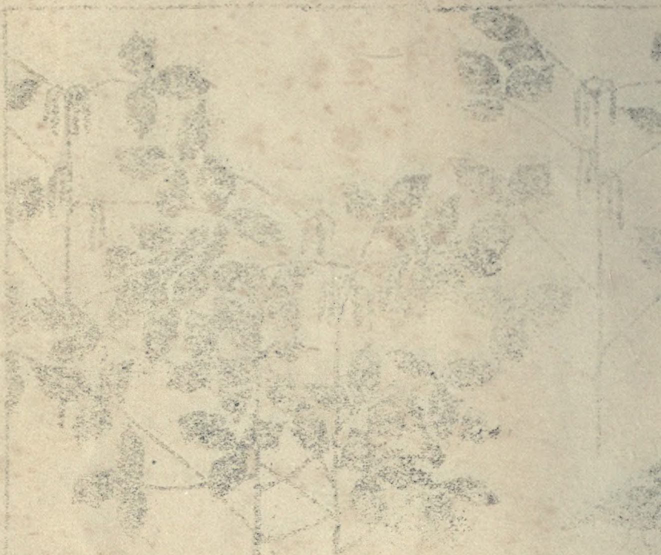
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03030 5304



不許複製

大正十二年八月十五日　印刷
大正十二年八月十八日　發行

[illegible]（非賣品）

編輯者　[illegible]

發行者　[illegible]

印刷者　三浦理
[illegible]

印刷所　有明堂印刷部
[illegible]

發行所　有明堂書店

父因請以爲レ薪。其人乃不レ悅曰。鄰人之父。徒欲レ爲レ薪。而敎二吾伐一レ之也。與レ我鄰。若レ此其險。豈可哉。

我と鄰して、此の若く其れ險なり。豈可ならんやと。

（一）險は心誠ならざるをいふ

人有二亡レ鈇者一。意二其鄰之子一。視二其行步一。竊レ鈇也。顏色竊レ鈇也。言語竊レ鈇也。作動態度。無レ爲而不レ竊レ鈇也。俄而抇二其谷一而得二其鈇一。他日復見二其鄰人之子一。動作態度。無レ似レ竊レ鈇者一。

人鈇を亡ふ者あり、其の鄰の子を意ふ。其の行步を視るに鈇を竊めるなり。顏色も鈇を竊めるなり。言語も鈇を竊めるなり、作動態度、爲すとして鈇を竊まざるものなし。俄にして其の谷を抇りて其の鈇を得たり。他日復た其の鄰人の子を見るに、動作態度、鈇を竊むに似たる者なし。

（一）鈇はまさかり　（二）意ふは疑ふ也

白公勝慮レ亂。罷レ朝而立。倒杖レ策。錣上貫レ

白公勝亂を慮る。朝を罷めて立ち、倒に策を杖つく。錣上りて頤を貫き血流れて地に至れども知らざるなり。鄭人之を聞いて曰く、頭だも之れ忘

乞於城市。城市患其亟也。衆莫之與。遂適田氏之厩。從馬醫。作役而假食。郭中人戲之曰。從馬醫而食。不以辱乎。乞兒曰。天下之辱。莫過於乞。乞猶不辱。豈辱馬醫哉。

のなし。遂に田氏の厩に適き、馬醫に従ひ作役して假食す。郭中の人之に戲れて曰く、馬醫に従つて食す、以て辱とせざるかと。乞兒曰く、天下の辱は乞に過ぐるはなし。乞すら猶ほ辱とせず、豈馬醫を辱とせんやと。

(一) 仕事をして食を貰ふ也

宋人有游於道。得人遺契者。歸而藏之。密數其齒。告鄰人曰。吾富可待矣。

人有枯梧樹者。其鄰父言。枯梧之樹不祥。其鄰人遽而伐之。鄰人

宋人、道に游んで人の遺契を得る者あり。歸りて之を藏し、密に其の齒を數へて鄰人に告げて曰く、吾が富待つべしと。

(一) 遺契は人の棄てたる割符にて既に用を濟して無効なる者なり　(二) 齒は契面に刻したる合璽の數也　(三) 契の名のみありて實なき者を悦ぶ人の虚名を貪んで實なき者に喩へし也

人枯れたる梧樹を有する者あり。其の鄰父言ふ、枯梧の樹は不祥なりと。其の鄰人遽てて之を伐る。鄰人の父因つて請うて以て薪と爲す。其の人乃ち悦ばずして曰く、鄰人の父徒に薪と爲さんと欲して、吾をして之を伐らしむるなりと。

齊田氏祖二於庭一。食客千人。中坐有下獻二魚鴈一者上。田氏視レ之。乃歎曰。天之於レ民厚矣。殖二五穀一。生二魚鳥一。以爲二之用一。衆客和レ之如レ響。鮑氏之子。年十二。預二於次一。進曰。不レ如二君言一。天地萬物與レ我並生類也。類無二貴賤一。徒以二小大智力一而相制。迭相食。非二相爲而生一レ之。人取二可レ食者一而食レ之。豈天本爲レ人生レ之。且蚊蚋噆レ膚。虎狼食レ肉。非下天本爲二蚊蚋一生レ人。虎狼生レ肉者上哉。

齊の田氏庭に祖す。食客千人あり。(一)中坐に魚鴈を獻ずる者あり。田氏之を視、乃ち歎じて曰く、天の民に於けるや厚し。五穀を殖し魚鳥を生じて、以て之が用を爲すと。衆客之に和すること響の如し。鮑氏の子年十二にして(二)次に預る。進んで曰く、君の言の如くならず。天地萬物と、我と並に生類なり。(三)類に貴賤なし。徒に小大智力を以て相制し、迭に相食むは、相爲にして之を生ずるに非ず。人食ふべき者を取りて之を食ふのみ。豈天本人の爲に之を生ぜんや。且つ蚊蚋膚を噆ひ、虎狼肉を食ふ。天本蚊蚋の爲に人を生じ、虎狼のために肉を生ずるには非ずと。

(一)中坐は食客の中也 (二)末席に在る也 (三)生類に貴賤の別なし

齊有二貧者一。常

齊に貧者あり、常に城市に乞ふ。城市其の亟なるを患ふるや、衆之に與ふるも

猶恨レ之。是不レ知レ所二以爲一レ學。胡子曰、富子之言非也。凡人有レ術不レ能レ行者有矣。能行而無二其術一者亦有矣。衞人有二善レ數者一。臨レ死以レ訣喩二其子一。其子志二其言一而不レ能レ行也。他人問レ之。以二其父所一レ言告レ之。問者用二其言一而行二其術一。與二其父一無レ差焉。若然死者奚爲不レ能レ言二生術一哉。

㊀使者往くこと疾ならざりし爲、不死の道を知れりと言ふ者死せし也　㊁幸臣は近臣也　㊂不死の道を知れりといふ者自ら其の生を失ふ其の道を備へたりとて君を不死ならしむること能はず　㊃訣は祕訣也

邯鄲之民。以二正月之旦一。獻二鳩於簡子一。簡子大悅。厚賞レ之。客問二其故一。簡子曰。正旦放レ生。示レ有レ恩也。客曰。民知二君之欲一レ放レ之。競而捕レ之。死者衆矣。君如欲レ生レ之。不レ若レ禁レ民勿一レ捕。捕而放レ之。恩過不二相補一矣。簡子曰。然。

邯鄲の民、正月の旦を以て鳩を簡子に獻ず。㊀簡子大に悅び、厚く之を賞す。客其の故を問ふ。簡子曰く、正旦に生を放つは、恩あるを示すなり。客曰く、民は君の之を放たんと欲するを知る。競うて之を捕へ、㊁死する者衆し。君如し之を生さんと欲せば、民に禁じて捕ふることなからしむるに若かず。捕へて之を放たば、恩過相補はずと。簡子曰く、然りと。

㊀簡子は趙簡子也　㊁鳩多く死す

知ニ不死之道一者上。燕君使ニ人受レ之。不レ捷而言者死。燕君甚怒ニ其使者一。將レ加レ誅焉。幸臣諫曰。人所レ憂者ハ莫レ急ニ乎死。已所レ重者。莫レ過ニ乎生。彼自喪ニ其生。安能令ニ君不レ死也。乃不レ誅。有ニ齊子。亦欲レ學ニ其道。聞ニ言者之死。乃撫レ膺而恨。富子聞而笑レ之曰。夫所レ欲レ學不死。其人已死。而

らずして言ふ者死す。燕君甚だ其の使者を怒り、將に誅を加へんとす。幸臣(二)諫めて曰く、人の憂ふる所の者は死より急なるはなく、己の重んずる所の者は生より過ぐるはなし。彼自ら其の生を喪ふ、安んぞ能く君をして死せざらしめんやと。乃ち誅せず。齊子(三)といふものあり、亦其の道を學ばんと欲す。言ふ者の死せるを聞き、乃ち膺を撫でて恨む。富子聞いて之を笑うて曰く、夫れ學ばんと欲する所は不死なり。其の人已に死したるに、而も猶ほ之を恨むは、是學を爲す所以を知らざるなりと。胡子曰く、富子の言非なり。凡そ人は術ありて行ふこと能はざる者有り。能く行うて其の術なき者も亦有り。衞人數を善くする者あり、死に臨みて訣(四)を以て其の子に喩す。其の子其の言を志して行ふこと能はず。他人之を問へば、其の父の言ふ所を以て之に告ぐ。問ふ者其の言を用ひて其の術を行ふに、其の父と差ふことなし。若し然らば、死者奚爲れぞ生術を言ふこと能はざらんやと。

楊朱之弟曰布。衣素衣而出。天雨。解素衣、衣緇衣而反。其狗不知、迎而吠之。楊布怒、將扑之。楊朱曰、子無扑矣。子亦猶是也。嚮者使汝狗白而往、黑而來、豈能無怪哉。

楊朱の弟を布と曰ふ。素衣を衣て出で、天雨る。素衣を解き、緇衣を衣て反る。其の狗知らず、迎へて之を吠ゆ。楊布怒り、將に之を扑たんとす。楊朱曰く、子扑つことなかれ。子も亦猶は是のごとし。嚮に汝の狗をして白くして往き黑くして來らしめば、豈能く怪むことなからんやと。

○緇衣は黑衣

楊朱曰、行善不以爲名、而名從之。名不與利期、而利歸之。利不與爭期、而爭及之。故君子必愼爲善。

楊朱曰く、善を行ふは以て名の爲にせざれども、名之に從ふ。名は利と期せざれども、利之に歸す。利は爭と期せざれども、爭之に及ぶ。故に君子は必ず善を爲すを愼む。

○名も利でるは利を得んが爲に爲すも利之に歸す ○善を爲して之を人に知らせんと思ふときは反つて名を失ふ、君子の[illegible]を顯して名に近づくことあれとは[illegible]此の意也

昔人有言有……

昔人、不死の道を知る者ありと言ふ人の有り。燕君人をして之を受けしむ。捷な

心都子。心都子他日與孟孫陽偕入而問曰。昔有昆弟三人。游齊魯之間。同師而學。進仁義之道而歸。其父曰。仁義之道若何。伯曰。仁義使我愛身而後名。仲曰。仁義使我殺身以成名。叔曰。仁義使我身名並全。彼三術相反。而同出於儒。孰是孰非邪。楊子曰。人有濱河而居者。習於水。勇於泅。操舟鬻渡。利供百口。裹糧就學者成徒。而溺死者幾半。本學泅。不學溺。而利害如此。若以爲孰是孰非。心都子嘿然而出。孟孫陽讓之曰。何吾子問之迂。夫子答之僻。吾惑愈甚。心都子曰。大道以多岐亡羊。學者以多方喪生。學非本不同。非本不一。而末異若是。唯歸同反一。爲亡得喪。子長先生之門。習先生之道。而不達先生之況也。哀哉。

めて曰く、何ぞ吾子が問ふことの迂にして、夫子の答ふることの僻なる。吾が惑愈〻甚しと。心都子曰く、大道は多岐なるを以て羊を亡ひ、學者(八)は多方なるを以て生を喪ふ。學本同じからざるに非ず。本一ならざるに非ず。而して末異なること是の若し。唯同に歸り一に反れば得喪なしと爲す。子は先生の門に長じ、先生の道を習ひて、而して生の況(九)に達せざるなり。哀しいかなと。

(一) 黨は其の家屬をいふ　(二) 豎は奴隷也　(三) 岐路は分れ路也　(四) 戚然は傷む貌　(五) 楊子の意を解せざる也
(六) 我が身を傷づけぬやうにして名譽を顯すことを後にする也　(七) 遠方より來り學ぶ者多き也　(八) 學者は學問の術多き爲に其の本を失ひ時としては生命をも失ふに至る　(九) 況は情也

羊何追者之衆鄰人曰多歧路既反問獲羊乎曰亡之矣曰奚亡之曰歧路之中又有歧焉吾不知所之所以反也楊子戚然變容不言者移時不笑者竟日門人怪之請曰羊賤畜又非夫子之有而損言笑者何哉楊子不答門人不獲所命弟子孟孫陽出以告

子戚然として容を變じ、言はざる者時を移し、笑はざる者日を竟ふ。門人之を怪み、請うて曰く、羊は賤畜なり、又夫子の有に非ず。而るに言笑を損する者は何ぞやと。楊子答へず。門人命ずる所を獲ず。弟子孟孫陽、出でて以て心都子に告ぐ。心都子他日孟孫陽と偕に入りて問うて曰く、昔昆弟三人有り、齊魯の間に游び、師を同じうして學び、仁義の道を進して歸る。其の父曰く、仁義の道は若何と。伯曰く、仁義は我をして身を愛して名を後にせしむと。仲曰く、仁義は我をして身を殺して以て名を成さしむと。叔曰く、仁義は我をして身名並に全からしむと。彼の三術相反して同じく儒に出づ。孰れをか是とし孰れをか非とせんやと。楊子曰く、人河に濱して居る者あり。水に習ひ泅ぐに勇に、舟を操り渡を鬻ぎて、利百口に供す。糧を裹み就いて學ぶ者徒を成す。而して溺死する者幾んど半なり。本泅ぐことを學びて溺るゝことを學ばず、而して利害此の如し。若孰れか是孰れか非なりと以爲ふかと。心都子嘿然として出づ。孟孫陽之を讓

今往死之。是知與不知無辨也。柱厲叔曰。不然。自以爲不知。故去。今死。是果不知我也。吾將死之以醜後世之人主不知其臣者也。凡知則死之。不知則弗死。此直道而行者也。柱厲叔。可謂懟以忘其身者也。

直くして行ふ者なり。柱厲叔は、懟みて以て其の身を忘るゝ者と謂ふべきなり。

(一) 菱芰はひしの類 (二) 栗々とちの實 (三) 敖公の爲に殉死せんとす (四) 知己と知己に非ざる者と區別なき也 (五) 我殉死せば君忠臣を知らざりしこと明白とならん

楊朱曰。利出者實及。怨往者害來。發於此而應於外者。唯請。是故賢者愼所出。

楊朱曰く、(一)利出づる者は實及ぶ、怨往く者は害來る。此に發して外に應ずる者は唯(二)請なり。是の故に賢者は出づる所を愼む。

(一) 他人の利となる事をすれば他人も亦之に報ゆるに利を以てす是實及ぶ也 (二) 請は當に情に作るべし

楊子之鄰人亡羊。既率其黨。又請楊子之豎追之。楊子曰。嘻亡一

楊子の鄰人羊を亡ふ。既に其の黨を率ゐ、又楊子の(一)豎を請うて之を追ふ。楊子曰く、嘻一羊を亡ふに、何ぞ追ふ者の衆きやと。鄰人曰く、(三)岐路多ければなりと。既に反る。問ふ、羊を獲たるかと。曰く、之を亡へりと。曰く、奚ぞ之を亡へると。曰く、岐路の中に又岐あり、吾之く所を知らず。反る所以なりと。楊

之人丘也。爰旌目曰、譆、汝非盜邪、胡爲而食我。吾義不食子之食也。兩手據地而歐之、不出、喀喀然遂伏而死。狐父之人則盜矣、而食非盜也。以人之盜因謂食爲盜、而不敢食、是失名實者也。

はす。是名實を失ふ者なり。

〇[illegible]　[illegible]は[illegible]。〇[illegible]　[illegible]は[illegible]に入れたる[illegible]、[illegible]は[illegible]を食に[illegible]ひたるをいふ。〇[illegible]　三口食ひて始めて目が見ゆる。
〇[illegible]　何者ぞと問ふ。〇[illegible]　兩手を地に支へて吐き出す也。〇[illegible]　喀喀は吐く聲也。〇[illegible]　名と實とを混亂せる者なり。

柱厲叔事莒敖公、自爲不知己者、居海上、夏日則食菱芰、冬日則食橡栗。莒敖公有難、柱厲叔辭其友而往死之。其友曰、子自以爲不知己、故去。

柱厲叔、莒の敖公に事ふ。自ら己を知らざる者と爲し、海上に居る。夏日は則ち菱芰を食ひ、冬日は則ち橡栗を食ふ。莒の敖公難あり。柱厲叔其の友を辭して、往いて之に死なんとす。其の友曰く、子自ら以て己を知らずと爲し、故に去る。今往いて之に死なば、是知ると知らざると辨なきなりと。柱厲叔曰く、然らず。自ら以て知らずと爲す、故に去る。今死なば、是果して我を知らざりしなり。吾將に之に死して、以て後世の人主の其の臣を知らざる者を醜しめんとするなりと。凡そ知れば則ち之に死し、知らざれば則ち死せざるは、是道を

飛鳶適墜二其腐鼠一而中レ之。俠客相與言曰。虞氏富樂之日久矣。而常有下輕二易人一之志上。吾不レ侵二犯之一。而乃辱レ我以二腐鼠一。此而不レ報。無三以立二慬於天下一。請與二若等一戮レ力一レ志。率二徒屬一。必滅二其家一爲。等倫皆許諾。至二期日之夜一。聚レ衆積レ兵。以攻二虞氏一。大滅二其家一。

を聚め兵を積みて以て虞氏を攻め、大に其の家を滅す。

(一)臺は樓と同じ　(二)擊博は博奕、すごろくの類也　(三)樓下を通行す　(四)射るは采を投ぐる也　(五)明瓊は双陸の采也、張中は局の上に設けたる博の具に中るをいふ　(六)兩搶魚は采の目の名笑ふは大に勝ちたるを笑ふ也　(七)其の時偶然鳶腐鼠を空中より墜して俠客に中てし也　(八)慬は勇也俠者の勇を天下に立つることなき也　(九)等倫は同輩也

東方有レ人焉。曰二爰旌目一。將レ有レ適也。而餓二於道一。狐父之盜曰レ丘。見而下二壺餐一以餔レ之。爰旌目三餔而後能視。曰。子何爲者也。曰。我狐父

東方に人あり、爰旌目と曰ふ。將に適くことあらんとして道に餓う。(一)狐父の盜を丘と曰ふ。見て(二)壺餐を下して以て之に餔す。爰旌目(三)三たび餔して後に能く視る。曰く、子は(四)何爲る者ぞと。曰く、我は狐父の人丘なりと。爰旌目曰く、譆、汝は盜に非ずや。何すれぞ我に食はしむるや。吾義、子の食を食はずと。(五)兩手地に據りて之を毆く。出でず。(六)喀喀然として遂に伏して死す。狐父の人は則ち盜なり、而も食は盜に非ず。人の盜するを以て、因つて食を謂つて盜と爲して敢て食

曰、遇盜、莫如上地之牛缺也。皆受教。俄而其弟適秦。至關下、果遇盜。憶其兄之戒、因與盜力爭。既而不如。又追而以卑辭請物。盜怒曰、吾活汝弘矣。而追吾不已、迹將著焉。既爲盜矣。仁將焉在。遂殺之。又傍害其黨四五人焉。

〔一〕上地に居る牛缺のことをいふ、其の盜に遇ひたることをいふ〔二〕關下は函谷關の關所〔三〕力比べして爭ふ〔四〕殺されたる物を返されんことを請ふ〔五〕盜賊の足跡露見すべし

虞氏者、梁之富人也。家充殷盛、錢帛無量、財貨無訾。登高樓、臨大路、設樂陳酒、擊博樓上。俠客相隨而行。樓上博者射。明瓊張中、反兩㯓魚而笑。

虞氏は梁の富人なり。家充ち殷盛にして、錢帛量なく、財貨訾なし。高樓に登り大路に臨み、樂を設け酒を陳ね、樓上に擊博す。俠客相隨つて行く。樓上の博者射る。明瓊張中し、兩㯓魚を反して笑ふ。飛鳶適〻其の腐鼠を墜して、之に中つ。俠客相與に言つて曰く、虞氏富樂の日久し、而して常に人を輕易するの志あり。吾之を侵犯せず。而るに乃ち我を辱しむるに腐鼠を以てす。此にして報ぜずんば、以て勇を天下に立つることなし。請ふ若等と力を戮せ志を一にし、徒屬を率ゐて必ず其の家を滅すを爲さんと。等倫皆許諾す。期日の夜に至り、衆

牛缺者上地之大儒也。下二邯鄲一。遇二盜於耦沙之中一。盡取二其衣裝車牛一。步而去。視レ之歡然無二憂恡之色一。盜追而問二其故一。曰。君子不三以レ所レ養害二其所一レ養。盜曰。嘻賢矣夫。既而相謂曰。以二彼之賢一。往見二趙君一。使下以二我爲一必困上レ我。不レ如レ殺レ之。乃相與追而殺レ之。燕人聞レ之。聚レ族相戒

牛缺は上地(一)の大儒なり。邯鄲(二)に下り、盜に耦沙(三)の中に遇ふ。盡く其の衣裳車牛を取られ、歩して去る。之を視るに歡然として憂恡(四)の色なし。盜追うて其の故を問ふ。曰く、君子は養ふ所(五)を以て其の養ふ所を害せずと。盜曰く、嘻賢なるかなと。既にして相謂つて曰く、彼の賢を以て往いて趙君に見えば、我が爲を以て必ず我を困しめん。之を殺すに如かずと。乃ち相與に追うて之を殺す。燕人之を聞き、族を聚めて相戒めて曰く、盜に遇はば上地の牛缺の如くなることなかれと。皆教を受く。俄にして其の弟秦に適き、關下(六)に至りしに、果して盜に遇ふ。其の兄の戒を憶ひ、因つて盜と力爭す。既(七)にして如かず。又追うて卑辭を以て物(八)を請ふ。盜怒つて曰く、吾汝を活すこと弘なり。而して吾を追ふこと已まず。迹(九)將に著れんとす。既に盜を爲せば、仁將焉にか在らんと。遂に之を殺し、又傍其の黨四五人を害す。

(一) 趙は低地なる故之に對して高地を謂ふ也 (二) 邯鄲は趙の都 (三) 耦沙は地名 (四) 憂恡は憂ひ惜む也 (五)

之手。孫叔敖曰、何謂也。對曰、爵高者人妬之。官大者主惡之。祿厚者怨逮之。孫叔敖曰、吾爵益高。吾志益下。吾官益大。吾心益小。吾祿益厚。吾施益博。以是免於三怨。可乎。孫叔敖疾將死。戒其子曰。王亟封我矣。吾不受也。爲我死。王則封汝。汝必無受利地。楚越之間有寢丘者。此地不利而名甚惡。楚人鬼而越人禨。可長有者唯此也。孫叔敖死。王果以美地封其子。子辭而不受。請寢丘。與之。至今不失。

祿厚き者は怨之に逮ふと。孫叔敖曰く、吾が爵益〻高くして吾が志益〻下る、吾が官益〻大にして吾が心益〻小なり。吾が祿益〻厚くして吾が施益〻博し。是を以て三怨を免れんこと可ならんかと。孫叔敖疾んで將に死せんとし、其の子を戒めて曰く、王亟〻我を封ぜんとせしも、吾受けざりき。我が死するが爲に、王則ち汝を封ぜん。汝必ず利地を受くることなかれ。楚越の間に寢丘といふ者あり。此の地は利あらずして名甚だ惡し。楚人は鬼にして越人は禨す。長く有つべき者は必ず此ならんと。孫叔敖死す。王果して美地を以て其の子を封ぜんとす。子辭して受けず、寢丘を請ふ。之を與ふ。今に至るまで失はず。

㊀ 丈人は老人なり　㊁ 利地は便利の地なり　㊂ 寢丘の名は墓所に類せり　㊃ 楚の人は鬼神を畏れ敬ひ、越の人はおトうことを好み一般を求む、故に寢丘の地を望むものなく永く保有し得べしといふなるべし

使求馬者。色物牝牡。尙弗能知。又何馬之能知也。伯樂喟然太息曰。一至於此乎。是乃其所以千萬臣而無數者也。若皐之所觀天機也。得其精而忘其麤。在其內而忘其外。見其所見。不見其所不見。視其所視。而遺其所不視。若皐之相馬。乃有貴乎馬者也。馬至。果天下之馬也。

楚莊王問詹何曰。治國奈何。詹何對曰。臣明於治身。而不明於治國也。楚莊王曰。寡人得奉宗廟社稷。願學所以守之。詹何對曰。臣未嘗聞身治而國亂者也。又未嘗聞身亂而國治者也。故本在身。不敢對以末。楚王曰善。

楚の莊王詹何に問うて曰く、國を治むること奈何と。詹何對へて曰く、臣身を治むるに明にして、國を治むるに明ならずと。楚の莊王曰く、寡人(一)宗廟社稷を奉ずるを得たり。願はくは之を守る所以を學ばんと。詹何對へて曰く、臣未だ嘗て身治りて國亂るる者を聞かざるなり。又未だ嘗て身亂れて國治る者を聞かざるなり。故に本は身に在り。敢て對ふるに末を以てせずと。楚王曰く善しと。

(一) 一國に主たるを得たり

孤丘丈人謂孫叔敖曰。人有三怨。子知

孤丘の丈人(一)、孫叔敖に謂つて曰く、人三怨あり、子之を知るかと。孫叔敖曰く、何の謂ぞやと。對へて曰く、爵高き者は人之を妬む、官大なる者は主之を惡む、

之子皆下才也。可告以良馬、不可告以天下之馬也。臣有所與共擔纆薪菜者、有九方皐。此其於馬、非臣之下。請見之。穆公見之、使行求馬。三月而反報曰、已得之矣。在沙丘。穆公曰、何馬也。對曰、牝而黃。使人往取之、牡而驪。穆公不説。召伯樂而謂之曰、敗矣。子所

と。穆公曰く、何の馬ぞと。對へて曰く、牝にして黃なりと。人をして往いて之を取らしむれば、牡にして驪なり。穆公悦ばず。伯樂を召して之に謂つて曰く、敗れぬ。子が馬を求めしめし所の者は、色物牝牡すら尚ほ知ること能はず。又何ぞ馬を能く知らんと。伯樂喟然として大息して曰く、一に此に至るか。是れ乃ち其の臣に千萬にして數なき所以の者なり。皐の觀る所の若きは天機なり。其の精を得て其の麤を忘れ、其の内に在りて其の外を忘れ、其の見る所を見て其の見ざる所を見ず、其の視る所を視て其の視ざる所を遺るゝなり。皐の馬を相するが若きは、乃ち馬より貴き者あるなり。馬至れば、果して天下の馬なりき。

(一五) 年長ずりとは老いたるをいふ (一六) 子姓は子孫をいふ (一七) 普通の良馬は外形骨格を以て鑑するを得べし (一八) 天下の名馬は形や毛色にて之を知るべからず、故に有るか無きかに遠く、隠るるか見ゆるかに [illegible] として [illegible] (一九) [illegible] (二〇) [illegible] (二一) 驪は黑色 (二二) 敗れぬとは失敗せりとの意 (二三) 色物は毛色をいふ (二四) [illegible] (二五) [illegible] 内と外とは馬の牝牡毛色をいふ

賜二金帛一。又有二蘭子一。又能燕戲者。聞レ之。復以干二元君一。元君大怒曰。昔有下異技干二寡人一者上。技無レ庸。適値三寡人有二歡心一。故賜二金帛一。彼必聞レ之而進。復望二吾賞一。拘而擬レ戮レ之。經レ月乃放。

た吾が賞を望むならんと。拘へて之を戮せんと擬す。月を經て乃ち放せり。

(一) 蘭子は曲藝を以て四方に漫遊する者也 (二) 技藝を演じて御目に懸けたしと願ふ也 (三) 雙枝は竹馬也 (四) 燕すは[illegible]を足す也

秦穆公謂二伯樂一曰。子之年長矣。子姓有二可レ使レ求レ馬者一乎。伯樂對曰。良馬可二形容筋骨相一也。天下之馬者。若レ滅若レ沒。若レ亡若レ失。如レ此者絕レ塵弭レ轍。臣

秦の穆公伯樂に謂つて曰く、子の(一)年長ぜり。(二)子姓馬を求めしむべき者あるかと。伯樂對へて曰く、(三)良馬は形容筋骨もて相すべきなり。(四)天下の馬は滅するが若く沒するが若く、亡するが若く失するが若し。(五)此の若き者は塵を絕ち轍を弭む。臣の子は皆下才なり。告ぐるに良馬を以てすべきも、告ぐるに天下の馬を以てすべからざるなり。臣與に共に(六)纏を擔ひ薪菜する所の者あり、九方皐といふものあり。此其の馬に於ける、臣の下に非ざるなり。請ふ之を見えしめんと。穆公之を見、行いて馬を求めしむ。三月にして反り、報じて曰く、已に之を得たり、沙丘に在り

事未。究。姑復問之。其子又復問孔子。孔子曰。吉祥也。復教以祭。其子歸致命。其父曰。行孔子之言也。居一年。其子又無故而盲。其後楚攻宋。圍其城。民易子而食之。析骸而炊之。丁壯者皆乘城而戰。死者大半。此人以父子有疾皆免。及圍解而疾俱復。

に復しぬ。

一 既に已に盲となりたるも尚ほ以て吉祥となすか ● 未だ其の事の結局何如を知らず ● 民みな之を城上に登び 人々子を易へて食ふ也 ● 骸骨を割きて薪に代用する也 ● 前を復せしなり

宋有蘭子者。以技干宋元。宋元召而使見其技。以雙枝長倍其身。屬其脛。並趨並馳。弄七劍。迭而躍之。五劍常在空中。元君大驚。立

宋に蘭子なる者あり、技を以て宋元を干す。宋元召して其の技を見さしむ。雙枝の長さ其の身に倍するを以て其の脛に屬し、並に趨り並に馳せ、七劍を弄して迭に之を躍らすに、五劍常に空中に在り。元君大に驚き、立どころに金帛を賜ふ。又蘭子あり、又能く燕戲する者なり。之を聞き、復た以て元君を干す。元君大に怒りて曰く、昔に異技もて寡人を干せる者あり。技は用ふることなきも、適寡人の歡心あるに値ひしかば、故に金帛を賜へり。彼必ず之を聞いて進み、復

道之士。爲ニ能持レ勝。孔子之勁。能拓國門之關一而不ニ肯以レ力聞一。墨子爲レ守レ攻。公輸般服。而不ニ肯以レ兵知一。故善持レ勝者。以レ強爲レ弱。

宋人有下好レ行二仁義一者上。三世不レ懈。家無レ故黑牛生二白犢一。以問二孔子一。孔子曰。此吉祥也。以薦二上帝一。居一年。其父無レ故而盲。其牛又復生二白犢一。其父又復令三其子問二孔子一。其子曰。前問レ之而失レ明。又何問乎。父曰。聖人之言。先迕後合。其

宋人仁義を行ふことを好む者あり、三世懈らず。家に故なくして黑牛白犢を生む。以て孔子に問ふ。孔子曰く、此吉祥なり。以て上帝に薦めよと。居ること一年にして、其の父故なくして盲す。其の牛又復た白犢を生む。其の父又復た其の子をして孔子に問はしむ。其の子曰く、前に之に問うて明を失ふ。又何ぞ問はんやと。父曰く、聖人の言は、(一)先に迕へども後に合ふ。(二)其の事未だ究らず、姑く復た之に問へと。其の子又復た孔子に問ふ。孔子曰く、吉祥なりと、復た敎ふるに祭ることを以てす。其の子歸りて命を致す。其の父曰く、孔子の言を行へと。居ること一年にして、其の子又故なくして盲す。其の後楚宋を攻め、其の城を圍む。(三)民子を易へて之を食ひ、(四)骸を析きて之を炊ぎ、丁壯の者皆城に乘りて戰ひ、死する者太半なり。此の人父子疾あるを以て皆免れ、圍解くるに及びて(五)疾倶

人之所喜也。今君有憂色、何也。襄子曰。夫江河之大也、不過三日。飄風暴雨不終朝、日中不須臾。今趙氏之徳行、無所施於積、一朝而兩城下。亡其及我哉。孔子聞之曰、趙子其昌乎。夫憂者所以爲昌也、喜者所以爲亡也。勝非其難者也。持之其難者也。賢主以此持勝、故其福及後世。齊楚吳越皆嘗勝矣、然卒取亡焉、不達乎持勝也。唯有

んかなと。孔子之を聞いて曰く、趙氏は其れ昌えんか。夫れ憂は昌を爲す所以なり、喜は亡ぶるを爲す所以なり。勝つは其の難き者に非ざるなり、之を持するは其の難き者なり。賢主此を以て勝を持す、故に其の福後世に及ぶ。齊楚吳越皆嘗て勝てり。然れども卒に亡を取りしは、勝を持するに達せざればなり。唯有道の主のみ、能く勝を持するを爲す。孔子の勁能く國門の關を拓きたるも、肯て力を以て聞えず。墨子攻むるを守ることを爲して、公輸般服せしも、肯て兵を以て知られず。故に善く勝を持する者は、強を以て弱と爲すと。

（一）翟は狄と同じ北方の國の名　（二）左人中人は狄國の二城の名　（三）襄子は趙簡子の嗣子　（四）江水河水の漲あらば三日に過ぎず　（五）徳を身に積んで其の餘澤を人に施す所なし　（六）勝を保持するは難し　（七）勁は力の意、國門の關は國門の關貫の意に讀むべし　（八）孔子の勁を稱して力を以て聞えずとなり　（九）公輸般は魯の巧人、墨子に巧なり、然るに墨子は城を守るに巧にして公輸般を服せしめたるも、世人は其の兵法に巧なることを知らず　（十）能く勝を持するは弱に處くとも強く見ゆるなり

背而知之。白公曰、人固不可與微言乎。孔子曰。何爲不可。唯知言之謂者乎。夫知言之謂者。不以言言也。爭魚者濡。逐獸者趨。非樂之也。故至言去言。至爲無爲。夫淺知之所爭者末矣。白公不得已。遂死於浴室。

とを得ず、遂に浴室に死せり。(九)

(一) 白公は楚の平王の孫にて太子建の子名を勝といふ、太子費無極に讒せられて鄭に奔り鄭人に殺さる (二) 白公勝亂を作さんと欲し、隱語を以て孔子に謀らんとする也。微言は隱語也 (三) 石を以て水に投ずるは隱語の解し難きを喩へし也 (四) 吳は水國なれば泅ぐ者多し、故に吳の善く泅する者能く水中の石を取らんと謂ふ也、是は隱語の解し難からずして隱すべからざるを謂ふ (五) 淄水澠水の混合せるも易牙は能く味うて之を知らん、亦微言の隱すべからざるを謂ふ (六) 言の謂は發言する所以の旨趣にして言の微なる者也 (七) 樂みて爲すに非ず自然の勢也 (八) 至言は無言にて至爲は無爲なり、然るに事を以て人と爭はんとするは末なり、是時に白公勝の亂を作さんとするを止めし也 (九) 浴室にて殺さる

趙襄子使新穉穆子攻翟。勝之。取左人中人。使遽人謁之。襄子方食。而有憂色。左右曰。一朝而兩城下。此

趙襄子、新穉、穆子をして翟を攻めしむ。之に勝ち、左人中人を取る。(二)遽人をして之を謁げしむ。(三)襄子食に方りて憂ふる色あり。(一)左右曰く、一朝にして兩城下るは、此人の喜ぶ所なり。今君憂ふる色あるは何ぞやと。襄子曰く、夫れ江河の大なるや三日に過ぎず、(四)飄風暴雨も朝を終へず、日の中するも須臾ならず、今趙氏の德行、積むに施す所なきに、(五)一朝にして兩城下る。亡ぶること其れ我に及ば

錯意、遂度而出。孔子問之曰、巧乎、有道術乎、所以能入而出者何也。丈夫對曰、始吾之入也、先以忠信、及吾之出也、又從以忠信。忠信錯吾軀於波流、而吾不敢用私、所以能入而復出者以此也。孔子謂弟子曰、二三子識之。水且猶可以忠信誠身親之、而況人乎。

やと。

❸ 此の一章は黄帝篇に見ゆ

白公問孔子曰、人可與微言乎。孔子不應。白公問曰、若以石投水何如。孔子曰、吳之善沒者能取之。曰、若以水投水何如。孔子曰、淄澠之合、易牙

白公孔子に問うて曰く、人與に微言すべきかと。孔子應へず。白公問うて曰く、若し石を以て水に投ぜば何如と。孔子曰く、呉の善く沒する者能く之を取らんと。曰く、若し水を以て水に投ぜば何如と。孔子曰く、淄澠の合へる、易牙嘗めて之を知ると。白公曰く、人固に與に微言すべからざるかと。孔子曰く、何ぞ爲れぞ不可ならん。唯言の謂を知る者か。夫れ言の謂を知る者は、言を以て言はざるなり。魚を爭ふ者は濡れ、獸を逐ふ者は趨る。之を樂むに非ざるなり。故に至言は言を去り。至爲は無爲なり。夫れ淺知の爭ふ所の者は末なりと。白公已むこ

駭。立召二文子一而告レ之曰、果如二子言一。郄雍死矣、然取レ盗何方。文子曰。周諺有レ言、察見二淵魚一者不祥、智料二隠匿一者有レ殃。且君欲レ無レ盗、莫レ若下挙レ賢而任上レ之。使下教明二於上一。化行二於下一。民有中恥心上。則何盗之為。於レ是用二随会一知レ政、而群盗奔レ秦焉。

孔子自レ衛反レ魯、息二駕乎河梁一而観焉。有二懸水三十仞一。圜流九十里、魚鼈弗レ能レ游。黿鼉弗レ能レ居。有二一丈夫一。方将レ厲レ之。孔子使三人並レ涯止二之曰。此懸水三十仞、圜流九十里。魚鼈弗レ能レ游。黿鼉弗レ能レ居也。意者難レ可二以済一乎。丈夫不二以

(二)孔子衛より魯に反らんとして駕を河梁に息へて観る。懸水あり三十仞、圜流九十里、魚鼈も游ぐこと能はず、黿鼉も居ること能はず。一丈夫あり、方に將に之を厲せんとす。孔子人をして涯に並うて之を止めしめて曰く、此懸水三十仞、圜流九十里、魚鼈も游ぐこと能はず、黿鼉も居ること能はず。意ふに以て濟るべきに難からんかと。丈夫以て意に錯かず、遂に度りて出づ。孔子之に問うて曰く、巧なるかな。道術あるか。能く入りて出づる所以の者は何ぞやと。丈夫對へて曰く、始め吾の入るや、先づ忠信を以てし、吾が出づるに及んでや、又從ふに忠信を以てす。忠信吾が軀を波流に錯いて、而して吾敢て私を用ひず。能く入りて復た出づる所以の者は此を以てなりと。孔子弟子に謂つて曰く、二三子之を識せ。水すら且つ猶ほ忠信を以て身を誠にして之を親むべし。而るを況んや人を

郄雍者、能視盜之貌、察其眉睫之間、而得其情。晉侯使視盜、千百無遺一焉。晉侯喜告趙文子曰、吾得一人而一國盜爲盡矣。奚用多爲。文子曰、吾君恃伺察、而得盜、盜不盡矣。且郄雍必不得其死。焉。俄而羣盜謀曰、吾所窮者郄雍也。遂共盜而殘之。晉侯聞而大

て其の情を得。晉侯盜を視しむるに、千百に一をも遺すことなし。晉侯大に喜んで、趙文子に告げて曰く、吾一人を得て、一國の盜爲に盡きたり。奚ぞ多きを用ふることを爲さんと。文子曰く、吾が君伺察を恃んで盜を得るも、盜は盡きじ。且つ郄雍は必ず其の死を得じと。俄にして羣盜謀りて曰く、吾が窮する所の者は郄雍なりと。遂に盜を共にして之を殘す。晉侯聞いて大に駭き、立どころに文子を召して之に告げて曰く、果して子が言の如くなりき。郄雍死したり。然れども盜を取ふること何の方ぞと。文子曰く、周の諺に言へることあり、淵魚を見る者は不祥なり、智隱匿を料る者は殃ありと。且つ其盜なきを欲せば、賢を擧げて之に任ずるに若くはなし。敎上に明に、化下に行はれ、民恥づる心あらしめば、則ち何の盜かこれ爲さんと。是に於て隨會を用ひて政を知らしめしに、羣盜秦に奔れり。

㊀ 人の眉と目との間を見て其の盜たることを知る也　㊁ 大勢にて郄雍を殺せる也　㊂ 言ふ所の如くなること　㊃ 隱匿は人の胸中の秘密をいふ

可レ待矣、若全而歸レ之適二於他國一。爲二吾之患一不レ輕矣。遂刖レ之而還二諸魯一。既反。孟氏之父子。叩レ胸而讓二施氏一。施氏曰。凡得レ時者昌。失レ時者亡。子道與レ吾同。而功與レ吾異。失レ時者也。非二行之謬一也。且天下之理無二常是一。事無二常非一。先日所レ用。今或棄レ之。今之所レ棄。後或用レ之。此用與レ不用。無二定是非一也。投レ隙抵レ時。應レ事無レ方。屬二乎智一。智苟不レ足。使下君博如二孔丘一。術如中呂尚上。焉往而不レ窮哉。孟氏父子舍然無二慍容一。曰。吾知レ之矣。子勿二重言一。

晉文公出會欲レ伐レ衛。公子鋤仰レ天而笑。公問。何笑。曰。臣笑丙鄰之人有下送二其妻適一私家上者。道見二桑婦一。悅而與言。然顧二視其妻一。亦有乙招レ之者甲矣。臣竊笑レ此也。公寤二其言一乃止。引レ師而還。未レ至而有下伐二其北鄙一者上矣。

晉の文公出でて會し、衛を伐たんと欲す。公子鋤天を仰いで笑ふ。公問ふ、何をか笑ふと。曰く、臣が鄰の人其の妻の私家(一)に適くを送る者あり、道にて桑婦を見、悅んで與に言ふ。然れども其の妻を顧視すれば、亦之を招く者あるを笑ふ。臣竊に此を笑ふなりと。公其の言を寤りて乃ち止め、師を引いて還る。未だ至らずして其の北鄙を伐つ者ありき。

(一)私家は妻の里方也

晉國苦レ盜。有二

晉國盜に苦む。郄雍といふ者あり、能く盜の貌を視る。其の眉睫(一)の間を察し

進趨之方。二子以實告二孟氏一。孟氏之一子之レ秦。以レ術干二秦王一。秦王曰。當今諸侯力爭。所レ務兵食而已。若用二仁義一治二吾國一。是滅亡之道。遂宮而放レ之。其一子之レ衞。以レ法干二衞侯一。衞侯曰。吾弱國也。而攝二乎大國之間一。大國吾事レ之。小國吾撫レ之。是求レ安之道。若賴二兵權一滅亡

患を免かるゝなしと。遂に之を刖りて、諸を魯に還す。既に反る。孟氏の父子胸を叩いて施氏を譲む。施氏曰く、凡そ時を得る者は昌え、時を失ふ者は亡ぶ。子が道吾と同じうして、功吾と異なるは、時を失ふ者なり。行の謬に非ざるなり。且つ天下の理、常是なく、事常非なし。先日用ふる所、今或は之を棄て、今の棄つる所、後或は之を用ふ。此用と不用と定是非なきなり。隙に投じ時に抵り、事に應じて方なきは智に屬す。智苟も足らずんば、若をして博きこと孔丘の如く、術は呂尚の如くならしむとも、焉くに往くとして窮せざらんやと。孟氏父子舍然として慍容なくして曰く、吾之を知れり、子重ねて言ふことなかれと。

知レ我也。以二人之言一而遺二我粟一。至二其罪レ我也。又且レ以二人之言一。此吾所二以不レ受也。其卒。民果作レ難而殺二子陽一。

魯施氏有二二子一。其一好レ學。其一好レ兵。好レ學者以レ術干二齊侯一。齊侯納レ之。以爲二諸公子之傅一。好レ兵者之レ楚。以レ法干二楚王一。王悦レ之。以爲二軍正一。祿富二其家一。爵榮二其親一。施氏之鄰人孟氏同有二二子一。所レ業亦同。而窘二於貧一。羨二施氏之有一。因從請二

魯の施氏二子あり。其の一は學を好み、其の一は兵を好む。學を好む者術(一)を以て齊侯を干す。齊侯之を納れて以て諸公子の傅と爲す。兵を好む者楚に之き、法(二)を以て楚王を干す。王之を悦び、以て軍正(三)と爲す。祿其の家を富し、爵其の親を榮す。施氏の鄰人孟氏に同じく二子あり、業(四)とする所亦同じくして貧に窘む。施氏の有を羨み、因りて從って進趨(五)の方を請ふ。二子實を以て孟氏に告ぐ。孟氏の一子秦に之き、術を以て秦王を干す。秦王曰く、當今諸侯力爭し、務むる所は兵食のみ。若し仁義を用て吾が國を治めば、是滅亡の道なりと。遂に宮(六)して之を放つ。其の一子衞に之き、法を以て衞侯を干す。衞侯曰く、吾は弱國なり、而して大國の間に攝まる。大國には吾之に事へ、小國は吾之を撫す。是安きを求むるの道なり。若し兵權を賴まば、滅亡待つべし。若し全うして之を歸し、他國に適かしめば、吾が

聞之曰、使天地之生物、三年而成一葉、則物之有葉者寡矣。故聖人恃道化而不恃智巧。

子列子窮、容貌有飢色。客有言之鄭子陽者曰、列禦寇蓋有道之士也。居君之國而窮。君無乃爲不好士乎。鄭子陽卽令官遺之粟。子列子出見使者、再拜而辭。使者去。子列子入。其妻望之而拊心曰、妾聞爲有道者之妻子、皆得佚樂。今有飢色。君過而遺先生食。先生不受。豈不命也哉。子列子笑謂之曰、君非自

子列子窮し、容貌飢色あり。客之を鄭の子陽に言ふ者あり、曰く、列禦寇は蓋し有道の士なり。君の國に居て而して窮す。君乃ち士を好まずと爲すなからんかと。鄭の子陽卽ち官をして之に粟を遺らしむ。子列子出でて使者を見、再拜して之を辭す。使者去る。子列子入る。其の妻之を望んで心を拊ちて曰く、妾聞く、有道者の妻子となれば皆佚樂を得と。今飢色あり。君過れりとして先生に食を遺るに、先生受けず。豈命にあらずやと。子列子笑うて之に謂つて曰く、君自ら我を知るに非ずして、人の言を以て我に粟を遺る。其の我を罪するに至るや、又且に人の言を以てせんとす。此吾が受けざる所以なりと。其の卒に、民果して難を作して子陽を殺せり。

㊀ 辭退して受けざる也　㊁ 其の不運を嘆く也

況行レ之乎。故自奮、則人莫二之告一。人莫二之告一。則孤而無レ輔矣。賢者任レ人、故年老而不レ衰。智盡而不レ亂。故治レ國之難。在二於知レ賢。而不レ在二自賢一。

宋人有下爲二其君一以レ玉爲二楮葉一者上。三年而成。鋒殺莖柯。毫芒繁澤。亂二之楮葉中一而不レ可レ別也。此人遂以レ巧食二宋國一。子列子

して輔なし。(四)賢者は人に任ず、故に年老いて衰へず、智盡きて亂れず。故に國を治むるの難きは、賢を知るに在りて、自ら賢とするに在らず。

(一) 色は顏色也、威勢強き者は顏色を厲まし人に驕り、而力ある者は力を恃みて勝つことを求む、此の如き人は未だ道を語るに足らず (二) 斑白は頭髮半白き也、頭未だ斑白ならず世故を經歷せざる者には道の是非得失を知らんやうなし、まして之を行はんことは望むべからず (三) 自ら勇力を奮ふ者には人之に道を語らず、故に孤立して輔なし (四) 賢者は我が才力を專とせず能く人に任ずるが故に年老いて力衰ふるも政道は衰へず、才智竭くるも我を輔くる者あれば政亂れず

宋人、其の君の爲に玉を以て(一)楮葉を爲る者あり、三年にして成る。(二)鋒殺莖柯、(三)毫芒繁澤、之を楮葉の中に亂して別つべからざるなり。此の人遂に(四)巧を以て宋國に食す。子列子之を聞いて曰く、天地の物を生ずる三年にして一葉を成さしめば則ち物の葉ある者寡からん。故に聖人は(五)道化を恃んで、智巧を恃まずと。

(一) 楮葉はかぢの葉 (二) 鋒殺は葉の稜角也、莖柯はくきと枝 (三) 毫芒は刺尖、繁澤は葉の文理色澤也 (四) 技術を以て食封を得る也 (五) 道化は無爲の治をいふ

矣。請ニ於關尹子一。尹子曰。子知ニ子之所一レ以中者乎。對曰。弗レ知也。關尹子曰。未レ可。退而習レ之三年。又以報ニ關尹子一。尹子曰。子知ニ子之所一レ以中乎。列子曰。知レ之矣。關尹子曰。可。以守而勿レ失也。非ニ獨射一也。爲レ國與レ身亦皆如レ之。故聖人不レ察ニ存亡一。而察ニ其所一レ以然。

るかと。對へて曰く、知らざるなりと。關尹子曰く、未可なりと。退いて之を習ふこと三年、又以て關尹子に報ず。尹子曰く、子は子の中れる所以を知るかと。列子曰く、之を知れりと。關尹子曰く、可なり。以て守りて失ふことなかれ。獨り射のみに非ず。國と身とを爲むるも亦皆之の如し。故に聖人は存亡を察せずして、其の然る所以を察すと。

〔一〕習に其の上の射を謂ふ、關上也 〔二〕射の能く中る所以は心を中にし身を正しくして中ると中らざるとを心にかけざるに在り、故に其の道を守りて失ふことなかれ 〔三〕聖人の天下を治むるは治まると治まらざるとを意とせずして身を正うして躬行するのみ

列子曰。色盛者驕。力盛者奮。未レ可ニ以語一レ道也。故不ニ班白一語レ道失。而

列子曰く、色盛なる者は驕り、力盛なる者は奮ふも、未だ以て道を語るべからず。故に班白ならずして道を語るは失せり。而るを況んや之を行ふをや。故に自ら奮ふときは則ち人之に告ぐることとなし、人之に告ぐることなきときは則ち孤に

惡二天下一。故亡レ此所レ稽也。稽度皆明而不レ道也。譬二之出不レ由レ門。行不レ從レ徑也。以レ是求レ利。不二亦難一乎。嘗觀二之神農有炎之德一。稽二之虞夏商周之書一。度二諸法賢士人之言一。所三以存亡廢興一。而非レ由二此道一者。未二之有一也。

嚴恢曰。所レ爲レ問レ道者爲レ富。今得レ珠亦富矣。安用レ道。子列子曰。桀紂唯重レ利而輕レ道。是以亡。幸哉。余未二汝語一也。人而無レ義。唯食而已。是雞狗也。彊食靡角。勝者爲レ制。是禽獸也。爲二雞狗禽獸一矣。而欲二人之尊一レ己。不レ可レ得也。人不レ尊レ己。則危辱及レ之矣。

嚴恢曰く、(一)道を問ふを爲す所のものは富まんが爲なり。今珠を得るも亦富まん、安んぞ道を用ひんと。子列子曰く、桀紂は唯利を重んじて道を輕んず、是を以て亡びたり。幸なるかな(二)。余未だ汝に語らざりき。人にして義なきときは唯食するのみ。是雞狗なり。彊食靡角(三)、勝つ者制を爲すは、是禽獸なり。雞狗禽獸たり、而して人の己を尊ばんことを欲するも得べからざるなり。人己を尊ばざれば、則ち危辱之に及ぶと。

(一)道を問ふは學問する也 (二)汝の問ひたることそ幸なれ (三)食を爭ひ角にて突き合ふ也

列子學レ射中

列子射を學んで中れり。(一)關尹子に請ふ。尹子曰く、子は子の中れる所以の者を知

子曰。言美則響美。言惡則響惡。身長則影長。身短則影短。名也者響也。身也者影也。故曰。愼爾言。將有和之。愼爾行。將有隨之。是故聖人見出以知入。觀往以知來。此其所以先知之理也。度在身。稽在人。人愛我。我必愛之。人惡我。我必惡之。湯武愛天下。故王。桀紂

惡し。身長きときは則ち影長く、身短きときは則ち影短し。名は響なり、身は影なり(一)。故に曰く、爾の言を愼まば、將に之に和するものあらんとす。爾の行を愼まば、將に之に隨ふものあらんとすと。是の故に聖人は、出づるを見て以て入るを知り(二)、往くを觀て以て來るを知る。此其の先づ知る所以の理なり(三)。(四)度は身に在り、稽ふるは人に在り。人我を愛すれば、我必ず之を愛す、人我を惡めば、我必ず之を惡む。湯武は天下を愛す、故に王たり。桀紂は天下を惡む、故に亡ぶ。此れ稽ふる所なり。稽度皆明にして道らざるは、之を出づるに門に由らず、行くに徑に從はざるに譬ふ。是を以て利を求むること亦難からずや。嘗て之を神農有炎(五)の德に觀、之を虞夏商周の書に稽へ、諸を法士(六)賢人の言に度らば、存亡廢興する所以にして此の道に由るに非ざる者は、未だ之あらざるなり。

(一) 名は實の響にして身は心の影也　(二) 聖人は言出づれば響入り、形往けば影來ることを知る也　(三) 人の知らざる所を先づ知る也　(四) 度は尺度也、我が身を尺度にして人に就いて稽ふる也　(五) 有炎は炎帝也　(六) 法士は五帝三王の法度を守る士也

(一)說符第八

子列子學ニ於壺丘子林ー。壺丘子林曰。子知レ持レ後。則可レ言レ持レ身矣。列子曰。願聞レ持レ後。曰。顧ニ若影ー則知レ之。列子顧而觀レ影。形枉則影曲。形直則影正。然則枉直隨レ形而不レ在レ影。屈伸任レ物而不レ在レ我。此之謂ニ持レ後而處レ先。

子列子は壺丘子林に學ぶ。壺丘子林曰く、(二)子後を持することを知らば、則ち身を持することを言ふべしと。列子曰く、願はくは後を持することを聞かんと。曰く、若が影を顧みば則ち之を知らんと。列子顧みて影を觀る。形枉るときは則ち影曲り、形直きときは則ち影正し。然らば則ち(三)枉直は形に隨つて影に在らず、(四)屈伸は物に任じて我に在らず。此を之れ(五)後を持して先に處ると謂ふと。

(一) 至人の言は天道と符節を合するが如しといふ章にて說符と名づく (二) 後を持するは人に先だたぬことにて即ち謙譲の意なり (三) 影の枉ると直きとは形に隨ふものなり、即ち己人を敬すれば人も亦己を敬する理也 (四) 我が身の屈伸は萬物の主たる物の主る所にして我に在らず、萬物の主は即ち無名無形のものなり (五) 後を持して身を卑下の處に置けば人自然に我を先立たしむる也

關尹謂ニ子列

關尹子列子に謂つて曰く、言美なるときは則ち響美なり、言惡きときは則ち響

實。而悠悠者趣レ名不レ已。名固不レ可レ去。名固不レ可レ賓邪。今有レ名則尊榮。亡レ名則卑辱。尊榮則逸樂。卑辱則憂苦。憂苦犯レ性者也。逸樂順レ性者也。斯實之所レ係矣。名胡可レ去。名胡可レ賓。但惡ニ夫守レ名而累レ實。守レ名而累レ實。將レ恤ニ危亡之不レ救。豈徒逸樂憂苦之間哉。

か。今名あるときは則ち尊榮、名なきときは則ち卑辱、尊榮なれば則ち逸樂し、卑辱なれば則ち憂苦す。憂苦は性を犯す者なり、逸樂は性に順ふ者なり。斯れ實の係る所なり、名胡ぞ去つべけんや、名胡ぞ賓とすべけんや。但夫の名を守りて實を累すを惡む。名を守りて實を累さば、將に危亡の救はれざることを恤へんとす。豈徒に逸樂憂苦の間のみならんや。

㊀ 名のある所には譏も亦之に從ふ、故に名を棄つれば心邪無きなし ㊁ 名は賓物にて實者の如きものなり ㊂ 悠々たる者は樂しくなき人といふ意 ㊃ 此の如くなれば名は實の係る所なり、故に棄つべからず、又賓とすべからず ㊄ 名を護ひ棄つる所以は、名のみに拘り却つて實の妨げとなるを惡む故なり ㊅ 名のみに拘り生命を失ふに至る者は、實を累す者なり、豈に逸樂と憂苦との間のみに非ず、故に名を棄つる也

楊朱曰。豐屋美服。厚味姣色。有ニ此四者一。何求ニ於外一。有レ此而求レ外者。無レ厭之性。無レ厭之性。陰陽之蠹也。忠不レ足ニ以安レ君。適足ニ以危レ身。義不レ足ニ以利レ物。適足ニ以害レ生。安レ上不レ由ニ於忠一。而忠名滅焉。利レ物不レ由ニ於義一。而義名絕焉。君臣皆安。物我兼利。古之道也。

楊朱曰く、豐屋美服、厚味姣色、(一)此の四者あれば何ぞ外に求めん。此ありて外に求むるは厭くなきの性なり。厭くなきの性は陰陽の蠹なり。(二)忠は以て君を安んずるに足らず、適に以て身を危くするに足る。(三)義は以て物を利するに足らず、適に以て生を害するに足る。上を安んずること忠に由らずして忠名滅す。(四)物を利すること義に由らずして義名絕す。君臣皆安く、(五)物我兼ね利あるは、古の道なり。

(一) 姣色は美人也 (二) 陰陽の性を損する者なり (三) 忠義は君を安んじ物を利するに足らずして、却つて身を危くし生を害する者なり、自然の道に從へば上下共に安くして國治る也 (四) 自然に任すれば忠義の名なし、即ち忠義の名滅する也 (五) 忠義の名なくして君臣皆安く物我共に利あるは自然の道に從ふ故にて、是即ち眞の忠眞の義なり

鬻子曰。去レ名者無レ憂。老子曰。名者實之

鬻子曰く、名を去つる者は憂なしと。老子曰く、(二)名は實の賓なりと。而して悠悠(三)たる者名に趨(一)いて已まず。名固より去つべからず、名固より賓とすべからざる

聞機。心脊體煩。内熱生レ病矣。函晉之君。與二田父一侔レ地。則亦不レ盈二一時一而憊矣。故野人之所レ安。野人之所レ美。謂三天下無二過者一。昔者宋國有二田夫一。常衣二縕黂一。僅以過レ冬。暨二春東作一。自曝二於日一。不レ知三天下之有二廣廈隩室。綿纊狐貉一。顧二其妻一曰。負二日之暄一。人莫二知者一。以獻二吾君一。將レ有二重賞一。里之富室告レ之曰。昔人有下美二戎菽甘枲。莖芹萍子一者上。對二鄉豪一稱レ之。鄉豪取而嘗レ之。蜇二於口一慘二於腹一。衆哂而怨レ之。其人大慙。子此類也。

故に野人の安んずる所、野人の美とする所は、天下に過ぐる者なしと謂へり。昔者宋國に田夫あり、常に(一)縕黂を衣て、僅に以て冬を過す。春の(二)東作に暨んで、自ら(三)日に曝し、天下の(四)廣廈隩室綿纊狐貉あることを知らず。其の妻を顧みて曰く、日の暄なるを負ふ、人知る者なし。以て吾が君に獻ぜば、將に重賞あらんとすと。里の富室之に告げて曰く、昔人(五)戎菽甘枲莖芹萍子を美とする者あり。(六)鄉豪に對して之を稱す。鄉豪取りて之を嘗めしに、口を蜇し腹を慘む。衆哂うて之を怨む。其の人大に慙ぢぬ。子は此の類なりと。

(一) 亂れたる麻の綿入也　(二) 東作は春田を耕すをいふ　(三) 背を曝す也　(四) 廣廈は大屋、隩室は暖き室、綿纊はわた、狐貉はきつねむじなの裘　(五) 戎菽は大豆、甘枲は好麻子、莖芹萍子は菜蔬の名　(六) 鄉豪は鄉の豪族也

何羨壽。不矜貴。何羨名。不要勢。何羨位。不貪富。何羨貨。此謂順民。天下無對。制命在內。故語有之。曰。人不婚宦。情欲失半。人不衣食。君臣道息。周諺曰。田父可坐殺。晨出夜入。自以性之恒。啜菽茹藿。自以味之極。肌肉粗厚。筋節腃急。一朝處以柔毛綈幕。薦以粱肉

と。周の諺に曰く、田父は(一二)坐殺すべし。晨に出で夜に入り、自ら性の恒なりと以へり。菽を啜り(一三)藿を茹ひ、自ら味の極なりと以へり。(一四)肌肉麤厚、筋節腃急なり。一朝處らしむるに(一五)柔毛綈幕を以てし、薦むるに(一六)粱肉蘭橘を以てせば、心痟へ體煩うて、(一七)內熱して病を生ぜん。商魯の君(一八)田父と地を侔うせば、則ち亦(一九)一時に盈たずして憊れん。

(一) 鬼は鬼神妖怪の類 (二) 威は幽明の禍福也 (三) 遁人とは天を遁れ理に背く人也 (四) 自然に任するときは人より制せられず、然れども此の四者あるときは殺活を人に制せらる (五) 天命に逆はずして生死を心に置かざれば他人の長壽も羨むに足らず (六) 貴きに誇らんとする心なければ他人の高名も羨むに足らず。以下之に準ず (七) 自然に任せて逆はぬ故順民といふ也 (八) 畏るることなく羨むことなく貪ることなく、物を有せざるに因り、天下に我に對する者なし (九) 語は古語也 (一〇) 人妻を娶らず官に就くことなければ欲薄くして心を苦むることなからん (一一) 人衣食することなければ人に使はるゝことなし。故に君臣の道絶ゆる也 (一二) 農夫は常に立ちて働く者なり、故に久しく坐らせて置けば窮屈にたへず、之を坐殺といふ (一三) 藿は豆葉也 (一四) 皮膚荒々しく筋肉骨節ふとくこはき也 (一五) 柔かき毛織を着せ厚絹の幕を張りて居らしむる也 (一六) 米飯美肉等の珍味 (一七) 身內煩悶する也 (一八) 田父と同様の事をなす (一九) 一時間に滿たざる內に疲勞せん

非ニ我有一也。既有。不ニ得而去一之。身固生之主。物亦養之主。雖レ全ニ生身一。不レ可レ有ニ其身一。雖レ不レ去レ物。不レ可レ有ニ其物一。有ニ其物一。有ニ其身一。是横私ニ天下之身一。横私ニ天下之物一。其惟聖人乎。公ニ天下之身一。公ニ天下之物一。其惟至人矣。此之謂ニ至至者一也。

を離りて其の生命を養ふ也　(三) 身は我が所有とすることは能はざれども、既に生るゝからは之を全うせざるべからず　(四) 物は萬物也、物は我が有とすることは能はざれども、既に物なれば亦之を棄つるにも及ばず　(五) 身ありて始めて生命あり、物ありて始めて生を養ふを得る也　(六) 身あれば之を全うすといへども、又我が身を私せず我に物とし上ふべからず　(七) 物は生を養ふの主なれば棄てざるも、之を我が物として有すれば物我が累となる　(八) 天下の身を公にし天下の物を公にするは唯々聖人あるのみ。下の聖人も亦同じ　(一〇) 至至者は至人中の至人也

楊朱曰、生民之不レ得ニ休息一。爲ニ四事一故。一爲レ壽。二爲レ名。三爲レ位。四爲レ貨。有ニ此四一者。畏レ鬼。畏レ人。畏レ威。畏レ刑。此謂ニ之遁人一也。可レ殺可レ活。制レ命在レ外。不レ逆レ命。

楊朱曰く、生民の休息することを得ざるは四事の爲の故たり。一を壽と爲す、二を名と爲す、三を位と爲す、四を貨と爲す。此の四ある者は鬼を畏れ、人を畏れ、威を畏れ、(二)刑を畏る。此之を遁人と謂ふなり。(三)殺すべく活すべく、命を制すること外に在り。(四)命に逆はずば、何ぞ壽を羨まん。貴に矜らずば、何ぞ名を羨まん。(五)勢を要めずば、何ぞ位を羨まん。富を貪らずば、何ぞ貨を羨まん。(六)此をこれ順民と謂ふなり。(七)天下に對するなし。(八)命を制すること内に在り。故に語に之あり、(九)曰く、人婚宦せざれば、(一〇)情欲半を失ひ、人衣食せざれば君臣の道息まん(一一)

楊朱見二梁王一。言下治二天下一如レ運中諸掌上。梁王曰。先生有二一妻一妾一而不レ能レ治。三畝之園而不レ能レ芸。而言下治二天下一如レ運中諸掌上。何也。對曰。君見二其牧レ羊者一乎。百羊而羣。使二五尺童子荷レ箠而隨レ之。欲レ東而東。欲レ西而西。使下堯牽二一羊一。舜荷レ箠而隨上レ之。則不レ能レ前矣。且臣聞レ之。呑舟之

楊朱梁王に見え、天下を治むるは諸を掌に運らすが如しと言ふ(一)。梁王曰く、先生一妻一妾ありて治むること能はず、三畝の園ありて芸ること能はず、而して天下を治むるは諸を掌に運らすが如しと言ふは何ぞやと。對へて曰く、君其の羊を牧ふ者を見たるか。百羊ありて羣するに、五尺の童子をして箠を荷うて之に隨はしめば、東せんと欲すれば東し、西せんと欲すれば西せん。(二)堯をして一羊を牽き、舜をして箠を荷うて之に隨はしむるときは、則ち前むこと能はざらん。且つ臣之を聞く、(三)呑舟の魚は枝流に游ばず、鴻鵠は高飛して汙池に集らず。何となれば則ち其の(四)極めて遠ければなり。(五)黃鐘大呂は煩奏の舞に從ふべからず。何となれば則ち其の音疏(六)なればなり。將に大を治めんとする者は細を治めず、大功を成す者は小を成さずと、此の謂なり。

(一) 掌に運らすは易きを謂ふ (二) 堯舜をして一羊を牧せしむるも意の如くならず、天下を治むる才と家を治むる才とは同じからざるを謂ふ (三) 呑舟の魚は大魚をいふ (四) 其の志極めて高遠なればなり (五) 黃鐘大呂の音律は煩細なる俗樂に合はず (六) 疏は大也

紂亦藉累世之資。居南面之尊。威無不行。志無不從。肆情於傾宮。縱欲於長夜。不以禮義自苦。熙熙然以至於誅。此天民之放縱者也。彼二凶也。生有從欲之歡。死被愚暴之名。實者固非名之所與也。雖毀之不知。雖稱之弗知。此與株塊奚以異矣。彼四聖雖美之所歸。苦以至終。同歸於死矣。彼二凶雖惡之所歸。樂以至終。亦同歸於死矣。

紂も亦累世の資に藉り、南面の尊に居り、威行はれざるなく、志従はざるなく、情を傾宮に(一)肆にし、欲を長夜に(二)縦にし、禮義を以て自ら苦まず、熙熙然として以て誅せらるゝに至れり。此天民の放縦なる者なり。彼の二凶や、生きては欲を縦にするの歡あり、死しては愚暴の名を被る。(三)實は固より名の與する所に非ざるなり。(四)之を毀ると雖も知らず、之を稱すと雖も知らず。此株塊と奚を以て異ならん。彼の四聖は美の歸する所なりと雖も、苦んで以て終に至り、同じく死に歸せり。彼の二凶は惡の歸する所なりと雖も、樂んで以て終に至り、亦同じく死に歸せり。

(一) 傾宮は紂の宮殿　(二) 長夜の飲をいふ　(三) 實の無を識せば名を歸ることと能はず　(四) 然れども死後には譏らるゝも譽めらるゝも知ることなし

孔子明二帝王之道一。應二時君之聘一。伐二樹於宋一。削二迹於衞一。窮二於商周一。圍二於陳蔡一。受二屈於季氏一。見レ辱二於陽虎一。戚戚然以至二於死一。此天民之遑遽者也。凡彼四聖者。生無二一日之歡一。死有二萬世之名一。名者固非二實之所一レ取也。雖レ稱レ之弗レ知。雖レ賞レ之不レ知。與二株塊一無二以異一矣。桀藉二累世之資一。居二南面之尊一。智足三以距二羣下一。威足三以震二海内一。恣二耳目之娛一。窮二意慮之所一レ爲。熙熙然以至二於死一。此天民之逸蕩者也。

實の取る所に非ざるなり。之を(一一)稱すと雖も知らず、之を賞すと雖も知らず。株塊(一二)と以て異なることなし。桀は(一三)累世の資に藉り、南面の尊に居り、智は以て羣下を(一四)距ぐに足り、威は以て海内に震ふに足り、耳目の娛を恣にし、意慮の爲す所を窮め、熙熙然として以て死に至れり。此天民の逸蕩(一五)なる者なり。

(一)四國は四方の國にて管叔蔡叔等を指す、流言は周公成王の不利を謀らんとすと噂せし也　(二)周公東國に留り居りしこと三年　(三)管叔は周公の兄、蔡叔は周公の弟　(四)孔子宋に往き大樹の下にて禮を講習したるに宋の桓魋といふ人其の樹を伐り拔けり　(五)孔子衞に往きしも衞公の爲す所を醜として之を去る　(六)楚人をして孔子を聘せしめんとせしに、陳蔡の大夫孔子の楚に用ひらるゝを害とし孔子を野に圍めり　(七)孔子魯の大司寇より相事を攝行す、齊人之を聞いて懼れ女樂を魯に饋る、季桓子之を受け、又郊祭して膰俎を大夫に致さず、孔子遂に魯を去る　(八)孔子匡を過ぎし時、匡人嘗て陽虎に亂暴せられしことあり、孔子の貌陽虎に類せりとて之を執へたり　(一〇)名ある者は實なし、故に名は實に因りて得らるゝものに非ず　(一一)死後に名を稱揚せらるゝも知ること能はず　(一二)人死すれば木のかぶ土くれと異なることなし　(一三)祖先累世の遺業を承け繼ぐ也　(一四)臣下の諫を拒ぐに足る也　(一五)逸樂放蕩也

商鈞不才、禪位於禹。戚戚然以至於死。此天人之窮毒者也。鯀治水土、績用不就。殛諸羽山。禹纂業事讎。惟荒土功、子產不字。過門不入、身體偏枯、手足胼胝。及受舜禪、卑宮室、美紱冕。戚戚然以至於死。此天人之憂苦者也。

武王既終。成王幼弱。周公攝天子之政。邵公不悅。四國流言。居東三年。誅兄放弟。僅免其身。戚戚然以至於死。此天人之危懼者也。

● 天下の哲人を擧ぐれば必ず舜禹周孔を稱し聖人を擧ぐれば必ず堯舜を稱する也 ● 周は周公を作る也 ● 口に美味を食することを得ざる也 ● 父母に疎ぜられて妻を娶る ● 舜の子商鈞不肖にして位を嗣ぐに足らず ● 戚戚は憂苦の貌 ● 天人は天下の人、窮毒は困窮・勞也 ● 鯀は禹の父、洪水の防治をして成績擧らず遂に羽山に殛死せらる ● 纂業の四字事讎と讀む也 ● 荒はひろくあまねき也 ● 天子の位にある故紱冕は美にする也

武王既に終り、成王幼弱なり。周公天子の政を攝す。邵公悦ばず、四國流言す。東に居ること三年、兄を誅し弟を放ち、僅に其の身を免れ、戚戚然として以て死に至れり。此天人の危懼せる者なり。孔子帝王の道を明にし、時君の聘に應じ、樹を宋に伐られ、迹を衛に削られ、商周に窮し、陳蔡に圍まれ、屈を季氏に受け、陽虎に辱められ、戚戚然として以て死に至れり。此天民の遑遽なる者なり。凡そ彼の四聖は、生きて一日の歡なく、死して萬世の名あり。名は固より

一節一得中一國上子爲レ之乎。禽子默然。有レ間孟孫陽曰。一毛微二於肌膚一。肌膚微二於一節一省矣。然則積二一毛一以成二肌膚一。積二肌膚一以成二一節一。一毛固一體萬分中之一物。奈何輕レ之乎。禽子曰。吾不レ能レ所二以答一レ子。然則以二子之言一問二老聃關尹一。則子言當矣。以二吾言一問二大禹墨翟一。則吾言當矣。孟孫陽因顧與二其徒一說二他事一。

楊朱曰。天下之美。歸二之舜禹周孔一。天下之惡。歸二之桀紂一。然而舜耕二於河陽一。陶二於雷澤一。四體不レ得二暫安一。口腹不レ得二美厚一。父母之所レ不レ安弟妹之所レ不レ親。行年三十。不レ告而娶。及レ受二堯之禪一。年已長。智已衰。

楊朱曰く、(一)天下の美之を舜禹周孔に歸し、天下の惡之を桀紂に歸す。然り而して舜は河陽に耕し、(二)雷澤に陶し、四體暫くも安んずることを得ず、(三)口腹美厚なることを得ず。父母の安んぜざる所、弟妹の親まざる所なり。行年三十にして(四)告げずして娶る。堯の禪を受くるに及んで年已に長じ、智已に衰ふ。(五)商鈞不才にして位を禹に禪り、(六)戚戚然として以て死に至る。(七)此天人の窮毒なる者なり。(八)鯀水土を治めて、績用就らず。諸を羽山に殛す。禹業を纂ぎ讐に事へ、惟土功を荒にし、子産るれども字まず、門を過ぐれども入らず、(九)身體偏枯し、(一〇)手足胼胝す。舜の禪を受くるに及んで、宮室を卑くし、紱冕を美くし、戚戚然として以て死に至れり。此天人の憂苦する者なり。

一毫一人人不レ利二天下一天下治矣。禽子問二楊朱一曰。去二子體之一毛一以濟二一世一汝爲レ之乎。楊子曰。世固非二一毛之所一レ濟。禽子曰。假濟爲レ之乎。楊子弗レ應。禽子出語二孟孫陽一。孟孫陽曰。子不レ達二夫子之心一。吾請言レ之。有下侵二若肌膚一獲二萬金一者上。若爲レ之乎。曰。爲レ之。孟孫陽曰。有下斷二若

獲ることあらば、若之を爲さんかと。曰く、之を爲さんと。孟孫陽曰く、若が（六）一節を斷ちて一國を得ることあらば、子之を爲さんかと。禽子默然たり。間くありて孟孫陽曰く、一毛は肌膚より微に、肌膚は一節より微なること省なり。然らば則ち一毛を積みて以て肌膚を成し、肌膚を積みて以て一節を成す。一毛は固より一體萬分中の一物なり。奈何ぞ之を輕んぜんやと。禽子曰く、（七）吾子に答ふる所以を能くせず。然らば則ち子の言を以て老聃關尹に問はば、則ち子の言當らん。吾が言を以て大禹墨翟に問はば、則ち吾が言當らんと。（八）孟孫陽因つて顧みて其の徒と他事を說く。

（一）一本の毛を拔いて物を利することをすらせず（二）禹は洪水を治へて天下を奔走し手足胼胝せり（三）損す身を費ふことは甚だ遠く故に此の問を設する也（四）假し濟ふことを得ば之を爲すか（五）侵すは掠りとる也。汝の肌膚を掠りとらば萬金を與へんと言はゞ之を爲すか（六）一節は手足の一ふし（七）吾汝の問に答ふること能はず、然れども汝は道家の學を爲す者にして我は聖賢の道を學ぶ者なれば各據る所あり（八）孟孫陽は楊朱の弟子にて大禹墨翟の道を喜ばず故に復た答へざる也

百年猶厭二其多一。況人生之苦也乎。孟孫陽曰。若然速亡愈二於久生一。則踐二鋒刃一。入二湯火一。得レ所レ志矣。楊子曰。不レ然。既生則廢而任レ之。究二其所一レ欲。以俟二於死一。將レ死則廢而任レ之。究二其所一レ之。以放二於盡一。無レ不レ廢。無レ不レ任。何遽遲二速於其間一乎。

べきのみ 〔四〕既に此の世に生るれば打捨てゝ其の生くるに任せ毫も心を用ひず 〔五〕廢てざるなく任せざるなく毫も心を用ひざれば早く死するも遲く死するも一様にて區別なし

楊朱曰。伯成子高不下以二一毫一利上レ物。舍レ國而隱耕。大禹不下以二一身一自利上。一體偏枯。古之人。損二一毫一利二天下一不レ與也。悉二天下一奉二一身一不レ取也。人人不レ損二

揚朱曰く、伯成子高は〔一〕一毫を以て物を利せず、國を舍てて隱耕す。大禹は一身を以て自ら利せず、〔二〕一體偏枯す。古の人、一毫を損して天下を利するも與せざるなり、天下を悉して一身に奉ずるも取らざるなり。人人一毫を損せず、人人天下を利せざれば、天下治らんと。〔三〕禽子楊朱に問うて曰く、子が體の一毛を去て以て世を濟ふは、汝之を爲すかと。楊子曰く、世固より一毛の濟ふ所に非ずと。禽子曰く、〔四〕假し濟はば之を爲さんかと。楊子應へず。禽子出でて孟孫陽に語ぐ。孟孫陽曰く、子は夫子の心に達せず。吾請ふ之を言はん。若の肌膚を〔五〕侵して萬金を

孟孫陽。問二楊子一曰。有レ人二於此一。貴レ生愛レ身。以蘄二不死一可乎。曰。理無二不死一。以蘄二久生一可乎。曰。理無二久生一。生非二貴之所一レ能存一。身非二愛之所一レ能厚一。且久生奚爲。五情好惡。古猶レ今也。四體安危。古猶レ今也。世事苦樂。古猶レ今也。變易治亂。古猶レ今也。既聞レ之矣。既見レ之矣。既更レ之矣。

孟孫陽、楊子に問うて曰く、此に人あらんに、(一)生を貴び身を愛し、以て不死を蘄めば可ならんかと。曰く、理不死なし。以て久生を蘄むるは可ならんかと。曰く、理久生なし。生は貴の能く存するに所に非ず、身は愛の能く厚くする所に非ず。且つ久生して奚をか爲さん。五情の好惡、古猶ほ今のごとし、四體の安危、古猶ほ今のごとし、世事の苦樂古猶ほ今のごとし。(二)變易治亂古猶ほ今のごとし。(三)既に之を聞けり、既に之を見たり、既に之を更たり。百年猶ほ其の多きを厭ふ、況んや人生の苦をやと。孟孫陽曰く、若し然く速に亡すること久生に愈らば、則ち鋒刃を蹈み湯火に入らば、志す所を得んと。楊子曰く、然らず。既に生ずれば則ち廢てて之に任せ、其の欲する所を究めて以て死を俟つ。將に死せんとすれば則ち廢てて之に任せ、其の之く所を究めて以て盡くるに放る。廢てざるなく任せざるなし、何ぞ其の間に遲速あらんやと。

(一) 生命を貴び身を大切にする也　(二) 變易は世事の推移をいふ　(三) 汝と我と既に之を經驗せり、將來も亦知る

也。雖二山川阻險。塗逕修遠一。無レ不二必之一。猶三人之行二咫步一也。賓客在レ庭者日百往。庖厨之下。不レ絕二煙火一。堂廡之上。不レ絕二聲樂一。奉養之餘。先散二之宗族一。宗族之餘。次散二之邑里一。邑里之餘。乃散二之一國一。行年六十。氣幹將レ衰。棄二其家事一。都散二其庫藏珍寶。車服妾媵一。一年之中盡焉。不下爲二子孫一留上財。及二其病一也。無二藥石之儲一。及二其死一也。無二瘞埋之資一。一國之人。受二其施一者。相與賦而藏レ之。反二其子孫之財一焉。禽骨釐聞レ之曰。端木叔狂人也。辱二其祖一矣。段干生聞レ之曰。端木叔達人也。德過二其祖一矣。其所レ行也。其所レ爲也。衆意所レ驚。而誠理所レ取。衞之君子。多以二禮敎一自持。固未レ足三以得二此人之心一也。

むと。段干生之を聞いて曰く、端木叔は達人なり、德其の祖に過ぎたり。其の行ふ所、其の爲す所、衆意の驚く所にして、(二一)誠理の取る所なり。衞の君子多く禮敎を以て自ら持するも、固より(二二)未だ以て此の人の心を得るに足らざるなりと。

(一) 端木は姓、叔は名　(二) 世は末孫をいふ　(三) 先貲は父祖の遺產也　(四) 世故は世渡りの道也　(五) 生民は人民に同じ　(六) 牆屋は家作をいふ臺は土を積みて造れるもの、榭は臺に屋ある者　(七) 草木を植うるを園といひ、禽獸を飼ふを囿といふ、皆には也　(八) 音樂と侍女と　(九) 齊楚は皆大國也　(一〇) 遠方の國をいふ　(一一) 齊土は中國をいふ　(一二) 我が垣根の中に在る物の如し　(一三) 塗逕修遠は道の遠き處をいふ　(一四) 八寸を咫といふ、咫步は一尺にも足らぬ道をいふ　(一五) 臺所に火の絕ゆることなし　(一六) 奉養の餘は一家衣食の餘也　(一七) 宗族は一族親類をいふ　(一八) 氣幹は氣力筋骨也　(一九) 瘞埋の資は埋葬の費也　(二〇) 相與に醵金して葬式を營み、又財を其の子孫に返す也　(二一) 誠の理を以て考ふれば法則として取るべし　(二二) 達人の爲す所は凡人知らざる也

果二萬金一。不レ治二世故一。放二意所一レ好。其生民之所レ欲レ爲。人意之所レ欲レ玩者。無レ不レ爲也。無レ不レ玩也。牆屋臺榭園囿池沼飲食車服。聲樂嬪御。擬二齊楚之君一焉。至二其情所レ欲レ好。耳所レ欲レ聽。目所レ欲レ視。口所レ欲レ嘗。雖二殊方偏國。非二齊土之所一レ產育一者上。無レ不二必致一レ之。猶二藩墻之物一也。及二其游一

する所の者、爲さざるなく、玩ばざるなく、牆屋臺榭、園囿池沼、飲食車服、聲樂嬪御、齊楚の君に擬す。其の情の好まんと欲する所、耳の聽かんと欲する所、目の視んと欲する所、口の嘗めんと欲する所に至りては、殊方偏國、齊土の產育する所の者に非ずと雖も、必ず之を致さざることなく、猶ほ藩墻の物のごとし。其の游ぶに及んでや、山川阻險、塗逕修遠なりと雖も、必ず之かざるなく、猶ほ人の跬步を行くがごとし。賓客の庭に在る者日々に百もて往へ、庖廚の下煙火を絕たず、堂廡の上聲樂を絕たず。奉養の餘は先づ之を宗族に散じ、宗族の餘は次に之を邑里に散じ、邑里の餘は乃ち之を一國に散ず。行年六十、氣幹將に衰へんとす。其の家事を棄て、都て其の庫藏の珍寶車服妾媵を散じ、一年の中に盡し、子孫の爲に財を留めず。其の病めるに及んでや、藥石の儲なく、其の死するに及んでや、瘞埋の資なし。一國の人其の施を受くる者、相與に賦して之を藏め、其の子孫の財を反す。禽骨釐之を聞いて曰く、端木叔は狂人なり、其の祖を辱

之醜。性命之危也。且若以治國之能夸物。欲以說辭亂我之心。榮祿喜我之意。不亦鄙而可憐哉。我又欲與若別之。夫善治外者物未必治而身交苦。善治內者。物未必亂而性交逸。以若之治外。其法可暫行於一國。未合於人心。以我之治內。可推之於天下。君臣之道息矣。吾常欲以此術而喩之。若反以彼術而敎我哉。子產忙然無以應之。他日以告鄧析。鄧析曰。子與眞人居。而不知也。孰謂子智者乎。鄭國之治偶耳。非子之功也。

(一一)彼の術を以て我を敎へんやと。子產(一二)忙然として以て之に應ふることなし。他日以て鄧析に告ぐ。鄧析曰く、子眞人と居て知らざるなり。孰か子を智者なりと謂ふや。鄭國の治るは偶(一三)のみ、子の功に非ざるなりと。

(一)酒色に耽ると祿位を得ると何れか樂しきかを擇ぶ也 (二)覩は數に通ず (三)人に誇る也 (四)汝の爲に之を辨ぜん (五)外を治むるは禮義を治むる也 (六)身を苦めて天下必ずしも治らず (七)內を治むるは性情の眞を治むる也 (八)各性のまゝに安んずる也 (九)君も勞することなく民も安んじて其の然る所以を知らず、君臣の道止むに同じき也 (一〇)此の道は內を治むるをいふ (一一)彼の術は外を治むるをいふ (一二)忙然は茫然に同じ (一三)偶は偶然也

衞端木叔者。子貢之世也。藉其先貲。家

衞の(一)端木叔は子貢の世(二)なり。其の先貲(三)に藉りて家萬金を累ね、世故(四)を治めずして意の好む所を放にす。其の生民(五)の爲さんと欲する所、人意の玩ばんと欲

之久矣、擇之亦久矣。豈待若言而後識之哉。凡生之難遇。而死之易及。以難遇之生。俟易及之死。可孰念哉、而欲尊禮義以夸人。矯情性以招名。吾以此爲弗若死也。爲欲盡一生之觀。窮當年之樂。唯患腹溢而不得恣口之飮。力憊而不得肆情於色。不遑憂名聲

之を識らんや。凡そ生は遇ひ難くして死に及び易し。遇ひ難きの生を以て及び易きの死を待つ、孰く念ふべきかな。而して禮義を尊んで以て人に夸り、情性を矯めて以て名を招かんと欲す。吾此を以て爲すは死するに若かず。一生の觀を盡し、當年の樂を窮めんと欲する爲には、唯、腹の溢れて口の飮むことを恣にすることを得ざらんことを患へて、力憊れて情を色に肆にすることを得ず、名聲の醜と性命の危きとを憂ふるに遑あらざるなり。且つ若國を治むるの能を以て物に夸り、說辭を以て我が心を亂り、榮祿もて我が意を喜ばしめんと欲す。亦鄙(一)にして憐む可からずや。我又(二)若の與に之を別たんと欲す。夫れ善く(三)外を治むる者は、(六)物未だ必ずしも治らずして身交苦む。善く(七)內を治むる者は、物未だ必ずしも亂れずして(八)性交逸す。若の外を治むるを以てすれば、其の法暫く一國に行ふべきも、未だ人心に合はず。我が內を治むるを以てすれば、之を天下に推すべく、(九)君臣の道息す。吾常に此(一〇)の術を以て之を喩さんと欲す。若反つて

屛ニ親昵一。絕ニ交遊一。逃ニ於後庭一。以レ晝足レ夜。三月一出。意猶未レ愜。鄕有ニ處子之娥姣者一。必賄而招レ之。媒而挑レ之。弗レ獲而後巳。子產日夜以爲レ戚。密造ニ鄧析一而謀レ之曰。僑聞。治レ身以及レ家。治レ家以及レ國。此言下自ニ於近一至中於遠上也。僑爲レ國則治矣。而家則亂矣。其道逆邪。將奚方以救ニ二子一。子其詔レ之。鄧析曰。吾怪レ之久矣。未ニ敢先言一。子奚不下時ニ其治一也。喩以ニ性命之重一。誘以中禮義之尊上乎。子產用ニ鄧析之言一。因間以謁ニ其兄弟一。而告レ之曰。人之所三以貴ニ於禽獸一者智慮。智慮之所レ將者禮義。禮義成則名位至矣。若觸レ情而動。耽ニ於嗜慾一。則性命危矣。子納ニ僑之言一。則朝自悔而夕食レ祿矣。

成れば則ち名位至る。(二五)若し情に觸れて動き、嗜慾に耽らば、則ち性命危からん。子、僑の言を納れば、則ち朝に自ら悔いて夕に祿を食まんと。

(一) 化は德化也 (二) 禁は禁令也 (三) 室は家也 (四) 一鍾は六石四斗 (五) 封は堆也 (六) 糟麴は酒糟也 (七) 世道の安危は世の治亂をいふ (八) 人理の悔吝は人事の禍福をいふ (九) 室内の有亡は家財の有無也 (一〇) 生死の哀樂也 (一一) 後庭は女中部屋也 (一二) 稚齒は年少也、婑媠は美好也 (一三) 聃は耽也 (一四) 親昵は親近の者をいふ (一五) 未は愜はずとは未だ飽かざる也 (一六) 處子は處女也 (一七) 娥姣も亦美女の形容 (一八) 賄は金銀を贈る也 (一九) 百方手段を盡す也 (二〇) 僑は子產の名 (二一) 其の道古人の言ふ所に反せり (二二) 其の醉はず溺れざる時を伺ふをいふ (二三) 性命は生命也 (二四) 間は間隙の時也 (二五) 情欲のまゝに擧動する也

朝穆曰。吾知レ

朝穆曰く、吾之を知ること久し、(一)之を擇ぶこと亦久し。豈若が言を待ちて後に

穆。朝好酒、穆好色。朝之室也、聚酒千鍾。積麴成封、望門百步、糟漿之氣、逆於人鼻。方其荒於酒也、不知世道之安危、人理之悔吝、室內之有亡、九族之親疎、存亡之哀樂也。雖水火兵刃交於前、弗知也。穆之後庭、比房數十、皆擇稚齒婑媠者以盈之。方其耽於色也

の哀樂を知らず、水火兵刃前に交ると雖も知らざるなり。穆の後庭は、房を比ぶること數十、皆稚齒婑媠なる者を擇びて以て之に盈つ。其の色に耽るに方りてや、親暱を屛け、交游を絕ち、後庭に逃れ、晝を以て夜に足し、三月に一たび出づるも、意猶ほ未だ愜はず。鄕に處子の娥姣なる者あれば、必ず賄して之を招き、媒して之を挑み、獲られずして後に已む。子產日夜以て戚と爲し、密に鄧析に造りて之に謀りて曰く、僑聞く、身を治めて以て家に及ぼし、家を治めて以て國に及ぼす。此近きより遠きに至るを言ふなり。僑國を爲むることは則ち治れり、而して家は則ち亂れたり。其の道逆なるか。將奚の方か以て二子を救はん。子其れ之を詔げよと。鄧析曰く、吾之を怪むこと久し。未だ敢て先づ言はず。子奚ぞ其の治れるを時として、喩すに性命の重きを以てし、誘ふに禮義の尊きを以てせざるやと。子產鄧析の言を用ひ、因つて間に以て其の兄弟に謁して之に告げて曰く、人の禽獸より貴き所以は智慮なり、智慮の將ふ所の者は禮義なり。禮義

晏平仲曰。送レ死略矣。將何以告焉。管夷吾曰。吾固欲レ聞レ之。平仲曰。既死。豈在レ我哉。焚レ之亦可。沈レ之亦可。瘞レ之亦可。露レ之亦可。衣レ薪而棄二諸溝壑一亦可。袞衣繡裳。而納二諸石槨一亦可。唯所レ遇焉。管夷吾顧謂二鮑叔黄子一曰。生死之道。吾二人進レ之矣。

石槨に納るるも亦可なり。唯(六)遇ふ所のまゝなりと。管夷吾顧みて鮑叔(七)と黄子に謂つて曰く、生死の道、吾二人之を進せりと。

(一)愉快に日を送れば一日も一年の如く、一年も十年の如し (二)戚戚然は憂ふる貌 (三)略せりとは足らずとの意、死を送ることは告ぐるに足らず故に告ぐることを得ず (四)既に死すれば人に非ず故に又我にあらず (五)袞衣繡裳に天子の法服也 (六)たゞ其の時其の處の境遇次第にて宜し (七)鮑叔黄子は二人の名

子產相レ鄭。專二國之政一三年。善者服二其化一。惡者畏二其禁一。鄭國以治。諸侯憚レ之。而有レ兄。曰二公孫朝一。有レ弟。曰二公孫

子產鄭に相として、國の政を專にすること三年。善者は其の化(一)に服し、惡者は其の禁(二)を畏れ、鄭國以て治り、諸侯之を憚る。而して兄あり公孫朝と曰ひ、弟あり公孫穆と曰ふ。朝は酒を好み、穆は色を好む。朝の室(三)や、酒を聚むること千鍾(四)、麴を積んで封(五)を成し、門を望み百歩にして、糟漿(六)の氣人の鼻を逆ふ。其の酒に荒むに方りては、世道(七)の安危、人理(八)の悔吝、室内(九)の有亡、九族の親疎、存亡(一〇)

見者美色。而不得觀。謂之閼明。鼻之所欲向者椒蘭。而不得嗅。謂之閼顫。口之所欲道者是非。而不所言。謂之閼智。體之所欲安者美厚。而不得從。謂之閼適。意之所欲爲者放逸。而不得行。謂之閼性。凡此諸閼。廢虐之主。去廢虐之主。熙熙然以俟死。

そ此の諸閼は廢虐の主なり。（八）廢虐の主を去て、熙熙然として以て死を俟つ。（九）

● （一）晏平仲は晏嬰、管夷吾は管仲也　（二）自然に任せ一毫强ゼず抑制せざる也　（三）其の耳目を閉ふ也　（四）閼聰は聰を塞ぐ也、以下之に準ず　（五）顫は鼻の通ずる也　（六）美厚は美にして厚きをいふ　（七）意の往くまゝにすることを得ざる也　（八）廢は大也、人の性情を抑壓するものなれば之を大惡の君主に比する也　（九）熙熙然は樂む貌

一日一月。一年十年。吾所謂養。拘此廢虐之主。錄而不舍。戚戚然以至久生。百年千年萬年。非吾所謂養。管夷吾曰。吾既告子養生矣。送死奈何。

（一）一日も一月なり、一年も十年なり、吾が謂はゆる養ふなり。此の廢虐の主に拘へられ、錄せられて舍てず、（二）戚戚然として以て百年十年萬年を久生するに至るも、吾が謂はゆる養ふに非ざるなりと。管夷吾曰く、吾既に子に養生を告げたり。死を送るは奈何。晏平仲曰く、死を送ること略せり、（三）將何を以てか告げんと。管夷吾曰く、吾固く之を聞かんと欲すと。平仲曰く、（四）既に死すれば、豈我に在らんや。之を焚くも亦可なり、之を沈むるも亦可なり。之を瘞むるも亦可なり、之を露すも亦可なり。薪を衣せて諸を溝壑に棄つるも亦可なり。（五）袞衣繡裳して諸を

不ㇾ服二文錦一。不ㇾ陳二犧牲一。不ㇾ設二明器一也。

晏平仲。問二養ㇾ生於管夷吾一。管夷吾曰。肆ㇾ之而已。勿ㇾ壅勿ㇾ閼。晏平仲曰。其目奈何。夷吾曰。恣二耳之所ㇾ欲ㇾ聽。恣二目之所ㇾ欲ㇾ視。恣二鼻之所ㇾ欲ㇾ向。恣二口之所ㇾ欲ㇾ言。恣二體之所ㇾ欲ㇾ安。恣二意之所ㇾ欲ㇾ行。夫耳之所ㇾ欲ㇾ聞者音聲。而不ㇾ得ㇾ聽。謂二之閼聽一。目之所ㇾ欲

(一)晏平仲、生を養ふことを管夷吾に問ふ。管夷吾曰く、(二)之を肆にするのみ、壅ぐこと勿れ閼ぐこと勿れと。晏平仲曰く、其の目奈何。(三)夷吾曰く、耳の聽かんと欲する所を恣にし、目の視んと欲する所を恣にし、鼻の向はんと欲する所を恣にし、口の言はんと欲する所を恣にし、體の安んぜんと欲する所を恣にし、意の行はんと欲する所を恣にす。夫れ耳の聞かんと欲する所の者は音聲なり、而して聽くことを得ざるを、之を閼聽と謂ふ。(四)目の見んと欲する所の者は美色なり、而して視ることを得ざるを、之を閼明と謂ふ。鼻の向はんと欲する所の者は椒蘭なり、而して嗅ぐことを得ざるを、之を閼顫と謂ふ。(五)口の道はんと欲する所の者は是非なり。而して言ふことを得ざるを、之を閼智と謂ふ。體の安んぜんと欲する所の者は(六)美厚なり、而して從ふことを得ざるを、之を閼適と謂ふ。意の爲さんと欲する所の者は放逸なり、而して行ふことを得ざるを、之を閼性と謂ふ。(七)凡

之窶損生。子貢之殖累身。然則窶亦不可。殖亦不可。其可焉在。曰。可在樂生。可在逸身。故善樂生者不窶。善逸身者不殖。

可は生を樂むに在り。可は身を逸するに在り。故に善く生を樂む者は窶せず、善く身を逸する者は殖せず。

㈠ 原憲は孔子弟子也、窶は貧の甚しき也 ㈡ 子貢は初貧なりしも後貨殖して富者となれり ㈢ 原憲の道を守りて貧窶なりしは一生を損する者なり、子貢の貨殖して富みしも辛労して樂む暇少し ㈣ 以上は二つながら不可也

楊朱曰。古語有之。生相憐。死相捐。此語至矣。相憐之道。非唯情也。勤能使逸。饑能使飽。寒能使溫。窮能使達也。相捐之道。非不相哀也。不含珠玉。

楊朱曰く、古語に之あり、(二)生に相憐み、死に相捐つと。此の語至れり。相憐むの道は唯ゝ情に非ず。勤むれば能く逸せしめ、饑うれば能く飽かしめ、寒ければ能く溫ならしめ、窮すれば能く達せしむ。(三)相捐つるの道は、相哀まざるに非ざるなり。珠玉を含ましめず、文錦を服せしめず、犧牲を陳ねず、(三)明器を設けざるなり。

㈡ 人は生時こそ大切なれ、死後には如何にするも詮なし、故に死者を葬ることと棄つるが如し ㈢ 古人の死しては相捐つといふは、哀み嘆くことは甚しきも儀式裝飾を盛にせざるをいふ。當時の人情葬禮に力を盡すも哀悼の足らざるを譏れる也 ㈣ 明器は殉葬也

所貴。賤非所賤。然而萬物齊生齊死。齊賢齊愚。齊貴齊賤。十年亦死。百年亦死。仁聖亦死。凶愚亦死。生則堯舜。死則腐骨。生則桀紂。死則腐骨。一矣。孰知其異。且趣當生。奚遑死後。

(一)生時は各異なれども死すれば皆同じ　(二)人の能くする所に非ず自然なり　(三)自ら生ぜんとして生ずる者にあらず、自ら死せんとして死する者にあらず、賢にするも愚にするも貴くするも賤くするも皆同じ　(四)たゞ生前の事を計るべし、死後の事を思ふべからず

楊朱曰。伯夷非亡欲。矜清之郵。以放餓死。展季非亡情。矜貞之郵。以放寡宗。清貞之誤善。若此。

楊朱曰。原憲窶於魯。子貢殖於衛。原憲

楊朱曰く、伯夷は欲なきに非ざるも、(一)清に矜るの郵しき、以て餓死に放れり。展季(二)は情なきに非ざるも、貞に矜るの郵しき、以て宗を寡にするに放れり。(三)清(四)貞の善を誤ること此の若し。

(一)欲なきに非ずとは生を欲せざるに非ざるを謂ふ　(二)展季は柳下恵也　(三)柳下恵は寒夜に人の娘を抱きて眠るに人之を疑はざる程堅固の人なり、然れども其の爲に子孫なくして祖先を祭寡の如くせり　(四)清貞に過ぐるは自然の性に違ふものなり

楊朱曰く、(一)原憲魯に窶し、(二)子貢衛に殖す。(三)原憲の窶は生を損し、子貢の殖は身を累す。然らば則ち窶も亦不可、殖も亦不可なり。(四)其の可焉くにか在る。曰く、

耳目之觀聽。惜身意之是非。徒失當年之至樂。不能自肆於一時。重囚累梏。何以異哉。太古之人。知生之暫來。知死之暫往。故從心而動。不違自然。所好當身之娛。非所去也。故不為名所勸。從性而動。不逆萬物。所好死後之名。非所取也。故不為刑所及。名譽先後。年命多少。非所量也。

楊朱曰。萬物所異者生也。所同者死也。生則有賢愚貴賤。所以異也。死則有臭腐消滅。是所同也。雖然賢愚貴賤。非所能也。臭腐消滅。亦非所能也。故生非所生。死非所死。賢非所賢。愚非所愚。貴非

楊朱曰く、萬物の異なる所の者は生なり、同じき所の者は死なり。生きては則ち賢愚貴賤あり、異なる所以なり。死しては則ち臭腐消滅あり、是同じき所なり。然りと雖も賢愚貴賤は能くする所に非ず。臭腐消滅も亦能くする所に非ず。故に生も生ずる所に非ず、死も死する所に非ず、賢も賢にする所に非ず、愚も愚にする所に非ず、貴も貴くする所に非ず、賤も賤くする所に非ず。然り而して萬物齊しく生じ齊しく死し、齊しく賢に齊しく愚に、齊しく貴く齊しく賤し。十年も亦死し、百年も亦死す。仁聖も亦死し、凶愚も亦死す。生けるときは則ち堯舜、死するときは則ち腐骨。生けるときは則ち桀紂、死するときは則ち腐骨。腐骨は一なり。孰か其の異を知らん。且く當生に趣うて、奚ぞ死後に遑あらん。

懼。又幾居二其半一矣。量二十數年之中一。逌然而自得。無二介焉之慮一者。亦亡二一時之中一爾。則人之生也奚爲哉。奚樂哉。爲二美厚一爾。爲二聲色一爾。而美厚復不レ可二常厭足一。聲色不レ可二常翫聞一。乃復爲下刑賞之所二禁勸一。名法之所中進退上。遑遑爾競二一時之虚譽一。規二死後之餘榮一。偶偶爾愼二

榮を規(はか)り、(一一)偶偶爾(くくじ)として耳目の觀聽(くわんちやう)を愼(つゝし)み、(一二)身意の是非を惜み、徒(いたづら)に當年の至樂を失ひ、自ら一時に肆(ほしいまゝ)にすること能はず。(一三)重囚纍梏(ちようしうるゐこく)何を以て異(こと)ならんや。太古の人は生の暫く來るを知り、死の暫く往くを知る。故に心に從つて動き自然に違はず。好む所の當身の娛(たのしみ)、去る所に非ざるなり。故に名の勸(すゝ)むる所と爲らず。(一四)性に從つて游び、萬物に逆(さから)はず。好む所の死後の名、取る所に非ざるなり。(一五)故に刑の及ぶ所と爲らず。名譽先後(せんこう)年命の多少は、量る所に非ざるなり。

(一) 大齊は大限也　人生は百年を以て大限とする也　(二) 嬰兒の時と老衰の時と殆ど一生の半也　(三) 夜眠りたる間と晝間の思案に遺失する所亦五十年の半を占む　(四) 病災事故にて心を痛め樂まざること又以上の殘りの半に居る　(五) 以上の時間を差引きて殘る所僅に十數年に過ぎず、其の內眞にゆつたりとして自得し少しばかりの念慮もなき時を求むるに亦一時の中すらもなし　(六) 美厚は美衣美食也、聲色は歌舞と女色と也　(七) 厭足は十分に飽き足ること　(八) 刑によりて禁ぜられ罰によりて勸めらる　(九) 名と法度とに進退せらる　(一〇) 遑遑爾は忙はしき形容　(一一) 偶々爾はこせこせする有樣　(一二) 身意の是なる事を人に知らせ非なる事を人に知らせざらんとする也　(一三) 囚人となり束縛桎梏せらるゝと異なることなし　(一四) 萬物皆其の性に從つて生生死死す、人も亦其の性のまゝに行動して一生を終るは萬物に逆はざる也　(一五) 名の爲に身を殺す如き事をせず

無實。名者偽而已矣。昔者堯舜偽以天下讓許由善卷、而不失天下。享祚百年。伯夷叔齊。實以孤竹君讓。而終亡其國。餓死於首陽之山。實偽之辨。如此其省也。

許由善卷に讓りて、而も天下を失はず。祚を享くること百年なりき。伯夷叔齊は實に孤竹の君を以て讓り、而して終に其の國を亡ひ、首陽の山に餓死す。實僞の辨、此の如く其れ省なり。

(一) 眞人は名に拘らず名を成す者は皆僞なり　(二) 孤竹の君位を讓りて受けず是實名也、故に天下を失ふ

楊朱曰。百年壽之大齊。得百年者。千無一焉。設有一者。孩抱以逮昏老。幾居其半矣。夜眠之所弭。晝覺之所遺。又幾居其半矣。痛疾哀苦。亡失憂

楊朱曰く、百年は壽の大齊なり、百年を得る者千に一もなし。設し一ある者も、孩抱より以て昏老に逮ぶまで幾ど其の半に居り、夜眠の弭む所、晝覺の遺ふ所、又幾ど其の半に居り、痛疾哀苦、亡失憂懼、又幾ど其の半に居る。十數年の中を量るに、逌然として自得し、介焉の慮なき者、亦一時の中なきこと爾り。則ち人の生るゝや奚を爲すや、奚を樂むや。美厚の爲のみ、聲色の爲のみ。而して美厚復た常に厭足すべからず、聲色常に翫び聞くべからず。乃ち復た刑賞の禁勸する所、名法の進退する所となり、遑遑爾として一時の虛譽を競ひ、死後の餘

利兼二郷黨一。況子孫乎。凡爲レ名者。必廉。廉斯貧。爲レ名者必讓。讓斯賤。

靜なり

曰。管仲之相レ齊也。君淫亦淫。君奢亦奢。志合言從。道行國霸。死之後。管氏而已。田子之相レ齊也。君盈則己降。君斂則己施。民皆歸レ之。因有二齊國一。子孫享レ之。至レ今不レ絶。若二實名一貧。僞名富。

曰く、管仲の齊に相たるや、(一)君淫すれば亦淫し、君奢れば亦奢る。志合ひ言從ひ、道行はれ國霸たり。(二)死するの後管氏のみ。田氏の齊に相たるや、(三)君盈つれば則ち己降り、君斂むれば則ち己施し、民皆之に歸す。因つて齊國を有ち、子孫之を享け、今に至るまで絶えず。(四)實名の若きは貧しく、僞名は富む。

(一) 君酒色に溺るゝときは己も亦酒色に溺るゝ也 (二) 死するの後たゞ管仲といはるゝのみにて子孫に餘澤なし、是實名なるが故也 (三) 君盈滿して驕れば己は謙遜し、君聚斂すれば己は民に惠を施す是己の名を揚げて君に惡名を蒙らしむるものにて僞名也 (四) 前に名は富貴の爲子孫の爲と言ひたれども實名は子孫の爲にも身の爲にもならず、僞名は則ち田氏の如きなり

曰。實無レ名。名

曰く、實には名なく、名には實なし。(一)名は僞のみ。昔者堯舜僞つて天下を以て

楊朱游二於魯一。舍二於孟子一。孟子問曰。人而已矣。奚以レ名為。曰。以レ名者為レ富。既富矣。奚不レ已焉。曰。為レ貴。既貴矣。奚不レ已焉。曰。為レ死。既死矣。奚為焉。曰。為二子孫一。名奚益二於子孫一。曰。名乃苦二其身一。燋二其心一。乘二其名一者。澤及二宗族一。

楊朱第七（一）

楊朱魯に游び、孟氏に舍す。孟子問うて曰く、人なるのみ、奚ぞ名を以て為さんと。（二）曰く、名を以てするは富まんが為なり。既に富めるに奚ぞ已まざる。曰く、貴からんが為なり。既に貴きに奚ぞ已まざる。（三）曰く、死の為なり。既に死せば奚の為ぞ。曰く、子孫の為なり。名奚ぞ子孫に益あらん。（四）曰く、名は乃ち其の身を苦め、其の心を燋む。其の名に乘ずる者は澤宗族に及び、利郷黨を兼ぬ。（五）況んや子孫をや。（六）凡そ名の為にする者は必ず廉なり。廉なれば斯に貧し。名の為にする者は必ず讓る。讓れば斯に賤し。

（一）是も篇首の二字を取りて名づけし也（二）人と生れては人のすべき事をして天下を治るべきのみ、名を揚ぐるの要なし（三）人の名誉を得んとするは富者にならんが為なり（四）死後まで名を遺さんが為なり（五）名を得んが為には身と心とを苦しむ、然れども此の名を得て之に乘ずれば利澤宗族郷黨に及ぶなり（六）此の一節は[illegible]の

無レ子之時不レ憂。今子死。乃與レ嚮無レ子同。巨奚憂焉。

農赴レ時。商赴レ利。工追レ術。仕逐レ勢。勢使レ然也。然農有二水旱一。商有二得失一。工有二成敗一。仕有二遇否一。命使レ然也。

農は時に赴き、(一)商は利に赴き、(二)工は術を追ひ、(三)仕は勢を逐ふ。(四)勢然らしむるなり。然れども、農に水旱あり、商に得失あり、工に成敗あり、仕に遇否あり、(五)命然らしむるなり。

(一)春は耕し夏は耘るの類をいふ (二)利のある所に赴く也 (三)術の巧ならんことを求むる也 (四)仕官する者は権勢を追ふ也 (五)知己に遇うて用ひらるゝことと然らざることとあり

者常守之。則太公桓公將常守之矣。使有勇者而常守之。則莊公靈公將常守之矣。數君者將守之。吾君方將被蓑笠而立乎畎畝之中。唯事之恤。行假念死乎。則吾君又安得此位而立焉。以其迭處之迭去之。至於君也。而獨爲之流涕。是不仁也。見不仁之君。見諂諛之臣。臣見此二者。臣之所爲獨竊笑也。景公慙焉。擧觴自罰。罰二臣者。各二觴焉。

死して此の位を去ることなかるべきにと嘆く也　（一）蓑笠はみの笠、畎畝は小溝也　（二）此の如き我等すら死を欲せず、況んや爵位をや　（三）古より死といふものなく賢者常に國を守るとせば、齊に始めて封ぜられし太公望這は齊を以て天下に霸者となりし桓公今日に至るまで此の國を守るならん　（四）若し勇者常に國を守るとせば、勇力を以て名高き莊公靈公今日に至るまで此の國を守るなるべし　（五）たゞ農事を憂へて死を念ふ暇なかりしならん　（六）行は何假は暇に作るを可とす

魏人有東門吳者。其子死而不憂。其相室曰。公之愛子。天下無有。今子死不憂何也。東門吳曰。吾常無子。

魏人に東門吳といふ者あり、其の子死して憂へず。其の相室曰く、公の子を愛すること天下に有るなし。今子死するに憂へざるは何ぞやと。東門吳曰く、吾常て子なかりき。子なきの時憂へざりき。今子死すれば、乃ち嚮の子なきと同じ。巨奚ぞ憂へんやと。

（一）相室は家事を管する者　（二）今子の死したるは前に子なかりし時と同一の状態に返りしなり何ぞ憂ふることあらんや

國一而死乎。使三古無二死者一。寡人將去レ斯而之レ何。史孔。梁丘據。皆從而泣曰。臣賴二君之賜一。疏食惡肉。可二得而食一。駑馬稜車。可二得而乘一也。且猶不レ欲レ死。而況吾君乎。晏子獨笑二於旁一。公雪レ涕而顧二晏子一曰。寡人今日之遊悲。孔與レ據。皆從二寡人一而泣。子之獨笑何也。晏子對曰。使二賢

て乘るべきなり。且つ猶ほ死を欲せず、而るを況んや吾が君をやと。晏子獨り旁に笑ふ。涕を雪うて(五)晏子を顧みて曰く、寡人今日の游悲し。孔と據と皆寡人に從つて泣く。子の獨り笑ふは何ぞやと。晏子對へて曰く、(六)賢者をして常に之を守らしめば、則ち太公桓公將に常に之を守らんとす。(七)勇なる者をして常に之を守らしめば、則ち莊公靈公將に常に之を守らんとす。數君の者將に之を守らんとせば、吾が君方に將に蓑笠を被りて畎畝の中に立ち、(八)唯〻事を之れ恤へんとす。(九)行の假あつて死を念はんや。則ち吾が君又安んぞ此の位を得て立たん。其の迭に之に處り迭に之を去るを以て君に至れり。而るを獨り之が爲に流涕するは是不仁なり。不仁の君を見、諂諛の臣を見る。臣此の二者を見る、臣の獨り竊に笑ふを爲す所なりと。景公慙ぢ、觴を擧げて自ら罰す。二臣を罰すること各〻二觴なり。

(一) 鬱鬱芊芊は草木茂盛の貌 (二) 滴滴は流落の貌、魂魄浮び漂ふをいふ (三) 古より死といふものなくば寡人も

者。不知時者也。當死不懼。在窮不戚。知命安時也。其使多智之人。量利害。料虚實。度人情。得亦中。亡亦中。其少智之人。不量利害。不料虚實。不度人情。得亦中。亡亦中。量與不量。料與不料。度與不度。奚以異。唯亡所量。無所不量。則全而亡喪。亦非知全。亦非知喪。自全也。自亡也。自喪也。

(一)往々は殆んど似る也 (二)初に成るに似て後に破敗する也 (三)往は成るに似敗る、に似たる情々の際に生ずるなり (四)昧然たる時に能く之を明にして暗からざれば、外より來る禍に驚かず內の福を喜ばず、動止時に隨つて少しも智を用ふることなき也 (五)禍に遇うて悲み福を得て喜ぶは二心あるなり (六)目を掩ひ耳を塞ぎて外物を見聞せざるに如かず (七)目を掩ひ耳を塞げば禍を後にし福を前にして立つも墮ち作る、ことなき也 (八)夭折は自然也 (九)多智の人ありて利害虚實人情を量度するも得失相半す (十)少智の人ありて利害虚實人情を量度せざるも其の得失亦相半すべし (十一)量る所なく量らざる所なく智の自然に任するときは其の天なる者全うして失ふことなし (十二)全うして喪はずといふは智に因りて全きには非ず、亦智に因りて喪ふといふにもあらず皆自然得失の外にありて自然に全く自然に亡び自然に喪ふ也

齊景公游於牛山。北臨其國城而流涕曰。美哉國乎。鬱鬱芊芊。若何滴滴去此

齊の景公牛山に游ぶ。北のかた其の國城に臨みて涕を流して曰く、美なるかな國や、鬱鬱芊芊たり。若何んぞ滴滴として此の國を去つて死せんや。古(一)をして死といふ者なからしめば、寡人將た斯(二)を去つて何くに之かんと。史孔、梁丘據、皆從つて泣いて曰く、臣君の賜に賴りて、疏食惡肉も得て食ふべく、駑(三)馬稜車も得

偝レ敗者也。初非レ敗也。故迷生二於偝偝之際一。昧二然於上偝。而不二昧然一。則不レ駭二外禍一。不レ喜二内福一。隨レ時動。隨レ時止。智不レ能レ知也。信レ命者。於二彼我一無二二心一。於二彼我一而有二二心一者。不レ若二揜レ目塞上耳。背レ坂面レ隍。不二亦墜仆上也。故曰。死生有レ命也。貧窮自時也。怨二夭折一者。不レ知レ命者也。怨二貧窮一

たるに昧然として昧然たらざれば、則ち外の禍に駭かず、内の福を喜ばず。時に隨つて動き時に隨つて止り、智も知ること能はざるなり。命を信ずる者は(五)彼我に於て二心なし。彼我に於て二心ある者は、(六)目を揜ひ耳を塞ぐに若かず。(七)坂に背き隍に面ふも亦墜仆せざるなり。故に曰く、死生は命あり、貧窮は自ら時なり。(八)夭折を怨む者は命を知らざる者なり、貧窮を怨む者は、時を知らざる者なり。死に當りて懼れず、窮に在りて戚まざるは、命を知り時に安んずるなり。其の多智の人をして利害を量り、虛實を料り、人情を度らしむるも、(一〇)得るも亦中、(九)亡ふも亦中なり。其の少智の人利害を量らず、虛實を料らず、人情を度らざるも、得るも亦中、亡ふも亦中なり。量と不量と、料と不料と、度と不度と、奚を以て異ならん。唯〻(一一)量る所なく、量らざる所なければ、則ち全うして(一二)喪ふことなし。亦知の全きに非ず、亦知の喪ふに非ず。自ら全きなり、自ら亡ふなり、自ら喪ふなり。

窮年而不ㇾ相二語術一。自以二巧之微一也。儇㤼情露謇極凌誶四人。相與遊二於世一。胥如ㇾ志也。窮年不二相曉悟一。自以二爲才之得一也。眠娗諈諉勇敢怯疑四人。相與遊二於世一。胥如ㇾ志也。窮年不二相譴發一。自以二行無ㇾ戻也。多偶自專乘權隻立四人。相與遊於世。胥如ㇾ志也。窮年不相顧眄一。自以二時之適一也。此衆態也。其貌不ㇾ一。而成之二於道一。命所ㇾ歸也。

與に世に遊び、胥志に如ふ。（二二）窮年相顧眄せず、自ら時の適なりと以へり。此の衆態や、（二三）其の貌一ならずして咸道に之く。命の歸する所なり。

（一）墨杘は狡猾、しだらく者 （二）單至は詐りつかぬ人 （三）嘽咺はゆつたりしたる人 （四）きむかしき人 （五）自ら其の智にくらみて互に他の性情を知らざる也 （六）巧佞は佞らふ人 （七）愚直の飾き人 （八）便辟はへつらふ人 （九）婩斫き人 （一〇）情露は隠すことなく丸出しの人 （一一）謇口にてどもる人 （一二）人を凌ぎ恥しめ大言にて罵る人 （一三）互に知らざる也 （一四）人を欺罔する人 （一五）純にして人に世話をかける人 （一六）物事を早く斷行する人 （一七）怯疑は躊躇する人 （一八）互に他を責め咎むることなし （一九）多偶は人と仲よき人 （二〇）自專は我儘をする人 （二一）權勢に任せて事を爲す人 （二二）隻立は孤立して頼る所なき人 （二三）互に他と交際せざる也 （二四）其の容貌外貌一ならざれども皆自然に出で、即ち皆天命之を爲す也

佹佹成者俏ㇾ成也。初非ㇾ成也。佹佹敗者

（一）佹佹として成る者は成るに俏たり、（二）初より成るに非ざるなり。佹佹として敗る丶者は敗る丶に俏たり、初より敗る丶に非ざるなり。故に（三）迷は俏俏の際に生じ、（四）俏

至人居若レ死。動若レ械。亦不レ知レ所二以居一。亦不レ知レ所二以不一レ居。亦不レ知レ所二以動一。亦不レ知レ所二以不一レ動。亦不下以二衆人之觀一易中其情貌上。亦不下謂二衆人之不一レ觀不上レ易二其情貌一。獨往獨來。獨出獨入。孰能礙レ之。

らず、亦居らざる所以を知らず、亦動く所以を知らず、亦動かざる所以を知らず。亦衆人の觀るを以て其の情貌を易へず、亦衆人の觀ざるを謂つて其の情貌を易へずんばあらず。(三)獨り往き獨り來り、獨り出で獨り入る。孰か能く之を礙へん。(四)

㊀至人は無心なる故居る時には死灰の如く、動く時には機械人形の如し　㊁居るも居らざるも動くも動かざるも皆自ら知らざる也　㊂外物の爲に視聽其の度を改めざる也　㊃往來出入皆心を用ふることなき也

墨𡰪單至嘽咺憋懯四人。相與遊二於世一。胥如レ志也。窮年不二相知一レ情。自以二智之深一也。巧佞愚直婩斫便辟四人。相與遊二於世一。胥如レ志也。

墨𡰪(一)、單至(二)、嘽咺(三)、憋懯(四)、四人相與に世に遊び、胥志に如ふ。窮年(五)情を相知らず、自ら智の深きを以へり。巧佞(六)、愚直、婩斫(七)、便辟(八)、四人相與に世に游び、胥志に如ふ。窮年術を相語らず、自ら巧の微なるを以へり。𧳜伢(九)、情露(一〇)、謇極(一一)、凌誶(一二)、四人相與に世に游び、胥志に如ふ。窮年相曉悟(一三)せず、自ら才の得なりと以爲へり。眠娗(一四)、諈諉(一五)、勇敢(一六)、怯疑(一七)、四人相與に世に游び、胥志に如ふ。窮年相發(一八)せず、自ら行戻るなしと以へり。多偶(一九)、自專(二〇)、乘權(二一)、隻立(二二)、四人相

名譽父子也。愛憎父子也。吾惡之。楊子曰。古之人有言。吾嘗識之。將以告若。不知所以然而然命也。今昏昏昧昧。紛紛若若。隨所爲隨所不爲。日去日來。孰能知其故皆命也。夫信命者亡壽夭。信理者亡是非。信心者亡逆順。信性者亡安危。則謂之都亡所信。都亡所不信。眞矣慤矣。奚去奚就。奚哀奚樂。奚爲奚不爲。

黃帝之書云。

味味、紛紛若若、爲す所に随ひ、爲さざる所に随ひ、日々に去り日々に來る。孰か能く其の故を知らんや。皆命なり。夫れ命を信ずる者は壽夭なし。理を信ずる者は是非なし、心を信ずる者は逆順なし、性を信ずる者は安危なし、則ち之を都て信ずる所なく、都て信ぜざる所なしと謂ふ。眞なり慤なり。奚をか去り奚をか就かん。奚をか哀み奚をか樂まん。奚をか爲し奚をか爲さざらん。

（一）昏昏昧昧は闇昧しきをいふ　（二）紛紛若若とは大に乱るゝをいふ　（三）紛紛は乱れて多きをいふ若くは随いて止まざるをいふ　（四）爲さんと欲して爲すことを得ず、爲さざらんと欲して爲すをいふ　（五）爲すこと爲さざることは日々に新に去り、又日々に來る　（六）天命を信ずる者は生死を天に委する故壽夭の長短に心なき也　（七）是といひ非といふは皆我なり其の理を信じて心に定めざれば是非なし　（八）賢愚の心を知れば逆順なし　（九）我が性のまゝを信じて自然に任すれば安く危くもなし　（十）上に言ふ所は皆自然なる故信ずるといふにも非ず、信ぜずといふにも非ざる也　（十一）心に智欲をまじへず、純眞にして誠一なり　（十二）心眞慤なれば去就も哀樂も爲すも爲さざるもなき也

黃帝の書に云く、至人は居ること死の若く、動くこと械の若し。亦居る所以を知

而死。或愛之而厚。或輕之而薄。此似レ順也非レ順也。此亦自生自死。自厚。自薄。鬻熊語二文王一曰。自長非レ所レ增。自短非レ所レ損。算之所レ亡若何。

ず皆天命也 ㊄ 理の當然なるに似て理の當然に非ず、皆天命也 ㊅ 自長は自然に長き者、例へば鶴の脛の如し、增す所に非ずとは自ら之を增したるに非ざるをいふ、自短云々も之に準ず ㊆ 算の亡き所は智慮の及ばざる所にして皆自然なるをいふ

老聃語二關尹一曰。天之所レ惡。孰知二其故一。言迎二天意一揣二利害一。不レ如二其已一。

老聃關尹に語りて曰く、天の惡む所、孰か其の故を知らん。(一)言天意を迎へ利害を揣るは、(二)其の已まんに如かずと。

㊀ 善人必ずしも壽ならず惡人必ずしも夭ならず、天の如何なる人を惡むかは得て知るべからず ㊁ 天意を迎へ料りて利に就き害を去らんとするも自然の運命は免るゝこと能はず、無用の思案は已むるに如かず

楊布問曰。有二人於此一。年兄弟也。言兄弟也。才兄弟也。貌兄弟也。而壽夭父子也。貴賤父子也。

楊布問うて曰く、此に人あり、年も兄弟なり、(一)言も兄弟なり、才も兄弟なり、貌も兄弟なり、而して壽夭は父子なり、(二)貴賤も父子なり、名譽も父子なり、愛憎も父子なり、吾之に惑ふと。楊子曰く、古の人言へることあり、吾嘗て之を識れり、將に以て若に告げんとす。然る所以を知らずして然るは命なりと。今昏昏(三)

季梁曰、衆醫也。亟屏之。兪氏曰、女始則胎氣不足、乳湩有餘。病非一朝一夕之故、其所由來漸矣、弗可已也。季梁曰、良醫也。且食之。盧氏曰、汝疾不由天、亦不由人、亦不由鬼。禀生受形、既有制之者矣。亦有知之者矣。藥石其如汝何。季梁曰、神醫也。重貺遣之。俄而季梁之疾自瘳。

生非貴之所能存、身非愛之所能厚。生亦非賤之所能夭、身亦非輕之所能薄。故貴之或不生、賤之或不死、愛之或不厚、輕之或不薄。此似反也、非反也。此自生自死、自厚自薄。或貴之而生、或賤之

生は貴の能く存する所に非ず、身は愛の能く厚くする所に非ず。生は亦賤の能く夭する所に非ず、身は亦輕の能く薄くする所に非ず。故に貴けれども或は生きず、賤しけれども或は死せず、愛すれども或は厚からず、輕んずれども或は薄からず。此反に似て反に非ざるなり。此自ら生き自ら死し、自ら厚く自ら薄きなり。或は貴くして生き、或は賤しくして生き、或は愛して厚く、或は輕んじて薄し。此順に似て順に非ざるなり。此亦自ら生き、自ら死し、自ら厚く、自ら薄きなり。鬻熊文王に語りて曰く、自長は増す所に非ず、自短は損する所に非ず。算の亡き所若何にせんと。

〔一〕厚くするは富ます也　〔二〕輕は輕賤也　〔三〕薄くするは貧しくする也　〔四〕理に反するに似て理に反するに非

爲我歌以曉之。楊朱歌曰。天其弗識。人胡能覺。匪祐自天。弗孽由人。我乎汝乎。其弗知乎。醫乎巫乎。其知之乎。其子弗曉。終謁三醫。一曰矯氏。二曰兪氏。三曰盧氏。診其所疾。矯氏謂季梁曰。汝寒溫不節。虛實失度。病由飢飽色欲精慮煩散。非天非鬼。雖漸可攻也。

三醫に謁す。一を矯氏と曰ひ、二を兪氏と曰ひ、三を盧氏と曰ふ。其の疾む所を診す。矯氏季梁に謂つて曰く、汝寒溫節あらず、虛實度を失ふ。病は(三)飢飽色欲精慮の煩散に由る。天に非ず、鬼に非ず、(四)漸むと雖も攻むべきなりと。李梁曰く、衆(五)醫なり。亟に之を屛けよと。兪氏曰く、女始は則ち胎氣不足にして、(六)乳湩餘あり。病一朝一夕の故に非ず、其の由りて來る所漸なり。已すべからざるなりと。季梁曰く、良醫なり、且く之に食はしめよと。盧氏曰く、汝が疾は天に由らず、亦人に由らず、亦鬼に由らず。生を稟け形を受けしとき、旣に(七)之を制する者あり、亦之を知る者あり。藥石其れ汝を如何にせんと。季梁曰く、神醫なり、重く貽うて之を遣れと。俄にして季梁の疾自ら瘳えぬ。

(一) 大漸は危篤となる也 (二) 此の歌は天命は誰も知る者なきをいふ (三) 或は飢ゑ或は飽き或は房事を過し或は思案に心氣を散ぜしむるに由る (四) 病重しと雖も治癒することを得べし (五) 衆醫は平凡の醫者也 (六) 乳汁を飮むこと多きに過ぎたり (七) 制するは之を定むる也

不可以死。或死或生有矣。然而生生死死。非物非我。皆命也。智之所無奈何。故曰。窈然無際。天道自會。漠然無分。天道自運。天地不能犯。聖智不能干。鬼魅不能欺。自然者默之。成之。平之。寧之。將之。迎之。

こと能はず、聖智も干すこと能はず、鬼魅も欺くこと能はず。(六)自然なる者(七)之を默し、之を成し、之を平にし、之を寧んじ、之を將り、之を迎ふ。

㊁ 物来つて我を殺すにもあらず、我が才智を以て生くるにもあらず、皆天命なり ㊂ 冥然は冥くして測るべからざる貌 ㊃ 天道自然に運行す ㊄ 漠然は宇宙の貌、分さしとは分別さるる也 ㊅ 自然は天地も聖智も鬼魅も如何ともすること能はざる也 ㊆ 無言にて物を生成し、平常に安寧に往を送り来を迎ふる也

楊朱之友曰季梁。季梁得疾。七日大漸。其子環而泣之。請醫。季梁謂楊朱曰。吾子不肖如此之甚。汝奚不

楊朱の友を季梁と曰ふ。季梁疾を得て、七日にして大に漸む。(一)其の子環りて之に泣き、醫を請ふ。季梁楊朱に謂つて曰く、吾が子の不肖此の如く甚だし、汝奚ぞ我が爲に歌うて以て之を曉さざると。楊朱歌うて曰く、(二)天其れ識らず、人胡ぞ能く覺らん。祐すること天よりするに匪ず、孽することも人に由るにあらず。我と汝と、其れ知らざるか。醫と巫と、其れ之を知らんやと。其の子曉らず、終に

執ㇾ政。作二竹刑一。鄭國用ㇾ之。數難二子產之治一。子產屈ㇾ之。子產執而戮ㇾ之。俄而誅ㇾ之。然則子產非三能用二竹刑一。不ㇾ得ㇾ不ㇾ用。鄧析非三能屈二子產一。不ㇾ得ㇾ不ㇾ屈。子產非三能誅二鄧析一。不ㇾ得ㇾ不ㇾ誅也。

俄にして之を誅す。(五)然らば則ち子產能く竹刑を用ひしに非ず、用ひざるを得ざりしなり。鄧析能く子產を屈せしに非ず、屈せざるを得ざりしなり。子產能く鄧析を誅せしに非ず、誅せざるを得ざりしなり。

(一)兩可の說は是非を顧みずして妄に人に隨ふ也　(二)無窮の辭は窮詰しがたき辭也　(三)鄧析竹刑を作る也、竹刑は竹簡に書したる刑書　(四)戮するは執へて辱しむる也　(五)以下も亦皆命なるをいふ

可二以生一而生。天福也。可二以死一而死。天福也。可二以生一而不ㇾ生。天罰也。可二以死一而不ㇾ死。天罰也。可二以生一。可二以死一。得ㇾ生得ㇾ死有矣。不ㇾ可二以生一。

以て生くべくして生くるは天福なり。以て死すべくして死するは天福なり。以て生くべくして生きざるは天罰なり。以て死すべくして死せざるは天罰なり。以て生くべく以て死すべくして、生を得死を得るものあり。以て生くべからず以て死すべからずして、或は死し或は生くるものあり。然り而して生生死死するは、(一)物に非ず我に非ず、皆命なり。智の奈何ともするなき所なり。故に曰く、(二)窈然として際なく、(三)天道自ら會す。(四)漠然として分なく、天道自ら運ると。(五)天地も犯す

乎民。其得罪於君也。將弗久矣。小白曰。然則孰可。對曰。勿已則隰朋可。其爲人也。上忘而下不叛。愧其不若黃帝。而哀不己若者。以德分人。謂之聖人。以財分人。謂之賢人。以賢臨人。未有得人者也。以賢下人也。未有不得人者。其於國有不聞也。其於家有不見也。勿已則隰朋可。然則管夷吾非薄鮑叔也。不得不薄。非厚隰朋也。不得不厚。厚之於始。或薄之於終。薄之於終。或厚之於始。厚薄之去來。弗由我也。

於けることあり。已むなくんば則ち隰朋可ならんと。然らば則ち管夷吾は鮑叔を薄んぜしに非ざるなり。薄んぜざるを得ざりしなり。隰朋を厚くせしに非ざるなり。厚くせざるを得ざりしなり。之を始に厚くすれば、或は之を終に薄くし、之を終に薄くすれば、或は之を始に厚くす。厚薄の去來は我に由らざるなり。

(一) 大病なれば諱んで云はざるを得ざる也　(二) 君に國事を任じて可ならん　(三) 之を人とも思はざる也　(四) 君を擯棄する也　(五) 民心に從ふ也　(六) 上に事ふるには離心を以てし下に離叛の民少き也　(七) 自ら德を有せざる也　(八) 心ありて人を服せんとする也　(九) 隰朋を用ふれば細故の治に與らず、國に於ける事は聞かざることあり家に於けるは見ざることあるやうにて始めて政事を成就すべし　(一〇) 管夷吾なるをいふ

鄧析操兩可之說。設無窮之辭。當子產

鄧析兩可の說を操りて、無窮の辭を設く。子產が政を執るに當りて、竹刑を作る。鄧國之を用ひて、數〻子產の治を難ず。子產之に屈す。子產執へて之を戮し、

擧。小白非ニ能用ヒ讎。不レ得レ不レ用。

及ニ管夷吾有レ病。小白問レ之曰。仲父之病病矣。可レ不ニ諱云一。至ニ於大病一。則寡人惡乎屬レ國而可。夷吾曰。公誰欲歟。小白曰。鮑叔牙可。曰不可。其爲レ人潔廉善士也。其於下不ニ己若一者上。不レ比ニ之人一。一聞ニ人之過一。終身不レ忘。使ニ之理レ國。上且レ鉤ニ乎君一。下且レ逆ニ

管夷吾病あるに及んで、小白之に問うて曰く、仲父の病疾し。(一)諱んで云はざるべけんや。大病に至らば、則ち寡人(二)惡にか國を屬して可ならん。夷吾曰く、公誰を欲するか。小白曰く、鮑叔牙可ならんと。曰く不可なり、其の人と爲り潔廉の善士なれども、其の己に若かざる者に於ては(三)之を人に比せず。一たび人の過を聞けば終身忘れず。之をして國を理めしめば、上は且に(四)君を鉤せんとす、下は且に(五)民に逆はんとす。其の罪を君に得んこと將に久しからざらんとすと。小白曰く然らば則ち孰か可ならんと。對へて曰く、已むなくんば則ち隰朋可ならん。其の人と爲りや、(六)上は忘れて下は叛かず。其の黄帝に若かざることを愧ぢて、己に若かざる者を哀む。(七)德を以て人に分つ、之を聖人と謂ふ。財を以て人に分つ、之を賢人と謂ふ。(八)賢を以て人に臨めば、未だ人を得る者あらざるなり。賢を以て人に下れば、未だ人を得ざる者はあらざるなり。(九)其の國に於けるは聞かざることあり、其の家に

知時有利不利也。吾嘗三仕三見逐於君。鮑叔不以我爲不肖。知我不遭時也。吾嘗三戰三北。鮑叔不以我爲怯。知我有老母也。公子糾敗。召忽死之。吾[illegible]囚受辱。鮑叔不以我爲無恥。知我不羞小節。而恥名不顯於天下也。生我者父母。知我者鮑叔也。此世稱。管鮑善交者。小白善用能者。然實無善交。實無用能也。實無善交。實無用能者。非更有善交。更有善用能也。召忽非能死。不得不死。鮑叔非能擧賢。不得不

辱を受く、鮑叔我を以て恥なしと爲さず。我が小節を羞ぢずして、名の天下に顯れざるを恥づるを知ればなり。我を生む者は父母、我を知る者は鮑叔なりと。此を世に稱す、管鮑は交を善くする者なり、小白は善く能を用ふる者なりと。然れども實は交を善くすることなく、實は能を用ふることなきなり。實は交を善くすることなく、實は能を用ふることなしとは、更に交を善くすることあり、更に善く能を用ふることあるに非ざるなり。召忽は能く死せしに非ず、死せざるを得ざりしなり。鮑叔は能く賢を擧げしに非ず、擧げざるを得ざりしなり。小白は能く讎を用ひしに非ず、用ひざるを得ざりしなり。

(一) 賈とは商賣する也　(二) 時に遭はざるは出世すべき時節に遭はざるをいふ　(三) 小節は小なる事故也　(四) 管仲よりも更に交を善くする者あり、鮑叔よりも更に善く能を用ふる者ありといふにはあらず。以下は皆天命なりとの意

脅ㇾ魯殺二子糾一。召忽死ㇾ之。管夷吾被ㇾ囚。鮑叔牙謂二桓公一曰。管夷吾能可二以治一ㇾ國。桓公曰。我讎也。願殺ㇾ之。鮑叔牙曰。吾聞賢君無二私怨一。且人能爲二其主一。亦必能爲ㇾ人。君如欲二霸王一。非二夷吾一其弗可。君必舍ㇾ之。遂召二管仲一。魯歸二之齊一。鮑叔牙郊迎釋二其囚一。桓公禮ㇾ之。而位二於高國之上一。鮑叔牙以ㇾ身下ㇾ之。任以二國政一。號曰二仲父一。桓公遂霸。

㊀ 嫡庶行を並ぶとは、齊の僖公の同母弟夷仲年が公孫無知を生みたるを僖公之を愛して禮秩を太子と同じくせしを云ふ　㊁ 太子襄公立ちて無知の禮秩を廢せしより、無知襄公を殺して自立し、國人やがて無知を殺せり　㊂ 帶鉤は帶の金具也　㊃ 魯が公子糾を殺さゞれば魯を擊ち滅さんと脅迫せし也　㊄ 既に其の主の爲に忠節を盡さば、また他人に事へても忠節を盡すならん　㊅ 弗可は不可に同じ　㊆ 高國は齊の世族高氏と國氏とをいふ

管仲嘗歎曰。吾少窮困時。嘗與二鮑叔牙一賈。分ㇾ財多自與。鮑叔不二以ㇾ我爲一ㇾ貪。知二我貧一也。吾嘗爲二鮑叔一謀ㇾ事。而大窮困。鮑叔不二以ㇾ我爲一ㇾ愚。

管仲嘗て嘆じて曰く、吾少うして窮困せし時、嘗て鮑叔牙と賈し、財を分つに多く自ら與ふ。鮑叔我を以て貪と爲さず。我が貧しきを知ればなり。吾嘗て鮑叔の爲に事を謀りて大に窮困す。鮑叔我を以て愚と爲さず。時に利不利あるを知ればなり。吾嘗て三たび仕へて三たび君に逐はる。鮑叔我を以て不肖と爲さず。我が時に遭はざるを知ればなり。吾嘗て三たび戰つて三たび北ぐ。鮑叔我を以て怯と爲さず。我に老母あるを知ればなり。公子糾敗れ、召忽之に死す。吾幽囚せられて

管夷吾鮑叔牙二人相友甚戚、同處於齊。管夷吾事公子糾、鮑叔牙事公子小白。齊公族多寵、嫡庶並行。國人懼亂。管仲與召忽奉公子糾奔魯。鮑叔奉公子小白奔莒。既而公孫無知作亂。齊無君。二公子爭入。管夷吾與小白戰於莒道、射中小白帶鉤。小白既立。

管夷吾、鮑叔牙二人、相友として甚だ戚しく、同じく齊に處る。管夷吾は公子糾に事へ、鮑叔牙は公子小白に事ふ。齊の公族寵多くして、嫡庶行を並ぶ。國人亂を懼る。管仲と召忽とは公子糾を奉じて魯に奔る。鮑叔は公子小白を奉じて莒に奔る。既にして公孫無知亂を作し。齊に君なく、二公子入らんことを爭ふ。管夷吾、小白と莒の道に戰ひ、射て小白の帶鉤に中つ。小白既に立ち、魯を脅して子糾を殺さしむ。召忽之に死す。管夷吾囚へらる。鮑叔牙桓公に謂つて曰く管夷吾の能以て國を治めしむべしと。桓公曰く我が讎なり、願はくは之を殺さんと。鮑叔牙曰く、吾聞く賢君は私怨なしと。且つ人能く其の主の爲にせば、亦必ず能く人の爲にせん。君如し覇王たらんと欲せば、夷吾に非ざれば其れ弗可なり。君必ず之を舍せと。遂に管仲を召す。魯之を齊に歸す。鮑叔牙郊迎して其の囚を釋す。桓公之を禮して高國の上に位せしむ。鮑叔牙身を以て之に下る。任ずるに國政を以てし、號して仲父と曰ふ。桓公遂に覇たり。

歟。而皆謂二與レ予並一。汝之顏厚矣。東郭先生曰。汝之言二厚薄一。不レ過レ言二才德之差一。吾之言二厚薄一。異二於是一矣。夫北宮子。厚二於德一薄二於命一。汝厚二於命一薄二於德一。汝之達。非二智得一也。北宮子之窮。非二愚失一也。皆天也。非レ人也。而女以二命厚一自矜。北宮子以二德厚一自愧。皆不レ識二夫固然之理一矣。西門子曰。先生止矣。予不二敢復言一。北宮子既歸。衣二其短褐一。有二狐貉之溫一。進二其戎菽一。有二稻粱之味一。庇二其蓬室一。若二廣廈之蔭一。乘二其蓽輅一。若二文軒之飾一。終身逌然。不レ知二榮辱之在レ彼也在レ我也。東郭先生聞レ之曰。北宮子之寐久矣。一言而能寤。易レ悟也哉。

宮子既に歸り、其の短褐を衣れば、狐貉(五)の溫あり。其の戎菽(六)を進むれば、稻粱の味あり。其の蓬室に庇すれば、廣廈(七)の蔭の如く、其の蓽輅(八)に乘れば、文軒(九)の飾の如く、終身逌然(一〇)として、榮辱の彼に在ると我に在るとを知らざるなり。東郭先生之を聞いて曰く、北宮子の寐ぬる(一一)こと久し。一言にして能く寤む。悟し易きかなと。

(一) 愧を含むるは愧を淸むる也　(二) 德は厚けれども天命薄き也　(三) 汝の榮達は智德に因るに非ず　(四) 固然の理は自然の理也　(五) 狐やむじなの裘也　(六) 戎菽は大豆也　(七) 廣きひさしの下に居る如き也　(八) 蓽路は柴を積む車也　(九) 文軒は玉にて飾れる車也　(一〇) 逌然は自得の貌　(一一) 北宮子の心迷へること久しかりしに、能く我が一言にて悟れり

不同行。固有年矣。子自以徳過於我。西門子曰。予無以知其實。汝造事而窮。予造事而達。此厚薄之驗歟。而皆謂與予並。汝之顏厚矣。北宮子無以應。自失而歸。中塗遇東郭先生。先生曰。汝奚往而反。偊偊而步。有深愧之色邪。北宮子言其狀。

東郭先生曰。吾將舍汝之愧。與汝更之西門氏而問之。曰。汝奚辱北宮子之深乎。固且言之。西門子曰。北宮子言世族年貌言行與予並。而賤貴貧富與予異。予語之曰。予無以知其實。汝造事而窮。予造事而達。此將厚薄之

東郭先生曰く、吾將に汝の愧を舍めんとす。汝と更に西門子に之かんと。而して之に問うて曰く、汝奚ぞ北宮子を辱しむるの深きや。固に且之を言へと。西門子曰く、北宮子、世族年貌言行予と並び、而して賤貴貧富予と異なりと言ふ。予之に語げて曰く、予以て其の實を知ることなし。汝は事を造して窮し、予は事を造して達す、此將厚薄の驗か。而して皆予と並ぶと謂ふ、汝の顏厚しと。東郭先生曰く、汝の厚薄を言ふは、才徳の差を言ふに過ぎず。吾が厚薄を言ふは是に異なり。夫れ北宮子は德に厚くして命に薄し。汝は命に厚くして德に薄し。汝の達は智の得に非ざるなり。北宮子の窮は愚の失に非ざるなり。皆天なり、人に非ざるなり。而して汝は命厚きを以て自ら矜り、北宮子は德厚きを以て自ら愧づ。皆夫の固然の理を識らざるなりと。西門子曰く、先生止めよ。予敢て復た言はじと。北

並貌也。而人子愛。並言也。而人子庸。並行也。而人子誠。並仕也。而人子貴。並農也。而人子富。並商也。而人子利。朕衣則短褐。食則粢糲。居則蓬室。出則徒行。子衣則衣錦。食則粱肉。居則連欐。出則結駟。在家熙然。有棄朕心。在朝諤然。有敖朕之色。請謁不相及。敖遊

ぶ、而して人子を富ます。商を並ぶ、而して人子を利す。朕が衣は則ち短褐、食は則ち粢糲（六）、居は則ち蓬室（七）、出づれば則ち徒行す。子が衣は則ち錦（八）を衣、食は則ち粱肉（九）、居は則ち欐（一〇）を連ね、出づれば則ち駟（一一）を結ぶ。家に在りては熙然（一二）として朕を棄つるの心あり、朝に在りては諤然（一三）として朕に敖るの色あり、請謁（一四）相及ばず、敖（一五）遊行を同じうせざること固より年あり。子自ら徳朕に過ぎたりと以ふかと。西門子曰く、予以て其の實を知ることなし。汝は事を造して窮し、予は事を造して達す。此厚薄（一六）の驗か。而して皆予と並ぶと謂ふ、汝の顔厚し（一七）と。北宮子以て應ふることなく、自失して歸る。中塗にして東郭先生に遇ふ。先生曰く、汝奚くに往きて反りて、偊偊（一八）として歩み、深く愧づる色あるかと。北宮子其の狀を言ふ。

（一）我と汝と同じ世に住めるに、人汝をのみ薦達す。以下之に準ず　（二）族を並ぶとは家族も同じき也　（三）庸は用也　（四）仕を並ぶとは同じく仕官する也　（五）短き粗毛布の衣也　（六）粢糲は粟麥をざつと搗いて作りし團子也　（七）蓬室はかやぶきの家　（八）美しきあやを織りたる錦　（九）粱は上等の米　（一〇）欐は棟也　（一一）四頭の馬に車を引かせて乘る也　（一二）熙然は喜び笑ふ貌　（一三）諤然は思ふまゝを直言する貌　（一四）互に訪問往來せざる也　（一五）敖遊はあそび也　（一六）徳に厚薄ある證據ならん　（一七）汝は恥を知らぬ者なり　（一八）偊偊は獨り行く貌

之行。不出三仁之上、而居君位。季札無爵於呉、田恆專有齊國。夷齊餓於首陽、季氏富於展禽。若是汝力之所能、奈何壽彼而夭此。窮聖而達逆、賤賢而貴愚、貧善而富惡邪。力曰、若如若言、我固無功於物、而物若此邪。此則若之所制邪。命曰、既謂之命、奈何有制之者邪。朕直而推之。曲而任之。自壽自夭。自窮自達、自貴自賤。自富自貧。朕豈能識之哉。朕豈能識之哉。

之を推し、曲げて之に任す。自ら壽に自ら夭に、自ら窮し自ら達し、自ら貴く自ら賤しく、自ら富み自ら貧し。朕豈能く之を識らんや。朕豈能く之を識らんやと。

㊀ 此の篇は自然の命令即ち天命を説く、力命の二字を取りて名づく ㊁ 力は人力、命は天命、今共に人に擬して説く也 ㊂ 四八は三十二 ㊃ 三仁は箕子微子比干也 ㊄ 田恆は齊の權臣 ㊅ 魯の季氏は僭位の人なりしが展禽よりも富めり、展禽は柳下惠也 ㊆ 既に命といへば自然にして然るのみ、之を制する者なし ㊇ 直なる者は直なるまゝに之を推し、曲つる者は曲るまゝに之をまかする也

北宮子謂西門子曰、朕與子並世也、而人子達。並族也、而人子敬。

北宮子、西門子に謂つて曰く、(一)朕、子と世に並ぶ、而して人子を達す。(二)族を並ぶ、而して人子を敬す。貌を並ぶ、而して人子を愛す。言を並ぶ、而して人子を庸ふ。行を並ぶ、而して人子を誠とす。(三)仕を並ぶ、而して人子を貴ぶ。農を並

力。謂レ命曰。若之功奚若レ我哉。命曰。汝奚功二於物一而欲レ比レ朕。力曰。壽夭窮達。貴賤貧富。我力之所レ能也。命曰。彭祖之智。不レ出二堯舜之上一。而壽八百。顔淵之才。不レ出二衆人之下一。而壽四八。仲尼之德。不レ出二諸侯之下一。而困二於陳蔡一。殷紂

(一)力命第六

(二)力、命に謂つて曰く、若の功奚ぞ我に若かんやと。命曰く、汝奚ぞ物に功ありて朕に比せんと欲するかと。力曰く、壽夭窮達、貴賤貧富、我が力の能くする所なりと。命曰く、彭祖の智堯舜の上に出でず、而して壽八百なり。顔淵の才衆人の下に出でず、而して壽四八(三)なり。仲尼の德諸侯の下に出でず、而して陳蔡に困み、殷紂の行(四)三仁の上に出でず、而して君位に居る。季札呉に爵なく、田恆專ら齊國を有ち、夷(五)齊首陽に餓ゑ、季氏(六)展禽より富めり。若し是汝が力の能くする所ならば、奈何ぞ彼を壽にして此を夭にし、聖を窮せしめて逆を達せしめ、賢を賤しくして愚を貴くし、善を貧しくして惡を富ますかと。力曰く、若し是の言の如くならば、我固より物に功なし。而して物此の若きは、此則ち若の制する所かと。命曰く、(七)既に之を命と謂ふ、奈何ぞ之を制する者あらんや。朕直(八)にして

鋼赤刃。用ㇾ之切ㇾ玉。如ㇾ切ㇾ泥焉。火浣之布。浣ㇾ之必投二於火一。布則火色。垢則布色。出ㇾ火而振ㇾ之。皓然疑二乎雪一。皇子以爲ㇾ無二此物一。傳ㇾ之者妄。蕭叔曰。皇子果二於自信一。果二於誣一ㇾ理哉。

振へば、皓然として雪かと疑はる。皇子以爲へらく、此の物なし、之を傳ふる者妄なりと。蕭叔曰く、皇子自ら信ずるに果にして、理を誣ふるに果なるかなと。

㊀ 西州に昆吾といふ石ありこれを鋼に作れば玉も切れるといふ ㊁ 火浣といふ國には火常に燃え、此の火の中を走る鼠あり、此の鼠の毛を取りて織りたるを火浣布といふ ㊂ 有は又に同じ、尺有咫は一尺八寸也 ㊃ [illegible]はまた[illegible]をたるにがれ ㊄ 布は火の如く赤色となり、垢に汚したる部は本の色となる也 ㊅ 皇子は自分の考を信ずるに果敢なれども、是は自分の理を誣ふるに果敢なるものと謂ふべし

丹遂執レ劍從二黑卵一。時黑卵之醉偃二牖下一。自レ頸至レ腰三斬レ之。黑卵不レ覺。來丹以二黑卵之死一。趨而退。遇二黑卵之子於門一。擊レ之三下。如レ投レ虛。黑卵之子方笑曰。汝何蚩而三招レ予。來丹知二劍之不一レ能レ殺レ人也。歎而歸。黑卵既醒。怒二其妻一曰。醉而露レ我。使二我嗌疾而腰急一。其子曰。疇昔來丹之來。遇二我於門一。三招レ我。亦使二我體疾而支彊一。彼其厭レ我哉。

三下するに、(四)虛に投ずるが如し。黑卵の子方に笑つて曰く、汝何を蚩りて三たび予を招けると。來丹劍の人を殺すこと能はざるを知るや、嘆じて歸る。黑卵既に醒めて、其の妻を怒つて曰く、(五)醉うて我を露にして、我をして嗌疾みて腰急ならしむと。其の子曰く、疇昔來丹の來る、我に門に遇ひ、三たび我を招く。亦我をして體疾みて(六)支彊からしむ。(七)彼其れ我を厭へるかなと。

(一)日暮れて暗き時也 (二)黑卵の跡をつけねらふ也 (三)自ら其の斬られたることを覺らず (四)物なき處を擊つが如く手答なき也 (五)醉うて臥したるに着物を着せざりし故風を引ぎ、喉は痛み腰屈まれりと也 (六)支は四肢也 (七)父子共に斬られたることを知らず、因りてまじなひの術を用ひたる者と思へる也

周穆王大征二西戎一。西戎獻二錕鋙之劍。火浣之布一。其劍長尺有咫。練

周の穆王大に西戎を征す。西戎、(一)錕鋙の劍、(二)火浣の布を獻ず。其の劍長さ(三)尺有咫、(四)練鋼赤刃なり。之を用て玉を切れば、泥を切るが如し。火浣の布は、之を浣ふには必ず火に投ず。(五)布は則ち火色、垢は則ち布色となる。火より出して之を

且昧爽之交。日夕昏明之際。北面而察之。淡淡焉若有物存。莫識其狀。其所觸也。竊竊然有聲。經物而物不疾也。三曰宵練。方晝則見影而不見光。方夜見光而不見形。其觸物也。騞然而過。隨過隨合。覺疾而不血刃焉。此三寶者。傳之十三世矣。而無施於事。匣而藏之。未嘗啓封。來丹曰。雖然。吾必請其下者。孔周乃歸其妻子。與齋七日。晏陰之間。跪而授其下劍。來丹再拜受之以歸。來

騞然(六)として過ぎ、隨つて(七)過ぐれば隨つて合し、疾きことを覺えて刃に血ぬらさず。此の三寶は之を傳ふること十三世なるも、事に施すことなく、匣にして之を藏め、未だ嘗て封を啓かずと。來丹曰く、然りと雖も、吾必ず其の下なる者(八)を請はんと。

(一) 其の有様を言はん　(二) 隠れし昧爽まで明りなき也　(三) 昧爽は夜のひきあけをいふ　(四) 晨暮の時をいふ　(五) 竊竊然はさゝやかなる聲也　(六) 騞然は裂くる聲　(七) 切れば切るに随つて、疾いえ刃の過ぐることを覺ゆれど、更に血塗らざる也　(八) 其の下になる者は第三の者をいふ

孔周乃ち其の妻子を歸し、與に齋すること七日、晏陰(一)の間、跪いて其の下劍を授く。來丹再拜して之を受けて以て歸る。來丹遂に劍を執りて黑卵(二)を從ふ。時に黑卵醉ひて牖下に僵せるを、頸より腰に至るまで三たび之を斬る。黑卵覺ら(三)ず。來丹黑卵の死せるを以ひ、趨りて退き、黑卵の子に門に遇ひ、之を擊つこと

中他曰。吾聞衞孔周。其祖得二殷帝之寶劍一。一童子服レ之。却二三軍之衆一。奚不レ請焉。來丹遂適レ衞。見二孔周一。執二僕御之禮一。請先納二妻子一。後言レ所レ欲。

中他曰く、吾聞く、衞の孔周、其の祖殷帝の寶劍を得たるに、一童子之を服ぶれば三軍の衆を却くと。奚ぞ請はざると(一)。來丹遂に衞に適き孔周に見え、僕御の禮(二)を執り、請うて先づ妻子(三)を納れ、後に欲する所を言ふ。

(一)其の劍を借りて來れ　(二)自ら家僕の禮を執りて孔周に仕ふる也　(三)妻子を納れて人質とする也

孔周曰。吾有二三劍一。惟子所レ擇。皆不レ能レ殺レ人。且先言二其狀一。一曰二含光一。視レ之不レ可レ見。運レ之不レ知二其有一。其所レ觸也。泯然無レ際。經レ物而物不レ覺。二曰二承影一。將レ

孔周曰く、吾に三劍あり、惟子が擇ぶ所のまゝなり。皆人を殺すこと能はず。且らく先づ其(一)の狀を言はん。一を含光と曰ふ。之を視るに見るべからず、之を運するに其の有ることを知らず、其の觸るゝ所や泯然(二)として際なく、物に經れて物覺えず。二を承影と曰ふ。將に旦けんとする(三)味爽の交(四)、日夕昏明の際、北面して之を察るに、淡淡焉として物の存するあるが若く、其の狀を識ることなし。其の觸る所や、竊竊焉(五)として聲あり、物に經れて物疾まず。三を宵練と曰ふ。晝に方りては則ち影を見て光を見ず、夜に方りては光を見て形を見ず。其の物に觸るゝや

魏黒卵。以暱嫌殺丘邴章。丘邴章之子來丹。謀報父之讎。丹氣甚猛。形甚露。計粒而食。順風而趨。雖怒不能稱兵以報之。恥假力於人。誓手劍以屠黒卵。黒卵悍志絶衆。力抗百夫。筋骨皮肉。非人類也。延頸承刃。披胸受矢。鋩鍔摧屈。而體無痕撻。負其才力。視來丹猶雛鷇也。來丹之友申他曰。子怨黒卵至矣。黒卵之易子過矣。將奚謀焉。來丹垂涕曰。願子爲我謀。

魏の黒卵、暱嫌(一)を以て丘邴章を殺す。丘邴章の子來丹、父の讎を報ぜんことを謀る。丹は氣甚だ猛なれども形甚だ露れ(二)、粒を計へて食ひ(三)、風に順つて趨る(四)。怒ると雖も、兵を稱けて以て之を報ずること能はず、力を人に假らんことを恥ぢて、劍を手にして以て黒卵を屠らんことを誓ふ。黒卵悍志衆に絶れ、力百夫に抗し、筋骨皮肉人類に非ず(五)。頸を延べて刃を承け、胸を披いて矢を受け、鋩鍔摧屈すれども體に痕撻(六)なし。其の材力を負みて、來丹を視ること猶ほ雛鷇(七)のごとし。來丹の友申他曰く、子黒卵を怨むこと至れり。黒卵の子を易ること過ぎたり。將に奚をか謀らんとすると。來丹涕を垂れて曰く、願はくは子我が爲に謀れと。

(一)暱嫌は私怨也　(二)痩せて骨があらはなる也　(三)食少くして米粒を數へて食ふ程なり　(四)力弱くして風に從ひて行くこと能はず　(五)普通の人に異なるを謂ふ　(六)鋩はきつさき、鍔はつば、鋩はくだけ鍔はまがれども體に創痕を印せざる也　(七)雛鷇は鳥のひな也

所御者。亦如此也。曩汝之行。得之於足。應之於心。推於御也。齊輯乎轡銜之際。而急緩乎脣吻之和。正度於胸臆之中。而執節乎掌握之間。內得於中心。而外合於馬志。是故能進退履繩。而旋曲中規矩。取道致遠。而氣力有餘。誠得其術也。得之於銜。應之於轡。得之於轡。應之於手。得之於手。應之於心。則不以目視。不以策驅。心閑體正。六轡不亂。而二十四蹄所投無差。迴旋進退。莫不中節。然後轡輪之外。可使無餘轍。馬蹄之外。可使無餘地。未嘗覺山谷之嶮。原隰之夷。視之一也。吾術窮矣。汝其識之。

夷を覺えず、之を視ること一なり。(一七)吾が術窮まりぬ。汝其れ之を識せと。

(一) 上手の弓造りは先づ箕を造ることを學ぶ也 (二) 上手の鍛冶は先づ裘を造り習ふ也 (三) 六轡は六馬につけたる手綱也 (四) 木を立てゝ造のしるしと爲し、木と木との間に僅に數步を容るべからしめ、步數を數へて杭をうつ也 (五) 走りつゝ往來するに步數を踏み誤ることなし (六) 馬を御するの道も亦此の如し (七) 木を立てたる間を踏み誤らぬやうに行くは、先づ足に踏み覺えて後心に得るものあり (八) 輯は車輿也、車輿の齊頓を得るは轡と銜との間に在る也 (九) 轡を引くことの緩急を馬の口吻によりて調和する也 (一〇) 法度を我が胸中に正しくす (一一) 疾徐の節を手綱・握れる手の中に執る (一二) 繩の如き細路を踏みて行き、周旋規にあたり曲折矩にあたる也 (一三) 馬の進退はくつわによりてするものにて、其の緩急は手綱の緩急に因る、手綱の緩急は手の按排に因る、手の按排は心に因りて爲す、此の如く始は手足のわざより入りて之を心に會得すれば、一々目を以て視ず、策を以て馬を驅るを要せす、心を勞せずして體正しく・六馬の手綱自然に亂れず (一四) 六馬の足也 (一五) 車の輪のめぐり行く所一定して左右に動搖することなく、馬蹄の踏み行く所前後相齊しくして亂離ならざる也 (一六) 原隰は平地也 (一七) 吾が御術此に窮まれり

愈謹。乃告之曰、古詩言、良弓之子、必先爲箕、良冶之子、必先爲裘。汝先觀吾趣、趣如吾、然後六轡可持、六馬可御、造父曰、唯命所從。泰豆乃立木爲塗、僅可容足、計步而置、履之而行、趣走往還無跌失也、造父學之三日盡其巧、泰豆歎曰、子何其敏也、得之捷乎、凡

御すべしと。造父曰く、唯命のまゝに從ふ所なりと。泰豆乃ち木を立てて塗と爲し、僅に足を容るべからしめ、步を計へて置き、之を履みて行くに、趣走往還跌失することなし。造父之を學ぶこと三日にして其の巧を盡す。泰豆嘆じて曰く、子何ぞ其れ敏にして、之を得ること捷きや。凡そ御する所の者も亦此の如し。嚮に汝の行く、之を足に得て之を心に應ず。御に推せば、轡を銜の際に齊へ、而して脣吻の和を急緩にし、度を胸臆の中に正しうし、而して節を掌握の間に執る。內中心に得て、外馬の志に合す。是の故に能く進退繩を履み、旋曲規矩に中り。道を取り遠きを致して氣力餘あり。誠に其の術を得ればなり。之を銜に得て之を轡に應じ、之を轡に得て之を手に應じ、之を手に得て之を心に應ずれば、則ち目を以て視ず、策を以て驅らず、心閑に體正しく、六轡亂れず。而して二十四蹄の投ずる所差なく、迴旋進退節に中らざることなし。然る後輿輪の外餘轍なからしむべく、馬蹄の外餘地なからしむべく、未だ嘗て山谷の嶮、原隰の

告我。昌以氂懸虱於牖南面而望之。旬日之間。浸大也。三年之後如車輪焉。以覩餘物。皆丘山也。乃以燕角之弧。朔蓬之簳射之。貫虱之心而懸不絶。以告飛衛。飛衛高蹈拊膺曰。汝得之矣。紀昌既盡衛之術。計天下之敵己者。一人而已。乃謀殺飛衛。相遇於野。二人交射。中路矢鋒相觸而墜於地。而塵不揚。飛衛之矢先窮。紀昌遺一矢。既發。飛衛以棘刺之端扞之而無差焉。於是二子泣而投弓。相拜於塗。請爲父子。剋臂以誓。不得告術於人。

ふことなし。是に於て二子泣いて弓を投げ、塗に相拜し、請うて父子と爲り、臂を剋して(一二)以て誓ひ、術を人に告ぐるを得ず。(一三)

(一)弓を張りて未だ射ざるに獸は地に伏し鳥は地に下りて射らるゝを待つ　(二)またゝきせぬことを學べ　(三)はたの下に臥す也　(四)牽挺は機の踏み竹也　(五)氂は毛也　(六)餘物は他の物也　(七)燕國より出づる角の弓北狄の蓬の矢　(八)毛に懸りたるまゝ落ちざる也　(九)飛衛一人あるのみ　(一〇)窮するは射盡したる也　(一一)棘刺はばらのはり也　(一二)臂を刺して血を出して誓ふ也　(一三)射術を人に敎へざる也

造父之師曰泰豆氏。造父之始從習御也。執禮甚卑。泰豆三年不告。造父執禮

造父の師を泰豆氏と曰ふ。造父の始め從つて御を習ふや、禮を執ること甚だ卑し。泰豆三年まで告げず。造父禮を執ること愈〻謹めり。乃ち之に告げて曰く、古詩に言ふ、(一)良弓の子は必ず先づ箕を爲る、(二)良冶の子は必ず先づ裘を爲ると。汝先づ吾が趣くことを觀よ。趣くこと吾が如くにして、然る後六轡(三)持つべく、六馬

射者。彀レ弓而獸伏鳥下。弟子名飛衛。學二射於甘蠅一而巧過二其師一。紀昌者。又學二射於飛衛一。飛衛曰。爾先學レ不レ瞬而後可レ言レ射矣。紀昌歸偃二臥其妻之機下一。以レ目承二牽挺一。二年之後。雖二錐末倒一レ眥而不レ瞬也。以告二飛衛一。飛衛曰。未也。亞學レ視而後可。視レ小如レ大。視レ微如レ著。而後

を甘蠅に學びて、巧なること其の師に過ぐ。紀昌といふ者、又射を飛衛に學ぶ。飛衛曰く、爾先づ瞬せざることを學べ、而して後に射を言ふべしと。紀昌歸りて其の妻の機下に偃臥し、目を以て牽挺を承く。二年の後、錐末眥に倒ると雖も瞬せず。以て飛衛に告ぐ。飛衛曰く、未だし。亞いで視ることを學びて、而して後可なり。小を視ること大の如く、微を視ること著の如くにして、而して後に我に告げよと。昌は氂を以て虱を牖に懸け、南面して之を望む。旬日の間にして浸く大に、三年の後車輪の如し。以て餘物を視るに皆丘山なり。乃ち燕角の弧、朔蓬の簳(八)を以て之を射るに、虱の心を貫いて、而も懸りて絶えず。以て飛衛に告ぐ。飛衛高蹈して膺を拊つて曰く、汝之を得たりと。紀昌既に衛の術を盡して、天下の己に敵する者を計るに一人のみ。乃ち飛衛を殺さんことを謀る。野に相遇ひ、二人交ゝ射る。中路にして矢鋒相觸れ、地に墜ちて塵揚らず。飛衛の矢先づ窮まる(一〇)。紀昌一矢を遺す。既に發つとき、飛衛棘刺(一一)の端を以て之を扞ぐに、差

變萬化ㇼ唯意所ㇾ適。王以爲二實人一也。與二盛姫內御一並觀ㇾ之。技將ㇾ終。倡者瞬二其目一而招二王之左右侍妾一。王大怒。立欲ㇾ誅二偃師一。偃師大懾。立剖二散倡者一以示ㇾ王。皆傅二會革木膠漆白黑丹青一之所ㇾ爲。王諦料ㇾ之。內則肝膽心肺脾腎腸胃。外則筋骨支節皮毛齒髮。皆假物也。而無下不二畢具一者上。合會復加二初見一。王試廢二其心一。則口不ㇾ能ㇾ言。廢二其肝一。則目不ㇾ能ㇾ視。廢二其腎一。則足不ㇾ能ㇾ步。穆王始悅而歎曰。人之巧。乃可下與二造化者一同上ㇾ功乎。詔二貳車一載ㇾ之以歸。夫班輸之雲梯。墨翟之飛鳶。自謂二能之極一也。弟子東門賈。禽滑釐。聞二偃師之巧一以告二二子一。二子終身不二敢語一ㇾ藝。而時執二規矩一。

はず。穆王始めて悅んで嘆じて曰く、人の巧乃ち造化者と功を同じうすべきかと。貳車(一一)に詔して之を載せ以て歸る。夫れ班輸の雲梯(一二)、墨翟の飛鳶(一三)、自ら能の極なりと謂ふ。弟子東門賈、禽滑釐、偃師の巧を聞いて以て二子に告ぐ。二子終身敢て藝を語らず(一四)、而して時に規矩を執るのみ。

〔一〕瞬むるは前に進ましむる也 〔二〕日は他日也 〔三〕能く倡する者は俳優也 〔四〕走り歩み俯し仰ぐ也 〔五〕宮中の女官等也 〔六〕瞬はまたゝきする也 〔七〕人形を分解する也 〔八〕傅會は附け合せる也 〔九〕合會は組み立つる也 〔一〇〕心は心臟也 〔一一〕貳車は乘換の車 〔一二〕雲梯は城に打ち掛けて城を攻むるはしご 〔一三〕墨翟木にて鳶を造りて飛ばせたるに三日間歸り來らざりき 〔一四〕止むを得ざる時にのみ規矩を取りしなり

甘蠅古之善ㇾ

甘蠅は古の射を善くする者なり(一)。弓を彀りて獸伏し鳥下る。弟子名は飛衞、射

偃師。穆王薦之問曰。若有何能。偃師曰。臣唯命所試。然臣已有所造。願王先觀之。穆王曰。日以俱來。吾與若俱觀之。越日偃師謁見王。王薦之曰。若與偕來者何人。對曰。臣之所造能倡者。穆王驚視之。趨步俯仰。信人也。巧夫。顉其頤則歌合律。捧其手則舞應節。千

造りし所あり。願はくは王先づ之を觀よと。穆王曰く、日に以て(一)俱に來れ。吾若と俱に之を觀んと。越日偃師王に謁見す。王之を薦めて曰く、若と偕に來れる者は何人ぞやと。對へて曰く、臣の造る所の能く倡(二)する者なりと。穆王驚いて之を視れば、趨步俯仰(三)信に人なり。巧なるかな、其の頤を顉ぐれば則ち歌律に合し、其の手を捧ぐれば則ち舞節に應ず。千變萬化、唯意の適する所なり。王實の人なりと以爲ひ、盛姫内御と之を並び觀る。技將に終らんとし、倡者其の目を瞬(四)して王の左右の侍妾を招く。王大に怒り、立どころに偃師を誅せんと欲す。偃師大に懾れ、立どころに倡者(五)を剖散して以て王に示ししに、皆革木膠漆白黑丹靑を傅會するの爲す所なり。王諦に之を料るに、内は則ち肝膽心肺脾腎腸胃、外は則ち筋骨支節皮毛齒髮、皆假物なり、而も畢く具へざる者なし。合會(九)すれば復た初見の如し。王試(一〇)に其の心を廢すれば、則ち口言ふこと能はず、其の肝を廢すれば、則ち目視ること能はず、其の腎を廢すれば、則ち足步むこと能

在レ登ニ高山一、鍾子期曰。善哉。峩峩兮若ニ泰山一。志在ニ流水一。鍾子期曰。善哉。洋洋兮若ニ江河一。伯牙所レ念、鍾子期必得レ之。伯牙游ニ於泰山之陰一。卒逢ニ暴雨一。止ニ於岩下一心悲。乃援レ琴而鼓レ之。初爲ニ霖雨之操一。更造ニ崩山之音一。曲毎レ奏。鍾子期輙窮ニ其趣一。伯牙乃舍レ琴而嘆曰。善哉善哉。子之聽。夫志想象。猶ニ吾心一也。吾於レ何逃レ聲哉。

く、善い哉、洋洋(二)たること江河の若しと。伯牙の念ふ所、鍾子期必ず之を得たり。伯牙泰山の陰に游び、卒に暴雨に逢ひ、巖下に止りて心悲む。乃ち琴を援りて之を鼓く、初め霖雨(三)の操を爲し、更に崩山の音を造す。曲奏する毎に、鍾子期輙ち其の趣を窮む。伯牙乃ち琴を舍いて嘆じて曰く、善い哉、善い哉。子の聽くこと。夫れ志の想象(四)すること、猶ほ吾が心のごとし。(五)吾何に於て聲を逃れんやと。

(一) 峨々は山高き貌 (二) 洋洋は水盛なる貌 (三) 霖雨崩山は共に琴曲の名 (四) 汝の我が志を想像すること我が心の如し (五) 吾は聲をかくすこと能はず

周穆王西巡狩越ニ崑崙一。不レ至ニ弇山一反。還未レ及ニ中國一。道有レ獻ニ工人一。名ニ

周の穆王西に巡狩す。崑崙を越え、弇山に至らずして反る。還りて未だ中國に及ばず、道に工人を獻ずるあり、偃師と名づく。穆王之を薦(一)めて問うて曰く、若何の能かあると。偃師曰く、臣は唯〻命のまゝに試る所なり。然れども臣已に

譚乃謝求反。終身不敢言歸。秦青顧謂其友曰、昔韓娥東之齊。匱糧。過雍門、鬻歌假食。既去。而餘音遶梁欐三日不絕。左右以其人弗去。過逆旅。逆旅人辱之。韓娥因曼聲哀哭。一里老幼。悲愁垂涕。相對三日不食。遽而追之。娥還復爲曼聲長歌。一里老幼。喜躍抃舞。弗能自禁。忘向之悲也。乃厚賂發之。故雍門之人。至今善歌哭。放娥之遺聲。

へり。逆旅を過ぐ。逆旅の人之を辱む。韓娥因りて曼聲して哀哭す。一里の老幼悲愁して涕を垂れ、相對して三日食はず。遽にして之を追ふ。娥還りて復た爲に曼聲長歌す。一里の老幼喜躍抃舞して自ら禁ずる能はず、向の悲を忘れたり。乃ち厚く賂うて之を發せしむ。故に雍門の人、今に至るまで歌哭を善くすること娥の遺聲に効へり。

㊀ 雍門は齊の西門也 ㊁ 手拍子を打つ也 ㊂ 秦青の處に立還らんことを求むる也 ㊃ 歌を賣りて食を求むる也 ㊄ 韓娥の歌ひ去りし後其の餘音梁欐の間にのこれる也 ㊅ 左右は近隣の人也 ㊆ 逆旅は旅舍也 ㊇ 曼聲は長き聲也 ㊈ 喜んで躍り手を拍ちて踊上 ㊉ 厚く物を賂りて立ち去らしめし也

伯牙善鼓琴。鍾子期善聽。伯牙鼓琴。志

伯牙善く琴を鼓き、鍾子期善く聽く。伯牙琴を鼓いて、志高山に登るに在れば、鍾子期曰く、善い哉、峩峩たること泰山の若しと。志流水に在れば、鍾子期曰

賓。及レ秋而叩ニ角弦一。以激ニ夾鍾一。溫風徐廻。草木發レ榮。當レ夏而叩ニ羽弦一。以召ニ黃鍾一。霜雪交下。川池暴沍。及レ冬而叩ニ徵弦一。以激ニ蕤賓一。陽光熾烈。堅冰立散。將レ終。命レ宮而總ニ四弦一。則景風翔。慶雲浮。甘露降。醴泉涌。師襄乃撫レ心高蹈曰。微矣子之彈也。雖ニ師曠之清角。鄒衍之吹律一。亡ニ以加一レ之。彼將三挾レ琴執レ管而從ニ子之後一耳。

は夏の音、蕤賓は五日の律 (一一) 宮は中聲を主る絃也、命ずるはおもに彈く也、四弦は商角徵羽の絃也 (一二) 景風はよき風、慶雲はめでたき雲 (一三) 甘露は甘きつゆ、醴泉はあまき泉 (一四) 高蹈は足拍子をふむ也 (一五) 微は微妙也 (一六) 師曠は晉の平公の樂師、平公の命により清角の曲を奏したるに西方より白雲起り、再び奏したるに大風吹き雨降り來り、三たび奏したるに家も瓦も吹き破られ大旱となりて田畠に青き物なきに至り、晉國三年饑饉せり (一七) 鄒衍は燕の昭王の時の人、燕は北方の國にて寒國ゆゑ五穀の生ぜぬ處ありたるを、鄒衍暖律を吹きて之を暖めたるに其れより禾黍能く生ずるに至れり (一八) 管は笛の類

薛譚學ニ謳於秦青一。未レ窮ニ青之技一。自謂レ盡レ之。遂辭歸。秦青弗レ止。餞ニ於郊衢一。撫レ節悲歌。聲振ニ林木一。響遏ニ行雲一。薛

薛譚謳を秦青に學び、未だ青の技を窮めずして、自ら之を盡せりと謂ひ、遂に辭し歸る。秦青止めずして郊衢に餞し、(一)節を撫して悲歌す。(二)聲林木に振ひ、響行雲を遏む。薛譚乃ち謝して反らんことを求め、(三)終身敢て歸ることを言はず。秦青顧みて其の友に謂つて曰く、昔韓娥東齊に之きて糧に匱し。雍門を過ぎ、(四)歌を鬻いで食を假る。(五)既に去りて餘音梁欐を繞り、三日絶えず。(六)左右、其の人去らずと以

其琴一嘆曰。文非絃之不能鈎。非章之不能成。文所存者。不在絃。所志者。不在聲。内不得於心。外不應於器。故不敢發手而動絃。且小假之。以觀其後。無幾何復見師襄。師襄曰。子之琴何如。師文曰。得之矣。請嘗試之。於是當春而叩商絃。以召南呂。涼風忽至。草木成

且く小しく之を假して以て其の後を觀よと。幾何もなくして復た師襄に見ゆ。師襄曰く、子の琴は何如と。師文曰く、之を得たり。請ふ之を嘗試みんと。是に於て春に當りて商の弦を叩いて以て南呂を召べば、涼風忽ち至り、草木實を成す。秋に及んで角の弦を扣いて以て夾鐘を激すれば、溫風徐に廻り、草木榮を發す。夏に當りて羽弦を叩いて以て黄鐘を召べば、霜雪交々下り、川池暴に沍る。冬に及びて徵の弦を叩いて以て蕤賓を激すれば、陽光熾烈に、堅冰立どころに散ず。將に終らんとし、宮に命じて四弦を總ぶれば、則ち景風翔り慶雲浮び、甘露降り醴泉涌く。師襄乃ち心を撫で高蹈して曰く、微なるかな子の彈ずるや。師曠の清角、鄒衍の吹律と雖も、以て之に加ふることなし。彼將に琴を挾み管を執りて子の後に從はんとせんのみと。

(一)徽にて絃をおさへ聲をかきならす也 (二)一曲をも成就すること能はず (三)存するは心を存する也 (四)内心に合諧せざれば樂器に應ぜざる也 (五)之を假すは之を待つ也 (六)商の絃は金に屬す秋の音、南呂は八月の律也 (七)角は春の音夾鐘は二月の律 (八)實を成するに至る也 (九)羽は冬の音、黄鐘は十二月の律 (一〇)徵

於謀㆒。而寡㆓於斷㆒。齊嬰志弱而氣彊。故少㆓於慮㆒而傷㆓於專㆒。若換㆓汝之心㆒。則均㆓於善㆒矣。扁鵲遂飲㆓二人毒酒㆒。迷死三日。剖㆑胸探㆑心。易而置㆑之。投以㆓神藥㆒。既悟如㆑初。二人辭歸。於㆑是公扈反㆓齊嬰之室㆒。而有㆓其妻子㆒。妻子弗㆑識。齊嬰亦反㆓公扈之室㆒。有㆓其妻子㆒。妻子亦弗㆑識。二室因相與訟。求㆓辯於扁鵲㆒。扁鵲辯㆓其所㆑由。訟乃已。

ども、妻子も亦識らず。二室因つて相與に訟へて、(七)辯を扁鵲に求む。扁鵲其の由る所を辯じて、訟乃ち已みぬ。

(一) 府藏は臟腑也 (二) 生るゝと共に生じたる病也 (三) 疾も亦病症也 (四) 專は專斷也 (五) 迷死は藥の爲に假死する也 (六) 妻子は其の人を見知らぬ也 (七) 辯は辨明也

瓠巴鼓㆑琴。而鳥舞魚躍。鄭師文聞㆑之。棄㆑家從㆓師襄㆒游。柱㆑指鉤㆑弦。三年不㆑成㆑章。師襄曰。子可㆓以歸㆒矣。師文舍㆓

瓠巴琴を鼓いて、鳥舞ひ魚躍る。鄭の師文之を聞き、家を棄て師襄に從つて游ぶ。(一)指を柱へ弦を鉤すること三年にして(二)章を成さず。師襄曰く、子以て歸るべしと。師文其の琴を舍て歎じて曰く、文は弦を鉤すること能はざるに非ず、章を成すこと能はざるに非ず。文の存する所の者は弦に在らず、志す所の者は聲に在らず。(四)內心に得ざれば、(三)外器に應ぜず。故に敢て手を發して弦を動かさざるなり。

猨遠。唯魚之念。投綸沈鈎。手無輕重。物莫能亂。魚見臣之鈎餌。猶沈埃聚沫。呑之不疑。所以能以弱制彊以輕致重也。大王治國誠能若此則天下可運於一握。將以奚事哉。楚王曰善。

魯公扈。趙齊嬰二人有疾。同請扁鵲求治。扁鵲治之。既同愈。謂公扈齊嬰曰。汝曩之所疾。自外而干府藏者。固藥石之所已。今有偕生之疾。與體長。今爲汝攻之何如。二人曰。願先聞其驗。扁鵲謂公扈曰。汝志彊而氣弱。故足

魯の公扈、趙の齊嬰の二人疾あり。同じく扁鵲に請うて治を求む。扁鵲之を治めて既に同じく愈えぬ。公扈齊嬰に謂つて曰く、汝が曩の疾む所は、外よりして府藏を干す者にして、固より藥石の已す所なり。今偕に生ずるの疾あり、體と偕に長ず。今汝の爲に之を攻めば何如と。二人曰く、願はくは先づ其の驗を聞かんと。扁鵲は公扈に謂つて曰く、汝は志彊にして氣弱なり、故に謀に足りて斷に寡し。齊嬰は志弱にして氣彊なり、故に慮に少くして專なるに傷る。若し汝の心を換へば則ち善に均しからんと。扁鵲遂に二人に毒酒を飲ましめ、迷死すること三日せしめ、胸を剖き心を探り、易へて之を置き、投ずるに神藥を以てす。既に悟めて初の如し。二人辭し歸る。是に於て公扈は齊嬰の室に反りて其の妻子を有すれども、妻子識らず。齊嬰も亦公扈の室に反りて其の妻子を有すれ

竿。剖粒而餌。引盈車之魚於百仞之淵。汨流之中。綸不絶。鉤不伸。竿不撓。楚王聞而異之。召問其故。詹何曰。臣聞先大夫之言。蒲且子之弋也。弱弓纖繳。乘風振之。連雙鶬於青雲之際。用心專。動手均也。臣因其事。放而學釣。五年始盡其道。當臣之臨河持竿。心無

まず。楚王聞いて之を異とし、召して其の故を問ふ。詹何曰く、臣先大夫(六)の言を聞きしに、蒲且子の弋(七)するや、弱弓(八)纖繳、風に乘じて之を振ふ。雙鶬(九)を青雲の際に連ぬ。心を用ふること專にして、手を動すこと均しければなり。臣其の事に因り、放うて釣を學ぶ。五年にして始めて其の道を盡す。臣の河に臨み竿を持するに當りて、心雜慮なく、唯〻魚のみ之念ふ。綸を投じて鉤を沈むるに、手輕重なく、物能く亂ることなし。魚臣の鉤餌を見ること、猶ほ沈埃聚沫(一〇)のごとく、之を呑んで疑はず。能く弱を以て彊を制し、輕を以て重を致す所以なり。大王國を治むること誠に能く此の若くならば、則ち天下は一握に運らすべし。將以て奚をか事とせんやと。楚王曰く善しと。

(一) 繭より引き出したるまゝにて撚り合せぬ絲 (二) 芒鍼は稻ののげ (三) ばらの木の苗 (四) 粒は飯粒也 (五) 汨流は渦巻く流 (六) 自分の父をいふ (七) 弋は矢に絲をつけて鳥を卷き落すをいふ (八) 細きいぐるみ (九) 鶬は黄鸝也。うぐひす。連ぬとは二匹を射落す也 (一〇) 水底に沈める塵埃、あつまれる水のあわ

中時近也。一兒曰、日初出大如車蓋。及日中則如盤盂。此不爲遠者小而近者大乎。一兒曰、日初出滄滄涼涼。及其日中如探湯。此不爲近者熱而遠者涼乎。孔子不能決也。兩小兒笑曰。孰爲汝多知乎。

ては、湯を探るが如し。此れ近き者熱くして遠き者涼しと爲さずやと。孔子決すること能はず。兩小兒笑うて曰く、孰か汝を多知と爲すやと。

(一)盤盂は口器也　(二)車の上のかさ也　(三)蒼蒼は盛也　(四)滄滄涼涼は寒冷也

均天下之至理也。連於形物亦然。均髮均縣輕重而髮絕。髮不均也。均也其絕也莫絕。人以爲不然。自有知其然者也。詹何以獨繭絲爲綸、芒針爲鉤、荊篠爲竿、剖粒爲餌、

(一)均は天下の至理なり。(二)形物を連ぬる亦然り。(三)均髮は縣に均し。(四)輕重ありて髮絶ゆるは、髮均しからざればなり。均しければ其の絶ゆるや絶ゆることなし。人以て然らずと爲す。(五)自ら其の然ることを知る者あらん。

(一)均は平均也　(二)凡そ有形に屬する者皆然り　(三)髮の力平均なれば之に懸けたる物も均しく懸りて髮絶ゆることなし　(四)懸けたる物の輕重ありて髮絶ゆるは、髮の均しからざる故なり　(五)常人能く其の理を知る

詹何獨繭絲を以て綸と爲し、芒針を鉤と爲し、荊篠を竿と爲し、粒を剖いて餌と爲し、盈車の魚を百仞の淵、汨流の中に引くに、綸絶えず、鉤伸びず、竿撓

棄レ之。曰。鬼妻不レ可三與同二居處一。楚之南有二炎人之國一。其親戚死。㓟二其肉一而棄レ之。然後埋二其骨一。迺成レ爲二孝子一。秦之西有二儀渠之國者一。其親戚死。聚レ柴積而焚レ之。燻則煙上。謂二之登遐一。然後成レ爲二孝子一。此上而爲レ政。下以爲レ俗。而未レ足レ爲レ異也。

渠の國といふ者あり。其の親戚死すれば、柴を聚め積みて之を焚く。燻すれば則ち煙上る、之を登遐（六）と謂ふ。然る後に孝子たることを成す。此上にして政と爲し、下以て俗と爲し、而して未だ異と爲すに足らざるなり。

（一）鮮は死ぬまじき者を殺すをいふ　（二）弟に宜しとは弟の生長に宜しき也　（三）大父は祖父、大母は祖母也　（四）鬼妻は死者の妻也　（五）剔く也　（六）死者の魂天に上れりといふ

孔子東游。見二兩小兒辯鬬一。問二其故一。一兒曰。我以。日始出時去レ人近。而日中時遠也。一兒以二日初出遠。而日

孔子東游して、兩小兒の辯鬬（一）を見て其の故を問ふ。一兒曰く、我以へらく、日始めて出づる時は人を去ること近く、日の中する時は遠し、一兒は日の初め出づるや遠くして、日の中する時は近しと以へりと。一兒曰く、日の初め出づるや大いさ車蓋（二）の如し。日中に及んでは則ち盤盂（三）の如し。此遠き者小にして近き者大なりと爲さずやと。一兒曰く、日の初め出づるや滄滄涼涼（四）たり。其の日中に及び

稷従二戎夷之國一乎。此仲父之罪。奈何從レ之。桓公乃止。以二隰朋之言一告二管仲一。仲曰。此固非二朋之所一レ及也。臣恐三彼國之不レ可レ升之也。齊國之富奚戀。隰朋之言奚顧。

南國之人。祝髮而裸。北國之人。鞨巾而裘。中國之人。冠冕而裳。九土所レ資。或農或商。或田或漁。如二冬裘夏葛。水舟陸車一。默而得レ之。性而成レ之。越之東有二輒沐之國一。其長子生。則鮮而食レ之。謂二之宜一レ弟。其大父死。負二其大母一而

南國の人は祝髮(一)して裸なり、北國の人は鞨巾(二)して裘す、中國の人は冠冕して裳す。九土の資する所(三)、或は農し、或は商し、或は田(四)し、或は漁す。冬は裘し、夏は葛し、水には舟し、陸には車する如き、默(五)して之を得、性のまゝにして之を成す。

(一)祝髮は斷髮也　(二)鞨巾は絳衣にて首をつゝむこと　(三)九土は九州也、資する所は山國又は水國の相違あるをいふ　(四)田は田獵也　(五)習慣を待たずして自然に出るをいふ

越の東に輒沐の國あり。其の長子生るれば、則ち鮮(一)にして之を食ひ、之を弟に宜(二)しと謂ふ。其の大父(三)死するときは、其の大母を負うて之を棄つ。曰く、鬼妻(四)は以て居處を同じくすべからずと。楚の南に炎人の國あり、其の親戚死すれば、其の肉を朽いて之を棄て、然る後に其の骨を埋め、廼ち孝子たることを成す、秦の西に儀

不臣。男女雜游。不媒不聘。緣水而居。不耕不稼。土氣溫適。不織不衣。百年而死。不夭不病。其民孳阜亡數。有喜樂。亡衰老哀苦。其俗好聲。相攜而迭謠。終日不輟音。饑惓則飲神瀵。力志和平。過則醉經旬乃醒。沐浴神瀵。膚色脂澤。香氣經旬乃歇。周穆王北游過其國。三年忘歸。旣反周室。慕其國。儆然自失。不進酒肉。不召嬪御者數月。乃復。

管仲勉齊桓公。因游遼口。俱之其國。幾尅舉。隰朋諫曰。君舍齊國之廣。人民之衆。山川之觀。殖物之阜。禮儀之盛。章服之美。妖靡盈庭。忠良滿朝。肆咤則徒卒百萬。視撝則諸侯從命。亦奚羨於彼而棄齊國之社

管仲齊の桓公を勉め、因つて遼口に游び、俱に其の國に之かんとして、幾んど舉を剋す。(一)隰朋諫めて曰く、君齊國の廣き、人民の衆き、山川の觀、(二)殖物の阜なる、禮義の盛なる、章服の美しく、(三)妖靡庭に盈ち、忠良朝に滿ち、(四)肆咤すれば則ち徒卒百萬、(五)視撝すれば則ち諸侯命に從ふを舍てて、亦奚ぞ彼を羨んで齊國の社稷を棄てて、戎夷の國に從ふか。(六)此仲父の耄せるなり。奈何ぞ之に從はんと。桓公乃ち止め、隰朋の言を以て管仲に告ぐ。仲曰く、此固より朋の及ぶ所に非ざるなり。(七)臣は彼の國の升るべからざることを恐る。齊國の富奚ぞ戀はん。隰朋の言奚ぞ顧みんと。

(一) 出發の日を定むる也 (二) 五穀豐に實る也 (三) 妖靡は美人を謂ふ (四) 肆咤は叱咤の誤なるべし (五) 視撝は指揮の誤なるべし (六) 桓公管仲を尊んで仲父といふ (七) 臣は却つて彼の國に至る能はざらんことを恐る

之類。四方悉平。周以喬陟。當國之中有山。山名壺領。狀若甔甀。頂有口。狀若員環。名曰滋穴。有水湧出。名曰神瀵。臭過蘭椒。味過醪醴。一源分爲四埒。注於山下。經營一國。亡不悉徧。土氣和。亡札厲。人性婉而從。物不競不爭。柔心而弱骨。不驕不忌。長幼儕居。不君

ひ、競はず爭はず。柔心にして弱骨、驕らず忌まず。長幼儕居し、君あらず臣あらず、男女雑游して、媒せず聘せず、水に縁うて居り、耕せず稼せず、土氣温適にして、織らず衣ず、百年にして死す。夭せず病せず、其の民孳阜すること數なく、喜樂ありて衰老哀苦なし。其の俗聲を好み、相攜へて迭に謡ひ、終日音を輟めず。饑ゑ惓めば則ち神瀵を飲み、力志和平なり。過ぐるときは則ち醉ひ、旬を經て乃ち醒む。神瀵に沐浴すれば、膚色脂澤にして、香氣旬を經て乃ち歇む。周の穆王北游して其の國を過ぎ、三年にして歸るを忘る。既に周室に反りて其の國を慕ひ、儵然として自失し、酒肉を進めず、嬪御を召さざること數月にして乃ち復せり。

(一) 齊州は中國也 (二) 境界の限る所を知らず (三) 周陟は高山也 (四) ほとぎの類 (五) 圓環也 (六) 臭は香氣也 (七) 醪醴は濁酒也 (八) 四方に流れ下る也。山上より水流れ下るを埒といふ (九) 經營はめぐる也 (一〇) 土氣和するは氣候温和なる也、札厲は疫病などにて死ぬ人也 (一一) 婉は柔順也 (一二) 儕居は共に居る也 (一三) 內爾人もなく病もなくして天壽に至る也 (一四) 孳阜は繁殖する也 (一五) 心氣和平也 (一六) 脂澤はつやつやしくうる也 (一七) 復はさめる也

陰陽一而形。不レ待二日月一而明。不レ待二殺戮一而夭。不レ待二將迎一而壽。不レ待二五穀一而食。不レ待二繒纊一而衣。不レ待二舟車一而行。其道自然。非二聖人之所一レ通也。

は主る也 (五) 太歲は歲星也 (六) 神靈は造化也 (七) 神靈を待たずして生ずるは日月太歲の類也 (八) 陰陽を待たずして形するは土石の類也 (九) 日月を待たずして明なるは蚯蚓の如きもの也 (一〇) 殺戮する者なくして夭死するは朝菌蟪蛄の類也 (一一) 將迎は人の世話を受けざる也、將迎を待たずして壽なるは松柏の類也 (一二) 鳥獸には五穀を食はざる者多し (一三) 繒纊は絹や綿也。繒纊を待たずして衣るは鳥獸也 (一四) 舟車を待たずして行くは動物皆然り

禹之治二水土一也。迷而失レ塗。謬之二一國一。濱二北海之北一。不レ知下距二齊州一幾千萬里上。其國名曰二終北一。不レ知二際畔之所一レ齊限。無二風雨霜露一。不レ生二鳥獸蟲魚草木

禹の水土を治むるや、迷うて塗を失ひ、謬りて一國に之く。北海の北に濱うて、(一)齊州を距ること幾千萬里なるを知らず。其の國名を終北と曰ふ。(二)際畔の齊限する所を知らず、風雨霜露なく、鳥獸蟲魚草木の類を生ぜず、四方悉く平にして、周らすに(三)喬陟を以てす。國の中に當りて山あり、山を壺領と名づく、狀(四)甔甀の若し。頂に口あり、狀(五)員環の若し、名を滋穴と曰ふ。水あり湧出す、名を神(六)瀵と曰ふ。臭蘭椒に過ぎ、味(七)醪醴に過ぎ、一源分れて(八)四埒と爲る。山下に注い(九)で一國を經營し、悉徧せざるはなし。(一〇)土氣和して札厲なく、人性婉(一一)にして物に從

渭不レ足。將三走北飮二大澤一。未レ至。道渴而死。棄二其杖一。尸膏肉所レ浸。生二鄧林一。鄧林彌二廣數千里一焉。

を生ず。鄧林廣さ數千里に彌れり。

㊀ 夸父は兩黃蛇を耳に珥み、兩黃蛇を足にて踏み居る人なりといふ　㊁ 隅谷は日の入る處　㊂ 河水と渭水と　㊃ 大なる澤也

大禹曰。六合之間。四海之內。照レ之以二日月一。經レ之以二星辰一。紀レ之以二四時一。要レ之以二太歲一。神靈所レ生。其物異形。或夭或壽。唯聖人能通二其道一。夏革曰。然則亦有下不レ待二神靈一而生。不レ待

大禹曰く、(一)六合の間、四海の内、之を照すに日月を以てし、(二)之を經するに星辰を以てし、(三)之を紀するに四時を以てし、(四)之を要するに太歲を以てす。(五)神靈の生ずる所、其の物其の形、或は夭或は壽なり。唯、聖人能く其の道に通ず。(六)夏革曰く、然も則ち亦神靈を待たずして生じ、(七)陰陽を待たずして形し、(八)日月を待たずして明に、(九)殺戮を待たずして夭し、(十)將迎を待たずして壽に、(十一)五穀を待たずして食ひ、(十二)繒纊を待たずして衣、(十三)舟車を待たずして行くことあり。其の道自然、聖人の通ずる所に非ざるなり。

㊀ 六合は上下四方をいふ　㊁ 之を經すとは方位を分つ也　㊂ 之を紀すとは節季を定むる也　㊃ 之を要する

海之尾。鄰人京城氏之孀妻。有二遺男一。始齔，跳往助レ之。寒暑易レ節。始一反焉。河曲智叟笑而止レ之曰。甚矣汝之不慧。以二殘年餘力一。曾不レ能レ毀二山之一毛一。其如二土石一何。北山愚公長息曰。汝心之固。固不レ可レ徹。曾不レ若二孀妻弱子一。雖二我之死一。有レ子存焉。子又生レ孫。孫又生レ子。子又生レ子。子又生レ孫。子子孫孫。無二窮匱一也。而山不レ加レ增。何苦而不レ平。河曲智叟亡二以應一。操蛇之神聞レ之。懼二其不一レ已也。告二之於帝一。帝感二其誠一。命二夸娥氏二子一。負二二山一。一厝二朔東一。一厝二雍南一。自レ此冀之南。漢之陰。無二隴斷一焉。

南、漢の陰に隴断だもなし。(二三)

(一) 太形は太行の誤、太行山は河内野王縣に在り、王屋山は河東東垣縣に在り (二) 俗に愚と謂ふ者未だ必ずしも智ならずんばあらず (三) 家族を聚めて議する也 (四) 豫州の南に切り通す也 (五) 漢水の北邊 (六) 一同に之を可とする也 (七) 尾は末也 (八) 隱土は世界のはて也 (九) 子孫の土を荷ふ者三人 (一〇) 石を打ち割り土を掘りかへす (一一) 箕はみ、畚はもつこ (一二) 孀妻はやもめ (一三) 男女七歳にして齒のぬけかはるを齔といふ (一四) 寒暑を越えて始めて一往復す (一五) 俗に智と謂ふ者未だ必ずしも愚に非ずんばあらず (一六) 不慧は無智也 (一七) 固は頑固なること、徹は通也 (一八) 蛇を手に持てる神。山海の神 (一九) その作業を止めざることを恐るゝ也 (二〇) 夸氏と蛾氏との子也 (二一) 朔東は北海の東 (二二) 雍州の南 (二三) 隴断は小丘也

夸父不レ量レ力。欲レ追二日影一。逐二之於隅谷之際一。渴欲レ得レ飲。赴飲二河渭一。河

夸父力を量らず、(一)日の影を追はんと欲し、之を隅谷の際に逐ふ。(二)渇して飲を得んと欲し、赴いて河渭に飲む。(三)河渭足らず、將に走りて北のかた大澤に飲まんとす。(四)未だ至らず、道にして渇して死す。其の杖を棄てしに、尸の膏肉の浸す所鄧林

九十。面山而居。懲山北之塞。出入之迂也。聚室而謀曰。吾與汝畢力平險。指通豫南。達于漢陰。可乎。雜然相許。其妻獻疑曰。以君之力。曾不能損魁父之丘。如太形王屋何。且焉置土石。雜曰。投諸渤海之尾。隱土之北。遂率子孫荷擔者三夫。叩石墾壤。箕畚運於渤

を以て、曾て魁父の丘を損すること能はず、太形王屋を如何にせん。且つ焉くに土石を置かんと。雜曰く、諸を渤海の尾、隱土の北に投せんと。遂に子孫を率ゐ、荷擔する者三夫、石を叩き壤を墾し、箕畚もて渤海の尾に運ぶ。鄰人京城氏の孀妻に遺男あり、始めて齔す、跳り往きて之を助く。寒暑節を易へて始めて一たび反る。河曲の智叟笑うて之を止めて曰く、甚しいかな汝の不惠なること。殘年餘力を以て、曾て山の一毛をも毀つこと能はず、其れ土石を如何にせんと。北山の愚公長息して曰く、汝が心の固なること固より徹すべからず。曾ち孀妻弱子にだも若かず。我死すと雖も、子ありて存す。子又孫を生み、孫又子を生み、子又子を生み、子又孫を生み、子子孫孫窮り匱しきことなし、而して山は増すことを加へず、何ぞ平ならざるを苦まんと。河曲の智叟以て應ふることなし。操蛇の神之を聞き、其の已まざることを懼れ、之を帝に告ぐ。帝其の誠に感じ、夸蛾氏の二子に命じて二山を負ひ、一を朔東に厝き、一を雍の南に厝かしむ。此より冀の

冬生レ實。丹而味酸。食二其皮汁一、已二憤厥之疾一。齊州珍レ之。渡レ淮而北。而化爲レ枳焉。鸜鵒不レ踰レ濟。貉踰レ汶則死矣。地氣然也。雖レ然形氣異也。性鈞已。無二相易一已。生皆全已。分皆足已。吾何以識二其巨細一。何以識二其修短一。何以識二其同異一哉。

北すれば、化して枳と爲る。(五)鸜鵒濟を踰えず、(六)貉汶を踰ゆれば則ち死す。地氣然るなり。然りと雖も(七)形氣異なるも、性は鈞しきのみ、相易ることなきのみ。生は皆全きのみ、分皆足るのみ。吾何を以て其の巨細を識らん、何を以て其の修短を知らん、何を以て其の同異を識らんと。

(一)橘柚也 (二)憤厥は氣疾也 (三)齊州は齊國也 (四)淮は水の名 (五)鳥の名、濟水を踰ゆれば死す (六)むじなは汶水を踰ゆれば死す (七)形の大小長短、土地により生ずると生ぜぬとは異なるも其の性は均し

太形王屋二山。方七百里。高萬仞。本在二冀州之南。河陽之北一。北山愚公者。年且二

(一)太形王屋の二山、方七百里、高さ萬仞、本冀州の南、河陽の北に在り。北山の(二)愚公といふ者、年且に九十ならんとす。山に面して居るに、山北の塞りて出入の迂なるに(三)懲み、室を聚めて謀りて曰く、吾汝と力を畢して險を平げ、(四)豫の南に指通し、(五)漢の陰に達せば可ならんかと。(六)雜然として相許す。其の妻疑を獻じて曰く、君の力

江浦之間生麼蟲。其名曰焦螟。羣飛而集於蚊睫不相觸。棲宿去來蚊弗覺也。離朱子羽。方晝拭眥揚眉而望之。弗見其形。䚡俞師曠方夜擿耳俛首而聽之。弗聞其聲。唯黃帝與容成子居空峒之上。同齋三月。心死形廢。徐以神視。塊然見之。若嵩山之阿。徐以氣聽。砰然聞之。若雷霆之聲。

江浦〔一〕の間麼蟲〔二〕を生ず、其の名を焦螟と曰ふ。羣飛して蚊睫〔三〕に集れども相觸れず、棲宿去來すれども蚊覺らず。〔四〕離朱子羽、晝に方り眥を拭ひ、眉を揚げて之を望めども、其の形を見ず。〔五〕䚡俞師曠、夜に方り耳を擿し、首を俛して之を聽けども、其の聲を聞かず。唯ゞ黃帝と容成子とのみ、〔六〕空峒の上に居り、同じく齋すること三月、〔七〕心死し形廢し、徐に〔八〕神を以て視れば、〔九〕塊然として之を見ること嵩山の阿〔一〇〕の如く、徐に氣を以て〔一一〕聽けば、砰然として之を聞くこと雷霆の聲の若し。

〔一〕水邊。〔二〕麼蟲は極めて小なる蟲也。〔三〕蚊のまつげ。〔四〕古の眼の明なる人。〔五〕古の耳のよく聞ゆる人。〔六〕空峒は山の名、今甘肅省に在り。〔七〕心は死灰の如く形は枯木の如くなる也。〔八〕たましひを以て視る也。〔九〕塊然は大なる貌。〔一〇〕阿は山脚也。〔一一〕自然の氣を以て聽く也。

吳楚之國有大木焉。其名爲櫾。碧樹而

吳楚の國に大木あり、其の名を櫾〔一〕と爲す。碧樹にして冬實を生じ、丹くして味酸し。其の皮汁を食へば、憤厥〔二〕の疾を已す。〔三〕齊州之を珍とす。〔四〕淮を渡りて

從二中州一以東四十萬里。得二僬僥國一。人長一尺五寸。東北極有レ人。名曰レ諍。人長九寸。荊之南有二冥靈者一以二五百歲一爲レ春。五百歲爲レ秋。上古有二大椿者一。以二八千歲一爲レ春。八千歲爲レ秋。朽壤之上。有二菌芝者一。生二於朝一。死二於晦一。春夏之月。有二蚊蚋者一。因レ雨而生。見レ陽而死。終髮北之北。有二溟海者一。天池也。有レ魚焉。其廣數千里。其長稱焉。其名爲レ鯤。有レ鳥焉。其名爲レ鵬。翼若二垂天之雲一。其體稱焉。世豈知レ有二此物一哉。大禹行而見レ之。伯益知而名レ之。夷堅聞而志レ之。

中州より以東四十萬里に僬僥國を得。人の長一尺五寸。東北極に人あり、名を諍と曰ふ。人の長九寸。荊の南に冥靈(一)といふ者あり、五百歲を以て春と爲し、五百歲を秋と爲す。上古に大椿(二)といふ者あり、八千歲を以て春と爲し、八千歲を秋と爲す。(三)朽壤の上に菌芝(四)といふ者あり、朝に生じ晦に死る。春夏の月に蚊蚋(五)といふ者あり、雨に因りて生じ、陽を見て死す。終髮(六)の北の北に溟海といふ者あり、天池なり。魚あり、其の廣さ數千里、其の長稱へり(七)。其の名を鯤と爲す。鳥あり、其の名を鵬と爲す。翼(八)垂天の雲の若く、其の體稱へり。世豈此の物あるを知らんや。大禹行きて之を見、伯益知りて之を名づけ、夷堅聞きて之を志す。

(一)冥靈は木の名 (二)大椿も木の名 (三)朽壤は糞土也 (四)菌芝はくさびら (五)蚊やあぶの類 (六)終髮は地の名、北の方は遠き極なるをいふ (七)其の身長其の廣さに相應せり (八)垂天の雲は天に一面にある雲をいふ

九千里。山之中間。相去七萬里。以爲鄰居焉。其上臺觀皆金玉。其上禽獸皆純縞。珠玕之樹皆叢生。華實皆有滋味。食之皆不老不死。所居之人。皆仙聖之種。一日一夕。飛相往來者。不可數焉。而五山之根。無所連著。常隨潮波上下往還。不得暫峙焉。仙聖毒之。訴之於帝。帝恐流於西極。失羣聖之居。乃命禺彊使巨鼇十五舉首而戴之。迭爲三番。六萬歲一交焉。五山始峙而不動。而龍伯之國有大人。舉足不盈數步。而暨五山之所。一釣而連六鼇。合負而趣歸其國。灼其骨以數焉。於是岱輿員嶠二山。流於北極。沈於大海。仙聖之播遷者巨億計。帝憑怒。侵減龍伯之國使阨。侵小龍伯之民使短。至伏羲神農時。其國人猶數十丈。

五山の所に曁び、一釣して六鼇を連ね、合せ負うて趣に其の國に歸り、其の骨を灼いて以て數ふ。是に於て岱輿員嶠の二山北極に流れ、大海に沈み、仙聖の播遷する者巨億計なり。帝憑に怒り、龍伯の國を侵し減じて阨からしめ、龍伯の民を侵し小にして短からしめしも、伏羲神農の時に至りて、其の國人猶は數十丈ありき。

(一) 巨細は大小也、脩短は長短也 (二) 渤海は今の渤海灣 (三) 大壑は谷の名 (四) 八紘は八方、九野は天の八方と中央とをいふ (五) 間隙は間隔也 (六) 相並んで居る也 (七) 員嶠は員嶠也 (八) 仙人の住也 (九) 帝は天帝也 (十) 禺彊は人名、身は鳥の如く北海の神 (十一) 三番に分れ交番に五山を載かしむ (十二) 龍伯の國は即ち大人國也 (十三) 數は占也 (十四) 阨は偏狹也

巨細一乎。有二修短一乎。有二同異一乎。革曰。渤海之東。不レ知二幾億萬里一。有二大壑一焉。實惟無底之谷。其下無レ底。名曰二歸墟一。八紘九野之水。天漢之流。莫レ不レ注レ之。而無レ增無レ減焉。其中有二五山一焉。一曰二岱輿一。二曰二員嶠一。三曰二方壺一。四曰二瀛洲一。五曰二蓬萊一。其山高下周旋三萬里。其頂平處

里なるを知らず、大壑(三)あり。實に惟れ無底の谷なり。其の下底なし、名づけて歸墟と曰ふ。(四)八紘九野の水、天漢の流、之に注がざることなくして、增すことなく減ずることなし。其の中五山あり、一を岱輿と曰ひ、二を員嶠と曰ひ、三を方壺と曰ひ、四を瀛洲と曰ひ、五を蓬萊と曰ふ。其の山の高下周旋(五)三萬里、其の頂の平なる處九千里、山の中間相去ること七萬里、以て鄰居(六)たり。其の上に臺觀あり、皆金玉なり。其の上に禽獸あり、皆純縞(七)なり。珠玕の樹皆叢生し、華實皆滋味あり。之を食ふもの皆不老不死にして、居る所の人皆仙聖の種(八)なり。一日一夕飛んで相往來する者數ふべからず。而して五山の根連著する所なく、常に潮波に隨つて上下往還して、暫くも峙つことを得ず。仙聖之を毒んで、之を帝に訴(九)ふ。帝西極に流れて羣聖の居を失はんことを恐れ、乃ち禺彊(一〇)に命じ、巨鼇十五をして首を擧げて之を載せしめ、迭(一一)に三番と爲り、六萬歲に一たび交らしむ。五山始めて峙つて動かず。而して龍伯(一二)の國に大人あり。足を擧ぐること數歩に盈たずして

是也。問二豳之西一。復猶二豳也。朕以レ是知二四海四荒四極之不一レ異是也。故大小相含無二窮極一也。含二萬物一者。亦如レ含二天地一。含二萬物一也故不レ窮。含二天地一也故無レ極。朕亦焉知二天地之表。不下有二大天地一者上乎。亦吾所レ不レ知也。然則天地亦物也。物有レ不レ足。故昔者女媧氏練二五色石一以補二其闕一。斷二鼇之足一以立二四極一。其後共工氏與二顓頊一爭レ爲レ帝。怒而觸二不周之山一。折二天柱一。絶二地維一。故天傾二西北一。日月星辰就焉。地不レ滿二東南一。故百川水潦歸焉。

なし。朕亦焉んぞ天地の表に天地より大なる者あらざるを知らんや。亦吾が知らざる所なり。然らば則ち天地も亦物なり。物は足らざることあり。故に昔者女媧氏五色の石を練りて以て其の闕を補ひ、〔七〕鼇の足を斷ちて以て四極を立つ。其の後共工氏、顓頊と帝たることを爭ひ、怒りて〔八〕不周の山に觸れ、天柱を折り〔九〕地維を絶つ。故に天は西北に傾き、日月星辰就く。地は東南に滿たず、故に百川水潦歸す。

㊀ 四海の外にも中國の如き國あり。齊州は中國をいふ ㊁ 之を實にすとは之を證する意 ㊂ 今の陝西、古の雍州 ㊃ 豳州 ㊄ 四海の外を四荒といひ、四荒の外を四極といふ ㊅ 萬物を含む者は天地、天地を含む者は太虛なるが如き是なり ㊆ 大龜也 ㊇ 不周は山の名 ㊈ 地維は大地を維持する綱

湯又問。物有二巨細一乎。

湯又問ふ、物巨細あるか、修短あるか、同異あるかと。革曰く、〔一〇〕渤海の東幾億萬

則上下八方。有ニ極盡一乎。革曰。不レ知也。湯固問。革曰。無則無レ極。有則有レ盡。朕何以知レ之。然無極之外復無ニ無極一。無盡之中復無ニ無盡一。無極復無ニ無極一。無盡復無ニ無盡一。朕以レ是知ニ其無レ極無レ盡也。而不レ知ニ其有レ極有レ盡也。

いふもの或は物の終とあり、今の終といふもの或は物の始となり、終始循環して分つべからず（七）紀は極也（八）物の外に物なく、事の先に事なし、物の外事の先は我が知らざる所なり、然れども有無は相離れず、道は無きものの如くなれども、寒暑往來の迹を見れば亦無きものに非ず（九）物の外事の先は無なり、然れども無を知らんとして之を尋ねて無といふ物あらんには是れ眞無に非ず、故に知らずと答ふる也（一〇）既に無極といへば外あることを得ず、既に無盡といへば中あることを得ず、無無極、無無盡、乃ち眞の極盡なり（一一）無極の外にまた無極なく、無盡の中にまた無盡なき也。

湯又問曰。四海之外奚有。革曰。猶ニ齊州一也。湯曰。汝奚以實レ之。革曰。朕東行至レ營。人民猶レ是也。問ニ營之東一。復猶レ營也。西行至レ豳。人民猶レ

湯又問うて曰く、四海の外奚か有ると。革曰く、（一）猶ほ齊州のごときなりと。湯曰く、汝奚を以てか之を（二）實にする。革曰く、朕東行して（三）營に至るに、人民猶ほ是のごとし。營の東を問ふも、復た猶ほ營のごとし。西行して（四）豳に至るに、人民猶ほ是のごとし。豳の西を問ふも、復た猶ほ豳のごとし。朕是を以て（五）四海四荒四極の是に異ならざるを知るなり。故に（六）大小相含みて窮極することなきなり。萬物を含む者は、亦天地を含むが如し。萬物を含む、固に窮まらず、天地を含む、故に極

殷湯問二於夏革一曰。古初有レ物乎。夏革曰。古初無レ物。今惡得レ物。後之人將レ謂二今之無一レ物。可乎。殷湯曰。然則物無二先後一乎。夏革曰。物之終始。初無二極已一。始或爲レ終。終或爲レ始。惡知二其紀一。然自レ物之外。自レ事之先。朕所レ不レ知也。殷湯曰。然

湯問第五

殷湯夏革に問うて曰く、古初に物ありしかと。夏革曰く、古初に物なくば、今惡んぞ物あるを得ん。後の人將今を物なしと謂はば可ならんか。殷湯曰く、然らば則ち物先後なきか。夏革曰く、物の終始初より極已なし。始或は終と爲り、終或は始と爲る、惡んぞ其の紀を知らん。然れども物より外、事より先、朕が知らざる所なりと。殷湯曰く、然らば則ち上下八方極り盡くることあるかと。革曰く知らざるなりと。湯固く問ふ。革曰く、無は則ち極なし、有は則ち盡くることあり。朕何を以て之を知らん。然れども無極の外復た無極なく、無盡の中復た無盡なし。無極復た無極なく、無盡復た無盡なし。朕是を以て其の極なく盡くることなきを知るなり、而して其の極あり盡くることあるを知らざるなり。

(一) 篇首の二字を取りて名づく　(二) 古初は太古なり、有は無より生ずといふも、何物かありしならん　(三) 太古に全く物なしとせば、今に至りても物なき筈なり　(四) 物に前後の差別なきか　(五) 綱紀なき也　(六) 今の始めと

而忘レ情。能而不レ爲。眞知眞能也。發ニ無知一何能情。發ニ不能一何能爲。聚塊也。積塵也。雖ニ無爲一而非レ理也。

然として之を自得し、我が性のまゝにして之を成す者始めて道を得べし 〔一四〕 知るといへども、自ら其の知りたることを忘れ能くすといへども能くすることを忘るゝもの、是れ即ち眞に知に眞に能くする者なり、情は實也 〔一五〕 然れども無知無能が眞の知能には非ず、全く無知無能なれば木石に同じく情もなく爲すこともなき也 〔一六〕 たゞ土塊積塵の如く動かずして居るを無爲なりとするは理に非ず

其道若、物者也。物自違道、道不違物。善若道者、亦不用耳、亦不用目、亦不用力、亦不用心。欲若道而用視聴形智以求之、弗當矣。瞻之在前、忽焉在後。用之彌滿六虚、廢之莫知其所。亦非有心者所能得遠、亦非無心者所能得近。唯默而得之而性成之者得之。知

耳を用ひず、亦目を用ひず、亦力を用ひず、亦心を用ひず。道に若はんと欲して視聴形智を用ひて以て之を求めば當らず。(一九)之を瞻るに前に在れば、忽焉として後に在り。(二〇)之を用ふれば六虚に彌滿し、之を廢すれば其の所を知ることなし。(二一)亦有心の者の能く得る所遠きに非ず、(二二)亦無心の者の能く得る所近きに非ず、(二三)唯默して之を得、而して性のまゝに之を成す者之を得。(二四)知りて情を忘れ、能くして爲さざるは、眞知眞能なり。(二五)無知に發せば何ぞ能く情あらん、不能に發せば何ぞ能く爲さん。(二六)聚塊や、積塵や、無爲なりと雖も理に非ざるなり。

(一四) 執着する所なきを也 (一五) 道は物に随つて離はる、也、鳥獣は害を防ぐ手段を知らざる者なる故毛を生ずるが如し (一六) 道の流行するは無心なれば自然にして背らず (一七) 物乗りて自ら形をあらはす者より求むるに非ず (一八) 響の聲に應ずる如く自然にして然るのみ (一九) 物に執するのみ、道を上ことゝなし (二〇) 物は往々にして道に違ひ、違ひたる上にも違らんことを求むれどもなほ違くも物に違はず、害相まれば害となり調和すれば和となる (二一) 道に随ひて自然に任ずる者は耳目心力を用ひず、智欲を棄て、無心なり (二二) 道に當らざる也 (二三) 道は随處にあり前にあるかと思へば忽ち後にある也 (二四) 六虚は六合に同じ、之を用ふるときは天地四方に滿ちはびこり、用ひざるときは所在を失ふ也 (二五) 有心なれば之を得ること遠く無心なれば之を得ること近きにも非ず (二六) たゞ默

不願戴己歟。顧問左右。左右不知。問外朝。外朝不知。問在野。在野不知。堯乃微服。游於康衢。聞兒童謠曰。立我蒸民。莫匪爾極。不識不知。順帝之則。堯喜問曰。誰教爾爲此言。童兒曰。我聞之大夫。問大夫。大夫曰。古詩也。堯還宮召舜。因禪以天下。舜不辭而受之。

して康衢に游ぶ。兒童の謠ふを聞くに、曰く、我が蒸民を立つ、(四)爾の極に匪ざることなし。(五)識らず知らず帝の則に順ふと。(六)堯喜びて問うて曰く、誰か爾に敎へて此の言を爲さしむると。童兒曰く、我之を大夫に聞けりと。大夫に問ふ。大夫曰く、古詩なりと。堯宮に還りて舜を召し、(七)因りて禪るに天下を以てす。舜辭せずして之を受く。

(一) 外朝は朝廷に在る百官也 (二) 在野は在鄕の者也 (三) 微服は賤者の服を着くる也、康衢は都の廣小路也 (四) 蒸民は萬民也 (五) 萬物其の所を得て至極の道にかなはぬ者なし (六) 此の如く敎化の行き届くは君が世話をやかるゝ、爲てもなく下民はたゞ知らず識らず天帝の法則に從ふのみなり (七) 堯の禪る舜の受くる皆無心にして四時の推移するが如し

關尹喜曰。在己無居。形物其著。其動若水。其靜若鏡。其應若響。故

關尹喜曰く、己(一)に在りて居ることなかれ、物(二)に形して其れ著る。(三)其の動くこと水の若く、(四)其の靜なること鏡の若く、(五)其の應ずること響の若し。(六)故に其の道物に若ふ者なり。(七)物自ら道に違へども、道は物に違はず。(八)善く道に若ふ者は、亦

有影不移者。說在改也。髮引千鈞。勢至等也。白馬非馬。形名離也。孤犢未嘗有母。非孤犢也。樂正子輿曰。子以公孫龍之鳴皆條也。設令發於餘竅。子亦將承之。公子牟默然良久。告退曰。請待餘日。更謁子論。

れば心の本體を失ふ也 （九） 一物を指して其の筆端を盡むるとはその一物に限り指さざる外の物には至ること能はず （十） 古人の一尺の棰を日々に折半すれば萬年といへども盡きずといへる類なり、物は盡くるとも理は盡くることなし （十一） 影は光に因りて生ず、光動くも移らざれば影は實に生ずるなり、古人の飛鳥の影未だ嘗て動かずと云へる類なり （十二） 一本の髮は千鈞の重き物を引く力あり （十三） 白き馬といへば馬に非ず （十四） 孤子の小牛は始より母なき者なり （十五） 樂正に背き物理に反する也 （十六） 之を失反つて子に在らん （十七） 意と心とは別の名なり意といへば心を離れ心といへば意にあらず、意なければ心無きに同じき也 （十八） 指すことを盡るれば至らざる所なき也 （十九） 物を離すことあれば物盡くることなき也 （二十） 影は改りて實に生ずるの說なり （二十一） 髮の力に等しからざる所なき也 （二十二） 形と名と分離して白は白、馬は馬となる也 （二十三） 母あれば孤犢に非ざる也 （二十四） 公孫龍が鳴、の鳴るが如く理なき事を言ふを皆條理ある事と思へり （二十五） 聲が若し口より出でずして他の穴より出づるも子は亦之を承引するならん

堯治天下五十年。不知天下治歟。不治歟。不知億兆之願戴己歟。

堯天下を治むること五十年、天下治まるか治まらざるかを知らず、億兆の己を戴くことを願ふか、己を戴くことを願はざるかを知らず。顧みて左右に問ふに、左右知らず。（一）外朝に問ふに、外朝知らず。（二）在野に問ふに、在野知らず。堯乃ち（三）微服

樂正子輿曰。子龍之徒。焉得不飾其闕。吾又言其尤者。龍誑魏王曰。有意不心。有指不至。有物不盡。有影不移。髮引千鈞。白馬非馬。孤犢未嘗有母。其負類反倫。不可勝言也。公子牟曰。子不諭至言而以爲尤也。尤其在子矣。夫無意則心同。無指則皆至。盡物者常

樂正子輿曰く、(一)子龍の徒なり、焉んぞ其の闕を飾らざるを得ん。吾又其の尤なる者を言はん。龍魏王を誑いて曰く、(二)意あれば心あらず、(三)指すことあれば至らず、(四)物ありて盡きず、(五)影ありて移らず、(六)髮千鈞を引く、(七)白馬は馬に非ず、(八)孤犢は未だ嘗て母あらずと。(九)其の類に負き倫に反する、勝げて言ふべからざるなりと。公子牟曰く、子至言を諭らずして、以て尤なりと爲すも、(一〇)尤なること其れ子に在らん。(一一)夫れ意なければ則ち心同じ、(一二)指すことなければ則ち皆至る。(一三)物を盡す者は常に有り、影移らざるは(一四)說改むるに在り、髮千鈞を引くは(一五)勢至りて等しければなり。白馬は馬に非ずとは(一六)形名離るればなり、孤犢未だ嘗て母あらずとは、(一七)孤犢に非ざればなりと。樂正子輿曰く、子は(一八)公孫龍の鳴る皆條ありと以へり。設令餘竅(一九)に發すとも、子も亦將に之を承けんとするかと。公子牟默然たること良〻久しうして、退くことを告げて曰く、請ふ餘日を待ち、更に子に謁して論ぜんと。

(一) 公子牟は子龍の同類なるゆゑ其の過を飾るなるべし　(二) 心は寂然として想なきものなり、既に意慮を生ず

發發相及。矢矢相屬。前矢造レ準而無レ絶落。後矢之括。猶銜レ弦。視レ之若二一焉一。孔穿駭レ之。龍曰。此未二其妙一者。逢蒙之弟子曰二鴻超一。怒二其妻一而怖レ之。引二烏號之弓。綦衛之箭一。射二其目一。矢來注二眸子一而眶不レ睫。矢隧レ地而塵不レ揚。是豈智者之言與。公子牟曰。智者之言。固非二愚者之所一レ曉。後鏃中二前括一。鈞二後於前一。矢注二眸子一而眶不レ睫。盡二矢之勢一也。子何疑焉。

孔穿之に駭く。龍曰く、此未だ其の妙ならざる者なり。逢蒙の弟子を鴻超と曰ふ。其の妻を怒つて之を怖さんとし、烏號の弓、(一)綦衛の箭を引いて其の目を射る。(二)矢來つて眸子に注げども眶睫がず、(三)矢地に隧ちて塵揚らずと。是豈智者の言ならんや。公子牟曰く、智者の言は、固より愚者の曉る所に非ず。後の鏃前の括に中るは、(四)後を前に鈞しくすればなり。(五)矢眸子に注いて眶睫がざるは、矢の勢を盡すなり。子何ぞ疑ふやと。

(一) 烏號は黄帝の弓、綦は地の名、衛は矢の羽也　(二) 矢は眼のひとみに當りたるやうに見ゆれど實は眼と毛一筋をへだてゝ中らず、故に射られたる者之を知らずしてまばたきも一たゝきせず　(三) 矢が眼の睫に達するときは矢の勢の盡くるやうに射たるゆゑ矢が地に落ちても塵揚らざる也　(四) 後の矢を前の矢と同じ矢どころにて射する故なり　(五) 矢が丁度目の睫まで行きて中らず、矢の勢盡きて盡つるやうに手心して射る故なり

賢人游。不恤國事。而悅趙人公孫龍。樂正子輿之徒笑之。公子牟曰。子何笑牟之悅公孫龍也。子輿曰。公孫龍之爲人也。行無師。學無友。佞給而不中。漫衍而無家。好怪而妄言。欲惑人之心。屈人之口。與韓檀等肄之。

ことを笑ふや。子輿曰く、公孫龍の人と爲りは、(一)行に師なく、學に友なく、(二)佞給にして中らず。(三)漫衍にして家なく、怪を好みて妄言し、人の心を惑はし人の口を屈せんと欲し、(四)韓檀等と之を肄ふと。

(一) 師なく友なきは聖賢の道を學ばざるをいふ (二) 辯舌すぐれたれども理に當らず (三) 其の言ふ所散慢にして一家の學を主とせず (四) 韓檀の徒と共に講習して世人を惑はすと也

公子牟變容曰。何子狀公孫龍之過歟。請聞其實。子輿曰。吾笑龍之詒孔穿。言。善射者。能令後鏃中前括。

公子牟容を變じて曰く、何ぞ子が公孫龍を狀するの過ぐるや。請ふ其の實を聞かんと。子輿曰く、吾龍の孔穿を詒くを笑ふ。言ふ、善く射る者は、(一)能く後の鏃をして前の括に中らしめ、發發相及び、矢矢相屬す。前矢準に造りて絶落なし。後矢の括猶ほ弦を銜むがごとく、之を視ること一の若しと。

(一) 後の矢の鏃が前の矢の括に中り、後の矢後の矢と相續き、前の矢的に中りて後の矢の括は猶ほ弦をふくみ、一筋の如く長く見ゆる也

之。乃告臣曰。人欲見其所不見。視人所不窺。欲得其所不得。修人所不爲。故學眎者先見輿薪。學聽者先聞撞鐘。夫有易於内者。無難於外。於外無難。故名不出其一家。今臣之名聞於諸侯。是臣違師之教。顯臣之能者也。然則臣之名。不以負其力者也。以能用其力者也。不猶愈於負其力者乎。

なし。（七）外に於て難きことなし、故に名其の一家を出でず。今臣の名諸侯に聞ゆるは、是臣が師の教に違うて、臣の能を顯はす者なり。然らば則ち臣の名は、（八）以て其の力を負まざる者なり。能く其の力を用ふるを以てする者なり。（九）猶ほ其の力を負む者に愈らずやと。

（一）輿薪は大小に同じ　（二）六觀は父侶見聞室子也　（三）人其の見えざる所を見んとせば、己は人の窺はざる所即ち用ふる所を修めよ　（四）人其の得られざる所を得んと欲せば己は人の修めざる所即ち用ふる所を修めよ　（五）輿薪は車に積みたる薪なり　（六）我内に求めて易き故外にかても難きことなし　（七）外に難きことなければ見聞する所も之を用ひざる故人之を知ることなし　（八）其の力を恃み力に特りて聞えたるに非ず、能く其の力を用ひたるが故なり　（九）然れども臣は其の力を恃み其の能に特る者には勝れりと、是れ王の輿を好むことを諫めたるの也

中山公子牟者。魏國之賢公子也。好與

中山の公子牟は魏國の賢公子なり。好みて賢人と游び、國事を恤へず。而して趙人公孫龍を悦ぶ。樂正子輿の徒之を笑ふ。公子牟曰く、子何ぞ牟の公孫龍を悦ぶ

宣王。王備禮以聘之。公儀伯至。觀形懦夫也。宣王心惑而疑曰。女之力何如。公儀曰。臣之力能折春螽之股。堪秋蟬之翼。王作色曰。吾之力者。能裂犀兕之革。曳九牛之尾。猶憾其弱。女折春螽之股。堪秋蟬之翼。而力聞天下。何也。

如と。公儀伯曰く、臣の力能く春螽(二)の股を折り、秋蟬の翼に堪ふと。王色を作(三)して曰く、吾が力は能く犀兕(四)の革を裂き、九牛の尾を曳くも、猶ほ其の弱きを憾む。女春螽の股を折り、秋蟬の翼に堪へ、而して力天下に聞ゆるは何ぞやと。

(一) 懦夫は懦弱の男　(二) 螽はいなご　(三) 怒りて顏色を變ずる也　(四) 兕は野牛

公儀伯長息。退席曰。善哉王之問也。臣敢以實對。臣之師有商丘子者。力無敵於天下。而六親不知。以未嘗用其力故也。臣以死事

公儀伯長息(一)して席を退いて曰く、善いかな王の問ふことや。臣敢て實を以て對へん。臣の師に商丘子といふ者あり。力天下に敵なく、而して六親(二)知らず。未だ嘗て其の力を用ひざるが故を以てなり。臣死を以て之に事ふ。乃ち臣に告げて曰く、人其(三)の見ざる所を見んと欲せば、人の窺はざる所を視よ。其(四)の得ざる所を得んと欲せば、人の爲さざる所を修めよと。故に眎ることを學ぶ者は先づ輿薪(五)を見る、聽くことを學ぶ者は先づ撞鐘を聞く。夫れ内(六)に易きことあれば、外に難きこと

功也。長幼羣聚而爲牢藉庖廚之物。奚異犬豕之類乎。伯豐子不應。伯豐子之從者。越次而進曰。大夫不聞齊魯之多機乎。有善治土木者。有善治金革者。有善治聲樂者。有善治書數者。有善治軍旅者。有善治宗廟者。羣才備也。而無相位者。無能相使者。而位之者無知。使之者無能。而知之與能爲之使焉。執政者。迺吾之所使。子奚矜焉。鄧析無以應。目其徒而退。

るなく、其の徒を目して退く。

㊀ 徒は弟子といふがごとし ㊁ [illegible]する者 ㊂ [illegible]をいふ ㊃ 執政は[illegible]を指す ㊄ 長幼羣聚に群聚して牢藉庖廚の物をつくる是れ犬豕の類なり、牢は獸をいれ置く處、藉は竹木を編にして編むこと、庖は料理する處、廚は食物をなす處 ㊅ 機は巧なり機多きは巧能の人多きをいふ ㊆ 土又は木の細工をする者 ㊇ 金鐵皮革の細工をする者 ㊈ 聲樂は音樂 ㊉ 書數は[illegible]に關しる人 (一一) 兵事に關する人 (一二) 宗廟の禮を司る人 (一三) 各人各一事に長ずるも[illegible]にて、互に他人に位を授くる者なく又他人を使ふ者なし (一四) 上に立ちて位を授け仕事を命ずる者は知なく能なき者にして、知ある者能ある者反つて之に使はる・也 (一五) 執政は知能を用ふるものなれば、却つて我等知能ある者の使ふ所なり (一六) 其の弟子共を目くばせして退く

公儀伯以力聞諸侯。堂谿公言之於周

公儀伯は力を以て諸侯に聞ゆ。堂谿公之を周の宣王に言ふ。王禮を備へて以て之を聘す。公儀伯至る。形を觀れば懦夫なり。宣王心惑うて疑うて曰く、女の力何

鄭之圃澤多レ賢。東里多レ才。有ニ伯豐子者一。行過ニ東里一。遇ニ鄧析一。鄧析顧ニ其徒一而笑曰。爲レ若舞ニ彼來者一奚若。其徒曰。所レ願知也。鄧析謂ニ伯豐子一曰。汝知ニ養養之義一乎。受ニ人養一而不レ能ニ自養一者。犬豕之類也。養レ物而物爲ニ我用一者。人之力也。使ニ汝之徒。食而飽。衣而息一。執政之

鄭の圃澤に賢多く、東里に才多し。圃澤の役に伯豐子といふ者あり、行きて東里を過ぎて鄧析に遇ふ。其の徒を顧みて笑うて曰く、若が爲に彼の來る者を舞はしめんは奚若と。其の徒曰く、知らんことを願ふ所なりと。鄧析伯豐子に謂つて曰く、汝養養の義を知るや。人の養を受けて自ら養ふこと能はざる者は、犬豕の類なり。物を養うて物我が用を爲す者は人の力なり。汝の徒をして食うて飽き、衣て息はしむるは、執政の功なり。長幼羣聚して牢藉庖廚の物を爲る、奚ぞ犬豕の類に異ならんやと。伯豐子應へず。伯豐子の從者次を越えて進んで曰く、大夫は齊魯の機多きを聞かざるか。善く土木を治むる者あり、善く金革を治むる者あり、善く聲樂を治むる者あり、善く書數を治むる者あり、善く軍旅を治むる者あり、善く宗廟を治むる者あり、羣才備はる。而して相位する者なく、能く相使ふ者なし。而して之を位する者は知なく、之を使ふ者は能なく、而して知と能と之が爲に使はる。執政は迺ち吾の使ふ所なり。子奚ぞ矜ると。鄧析以て應ふ

道而得死者。亦謂之常。

季梁之死。楊朱望其門而歌。隨梧之死。楊朱撫其尸而哭。隸人之生。隸人之死。衆人且歌。衆人且哭。目將眇。先睹秋毫。耳將聾者。先聞納飛。口將爽者。先辨淄澠。鼻將窒者。先覺焦朽。體將僵者。先亟奔佚。心將迷者。先識是非。故物不至者則不反。

い存亡の理を得る者之を常と謂ふ也　(三) 君父の難に道を用ひて死する者も亦自然の理也　(四) 道を用ひて世を全て隨道して死を得る者も亦理の常也

季梁の死せしとき、楊朱其の門を望みて歌ふ。隨梧の死せしとき、楊朱其の尸を撫でて哭す。隸人の生、隸人の死、衆人且つ歌ひ、衆人且つ哭す。目將に眇せんとする者は先づ秋毫を睹る。耳將に聾せんとする者は先づ蚋飛を聞く。口將に爽はんとする者は先づ淄澠を辨ず。鼻將に窒がらんとする者は先づ焦朽を覺る。體將に僵れんとする者は先づ奔佚に亟なり。心將に迷はんとする者は先づ是非を識る。故に物至らざる者は則ち反せず。

(五) 隸人も亦衆人也　(六) 隸人は生死の理を知らず、衆人の死に或は歌ひ或は哭す、是れ自然の中を失ふ者なり　(七) 目の盲せんとする者は其の前に秋の獸細の毛の末までも見ゆる　(八) 耳の聾せんとする者は其の前に蚋の飛ぶ音をも聞く　(九) 淄水と澠水との水の味を辨別する也　(十) 焦げ臭きと朽ち臭きとの區別を覺る　(十一) 欲に奔るに急なり　(十二) 物其の極に達すれば反る、生死の理も亦此の如し

友御妻子。制僕隷。此奚疾哉。奚方能已之乎。文摯乃命龍叔背明而立。文摯自後向明而望之。既而曰。嘻吾見子之心矣。方寸之地虚矣。幾聖人也。子心六孔流通。一孔不達。今以聖智爲疾者。或由此乎。非吾淺術所能已也。

無所由而常生者道也。由生而生。故雖終而不凶。常也。由生而亡。不幸也。有所由而常死者。亦道也。由死而死。故雖未終而自亡者。亦常也。由死而生。幸也。故無用而生。謂之道。用道得終。謂之常。有所用而死者。亦謂之道。用

(一)由る所なくして常に生ずる者は道なり。(二)生に由りて生ず、故に終ると雖も凶びざるは常なり。(三)生に由りて亡するは不幸なり。(四)由る所ありて常に死する者も亦道なり。(五)死に由りて死す、故に未だ終らずと雖も自ら亡する者も亦常なり。(六)死に由りて生ずるは幸なり。(七)故に用ふることなくして生ずる之を道と謂ふ。(八)道を用ひて終を得る之を常と謂ふ。(九)用ふる所ありて死する者、亦之を道と謂ふ。(一〇)道を用ひて死を得る者、亦之を常と謂ふ。

(一) 能く死生を忘れて遇ふ所に任せ、通も亦通、窮も亦通、故に常生にして死地なし是れ聖人の道也 (二) 攝生の理に通じて生ける者は死に至ると雖も生たる所以の道常に存す是れ賢人の分也 (三) 智を役して全きを求め、身を貴び物を賤しみ、害を去り利に就き、内を務め外を役して、却つて早く亡するは不幸なり、是れ愚人の事なり (四) 必死の理を行ひ必死の地に往くものなり、是れ亦自然の道なり (五) 常人の死に於ける其の身未だ終らずして生理すでに盡く是れ亦理の常也 (六) 理を犯し道に違ひ、應に死すべくして猶は生くる者は幸にして免れたるものにて生を誤る者なり (七) 生死に心なく、何の術も用ふることなくして一生を終るは自然の道なり (八) 聖人の道を用

然先言子所病之證。龍叔曰。吾鄕譽不以爲榮。國毀不以爲辱。得而不喜。失而弗憂。視生如死。視富如貧。視人如豕。視吾如人。處吾之家。如逆旅之舍。觀吾之鄕。如戎蠻之國。凡此衆疾。爵賞不能勸。刑罰不能威。盛衰利害不能易。哀樂不能移。固不可事國君。交親

ばす、失うて憂へず。(五)生を視ること死の如く、(六)富を視ること貧しきが如く、(七)人を視ること豕の如く、(八)吾を視ること人の如く、(九)吾が家に處ること逆旅の舍の如く、吾が(一〇)鄕を觀ること戎蠻の國の如し。凡そ此の衆疾は、爵賞も勸むること能はず、刑罰も威すこと能はず、盛衰利害も易ふること能はず、哀樂も移すこと能はず、固より國君に事へ、親友に交り、妻子を御し、僕隷を制す可からず。此奚の疾ぞや。奚の方か能く之を已さんと。文摯乃ち龍叔に命じて、(一一)明に背きて立たしめ、文摯後より明に向ひて之を望む。既にして曰く、嘻、吾、子の心を見たり。(一二)方寸の地虛し、幾んど聖人なり。子が心は(一三)六孔流通して、一孔達せず。今聖知を以て疾と爲す者は、或は此に由るか。吾が淺術の能く已す所に非ざるなり。

(一) 病の證に入るをいふ　(二) 證は病證也　(三) 毀譽を忘るゝ也　(四) 得失を忘るゝ也　(五) 生死を忘るゝ也　(六) 貧富を忘るゝ也　(七) 人獸の別を忘るゝ也　(八) 彼我を忘るゝ也　(九) 家と逆旅とを忘るゝ也　(一〇) 故鄕と蠻夷の國とを忘るゝ也　(一一) 明るき方を後にして立つ也　(一二) 胸中方寸の空虛しき也　(一三) 舊説に聖人の胸に七孔ありといへり、今六孔流通して、他の一孔未だ通ぜず

之無故。不知我亦無故。務外游。不知務內觀。外游者求備於物。內觀者取足於身。取足於身。游之至也。求備於物。游之不至也。於是列子終身不出。自以爲不知游。壺丘子曰。游其至乎。至游者不知所適。至觀者不知所眡。物物皆游矣。物物皆觀矣。是我之所謂游。是我之所謂觀也。故曰。游其至矣乎。游其至矣乎。

謂はゆる游、是我が謂はゆる觀なり。故に曰く、游其れ至れるかな、游其れ至れるかなと。

(一) 游は游觀、天地の間に遊觀して物理を觀察する也 (二) 造化の變轉して一物も新ならざるものなきを玩ぶ也 (三) 衆人は未だ我が遊の意味を辨知する者あらず (四) 凡そ世人の見る所も亦恒に其の變化する所を見るものにて列子の遊と大差なし (五) 我が身も亦常に變轉して故なきことを知らず (六) 外物の變化を玩んで我が身の變化を知らず (七) 外物の變化を玩ばんとするには備はることを外物に求めざるべからず我が身の變化を觀る者は身に求めて足る也 (八) 是より壺丘子の遊を說く (九) 至游は身に求めて足る、故に往くことも觀ることも要せざる也 (一〇) 物物皆變化あり、故に眼前の物を觀て其の變化を玩ぶは卽ち皆游觀なり (一一) 游觀を忘れたる處卽ち眞の游觀なり

龍叔謂文摯曰。子之術微矣。吾有疾。子能已乎。文摯曰。唯命所聽。

龍叔、文摯に謂つて曰く、子の術微なり(一)。吾疾あり、子能く已さんかと。文摯曰く、唯〻命のまゝに聽く所なり。然れども先づ子が病む所の證を言へ(二)と。龍叔曰く、吾、(三)鄕譽むれども以て榮と爲さず、國毀れども以て辱と爲さず、(四)得て喜

所ㇾ念。橫ニ口之所ㇾ言。亦不ㇾ知ニ我之是非利害歟。亦不ㇾ知ニ彼之是非利害歟。外內進矣。而後眼如ㇾ耳。耳如ㇾ鼻。鼻如ㇾ口。口無ㇾ不ㇾ同。心凝形釋。骨肉都融。不ㇾ覺ニ形之所ㇾ倚。足之所ㇾ履。心之所ㇾ念。言之所ㇾ藏。如ㇾ斯而已。則理無ㇾ所ㇾ隱矣。

初子列子好ㇾ游。壺丘子曰。禦寇好ㇾ游。游何所ㇾ好。列子曰。游之樂。所ㇾ玩ㇾ無ㇾ故。人之游也。觀ニ其所ㇾ見。我之游也。觀ニ之所ㇾ變。游乎游乎。未ㇾ有ㇾ能辨ニ其游ー者上。壺丘子曰。禦寇之游。固與ㇾ人同。而曰ニ固與ㇾ人異ー歟。凡所ㇾ見。亦恒見ニ其變ー。玩ニ彼物

初め子列子游を好む。壺丘子曰く、禦寇游を好む。游何の好む所ぞと。列子曰く、游の樂しきことは、故なきを玩ぶ所なり。人の游ぶや其の見る所を觀る。我の游ぶや之の變ずる所を觀る。游か游か、未だ能く其の游を辨ずる者あらずと。壺丘子曰く、禦寇の游固より人と同じきか、而して固より人と異なりと曰ふか。凡そ見る所も亦恒に其の變を見る。彼の物の故なきを玩んで、我も亦故なきことを知らず。外游を務めて、內觀を務むることを知らず。外游する者は備ることを物に求む。內觀する者は足ることを身に取る。足ることを身に取るは游の至なり、備はることを物に求むるは游の至らざるなりと。是に於て列子終身出でず。自ら以爲へらく、游を知らずと。壺丘子曰く、游其れ至れるか。至游は適く所を知らず、至觀は眂る所を知らず。物物皆游なり、物物皆觀なり。是我が

言。亦無レ所レ知。如レ斯而已。汝奚妄駭哉。

子列子學也。三年之後。心不三敢念二是非一。口不三敢言二利害一。始得二老商一眄一而已。五年之後。心更念二是非一。口更言二利害一。老商始一解レ顏而笑。七年之後。從二心之所一レ念更無二是非一。從二口之所一レ言。更無二利害一。夫子始一引レ吾並レ席而坐。九年之後。横二心之

子列子の學ぶや、三年の後、心敢て是非を念はず、口敢て利害を言はず、始めて(一)老商の一眄を得るのみ。五年の後、心更に是非を念ひ、口更に利害を言ふ。老商始めて一たび顏を解いて笑ふ。七年の後、心の念ふ所を從にすれども、更に是非なく、口の言ふ所を從にすれども、更に利害なし。夫子始めて一たび吾を引き、(二)席を竝べて坐す。九年の後、心の念ふ所を横にし、口の言ふ所を横にし、亦我の是非利害かを知らず、亦彼の是非利害かを知らず、(三)外内進きぬ。而して後眼は耳の如く、耳は鼻の如く、鼻は口の如く、口は同じからざることなく、心凝り形釋け、骨肉都て融け、形の倚る所、足の履む所、心の念ふ所、言の藏むる所を覺えず。斯の如きのみ。則ち理隱るゝ所なし。

(一) 老商は列子の師、前篇に出てたり (二) 一眄一笑と、席を並べて坐すると、褒貶昇降の情あるが如くなれども聖人の心は事に應じて感じ、外物の少多を以て度と爲すのみ、一定の方あるに非ず (三) 心は理と化して親疎彼我の別全く盡き果つる也

設子列子。形神不相偶。而不可與羣。南郭子貌而指子列子之弟子末行者與言。衎衎然若專直而在雄者。子列子之徒駭之。反舍咸有疑色。

き、舍に反りて咸疑ふ色あり。

(二) 羣は衆也 (三) 貌は若しとは神凝り形猶愛して土木の如くなるをいふ (四) 形神相偶る、也 (五) 末行は末席也 (六) 衎々然は服せずして強盛なる有様 (七) 專直は我が思ふ所を一すぢに貫ぬくをいふ、雄に在りとは自ら雄とするをいふ (八) 南郭子の師人なるか衆人なるかを駭ふ也

子列子曰。得意者無言。進知者亦無言。用無言爲言亦言。無知爲知。亦知。無言與不言。無知與不知。亦言亦知。亦無所不言。亦無所不知。亦無所

子列子曰く、(一)意を得る者は言なし、(二)知を進す者も亦言なし。(三)無言を用て言と爲すも亦言となり、無知を知と爲すも亦知となる。(四)無言と不言と、無知と不知と、亦言ひ亦知るなり。(五)亦言はざる所なく、亦知らざる所なく、亦言ふ所なく、亦知る所なし。斯の如きのみ。汝奚ぞ妄に駭くやと。

(一) 意を得るは言を忘れて眞誠の意を得る也、言なきは言を忘るゝ也 (二) 道理を知ることと深遠に進する者也 (三) 言を忘れんとして心を用ひて言はざるは亦言ふなり、無知ならんとして心を用ひて知を棄つるは亦知なり (四) 無言と不言と、無知と不知とを主として自然を全くせんとする者も亦未だ言知の域を脱すること能はず (五) 聖人の心は斯然として洞虚、物に應じて言へども我が言ふに非ず、物に即いて知れども我が知るに非ず、故に終日言はずして言默の[illegible]なく終日知を用ひて[illegible]なし、故は言はざる所なく知らざる所なきを得る也

無レ不レ聞。而與二南郭子一連レ牆二十年。不二相謁請一。相二遇於道一。目若下不二相見一者上。門之徒役以爲。子列子與二南郭子一有レ敵不レ疑。有下自レ楚來者上。問二子列子一曰。先生與二南郭子一奚敵。子列子曰。南郭子貌充心虛。耳無レ聞。目無レ見。口無レ言。心無レ知。形無レ惕。往將奚爲。

南郭子と奚の敵かあると。子列子曰く、南郭子(八)貌充ち心虛にして、(九)耳聞くことなく、目見ることなく、口言ふことなく、心知ることなく、形惕るゝことなし。往いて將奚をか爲さん。

㊀ 列子に從ひて學ぶ者甚だ多き也 ㊁ 列子應酬の力衰ふる也 ㊂ 每朝諸弟子と辯論すること遠近に聞ゆる也 ㊃ 南郭子と相隣して居ること二十年 ㊄ 互に名刺を通じて相往復せず ㊅ 門人家來等 ㊆ 心中に敵とする所ありて相往來せざること疑なし ㊇ 心虛にして德全きが故に、其の貌充ち全き也 ㊈ 以下皆心虛にして貌充つるの象なり

雖レ然試與レ汝偕往。閱二弟子四十人一同行。見二南郭子一。果若二欺魄一焉。而不レ可二與接一。顧

然りと雖も試みに汝と偕に往かんと。弟子四十人を閱んで(一)同行し、南郭子を見る果して(二)欺魄の若くにして、與に接るべからず。顧みて子列子を視れば、(三)形神相偶せずして、與に羣すべからず。南郭子俄にして子列子の弟子の(四)末行の者を指して與に言ふ。(五)衎衎然として(六)專直にして雄に在る者の若し。子列子の徒之に駭

之勇賢於丘也。曰子張之爲人奚若。子曰師之莊賢於丘也。子夏避席而問曰。然則四子者何爲事夫子。曰。居吾語汝。夫回能仁而不能反。賜能辯而不能訥。由能勇而不能怯。師能莊而不能同。兼四子之有以易吾。吾弗許也。此其所以事吾而不貳也。

して怯なること能はず、師は能く莊にして、(六)同なること能はず。(七)四子の有を兼ねて以て吾に易ふとも、吾は許さざるなり。此其の吾に事へて(八)貳あらざる所以なりと。

㊀ 賜は端木賜也 ㊁ 訥は遲鈍寡言也 ㊂ 能く仁なるも之を千變萬化する權道を知らず ㊃ 剛勇すぐれたるのみにて、時として讓ること能はず ㊄ 時として謙讓なること能はず ㊅ 同は卽ち和光同塵の義にて、光を和して俗人と同じにして居ること ㊆ 四子の有する所を併せて我が道を變易せんとするも吾は之を許さず ㊇ 貳は變也

子列子既師壺丘子林友伯昏瞀人乃居南郭。從之處者日數而不及。雖然。子列子亦微焉。朝朝相與辯

子列子既に壺丘子林を師とし、伯昏瞀人を友として、乃ち南郭に居る。(一)之に從つて處る者日に數へて及ばず。然りと雖も、(二)子列子も亦微なり。(三)朝朝相與に辨ずること、聞かざることなし。而して南郭子と(四)牆を連ぬること二十年なるも、(五)相謁せず。道に相遇ふときは、目相見ざる者の若し。(六)門の徒役以爲へらく、子列子南郭子と敵あること疑はずと。(七)楚より來れる者あり、子列子に問うて曰く、先生

任因時者。聖則丘弗知。商太宰大駭曰。然則孰者爲聖。孔子動容。有間曰。西方之人有聖者焉。不治而不亂。不言而自信。不化而自行。蕩蕩乎民無能名焉。丘疑其爲聖。弗知眞爲聖歟。眞不聖歟。商太宰嘿然心計曰。孔丘欺我哉。

(一)三王は夏殷周三代の王也 (二)智勇の人に任ずる也 (三)五帝は少昊、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜をいふ (四)三皇は伏羲、神農、黄帝をいふ (五)善く其の質朴なる時務に任せて天下を治めたる者 (六)世の所謂聖者を孔子は皆聖に非ずといふ、故に大に驚く也 (七)治めんとするに意なくして之を治むる故亂れざる也 (八)民自然に君を信ずる也 (九)教化を施さずして教化自然に行はる (一〇)蕩蕩は廣遠の貌 (一一)嘿然は默然に同じ (一二)心計は心に計り思ふ

子夏問孔子曰。顏回之爲人奚若。子曰。回之仁賢於丘也。曰。子貢之爲人奚若。子曰。賜之辨賢於丘也。曰。子路之爲人奚若。子曰。由

子夏孔子に問うて曰く、顏回の人と爲りは奚若と。子曰く、回の仁は丘に賢れりと。曰く、子貢の人と爲りは奚若と。子曰く、(一)賜の辨は丘に賢れりと。曰く、子路の人と爲りは奚若と。子曰く、由の勇は丘に賢れりと。曰く、子張の人と爲りは奚若と。子曰く、師の(二)莊は丘に賢れりと。子夏席を避けて問うて曰く、然らば則ち四子の者何爲れぞ夫子に事ふると。曰く、居れ吾汝に語らん。夫れ回は(三)能く仁にして反すること能はず、賜は(四)能く辨じて訥なること能はず、由は能く勇に

內上來干ノ我者。我必知ノ之。乃不ノ知三是我七孔四支之所ノ覺。心腹六藏之所ニ知。其自知而已矣。晉侯大悅。他日以告ニ仲尼一。仲尼笑而不ノ答。

商太宰見ニ孔子一曰。丘聖者歟。孔子曰。聖則丘何敢。然則丘博學多識者也。商太宰曰。三王聖者歟。孔子曰。三王善任ニ智勇一者。聖則丘不ノ知。曰。五帝聖者歟。孔子曰。五帝善任ニ仁義一者。聖則丘弗ノ知。曰。三皇聖者歟。孔子曰。三皇善

商の太宰孔子に見えて曰く、丘は聖者かと。孔子曰く、聖は則ち丘は何ぞ敢てせん。然かも則ち丘は博學多識なる者なりと。商の太宰曰く、三王は聖者かと。孔子曰く、三王は善く智勇に任ずる者なり。聖は則ち丘知らずと。曰く、五帝は聖者かと。孔子曰く、五帝は善く仁義に任ずる者なり。聖は則ち丘知らずと。曰く三皇は聖者かと。孔子曰く、三皇は善く時に因るに任ずる者なり。聖は則ち丘知らずと。商の太宰大に駭いて曰く、然らば則ち孰か聖たると。孔子動容して間ありて曰く、西方の人聖者あり、治めずして亂れず、言はずして自ら信じ化せずして自ら行はる。蕩蕩乎として民能く名づくることなし。丘其の聖たることを疑ふ。知らず眞に聖たるか、眞に聖たらざるかと。商の太宰嘿然として心計して曰く、孔丘我を欺くかなと。

使ニ上卿厚レ禮而致ヒ之。亢倉子應レ聘而至。

魯侯卑レ辭請ニ問之一。亢倉子曰。傳レ之者妄。我能視聽不レ用ニ耳目一。不レ能レ易ニ耳目之用一。魯侯曰。此增異矣。其道奈何。寡人終願レ聞レ之。亢倉子曰。我體合ニ於心一。心合ニ於氣一。氣合ニ於神一。神合ニ於無一。其有ニ介然之有。唯然之音一。雖下遠在ニ八荒之外一。近在中眉睫之

魯侯辭を卑くして之を請ひ問ふ。亢倉子曰く、之を傳ふる者妄なり(一)。我能く視聽に耳目を用ひざるも、耳目の用を易ふること能はずと(二)。魯侯曰く、此增〻異なり。其の道奈何。寡人終に願はくば之を聞かんと。亢倉子曰く、(三)我が體は心に合し、(四)心は氣に合し、(五)氣は神に合し、(六)神は無に合す。其の(七)介然の有、唯然の音あるときは、遠く(八)八荒の外に在り、近く(九)眉睫の内に在りと雖も、來りて我を干す者は、我必ず之を知る。乃ち是我が七孔四支の覺る所(一〇)、心腹六藏の知る所を知らず(一一)、其れ(一二)自ら知るのみと。魯侯大に悅び、他日以て仲尼に告ぐ。仲尼笑うて答へず。

(一) 虛妄也 (二) 心にて視聽し、耳目を用ひざるも、目にて聽くこと能はず (三) 形體は心と離れず、心ありて始めて用を爲す也 (四) 心は天地の氣と合體し、自然のまゝにして毫も私智をまじへず (五) 天地の氣は即ち造化の妙用と合體す (六) 造化の妙用は即ち無と合體す (七) 一芥の微物、微細の音 (八) 八荒は八方の蠻夷なり (九) まゆ、まつげの內、即ち眼前をいふ (一〇) 七孔は耳目鼻等の七竅也、四支は手足也 (一一) 五臟六腑をいふ (一二) 七孔四支名司る所あり心腹六藏各用を爲すに、我は其の如何の用を爲すかを知らず其の者自ら之を知るのみ

不食以至骨立。顏回重往喩之。乃反丘門。弦歌誦書。終身不輟。

（一）[illegible]　（二）[illegible]　（三）[illegible]　（四）[illegible]
[illegible]ざる也

陳大夫聘魯。私見叔孫氏。叔孫氏曰。吾國有聖人。曰。非孔丘邪。曰。是也。何以知其聖乎。叔孫氏曰。吾常聞之顏回。曰。孔丘能廢心而用形。陳大夫曰。吾國亦有聖人。子弗知乎。曰。聖人孰謂。曰。老聃之弟子有亢倉子者。得聃之道。能以耳視而目聽。魯侯聞之大驚。

陳の大夫魯に聘し、（一）私に叔孫氏を見る。叔孫氏曰く、吾が國に聖人ありと。曰く、孔丘に非ずやと。曰く、是なり。何を以て其の聖なるを知るかと。叔孫氏曰く、吾常て之を顏回に聞けり、曰く、孔丘能く心を廢して（二）形を用ふと。陳の大夫曰く、吾が國にも亦聖人あり、子知らざるかと。曰く、聖人とは孰をか謂ふ。曰く、老聃の弟子に亢倉子といふ者あり。聃の道を得、能く耳を以て視て目をもて聽くと。魯侯之を聞き、大に驚き、上卿をして禮を厚くして（三）之を致さしむ。亢倉子聘に應じて至る。

（一）私命を以て見聞に行きたる也　（二）無心にして形のまゝに用ふる也　（三）之を招き來らしむる也

所以革之之方。此樂天知命者之所憂。雖然吾得之矣。夫樂而知者。非古人之所謂樂知也。無樂無知。是眞樂眞知。故無所不樂。無所不知。無所不憂。無所不爲。詩書禮樂。何棄之有。革之何爲。

夫れ樂しむと知るとは、古人の謂はゆる樂知に非ざるなり。(三)樂しむこともなく知ることもなき、是眞樂眞知なり。(四)故に樂しまざる所なく、知らざる所なく、憂へざる所なく、爲さざる所なし。(五)詩書禮樂、何の棄つることか之有らん。(六)之を革むること何ぞ爲さんと。

(一) 現今の詩書禮樂を指す (二) 方は道也 (三) 是まで樂しみ又知ると思ひしは、古の聖人の樂しみ又知るといへると異なり (四) 樂しむこともなく知ることもなきこそ、古の聖人の眞の樂眞の知なれ (五) 樂しむも知るも之を用ふる所なし、故に樂しまざる所なく、知らざる所なく憂へざる所なく爲さゞる所なし、是れ眞の樂知憂爲なり (六) されば詩書禮樂を棄てゝ別に治術を求むるの要なく、又之を改めて後世天下を治むる者の範をなす要もなき也

顔回北面拜手曰。回亦得之矣。出告子貢。子貢茫然自失。歸家淫思七日。不寢

顔回北面拜手して曰く、回も亦之を得たりと。出でて子貢に告ぐ。子貢茫然(一)として自失し、家に歸りて淫思(二)すること七日、寢ねず食はずして以て骨立(三)するに至れり。顔回重ねて往いて之を喩す。乃ち丘(四)が門に反りて弦歌し、書を誦して終身輟まざりき。

哉、汝之意失矣。此吾昔日之言爾。請以今言爲正也。汝徒知樂天知命之無憂。未知樂天知命有憂之大也。今告若其實。脩一身任窮達、知去來之非我、亡變亂於心慮、爾之所謂樂天知命之無憂也。曩吾脩詩書正禮樂、將以治天下遺來世。非但脩一身治魯國而已。而魯之君臣日失其序。仁義益衰。情性益薄。此道不行一國與當年。如其天下與來世矣。

らんとす。但一身を脩め魯國を治むるのみに非ず。而るに魯の君臣日に其の序を(一〇)失ひ、仁義益々衰へ、情性益々薄し。(一一)此の道一國と當年とに行はれずんば、其れ天下と來世とを知にせん。

(一)昔言の二字を取つて名づく　(二)孔子嘗て上る所ある事　(三)魯國が世を濁りて歌ひたるは、孔子の不遇に由ひて用はんことを排斥せしなり、其の意味の一字にこもれり　(四)斯しき顏色をする故　(五)此の如き弟子教へたることとくありとの意　(六)汝の意思は間は誤れり　(七)用ひるゝとは出でて先王の道を天下に行ひ、用ひられぬときは退いて先王の道を樂しむ　(八)死生窮通貧賤に在らずして天に在ることを知る者　(九)通達によりて心慮の變亂せざる也　(一〇)禮樂の次第を失ふ也　(一一)人の情性益々淳薄に陥る也

吾始知詩書禮樂。無救於治亂、而未知

吾始めて詩書禮樂の治亂を救ふことなきを知れども、未だ之を革むる所以の方を知らず。此天を樂しみ命を知る者の憂ふる所なり。然りと雖も吾之を得たり。

仲尼閒居。子貢入侍。而有二憂色一。子貢不二敢問一。出告二顏回一。顏回援レ琴而歌。孔子聞レ之。果召レ回入。問曰。若奚獨樂。回曰。夫子奚獨憂。孔子曰。先言二爾志一。曰。吾昔聞二之夫子一。曰。樂レ天知レ命。故不レ憂。回所二以樂一也。孔子愀然有レ間曰。有二是言一

仲尼第四

(一)

仲尼閒居し、子貢入り侍せしに、(二)憂色あり。子貢敢て問はず、出でて顏回に告ぐ。顏回琴を援きて歌ふ。孔子之を聞き、(三)果して回を召して入らしむ。問うて曰く、若奚ぞ獨り樂しめる。回曰く、夫子奚ぞ獨り憂ふる。孔子曰く、先づ爾の志を言へと。曰く、吾昔之を夫子に聞けり、曰く、天を樂しみ命を知ると。故に憂へず。回が樂しむ所以なりと。孔子(四)愀然として間ありて曰く、(五)是の言あるかな。(六)汝の意失せり。此吾が昔日の言のみ。請ふ今の言を以て正と爲せよ。汝徒に天を樂しみ命を知るの憂なきを知りて、未だ天を樂しみ命を知るの憂あるの大なることを知らざるなり。今若に其の實を告げん。一身を脩め、(七)窮達に任せ、(八)去來の我に非ざることを知り、(九)心慮に變亂なきは、爾の謂はゆる天を樂しみ命を知るの憂なきなり。曩に吾詩書を脩め、禮樂を正し、將に以て天下を治めて來世に遺

其人愁然變容。指社曰。此若里之社。乃喟然而歎。指舍曰。此若先人之廬。乃涓然而泣。指壠曰。此若先人之冢。其人哭自不禁。同行者啞然大笑曰。予昔紿若。此晉國耳。其人大慙。及至燕。眞見燕國之城社。眞見先人之廬冢。悲心更微。

人の冢なりと。其の人哭して自ら禁ぜず。同行者啞然として大笑して曰く、予昔に若を紿きたるなり。此晉國のみと。其の人大に慙づ。燕に至るに及んで、眞に燕國の城社を見、眞に先人の廬冢を見しも、悲心更に微なりき。

㊀喟然はなげく貌　㊁涓然は泫然と同じ　㊂冢は丘墓也　㊃啞然は大に笑ふ貌

汝庸知二汝子之迷一乎。今天下之人。皆惑二於是非一。昏二於利害一。同疾者多。固無レ有二覺者一。且一身之迷。不レ足レ傾二一家一。一家之迷。不レ足レ傾二一鄕一。一鄕之迷。不レ足レ傾二一國一。一國之迷。不レ足レ傾二天下一。天下盡迷。孰傾レ之哉。向使三天下之人。其心盡如二汝子一。汝則反迷矣。哀樂聲色。臭味是非。孰能正レ之。且吾之言。未二必非一レ迷。而況魯之君子。迷之郵者。焉能解二人之迷一哉。榮二汝之糧一。不レ若二遄歸一也。

をや、焉んぞ能く人の迷を解かんや。汝の糧を榮ひて(九)、遄に歸るに若かざるなりと。

(一) 惠は慧也 (二) 迷罔の疾は心の迷ふ疾也 (三) 朽は朽ちくさき臭氣也 (四) 魯には聖賢の人多きゆゑ藝術のすぐれし人も多しと也 (五) 證は病症也 (六) 一家を動かすに足らざる也 (七) 一人迷はざる者ありたりとて、如何にして天下の迷を動かすを得んや (八) 郵は尤也、迷の郵なる者は迷の甚だしき者也 (九) 負ひての意

燕人生二於燕一。長二於楚一。及レ老而還二本國一。過二晉國一。同行者誑レ之。指レ城曰。此燕國之城。

燕人燕に生れて楚に長じ、老に及びて本國に還る。晉國を過ぐるとき、同行者之を誑かす。城を指して曰く、此燕國の城なりと。其の人愀然として容を變ず。社を指して曰く、此若が里の社なりと。乃ち喟然(一)として歎ず。舍を指して曰く、此若が先人の廬なりと。乃ち涓然(二)として泣く。壠(三)を指して曰く、此若が先

秦人逢氏有レ子。少而惠。及レ壯而有二迷罔之疾一。聞レ歌以爲レ哭。視レ白以爲レ黑。饗レ香以爲レ朽。嘗レ甘以爲レ苦。行レ非以爲レ是。意之所レ之。天地四方。水火寒暑。無レ不二倒錯一者上焉。楊氏告二其父一曰。魯之君子多二術藝一。將能已乎。汝奚不レ訪焉。其父之レ魯。過レ陳遇二老聃一。因告二其子之證一。老聃曰。

秦人逢氏子あり、少にして惠なりしも、壯なるに及びて迷罔の疾あり。歌を聞いて以て哭と爲し、白を視て以て黑と爲し、香を饗いで以て朽と爲し、甘を嘗めて以て苦と爲し、非を行うて以て是と爲し、意の之く所、天地四方、水火寒暑、倒錯せざる者なし。楊氏其の父に告げて曰く、魯の君子術藝多し、將に能く已さんとす。汝奚ぞ訪はざると。其の父魯に之き、陳を過ぎ老聃に遇ふ。因つて其の子の證を告ぐ。老聃曰く、汝庸ぞ汝が子の迷を知らんや。今天下の人皆是非に惑ひ、利害に昏く、同疾の者多くして、固より覺れる者あるなし。且つ一身の迷は一家を傾くるに足らず、一家の迷は一鄕を傾くるに足らず、一鄕の迷は一國を傾くるに足らず、一國の迷は天下を傾くるに足らず。天下盡く迷はば、孰か之を傾けんや。向に天下の人をして其の心盡く汝の子の如くならしめば、汝則ち反つて迷へるならん。哀樂聲色、臭味是非、孰か能く之を正さん。且つ吾が言も未だ必ずしも迷に非ずんばあらず。而るを況んや魯の君子は迷の鄙なる者なる

求衣。饑之而求食。幽之而求明。儒生欣然告其子曰。疾可已也。然吾之方密傳世。不以告人。試屛左右。獨與居室七日。從之。莫知其所施爲也。而積年之疾。一朝都除。

華子既悟。迺大怒。黜妻罰子。操戈逐儒生。宋人執而問其以。華子曰。曩吾忘也。蕩蕩然不覺天地之有無。今頓識既往。數十年來存亡得失。哀樂好惡。擾擾萬緒起矣。吾恐將來之存亡得失。哀樂好惡之亂吾心如此也。須臾之忘。可復得乎。子貢聞而怪之。以告孔子。孔子曰。此非汝所及乎。顧謂顏回紀之。

華子既に悟めて、迺ち大に怒り、妻を黜け子を罰し、戈を操りて儒生を逐ふ。宋人執へて其の以を問ふ。華子曰く、曩に吾が忘るゝや、(一)蕩蕩然として天地の有無を覺えず。今頓に既往を識り、數十年來の存亡得失、哀樂好惡、(二)擾擾として萬緒起れり。吾將來の存亡得失、哀樂好惡の吾が心を亂ること、此の如くならんことを恐る。須臾の忘るゝことも復た得べけんやと。子貢聞いて之を怪み、以て孔子に告ぐ。孔子曰く、此汝の及ぶ所に非ざるかと、顧みて顏回に謂つて之を紀せしむ。

(一) 蕩々然は廣大の貌 (二) 擾擾は紛雜也。萬緒は萬端の事也

室則忘坐。今不識先後。不識今。闔室毒之。謁史而卜之。弗占。謁巫而禱之。弗禁。謁醫攻之。弗已。魯有儒生。自媒能治之。華子之妻子。以居産之半請其方。儒生曰。此固非卦兆之所占。非祈請之所禱。非藥石之所攻。吾試化其心變其慮。庶幾其瘳乎。於是。試露之而

巫に謁して之を禱るに禁ぜず、醫に謁して之を攻むるに已えず。魯に儒生あり、自ら能く之を治めんと媒す。華子の妻子、居産の半を以て其の方を請ふ。儒生曰く、此固より卦兆の占する所に非ず、祈請の禱る所に非ず、藥石の攻むるに所に非ず、吾試に其の心を化し、其の慮を變ぜば、庶幾くは其れ瘳えんかと。是に於て試に之を露せば而ち衣を求め、之を饑せば而ち食を求め、之を幽にすれば而ち明を求む。儒生欣然として其の子に告げて曰く、疾已ゆべし。然れども吾が方は密に世に傳ふるのみ、以て人に告げず。試に左右を屏け、獨り與に室に居ること七日せんと。之に從ふ。其の施爲する所を知ることなし。而して積年の疾一朝にして都て除けり。

(一) 全室之に苦しむ也 (二) 卜人に謁ふ、之を卜するに卦兆を示さず (三) 醫師の如きを也 (四) 財産の半を與へて其の治方を請ふ也 (五) 露すは裸體にする也 (六) 幽にするは暗き處に置く也 (七) 秘術にて世間に傳ふるのみにて他人に教へず

[illegible]

之鹿。又夢ニ得レ之之主。爽旦案レ所レ夢而尋ニ得之。遂訟而爭レ之。歸ニ之士師。士師曰。若初眞得レ鹿。妄謂ニ之夢。眞夢得レ鹿。妄謂ニ之實。彼眞取ニ若鹿。而與レ若爭レ鹿。室人又謂下夢認ニ人鹿。無中人得上レ鹿。今據レ有ニ此鹿。請二ニ分之。以聞ニ鄭君。鄭君曰。嘻士師將三復夢分ニ人鹿一乎。訪ニ之國相。國相曰。夢與レ不レ夢。臣所レ不レ能レ辨也。欲レ辨ニ覺夢。唯黄帝孔丘。今亡ニ黄帝孔丘。孰辨レ之哉。且恂ニ士師之言可也。

(一) 薪を採る也 (二) 駭鹿は物に驚きて走り來れる鹿也 (三) 道を歩きながら其の事を口ずさむ也 (四) 室人は妻也。(五) 彼は眞に夢を見たる者なり (六) 汝は夢に薪者の鹿を得たることを見たるに非ざるか、然らば薪者は眞に有るには非ざるべし。今汝が眞に鹿を得たるは、是亦眞の夢なるやも知るべからず (七) 厭かずは滿足せざる也 (八) 爽旦は早朝也 (九) 士師は訴訟を司る人 (一〇) 汝初には眞に鹿を得て之を夢なりと謂ひ、後には夢に鹿を得て之を實なりと謂へり、是何れが眞か未だ知るべからざるなり (一一) 彼の鹿を得たる者は、眞に汝の鹿を取りたりとて汝と鹿を爭ふも、其の妻は夢に人の鹿を認めたるにて眞に人の鹿を得たることなしと謂ふ、是亦何れが夢か眞か未だ知るべからず (一二) 然れども今現に此の鹿あるに因り、暫く兩人にて之を二分すべし (一三) 士師の判決に服せず、又之を鄭君に告ぐる也 (一四) 師士の裁判も亦夢なるべし

宋陽里華子。中年病レ忘。朝取而夕忘。夕與而朝忘。在レ塗則忘レ行。在レ

宋の陽里の華子、中年に忘を病む。朝に取りて夕に忘れ、夕に與へて朝に忘る。塗に在りては則ち行くことを忘れ、室に在りては則ち坐することを忘る。今先を識らず、後、今を知らず。(一)闔室之を毒み、(二)史に謁して之を卜するに占あらず、

而訟二其事一。傍人有二聞者一用二其言一而取レ之。既歸告二其室人一曰。向薪者。夢得レ鹿而不レ知二其處一。吾今得レ之。彼直眞夢者矣。室人曰。若將是夢見二薪者之得一レ鹿邪。詎有二薪者一邪。今眞得レ鹿。是若之夢眞邪。夫曰。吾據得レ鹿。何用知二彼夢我夢一邪。薪者之歸。不レ厭レ失レ鹿。其夜眞夢二藏レ之

か。詎ぞ薪者あらんや。今眞に鹿を得たるは、是若の夢眞なるかと。夫曰く、吾據に鹿を得たり、何を用て彼の夢か我の夢かを知らんやと。薪者の歸るや、鹿を失ひしに厭かず、其の夜眞に之を藏しし處を夢み、又之を得し主を夢みぬ。(八)爽日に夢みし所を案じて之を尋ね得たれば、遂に訟へて之を爭ひ、之を(九)士師に歸せり。士師曰く、(一〇)若初眞に鹿を得て、妄りに之を夢なりと謂ひ、眞に夢に鹿を得て、妄りに之を實なりと謂へり。(一一)彼は眞に若の鹿を取りて、若と鹿を爭ふも、室人は又、夢に人の鹿を認めたるにて、人の鹿を得たるものなしと謂へり。(一二)今此の鹿あるに據り、請ふ之を二分せんと。(一三)以て鄭君に聞す。鄭君曰く、噫、(一四)士師將に復た夢に人の鹿を分たんとするかと。之を國相に訪ふ。國相曰く、夢と夢ならざるとは、臣の辨ずること能はざる所なり。覺夢を辨ぜんと欲せば、唯黃帝孔丘あるのみ。今黃帝孔丘なければ、孰か之を辨ぜんや。且く士師の言に恂うて可なりと。

則苦矣。夜爲二人君一。其樂無レ比。何所レ怨哉。尹氏心營二世事一。慮鍾二家業一。心形俱疲。夜亦昏憊而寐。昔昔夢爲二人僕一。趨走作役無レ不レ爲也。數罵杖撻。無レ不レ至也。眠中啽囈呻呼。徹レ旦息焉。尹氏病レ之。以訪二其友一。友曰。若位足レ榮レ身。資財有レ餘。勝レ人遠矣。夜夢爲レ僕。苦逸之復。數之常也。若欲二覺夢兼一レ之。豈可レ得邪。尹氏聞二其友言一。寛二其役夫之程一。減二己思慮之事一。疾竝少間。

(一)家産を殖する也 (二)其の家人の仕事に服する者 (三)朝は早く起き夜は晩く寢ぬる也 (四)呻呼はうめく也 (五)疲れ果てゝ眠る也 (六)疲れ果てゝ精神恍惚となる也 (七)昔昔は夕夕也 (八)慰めさとす (九)數罵は責也 (一〇)啽囈は寢語なり、呻呼はうめく也 (一一)朝に達して歩む也 (一二)苦逸の反覆するは數の常也 (一三)程は勞役の程度也

鄭人有中薪二於野一者上。遇二駭鹿一。御而擊レ之。斃レ之。恐二人見一レ之也。遽而藏二諸隍中一。覆レ之以レ蕉。不レ勝二其喜一。俄而遺二其所レ藏之處一。遂以二爲夢一焉。順レ塗。

鄭人野に薪する者あり、駭鹿に遇ひ、御へて之を撃ち、之を斃す。人の之を見んことを恐れ、遽てて諸を隍中に藏し、之を覆ふに蕉を以てす。其の喜に勝へず、俄にして其の藏しし所の處を遺す、遂に夢なりと以爲ひ、(三)塗に順うて其の事を詠ず。傍人聞ける者あり、其の言を用ひて之を取る。既に歸りて其の室人(四)に告げて曰く、向に薪者夢に鹿を得て、其の處を知らざりき。吾今之を得たり。(五)彼は直に眞に夢みたる者なりと。室人曰く、(六)若將た是夢に薪者の鹿を得たるを見たる

治產。其下趣役者、侵晨昏而弗息。有老役夫。筋力竭矣。而使之彌勤。晝則呻呼而即事。夜則昏憊而熟寐。精神荒散。昔昔夢爲國君。居人民之上。總一國之事。遊燕宮觀。恣意所欲。其樂無比。覺則復役。人有慰喩其懃者。役夫曰。人生百年。晝夜各分。吾晝爲僕虜。苦

り、筋力竭きたり、而るに之を使ふこと彌〻勤む。晝は則ち呻呼して事に即き、夜は則ち昏憊して熟寐す。精神荒散して、昔昔夢に國君と爲り、人民の上に居り、一國の事を總べ、遊燕宮觀意の欲する所を恣にし、其の樂比なし。覺むれば則ち復た役す。人其の懃を慰喩する者あれば、役夫曰く、人生百年、晝夜各〻分る。吾晝は僕虜と爲り、苦しきことは則ち苦しきも、夜は人君と爲り、其の樂比なし。何の怨む所あらんやと。尹氏心に世事を營み、慮家業に鍾り、心形倶に疲れ、夜も亦昏憊して寐ぬ。昔昔夢に人僕と爲り、趨走作役爲さざることなく、數罵杖撻至らざることなし。眠中啽囈呻呼して、旦に徹して息む。尹氏之を病み、以て其の友に訪ふ。友曰く、若が位身に榮するに足り、資財餘あり、人に勝ること遠し。夜夢に僕と爲る。苦は逸の復、數の常なり。若覺夢之を兼ねんと欲するも、豈得べけんやと。尹氏其の友の言を聞き、其の役夫の程を寬くし、己が思慮の事を減じたれば、疾並に少しく間えたり。

東四。萬有餘里。其陰陽之審度。故一寒一暑。昏明之分察。故一晝一夜。其民有ㇾ智有ㇾ愚。萬物滋殖。才藝多方。有二君臣一相臨。禮法相持。其所二云爲一。不ㇾ可二稱計一。一覺一寐。以二爲覺之所ㇾ爲者實。夢之所ㇾ見者忘。東極之北隅有ㇾ國。曰二阜落之國一。其土氣常燠。日月餘光之照。其土不ㇾ生二嘉苗一。其民食二草根木實一。不ㇾ知二火食一。性剛悍。彊弱相藉。貴ㇾ勝而不ㇾ尙ㇾ義。多二馳步一少二休息一。常覺而不ㇾ眠。

其の民智あり愚あり、萬物滋殖せり。(六)才藝多方にして、君臣ありて相臨み、禮法ありて相持す。其の云爲する所、稱げて計ふべからず。一覺一寐あり、覺の爲す所の者は實にして、夢の見る所の者は妄なりと以爲へり。東極の北隅に國あり、阜落の國と曰ふ。其の土氣常に燠に、(七)日月餘光の照あり。其の土嘉苗を生ぜず(八)其の民草根木實を食ひ、火食を知らず。(九)性剛悍にして彊弱相藉ぎ、勝つことを貴んで義を尙ばず、馳步多くして休息少く、常に覺めて眠らず。

(一) 齊は中也、卽ち今の支那をいふ　(二) 河は黄河也　(三) 岱は岱岳也　(四) 陰陽循環の度數精密にして違はず　(五) 晝夜の區別分明なり　(六) 滋殖は繁殖也　(七) 日月の餘光交替して之を照す　(八) 嘉苗は五穀の苗也　(九) 火食は烹炊して食ふ也

周之尹氏。大

周の尹氏大に産を治む。(一)其の下の役に趣く者、(二)晨昏を侵して息まず。(三)老役夫あ

想夢自消。信覺不語。信夢不達。物化之往來者。古之眞人。其覺自忘。其寢不夢。幾虛語哉。

れ、其の寢ねたるときは夢みずと、幾んど虛語ならんや。(七)

(一)夢は精神の遇ふ者なり　(二)見聞は卽ち形開するなり　(三)精神凝定する者は想念なく、夜夢みることなし　(四)眞の覺者は語なし、故に語らず、眞の夢者は理に達せず、彼は夢を以て眞と爲す　(五)覺と夢とは皆物化の往來する者なり　(六)全覺なき者　(七)覺めたる時念慮なし、故に寢ねても夢なき者

西極之南隅有國焉。不知境界之所接。名古莽之國。陰陽之氣所不交。故寒暑亡辨。日月之光所不照。故晝夜亡辨。其民不食不衣而多眠。五旬一覺。以夢中所爲者實。覺之所見者妄。

西極の南隅に國あり、境界の接する所を知らず、古莽の國と名づく。陰陽の氣の交らざる所、故に寒暑辨なし。(一)日月の光の照さざる所、故に晝夜辨なし。其の民食はず衣ずして、多く眠り、五旬に一たび覺む。夢中爲す所の者は實にして、覺めて見る所の者は妄なりと以へり。

(一)寒暑といふ區別なし

四海之齊。謂中央之國。跨河南北。越岱

四海の齊を(一)中央の國と謂ふ。(二)河の南北に跨り、(三)岱の東西に越ゆること萬有餘里、其の陰陽の審度あり、(四)故に一寒一暑あり。(五)昏明の分察なり、故に一晝一夜あり。

起者。事至則如三其所二由然一。知三其所二由然一則無レ所レ怛。一體之盈虛消息。皆通二於天地一。應二於物類一。故陰氣壯則夢涉二大水一而恐懼。陽氣壯則夢涉二大火一而燔焫。陰陽俱壯。則夢生殺。甚飽則夢與。甚饑則夢取。是以以二浮虛一爲レ疾者則夢揚。以二沈實一爲レ疾者則夢溺。藉レ帶而寢則夢レ蛇。飛鳥銜レ髮則夢レ飛。將レ陰夢レ火。將レ疾夢レ食。飲レ酒者憂。歌舞者哭。

に疾まんとすれば食を夢む。酒を飲むとみる者は憂あり、歌舞するとみる者は哭す。

(一) 覺は夢に對していふ、徵は驗也 (二) 候は占也 (三) 故は事故也 (四) 爲は所作也 (五) 有形の者の同じく然る所なる故に、形の接する所といふ (六) 夢は精神の外境に交りて致す所なり (七) 感變は、物と我との感ずる所種々の變化あるをいふ (八) 感變は皆我が一心より起ることを知らざる故、事の起るや其の起りたる所以に惑うて驚き懼るゝ也 (九) 感變の我一心より起ることを知る者は、事至れば直に其の起る所以を知りて泰然自若たり (一〇) 一體は一身なり、人は天地と氣を通じ萬物と形を並ぶるものなれば、其の盈虛消息皆天地と感通する也 (一一) 燔焫は焚かるゝ也 (一二) 生したり殺したりすることを夢みる (一三) 心の浮きて虛なる也 (一四) 心の沈みて實なる也

子列子曰。神遇爲夢。形接爲レ事。故晝想夜夢。神形所レ遇。故神凝者。

子列子曰く、(一)神遇ふを夢と爲し、(二)形接するを事と爲す。故に晝は想ひ、夜は夢みる。神と形との遇ふ所なり。故に(三)神凝る者は想夢自ら消す。(四)信覺は語らず、信夢は達せず、(五)物化の往來する者なり。古の眞人、其の覺めたるときは(六)自ら忘

覺有八徵。夢有六候。奚謂八徵。一曰故。二曰爲。三曰得。四曰喪。五曰哀。六曰樂。七曰生。八曰死。此者八徵。形所接也。奚謂六候。一曰正夢。二曰蘁夢。三曰思夢。四曰寤夢。五曰喜夢。六曰懼夢。此六者神所交也。不識感變之所起者。事至則惑其所由然。識感變之所

覺に八徵あり、夢に六候あり。奚をか八徵と謂ふ。一に曰く故、二に曰く爲、三に曰く得、四に曰く喪、五に曰く哀、六に曰く樂、七に曰く生、八に曰く死、此の八徵は、形の接する所なり。奚をか六候と謂ふ。一に曰く正夢、二に曰く蘁夢、三に曰く思夢、四に曰く寤夢、五に曰く喜夢、六に曰く懼夢。此の六の者は神の交る所なり。感變の起る所を識らざる者は、事至れば則ち其の由りて然る所に惑ふ。感變の起る所を識る者は、事至れば則ち其の由りて然る所を知る。其の由りて然る所を知れば、則ち怛るゝ所なし。一體の盈虛消息、皆天地に通じ、物類に應ず。故に陰氣壯なれば、則ち夢に大水を渉りて恐懼す。陽氣壯なれば、則ち夢に大火を渉りて燔焫す。陰陽俱に壯なれば、則ち夢に生殺す。甚だ飽くときは則ち夢に與ふ、甚だ饑らるときは則ち夢に取る。是を以て浮虛を以て疾と爲す者は則ち夢に揚る、沈實を以て疾と爲す者は則ち夢に溺る。帶を藉きて寢ぬれば則ち蛇を夢み、飛鳥髮を銜めば則ち飛ぶを夢む。將に陰らんとすれば火を夢み、將

巧妙。其功深。固難窮難終。因形者。其巧顯。其功淺。故隨起隨滅。知幻化之不異生死也。始可與學幻矣。吾與汝亦幻也。奚須學哉。

老成子歸用尹文先生之言。深思三月。遂能存亡自在。幡校四時。冬起雷。夏造氷。飛者走。走者飛。終身不著其術。故世莫傳焉。

老成子歸り、尹文先生の言を用て深思すること三月、遂に能く存亡自在にして、(一)四時を幡校し、冬雷を起し、夏氷を造り、飛ぶ者走り、走る者飛ぶ。終身其の術を著さず、故に世傳ふることなし。

(一) 有無を變化すること意の如き也　(二) 幡校は翻校に作る、四時陰陽の節を變易する也

子列子曰。善爲化者。其道密庸。其功同人。五帝之德。三王之功。未必盡智勇之力。或由化而成。孰測之哉。

子列子曰く、善く化を爲す者は、(一)其の道密に庸ひ、其の功人に同じ。五帝の德、三王の功、未だ必ずしも盡く智勇の力ならず、(二)或は化に由りて成る。孰か之を測らんや。

(一) 帝王の化は默して用ふる故、人は之を見ることを得ざるも、其の功は人と同じき也　(二) 或は自然の化を用ひしものならん

老成子學二幻於尹文先生一。三年不レ告。老成子請二其過一而求レ退。尹文先生揖而進二之於室一。屏二左右一而與レ之言曰。昔老聃之徂レ西也。顧而告レ予曰。有生之氣。有形之狀。盡幻也。造化之所レ始。陰陽之所レ變者。謂二之生一謂二之死一窮レ數達レ變。因レ形移易者謂二之化一。謂二之幻一。造物者。其

老成子幻を尹文先生に學ぶ。(一)三年まで告げず。老成子其の過を請うて退かんことを求む。尹文先生揖して之を室に進め、左右を屏けて之と言つて曰く、昔(二)老聃の西に徂くや、顧みて予に告げて曰く、(三)有生の氣、有形の狀、(四)盡く幻なり。造化の始むる所、陰陽の變ずる所の者、之を生と謂ひ、之を死と謂ふ。(五)數を窮め變に達し、形に因りて移易する者、之を化と謂ひ、之を幻と謂ふ。造物は其の巧妙に、其の功深く、固より窮め難く、終へ難し。(六)形に因る者は其の巧顯れ、其の功淺し、故に隨つて起り隨つて滅す。(七)幻化の生死に異ならざるを知らば、始めて與に幻を學ぶべしと。吾と汝とも亦幻なり、奚ぞ學ぶを須ゐんやと。

(一) 幻は變幻の術也　(二) 三年經りたるも未だ教へざる也　(三) 一氣往來して窮らず、生じては滅し、滅しては生ず、其の生じたる所は即ち有生の氣有形の狀なり　(四) 盡く皆幻術なり　(五) 天地の數を窮め陰陽の變化に通ひ、形ある者の滅は生じ生は滅する、之を化といふ　(六) 形ある者の爲す事は其の功造化に及ばず、故に成敗するかと思へば忽ちまた滅する也　(七) 人間變幻の術と造物死生變化の理と同一なるを知りて後、始めて與に幻術を學ぶべし

山子柏夭。主車。參百爲レ御。奔戎爲レ右、驂騮千里、至二于巨蒐氏之國一。巨蒐氏乃獻二白鵠之血一。以飮レ王。具二牛馬之湩一。以洗二王之足一。及二二乘之人一。已飮而行。遂宿二于崑崙之阿。赤水之陽一。別日升二崑崙之丘一。以觀二黃帝之宮一。而封レ之以詒二後世一。遂賓二于西王母一。觴二于瑤池之上一。西王母爲レ王謠。王和レ之。其辭哀焉。迺觀二日之所レ入。一日行萬里。王乃歎曰。於乎予一人不レ盈二于德一。而諧二於樂一。後世其追數二吾過一乎。穆王幾神人哉。能窮二當身之樂一。猶百年乃徂。世以爲二登假一焉。

の上に觴(一一)す。西王母、王の爲に謠ひ、王之に和す、其の辭哀し。迺ち日の入る所を觀る。一日に行くこと萬里なり。王乃ち歎じて曰く、於乎、予一人、德に盈たずして樂(一二)に諧ふ。後世其れ追うて吾が過を數めんかと。穆王幾んど神人なるかな。能く當身の樂を窮め、猶ほ百年にして乃ち徂きぬ。世以て登假(一三)と爲せり。

(一) 八頭の駿馬の引く車に乘る也 (二) 右服は轅の内にある右の馬左は左服にて左の服馬也、驊騮綠耳は馬の名 (三) 右驂は轅の外にある右の馬、左は左驂にて左の驂馬也、赤驥白𦏁は馬の名 (四) 造父齊𥳑は御車の名 (五) 次は乘り換への車 (六) 渠黃踰輪盜驪山子柏夭は皆馬の名 (七) 參百奔戎は御者の名 (八) 湩は乳汁也 (九) 崑崙は山の名、赤水は川の名 (一〇) 封ずるは祭る也 (一一) 觴するは酒宴をする也 (一二) 穆王は殆ど神に近き人なり (一三) 登假は登遐に同じ、天に升りて神仙となるをいふ

之所居。奚異王之宮。曩之所遊。奚異王之圃。王閒恒疑暫亡。變化之極。徐疾之間。可盡模哉。

（一）自然に心思を失ふ也　（二）神游は精神を以て遊ぶ也　（三）常に見る所の者に慣れて暫く神遊したるを疑ふ也
（四）變化測り難く、疾きもゆるやかなるも其の實は同じ事にて、千變萬化の理は人智を以て測るべからざるをいふ

王大悅。不恤國事。不樂臣妾。肆意遠遊。命駕八駿之乘。右服驊騮。而左綠耳。右驂赤驥。而左白義。主車則造父為御。𤞶丙為右。次車之乘。右服渠黃。而左踰輪。左驂盜驪。而右山子。

王大に悅び、國事を恤へず、臣妾を樂ます、意を肆にして遠游し、命じて八駿の乘に駕し、驊騮を右服にして綠耳を左にし、赤驥を右驂にして白義を左にす。主車は則ち造父御となり、𤞶丙右となる。次車の乘には、渠黃を右服にして踰輪を左にし、盜驪を左驂にして山子柏夭を右にす。主車は參百御となり、奔戎右となる。馳驅すること千里、巨蒐氏の國に至る。巨蒐氏乃ち白鵠の血を獻じて以て王に飮ましめ、牛馬の湩を具へて以て王の足を洗はしめ、二乘の人に及ぼす。已に飮みて行き、遂に崑崙の阿、赤水の陽に宿す。別日に崑崙の丘に升り、以て黃帝の宮を觀、而して之を封じて以て後世に詒し、遂に西王母に賓して瑤池

清都紫微。鈞天廣樂。帝之所ﾚ居。王俯而視ﾚ之。其宮榭若ニ累塊積蘇一焉。王自以居數十年。不ﾚ思ニ其國一也。化人復謁ﾚ王同游。所ﾚ及之處。仰不ﾚ見ニ日月一。俯不ﾚ見ニ河海一。光影所ﾚ照。王目眩不ﾚ能ﾚ得ﾚ視。音響所ﾚ來。王耳亂不ﾚ能ﾚ得ﾚ聽。百骸六藏。悸而不ﾚ凝。意迷精喪。請ニ化人一求ﾚ還。化人移ﾚ之。王若ﾚ殞ﾚ虛焉。既寤。所ﾚ坐猶嚮者之處。侍御猶嚮者之人。視ニ其前一則酒未ﾚ清。肴未ﾚ昲。王問ﾚ所ニ從來一。左右曰。王默存耳。

きたる眉なり　(四)　笄はかんざし珥は耳環也　(五)　阿錫齊紈は共に細密なる絹織物　(六)　粉はおしろひ、黛はまゆずみ　(七)　珮は佩玉　(八)　芷若は香草、香氣に滿つる也　(九)　承雲は黃帝の樂、六瑩は帝嚳の樂、九韶は舜の樂、晨露は湯王の樂　(一〇)　未だ滿足せざる也　(一一)　謁は告ぐる也　(一二)　袪は袖也　(一三)　其の基礎の見えざる也　(一四)　屯雲は集れる雲也　(一五)　清都紫微は天帝の宮　(一六)　鈞天廣樂は天上の音樂　(一七)　帝は天帝也　(一八)　王の宮室也　(一九)　累塊積蘇は累土積草也　(二〇)　身體恐れて定らざる也　(二一)　侍御は左右の侍者也　(二二)　肴未だ味を變ぜざる也

由ﾚ此穆王自失者三月而復。更問ニ化人一。化人曰。吾與ﾚ王神游也。形奚動哉。且曩

此に由り穆王自失(一)すること三月にして復せり。更に化人に問へば、化人曰く、吾、王と神游する(二)なり、形奚ぞ動かんや。且つ曩の居りし所、奚ぞ王の宮に異ならん。曩の游びし所、奚ぞ王の圃に異ならん。王恒に間うて(三)暫く亡するを疑ふも、(四)變化の極、徐疾の間、盡く模るべけんやと。

之。日月獻玉衣、旦旦薦玉食。化人猶不舍然、不得已而臨之。居亡幾何、謁王同遊。王執化人之袪、騰而上者、中天迺止。暨及化人之宮。化人之宮、構以金銀、絡以珠玉、出雲雨之上、而不知下之據、望之若屯雲焉。耳目所觀聽、鼻口所納嘗、皆非人間之有。王實以爲

を以てし、雲雨の上に出でて下の據ることを知らず、之を望むに、屯雲の若し。耳目の觀聽する所、鼻口の納れ嘗むる所、皆人間の有に非ず。王實に以爲へらく、清都紫微、鈞天廣樂、帝の居る所なりと。王俯して之を視れば、其の宮榭は累塊積蘇の若し。王自ら以へらく、居ること數十年なりと。其の國を思はざりき。化人復た王に謁して同じく遊ぶ。及ぶ所の處、仰いで日月を見ず、俯して河海を見ず、光影の照す所、王目眩して視ることを得ること能はず、音響の來る所、王耳亂れて聽くを得ること能はず、百骸六藏悸して凝らず、意迷ひ精喪ひ、化人に請うて還らんことを求む。化人之を移せば、王は虛より殞つるが若くなりき。既に寤むれば、坐する所猶ほ嚮者の處にして、侍御も猶ほ嚮者の人なり。其の前を視れば、則ち酒未だ清めず、肴未だ晞れず。王從りて來る所を問へば、左右曰く王は、默存せるのみと。

（一）處子は處女、娥媌は美しき貌、靡曼はたをやかなる貌　（二）芳澤は香物又は光澤のもの也　（三）鄭衛は淫く書

之宮室。卑陋而不レ可レ處。王之厨饌。腥螻而不レ可レ饗。王之嬪御。膻惡而不レ可レ親。穆王乃爲レ之改築。土木之功。赭堊之色。無レ遺巧一矣。五府爲虛。而臺始成。其高千仞。臨二終南之上一。號曰二中天之臺一。

反覆する也 (五) 虛は空中也 (六) 實は有形の物體也 (七) 人をして從來覺えたる事をも忘れしむる也 (八) 路寢は宮中の一等の座敷也 (九) 三牲は牛羊豕を備へたる盛饌也 (一〇) 腥螻はなまぐさき惡臭なり (一一) 嬪御は宮女也、膻惡は獸肉の如きなまぐさき臭氣ある也 (一二) 赭は赤色堊は白色の土 (一三) 建築に遺憾なく結構を盡したる也 (一四) 五府は太府玉府內府外府膳府の五つの藏をいふ (一五) 終南は山の名

簡二鄭衛之處子。蛾媌靡曼者一。施二芳澤一。正二蛾眉一。設二笄珥一。衣二阿錫一。曳二齊紈一。粉白黛黑。珮二玉環一。雜二芷若一。以滿レ之。奏二承雲六瑩九韶晨露一以樂レ之。

鄭衛の處子(一)の娥媌靡曼なる者を簡び、芳澤(二)を施し、蛾眉(三)を正し、笄珥(四)を設け、阿錫(五)を衣せ、齊紈を曳かせ、粉白く黛黑く(六)、玉環を珮(七)にし、芷若(八)を雜へて以て之に滿て、承雲六瑩九韶晨露を奏して以て之を樂ましめ、日月に玉衣を獻じ、旦旦に玉食を薦む(九)。化人猶ほ舍然(一〇)たらず、已むことを得ずして之に臨む。居ること幾何もなくして王に謁(一一)して同じく游ぶ。王、化人の袪(一二)を執り、騰りて上ること中天にして迺ち止り、化人の宮に暨及ぶ。化人の宮は、構ふるに金銀を以てし、絡ふに珠玉

周穆王時。西極之國有化人來。入水火。貫金石。反山川。移城邑。乘虛不墜。觸實不硋。千變萬化。不可窮極。既已變物之形。又且易人之慮。穆王敬之若神。事之若君。推路寢以居之。引三牲以進之。選女樂以娛之。化人以爲王

周穆王第三

周の穆王の時、西極の國より化人の來れるあり。水火に入り、金石を貫き、山川を反し、城邑を移し、虛に乘じて墜ちず、實に觸れて硋らず、千變萬化して窮極すべからず。既已に物の形を變じ、又且つ人の慮を易ふ。穆王之を敬すること神の若く、之に事ふること君の若く、路寢を推して以て之を居き、三牲を引きて以て之を進め、女樂を選んで以て之を娛ましむ。化人以爲へらく、王の宮室は卑陋にして處るべからず、王の廚饌は腥螻にして饗くべからず、王の嬪御は膻惡にして親しむべからずと。穆王乃ち之が爲に改め築き、土木の功、赭堊の色、遺功なし。五府爲に虛しくして臺始めて成る。其の高さ千仞、終南の上に臨み、號して中天の臺と曰ふ。

(一) 篇初の三字を取つて篇の名とす (二) 西極の國は西のはずれの國也 (三) 化人は幻術ある人なり (四) 山川を

之不ㇾ中。此猶辱也。臣有ㇾ道ニ於此一。使ㇸ人雖ㇾ有ㇾ勇弗ニ敢刺一。雖ㇾ有ㇾ力弗ㇳ敢擊ㇹ。夫弗ㇾ敢非ㇾ無ニ其志一也。臣有ㇾ道ニ於此一。使三人本無ニ其志一也。夫無ニ其志一也。未ㇾ有ニ愛利之心一也。臣有ㇾ道ニ於此一。使ニ天下丈夫女子。莫ㇾ不ニ驩然皆欲ㇾ愛ニ利之一。此其賢ニ於勇有ㇾ力也。四累之上也。大王獨無ㇾ意邪。

㊀ 蹀足は足にて地をたゝく也、謦欬はせきばらひ也 ㊁ 疾言は急言也 ㊂ 彼猶は我に敵する心あり故に辱づべし ㊃ 猶は我を刺し我を撃つ志なきに非ず ㊄ 未だ我を愛し我を利せんの志なき也 ㊅ 驩然はよろこぶ貌 ㊆ 四累は上に述べたる四道の上なるをいふ

宋王曰。此寡人之所ㇾ欲ㇾ得也。惠盎對曰。孔墨是已。孔丘墨翟。無ㇾ地而爲ㇾ君。無ㇾ官而爲ㇾ長。天下丈夫女子。莫ㇾ不四延ㇾ頸擧ㇾ踵而願三安ニ利之一。今大王萬乘之主也。誠有ニ其志一。則四竟之內。皆得ニ其利一矣。其賢ニ於孔墨一也遠矣。宋王無ニ以應一。惠盎趨而出。宋王謂ニ左右一曰。辯矣。客之以ㇾ說服ニ寡人一也。

宋王曰く、此寡人の得んと欲する所なりと。惠盎對へて曰く、孔墨是のみ。孔丘墨翟は地なくして君たり、官なくして長たり、天下の丈夫女子、頸を延き踵を擧げて之を安利せんことを願はざるはなし。今大王は萬乘の主なり。誠に其の志あらば、則ち四竟の內皆其の利を得ん。其の孔墨に賢るや遠しと。宋王以て應ふることなし。惠盎趨りて出でぬ。宋王左右に謂つて曰く、辯なるかな、客の說を以て寡人を服するやと。

無變矣。望之似木雞矣。其德全矣。異雞無敢應者、反走耳。

惠盎見宋康王。康王蹀足謦欬疾言曰。寡人之所說者。勇有力也。不說爲仁義者也。客將何以教寡人。惠盎對曰。臣有道於此。使人雖勇刺之不入。雖有力擊之弗中。大王獨無意邪。宋王曰善。此寡人之所欲聞也。惠盎曰。夫刺之不入。擊

惠盎、宋の康王に見ゆ。康王蹀足謦欬し、疾言して曰く、寡人の說ぶ所は勇にして力あるものなり。仁義を爲す者を說ばず。客將に何を以て寡人に敎へんとするかと。惠盎對へて曰く、臣此に道あり、人をして勇にして之を刺すと雖も入らず、力ありて之を擊つと雖も中らざらしむ。大王獨り意なきかと。宋王曰く、善し。此寡人の聞かんと欲する所なりと。惠盎曰く、夫れ之を刺すとも入らず、之を擊つとも中らざるは、此猶ほ辱なり。臣此に道あり、人をして勇ありと雖も敢て刺さず、力ありと雖も敢て擊たざらしむ。夫れ敢てせざるは其の志なきに非ざるなり。臣此に道あり、人をして本其の志なからしむ。夫れ其の志なきは、未だ愛利の心あらざるなり。臣此に道あり、天下の丈夫女子をして、驩然として皆之を愛利することを欲せざるなからしむ。此其の勇にして力あるに賢ること四累の上なり。大王獨り意なきか。

而怒。俄而曰。與ニ若芧ー朝四而暮三。足乎。衆狙皆伏而喜。物之以ニ能鄙ー相籠。皆猶ㇾ此也。聖人以ㇾ智籠ニ羣愚ー。亦猶ニ狙公之以ㇾ智籠ニ衆狙ー也。名實不ㇾ虧。使ニ其喜怒ー哉。

(一) 狙は猿也、狙公は常に多く狙を飼ひし故名づけし也 (二) 心を得るは其意を解する也 (三) 家内の人數をへらして猿に食を與ふる也 (四) 貧乏になりたる也 (五) 馴れざるは從はざる也 (六) 芧は橡(どんぐり)の類 (七) 能鄙は智愚也、相籠するは相籠絡する也、智ある者が愚なる者をまるめるをいふ (八) 名實共に損する所なくして、狙をして一喜一怒せしむる也

紀渻子爲ニ周宣王ー養ニ鬭鷄ー。十日而問。鷄可ㇾ鬭已乎。曰未也。方虛驕而恃ㇾ氣。十日又問。曰未也。猶應ニ影響ー。十日又問。曰。未也。猶疾視而盛氣。十日又問。曰。幾矣。鷄雖ㇾ有ニ鳴者ー。已

紀渻子(一)周の宣王の爲に鬭雞を養ふ。十日にして問ふ、雞鬭はすべきかと。曰く、未だし。方に虛驕(二)にして氣を恃むと。十日にして又問ふ。曰く、未だし。猶ほ影響(三)に應ずと。十日にして又問ふ。曰く、未だし。猶ほ疾視(四)して盛氣ありと。十日にして又問ふ。曰く、幾し(五)。雞鳴く(六)者ありと雖も、已變ずることなし。之を望むに木雞に似たり(七)。其の德全し(八)。異雞敢て應ずる者なく、反つて走らんのみと。

(一) 紀氏にて名を渻子といふ者 (二) 虛驕は實なくして自ら誇る也、氣は血氣 (三) 響を聞いて應じ影を見て動き猶は外物に動かさるゝ也 (四) 眼に角を立てゝ蹴合はんとする氣ある也 (五) 幾しは可なるに近き也 (六) 敵雞鳴いて鬭はんとすれども己は之に應ずる心なき也 (七) 影響に應ぜず、勝敗を思はず、故に德全き也 (八) 他の雞も之に化せられて亦鬭ふ心なく、却き走らんのみ

音聲合而聚之、訓而受之、同於人民。故先會鬼神魑魅、次達八方人民、末聚禽獸蟲蛾。言血氣之類、心智不殊遠也。神聖知其如此、故其所教訓者、無所遺逸焉。

（一）中國より東方にある介氏といふ國なり　（二）六畜に馬牛羊豬犬豕をいふ　（三）偽知にまじりなき生れたるまゝの智をいふ　（四）鳥獸に禽獸をいふ　（五）魅はばけものの類　（六）遺すは物を遺逸する也　（七）血氣ある者はすべて其の心智人と大差なき也　（八）人と人に異ずる者とを皆教訓せざる所なきなり

宋有狙公者。愛狙、養之成羣。能解狙之意、狙亦得公之心。損其家口、充狙之欲。俄而匱焉。將限其食、恐衆狙之不馴於己也。先誑之曰、與若芧、朝三而暮四、足乎。衆狙皆起

宋に狙公といふ者あり、狙を愛し、之を養うて羣を成す。能く狙の意を解し、狙も亦公の心を得。其の家口を損して狙の欲に充つ。俄にして匱し。將に其の食を限らんとするに、衆狙の己に馴れざらんことを恐る。先づ之を誑いて曰く、若に芧を與へん、朝は三にして暮は四にして足るかと。衆狙皆起ちて怒る。俄にして曰く、若に芧を與へん、朝は四にして暮は三にして足るかと。衆狙皆伏して喜ぶ。物の能鄙を以て相籠すること皆此のごとし。聖人智を以て羣愚を籠すること、亦猶ほ狙公の智を以て衆狙を籠するがごとし。名實虧けずして、其をして喜怒せしむるかな。

率舞。簫韶九成。鳳皇來儀。此以レ聲致二禽獸一者也。然則禽獸之心。奚爲異レ人。形音與レ人異。而不レ知レ接レ之之道一焉。聖人無レ所レ不レ知。無レ所レ不レ通。故得二引而使一レ之焉。禽獸之智。有二自然與レ人童者一。其齊欲レ攝レ生。亦不レ假二智於人一也。牝牡相偶。母子相親。避レ平依レ險。違レ寒就レ溫。居則有レ群。行則有レ列。小者居レ内。壯者居レ外。飮則相携。食則鳴レ群。太古之時則與レ人同處。與レ人並行。帝王之時。始驚駭散亂矣。逮二於末世一隱伏逃竄。以避二患害一。

て以て患害を避く。

(一) 人の狀をして居れば聖智を得らるゝものと思ひ之を求むれども必ずしも之を得べからず (二) 黃帝は軒轅氏、炎帝は神農氏也 (三) 猛獸の名を取りて人に名づけ戰士に用ひたることあるを假りて言ひたる也 (四) 石を擊ち石を拊つは樂器を擊つ也 (五) 韶は舜の樂也、九成は九終也 (六) 來儀は來り舞ふ也 (七) 生を攝するは生を養ふ也 (八) 帝王は五帝三王を謂ふ (九) 人を見て驚き散亂する也

今東方介氏之國。其國人數數解二六畜之語一者。蓋偏知之所レ得。太古神聖之人。備知二萬物情態一。悉解二異類

今東方介氏(一)の國、其の國人數數(二)六畜の語を解する者、蓋し偏知(三)の得る所なり。太古神聖の人、備さに萬物の情態を知り、悉く(四)異類の音聲を解す。會して之を聚め、訓へて之を受けしめ、人民に同じくす。故に先づ鬼神魑魅(五)を會して、次に八方の人民に達し(六)、末に禽獸蟲蛾を聚む。(七)血氣の類、心智殊に遠からざるを言ふなり。神聖其の此の如くなるを知る、故に(八)其の教訓する所の者、遺逸する所なし。

面。牛首虎身。此有レ非レ人之狀。而有二大聖之德。夏桀殷紂魯桓楚穆。狀貌七竅皆同二於人。而有二禽獸之心。而衆人守二一狀。以求二至智。未レ可レ幾也。黄帝與二炎帝。戰二於阪泉之野。帥二熊羆狼豹貙虎。爲二前驅。鵰鶡鷹鳶爲二旗幟。此以レ力使二禽獸者也。堯使二夔典一レ樂。擊レ石拊レ石。百獸

同じけれども、而も禽獸の心あり。衆人一狀を守り、以て至智を求むとも、未だ幾ふべからざるなり。黄帝、炎帝と阪泉の野に戰ふ。(一)熊羆狼豹貙虎を帥ゐて前驅と爲し、鵰鶡鷹鳶を旗幟と爲す。此力を以て禽獸を使ふ者なり。堯、夔をして樂を典らしむ。(二)石を擊ち石を拊てば、百獸率ゐて舞ひ、(三)簫韶九成すれば、鳳皇來儀す。(四)此聲を以て禽獸を致す者なり。然らば則ち禽獸の心奚すれぞ人に異ならん。形音人と異にして、之に接するの道を知らざるなり。聖人は知らざる所なく、通ぜざる所なし。故に引いて之を使ふことを得。禽獸の智、自然に人と同じき者あり。其の齊しく生を攝せんと欲するや、(五)亦智を人に假らざるなり。牝牡相偶し、母子相親み、平を避け險に依り、寒を違り溫に就き、居るときは則ち羣あり、行くときは則ち列あり、小なる者は內に居り、壯なる者は外に居り、飮むときは則ち相攜へ、食するときは則ち羣に鳴く。太古の時は則ち人と同じく處り、人と並び行きしも、(六)帝王の時始めて驚駭し散亂せり。末世に逮んで、隱伏逃竄し

人取二童智一而遺二童狀一。衆人近二童狀一而疏二童智一。狀與レ我童者近而愛レ之。狀與レ我異者。疏而畏レ之。有二七尺之骸。手足之異。戴レ髮含レ齒。倚而趣者。謂二之人一。而人未三必無二獸心一。雖レ有二獸心一。以レ狀而見レ親矣。傅レ翼戴レ角分レ牙布レ爪。仰飛伏走。謂二之禽獸一。而禽獸未三必無二人心一。雖レ有二人心一。以レ狀而見レ疏矣。

狀我と童じき者は近づけて之を愛し、狀我と異なる者は疏んじて之を畏る。七尺の骸、(二)手足の異なるあり、髮を戴き齒を含み、(三)倚りて趣く者、之を人と謂ふ。而して人未だ必ずしも獸心なくんばあらず。獸心ありと雖も、(四)狀を以て親まる。翼を傅け角を戴き、牙を分ち爪を布き、仰いで飛び伏して走る。之を禽獸と謂ふ。而して禽獸未だ必ずしも人心なくんばあらず。人心ありと雖も、(五)狀を以て疏んぜらる。

(一)童は同の誤、此の一節は狀を取らずして心を取るべきを言ひたる也 (二)手足の異とは手足禽獸と異なるをいふ (三)倚りて趣くは相倚り提携して行く也 (四)狀人に同じきを以て親愛せらる (五)狀人と同じからざるを以て疏んぜらる

庖犧氏。女媧氏。神農氏。夏后氏。蛇身人

庖犧氏、女媧氏、神農氏、夏后氏は、蛇身人面、牛首虎鼻なり。此人に非ざるの狀あれども、而も大聖の德あり。夏桀、殷紂、魯桓、楚穆は、狀貌七竅皆人に

出於己者亡所殆矣。以此勝一身若徒。以此任天下若徒。謂不勝而自勝。不任而自任也。

(一) 名を以て任ぜられて、天下の主となるときは、身は少しも我よりこれを任ずるが故に之を失ふの患なく、天下は空當の如き也

粥子曰。欲剛必以柔守之。欲強必以弱保之。積於柔必剛。積於弱必強。觀其所積。以知禍福之鄉。強勝不若己。至於若己者剛。柔勝出於己者。其力不可量。老聃曰。兵強則滅。木強則折。柔弱者生之徒。堅強者死之徒。

粥子曰く、剛ならんと欲せば必ず柔を以て之を守れ、強ならんと欲せば必ず弱を以て之を保て。柔を積めば必ず剛、弱を積めば必ず強なり。(一)其の積む所を観て、以て禍福の郷ふことを知る。強は己に若かざるに勝つ、(二)己に若く者に至りては剛なり。柔は己に出づる者に勝つ、其の力量るべからず。老聃曰く、兵強ければ則ち滅ぶ、木強ければ則ち折る。柔弱は生の徒、堅強は死の徒なりと。

(一) 柔弱なれば福向ひ至り剛強なれば禍向ひ至る也 (二) 剛なりとは必ず折るゝことあるをいふ

狀不必童而智童。智不必童而狀童。聖

狀必ずしも童じからずして智童じきあり、智必ずしも童じからずして狀童じきあり。聖人は童智を取りて童狀を遺る。衆人は童狀を近づけて童智を疏んず。

者貴而美者賤。楊子問二其故一。逆旅小子對曰。其美者自美。吾不レ知二其美一也。其惡者自惡。吾不レ知二其惡一也。楊子曰。弟子記二之。行レ賢而去二自賢之行一。安往不レ愛哉

惡しき者は自ら惡しとす、吾其の惡しきを知らずと。楊子曰く、弟子之を記せ、賢(一)を行うて自ら賢とするの行を去てば、安くに往くとして愛せられざらんやと。

㊀ 逆旅は旅舍也 ㊁ 賢人の行を爲して自ら矜る心なければ、人之を賢として愛敬するを云ふ

天下有二常勝之道一。有二常不レ勝之道一。常勝之道曰レ柔。常不レ勝之道曰レ彊。二者亦レ知。而人未二之知一。故上古之言。彊先下不二己若一者上。柔先下出二於己一者上。先下不二己若一者上。至二於若レ己則殆矣。先レ

天下常に勝つの道あり、常に勝たざるの道あり。(一)常に勝つの道を柔と曰ふ、常に勝たざるの道を彊と曰ふ。二者知り亦し(二)、而して人未だ之を知らず。故に上古(三)の言に、(四)彊は己に若かざる者に先だつ。(五)柔は己に出づる者に先だつといへり。己に若かざるに先だつ者は、己に若くに至りては則ち殆し。己に出づるに先だつ者は殆き所なし。(六)此を以て勝つときは一身徒の若し。(七)此を以て任ずるときは天下徒の若し。勝たずして自ら勝ち、任ぜずして自ら任ずるを謂ふなり。

㊀ 即ち柔能く剛を制する也 ㊁ 亦は易の誤 ㊂ 上古の言は上古の人の語也 ㊃ 彊者は力の己に如かざる者にのみ勝つ也 ㊄ 柔者は世人の己に勝ることを知りて之と力を以て爭はず、是己に勝る者に勝つ也 ㊅ 此は柔を指す、徒は空歎也、柔虛を以て體と爲すが故に勝つは我が力に非ず、一身虛空の如く勞することなく危きことなし

膝行而前曰。向者夫子仰天歎曰。始以汝爲可教。今不可教。弟子欲請夫子辭。行不間。是以不敢。今夫子間矣。請問其過。老子曰。而睢睢而盱盱。而誰與居。大白若辱。盛德若不足。楊朱蹵然變容曰。敬聞命矣。其往也舍者迎將。家公執席。妻執巾櫛。舍者避席。煬者避竈。其反也舍者與之爭席矣。

ざるが若しと。楊朱蹵然(七)として容を變じて曰く、敬んで命を聞けりと。其の往(八)くや、舍者迎將(九)し、家公(一〇)席を執り、妻(一一)は巾櫛を執り、舍者席を避け、煬者(一二)竈を避く。其の反(一三)るや、舍者之と席を爭ふ。

(一)舍は旅舍也 (二)涫は盥也、涫漱は盥に湯を入れ手足を洗ふ用意をする也、巾は手拭、櫛はくし (三)途中に間なくして辭する也 (四)睢々盱々は共に目を張り仰ぎ見る貌にて跨誇なる貌なり (五)斯くては人と與に居るべからず (六)大白は甚だ潔白なることなり、甚だ潔白なる者は汚れたるが如く盛德ある者は德の足らざるが如し (七)蹵然は自ら安んぜざる貌 (八)楊朱の初め往く時をいふ (九)舍者は旅舍の人也、迎將は送迎也 (一〇)家公は旅舍の主人也 (一一)旅舍の主人の妻也 (一二)煬者は炊者也 (一三)既に老子の言を聞きて自ら謙ましたれば旅舍の人常人と思ひて復た敬せざる也

楊朱過宋。東之於逆旅。逆旅人有妾二人。其一人美。其一人惡。惡

楊朱宋に過り、東して逆旅に之く。逆旅の人妾二人あり。其の一人は美にして其の一人は惡し。惡しき者は貴うして美なる者は賤し。楊子其の故を問ふ。逆旅の小子對へて曰く、其の美なる者は自ら美とす、吾其の美なるを知らざるなり。其の

曰。先生既來。曾不レ廢レ藥乎。曰已矣。吾固告レ汝。曰。人將レ保レ汝。果保レ汝矣。非三汝能使二人保一レ汝。而汝不レ能レ使三人無二汝保一也。而焉用之感也。感豫出レ異。且二必有一レ感也。搖二而本身一。又無レ謂也。與レ汝遊者、莫二汝告一也。彼所二小言一。盡人毒也。莫レ覺莫レ悟。何相孰也。

して斯く人に感ぜらるゝや 〔一五〕 斯く人に感じ悅ばるゝは汝特異の處を人に示せば也 〔一六〕 人に感ぜられんとすれば却つて我が本來の心身を動かし其の謂れなきことなり 〔一七〕 汝に其の過を告ぐることなし 〔一八〕 小言する所は小人の言也、小人の言ふ所は盡く人の害毒となる事也 〔一九〕 孰は熟也、何ぞ相孰せんやとは何ぞ至德を成熟することを得んやと也

楊朱南之レ沛。老聃西遊二於秦一。邀二於郊一。至レ梁而遇二老子一。老子中道仰レ天而歎曰。始以レ汝爲レ可レ教。今不レ可レ教也。楊朱不レ答。至レ舍進二涫漱巾櫛一。脫二履戶外一。

楊朱南沛に之き、老聃西秦に遊ぶ。郊に邀へ梁に至りて老子に遇ふ。老子中道にして天を仰いで歎じて曰く、始め汝を以て教ふべしと爲ししも、今教ふべからざるなりと。楊朱答へず。〔一〕舍に至りて〔二〕涫漱巾櫛を進め、履を戸外に脫ぎて、膝行して前みて曰く、向に夫子天を仰いで歎じて曰へり、始め汝を以て教ふ可しと爲ししも、今教ふ可からずと。弟子請はんと欲せしも、〔三〕夫子行いて閒あらずと辭す、是を以て敢てせざりき。今夫子閒あり、其の過を請ひ問ふと。老子曰く、〔四〕而睢睢たり、而盱盱たり。〔五〕而誰と與にか居らん。〔六〕大白は辱の若く、盛德は足ら

若是。而況萬乘之主。身勞於國、而智盡於事。彼將任我以事、而效我以功。吾是以驚。伯昏瞀人曰。善哉觀乎。汝處已。人將保汝矣。無幾何而往。則戶外之屨滿矣。伯昏瞀人北面而立。敦杖蹙之乎頤。立。有間不言而出。賓者以告列子。列子提履徒跣而走。暨乎門。問

が能く人をして汝を保とせしむるに非ず、而して汝、人をして汝を保とすると無からしむること能はざるなり。(二四)而ち焉んぞ用て感ぜらるゝや。(二五)感豫は異を出せばなり。(二六)且に必ず感あらんとするや、而が本身を搖かす、又謂なきなり。汝と遊ぶ者(二七)汝に告ぐることなし。(二八)彼の小言する所は盡く人毒なり。覺ることなく悟ることなくんば、(二九)何ぞ相孰せんや。

(一) 伯昏瞀人又問ふ也 (二) 列子又對ふる也、十漿に食すとは十家を食ふべき約束にて泊りしを云ふ (三) 五漿先づ饋るとは五家は皆を要せずして饋遺せしなり (四) 聖人は其の德外に現れず、然樣あれども内現愚人の如し、然るに内の誠未だ解けざれば形諜として迹なきこと能はず、威儀外に現れて光を發する也 (五) 外の儀を以て人を鎭服せしむる故に、人をして貴人老人を輕んじて己を重んぜしめ種々の害を身に齎らす也 (六) 聖人は食漿を作りて人に饋る者、多分の利得ある者に非ず (七) 其の利益は薄く其の威權は輕き者なるに猶は貴人老人を貴ばずして我を貴ぶこと此の如し (八) 聞るを況んや萬乘の君主にして身國政に勞し智を政事に盡したる者我を見ば、將に我に任ずるに政事を以てし我に功業を成就させんとするならん、故に驚いて中道より反れりと也 (九) 汝は他國に往かずして國内に居るべし、然れども和光同塵にして德の外に現れざる樣にすること能はざれば、國内に居ると雖も人將に汝を以て師保と爲さんとすと也 (一〇) 列子の門に弟子等多く集り戶外の履滿ちたる也 (一一) 賓者は客を取扱ふ者也 (一二) 履をはくに暇あらず徒跣にて走り出づる也 (一三) 履を攝くは金言を留むるを云ふ (一四) 汝は如何に

中道而反。遇ニ伯昏瞀人一。伯昏瞀人曰。奚方而反。曰。吾驚焉。惡乎驚。吾食ニ於十漿一。而五漿先饋。伯昏瞀人曰。若レ是則汝何爲驚レ已。曰。夫内誠不レ解。形諜成レ光。以レ外鎭ニ人心一。使三人輕ニ乎貴老一。而𩞄ニ其所レ患。夫漿人特爲ニ食羹之貨一。無ニ多餘之贏一。其爲レ利也薄。其爲レ權也輕。而猶

して反ると。曰く、吾驚けりと。(一)惡にか驚けると。(二)吾十漿に食す。而して五(三)漿先づ饋ると。伯昏瞀人曰く、是の若くば則ち汝何すれぞ已を驚かしむると。曰く(四)夫れ内の誠解けず、形諜いて光を成す。(五)外を以て人心を鎭め、人をして貴老を輕んぜしめて、其の患ふる所を𩞄む、夫れ(六)漿人は、特に食羹の貨を爲し、多餘の贏なし。其の利たるや薄く、其の權たるや輕し。而るに猶ほ是の如し。(八)而るを況んや(七)萬乘の主、身國に勞して智事に盡きば、彼將に我に任ずるに事を以てして、我に效すに功を以てせんとす。吾是を以て驚くと。伯昏瞀人曰く、善いかな觀ることや。汝處らんのみ、人將に汝を保とせんとすと。幾何もなくして往けば、則ち(九)戸外の屨滿てり。伯昏瞀人北面して立ち、杖を敦てて之を頤に蹙へて立つ。(一〇)間ありて言はずして出づ。(一一)賓者以て列子に告ぐ。列子(一二)履を提げて徒跣して走る。門に曁び、問うて曰く、先生既に來る、(一三)曾て藥を廢かれざるかと。曰く、已し。吾固より汝に告げて曰へり、人將に汝を保とせんとす。果して汝を保とせり。汝

矣。已失矣。吾不及也。壺子曰。向吾示之以未始出吾宗。吾與之虛而猗移。不知其誰何。因以爲弟靡。因以爲波流。故逃也。然後列子自以爲未始學。而歸三年不出。爲其妻爨。食豕如食人。於事無親。雕琢復朴。塊然獨以其形立。份然而封戎。壹以是終。

因りて以て（四）弟靡を爲し、因りて以て波流を爲す。（五）故に逃れしなりと。然る後列子自ら以爲へらく、（六）未だ始より學ばずと。而して歸りて三年出でず。（七）其の妻の爲に爨ぎ、（八）豕を食ふこと人を食ふが如く、（九）事に於て親なく、（一〇）雕琢して朴に復り、（一一）塊然として獨り其の形を以て立ち、（一二）份然として封あらん哉。壹に是を以て終る。

（一）未だ始より吾が宗を出さざるは根柢を深くして現はさざるを謂ふ（二）猗移は委移の意、無心にして打ちまかせて隨ふ貌（三）其の誰何を知らずとは有るが如く無きが如く其の如何を知らざるを云ふ（四）弟靡は頹靡と同じ、弟靡波流は人と共に俯仰し變に應じて時に動く也（五）之を然する所以を知らず驚いて逃げ走れる也（六）我は學問に於て未だ得る所あらざる也（七）其の妻の爲に爨ぐは驕心を棄つる也（八）食は飼也、豕を養ふこと人を養ふ如くするは貴賤を忘るゝ也（九）事を爲せども自ら之に心を留めず親しく爲さざるが如き也（一〇）雕琢は聰明を去り去る也、朴に復るは小兒の純朴なるに立返る也（一一）塊然は無心の有様をいふ（一二）份は紛に同じ紛然の意、紛紛と物多き中に居ても人と封域を立つる所なき也。戎は哉の誤

子列子之齊。

子列子齊に之き、中道にして反り、伯昏瞀人に遇ふ。伯昏瞀人曰く、奚の方より

得而相焉。試齋將且復相之。列子入告壺子。壺子曰。向吾示之以太沖莫眹。是始見吾衡氣幾也。鯢旋之潘爲淵。止水之潘爲淵。流水之潘爲淵。濫水之潘爲淵。沃水之潘爲淵。氿水之潘爲淵。雍水之潘爲淵。汧水之潘爲淵。肥水之潘爲淵。是爲九淵焉。嘗又與來。

名實入らずとは有無共に忘るゝをいふ ㊄ 其氣下より上るを謂ふ微にして見え難し故に機と云ふ ㊅ 發せんとする氣ありて未だ發せざるを謂ふ ㊆ 季咸は人々の動く處を見て相する者なり ㊇ 齋はものいみして心をとゝのふる也 ㊈ 太沖は太虛也、莫眹はきざしを現さず際限を見ざる也 ㊉ 衡氣の機は氣機の動いて衡平の地に至りて止ること即ち動くが如くにして動かず靜かなるが如くして靜かならざる有樣をいふ (一一) 以下九淵の名を擧げたるは蓋し壺子が德機の動靜を喩へたるものなり、鯢旋は大魚の棲みて水の盤旋する也、潘は水の渦卷く處を云ふ (一二) 濫水は水の湧く處を謂ふ (一三) 沃水は水の上より流下する也 (一四) 氿水は水の旁穴より出づる也 (一五) 雍水は塞りて流れざる也 (一六) 汧水は泉水の流れ出てゝ汙池となるもの也 (一七) 肥水は同出別派の水也

明日又與之見壺子。立未定。自失而走。壺子曰。追之。列子追之而不及。反以報壺子曰。已滅

明日又之と壺子に見ゆ。立つこと未だ定まらざるに、自失して走る。壺子曰く、之を追へと。列子之を追へども及ばず。反りて以て壺子に報じて曰く、已に滅せり、已に失へり、吾及ばざるなりと。壺子曰く、向に吾之に示すに、(一)未だ始より吾が宗を出さざるを以てす。吾之と虛にして(二)猗移たり。(三)其の誰何を知らず。

明日又與レ之見二壺子一。出而謂二列子一曰。幸矣子之先生遇レ我也。有レ瘳矣。灰然有レ生矣。吾見二杜權一矣。列子入告二壺子一。壺子曰。向吾示レ之以二天壤一。名實不レ入。而機發二於踵一。此爲二杜權一。是殆見二吾善者機一也。嘗又與來。明日又與レ之見二壺子一。出而謂二列子一曰。子之先生坐不レ齊。吾無

明日又之と壺子に見ゆ。出でて列子に謂つて曰く、幸なるかな子の先生、我に遇うて瘳ゆることあり。(一)灰然として生あり。(二)吾權を杜ぐを見ると。列子入つて壺子に告ぐ。壺子曰く、向に吾之に示すに天壤(三)を以てす。(四)名實入らず、而して機(五)發すること踵に於てす。此を權を杜ぐと爲す。(六)是殆ど吾が善き者(七)の機を見るなり。嘗に又與に來れと。明日又之と壺子に見ゆ。出でて列子に謂つて曰く、子の先生坐して齊せず。(八)吾得て相するなし。試に齊せよ。將に且に復た之を相せんとすと。列子入りて壺子に告ぐ。壺子曰く、向に吾之に示すに(九)太沖莫眹を以てす。是殆ど吾が衡氣の機を見るなり。(一〇)鯢旋の潘を淵と爲す、(一一)止水の潘を淵と爲す、流水の潘を淵と爲す、(一二)濫水の潘を淵と爲す、(一三)沃水の潘を淵と爲す、(一四)氿水の潘を淵と爲す、(一五)雍水の潘を淵と爲す、(一六)汧水の潘を淵と爲す、(一七)肥水の潘を淵と爲す、是を九淵と爲す、嘗に又與に來れと。

(一) 灰は全に作るべし　(二) 權は機の少しく現る、をいふ　(三) 天壤は自然の土壤に一生意が萌動する處也　(四)

壷丘子曰。始吾以二夫子之道一爲レ至矣。則又有二至レ焉者一矣。壷子曰。吾與レ汝既二其文一未レ既二其實一。而固得レ道與。衆雌而無レ雄。而又奚卵焉。而以レ道與レ世抗。必信矣夫。故使二人得而相一レ汝。嘗試與來。以レ予示レ之。明日列子與レ之見二壷子一。出而謂二列子一曰。譆子之先生死矣。弗レ活矣。不レ可二以レ旬數一矣。吾見レ怪焉。見二濕灰一焉。列子入涕泣沾レ衾。以告二壷子一。壷子曰。向吾示レ之以二地文一。罪乎不レ誫不レ止。是殆見三吾杜二德幾一也。嘗又與來。

て得て汝を相せしむ。嘗試に與に來りて、(七)予を以て之に示せと。明日列子之と壺子に見ゆ。出でて列子に謂つて曰く、譆、子の先生死なん、活きじ。旬を以て數ふべからず。(八)吾怪を見たり、濕灰を見たりと。列子入り、涕泣して衾を沾し、以て壺子に告ぐ。壺子曰く、向に吾之に示すに(九)地文を以てす。(一〇)罪乎として誫かず止らず。是殆ど吾が(一一)德幾を杜ぐを見るなり。嘗に又與に來れと。

(一) 神巫は相者也 (二) 其の月日を豫言するに皆驗ある也 (三) 心醉は心迷ふ也 (四) 其の文を既して未だ其の實を既さずとは、其の外のみを究めて未だ内を究めざるを謂ふ (五) 而固より道を得たるかとは、未だ道を得たりとすべからずとの意 (六) 我が道未だ世に感じ和せらるゝに至らずして我が道を以て世にたかぶり世に信ぜられんとするかと也 (七) 神巫をして予を相せしめよ (八) 吾怪しき相を見たり、吾其の氣の濕灰の如きを見たり (九) 地文は靜にして動かざる處をいふ (一〇) 罪は萌の誤、萌は生ぜんとして未だ生ぜず其のきざしを内に含むを謂ふ (一一) 幾は動の微少なる處をいふ、德幾を杜ぐは、德幾の外に發せんとするを杜ぎ閉ぢて現さざる也

所出者石也。而燼之所涉者火也。其人曰、不知也。魏文侯聞之、問子夏曰。彼何人哉。子夏曰。以商所聞夫子之言。和者大同於物。物無得傷閡者。游金石。蹈水火。皆可也。文侯曰。吾子奚不爲之。子夏曰。刳心去智。商未之能。雖然試語之有暇矣。文侯曰。夫子奚不爲之。子夏曰。夫子能之而能不爲者也。文侯大說。

る者なりと。文侯大に說ぶ。

(一) 燔燔は火をあふり立つること (二) 火中を往來して燃れる者とは見えざる也 (三) 之を傷折せしむる也 (四) 耳目聰明、七竅も人の如し。七竅は耳目鼻口也 (五) 商は子夏の名 (六) 和者は道と同體の人を謂ふ大同は道と合體する也 (七) 今よりまゝよる也

有神巫自齊來。處於鄭。命曰季咸。知人死生存亡禍福壽夭。期以歲月旬日。如神。鄭人見之。皆避而走。列子見之而心醉。而歸以告

神巫あり、齊より來りて鄭に處る、命けて季咸と曰ふ。人の死生存亡禍福壽夭を知り、期するに歲月旬日を以てすること神の如し。鄭人之を見て皆避けて走る。列子之を見て心醉し、歸りて以て壺丘子に告げて曰く、始め吾夫子の道を以て至れりと爲ししに、則ち又焉より至れる者ありと。壺子曰く、吾汝と其の文を既して、未だ其の實を既さず、而固より道を得たるか。衆雌にして雄なくんば、又奚の卵かあらん。而して道を以て世と抗す、必ず信ぜられんとするか。故に人をし

趙襄子率ニ徒十萬ー狩ニ於中山ー。藉レ芿燔レ林。扇赫百里。有下一人從ニ石壁中ー出。隨ニ煙燼ー上下。衆謂鬼物。火過徐行而出。若下無レ所ニ經涉ー者上。襄子怪而留レ之。徐而察レ之。形色七竅人也。氣息音聲人也。問奚道而處レ石。奚道而入レ火。其人曰。奚物而謂レ石。奚物而謂レ火。襄子曰。而嚮之

趙襄子徒十萬を率ゐて中山に狩す。芿を藉き林を燔く、(一)扇赫百里なり。一人の石壁の中より出で、煙燼に隨つて上下するあり。衆謂へらく鬼物なりと。火過ぎて徐行して出づ、(二)經涉する所なき者の若し。襄子怪みて(三)之を留む。徐に之を察れば、(四)形色七竅も人なり。氣息音聲も人なり。問ふ、奚の道あり石に處り、奚の道ありて火に入ると。其の人曰く、奚の物ありて石と謂ひ、奚の物ありて火と謂ふやと。襄子曰く、而が嚮に出でし所の者は石なり、而が嚮に涉りし所の者は火なりと。其の人曰く、知らざるなりと。魏の文侯之を聞き、子夏に問うて曰く、彼何人ぞやと。子夏曰く、(五)商が夫子に聞きし所の言を以てするに、(六)和者は物に大同す、物傷閡(七)することを得る者なし。金石に游び水火を踏むも皆可なりと。文侯曰く、吾子奚ぞ之を爲さざると。子夏曰く、心を刳き智を去ること、商未だ之を能くせず。然りと雖も試に之を語ること暇ありと。文侯曰く、夫子奚ぞ之を爲さざると。子夏曰く、夫子は之を能くし、而して能く爲さざ

萬物之多、而唯蜩翼之知。吾不反不側、不以萬物易蜩之翼。何爲而不得。孔子顧謂弟子曰、用志不分、乃凝於神。其痀僂丈人之謂乎。丈人曰、汝逢衣徒也。亦何知問是乎。脩汝所以、而後載言其上。

腎すれに蜩を取り遺すこと錙銖の間に過ぎぬ ●(四) 吾が立ちて居ること豎てる樹の株の如く也、株は豎、拘は樹の根の土に入らぬ部 ●(五) 吾が臂を執かすこと槁木の枝の如く也 ●(六) たゞ蜩翼のみを見て他の物を見ざる也 ●(七) 反せず側せずは身動きせざること ●(八) 神に似る也 ●(九) 逢衣は縫の大なる者にて儒者の服なり ●(一〇) 所以は所爲也、汝が本職の仁義を修めて然る後に更に其の上を言へと也

海上之人、有好漚鳥者。毎旦之海上、從漚鳥游。漚鳥之至者、百住而不止。其父曰、吾聞漚鳥皆從汝游。汝取來。吾玩之。明日之海上、漚鳥舞而不下也。故曰、至言去言。至爲無爲。齊智之所知則淺矣。

海上の人、漚鳥を好む者あり。毎旦海上に之き、漚鳥に從つて游ぶ。漚鳥の至る者、百住にして止らず。其の父曰く、吾聞く、漚鳥皆汝に從つて游ぶと。汝取り來れ、吾之を玩ばんと。明日海上に之きしに、漚鳥舞うて下らず。故に曰く、至言は言を去る、至爲は爲すことなし。齊智の知る所は則ち淺し。

●(一) 漚鳥は鷗鳥也、かもめ ●(二) 百住は百數也

察レ子則人也。請問蹈レ水有レ道乎。曰亡。吾無レ道。吾始二乎故一。長二乎性一。成二乎命一。與レ齎俱入。與レ汨偕出。從二水之道一而不レ爲レ私焉。此吾所二以道一レ之也。孔子曰。何謂下始二乎故一。長二乎性一。成中乎命上也。曰。吾生二於陵一而安二於陵一故也。長二於水一而安二於水一性也。不レ知三吾所二以然一而然命也。

仲尼適レ楚。出二於林中一。見二痀僂者承レ蜩猶レ掇レ之也。仲尼曰。子巧乎。有レ道邪。曰。我有レ道也。五六月纍二垸二一而不レ墜。則失者錙銖。纍三而不レ墜。則失者十一。纍レ五而不レ墜。猶レ掇レ之也。吾處也若二橛株駒一。吾執レ臂若二槁木之枝一。雖二天地之大一。

仲尼楚に適き、林中に出で、(一)痀僂の者の(二)蜩を承ること猶ほ之を掇ふがごときを見る。仲尼曰く、子は巧なるかな、道あるかと。曰く、我道あり。(三)五六月垸二を纍ねて墜さざれば、則ち失ふ者錙銖、三を纍ねて墜さざれば、則ち失ふ者十の一、五を纍ねて墜さざれば、猶ほ之を掇ふがごとし。(四)吾が處るや橛株駒の若く、(五)吾が臂を執ること槁木の枝の若く、天地の大、萬物の多きと雖も、(六)唯蜩翼を之れ知る。吾反せず側せず、萬物を以て蜩の翼に易へず。何を爲してか得ざらんと。(七)孔子顧みて弟子に謂つて曰く、志を用ふること分たざれば、則ち(八)神に疑ると、其れ痀僂丈人の謂かと。丈人曰く、汝は(九)逢衣の徒なり、亦何ぞ是を問ふことを知らんや。(一〇)汝が所以を脩めて、而して後に載ち其の上を言へと。

(一) 痀僂はせむし也　(二) 蜩は蟬、承は捕る也　(三) 垸は丸也、五六ケ月丸二個を竿の先に載せて落ちぬことを錬

也。見一丈夫游之。以爲有苦而欲死者也。使弟子並流而承之。數百步而出。被髮行歌。而游於棠行。孔子從而問之曰。呂梁懸水三十仞。流沫三十里。黿鼉魚鼈所不能游。向吾見子道之。以爲有苦而欲死者。使弟子並流將承子。子出而被髮行歌。吾以子爲鬼也。

うて棠行に游ぶ。孔子從つて之に問うて曰く、呂梁は懸水三十仞、流沫三十里、黿鼉魚鼈の游ぐ能はざる所なり。向に吾、子の之を道む(六)を見て以爲へらく、苦おりて死せんと欲する者なりと。弟子をして流に竝うて、將に子を承はしめんとす。子出でて髮を被り行ゝ歌ふ。吾、子を以て鬼なりと爲ししに、子を察すれば則ち人なり。請ひ問ふ、水を蹈むこと道あるかと。曰く、亡し。吾道なし。(七)吾故に始まり、性に長じ、命に成り、(八)齎と俱に入り、(九)汨と偕に出で、水の道に從つて私を爲さず。此吾が之を道む所以なりと。孔子曰く、何をか故に始まり、性に長じ、命に成ると謂ふや。曰く、吾陵に生れて陵に安んずるは故なり、水に長じて水に安んずるは性なり、吾が然る所以を知らずして然るは命なりと。

(一) 呂梁は地名　(二) 懸水は瀑布也　(三) 流沫は泡立ちて流るゝ也　(四) 黿は大鼈、鼉は水蟲にて形蜥蜴に似たる者　(五) 棠行は宜しく堤下に作るべし　(六) 道は蹈む也　(七) もと陸地に生れしが成長するに及んで水邊に居り習性となり、天命と同じきに至れり　(八) 齎は齊の誤、水の渦巻くところ　(九) 汨は水の湧き出る處

輕レ水也。善游者之數能也。忘レ水也。乃若下夫沒人之未二嘗見一舟也而謖操レ之也。彼視レ淵若レ陵。視二舟之覆一猶二其車却一也。覆二却萬物一方陳二乎前一。而不レ得レ入二其舍一。惡往而不レ暇。

未だ其の內實を究めず ㈧ 汝其の外面のみを見て之を道とするか ㈨ 萬物の顚覆し又は退却する者吾が前に陳列すと雖も毫も心に掛けざる也、其の舍は神明の宿る所即ち心を謂ふ

以レ瓦摳者巧。以レ鉤摳者憚。以二黃金一摳者惛。巧一也。而有レ所レ矜則重レ外也。凡重レ外者拱レ內。

瓦を以て摳る者(一)は巧なり、(二)鉤を以て摳る者は憚る、黃金を以て摳る者は惛し。巧は一なり、而して(三)矜む所あるときは則ち外を重んず。凡そ外を重んずる者は(四)內を拱すと。

㈠ 摳るは手中に物を藏して之を言ひ當つる戲なり ㈡ 鉤は帶鉤也 ㈢ 矜は矜吝也 ㈣ 內を拱すとは內心扞格するを謂ふ、賭物を他人に取られじとふせぎ鬪ふ也

孔子觀二於呂梁一。懸水三十仞。流沫三十里。黿鼉魚鼈之所レ不レ能レ游

孔子(一)呂梁に觀ぶ。(二)懸水三十仞、(三)流沫三十里、(四)黿鼉魚鼈の游ぐこと能はざる所なり。一丈夫の之に游ぐを見る。以爲へらく、苦ありて死せんと欲する者なりと。弟子をして流に竝うて之を承はしむ。數百步にして出で、髮を被り行〻歌

顏回問乎仲尼曰。吾嘗濟於觴深之淵矣。津人操舟若神。吾問焉曰。操舟可學邪。曰可。能游者可教也。善游者數能。乃若夫沒人則未嘗見舟而謖操之者也。吾問焉而不告。敢問何謂也。仲尼曰。譆。吾與若玩其文也久矣。而未達其實。而固且道與。能游者可教也。

顏回仲尼に問うて曰く、吾嘗て觴深(一)の淵を濟る。津人(二)舟を操ること神の若し。吾問うて曰く、舟を操ること學ぶべきかと。曰く、可なり。能く游ぐ者は教ふ可し、(三)善く游ぐ者は數〻能くす。乃ち夫の沒人(四)の若きは、則ち未だ嘗て舟を見ざるも、而も謖(五)つて之を操る者なりと。吾問うて告げず。敢て問ふ何の謂ぞや。仲尼曰く、(六)譆、吾若と、(七)其の文に玩ふや久し、而して未だ其の實に達せず。(八)固より且つ道とするか。能く游ぐ者の教ふべきは水を輕んずればなり。善く游ぐ者の數〻能くするは水を忘るればなり。乃ち夫の沒人の未だ嘗て舟を見ずして、而して謖つて之を操る若きや、彼淵を視ること陵の若く、舟の覆るを視ること猶ほ其の車の卻くがごとし。萬物を覆卻して方に前に陳ぬれども、其の舍に入るを得ず。惡くに往くとして暇あらざらん。

(一)觴深は淵の名　(二)津人は渡守也　(三)善く游ぐ者は水を恐れざる故舟を操ることを能くする者多し　(四)沒人は能く水中に入る者　(五)謖は起也、たちぬけに舟を操ることを得る也　(六)嘻と同じ　(七)外面のみを習ひて

術以告レ爾。懼ニ王之謂ヒ隱ニ於爾一也。且一言。我養レ虎之法。凡順レ之則喜。逆レ之則怒。此有ニ血氣一者之性也。然喜怒豈妄發哉。皆逆レ之之所レ犯也。夫食レ虎者。不下敢以ニ生物一與中之上。為ニ其殺レ之之怒一也。不下敢以ニ全物一與中之上。為ニ其碎レ之之怒一也。時ニ其饑飽一、達ニ其怒心一。虎之與レ人異類。而媚ニ養レ己者一順也。故其殺レ之逆也。然則吾豈敢逆レ之使レ怒哉。亦不ニ順レ之使ヒ喜也。夫喜之復也必怒。怒之復也常喜。皆不レ中也。今吾心無ニ逆順一者也。則鳥獸之視レ吾。猶ニ其儕一也。故游ニ吾園一者。不レ思ニ高林曠澤一。寢ニ吾庭一者。不レ願ニ深山幽谷一。理使レ然也。

し、其の怒心に達す。虎の人と異類にして、而も己を養ふ者に媚ぶるは、順(八)なればなり。故に之を殺すは逆なり。然らば則ち吾豈敢て之に逆うて怒らしめんや。亦之に順うて喜ばしめざるなり。夫れ喜の復するや必ず怒る、怒の復するや常に喜ぶ、皆中ならざればなり。今吾が心逆順なき者ならば、則ち鳥獸の吾を視ること猶ほ其の儕のごとくならん。故に吾が園に游ぶ者は、高林曠澤を思はず、吾が庭に寢ぬる者は、深山幽谷を願はず。理然らしむるなり。

(一) 牧正は六畜を養ふ者 (二) 役人は下役人也 (三) 鵰鶚は共に鷙鳥也、くまたか (四) 孳尾は牝牡交接する也 (五) 翼にて打ち合ひ牙にて噛み合ふことをせぬ也 (六) 梁鴦の死後其の術を傳ふる者なきを慮る也 (七) 當に饑ゑもせず飽きもせぬ様にし、其の怒は何に由つて發するかを審に知りて之に逆はざる也 (八) 順は其の性に順ふ也

猜慮。外矜二觀聽一。追幸昔日之不二焦溺一也。怛然内熱。惕然震悸矣。水火豈復可レ近哉。自レ此之後。范氏門徒。路遇二乞兒馬醫一。弗二敢辱一也。必下レ車而揖レ之。宰我聞レ之。以告二仲尼一。仲尼曰。汝弗レ知乎。夫至信之人。可三以感二物也。動二天地一感二鬼神一横二六合一而無二逆者一。豈但履二危險一入二水火一而已哉。商丘開信二僞物一猶不レ逆。況彼我皆誠哉。小子識レ之。

周宣王之牧正有二役人梁鴦者一。能養二野禽獸一。委二食於園庭之内一。雖二虎狼鵰鶚之類一。無レ不二柔馴一者。雄雌在レ前。孳尾成レ羣。異類雜居。不二相搏噬一也。王慮三其術終二於其身一。令三毛丘園傳二之。梁鴦曰。鴦賤役也。何

周の宣王の牧正に、役人梁鴦といふ者あり。能く野の禽獸を養ひ、食を園庭の内に委む。虎狼鵰鶚〔一〕の類と雖も、柔馴せざる者なし。雄雌前に在り、孳尾羣を成し、異類雜居して相搏噬〔二〕せず。〔三〕王其の術の其の身に終らんことを慮り、毛丘園をして之を傳へしむ。梁鴦曰く、鴦は賤役なり、何の術ありて以て爾に告げん。王の爾に隱せりと謂はんことを懼るゝや、且く一言せん。我が虎を養ふの法は、凡そ之に順ふときは則ち喜び、之に逆ふときは則ち怒る。此血氣ある者の性なり。然れども喜怒豈妄りに發せんや。皆逆ふの犯す所なり。夫れ虎を食ふ者は、敢て生物を以て之に與へず。其の之を殺さんとして怒るが爲なり。敢て全物を以て之に與へず。其の之を碎かんとして怒るが爲なり。其の饑〔四〕飽を時に

言レ之。商子ニ客之宿ニ吾舍一也。聞レ譽ニ范氏之勢一。能使ニ存者亡。亡者存。富者貧。貧者富。吾誠レ之無ニ二心一。故不レ遠而來。及レ來以ニ子黨之言皆實一也。唯恐ニ誠レ之之不一レ至。行レ之之不レ及。不レ知ニ形體之所レ措。利害之所レ存也。心一而已。物亡ニ迕者一。如レ斯而已。今昉知ニ子黨之誕一レ我。我內藏ニ

しく、貧しき者をして富ましむと。吾之を誠とし二心なし(二)、故に遠しとせずして來れり。來るに及んで、子が黨の言皆實ならんと以ふや、唯之を誠にするの至らず、之を行ふの及ばざらんことを恐れて、形體の措く所、利害の存する所を知らざるなり。(三)心一なるのみ、物迕ふ者なし。斯の如きのみ。今昉めて子が黨の我を誕けるを知りて、我內に猜慮を藏し、外觀聽に矜ひ、追うて昔日の焦溺せざりしを幸なりとし、(四)怛然として內熱し、(五)惕然として震悸す。水火豈復た近づくべけんやと。此より後、范氏の門徒、路に乞兒馬醫に遇ふとも敢て辱しめず、必ず車を下りて之を揖せり。宰我之を聞き、以て仲尼に告ぐ。仲尼曰く、汝知らずや、夫れ至信の人は以て物を感ずべし。天地を動かし、鬼神を感ぜしめ、(六)六合に横はれども逆ふ者なし。豈但危險を履み水火に入るのみならんや。商丘開僞物を信ずるすら猶ほ逆はず、況んや彼我皆誠なるをや。小子之を識せと。

(一) 此に一事の思ひ當れる者あり　(二) 二心なきは疑ふ心なき也　(三) 心事一にて他を思はざる故物之に逆はざる也　(四) 怛然は驚く貌　(五) 惕然は懼るゝ貌　(六) 六合は上下四方をいふ、横はるは縱横に馳け廻る也

百金。衆皆競應。商丘開以爲信然。遂先投下。形若飛鳥。揚於地。骪骨無碪。范氏之黨以爲偶然。未詎怪也。因復指河曲之淫隈曰。彼中有寶珠。泳可得也。商丘開復從而泳之。旣出果得珠焉。衆昉同疑。子華昉令豫肉食衣帛之次。俄而范氏之藏大火。子華曰。若能入火取錦者。從所得多少賞若。商丘開往無難色。入火往還。埃不漫。身不焦。范氏之黨以爲有道。乃共謝之曰。吾不知子之有道而誕子。吾不知子之神人而辱子。子其愚我也。子其聾我也。子其盲我也。敢問其道。

を知らずして子を辱しむ。子其れ我を愚なりとせん、子其れ我を聾なりとせん、子其れ我を盲なりとせん。敢て其の道を問ふと。

〇應は開應也 〇金は貨也、あたひ 〇[illegible]は自[illegible]也、衆昉は衆に[illegible]る也 〇漫ならざるは汚れて害はず る也 〇[illegible]は[illegible]也 〇誕はあざむく也 〇骪は骨を曲す也、碪は突き叩く也、詖は[illegible]し突くこと、此は骨を打つ也 〇誕言は欺言也、誕にとくふく言ふこと 〇[illegible]と同じ 〇昉は始也 〇淫隈は水の淵まく言也 〇昉は始也 〇肉を食ひ帛を衣る者の類に列する也 〇漫せずとは埃塵を蒙らざる也

商丘開曰。吾亡道。雖吾之心。亦不知所以。雖然有一於此。試與子

商丘開曰く、吾道なし。吾が心と雖も亦所以を知らず。然りと雖も此に一あり、試に子が與に之を言はん。曩に子が二客の吾が舍に宿るや、范氏の勢を譽むるを聞くに、能く存する者をして亡し、亡する者をして存し、富める者をして貧

假ㇾ糧荷ㇾ畚。之ニ子華之門一。子華之門徒。皆世族也。縞衣乘軒。緩步闊視。顧見ニ商丘開。年老力弱。面目黎黑。衣冠不ㇾ檢。莫ㇾ不ㇾ眲ㇾ之。既而狎侮欺詒。攩拯挨抌。亡ㇾ所ㇾ不ㇾ爲。商丘開常無ニ慍容一。而諸客之技單。憊ニ於戲笑一。遂與ニ商丘開一俱乘ニ高臺一。於ニ衆中一漫言曰。有ニ能自投下者一。賞ニ

年老い力弱く、面目黎黑、衣冠檢ならざるを見て、之を眲(五)らざるはなし。既にして狎れ侮りて欺詒し(六)、攩拯挨抌(七)、爲さざる所なし。商丘開常に慍容なく、而して諸客の技單き、戲笑に憊る。遂に商丘開と倶に高臺に乘り、衆中に於て漫言(八)して曰く、能く自ら投下する者あらば百金を賞せんと。衆皆競ひ應ず。商丘開以て信に然りと爲し、遂に先づ投下す。形飛鳥の地に揚るが若く、骪骨(九)碼るなし。范氏の黨以て偶然と爲し、未だ詎(一〇)を怪まざるなり。因つて復た河曲の淫隈(一一)を指して曰く、彼の中に寶珠あり、泳りて得べしと。商丘開復た從つて之に泳ぐ。既にして出づれば果して珠を得たり。衆昉めて(一二)同じく疑ふ。子華昉めて肉食衣帛(一三)の次に豫らしむ。俄にして范氏の藏大に火く。子華曰く、若能く火に入りて錦を取らば、得る所の多少に從ひて若を賞せんと。商丘開往いて難る色なく、火に入りて往還するに、埃(一四)漫せず、身焦れず。范氏の黨以て有道と爲し、乃ち共に之に謝して曰く、吾、子が有道なるを知らずして子を誕く。吾、子の神人なる

卿之右。目所偏視、晉國爵之。口所偏肥、晉國黜之。游其庭者侔於朝。子華使其俠客以智鄙相攻、彊弱相凌。雖傷破於前、不用介意。終日夜以此爲戲樂。國殆成俗。禾生子伯范氏之上客。出行經坰外、宿於田更商丘開之舍。中夜禾生子伯二人相與言子華之名勢、能使存者亡、亡者存、富者貧、貧者富。

以て相攻め、彊弱をもて相凌がしむ。前に(六)傷破すと雖も、用て意に介せず。日(七)夜を終へて此を以て戲樂と爲し、國殆ど俗を成せり。禾生、子伯は范氏の上客なり。出行して坰外(八)を經、田更(九)商丘開の舍に宿りぬ。中夜に禾生、子伯の二人、相與に言ふ、子華の名勢(一〇)、能く存する者をして亡し、亡する者をして存し、富める者をして貧しく、貧しき者をして富ましむと。

(一) 私名を善くすとは俠名を得るなり (二) 子華が特に目を屬する者 (三) 子華が殊に嫌ふ者 (四) 子華の庭に游ぶ者百官の朝廷に仕ふるが如し (五) 智鄙は智愚也 (六) 子華の前に傷を受け苦しむ者ありても意に介せざる也 (七) 終日終夜也 (八) 坰外は郊野の外也 (九) 田更は野老也 (一〇) 名勢は聲名勢力也

商丘開先窘於飢寒、潛於牖北聽之。因

商丘開先に飢寒に窘み、牖北に潛む。之を聽き、因りて糧を假り畚を荷うて子華の門に之く。子華の門徒は皆世族なり。縞衣乘軒緩步闊視し、顧みて商丘開が

人曰。是射之射一也。非二不射之射一也。當下與レ汝登二高山一履二危石一臨中百仞之淵上若能射乎。於レ是無人遂登二高山一。履二危石一。臨二百仞之淵一。背逡巡。足二分垂在レ外。揖二禦寇一而進レ之。禦寇伏レ地汗流至レ踵。伯昏無人曰。夫至人者。上闚二青天一。下潜二黄泉一。揮斥八極一。神氣不レ變。今汝怵然有二恂目之志一。爾於レ中也殆矣夫。

て之を進む。禦寇地に伏して、汗流れて踵に至る。伯昏無人曰く、夫れ至人は、上は青天を闚び、(七)下は黄泉に潜み、(八)八極を揮斥すれども、(九)神氣變ぜず。今汝怵然として恂目の志あり。(一〇)爾中るに於てや殆いかなと。

(一) 弓を滿月の如く張る也 (二) 鏑矢は矢の根を施しゝ矢也、復沓は相重なる也 (三) 前の矢の未だ的に達せざる内に後の知既に肘の上に在るなり (四) 象人は人形也 (五) 射者の射は自慢の心あり、射るも射ざるも巧拙も皆忘れて心に留めざる者の射に非ず (六) 足を三分して其の一分を石上にかけ、二分は垂れて谷の上に在る也 (七) 天に上る也 (八) 地の中に入る也 (九) 八方の世界のはてを馳け廻る也 (一〇) 怵然は懼るゝ貌、恂目はまたゝきする也

范氏有レ子。曰二子華一。善養二私名一。擧レ國服レ之。有レ寵二於晉君一。不レ仕而居二三

范氏に子あり、子華と曰ふ。善く私名を養ひ、(一)國を擧げて之に服す。晉君に寵あり、仕へずして三卿の右に居る。(二)目の偏に視る所、晉國之を爵す、(三)口の偏に肥る所、晉國之を黜く。(四)其の庭に游ぶ者朝に侔し。子華其の俠客をして智鄙を(五)

夫醉者之墜於車也。雖疾不死。骨節與人同。而犯害與人異。其神全也。乘亦弗知也。墜亦弗知也。死生驚懼不入乎其胸。是故逆物而不慴。彼得全於酒。而猶若是。而況得全於天乎。聖人藏於天。故物莫之能傷也。

夫れ醉へる者の車より墜つるや、疾むと雖も死せず。骨節人と同じうして、犯害人と異なるは、其の神全ければなり。乘るも亦知らざるなり、墜つるも亦知らざるなり。死生驚懼其の胸に入らず、是の故に物に逆うて慴れず。彼全きことを酒に得てすら、猶ほ是の若し。而るを況んや全きことを天に得るをや。（一）聖人は天に藏る、（二）故に物之を能く傷つくること莫きなり。

（一）天地無爲の趣を得る也　（二）無心にして己を忘れ天に藏する也

列禦寇爲伯昏無人射。引之盈貫。措杯水其肘上。發之。鏑矢復沓。方矢復寓。當是時也。猶象人也。伯昏無

列禦寇、伯昏無人の爲に射る。（一）之を引いて盈貫し、杯水を其の肘上に措きて之を發つに、（二）鏑矢復沓し、（三）方に矢いれば復た寓る。是の時に當りてや、猶ほ象人（四）のごとし。伯昏無人曰く、是射の射なり、不射の射に非ざるなり。當に汝と高山に登り、危石を履み、百仞の淵に臨む（五）べし。若能く射んかと。是に於て無人遂に高山に登り、危石を履み、百仞の淵に臨み、背は逡巡し、（六）足二分垂れて外に在り。禦寇を揖し

也。非二智巧果敢之列一。姫魚語レ女。凡有二貌像聲色一者。皆物也。物與レ物何以相遠也。夫奚足三以至二乎先一。是色而已。則物之造二乎不レ形。而止二乎無レ所レ化。夫得レ是而窮レ之者焉得レ爲レ正焉。彼將丁處二乎不深之度一而藏二乎無端之紀一。游丙乎萬物之所乙終始甲。壹二其性一。養二其氣一。含二其德一。以通二乎物之所一レ造。夫若レ是者。其天守全。其神無レ郤。物奚自入焉。

を得て之を窮めば、焉んぞ正と爲すことを得ん。彼將に不深(一〇)の度に處り、無端の紀に藏れ、(一一)萬物の終始する所に游ばんとす。其の性を壹(一二)にし、其の氣を養ひ、其の德を含み、以て(一三)物の造る所に通ず。夫れ是の若くなる者は、其の天守(一四)全く、其の神郤なし。(一五)物奚くよりして入らん。

㊀ 關尹は名は喜、老子に勸めて書を著さしめし者列子とは異代の人なれども假りて言ひたる也 ㊁ 至人は神人をいふ、潛行すれども空しからずとは水中を行くこと地上を行くが如き也 ㊂ 純氣は至純至眞の氣にて人の性分の氣也 ㊃ 智巧果敢の及ぶ所に非ず、列は例也 ㊄ 姫は居、魚は吾の誤 ㊅ 人も禽獸蟲魚も皆一氣の形に現れし者なるを謂ふ ㊆ 先は造化の始なり、造化の始は無形無色の者也、凡そ有形の物は皆相遠からず、無形無色の物の萬物の上に超然たるに如かず ㊇ 均しく是貌像聲色ある者なり、然れども其の始は皆不形に成りて化する所なきに在りたる者なり、形せざるは上の未だ氣を見さざる也、化する所なきは造化未萠の始を謂ふ止は在なり ㊈ 是は貌像聲色を謂ふ、之は終始を謂ふ、貌像聲色を捉へて物の終始を窮めんとするは正論と爲すことを得ず 一〇 不深の度は目前淺近の法也、無端は無始也、淺近の法と雖も其の本は無始よりせざるはなきを謂ふ 一一 萬物の終始する所を優游自得する也 一二 壹は純壹也 一三 造化と冥合する也 一四 其の氣純一にして心神隙間なし 一五 物能く之を害するなし

而後。九年之後。横二心之所一レ念。横二口之所一レ言。亦不レ知二我之是非利害歟一。亦不レ知二彼之是非利害歟一。亦不レ知下夫子之爲二我師一若人之爲中我友上。内外進矣。而後眼如レ耳。耳如レ鼻。鼻如レ口。無レ不レ同也。心凝形釋。骨肉都融。不レ覺二形之所一レ倚。足之所一レ履。隨レ風東西。猶二木葉幹殼一。竟不レ知二風乘一レ我邪。我乘レ風乎。今女居二先生之門一。曾未二浹時一。而懟憾者再三。女之片體。將二氣所一レ不レ受。汝之一節。將二地所一レ不レ載。履レ虚乘レ風。其可レ幾乎。尹生甚怍。屏息良久。不二敢復言一。

(一) 章戴は尹生の名　(二) 衆蠶は僻解けたる也　(三) 嶮は眼の誤　(四) 若人は伯高子を指す　(五) 一所に一顧也　(六) 眞に言也、是非を念ひ利害を言へども内外一致して是を是とし利を利とする心なき也　(七) 骨を解くは面相をくずす也　(八) 心境と化して彼我彼此の別全く消き消つる也　(九) 幹殼は樹皮也　(十) 浹時は時を亘る也　(十一) 此の如く身を有し物を用ふる間にては身體の一節だも天地は受け載することと能はざるべし

列子問二關尹一曰。至人潛行不レ空。蹈レ火不レ熱。行二乎萬物之上一而不レ慄。請問何以至二於此一。關尹曰。是純氣之守

列子關尹に問うて曰く、(一)至人は潜行すれども窒しからず、火を蹈めども熱からず、萬物の上に行きて慄れず。(二)請ひ問ふ、何を以てか此に至ると。關尹曰く、是ん純氣を守ればなり、(三)(四)智巧果敢の列に非ず。(五)居れ吾女に語らん。凡そ貌像聲色ある者は皆物なり。(六)物と物と何を以て相遠からんや。夫れ奚ぞ以て先に至る(七)に足らん。(八)是色のみ、則ち物の形せざるに造りて、化する所なきに止る。夫れ是(九)

至レ此乎。姬將レ告下汝所レ學二於夫子一者上矣。自下吾之事二夫子一友中若人上也。三年之後。心不三敢念二是非一。口不三敢言二利害一。始得二夫子一眄一而已。五年之後。心庚念二是非一。口庚言二利害一。夫子始一解レ顏而笑。七年之後。從二心之所一レ念。庚無二是非一。從二口之所一レ言。庚無二利害一。夫子始一引レ吾並レ帶

口庚に利害を言ひ、夫子始めて一たび顏を解きて(七)笑ふ。七年の後、心の念ふ所を從にして、庚に是非なく、口の言ふ所を從にして、庚に利害なし。夫子始めて一たび吾を引き席を竝べて坐す。九年の後、心の思ふ所を橫にし、口の言ふ所を橫にすれども、亦我が是非利害かを知らず、亦彼の是非利害かを知らず、亦夫子の我が師たること、若人の我が友たることを知らず、內外(八)進きぬ。而して後眼は耳の如く、耳は鼻の如く、鼻は口の如く、同じからざるなきなり、心凝り形釋け、骨肉都て融け、形の倚る所、足の履む所を覺えず。風に隨つて東西すること、猶ほ木葉幹殼(九)のごとく、竟に風我に乘ずるか、我風に乘ずるかを知らず。今女先生の門に居り、曾て未だ浹時(一〇)ならずして、懟み憾むこと再三。女(一一)の片體將に氣も受けざる所あらんとす、汝の一節、將に地も載せざる所あらんとす。虛を履み風に乘ずること、其れ幾ふ可けんやと。尹生甚だ怍ぢ、息を屛むること良〻久しく、敢て復た言はず。

列子師二老商氏一友二伯高子一。進二二子之道一。乘レ風而歸。尹生聞レ之。從二列子一居數月。不レ省レ舍。因レ間請レ蘄二其術一者十反。而十不レ告。尹生懟而請レ辭。列子又不レ命。尹生退。數月意不レ已。又往從レ之。列子曰。汝何去來之頻。

列子老商氏を師とし、伯高氏を友とす。(一)二子の道を盡して、風に乘じて歸る。尹生之を聞き、列子に從つて居ること數月、舍を省みず。(二)間に因りて其の術を蘄めんと請ふ者十反、而して十たびながら告げず。尹生懟んで辭せんと請ふ。列子又命ぜず。尹生退く。數月にして意已まず、又往いて之に從ふ。列子曰く、汝何ぞ去來の頻なると。

(一) 伯高氏は列子の同門の友 (二) 舍を省みざるは家に歸らざる也 (三) 間は列子の閒暇の時也 (四) 求也

尹生曰。曩章戴有レ請二於子一。子不二我告一。固有レ憾二於子一。今復脫然。是以又來。列子曰。曩吾以二汝爲一達。今汝之鄙

尹生曰く、曩に章戴、子に請ふことあり、子我に告げず、固より子に憾あり。今復た脫然たり。是を以て又來ると。列子曰く、曩に吾汝を以て達せりと爲しも、今汝の鄙きこと此に至るか。姬れ將に汝に夫子に學びし所の者を告げんとす。吾が夫子に事へ(一)若人を友とせしより、三年の後、心敢て是非を念はず、口敢て利害を言はず、始めて夫子の一眄を得たるのみ。五年の後、心庚に是非を念ひ、

獲二其術一。疲而睡。所レ夢若レ此。今知二至道不一レ可二以レ情求一矣。朕知レ之矣。朕得レ之矣。而不レ能二以告一レ若矣。又二十有八年。天下大治。幾若二華胥氏之國一。而帝登假。百姓號レ之二百餘年不レ輟。

列姑射山在二海河洲中一。山上有二神人一焉。吸レ風飲レ露。不レ食二五穀一。心如二淵泉一。形如二處女一。不レ偎不レ愛。仙聖爲二之臣一。不レ畏不レ怒。愿慤爲二之使一。不レ施不レ惠。而物自足。不レ聚不レ斂。而己無レ愆。陰陽常調。日月常明。四時常若。風雨常均。字育常時。年穀常豐。而土無二札傷一。人無二夭惡一。物無二疵癘一。鬼無二靈響一焉。

列姑射の山は海河の洲中に在り。(一)山上に神人あり、風を吸ひ露を飲み、五穀を食はず。心淵泉の如く、形處女の如く、偎せず(二)愛せず。仙聖之が臣となり、畏さず怒らず。(三)原愨之が使となり、施さず惠まずして物自ら足る。聚めず斂めずして己愆くることなし。陰陽常に調ひ、日月常に明に、四時常に若ひ、風雨常に均しく、(四)字育常に時あり、年穀常に豐なり。而して土に(五)札傷なく、人に(六)夭惡なく、物に(七)疵癘なく、鬼に(八)靈響なし。

(一) 海中の人の住むべき處を洲と云ふ、此の一節も亦無爲の治を形容す (二) 偎せず愛せずとは髣髴として審に見え分たざるを謂ふ (三) 原愨は謹愼の人也 (四) 字育は禽獸の生育也 (五) 札傷は疾癘也 (六) 夭惡は美惡也 (七) 疵癘は疵瑕也 (八) 靈響は夭異也

嗜。不知親己。不知疏物。故無愛憎。不知背逆。不知向順。故無利害。都無所愛惜。都無所畏忌。入水不溺。入火不熱。斫撻無傷痛。指擿無痟痒。乘空如履實。寢虚若處牀。雲霧不硋其視。雷霆不亂其聽。美惡不滑其心。山谷不躓其歩。神行而已。黄帝既寤。悟然自得。召天老力牧太山稽告之曰。朕閑居三月。齋心服形。思有以養身治物之道。弗

ず、美惡其の心を滑さず、山谷其の歩を躓かしめず、神行(一〇)するのみ。黄帝既に寤めて悟然(一一)として自得し、天老(一二)、力牧、太山稽を召して、之に告げて曰く、朕閒居すること三月、心を齋し形を服して、以て身を養ひ物を治むるの道あらんことを思へども、其の術を獲ず。疲れて睡れば、夢みる所此の若し。今至道(一三)の情を以て求む可からざることを知れり。朕之を知り、朕之を得、而して以て若に告ぐること能はずと。又二十有八年、天下大に治ること、幾んど華胥氏の國の若し。而して帝登假(一四)す。百姓之に號くこと二百餘年にして輟まざりき。

(一) 弇州は中國をいふ (二) 恬然恍惚として其の地に游ぶのみ (三) 其の國主長なく、自然にして治る也 (四) 夭殤は早死也 心を生死に用ひず故に夭殤なし (五) 他人と自我との區別なし故に愛憎の情なし (六) 其の心に取捨する所なし故に利害の念なし (七) 斫は刀にて斬る也、撻は鞭にて打つ也 (八) 指擿は指にて掻く也 (九) 痟痒は痛癢也 (一〇) 身體行くに非ず精神行くのみ (一一) 夢中の遊一揆して心に合致する也 (一二) 天老以下三人は黄帝の臣也 (一三) 情は思想工夫也 (一四) 假は遐の字の誤、登遐は崩御也

治ニ萬物一。其患如レ此。於レ是放ニ萬機一。舍ニ宮寢一。去ニ直侍一。徹ニ鐘懸一。滅ニ廚膳一。退而閒ニ居大庭之館一。齋レ心服レ形。三月不レ親ニ政事一。晝寢而夢。遊ニ於華胥氏之國一。

（九）萬機の政務を放棄する也　（一〇）宮寢は宮室寢殿也　（一一）直侍は近侍の臣也　（一二）樂器に用ふる鐘などを卸し去る也　（一三）廚膳は食膳也　（一四）大庭は大内也　（一五）心の昏亂したるを一すぢに取りまとめ、形も亦心に服從して無爲なるをいふ　（一六）華胥氏の國は假設の國名

華胥氏之國。在ニ弇州之西。台州之北一。不レ知下斯ニ齊國一幾千萬里上。蓋非ニ舟車足力之所一レ及。神游而已。其國無ニ師長一。自然而已。其民無ニ嗜欲一。自然而已。不レ知レ樂レ生。不レ知レ惡レ死。故無ニ夭

華胥氏の國は弇州の西、台州の北に在り、（一）齊國を斯るゝこと幾千萬里なることを知らず。蓋し舟車足力の及ぶ所に非ず、（二）神游するのみ。（三）其の國、帥長なし、自然なるのみ。其の民、嗜欲なし、自然なるのみ。生を樂むことを知らず、死を惡むことを知らず、故に（四）夭殤なし。（五）己を親むことを知らず、物を疎んずることを知らず、故に愛憎なし。（六）背逆を知らず、向順を知らず、故に利害なし。都て愛惜する所なく、都て畏忌する所なし。水に入りて溺れず、火に入りて熱からず。（七）斫撻すれども傷痛なく、（八）指擿すれども（九）痟癢なし。空に乘ずること實を履むが如く、虛に寢ぬること牀に處るが若し。雲霧其の視を硋へず、雷霆其の聽を亂さ

黃帝卽位十有五年。喜天下戴己。養正命。娛耳目。供鼻口。焦然肌色皯䵴。昏然五情爽惑。又十有五年。憂天下之不治。竭聰明。進智力。營百姓。焦然肌色皯䵴。昏然五情爽惑。黃帝乃喟然讚曰。朕之過淫矣。養一己其患如此。

黃帝第二(一)

黃帝位に卽いて十有五年、天下の己を戴くを喜び、(二)正命を養ひ、耳目を娛ましめ、鼻口に供し、(三)焦然として肌色皯䵴し、昏然として(四)五情爽惑す。又十有五年、天下の治らざるを憂へ、聰明を竭し、智力を進し、(五)百姓を營し、焦然として肌色皯䵴し、昏然として五情爽惑す。黃帝乃ち喟然として讚じて(六)曰く、朕が(七)過淫し。一己を養ふに、其の患此の如し。(八)萬物を治むるに、其の患此の如しと。是に於て(九)萬機を放ち、(一〇)宮寢を舍て、(一一)直侍を去り、(一二)鐘懸を徹し、(一三)厨膳を減じ、退いて(一四)大庭の館に(一五)間居し、心を齋し形を服し、三月政事を親らせず、晝寢ねて夢み、(一六)華胥氏の國に遊ぶ。

(一) 黃帝は篇首の二字を取りて名とせるのみ、別に意義なし、以下五篇皆然り　(二) 正命は性命の謂　(三) 焦然は瘦せ衰ふる貌、肌色皯䵴は肌膚の色黧み黒むをいふ　(四) 五情は喜怒哀樂欲をいふ、爽惑は違ひ亂るゝ也　(五) 百姓の事を屢々世話する也　(六) 讚は歎の誤　(七) 淫は濫の誤　(八) 患此の如しとは肌色皯䵴し五情爽惑するを謂ふ

盜ニ天地之時利。雲雨之滂潤。山澤之產育一。以生二吾禾一。殖二吾稼一。築二吾垣一。建二吾舍一。陸盜二禽獸一。水盜二魚鼈一。亡レ非レ盜也。夫禾稼土木禽獸魚鼈皆天之所レ生。豈吾之所レ有。然吾盜レ天而亡レ殃。夫金玉珍寶穀帛財貨。人之所レ聚。豈天之所レ與。若盜レ之而獲レ罪。孰怨哉。向氏大惑。以爲國氏之重罔レ己也。過二東郭先生一問焉。東郭先生曰。若一身。庸非レ盜乎。盜二陰陽之和一。以成二若生一。載二若形一。況外物而非レ盜哉。誠然。天地萬物不二相離一也。認而有レ之。皆惑也。國氏之盜。公道也。故亡レ殃。若之盜。私心也。故得レ罪。有二公私一者亦盜也。亡二公私一者亦盜也。公公私私。天地之德。知二天地之德一者。孰爲レ盜邪。孰爲レ不レ盜邪。

得。公私ある者も亦盜なり、(一九)公私なき者も亦盜なり。(二〇)公公私私は天地の德なり。
(二一)天地の德を知る者は、孰か盜むと爲さんや、孰か盜まずと爲さんやと。

(一)給するは間に合ふ也 (二)足るは不足なき也 (三)穰は大に富む也 (四)二十五家を閭といふ、州閭に及ぼすは州閭の人も亦富む也 (五)時は四時の時、未だ時に及ばざるは未だ三ケ月に及ばざる也 (六)贓は盜罪 (七)先居の財は從來貯へし財也沒すは沒收する也 (八)時は春夏秋冬なり (九)利は五穀其の他一切の物をいふ (一〇)滂潤は潤澤也 (一一)山澤の產育は山澤の生ずる所也 (一二)舍は家也 (一三)罔は欺罔也 (一四)載も亦成也 (一五)我が身すら盜める者なり、況んや其の他の物を用ふるは皆盜めるに非ずや (一六)天地萬物は一氣の形成せる者、故に天地と萬物と皆相離れざる也 (一七)公道は天地の物を公然と盜むをいふ (一八)人の聚めし財を私かに盜むをいふ (一九)人に就いて之を論ずれば公私の別なき者も盜たることを免れず (二〇)若し天地の德より之を論ずれば、公を公とし私とするも皆天地の之を然らしむる者にて自然なり (二一)天地は無心にして萬物を生り、萬物生ずれば各其の食物あり、是亦自然なれば公私の別なし是天地の德なり

及二州閭一。向氏大喜。喩二其爲一盜之言一而不レ喩二其爲レ盜之道一。遂踰レ垣鑿レ室。手目所レ及。亡レ不レ探也。未レ及レ時。以レ臓獲レ罪。沒二其先居之財一。向氏以二國氏之謬一レ己也。往而怨レ之。國氏曰。若爲レ盜若何。向氏言二其狀一。國氏曰。嘻若失二爲レ盜之道一至レ此乎。今將レ告レ若矣。吾聞天有レ時。地有レ利。吾

氏曰く、若盜を爲せること若何と。向氏其の狀を言ふ。國氏曰く、嘻、若盜を爲すの道を失ふこと此に至れるか。今將に若に告げんとす。吾聞く、天に時あり、地に利(九)ありと。吾天地の時利、雲雨の滂潤(一〇)、山澤の產育(一一)を盜みて、以て吾が禾を生じ、吾が稼を殖し、吾が垣を築き、吾が舍(一二)を建つ。陸に禽獸を盜み、水には魚鼈を盜む、盜に非ざるなし。夫れ禾稼土木禽獸魚鼈は、皆天の生ずる所、豈吾が有する所ならんや。然れども吾は天に盜みて殃なし。夫れ金玉珍寶穀帛財貨は、人の聚むる所なり、豈天の與ふる所ならんや。若之を盜みて罪を獲るも、孰をか怨みんやと。向氏大に惑うて、以爲へらく國氏重ねて己を誣ふる(一三)なりと。東郭先生に過りて問ふ。東郭先生曰く、若の一身も庸ぞ盜めるに非ずや。陰陽の和を盜みて以て若の生を成し、若の形を載す(一四)。況んや(一五)外物にして盜めるに非ざらんや。誠に然り(一六)、天地萬物相離れざるなり。認めて之を有するは皆惑なり。國氏の盜は公道(一七)なり。故に殃なし。若の盜は私心(一八)なり、故に罪を

委形也。生非ニ汝有一。是天地之委和也。性命非ニ汝有一。是天地之委順也。孫子非ニ汝有一。皆天地之委蛻也。故行不レ知レ所レ往。處不レ知レ所レ持。食不レ知ニ所以一。天地強陽氣也。又胡可ニ得而有一邪。

以を知らず。天地は強陽の氣なり(八)、又胡ぞ得て有す可けんやと。

(一) 有すとは取りて我が有と爲す也 (二) 委は積なり、地風水火の四大假に合して此の身を成す、故に委形といふ (三) 陰陽相和して萬物生ず故に委和といふ (四) 性命は生命也 (五) 順は理也、生死皆理に順ふものにして人の自由にする所に非ず故に委順といふ (六) 子孫の生るゝは土中の蟲のもぬけて蟬となるが如し、故に委蛻といふ (七) 持する所は守る所なり (八) 一氣の形を成せる者天地より大なるはなし而して活動して止まず、故に陰陽の氣といふ也

齊之國氏大富。宋之向氏大貧。自レ宋之レ齊請ニ其術一。國氏告レ之曰。吾善爲レ盜。始吾爲レ盜也。一年而給。二年而足。三年大穰。自レ此以往。施

齊の國氏大に富めり。宋の向氏大に貧し。宋より齊に之きて其の術を請ふ。國氏之に告げて曰く、吾善く盜を爲す。始に吾が盜を爲すや、一年にして給し(一)、二年にして足り(二)、三年にして大に穰す(三)。此より以往は施いて州閭に及ぼすと(四)。向氏大に喜び、其の盜を爲すの言を喩りて、其の盜を爲すの道を喩らず。遂に垣を踰え室を鑿ち、手目の及ぶ所探らざることなし。未だ時に及ばずして(五)、贓を以て罪を獲(六)、其の先居の財を沒す(七)。向氏、國氏の己を謬るを以て、往いて之を怨む。國

風雨也。四時也。此積氣之成二乎天一者也。山岳也。河海也。金石也。火木也。此積形之成二乎地一者也。知二積氣一也。知二積塊一也。奚謂レ不レ壞。夫天地。空中之一細物。有中之最巨者。難レ終難レ窮。此固然矣。難レ測難レ識。此固然矣。憂二其壞一者。誠爲二大遠一。言二其不一レ壞者。亦爲レ未レ是。天地不レ得レ不レ壞。則會歸二於壞一。遇二其壞時一。奚爲不レ憂哉。子列子聞而笑曰。言二天地壞一者亦謬。言二天地不一レ壞者亦謬。壞與レ不レ壞。吾所レ不レ能レ知也。雖レ然彼一也。此一也。故生不レ知レ死。死不レ知レ生。來不レ知レ去。去不レ知レ來。壞與レ不レ壞。吾何容レ心哉。

（一）天墜ち地崩る、也　（二）積氣は空氣の積み重なりたるもの　（三）一に「亡とし」と訓ず、下同じ　（四）積塊は土塊の積み重なりたるもの　（五）四虚は四方太虛の外也　（六）躇歩は足を止むるなり、跐蹈は蹈む也　（七）舍は釋に通ず了解する貌　（八）巨は大也　（九）甚だ迂遠也　（一〇）彼は壞れずと曰ふ者を指す、此は壞ると曰ふ者を指す、此の二者皆有を離れざる故に謬れり

舜問二乎烝一曰。道可二得而有一乎。曰。汝身非二汝有一也。汝何得レ有二夫道一。舜曰。吾身非二吾有一。孰有レ之哉。曰。是天地之

舜烝に問うて曰く、道得て有すべきかと。曰く、汝が身は汝の有に非ざるなり。汝何ぞ夫の道を有するを得んやと。舜曰く、吾が身吾が有に非ずば、孰か之を有するやと。曰く、是天地の委形なり。生は汝の有に非ず、是天地の委和なり。性命は汝の有に非ず、是天地の委順なり。孫子は汝の有に非ず、是天地の委蛻なり。故に行けども往く所を知らず、處れども持する所を知らず、食へども所

星宿。不ㇾ當ㇾ墜邪。曉ㇾ之者曰。日月星宿。亦積氣中之有二光耀一者。只使ㇾ墜亦不ㇾ能ㇾ有ㇾ所二中傷一。其人曰。奈二地壞一何。曉者曰。地積塊耳。充二塞四虛一。亡二處亡ㇾ塊。若躇步跐蹈。終日在二地上一行止。奈何憂二其壞一。其人舍然大喜。曉ㇾ之者亦舍然大喜。長廬子聞而笑ㇾ之曰。虹蜺也。雲霧也。

として大に喜ぶ。之を曉す者も亦舍然(七)として大に喜ぶ。長廬子聞いて、之を笑うて曰く、虹蜺や、雲霧や、風雨や、四時や、此積氣の天に成る者なり。山岳や、河海や、金石や、火木や、此積形の地に成る者なり。積氣なることを知り、積塊なることを知らば、奚ぞ壞れずと謂ふや。夫れ天地は空中の一細物、有中の最も巨(八)なる者なり。終り難く窮り難きこと、此固より然り。測り難く識り難きこと、此固より然り。其の壞れんことを憂ふる者は、誠に(九)大だ遠しと爲す、其の壞れざるを言ふ者も、亦未だ是ならずと爲す。天地壞れざるを得ざるときは、會ず壞るゝに歸せん。其の壞るゝ時に遇はば、奚爲れぞ憂へざらんやと。子列子聞いて笑うて曰く、天地壞ると言ふ者も亦謬れり、天地壞れずと言ふ者も亦謬れり。壞るゝと壞れざるとは、吾が知ること能はざる所なり。然りと雖も、彼も(一〇)一なり、此も一なり。故に生は死を知らず、死は生を知らず、來は去を知らず、去は來を知らず。壞るゝと壞れざると、吾何ぞ心を容れんやと。

進。一形不頓虧。亦不覺其成。不覺其虧。亦如人自世至老。貌色智態。亡日不異。皮膚爪髮。隨世隨落。非嬰孩時有停而不易也。間不可覺。俟至後知。

天地間に充滿する氣なり、一氣の運轉すること暫くも止まず漸を以てする也 〔二〕 萬物の形を成すも形の虧け盈る〻も速には知らず 〔三〕 容貌の變化し貌の衰づくは同時なきもの故之を覺ること能はず、老年に至りて始めて知らるる也

杞國有人憂天地崩墜。身亡所寄。廢寢食者。又有憂彼之所憂者。因往曉之曰。天積氣耳。亡處亡氣。若屈伸呼吸。終日在天中行止。奈何憂崩墜乎。其人曰。天果積氣。日月

杞國に、人の天地崩墜して身寄する所なきを憂へて、寢食を廢する者あり。又彼の憂ふる所を憂ふる者あり、因つて往いて之を曉す。曰く、天は積氣のみ、處として氣なきはなし。若屈伸呼吸して、終日天中に在りて行止す。奈何ぞ崩墜を憂ふるやと。其の人曰く、天果して積氣ならば、日月星宿は當に墜つべからざるかと。之を曉す者曰く、日月星宿も亦積氣中の光耀ある者なり。只墜ちしむるも、亦中傷する所ある能はずと。其の人曰く、地の壞る〻を奈何にせんと。曉す者曰く、地は積塊のみ、四虛に充塞して、處として塊なきはなし。若躇歩跐蹈して、終日地上に在りて行止す。奈何ぞ其の壞る〻を憂へんと。其の人舍然

子列子曰。非ニ其名一也。莫レ如レ靜。莫レ虛。靜也。虛也。得ニ其居一矣。取也與也。失ニ其所一矣。事之破碼而後有下舞ニ仁義一者上。弗レ能レ復也。粥熊曰。運轉亡レ已。天地密移。疇覺レ之哉。故物損ニ於彼一者盈ニ於此一。成ニ於此一者虧ニ於彼一。損盈成虧。隨世隨死。往來相接。間不レ可レ省。疇覺レ之哉。凡一氣不ニ頓

子列子曰く、其の名を非とするは、(一)靜に如くはなく、虛に如くはなし、靜や虛や、(二)其の居を得、取や與や、其の所を失ふ。(三)事の破碼して後に仁義を舞はす者あり。復すること能はざるなり。(四)粥熊曰く、運轉して已むことなく、(五)天地密に移る、疇か之を覺らんや。故に物彼に損する者は此に盈つ、此に成る者は彼に虧く。損盈成虧、隨つて世じ(六)隨つて死す。(七)往來相接する、間省る可からず、疇か之を覺らんや。凡そ一氣(八)頓に進まず、一形(九)頓に虧けず。亦其の成るを覺えず、其の虧くるを覺えず、亦人の世より老に至るまで、貌色智態、日として異ならざることなく、皮膚爪髮、隨つて世じ隨つて落ち、嬰孩の時より停りて易らざること有るに非ざるが如きなり。(一〇)間覺る可からず。至るを俟ちて後に知る。

(一) 凡そ名は實なきものなり、名を非とするには靜と虛とに如くはなし (二) 靜虛なれば自然の眞を失はずして其の安居を得、取與に涉れば安居を失ふなり (三) 眞去り所を失ひて後仁義を行うて性を自然に反さんとするも復する能はざるなり (四) 粥熊は周の文王の師にて楚國に封ぜられし人 (五) 天地は日夜運轉して一息の間斷なし (六) 世は生と通ず下同じ (七) 物の成敗人の生死の往來循環して已まざること其の間隙窺ひ知るべからず (八) 一氣は

仁者伏焉。死也者。德之徼也。古者謂死人爲歸人。夫言死人爲歸人。則生人爲行人矣。行而不知歸。失家者也。一人失家。一世非之。天下失家。莫知非焉。有人去鄕土。離六親。廢家業。遊於四方而不歸者。何人哉。世必謂之爲狂蕩之人矣。又有人鍾賢世。矜巧能。脩名譽。誇張於世而不知已者。亦何人哉。世必以爲智謀之士。此二者。胥失者也。而世與一不與一。唯聖人知所與。知所去。或謂子列子曰。子奚貴虛。列子曰。虛者無貴也。

ち生人は行人たり。行いて歸ることを知らざるは、家を失ふ者なり。一人家を失へば、一世之を非る。天下家を失へば、非を知ることなし。人あり、鄕土を去り、六親を離れ、家業を廢し、四方に遊んで歸らざる者は何人ぞや。世必ず之を謂つて狂蕩の人と爲さん。又人あり、(二)賢世を鍾んじ、巧能に矜り、名譽を脩め、世に誇張して已むことを知らざる者、亦何人ぞや。世必ず以て智謀の士と爲さん。此の二者は胥失する者なり。而して世一に與して一に與せず。唯ゝ聖人與する所を知り、去る所を知る。或るひと子列子に謂つて曰く、子奚ぞ虛を貴ぶと。列子曰く、(三)虛は貴ぶことなしと。

(一) 德は得、徼は歸、天より受けたる骨肉精神が死の太虛に歸るを云ふ也 (一) 歸人は其の本根に歸るを謂ふ (二) 賢形生に作るべし、身體生命を重んずる也 (三) 既に虛なれば貴ぶ所なく賤む所なし

告二仲尼一曰。願有レ所レ息。仲尼曰。生無レ所レ息。子貢曰。然則賜息無レ所乎。仲尼曰有焉耳。望二其壙一睪如也。宰如也。墳如也。鬲如也。則知レ所レ息矣。子貢曰。大哉死乎。君子息焉。小人伏焉。仲尼曰。賜汝知レ之矣。人胥知二生之樂一。未レ知二生之苦一。知二老之憊一。未レ知二老之佚一。知二死之惡一。未レ知二死之息一也。

ふ所なしと。子貢曰く、然らば則ち賜は息ふに所なきかと。仲尼曰く、有るのみ。其の壙(三)を望むに、睪如(四)たり、宰如たり、墳如たり、鬲如たり、則ち(五)息ふ所を知らんと。子貢曰く、大なるかな死や、(六)君子は息ひ、(七)小人は伏すと。仲尼曰く、賜汝之を知れりや。人胥生の樂を知り、未だ生の苦を知らず、老の憊るゝを知り、未だ老の佚なるを知らず。死の惡なるを知り、未だ死の息ふを知らざるなり。

(一) 仲尼は孔子の字 (二) 生きて居る間は肢體を働かせ知慮を勞して休息する所なしと (三) 壙は墓穴也 (四) 睪如、宰如、墳如、鬲如は皆土を堆く盛りたる形を謂ふ (五) 死して墓穴に入らば則ち休息すべし (六) 君子は天命を知る故泰然として死を待つ也 (七) 小人は生を貪り死期に至りて是非なく天命に屈伏する也

晏子曰。善哉古之有レ死也。仁者息焉。不

晏子曰く、善いかな、古の死あるや。仁者は息ひ、不仁者は伏す。(一)死は徳の徼なり。古者死人を言つて(二)歸人と爲せり。夫れ死人を言つて歸人と爲すときは、則

不レ競レ時。老無二妻子一。死期將レ至。亦有二何樂一而拾レ穗行歌乎。林類笑曰。吾之所三以爲二樂一。人皆有レ之。而反以爲レ憂。少不レ勤レ行。長不レ競レ時。故能壽若レ此。老無二妻子一。死期將レ至。故樂若レ此。子貢曰。壽者人之情。死者人之惡。子以レ死爲レ樂何也。林類曰。死之與レ生。一往一反。故死レ是者。安知レ不レ生二於彼一。故吾知二其不一レ相若一矣。吾又安和二營營而求レ生非一レ惑乎。亦又安知二吾今之死一不レ愈二昔之生一乎。子貢聞レ之不レ喩二其意一。還以告二夫子一。夫子曰。吾知二其可一レ與言。果然。然彼得レ之而不レ盡者也。

の相若かざるを知る。吾又安んぞ營營(一二)として生を求むるの惑に非ざるを知らんや。亦又安んぞ吾が今の死の昔の生に愈らざるを知らんやと。子貢之を聞いて其の意を喩らず、還りて以て夫子(一三)に告ぐ。夫子曰く、吾其の與に言ふべきを知りしが、果して然り。然れども彼は之を得て盡(一四)さざる者なりと。

(一) 遺穗は落ちたる稻穗 (二) 故畦は田のくろ (三) 且つ歌ひ且つ行く也 (四) 叟は老人の稱 (五) 壠は田の間の小高き處 (六) 叩くは問ふ也 (七) 時流を競はざる也 (八) 常人は之を樂とせずして反つて憂とす (九) 壽は人の好む所死は人の惡む所なり (一〇) 生れし者の死するは往きし者の返るが如し (一一) 生の死に若かざるを知る也 (一二) 營營は勞苦する貌 (一三) 夫子は孔子を指す (一四) 之を得るは存亡往復の理を得たるをいふ、盡さざるは未だ有無得失の境を離れ彼我共に忘るゝに至らざるを云ふ

子貢倦於學。

子貢學に倦む。仲尼(一五)に告げて曰く、願はくは息ふ所あらんと。仲尼曰く、(一六)生は息

林類年且二百歲。底レ春被レ裘拾二遺穗於故畦一。並歌並進。孔子適レ衞。望二之於野一。顧謂二弟子一曰。彼叟可二與言一者。試往訊レ之。子貢請行。逆二之壠端一。面レ之而歎曰。先生曾不レ悔乎。而行歌拾レ穗。林類行不レ留。歌不レ輟。子貢叩レ之不レ已。乃仰而應曰。吾何悔邪。子貢曰。先生少不レ勤レ行。長

林類、年且に百歲ならんとす。春に底りて裘を被て遺穗（一）を故畦（二）に拾ひ、並（三）び歌ひ並び進む。孔子衞に適き、之を野に望み、顧みて弟子に謂つて曰く、彼の叟（四）は與に言ふべき者なり、試に往いて之を訊へ。子貢請うて行き、之を壠端（五）に逆へ、之に面して歎じて曰く、先生曾て悔いざるか、而して行ゝ歌ひて穗を拾ふと。林類行きて留らず、歌ひて輟まず。子貢之を叩（六）いて已まず。乃ち仰ぎて應へて曰く、吾何を悔いんやと。子貢曰く、先生少うして行を勤めず、長じて時（七）を競はず、老いて妻子なく、死期將に至らんとす。亦何の樂ありて穗を拾ひ行ゝ歌ふか。林類笑うて曰く、吾が樂と爲す所以は、人皆之あり、而（八）して反りて以て憂と爲す。少うして行を勤めず、長じて時を競はず、故に能く壽此の若し。老いて妻子なく、死期將に至らんとす、故に樂むこと此の若しと。子貢曰く、壽（九）は人の情、死は人の惡なり。子死を以て樂と爲すは何ぞや。林類曰く、死（一〇）と生とは、一往一反す。故に是に死する者は、安んぞ彼に生れざるを知らん。故に吾（一一）其

孔子遊於太山。見榮啓期行乎郕之野。鹿裘帶索鼓琴而歌。孔子問曰。先生所以樂何也。對曰。吾樂甚多。天生萬物。唯人爲貴。而吾得爲人。是一樂也。男女之別。男尊女卑。故以男爲貴。吾既得爲男矣。是二樂也。人生有不見日月不免襁褓者。吾既已行年九十矣。是三樂也。貧者士之常也。死者人之終也。處常得終。當何憂哉。孔子曰。善乎。能自寬者也。

孔子太山に遊び、榮啓期(一)が郕(二)の野に行き、鹿裘帶索(三)して、琴を鼓いて、歌ふを見る。孔子問うて曰く、先生樂む所以は何ぞや。對へて曰く、吾が樂甚だ多し。天の萬物を生ずる、唯〻人を貴しと爲す。而して吾れ人たるを得たり。是一の樂なり。男女の別、男は尊く女は卑し、故に男を以て貴しと爲す。吾れ既に男たるを得たり、是二の樂なり。人生れて、日月を見ず(四)、襁褓を免れざる(五)者あり。吾既に已に行年九十なり、是三の樂なり。貧は士の常なり、死は人の終なり。常に處て終を得る、當に何を憂ふべきやと。孔子曰く、善いかな、善く自ら寛うする(六)者なりと。

(一) 姓は榮、名は啓期　(二) 郕は魯の邑　(三) 鹿裘は鹿皮の裘、帶索は繩の帶　(四) 生れて直に死する者也　(五) 未だむつきを離れずして死する者也　(六) ゆつたりとして天命に安んずる者也

而散。屬地濁而聚。精神離形。各歸其眞。故謂之鬼。鬼歸也。歸其眞宅。黃帝曰。精神入其門。骨骸反其根。我尙何存。人自生至終。大化有四。嬰孩也。少壯也。老耄也。死亡也。其在嬰孩。氣專志一。和之至也。物不傷焉。德莫加焉。其在少壯。則血氣飄溢。欲慮充起。物所攻焉。德故衰焉。其在老耄。則欲慮柔焉。體將休焉。物莫先焉。雖未及嬰孩之全。方於少壯間矣。其在死亡也。則之於息焉。及其極矣。

少壯なり、老耄なり、死亡なり、其の嬰孩に在るときは、氣專に志一に、和の至なり。(七)物傷らず、德加ふることなし。其の少壯に在るときは、則ち(八)血氣飄溢し、欲慮充起して、物に攻めらる。德故に衰ふ。其の老耄に在るときは、則ち欲慮柔なり。體將に休せんとし、(九)物に先だつことなし。未だ嬰孩の全きに及ばずと雖も、少壯に方ぶれば間あり。其の死亡に在りては、則ち(一〇)息するに之く、其の極に反るなり。

(一) 精神は天の分前、肉體は地の分前也 (二) 精神と骨骸と各其の本原に歸する也 (三) 其の出でたる門に歸る也 (四) 其の本の地に歸る也 (五) 何物も殆ど存せざるを謂ふ (六) 大化は大なる變化也 (七) 物を害する心なし故に物も亦之を傷らず (八) 血氣盛に欲念盛にして色慾財寶の慾等に攻めらるゝ也 (九) 人と爭ふ心なし (一〇) 死すれば無に反る故息すと謂ふ

終者也。天地終乎。與我偕終。終進乎。不知也。道終乎。本無始。進乎。本不久。有生則復於不生。有形則復於無形。不生者。非本不生者也。無形者。非本無形者也。

生者。理之必終者也。終者不得不終。亦如生者之不得不生。而欲恆其生。盡其終。惑於數也。精神者天之分。骨骸者地之分。屬天清

るに蟲のうつろになりたる中に小兒居りたる故取り來りて育てたるに賢人となれり、伊尹是れなり（四）厥昭は蟲の名（五）醯雞は蟲の名、酒のすくなりたる氣より生ずる（六）不箰久竹は竹に似て筍を生ぜざる者、青寧は蟲の名（七）機に入るは無に歸するなり（八）萬物皆無より生じて末皆無に歸するなり（九）無の有を生ずる也（一〇）形ある者は必ず終あり。故に天地も亦終あるべし（一一）天地盡くるに終るか、其の妙用得て知るべからず（一二）道は始なし故に又終なし、有にあらず故に又盡くる期なし。久は有に作るを可とす（一三）生ずる者は必ず終り、形ある者は必ず無形に歸す（一四）不生は生ぜぬ者に非ず生じて後に滅ぶる故之を不生といふ、無形は形なき者に非ず、形ありたる者散じて無形となる故之を無形といふ

生は理の必ず終る者なり。終る者の終らざるを得ざるは、亦生ずる者の生ぜざるを得ざるが如し。而して其の生を恆にし其の終を盡くせんと欲するは、數に惑へるなり。精神は天の分、骨骸は地の分、天に屬するは淸くして散じ、地に屬するは濁りて聚る。精神形を離るれば、（一五）各〻其の眞に歸す。故に之を鬼と謂ふ。鬼は歸なり。其の眞宅に歸るなり。黃帝曰く、（一六）精神は其の門に入り、骨骸は其の根に反る。（一七）我尙ほ何ぞ存せん。人、生より終に至るまで、（一八）大化四あり。嬰孩なり、

思士不レ妻而感。思女不レ夫而孕。后稷生ニ乎巨跡一。伊尹生ニ乎空桑一。厥昭生ニ乎濕一。醯雞生ニ乎酒一。羊奚比ニ乎不荀久竹一生ニ青寧一。青寧生レ程。程生レ馬。馬生レ人。人久入ニ於機一。萬物皆出ニ於機一。皆入ニ於機一。黄帝書曰。形動不レ生レ形而生レ影。聲動不レ生レ聲而生レ響。無動不レ生レ無而生レ有。形必

(一)思士は妻あらずして感じ、思女は夫あらずして孕む。(二)后稷は巨跡に生れ、(三)伊尹は空桑に生る。(四)厥昭は濕に生れ、(五)醯雞は酒に生る。(六)羊奚は不荀久竹に比んで青寧を生ず、青寧程を生ず、程馬を生ず、馬人を生ず、人久うして機に入る。(七)萬物皆機より出で、皆機に入る。(八)黄帝の書に曰く、(九)形動いて形を生ぜずして影を生ず、聲動いて聲を生ぜずして響を生ず、無動いて無を生ぜずして有を生ず。形は必ず終る者なり、(一〇)天地終らんか、我と偕に終らん。(一一)進くるに終るか、知らざるなり。(一二)道終らんか、本始なし、進きんか、本久しからず。(一三)有生は則ち不生に復し、有形は則ち無形に復す、(一四)不生は本生ぜざる者に非ざるなり、無形は本形なき者に非ざるなり。

(一) 思士は男ばかりの國、思女は女ばかりの國、互に相隔りたる國なれども相感じて子を生む也 (二) 后稷は堯の臣周の祖先、其の母姜原巨人の足跡を踏んで孕み后稷を生む (三) 伊尹は殷の湯王の臣、其の母懷姙せる後何者とも知らず告げて曰ふやう明日臼の水より出る時早く東方に逃げよ大水出づべしと、因つて隣家にも告げて共に逃げ十里ばかり行きて顧れば故郷は盡く水となれり、而して其の身は化して桑の木となる、有莘氏の女桑採りに行きた

餘骨。乾餘骨之沫。爲斯彌。斯彌爲食醯頤輅。食醯頤輅生乎食醯黃軦。食醯黃軦生乎九猷。九猷生乎瞀芮。瞀芮生乎腐蠸。

羊肝化爲地皐。馬血之爲轉鄰也。人血之爲野火也。鷂之爲鸇。鸇之爲布穀。布穀久復爲鷂也。燕之爲蛤也。田鼠之爲鶉也。朽瓜之爲魚也。老韭之爲莧也。老羭之爲猨也。魚卵之爲蟲。亶爰之獸。自孕而生曰類。河澤之鳥。視而生曰鶂。純雌其名大腰。純雄其名穉蜂。

羊肝化して地皐(一)となり、馬血の轉鄰(二)となり、人血の野火(三)となり、鷂の鸇となり、鸇の布穀(四)となるあり、布穀久うして復た鷂となり、燕の蛤となり、田鼠(五)の鶉となり、朽瓜(六)の魚となり、老韭(七)の莧となり、老羭(八)の猨となり、魚卵の蟲となるあり。亶爰(九)の獸、自ら孕みて生ずるを類(一〇)と曰ふ、河澤の鳥、視て生ずる(一一)を鶂と曰ふ。純雌(一二)なるは其の名は大腰(一三)、純雄(一四)なるは其の名は穉蜂(一五)なり。

(一) 地皐は不詳 (二) 轉鄰は鬼火 (三) 野火も亦鬼火 (四) 布穀は鳩 (五) 田鼠はけら (六) 朽瓜は腐敗せる瓜 (七) 老韭は年久しきにら (八) 羭は牝羊 (九) 亶爰は山の名 (一〇) 自ら女となり男となりて子を生む也 (一一) 互に視合ひたるのみにて孕む也 (一二) 純雌は女ばかりのこと (一三) 大腰は細腰の類 (一四) 純雄は男ばかりのこと (一五) 穉蜂は蜂の細き腰

知。而未二嘗生一。未二嘗死一也。此過養乎。此過歡乎。種有レ幾。若二鼃爲レ鶉。得レ水爲レ㡭。得二水土之際一。則爲二鼃蠙之衣一。生二於陵屯一。則爲二陵舃一。陵舃得二鬱栖一。則爲二烏足一。烏足之根爲二蠐螬一。其葉爲二胡蝶一。胡蝶胥也。化而爲レ蟲生二竈下一。其狀若レ脫。其名曰二鴝掇一。鴝掇千日。化而爲レ鳥。其名曰二乾

ずれば則ち陵舃となる。陵舃鬱栖(九)を得れば則ち烏足となる。烏足の根蠐螬(一〇)となる。其の葉(一一)は胡蝶となる、胡蝶は胥なり。化して蟲となり竈下(一二)に生ず、其の狀脫するが若し、其の名を鴝掇と曰ふ。鴝掇千日にして化して鳥となる、其の名を乾餘骨と曰ふ。乾餘骨の沫斯彌(一三)となる、斯彌食醯頤輅(一四)となる。食醯頤輅、食醯黃軦(一五)を生ず。食醯黃軦、九猷(一六)を生ず。九猷瞀芮(一七)を生ず、瞀芮腐蠸(一八)を生ず。

(一) 路傍の髑髏を拔いて指し示す也 (二) 他の者は我は生きて居て髑髏は死せりと思はんが、我も髑髏も生きて居るでもなければ死して居るでもないことを唯々予と彼とのみ知り居れりと也 (三) 生ある者は必ず死す、然るに生れたりとて歡ぶは過ちて歡ぶなり、生を何時までも留め置かんとて養ひ過すは過ちて養ふなり (四) 天地の間に變化する者の種類幾何なるかと自ら問ふ也 (五) 鼃は蛙也 (六) 水を得るは池などに水の引續いて流るゝをいふ、㡭は水上に生ずる水垢の如き者なり (七) 水土の際を得るは根が水と土の間にありて水中に生ずるをいふ、鼃蠙の衣は青苔の一種なり (八) 陵屯は水のなき小高き處、陵舃は艸の名 (九) 鬱栖は糞壤なり、烏足も亦艸の名 (一〇) 蠐螬は蝎虫 (一一) 烏足の葉は化して胡蝶となる、胥は蝶の別名 (一二) 竈下の蟲ぬけかへりてはだか蟲となる、脫するが若しとは皮がむけること也 (一三) 沫は涎也、斯彌は蟲の名 (一四) 食醯は蠛蠓也、頤輅は蟲の名 (一五) 黃軦は蟲の名 (一六) 九は久の誤、久は老の義、猷は蟲の名 (一七) 瞀芮は小蟲の名 (一八) 腐蠸は瓜の中に居る青の黃色な蟲

色者。有ニ味者。有ニ味ゝ味者一。生之所。生者死矣。而生生者未ニ嘗終一。形之所ゝ形者實矣。而形ゝ形者未ニ嘗有一。聲之所ゝ聲者聞矣。而聲ゝ聲者未ニ嘗發一。色之所ゝ色者彰矣。而色ゝ色者未ニ嘗顯一。味之所ゝ味者嘗矣。而味ゝ味者未ニ嘗呈一。皆無爲之職也。能陰能陽。能柔能剛。能短能長。能圓能方。能生能死。能暑能涼。能浮能沈。能宮能商。能出能沒。能玄能黃。能甘能苦。能羶能香。無知也。無能也。而無ゝ不ゝ知也。而無ゝ不ゝ能也。

頭上 (八) 萬物を變ずる也 (九) 仁義を以て人民を教化する也 (十) 其の性によりて各宜しき所を異にす (十一) 事人と鳥獸の性に違ふこと能はず (十二) 萬物各其の性の宜しき所を出づること能はず (十三) 生ずる者は天地間に生ずる萬物也、形聲色味は皆萬物の形聲色味なり (十四) 生を生ずる者は即ち造化なり形を形する者以下皆同じ (十五) 生の生ずる所は生ある者なり (十六) 生を生ずる者は無なり、故に未だ嘗て終らず (十七) 形の形する所の者は形ある者なり、以下皆同じ (十八) 無なるが故に未だ嘗て有らず、以下皆同じ (十九) 造化は無爲にして生形聲色味皆自然に生成する也 (二十) 能く陰能く陽以下皆造化の妙用をいふ、而して之を能くする者は無知にして知らざるなく無能にして能くせざるなきを言ふなり

子列子適ゝ衛。食ニ於道從者一。見ニ百歲髑髏一。攓ゝ蓬而指。顧謂ニ弟子百豐一曰。唯予與ゝ彼

子列子衛に適き、道の從者に食す。百歲の髑髏を見て、(一)蓬を攓いて指し、顧みて弟子百豐に謂つて曰く、(二)唯ゝ予と彼と知れり、而して未だ嘗て生ぜず、未だ嘗て死せざるなり。(三)此過ちて養ふか、此過ちて歡ぶか。(四)種幾くかあり。(五)鼃の鶉となるが若し。(六)水を得て𢇁となる、(七)水土の際を得れば則ち鼃蠙の衣となる。(八)陵屯に生

物有レ所レ通。何則生覆者。不レ能二形載一。形載者。不レ能二教化一。教化者。不レ能レ違レ所レ宜。宜定者不レ出二所位一。故天地之道。非レ陰則陽。聖人之教。非レ仁則義。萬物之宜非レ柔則剛。此皆隨二所宜一而不レ能レ出二所位一者也。故有二生者一。有二生レ生者一。有二形者一。有二形レ形者一。有二聲者一。有二聲レ聲者一。有二色者一。有二色レ

ざれば則ち剛、此皆所宜に隨つて所位を出づること能はざる者なり。故に生ずる(一〇)者あり、生を生ずる(一一)者あり、形する者あり、形を形する者あり、聲ある者あり、聲を聲する者あり、色ある者あり、色を色する者あり、味ある者あり、味を味する者あり、生の(一二)生ずる所の者は死す、而して生を生ずる(一三)者は未だ嘗て終らず。(一四)形の形する所の者は實なり。而して形を形する者は未だ(一五)嘗て有らず。聲の聲する所の者は聞ゆ、而して聲を聲する者は未だ嘗て發せず。色の色する所の者は彰る、而して色を色する者は未だ嘗て顯れず。味の味する所の者は嘗む、而して味を味する者は未だ嘗て呈せず。(一六)皆無爲の職なり。(一七)能く陰能く陽、能く柔能く剛、能く短能く長、能く圓能く方、能く生能く死、能く暑能く涼、能く浮能く沈、能く宮能く商、能く出能く沒、能く玄能く黄、能く甘能く苦、能く羶能く香。無知なり、無能なり、而して知らざるなきなり、而して能くせざるなきなり。

(一) 天地の功も盡さゞる所あり　(二) 聖人も能くせざる所あり　(三) 萬物各其の用を異にす　(四) 萬物を生じ之を

者。言萬物相渾淪而未相離也。視之不見。聽之不聞。循之不得。故曰易也。易無形埒。易變而爲一。一變而爲七。七變而爲九。九變者究也。乃復變而爲一。一者形變之始也。清輕者上爲天。濁重者下爲地。沖和氣者爲人。故天地含精。萬物化生。

見ざるにまだ見るべからざるをいふ　氣の始に陰陽未だ分れざる也　陰陽已に分れて品物始めて形づくりたる也　質は性也、万物各自剛柔離散の性をいふ　渾淪は一氣未だ分離せざる貌　形も影もなき也　一は一氣也、太易變じて一氣を生ずる也　一氣變じて陰陽五行となる也　九は陽數の極なり、九の變は變の極にて又一となる　窮變する時は乃ち易變じて一となる　清輕なる者は陽氣也　濁重なる者は陰氣也　陰陽の氣和合して人となる也　天地の間は空虚なれども生々する所の精分を含む也

子列子曰。天地無全功。聖人無全能。萬物無全用。故天職生覆。地職形載。聖職教化。物職所宜。然則天有所短。地有所長。聖有所否。

子列子曰く、天地全功なし、聖人全能なし、萬物全用なし。故に天は生覆を職り、地は形載を職り、聖は教化を職り、物は宜しき所を職る。然らば則ち天も短き所あり、地も長ずる所あり、聖も否る所あり、物も通ずる所あり。何となれば則ち生覆する者は形載すること能はず、形載する者は教化すること能はず、教化する者は宜しき所に違ふこと能はず、宜定る者は所位を出でず。故に天地の道、陰に非ざれば則ち陽、聖人の教、仁に非ざれば則ち義、萬物の宜、柔に非

是謂二玄牝一。玄牝之門。是謂二天地之根一。綿綿若レ存。用レ之不レ勤。故生レ物者不レ生。化レ物者不レ化。自生自化。自形自色。自智自力。自消自息。謂二之生化形色智力消息一者非也。

子列子曰。昔者聖人因二陰陽一以統二天地一。夫有形者。生二於無形一。則天地安從生。故曰。有二太易一。有二太初一。有二太始一。有二太素一。太易者。未レ見レ氣也。太初者。氣之始也。太始者。形之始也。太素者。質之始也。氣形質具而未二相離一。故曰二渾淪一。渾淪

子列子曰く、昔者聖人、(一)陰陽に因りて以て天地を統ぶ。夫れ有形は無形より生ずれば、則ち天地安くより生ずる。故に曰く、(二)太易あり、太初あり、太始あり、太素あり。太易は(三)未だ氣を見ざるなり。太初は(四)氣の始なり。太始は(五)形の始なり。太素は(六)質の始なり。氣形質具りて未だ相離れず、故に(七)渾淪と曰ふ。渾淪は萬物相渾淪して未だ相離れざるを言ふなり。之を視れども見えず、之を聽けども聞えず。之に循へども得ず、故に易と曰ふなり。易は(八)形埒なし。易變じて(九)一となり、(一〇)一變じて七となり、七變じて(一一)九となる。九は變ずる者の究なり。乃ち復た變じて一となる。一は(一二)形變ずるの始なり。(一三)清輕なる者は上りて天となり、(一四)濁重なる者は下りて地となり、(一五)沖和の氣は人となる。故に(一六)天地精を含み、萬物化生す。

(一) 陰陽は無形の物、天地は有形の物、卽ち無形を以て有形を統ぶる也 (二) 以下造化の神をいふ (三) 未だ氣を

昏瞀人。吾側聞之。試以告女。其言曰。有生不生。有化不化。不生者。能生生。不化者能化化。生者不能不生。化者不能不化。故常生常化。常生常化者。無時不生。無時不化。陰陽爾。四時爾。不生者疑獨。不化者往復。其際不可終。疑獨其道不可窮。黃帝書曰。谷神不死。

むべからず。（一二）黄帝の書に曰く、（一三）谷神は死せず、是を（一四）玄牝と謂ふ。（一五）玄牝の門、是を天地の根と謂ふ。（一六）綿綿として存するが若く、之を用ひて（一七）勤めず。故に物を生ずる者は生ぜず、物を化する者は化せず。（一八）自ら生じ、自ら化し、自ら形し、自ら色し、自ら智あり、自ら力あり、自ら消し、自ら息す。（一九）之を生化形色智力消息すと謂ふ者は非なり。

（一）此篇は多く天理を言へり、篇は篇目也（二）列子の子は男子の通稱、上の子は列子の門人が此書を編するとき尊びて更に子の字を加へたる也（三）四年にて米穀足らざる也（四）故郷を去りて他國に往くを適といふ（五）壺丘子林は列子の師（六）伯昏瞀人は列子の友（七）有生は天地間に生成せる萬物也、不生は即ち無也（八）有化は存亡變化する者をいふ不化は存亡變化せざるもの即ち造化をいふ（九）造化の能く萬物を化生するをいふ（一〇）不生者は目にも見えず耳にも聞えず始もなく終もなく獨然として一なり故に獨といふ、其の獨り知るべからざる故に之を疑といふ（一一）往復は四時の互に推し移るをいふ（一二）此の一節は老子第六章の全文なり（一三）谷は虚なるもの神は微妙にして測られざるをいふ、谷神は即ち道の本體をいふ、死せずとは盡くることなき也（一四）牝は能く物を生ず即ち萬物の根なり、微妙にして測られず故に之を玄牝といふ（一五）門は物の出づる處（一六）綿綿は絶えず已まざるものなれどもその物たる有るが如く無きが如し（一七）物を生ずるに無爲無心なる故勞することなし故に勤めずと言ふ（一八）萬物皆自ら化生する也（一九）造化が有心に之を生じ之を形し之を色し之を智にし之を力にし之を消し之を息すと謂ふは不可なり

子列子居二鄭圃一四十年。人無二識者一。國君卿大夫。眎レ之猶二衆庶一也。國不レ足。將レ嫁二於衞一。弟子曰。先生往無二反期一。弟子敢有レ所レ謁。先生將何以教。先生不レ聞二壺丘子林之言一乎。子列子笑曰。壺子何言哉。雖レ然夫子嘗敎二伯

列子

天瑞第一（一）

子列子（二）鄭の圃に居ること四十年、人識る者なし。國君卿大夫の、之を眎ること、猶ほ衆庶のごとし。國（三）足らずして、將に衞に嫁（四）かんとす。弟子曰く、先生往いて反る期なし。弟子敢へて謁ふ所あり、先生將何を以て敎へん。先生は壺丘子林（五）の言を聞かざりしか。子列子笑うて曰く、壺子何をか言へるや。然りと雖も夫子嘗て伯昏瞀（六）人に語り、吾側に之を聞けり。試に以て女に告げん。其の言に曰く、有生（七）は不生よりし、有化（八）は不化よりす。不生者は能く生を生じ、不化者（九）は能く化を化す。生者は生ぜざる能はず、化者は化せざる能はず、故に常に生じ常に化す。常に生じ常に化する者は、時として生ぜざるなく、時として化せざるなし。陰陽爾り、四時爾り。不生者は疑獨（一〇）、不化者は往復（一一）す。其の際終るべからず。疑獨は其の道窮

已。猶以爲寡。益レ之以レ怪。以レ反レ人爲レ實、而欲下以レ勝レ人爲上レ名。是以與レ衆不レ適也。弱二於德一、強二於物一。其塗隩矣。由二天地之道一、觀二惠施之能一、其猶二一蚊一虻之勞者一也。其於レ物也何庸。夫充レ一尚可。曰二愈貴一レ道幾矣。惠施不レ能二以レ此自寧一。散二於萬物一而不レ厭。卒以二善辯一爲レ名。惜乎。惠施之才。駘蕩而不レ得。逐二萬物一而不レ反。是窮レ響以レ聲。形與レ影競走也。悲夫。

塊の壯なるに比す（七）惠施は自ら雄辯の志を存して道術を知らず（八）畸人（九）惠施に問ふなり（一〇）多辯して止めず猶之を不足として奇怪の說を附加す（一一）人に反し實を立つるを以て能事となす（一二）人と相容れず（一三）自ら治むる德弱くして物我の念強し（一四）惠子の道は小さくして曖し（一五）蚊虻の飛びまはるが如く空しく騷り勞するのみ（一六）物に對して用ふる所無し（一七）一個の能を充實するだけならばまだ可なり（一八）道に違せずれども貴々之を貴びて道に進まんといはゞ可なるに近し（一九）心を己に凝集せずして萬物の上に分散す（二〇）檢束なくして眞を得ず（二一）萬物を逐うて心を形役に勞し性命の眞に反らず（二二）響は聲に應じて生ずるものなるに響の在る所を窮めんとして聲を發すれば益々響を生じて窮むべからず（二三）影は形に依りて生ずるものなるに影を止めんとして走れば影亦走りて止むべからず求むること厚くして得ること遠しといふべし

莊子　終

人之心。辯者之囿也。惠施日以其知。與人之辯。特與天下之辯者爲怪。此其柢也。然惠施之口談。自以爲最賢。曰天地其壯乎。施存雄而無術。南方有倚人焉。曰黃繚。問天地所以不墜不陷。風雨雷霆之故。惠施不辭而應。不慮而對。徧爲萬物說。說而不休。多而無

も賢と爲す。曰く、天地其れ壯なるかなと。(七)施は雄を存して、而して術なし。南方に(八)倚人あり、(六)黃繚と曰ふ。天地の、墜ちず陷らざる所以と、風雨雷霆の(九)故とを問ふ。惠施辭せずして應じ、慮らずして對ふ。徧く萬物の說を爲して、說いて休まず。(一〇)多くして已むことなくして猶ほ以て寡しと爲し、之れ益すに怪を以てし、人に反するを以て實と爲し、而して(一一)人に勝つを以て名と爲さんと欲す。是を以て(一二)衆と適はざるなり。(一三)德に弱くして、物に強く、其の(一四)塗隩なり。天地の道に由りて、惠施の能を觀れば、其れ猶ほ(一五)一蚊一虻の勞するもののごときなり(一六)其の物に於けるや、何ぞ庸ひん。夫れ(一七)一に充てば尙ほ可なり、(一八)愈〻道を貴ぶと曰はゞ幾し。惠施此を以て自ら寧んずること能はず。(一九)萬物に散じて厭はず、卒に善辯を以て名を爲す。惜いかな、惠施の才にして、(二〇)駘蕩して得ず、(二一)萬物を逐うて反らざること。是れ(二二)響を窮むるに聲を以てし、(二三)形と影と競ひ走るなり、悲しい夫。

㊀ 共に趙の人 ㊁ 人の意を紛亂せしむ ㊂ 辯論の雄 ㊃ 怪詭の辯を呈す ㊄ 本領とする所 ㊅ 自ら天

可以爲羽。鑿不圍枘。飛鳥之景未嘗動也。鏃矢之疾。而有不行不止之時。狗非犬。黃馬驪牛三。白狗黑。孤駒未嘗有母。一尺之捶。日取其半。萬世不竭。辯者以此與惠施相應。終身無窮。

桓團。公孫龍辯者之徒。飾人之心。易人之意。能勝人之口。不能服

施と相應じて、終身窮まりなし。(二二)

(一) 卵にも毛あるを以てすれば卵の内已に毛を生ずべき伏線あり故に卵に毛あり (二) 雞は二足なれど之を動かす者あり之を足と見て三足 (三) 楚の郢都は天下の内に存在して最小たる小邑なれど其の小を論ずれば天下も亦小故に郢よく天下を有つともいふべし (四) 犬といひ羊といふは人の與へし名目に過ぎず (五) 馬は胎生し鳥は卵生すれど形の上の異にして胎と卵と生ずる所以に於て異なるなし (六) 蝦蟇に尾なけれど蝌斗に尾あるを以てすれば尾あり (七) 冷熱は相對的の感覺にすぎず (八) 谷は聲を出すよりすれば山に口あり (九) 車輪は轉じて止まざる故に地を踏まず (一〇) 目の見るは物の幻影のみにして實物目に入るに非ず (一一) 指は物を指せど物に觸るゝ能はず觸るれば即きて離れず (一二) 長短は形の比のみ (一三) 方圓は形の名のみ (一四) 枘の鑿穴に入るは隙あるためなり圍んで餘地なくば入るを得じ (一五) 動けば影なし (一六) 行くに時あるを以て見れば止まる所あり止まれば行かざるを以て見れば止まらざる所あり (一七) 狗犬は一なれど狗といへば犬といふを得ず (一八) 黃と驪との色より見れば牛と馬とは一にして三となり牛と馬との形より見れば黃と驪と、色は一にして亦三となる (一九) 黑白は色の名に過ぎず (二〇) 駒に母なきを得ざれど孤といへば已には母なし (二一) 二分の一ずゝ取れば無限に二分一だけ殘る (二二) 一生辯論して窮り無し

(一)桓團、公孫龍は辯者の徒、人の心を飾り、人の意を易ふ。(二)能く人の口に勝つも人の心を服すること能はず。(三)辯者の囿なり。惠施日に其の知を以て、人と之れ辯じ、特り天下の辯者と怪を爲す。(四)此れ其の柢なり。(五)然かも惠施の口談自ら以て最

之謂大同異。南方無窮而有窮。今日適越而昔來。連環可解也。我知天下之中央。燕之北。越之南是也。氾愛萬物。天地一體也。惠施以此爲大觀於天下。而曉辯者。天下之辯者相與樂之。

厚さあれば限あり厚さ無きものは積むべからざれど其の大千里に及ぶ（七）大小厚無厚は皆相對の言なり。相對的にいへば天は地よりも卑く山は澤より低しとも云はる（八）西に居るものよりして見れば日は正午なりと云へど東に居るものよりして見れば斜陽なり。睨は横に視るなり（九）生死要するに大同にして小異に過ぎず故に之を小同異といふ（一〇）萬物は之を同じと見れば悉く一元異なりとすれば各々萬殊に分る（一一）南といふ方角は限り無けれど南に南に行けば遂に南とせし所已に北となる故に窮あり（一二）昨日は昨日の今日にして今日は明日の昨日なり（一三）環の貫くは空所を貫くものにして環其のものを貫くにあらざれば兩環相聯るも之を解き得（一四）燕は天下の北越は天下の南なれど無窮よりすれば之を天下の中央となし得

卵有毛。雞三足。郢有天下。犬可以爲羊。馬有卵。丁子有尾。火不熱。山出口。輪不蹍地。目不見。指不至。至不絕。龜長於蛇。矩不方。規不

（一）卵に毛あり、（二）鷄は三足。（三）郢は天下を有つ。（四）犬以て羊と爲すべし。（五）馬に卵あり。（六）丁子に尾あり。（七）火は熱からず。（八）山に口を出だす。（九）輪は地を蹍まず。（一〇）目は見ず。（一一）指は至らず、至れば絕たず。（一二）龜は蛇より長し、（一三）矩は方ならず。規は以て圓と爲すべからず。（一四）鑿は枘を圍まず。（一五）飛鳥の景未だ嘗て動かざるなり。（一六）鏃矢の疾きも、行かず止まらざるの時あり。（一七）狗は犬に非ず。（一八）黄馬驪牛三つ。（一九）白狗は黑し。（二〇）孤駒未だ嘗て母あらず。（二一）一尺の捶、日に其の半を取れば、萬世竭きずと。辯者此を以て惠

觀。彼其充實不可以已。上與造物者遊、而下與外死生無終始者爲友。其於本也、弘大而辟。深閎而肆。其於宗也、可謂稠適而上遂矣。雖然、其應於化而解於物也、其理不竭。其來不蛻。芒乎昧乎、未之盡者。

惠施多方。其書五車。其道舛駁。其言也不中。厤物之意曰。至大無外。謂之大一。至小無內。謂之小一。無厚不可積也。其大千里。天與地卑。山與澤平。日方中方睨。物方生方死。大同而與小同異。此之謂小同異。萬物畢同畢異。

惠施多方、其の書五車、其の道舛駁、其の言や中らず、物の意を厤して曰く、至大は外無し、之を大一と謂ふ。至小は内無し、之を小一と謂ふ。無厚は積むべからざるなり。其の大千里、天は地より卑く、山は澤より平かなり。日方に中すれば方に睨す。物方に生ずれば方に死す。大同にして小同と異なる、此を之れ小同異と謂ふ。萬物畢く同じく畢く異なる、此を之れ大同異と謂ふ。南方窮りなくして窮りあり。今日越に適いて而して昔來る。連環解くべきなり。我れ天下の中央を知る。燕の北、越の南是なり。汎く萬物を愛すれば、天地一體なりと。惠施此を以て天下に大觀せりと爲して辯者を曉す。天下の辯者相與に之を樂しむ。

(一) 方術多岐にわたる　(二) 雜駁　(三) 物の意義を歴說す　(四) 外あれば至大ならず　(五) 内あれば至少ならず

而悅レ之。以下謬悠之說、荒唐之言。無端崖之辭、時恣縱而不レ儻、不二以レ觭見一レ之也。以二天下一爲三沈濁不レ可二與莊語一。以二卮言一爲二曼衍一、以二重言一爲レ眞、以二寓言一爲レ廣。獨與二天地精神一往來。而不三敖二倪於萬物一。不レ譴二是非一、以與二世俗一處。其書雖二瓌瑋一、而連犿無レ傷也。其辭雖二參差一、而諔詭可レ

倪せず、是非を譴めずして以て世俗と處る。其の書瓌瑋(一三)と雖も、而かも連犿(一四)として傷なきなり。其の辭參差(一五)と雖も、而かも諔詭(一六)にして觀るべし。彼れ其れ充實(一七)して以て已むべからざればなり。上は造物者と與に遊んで、下は死生を外にし、終始無きものと友たり。其の本(一八)に於けるや、弘太にして而して辟、深閎(一九)にして而して肆、其の宗(二〇)に於けるや、稠適して而して上遂すと謂ふべし。然りと雖も、其の化(二一)に應じて而して物に解くや、其の理は竭きず、其の來るや蛻せず(二二)、芒乎昧乎(二三)、未だ之れ盡きざるものなり。

(一) 恍惚寂寞として形無し (二) 其の大をいふ (三) 跡無きをいふ (四) 萬物森羅して均一する所無し (五) 虛遠の說空漠無稽の言廣大無邊の辭 (六) 拘束せらるゝ所無くして偏依せず (七) 奇偶の奇と同じ一端を以て言とせざるなり (八) 沈濁暗濁にして與に正言すべからず (九) 好言を以て游衍自得す (一〇) 重きを古先の言に假りて人をして信ぜしむ (一一) 寓言假說を以て意を廣む (一二) 萬物に傲らず (一三) 怪奇 (一四) 宛轉の貌、縱橫細說して詡らざる所なきなり (一五) 區々にして同じからず (一六) 奇幻にして觀るに足る (一七) 彼は內に充實する所ありて言はざらむとするも止むべからざればなり (一八) 其の道の本源に於るや弘大開通 (一九) 深遠宏大にして洋溢 (二〇) 其の道の大要に於るや物と諧和して上達す (二一) 天地の變化に應じて拘執無きや其の理深[illegible]して盡きず (二二) 其の言は道より來りて道を離れず (二三) 芒寞冥昧にして形無く盡くるなし

垢。人皆取實。己獨取虛。無藏也故有餘。巋然而有餘。其行身也徐而不費。無爲也而笑巧。人皆求福。己獨曲全。曰苟免於咎。以深爲根。以約爲紀。曰堅則毀矣。銳則挫矣。常寬容於物。不削於人。可謂至極。關尹老聃乎。古之博大眞人哉。

ず故に失へること無し [illegible] 高深の理を解へながら自ら卑位に居れば天下の谿となる谿は虛にして能く容るゝをいふ [illegible] 潔白の行を知りながら自らは汚辱に居る [illegible] 人皆福に先んぜんとするも己は獨り人に後れて爭はず [illegible] 天下の汚垢を身に受く [illegible] 之を貯蓄せざるが故に用ひて餘りあり [illegible] 獨立の貌 [illegible] 行動舒緩にして勞力を消費せず [illegible] 委曲に物に隨うて身を全うす [illegible] 智は才識に才鋭くして罪を見れんのみ [illegible] 深ければ毀れず故に之を根本とす [illegible] 約なれば簡故に之を大綱とす [illegible] 人に對して刻薄ならず

芴漠無形。變化無常。死與。生與。天地並與。神明往與。芒乎何之。忽乎何適。萬物畢羅。莫足以歸。古之道術有在於是者。莊周聞其風

芴漠形なく、變化常なし。死與生與、天地と並ぶ與、神明と往く歟、芒乎として何にか之き、忽乎として何にか適く。萬物畢く羅なりて以て歸するに足る莫し。古の道術是に在るものあり。莊周其の風を聞いて之を悅び、謬悠の說、荒唐の言、無端崖の辭を以てす。時に恣縱にして儻せず、觭を以て之を見さざるなり。天下を以て、沈濁にして與に莊語すべからずと爲し、巵言を以て曼衍を爲し、重言を以て眞を爲し、寓言を以て廣を爲し、獨り天地精神と往來して、萬物を敖

一。以二濡弱謙下一爲レ表。以二空虚不一レ毀二萬物一爲レ實。關尹曰。在レ己無レ居。形レ物自著。其動若レ水。其靜若レ鏡。其應若レ響。芴乎若レ亡。寂乎若レ清。同レ焉者和。得レ焉者失。未二嘗先一レ人而常隨レ人。老聃曰。知二其雄一。守二其雌一。爲二天下谿一。知二其白一。守二其辱一。爲二天下谷一。人皆取レ先。己獨取レ後。曰。受二天下之

寂乎として清きが若し。焉(一二)に同じきものは和し、焉(一三)を得るものは失ふと。未だ嘗て人に先んぜずして、常に人に隨ふと。老聃曰く、其の雄(一四)を知りて、其の雌を守れば、天下の谿と爲り、其の白(一五)を知りて、其の辱を守れば、天下の谷と爲ると。人皆(一六)先を取る。己れ獨り後を取ると。曰く、(一七)天下の垢を受くと。人皆實を取り、己れ獨り虚を取る。藏(一八)むることなきなり。故に餘りあり、巋然(一九)として餘りあり、其の身(二〇)を行ふや徐にして費さず、無爲にして巧を笑ふ。人皆福を求め、己れ獨り曲全(二一)すと。曰く、苟くも咎(二二)を免れんのみと。深(二三)を以て根と爲し、約(二四)を以て紀となす。曰く、堅ければ則ち毀る、鋭ければ則ち挫くと。常に物に寛容にして人(二五)に削しくせず。至極と謂ふべし。關尹老聃や、古の博大眞人なる哉。

(一) 無を以て純精となす (二) 富の充積を以て足らずとなす (三) 淡然無欲にして眞性に安んず (四) 散關の令尹喜關尹子といふ (五) 虚無 (六) 絶對 (七) 軟弱にして謙遜なることを外部の表徴とす (八) 虚に居て自然に應じ物をやぶらざるを以て内に守る所となす (九) 物の來るに應ずるのみなれば定居無し (一〇) 我を以て我を有さず物によつて著明 (一一) 恍惚として有れども亡きが如し (一二) 敢へて異を立てざるをいふ (一三) 得れども己の有とせ

是。莫之非而已矣。其風窢然。惡可而言。常反人不見觀。而不免於魭斷。其所謂道非道。而所言之韙。不免於非。彭蒙田駢慎到不知道。雖然。概乎皆嘗有聞者也。

道に非ずして、而して言ふ(六)所の韙は非を免れず。彭蒙田駢慎到道を知らず。然りと雖も、(七)概乎として皆嘗て聞くことあるものなり。

㊀ 實を覺らずして其の說を得たり ㊁ 圓轉として要領を缺く ㊂ わが道を是として詐りいはず ㊃ 賢人の嫌ふ所に反して傾聽せず ㊄ 自然に非ずして言ありて斷てるを免れず ㊅ 其の言ふ所の是は亦非を免れ得ず ㊆ 概略に於ては道を聞きしことあるもの

以本爲精。以物爲粗。以有積爲不足。澹然獨與神明居。古之道術有在於是者。關尹老聃聞其風而悅之。建之以常無有。主之以太一。

(一)本を以て精と爲し、物を以て粗と爲し、(二)積あるを以て足らずと爲し、(三)澹然として獨り神明と與に居る。古の道術是に在るものあり。(四)關尹老聃、其の風を聞いて之を悅び、之を建つるに常無有を以てし、之を主とするに(六)太一を以てす。(七)濡弱謙下を以て表と爲し、(八)空虛にして、萬物を毀たざるを以て實と爲す。關尹曰く、(九)己に在りては居ることなく、(一〇)物に形して自から著す。其の動くこと水の若く、其の靜かなること鏡の若く、其の應ずること響の若く、(一一)芴乎として亡きが若く、

無行。而非天下之大聖。椎拍輐斷。與物宛轉。舍是與非。苟可以免。不師知慮。不知前後。魏然而已矣。推而後行。曳而後往。若飄風之還。若羽之旋。若磨石之隧。全而無非。動靜無過。未嘗有罪。是何故。夫無知之物。無建己之患。無用知之累。動靜不離於理。是以終身無譽。故曰。至於若無知之物而已。無用賢聖。夫塊不失道。豪傑相與笑之曰。愼到之道。非生人之行。而至死人之理。適得怪焉。

稷下の士の說に曰く　(一〇) 是と云ひ非と云ひて選擇する所あれば周偏なる能はず　(一一) 道を敎ふれば道に至らず　(一二) 道は細大精粗遺さず包容すべきもの　(一三) 自ら主として作爲せず已むを得ざるに因りて物を淘汰す　(一四) 知るには限る所あれば則ち是知らざるなり　(一五) 知を輕んずるに過ぎて之を傷くるにちかきもの　(一六) 恥を忍び溷行して毀譽を心に置かずして天下の人が賢人を尙ぶを笑ふ　(一七) 放縱洒脫にして行に檢束なし　(一八) 椎を以て拍ち輐を以て斷ちし如く圭角なきを云ふ　(一九) 苟も是無くてすむことならば知慮に賴らず前後を知らず巍然として獨立す　(二〇) 已むを得ずして動く　(二一) ツムジ風の吹きめぐる如く羽の舞ひ落つる如く磨臼の回轉する如く自然に動く　(二二) 私に立てゝ事を爲すの患無し　(二三) 動靜進退盡く無爲にして理を離れず　(二四) 無知の物の如き境地に至れば可なり賢聖の必要なし　(二五) 土塊は無知なり故に道を失はず　(二六) 徒に世に怪まるゝのみ

田駢亦然。學於彭蒙。得不敎焉。彭蒙之師曰。古之道人。至於莫之

田駢亦然り、彭蒙に學んで敎へられざる(一)ことを得。彭蒙の師曰く、古の道人、之を是とする莫く、之を非とする莫きに至るのみ。其の風窢然、(二)惡にか可として言はんと。常に(三)人に反して觀を見さず、而かも(四)䡓斷を免かれず。其の所謂道は

而不能載之。地能載之而不能覆之。大道能包之。而不能辯之。知萬物皆有所可。有所不可。故曰。選則不徧。教則不至。道則無遺者矣。是故愼到棄知去己而緣不得已。冷汰於物以爲道理。曰。知不知。將薄知而後鄰傷之者也。謑髁無任。而笑天下之尙賢也。縱脫

に知るに薄くして後之を傷るに鄰からんとする者なり。(二五)謑髁、任ずるなくして、天下の(二六)賢を尙ぶを笑ひ、(二七)縱脫、行なくして、天下の大聖を非り、(二八)椎拍輐斷、物と與に宛轉し、是と非とを舍て、(二九)苟くも以て免るべければ、知慮を師とせず、前後を知らず、魏然たるのみ。(三〇)推して後行き曳いて後往く、(三一)飄風の還るが若く、羽の旋るが若く、磨石の隧するが若し。全うして非なく、(三二)動靜に過なく、未だ嘗て罪あらず。是れ何の故ぞや。夫れ無知の物は、(三三)己を建つるの患なく、知を用ふるの累なく、動靜に理を離れず、是を以て終身譽れなし。故に曰く、無知の物の若きに至つて已む。賢聖を用ふることなし。夫の(三四)塊は道を失はずと。(三五)豪傑相與に之を笑つて曰く、愼到の道は、生人の行に非ずして、死人の理に至ると。適に(三六)怪を得るのみ。

㊀ 公正平易にして偏私せず、黨は黨なり ㊁ 水の流るゝが如く自然につきて主とする所なし ㊂ 物に隨うて彼我を立てず ㊃ 思慮せず是非せず選擇せず ㊄ 同化し一行動す ㊅ 齊の隱士にして倶に稷下に遊び書を著す ㊆ 萬物を齊しうし擇ばざるを主義とす ㊇ 天地の大道は萬物を包容すれども之を辯說する能はず ㊈

夜不レ休曰。我必レ得レ活哉。圖レ傲一乎救レ世之士一哉。曰。君子不レ爲ニ苛察一。不ニ以レ身假レ物。以爲無レ益ニ於天下一者。明レ之不レ如レ已也。以ニ禁レ攻寢レ兵爲レ外。以ニ情欲寡淺一爲レ內。其小大精粗。其行適至レ是而止。

出づ 一四 攻略を禁じ戰を止むるを外部の務とし欲寡を淺少にするを內部の務とす 一五 自他內外の行大小精粗あれども其の行は是の如きのみ

公而不レ當。易而無レ私。決然無レ主。趣レ物而不レ兩。不レ顧ニ於慮一。不レ謀ニ於知一。與レ物無レ擇。與レ之俱往。古之道術有下在ニ於是一者上。彭蒙田駢愼到。聞ニ其風一而悅レ之。齊ニ萬物一以爲レ首。曰。天能覆レ之。

(一)公にして當せず、易にして私なし。(二)決然として主なく、(三)物に趣いて兩にせず、(四)慮に顧みず、知に謀らず、物と擇ぶこと無く、(五)之と俱に往く。古の道術是に在るものあり。(六)彭蒙、田駢、愼到、其の風を聞いて之を悅び、(七)萬物を齊しうするを以て首と爲す。曰く、天能く覆へども、載すること能はず。地能く載すれども、覆ふこと能はず。(八)大道能く包めども、辯ずること能はずと。萬物皆可なる所あり、不可なる所あるを知る。(九)故に曰く、(一〇)選べば則ち偏からず、(一一)教ふれば則ち至らず。(一二)道は則ち遺すことなきものなりと。是の故に愼到、知を棄て己を去つて、(一三)已むことを得ざるに緣り、(一四)物を冷汰して、以て道理を爲す。曰く、知るは知らずと。將

聏合驩。以調ニ海内ヲ。請欲ス置ニ之ヲ以爲スト主ト。見レ侮不レ辱。救ニ民之鬭ヲ。禁レ攻寢レ兵。救ニ世之戰ヲ。以レ此周ニ行天下ニ。上説下教。雖ニ天下不ルト取。强聒而不レ舍者也。故曰。上下見レ厭而强見也。雖然。其爲レ人太多。其自爲太少。曰。請欲下固置ニ五升之飯ニ足上矣。先生恐不レ得レ飽。弟子雖レ飢。不レ忘ニ天下ヲ日

とを欲すと。先生恐らくは飽くことを得ず、弟子飢うと雖も天下を忘れじと。日夜休はずして曰く、（一二）我れ活を得ることを必せんや、世を救ふの士に傲ることを圖らんと。曰く、君子は（一三）苛察を爲さず、（一四）身を以て物を假らずと。以爲へらく天下に益無きものは、之を明かにするは已むるに如かざるなりと。（一六）攻を禁じ兵を寢むるを以て外と爲し、（一五）情欲寡淺を以て内と爲す。其の大小精粗、其の行適に是に至つて止む。

（一）自個の衣食足りて止まんことを願ひ之を以て心を潔白にす　（二）共に齊の宣王の時の人　（三）上下均平の冠[?]を作りて其の其の[?]道の均平なるを表る[?]　（四）萬物を別區別して相紛さざらしむる[?]を以て始めとす　（五）心の狀態を語り之を名づけて曰く　（六）同和を以て衆人の喜を一に合せ以て天下を治む　（七）和するの心を置いて主とせんと欲す　（八）天下の人其の說を採用せざれど強ひてやかましく說立てゝ止まず　（九）上下の人に厭はせられながら強ひて行はんとするもの　（一〇）人の爲に計ること多くして己の爲にすること甚だ少し　（一一）宋尹等の說に曰く僅か五升の飯さへあらば足らんことを欲す恐らくは先生其の食十分ならず弟子も飢ゆるならんが然れども天下を忘れじと　（一二）己を忘れて他の爲に計るなれば我が生存を必すること難し又救世濟民を看板とせる俗士とはり合はん[?]之に傲ることをなさし　（一三）小さき事まで穿鑿立てせず　（一四）身のために外物を假り用ひず即ち他者の物を受け容れに[?]

而已矣。亂之上也。治之下也。雖レ然。墨子眞天下之好也。將下求レ之不レ得也。雖ニ枯槁一不レ舍也。才士也夫。

不レ累ニ於俗一。不レ飾ニ於物一。不レ苟ニ於人一。不レ忮ニ於衆一。願下天下之安寧。以活ニ民命一。人我之養。畢足而止上。以レ此白レ心。古之道術。有下在ニ於是一者上。宋鈃尹文聞ニ其風一而悅レ之。作ニ爲華山之冠一以自表。接ニ萬物一以ニ別宥一爲レ始。語ニ心之容一。命レ之曰。心之行以レ

俗に累はされず、物を飾らず、人に苟くもせず、衆に忮はず、天下の安寧にして以て民命を活かし、(一)人我の養、畢く足つて止まんことを願ひ、此を以て心を白にす。古への道術、是に在るものあり。(二)宋鈃尹文は其の風を聞いて之を悅び、(三)華山の冠を作爲して以て自ら表し、萬物に接するに(四)別宥を以て始めとす。(五)心の容を語り、之を命じて曰く、心の行は、(六)聏を以て驩を合し、以て海内を調ふ。請(七)ふ之を置いて以て主とせんと欲す。侮られて辱とせずして、民の鬭を救ひ、攻を禁じ兵を寢めて、世の戰を救はんとす。此を以て、天下に周行して、上に說き下に敎ふ。天下取らずと雖も、强聒して舍かざるものなり。故に曰く、(八)上下に厭はれて强ひて見ゆるなり。然りと雖も、(九)其の人の爲めにするや太だ多く、其の自らの爲めにするや太だ少し。(一〇)曰く、請ふ固より五升の飯を置きて足らんこ

也。而形勞天下也。如此使後世之墨者、多以裘褐爲衣。以跂蹻爲服。日夜不休。以自苦爲極。曰、不能如此、非禹之道也、不足謂墨。相里勤之弟子、五侯之徒、南方之墨者、苦獲己齒鄧陵子之屬、俱誦墨經、而倍譎不同、相謂別墨。以堅白同異之辯相訾、以觭偶不仵之辭相應、以巨子爲聖人、皆願爲之尸、冀得爲其後世、至今不決。墨翟禽滑釐之意則是、其行則非也。將使後世之墨者、必自苦以腓無胈、脛無毛、相進上

訾り、觭偶不仵の辭を以て相應じ、(二五)巨子を以て聖人と爲し、(二六)皆之を尸と爲さんを願ひ、(二七)其の後世たるを得んを冀ひて、(二八)今に至つて決せず。墨翟、禽滑釐の意は則ち是なり。其の行は則ち非なり。將に後世の墨者をして、必ず自ら苦しんで、腓に胈なく、脛に毛無きを以て、相進ましめんとするのみ。亂の上なり、治の下なり。(二九)然りと雖も、墨子は眞に天下の好なり、將に之を求めて得ざれば、枯槁すと雖も舍かざらんとせるなり。(三一)才士なる夫。(三〇)

(一一) 禹の爲王九年の洪水を平げしこと史に見ゆ (一二) 河の支流 (一三) 土を盛る器と掘る器 (一四) 調合するなり (一五) 身を勞することと甚しくして腓に肉なく脛に毛なし (一六) 狹風暴雨に曝されて勞役す (一七) 毛織の衣にて粗服なり (一八) 木履と草鞋とを穿つ (一九) 決剛勁氣となす (二〇) 墨子の弟子 (二一) 公餘伯子明五等の諸侯の門に出づるもの (二二) 背反詭譎して同じからず (二三) 墨者の別派といふ (二四) 前に出づ (二五) 奇と偶と相均しからずといふ說を以て答問す (二六) 墨者の首領たるもの (二七) 主 (二八) 其の後繼を繼がんことを願ふ (二九) 亂に及ばずとも治には至らず (三〇) 立派なる人物 (三一) 道を求めて得ざれば其の身枯槁すと雖も止まず

未ㇾ敗ニ墨子道一。雖ㇾ然。歌而非ㇾ歌。哭而非ㇾ哭。樂而非ㇾ樂。是果類乎。其生也勤。其死也薄。其道大觳。使ニ人憂一。使ニ人悲一。其行難ㇾ爲也。恐其不ㇾ可ㇾ以爲ニ聖人之道一。反ニ天下之心一。天下不ㇾ堪。墨子雖ニ獨能任一。奈ニ天下一何。離ニ於天下一。其去ㇾ王也遠矣。

自ら愛する所以に非ず　(五)普通の人情に似たるか　(六)死して葬むること薄し　(七)潤ひなくして殺風景　(八)天下爲すにたへず

墨子。稱ㇾ道曰。昔者禹之湮ニ洪水一。決ニ江河一。而通ニ四夷九州一也。名山三百。支川三千。小者無數。禹親自操ニ橐耜一而九ニ雜天下之川一。腓無ㇾ胈脛無ㇾ毛。沐ニ甚風一。櫛ニ疾雨一。置ニ萬國一。禹大聖

墨子、道を稱して曰く、昔は禹の(一)洪水を湮ぎ、江河を決して、而して四夷九州を通ずるや、名山三百、(二)支川三千、小なるもの無數。禹は親しく自ら橐耜(三)を操つて天下の川を(四)九雜し、(五)腓に胈なく脛に毛なく、(六)甚風に沐し、疾雨に櫛り、萬國を置く。禹は大聖なり、而かも形の天下に勞するや此の如しと。後世の學者をして多く(七)裘褐を以て衣と爲し、(八)跂蹻を以て服と爲し、日夜休はず、自ら苦しむを以て(九)極と爲さしめて曰く、此の如きこと能はずんば、禹の道に非ざるなり。墨と謂ふに足らずと。(一〇)相里勤の弟子(一一)五侯の徒、南方の墨者、苦獲、己齒、鄧陵子の屬、倶に墨經を稱して、(一二)倍譎して同じからず。(一三)別墨と相謂つて、(一四)堅白同異の辯を以て相

黄帝有咸池。堯以大章。舜有大韶。禹有大夏。湯有大濩。文王有辟雍之樂。武王周公作武。古之喪禮。貴賤有儀。上下有等。天子棺槨七重。諸侯五重。大夫三重。士再重。今墨子獨。生不歌。死不服。桐棺三寸而無槨。以爲法式。以此教人。恐不愛人。以此自行。固不愛己。

黄帝に咸池（一）あり、堯に大章あり、舜に大韶あり、禹に大夏あり、湯に大濩あり、文王に辟雍の樂あり。武王周公は武を作す。古の喪禮は貴賤に儀あり、上下に等あり、（二）天下は棺槨七重、諸侯は五重、大夫は三重、士は再重。今は墨子、獨り、生れて歌はず、死して服せず、（三）桐棺三寸にして槨なきを以て法式と爲す。此を以て自ら行へば、固より（四）己を愛せじ。以て人に教へば、恐らくは人を愛せじ。未だ墨子の道を敗らざるも、然りと雖も、歌ふべくして歌ふを非とし、哭すべくして哭するを非とし、樂しむべくして樂しむを非とす、是れ（五）果して類するか。其の生や勤、其の死や薄（六）、其の道大穀（七）、人をして憂へしめ、人をして悲しましむ。其の行は爲し難きなり。恐らくは、其れ以て聖人の道と爲すべからず。天下の心に反して、（八）天下堪へず。墨子獨り能く任ずと雖も、天下を奈何せん。天下を離るれば、其の王を去るや遠し。

（一）以下皆樂の名　（二）天子は棺槨を七重にす　（三）桐の棺の厚さ三寸にして外槨なきを法式とす　（四）努苦して

明。鬱而不レ發。天下之人。各爲二其所一レ欲焉。以自爲レ方。悲夫。百家往而不レ反。必不レ合矣。後世之學者。不幸。不レ見二天地之純。古人之大體一。道術將下爲二天下一裂上。

不レ侈二於後世一。不レ靡二於萬物一。不レ暉二於數度一。以二繩墨一自矯。而備二世之急一。古之道術。有下在二於是一者上。墨翟禽滑釐。聞二其風一而說レ之。爲レ之大過。已レ之大順。作二爲非樂一。命レ之曰二節用一。生不レ歌。死無レ服。墨子汎愛兼利。而非レ鬭。其道不レ怒又好レ學而博不レ異、不下與二先王一同上。毀二古之禮樂一。

(一)後世を侈らしめず、(二)萬物を靡しくせず、(三)數度を暉かさず、(四)繩墨を以て自ら矯めて世の急に備ふ。古の道術是に在るものあり。墨翟、(五)禽滑釐其の風を聞いて之を說び、(六)之を爲すこと大過、(七)之を已むること大順、(八)非樂を作爲し、之を命じて節用と曰ふ。(九)生れて歌はず、死して服なし。墨子は(一〇)汎愛兼利して鬭を非とす。其の(一一)道怒らず。又學を好んで博くして(一二)異にせず。(一三)先王と同じうせず、古の禮樂を毀る。

(一)後世に敎ふるに奢侈を以てせず (二)外飾を事とせず (三)制度法制を衒耀せず (四)正しき法規を以て自ら檢束して世の變に備ふ (五)墨子の弟子 (六)古人の風に習うて是とする所を爲すと極端にすぐ (七)非とする所を止むるに甚だしく極端 (八)音樂を廢する說を爲して之を用を節するといふ (九)人生るゝも之を祝せず死すれども喪に服せず (一〇)博く人を愛し偏く人を利し非戰論を唱ふ (一一)墨子の道は怒りを非とす (一二)自ら異を立てず (一三)先王の禮樂と同じうせず

天下大亂、賢聖不明、道德不一。天下多得一。察焉以自好。譬如耳目鼻口、皆有所明。不能相通。猶百家衆技也。皆有所長。時有所用。雖然、不該不徧。一曲之士也。判天地之美、析萬物之理、察古人之全、寡能備於天地之美、稱神明之容、是故内聖外王之道、闇而不

天下大に亂れて、賢聖明ならず、道德一ならず。天下多く一を得、察焉として以て自ら好しとす。(一)譬へば耳目鼻口、皆明かなる所あつて、相通ずる能はざるが如く、(二)猶ほ百家衆技の皆長ずる所あつて、時に用ふる所あるがごとし。(三)然りと雖も、該ねず偏からず、一曲の士なり。(四)天下の美を判ち、萬物の理を析つ。古人の全きを察するに、能く天地の美を備へ、神明の容に稱ふこと寡し。(五)是の故に内聖外王の道、闇くして明ならず、鬱として發せず。(六)天下の人、各〻其の欲する所を爲して、以て自ら方と爲す。(七)悲しい夫、百家往いて反らず、必ず合はず。(八)後世の學者不幸にして、天地の純、古人の大體を見ず、(九)道術將に天下の爲めに裂けんとす。

(一) 天下隆道術の一偏を得るもの之を察して自ら得たりとなす　(二) 各々明かなる所あれど他の感官の爲す所に通ずる能はず　(三) 技術百工皆各々長ずる所ありて時に用ふるに足れど一人の衆技を兼ぬる能はざるが如し　(四) 天地淳和の美をわざと剖判し萬物齊通の理を解析す　(五) 古の全德の士を見るに天地の純美を身に備へ神明の聖容に適ふもの少し　(六) 聖德を内に體し王道を外に治むる道暗くして明ならず　(七) 方術　(八) 百家の學者は往いて物を逐ひて本に反らず從つて理に合はず　(九) 古人の純備はりて全き所以を見ず

乎。配ニ神明一。醇ニ天地一。育ニ萬物一。和ニ天下一。澤及ニ百姓一。明ニ於本數一。係ニ於末度一。六通四辟。大小精粗。其運無ニ乎不一レ在。其明而在ニ數度一者。舊法世傳之史尚多有レ之。其在ニ於詩書禮樂一者。鄒魯之士。縉紳先生多能明レ之。詩以道レ志。書以道レ事。禮以道レ行。樂以道レ和。易以道ニ陰陽一。春秋以道ニ名分一。其數散ニ於天下一。而設ニ於中國一者。百家之學。時或稱而道レ之。

百姓に及び、(二)本數を明かにし、(三)末度を係く。(四)六通四辟、大小精粗、其の運、(五)在らざることなし。其の明かにして數度にあるものは、舊法世傳の史尚ほ多く之れ有り。其の詩書禮樂にあるものは、(六)鄒魯の士、縉紳先生多く能く之を明にす。(七)詩は以て志を道ひ、書は以て事を道ひ、禮は以て行を道ひ、樂は以て和を道ひ、(八)易は以て陰陽を道ひ、春秋は以て名分を道ふ。(九)其の數の天下に散じて、而して中國に設くるもの、百家の學、時に或は稱して之を道ふ。

(一) 天地を經緯して顯にす (二) 治民の根本たる制度法政 (三) 衆葉末節の法制 (四) 四方八方に闢け通ず (五) 其の作用の及ぼさざる所無し (六) 其の道の明にして法名に關するものは舊法及び世傳の史上にあり (七) 道の詩書禮樂に存するものをば孔孟の亞流公卿學者多く能く之を明にす (八) 詩は人の感情を發表し書は世事を述べいひ樂は人の和樂をいひ易は陰陽二氣の變をいひ春秋は名分秩序をいふ (九) 其の數度は散じて天下に分布し其の時に中國に設くるものは諸子百家の學之を稱道せり

成。皆原ニ於一一。不レ離ニ於宗一。謂ニ之天人一。不レ離ニ於精一。謂ニ之神人一。不レ離ニ於眞一。謂ニ之至人一。以レ天爲レ宗。以レ德爲レ本。以レ道爲レ門。兆ニ於變化一。謂ニ之聖人一。以レ仁爲レ恩。以レ義爲レ理。以レ禮爲レ行。以レ樂爲レ和。薰然慈仁。謂ニ之君子一。以レ法爲レ分。以レ名爲レ表。以レ參爲レ驗。以レ稽爲レ決。其數一二三四是也。百官以レ此相齒。以レ事爲レ常。以ニ衣食一爲レ主。蕃息畜藏。老弱孤寡爲レ意。皆有ニ以養レ民之理一也。

禮を以て行と爲し、樂を以て和と爲し、薰然として慈仁なる、之を君子と謂ふ。(一一)法を以て分を爲し、(一二)名を以て表を爲し、(一三)參を以て驗を爲し、(一四)稽を以て決を爲す。(一五)其の數は一二三四是れなり。(一六)百官此を以て相齒す。(一七)事を以て常と爲し、(一八)衣食を以て主と爲す。(一九)蕃息畜藏、(二〇)老弱孤寡を意となす。皆以て民を養ふの理あるなり。

(一) 此の篇古今道術の淵源を敍論し莊子の立つ所以を明にす莊門の徒の述作に係るものと云ふ (二) 道術の一方面 (三) 皆自己の修むる所を以て聖學となす (四) 道術は萬物の上に在らざる所無し (五) 人心の本性 (六) 聖德 (七) 王道 (八) 道の大本 (九) 道の門戶 (一〇) 變化未だ顯れざる先に其の未發を察して之に應ず (一一) 香氣の薰ずる如く慈仁の光被するを君子といふ (一二) 法則を立てゝ秩序を制す (一三) 名稱を以て實を表示す (一四) 比較し參考して實情を驗知す (一五) 考察して是非を決す (一六) 分界を決し歷然整然として數を以て計るが如し (一七) 百官は此職事を以て明に列す (一八) 職事とする所を定法とす (一九) 主として民の衣食について圖る所あり (二〇) 家畜蕃殖し財用蓄藏す

古之人其備

古の人其れ備はるか、神明に配し、(一)天地を醇くし、萬物を育し、天下を和し、澤は

與レ此。何其偏也。以二不平一平。其平也不レ平。以二不徵一徵。其徵也不レ徵。明者唯爲二之使一。神者徵レ之。夫明之不レ勝レ神也久矣。而愚者恃二其所レ見。入二於人一。其功外也。不二亦悲一乎。

㈠珠玉の裝飾 ㈡同上 ㈢會那者 ㈣人爲の不平を以て平にせんとすれば却つて平ならず ㈤自然によらずして物を徵取す ㈥明知は物の使役となる ㈦人心の本性は爲さずして物と應じ之を徵す ㈧人爲の道に入る

天下之治二方術一者多矣。皆以二其有一。爲レ不レ可レ加矣。古之所レ謂道術者。果惡乎在。曰。無二乎不一レ在。曰。神何由降。明何由出。聖有レ所レ生。王有レ所レ

天(一)下

天下の方術を治むるもの多し。(二)皆、其の有を以て、加ふべからずと爲す。(三)古の所謂道術なるものは、果して惡にか在る。曰く、(四)在らざること無し。曰く、(五)神は何くより降り、明は何より出づる。(六)聖は生ずる所あり、(七)王は成る所あり、皆一に原づく。(八)宗を離れざる、之を天人と謂ひ、(九)精を離れざる、之を神人と謂ひ、眞を離れざる、之を至人と謂ふ。天を以て宗と爲し、德を以て本と爲し、道を以て門と爲し、(一〇)變化に兆する、之を聖人と謂ふ。仁を以て恩と爲し、義を以て理と爲し、

及三其來而入二於太廟一。雖レ欲レ爲二孤犢一。其可レ得乎。

(一)犠牲の牛　(二)縁取りある錦繍　(三)草に豆　(四)仔牛

荘子將レ死。弟子欲二厚葬一レ之。荘子曰。吾以二天地一爲二棺槨一。日月爲二連璧一。星辰爲二珠璣一。萬物爲二齎送一。吾葬具豈不レ備邪。何以加レ此。弟子曰。吾恐烏鳶之食二夫子一也。荘子曰。在レ上爲二烏鳶食一。在レ下爲二螻蟻食一。奪レ彼

荘子將に死せんとす。弟子厚く之を葬らんと欲す。荘子曰く、吾れ天地を以て棺槨と爲し、日月を(一)連璧と爲し、星辰を(二)珠璣と爲し、萬物を(三)齎送と爲す。吾が葬具豈に備はらざらんや。何を以て此に加へんと。弟子曰く、吾れ恐らくは烏鳶の夫子を食はんことをと。荘子曰く、上に在れば烏鳶の食と爲り、下に在れば螻蟻の食と爲る。彼を奪つて此に與ふ。何ぞ其れ偏なるや。(四)不平を以て平にせんとすれば其の平や平ならず。(五)不徴を以て徴せんとすれば其の徴や徴ならず。(六)明なるものは唯之が使たり、(七)神なるものは之を徴す、夫れ明の神に勝らざるや久し。而るを愚者其の見る所を恃んで、(八)人に入る。其の功は外なり、亦悲しからずやと。

貧恃緯蕭而食者。其子沒於淵。得千金之珠。其父謂其子曰。取石來鍛之。夫千金之珠。必在九重之淵。而驪龍頷下。子能得珠者。必遭其睡也。使驪龍而寤。子尚奚微之有哉。今宋國之深。非直九重之淵也。宋王之猛。非直驪龍也。子能得車者。必遭其睡也。使宋王而寤。子爲虀粉矣。

金の珠は、必ず九重の淵の、而かも驪龍の頷下に在り。子能く珠を得しは、必ず其の(五)睡に遭ひたればなり。驪龍をして寤めしめば、子尚ほ(六)奚の微かこれあらんと。今宋國の深、直に九重の淵のみに非ざるなり、宋王の猛、直に驪龍のみに非ざるなり、子能く車を得たるものは、必ず其の睡りに遭ひたればなり。宋王をして寤めたらしめば、子虀粉たらんのみと。

(一)自慢す　(二)蕭荻を撚りて業とす　(三)珠を砕けよ　(四)黒龍の頷下にあり　(五)龍の睡れる時なるべし　(六)餘す所なく龍に食はれん

或聘於莊子。莊子應其使曰。子見夫犧牛乎。衣以文繡。食以芻菽。

或る人莊子を聘す。莊子其の使に應へて曰く、子、夫の(一)犧牛を見しや。衣するに(二)文繡を以てし、食はすに(三)芻菽を以てす。其の牽かれて太廟に入るに及んで、(四)孤犢たらんと欲すと雖も、其れ得べけんやと。

而此其所不爲者也。窮有八極、達有三必、形有六府。美髯長大。壯麗勇敢。八者俱過人也。因以是窮。緣循偃佒困畏不若人。三者俱通達。知慧外通、勇動多怨。仁義多責。達生之情者傀。達於知者肖。達大命者隨。達小命者遭。

かず、三つの者は俱に通達す。知慧は外に通じ、勇動は怨多く、仁義は責多し。生の情に達するものは傀、知に達するものは肖、大命に達するものは隨、小命に達するものは遭。

（一）德は無心なるべきに心ありて之を爲す、以は是道の賊、心は偏知なるべきに心に眼ありて是非を見るは亦賊なり　（二）心に眼あるが故に內に是非を見る　（三）好む所を以て德に中るとなし好まずして爲す所のものを斥く　（四）人の窮する原因に八つの美所あり　（五）人の通達するに三つの必然的條件あり　（六）人に過ぐる故に之を恃み却に窮す　（七）言ひなり故に人に屈ふ　（八）屈して人に從ふ　（九）快意　（一〇）人に若かざる故に却つて通達す　（一一）死生を超脫す　（一二）悟りて道を得　（一三）天の大命に通達するものは即其の命に隨ふのみにて窮達　（一四）遭ふ所に異らず

人有見宋王者、錫車十乘。以其十乘驕穉莊子。莊子曰、河上有家

人の、宋王に見ゆる者あり、車十乘を錫ふ。其の十乘を以て莊子に驕穉す。莊子曰く、河上に家貧しうして緯蕭を恃みて食ふものあり。其の子淵に沒して、千金の珠を得。其の父其の子に謂つて曰く、石を取り來つて之を鍛けよ。夫れ千

正考父。一命而傴。再命而僂。三命而俯。循レ牆而走。孰敢不レ軌。如ニ而夫一者。一命而呂鉅。再命而於ニ車上一儛。三命而名ニ諸父一。孰協ニ唐許一。

賊莫レ大ニ乎德有レ心。而心有レ睫。及ニ其有レ睫也而內視。內視而敗矣。凶德有レ五。中德爲レ首。何謂ニ中德一。中德也者有ニ以自好一也。

正考父(一)は一命にして而して傴し、(二)再命にして而して僂し、(三)三命にして而して俯し、(四)牆に循つて走る、孰れか敢へて軌せざらん。(五)而の夫の如きものは、一命にして呂(六)鉅し、再命にして而して車上に於て儛ひ、(七)三命にして諸父に名いふ、(八)孰れか唐(九)許に協はん。

(一)孔子十世の祖宋の大夫　(二)一たび任命せられて士となれば遜りて背を曲ぐ　(三)二命大夫となれば腰を曲ぐ　(四)三命卿となれば俯伏し垣根に沿うて走り横行濶歩せず　(五)世俗の人　(六)倨る　(七)得意なるなり　(八)叔伯父に對して其の名を呼ぶほど不遜　(九)唐堯許由の謙遜に及ぶもの無し

賊は德に心あつて、而して心に睫あるより大なるは莫し、其の睫あるに及んでや(一)内視す、(二)内視すれば敗る。凶德に五あり、中德を首と爲す。何をか中德と謂ふ。中德なるものは以て自ら好むあるなり、(三)而して其の爲さざる所のものを呰るなり(四)。窮に八極あり。(五)達に三必あり。形に六府あり、美、髯、長、大、壯、麗、勇、敢、八つの者は倶に人に過ぐるなり、(六)因つて是を以て窮す。(七)緣循、(八)偃佒、(九)困畏、人に若

人者厚貌深情。故有貌愿而益。有長若不肖。有順懁而達。有堅而縵。有緩而釬。故其就義若渇者。其去義若熱。故君子遠使之而觀其忠。近使之而觀其敬。煩使之而觀其能。卒然問焉而觀其知。急與之期而觀其信。委之以財而觀其仁。告之以危而觀其節。醉之以酒而觀其側。雜之以處而觀其色。九徴至。不肖人得矣。

縵にして而して釬なる(六)あり。故に其の義に就く(七)こと渇するが若きものは、其の義を去ること熱の若し。故に君子遠く之を使つて其の忠を觀、近く之を使つて其の敬を觀、煩しく之を使つて其の能を觀、卒然として焉れに問うて其の知を觀、急に之と期して其の信を觀、之に委ぬるに財を以てして其の仁を觀、之に告ぐるに危きを以てして其の節を觀、之に醉はしむるに酒を以てして其の側(八)を觀、之に(九)雜へ以て處きて其の色を觀る。九徴(一〇)至つて不肖人得と。

(一) 厚きが故に貌を以て察しがたく深きが故に情以て知りがたし (二) 容貌律儀にして内實は驕慢なるものあり (三) 材能長ずる如くにして實に不肖なるものあり (四) 心正直なる如くにして邪なるあり (五) 堅固なる如くにして軟弱なるあり (六) 性急 (七) 就くこと急なれば去ること亦急 (八) 戚偵の側あるを觀察す (九) 衆人と雜處せしめて其の容態をみる (一〇) 以上九種の徴驗はよく不肖人を識別し得

女與。予頤與。設而可矣。今使二民離レ實學一レ僞。非レ所二以視一レ民也。爲二後世一慮。不レ若レ休レ之。難レ治也。施二於人一而不レ忘。非二天布一也。商賈不レ齒。雖二以レ事齒一レ之。神者弗レ齒。爲二外刑一者。金與レ木也。爲二內刑一者。動與レ過也。宵人之離二外刑一者。金木訊レ之。離二內刑一者。陰陽食レ之。夫免二乎外內之刑一者。唯眞人能レ之。

は、動と過となり。(一六)宵人の外刑に離るものは、金木之を訊し、內刑に離るものは、陰陽之を食す、夫れ外內の刑を免るゝものは、唯眞人之を能くすと。(一七)

(二)棟梁の臣 (三)危き貌 (四)羽毛を飾りたる上に彩色を加ふるにて文飾の甚しきなり (五)枝葉のこと (六)其の本性を矯めて仁義を民に示し而して其の性命の眞情ならざるを知らず (七)心神を勞して是非を爲す (八)孔子は君侯と親善なりや (九)祿を與へて食はんとなりや (一〇)一寸の誤解ならば可なり (一一)孔子の道は民心の性を離れ仁義を學ばしむるにて民に敎ふべきことならず (一二)民の治め難きは恩澤を之に施して忘れず天の德澤萬物の上に布く如く無心ならざればなり (一三)商賈は人と相伍せず即ち利に奔つて私を爲すを以てなり (一四)人の形體を刑するものは刀鋸斧鉞と鞭笞桎梏 (一五)人の精神を刑するものは動亂と過激なり (一六)小人 (一七)憂患生じて心を蝕す

孔子曰。凡人心險二於山川一。難二於知一レ天。天猶有二春秋冬夏旦暮之期一。

孔子曰く、凡そ人心は山川よりも險、天を知るよりも難し。天猶ほ春秋冬夏旦暮の期あり、人は厚貌深情なり。(一)故に貌は愿にして而して益なるあり。(二)長にして不肖の若きあり。(三)順懁にして而して達なるあり、(四)堅にして而して縵なるあり(五)

(一)凋弊して皐野を作る　惡性の腫物、痤も同じ　(二)痩せたる馬　(三)實際に飾はれて離れし如きを耳　(四)君商自ら不得手とする所　(五)

乘之主、而從車百乘者、商之所長也。莊子曰、秦王有病召醫。破癰潰痤者。得車一乘、舐痔者、得車五乘。所治愈下。得車愈多。子豈治其痔邪。何得車之多也。子行矣。

魯哀公。問於顏闔曰。吾以仲尼爲貞幹。國其有瘳乎。曰。殆哉圾乎。仲尼方且飾羽而畫。從事華辭。以支爲旨。忍性以視民。而不知不信。受乎心。宰乎神。夫何足以上民。彼宜

魯の哀公、顏闔に問うて曰く、吾れ仲尼を以て貞幹と爲さば(一)、國其れ瘳ゆることあらんかと。曰く、殆いかな圾乎たり(二)。仲尼方に且に羽を飾つて畫し(三)、華辭に從事し(四)、支を以て旨と爲し、性を忍んで以て民に視し、而して信ならざるを知らず(五)。心に受け、神に宰す(六)、夫れ何ぞ以て民に上たるに足らん(七)。彼れ汝に宜しき與(八)、予へて頤はん與(九)、誤ならば可なり(一〇)。今は民をして實を離れ僞を學ばしむ(一一)、民に視す所以に非ざるなり。後世の爲めに慮るに、之を休むるに若かず。治め難きや(一二)、人に施して忘れず、天布に非ざればなり(一三)。商賈は齒せず、事を以て之に齒すと雖も、神は齒せず(一四)。外刑を爲すものは、金と木となり、內刑を爲すもの(一五)

敝ニ精神乎蹇淺ー。而欲下兼ニ濟道物ー。太一形虛上。若レ是者。迷ニ惑于宇宙ー。形累不レ知ニ太初ー。彼至人者。歸ニ精神乎無始ー。而甘ニ冥乎無何有之鄕ー。水ニ流乎無形ー。發ニ泄乎太淸ー。悲哉乎。汝爲。知在ニ毫毛ー。而不レ知ニ大寧ー。

之必とするものにして微機を恃みとすれば必ず亡ぶ　(六)　贈物と曾信　(七)　精神を淺薄なることに疲らす　(八)　僭越にも物と道とを兩ながら治めて太一玄同にして形を虛脫せる境に到達せんと欲す　(九)　無始の境地に酣眠し形無き境地に水の流るゝ如く自然に歸順す　(一〇)　至極の淸虛に趣き着く　(一一)　汝の知は毫毛の小に在りて未始有物の太寧を知らず

宋人有ニ曹商者ー。爲ニ宋王ー使レ秦。其往也得ニ車數乘ー。王說レ之。益ニ車百乘ー。反ニ於宋ー。見ニ莊子ー曰。夫處ニ窮閭阨巷ー。困窘織レ屨。槁項黃馘者。商之所レ短也。一悟ニ萬

宋人に曹商なるものあり、宋王の爲めに秦に使す。其の往くや車數乘を得。王之を說び、車百乘を益す。宋に反り、莊子を見て曰く、夫れ窮閭阨巷に處り、(一)困窘して、屨を織り、(二)槁項(三)黃馘なるは、商の短なる所なり。一たび萬乘の主を悟して、從車百乘なるものは、(四)商の長ずる所なりと。莊子曰く、秦王病あつて醫を召す。(五)癰を破り痤を潰すものは、車一乘を得。痔を舐むるものは、車五乘を得。治する所愈ゝ下れば、車を得ること愈ゝ多し。子豈に其の痔を治したるか、何ぞ車を得るの多きや。子行れと。

莊子曰。知道易。勿言難。知而不言。所以之天也。知而言之。所以之人也。古之人。天而不人。朱泙漫學屠龍於支離益。單千金之家。三年技成。而無所用其巧。聖人以必不必。故無兵。衆人以不必必之。故多兵。順於兵。故行有求。兵恃之則亡。小夫之知。不離苞苴竿牘。

莊子曰く、道を知るは易く、言ふこと勿きは難し。（一）知つて言はざるは、天に之く所以なり。知つて之を言ふは、人に之く所以なり。古の人は、天にして人ならず。朱泙漫は龍を屠ることを支離益に學ぶ。（二）千金の家を單し、三年にして技成るも、（三）其の巧を用ふる所なし。（四）聖人は必を以ても必とせず、故に兵なし。衆人は必ならざるを以ても之を必とす、故に兵多し。（五）兵に順ふが故に行いて求むるあり、兵之を恃めば則ち亡ぶ。小夫の知は、（六）苞苴竿牘を離れず。（七）精神を蹇淺に敝らし、而して（八）道と物とを兼ね濟して、太一形虛ならんことを欲す。是の若き者、宇宙に迷惑し、形に累はされて太初を知らず。彼の至人なる者は、精神を無始に歸して、而して（九）無何有の郷に甘冥し、無形に水流し、（一〇）太淸に發泄す。悲しい哉汝の爲、（一一）知は毫毛に在るも、而かも大寧を知らずと。

㈠ 道を知れども之を口に言はざるは天に循ふ所以　㈡ 千金の産を盡す　㈢ 知れども言はざるもの　㈣ 聖人必然の事に處するにも必然とせざるが故に胸中戰爭無し　㈤ 戰爭の發するまゝに隨ふが故に外に求むる所あり、

相與辯。其父助レ翟。十年而緩自殺。其父夢レ之。曰。使ニ而子爲ヒ墨者予也。闔丁胡嘗視丙其良既爲乙秋柏之實甲矣。夫造物者之報レ人也。不レ報ニ其人一。而報ニ其人之天一。彼故使レ彼。夫人以レ已。爲レ有ニ以異ニ於人一。以賤ニ其親一。齊人之井飲者相捽也。故曰。今之世皆緩也。自レ是有レ德者以レ不レ知也。而況有レ道者乎。古者謂ニ之遁天之刑一。聖人安ニ其所ヒ安。不レ安ニ其所ヒ不レ安。衆人安ニ其所ヒ不レ安。不レ安ニ其所ヒ安。

(八)造物者の人に報ずるや、其の人に報ぜずして、其の人の天に報ず、(九)彼故に彼ならしむ。(一〇)夫の人己を以て、以て人に異なるありと爲して、以て其の親を賤しむは、齊人の井に飲むもの相捽つなり。故に曰く、今の世皆緩なり。(一一)是によつて德あるものは知らざるを以てなり、而るを況んや道あるものをや。古は之を(一二)遁天の刑と謂ふ。聖人は其の安んずる所に安んじて、其の安んぜざる所に安んぜず、衆人は其の安んぜざる所に安んじて、其の安んずる所に安んぜず。

(一)地名 (二)書を誦讀す (三)黄河が其の沿岸に九里の地を潤す如く惠澤廣く及ぶ (四)墨翟の學を學ばしむ (五)弟の名 (六)弟を墨氏の徒とせしは自分なり (七)吾が墓地なる柏が實を結べるを見ずや。父を怨めるなり (八)造物者が人間に交渉するには其の形體に於てせずして其の天性に於てする (九)翟には翟としての性ある故に墨者となりしなり (一〇)緩が自己を人に超えたる所ありとなして夢枕に立ちてまでも親を賤しむは齊人井を掘りて水を得しを各々自己の力となして天の力なるを忘れ相打ちしが如し (一一)德ある者は其德あるを自覺せざるが故に德あり (一二)自然に依らずして己を用ふるは天を逃るゝものなり

非汝能使人保汝。而不能使人無保汝也。而焉用之。感豫出異也。必且有感搖而本才。又無謂也。與汝遊者。又莫汝告也。彼所小言。盡人毒也。莫覺莫悟何相孰也。巧者勞而知者憂。無能者無所求。飽食而遨遊。汎若不繫之舟。虛而遨遊者也。

者は勞して知者は憂ふ。無能なる者は求むる所なく、飽食して遨遊す。汎として繫がざるの船の若く、虛にして遨遊するものなりと。

約皆衆人列子の許にゆく　人の来るもの多きなり　杖を立てて之に頤を乗す　取次のもの　身のためにする忠告を顧れざるや　関説するも益無からん　人の為に悦ばしむるは其の特異の點を外部に出す故なり　必ず人を感動せしめんとすれば汝の心性動揺せん　汝に従遊するもの又汝に此の理を告げず　彼等の小言する言は悉く人を毒するものなり　覺りもせねば覺しもせず孰れもそろひし愚人なり　浮べる船

鄭人緩也。呻吟裘氏之地。祇三年。而緩爲儒。河潤九里。澤及三族。使其弟墨。儒

鄭人緩なる者、裘氏の地に呻吟す。祇に三年にして、緩儒と爲る。河九里を潤し。澤は三族に及ぶ。其の弟をして墨たらしむ。儒墨相與に辯ず。其の父は翟を助く。十年にして緩自殺す。其の父之を夢む。曰く、而の子をして墨たらしめしものは予なり。闔ぞ胡ぞ嘗に其の良既に秋柏の實を爲せるを視ざると。夫れ

主乎。身勞於國。而知盡於事。彼將任我以事。而效我以功。吾是以驚。伯昏瞀人曰。善哉觀乎。汝處已。人將保汝矣。

多くの傭をなさんとするのみ (八) 是の如く吾を敬ふ (九) 身を國事に勞して知竭く (一〇) 萬乘の主 (一一) 萬乘の君に羅致せられんとするを驚き怖る (一二) 己を處する所あれば光あり人將に來る汝に附從せん

無幾何而往。則戶外之屨滿矣。伯昏瞀人。北面而立。敦杖蹙之乎頤。立有間不言而出。賓者以告列子。列子提屨跣而走。曁乎門曰。先生既來。曾不發藥乎。曰。已矣。吾固告汝曰。人將保汝。果保汝矣。

幾何もなくして往けば、(一)則ち戸外の履滿てり。(二)伯昏瞀人、北面して立ち、(三)杖を敦めて、之に頤を蹙ふ。立つこと間あり、言はずして出づ。(四)賓者以て列子に告ぐ。列子屨を提げ、跣にして走り、門に曁ぶ。曰く、先生既に來る、(五)曾ぞ藥を發せざるやと。曰く、已めよ。吾れ固より汝に告げて曰ひき、人將に汝を保たんとすと。果して汝を保てり。汝能く、人をして汝を保たしむるに非ざれども、而かも汝、人をして汝を保つ無からしむること能はざるなり、(六)而かも焉ぞ之を用ひん。(七)感豫するは異を出だすなり、必ず且に感ずることあらんとすれば、(八)而の本才を搖がす、又謂れなきなり。(九)汝と與に遊ぶもの、又汝に告ぐること莫きなり。彼の小言する所は、盡く人毒なり。(一〇)覺すこと莫く、悟ること莫し、何ぞ相孰とせんや。巧

昏瞀人曰。奚方而反。曰、吾驚焉。曰。惡乎驚。曰。吾嘗食於十漿。而五漿先饋。伯昏瞀人曰。若是則汝何爲驚已。曰。夫內誠不解。形諜成光。以外鎭人心。使人輕乎貴老。而䪡其所患。夫漿人特爲食羹之貨。多餘之贏。其爲利也薄。其爲權也輕。而猶若是。而況於萬乘之

(四)十漿を食へるに、五漿は先づ饋れりと。伯昏瞀人曰く、是の若くば則ち汝何爲ぞ驚けるやと。曰く、夫れ內、(五)誠解けず、形、諜して光を成す。(六)外を以て人心を鎭し、人をして老を貴ぶことを輕んぜしめて、其の所患を䪡せり。夫れ(七)漿人は特に食羹の貨、多餘の贏を爲すのみ。其の利たるや薄く、其の權たるや輕うして、(八)而かも猶ほ是の若し、而るを況んや萬乘の主に於てをや。(九)身は國に勞して、知は事に盡く、(一〇)彼將に我に任ずるに事を以てして、我に效さしむるに功を以てするあらん。(一一)吾れ是を以て驚くと。伯昏瞀人曰く、善いかな觀ることや。(一二)汝己を處すれば、人將に汝を保たんとすと。

(一) 此の篇外光を輝かし露を出だして人をして敬り歸せしむるは道の至れるものに非ず己を虛にして繋がれざらば外に顯れざる所以を說く。此の篇莊子の筆と稱すれど末段の子將死の語は自家の假設か又は門人の追記に係るものなるべし (二) 前に出づ (三) 齊の隱者 (四) 十種の漿を鬻ぐ處に主人五漿は他の客より先んじて吾に與へたり (五) 胸の鬱懷けて誠實を境地に至らず外形に動き顯れて光となり人の目につく (六) 外部の光を以て人の心を壓迫し人をして老者を貴ぶことを輕んじ其れを損ひ先づ吾に其を饋るに至らしむ (七) 漿を賣るものは食物を賣つて

夫子。未₃嘗不₂分ㇾ庭伉禮₁。夫子猶有₂倨傲之容₁。今漁父杖ㇾ拏逆立。而夫子曲要磬折。再拜而應。得ㇾ無₂太甚₁乎。門人皆怪₂夫子₁矣。漁父何以得ㇾ此乎。孔子伏ㇾ軾而歎曰。甚矣。由之難ㇾ化也。湛₂於禮義₁有ㇾ間矣。而樸鄙之心。至ㇾ今未ㇾ去。進。吾語ㇾ汝。夫遇ㇾ長不ㇾ敬失ㇾ禮也。見ㇾ賢不ㇾ尊不ㇾ仁也。彼非₂至仁₁。不ㇾ能ㇾ下ㇾ人。下ㇾ人不ㇾ精。不ㇾ得₂其眞₁。故長傷ㇾ身。惜哉不仁之於ㇾ人也。禍莫ㇾ大ㇾ焉。而由獨擅ㇾ之。且道者。萬物之所ㇾ由也。庶物失ㇾ之者死。得ㇾ之者生。爲ㇾ事逆ㇾ之則敗。順ㇾ之則成。故道之所ㇾ在。聖人尊ㇾ之。今漁父之於ㇾ道。可ㇾ謂ㇾ有矣。吾敢不ㇾ敬乎。

の在る所、聖人之を尊ぶ。今は漁夫の道に於けるや、有りと謂ふべし。吾れ敢へて敬せざらんやと。

(一) 門人同樣にして親しく教へらる (二) 御住居は何處なりや (三) 葦の間に沿うて行く (四) 車中に立つ時執る綱 (五) 櫂の音の聞えずなりて車に乘る (六) 召使をつとむること久し (七) 座を分ちて對等の禮をとる (八) 向ひ立つ (九) 腰を曲げ身をかゞむ (一〇) 謙遜に過ぎたり (一一) 車中の横木 (一二) 禮義を習ふこと久しけれども卑しき心今に去らず (一三) 人に下るに至極をつくさゞれば其の眞を無くしがたし (一四) 不仁を逞しうす

(一)列禦寇

列御寇。之ㇾ齊。中道而反。遇₂伯昏瞀人₁。伯

(一)列禦寇、齊に之く、中道にして反り、(二)伯昏瞀人に遇ふ。伯昏瞀人曰く、奚ぞ方にして反れると。曰く、吾れ驚けりと。曰く、惡にか驚けると。曰く、吾れ嘗て

之至於妙道。不可與往者。不知其道。愼勿與之。身乃無咎。子勉之。吾去子矣。吾去子矣。乃刺船而去。延緣葦間。顏淵還車。子路授綏。孔子不顧。待水波定。不聞挐音而後敢乘。子路旁車而問曰。由得爲役久矣。未嘗見夫子遇人如此其威也。萬乘之主。千乘之君。見

に旁うて問うて曰く、由の役たるを得ること久し、未だ嘗て夫子の人を遇するに、此の如く其れ威るゝを見ざるなり。萬乘の主、千乘の君、夫子を見れば、未だ嘗て庭を分ちて伉禮せずんばあらず。夫子猶ほ倨傲の容あり。今漁父竿を杖て逆立して、夫子曲要磬折し、再拜して應ず。太甚しきこと無きを得んや。門人皆夫子を怪しむ。漁父何を以て此を得たるかと。孔子軾に伏して歎じて曰く、甚しいかな、由の化し難きや。禮義に湛ること間あれども、樸鄙の心今に至りて未だ去らず。進め、吾れ汝に語げん。夫れ長に遇ひて敬せざるは禮を失ふなり。賢を見て尊ばざるは、仁ならざるなり。彼の至仁に非ざれば、人に下ること能はず、人に下つて精ならざれば、其の眞を得ず。故に長く身を傷る。惜しいかな、不仁の人に於けるや、禍、焉より大なるは莫し、而して由、獨り之を擅にす。且道なるものは、萬物の由る所なり、庶物之を失ふものは死し、之を得るものは生く。事を爲して之に逆へば則ち敗れ、之に順へば則ち成る。故に道

主。功成之美。無レ一ニ其迹一矣。事レ親以レ適。不レ論ニ所以一矣。飮レ酒以レ樂。不レ選ニ其具一矣。處レ喪以レ哀。無レ問ニ其禮一矣。禮者世俗之所レ爲也。眞者。所ニ以受ニ於天一也。自然不レ可レ易也。故聖人法レ天貴レ眞。不レ拘ニ於俗一。愚者反レ此。不レ能レ法レ天。而恤ニ於人一。不レ知レ貴レ眞。祿祿而受ニ變於俗一。故不レ足。惜哉。子之蚤湛ニ於僞一。而晩聞ニ大道一也。

其の手法一ならず故に迹の如何を問ふに及ばず　(五)方法　(六)天則に依る能はずして人事を憂ふ　(七)世俗の變を受けて躊躇す　(八)故に安んずる所無し

孔子又再拜而起曰。今者丘得レ遇也。若ニ天幸一然。先生不レ羞。而比ニ之服役一而身教レ之。敢問ニ舍所一レ在。請因受レ業。而卒學ニ大道一。客曰。吾聞レ之。可ニ與往一者。與レ

孔子又再拜して起つて曰く、今は丘の遇ふを得るや、天幸の若く然り。先生羞ぢずして、之を服役(一)に比して身づから之を敎ふ。敢へて舍(二)の在る所を問ふ。請ふ因つて業を受けて、卒に大道を學ばんと。客曰く、吾れ之を聞く、與に往くべきものは、之と與に妙道に至る、與に往くべからざるものは、其の道を知らず、愼んで之と與にする勿れ、身乃ち咎なしと。子之を勉めよ。吾れ子を去らん、吾れ子を去らんと。乃ち船を刺して去り、(三)葦間に延緣す。顏淵車を還らし、子路綏(四)を授く、孔子顧みず。水波定まり、(五)拏音を聞かざるを待つて後、敢へて乘る。子路車

者。雖悲不哀。強怒者。雖嚴不威。強親者。雖笑不和。眞悲無聲而哀。眞怒未發而威。眞親未笑而和。眞在內者。神動於外。是所以貴眞也。其用於人理也。事親則慈孝。事君則忠貞。飮酒則歡樂。處喪則悲哀。忠貞以功爲主。飮酒以樂爲主。處喪以哀爲主。事親以適爲

あり、眞親は未だ笑はずして和す。(一)眞の內に在るものは、神、外に動く。是れ眞を貴ぶ所以なり。(二)其の人理に用ふるや、親に事ふれば則ち慈孝、君に事ふれば則ち忠貞、酒を飮めば則ち歡樂、喪に處れば則ち悲哀。忠貞は功を以て主と爲し、酒を飮むは樂を以て主となし、喪に處るは哀を以て主と爲し、親に事ふるは(三)適を以て主と爲す。(四)功成の美、其の迹を一にすることなく、親に事ふるは適を以てして、(五)所以を論ぜず、酒を飮むには樂を以てして、其の具を選ばず、喪に處るには哀を以てして、其の禮を問ふこと無し。禮なる者は、世俗の爲す所なり。眞なる者は、天に受くる所以なり、自然にして易ふべからざるなり。故に聖人は(六)天に法つて眞を貴び、俗に拘らず。愚者は此に反す。天に法ること能はずして、人を恤へ、眞を貴ぶことを知らずして、祿祿として(七)變を俗に受く、(八)故に足らず。惜い哉。子の蚤く僞に湛りて、晩く大道を聞けることやと。

(一) 眞誠心內に在る時は精神外部に現る　(二) 其の眞誠を人倫の上に用ふ　(三) 親の意に適ふ　(四) 功を成すには

而歎。再拜而起曰。丘再逐ニ於魯一。削ニ迹於衞一。伐ニ樹於宋一。圍ニ於陳蔡一。丘不レ知レ所レ失。而離ニ此四謗一者。何也。客悽然變レ容曰。甚矣子之難レ悟也。人有ニ畏レ影。惡レ迹而去レ之走者一。擧レ足愈數。而迹愈多。走愈疾而影不レ離レ身。自以爲尚遲。疾走不レ休。絶レ力而死。不レ知。處レ陰以休レ影。處レ靜以息レ迹。愚亦甚矣。子審ニ仁義之間一。察ニ同異之際一。觀ニ動靜之變一。適ニ受與之度一。理ニ好惡之情一。和ニ喜怒之節一。而幾ニ於不一レ免矣。謹修ニ而身一。愼守ニ其眞一。還以レ物與レ人。則無レ所レ累矣。今不レ修ニ之身一。而求ニ之人一。不ニ亦外一乎。

(一) 濫りといふ (二) 人君より顧みられざるに言を進むるを佞といふ (三) 人を褒めあげ詐りて人を惡に陥らすを慝といふ (四) 顔色を窺ひて意を受け其の好む所に調子を合す (五) 人己と同じ説なれば之を可とし己に違へば善と雖も美とせざるを矜といふ (六) 顔色を變ずる貌 (七) 前に出づ (八) 自ら如何なる罪失によつて然るか分明ならざるに此の困難に遭へるは何故ぞ (九) 影法師を畏れ足跡を惡んで之を捨てゝ去るものあり (一〇) 終に力竭きて死す (一一) 陰所に處れば影消え靜に處りて動かざれば迹無きことを知らず (一二) 仁義の理を審かに知る (一三) 是非の理を察知す (一四) 動靜進退の變を觀る (一五) 人より受け人に與ふるを適度にす (一六) 好き嫌ひの情を正しくす (一七) しかく心を努すれども禍を免れざる如し (一八) 外物を人に還して累はされず

孔子愀然曰。請問何謂レ眞。客曰。眞者精誠之至也。不レ精不レ誠。不レ能レ動レ人。故强哭

孔子愀然として曰く、請ひ問ふ何をか眞と謂ふと。客曰く、眞とは、精誠の至りなり、精ならず誠ならざれば、人を動かすこと能はず。故に强ひて哭するものは、悲しむと雖も哀しからず。强ひて怒るものは、嚴と雖も威あらず、强ひて親しむものは、笑ふと雖も和せず。眞悲は聲なくして哀しみ、眞怒は未だ發せずして威

此八疵者。外以亂人。內以傷身。君子不友。明君不臣。所謂四患者。好經大事。變更易常。以挂功名。謂之叨。專知擅事。侵人自用。謂之貪。見過不更。聞諫愈甚。謂之很。人同於己則可。不同於己雖善不善。謂之矜。此四患也。能去八疵無行四患而始可教已。孔子愀然

四患なり。能く八疵を去り、四患を行ふなくして、始めて敎ふべきのみと。孔子愀然として歎じ、再拜して起つて曰く、丘再び魯に逐はれ、迹を衛に削られ、樹を宋に伐られ、陳蔡に圍まる。丘は失ふ所を知らずして、此の四謗に離れる者は何ぞやと。客悽然として容を變じて曰く、甚しいかな子の悟し難きことや。人の影を畏れ、迹を惡んで之を去てて走るものあり。足を擧ぐること愈〻數〻にして迹愈〻多く、走ること愈〻疾くして影は身を離れず。自ら以爲へらく尙ほ遲しと、疾く走つて休まず、力を絕つて死す。知らず、陰に處りて以て影を休め、靜に處りて以て迹を息むるを。愚も亦甚し。子は仁義の間を審にし、同異の際を察し、動靜の變を觀、受與の度を適へ、好惡の情を理め、喜怒の節を和して、而も免れざるに幾し。謹んで而の身を修め、愼んで其の眞を守り、還して物を以て人に與へば、則ち累はさる丶所なし。今之を身に修めずして之を人に求む、亦外ならずやと。

不ニ泰多事一乎。

且人有ニ八疵一。事有ニ四患一。不レ可レ不レ察也。非ニ其事一而事レ之。謂ニ之總一。莫ニ之顧一而進レ之。謂ニ之佞一。希レ意道レ言、謂ニ之諂一。不レ擇ニ是非一而言謂ニ之諛一。好言ニ人之惡一。謂ニ之讒一。析レ交離レ親。謂ニ之賊一。稱譽詐僞以敗ニ惡人一。謂ニ之慝一。不レ擇ニ善否一。兩容頰適偸ニ拔其所レ欲。謂ニ之險一。

且つ人に八疵あり、事に四患あり、察せざるべからざるなり。其の事に非ずして之を事とするを、之を總(一)と謂ひ、顧(二)みらるゝこと莫きに、之を進むるを、之を佞と謂ひ、意を希ひ、言を道くを、之を諂と謂ひ、是非を擇ばずして言ふを、之を諛と謂ひ、好んで人の惡を言ふを、之を讒と謂ひ、交を析き親を離つを、之を賊と謂ひ、(三)稱譽詐僞して以て人を敗惡するを、之を慝と謂ひ、善否を擇ばず兩ながら容れ、(四)頰適して其の欲する所を偸拔するを、之を險と謂ふ。此の八疵は、外以て人を亂り、內以て身を傷る。君子は友とせず、明君は臣とせず。所謂四患は、好んで大事を經し、變更して常を易へて、以て功名を挂けんとするを、之を叨と謂ふ。知を專にし事を擅にし、人を侵して自ら用ふるを、之を貪と謂ふ。過を見て更めず、諫を聞いて愈ゝ甚しきを、之を狠と謂ふ。(五)人己に同じければ則ち可とし、己に同じからざれば善と雖も善とせざるを、之を矜と謂ふ。此れ

之美也。四者離レ位而亂莫大焉。官治二其職一。人憂二其事一。乃無レ所レ陵。故田荒室露。衣食不レ足。徵賦不レ屬。妻妾不レ和。長少。無レ序。庶人之憂也。能不レ勝レ任。官事不レ治。行不二清白一。羣下荒怠。功美不レ有。爵祿不レ持。大夫之憂也。廷無二忠臣一。國家昏亂。工技不レ巧。貢職不レ美。春秋後レ倫。不レ順二天子一。諸侯之憂也。陰陽不レ和。寒暑不レ時。以傷二庶物一。諸侯暴亂。擅相攘伐。以殘二民人一。禮樂不レ節。財用窮匱。人倫不レ飭。百姓淫亂。天子有司之憂也。今子既上無二君侯有司之勢一。而下無二大臣職事之官一。而擅飾二禮樂一。選二人倫一。以化二齊民一。

下は荒怠し、（七）功美有せず、爵祿持せざるは、大夫の憂なり。廷に忠臣なく、國家昏亂し、（八）工技巧ならず、（九）貢職美ならず、（一〇）春秋倫に後れて、天子に順はざるは、諸侯の憂なり。陰陽和せず、寒暑時ならず、以て庶物を傷り、諸侯暴亂し、擅に相攘伐し、（一一）以て民人を殘ひ、禮樂節せず、財用窮匱し、（一二）人倫飭はず、百姓淫亂するは、天子の有司の憂なり。今子既に上は君侯有司の勢なくして、下は大臣職事の官なし。而るに擅に禮樂を飾り、人倫を選び、以て齊民を化せんとす、泰だ多事ならずや。

（一）吾が有する所の大道を措きて、子の事とする人事を論ぜん　（二）秩序を亂す　（三）人各々爲すべきことを勤むれば上下違ぐ所なし　（四）家室破損す　（五）材能下劣にして任に勝へず　（六）部下の官吏勝手放逸に流る　（七）立派なる勳功無し　（八）百工技藝拙なり　（九）貢物粗惡　（一〇）春秋の朝覲貢獻に後る　（一一）民の財を殘害す　（一二）人倫整はず

客乃笑而還。行言曰。仁則仁矣。恐不免其身。苦心勞形。以危其眞。嗚呼遠哉。其分於道也。子貢還報孔子。孔子推琴而起曰。其聖人與。乃下求之。至於澤畔。方將杖拏而引其船。顧見孔子。還鄉而立。孔子反走。再拜而進。客曰。子將何求。孔子曰。曩者先生有緒言而去。丘不肖未知所謂。竊待於下風。幸聞咳唾之音。以卒相丘也。客曰。嘻。甚矣子之好學也。孔子再拜而起曰。丘少而修學。以至于今六十九歲矣。無所得聞至教。敢不虛心。

領地を有する國君か　（九）王侯の輔佐の臣か　（一〇）其の身の禍を免れざらん　（一一）棹をさして船を潛ぎゆかんとす　（一二）身をめぐらして對ひ立つ　（一三）いとぐちのみ言ひて去る　（一四）ひそかに先生の下に立ちてお言葉を拜聽したり

客曰。同類相從。同聲相應。固天之理也。吾請釋吾之所有。而經子之所以。子之所以者人事也。天子諸侯大夫庶人。此四者自正。治

客曰く、同類相從ひ、同聲相應ずるは、固より天の理なり。（一）吾れ請ふ吾れの有する所を釋てて、而して子の以ふる所を經せん。子の以ふる所のものは人事なり。天子、諸侯、大夫、庶人、此の四者自ら正しきは、治の美なり。四者（二）位を離るれば、亂焉より大なるは莫し。官其の職を治め、（三）人其の事を憂ふれば、乃ち陵ぐ所なし。故に田荒れ（四）室露れ、衣食足らず、徵賦屬がず、妻妾和せず、長少序なきは、庶人の憂なり。（五）能任に勝へず、官事治まらず、行は淸白ならず、（六）羣

子路對曰。魯之君子也。客問其族。子路對曰。族孔氏。客曰。孔氏者何治也。子路未應。子貢對曰。孔氏者性服忠信。身行仁義。飾禮樂。選人倫。上以忠於世主。下以化於齊民。將以利天下。此孔氏之所治也。又問曰。有土之君與。子貢曰。非也。侯王之佐與。子貢曰。非也。

る。(九)行く言つて曰く、仁は則ち仁なり、恐らくは其の身(一〇)を免れざらん。心を苦しめ形を勞し、以て其の眞を危うす。嗚呼遠きかな、其の道に分るゝことやと。

子貢還つて孔子に報ず。孔子拏を推して起つて曰く、其れ聖人かと。乃ち下つて之を求めて、澤畔に至る。方に將に拏(一一)を杖てて其の船を引かんとす。顧みて孔子を見、(一二)還鄕して立つ。孔子反り走り、再拜して進む。客曰く、子將に何をか求めんとすると。孔子曰く、曩には先生緒言(一三)あつて去る。丘不肖未だ所謂を知らず。(一四)竊に下風に待ち、幸に咳唾の音を聞けり、以て卒に丘を相けよと。客曰く、噫、甚しいかな。子の學を好むことやと。孔子再拜して起つて曰く、丘少うして學を修め、以て今、六十九歲に至る。至敎を聞くを得る所なし。敢へて心を虛しうせざらんやと。

(一) 此の漁人篇の篇趣を用ひずして自然の至道に出づべきことを述ぶ、莊子の言に非ずとも[illegible]に據よれば[illegible]る勝るとも云ふ (二) 林[illegible]茂して日を蔽うて帷幕の如きをいふと (三) 林中の高處にして杏樹多し故に云ふと (四) 鬚眉共に白し (五) [illegible]にして[illegible] (六) 孔子の琴曲終りて漁父子貢子路を招きて對す (七) 衆民を敎化す (八)

孔子游二乎緇帷之林一。休二坐乎杏壇之上一。弟子讀レ書。孔子弦歌鼓レ琴。奏レ曲未レ半。有二漁父者一。下レ船而來。須眉交白。被レ髮揄レ袂。行レ原以上。距レ陸而止。左手據レ膝。右手持レ頤以聽。曲終。而招二子貢子路二人一。倶對。客指二孔子一曰。彼何爲者也。

（一）漁父

孔子緇帷の林に遊び、（二）杏壇の上に休坐す。弟子書を讀み孔子弦歌して琴を鼓す。（三）曲を奏すること未だ半ばならず、漁父なるものあり、船を下つて來る。（四）須眉交白、髮を被り袂を揄し、原を行きて以て上り、陸に距りて止まる。左手膝に據り、（五）右手頤を持して以て聽く。（六）曲終つて、子貢子路二人を招いて倶に對す。客は孔子を指して曰く、彼は何爲るものぞやと。子路對へて曰く、魯の君子なりと。客其の族を問ふ、子路對へて曰く、族は孔氏と。客曰く、孔氏なるものは何をか治むると。子路未だ對へず。子貢對へて曰く、孔氏は、性忠信を服し、身仁義を行ひ、禮樂を飾り、人倫を選び、上以て世主に忠に、下以て（七）齊民を化し、將に以て天下を利せんとす。此れ孔子の治むる所なりと。又問うて曰く、（八）有土の君かと。子貢曰く、非なりと。（九）侯王の佐かと。子貢曰く、非なりと。客乃ち笑つて還

運之亦無旁。上法圓天以順三光。下法方地以順四時。中和民意以安四鄉。此劍一用。如雷霆之震也。四封之內。無不賓服而聽從君命者矣。此諸侯之劍也。王曰。庶人之劍何如。曰庶人之劍。蓬頭突鬢。垂冠曼胡之纓。短後之衣。瞋目而語難。相擊於前。上斬頸領。下決肝肺。此庶人之劍。無異於鬪雞。一旦命已絕矣。無所用於國事。今大王有天子之位。而好庶人之劍。臣竊爲大王薄之。王乃牽而上殿。宰人上食。王三環之。莊子曰。大王安坐定氣。劍事已畢奏矣。於是文王不出宮三月。劍士皆服斃其處也。

て語に難く、前に相撃ち、上は頸領を斬り、(四)下は肝肺を決す。此れ庶人の劍、闘雞に異なる無し。一旦命已に絶ゆれば、國事に用ふる所なし。今大王天子の位にありて、庶人の劍を好む。臣竊かに大王の爲めに之を薄づと。王乃ち牽いて殿に上る。(五)宰人食を上る。(六)王三たび之を環る。莊子曰く、大王安座して氣を定めよ。劍事已に畢く奏せりと。是に於て文王宮を出でざること三月、(七)劍士皆其の處に服斃す。

(一)蓬頭として髪を亂る　(二)上は圓形の天に法りて日月星に順ふ　(三)國内從ひ服して君命を聽かざるものなし　(四)頭頂を切る　(五)料理人　(六)王三度席前をめぐりて心落ちつかず　(七)劍士皆顧みられざるを怒りて自殺す

劍。以二燕谿石城一爲レ鋒。齊岱爲レ鍔。晉魏爲レ春。周宋爲レ鐔。韓魏爲レ夾。包以二四夷一。裹以二四時一。繞以二渤海一。帶以二常山一。制以二五行一。論以二刑德一。開以二陰陽一。持以二春夏一。行以二秋冬一。此劍直レ之無レ前。擧レ之無レ上。案レ之無レ下。運レ之無レ旁。上決二浮雲一。下絕二地紀一。此劍一用。匡二諸侯一。天下服矣。此天子之劍也。

文王芒然自失曰。諸侯之劍何如。曰。諸侯之劍。以二知勇士一爲レ鋒。以二清廉士一爲レ鍔。以二賢良士一爲レ春。以二忠聖士一爲レ鐔。以二豪傑士一爲レ夾。此劍直レ之亦無レ前。擧レ之亦無レ上。案レ之亦無レ下。

文王芒(一)然自失して曰く、諸侯の劍は如何と。曰く、諸侯の劍は、知勇の士を以て鋒と爲し、清廉の士を以て鍔と爲し、賢良の士を以て脊と爲し、忠聖の士を以て鐔と爲し、豪傑の士を以て夾と爲す。此の劍之を直くすれば亦前なく、之を擧ぐれば亦上なく、之を案ふれば亦下なく、之を運らせば亦旁なし。上は圓(二)天に法りて以て三光に順ひ、下は方地に法りて以て四時に順ひ、中は民意を和して以て四郷を安んず。此の劍一たび用ふれば、雷霆の震ふが如し。(三)四封の內、賓服して君命に聽從せざるものなし。此れ諸侯の劍なりと。王曰く、庶人の劍は何如と。曰く、庶人の劍、蓬頭、突鬢、垂冠、曼胡の纓、短後の衣、目を瞋らし

(一三) 春夏の和と秋冬の威とを持つ (一四) 此の劍を振りまはせば前後左右無し (一五) 上に於ては空に浮べる雲を斬り開き地に於ては地を繋げる綱を絕つ

傷者六十餘人。得二五六人一。使レ奉二劍於殿下一。乃召二莊子一。王曰。今日試使二士敦一レ劍。莊子曰。望レ之久矣。王曰。夫子所レ御杖長短何如。曰。臣之所レ奉皆可。然臣有二三劍一。唯王所レ用。請先言而後試。王曰。願聞二三劍一。曰。有二天子劍一。有二諸侯劍一。有二庶人劍一。王曰。天子之劍何如。曰。天子之

奉ずる所皆可なり、然れども臣に三劍あり、唯ゝ王の用ふる所のまゝ。請ふ先づ言つて後に試みんと。王曰く、願はくは三劍を聞かんと。曰く天子の劍あり、諸侯の劍あり、庶人の劍ありと。王曰く、天子の劍は如何と。曰く、天子の劍は、燕谿(七)、石城(八)を以て鋒と爲し、齊岱(九)を鍔と爲し、晉魏を脊と爲し、周宋を鐔と爲し、韓魏を夾(一〇)と爲し、包むに四夷を以てし、裹むに四時を以てし、繞らすに渤海を以てし、帶ぶるに常山を以てし、制するに五行(一一)を以てし、論ずるに刑德(一二)を以てし、開くに陰陽を以てし、持するに春夏(一三)を以てし、行ふに秋冬を以てす。此の劍之を直くすれば前なく、之を擧ぐれば上なく、之を案ふれば下なく、之を運(一四)らせば旁なし。上は浮雲を決き、下は地紀を絕つ。此の劍一たび用ふれば、諸侯を匡し、天下服す(一五)。此れ天子の劍なりと。

(一) 敵に示すに隙を以てし之を誘ふに利を以てす (二) 敵に後れて發し敵に先んじて撃つ (三) 試合を罷く (四) 試合させて人を選むこと七日 (五) 劍戟を殿下に試みしむ (六) 武器 (七) 燕の地名 (八) 塞外山北の地 (九) 齊の岱岳を以て刃とす (一〇) 柄 (一一) 制定するに木火土金水の五行を以てす (一二) 論ずるに刑罰德化を以てす

王所見唯劍士也。莊子曰。諾。周善爲劍。太子曰。然。吾王所見劍士。皆蓬頭突鬢。垂冠曼胡之纓。短後之衣。瞋目而語難。王乃說之。今夫子必儒服而見王。事必大逆。莊子曰。請治劍服。治劍服三日。乃見太子。太子乃與見王。王服白刃待之。莊子入殿門不趨。見王不拜。王曰。子欲何以敎寡人。使太子先。曰。臣聞大王喜劍。故以劍見王。王曰。子之劍何能禁制。曰。臣之劍。十步一人。千里不留行。王大說之曰。天下無敵矣。

に飾無き冠紐裾短かなる上衣 （一一） 言語ゴツ〳〵として和かず （一二） 劍士の服裝を用意せん （一三） 殿門に入るも趨走の禮をなさず （一四） 紹介させろ、（一五） 十步每に一人を斬り千里を行くに一人の遮るものなし

莊子曰。夫爲劍者。示之以虛。開之以利。後之以發。先之以至。願得試之。王曰。夫子休。就舍待命。令設戲請夫子。王乃校劍士七日。死

莊子曰く、夫れ劍を爲す者は、（一）之を示すに虛を以てし、之を開くに利を以てし、（二）之に後れて以て發し、之に先んじて以て至る。願はくは之を試むるを得んと。王曰く、夫子休せよ。舍に就いて命を待て。（三）戲を設けしめて夫子を請はんと。王は乃ち劍士を（四）校すること七日、死傷するもの六十餘人、五六人を得、（五）劍を殿下に奉ぜしむ。乃ち莊子を召して曰く、今日試みに士をして劍を敦めしめん。莊子曰く、之を望むこと久しと。王曰く、夫子御する所の（六）杖は長短何如と。曰く、臣の

以效周。賜周千金。太子曰。聞夫子明聖。謹奉千金以幣從者。夫子弗受。悝尚何敢言。莊子曰。聞太子所欲用周者。欲絕王之喜好也。使臣上說大王而逆王意。下不當太子。則身刑而死。周尚安所事金乎。使臣上說大王。下當太子。趙國何求而不得也。太子曰。然。吾

莊子曰く、諾、周は善く劍を爲すと。太子曰く、然り。吾が王見る所の劍士は、皆蓬頭、突鬢、垂冠、曼胡の纓、短後の衣、目を瞋らして語に難し。王乃ち之を說ぶ。今夫子必ず儒服して王に見えば、事必ず大に逆はんと。莊子曰く、請ふ劍服を治めんと。劍服を治むること三日、乃ち太子に見ゆ。太子乃ち與に王に見ゆ。王白刃を脫して之を待つ。莊子殿門に入つて趨らず、王を見て拜せず。王曰く、子何を以て寡人に敎へんと欲して、太子をして先んぜしむると。曰く、臣聞く大王劍を喜むと。故に劍を以て王に見ゆと。王曰く、子の劍、何をか能く禁制すると。曰く、臣の劍、十步に一人、千里行くを留めずと。王大に之を說んで曰く、天下に敵なしと。

(一) 此の篇天子諸侯庶人の三劍を說き劍を用ひて爲すものは卑しく自然に據るものは貴き所以を述ぶ、通篇氣格遒勁戰國策士の論說にして、莊子の言に非ずと云ふ (二) 趙の惠文王 (三) 誰使之を侯たんと謂る (四) 何を仰せつけられんとして千金を賜はりしや (五) 千金を以て從者まで贈りたり (六) 王が劍に耽ける嗜好を止めしめんと欲してなり (七) 太子の意を曲げ能はず (八) 劍術に巧みなり (九) 亂髮にして鬢を突き出す (一〇) 低く傾きたる冠

昔趙文王。喜レ劍。劍士夾レ門而客三千餘人。日夜相二擊於前一。死傷者歲百餘人。好レ之不レ厭。如レ是三年國衰。諸侯謀レ之。太子悝患レ之。募二左右一曰。孰能說二王之意一。止二劍士一者。賜二之千金一。左右曰。莊子當レ能。太子乃使下人以二千金一奉中莊子上。莊子弗レ受。與二使者一俱往見二太子一曰。太子何

昔は趙(二)の文王、劍を喜ぶ。劍士門を夾んで客たるもの三千餘人、日夜前に相擊ち、死傷するもの歲に百餘人。之を好んで厭はず、是の如きこと三年にして國衰ふ。(三)諸侯之を謀る。太子悝之を患へ、左右に募つて曰く、孰れか能く王の意を說ばせ、劍士を止むる者ぞ、之に千金を賜はんと。左右曰く、莊子當に能くべしと。太子乃ち人をして千金を以て莊子に奉ぜしむ。莊子受けず。使者と俱に往いて太子に見えて曰く、太子何(四)を以て周に教へんとして、周に千金を賜ふやと。太子曰く、夫子の明聖なるを聞き、謹(五)んで千金を奉じて以て從者に幣す、夫子受けず、悝尙ほ何ぞ敢へて言はんと。莊子曰く、聞く太子の周を用ひんと欲する所の者は、王(六)の喜好を絕たんことを欲してなりと。臣をして上、大王に說いて(七)王の意に逆らひ、下、太子に當らざらしめば、則ち身刑せられて死されん。周尙ほ安んぞ金を事とする所あらんや。臣をして上、大王を說ばし、下は太子に當らしめば、趙國何を求めてか得ざらんと。太子曰く、然り。吾が王の見る所は唯〻劍士なりと。

謂ﾚ疾矣。爲ﾆ欲ﾚ富就ﾚ利故。滿若ﾆ堵耳ﾆ而不ﾚ知ﾚ避。且馮而不ﾚ舍。可ﾚ謂ﾚ辱矣。財積而無ﾚ用。服膺而不ﾚ舍。滿心戚醮。求ﾚ益而不ﾚ止。可ﾚ謂ﾚ憂矣。內則疑ﾆ劫請之賊ﾆ外則畏ﾆ寇盜之害ﾆ內周ﾆ樓疏ﾆ外不ﾆ敢獨行。可ﾚ謂ﾚ畏矣。此六者。天下之至害也。皆遺忘而不ﾚ知ﾚ察。及ﾆ其患至ﾆ求ﾚ盡ﾚ性竭ﾚ財。單以反ﾆ一日之無ﾚ故。而不ﾚ可ﾚ得也。故觀ﾆ之名ﾆ則不ﾚ見。求ﾆ之利ﾆ則不ﾚ得。繚ﾚ意絶ﾚ體。而爭ﾚ此不ﾆ亦惑ﾆ乎。

れば則ち見えず、之が利を求むれば則ち得ず、意を繚らし、體を絶ちて、此を爭ふ。亦惑はずやと。(一八)

(一)養生の法を節約にして生命を保てば則ち長生に至り久しき疾病に遭へども死せざるもの　(二)適度を害瞻とす　(三)體を鍛へ酒の背膂を發す　(四)青門表擺を開くまで坦上　(五)體偸不滿の氣に鬱積し沈して五臟の中を失ひ山を攀うて高きに上る如し　(六)思慮を暇くす　(七)安閑逸樂なれば疾病に取る　(八)體肥滿なれば愼過して息背し　(九)財滿つること垣根の如く高きもこれを積つる所以を知らず　(一〇)心不滿にして貪りて飽くことなし大切にする　(一一)滿心戚醮氣鬱して利を追求して止まず　(一二)家に居ては劫して強請する賊を怖れ樓上室壘を廻らして防備を嚴にす　(一三)貧苦疾厄憂畏の六　(一四)其の災禍起りし時に至りて性を消耗し財を費しつくして唯一日の安を得んとするも不可能なり　(一五)名を觀るも立派なる名無く利を求むるも得ることなし　(一六)意を用ひ體を害ひて之を爭ひ求むるも惑ひなり

說劍

生。則亦久病長阨而不レ死者也。知和曰。平爲レ福。有餘爲レ害者。物莫レ不レ然。而財其甚者也。今富人耳營ニ鍾鼓筦籥之聲一。口嗛ニ於芻豢醪醴之味一。以感ニ其意一遺ニ忘其業一。可レ謂レ亂矣。侅ニ溺於馮氣一。若ニ負レ重行而上一也。可レ謂レ苦矣。貪レ財而取レ慰、貪レ權而取レ竭。靜居則溺。體澤則馮。可レ

るを福と爲し、有餘を害と爲す者は、物、然らざるは莫けれども、財は其の甚だしきものなり。今富人、耳に鐘鼓筦籥の聲を營み、口に芻豢醪醴の味に嗛き、以て其の意を感じて、其の業を遺忘す、亂と謂ふべし。馮氣に侅溺して、重きを負うて行いて而して上るが若きなり、苦と謂ふべし。財を貪つて慰を取り、權を貪つて竭を取り、靜居には則ち溺れ、體澤には則ち馮す、疾むと謂ふべし。富を欲し利に就くが爲めの故に、滿つること堵の若きのみなるも、而かも避くることを知らず、且馮して舍かず、辱と謂ふべし。財積んで而して用ふることなく、服膺して舍かず、滿心戚醮して、益を求めて止まず。憂と謂ふべし。內には則ち劫請の賊を疑ひ、外には則ち寇盗の害を畏る。內は樓疏を周らし、外は敢へて獨行せず、畏と謂ふべし。此の六つのものは、天下の至害なり。皆遺忘して察することを知らず。其の患至るに及び、性を盡くし、財を竭くして、單に以て一日の故なきに反らんことを求むるも、而かも得べからざるなり。故に之が名を觀

廉。廉貪之實。非以迫外也。反監之度。勢爲天子。而不以貴驕人。富有天下。而不以財戲人。計其患。慮其反。以爲害於性。故辭而不受也。非以要名譽也。堯舜爲帝而雍。非仁天下也。不以美害生也。善卷許由。得帝而不受。非虛辭讓也。不以事害已。此皆就其利。辭其害。而天下稱賢焉。則可以有之。彼非以興名譽也。

無足曰。必持其名。苦體絕甘。約養以持

雍ぐは、天下を仁するがために非ざるなり。美を以て生を害せざるなり。善卷、許由、帝を得れども受けざるは、虛しく辭讓するには非ざるなり。事を以て己を害せざるなり、此れ皆其の利に就き、其の害を辭せしなり。而して天下賢と稱するは、則ち以て之(九)あるべければなり、彼れ以て名譽に興るにあらざるなりと。

(一) 動くに衆民の心を本として百事其の法度に違ふことなし (二) 貧窮なるが故に求むる所無し (三) 求むるは足らざるがため止むを得ざるに出づ故に四方の地に爭へども自ら反慮して貪れりとなさず (四) 廉と貪との實情は自然に從ふにして外物に繋る所なし (五) 心に反慮して法度に鑒みる (六) 富の累たるを計慮し其の反りて性命を害するを思へば固より之を辭して受けず (七) 富を受けざるは清廉の名譽を求むるに非ず (八) 堯舜が天子の富に居りて心和平なるは天下萬民を慈しむために非ず唯美名を以て性命を害せざる故なり (九) 實とよばるゝ實情あるものにして名譽のために辭せしに非ず

無足曰く、必ず其の名を持せんとして、體を苦しめ甘を絕ち、養ひ(一)を約にして以て生を持せば、則ち亦久病長阨すれども死せざるものなりと。知和曰く、(二)平な

人之德。以爲二賢良一。非レ享レ國而嚴若二君父一。且夫聲色滋味權勢之於レ人。心不レ待レ學而樂レ之。體不レ待レ象而安レ之。夫欲惡避就。固不レ待レ師。此人之性也。天下雖レ非レ我。孰能辭レ之。

孰れか能く之を辭せんと。

(一) 富の美勢を蒸すことに於いては至人聖人も得て及ぶ能はず (二) 富者はよく人の勇力を挾み持ちて己の威強を爲す (三) 國君の地位に在らざれども君父の尊嚴を爲す (四) 欲するものに就き惡むものを避くるは人の天性にして師の教へを待たず (五) 天下權勢聲色滋味を欲するもの我のみならじ

知和曰。知者之爲。故動以二百姓一不レ違二其度一。是以足而不レ爭。無二以爲一故不レ求。不レ足故求レ之。爭二四處一而不二自以爲レ貪。有レ餘故辭レ之。棄二天下一而不二自以爲レ

知和曰く、知者の爲、故より動くに(一)百姓を以てして其の度に違はず、是を以て足つて爭はず、以て爲すこと(二)無きの故に求めず。足らざるが(三)故に之を求む、四處に爭へども自ら以て貪と爲さず。餘りあるが故に之を辭す、天下を棄つれども自ら以て廉と爲さず。廉貪の實(四)、以て外に迫るに非ざるなり。反つて(五)之を度に監みる。勢天子と爲れども、貴を以て人に驕らず、富天下を有てども、財を以て人に戯れず。其の患(六)を計り、其の反を慮つて、以て性に害ありと爲せば、故より辭して受けざるなり。以て名譽(七)を要むるには非ざるなり。堯舜(八)の帝と爲つて

焉。是專無主正。所以覽古今之時、是非之分也。與俗化世。去至重。棄至尊。以爲其所爲也。此其所以論長生安體樂意之道。不亦遠乎。慘怛之疾。恬愉之安。不監於體。怵惕之恐。欣懽之喜。不監於心。知爲爲而不知所以爲。是以貴爲天子。富有天下。而不免於患也。

るゝものは長壽して體を安んじ意を樂しましむる所以の道なり (六) 富貴に定なし (七) 正直に拘泥して寘を不正として忘れざるためか (八) 名利の人 (九) これを以て俗にすぐれ世に超えたる人物と見なす (十) 此の心を棄するに專ら性の本本たる大中至正の道無くして古今時宜の變易是非善惡の區別を見るのみに過ぎず (十一) 性命の實情を放棄するをいふ (十二) 慘みの情 (十三) 樂みの情 (十四) 懼れ惕む恐怖 (十五) 名利の行を爲すことを知れども性命の情の本たるを知らず

無足曰。夫富之於人。無所不利。窮美究勢。至人之所不得逮。聖人之所不能及。俠人之勇力。而以爲威強。秉人之知謀。以爲明察。因

無足曰く、夫れ富の人に於けるは、利ならざる所なし。美を窮め勢を究む。(一)至人の逮ぶことを得ざる所、聖人の及ぶこと能はざる所。(二)人の勇力を俠んで以て威強を爲し、人の知謀を秉つて以て明察を爲し、人の德に因つて以て賢良を爲し、(三)國を享くるに非ずして嚴なること君父の若し。且夫れ聲色、滋味、權勢の人に於けるや、心は學ぶを待たずして之を樂しみ、體は象るを待たずして而して之に安んず。(四)夫れ欲惡避就、固より師を待たず、此れ人の性なり。(五)天下我に非ずと雖も、

無足問於知和曰。人卒未有不興名就利者。彼富則人歸之。歸則下之。下則貴之。夫見下貴者。所以長生安體樂意之道也。今子獨無意焉。知不足邪。意知而力不能行邪。故推正不忘邪。知和曰。今夫此人。以爲。與己同時而生。同鄕而處者。以爲夫絕俗過世之士

(一)無足(二)知和に問うて曰く、人卒未だ名に興り利に就かざるものあらず。彼れ富めば則ち人之に歸し、歸すれば則ち之に下る、下れば則ち之を貴ぶ。(三)夫の下り貴ばるるものは、長生、安體、樂意する所以の道なり。今子獨り(四)意なきは、知足らざるか、意ふに、知れども力行ふこと能はざるか、故より(五)正を推して忘れざるかと。知和曰く、今夫れ(六)此の人は、以爲へらく、己と時を同じうして生れ、鄕を同じうして處る者は、以て夫の(七)絕俗過世の士と爲さん。(八)是れ專ら主正無く、古今の時、是非の分を覽る所以なり。俗に與し世と化し、(九)至重を去り、至尊を棄て、以て其の爲す所を爲さば、此れ其の長生、安體、樂意の道を論ずる所以、亦遠からずや。(一〇)慘怛の疾と、(一一)恬愉の安きとを體に監みず。(一二)怵惕の恐れと、欣歡の喜とを、心に監みず、(一三)爲すを爲すを知つて、而して爲す所以を知らず、是を以て貴は天子と爲り、富は天下を有てども、患に免れざるなりと。

(一)足ることを知らざる意を寓する假設の人　(二)中和の道を知れる廉潔なる人に譬ふ　(三)人より謙遜して貴ば

極。而ニ觀四方。與時消息。若是若非。執二而圓機。獨成而意。與道徘徊。無轉而行。無成而義。將失而所爲。無赴而富。無殉而成。將棄而天。比干剖心。子胥抉眼。忠之禍也。直躬證父。尾生溺死。信之患也。鮑子立乾。勝子不自理。廉之害也。孔子不見母。匡子不見父。義之失也。此上世之所傳。下世之所語。以爲士者。正其言。必其行。故服其殃。離其患也。

道と與に徘徊せよ。而の行を轉ずる無かれ。而の義を成す無かれ、將に而の爲す所を失はんとす。而の富に赴く無かれ、而の成るに殉ふ無かれ、將に而の天を棄てんとす。(四)比干は心を剖かれ、子胥は眼を抉らる、忠の禍なり。(五)直躬父を證し、尾生溺死す。信の患なり。鮑子は立ながら乾し、(六)勝子は自ら理せず、廉の害なり。(七)孔子は母を見ず、(八)匡子は父を見ず、義の失なり。此れ上世の傳ふる所、下世の語る所。以て士たるもの、其の言を正しくし、其の行を(九)必とす。故に其の殃に服し、其の患に離るなりと。

(一)事の曲直を問ふことなく之を自然の法則に照し四方をまのあたり觀て時に從つて消長せよ　(二)是非を均しくし環中の道を守り汝の意に任せ行ひ心を絶對に遊ばせよ　(三)汝の成功を追求することなかれ然らざれば汝の性天を毀棄せん　(四)讒に出づ　(五)躬の父羊を盜みしに子之を證す　(六)晉の獻公の太子申生をいふ事讒讒に出づ一本申子に作れり　(七)孔子諱何を辭讓して母の死を知らず　(八)齊人匡章は父を諫めて逐はれ終生父を見ず　(九)其の行を必ず爲さんとす

流二母弟一。疏戚有レ倫乎。湯放レ桀。武王殺レ紂。貴賤有レ義乎。王季爲レ適。周公殺レ兄。長幼有レ序乎。儒者僞レ辭。墨者兼愛。五紀六位。將レ有レ別乎。且子正レ爲レ名。我正レ爲レ利。名利之實。不レ順二於理一。不レ監二於道一。吾日與レ子訟二於無約一曰。小人狥レ財。君子狥レ名。其所下以變二其情一易中其性上則異矣。乃至下於棄二其所一レ爲。而狥中其所上レ不レ爲。則一也。

し、我は利の爲めにするを正しとせんに、名利の實、理に順はず、道に監みず、吾れ日に子と無約に訟へしときに曰く、小人は財に狥ひ、君子は名に狥ふと。其の、其の情を變じ、其の性を易ふる所以は、則ち異なり。乃ち其の爲す所を棄てて、其の爲さざる所に狥ふに至つては、則ち一なり。

(一) 親疎貴賤長幼の區別なし (二) 祖、父、身、子、孫 (三) 父子、君臣、夫婦 (四) 丹朱を廢せしをいふ (五) 弟象を有庳に封ず (六) 季歴適嗣となり二兄荊蠻に逃る (七) 管叔蔡叔反せしにより之を殺す (八) 名と利との事情共に眞實の道理に協はず (九) 假設の人拘束なくして自然のまゝなる故にいふ (一〇) 對象物の上よりすれば名と利とは異なる所あり (一一) 性の自然に徇ふことを棄てて外物を追ふに至つては一なり

故曰。無レ爲二小人一。反狥二而天一。無レ爲二君子一。從二天之理一。若枉若直。相二而天

故に曰く、小人たること無かれ、反りて而の天に狥へ。君子たること無かれ、天の理に從へ。若しくは枉若しくは直、而の天極に相、四方を面観して、時と與に消息せよ。若しくは是若しくは非、而の圓機を執り、而の意を獨成して、

爲二天子一。未二必貴一也。窮爲二匹夫一。未三必賤一也。貴賤之分。在二行之美惡一。滿苟得曰。小盜者拘。大盜者爲二諸侯一。諸侯之門義士存焉。昔者桓公小白。殺レ兄入レ嫂。而管仲爲レ臣。田成子常。殺レ君竊レ國。而孔子受レ幣。論則賤レ之。行則下レ之。則是言行之情。悖二戰於胸中一也。不二亦拂一乎。故書曰。孰惡孰美。成者爲レ首。不レ成者爲レ尾。

り。則ち是れ言行(一〇)の情、胸中に悖戰するなり。亦拂らずや。故に書に曰く、孰れか惡孰れか美、成る(一一)ものを首と爲し、成らざるものを尾と爲すと。

(二) 臧聚の名　(三) 盜跖の如き小人も桀紂を羞しむ　(四) 孔墨に比するに足らずとして、輕蔑す　(五) 貴賤の區別は行の善惡による　(六) 故に貴賤の分は必ずしも行の善惡に關せざるをいふ　(七) 小白は齊の桓公の名　(八) 齊の[illegible]　(九) 管仲孔子が桓公や田成子等を論ずる時には之を賤しめども實行上にては下位に就きて甘んぜり　(一〇) 言と行と矛盾して、胸中に戰ひ戰ふ　(一一) 善惡を定するに成敗によるのみとの意

子張曰。子不レ爲レ行。則將下疏戚無レ倫。貴賤無レ義。長幼無上レ序。五紀六位。將二何以爲一レ別乎。滿苟得曰。堯殺二長子一。舜

子張曰く、子が行を爲さずんば、則ち將に(一)疏戚倫なく、貴賤義なく、長幼序なからんとす。(二)五紀(三)六位、將に何を以て別を爲さんとするかと。滿苟得曰く、(四)堯は長子を殺し、(五)舜は母弟を流す、疏戚倫あるか。湯は桀を放ち、武王は紂を殺す、貴賤義あるか。(六)王季は適となり、周公は兄を(七)殺す、長幼序あるか。儒者は僞を爲り、墨者は兼愛す、五紀六位、將た別あるか。且子は名の爲めにするを正しと

之大者。幾在ニ無レ恥而信一。故觀ニ之名一。計ニ之利一而信。眞是也。若棄ニ名利一。反ニ之於心一。則夫士之爲レ行。抱ニ其天一乎。

大道を守らん

子張曰。昔者桀紂。貴爲ニ天子一。富有ニ天下一。今謂ニ臧聚一曰下汝行如中桀紂上。則有ニ作色一。有ニ不レ服之心一者。小人所レ賤也。仲尼墨翟。窮爲ニ匹夫一。今謂ニ宰相一。曰下子行如中仲尼墨翟上。則變レ容易レ色。稱レ不レ足者。士誠貴也。故勢

子張曰く、昔は桀紂、貴は天子と爲り、富は天下を有てり。今は臧聚に謂つて、(一)汝の行桀紂の如しと曰へば、則ち作づる色あり。服せざるの心ある者は、(二)小人も賤しむ所なればなり。仲尼墨翟、窮して匹夫たり。今宰相に謂つて、子の行は仲尼墨翟の如しと曰へば、則ち容を變じ色を易へ、(三)足らずと稱する者は、士は誠に貴ければなり。故に勢天子たるも、未だ必ずしも貴からざるなり。窮して匹夫たるも、未だ必ずしも賤しからざるなり。(四)貴賤の分は、行の美惡に在りと。(六)滿苟得曰く、小盜は拘れ、大盜は諸侯と爲る。(五)諸侯の門に義士存す。昔は桓公小白、兄を殺し嫂を入れて、而して管仲臣と爲る。田成子常、(七)君を殺し國を竊んで、而して孔子幣を受く。(八)(九)論ずれば則ち之を賤しとせんも、行は則ち之に下れ

孔子仰ㇾ天而歎曰。然。柳下季曰。跖得ㇾ無ㇾ逆ニ汝意一若ㇾ前乎。孔子曰然。丘所ㇾ謂無ㇾ病而自灸也。疾走料ニ虎頭一編ニ虎須一。幾不ㇾ免ニ虎口一哉。

ぬ ㈡ 車馬のありさま何處か一寸出かけの樣子なり ㈢ 前に君が言ひし如くならざりしや ㈣ 虎の頭を撫でゝ虎の鬚を編むやうなる危險を冒し殆ど難を免れざるが如くなりき

子張。問ニ於滿苟得一曰。盍ㇾ不ㇾ爲ㇾ行。無ㇾ行則不ㇾ信。不ㇾ信則不ㇾ任。不ㇾ任則不ㇾ利。故觀ニ之名一。計ニ之利一。而義眞是也。若棄ニ名利一。反ニ之於心一。則夫士之爲ㇾ行。不ㇾ可ニ一日不ㇾ爲乎。滿苟得曰。無ㇾ恥者富。多ㇾ信者顯。夫名利

子張㈠、滿苟得㈡に問うて曰く、盍ぞ行を爲さざる㈢、行無ければ則ち信ぜられず、信ぜられざれば則ち任ぜられず㈣。任ぜられざれば則ち利ならず。故に之を名に觀、之を利に計つて、義ならば眞に是なり㈤。若し名利を棄てて之を心に反さば、則ち夫の士の行を爲す、一日も爲さざるべからざらんやと㈥。滿苟得曰く、恥なきものは富み、信多きものは顯る㈦、夫の名利の大なるものは、殆ど恥なくして信なるに在り。故に之を名に觀、之を利に計りて信ならば、眞に是なり。若し名利を棄てて之を心に反せば、則ち夫の士の行を爲す、其の天㈧を抱かんかと。

㈠ 孔子の門人 ㈡ 假托の人 ㈢ 何ぞ德行を治めざるか ㈣ 事に任ぜられず ㈤ 名譽の上に觀ることあり功利の上に計つて義の實しきを得たらば則ち德行を事とせずとも是なり ㈥ 若し名利を棄てゝ心に反思する所ありとせば士の德行を爲すこと一日も缺くべからず ㈦ 無恥を以て多く人に信ぜらるゝ者は世に顯る ㈧ 自然の

死喪憂患。其中開レ口而笑者。一月之中。不レ過二四五日一而已矣。天與レ地無レ窮。人死者有レ時。操二有レ時之具一而託二於無レ窮之間一。忽然。無レ異二騏驥之馳過一レ隙也。不レ能下說二其志意一。養中其壽命上者。皆非二通レ道者一也。丘之所レ言。皆吾之所レ棄也。亟去走歸。無二復言一レ之。子之道。狂狂汲汲。詐巧虛僞事也。非レ可三以全二眞也。奚足レ論哉。

子が吾に告ぐる所の人事が此の如きに過ぎずとせば吾が既に十分聞知せる所なり　(五) 志氣は常に心に盈たんとするの傾向を有す　(六) 有限の人の身を以て無限の天地に托す　(七) 狂々は性を失ふを云ひ汲々は足らざるを云ふ

孔子再拜趨走。出レ門。上レ車執レ轡三失。目芒然無レ見。色若二死灰一。據レ軾低レ頭。不レ能レ出レ氣。歸到二魯東門外一。適遇二柳下季一。柳下季曰。今者闕然數日不レ見。車馬有二行色一。得レ微二往見一レ跖邪。

孔子再拜して趨走し、門を出づ。車に上り轡を執らんとして三たび失し(一)、目芒然として見ることなく、色は死灰の若し。軾(二)に據り頭を低れて、氣を出すこと能はず。歸つて魯の東門外に到り、適〻柳下季に遇ふ。柳下季曰く、今者闕然數日見ず(三)。車馬行色あり(四)、往いて跖を見る微きを得んやと。孔子天を仰いで歎じて曰く、然りと。柳下季曰く、跖は汝の意に逆ふこと前の若くなること無きを得んや(五)と。孔子曰く然り。丘は所謂病無くして自ら灸せしなり。疾く走らん。虎頭(六)を料で、虎須を編む、幾んど虎口を免れざらんとせし哉と。

(一) 手綱をとらんとして三度取りはづす　(二) 車の横木によりかゝる　(三) 此の頃ごぶさたして數日おめにかゝら

忠臣也。然卒爲天下笑。自上觀之、至于子胥比干、皆不足貴也。丘之所以說我者。若告我以鬼事、則我不能知也。若告我以人事者。不過此矣。皆吾所聞知也。今吾告子以人之情。目欲視色。耳欲聽聲。口欲察味。志氣欲盈。人上壽百歲。中壽八十。下壽六十。除病瘦

若し我に告ぐるに人事を以てするもの此れに過ぎずんば、皆吾が聞知する所なり。今は吾れ子に告ぐるに人の情を以てせん。目は色を視んことを欲し、耳は聲を聽かんことを欲し、口は味を察せんことを欲し、志氣は盈たんことを欲す。人の上壽は百歲、中壽は八十、下壽は六十。病瘦、死喪、憂患を除いて、其の中に口を開いて笑ふもの、一月の中、四五日に過ぎざるのみ。天と地とは窮まりなくして、人の死するは時あり、時あるの具を操つて、而して窮まりなきの間に託す。忽然たること、騏驥の馳せて隙を過ぐるに異なるなきなり。其の志意を說ばせ、其の壽命を養ふこと能はざるものは、皆道に通ずるものに非ざるなり。丘の言ふ所は、皆吾の棄つる所なり。亟かに去り走り歸れ、復た之を言ふ無かれ。子の道は、狂狂汲汲たる詐巧虛僞の事なり、以て眞を全うすべきにあらざるなり。奚ぞ論ずるに足らんやと。

(一) 比干伍子胥のこと、前に出づ　(二) 前に述べたる鬼神より降て子胥比干に至るまで　(三) 幽冥界の事　(四) 孔

夷叔齊。辭二孤竹之君一。而餓二死於首陽之山一。骨肉不レ葬。鮑焦飾レ行。非レ世。抱レ木而死。申徒狄諫而不レ聽。負レ石自投二於河一。爲二魚鼈一所レ食。介子推至忠也。自割二其股一以食二文公一。文公後背レ之。子推怒而去。抱レ木而燔死。尾生與二女子一期二於梁下一。女子不レ來。水至不レ去。抱二梁柱一而死。此四者無レ異二於磔犬流豕。操レ瓢而乞者一。皆離レ名輕レ死。不下念レ本養中壽命上者也。

ること無し。皆名に離り死を輕んじ、本を念ひ壽命を養はざるものなり。(一四)

(一) 堯は其の子丹朱に天下を譲らず故に不慈の親 (二) 舜は父瞽瞍に憎まる故に不孝の子 (三) 禹王は半身不隨の病に罹る (四) 周の文王は殷紂の怒にふれて羑里の獄に囚へらる (五) 反覆愬論す (六) 利欲の念を以て其の眞性を惑亂し強ひて其の眞情に反す (七) 前に出づ (八) 周の隱者清廉高節後遂に木を抱きて立死す (九) 前に出づ (一〇) 晉の文公出亡せし時子推其の股肉を割きて之に食はしむ文公晉に歸るに及び子推を忘る子推介山に入り終に火死す (一一) 尾生は女子と梁下に約し女子來らざるがために溺死す (一二) ハリツケにかけたる犬河に流せし豕 (一三) 乞丐 (一四) 其の本に反りて生を養ふを知らず

世之所レ謂忠臣者。莫レ若二王子比干伍子胥一。子胥沈レ江。比干剖レ心。此二子者世謂

世の所謂忠臣なるものは、(一)王子比干伍子胥に若くは莫し。子胥は江に沈められ、比干は心を剖かる。此の二子は世に謂ふ忠臣なり。然れども卒に天下の笑ひと爲る。(二)上より之を觀て、子胥比干に至るまで、皆貴ぶに足らざるなり。丘の我に說く所以のもの、若し我に告ぐるに(三)鬼事を以てせば、則ち我れ知る能はざるなり。

孔丘能止暴禁非。其卒之也。子路欲殺衞君而事不成。身菹於衞東門之上。是子教之不至也。子自謂才士聖人邪。則再逐於魯。削迹於衞。窮於齊。圍於陳蔡。不容身於天下。子教子路菹此患。上無以爲身。下無以爲人。子之道豈足貴邪。

世之所高。莫若黃帝。黃帝尚不能全德。而戰涿鹿之野。流血百里。堯不慈。舜不孝。禹偏枯。湯放其主。武王伐紂。文王拘羑里。此六子者。世之所高也。孰論之。皆以利惑其眞。而強反其情性。其行乃甚可羞也。世之所謂賢士。伯

世の高しとする所は黃帝に若くは莫し。黃帝尚は全德なる能はずして、涿鹿の野に戰つて、流血百里。（一）堯は不慈、（二）舜は不孝、（三）禹は偏枯、湯は其の主を放ち、武王は紂を伐ち、（四）文王は羑里に拘はる。此の六子は、世の高しとする所なり。（五）之を孰論するに、（六）皆利を以て其の眞を惑はして、強ひて其の情性に反す。其の行乃ち甚だ羞つべきなり。世の所謂賢士、（七）伯夷叔齊は、孤竹の君を辭して、首陽の山に餓死し、骨肉葬らず。（八）鮑焦は行を飾り、世を非り、木を抱いて死す。（九）申徒狄は諫めて聽かれず。石を負うて自ら河に投じ、魚鼈の爲めに食はる。（一〇）介子推は至忠なり。自ら其の股を割いて以て文公に食はしむ。文公後之に背く。子推怒つて去り、木を抱いて燔死す。（一一）尾生は女子と梁下に期す、女子來らず、水至れども去らず、梁柱を抱いて死せり。此の四者は、（一二）磔犬流豕と、（一三）瓢を操つて乞ふ者とに異な

紂。自ㇾ是之後。以ㇾ強陵ㇾ弱。以ㇾ衆暴ㇾ寡。湯武以來。皆亂人之徒也。

今子修二文武之道一。掌二天下之辯一。以教二後世一。縫衣淺帶。矯言僞行。以迷二惑天下之主一。而欲ㇾ求二富貴一焉。盗莫ㇾ大二於子一。天下何故不三謂ㇾ子爲二盗丘一。而乃謂ㇾ我爲二盗跖一。子以二甘辭一說二子路一而使ㇾ從ㇾ之。使下子路去二其危冠一。解二其長劍一。而受中教於子上。天下皆曰。

今子は文武の道を修め、天下の辯(一)を掌り、以て後世に敎ふ。縫衣淺帶(二)、矯言僞行(三)、以て天下の主を迷惑せしめて、富貴を求めんと欲す。盗は子より大なるは莫し、天下何か故にか子を謂つて盗丘と爲さずして、而して乃ち我を謂つて盗跖とする。子甘辭(四)を以て子路に說いて之を從はしめ、子路をして其の危冠(五)を去り、其の長劍を解いて、而して敎を子に受けしむ。天下皆曰く、孔丘能く暴を止め非を禁ずと。其の卒りや、子路衞君を殺さんと欲して事成らず、身は衞の東門の上に葅せらる(六)。是れ子が敎の至らざるなり。子自ら才士聖人と謂ふか、則ち再び魯に逐はれ、迹を衞に削られ、齊に窮し、陳蔡に圍まれ、身を天下に容れられず。子は子路に、葅せらるゝの此の患を敎へ、上以て身の爲めにするなく、下以て人の爲めにする無し。子の道豈に貴ぶに足らんや。

(一) 天下の學術辯說を總領す (二) 縫腋の衣淺狹の帶、儒服なり (三) 奇矯の言僞れる行 (四) 甘言 (五) 高き冠を脫ぎ長劍を解きて其の暴戾の氣を去らしむ (六) 葅にせらる

畜我也。安可長久也。城之大者。莫大于天下矣。堯舜有天下。子孫無置錐之地。湯武立爲天子。而後世絶滅。非以其利大故邪。且吾聞之。古者禽獸多而人民少。於是民皆巣居以避之。晝拾橡栗。暮棲木上。故命之曰有巣氏之民。古者民不知衣服。夏多積薪。冬則煬之。故命之曰知生之民。神農之世。臥則居居。起則于于。民知其母。不知其父。與麋鹿共處。耕而食。織而衣。無有相害之心。此至德之隆也。然而黄帝不能致德。與蚩尤戰於涿鹿之野。流血百里。堯舜作。立羣臣。湯放其主。武王殺

を命けて知生(七)の民と曰ふ。神農の世、臥せば則ち居居(八)、起ては則ち于于(九)、民は其の母を知つて、其の父を知らず、(一〇)麋鹿と與に共に處り(一一)、耕して食ひ、織つて衣、相害するの心有ること無し、此れ至德の隆なり。然り而して黄帝(一二)德を致すこと能はず。(一三)蚩尤と涿鹿の野に戰ひ、流血百里。堯舜作つて、羣臣を立つ。湯は其の(一四)主を放ち、武王は紂を殺す。是より後、强を以て弱を陵ぎ、衆を以て寡を暴す。湯武以來、皆亂人の徒なり。

(一) 利を以て之を誘り言を以て之を譽め得べきは愚蠢の凡人のみ (二) 面前にて人を譽むることを好むものは亦かげにて謗ることを好む (三) 大城衆民と雖もよく長久に存する能はず (四) 寸地も無し (五) 其の利の餘りに大に過ぎたるためなり (六) トチやクリの實を拾ひ樹上 (七) 生くるの道を知れる民 (八) 安靜の貌 (九) 自得の貌 (一〇) 夫婦の別なきゆゑに母を知れども父を知らず (一一) 麋の類と共に住む (一二) 黄帝に至りては萬民に下りて無爲の德を致す能はず (一三) 時の諸侯涿鹿は直隸省宣化府の西に在るといふ (一四) 夏の桀王

弟。共祭先祖。此聖人才士之行。而天下之願也。

盜跖大怒曰。丘來前。夫可規以利。而可諫以言者。皆愚陋恆民之謂耳。今長大美好。人見而說之者。此吾父母之遺德也。丘雖不吾譽。吾獨不自知邪。且吾聞之。好面譽人者。亦好背而毀之。今丘告我以大城衆民。是欲規我以利。而恆民

盜跖大に怒つて曰く、丘來り前め。夫れ規るに利を以てすべくして、而して諫むるに言を以てすべきものは、皆愚陋なる恆民(一)の謂のみ。今長大美好、人見て之を說ぶものは、此れ吾が父母の遺德なり。丘、吾を譽めずと雖も、吾れ獨り自ら知らざらんや。且吾れ之を聞く、(二)面のあたり人を譽むるを好むものは、亦背いて之を毀るを好むと。今丘我に告ぐるに大城衆民を以てするは、是れ我を規るに利を以てして、而して恆民として我を畜はんと欲するなり。(三)安んぞ長久なるべけんや。城の大なるものは、天下より大なるは莫し。堯舜天下を有ちしも、子孫錐(四)を置くの地無し。湯武立つて天子たりしも、而かも後世絶滅す。(五)其の利の大なるを以ての故に非ずや。且吾れ之を聞く。古は禽獸多くして人民少し。是に於て民皆巣居して以て之を避く。晝は橡栗(六)を拾ひ、暮は木上に棲む。故に之を命けて有巣氏の民と曰ふ。古は民衣服を知らず、夏は多く薪を積み、冬は則ち之を煬く。故に之

大美好無雙。
少長貴賤見
而皆說之。此
上德也。知維
天地、能辯諸
物。此中德也。
勇悍果敢。聚
衆率兵。此下
德也。凡人有
此一德者。足
以南面稱孤
矣。今將軍兼
此三者。身長
八尺二寸。面
目有光。脣如
激丹。齒如齊
貝。音中黃鍾。
而名曰盜跖。
丘竊為將軍恥不取焉。將軍有意聽臣。臣請南使吳越。北使齊魯。東使宋衞。西使晉楚。使
為將軍造大城數百里。立數十萬戶之邑。尊將軍為諸侯。與天下更始。罷兵休卒。收養昆

を辯ずるは、此れ中德なり。勇悍果敢にして、衆を聚め兵を率ゐるは、此れ下德な
りと。凡そ人此の一德あるものは、以て南面して(四)孤と稱するに足る。今將軍此の
三者を兼ぬ。身の長は八尺二寸、面目光あり、(五)脣は激丹の如く、齒は(六)齊貝の如
く、(七)音黄鍾に中る。而して名づけて盜跖と曰ふ、丘竊かに將軍の爲めに恥ぢて
取らず。將軍臣に聽くに意あらば、臣請ふ南は吳越に使し、北は齊魯に使し、東は
宋衞に使し、西は晉楚に使し、將軍の爲めに大城數百里を造り、數十萬戶の邑を
立て、將軍を尊んで諸侯となさしめん。(八)天下と更始して、兵を罷め卒を休め、(九)昆
弟を收養し、先祖を共祭せば、此れ聖人才士の行にして、天下の願なりと。

(一) 生來身のたけ長大に容貌秀麗　(二) 其の知天地を網羅す　(三) 其の能萬物の理を辨へ知る　(四) 諸侯の謙稱
(五) 脣の紅きをいふ　(六) 貝殼をならべたる如し　(七) 其の音聲六律にかなふ　(八) 天下と共に一新す　(九) 兄弟を收め養ひ共に先祖を祭る

武。冠枝木之冠。帶死牛之脅。多辭繆說。不耕而食。不織而衣。搖脣鼓舌。擅生是非。以迷天下之主。使天下學士。不反其本。妄作孝弟。而徼倖於封侯富貴者也。子之罪大極重。疾走歸。不然我將以子肝益晝餔之膳。孔子復通曰。丘得幸於季。願望履幕下。謁者復通。盜跖曰。使來前。孔子趨而進。避席反走。再拜盜跖。盜跖大怒。兩展其足。案劍瞋目。聲如乳虎。曰丘來前。若所言順吾意則生。逆吾心則死。

に怒り、兩つながら其の足を展べ、劍を案じ目を瞋らし、聲乳虎の如し。(一八)曰く丘來り前め、若が言ふ所吾が意に順はば則ち生きん、吾か心に逆はば則ち死せんと。

(一) 車の御者となる (二) 手下の賊を太山の南に休息せしめ人の肝を魚膾となして食ふ (三) 取次役 (四) 御面會の儀を御頼み申す (五) 山師 (六) 色々の語を造り設く (七) 周の文王武王 (八) 孔子の冠の多飾なること樹枝の繁きが如きにいふ (九) 牛皮を帶とす (一〇) 辭煩多にして說に謬りあり (一一) 天下の學者を迷はしめて其の本然の性に反らざらしび (一二) 僥倖 (一三) 足下の肝を取つて晝飯の菜となさん (一四) 謁者によりて意を通ず (一五) 柳下季と懇意なり (一六) 脚下に伏謁せん (一七) 其の席を避けて引下る (一八) 虎兒を哺する虎は其の威殊に烈し

孔子曰。丘聞之。凡天下有三德。生而長

孔子曰く、丘之を聞く、凡そ天下に三德あり。(一)生れながらにして長大美好なること無雙、少長貴賤見て皆之を說ぶは、此れ上德なり。(二)知は天地を維ぎ、(三)能諸物

孔子不レ聽。顏回爲レ馭。子貢爲レ右。往見二盜跖一。盜跖乃方休二卒徒太山之陽一。膾二人肝一而餔レ之。孔子下レ車而前。見二謁者一曰。魯人孔丘。聞二將軍高義一。敬再二拜謁者一。謁者入通。盜跖聞レ之大怒。目如二明星一。髮上指レ冠。曰。此夫魯國之巧僞人孔丘非邪。爲レ我告レ之。爾作言造語。妄稱二文

孔子聽かず、顏回馭と爲り、子貢右と爲り、往いて盜跖を見る。盜跖乃ち方に卒徒を太山の陽に休し、人肝を膾にして之を餔ふ。孔子車より下りて前み、謁者を見て曰く、魯人孔丘、將軍の高義を聞き、敬んで謁者に再拜すと。謁者入つて通す。盜跖之を聞いて大に怒り、目は明星の如く、髮上つて冠を指す。曰く、此れ夫の魯國の巧僞人孔丘に非ずや。我が爲めに之に告げよ。爾作言造語して、妄りに文武を稱し、枝木の冠を冠り、死牛の脅を帶び、多辭繆說して、耕さずして食ひ、織らずして衣、脣を搖かし舌を鼓し、擅に是非を生じて、以て天下の主を迷はし、天下の學士をして、其の本に反らざらしめ、妄りに孝弟を作して、封侯富貴を儌倖するものなり。子の罪大にして極めて重し。疾く走り歸れ、然らずんば我れ將に子の肝を以て晝餔の膳を益さんとすと。孔子復た通じて曰く、丘幸を季に得たり。願はくは履を幕下に望まんと。謁者復た通ず。盜跖曰く、來り前ましめよと。孔子趨つて進み、席を避けて反り走り、盜跖を再拜す。盜跖大

城。小國入保。萬民苦之。孔子謂柳下季曰。夫爲人父者。必能詔其子。爲人兄者。必能教其弟。若父不能詔其子。兄不能教其弟。則無貴父子兄弟之親矣。今先生。世之才士也。弟爲盜跖。爲天下害。而弗能教也。丘竊爲先生羞之。丘請爲先生往說之。柳下季曰。先生言爲人父者。必能詔其子。爲人兄者。必能教其弟。若子不聽父之詔。弟不受兄之教。雖今先生之辯。將奈之何哉。且跖之爲人也。心如涌泉。意如飄風。强足以拒敵。辯足以飾非。順其心則喜。逆其心則怒。易辱人以言。先生必無往。

めに往いて之を說かんと。柳下季曰く、先生言ふ、人の父たるものは、必ず能く其の子に詔げ、人の兄たるものは、必ず能く其の弟を教ふと。若し子は父の詔を聽かず、弟は兄の教を受けずんば、今の先生の辯と雖も、將た之を奈何せんや。且跖の人と爲りや、心は湧泉の如く、(六)意は飄風の如し。(七)强以て敵を拒ぐに足り、辯以て非を飾るに足る。其の心に順へば則ち喜び、其の心に逆へば則ち怒り、(八)人を辱むるに言を以てし易し。先生必ず往くこと無かれと。

㊀ 此の篇聖人を譏り孔子を揶揄し名のためにすると利のためにすると其の道の賊たるに於て違ふことなき所以を述ぶ ㊁ 姓は展、名は禽、字は季、其の采邑柳下なるを以て柳下季といふ。一說に柳樹の下に宅せるを以てなりと云ふ ㊂ 屋に穴を穿ち戸の樞を破る ㊃ 盜跖の通過する邑 ㊄ 小城 ㊅ 知の湧出づること泉の如し ㊆ 意驕りて旋風の如し ㊇ 常に言を以て人を辱むることをなす

之以潔二吾行一。二子北至二於首陽之山一。遂餓而死焉。若二伯夷叔齊一者。其於二富貴一也。苟可レ得レ已。則必不レ賴二高節戾行一。獨樂二其志一。不レ事二於世一。此二士之節也。

盗跖(一)

孔子與二柳下季一爲レ友。柳下季之弟。名曰二盜跖一。盜跖從卒九千人。横二行天下一。侵二暴諸侯一。穴レ室樞レ戶。驅二人牛馬一。取二人婦女一。貪レ得忘レ親。不レ顧二父母兄弟一。不レ祭二先祖一。所レ過之邑。大國守レ

孔子(二)、柳下季と友たり。柳下季の弟、名を盗跖と曰ふ。盗跖從卒九千人、天下に横行し、諸侯を侵暴し、(三)室に穴し戸に樞し、人の牛馬を驅り、人の婦女を取り、得を貪つて親を忘れ、父母兄弟を顧みず、先祖を祭らず、(四)過ぐる所の邑、大國は城を守り、小國は保(五)に入る。萬民之を苦しむ。孔子柳下季に謂つて曰く、夫れ人の父たるものは、必ず能く其子に詔け、人の兄たるものは、必ず能く其の弟に教ふ。若し父其の子に詔ぐること能はず、兄其の弟を教ふること能はずんば、則ち父子兄弟の親を貴むこと無し。今先生、世の才士なり。弟は盗跖たり、天下の害を爲せども教ふること能はず。丘竊に先生の爲めに之を羞づ。丘請ふ、先生の爲

喜。其於レ人也。忠信盡レ治。而無レ求焉。樂二與レ政爲一レ政。樂二與レ治爲一レ治。不下以二人之壞一自成上也。不下以二人之卑一自高上也。不下以レ遭レ時自利上也。今周見二殷之亂一。而遽爲レ政。上謀而下行レ貨。阻レ兵而保レ威。割レ牲而盟。以爲レ信。揚レ行以說レ衆。殺伐以要レ利。是推レ亂以易レ暴也。吾聞古之士遭二治世一不レ避二其任一。遇二亂世一不レ爲二苟存一。今天下闇。周德衰。其並二乎周一以塗二吾身一也。不レ如レ避

も存するを爲さず。今天下闇く、周德衰ふ。其の周に並んで以て吾身を塗さんよりは、之を避けて以て吾が行を潔くせんには如かずと。二子、北、首陽の山に至り、遂に餓ゑて死せり。伯夷叔齊の若き者は、其の富貴に於けるや、(一八)苟くも已むを得べくんば、則ち必ず高節戾行を頼まず、(一九)獨り其の志を樂しみ、世に事へず、此れ二士の節なり。

(一) 國の名 (二) 岐山の南武王の都する處 (三) 弟の周公旦 (四) 伯夷叔齊 (五) 其の祿を優し一等の官に任ぜん (六) 牲を殺し其の血を取り盟つて後に之を埋む (七) 歲時の祭祀に崇敬をつくせども福を祈らず (八) 人に對する場合には誠實にしてできる限りつくせども人より求むる所無し (九) 私欲を挾まざるをいふ (一〇) 人の失敗せるを以て自ら成功せるものとなさず (一一) 時世に遭遇して志を得るも之を以て己を利せず (一二) あわてゝ善政を施す (一三) 上位に在るものは謀略をめぐらして下のものに爵祿を與へて誘ふ (一四) 兵を頼みにして威を保つ (一五) 善行揚げて衆心を悅ばす (一六) 亂を以て桀の暴に易ふるまでにて同じことなり (一七) 節を屈して存せんことを求めず (一八) 義に於て受くべきものならば必ずしも節を高くし人に暴なる行をなさんとするものに非ず (一九) 唯義に於て受くべからざるものなる故に獨り己の志を樂しみ世俗に從はざりしなり

昔周之興。有二士二人。處於孤竹。曰伯夷叔齊。二人相謂曰。吾聞西方有人。似有道者。試往觀焉。至於岐陽。武王聞之。使叔旦往見之。與之盟曰。加富二等。就官一列。血牲而埋之。二人相視而笑曰。嘻異哉。此非吾所謂道也。昔者神農之有天下也。時祀盡敬。而不祈

昔、周の興る、士二人あり、孤竹に處る。伯夷叔齊と曰ふ。二人相謂つて曰く、吾れ聞く、西方に人あり、道あるものに似たりと。試に往いて觀んと。岐陽に至る。武王之を聞き、叔旦をして往いて之を見しむ。之と與に盟つて曰く、富、二等を加へ、官、一列に就かしめんと。血牲して之を埋む。二人相視て笑つて曰く、嘻、異なるかな。此れ吾が所謂道に非ざるなり。昔は神農の天下を有つや、時祀、敬を盡せども喜を祈らず。其の人に於けるや、忠信にして治を盡せども求むることなし。政のために政を爲すを樂しみ、治のために治を爲すを樂しむ。人の壞るゝを以て自ら成さざるなり。人の卑しきを以て自ら高うせざるなり。時に遭ふを以て自ら利せざるなり。今、周、殷の亂を見て遽かに政を爲す。上、謀つて、而して下、貨を行ひ、兵を阻てて威を保ち、牲を割いて盟つて以て信と爲し、行を揚げて以て衆を說ばせ、殺伐以て利を要む。是れ亂を推し以て暴に易ふるなり。吾れ聞く、古の士は、治世に遭へば其の任を避けず、亂世に遇へば苟く

可。曰吾不ㇾ知也。湯曰伊尹何如。曰强力忍ㇾ垢。吾不ㇾ知ニ其他一也。湯遂與ニ伊尹一謀。伐ㇾ桀克ㇾ之。以讓ニ卞隨。卞隨辭曰。后之伐ㇾ桀也謀ニ乎我。必以ㇾ我爲ㇾ賊也。勝ㇾ桀而讓ㇾ我。必以ㇾ我爲ㇾ貪也。吾生ニ乎亂世。而無道之人再來。漫ㇾ我以ニ其辱行。吾不ㇾ忍ニ數聞一也。乃自投ニ椆水一而死。湯又讓ニ瞀光。曰。知者謀ㇾ之。武者遂ㇾ之。仁者居ㇾ之。古之道也。吾子胡不ㇾ立乎。瞀光辭曰。廢ㇾ上非ㇾ義也。殺ㇾ民非ㇾ仁也。人犯ニ其難一。我享ニ其利。非ㇾ廉也。吾聞ㇾ之曰。非ニ其義一者。不ㇾ受ニ其祿。無道之世。不ㇾ踐ニ其土。況尊ㇾ我乎。吾不ㇾ忍ニ久見一也。乃負ㇾ石而自沈ニ於廬水。

るは古の道なり。吾子胡ぞ立たざるやと。瞀光辭して曰く、上を廢するは義に非ざるなり。（一二）民を殺すは仁に非ざるなり、人其の難を犯して、（一三）吾れ其の利を享くるは、廉に非ざるなり。吾れ之を聞く、曰く、其の義に非ざれば、其の祿を受けず、無道の世は其の土を踐まずと。況や我を尊ぶをや。吾れ久しく見るに忍びざるなりと。乃ち石を負うて自ら廬水に沈む。（一四）

（一）北方の人名は無擇　（二）田舍の農民でありながら其れに安んずる能はずして堯の處につく　（三）尙は慾りずして其の汙辱の行を以て我をけがさんとす　（四）淵の名　（五）殷の湯王　（六）一に務光に作る　（七）强ひて我慢して恥を忍ぶ男なるが其の他は存ぜず　（八）旅に出づ　（九）湯と共に其の君を討つ賊臣と見なしたるなり　（一〇）川の名、一に桐水に作る　（一一）知者は謀慮し武者其の謀慮する所を遂行し仁者其の遂げたる位に居るは古人の道　（一二）桀を放つを斥す　（一三）湯王を斥す　（一四）川の名

舜以天下讓其友北人無擇。北人無擇曰。異哉后之爲人也居於畎畝之中而遊堯之門。不若是而已又欲以其辱行漫我吾羞見之因自投清泠之淵湯將伐桀。因卞隨而謀。卞隨曰。非吾事也湯曰孰可曰吾不知也。湯又因瞀光而謀。瞀光曰非吾事也湯曰孰

舜、天下を以て其の友北人無擇に讓る。北人無擇曰く、異なるかな后の人と爲りや、畎畝の中に居て堯の門に遊ぶ。是の若くにして已まず、又其の辱行を以て我を漫さんと欲す。吾れ之を見るを羞づと。因つて自ら清泠の淵に投ず。湯將に桀を伐たんとす。卞隨に因つて謀る。卞隨曰く、吾が事に非ざるなりと。湯曰く、孰れか可なると。曰く、吾れ知らざるなりと。湯又瞀光に因つて謀る。瞀光曰く、吾が事に非ざるなりと。湯曰く、孰れか可なる。曰く、吾れ知らざるなりと。湯曰く、伊尹は何如と。曰く、強力にして垢を忍ぶ、吾れ其の他を知らざるなりと。湯遂に伊尹と與に謀つて桀を伐ち、之に克つ。以て卞隨に讓る。卞隨辭して曰く、后の桀を伐つや我に謀るは、必ず我を以て賊と爲すなり。桀に勝つて我に讓るは、必ず我を以て貪と爲すなり。吾れ亂世に生れて、無道の人、再び來つて我を漫其のすに辱行を以てす。吾れ數〻聞くに忍びざるなりと。乃ち自ら椆水に投じて死す。湯又瞀光に讓る。曰く、知者之を謀り、武者之を遂け、仁者之に居

來。吾語之。子路子貢入。子路曰。如此者可謂窮矣。孔子曰。是何言也。君子通於道之謂通。窮於道之謂窮。今丘抱仁義之道。以遭亂世之患。其何窮之爲。故内省而不窮於道。臨難而不失其德。天寒既至。霜雪既降。吾是以知松柏之茂也。陳蔡之隘。於丘其幸乎。孔子削然反琴而弦歌。子路抗然執干而舞。子貢曰。吾不知天之高也。地之下也。古之得道者窮亦樂。通亦樂。所樂非窮通也。道德於此。則窮通爲寒暑風雨之序矣。故許由娛於潁陽。而共伯得乎共首。

則ち窮通(一八)は寒暑風雨の序たり。故に許由は潁陽(一九)に娛しみ、而して共伯(二〇)は共首に得たりと。

一 孔子楚に之かんとして陳蔡の間に圍まれしことあり　二 菜のアツモノに米無し　三 共に孔子の弟子　四 宋に於て弟子を集めて禮を樹下に習はし司馬桓魋のために樹を伐り倒さる　五 殷周の舊都　六 縛する者も禁止せられず　七 君子の恥辱を恥辱と思はざるは此の如きか　八 子路と子貢との名　九 小人　一〇 衷心に省みて道に窮する所なく災難に遇ひて其の德を傷け失ふことなし　一一 災厄　一二 孤高の貌　一三 琴をもとの座にかへして絃歌す　一四 窺ひ舞ふ貌　一五 愚にして天高地下の見やすき道理をも辨へず　一六 窮通を以て心を二にせず　一七 道を樂しむなり　一八 内に道德あれば窮と通とは風雨寒暑の往來變化して定まらざる如く意にかゝるに足らず。一説道を此に德ばと德字を得字とす　一九 潁川の陽　二〇 周王の孫にして道を懷けり。周の厲王出奔の後諸侯之を天子となさんとせしも聽かず。終止むを得ずして卽位し後故ありて位を廢せられて宣王立ちたるも怨まず丘首の山に自得す。一説に丘首を山の邊とす

不糝。顏色甚憊而弦歌於室。顏回擇菜。子路子貢相與言曰。夫子再逐於魯。削迹於衞。伐樹於宋。窮於商周。圍於陳蔡。殺夫子者無罪。藉夫子者無禁。弦歌鼓琴。未嘗絶音。君子之無恥也若此乎。顏回無以應。入告孔子。孔子推琴。喟然而歎曰。由與賜細人也。召而

を衞に削られ、樹を宋に伐られ、商周に窮し、陳蔡に圍まる。夫子を殺すものも罪なく、夫子を藉するものも禁なし。弦歌して琴を鼓し、未だ嘗て音を絶たず。君子の恥無きや、此の若きかと。顏回以て應ずることなく、入つて孔子に告ぐ。孔子琴を推し、喟然として歎じて曰く、由と賜とは細人なり、召して來れ、吾れ之に語げんと。子路子貢入る。子路曰く、此の如きもの窮すと謂ふべしと。孔子曰く、是れ何の言ぞや。君子道に通ずる之を通と謂ふ、道に窮する之を窮と謂ふ。今丘は仁義の道を抱いて以て亂世の患に遭ふ。其れ何の窮するをか之れ爲さん。故に内に省みて道に窮せず、難に臨んで其の德を失はず。天寒既に至り、霜雪既に降る。吾れ是を以て松柏の茂るを知るなり。陳蔡の隘は、丘に於て其れ幸かと。孔子削然として琴を反して弦歌す。子路扢然として干を執つて舞ふ。子貢曰く、吾れ天の高きや、地の下きやを知らざるなり。古の道を得る者は、窮も亦樂しみ、通も亦樂しむ。樂しむ所は窮通に非ざるなり。此に道德あれば、

心居二乎魏闕之下一。奈何。瞻子曰。重レ生。重レ生則利輕。中山公子牟曰。雖レ知レ之。未レ能レ勝也。瞻子曰。不レ能二自勝一。則從。神無レ惡乎。不レ能二自勝一。而強不レ從者。此之謂二重傷一。重傷之人。無二壽類一矣。魏牟萬乘之公子也。其隱二巖穴一也。難レ爲二於布衣之士一。雖レ未レ至二乎道一。可レ謂レ有二其意一矣。

之を知ると雖も、未だ勝つこと能はずと。瞻子曰く、(五)自ら勝つこと能はずんば則ち從へ、(六)神惡むこと無からんか。自ら勝つこと能はずして、強ひて從はざるものは、此を之れ(七)重傷と謂ふ。重傷の人は(八)壽の類無しと。魏牟は(九)萬乘の公子なり、其の巖穴に隱るゝや、布衣の士よりも爲し難し。未だ道に至らずと雖も、其の意ありと謂ふべし。

(一)魏の公子にて中山に封ぜられし人 (二)魏の賢人 (三)身は江湖に隱遁しながら心のみは魏の王宮に居る時の如し (四)生道を重んずれば名利のために之を害はず名利に打ちかつこと能はず (五)名利に勝つこと能はずんば姑く名利に從へ (六)さすれば精神の惡み厭ふ所なく心を害ふことなかるらん (七)心に勝つこと能はざる上に強ひて心に從はざらむとするは重ねて傷つくの人 (八)長壽するものなし (九)萬乘君の公子なるが山林に隱るゝことは無位無官の人よりなしがたかりしもよく之を成せり

孔子窮二於陳蔡之間一。七日不二火食一。藜羹

孔子、陳蔡の間に窮し、七日火食せず、(二)藜羹、糝せず。顏色甚だ憊れて、室に(一)弦歌す。顏回、菜を擇ぶ。(三)子路子貢相與に言つて曰く、夫子再び魯に逐はれ、跡

乎。顏回對曰。不レ願レ仕。回有二郭外之田五十畝一。足三以給二飦粥一。郭内之田十畝。足二以爲二絲麻一。鼓レ琴足二以自娯一。所レ學二夫子一之道者。足二以自樂一也。回不レ願レ仕。孔子愀然變レ容曰。善哉回之意。丘聞レ之。知レ足者。不三以レ利自累一也。審自得一者。失レ之而不レ懼。行修二於内一者。無レ位而不レ怍。丘誦レ之久矣。今於レ回而後見レ之。是丘之得也。

足る。郭内の田十畝、以て絲麻を爲るに足る。琴を鼓すれば以て自ら娯しむに足り、夫子に學ぶ所の道は、以て自ら樂しむに足れり。回、仕を願はずと。孔子愀(四)然として容を變じて曰く、善い哉、回の意や。丘之を聞く、足るを知るものは、利を以て自ら累はさず。(五)自得を審かにするものは、之を失うて懼れず。行、内に修まるものは、位無くして怍ぢずと。丘之を誦するや久し。今、回に於て後之を見る。是れ丘の得(六)なりと。

(一)城郭外の田地　(二)カユ　(三)衣服の料とするに足る　(四)容を變ずる貌　(五)自適して安んずることを知るものは得失のために懼れず　(六)孔子自ら得る所ありとなり

中山公子牟。謂二瞻子一曰。身在二江海之上一。

中山公子牟、瞻子に謂つて曰く、身は江海の上に在り、心は魏闕の下に居る、奈何と。瞻子曰く、(三)生を重んぜよ、生を重んずれば則ち利輕し。中山公子牟曰く、

曾子居レ衛。縕袍無レ表。顔色腫噲。手足胼胝。三日不レ擧レ火。十年不レ製レ衣。正レ冠而纓絕。捉レ衿而肘見。納レ履而踵決。曳レ縰而歌二商頌一。聲滿二天地一。若レ出二金石一。天子不レ得レ臣。諸侯不レ得レ友。故養レ志者忘レ形。養レ形者忘レ利。致レ道者忘レ心矣。

曾子、衛に居る。縕袍(一)表なく、顔色腫噲し、(二)手足胼胝す。(三)三日火を擧げず、(四)十年衣を製せず、冠(五)を正せば纓絕ち、衿(六)を捉れば肘見え、履(七)を納るれば踵決す。曳縰(八)して商頌(九)を歌ひ、聲(一〇)天地に滿ち、金石より出づるが若し。天子も臣とするを得ず、諸侯も友とするを得ず。故に志を養ふものは形を忘れ、(一一)形を養ふものは利を忘れ、(一二)道を致すものは心を忘る。(一三)

(一) 綿入のドテラの表は破れとれたり (二) 水氣にムクむ (三) ヒビ、アカギレがきれる (四) 三日間も炊がず (五) 冠をかむり正せば冠の紐がきれる (六) 襟をかきあはすれば肘が出る (七) クツをはけば踵が裂ける (八) 足を引きずる (九) 詩經にある殷の樂歌 (一〇) 聲高らかに響きわたつて節奏の美なること音樂の如し (一一) 心を養ふものは衣食のために心を勞することなし (一二) 形體を養生するものは外利を忘る (一三) 道を修むるものはわが知を忘る

孔子謂二顔回一曰。回來。家貧居レ卑。胡不レ仕

孔子顔回に謂つて曰く、回來れ、家貧しく卑きに居る、胡ぞ仕へざるやと。顔回對へて曰く、仕を願はず、回、郭外(一)の田五十畝あり。以て飦粥(二)に給するに

褐以爲レ塞。上漏下濕。匡坐而弦。子貢乘二大馬一。中紺而表素。軒車不レ容レ巷。往見二原憲一。原憲華冠縰履。杖レ藜而應レ門。子貢曰。嘻。先生何病。原憲應レ之曰。憲聞レ之。無レ財謂二之貧一。學而不レ能レ行謂二之病一。今憲貧也。非レ病也。子貢逡巡而有二愧色一。原憲笑曰。夫希レ世而行。比周而友。學以爲レ人。敎以爲レ己。仁義之慝。輿馬之飾。憲不レ忍レ爲也。

を見る。原憲華冠(一〇)縰履(一一)、藜を杖いて門に應ず(一二)。子貢曰く、嘻先生何をか病むと。原憲之に應へて曰く、憲之を聞く、財無き之を貧と謂ひ、學んで行ふこと能はざる之を病と謂ふ。今、憲は貧なり、病に非ざるなりと。子貢逡巡(一三)して愧色あり。原憲笑つて曰く、夫れ世に希うて(一四)行ひ、比周して友とす、學ぶ(一五)は以て人の爲めにし、敎ふる(一六)は以て己の爲めにす。仁義の慝(一七)、輿馬(一八)の飾は、憲、爲すに忍びざるなりと。

(一) 孔子の弟子 (二) 周圍各一堵の室 (三) 蓬を編んで戶となすに破れたり (四) 戶のクルル (五) 甕を壁に塡めて明とりの窓となす (六) 粗布をもつて窓かけとなす (七) 正坐して彈琴す (八) 車蓋裏は紺色にて表白し (九) 大夫の乘る車 (一〇) 樺皮の冠 (一一) 踵のとれた破れ履 (一二) 門に出て應接す (一三) モジ〳〵して愧かしき顏をなす (一四) 俗世に容あらんことを期待して行ひ偏私阿黨して友となる (一五) 學んで以て己を飾むることをなさずして世に衒ふためにす (一六) 敎へて以て人に道を傳ふるに非ずして己の利欲のためにす (一七) 仁義を假りて惡をなす (一八) 車馬の美觀

得レ見。今臣之知不レ足二以存一レ國。而勇不レ足二以死一レ寇。吳軍入レ郢。說畏レ難而避レ寇。非三故隨二大王一也。今大王欲下廢レ法毀レ約而見上レ說。此非四臣之所三以聞二天下一也。王謂二司馬子綦一曰。屠羊說居處卑賤。而陳レ義甚高。子綦爲レ我延レ之以二三旌之位一。屠羊說曰。夫三旌之位吾知三其貴二於屠羊之肆一也。萬鍾之祿。吾知三其富二於屠羊之利一也。然豈可下以レ貪二爵祿一而使丙吾君有乙妄施之名甲乎。說不二敢當一。願復反二吾屠羊之肆一。遂不レ受也。

ず。願はくは復た吾が屠羊の肆に反らんと。遂に受けず。

㈠ 羊を屠殺する役の說と云ふもの ㈡ 昭王國を失へば自分も其の業とする屠羊の職に離る ㈢ 使者に命じて強ひしむ ㈣ 王が國を失ふも國に反るも屠羊者として功罪の關する所なし ㈤ 直接に面會せん ㈥ 敵と鬪つて死するほどの勇無し ㈦ 楚の都 ㈧ 法規を無視して延見せんとす ㈨ 天下の人に知らしむべきことに非ず ㈩ 司馬は官名 ⑪ 身分卑しけれど義を陳ぶること甚だ高尚 ⑫ 三公の位。三公の車服各旌別ある故に云ふ一說に三珪となす諸侯の三卿皆珪を執るを以てなり ⑬ 一鍾は六斛四斗 ⑭ 吾が爵位俸祿を貪るが爲めにわが君妄に祿位を施與するの評を立つべからず

原憲居レ魯。環堵之室。茨以二生草一。蓬戶不レ完。桑以爲レ樞。而甕牖二室。

(一)原憲、魯に居る。(二)環堵の室、茨くに生草を以てす。(三)蓬戶完からず、桑以て(四)樞と爲し、而して(五)甕牖の二室、(六)褐以て塞ぐことを爲す。上漏り、下濕ふ。(七)匡坐して弦す。子貢、大馬に乘り、(八)中紺にして表素なり。(九)軒車巷に容らず。往いて原憲

王反レ國。將レ賞二從者一。及二屠羊説一。屠羊説曰。大王失レ國。説失二屠羊一。大王反レ國。説亦反レ屠羊一。臣之爵祿已復矣。又何賞之言。王曰強レ之。屠羊説曰。大王失レ國。非二臣之罪一。故不三敢伏二其誅一。大王反レ國。非二臣之功一。故不三敢當二其賞一。王曰見レ之。屠羊説曰。楚國之法。必有二重賞大功一而後

國に反れば說も亦屠羊に反る。臣の爵祿已に復す。又何の賞をか之れ言はんと。王曰く、之を強ひよと。屠羊說曰く、大王國を失ふ、臣の罪にあらず、故に敢へて其の誅に伏せず。大王、國に反る、臣の功にあらず、故に敢へて其の賞に當らずと。王曰く、之を見んと。屠羊說曰く、楚國の法、必ず重賞大功あつて而る後見ゆることを得。今、臣の知、以て國を存するに足らず、而して勇、以て寇に死するに足らず。吳軍、郢に入りしとき、說、難を畏れて寇を避けしのみ。故に大王に隨ひしにあらざるなり。今大王、法を廢し約を毀りて說を見んと欲す。此れ臣の、天下に聞ゆる所以に非ざるなりと。王、司馬子綦に謂つて曰く、屠羊說、居處卑賤にして、義を陳ぶること甚だ高し。子綦、我が爲に之を延くに三旌の位を以てせよと。屠羊說曰く、夫れ三旌の位は、吾れ其の屠羊の肆より貴きを知れり、萬鍾の祿は、吾れ其の屠羊の利より富むを知れり。然れども豈に爵祿を貪るを以て、而して吾が君をして妄施の名あらしむべけんや。說敢へて當ら

之士也。居二君之國一而窮。君無二乃爲レ不レ好レ士乎。鄭子陽卽令三官遺二之粟一。子列子見二使者一再拜而辭。使者去。子列子入。其妻望レ之而拊レ心曰。妾聞爲二有道者之妻子一。皆得二佚樂一。今有二飢色一。君過而遺二先生食一。先生不レ受。豈不レ命邪。子列子笑謂レ之曰。君非二自知レ我也。以二人之言一而遺二我粟一。至二其罪レ我也。又且レ以二人之言一。此吾所二以不レ受也。其卒民果作レ難而殺二子陽一。

使者去る。子列子入る。其の妻之を望んで心を拊つて曰く、(二)妾聞く、有道者の妻(三)子たれば、皆佚樂を得と。今飢色あり、君、(四)過てりとして先生に食を遺る。先生受けず。豈命ならずやと。子列子笑つて之に謂つて曰く、(五)君自ら我を知るにあらざるなり。人の言を以てして我に粟を遺れり。其の我を罪するに至るや、又且に人の言を以てせんとす。此れ吾が受けざる所以なりと。其の卒り(六)に民果して難を作して子陽を殺せり。

(一)鄭の宰相 (二)嗟歎するなり (三)有道者の妻子となれば皆佚樂するを得 (四)子陽自ら過てりと思ひて先生に食を遺る (五)子陽自ら列子を知れるに非ず (六)其の後に至り鄭人反くものありて子陽を殺せり

楚昭王失レ國。屠羊説走而從二於昭王一。昭

楚の昭王、國を失ふ。屠羊説、(一)走つて昭王に從ふ。昭王國に反り、將に從ふ者を賞せんとし、屠羊説に及ぶ。屠羊説曰く、(二)大王國を失へば、說屠羊を失ひ、大王

不レ得レ已。故若二顏闔一者。眞惡二富貴一也。故曰。道之眞以治レ身。其緒餘以爲二國家一。其土苴以治二天下一。由レ此觀レ之。帝王之功。聖人之餘事也。非三所二以完レ身養一レ生也。今世俗之君子。多危レ身棄レ生以殉レ物。豈不レ悲哉。凡聖人之動作也。必察下其所二以之一。與中其所上レ以爲。今且有二人於此一。以二隨侯之珠一。彈二千仞之雀一。世必笑レ之。是何也。則其所レ用者重。而所レ要者輕也。夫生者豈特隨侯之重哉。

ん。是れ何ぞや。則ち其の用ふる所の者重くして、要むる所の者輕ければなり。夫れ生なるものは豈に特隨侯の重きのみならんや。(一四)

(一)魯の賢公 (二)魯の陋巷 (三)使者を遣し贈物を以て先づ之を聘へしむ (四)むさくるしき陋巷に住む (五)粗布の衣を着る (六)恐らくは君命を承るもの、誤りて人まちがひなせしならん若し之を受けば使者冠冕の罪をのこさん (七)まちがひなきや確かるがよろし (八)既に遁れて在らず (九)糸屑なり身を治むるの餘力をいふ (一〇)糞と草。或は曰く糟粕。 (一一)天下國家を治むるの事業は聖人の身を治めし上の餘事 (一二)其の目的とする所と其れを爲す方法とを研究す (一三)濁水より寶珠を出し隨侯之を寶とす (一四)生の重きこと比すべきものなし

子列子窮。容貌有二飢色一。客有下言二之於鄭子陽一者上曰。列禦寇蓋有道

子列子窮す、容貌飢色あり。客の之を鄭の子陽に言ふものあり。曰く、列禦寇は蓋し有道の士なり。君の國に居つて窮す。君乃ち士を好まずとせらるゝ無からんやと。鄭の子陽即ち官をして之に粟を遺らしむ。子列子使者を見、再拜して辭す。

不レ得也。僖侯曰。善哉。教二寡人一者衆矣。未三嘗得二聞此言一也。子華子可レ謂レ知二輕重一矣。

魯君聞二顏闔得レ道之人也一。使二人以レ幣先一焉。顏闔守二陋閭一。苴布之衣。而自飯レ牛。魯君之使者至。顏闔自對レ之。使者曰。此顏闔之家與。顏闔對曰。此闔之家也。使者致レ幣。顏闔對曰。恐聽者謬而遺二使者罪一。不レ若レ審レ之。使者還反審レ之。復來求レ之。則

魯君(一)、顏闔(二)の道を得るの人(三)たるを聞き、人をして幣を以て先んぜしむ。顏闔、陋(四)閭を守り、苴布(五)の衣にして自ら牛に飯す。魯君の使者至る、顏闔自ら之に對す。使者曰く、此れ顏闔の家かと。顏闔對へて曰く、此れ闔の家なりと。使者幣を致す。顏闔對へて曰く、恐らく(六)は聽く者の謬つて、使者の罪を遺さんことを。之を審(七)にせんには若かずと。使者還り反つて之を審にし、復た來つて之を求むれば、則ち得ざるのみ。故に顏闔の若きものは、眞に富貴を惡むなり。故に曰く、道の眞(八)、以て身を治め、其の緒餘(九)以て國家を爲め、其の土苴(一〇)以て天下を治むと。此に由つて之を觀れば、帝王(一一)の功は、聖人の餘事なり、身を完うし生を養ふ所以に非ざるなり。今、世俗の君子、多く身を危うし生を棄てゝ以て物に殉ふ。豈に悲しからざらんや。凡そ聖人の動作は、必ず其の之く所以と、其の爲す所以とを察す。今且此に人あり、隨侯(一三)の珠を以て、千仞(一二)の雀を彈かば、世必ず之を笑は

韓魏相與爭二侵地一。子華子見二昭僖侯一。昭僖侯有二憂色一。子華子曰。今使三天下書二銘於君之前一。書之言曰。左手攫レ之。則右手廢。右手攫レ之。則左手廢。然而攫レ之者。必有二天下一。君能攫レ之乎。昭僖侯曰寡人不レ攫也。子華子曰。甚善。自レ是觀レ之。兩臂重二於天下一也。身亦重二於兩臂一。韓之輕二於天下一亦遠矣。今之所レ爭者。其輕二於韓一又遠。君固愁レ身傷レ生。以憂二戚

韓魏、相與に侵地を爭ふ。子華子(一)、昭僖侯(二)に見ゆ。昭僖侯憂色あり。子華子曰く、今、天下をして銘(三)を君の前に書せしめん。書の言に曰く、左手之を攫めば則ち右手廢し、右手之を攫めば則ち左手廢せん(四)、然かも之を攫むものは、必ず天下を有たんと。君能く之を攫まんやと。昭僖侯曰く、寡人攫まざるなり。子華子曰く、甚だ善し。是によつて之を觀れば、兩臂は天下より重きなり、身亦兩臂より重し。韓の天下より輕きこと亦遠し。今の爭ふ所のものは、其れ韓より輕きこと又遠し。君、固に身を愁へ、生を傷りて、以て得ざるを憂戚するや(六)。昭僖侯曰く、善いかな、寡人に敎ふるもの衆し。未だ嘗て此の言を聞くことを得ざりしなりと。子華子は輕重を知ると謂ふべし。

(一) 魏の人 (二) 韓の君 (三) 契約書 (四) 左手にて之を攫むときは右手利かなくなる (五) 二手は天下より重しとの意 (六) 小さき地を爭ひて之を得ざるを憂ひたまふか

爲二吾臣一。與レ爲二狄人臣一奚以異。且吾聞レ之。不下以二所レ用養一害上レ所レ養。因杖レ筴而去レ之。民相連而從レ之。遂成二國於岐山之下一。夫大王亶父。可レ謂二能尊レ生者一。雖二貴富一不二以レ養傷レ身。雖二貧賤一不二以レ利累レ形。今世之人居二高官尊爵一者。皆重レ失レ之。見レ利輕亡二其身一。豈不レ惑哉。越人三世弑二其君一。王子搜患レ之。逃二乎丹穴一。而越國無レ君。求二王子搜一不レ得。從二之丹穴一。王子搜不レ肯レ出。越人薰レ之以レ艾。乘以二王輿一。王子搜援レ綏登レ車。仰レ天而呼曰。君乎君乎。獨不レ可二以舍一レ我乎。王子搜非レ惡レ爲レ君也。惡二爲レ君之患一也。若二王子搜一者。可レ謂レ不下以レ國傷上レ生矣。此固越人之所レ欲二得爲一レ君也。

輕々しく其の身を亡ふ。豈に惑はずや。越人、三世其の君を弑す。王子搜之を患へ、丹穴(六)に逃れて、越國、君なし。王子搜を求むれども得ず、之に丹穴に從ふ。王子搜出づるを肯んぜず。越人之を薰するに艾(七)を以てし、乘するに王輿を以てす。王子搜綏(八)を援りて車に登り、天を仰いで呼んで曰く、君か君か、(九)獨り以て我を舍つべからざるかと。王子搜は君たるを惡むに非ざるなり。君たるの患を惡むなり。王子搜の若きものは、國を以て生を傷らずと謂ふべし。此れ固より越人の得て君とするを欲する所なり。

(一) 王季の父文王の祖　(二) 狄人と爭ふ時は其の民の子弟を殺さん　(三) 民を養ふ所以の土地を以て民を害せむ　(四) 馬鞭　(五) 身を奉養する衣食住に溺れて身を傷らず　(六) 南山の洞　(七) モグサにてイブシ出す　(八) 車上の綏　(九) 我亦終に君たらざるを得ざるか

之中。冬日衣皮毛。夏日衣葛絺。春耕種。形足以勞動。秋收斂。身足以休食。日出而作。日入而息。逍遙於天地之間。而心意自得。吾何以天下爲哉。悲夫子之不知余也。遂不受。於是去而入深山。莫知其處。舜以天下讓其友石戶之農。石戶之農曰。捲捲乎后之爲人。葆力之士也。以舜之德爲未至也。於是夫負妻戴。攜子以入於海。終身不反也。

大王亶父居邠。狄人攻之。事之以皮帛而不受。事之以犬馬而不受。事之以珠玉而不受。狄人之所求者土地也。大王亶父曰。與人之兄居而殺其弟。與人之父居而殺其子。吾不忍也。子皆勉居矣。

大王亶父、邠に居る。狄人之を攻む。之に事ふるに皮帛を以てすれども受けず、之に事ふるに犬馬を以てすれども受けず、之に事ふるに珠玉を以てすれども受けず。狄人の求むる所のものは土地なり。大王亶父曰く、人の兄と與に居て其の弟を殺し、人の父と與に居て其の子を殺すは、吾れ忍びざるなり。子皆勉めて居れ、吾が臣たると、狄人の臣たると、奚を以て異ならん。且吾れ之を聞く、用つて養ふ所を以て、養ふ所を害せずと。因て筴を杖いて之を去る。民相連れて之に従ひ遂に國を岐山の下に成せり。夫れ大王亶父は能く生を尊ぶと謂ふべし。能く生を尊ぶものは、貴富と雖も養を以て身を傷らず、貧賤と雖も利を以て形を累さず。今、世の人、高官尊爵に居るもの、皆之を失ふことを重かり、利を見ては

也。夫天下至重也。而不三以害二其生一。又況他物乎。唯無下以二天下一爲上者。可三以託二天下一也。舜讓二天下於子州支伯一。子州支伯曰。予適有二幽憂之病一。方且レ治レ之。未レ暇レ治二天下一也。故天下大器也。而不二以易一レ生。此有道者之所三以異二乎俗一者也。舜以二天下一讓二善卷一。善卷曰。余立二於宇宙

と。故に天下は大器なり、而かも以て生に易へず、此れ有道者の俗に異なる所以の者なり。舜天下を以て善卷(六)に讓る。善卷曰く、余、(七)宇宙の中に立ち、冬日は皮毛を衣、夏日は葛絺(八)を衣る。春は耕種して、形以て勞動するに足り、秋は收斂し(九)て、身以て休食するに足る。(一〇)日出でて作し、日入つて息ひ、天地の間に逍遙して、(一一)心意自得す。吾れ何ぞ天下を以て爲さんや。悲しいかな、子の余を知らざるやと。遂に受けず。是に於て去つて深山に入り、其の處を知ることなし。舜天下を以て其の友石戸の農(一二)に讓る。石戸の農曰く、捲捲乎(一三)たり、后の人たる、葆力の士(一四)なりと。舜の德を以て未だ至らずと爲すなり。是に於て夫負妻戴、(一五)子を攜へて以て海に入り、終身反へらざるなり。

(一) 此の篇天下を讓ることを記し道を守るものは生を重んずる所以を述ぶ。以下四篇は莊子の筆に非ずといへり (二) 前に出づ (三) 子は姓、州は名支父は字隱者なり (四) 閑靜なるを得ざるを憂ふる病 (五) 天下を以て爲す所無く之を忘るゝものゝみ以て天下を託して可なり (六) 隱者の名 (七) 天地の間に立つ (八) 帷子 (九) 穀を收穫す (一〇) 日出でゝゆつくり仕事にとりかゝる (一一) 天地の間に心を遊ばせて滿足す (一二) 石戸といへる地の農夫 (一三) 勤勞の貌 (一四) 力を居ひて勉強する人 (一五) 夫は荷物を負ひ妻は頭にのす

若レ辱。盛徳若レ不レ足。陽子居蹵然變レ容曰。敬聞レ命矣。其往也舍者迎將。其家公執レ席。妻執二巾櫛一。舍者避レ席。煬者避レ竈。其反也舍者與レ之爭レ席矣。

（一）主は手ずから席を執り舍者は席を避けて迎へ煬者は竈の前より逃げ出して畏れはゞかる　（二）老子に教へられて反り來るや矜驕の氣去りて人之に狎しむに至る

讓（一）王

堯以二天下一讓二許由一。許由不レ受。又讓二於子州支父一。子州支父曰。以レ我爲二天子一。猶之可也。雖レ然。我適有二幽憂之病一。方且レ治レ之。未レ暇レ治二天下一。

堯（二）、天下を以て許由に讓る。許由受けず。又（三）子州支父に讓る。子州支父曰く、我を以て天子と爲す、猶ほ之れ可なり。然りと雖も、我れ適〻（四）幽憂の病あり、方に且に之を治めんとす。未だ天下を治むるに暇あらざるなりと。夫れ天下は至重なり、而かも以て其の生を害せず、又況や他物をや。（五）唯〻天下を以て爲す無きもの以て天下を託すべきなり。舜、天下を子州支伯に讓る。子州支伯曰く、予適〻幽憂の病あり、方に且に之を治めんとす、未だ天下を治むるに暇あらざるなり

陽子居南之沛。老聃西遊於秦。邀於郊。至於梁而遇老子。老子中道仰天而歎曰。始以汝爲可敎。今不可也。陽子居不答。至舍進盥漱巾櫛。脱屨戸外。膝行而前曰。向者弟子欲請夫子。夫子行不間。是以不敢。今間矣。請問其故。老子曰。而睢睢盱盱。而誰與居。大白

(一)陽子居、南、沛に之く。老聃、西、秦に遊ぶ。(二)郊に邀へ、梁に至つて、老子に遇ふ。老子中道にして天を仰いで歎じて曰く、始め汝を以て敎ふべしと爲す、今や不可なりと。陽子居答へず。(三)舍に至り、(四)盥漱巾櫛を進め、屨を戸外に脱ぎ、膝行して前んで曰く、向には弟子、(五)夫子に請はんと欲す。夫子行いて間あらず、是を以て敢へてせず。今、間あり、其の故を請ひ問ふと。老子曰く、而、(六)睢睢盱盱たり。(七)而、誰と與にか居らんや。(八)大白は辱れたるが若く、盛德は足らざるが若しと。陽子居(九)蹵然として容を變じて曰く、敬で命を聞けりと。(一〇)其の往くや、舍者迎將し、其の家公席を執り、妻、巾櫛を執り、舍者、席を避け、煬者竈を避けしに、(一一)其の反るや、舍者之と與に席を爭へり。

(一) 陽は姓、子居は字、名は朱といふ (二) 老子を城外の地に出迎へ梁に至つて老子に遇ふ (三) 旅舍 (四) 手洗漱ぐ器や手拭櫛を呈す恭敬の意を表すなり (五) 先生は御旅行中にて暇なりき (六) 目を仰ぎ張る貌にて驕慢なるなり (七) 人汝を畏れ憚りて共に處るものなからん (八) 甚だ潔白なるものは却つて汚はしきが如く盛大なる德は謙抑にして足らざるが如し (九) 驚懼の貌 (一〇) 子居の最に往きし時は旅舍のコモノが出迎へ其の主人は敷物を

景曰。若向也俯而今也仰。向也括而今也被髮。向也坐而今也起。向也行而今也止。何也。景曰叟叟也。奚稍問也。予有而不知其所以。予蜩甲也。蛇蛻也。似之而非也。火與日吾屯也。陰與夜吾代也。彼吾所以有待邪。而況乎以有待者乎。彼來則我與之來。彼往則我與之往。彼強陽則我與之強陽。強陽者又何以有問乎。

髪し、向には坐して今や起ち、向には行きて今や止まるは何ぞやと。景曰く、叟(四)叟や、奚ぞ(五)稍問するや、予(六)有れども其の所以を知らず。予れ蜩甲(七)なり、蛇蛻(八)なり、之に(九)似て非なり。火(一〇)と日とには吾れ屯まり、陰と夜とには吾れ代はる、彼(一一)と吾と待つ有る所以か、而る(一二)を況んや待つ有るを以てする者をや。彼れ来れば則ち我れ之と與に来り、彼れ往けば則ち我れ之と與に往き、彼れ強陽(一三)すれば則ち我れ之と與に強陽(一四)す。強陽するものは又何を以てか問ふことあらんやと。

(一) 陰影の縁にあるうすき影　(二) 陰影　(三) さきに髪を結びしに今は乱髪なり　(四) 衆罔両を斥していふ　(五) うるさく問ふ　(六) 予は有れども形に随ふのみにして其の所以を知らず　(七) 蟬の脱殻　(八) 蛇の脱殻　(九) 脱殻は肉形あれども影には形なし　(一〇) 火と大陽とには吾出現して姿をあらはし陰と夜とには吾隠る　(一一) 形を斥す　(一二) 形影は無心にして待てども待つに意ありて物と拘るものに於ては固更存ならざる所あり　(一三) 鼓動す　(一四) 形に随うて鼓動するものに何を以てか其の然る所以を問ふことあるべき

入。七年而天成。八年而不レ知レ死不レ知レ生。九年而大妙。生有レ爲。死也勸公。以二其死一也。有レ自也。而生陽也。無レ自也。而果然乎。惡乎其所レ適。惡乎其所レ不レ適。天有二歷數一。地有二人據一。吾惡乎求レ之。莫レ知二其所レ終。若レ之何其無レ命也。莫レ知二其所レ始。若レ之何其有レ命也。有二以相應一也。若レ之何其無レ鬼邪。無二以相應一也。若レ之何其有レ鬼邪。

る。天に歷數(一二)有り、地に人據(一三)有り、吾れ惡にか之を求めん。其の終(一四)る所を知る莫し、之を若何ぞ其れ命無からんや。其の始まる所を知る莫し、之を若何ぞ其れ命あらんや。以て相應(一五)ずること有るなり。之を若何ぞ其れ鬼なからんや、以て相應(一六)ずることなきなり。之を若何ぞ其れ鬼あらんやと。

(一) 東郭子綦の弟子 (二) 一年を經て心氣樸となる (三) 我執なくして異を立てず (四) 差別の見なくして彼此を通じて一 (五) 頑然として無知の如し (六) 心定まりて天和來らんとす (七) 鬼神來り舍る (八) 天と德を合す (九) 未だ始めより始めあらざる大悟 (一〇) 公は同なり。同じきに勸め歸するが如し (一一) 死は有形より無形に適くが故に由る所あるが如しと雖も生は率然として其の始めを見る可らず (一二) 天に日月星辰の運行あり (一三) 耳目聞見の及ぶ所のもの (一四) 死の終る所を知らざるよりして見れば命あるが如しと雖も生の始まる所を知らざるよりして見れば命なきが如し (一五) 善に禍し惡に福して應報存するあるを以て見れば鬼神存するが如し (一六) 善惡の應報完からざる所あるより見れば鬼神なし

衆罔兩問二於

衆罔兩(一)、景(二)に問うて曰く、若、向(三)には俯して今や仰ぎ、向には括にして今や被

而心樂。後仕三千鍾不レ洎。吾心悲。弟子問二于仲尼一曰。若レ參者。可レ謂レ無レ所レ縣二其罪一乎。曰既已縣矣。夫無レ所レ縣者。可二以有一レ哀乎。彼視二三釜三千鍾一。如二觀雀蚊虻相二過乎前一也。

若きものは、（六）其の罪を縣くる所なしと謂ふべきかと。曰く、既に已に（七）縣かれり。夫れ縣かる所なきものは、以て哀しみあるべけんや、彼れ三釜三千鍾を視ること（八）觀雀蚊虻の前に相過ぐるが如くならんのみ。

（一）心再び變化をなす　（二）親の生存の時に仕ふ　（三）祿少けれど心樂しむ、一釜は六斗四升　（四）一鍾は六斛四斗　（五）曾參の名　（六）祿の多少によつて心を左右せられずして其の心を係累せられず　（七）累係せらる、　（八）縣かる所なくば小鳥や虫ケラが眼を通り過ぐる如く心冷々として關知することなきを譬ふ。觀一に鶴に作る

顏成子游謂二東郭子綦一曰。自三吾聞二子之言一。一年而野。二年而從。三年而通。四年而物。五年而來。六年而鬼

（一）顏成子遊、東郭子綦に謂つて曰く、吾れ子の言を聞きしより、（二）一年にして野、二年にして從、（三）三年にして通、四年にして（四）物、五年にして（五）來、六年にして（六）鬼入、（七）七年にして（八）天成、八年にして死を知らず、生を知らず、九年にして大妙なり。（九）生は爲すことあり、（一〇）死や勸公、（一一）其の死を以てや自ること有りとして、生陽や自ること無しとする、果して然るか。惡にか其の適く所なる、惡にか其の適かざる所な

知今之所ㇾ謂是之非ニ五十九非一也。惠子曰。孔子勤ㇾ志服ㇾ知也。莊子曰。孔子謝ㇾ之矣。而其未ニ之嘗言一。孔子云。夫受ニ才乎大本一。復ㇾ靈以生。鳴而當ㇾ律。言而當ㇾ法。利義陳ニ乎前一。而好惡是非。直服ニ人之口ニ而已矣。使ニ人乃以ㇾ心服。而不ニ敢蘁立一。定ニ天下之定一。已乎已乎。吾且不ㇾ得ㇾ及ㇾ彼乎。

謝せり。而して其れ未だ之れを嘗て言はずと。孔子の云ふ、夫れ才(四)を大本に受け、靈に復つて以て生くれば、鳴(五)いて律に當り、言つて法に當ると。利義前に陳ねて而して好惡是非するは、直ゝ人の口(六)を服するのみ。人をして乃ち心を以て服して敢へて蘁立(七)せざらしめて、天下の定を定む。已みなんか(八)已みなんか、吾れ且た彼に及ぶことを得ざらんかと。

(一)解前に出づ　(二)學を勤め知を研くに從事す　(三)志と和とを謝去す　(四)才智を大初無無の境より受く　(五)動作周旋凡て自然の調と則とに合致す　(六)舌の上にて人を服せしむるのみ　(七)忤逆對立せざらしむる時は天下一に定まる　(八)已みなん已みなん吾は孔子に及ばじとなり

曾子再仕而心再化。曰吾及ㇾ親仕。三釜

曾子再び仕へて心再び化(一)す。曰く、吾れ親(二)に及んで仕ふ。三(三)釜にして心樂しむ。後仕へて三(四)千鍾なるも、洎ばず、吾が心悲しむと。弟子仲尼に問うて曰く、參(五)が

無レ言。終身言未二嘗言一。終身不レ言。未二嘗不一レ言。有レ自也而可。有レ自也而不可。有レ自也而然。有レ自也而不レ然。惡乎然。然二於然一。惡乎不レ然。不レ然二於不一レ然。惡乎可。可二於可一。惡乎不レ可。不レ可二於不一レ可。物固有レ所レ然。物固有レ所レ可。無二物不一レ然。無二物不一レ可。非二卮言日出。和以二天倪一。孰得二其久一。萬物皆種也。以二不同形一相禪。始卒若レ環。莫レ得二其倫一。是謂二天均一。天均者天倪也。

(一) 此の日は是非をおりて自ら化する所以を説き莊子立言の實趣を述べ以て讀者をして通達する所を知らしむ　(二) 此の書の體裁寓言は十中九を占む　(三) 人に重んぜらるゝ故人の言を引けるは十中七　(四) 臨機應變の言は日に出でゝ窮まらず　(五) 以上の三言を和するに自然の分を以てし是非を均しうす天倪の解釋に任り　(六) 先人の言によりて是非の紛爭を止むるもの　(七) 長老を重んずるため　(八) 年長ずるも胸中に常理本末の綱維なくして年長を恃みとするものは眞の先覺に非ず　(九) 陳腐の人　(一〇) 終所自得　(一一) 天籟を聞め歸上る所以　(一二) 言はゞ是非に陥る故に言はざる時は言議齊し　(一三) 是非を爭はず同異を論ぜず是非を言つて言上なきもの　(一四) 世の可不可然不然の基づく所は自然に由りて然るのみ　(一五) 我の可不可然不然に拘泥することなく唯自然のまゝによる　(一六) 萬物は皆種に分れ形を異にするを以て互に變化流轉す　(一七) 始と終と循環の如く其の端を得へ難し　(一八) 天理の公平

莊子謂二惠子一曰。孔子行年六十而六十化。始時所レ是。卒而非レ之。未レ

莊子、惠子に謂つて曰く、孔子、(一)行年六十にして、六十化す。始めの時是とする所、卒にして之を非とす。未だ知らず今の所謂是の五十九の非に非ざることを。惠子曰く、孔子は(二)志を勵め、知に服するなりと。莊子曰く、孔子は(三)之を

反。同二於己一爲レ是レ之。異二於己一爲レ非レ之。重言十七。所二以已一レ言也。是爲二耆艾一。年先矣。而無二經緯本末一。以期二年耆一者。是非レ先也。人而無二以先一レ人。無二人道一也。人而無二人道一。是之謂二陳人一。巵言日出。和以二天倪一。因以二曼衍一。所二以窮一レ年。不レ言則齊。齊與レ言不レ齊。言與レ齊不レ齊也。故曰無レ言。言

きは、人の道なきなり。人にして人の道なき、是を之れ陳人と謂ふ。(九)巵言は日に出づ、和するに天倪を以てし、因るに曼衍を以てするは、(一〇)年を窮むる(一一)所以。(一二)言はざれば則ち齊し。齊しくすると言ふとは、齊しからず。言ふと、齊しきとは齊しからざるなり。故に曰く、言ふなしと。(一三)言つて言ふなければ、終身言ふも、未だ嘗て言はず。終身言はざるも、未だ嘗て言はずんばあらず。(一四)自ること有つて可。自ること有つて不可、自ること有つて然り、自ること有つて然らず。(一五)惡にか然る。然るを然りとす。惡にか然らざる、然らざるを然らずとす。惡にか可なる、可なるを可なりとす。惡にか可ならざる、可ならざるを可ならずとす。物固より然る所有り。物固より可なる所有り、物として然らざるはなく、物として可ならざるは無し、巵言の日に出で、和するに天倪を以てするに非ざれば、孰れか其の久しきを得ん。(一六)萬物皆種なり、形を同じくせざるを以て相禪る。(一七)始卒環の若く、其の倫を得る莫し、是を天均と謂ふ。(一八)天均なるものは、天倪なり。

魚。得ㇾ魚而忘ㇾ筌。蹄者所ニ以在ㇾ兎。得ㇾ兎而忘ㇾ蹄。言者所ニ以在ㇾ意。得ㇾ意而忘ㇾ言。吾安得ニ夫忘ㇾ言之人一而與ㇾ之言哉。

言は意に在る所以、意を得て言を忘る。吾れ安にか夫の忘言の人を得て、之と與に言はんや」と。

(一) 竹にて作りし魚取 (二) 兎を捕ふる器具 (三) 言は意を達するの用をなすもの

寓言（一）

寓言十九、重言十七。巵言日出、和以ニ天倪一。寓言十九、藉ㇾ外論ㇾ之。親父不下爲ニ其子一媒上。親父譽ㇾ之、不ㇾ若下非ニ其父一者上也。非ニ吾罪一也。人之罪也。與ㇾ己同則應。不ㇾ與ㇾ己同則

寓言(二)は十に九、重言(三)は十に七、巵言(四)は日に出で、和するに天倪(五)を以てす。寓言十に九は、外を藉りて之を論ずるなり、親父其の子の爲めに媒せざるは、親父の之を譽むるは、其の父に非ざる者に若かざればなり、吾が罪に非ざるなり、人の罪なり。己と同じければ則ち應じ、己と同じからざれば則ち反し、己に同じきは之を是と爲し、己に異なるは之を非と爲せばなり。重言十に七は、(六)言を已むる所以なり。是れ耆艾(七)の爲めなり。年先んずるも、而かも經緯本末なくして、以て年耆(八)を期するものは、是れ先んずるに非ざるなり。人にして以て人に先んずることな

焉。聖人之所三以駴二天下一。神人未二嘗過而問一焉。賢人所二以駴レ世。聖人未二嘗過而問一焉。君子所二以駴レ國。賢人未二嘗過而問一焉。小人所二以合レ時。君子未二嘗過而問一焉。

病を補ひ振ふべく情欲を滅除すれば老境自ら寧靜 (八) 寧靜ならば以て心の促急を止め得べし (九) 作爲するものの務むべきこと (一〇) 無爲玄默游逸するもののなすべき所に非ず (一一) 佚者は自適自得するが故に作爲の境を過ぎて問ふことなく之に超越す (一二) 聖人の仁義を以て天下を驚かす所以は神人は之を事とせず

演門有二親死一者一。以二善毀一爵爲二官師一。其黨人毀而死者半。堯與二許由天下一。許由逃レ之。湯與二務光一。務光怒レ之。紀他聞レ之。帥二弟子一而踆二於窾水一。諸侯弔レ之三年。申徒狄因以踣レ河。

演門(一)に親死するものあり。善く毀せたるを以て(二)、爵せられて官師と爲る。其の黨(三)人の毀せて死するもの半。(四)堯、許由に天下を與へて、許由之を逃る。湯務光に與へて、務光之を怒る。紀他、之を聞き、弟子を帥ゐて窾水(五)に踆る。諸侯之を弔すること三年。申徒狄(六)因て以て河に踣る。

(一) 宋の城門と云ふ (二) 親の死を悲しんで痩せたるを以て官吏に任ぜらる (三) 其の郷黨之を學んで死するもの半す (四) 前に出づ (五) 川の名 (六) 紀他の高名を聞きて之にならひ河中に倒る

筌者所二以在レ

(一)筌は魚に在る所以、魚を得て筌を忘る。(二)蹄は兎に在る所以、兎を得て蹄を忘る。

姑勃谿。心無二天遊一、則六鑿相攘。大林丘山之善二於人一也、神者不レ勝。

德溢二乎名一、名溢二乎暴一、謀稽二乎誸一、知出二乎爭一、柴生二乎守一、官事果二乎衆宜一。春雨日時。草木怒生。銚鎒於レ是乎始修。草木之到植者過レ半、而不レ知二其然一。靜然可二以補一レ病。眥㩜可二以休一レ老、寧可二以止一レ遽。雖レ然、若レ是勞者之務也、非二佚者之所一。未二嘗過而問一

（一）德は名に溢れ、（二）名は暴に溢れ、（三）謀は誸に稽へ、知は爭に出で、（四）柴は守に生ず。（五）官事は衆宜に果る。（六）春雨の日時、草木怒生す。（七）銚鎒是に於てか始めて修む。草木の到植するもの半に過ぎて、而して其の然るを知らず。（八）靜然は以て病を補ふべく、眥㩜は以て老を休すべく、寧は以て遽を止むべし。然りと雖も、是の若きは（九）勞者の務なり。（一〇）佚者の所にあらず。（一一）未だ嘗て過ぎて問はず、（一二）聖人の天下を駭かす所以、神人は未だ嘗て過ぎて問はず。賢人の世を駭かす所以、聖人は未だ嘗て過ぎて問はず、君子の國を駭かす所以、賢人は未だ嘗て過ぎて問はず、小人の時に合ふ所以、君子は未だ嘗て過ぎて問はず。

（一）德の分に過ぎて盛美なるは名を求むるによる（二）名の暴に顯著なるは行の暴戻たるによる（三）謀略の以て出づるは爭の盛なるによる（四）塞がりて蔽とするは固執保守するによる（五）官府の事は多數の便利によつて決するものにて必ずしも道に依らず（六）時雨降る時草木盛に生育す（七）始めて鋤を以て耕耘することをなせども此の時草木の更生するもの過半にして耕耘の勞を俟たざれど人は其の然るを知らず（八）心身を安靜にすれば以て

爲二君臣一時也。易レ世而無二以相賤一。故曰二至人不レ留レ行焉。夫尊レ古而卑レ今。學者之流也。且以二狶韋氏之流一。觀二今之世一。夫孰能不レ波。唯至人乃能遊二於世一而不レ僻。順レ人而不レ失レ己。彼教不レ學。承レ意不レ彼。

目徹爲レ明。耳徹爲レ聽。鼻徹爲レ顫。口徹爲レ甘。心徹爲レ知。知徹爲レ德。凡道不レ欲レ壅。壅則哽。哽而不レ止則跈。跈則衆害生。物之有レ知者恃レ息。其不レ殷非二天之罪一。天之穿レ之。日夜無レ降。人則顧塞二其竇一。胞有二重閬一。心有二天遊一。室無二空虛一。則婦

目の徹るを明と爲し、耳の徹るを聰と爲し、鼻の徹るを顫と爲し、口の徹るを甘と爲し、心の徹るを知と爲し、知の徹るを德と爲す。凡そ道は壅がることを欲せず。壅がれば則ち哽す、(一)哽して止まざれば則ち跈す、(二)跈すれば則ち衆害生ず。物の知あるものは息を恃めばなり。(三)其の殷ならざるは天の罪にあらず、(四)天の之を穿つ、日夜降むことなし。(五)人則ち顧つて其の竇を塞ぐ。(六)胞に重閬あり、心に天游あり、(七)室に空虛なければ、則ち婦姑勃谿す。(八)心に天游なければ、則ち六鑿相攘ふ。(九)大林丘山の人に善きや、神なるもの勝へざればなり。(一〇)

(一) 哽咽して通ぜず (二) 足の病を得てモガキ苦しむ (三) 物の知ありて生くるものは呼吸の通ずるを恃みとするが故なり (四) 吸呼の盛ならざるは天の罪に非ず (五) 呼吸の日夜休むことなきが自然 (六) 自然によれば穴は通ぜざることなきに人是非の私見に迷ひて穴を塞ぎ苦しむ (七) 肺に空虛の地ありて呼吸通じ心に虛ありて自然に遊ぶ (八) 姑と嫁の如く爭ひ怒る (九) 耳目鼻口等の欲感相爭ふ (一〇) 人よく深山林丘に隱遁するを善しとするは其の心六欲相戰ふ煩にたへざればなり

非不廣且大一也。人之所用容足耳。然則廁足而墊之致黃泉。人尙有用乎。惠子曰無用。莊子曰。然則無用之爲用也亦明矣。莊子曰。人有能遊。且得不遊乎。人而不能遊。且得遊乎。夫流遁之志。決絕之行。噫其非至知厚德之任與。覆墜而不反。火馳而不顧。雖相與

人尙は用ふるありやと。惠子曰く、用ふるなしと。莊子曰く、然らば則ち無用の用たることや亦明なりと。莊子曰く、人、(二)能く遊ぶことあらば、且遊ばざることを得んや、人にして遊ぶこと能はずんば、且遊ぶことを得んや。夫れ流遁の志(三)決絕の行は、噫其れ至知厚德の任に非ざるか。(四)覆墜して反らず。(五)火馳して顧みず。(六)相與に君臣たりと雖も、時なり。世を易ふれば以て相賤しむこと無し。故に曰く　至人は行を留めずと。(七)夫れ古を尊んで今を卑しむは、學者の流なり。且(八)豨韋氏の流を以て、今の世を觀る、夫れ孰れか(九)能く波せざらん。唯ゞ至人乃ち能く世に遊べども僻せず、人に順へども己を失はず、彼、敎ふるも學ばず、(一〇)意を承くるも彼とせず。

(一) 足を立て、置いて其の周圍を掘り下ぐ　(二) 人能く雜念の安境に遊ぶことあらば遊ばざらんとするも得べからず　(三) 世を遁れ俗を棄くる心と其の行を高くして世を異にする行　(四) 知の至れる人德厚き人の爲す所に非じ　(五) 顚隕顛蹶するも反ることを知らず唯只競して顧慮する所なし　(六) 現在君臣の關係にあれども是は一時のことにて世を易ふれば貴賤の分別無し　(七) 時に隨うて變じ物と共に動きて拘らず　(八) 三皇以前の帝王　(九) 何人と雖も高下の心を起さざるものなからん　(一〇) 他人の意を承受するも彼此の見を設けず

其圓五尺。君曰。獻二若之龜一。龜至。君再欲レ殺レ之。再欲レ活レ之。心疑。卜レ之。曰殺レ龜以卜吉。乃刳レ龜。七十二鑚而無二遺筴一。仲尼曰。神龜能見二夢於元君一。而不レ能レ避二余且之網一。知能七十二鑚而無二遺筴一。不レ能レ避二刳腸之患一。如レ是則知有レ所レ困。神有レ所レ不レ及也。雖レ有二至知一。萬人謀レ之。魚不レ畏レ網。而畏二鵜鶘一。去二小知一而大知明。去レ善而自善矣。嬰兒生無二石師一而能言。與二能言者一處也。

所あればなり。至知ありと雖も、萬人之を謀る。魚、網(八)を畏れずして、鵜鶘を畏る。小知を去れば大知明かに、善を去れば自ら善なり。嬰兒生れて石師(九)なくして能く言ふは、能く言ふものと與に處ればなりと。(一〇)

(一) 亂髮にして側門の中をのぞきこむ (二) 淵の名 (三) 水神 (四) 漁者の名 (五) 七十二度龜甲を燒きつけトせしも占卜に誤りなし (六) 腸を割かるゝ災難を避くること能はず (七) 神靈も限りありて及ばざる所あり (八) 網は人の爲す所なれば其の知限りありて及ばざる所あれど鵜鶘は自然の性に隨うて魚を食ふものゆゑ之を避けがたし (九) 石は碩にして大なり (一〇) 父母兄姉の能くいふものと與に處るを以て自然に學び知る

惠子謂二莊子一曰。子言無レ用。莊子曰。知レ無レ用而始可二與言一レ用矣。夫地

惠子、莊子に謂つて曰く、子の言、用なしと。莊子曰く、用なきを知つて、始めて與に用を言ふべし。夫れ地、廣く且大ならざるにあらざるなり。人の用ふる所は足を容るゝのみ。然らば則ち(一一)足を側てて、而して之を墊り、黃泉に致らば、

引以名。相結以隱。與其譽堯而非桀、不如兩忘而閉其所譽。反無非、傷也。動無非、邪也。聖人躊躇以興事。以每成功。奈何哉其載焉。終矜爾。

宋元君夜半而夢。人被髮闚阿門曰。予自宰路之淵。予爲清江使河伯之所。漁者余且得予。元君覺使人占之。曰此神龜也。君曰。漁者有余且乎。左右曰有。君曰。令余且會朝。明日余且朝。君曰。漁何得。對曰。且之網得白龜焉。

宋の元君、夜半にして夢む。人、被髮して阿門を闚(一)うて曰く、予、宰路(二)の淵よりす。予、清江の爲めに河伯(三)の所に使す。漁者余且(四)、予を得たりと。元君覺めて、人をして之を占はしむ。曰く、此れ神龜なりと。君曰く、漁者に余且ありやと。左右曰く、有りと。君曰く、余且をして朝に會せしめよと。明日、余且朝す。君曰く、漁して何をか得たると。對へて曰く、且が網、白龜を得たり。其の圓五尺と。君曰く、若の龜を獻ぜよと。龜至る。君再び之を殺さんと欲し、再び之を活さんと欲す。心疑ふ。之を卜す。曰く、龜を殺して以て卜せば吉なりと。乃ち龜を刳る。七十二鑽(五)して、遺筴なし。仲尼曰く、神龜能く夢に元君に見ゆれども、而かも余且の網を避くること能はず。知能く七十二鑽して遺筴なけれども、刳腸(六)の患を避くること能はず。是の如きは則ち、知も困する所あり。神(七)も及ばざる

若嘗二四海一。不レ知其誰氏之子。老萊子曰。是丘也。召而來。仲尼至。曰丘去三汝躬矜。與二汝容知一。斯爲二君子一矣。仲尼揖而退。蹙然改レ容而問曰。業可レ得レ進乎。老萊子曰。夫不レ忍二一世之傷一。而驁二萬世之患一。抑固窶邪。亡二其略一弗レ及邪。惠以レ歡爲レ驁。終身之醜。中民之行進レ焉耳。相

然として容を改め、而して問うて曰く、業進むことを得べきやと。老萊子曰く、夫れ(七)一世の傷に忍びずして、萬世の患に驁る。抑ゝ固より窶まんとにや、其の略亡くして及ばざるにや。(八)惠むに歡を以てして驁ることを爲すは、終身の醜なり。(九)中民の行これに進むのみ。相引くに名を以てし、相結ぶに隱を以てす。其の堯を譽めて桀を非らんより、兩つながら忘れて、其の譽むる所を閉ぢんには如かず。(一〇)反すれば傷に非ざること無きなり。動けば邪にあらざること無きなり。(一一)聖人躊躇して以て事を興し、以て毎に功を成せり、奈何ぞ其れ載(一二)とせん、矜に終らんのみと。

(一) 楚の隱君子 (二) 上體長くして下半身短し (三) セムシにして耳頭後につく (四) 視ること營々として天下を經營する如く忙し (五) 矜誇の意を躬に表せると知惠を顏に表せることを去る (六) 驚きおそるゝ貌 (七) 一世の兆民の痛みを見かねて義の名を立て僞に前世の患を設けながら誇る (八) 人に惠みて歡心を沽ひ而して誇りたぶるは一生涯の醜行 (九) 凡人の行が唯之に進むのみ至人は與らじ (一〇) 自然の理に背反するときは道を傷けざることなく動いて爲す所あるときは邪辟に陷らざることなし (一一) 聖人は敢へて自ら作爲せず止むを得ずして事を興す (一二) 意あつて事とせず事として自負する時は誇りに終る

寡。大儒臚傳曰。東方作矣。事之何若。小儒曰。未解裙襦。口中有珠。詩固有之。曰。青青之麥。生於陵陂。生不布施。死何含珠爲。接其鬢。壓其顪。儒以金椎控其頤。徐別其頰。無傷口中珠。

と何若んと。小儒曰く、未だ裙襦を解かず、口中に珠あり。詩に固より之あり、曰く、青青の麥、陵陂に生ず、生きて布施せず、死して何ぞ珠を含むと爲んと。其の鬢を接り、其の顪を壓へ、儒、金椎を以て其の頤を控き、徐に其の頰を別け、口中の珠を傷つくること無しと。

(一)先王詩禮の道によつて墓を發掘す　(二)下知を傳ふ　(三)東天白むに墓をあばくは如何　(四)死者の肌着をとらず　(五)墓田　(六)生時人に施與せしことなきに死して何ぞ珠を含むべきと貪富人を刺れる詩なり　(七)死者の鬢の毛をつまみ顋の下の毛を押ふ　(八)金椎にて其の頤を打ち徐に其の頰を開きて口中の珠を傷くることなし

老萊子之弟子出薪。遇仲尼。反以告曰。有人於彼。脩上而趨下。末僂而後耳。視

老萊子の弟子出でて薪とる。仲尼に遇ふ。反つて以て告げて曰く、彼に人あり、脩上にして趨下、末僂にして後耳、視ること四海を營むが若し。知らず其の誰氏の子なるをと。老萊子曰く、是れ丘なり。召して來れと。仲尼至る。曰く、丘、汝の躬矜と、汝の容知とを去らば、斯れ君子たりと。仲尼揖して退き、蹙

釣。期年不得魚。已而大魚食之。牽巨鉤錎沒而下。騖揚而奮鬐。白波若山。海水震蕩。聲侔鬼神。憚赫千里。任公子得若魚。離而腊之。自制河以東。蒼梧已北。莫不厭若魚者。已而後世輇才諷說之徒。皆驚而相告也。夫揭竿累趣灌瀆守鯢鮒。其於得大魚難矣。飾小說以干縣令。其於大達亦遠矣。是以未嘗聞任氏之風俗。其不可與經於世亦遠矣。

神に侔しく、(七)千里を憚赫す。任公子若き魚を得、離きて之を腊にす。(九)制河より以東、(一〇)蒼梧より已北、若き魚に厭かざるもの莫し。(八)已にして後世(一一)輇才諷說の徒、皆驚いて相告ぐるなり。夫れ(一二)竿累を揚げ、(一三)灌瀆に趣き、(一四)鯢鮒を守れば、其の大魚を得るに於て難し。(一五)小說を飾りて以て縣令に干むるは、其の大に達するに於て亦遠し。是を以て未だ嘗て任氏の風俗を聞かざるもの、其の與に世を經すべからざるも亦遠し。(一六)

(一)任國の公子 (二)大釣針と太き黒繩 (三)五十四の去勢したる牛を餌とす (四)山の名 (五)毎朝釣る (六)錎沒して水中深く下り刎ね上りてヒレをふるふ (七)千里の遠きまでも驚き怖れしむ (八)割りて乾肉にす (九)水の名 (一〇)山の名 (一一)小才にして噂好きの人だち (一二)細糸 (一三)小溝 (一四)小魚 (一五)愚にもつかぬ議論を飾り立てゝ縣令に任用せられんことを求む (一六)世を經綸すべからざること遠し

儒以詩禮發

儒あり、(一)詩禮を以て冢を發く。大儒、(二)臚傳して曰く、(三)東方作る、之を事とするこ

莊周忿然作色曰。周昨来、有中道而呼者。周顧視車轍中有鮒魚焉。周問之曰。鮒魚来。子何爲者邪。對曰。我東海之波臣也。君豈有斗升之水而活我哉。周曰諾。我且南遊呉越之王。激西江之水而迎子。可乎。鮒魚忿然作色曰。吾失我常與。我無所處。吾得斗升之水然活耳。君乃言此。曾不如早索我於枯魚之肆。

く、我は東海の波臣(五)なり、君豈に斗升の水あつて我を活かさんかと。周曰く、諾、我れ且に南、呉越の王に遊ばんとす。西江の水を激して、子を迎ふる、可ならんかと。鮒魚忿然として色を作して曰く、吾れ我が(六)常與を失ひ、我れ處る所なし。吾れ斗升の水を得ば然かも活きんのみ。君乃ち(七)此を言ふ、曾て早く我を(八)枯魚の肆に索めんには如かずと。

(一) 魏の文侯　(二) 采邑の租金を得んとす　(三) 道の中途　(四) 車輪の轢せし跡の水溜に鮒あり　(五) 水官　(六) 水を失つて止住する處無し　(七) 西江の水を激迎せしめて吾を迎へんとノンキなことを言ふ　(八) 西河の水到る前に枯死すべければ乾魚を商ふ店に求むるにしかず

任公子爲大鉤巨緇。五十犗以爲餌。蹲乎會稽。投竿東海。旦旦而

任公子(一)、大鉤巨緇を爲り、五十犗(二)を以て餌と爲し、會稽(三)に蹲まり、竿を東海に投じて、旦旦(四)にして釣る。期年(五)にして魚を得ず。已にして大魚之を食ひ、巨鉤を牽く。(六)錎没して下り、騖揚して鬐を奮ふ。白波山の若く、海水震蕩して、聲、鬼

與火相守則流。陰陽錯行則天地大絯。於是乎有雷有霆。水中有火。乃焚大槐。有甚憂兩陷而無所逃。螴蜳不得成。心若縣於天地之間。慰暋沈屯。利害相摩。生火甚多。衆人焚和。月固不勝火。於是乎有僓然而道盡。

（一）此の篇外物を追求すれば天受の性拘執せざるを得ず從つて通ぜざる所あり之を通ずるが道といふ所以を論ず　（二）禍福は常ならずして定めがたし　（三）關龍逢比干のこと前に出づ　（四）殷の紂王の庶父佯狂して奴となる　（五）紂王の押臣　（六）伍員吳王扶差を諫し遂に死を賜はりて自刎し馬皮に盛られて江に投ぜらる　（七）讒に遭ひて放たれ後蜀に歸りて腸を刳みて死ぬ蜀人匣を以て其の血に盛りしに三年にして化して碧玉となる　（八）殷の高宗の子後母の讒にあひて憂死す　（九）至孝にして父母に憎まれ常に打たれて悲泣す　（一〇）相すれば燃ゆ　（一一）陰陽二氣の運行其の序を錯れば天災地變あり　（一二）天災地變に非れば人事の憂患にかゝる兩天秤にかゝりて逃るゝを得ず　（一三）虫の蟄より出でゝ未だ甦らざる如く安んずることなし　（一四）鬱悶し沈淪し利害心中に相戰ひて胸中自然の和を失ふ　（一五）世人は胸中の和氣を消耗す　（一六）冷靜月の如き和氣は情熱に勝たず　（一七）衰憊して生道傷き破る

莊周家貧。故往貸粟於監河侯。監河侯曰諾。我將得邑金。將貸子三百金。可乎。

莊周、家貧なり。故に往いて粟を監河侯（一）に貸る。監河侯曰く、諾、我れ將に邑金（二）を得んとす。將に子に三百金を貸さんとす。可ならんかと。莊周忿然として色を作して曰く、周、昨來るとき、中道（三）にして呼ぶものあり。周、顧視すれば、車轍（四）中に鮒魚あり、周、之に問うて曰く、鮒魚來れ、子は何する者ぞやと。對へて曰

外物不レ可レ必。故龍逢誅。比干戮。箕子狂。惡來死。桀紂亡。人主莫レ不ノ欲二其臣之忠一。而忠未二必信一。故伍員流二于江一萇弘死二于蜀一藏二其血一三年而化爲レ碧。人親莫レ不レ欲二其子之孝一而孝未二必愛一故孝已憂而曾參悲。木與レ木相摩則然。金

外物（一）

外物（二）は必とすべからず。故に龍逢は誅せられ、比干（三）は戮せられ、箕子（四）は狂し、惡來（五）は死し、桀紂は亡ぶ。人主其の臣の忠なるを欲せざること莫くして、忠未だ必ずしも信ぜられず、故に伍員（六）は江に流され、萇弘（七）は蜀に死し、其の血を藏する三年にして化して碧と爲る。人の親、其の子を孝を欲せざること莫し、而して孝未だ必ずしも愛せられず、故に孝已（八）は憂へて曾參（九）は悲しむ。木と木と相摩（一〇）すれば則ち然え、金と火と相守れば則ち流る。陰陽（一一）錯行すれば、則ち天地大に絯く、是に於てか雷あり霆あり、水中に火あつて、乃ち大槐を焚く。甚憂（一二）の兩陷するあつて而して逃るゝ所なし。螴蜳（一三）、成るを得ず、心、天地の間に縣るが若し。慰暋（一四）沈屯、利害相摩して、火を生ずること甚だ多し。衆人（一五）和を焚く。月固（一六）より火に勝たず。是に於てか僓然（一七）たることありて、道盡く。

不レ可レ視。或ニ之使一。莫ニ之爲一。疑之所レ假。吾觀ニ之本一。其往無レ窮。吾求ニ之末一。其來無レ止。無レ窮無レ止。言之無也。與レ物同レ理。或レ使莫レ爲。言之本也。與レ物終始。道不レ可レ有。有不レ可レ無。道之爲レ名。所ニ假而行一。或レ使莫レ爲。在ニ物一曲一。夫胡ニ爲於大方一。言而足。則終日言而盡道。言而不レ足。則終日言而盡物。道物之極。言默不レ足ニ以載一。非レ言非レ默。議ニ其有極一。

議せよと。

(一) 季眞が萬物の生死は偶然なりとする說と接子の主宰ありとする說と何れが其の實情に於て正しく理に於て周れきか (二) 言說を以て鷄犬の鳴聲を發する變化を說明すること能はず (三) かくして是の如き物の動機變化を分析すれば其の精微比倫なきに至り又其の大之を圍むべからざる底に至る故に偶然なりと云ふと主宰ありと云ふと兩ながら至極せず (四) 主宰ありて使役せしむるものありとすれば實即ち現象以外に本體ありとするもの偶然にて爲すものなしとすれば虛即ち現象以外に物無しとするもの (五) 既に相對なれば口に之を言ふべく心に之を思念すべけれども之を言へば愈々相對に墮して道に疎し (六) 死生は天なれば未だ生ぜざる時生ずるを避くべからず死するを阻止すべからず (七) 死生は目前の事實にして其の理は遠くして知ることかたし (八) 主宰ありと云ひなしと云ふは疑惑の之によりて起る所 (九) 本に遡りて觀るときは其の往きて究極する所なく之を末に求むれば來りて終に止む時なし即ち無始無終なり (一〇) 言議を絕するは物の根柢に横たはる理と合一す (一一) 言議ある境涯は物と共に浮沈始終する有爲の地 (一二) 道は有無を超越す (一三) 道は有無を絕すれども假に名づけて道と云ふ (一四) 物の一部に偏る (一五) 大道に何の關する所あらんや (一六) 或は之を言ふも默して言はざることも皆相對にして絕對の道を盡くすべからず故に玄默以外即ち無爲を以て道の極致を論ずべし

雖有大知、不能以言讀其所自化、又不能以意其所將爲。斯而析之、精至於無倫、大至於不可圍。或之使、莫之爲、未免於物、而終以爲過。或使則實。莫爲則虛。有名有實、是物之居。無名無實、在物之虛。可言可意、言而愈疏。未生不可忌、已死不可徂。死生非遠也、理

未だ物に免れずして、而して終に以て過たり。使むるものあるは則ち實、爲すある莫ければ則ち虛、名有り實あるは、是れ物の居、名なく實なきは、物の虛に在り、(五)言ふべく意ふべく、言へば愈〻疏なり。(六)未だ生ぜざるは忌むべからず、已に死するは徂むべからず。(七)死生は遠きにあらざるなり、理は観るべからず。(八)之を使むるものあると、之を爲すある莫きとは、疑の假る所のみ。(九)吾れ之を本に観れば、其の往くや窮りなく、吾れ之を末に求むれば、其の來るや止むなし。窮り無く止むなきは、言の無きなり、(一〇)物と理を同じうす。使むるものあると爲すある莫きとは、言の本なり、物と終始す。(一一)(一二)道は有りとすべからず、有れば無しとすべからず。(一三)道の名たり、假りて而して行ふ所、使むるものあると爲すある莫きとは、(一四)物の一曲にあり、夫れ大方に胡かせん。(一五)言つて足るべくば、則ち終日言つて盡く道ならん、言つて足らずんば、則ち終日言つて盡く物ならん。道は物の極なり。(一六)言黙以て載すに足らず。言に非ず黙に非ずして、其の有極を

於是庸有。安危相易。禍福相生。緩急相摩。聚散以成。此名實之可紀。精之可志也。隨序之相理。橋運之相使。窮則反。終則始。此物之所有。言之所盡。知之所至。極物而已。観道之人。不隨其所廢。不原其所起。此議所止。

に隨はず、其の起る所を原ねず、此れ議の止まる所なりと。

(一) 上下四方之を六合といふ (二) 萬物の生起する根原は何處なりや (三) 陰陽二氣相應じ相合し相消長す (四) 春は生じ秋は殺す (五) 受欲憎惡の念及び取捨の考へ是に於て蜂起す (六) 雌雄の分合すること常に有り (七) 安と危と禍と福と緩と急と聚と散と相對觀念成立す (八) 以上相對的觀念に於て其の名と實とを皆記知すべく其の義理亦察すべし (九) 先後隨うて相治め蜂起する運行相消長す (一〇) 言說知識の至極する所は有に關するのみにして無を說く能はず唯物を推究するのみ (一一) 物の終美に隨はず其の始原を尋ねず

少知曰。季眞之莫爲。接子之或使。二家之議。孰正於其情。孰偏於其理。大公調曰。雞鳴狗吠。是人之所知。

少知曰く、(一)季眞の爲すある莫きと、接子の使しむるものあると、二家の議、孰れか其の情に正しく、孰れか其の理に偏ねきと。大公調曰く、鷄鳴狗吠、是れ人の知る所、大知ありと雖も、(二)言を以て其の自ら化する所を讀むこと能はず、又以て其の將に爲さんとする所を意ふ能はず、(三)斯にして之を析てば、精は倫なきに至り、大は圍むべからざるに至る。(四)之を使むるものあると、之を爲すある莫きと、

者。以二數之多一者號而讀レ之也。是故天地者形之大者也。陰陽者氣之大者也。道者爲二之公一。因二其大一以號而讀レ之則可也。已有レ之矣。乃將得レ比哉。則若以二斯辯一。譬猶二狗馬一。其不レ及遠矣。

已に之あり、乃ち將た比するを得んや。則ち(四)若し斯を以て辯ぜば、譬へば猶ほ狗と馬とのごとし。其の及ばざること遠しと。

(一) 然らば丘里の言を道と謂つて可ならんか　(二) 姑く數の多きものを指りて之を萬物といふなり　(三) 道は天地陰陽を通じて之を兼ぬるもの　(四) 丘里の言の大なるに非ずして之を道と謂ふは可なれど已に丘里の言あれども之を道に比することかたし　(五) 理を以て辯ずれば譬へば狗と馬との如く道と丘里の言の差は遠ることと遠し

少知曰。四方之內。六合之裏。萬物之所レ生惡起。大公調曰。陰陽相照。相蓋相治。四時相代。相生相殺。欲惡去就。於是橋起。雌雄片合。

少知曰く、四方の內、(一)六合の裏、(二)萬物の生ずる所惡にか起ると。大公調曰く、(三)陰陽相照らし、相蓋ひ相治む。四時相代はり、(四)相生じ相殺す。(五)欲惡去就、是に於て橋起し、(六)雌雄片合、是に於て庸に有り。(七)安危相易はり、禍福相生じ、緩急相摩し、聚散以て成る。(八)此れ名實の紀すべく、精の志すべきなり。(九)隨序の相理め、橋運の相使ふ、窮まれば則ち反り、終れば則ち始まる。此れ物の有る所なり、(一〇)言の盡くす所、知の至る所は、物を極むるのみ。道を覩るの人は、(一一)其の廢する所

不レ私。故國治。文武大人不レ賜。故德備。萬物殊レ理。道不レ私。故無レ名。無レ名故無レ爲。無レ爲而無レ不レ爲。時有二終始一。世有二變化一。禍福淳淳至。有レ所レ拂者。而有レ所レ宜。自殉殊レ面。有レ所レ正者。有レ所レ差。比二於大澤一。百材皆度。觀二乎大山一。木石同レ壇。此之謂二丘里之言一。

少知曰然則謂二之道一足乎。大公調曰。不レ然。今計二物之數一。不レ止二於萬一。而期曰二萬物一

し是同を散じて異となすもの （六）馬眼前に繋がるゝ時は其の百體を合して馬と謂ふ是異を合して同と爲すもの （七）大人は異を合せて公同をなす （八）中に主とする者あれども外部より入り來る言議に對して我執に偏せずして能く公同す （九）中より出づる我が言議は正しけれども各人の異を立つるを拒まず （一〇）春夏秋冬は各氣候を異にして天私に與へざる故に讖序の成るあり （一一）文武二道は大人偏賜せざるが故に德備はる （一二）萬物各々一理を備ふれども大道は偏私することなくして大公至正なるが故に迹なく又名稱し （一三）無爲にして始めて眞に爲す所あり有爲は爲す有るに似て爲すことなきもの （一四）流行の貌 （一五）我に逆うて禍となるものも亦我に順うて福となることあり （一六）自ら一に拘執す 所ありて向ふ所を異にすれば此方に於て正しきものも彼に於ては差ふ所ありて不正とす （一七）諸の樹木皆均しく大澤の中に居る （一八）木石異なれども均しく地を同じうして之に居る

少知曰く、然らば則ち（一）之を道と謂つて足らんかと。大公調曰く、然らず、今、物の數を計るに、萬に止まらずして、期して萬物と曰ふは、（二）數の多きものを以て、號して之を讀むなり。是の故に天地は形の大なるものなり、陰陽は氣の大なるものなり。（三）道は之が公たり、（四）其の大に因つて、以て號して之を讀まば則ち可なり。

名。而以爲二風俗一也。合レ異以爲レ同。散レ同以爲レ異。今指二馬之百體一而不レ得レ馬。而馬係二於前一者。立二其百體一而謂二之馬一也。是故丘山。積レ卑而爲レ高。江河。合レ水而爲レ大。大人合幷而爲レ公。是以自レ外入者。有レ主而不レ執。由レ中出者。有レ正而不レ距。四時殊レ氣。天不レ賜。故歳成。五官殊レ職。君

其の百體を立てて之を馬と謂ふなり。是の故に丘山は卑きを積んで高きを爲し、江河は、水を合して大を爲す、(七)大人合幷して公を爲す。是を以て(八)外より入るものは、主あれども而かも執らず。(九)中より出づるものは、正あれども而かも距まず。(一〇)四時氣を殊にして、天は賜はず、故に歳成る。五官職を殊にして、君は私せず。故に國治まる。(一一)文武大人賜はず、故に德備はる。(一二)萬物は理を殊にして、道は私せず、故に名なし。名なきが故に爲すことなく、(一三)爲すこと無くして爲さざること無し。時に終始あり、世に變化あり、(一四)禍福淳淳として至る、(一五)拂る所あるものも宜しき所あり。(一六)自ら殉へ而を殊にすれば、正しき所あるものも差ふ所あり。大澤に比れば、(一七)百材皆度し、大山に觀れば、(一八)木石壇を同じくす、此を之れ丘里の言と謂ふと。

(一)知の狹少なるに譬ふる賢人　(二)道德廣大にして至公萬物を調和するに譬ふる賢人　(三)寓問の言にして卽ち公論　(四)十と百の名を合して一の風俗を爲せるもの　(五)馬の體軀の各部を分解的に指すときは馬なるものな

是因レ是也。伯常騫曰。夫靈公有二妻三人一。同濫而浴。史鰌奉御而進レ所。搏レ幣而扶翼。其慢若レ彼之甚也。見二賢人一若レ此其肅也。是其所三以爲二靈公一也。狶韋曰。夫靈公也死。卜レ葬二於故墓一不吉。卜レ葬二於沙丘一而吉。掘レ之數仞。得二石槨一焉。洗而視レ之。有レ銘焉。曰。不レ馮二其子一。靈公奪而里レ之。夫靈公之爲レ靈也久矣。之二人。何足二以識一レ之。

丘に葬るを卜すれば吉なり。之を掘ること數仞、(八)石槨を得たり。洗つて之を視れば、銘あり。曰く、(九)其の子に馮られず、靈公奪つて之に里すと。(一〇)夫れ靈公の靈たるや久し、之の二人、何ぞ以て之を識るに足らんと。

(一) 官名 (二) 飲酒耽樂 (三) 鑑は大鋼戈はイグルミ (四) 是其の人の荒亂なるに基づいて靈公と諡せるなり (五) 混浴す。一に「タラヒを同じうして」と訓ず (六) 賢臣史鰌が君の召に應じて王の所に進めば幣帛をとつて人をして其の歩を扶けしむ (七) 祖宗の墓地 (八) 石の棺槨 (九) 前に葬られしもの其の子に馮らるゝを得ず靈公此の地を奪つて墓所とす (一〇) 土中の槨に既に靈公とありたるなれば前の二人の靈公の説はとるに足らず

少知問二於太公調一曰。何謂二丘里之言一。太公調曰。丘里者合二十姓百

(一)少知は(二)太公調に問うて曰く、何をか(三)丘里の言と謂ふと。太公調曰く、丘里なるものは、(四)十姓百名を合して、以て風俗を爲せるなり。異を合して以て同と爲し、同を散じて以て異と爲す。今は(五)馬の百體を指して馬を得ずして、(六)馬前に係がるれば、

乎出。而莫見其門。人皆尊其知之所知。而莫知恃其知之所不知。而後知。可不謂大疑乎。已乎已乎。且無所逃。此則所謂然與然乎。

仲尼。問於大史大弢。伯常騫。狶韋曰。夫衞靈公飲酒湛樂。不聽國家之政。田獵畢弋。不應諸侯之際。其所以爲靈公者何邪。大弢曰。

らんや。

㈡ 年々歳に進み化して息まず六十歳にして六十度化せり ㈢ 同一標準に止まらざるが故に始めは之を是とするも終には之を非とせではおかず ㈣ 六十歳の現在に於て是とする所は五十九歳までは非とせし所かも知れず ㈤ 萬物は生ずる所あれども其の生ずる根原を見ることなし ㈥ 現化する所あれども其の出づる門を見ることなし ㈦ 人皆其の理知を以て認識し得る知識を尊重すれども知識の範圍は有限相對にして言ふに足らず故に其の理知の知り得ざる無限絕對の玄境を恃むに至つて眞に知る所あるに至る理を知るものなし ㈧ 斯く言說するも相對知によつて表現するにて自ら對境の對立に陷らざるを得ず ㈨ 我が論ふ所は眞に然るか眞に然らんや、言說を絕したる所に眞知存在するが故に反語を以て是非の辯を排する自らを證へるなり

仲尼、太史大弢、伯常騫、狶韋に問うて曰く、夫れ衞の靈公飲酒湛樂して、國家の政を聽かず、(一)田獵畢弋して諸侯の際に應ぜず。其の靈公となす所以のものは何ぞやと。大弢曰く、(二)是れ是に因れりと。伯常騫曰く、夫れ靈公に妻三人あり、同じく濫れて浴す。(三)史鰌奉御して所に進めば、(四)幣を搏りて扶翼せしむ。其の慢彼の若く之れ甚しくして、賢人を見ること此の若く其れ肅めり。是れ其の靈公たる所以なりと。狶韋曰く、夫れ靈公の死する、(五)故墓に葬るをトす、不吉なり、沙

在レ民、以レ失爲レ在レ己。以レ正爲レ在レ民。以レ枉爲レ在レ己。故一形有下失二其形一者上。退而自責。今則不レ然。匿爲レ物而愚レ不レ識。大爲レ難而罪レ不レ敢。重爲レ任而罰レ不レ勝。遠二其塗一而誅レ不レ至。民知力竭則以レ僞繼レ之。日出多レ僞。士民安敢不レ僞。夫力不レ足則僞。知不レ足則欺。財不レ足則盜。盜竊之行。於レ誰責而可乎。

大なる災難ありて予獨り先づ之に遭遇せり (五) 榮辱の名目立つて後に人奔競して病む所あり (六) 理にたがへる不正は己にありとす (七) 一物にても其の自然の形狀を害ふものあれば退いて自己の罪を責む (八) 隱密に物を爲して民之を識らざるを愚とし之を顯明に爲す所以を思はず (九) 非常に困難なることを爲して民之を敢てせざるを違法として刑す (一〇) 難きを民に責むるが故に民知力竭くる時は僞るに至る (一一) 民を責むべからずして君を責むべしとなり

遽伯玉。行年六十而六十化。未丁嘗不丙始二於是乙之。而卒乙詘レ之以レ非也。未レ知。今之所レ謂是之非二五十九非一也。萬物有二乎生一而莫レ見二其根一。有二

遽伯玉、行年六十にして六十化す。(一) 未だ嘗て之を是とするに始まつて、之を詘くるに非を以てするに卒らずんばあらざるなり。(二) 未だ知らず、(三) 今の所謂是の五十九の非にあらざることを。(四) 萬物の生ずるとある、而かも其の根を見ること莫し。(五) 出づることあるか、而かも其の門を見ること莫し。(六) 人皆其の知の知る所を尊むも、而かも其の知らざる所を恃んで、而る後知ることを知る莫し。大疑と謂はざるべけんや。已みなんか已みなんか、(七) 且逃るゝ所なし、此れ(八)則ち所謂然るか然

何始。曰始於齊。至齊見辜人焉。推而強之。解朝服而幕之。號天而哭之。曰子乎子乎。天下有大菑。子獨先離之。曰莫爲盜。莫爲殺人。榮辱立然後覩所病。貨財聚然後覩所爭。今立人之所病。聚人之所爭。窮困人之身。使無休時。欲無至此得乎。古之君人者。以得爲

之に離れりと。曰く、盗を爲すこと莫かりしや、人を殺すを爲すこと莫かりしや。(五)榮辱立つて然る後病む所を覩、貨財聚まつて、然る後爭ふ所を覩る。今人の病む所を立て、人の爭ふ所を聚め、人の身を窮困せしめ、休む時なからしめて、此に至る無からんことを欲すとも得んや。古の人に君たるものは、得を以て民に在りと爲し、失を以て己に在りと爲し、正を以て民に在りと爲し、枉を以て己に在りと爲す。故に(七)一形も其の形を失ふものあれば、退いて自ら責む。(六)今は則ち然らず。(八)匿して物を爲して識らざるを愚とし、(九)大に難きを爲して敢へてせざるを罪し、重く任を爲して勝へざるを罰し、其の塗を遠くして至らざるを誅す。(一〇)民知力竭くれば、則ち僞りを以て之に繼ぐ、日々に出でて僞多ければ、士民安んぞ敢へて僞らざらん。夫れ力足らざれば則ち僞り、知足らざれば則ち欺き、財足らざれば則ち盗む。(一一)盗竊の行、誰に於て責めて可ならんやと。

(一)老子の門人　(二)刑死者　(三)強ひておし起し己の朝服を脱いで死人をおほふ　(四)天下に苛法虐政といへる

禾繁以滋。予終年厭飧。莊子聞レ之曰。今人之治二其形一。理二其心一。多有レ似二封人之所一レ謂。遁二其天一。離二其性一。滅二其情一。亡二其神一。以二衆爲一。故鹵二莽其性一者。欲惡之孽。爲二性萑葦蒹葭一。始萌以扶二吾形一。尋擢二吾性一。並潰漏發。不レ擇レ所レ出。漂疽疥癰。內熱溲膏是也。

吾が性を擢き、(一四)並潰漏發して、出づる所を擇ばず、(一五)漂疽疥癰(一六)内熱溲膏、是れなりと。

(一)長梧の封疆を守れる番人　(二)孔子の弟子、姓は琴・宋の鄕　(三)粗略　(四)混亂　(五)法を變ず　(六)入念に鋤き耕す　(七)一年中十分に食ふを得たり　(八)形骸を治め整へ心を理め安んず　(九)自然の理に反し性情に背き離る　(一〇)多くの有爲に因りて然り　(一一)ヒコバヘ　(一二)葦の族、性を害すること雑草の禾を害するが如きに譬ふ　(一三)欲惡の念萠して形體を助け耳目鼻口の欲を遂げしむ　(一四)自然の本性より擢でゝ蔓延す　(一五)到るところにうみ潰れ流れ出づ　(一六)皆腫物の名　(一七)内部に熱をもちて潰るると尿中に精液を漏らすと

柏矩學二於老聃一。曰。請之二天下一遊。老聃曰已矣。天下猶レ是也。又請レ之。老聃曰汝將二

(一)柏矩は老聃に學ぶ。曰く、請ふ天下に之いて遊ばんと。老聃曰く、已めよ、天下猶ほ是のごときなりと。又之を請ふ。老聃曰く、汝將に何くより始めんとすると。曰く、齊より始めんと。齊に至り(二)辜人を見、(三)推して之を强ひ、朝服を解いて之を幕し、天に號んで之を哭す。曰く、子や子や、(四)天下、大菑あり。子獨り先づ

丘之著於己也。知丘之適楚也。以丘爲必使楚王之召己也。彼且以丘爲佞人也。夫若然者。其於佞人也。羞聞其言。而況親見其身乎。而何以爲存。子路往視之。其室虛矣。

あらはさんとするを畏れり　（一二）孔子必ず楚王をして隱者を召さしむるものとなすべし　（一三）多言者　（一四）叔の隱者の如きものは多言者の言を聞くをも恥づるほどゆゑ親しく其の佞人を見ることはなすまじ

長梧封人。問子牢曰。君爲政焉勿鹵莽。治民焉勿滅裂。昔予爲禾。耕而鹵莽之。則其實亦鹵莽而報予。芸而滅裂之。其實亦滅裂而報予。予來年變齊。深其耕而熟耰之。其

長梧の封人、子牢に問うて曰く、君政を爲すに、鹵莽なること勿れ、民を治むるに、滅裂なること勿れ。昔に予禾を爲り、耕して之を鹵莽にすれば、則ち其の實も亦鹵莽にして予に報い、芸りて之を滅裂にすれば、其の實亦滅裂して予に報いたり。予來年は變齊し、其の耕を深くして之を熟耰するに、其の禾は繁にして以て滋く、予終年厭飧せりと。莊子之を聞いて曰く、今は人の其の形を治め、其の心を理むる、多く封人の謂ふ所に似たる有り。其の天を遁れ、其の性を離れ、其の情を滅し、其の神を亡ぼすは、衆爲を以てなり、故に其の性を鹵莽にするものは、欲惡の孼、性の萑葦蒹葭と爲る。始めは萌して以て吾が形を扶け、尋いで

孔子之楚。舍於蟻丘之漿。其鄰有夫妻臣妾登極者。子路曰。是稯稯何爲者邪。仲尼曰。是聖人僕也。是自埋於民。自藏於畔。其聲銷。其志無窮。其口雖言。其心未嘗言。方且與世違。而心不屑與之俱。是陸沈者也。是其市南宜僚邪。子路請往召之。孔子曰已矣。彼知

孔子楚に之き、蟻丘(一)の漿(二)に舍る。其の鄰に夫妻臣妾の極(三)に登るものあり。子路曰く、是の稯稯(四)たるは何爲るものぞやと。仲尼曰く、是れ聖人の僕(五)なり、是れ自ら民(六)に埋もれ、自ら畔に藏れたり。其の聲(七)は銷え、其の志は窮りなし、其の口言(八)ふと雖も、其の心は未だ嘗て言はず、方に且に世と違つて、心之と與に倶にするを屑しとせざらんとす、是れ陸沈(九)なるものなり。是れ其れ市南宜僚(一〇)かと。子路往いて之を召さんと請ふ。孔子曰く、已めよ。彼(一一)れ丘の己を著すを知れり。丘の楚に適くを知れり、丘(一二)を以て必ず楚王をして己を召さしむると爲さん。且に丘を以て佞人(一三)と爲さんとす。夫れ然る(一四)が若きものは、其の佞人に於けるや、其の言を聞くをも羞づ、而るを況んや親しく其の身を見るをや。而るを何を以て存することをせんと。子路往いて之を視れば、其の室虚し。

(一) 地名 (二) 漿を賣る家 (三) 屋の棟に登りて遠くを望めるものあり (四) 髮亂るゝ貌 (五) 聖人の徒 (六) 民間に埋もれ田間にかくる (七) 其の名聲は消えて顯れず其の志は無窮に遊ぶ (八) 口はよく物言へど其の心嘗て言はずして默を守る (九) 俗中に混じて隱れ尚は水無きに沈む如し (一〇) 前に出づ (一一) 彼は孔子が隱者を人目に

曰。然則若何。曰。君求其道而已矣。惠子聞之而見戴晉人。戴晉人曰。有所謂蝸者。君知之乎。曰。然。有國於蝸之左角者。曰觸氏。有國於蝸之右角者。曰蠻氏。時相與爭地而戰。伏尸數萬。逐北旬有五日。而後反。君曰。噫。其虛言與。曰。臣請爲君實之。君以意在四方上下有窮乎。君曰。無窮。曰。知遊心於無窮。而反在通達之國。若存若亡乎。君曰。然。曰。通達之中有魏。於魏中有梁。於梁中有王。王與蠻氏有辯乎。君曰。無辯。客出。而君惝然若有亡也。客出。惠子見。君曰。客大人也。聖人不足以當之。惠子曰。夫吹管也。猶有嗃也。吹劍首者。吷而已矣。堯舜人之所譽也。道堯舜於戴晉人之前。譬猶一吷也。

堯舜は人の譽むる所なり、堯舜を戴晉人の前に道ふは、譬へば猶ほ一吷のごときなりとと。

(一) 魏の惠王の名 (二) 齊の威王、名は牟、田侯の後なる故に田侯といふ (三) 官名、名は公孫衍 (四) 憤怒鬱悶の熱内身に熱氣を生じ背に腫瘍を發せしめん 一本「熱く」を「亡ゲて」に作る (五) 魏の賢臣 (六) 罪囚にして工役に從ふもの (七) 國家太平にして土…るに甲兵を起さば城の壊れるを壊ると同じ (八) 魏の賢臣 (九) 功利の心尙存するなり (一〇) 是非の心尙存するあり (一一) 戴は姓、晉人は字、魏の賢者 (一二) 蝸牛 (一三) 觸蠻に踏れ伏せし死屍數万 (一四) 其の虛言ならざることを證せん (一五) 上下四方に窮極ありや (一六) 心を一旦無窮に遊ばしめて他々反つて往くに限ある國にある時は殆ど存亡の意に介するに足らざるほど小なるべし (一七) 大梁は魏の都 (一八) 區別ありや (一九) 惝然茫然として自失せる如し (二〇) 簫管を吹けば嗃然として其の聲悠長 (二一) 劍の環頭の小孔を吹けば唯シュウと細促する音あるのみ

國。忌也出走。然後抶二其背一。折二其脊一。季子聞而恥レ之曰。築二十仞之城一。城者既十仞矣。則又壞レ之。此胥靡之所レ苦也。今兵不レ起七年矣。此王之基也。衍亂人。不レ可レ聽也。華子聞而醜レ之曰。善言レ伐レ齊者亂人也。善言レ勿レ伐者亦亂人也。謂二伐レ之與レ不レ伐亂人一也者。又亂人也。君

伐たざるとを亂人なりと謂ふものも、又亂人(一〇)なり。君曰く、然らば則ち若何と。曰く、君其の道を求めんのみと。惠子之を聞て戴晉人(一一)を見えしむ。戴晉人曰く、所謂蝸(一二)なるものあり、君之を知れりやと。曰く然り。蝸の左角に國するものあり、觸氏と曰ふ。蝸の右角に國するものあり、蠻氏と曰ふ。時に相與に地を爭うて戰ふ、伏尸(一三)數萬、北ぐるを逐ふこと旬有五日にして、而して後反ると。君曰く噫其れ虛言かと。曰く、臣請ふ君の爲めに(一四)之を實にせん。君、四方上下(一五)に在りて窮まりありと以意ふやと。君曰く窮まりなしと。曰く、心(一六)を無窮に遊ばしむるを知て、反つて通達の國に在るは、存するが若く亡きが若きかと。君曰く然りと。曰く、通達の中に魏あり、魏中(一七)に梁あり、梁中に王あり。王と蠻氏と辯(一八)ありやと。君曰く辯なしと。客出でて、君惝然(一九)として亡ふことあるが若きなり、客出づ。惠子見ゆ。君曰く、客は大人なり、聖人も以て之に當るに足らずと。惠子曰く、夫れ筦(二〇)を吹くや、猶ほ嗃たるあるなり、劍首(二一)を吹けば、吷たるのみ。

得二其所見一。仲尼之盡レ慮。爲レ之傅レ之。容成氏曰。除レ日無レ歲。無レ內無レ外。

魏瑩與二田侯牟一約。田侯牟背レ之。魏瑩怒。將レ使二人刺一レ之。犀首聞恥レ之。曰。君爲二萬乘之君一也。而以二匹夫一從レ讎。衍請受二甲二十萬一。爲レ君攻レ之。虜二其人民一。係二其牛馬一。使三其君內熱發二於背一。然後拔二其

し得たり 〔一四〕 湯の有徳は登恒の名にして登恒附庸の見を生ずるに至れり 〔一五〕 孔子の苦心して仁義を説いて人の師範となれるものにして天に逆へるものに非ず 〔一六〕 古の聖王 〔一七〕 日は三百六十にして歳となれるものなれば日を除けば歳は成立せず內無ければ外も無く從つて無し故に天人萬物の名づけいふものも無かるべき理なり

〔一〕魏瑩は〔二〕田侯牟と約して、田侯牟之に背く。魏瑩怒り、將に人をして之を刺さしめんとす。〔三〕犀首聞いて之を恥づ。曰く、君は萬乘の君たるなり、而るを匹夫を以て讎に從はんや。衍請ふ甲二十萬を受け、君の爲めに之を攻めん。其の人民を虜にし、其の牛馬を係ぎ、其の君をして〔四〕內熱背に發せしめて、然る後其の國を拔かん。忌や出で走らば、然る後其の背を抉ち、其の脊を折らんと。〔五〕季子聞いて之を恥ぢて曰く、十仞の城を築き、城くもの既に十仞なるを、則ち又之を壞たば、此れ〔六〕胥靡の苦しむ所なり。今は兵起らざること七年、此れ〔七〕王の基なり。衍は亂人なり。聽く可らざるなりと。〔八〕華子聞いて之を醜として曰く、善く齊を伐つを言ふものは亂人なり。〔九〕善く伐つこと勿れと言ふものも亦亂人なり。之を伐つと

一不化者也。闔嘗舍之。夫師天而不得師天。與物皆殉。其以爲事也。若之何。夫聖人未始有天。未始有人。未始有始。未始有物。與世偕行而不替。所行之備而不洫。其合之也。若之何。湯得其司御門尹登恒。爲之傅之。從師而不囿。得其隨成。爲之司其名。之名嬴法

事を爲すや、之を若何せん。夫れ聖人は(八)未だ始めより天あらず、未だ始めより人あらず、未だ始めより始めあらず、未だ始めより物あらず。(九)世と偕に行いて替れず、(一〇)行く所之れ備りて洫れず、(一一)其の之に合ふや、之を若何ん。(一二)湯の其の司御門尹登恒を得るや、之が爲に之を傅とす、(一三)從ひ師として囿せられざるは、其の成るに隨ふを得たればなり。(一四)之が爲に其の名を司る、(一五)之の名は嬴、法にして其の兩見を得たり。(一六)仲尼の慮を盡くすも、之が爲に之に傅たり。(一七)容成氏曰く、(一八)日を除けば歳なく、内無ければ外無し。

(一) 三皇以前の聖君　(二) 虚中の至理を得て萬物の自ら成るに從ひ爲す有る所無し　(三) 時節の變遷もなく時もなし　(四) 日に萬物と同じく化するは一の化せざるもの卽ち主宰なるものあつて然り　(五) 何ぞ試みに環中の地に宿り居らざる　(六) 天を師とせんとして師とし法るを得ざるは物と接へて之に追從するが故なり　(七) 物と相殉うて居りながら事を爲すには之を如何せん　(八) 聖人は虚無に處り自然に因るのみにして始めより天も人も始も物も皆無し　(九) 世と與に推移行動して廢るゝ所なし　(一〇) 推移行動する所備はり滿ちて缺くる所なし　(一一) 此の聖人の行に合ふには之を如何すべき　(一二) 殷湯は其の司御の官なる門尹登恒を得て之を師傅となす　(一三) 師とし從ひて拘束せられざるは萬物自成の道に隨ふことを得たるためなり　(一四) 湯王は之がために其の聖王たる名聲を傳

之好之亦無已。性也。聖人之愛人也。人與之名。不告則不知其愛人也。若知之。若不知之。若聞之。若不聞之。其愛人也終無已。人之安之亦無已。性也。舊國舊都。望之暢然。雖使丘陵草木之緡。入之者十九。猶之暢然。況見見聞聞者也。以十仞之臺縣衆間者也。

しむと雖も、猶ほ之れ暢然。況んや見しを見、聞きしを聞くものをや。十仞の臺(二〇)の衆間に縣るものを以てするをや。

(一一)以次の羅列するもの多く凡て正しくて缺くる所なし　(一二)自然の天命に復歸して動作し天を以て師とす　(一三)人は其の跡に從つて之に聖人と命ずるのみ　(一四)知の足らざるを憂へて行ふ時は行ふ所悉に知に限局せられ時には行ふ能はずして止まることあり　(一五)自ら知る知らざるにかゝはらず其の美の喜ぶべきは止めがたく人の其の美を好むも亦止めがたきは自然の性なればなり　(一六)聖人といふ名を與ふ　(一七)自ら聖人たることを關知せざるも其の人を愛することは止めがたく人が其の愛に安んずるも止めがたきことなるは其に自然の性なればなり　(一八)己の故郷を望見すれば氣暢び〳〵とす　(一九)故郷の丘陵草木が地を蔽うて十中八九は隱れて見えざれども猶は暢然　(二〇)高き十仞の臺が衆物の間に縣れゐるときはまして暢然

冉相氏。得其環中以隨成。與物無終無始。無幾無時。日與物化者。

冉相氏、(一)其の環中を得て以て成るに隨ふ、(二)物と與に終り無く始め無く、(三)幾無く時無し。(四)日に物と與に化するものは、一の化せざるものなり、(五)闔ぞ嘗みに之に舍らざる。夫れ天を師として(六)天を師とするを得ざるは、物と皆殉へばなり、(七)其の以て

故曰。待二公閱休一。

聖人達二綢繆一。周盡一體矣。而不ㇾ知二其然一。性也。復ㇾ命搖作。而以ㇾ天爲ㇾ師。人則從而命ㇾ之也。憂二乎知一而所ㇾ行。恆無ㇾ幾。時其有ㇾ止也。若ㇾ之何。生而美者。人與二之鑑一。不ㇾ告則不ㇾ知三其美二於人一也。若知ㇾ之。若不ㇾ知ㇾ之。若聞ㇾ之。若不ㇾ聞ㇾ之。其可ㇾ喜也終無ㇾ已。人

聖人(一)綢繆に達し、周盡して一體として、而して其の然るを知らざるは、性なり。(二)命に復って搖作して、天を以て師と爲す。(三)人は則ち從つて之に命ずるなり。(四)知に憂へて行ふ所は、恆に幾ばくも無くして、時に其れ止まることあるなり、之を若何せん。生れながらにして美なるもの、人之に鑑を與ふ。告げざれば則ち其の人よりも美なるを知らざるなり。若しくは之を知り、若しくは之を知らず。若しくは之を聞き、若しくは之を聞かざるも、(五)其の喜ぶべきや終に已むこと無く、人の之を好するも亦已むこと無きは、性なればなり。聖人の人を愛するや、人之に名を與ふ、告げざれば則ち其の人を愛するを知らざるなり、若しくは之を知り、(六)若しくは之を知らず。若しくは之を聞き、若しくは之を聞かざるも、(七)其の人を愛するや終に已むこと無く、人の之に安んずるも亦已むことなきは、性なればなり。(八)舊國舊都、之を望めば暢然たり、(九)丘陵草木の緡して、之に入るもの十に九なら

有知。不自許。以之神其交。固顛冥乎富貴之地。非相助以德。相助消也。夫凍者假衣於春。暍者反冬乎冷風。夫楚王之爲人也。形尊而嚴。其於罪也。無赦如虎。非夫佞人正德。其孰能撓焉。故聖人。其窮也。使家人忘其貧。其達也。使王公忘爵祿而化卑。其於物也。與之爲娛矣。其於人也。樂物之通而保己焉。故或不言。而飮人以和。與人並立。而使人化父子之宜。彼其乎歸居。而一閒其所施。其於人心者。若是其遠也。

して、人に飮ましむるに和を以てし、人と與に並び立つて、人をして化して父子の宜あらしむ。彼れ其れ歸居して、其の施す所を一閒にす、其の人心に於けるもの、是の若く其れ遠し。故に曰く、公閲休を待てと。

（一）此の冥冥の知らずして能く之を知り解せずして之を解すと云へる意を承けて不言非言の道を説く （二）姓は彭名は陽、則陽は其の字、魯の人 （三）楚の臣 （四）楚の賢人 （五）隱者の名 （六）山の澤に休息す （七）夷節すら足下を王に薦めて能はず況や我をや （八）無知くして知ぐ有り知の業を極めて自らをも假借せず （九）其の神外物と交りて是非を別す （十）富貴の位置に顛倒迷惑す （十一）德を以て互に扶ずるに非ずして反つて互に他を消す （十二）凍ゆる者が春の暖を衣とかりて衣を假り暑に中てられたるものが冬になりて冷風を反さんとするものにて其の時を失ふ （十三）佞口の人か正德の人に非ずして何人も楚王の意を屈せしむるものなし （十四）位を失つて野に窮困す （十五）位を得て朝に榮達す （十六）聖人の物に對するには物と娛しんで之に役せられず （十七）道の通ずるを樂しんで己の眞を保つ （十八）言說に及ばずして和氣にて人を醉はしむ （十九）人と並び立つに人を感化して父子の如く親しましむ （二十）是の如く人を化すと雖も爲すありて然るに非ず閑居安息して其の施す所を閑靜になすのみ （二十一）知ありて推測るものと聖人の閑靜なるものとは人心を化するに是の如く懸絶す

則陽遊ニ於楚一。夷節言ニ之於王一。王未ニ之見一。夷節歸。彭陽見ニ王果一曰。夫子何不レ譚ニ我於王一。王果曰。我不レ若ニ公閲休一。彭陽曰。公閲休奚爲者邪。曰。冬則擉ニ鼈于江一。夏則休ニ乎山樊一。有ニ過而問者一。曰。此予宅也。夫夷節已不レ能。而況我乎。吾又不レ若ニ夷節一。夫夷節之爲レ人也。無レ德而

(二)則陽楚に遊ぶ。(三)夷節之を王に言ふ、王未だ之を見ず。夷節歸る。彭陽(四)王果を見て曰く、夫子何ぞ我を王に譚せざると。王果曰く、我れ(五)公閲休に若かずと。彭陽曰く、公閲休とは奚するものぞと。曰く、冬は則ち鼈を江に擉へ、夏は則ち(六)山樊に休ふ。過つて問ふものあれば、曰く、此れ予が宅なりと。夫れ(七)夷節已に能はず、而るを況んや我をや。吾れ又夷節に若かず。夫れ夷節の人と爲りや、(八)德なくして知あり、自ら許さず、之を以て(九)神其れ交る、固より(一〇)富貴の地に(一一)顚冥す、相助くるに德を以てするに非ずして、相助けて消するなり。夫の凍者の衣を春に假り、暍者の冬に冷風を反すなり。夫れ楚王の人と爲りや、(一二)形尊うして嚴。其の罪に於けるや、赦す無きこと虎の如し。夫の(一三)佞人正德に非ずんば、其れ孰か能く撓まさん。故に聖人、其の(一四)窮するや、家人をして其の貧を忘れしめ、其の(一五)達するや、王公をして爵祿を忘れて卑きに化せしむ。(一六)其の物に於けるや、之と與に娛しみを爲し、其の人に於けるや、(一七)物の通を樂しんで己を保つ。故に(一八)或は言はず

知ニ大均一。知ニ大方一。知ニ大信一。知ニ大定一。至矣。大一通ㇾ之。大陰解ㇾ之。大目視ㇾ之。大均緣ㇾ之。大方體ㇾ之。大信稽ㇾ之。大定持ㇾ之。盡有天。循有照。冥有樞。始有彼。則其解之也。似ニ不ㇾ解之者一。其知ㇾ之也。似ㇾ不ㇾ知ㇾ之也。不ㇾ知而後知ㇾ之。其問ㇾ之也。不ㇾ可ニ以有一ㇾ崖。而不ㇾ可ニ以無一ㇾ崖。頡滑有ㇾ實。古今不ㇾ代。而不ㇾ可ニ以虧一。則可ㇾ不ㇾ謂ㇾ有ニ大揚搉一乎。闔不ニ亦問一ㇾ是已。奚惑然爲。以ㇾ不ㇾ惑解ㇾ惑。復ニ於不ㇾ惑一。是尙大不ㇾ惑。

重して國を亡ぼし民を戮するもの萬古より衰えざれど其の然る所以を講明するを知らず 〔一三〕 足の地に於けるや踐む所狹しと雖も踐まざる所の廣きを恃みて後善く博く踐みゆくを得 〔一四〕 人の知は少なれども其の知らざる所を恃みとして天と知を同じうし天理を知る 〔一七〕 渾沌未だ剖れざる之を大一と云ふ差別の分るゝを一以て通ずるなり 〔一八〕 至靜にして感ずる所無きを大陰といふ動けば應ずるあり故に靜以て之を解く 〔一九〕 無心にして觀るは大目にして觀るの至なり 〔二〇〕 其の性に循へば物皆平しからざるなし之を大均と云ふ 〔二一〕 虛にして衆がず物を容れて窮り無し故によく體す 〔二二〕 誠すれば不信あれど稽せざれば不信無し故に稽へて誤らざるなし 〔二三〕 有爲なれば定まらず無爲なれば常に定まりて變せず故に之を以て持すれば動かず 〔二四〕 人事を經盡すれば其處に天あり 〔二五〕 自然に從へば自ら明 〔二六〕 冥々の中に樞要の我を運ずるもの存す 〔二七〕 未有始の先に彼卽ち主宰存すれども之を解き知るは解得ならざる可らざるが故に解かず知らざるに似たり 〔二八〕 崖際ありとすべきにあらねど亦崖際なしとするも不可蓋は體の有無を超えたり 〔二九〕 升降升下し運動旋轉して捉ふべき無きが如くなれど其の中に實あり 〔三〇〕 古今に亘つて更代なく一毫の缺くる所なし 〔三一〕 揚げて引くなり卽ち著名にして掩ふべからざるなり

則陽

能。其於府也殆。殆之成也不給改。禍之長也茲萃。其反也緣功。其果也待久。而人以爲己寶。不亦悲乎。故有亡國戮民無已。不知問是也。故足之於地也踐。雖踐。恃其所不蹍。而後善博也。人之知也少。雖少。恃其所不知。而後知天之所謂也。知大一。知大陰。知大目。

めに彼あり、則ち其の之を解くや、之を解かざるものに似、其の之を知るや、之を知らざるに似るなり。知らずして後に之を知る。其の之を問ふや、以て崖ありと(二八)すべからざれども、以て崖なしとすべからず。(二九)頡滑實あり、(三〇)古今代へずして、以て虧くべからず、則ち(三一)大揚搉ありと謂はざるべけんや。闔ぞ亦是を問はずしてやまん。奚ぞ惑ふこと然く爲る。惑はざるを以て惑へるを解き、惑はざるに復らば、是れ尙くは大に惑はじと。

(一) 越王句踐は吳王扶差に破られ甲楯の士三千を以て會稽山にたてこもる (二) 越の大夫種は今越の亡ぶは他日起つて吳を亡ぼし越を存する所以なるを知る (三) 吳亡びて後句踐の嫌疑にふれて其の誅せらるゝを知らず (四) 梟の眼は夜視るに適し鶴の脛長けれども其の宜しにかきなへるにて之を除けば悲しむ (五) 風が河を吹過ぐる時は水の減ずることあり又日の照らしすぐること燥なる時にも水の減ずることあり (六) 風日相與に河を守るも河水敢へて缺きざるは源を恃んで流るゝものなればなり (七) 水が土に從ふは周到にして土あれば必ず在り又影は人に從はざる所無々し (八) 物の物に守ひ相類ッ相恃んで離れず (九) 目と耳と心と其の聰明を弄し外物を逐ふは自ら相恃んで自然に順はざる故に危し (一〇) 人の才能は之を藏積する所に危し (一一) 其の耳目心能の自然に反して危きに到れるものは改めんとするも及はず (一二) 一旦誤つて復自然に反るには功を積んで然る後に得べきものにて其の成果を得るには久しきを待つべきもの (一三) 然るに人は知能を以て無上の寶となすは悲しむべし (一四) 知能を偏

所以懸。故曰。鴟目有所適。鶴脛有所節。解之也悲。故曰。風之過河也有損焉。日之過河也有損焉。請只。風與日相與守河。而河以爲未始其攖也。恃源而往者也。故水之守土也審。影之守人也審。物之守物也審。故目之於明也殆。耳之於聰也殆。心之於殉也殆。凡

守らしむるも、而かも河は以て未だ始めより其れ攖れずと爲すなりと。(六)源を恃んで往くものなればなり。故に(七)水の土を守るや審なり、影の人を守るや審なり、(八)物の物を守るや審なり。故に(九)目の明に於けるや殆く、耳の聰に於けるや殆く、心の殉に於けるや殆し、凡そ能は、其の府に於てや殆し。(一〇)殆さの成るや改むるに給がず、禍の長ずる(一一)玆に萃まる。(一二)其の反るや功に緣り、其の果や久しきを待つ。而るに人以て己の(一三)寶と爲す、亦悲しからずや。故に(一四)亡國戮民あつて已むことなけれども、是を問ふことを知らざるなり。故に(一五)足の地に於けるや踐む、踐むと雖も、其の蹍まざる所を恃んで、後善く博きなり。(一六)人の知や少、少と雖も、其の知らざる所を恃んで、後に天の謂ふ所を知るなり。大一を知り。大陰を知り、大目を知り、大均を知り、大方を知り、大信を知り、大定を知るに、至れり、(一七)大一之を通じ、(一八)大陰之を解き、(一九)大目之を視、(二〇)大均之に緣り、(二一)大方之を體し(二二)大信之を稽へ、(二三)大定之を持す、(二四)盡きて天あり、(二五)循うて照あり、(二六)冥に樞あり、(二七)始

意。以レ目視レ目。以レ耳聽レ耳。以レ心復レ心。若レ然者。其平也繩。其變也循。古之眞人。以レ天待レ之。不二以レ人入一レ天。古之眞人。得レ之也生。失レ之也死。得レ之也死。失レ之也生。藥也其實菫也。桔梗也。雞廱也。豕零也。是時爲レ帝者也。何可二勝言一。

を失ふは生。藥(九)や其の實は菫なり、桔梗なり、雞廱なり、豕零なり。是れ時に帝たるものなり、何ぞ勝て言ふべけん。

(一) 神人は衆の至り歸することを惡む (二) 私に親しまず (三) 德を抱き持ち和を養うて天下の公に順ふ (四) 眞人は蟻に於て其の知を棄て魚の水中に處りて水を忘るゝ自適の計を得、羊の至柔なるも尙意あるを棄てゝ凡て無爲玄默を樂しむ (五) 視れども意なく聽けども意無く識れども意なく心を心に反す (六) 正平にして私曲あるなきこと繩の如く物に循うて變じて窮まらず (七) 其の平其の變唯自然に待ちて順應し有心を以て寧靜の天をみださず (八) 生を得とせば死は失、死を得とせば生は失、死生畢竟する一にして得失無し (九) 藥を以て言はゞ其の實は有毒の菫(烏頭)も氣を通ずる桔梗も脾を補ふ雞廱(芡實)も水を利する豕零(豬令)も各ゝ得失効用ありて治を主る時は其の藥が主藥となるべきものにて何ぞ始めより之を得とし之を失として勝げていふべけんや

句踐也以二甲楯三千一棲二於會稽一。唯種也能知二亡之所一以存。唯種也。不レ知三其身之

(一)勾踐や、甲楯三千を以て會稽に棲む、唯(二)種や、能く亡ぶるの存する所以たるを知る、唯種や、(三)其の身の愁ふる所以を知らず。故に曰く、(四)鴟目適する所あり、鶴脛節する所あり、之を解けば悲しむと。故に曰く、(五)風の河を過ぐるや損することあり、日の河を過ぐるや損することあり、請只、風と日と相與に河を

也。此以域進。此以域退。此其所謂濡需者也。卷婁者舜也。羊肉不慕蟻。蟻慕羊肉。羊肉羶也。舜有羶行。百姓悅之。故三徙成都。至鄧之虛。而十有萬家。堯聞舜之賢。擧之童土之地。曰冀得其來之澤。舜擧乎童土之地。年齒長矣。聰明衰矣。而不得休歸。所謂卷婁者也。

めに害はるゝもの　(四) 淺見にして自ら悦び足れりとなして道の根本たる未始有物を知らず　(五) 豕に生ずる蝨　(六) 疏毛を擇び取りて廣大なる宮殿苑囿となす　(七) 蹄の曲りたる所　(八) 股脚　(九) 安全なる宮便利なる場處　(一〇) 屠者が一度臂を揮つて草を布き、烟火を以て燔す時は己も俱に毛と共に焦ぐるを知らず　(一一) これ域中に隔離して域外に超絕することを知らず　(一二) 舜は仁義といへる德を行ひゐるによつて百姓蟻の如く慕ひよる　(一三) 地名　(一四) 擧用して草木も生ぜざる不毛の地に置く　(一五) 人民來りて舜の惠澤を受けんことを願ふ

是以神人惡衆至。衆至則不比。不比則不利也。故無所甚親。無所甚疏。抱德煬和。以順天下。此謂眞人。於蟻棄知。於魚得計。於羊棄

是を以て(一)神人は衆の至るを惡む、衆至れば則ち(二)比せず、比せざれば則ち利せざるなり。故に甚だ親なる所なく、甚だ疏なる所なく、(三)德を抱き和を煬めて、以つて天下に順ふ。此を眞人と謂ふ。(四)蟻に於て知を棄て、魚に於て計を得、羊に於て意を棄つ。(五)目を以て目を視、耳を以て耳を聽き、心を以て心に復す。然るが若きものは、(六)其の平や繩、其の變や循、古の眞人、(七)天を以て之を待ち、人を以て天に入らず。古の眞人、(八)之を得るや生なれば、之を失ふは死、之を得るや死なれば、之

濡需者。有二卷婁者一。所レ謂暖姝者。學二一先生之言一。則暖暖姝姝而私自說也。自以爲レ足矣。而未レ知レ未三始有レ物也。是以謂二暖姝者一也。濡需者。豕蝨是也。擇二疏鬣一。自以爲二廣宮大囿一。奎蹄曲隈。乳間股脚。自以爲二安室利處一。不レ知下屠者之一旦鼓レ臂布レ草。操二煙火一。而己與レ豕俱焦上

一先生の言を學べば、則ち暖暖姝姝(七)として私かに自ら說ぶなり。自ら以て足れりと爲して、未だ未だ始めより物あらざるを知らざるなり。是を以て暖姝と謂ふなり。濡需なるものは、豕蝨(五)是れなり、疏鬣(六)を擇んで、自ら以て廣宮大囿と爲し、奎蹄曲隈(七)(八)、乳間股脚を、自ら以て安室利處(九)と爲す、屠者の一旦臂を鼓し草を布き(一〇)、煙火を操れば、己は豕と倶に焦ぐるを知らざるなり。此れ域を以て進み、此れ域を以て退く。此れ其の所謂濡需なるものなり。卷婁なるものは舜なり。(一一)羊肉は蟻を慕はずして、蟻は羊肉を慕ふ、羊肉羶ければなり。舜に羶行あり、(一二)百姓之を悅ぶ。故に三徙して都を成し、鄧の虛に至つて(一三)、十有萬家あり。堯は舜の賢を聞いて、之を童土の地に擧ぐ(一四)。曰く、冀はくは其れ來りて澤するを得ん(一五)と。舜は童土の地に擧げられ、年齒長じ、聰明衰ふるも、而かも休歸するを得ず。所謂卷婁なるものなり。

(一) 淺見にして自ら喜ぶものあり (二) 拘泥して變通を知らざるものあり (三) 羊肉を盛る器、有する所の才のた

吾恐其爲天下笑。後世其人與人相食與。夫民不難聚也。愛之則親。利之則至。譽之則勸。致其所惡則散。愛利出乎仁義。捐仁義者寡。利仁義者衆。夫仁義之行。唯且無誠。且假夫禽貪者器。是以一人之斷制利天下。譬之猶一覕也。夫堯知賢人之利天下也。而不知其賊天下也。夫唯外乎賢者知之矣。

らざるなり。之を愛すれば則ち親しみ、之を利すれば則ち至り、之を譽むれば則ち勸み、其の惡む所を致せば則ち散ず。(四)愛利は仁義に出づ、仁義を捐つるものは寡く、仁義を利するものは衆し。夫れ(五)仁義の行は、唯且つ誠なくして、且に夫の禽貪者に器を假さんとす。是れ一人の(六)斷制を以て天下を利せんとす、之を譬へば猶ほ一覕(七)のごときなりと。夫れ堯賢人の天下を利するを知つて、而して其の天下を賊ふを知らざるなり。夫れ唯ゝ(八)賢を外にする者にして之を知らん。

(一) 勉努して仁を行ふ (二) 後世に至り天下亂れて人と人と相貪食するに至るべきか (三) 民は其の器を集むることと敢へて難きに非ず (四) 民を愛し民を利することは仁義より出づ (五) 仁義の行は性を矯飾してなすものなるゆゑに禽獸を貪りて獲するものに器具を假さんとするものと同じく仁義を假りて私利を行ふに至る (六) 一人の決斷裁制を以て天下を利せんとし私意を見れず (七) 物の彩錦なれるを省みず一瞥に切斷するが如し (八) 賢に拘はれずして之を外にし得るものにして賢が天下を賊ふを知る

有暖姝者。有

(一)暖姝なるものあり、(二)濡需なるものあり。(三)卷婁なるものあり。所謂暖姝なるものは

好レ田。而鶉生ニ於宎一。若勿レ怪何邪。吾所下與ニ吾子一遊上者。遊ニ於天地一。吾與レ之邀ニ樂於天一。吾與レ之邀ニ食於地一。吾不ニ與レ之爲レ事。不ニ與レ之爲レ謀。不ニ與レ之爲レ怪。吾與レ之乘ニ天地之誠一。而不ニ以レ物與レ之相攖一。吾與レ之一ニ委蛇一。而不三與レ之爲ニ事所一レ宜。今也然有ニ世俗之償一焉。凡有ニ怪徵一者。必有ニ怪行一。殆乎。非下我與ニ吾子一之罪上。幾天與レ之也。吾以レ是泣也。無ニ幾何一。而使三梱之ニ於燕一。盜得ニ之於道一。全而鬻レ之則難。不レ若ニ刖レ之則易一。於レ是則而鬻ニ之於齊一。適當ニ渠公之街一。然身食レ肉而終。

(一) 相者　(二) 八子の一　(三) 驚喜の貌　(四) 一國の主君と食を同じうするほどの尊貴の身分となつて一生を終ふ　(五) 如何にして是の如き不幸の極に至れるや　(六) 恩澤父母妻の三族に及ぶ　(七) 酒肉が口に入るに其の福盡く　(八) 未だ嘗て牧畜をなさゞるに牝羊室の西南隅に生る　(九) 田獵を好まざるに鶉室の東北隅に生ず　(一〇) 有り得べからざるものが生ずるを怪しまざるは何故ぞ。即ち梱が國君と同食するを譬へていふ　(一一) 天に順ひて自ら樂しみ世に順ひて自ら養ふ　(一二) 吾梱と世事をなさず私謀を爲さず自然に背きたる怪をなさず　(一三) 天地の至誠と一致して物を以て心を亂さず　(一四) 自然の命に從ひて世俗の行を爲さず　(一五) 國君と同食するをいふ。俗的の報償を受く　(一六) 盜起りて梱を途に捕ふ　(一七) 完全なる人として賣るは毀覺の虞あり　(一八) 渠公に購はれて街正となり肉を食つて身を終れり

齧缺遇ニ許由一。曰。子將ニ奚之一。曰。將レ逃レ堯。曰。奚謂邪。曰。夫堯。畜畜然仁。

齧缺、許由に遇ふ。曰く、子將に奚に之かんとすると。曰く、將に堯を逃れんとすと。曰く、奚の謂ぞやと。曰く、夫れ堯、(一)畜畜然として仁なり。吾れ其の天下の爲めに笑はれんことを恐る。(二)後世其れ人と人と相食まんか。夫れ民は(三)聚め難か

子綦索然出涕曰。吾子何爲以至於是極也。九方歅曰。夫與國君同食。澤及三族。而況於父母乎。今夫子聞之而泣。是禦福也。子則祥矣。父則不祥。子綦曰。歅女何足以識之。而梱祥邪。盡於酒肉入於鼻口矣。而何足以知其所自來。吾未嘗爲牧。而牂生於奧。未嘗

と。子綦曰く、歅女何ぞ以て之を識るに足らん。梱の祥や、(七)酒肉の鼻口に入るに盡く。而も何ぞ以て其の自つて來る所を知るに足らん。吾(八)未だ嘗て牧を爲さざるに牂は奧に生じ、未だ嘗て(九)田を好まざるに、鶉は宎に生ず。(一〇)若怪しむなきは何ぞや。吾れ吾が子と遊ぶ所のものは、天地に遊ぶなり。吾れ之と樂を天に邀へ、吾れ之と(一一)食を地に邀ふ。(一二)吾れ之と事を爲さず、之と謀を爲さず、之と怪を爲さず、吾れ之と(一三)天地の誠に乘じて、物を以て之を相攖らず、吾れ之と(一四)委蛇を一にして、而して之と事の宜しき所を爲さず。今や然かも(一五)世俗の償あり。凡そ怪徴あるものは、必ず怪行あればなり。殆いかな、我と吾が子との罪にあらず。幾んど天之を與ふるなり、吾れ是れを以て泣くなりと。幾何もなくして梱をして燕に之かしむ、(一六)盗之を道に得たり。(一七)全くして之を鬻ぐは則ち難し、之を刖るの則ち易きに若かず、是に於て刖つて之を齊に鬻ぐ。適ま(一八)渠公の街に當る。然かも身は肉を食つて終れり。

實不レ聚。名不レ立。此之謂ニ大人一。狗不下以ニ善吠一爲中良。人不下以ニ善言一爲中賢。而況爲レ大乎。夫爲レ大不レ足ニ以爲一レ大。而況爲レ德乎。夫大備矣。莫レ若ニ天地一。然奚求焉。而大備矣。知ニ大備一者。無レ求無レ失無レ棄。不ニ以レ物易一レ已也。反レ已而不レ窮。循レ古而不レ摩。大人之誠。

遺れて德を舉げ言は知らざる所を言ふべきものに非ざるに知らざる所までも辯ぜんとして備といひ盡といふ名目を爭ふは不祥 (一三) 聖人は生時人爵の尊貴無く死して謚號の稱ふべきなく貨利己に聚らず名聲天下に顯れず (一四) 大人は名立たず故に之を大とするに足る時は大人に非ず況して德とすることは猶以て難し (一五) 大に備はりて足れるものは天地に若くものなけれど天は何をも求めずして備はれり (一六) 外に求むれば物と窮まれども己に反つて求むる時は窮まることなく古代の無爲玄默の道に從つて磨滅することなし (一七) 是大人の至理なり

子綦有ニ八子一。陳ニ諸前一。召ニ九方歅一曰。爲レ我相。吾子孰爲レ祥。九方歅曰。梱也爲レ祥。子綦瞿然喜曰。奚若。曰。梱也將下與ニ國君一同食上。以終ニ其身一。

子綦に八子あり、諸を前に陳ね、九方歅(一)を召して曰く、我が爲めに相せよ、吾が子孰れか祥たらんと。九方歅曰く、(二)梱や祥たりと。子綦瞿然として喜んで曰く奚若と。曰く、梱や將に國君と同食して、以て其の身を終へんとす(三)と。子綦索然として涕を出して曰く、(四)吾が子何(五)すれぞ以て是の極に至れるやと。九方歅曰く、夫れ國君と同食すれば、(六)澤三族に及ぶ、而るを況んや父母に於てをや。今、夫子之を聞いて泣く、是れ福を禦ぐなり。子は則ち祥なり、父は則ち不祥なり

有喙三尺。彼之謂不道之道。此之謂不言之辯。故德總乎道之所一。而言休乎知之所不知。至矣。道之所一者。德不能同也。知之所不能知者。辯不能擧也。名若儒墨而凶矣。故海不辭東流。大之至也。聖人幷包天地。澤及天下。而不知其誰氏。是故生無爵。死無謚。

るを知らず。是の故に生きて爵なく、死して諡なく、實は聚らず、名は立たず、此を之れ大人と謂ふ。(一二)狗は善く吠ゆるを以て良となさず、人は善く言ふを以て賢と爲さず、而るを況んや大と爲るをや。夫れ、(一四)大と爲れば以て大と爲るに足らず、而るを況んや德と爲るをや。(一三)夫れ大に備はるは、天地に若くは莫し、然れども奚をか求めんや、而かも大に備はれり。大に備はるを知るものは、(一六)求むるなく失ふなく棄つるなく、物を以て己に易へざるなり。己に反つて而して窮まらず、古に循つて而して摩せず、(一七)大人の誠ありと。

(一)酒席を設く (二)楚の令尹 (三)姓は熊、名は宜僚、楚の賢者 (四)古人はかゝる宴會の時必ず言ふ所あり不言の言といふ敎を聞き未だ嘗て言ひしことなけれど今之を言はむ (五)楚の白公勝亂を作さんと欲し宜僚の勇を聞き之を招きて令尹子西、司馬子綦を殺さむとせしが宜僚彈丸を弄して使者と語らず故に反事終に成らざりき (六)安臥して寢者の持つ所の羽扇を執り更に爲す所無くして郢都の人兵器を捨て平和を樂しむ (七)願はくば三尺の喙を得ば或はよく言ふを得んか知らねど今の所言ふ所なし (八)孫叔敖と宜僚は無爲にして道を得たるものゆゑ不言の道といふ (九)孔子は多く言はずして言ふ所を能くせし故に不言の辯といふ (一〇)德は唯一絶對の道に融合統一せられ言は知の知らざる所に止まりて知ることのみを言ふが至當なり (一一)道は德以上のものならざるに道を

而知レ之。若我而不レ賣レ之。彼惡得而鬻レ之。嗟乎我悲二人之自喪一者。吾又悲二夫悲レ人者一。吾又悲下夫悲二人之悲一者上。其後而日遠矣。

仲尼之レ楚。楚王觴レ之。孫叔敖執レ爵而立。市南宜僚受レ酒而祭。曰。古之人乎。於レ此言已。曰。丘也聞二不言之言一矣。未二之嘗言一。於レ此乎言レ之。市南宜僚弄レ丸。而家之難解。孫叔敖甘寢秉レ羽。而郢人投レ兵。丘願

仲尼楚に之く。楚王之に（一）觴す。（二）孫叔敖は爵を執つて立ち、（三）市南宜僚は酒を受けて祭る。曰く、（四）古の人か、此に於て言ふのみと。曰く、丘や（五）不言の言を聞けり。未だ之を嘗て言はず、此に於てか之を言はん。（六）市南宜僚丸を弄して、兩家の難角け、（七）孫叔敖甘寢して羽を秉つて、郢人兵を投ず。（八）丘願はくは喙の三尺あらんと。（九）彼を之れ不道の道と謂ひ、（一〇）此を之れ不言の辯と謂ふ。故に（一一）徳は道の一なる所に總べられ、而して言は知の知らざる所に休するは、至れり。道の一なる所のものは、徳は同じうすること能はざるなり、知の知ること能はざる所のものは、辯擧ぐること能はざるなり。（一二）名儒墨の若きあるは凶なり。故に海は東流を辭せず、大の至りなり。聖人は天地を幷包し、澤、天下に及んで、而して其の誰氏な

ふものを悲しむ（一一）吾今人を悲みしが又顧みて人を悲しむものが己の悲しむべきを忘れたるを悲しむ（一二）自他共になほ悲樂に拘して超然無心ならざるを悲しむ（一三）其の後に漸く物累に遠ざかり槁骸死灰に至れり

以二汝色一驕レ人哉。顏不疑歸而師二董梧一、以助二其色一、去レ樂辭レ顯。三年而國人稱レ之。

南伯子綦隱レ几而坐、仰レ天而噓。顏成子入見曰、夫子物之尤也。形固可レ使レ若二槁骸一、心固可レ使レ若二死灰一乎。曰、吾嘗居二山穴之中一矣。當二是時一也、田禾一覩レ我、而齊國之衆、三賀レ之。我必先レ之、彼故知レ之。我必賣レ之、彼故鬻レ之。若我而不レ有レ之、彼惡得

（一）南伯子綦几に隱つて坐し、天を仰いで噓す。（二）顏成子入つて見て曰く、（三）夫子は物の尤なり、（四）形固より槁骸の若くならしむべく、心固より死灰の若くならしむべきかと。曰く、吾嘗て山穴の中に居る。是の時に當つてや、（五）田禾一たび我を覩て、（六）齊國の衆、三たび之を賀せり。（七）我必ず之に先んず、彼故に之を知れるなり。我必ず之を賣る、彼故に之を鬻げるなり。（八）若し我にして之を有せずんば、彼れ惡んぞ得て之を知らん。（九）若し我にして之を賣らずんば、彼れ惡んぞ得て之れを鬻がん。（一〇）嗟乎我人の自ら喪ふものを悲しむ。（一一）吾又夫の人を悲しむものを悲しむ、（一二）吾又夫の人の悲しむを悲しむものを悲しむと。（一三）其の後にして日に遠ざかれり。

（一）顏に出づ　（二）氣を吐く　（三）先生は物のすぐれ人なり　（四）其の形體は死骸の如く心は冷灰の如く物外に超然たらしむるを得べきや　（五）齊王姓は田は禾　（六）齊人は其の王が賢人を得たることを三度賀せり　（七）我自ら先んじて誇る所あるゆゑに齊王之を知るなり　（八）若し我有する所無くして無價ならば齊王如何にして我を知らん　（九）若し我が有する所の知を賣る所なくば齊王何ぞ之を鬻ぐことを得むや　（一〇）あゝ我は名を賣つて實を喪

帝一。而哀下不二已若一者上。以レ德分レ人。謂二之聖一。以レ財分レ人。謂二之賢一。以レ賢臨レ人。未レ有二得レ人者一也。以レ賢下レ人。未レ有二不レ得レ人者一也。其於レ國有レ不レ聞也。其於レ家有レ不レ見也。勿レ已則隰朋可。

吳王浮一于江一。登二乎狙之山一。衆狙見レ之。恂然棄而走。逃二於深蓁一。有二一狙一焉。委蛇攫抓。見二巧乎王一。王射レ之。敏給搏二捷矢一。王命二相者一趨射レ之。狙執死。王顧謂二其友顏不疑一曰。之狙也。伐二其巧一恃二其便一。以敖レ予。以至二此殛一也。戒レ之哉。嗟乎。無下

吳王江に浮び、狙の山に登る。衆狙之を見て、恂然として棄てて走り、深蓁に逃る。(一)一狙あり、委蛇攫抓して、(二)巧を王に見めす、王之を射る。敏給にして捷矢を搏つ。(三)王は相者に命じて趨つて之を射しむ。(四)狙執死す。(五)王顧みて其の友顏不疑に謂つて曰く、之の狙や、其の巧に伐り其の便を恃みて、以て予に敖り、以て此の殛に至れるなり。(六)之を戒めよや。嗟乎、汝の色を以て人に驕ることなかれよやと。(七)顏不疑歸つて董梧を師とし、以て其の色を助き、樂を去り顯を辭す。(八)三年にして國人之を稱す。

(一) 多くの猿ども吳王の登り來るを見て恐懼して山を棄てて走り林叢の中にかくる (二) 身を宛轉し物をつかむ身振りして己の藝をしめす (三) 敏捷にして飛箭を手にて打つ (四) 左右の近臣 (五) 矢をつかみたるまゝにて死す (六) かくの如く死せり (七) 汝の顏色にあらはして人に驕ること勿れ (八) 顏色を去り耳目の樂みをすて榮達を辭す

人惡乎屬レ國而可。管仲曰。公誰欲レ與。公曰鮑叔牙。曰不可。其爲レ人潔廉善士也其於レ不二己若一者上不レ比レ之。又一聞二人之過一終身不レ忘。使二之治一レ國。上且レ鉤二乎君一。下且レ逆二乎民一。其得二罪於君一也。將レ弗レ久矣。公曰。然則孰可。對曰。勿レ已則隰朋可。其爲レ人也。上忘而下畔。愧レ不レ若二黃

其の己に若かざるものに於て之と比せず、又一たび人の過ちを聞けば、終身忘れず。之をして國を治めしめば、(五)上は且に君に鉤かんとし、下は且に民に逆らはむとす。其の罪を君に得るや、將に久しからざらんとすと。公曰く、然らば則ち孰れか可ならんと。對へて曰く、已むなくんば則ち隰朋可なり。其の人と爲りや、(六)上忘れて而して下畔く。皇帝に若かざるを愧ぢて、己に若かざるものを哀れむ。德を以て人に分つ、之を聖と謂ふ、財を以て人に分つ之を賢と謂ふ。(七)賢を以て人に臨めば、未だ人を得る者あらざるなり。賢を以て人に下れば、未だ人を得ざる者あらざるなり。其の國に於ける聞かざるあるなり、其の家に於る見ざるあるなり。已むなくんば則ち(八)隰朋可なりと。

㈠ 桓公仲を稱んで仲父といふ。病篤 ㈡ 萬一の事諱しとすべからず。舊通は諱の字爲の字を用ふ列子によつて改めたり ㈢ 予何人に國家を依托してよからむ ㈣ 清潔貞廉の善士 ㈤ 上に於ては君に背くべく下に於ては民意に反せむとす ㈥ 爲すに自分を主とせざる故に上に忘れられ下民も之を親くことを忘る ㈦ 賢人を以て人に臨む時は人を得ること能はざれど賢を以て人に下る時は人を得ざることなし ㈧ 其の國に於ては聞かざる所あるが如く其の家に於ては見ざる所あるが如く有爲造作の迹なし

惠子之墓。顧謂從者曰。郢人堊漫其鼻端。若蠅翼。使匠石斲之。匠石運斤成風。聽而斲之。盡堊而鼻不傷。郢人立不失容。宋元君聞之。召匠石曰。嘗試爲寡人爲之。匠石曰。臣則嘗能斲之。雖然。臣之質死久矣。自夫子之死也。吾無以爲質矣。吾無與言之矣。

の鼻端を漫る、蠅翼の若し。(三)匠石をして之を斲らしむ。匠石斤(四)を運らし風を成す、聽して之を斲らしむ。(五)堊を盡くせども鼻傷かず。郢人立つて容を失はず。宋の元君之を聞き、匠石を召して曰く、嘗試に寡人の爲めに之を爲せと。匠石曰く、臣は則ち嘗て能く之を斲れり、然りと雖も臣の質(六)は死すること久しと。夫子の死せしより、吾れ以て質と爲すべき無し、吾れ與に之を言ふべき無しと。

(一)郢は楚の都 (二)白土にて誤つて其の鼻端を塗ること薄きこと蠅の羽の如し (三)工人の名 (四)斧を振ふ音風の如し (五)恐れずして之を削らしむ (六)質は刃を受くる臺郢人を斥す

管仲有病。桓公問之曰。仲父之病病矣。可不諱云。至於大病、則寡

管仲病あり、桓公之に問うて曰く、仲父(一)の病病なり。諱(二)まずと云ふべけんや。大病に至らば、則ち寡人(三)惡か國を屬して可ならんと。管仲曰く、公誰にか與へんと欲すると。公曰く鮑叔牙と。曰く不可なり。其の人と爲り潔廉(四)の善士なり。

二十五弦皆動。未始異於聲。而音之君已。且若是者邪。惠子曰。今夫儒墨楊秉。且方與我以辯。相拂以辭。相鎭以聲。而未始吾非也。則奚若矣。

莊子曰、齊人蹢子於宋者。其命閽也。不以完。其求鈃鍾也。以束縛。其求唐子也。而未始出域。有遺類矣。夫楚人寄而蹢閽者。夜半於無人之時。而與舟人闘。未始離於岑。而足以造於怨也。

莊子送葬。過

莊子曰く、齊人の子を宋に蹢かすものあり、其の閽を命ぜらるや、完を以てせず、其の(二)鈃鍾を求むるや、束縛を以てす。其の(三)唐子を求めて、未だ始めより域を出でざれば、遺類あり。夫の(四)楚人、寄らんとして蹢く。閽者夜半人無きの時に於てして、舟人と闘はんに、未だ始めより岑を離れずして、以て怨を造すに足れりと。

(一) 閽者は必ず刖者を用ひしを以て閽者を命ぜられし時はわざと其の子を不具者とす　(二) 小鐘を求められし時には傷つかざらしめため荷造りして運べり是其の子の傷くをおそれずして鐘の傷くをおそるゝものにて足下が性命の情を重んずると其の揆一なり　(三) 遠子を探すに境外まで出でざる時は手落あり右の四者惠子を非とする所なしと雖もなほ惠に非とするもの雖きかうたがはし　(四) 楚人舟に寄寓せんとしてゆくに其の從者夜半人無きを時機とする所の舟人と闘ふ時は岸を出でずして已に人の怨を結ぶ楚人與り知らずと雖も怨まるゝことを免れず惠子猶ほ闘はしてまだ未とせられずといふも謂るべからず

莊子葬を送り、惠子の墓を過ぎて、顧みて從者に謂つて曰く、(一)郢人、(二)堊もて其

爲レ五。果孰是邪。或者若ニ魯遽一者邪。其弟子曰。我得ニ夫子之道一矣。吾能冬爨レ鼎。而夏造レ氷矣。魯遽曰。是直以レ陽召レ陽。以レ陰召レ陰。非ニ吾所レ謂道一也。吾示ニ子乎吾道一。於レ是乎爲レ之調レ瑟。廢ニ一於堂一。廢ニ一於室一。鼓レ宮宮動。鼓角角動。音律同矣。夫或改ニ調一弦一。於ニ五音一無レ當也。鼓レ之

れば宮動き、角を鼓すれば角動けり。音律同じければなり、夫れ或は一弦を改め調ふれば、五音に於て當ること無きなり、之を鼓すれば二十五弦皆動く、(一二)未だ始(一三)めより聲に異なるあらずして、而して音の君あればのみ、且つ是の若きものかと。
恵子曰く、今夫れ儒墨楊秉、且つ方に我れと以て辯じ、(一四)相拂ふに辭を以てし、相鎭むるに聲を以てして、而して未だ始めより吾を非とせずんば、則ち奚若んと。

(一) 弓を射るもの中ることを豫期せざるに偶倖にして當るを弓の名人といふならば天下皆羿の如く善射也 (二) 善射として可也 (三) 萬人共通の是 (四) 儒者、墨翟、楊朱、公孫龍の四者に恵子を加へて此の五者の中何れが是なるか (五) 周初の人 (六) 魯遽の弟子 (七) 陰陽を支配して冬の寒きに火を用ひず鼎に炊ぎ夏の暑きによく氷を造る (八) 冬至の日は陽氣已に生じ夏至の月は陰氣已に生ず陽に陽を招けば冬も寒からず陰に陰を招けば夏も暑からず陰陽互に和合する (九) 吾がいふ所の道に違へり (一〇) 大琴の調子を合せ一を表座敷に置き一を奥の間に置く (一一) 此の琴の宮調を彈ずれば彼の琴の宮調の絃之に應じて動く (一二) 一絃の調子を變ふるときは宮商角徴羽の五音に於て相應ぜず之を彈ずる時は琴其の利を失うて二十五弦皆動く (一三) 始めより聲に異なる所あるにあらで一は和して音の主たるものあるによるのみ魯遽はかく普通なることを自ら高しとして誇る所あるが足下の自ら高しとするも亦かくの如きか (一四) 言辭を以て排斥し聲を高くして壓服するも未だ嘗て吾を非とすること能はざるは吾自ら是とせざるも自然に是なるわけなり

之業一則勤。百工有二器械之巧一則壯。錢財不レ積則貪者憂。權勢不レ尤則夸者悲。勢物之徒樂レ變。遭二時有一レ所レ用。不レ能二無爲一也。此皆順二比於歳一。不レ物二於易一者也。馳二其形性一。潛二之萬物一。終身不レ反。悲夫。

所にあへば儒家自然なる本能は才して勢利に趨く　(三)　百物の生成発育するは其の歳の序に順服周比して變ずるものにして物の自由に爲はること能はざるが如し　(四)　其の身心を驅馳して物外に超越すること能はず終心物欲のために役々たるは悲しむべし

莊子曰。射者非二前期一而中。謂二之善射一。天下皆羿也。可乎。惠子曰可。莊子曰。天下非レ有二公是一也。而各是二其所一レ是。是天下皆堯也。可乎。惠子曰可。莊子曰。然則儒墨楊秉四。與二夫子一

莊子曰く、射者の前期するにあらずして中るを、之れを善射と謂はゞ、天下皆羿なり。可ならんかと。惠子曰く可なりと。莊子曰く、天下公是あるにあらずして、各其の是とする所を是とせば、天下皆堯なり。可ならんかと。惠子曰く可なりと。莊子曰く、然らば則ち儒墨楊秉四、夫子と與に五たり、果して孰れか是なりや。或は魯遽の若き者か。其の弟子曰く、我れ夫子の道を得たり。吾れ能く冬鼎に爨ぎて、夏氷を造ると。魯遽曰く、是れ直陽を以て陽を召き、陰を以て陰を召くのみ。吾が所謂道にあらざるなり。吾れ子に吾が道を示さんかと。是に於てか之れが爲めに瑟を調へ、一を堂に廢き、一を室に廢く。宮を鼓す

之序。則不樂。察士。無凌誶之事。則不樂。皆囿於物者也。招世之士興朝。中民之士榮官。筋力之士矜難。勇敢之士奮患。兵革之士樂戰。枯槁之士宿名。法律之士廣治。禮樂之士敬容。仁義之士貴際。農夫無草萊之事則不比。商賈無市井之事則不比。庶人有旦暮

の士は朝に興り、中民の士は官に榮し、筋力の士は難に矜り、勇敢の士は患に奮ひ、兵革の士は戰を樂しみ、(五)枯槁の士は名に宿し、法律の士は治を廣め、禮樂の士は容を敬し、(六)仁義の士は際を貴ぶ。(七)農夫は草萊の事なければ則ち比せず、商賈は市井の事なければ則ち比せず。庶人は旦暮の樂あれば則ち勸み、(八)百工は器械の巧あれば則ち壯なり。錢財積まざれば則ち貧者憂へ、(九)權勢尤ならざれば則ち夸者悲む。(一〇)勢物の徒は變を樂しむ、(一一)時の用ふる所あるに遭へば、無爲なること能はざるなり。此れ皆歲に順比して、易ふるに物たらざるものなり。(一二)其の形性を馳せて、之れを萬物に潛め、終身反らず、悲しいかな。(一三)

(一) 知者は知を弄することを樂しむが故に思慮の變化なき時は樂しまず (二) 苛察にして明を誇るの士は人を淩ぎあばくことなければ樂しまず (三) 物にとらはる (四) 自ら衒うて世に求むる士は朝廷の上に起ち務めて民心を得むことを求むる士は官途に榮達し膂力の士は難に當つて力を誇り勇往果敢の士は暴患の間に奮ふ (五) 隱士は心を名聲にとゞめ法律の士は國家の治平を擴大す (六) 仁義の士は義理の截然としてきまりあるを尙ぶ (七) 農夫は耕種のことなければ相與にせず (八) 百工技藝に從ふものは器械を用ひるに巧みならば之を誇りとす (九) 權威勢望優れざる時は誇る者悲しむ (一〇) 勢に倚り物に附く輩は無指不變に陷らずして有爲變易を樂しむ (一一) 時の動かす

大隗之所ロ存。請問ヽ爲ニ天下一。小童曰。夫爲ニ天下一者。亦若レ此而已矣。又奚事焉。予少而自遊ニ於六合之内一。予適有ニ瞀病一。有ニ長者一教レ予曰。若乘ニ日之車一。而遊ニ於襄城之野一。今予病少痊。予又且ニ復遊ニ於六合之外一。夫爲ニ天下一亦若レ此而已。予又奚事焉。黄帝曰。夫爲ニ天下一者。則誠非ニ吾子之事一。雖レ然請ニ問爲ニ天下一。小童辭。黄帝又問。小童曰。夫爲ニ天下一者。亦奚以異ニ乎牧レ馬者一哉。亦去ニ其害レ馬者一而已矣。黄帝再拜稽首。稱ニ天師一而退。

黄帝又問ふ。小童曰く、夫れ天下を爲むるものは、亦奚ぞ以て馬を牧するものに異ならんや。亦其の馬を害するものを去るのみと。〔八〕黄帝再拜稽首、天師と稱して退く。〔九〕

（一）神の名、大道を擬人す　（二）前驅す　（三）上の御するもの前後に驅るもの七人をいふ　（四）わざと治めむとせば反つて治まらず無爲に從ふ時は治まるを評す　（五）予少時より自ら世界の内に遊びしに物累の爲に蔽はれて目くらむ病あり　（六）日を車として之に駕し襄城の野に遊べ　（七）天下を治むることは汝の關るべき事にはあるまじきが天下を治むる方法について敎へて敎へられたし　（八）馬を害するもののみ去つて其の他は自然に任す如く天下を害するものを去つて無爲ならば天下治まらん　（九）黄帝は再拜稽首して此の牧童を尊んで天師と稱して去れり

知士無ニ思慮之變一。則不レ樂。辯士無ニ談説

知士、思慮の變なければ、則ち樂しまず。〔一〕辯士、談説の序なければ、則ち樂しまず。〔二〕察士、凌誶の事無ければ、則ち樂しまず。〔三〕皆物に囿せらるゝものなり。〔四〕招世

若勿レ已矣。修二胸中之誠一以應二天地之情一而勿レ攖。夫民死已脱矣。君將惡乎用二夫偃一レ兵哉。

黄帝。將レ見二大隗乎具茨之山一。方明爲レ御。昌寓驂乘。張若謵朋前馬。昆閽滑稽後車。至二於襄城之野一。七聖皆迷。無レ所レ問レ塗。適遇二牧馬童子一。問レ塗焉曰。若知二具茨之山一乎。曰然。若知二大隗之所一レ存乎。曰然。黄帝曰。異哉小童。非三徒知二具茨之山一。又知二

黄帝、將に大隗(一)を具茨の山に見んとす。方明御たり。昌寓驂乘し、張若・謵朋前馬(二)たり、昆閽・滑稽後車たり。襄城の野に至る。七聖(三)皆迷ふ。塗を問ふ所無し。適牧馬の童子に遇うて塗を問うて曰く、若具茨の山を知るかと。曰く然りと。若大隗の存する所を知るかと。曰く然りと。黄帝曰く、異なるかな小童、徒に具茨の山を知るのみならず、又大隗の存する所を知れり。請ふ天下を爲むることを問はんと。小童曰く、夫れ天下を爲むるものも、亦此の若きのみ(四)又奚をか事とせん。予少き(五)よりして自ら六合の内に遊ぶ。予、適瞀病あり。長者あり、予に敎へて曰く、若日の車に乘じて、襄城の野に遊べと。今予が病少しく痊ゆ。予又且に復六合(六)の外に遊ばんとす。夫れ天下を爲むるも亦此の若きのみ。予又奚をか事とせむと。黄帝曰く、夫れ天下(七)を爲むるものは、則ち誠に吾子の事にあらじ。然りと雖も、天下を爲むることを請ひ問ふと。小童辭す。

不成。凡成美。惡器也。君雖爲仁義、幾且僞哉。形固造形。成固有伐。變固外戰。君亦必無盛鶴列於麗譙之間。無徒驥於錙壇之宮。無藏逆於得。無以巧勝人。無以謀勝人。無以戰勝人。夫殺人之士民、兼人之土地、以養吾私與吾神者、其戰、不知孰善。勝之惡乎在。君

徒驥すること無く、逆(八)を得に藏すること無く、巧を以て人に勝つこと無く、謀を以て人に勝つこと無く、戰ひを以て人に勝つこと無かれ。夫れ人の士民を殺し、人の土地を兼ね、以て吾が私と吾が神とを養ふものは、其の戰ひ、知らず(九)、孰れか善にして、勝の惡れにか在ることを。君若し已む(一〇)こと勿くんば、胸中の誠を修め、以て天地の情に應じて、擾すこと勿れ。夫れ民の死(一一)已に脱す、君將た惡にか夫の兵を偃する用ひんやと。

(一) 義のために戰を休めむと欲す是豈可ならむか (二) 愛するは有爲にして自然ならず故に害する因となる (三) 造作有爲の見地より之をなす時は何物も成就することなからむ (四) 善器は自然にして異なり兵器は凶なるが故に爭を作爲せむとす (五) 民を愛するの心をもつて有爲の形をなすときは形また形をなして歸する所なくして事を害せむ (六) 功成す所あれば誇る心あり (七) 充盈以にして兵を休むるに非ざる故に事情變ずる時はまた戰ふ (八) 鶴列の陣列を物見臺の間に飾らず社壇を祭る宮殿に歩騎の兵を陳ぬることなかれ (九) 民を愛するといふ美名を假りて無道を行ふなかれ (一〇) 其の戰爭は何れが善害にして勝敗何れに歸するかを知らず (一一) 戰ふこと無からむとのみ欲せば王の胸中の誠を養ひ天地の眞例に應じて擾すことなかれ (一二) かくて民已に死を脱する以上は何要に兵を休むることを云爲するを要すまじ

與形。武侯曰、何謂邪。徐無鬼曰。天地之養也一。登高不可以爲長。居下不可以爲短。君獨爲萬乘之主。以苦一國之民。以養耳目鼻口。夫神者不自許也。夫神者、好和而惡姦。夫姦病也。故勞之。唯君所病之何也。

(一) トチノ實と栗と　(二) ネギとニラ　(三) 吾を見棄てゝ訪はれざりしこと久し　(四) わが國家を制するの言を進めらるゝためにや　(五) 武侯曰く　(六) 君王の心と體とをいたはり安んぜんために來れり　(七) 天地の生を養ふは至公至正にして高位に居るとも長に非ず下位に居るも短に非ず是居るところの異なるのみ　(八) 一國の人民を苦しめ收斂して王の體を養ふも彼の天理良心なるものは之を是認せず　(九) 衆と共にすることを好んで私のためにするを惡む

武侯曰。欲見先生久矣。吾欲愛民而爲義偃兵。其可乎。徐無鬼曰。不可。愛民害民之始也。爲義偃兵、造兵之本也。君自此爲之。則殆

武侯曰く、先生を見んと欲すること久し。吾民を愛して、(一)義の爲めに兵を偃せんと欲す、其れ可ならんかと。徐無鬼曰く、不可なり。(二)民を愛するは、民を害するの始めなり。義の爲めに兵を偃するは、兵を造るの本なり。(三)君此より之を爲さば、則ち殆ど成らざらむ。凡そ(四)美を成すは、惡器なり。君仁義を爲すと雖も、幾んど且に僞らんとする哉。(五)形すれば固より形を造り、(六)成せば固より伐あり、(七)變ずれば固より外に戰ふ。君亦必ず(八)鶴列を麗譙の間に盛んにすること無く、錙壇の宮に

人滋久。思人滋深乎。夫逃虛空者。藜藋柱乎鼪鼬之逕。踉位其空。聞人足音跫然而喜矣。而況乎昆弟親戚之謦欬其側者乎。久矣夫莫以眞人之言謦欬吾君之側乎。

徐無鬼。見武侯。武侯曰。先生居山林。食芧栗。厭葱韭。以賓寡人。久矣。夫今老邪。其欲干酒肉之味邪。其寡人。亦有社稷之福邪。徐無鬼曰。無鬼生於貧賤。未嘗敢飲食君之酒肉。將來勞君也。君曰。何哉。奚勞寡人。曰勞君之神

徐無鬼、武侯に見ゆ。武侯曰く、先生山林に居り、(一)芧栗を食ひ、(二)葱韭に厭き、以て(三)寡人を賓つること久し。夫れ今、老いたるか、其れ酒肉の味を干めんと欲するか。其れ寡人、亦(四)社稷の福ありやと。徐無鬼曰く、無鬼貧賤に生る、未だ嘗て敢へて君の酒肉を飲食せんとせず、將に來つて君を勞せむとするなりと。(五)君曰く、何ぞや、奚ぞ寡人を勞するやと。曰く、君の(六)神と形とを勞すと。武侯曰く、何の謂ぞやと。徐無鬼曰く、(七)天地の養や一。高きに登つて以て長と爲すべからず、下に居つて以て短と爲すべからず。君獨り萬乘の主と爲り、以て(八)一國の民を苦しめ、以て耳目鼻口を養ふ。夫の神なるもの自ら許さざるなり。夫の神なるものは、(九)和を好んで姦を惡む。夫れ姦は病なり。故に之を勞す。唯ゝ君病む所を何すると。

弢。奉レ事而大有レ功者。不レ可レ爲レ數。而吾君未ニ嘗啓ヒ齒。今先生何以說ニ吾君。使ニ吾君說一若レ此乎。徐無鬼曰。吾直告三之吾相ニ狗馬一耳。女商曰。若レ是乎。曰。子不レ聞ニ夫越之流人一乎。去レ國數日。見ニ其所ヒ知而喜。去レ國旬月。見下所三嘗見ニ於國中一者上喜。及ニ期年一也。見ニ似レ人者一而喜矣。不ニ亦去レ

女商曰く、是の若きかと。(三)曰く、(四)子は夫の越の流人を聞かずや。(五)國を去ること數日、其の知る所を見て喜ぶ。(六)國を去ること旬月、嘗て國中に見し所の者を見て喜ぶ。(七)期年に及ぶや、人に似たるものを見て喜ぶ。亦人を去ること滋〻久しうして、人を思ふこと滋〻深からずや。(八)夫の虛空に逃るゝ者、藜藋鼪鼬の逕に柱る。(九)其の空に踉位すれば、人の足音跫然たるを聞いて喜ぶ。而るを況んや昆弟親戚の其の側に謦欬する者をや。(一〇)久しいかな、(一一)眞人の言を以て、吾が君の側に謦咳することを莫きやと。

㈠ 太公の兵法、韜んで金版といふ、六弢は六韜と同じ ㈡ 之まで笑をもらして悅びしことなし ㈢ 離それだけの事なりしか ㈣ 徐無鬼曰く ㈤ 南越に流謫せられしもの ㈥ 故國を去ること旬月に及べば必ずしも知人ならずとも國中に於て見し人に遭ふも之を喜ぶ ㈦ 一年になる時は蠻夷に非る以上は中國の人に似たるものすら之を悅ぶ ㈧ 人跡無き空谷に逃れかくるゝものはアカザの類の雜草がイタチムサヽビなどの通ふ逕にふさがり荒涼限りまし ㈨ かゝる空谷に行迷ふときは人の足音の聞ゆるにも喜ぶ ㈩ セキバラヒする ⑪ 君の側に眞人の言をセキバラヒほども說かざること久しかりし故に吾が君大に喜びしなり

吾相狗也。下之質執飽而止。是狸德也。中之質若視日。上之質若亡其一。吾相狗、又不若吾相馬也。吾相馬。直者中縄。曲者中鉤。方者中矩。圓者中規。是國馬也。而未若天下馬也。天下馬有成材。若卹若失。若喪其一。若是者超軼絶塵。不知其所。武侯大說而笑。

(一) 此の篇内篇の齊物を盡くし無爲以て天下を治むべき所以を說き仁義を去り實を外にし而天下に及べども名立たざるを大人の道となすべきを論ず (二) 緡山の人にして魏の隱士 (三) 魏の大夫 (四) 山林に隱栖して勞苦す (五) 嗜欲を滿足せしめ好惡の情を長ぜしめんとせば生命の眞性を傷けむ (六) 耳目の樂しむ所を失はむ (七) 不遜語にして吾へず (八) 下の狗は物を執へ食して吾に飽く嗜欲が飽を準とするもの是なり (九) 狸と德を同じうす (一〇) 中の狗は太陽を視るが如く超然として嗜欲好惡を去る (一一) 上の狗は忘我無心にして其の耦を失へるが如し (一二) 馬の曲直する所に直き所は墨縄にあひ曲れる所は曲りザシにあひ角の所はサシガネにあひ圓き所はブンマハシにあふ (一三) 天成の材質を備ふ (一四) 其の蹤跡につかず超逸絶塵して往く所を知らざるが如し

徐無鬼出。女商曰。先生獨何以說吾君乎。吾所以說吾君者。横說之。則以詩書禮樂。從說之。則以金板六

徐無鬼出づ。女商曰く、先生獨り何を以てか吾が君に說ける。吾が吾君に說く所以のものは、横に之を說けば、則ち詩書禮樂を以てし、從に之を說けば、則ち(一)金板六弢を以てし、事に奉じて大に功あるもの、數を爲すべからず。而して吾が君(二)未だ嘗て齒を啓かず。今は先生何を以てか吾君に說いて、吾君をして說ばしむること此の若きと。徐無鬼曰く、吾れ直之れに吾が狗馬を相するを告げしのみと。

徐無鬼因二女商一見二魏武侯一。武侯勞レ之曰。先生病矣。苦二於山林之勞一。故乃肯レ見二於寡人一。徐無鬼曰。我則於勞レ君。有三君何勞二於我一。君將下盈二耆欲一。長中好惡上。則性命之情病矣。君將下黜二耆欲一。掔中好惡上。則耳目病矣。我將レ勞レ君。君有三何勞二於我一。武侯超然不レ對。少焉徐無鬼曰。嘗語二君

一 徐無鬼(二)、女商(三)に因つて魏の武侯に見ゆ。武侯之を勞して曰く、先生病めり、山林(四)の勞に苦しむ。故に乃ち寡人を見るを肯へてすと。徐無鬼曰く、我は則ち君を勞せむとす、君何の我を勞することかあらん。君將に耆慾を盈て、好惡を長ぜんとせば、則ち性命の情(五)病まむ。君將に耆欲を黜け好惡を掔けむとせば、則ち耳目(六)病まむ。我れ將に君を勞せむとす、君何の我を勞することかあらむと。

、武侯超然(七)として對へず。少して徐無鬼曰く、嘗に君に吾が狗を相するを語げん。下の質(八)は執飽して止む、是れ狸德(九)なり。中の質(一〇)は日を視るが若し。上の質(一一)は其の一を亡ふが若し。吾が狗を相するは、又吾が馬を相するに若かざるなり。吾が馬を相する、直きは繩に中り、(一二)曲れるは鉤に中り、方なるは矩に中り、圓なるは規に中るは、是れ國馬なり。未だ天下の馬に若かざるなり。天下の馬は成材(一三)あり。卹ふが若く失るゝが若く、其の一を喪ふが若し。是の若きものは、超軼絶塵(一四)して、其の所を知らずと。武侯大に說んで笑ふ。

復謵不レ餽而忘レ人、忘レ人因以爲二天人一矣。故敬レ之而不レ喜。侮レ之而不レ怒者。唯同二乎天和一者爲レ然。怒出不レ怒、則怒出二於不一レ怒矣。出レ爲無レ爲。則爲出二於無一レ爲矣。欲レ靜則平レ氣。欲レ神則順レ心。有レ爲也。欲レ當。則緣於不レ得レ已、不レ得レ已之類。聖人之道。

つて以て天人と爲す。故に之を敬すれども喜ばず、之を侮れども怒らざるものは、惟、天和に同じきもの然りと爲す。(五)怒を出して怒らざれば、則ち怒は怒らざるに出づ。爲を出して爲すこと無ければ、則ち爲、爲すことなきに出づ。靜を欲せば則ち氣を平にす。(七)神を欲せば則ち心を順にす。(八)爲すこと有つて當らんと欲せば、則ち已むことを得ざるに縁れ、已むことを得ざるの類は聖人の道なり。

(一) 足蹴られたる不具者が容貌を飾らざるに世間の毀譽を顧みざる故なり (二) 徒刑の囚人が高所に登るもおそれぬは死生を忘れたる故なり (三) 一つことを反覆練習して愧ぢざるは性癖にして人を忘るればなり (四) 人を忘れたるをば天と其の德を合したるものとす (五) 怒を設して怒らざるときは怒るとも怒ることなし (六) 作爲しても作爲することなくば作爲すとも作爲とならず (七) 神通妙用を欲せば心を自然にするときは物應ずることなし (八) 作爲して其の當を得んとせば止むを得ずして行ふべし

徐無鬼

唯蟲能天。全人惡天。惡人之天。而況吾天乎人乎。一雀適羿。羿必得之威也。以天下爲之籠。則雀無所逃。是故湯以胞人籠伊尹。秦穆公以五羊之皮籠百里奚。是故。非以其所好籠之而可得者。無有也。介者拸畫。外非譽也。胥靡登高而不懼。遺死生也。夫

拙なり ㈡ 天にも巧にして人にも善きものは唯全德の人のみ之をよくす ㈢ 鳥獸は走飛啼吼して其の本性をも失はず醇く鳥獸たると共に一面には天工を失はず所謂天に工にして人に善き類なり ㈣ 全德の人が天を惡むは分解して人の天といふものを惡むなり ㈤ まして天を己に屬して吾が天吾が人といふに於ては惡むこと猶更なり

(一)一雀羿に適く、羿必ず之を得るは威なり、天下を以て之が籠と爲せば、則ち雀逃るゝ所なし。是の故に(二)湯は胞人を以て伊尹を籠し、(三)秦の穆公は五羊の皮を以て百里奚を籠す。是の故に、(四)其の好む所を以て、之を籠するに非ずして得べきものは、無有なり。

㈠ 一羽の雀羿の許を過ぐれば必ず之を射て得るは威を以て得るにて時に之を逃することなしとせず天下を以て籠とせば是天工に從ふにて雀逸すゝ所なし ㈡ 殷の湯王は庖人として賢相伊尹を籠罩す ㈢ 穆公は狄人が羊皮を好む性あるに從つて賢人百里奚を籠罩す ㈣ 其の好む所を媒囮として籠するに非ず天下を籠として得べきものは唯下無有自然の道なり

(一)介者の畫を拸るゝは、非譽を外にすればなり。(二)胥靡の高きに登つて懼れざるは、死生を遺れたればなり。(三)夫れ復諧して餽ぢざるは人を忘るゝなり。(四)人を忘れて因

明。明則虛。虛則無ㇾ爲而無ㇾ不ㇾ爲也。道者德之欽也。生者德之光也。性者生之質也。性之動。謂二之爲一。爲之僞。謂二之失一。知者接也。知者謨也。知者之所ㇾ不ㇾ知。猶ㇾ睨也。動以ㇾ不ㇾ得ㇾ已。之謂ㇾ德。動無ㇾ非ㇾ我。之謂ㇾ治。名相反。而實相順也。

すれども、實は相順ふなり。

㊀ 志の作用を紊す ㊁ 謬誤 ㊂ 容貌動作顔色言語氣調情意 ㊃ 胸中の心をゆりうごかす ㊄ 道は自然の大道にして我身にありて德と爲すべき根本なれば尊ぶべきもの ㊅ 天地の大德を生といふ故に生は德の顯現せるもの ㊆ 自然の性は生の本質 ㊇ 知者は物に交はり接し應酬す ㊈ 睨視すれば見ざるが如くにして凡てを見る知者も此の如く見ざるところなきなり ㊉ 動くにやむを得ずして動き有爲ならざるを德といふ ⑪ 動くに我に從ひて外を逐はざるを治といふ ⑫ 德と治とは名は反すれども實は相合す

羿工二乎中一ㇾ微。而拙二乎使三人無二己譽一。聖人工二乎天一而拙二乎人一。夫工二乎天一而俍二乎人一者。唯全人能ㇾ之。唯蟲能蟲。

(一)羿は微に中つるに工なれども、人をして己を譽むること無からしむるに拙し。聖人は天に工にして、人に拙し。(二)夫れ天に工にして人に俍きものは、唯、全人之を能くす。(三)唯、蟲能く蟲たり、唯、蟲能く天たり。(四)全人の天を惡むは、人の天を惡むなり、(五)而るを況や吾が天をや人をや。

㊀ 古の射を善くするもの羿は微小なるものを射中つること巧なれど人をして己が射術を譽めざらしむる事に於て

曰。至禮有レ不レ人。至義不レ物。至知不レ謀。至仁無レ親。至信辟レ金。徹二志之勃一。解二心之謬一。去二德之累一。達二道之塞一。貴富顯嚴名利。六者勃レ志也。容動色理氣意。六者謬レ心也。惡欲喜怒哀樂。六者累レ德也。去就取與知能。六者塞レ道也。此四六者。不レ盪二胸中一則正。正則靜。靜則

（一）市人の足を誤り踏む時は不恭なりしことを述べて謝罪す　（二）兄の足を踏む時は驚きてアアと言葉を出す　（三）親の足を踏む時は何の言葉も出さずして其のまゝなり　（四）至禮は人我の差別を設けず至義は物のために區別を設けず至知は謀慮を用ひず至仁は偏親するところなく至信は金玉の符信などを用ひず

（一）志の勃を徹し、心の謬を解き、徳の累を去り、道の塞を達す。（二）貴富顯嚴名利、六つのものは志を勃かすなり。（三）容動色理氣意、六つのものは心を謬らすなり。惡欲喜怒哀樂、六つのものは徳を累はすなり。去就取與知能、六つのものは道を塞ぐなり。此の四六の者、（四）胸中を盪せざれば則ち正し、正しければ則ち靜、靜なれば則ち明、明なれば則ち虛、虛なれば則ち爲すことなくして爲さざることなきなり。（五）道なるものは德の欽なり、（六）生なるものは德の光なり、（七）性なるものは生の質なり、性の動く、之を爲と謂ひ、爲の僞る、之を失と謂ふ。（八）知者は接はり、知者は謨る、（九）知者の知らざる所は、猶ほ睨のごときなり。（一〇）動くに已むを得ざるを以てするを、之れ德と謂ひ、（一一）動いて我に非ざるなきを、之れ治と謂ふ。（一二）名は相反

是擧移是。請嘗言移是。是以生爲本、以知爲師。因以乘是非。果有名實。因以己爲質。使人以爲己節。因以死償節。若然者。以用爲知。以不用爲愚。以徹爲名、以窮爲辱。移是今之人也。是蜩與鷽鳩同於同也。蹍市人之足。則辭以放驁。兄則以嫗。大親則已矣。故

用を以て知と爲し、不用を以て愚と爲し、徹を以て名と爲し、窮を以て辱と爲す。移是は今の人なり。是れ蜩と鷽鳩と、同に同するなり。

(一) 生なきものは元是一時造化の氣の假聚に過ぎず之を譬ふるに釜の鑪の殘滓みが火に熔生せられたるが如し (二) 渾然無差別を分解して是非を生じ而も是とし非とするに定分なくして相移すべければ之を移是といふ (三) 假に移是の說を言はんとするも是非互に移りて言ふべくもあらず (四) 冬至後三戌の日の祭 (五) 牛の腹臓と足蹠とは散じて別になし得べきものなれど散ずる時は全牛に非ず (六) 室を觀るものは寢廟をあまねく巡り又便處の小室へも至る。かくせざれば全室を觀たりと稱しがたし (七) 牛の腹臓と足蹠室の寢廟と便室と同じく牛たり室たるに相違なけれど腹臓寢廟を尊しとし足蹠便室を卑しとして移是の見を起く (八) 果して名と實との二元を肯定して己を以て實とし此處に人我の差別を設く (九) 他人をして己に節義をつくさしむる時は己亦死を以て人のために節によりて死せざる可からざることあり (一〇) 知上のものは有爲の用を以て知となし無爲の不用を以て愚となす (一一) 達顯を以て名譽となし窮困を以て恥辱となす (一二) 逍遥遊にある蜩と小鳩とが小知に拘つて其の是とする所を是として拘する如し

(一三)市人の足を蹍めば、則ち辭するに放驁を以てし、(一四)兄は則ち嫗を以てし、(一五)大親は則ち已む。故に曰く、(一六)至禮は人とせざるあり、至義は物とせず、至知は謀らず、至仁は親なし、至信は金を辟くと。

已。其次曰。始無有。既而有生。生俄而死。以無有爲首。以生爲體。以死爲尻。孰知有無死生之一守者。吾與之爲友。是三者。雖異公族也。昭景也著戴也。甲氏也著封也。非一也。

公族なり、(九)昭景や戴に著れ、甲氏や封に著る、(一〇)一に非ざるなり。

㊀ 卽ち無有の境 ㊁ 物有りとなして生を出じと見死を囘歸と見る ㊂ 死生の分あり ㊃ 始め無有にして既にして生有り生くること暫くにして死すとなす ㊄ 無有を以て首となし生を以て胴體となし死を以て尻となす誰か有無死生の一なるものを知らむ ㊆ 若し知るものあらば吾其人と友たらん ㊇ 此の有無生死の三者は異りと雖も人の體より出たる一族なり ㊈ 楚の王族昭景二氏は朝に在つて公室を翼戴するを以て著れ甲氏は封邑の大なるを以て著る ㊉ 分るゝ所は一に非ざれども根本の道に歸するものなり

有生黬也。披然曰移是。嘗言移是。非所言也。雖然不可知者也。臘者之有膍胲。可散而不可散也。觀室者。周於寢廟。又適其偃焉。爲

(一)生あるは黬なり。(二)披然たるを移是と曰ふ。(三)嘗に移是を言はんも、言ふ所にあらず。然りと雖も知るべからざる者なり。(四)臘者の膍胲ある、(五)散ずべくして散ずべからざるなり。(六)室を觀るものは、寢廟に周くして、又其の偃に適く。(七)是が爲めに移是を擧ぐ。請ふ嘗みに移是を言はん。是れ生を以て本と爲し、知を以て師と爲し、因りて以て是非に乘ず。(八)果して名實ありとし、因りて己を以て質と爲す。(九)人をして以て己に節を爲さしむれば、因りて死を以て節を償ふ。(一〇)然るが若きものは、

生。有ニ乎死。有ニ乎出。有ニ乎入。入出而無レ見ニ其形一。是謂ニ天門一。天門者無レ有也。萬物出ニ乎無有一。有不レ能ニ以レ有爲ヒ有。必出ニ乎無有一。而無有一ニ無有一。聖人藏ニ乎是一。

て死するは穴あつて入るにあらず（一一）實つる所あれども若干の場所を占めず長ずることあれど本末終始の認むべきものなし（一二）生まれて世に出づる所あつて入るに穴なきものは實つることありて無窮に長ぜん（一三）實つることあつて實る場所無きものは上下四方の空間なり（一四）長ずることありて本末なきものは古往今來の時間なり（一五）生死出入盡くることなく跡なくして其の形を見ることなきものを天門と云ふ（一六）天門と云ふは卽ち無其のものにして萬物も此の無より出づ（一七）有は有を以て有となすを得ず卽ち有に屬する時は更に有となることを得ず有は必ず無より出づべし（一八）しかし其の無も有ること無く卽ち有無の無に非ずして無無の無なり（一九）無無の無は聖人其の身を藏する處

古之人。其知有レ所レ至矣。惡乎至。有ニ以爲一未ニ始有ヒ物者上。至矣盡矣。弗レ可ニ以加一矣。其次。以爲レ有レ物矣。將ニ以レ生爲レ喪也。以レ死爲レ反也。是以分

古の人、其の知至る所あり、惡くにか至る。（一）以て未だ始めより物あらずと爲すものあり、至れり盡せり、以て加ふべからず。其の次は、（二）以て物ありと爲す、將に生を以て喪と爲し、死を以て反ると爲さんとするなり。（三）是を以て分るゝのみ。其の次は曰く、（四）始めは有ること無く、既にして生あり。生俄かにして死す。（五）有ること無きを以て首と爲し、生を以て體と爲し、死を以て尻と爲す。（六）孰か有無死生の一守なるを知るものぞ。（七）吾れ之と友たらんと。（八）是の三つの者、異なりと雖も

乎分一者。其分也以備。所三以惡二乎備一者。其有二以備一。故出而不レ反。見二其鬼一。出而得レ是。謂レ得レ死。滅而有レ實。鬼之一也。以二有レ形者一象二無レ形者一而定矣。出無レ本。入無レ竅。有レ實而無二乎處一。有レ長而無二乎本剽一。有レ所レ出而無レ竅者有レ實。有レ實而無二乎處一者宇也。有レ長而無二本剽一者宙也。有二乎

なく、入るや竅なし。(一一)實つると有れども處るなく、長ずること有れども本剽なし。(一二)出づる所あつて竅なきものは實つるあり。(一三)實つること有つて處なきものは宇なり。(一四)長ずること有つて本剽なきものは宙なり。(一五)生に有り、死に有り、出づるに有り、入るに有り、入出して其の形を見ること無き、是を天門と謂ふ。(一六)天門なるものは有ること無きなり、萬物有ること無きに出づ。(一七)有るは有を以て有とすること能はず、必ず有ること無きに出づ。(一八)而して一の有ること無きも有ること無し。(一九)聖人是に藏る。

(一) 刃物は人を傷くされど人の志の害の痛ましきには比すべくもなく莫邪の利劍も志に及ばず (二) 人を賊ふは陰陽なり大なるものなく天地の間に之を逃るゝ所なし (三) 道は成と毀との二を通じて一となす (四) 本來道は一なるものたるに分るれば成と毀との二となるものなるが其の分るゝことを忌み嫌ふ所以は分るゝ時は自然を害し有心造作して備ふる所あればなり (五) 備ふるを忌み嫌ふ理由は人各備ふることありて相通ぜざればなり (六) 生死も亦分にして出づるは則ち生なり故に出でゝ反らざるは死に向ふ所以 (七) 生きて其の分を得れば是死なり (八) 己に其の性を滅するも猶壞散消耗せずして滿つる所あるは鬼の類なり (九) 形ある所の人を以て形無き鬼神に象り則るは出でて反ることを知るものにして分始めて通ず (一〇) 忽然として生ずるは根本あつて生ずるに非ず忽然とし

唯庸有光。志乎期費者。唯賈人也。人見其跂。猶之魁然。與物窮者。物入焉。與物且者。其身之不能容。焉能容人。不能容人者無親。無親者盡人。兵莫憯于志。鏌鋣爲下。寇莫大於陰陽。無所逃於天地之間。非陰陽賊之。心則使之也。道通其分也。其成也毀也。所惡乎

不善の所業を衆人顕明の中になす時は人を誅するを得べきも不善を人の見ざるかげにてなすものは人之を誅する能はずして鬼神之を誅す（一四）人にも鬼神にも明かなるものにして然る後獨行孤往するを得（一五）身とは能を發するものの內に潜するとは本具眞性に據つて行ふをいひかゝるものの行には名迹の見るべきなし（一六）、本性に據らず外物に據つて行ふものは博く取り廣く求むることに志す（一七）名迹の存すべきものなくして行ふものに雖時有凡俗外面に何等の節なくして踰ふべからざる光彩あり（一八）人は其の外容の虚なるをわざと誇張して見せつくるもののあることを知れども衆は審人は自ら大なりとなす（一九）物に應じて至誠の域に至るものは物入らずといふことなく衆皆之に歸す（二〇）物と交るに彼我をつとむるものは氣宇限局して其の身だに容るゝ能はざる程ゆゑ況して人を容れんことかたし（二一）人と親しむ所なきものは一人の親と親しむものすらなし

（一）兵は志より憯なるは莫く、鏌鋣を下と爲す。（二）寇は陰陽より大なるは莫く、天地の間に逃るゝ所なし。陰陽之を賊ふに非ず、心則ち之をせしむるなり。（三）道は其の分を通ずるなり。（四）其の成るや毀るゝや、分に惡む所のものは、其の分るゝや（五）以て備ふればなり。備ふるに惡む所以のものは、其の以て備ふることあればなり。（六）故に出でて反らざれば、其の鬼を見る。（七）出でて是を得るを、死を得と謂ふ。（八）滅して實つるあるは、鬼の一なり。（九）形あるものを以て、形なきものに象つて定まる。（一〇）出づるや本

臺。靈臺者有レ持。而不レ知二其所一レ持。而不レ可レ持者也。

不レ見二其誠一レ己而發。每發而不レ當。業入而不レ舍。每更爲レ失。爲二不善乎顯明之中一者。人得而誅レ之。爲二不善乎幽間之中一者。鬼得而誅レ之。明二乎人一。明二乎鬼一者。然後能獨行。券レ內者行二乎無名一。券レ外者志二乎期費一。行二乎無名一者。

して外部の非我に通変到達す (四) 是の如くにするも尙業惡並び起るは天命にして人爲に非ず (五) 成德を亂すに足らず吾が心の靈臺に侵入なさしむべきものに非ず (六) 心にはもと主とする所のものあり而も其の何物を主とするかを知らざる時は主となること能はざるものなれば萬惡至ると雖も之に侵入すること能はざるなり

其の己に(一)誠なるを見ずして發すれば、每に發すれども當らず。(二)業に入つて舍てざれば、每に更へて失を爲す、(三)不善を顯明の中に爲すものは、人得て之を誅す。不善を幽間の中に爲すものは、鬼得て之を誅す。(四)人に明に、鬼に明なるものにして、然る後能く獨行す。(五)內に券するものは無名に行ひ、(六)外に券するものは期費に志す。(七)無名に行ふものは、唯庸として光あり。期費に志すものは唯賈人なり。(八)人其の跂つを見れども、猶ほ之を魁然たりとす。(九)物と窮まるものは、物入る。(一〇)物と且するものは、其の身だも容るゝこと能はず、焉んぞ能く人を容れん。人を容るゝこと能はざるものは親なし。(一一)親なきものは人を盡くす。

(一) 其の己に誠あるを見ず知によつて有心造作する所ありて外部に發する時は發する度每に正鵠にあたらずして亂る (二) 已に不誠の中に入つて之までの因襲を捨てざる時は發して當らざるため每に方針を變更して失をなす (三)

之。天助之。人之所舍。謂之天民。天之所助。謂之天子。學者學其所不能學也。行者行其所不能行也。辯者辯其所不能辯也。知止乎其所不能知。至矣。若有不即是者。天鈞敗之。

は其の辯することを能はざる所を辯ぜんとするなり。知は其の知る能はざる所に止まるは、至れり。若し是に即かざるものあれば、天鈞之を敗る。

(一) 心宇の泰然として靜定せるものは天然の光輝を發す (二) 天光を發するものは其の真我を顯現す (三) 衆生の道を修むることあるものは自ら不動にして常あり (四) 人之に歸服す (五) 學ぶものは學ぶこと能はざるものを學ばんとし行ふものは行ふこと能はざるものを行はんとし辯ずるものは其の辯ずること能はざるものを辯ぜんとするにて自然に非ず (六) 知は其の知る能はざる所に止まる時は其徳に止住して無窮なるを至れりとす (七) 若し是に從はずして強ふる時は自然の均衡を破るべし

備物以將形。藏不虞以生心。敬中以達彼。若是而萬惡至者。皆天也。而非人也。不足以滑成。不可內於靈臺。

物を備へて以て形を將ひ、(一)不虞を藏して以て心を生じ、(二)中を敬して以て彼に達す。(三)是く若くにして萬惡至るものは、皆天にして、人にあらざるなり。以て成を滑すに足らず、(四)靈臺に內るべからず。(五)靈臺なるものは持することありて、(六)其の持する所を知らざれば、持すべからざるものなり。

(一) 萬物を備へ設けて其の身を養ふ (二) 思慮計度せずして物におひて自然に心を生ず (三) 其の中なる心を敬持

不下以二人物利害一相攖上。不二相與爲一レ怪。不二相與爲一レ謀。不二相與爲一レ事。翛然而往。侗然而來。是謂二衞生之經一已。曰然則是至乎。曰未也。吾固告レ女曰、能兒子乎。兒子動不レ知レ所レ爲。行不レ知レ所レ之。身若二槁木之枝一而心若二死灰一。若レ是者禍亦不レ至。福亦不レ來。禍福無レ有。惡有二人災一也。

て曰く、能く兒子たらんかと。兒子は動けども爲す所を知らず、行けども之く所を知らず、身槁木(六)の枝の若くにして、心死灰の若し。是の若きものは禍も亦至らず、福も亦來らず。禍福あること無し。惡んぞ人災あらんや。

(一) 然らば則ち是が至人の德なるか　(二) 氷の解け凍のとけたると同樣にてまた前通り氷ることあるを免れざる境地なり　(三) 互に地によつて生活し互に天命を樂しむ　(四) 人物利害を以て心を亂さず互に異を立てず互に謀りあはず　(五) 前に出づ　(六) 子供は動けども自ら爲す所を知らず行けども自ら何れへゆくかを知らず身は枯木の如く心は冷灰の如く自然無爲なり

宇泰定者。發二乎天光一。發二乎天光一者。人見二其人一。人有レ修者。乃今有レ恆。有レ恆者人舍レ

(一)宇の泰定なるものは、天光(二)を發す、天光を發するものは、人其の人を見す。(三)人修むることあるもの、乃ち今にして恆あり、恆あるものは人之に舍り、天之を助く(四)。人の舍る所は之を天民と謂ひ、天の助くる所は之を天子と謂ふ。(五)學者は其の學ぶことを能はざる所を學ばんとし、行者は其の行ふこと能はざる所を行はんとし、辯者

能止乎。能已乎。能舍諸人。而求諸己乎。能翛然乎。能侗然乎。能兒子乎。兒子終日嗥而嗌不嗄。和之至也。終日握而手不掜。共其德也。終日視而目不瞚。偏不在外也。行不知所之。居不知所爲。與物委蛇而同其波。是衛生之經已。

南榮趎曰。然則是至人之德已乎。曰非也。是乃所謂冰解凍釋者。夫至人者。相與交食乎地。而交樂乎天。

の波を同じくす。是れ衛生の經のみと。

(一)自ら禍福をいふけどなるゆゑ未だをして前征ならず (二)身を衛生する方法 (三)天賦の一氣を守つて其の德を失ふことなし (四)止まり往くべき所を知り足ることを知る (五)外を求めずし一内を求む (六)淡泊にして思ふ所なし (七)侗然として知る所なし (八)小兒は終日に叫びても咽の嗄れざるは胸の自然を傷らずして和すればなり (九)終日手拳を握りつめて居ても手のかゞまらぬは其の德を一にすればなり (十)終日物を視つむれども目たゝきをせざるは外物を偏し見ざればなり (十一)物に順隨して浮沈を同じうし逆はず

南榮趎曰く、然らば則ち是れ至人の德のみかと。曰く非なり。是れ乃ち所謂冰解凍釋なるものなり。(一)夫れ至人なるものは、相與に交々地に食ひ、而して交々天を樂しむ。(二)人物利害を以て相攖らず、相與に怪を爲さず、相與に謀を爲さず、(三)翛然として往き、侗然として來る。是を衛生の經と謂ふのみと。曰く、然らば則ち是れ至れるかと。曰く未だしなり。吾れ固より汝に告げ

捉。將外揵。外内韄者。道德不能持。而況放道而行者乎。

南榮趎曰。里人有病。里人問之。病者能言其病。然其病病者猶未病也。若趎之聞大道。譬猶飮藥以加病也。趎願聞衞生之經而已矣。老子曰。衞生之經。能抱一乎。能勿失乎。能無卜筮而知吉凶乎。

に閉塞して外物を絶つの外なし（七）内、心智を勞するものは是非紛亂して制することを得ず故に外部に閉塞して思慮を省くの外なし（八）かく外内與に束縛せらるゝものは道德をも保持する能はず况んや道に自適して行ふことなどは特に難し

南榮趎曰く、里人病あり、里人之を問ふに、病者能く其の病を言ふ。（一）然らば其の病を病めるもの猶ほ未だ病まざるなり。趎が大道を聞くが若きは、譬へば猶ほ藥を飮んで以て病を加ふるがごときなり。趎願はくは（二）衞生の經を聞かんのみと。老子曰く、衞生の經、（三）能く一を抱かんか、能く失ふこと勿らんか。能く卜筮すること無くして吉凶を知らんか。（四）能く止まらんか、能く已まんか。（五）能く諸を人に舍てゝ、諸を己に求めんか。（六）能く翛然たらんか、（七）能く侗然たらんか。能く（八）兒子たらんか。兒子は終（九）日嘷びても嗌嗄れず、和の至りなり。終日握りても手掜せざるは、其の德を共にすればなり。（一〇）終日視れども目瞚かざるは、偏して外にあらざればなり。行けども之く所を知らず、居れども爲す所を知らず。物と委蛇して、（一一）其

可。此三言者。趎之所患也。願因楚而問之。老子曰。向吾見若眉睫之間。吾因以得汝矣。今汝又言而信之。若規規然若喪父母。揭竿而求諸海也。汝亡人哉。惘惘乎。汝欲反汝情性。而無由入。可憐哉。

はる如くにて見當らざるなり　●　性命を亡失する人　●　憂鬱して自得せざる貌　●　汝は汝の固有の本性に復歸せんと見へど本性にかへり入る途なきなり

南榮趎請入就舍。召其所好。去其所惡。十日自愁。復見老子。老子曰。汝自灑濯。孰哉。鬱鬱乎。然而其中。津津乎猶有惡也。夫外韄者。不可繁而捉。將內揵。內韄者不可繆而

南榮趎、(一)請ひ、入つて舍に就く。(二)其の好む所を召き、其の惡む所を去らんとして、十日自ら愁ふ。復老子に見ゆ。老子曰く、(三)汝自ら灑濯すること孰せりや、(四)鬱乎たり。然かも其の中、(五)津津乎として猶ほ惡あるなり。(六)夫れ外韄せらるゝものは、繁くして捉るべからず。將た內揵せんのみ。(七)內韄せらるゝものは繆れて捉るべからず。將た外揵せんのみ。(八)外內韄せらるゝものは、道德だも持する能はず、而るを況んや道に放つて行はんことをやと。

(一)　請うて入つて學舍に就く　(二)　其の心の是とする所を招き寄せ非とする所を棄て去らんとして十日間自ら憂へ苦しむ　(三)　汝自ら洗ひ濯ふることを十分にゆきしや　(四)　自得せざる所あり　(五)　心中靜謐ならず溢れこぼるゝ所ありて猶は不可なり　(六)　外、耳目を用ゐて聲色のために縛らるゝものは事繁くして捌することを得ず故に內心

子曰。子何與レ人偕來之衆也。南榮趎懼然顧二其後一。老子曰。子不レ知二吾所一レ謂乎。南榮趎俯而慙。仰而歎曰。今者吾忘二吾答一。因失二吾問一。老子曰。何謂也。南榮趎曰。不知乎。人謂二我朱愚一。知乎。反愁二我軀一。不仁則害レ人。仁則反愁二我身一。不義則傷レ彼。義則反愁レ我已。我安逃レ此而

と。老子曰く、何の謂ぞやと。南榮趎曰く、(五)不知ならんか、人我を朱愚と謂ふ。知ならんか、反つて我が軀を愁へしむ。不仁なれば則ち人を害し、仁なれば則ち反つて我が身を愁へしむ。不義なれば則ち彼を傷り、義なれば則ち反つて我を愁へしむるのみ。(六)我れ安にか此を逃れて可ならん。此の(七)三言は趎の患ふる所なり。(八)願はくは楚に因つて之を問はんと。老子曰く、向に吾若が眉睫の間を見て、吾れ因つて汝を得。今汝又言つて之を信にす。若は(九)規規然として(一〇)父母を喪ひて、(一一)竿を揭げて諸を海に求むるが若きなり。汝は亡人なる哉、(一二)惘惘乎たり。(一三)汝は汝の(一四)情性に反らんと欲すれども、入るに由なし、憐むべき哉と。

(一) そこもとは庚桑子のもとより來りしか (二) 何故に多勢の人と一所に來りしや。自ら悟る所なくして徒に人言に拘牽せられ居るを諷す (三) 多勢の人と一所に來りしやと言へる意味を知らざるか (四) 今予は吾が返答を忘れたれば從つて如何なる問ひを發するかも忘れたり (五) 知を去る時は人我を痴呆といふべく知あらば吾が身の累ひとなる (六) 如何して此のヂレンマを切りぬくべきにや (七) 知不知仁不仁義不義の三言 (八) どうか庚桑楚の紹介によつて之をたづねしたし (九) 以前吾は汝の眉間のところを見て汝が道を得ざることを察し得今汝の言によつて果して其の通りなるを確む (一〇) 細小の貌、コセコセするなり (一一) 父母死せし時竿をあげて海の中を探しま

不能自得。形之與形亦辟矣。而物或間之邪。欲相求而不能相得。今謂趎曰。全汝形。抱汝生。勿使汝思慮營營。趎勉聞道達耳矣。庚桑子曰。辭盡矣。曰奔蜂不能化藿蠋。越雞不能伏鵠卵。魯雞固能矣。雞之與雞。其德非不同也。有能與不能者。其才固有巨小也。今吾才小。不足以化子。子胡不南見老子。

子に見えざると。

(一)庚桑楚の弟子 (二)累きかくる、(三) (四)如何なる道に学を勉めて義身体の言に到達すべきか (五)汝の形を役せずして全うし汝の神を勞せずして生を保ち汝の思慮をあくせくせしむることなかれ (六)耳目心形はわれも人も異なる所はあらねど盲者は自ら物を見ること能はず (七)心と心と其の形に於て異なるところはあらねど狂者は本性を失ふ (八)彼の形と我の形と異なる所なきに彼用隔して達する所なきは物汝が之をへだつるか (九)南の庚桑子の言を序す (十)勉めて道をきけども耳に達するのみにて心に達せざらん (十一)汝の言ふべきこと盡きれにて盡きたり (十二)小蜂は豆の青虫を化して己の子とすること能はず細腰小蜂小蜂に螟蛉が螟蛉を化して子をすることとあればそれに比していふなり (十三)越雞は小さくして鵠の大卵を孵化すること能はねど魯雞は大なるゆゑ固より之をよくす

南榮趎贏糧。七日七夜。至老子之所。老子曰。子自楚之所來乎。南榮趎曰唯。老

南榮趎糧を贏し、七日七夜、老子の所に至る。老子曰く、(一)子は楚の所より來るかと。南榮趎曰く、唯と。老子曰く、(二)子何ぞ人と與に偕に來るの衆きやと。南榮趎懼然として其の後を顧みる。老子曰く、(三)子は吾が謂ふ所を知らざるかと。南榮趎俯して慙ぢ、仰いて歎じて曰く、(四)今は吾れ吾が答を忘る。因つて吾が問を失へり

正坐曰、若趎之年者已長矣。將惡乎託業以及此言邪。庚桑子曰。全汝形。抱汝生。無使汝思慮營營。若此三年。則可以及此言也。南榮趎曰。目之與形。吾不知其異也。而盲者不能自見。耳之與形。吾不知其異也。而聾者不能自聞。心之與形。吾不知其異也。而狂者

業を託して以て此の言に及ばんやと。庚桑子曰く、(四)汝の形を全うし、汝の生を抱き、汝の思慮をして營營たらしむることなかれ。此の若きこと三年ならば、則ち以て此の言に及ぶべきなりと。南榮趎曰く、(五)目の形と、吾れ其の異なるを知らざるなり。而して盲者自ら見ること能はず。耳の形と、吾れ其の異なるを知らざるなり。而して聾者は自ら聞くこと能はず。心の形と、吾れ其の異なるを知らざるなり、而して狂者は自ら得ること能はず。(七)形の形と、亦辟けるは、物或は之を間つるか、相求めんと欲すれども相得ること能はず。今、(八)趎に謂つて曰く、汝の形を全うし、汝の生を抱き、汝の思慮をして營營たらしむることなかれと。趎は(九)勉めて道を聞いて耳に達せんと。庚桑子曰く、(一〇)辭盡くせり。曰く(一一)奔蜂は藿蠋を化する能はず。(一二)越鷄は鵠卵を伏すること能はざれど、魯鷄は固より能くす。鷄と鷄と、其の德同じからざるにあらざるなり。能と不能とあるものは、其の才固より巨小あればなり。今、吾才小なり。以て子を化するに足らず、子胡ぞ南のかた老

水則蟻能苦之。故鳥獸不厭高。魚鼈不厭深。夫全其形生之人。藏其身也。不厭深眇而已矣。且夫二子者。又何足以稱揚哉。是其於辯也。將妄鑿垣牆而殖蓬蒿也。簡髮而櫛。數米而炊。竊竊乎。又何足以濟世哉。舉賢則民相軋。任知則民相盜。之數物者。不足以厚民。民之於利甚勤。子有殺父。臣有殺君。正晝爲盜。日中穴阫。吾語汝大亂之本。必生於堯舜之間。其末存乎千世之後。千世之後。其必有人與人相食者也。

正晝に盜を爲し、日中に阫に穴す。(一四)吾れ汝に大亂の本を語げん。必ず堯舜の間に生じて、其の末千世の後に存す。(一五)千世の後、其れ必ず人と人と相食むものあらんと。

(一)八尺を尋といひ之に倍するを常といふ　(二)小獸やドヂヤウの如きものに翻弄せらる　(三)步は六尺或は八尺　(四)妖孽はアヤカレを以す　(五)獸は時に隨り時は與に隨る　(六)先生には民の爲す所をも許しあれ　(七)車一ぱい位の巨獸も群を離れて一匹山を出づれば網にかゝることあり　(八)舟を呑む位の大魚も躍出て水より出づれば蟻之を苦しめ得　(九)形體性能を全くするの士は其の身を奥深き所に藏するを厭はず　(一〇)堯舜を斥す　(一一)堯舜の知慧はみだりに墻根に穴をあけ蓬草を殖さんとするものにて無益の作爲なり　(一二)髮の毛を一本づゝ櫛り米を一粒づゝ炊くものにて煩瑣なり　(一三)賢人を擧用すれば民互に名を爭ひ知に任ずる時は民互に利を爭ふ　(一四)墻根に穴をうく　(一五)大亂の根源は堯舜の間に發生して其の弊千世の後に存す

南榮趎。蹵然

南榮趎(一)、蹵然(二)として坐を正して曰く、趎の年の若きは已に長ぜり、將に惡(三)にか

弟子曰。不然。夫尋常之溝。巨魚無所還其體。而鯢鰌爲之制。歩仞之丘陵。巨獸無所隱其軀。而蘖狐爲之祥。且夫尊賢授能。先善與利。自古堯舜以然。而況畏壘之民乎。夫子亦聽矣。庚桑子曰。小子來。夫函車之獸。介而離山。則不免于罔罟之患。呑舟之魚。碭而失

弟子曰く、然らず。夫れ(一)尋常の溝、巨魚其の體を還らす所なくして、(二)鯢鰌之が制を爲す。(三)歩仞の丘陵、巨獸其の軀を隱す所なくして、(四)蘖狐之が祥を爲す。且つ夫れ賢を尊び能に授け、善と利とを先にするは、古の(五)堯舜より以て然り、而るを況んや畏壘の民をや。(六)夫子亦聽せと。庚桑子曰く、小子來れ。夫れ(七)函車の獸、介して山を離るれば、則ち罔罟の患を免れず。(八)呑舟の魚、碭して水を失へば、則ち蟻能く之を苦しむ。故に鳥獸は高きを厭はず、魚鼈は深きを厭はず、(九)夫の其の形生を全くするの人は、其の身を藏すること、深眇なるを厭はざるのみ。(一〇)且夫の二子なる者、又何ぞ以て稱揚するに足らんや。(一一)是れ其の辯に於けるや、將に妄りに垣墻を鑿つて、而して蓬蒿を殖さんとするなり。(一二)髪を簡びて櫛り、米を數へて炊く。竊竊乎たり、又何ぞ以て世を濟ふに足らんや。(一三)賢を擧ぐれば則ち民相軋り、知に任ずれば則ち民相盜む。之の數物のものは、以て民を厚くするに足らず。民の利に於けるや甚だ勤む、子として父を殺すあり、臣として君を殺すあり、

之。今吾日計之而不足。歲計之而有餘。庶幾其聖人乎。子胡不相與尸而祝之。社而稷之乎。庚桑子聞之。南面而不釋然。弟子異之。庚桑子曰。弟子何異於予。夫春氣發而百草生。正得秋而萬寶成。夫春與秋。豈無得而然哉。大道已行矣。吾聞至人尸居環堵之室。而百姓猖狂不知所如往。今以畏壘之細民。而竊竊焉欲俎豆予于賢人之間。我其杓之人邪。吾是以不釋於老聃之言。

尸居して、百姓猖狂如き往く所を知らずと。今は畏壘の細民を以て、竊竊焉としてして予を賢人の間に俎豆せんと欲す。我は其れ杓(一七)の人か。吾是を以て老聃(一八)の言に釋けずと。

(一) 此の聖賢ならず謙しまずよく明白淳直にして凡べて止むことなきに出づる時に絶對の聖域に住すべき所以を説く (二) 弟子 (三) 道の一端を得たり (四) 分明なる知を有するものは去る (五) 揭擘に反して仁にはこるものは之を遠ざけて共にをらず (六) 純朴なるものと與に居る (七) 鞅掌なきものを使役す (八) 五穀大に熟る (九) 驚きて異常の人なりとす (一〇) 生計を日に計算する時は足らざれど年に通算する時は餘剩あり (一一) 尸祝社稷は尊んで之を祀らんとするなり (一二) 其の師老子に背くを覺え南面して心喫かにとけず (一三) 萬物實みのる (一四) 春秋は生實の行用を欲せずとするも然せざるを得んや是天道の行はるればなり (一五) 方丈の小室に靜居して名を求めず民亦自然の性に從うて相忘れ歸向するところを忘る (一六) 相譲りて予を賢人の中に祀りこまんとす (一七) 偏淺にして淺薄其の爲す所に違あるをいふ (一八) 師老子の言にそむくゆゑ心とけず

老聃之役。有二庚桑楚者一。偏二得老聃之道一以北居二畏壘之山一。其臣之畫然知者去レ之。其妾之挈然仁者遠レ之。擁腫之與居。鞅掌之爲レ使。居三年。畏壘大穰。畏壘之民相與言曰。庚桑子之始來。吾灑然異レ

雑篇

庚桑楚（一）

老聃の役（二）に、庚桑楚といふ者あり。老聃の道（三）を偏得して、以て北のかた畏壘の山に居る。其の臣の畫（四）然として知あるものは之を去り、其の妾の挈（五）然として仁なるものは之を遠ざけ、擁（六）腫と與に居り、鞅（七）掌を使と爲す。居ること三年、畏壘大いに穰（八）る。畏壘の民相與に言つて曰く、庚桑子の始め來れる、吾れ灑（九）然として之を異とす。今吾（一〇）日に之を計つて足らず、歳に之を計つて餘りあり。庶幾ど其れ聖人か、子胡ぞ相與に尸して之を祝し、社して之を稷せざるかと。庚桑子之を聞いて、南（一一）面して釋（一二）然たらず。弟子之を異しむ。庚桑子曰く、弟子何ぞ予を異しむ。夫れ春氣發して百草生じ、正に秋を得て萬（一三）實成る。夫れ春（一四）と秋と、豈に得ることなくして然らんや。大道已に行はる。吾れ聞く、至人は環（一五）堵の室に

不レ能レ傷也。唯無レ所レ傷者。爲ニ能與レ人相將迎。山林與。皐壤與。使ニ我欣欣然一與樂未レ畢也。哀又繼レ之。哀樂之來。吾不レ能レ禦。其去弗レ能レ止。悲夫。世人直爲ニ物逆旅一耳。

夫知レ遇。而不レ知レ所レ不レ遇。知レ能レ能。而不レ能レ所レ不レ能。無知無能者。固人之所レ不レ免也。夫務レ免ニ乎人之所レ不レ免者。豈不ニ亦悲一哉。至言去レ言。至爲去レ爲。齊ニ知之所レ知則淺矣。

(一) 往を送らず來を迎へず (二) 往來送迎することなき境地に遊ぶ方を謂ふ (三) 外部は物に應じて化すれども內部に於ては心物に應ぜず卽ち靜寂なり (四) 物と化するものは自然に隨ふが故によく物に應じ心は一にして物と化せず (五) 何れに化し何れに化せず又何れに隨を從ふにや、是物に應ずるの多方にして拘はる所なきをいふ (六) 物の來るに應じて化するのみ何ぞ是非をとりて我より應ずることを事とならしめんぞとなり (七) 古の帝王、豨韋氏黃帝有虞殷湯周武の宮室囿圃に遊ぶもの君子若くは儒墨の師が既に是非の說を以て互に攻擊せり (八) 聖人は物の自然によつて之を處し物の性を傷らず (九) 物を傷らず物に傷られざるものにし始めて人を送迎して送迎せずよく無爲に居ることを得 (一〇) 山林山丘は我をして欣然と喜ばしむるも歡樂未だ盡きざるに哀傷起る (一一) 世人は物來れば之を迎へ留めて恰も逆旅の如し (一二) 知の及ぶ所は知れども知の及ばざる所は知ることを得ず (一三) 無知無能は固より人の免る可らざることなるに其を強ひて免れんとするは愚なるにたへたり (一四) 言の極致は言無く爲の極致は無爲し (一五) 知の知るところを齊くして及ばざる所なくすれば其の知淺し

其遊一。仲尼曰。古之人。外化而内不レ化。今之人。内化而外不レ化。與レ物化者。一不レ化者也。安化安不レ化。安與レ之相靡。必與レ之莫レ多。狶韋氏之囿。黄帝之圃。有虞氏之宮。湯武之室。君子之人。若儒墨者師。故以二是非一相韲也。而況今之人乎。聖人處レ物不レ傷レ物。不レ傷レ物者。物亦

化せざるものなり。(五)安にか化し安にか化せざる、安にか之と相靡く、(六)必ず之と多きこと莫らん。(七)狶韋氏の囿、黄帝の圃、有虞氏の宮、湯武の室、君子の人、若くは儒墨者の師、故より是非を以て相韲せり、而るを況んや今の人をや。(八)聖人物に處して物を傷らず、物を傷らざるものは、物も亦傷ること能はざるなり、(九)唯〻傷る所なきものにして、能く人と相將迎することを爲さん。(一〇)山林か皐壤か、我をして欣欣然として樂しましむるか、樂み未だ畢らざるに、哀又之に繼がん。哀樂の來る、吾れ禦ぐ能はず。其の去る止むること能はず、悲しいかな。(一一)世人直ちに物の逆旅たるのみ。(一二)夫れ遇ふを知れども遇はざる所を知らず。能くするを能くすることを知れども、能くせざる所を能くせず。(一三)無知無能は固より人の免れざる所なり。夫れ人の免れざる所を免るゝことを務むるものは、豈に亦悲しからずや。(一四)至言は言を去り、至爲は爲を去る。(一五)知の知る所を齊しうせんとすれば、則ち淺しと。

者求邪。無古無今。無始無終。未有子孫而有子孫可乎。冉求未對。仲尼曰。已矣。未應矣。不以生生死。不以死死生。死生有待邪。皆有所一體。有先天地生者物邪。物物者非物。物出不得先物也。猶其有物也。猶其有物也。無已。聖人之愛人也。終無已者。亦乃取於是者也。

するや、終に已むことなきものは、亦乃ち是に取れるものなりと。

(一)孔子の門人　(二)天地未發の太初は之を知り得べきにや　(三)退れて問ふに辭なくして退く　(四)昨夜は吾かに解し得たりと思ひしに今日は解し得ざるは何故ぞ　(五)昨日解し得たりしは心靈先づ之を受けて無心なりしが故に直覺的に解せしなり　(六)今日解し得ざるは心靈ならざる智識が之を解せんとを求むるためか　(七)天地には古もなく今もなく始もなく終もなく無始無終なり天地有らずして天地有りとするは子孫未だ生まれざるに子孫ありと云ふが如きのみ　(八)答へずともよろし　(九)生を以て死を說明して生けるものと云ひがたく死を以て生を說明して死せりとも云ひ難く生死は要するに變化の一面に過ぎずして一に歸すべきもの　(十)死生は有無を絶していへに待つ所なき一體の實質なり　(十一)天地より先だちて生ずるものは物に非ず物を物とし得るものは物にあらずして道なり即ち有を有とし得るものは道なり　(十二)物生れ出づる時は物に先だちて有ることを得ざる理由は既にそこに物が有ればにて物に先だつものは道ならざるべからず　(十三)かくて道より物を生じ物より有を生ずれば生々變化してやむことなし　(十四)聖人の人を愛するに無限なるは天地生々の道に從へるなり

顏淵問乎仲尼曰。回嘗聞諸夫子曰。無有所將。無有所迎。回敢問

顏淵、仲尼に問うて曰く、回、嘗て諸を夫子に聞く。曰く、(一)將る所あるなく、迎ふる所あるなしと。回、敢へて其の遊を問ふと。(二)仲尼曰く、古の人は、外化して(三)内、化せず。今の人は、内化して、外化せず。(四)物と與に化するものは、一にして

無レ不レ用者乎。物孰不レ資焉。

冉求問二於仲尼一曰。未レ有二天地一可レ知邪。仲尼曰。可。古猶レ今也。冉求失レ問而退。明日復見曰。昔者吾問未レ有二天地一可レ知乎。夫子曰。可。古猶レ今也。昔者吾昭然。今日吾昧然。敢問何謂也。仲尼曰。昔之昭然也。神者先受レ之。今之昧然也。且又爲二不レ神

(一)冉求、仲尼に問うて曰く、(二)未だ天地あらざるとき知るべきやと。仲尼曰く、可なり、古猶ほ今のごときなり。(三)冉求問を失うて退く。明日復見えて曰く、昔者吾れ問ふ、未だ天地あらざるとき知るべしやと。夫子曰く、可なり、古猶ほ今のごときなりと。(四)昔者、吾れ昭然たり、今日吾れ昧然たり。敢へて問ふ、何の謂ぞやと。仲尼曰く、昔の(五)昭然たるや、神たるもの先づ之を受けたり。(六)今の昧然たるや、且つ又神ならざるもの求むるが爲めか。(七)古なく今なく、始めなく終なし。未だ子孫あらずして、子孫ありとせば、可ならんやと。冉求未だ對へず。仲尼曰く、已めよ。(八)未だ應へざれ。(九)生を以て死を生けりとせず、死を以て生を死せりとせず。(一〇)死生、待つことあるか、皆一體する所あり。(一一)天地に先だつて生ずるものあり、物ならんや。物を物とするものは、物にあらず。(一二)物、出づれば、物に先だつことを得ざるは、(一三)猶ほ其れ物あればなり。猶ほ其れ物あれば已むことなし。(一四)聖人の人を愛

不聞。搏之而不得也。光曜曰、至矣、其孰能至此乎。予能有無矣、而未能無無也。及為無有矣。何從至此哉。

㊀ 何れも假設の人 ㊁ 貴公は有るものにや無きものにや ㊂ 問へど答へざる故に無有の状貌を熟視す ㊃ 窈冥空虚にして終日之を視れども見ることを得ず聽けども聞くことを得ず搏てども搏つことを得ず ㊄ 予は有形に比ぶれば無なれども未だ有に對する無を脱却すること能はずされば無有の如き絶對無に於ては何によつて至るを得べけんや

大馬之捶鉤者年八十矣。而不失豪芒。大馬曰、子巧與。有道與。曰、臣有守也。臣之年二十而好捶鉤。於物無視也。非鉤無察也。是用之者、假不用者也。以長得其用。而況乎

大馬の、鉤を捶ふるもの年八十なれども、毫芒を失はず。大馬曰く、子、巧なるか、道あるかと。曰く、臣、守あるなり。臣の年二十にして鉤を捶ふるを好む。物に於ける視ることなきなり。鉤にあらざれば察することなきなりと。是れ之を用ふるものは、用ひざるものを假りて、以て長く其の用ふることを得たるなり。而るを況んや用ひざること無きものをや、物孰れか資らざらんや。

㊀ 大司馬の家に著く鉤を鍛へ作るものあつて其の年八十歳なれども毫厘の差失なし ㊁ 守持する所あつて專一なり ㊂ 他の物に眼をくれることなく鉤より外に見向きもせず ㊃ 心を一方に用ふるものは之を他物に用ひず是によつて長く用ふることを得て毫厘をたがはざりしなり ㊄ 心を一方に用ふるものすら然り況や道を體する至人の用ひざる所なきものに於ては萬物皆之に資らざるものあるなし

曰。弗レ知乃知乎。知乃不レ知乎。孰知二不レ知之知一。無始曰。道不レ可レ聞。聞而非也。道不レ可レ見。見而非也。道不レ可レ言。言而非也 知二形レ形之不一レ形乎。道不レ當レ名。無始曰。有レ問レ道而應レ之者。不レ知レ道也。雖二問レ道者一。亦未レ聞レ道。道無レ問。問無レ應。無レ問問レ之。是問レ窮也。無レ應應レ之。是無レ內也。以レ無レ內待レ問レ窮。若レ是者外不レ觀二乎宇宙一。內不レ知二乎大初一。是以不レ過二乎崑崙一。不レ遊二乎大虛一。

(一)兩者とも假設の人　(二)道の名號即ち屬性といふが如し　(三)道は之を一點に要約し得べく四方に放散せしむべきを知る　(四)言半ばにして歎息す　(五)知らずと云ふが眞に道を知る所以か而して知ると云ふが反つて知らざるものか知らざることが眞に知る所以は誰も知るまじ　(六)道は人に聞くべきものあらざるに聞へば已に非　(七)形ある物象を生じて之に形を與ふる所の道は形無きものなることを知らば道は當に何とも名づくべきものに非ず　(八)道は問ふべきこともならず應ふることもならぬもの　(九)問ふべきこともならざるに問ふは言詮の及ばざる空を責め問ふものにて應ふべきこともなきに應ふるは內に其の實なきに有りとして應ふるもの

光曜問二乎無有一曰。夫子有乎。其無レ有乎。光曜不レ得レ問。而孰二視其狀貌一。窅然空然。終日視レ之而不レ見。聽レ之而

(一)光曜、無有に問うて曰く、夫子は有るか、其れ有ること無きかと。光曜(二)問ふことを得ずして、其の狀貌を(三)孰視するに、(四)窅然たり空然たり。終日之を視れども見えず、之を聽けども聞えず、之を搏てども得ざるなり。光曜曰く、至れり、其れ孰れか能く此に至らんや。予(五)能く無有れども未だ無無きこと能はざるなり。有無しと爲すに及びては、何に從つて此に至らんや。

曰子之知レ道亦有レ數乎。曰有。曰其數若何。無爲曰。吾知下道之可二以貴一可二以賤一可二以約一可中以散上。此吾所三以知二道之數一也。泰清以二之言一也。問二乎無始一曰。若レ是則無窮之弗レ知與二無爲之知一。孰是而孰非乎。無始曰。不レ知深矣。知レ之淺矣。弗レ知內矣。知レ之外矣。於レ是泰清中而歎

所以なりと。泰清之の言を以て無始に問うて曰く、是の若きは則ち無窮の知らざると、無爲の知ると、孰れか是にして而して孰れか非なりやと。無始曰く、知らざるは深し、之を知るは淺し、知らざるは內なり、之を知るは外なりと。是に於て泰清中ば(四)にして歎じて曰く、(五)知らざるは乃ち知るか、知るは乃ち知らざるか。孰れか知らざるの知るを知らんと。無始曰く、(六)道、聞くべからず、聞けば非なり、道、見るべからず、見れば非なり。道、言ふべからず、言へば非なり。(七)形を形するの、形せざるを知るか。道、當に名くべからずと。無始曰く、道を問ふことあつて、之に應ずるものは、道を知らざるなり。道を問ふものと雖も亦未だ道を聞かず。(八)道は問ふことなく、問ふも應ふることなし。(九)問ふことなきに之を問ふは是れ窮まるを問ふなり、應ふることなきに之に應ふるは是れ內なきなり。內無きを以て窮まるを問ふを待つ。是の若き者は、外、宇宙を觀ず、內、大初を知らず、是を以て崑崙を過ぎず、大虛に遊ばずと。

死已矣。夫子無ニ所レ發レ予之狂言一而死矣夫。弇堈弔聞レ之曰。夫體レ道者。天下之君子所レ繫焉。今於レ道。秋毫之端。萬分未レ得レ處一焉。而猶知下藏ニ其狂言一而死上。又況夫體レ道者乎。視ニ之無形一。聽ニ之無聲一。於ニ人之論者一。謂ニ之冥冥一。所ニ以論一レ道而非レ道也。

の論ずるもの(一三)に於ては、之を冥冥と謂ふ。道を論ずる所以にして道にあらざるなりと。

(一)婀は姓、荷甘は名 (二)三皇の神農にあらずして後人の號なり (三)道を識く人 (四)晝眠す (五)杖を放つの聲 (六)老龍を尊んでいふ (七)偏僻固陋にして誕慢荒誕 (八)老龍は予を啓發する至言を吐かずして死せり (九)隱者 (一〇)道と一體になれるものは天下の君子の歸する所なり (一一)神農は道に於ては秋毫の末端を萬分したる一にも足らざるにもかゝはらず老龍が至言を藏して死せるを知れり (一二)道は形無きに之を視、聲無きに之を聽くべきもの (一三)人の道を論ずるものに於ては道を冥々といへど斯くいふも已に道の名を論ずるも にして道の本體に觸れたるものに非ず

於レ是泰清問ニ乎無窮一曰。子知レ道乎。無窮曰。吾不レ知。又問ニ乎無爲一。無爲曰。吾知レ道。

是に於て泰清(一)、無窮に問うて曰く、子、道を知るかと。無窮曰く、吾れ知らずと。又無爲に問ふ。無爲曰く、吾れ道を知れりと。曰く、子の道を知る、亦數ありや(二)と。曰く、有りと。曰く、其の數若何と。無爲曰く、吾れ道の以て貴かるべく、以て賤しかるべく、以て約(三)すべく、以て散ずべきを知る。此れ吾が道の數を知る

際者也。謂盈虛衰殺。彼爲盈虛非盈虛。彼爲衰殺非衰殺。彼爲本末非本末。彼爲積散非積散也。

妸荷甘與神農同學於老龍吉。神農隱几闔戶晝瞑。妸荷甘日中奓戶而入曰。老龍死矣。神農隱几擁杖而起。嚗然放杖而笑曰。夫知予僻陋慢訑。故棄予而

にあらず、彼は積散を爲せども積散にあらざるなりと。

(一)物を物とするものは道にして物と際合して差別なし (二)物の差別あるものは是物際と云ふものにて天地間の相對的差別即ち是なり (三)差別の無差別無差別の差別にして物は道に寄り道は物に寓す (四)物の滿缺盛衰の理を云ふ道はよく盈虛をなせども盈ち缺くるものは物の上にあらず又物を盛衰すれども其は物の上にあらず (五)道は物の上に本末の差別を現せども本末直に道にあらず

(一)妸荷甘、(二)神農と與に同じく(三)老龍吉に學ぶ。神農、几に隱り戶を闔ぢて(四)晝瞑す。妸荷甘、日中に戶を奓いて入つて曰く、老龍死せりと。神農几に隱り杖を擁して起ち、(五)嚗然杖を放つて笑つて曰く、(六)夫、予が(七)僻陋慢訑なるを知る。故に予を棄てゝ死せるのみ。夫子(八)予を發く所の狂言なくして死せる夫と。(九)弇堈弔之を聞いて曰く、夫れ(一〇)道を體するものは、天下の君子の繫る所。今、(一一)道に於て秋毫の端、萬分して未だ一に處るを得ざるものにして、而して猶は其の狂言を藏して死せるを知る、又況んや夫の道を體するものをや。(一二)之を無形に視、之を無聲に聽く。人

也。毎下愈況。汝唯莫レ必。無二乎逃レ物。至道若レ是。大言亦然。周徧咸三者。異レ名同レ實。其指一也。嘗相與遊二乎無何有之宮一。同合而論二無レ所二終窮一乎。嘗相與無爲乎。澹而靜乎。漠而淸乎。調而閒乎。寥已吾志。無レ往焉而不レ知二其所一レ至。去而來。不レ知二其所一レ止。吾已往來焉。而不レ知二其所一レ終。彷二徨乎馮閎一。大知入焉。而不レ知二其所一レ窮。

知らず。（一八）馮閎に彷徨して、大知入るとも、而かも其の窮まる所を知らじ。

（一）無擇の師たる東郭順の子　（二）道の在るところを明指すべし　（三）ケラヤアリ　（四）道がケラヤアリに在りとすれば何ぞ其の卑しきや　（五）シヒナ稲にヒエの中にあり　（六）瓦の瓶の中にあり　（七）貴公の問ひは道の在所にありて本質の如何を問はず　（八）正は市尹にして獲は其の名　（九）市の取締役に大家を足もて踏みて其の肥瘠を検する法を問ふ　（一〇）豕の肥瘠を知るには髀部などの卑しき處になるほど踏みてよく其の肥瘠を知ることを得　（一一）汝道の一端を指して道とすることなく物を逃れて他に道ありとなす勿れ　（一二）三語皆アマネシと云ふ意にて名は異なれど意義同じ　（一三）今汝と虚無の中に遊び萬物を一に合して無窮なる道を論じ見ん　（一四）寂莫にして淸虚ならんか　（一五）調和して閒適ならんか　（一六）吾が志高遠寥廓にして往くこと無くして無限に往き其の至るところを知らず　（一七）去つて又來るも自ら去來するのみにして止住するところを知らず　（一八）大虚の裡に彷徨消遙して大和の者入り來るも其の窮まるところを知らず

物物者。與レ物無レ際。而物有レ際者。所レ謂物際者也。不際之際。際之不

物を物とする者は、物と際なし。（一）而して物の際あるものは、所謂物際なるものなり。（二）不際の際は際の不際なるものなり。（三）（四）盈虛衰殺を謂はんに、彼は盈虛を爲せども盈虛にあらず、彼は衰殺を爲せども衰殺にあらず、彼は本末を爲せども本末

聞。聞不レ若レ塞。此之謂二大得一。東郭子問二於莊子一曰。所謂道惡乎在。莊子曰。無レ所レ不レ在。東郭子曰。期而後可。莊子曰。在二螻蟻一。曰何其下邪。曰在二稊稗一。曰其何愈下邪。曰在二瓦甓一。曰何其愈甚邪。曰在二屎溺一。東郭子不レ應。莊子曰。夫子之問也。固不レ及レ質。正獲之問二於監市履レ狶

ることなし ● [illegible]を[illegible]して始めて生死の大道を知るを得故に之を大得といふ

(一)東郭子、莊子に問うて曰く、所謂道は惡にか在ると。莊子曰く、在らざる所なしと。東郭子曰く、(二)期して後、可なりと。莊子曰く、(三)螻蟻に在りと。曰く、(四)何ぞ其れ下れるやと。曰く、(五)稊稗に在りと。曰く、何ぞ其れ愈〻下れるやと。曰く、(六)瓦甓に在りと。曰く、何ぞ其れ愈〻甚しきやと。曰く、屎溺に在りと。東郭子應へず。莊子曰く、(七)夫子の問や、固より質に及ばず。(八)正獲の(九)監市に狶を履むを問ふや、(一〇)下る毎に愈〻況ふ。(一一)汝唯〻必とすること莫れ、物を逃る〻ことなかれ。至道是の若し、大言も亦然り。(一二)周徧咸、三つのもの、名を異にして實を同じうす其の指一なり。(一三)嘗みに相與に無何有の宮に遊び、同合して終窮する所なきを論ぜんか。嘗みに相與に無爲ならんか、澹にして靜ならんか、(一四)漠にして淸ならんか、(一五)調にして閒ならんか。(一六)寥たるのみ吾が志。往くこと無くして、其の至る所を知らず。(一七)去つて來れども、其の止まる所を知らず。吾れ已に往來して、其の終る所を

然漻然。莫レ不レ入レ焉。已化而生。又化而死。生物哀レ之。人類悲レ之。解二其天弢一。墮二其天袠一。紛乎宛乎。魂魄將レ往。乃身從レ之。乃大歸乎。

の天袠を墮て、(四)紛乎宛乎、魂魄將に往かんとして、乃ち身之に從ふ、乃ち(五)大歸か。

㊀ 水の流れ入る如く物の興るが如く出でて生ぜざることなく遂に動き遠ざかりて入りて死なざることなし ㊁ 已に化して生じ又化して死す故に生死共に自然の變化 ㊂ 弓囊衣囊を解き棄つる如く形體を棄つ ㊃ 弓衣の囊を解き棄つる紛亂の狀をいふ ㊄ 逝いて反らざるをいふ卽ち死

不レ形之形。形之不レ形。是人之所二同知一也。非二將レ至之所一レ務也。此衆人之所二同論一也。彼至則不レ論。論則不レ至。明見無レ値。辯不レ若レ默。道不レ可レ

(一)形せざるの形し、形せるの形せざる、是れ人の同じく知る所なり。(二)將に至らんとするの務むる所にあらざるは、此れ衆人の同じく論ずる所なり、(三)彼れ至れば則ち論ぜず、論ずれば則ち至らず。(四)明かに見れば値ふこと無し、辯ずるは默するに若かず、道は聞くべからず、聞くは塞ぐに若かず、此を之れ(五)大得と謂ふと。

㊀ 形無き死より形ある生に化し形せる生より形無き死に化し生死畢竟化に過ぎざるは人の知れるところ ㊁ 生死の至るは必至にして務むと雖も之を避くべらず ㊂ 生死の大事は論辯を超越するが故に其の至る時は論ぜず論ずるは未だ變化の大道に至れるものに非ず ㊃ 生死は視聽を超越するが故に明かに視るときは此の大事に悟達す

觀之。生者喑醷物也。雖有壽夭。相去幾何。須臾之說也。奚足以爲堯桀之是非。果蓏有理。人倫雖難。所以相齒。聖人遭之而不違。過之而不守。調而應之德也。偶而應之道也。帝之所興。王之所起也。

や。(四)果蓏にも理あり。人倫、難しと雖も、相齒する所以なり。(五)聖人之に遭ひて違はず、之を過ぎて守らず。(六)調へて之に應ずるは德なり。(七)偶ひて之に應ずるは道なり。(八)帝の興る所、王の起る所なり。

❶ 天地の中に至人といふものあり ❷ しばらく形體を假りて人となり居るも其の根本たる無に反らんとして死生を忘 ❸ 天地の根本たる無の觀念よりみれば生は瞬間に生ずる泡に等しく假に長短の差あれど其の區別殆ど無くいづれにしても無窮の大年より見れば僅かの時間の爭ひなり ❹ 木實々草實の微物にも自然に從うて存在するには一定の理のあるあり人倫の道は複雜にして窮し難しと雖も亦草木の實と相對列して天地間に伍する所以 ❺ 故に聖人天地の間に孕まれて生に遭ふ時は遭ふに從うて或は又死して之を過ぐる時は過ぐるに任せて守ることなし ❻ 己を調へて生に順應するは德にして爲す所なり ❼ 道ふがまゝに生に順應するは道にして爲す所なし ❽ 帝は道に得て興り王は德を得て起る

人生天地之間。若白駒之過郤。忽然而已。注然勃然。莫不出焉。油

人の天地の間に生まるゝ、白駒の郤を過ぐるが若く、忽然たるのみ。(一)注然勃然として焉に出でざることなく、油然漻然として、焉に入らざることなし。(二)已に化して生じ、又化して死す。生物之を哀しみ、人類之を悲しむ。(三)其の天弢を解き、其

必知。辯之不ニ必慧。聖人以斷ㇾ之矣。若夫益ㇾ之而不ㇾ加益。損ㇾ之而不ㇾ加ㇾ損者。聖人之所ㇾ保也。淵淵乎其若ㇾ海。魏魏乎其終則復始也。運ニ量萬物一而不ㇾ匱。則君子之道。彼其外與。萬物皆往資焉而不ㇾ匱。此其道與。

若し夫れ(二)之を益して益すことを加へず、之を損して損を加へざるものは、聖人の保つ所なり。(三)淵淵乎として其れ海の若く、魏魏乎として、其れ終れば則ち復た始まるなり。(四)萬物を運量して、匱しからざるは、則ち君子の道、(五)彼は其れ外か。(六)萬物皆往いて資つて匱きず、此れ其れ道か。

(一) 博學必ずしも知ならず辯給必ずしも慧ならざるを以て聖之を斷絶して棄てたり (二) 道は自ら存する所あれば之を益するも益せりとなさず之を損するも損せりとなさず故に聖人之を保てり (三) 道は深廣たること海の如く又高大にして終るとすればまた始まり無始無終なり (四) 萬物を運用裁量して窮まる所なきは君子の道 (五) 君子の道は未だ至らざる所あつて萬物に待つ故に外なり (六) 萬物の方より嚮往して至り而も無爲なるが故に乏しきことなし是眞の道なり

中國有ㇾ人焉。非ㇾ陰非ㇾ陽。處ニ於天地之間一。直且爲ㇾ人。將ㇾ反ニ於宗一。自ㇾ本

(一)中國に人なるものあり、陰にあらず陽にあらず、天地の間に處る。(二)直に且らく人と爲るも、將に宗に反らんとす。(三)本より之を觀れば生は喑醷の物なり、壽夭ありと雖も相去ること幾何ぞ。須臾の說なり。奚ぞ以て堯桀の是非を爲すに足らん

哉。將爲汝言其崖略。夫昭昭生於冥冥。有倫生於無形。精神生於道。形本生於精。而萬物以形相生。故九竅者胎生。八竅者卵生。其來無迹。其往無崖。無門無房。四達之皇皇也。邀於此者。四枝彊。思慮恂達。耳目聰明。其用心不勞。其應物無方。天不得不高。地不得不廣。日月不得不行。萬物不得不昌。此其道與。

なく、其の往くや崖なし。門なく房なく、四達して皇皇たり。此を邀ふるものは四枝彊く、思慮恂達、耳目聰明、其の心を用ふるや勞せず、其の物に應ずるや、方なし。天得ざれば高からず、地得ざれば廣からず、日月得ざれば行かず、萬物得ざれば昌えず、此れ其れ道か。

（一）冥昧（二）道が現はるゝを聞き難ず（三）隠れたるを洗顯す（四）顯つて隠け去る（五）道は奥深くして說きがたし（六）明かにして見るべき倫儀は冥々たる太極中より生じ來る（七）相對的なる五行の元氣は無形の精儀より生ず（八）人の性は天道即ち道より生ず（九）形體の本は男女の精血より生ず（一〇）九穴を有する獸類は胎生し八穴を有する魚鳥は卵生す（一一）其の生れ來るや何處より來りしかを知らず其の死に往くや其の往け果を知らず（一二）來るを防ぐる門もなく往くを容るゝ房舍もなし（一三）四方に通達して廣大なり（一四）道を迎へて之を得るものは四肢強く、思慮聰富にして通達し耳目亦聰明（一五）天も道を得ざるときは高きを得ず地も道を得ざるときは廣きを得ず

且夫博之不

且夫れ博の必ずしも知ならず、辯の必ずしも慧ならざる、聖人以に之を斷てり。

非㆓汝有㆒。是天地之委和也。性命非㆓汝有㆒。是天地之委順也。孫子非㆓汝有㆒。是天地之委蛻也。故行不㆑知㆑所㆑往。處不㆑知㆑所㆑持。食不㆑知㆑所㆑味。天地之彊陽氣也。又胡可㆓得而有㆒邪。

と。

(一) 官名、古の帝王に四輔あり左輔右弼前疑後丞是なり (二) 道は之を我身に所有し得らるゝものにや (三) 委は結聚の意、天は陰陽五行を以て萬物を化生し人その氣を得て形體を有す故に委形といふ (四) 天地の氣中和して生を現じ來る故に和といふ (五) 順は理なり天地の理、理正として道なるものを得て此處に性命となる故に委順といふ (六) 子孫は形々相禪つて窮まるところ無く蟬のヌケガラの如し (七) 行くも何處に往くかを知らず處るも其の處るところを固執せず食へども其の時の如何を知らず (八) 以上の如きは卽ち天地の健動する氣によつて然るにて之を我身に所有すべくもなし

孔子問㆓於老聃㆒曰。今日晏閒。敢問㆓至道㆒。老聃曰。汝齋戒。疏㆓瀹而心㆒。澡㆓雪而精神㆒。掊㆓擊而知㆒。夫道窅然難㆑言

孔子、老聃に問うて曰く、今日晏閒(一)なり。敢へて至道を問ふと。老聃曰く、汝齋戒して而の心を疏瀹(二)し、而の精神を澡雪(三)し、而の知を掊擊(四)せよ。夫れ道は窅然(五)として言ひ難きかな。將に汝が爲めに其の崖略を言はんとす。夫れ昭昭(六)は冥冥に生じ、有倫(七)は無形に生じ、精神(八)は道に生ず。形(九)の本は精に生じて、而して萬物、形を以て相生ず。故に九竅(一〇)なるものは胎生し、八竅なるものは卵生す。其の(一一)來るや迹

無求其故言未卒。齧缺睡寐。被衣大說。行歌而去之曰。形若槁骸。心若死灰。眞其實知。不以故自持。媒媒晦晦。無心而不可與謀。彼何人哉。

舜問乎丞曰。道可得而有乎。曰汝身非汝有也。汝何得有夫道。舜曰吾身非吾有也。孰有之哉。曰是天地之委形也。生

に謀るべからず。彼れ何人ぞやと。

（一）王倪の弟子　（二）王倪の師　（三）汝の形體を端正にして汝の視る所を一に定むる時は自然の和氣生ずべし　（四）汝の知識を斂め汝の思慮を一に定めて專に思索せざる時は神來りて汝の身に舍るべし　（五）德は汝の身を美にして美となり道は汝の心中に居るに至るべし　（六）無知にして自識すること新しく生れし犢牛の如く無心にし其の然る所以を求むるなかれ　（七）語る所あつて未だ終らずして睡に入る。　（八）形體は枯れたる骸の如く心冷えたる灰の如し　（九）其の心眞實無邪にして克く覺る所あり其の理由の如何は自ら心にかけず　（十）昧々として無識無心にして與に事を謀るべからず

（一）舜、丞に問うて曰く、（二）道得て有すべきかと。曰く、汝の身すら、汝の有にあらざるなり。汝何ぞ夫の道を有するを得んと。舜曰く、吾身、吾が有にあらずんば、孰れか之を有するやと。曰く、（三）是れ天地の委形なり。生、汝の有にあらず、是れ（四）天地の委和なり。性命、汝の有にあらず、是れ（五）天地の委順なり。孫子、汝の有にあらず。是れ（六）天地の委蛻なり。故に（七）行いて往く所を知らず。處つて持する所を知らず。食うて味ふ所を知らず。（八）天地の彊陽氣なり。又胡ぞ得て、有すべけんや

成レ體。天下莫レ不ニ沈浮一。終身不レ故。陰陽四時運行。各得ニ其序一。惛然若レ亡而存。油然不レ形而神。萬物畜而不レ知。此之謂ニ本根一。可三以觀ニ於天一矣。

（八）扁然來去して窮りなけれども萬物は古より固より存して往くことなし　（九）六合は巨大比なしと雖も未だ天地の本根内を離れず　（一〇）秋毫は小なれども天地の本根に待つ所あつて微細ながらもその體をなす　（一一）天下萬民此の本根の内に浮沈出入せざることなくして日々に新に終身此の本根の陳びることなし　（一二）陰陽四時も此の本根によつて運行して各その序を誤らず　（一三）見るべからざる貌　（一四）物の生ずる貌、物の形體を爲さずして自ら神明靈用　（一五）萬物は此の本根にやしなはるれども自ら覺らず　（一六）本根は虚無自然にして以て天道を觀ることを得べし

齧缺問ニ道乎被衣一。被衣曰。若正ニ汝形一。一ニ汝視一。天和將レ至。攝ニ汝知一。一ニ汝度一。神將ニ來舍一。德將レ爲ニ汝美一。道將レ爲ニ汝居一。汝瞳焉如ニ新生之犢一。而

齧缺（一）、道を被衣（二）に問ふ。被衣曰く、若（三）、汝の形を正しくし、汝の視を一にせよ、天和、將に至らんとす。（四）汝の知を攝し、汝の度を一にせよ。神將に來り舍らんとす。（五）德、將に汝の美と爲らんとす、道、將に汝の居と爲らんとす。汝瞳焉（六）として新生の犢の如かれ、而して其の故を求むることなかれと。言未だ卒らず、齧缺睡（七）寐す。被衣大に說び、行歌して之を去つて曰く、（八）形、槁骸の若く、心、死灰の若し。（九）眞にして其れ實に知れり、故を以て自ら持せず。（一〇）媒媒晦晦、無心にして與

天地有㆓大美㆒而不㆑言。四時有㆓明法㆒而不㆑議。萬物有㆓成理㆒而不㆑說。聖人者原㆓天地之美㆒而達㆓萬物之理㆒。是故至人無㆑爲。大聖不㆑作。觀㆓於天地㆒之謂也。今彼神明至精與㆑彼百化。物已死生方圓。莫㆑知㆓其根㆒也。扁然而萬物。自㆑古以固存。六合爲㆑巨。未㆑離㆓其內㆒。秋毫爲㆑小。待㆑之

(一)天地、大美あれども言はず、(二)四時、明法あれども議せず、(三)萬物、成理あれども說かず。(四)聖人なるものは、天地の美に原づいて、萬物の理に達す。是の故に至人は爲すことなく、大聖は作さずと、(五)天地に觀るの謂ひなり。今、(六)彼の神明至精、彼と百化す、(七)物已に死生方圓にして、其の根を知ること莫きなり。(八)扁然として萬物古より以て固より存す。(九)六合、巨たれども、未だ其內を離れず。(一〇)秋毫、小たれども、之を待つて體を成す。(一一)天下沈浮せざること莫くして、終身、故ならず。(一二)陰陽四時運行して、各其の序を得。(一三)惛然として、亡きが若くにして存し、(一四)油然として、形せずして神なり。(一五)萬物畜はれて知らず、此を之れ本根と謂ふ。(一六)以て天を觀るべし。

(一) 天地は覆載生成の美あれども其の美をいはず (二) 四時は生長收藏の法則あれども其の法を議せず (三) 萬物は飛潜動植自然の理あれども說かず (四) 聖人は天地の美に本づき萬物自然の理に達するが故に至人は無爲大聖は作爲せず (五) 是天地自然の理を觀てこれに循ふを謂ふ (六) 天地の神明靈妙にして至精至純なる體を以て物と共に百化千變す (七) 物は已に或は死し或は生じ或は方形に或は圓形に變化すれども然らしむる根本を知ること能はず

惡者爲二臭腐一。臭腐復化爲二神奇一。神奇復化爲二臭腐一。故曰。通二天下一一氣耳。聖人故貴レ一。

知謂二黄帝一曰。吾問二無爲謂一。無爲謂不レ應レ我。非レ不二我應一。不レ知レ應レ我也。吾問二狂屈一。狂屈中欲レ告レ我。而不二我告一。中欲レ不二我告一。非レ告而忘レ之也。今予問二乎若一。若知レ之。奚故不レ近。黄帝曰。彼其眞是也。以二其不一レ知也。此其似レ之也。以二其忘一レ之也。予與レ若終不レ近也。以二其知一レ之也。狂屈聞レ之。以二黄帝一爲二知言一。

知、黄帝に謂つて曰く、吾れ無爲謂に問ふに、無爲謂、我に應へず、我に應へざるにあらず、我に應ふるを知らざるなり。吾れ狂屈に問ふに、狂屈、中ごろ、我に告げんと欲して、我に告げず。我に告げざるにあらず、中ごろ、告げんと欲して之を忘れたるなり。今、予、若に問ふに、若、之を知れり。奚の故にか近からざると。(一)黄帝曰く、(二)彼の其の眞に是なるや、其の知らざるを以てなり。此の其の之に似たるや、其の之を忘れたるを以てなり。予と若と、終に近からざるや、其の之を知れるを以てなりと。狂屈之を聞いて、(三)黄帝を以て知言と爲す。

(一) 今我帝に問ふに帝は道を得る所以を御存知にて話しきかされたり然るに帝と我と道に近からずとは何故に… (二) 無爲謂の眞に正しきは道を得る所以を知らざるが故狂屈の之に近きは之を忘れし故なり (三) 予と汝と終に近からざるは之を知つて言にせるを以てなり道なるものは冥々として言知の得べき所に非ず然るに之を知つて言ふは近き所以に非ず

首也。故曰。爲道者日損。損之又損之。以至於無爲。無爲而無不爲也。今已爲物也。欲復歸根。不亦難乎。其易也。其唯大人乎。生也死之徒。死也生之始。孰知其紀。人之生。氣之聚也。聚則爲生。散則爲死。若死生爲徒。吾又何患。故萬物一也。是其所美者爲神奇。其所

のみか。生や死の徒、死や生の始め、孰れか其の紀を知らん。人の生は氣の聚りなり。聚まれば則ち生と爲り、散ずれば則ち死となる。若し死生、徒たらば、吾れ又何をか患へん。(一〇)故に萬物は一なり。是れ其の美とする所のものは神奇たり。其の惡む所のものは臭腐たり。臭腐復た化して神奇たり。神奇復た化して臭腐たり。(一一)故に曰く、天下を通じて一氣のみと。(一二)聖人故に一を貴ぶと。

(一) 道は強ひて之を致すべきものにあらずして自ら至るべきものなり、德は自ら至るべきものにあらずして致して後之を得るもの。道不可致より聖人故貴一まで文章錯雜にして接續せざるが如し (二) 仁は爲は道に近きが故に之を爲すも可なり (三) 義は分別に過ぐるが故に行ふべからず (四) 禮は相助けて僞るものなれば疎んずべし (五) 道を失ひたる後に始めて德あり德を失ひたる後に仁あり仁を失ひたる後に義あり義を失ひたる後に禮あり (六) 禮は道の外飾にして僞る所あれば亂のはじめなり (七) 道ををさむるものは日に禮を損し義を損し斯く損しつくして無爲玄默の境に達するを以て爲すことと無くしてよく爲さざる所無し (八) 世人已に爲す所ある物となつて無爲の根本に復歸せんと欲するも難し (九) 無爲に復歸するの易きは大人のみ (一〇) 生は死の伴侶死は生の始めなるが故に何人も其の根本とするところを知らず (一一) 人の美とする所のものは神奇靈麗にして醜とする所のものは臭腐醜穢なれども醜なるもの化して美となり美なるもの亦化して醜となり變化して常無し (一二) 天下唯一氣あるのみ此の一氣化して種々の相を現ず

問。反二於帝宮一。見二黄帝一而問焉。黄帝曰。無レ思無レ慮。始知レ道。無レ處無レ服。始安レ道。無レ從無レ道。始得レ道。知問二黄帝一曰。我與レ若知レ之。彼與レ彼不レ知也。其孰是耶。黄帝曰。彼無爲謂眞是也。狂屈似レ之。我與レ汝終不レ近也。夫知者不レ言。言者不レ知。故聖人行二不言之教一。

る者を譬ふ　（三）水の名、幽昧の意を寓す　（四）深遠靜然の意、至道の玄妙にして顯晦常無きを寓して丘となす　（五）言行無くして自然なるを擬人していふ　（六）無爲謂の答へざるはわざと答へざるにあらで是の如く有爲の問ひに對して答ふべき所以を知らざりしなり　（七）水の名、顯明の意を寓す　（八）丘の名　（九）人の名、猖狂にして屈然無知なる意を寓す　（一〇）黄帝の宮に反りて其の然る所以を問ふ　（一一）我と黄帝とは道を得る所以を知れるに無爲謂と狂屈の知らざるは孰れが是なりや　（一二）無爲謂は始より答ふること能はざるゆゑ是最も無爲玄同の道を得たるが故に道を得るに近し我と汝とは道を得るに之を口に言へるが故に終に近からず

道不レ可レ致。徳不レ可レ至。仁可レ爲也。義可レ虧也。禮相僞也。故曰。失レ道而後徳。失レ徳而後仁。失レ仁而後義。失レ義而後禮。禮者道之而華亂之

（一）道は致すべからず、徳は至るべからず、（二）仁は爲すべきなり、（三）義は虧くべきなり、（四）禮は相僞るなり。故に曰く、（五）道を失うて而して後、徳。徳を失うて而して後、仁。仁を失うて而して後、義。義を失うて而して後、禮。（六）禮なるものは道の華にして亂の首なりと。故に曰く、（七）道を爲むる者は日に損す、之を損して又之を損し、以て爲すこと無きに至る、爲すこと無くして爲さざること無しと。今、（八）已に物となつて、根に復歸せんと欲するも、亦難からずや、其の（九）易きや其れ唯ゝ大人

知謂無爲謂曰。予欲有問乎若。何思何慮則知道。何處何服則安道。何從何道則得道。三問。而無爲謂不答也。非不答。不知答也。知不得問。反於白水之南。登狐闋之上。而睹狂屈焉。知以之言也問乎狂屈。狂屈曰。唉。予知之。將語若。中欲言而忘其所欲言知不得

何くに道らば則ち道を得んと。三たび問へども無爲謂答へざるなり、答へざるに非ず、答を知らざるなり。知、問ふことを得ず、白水の南に反り、狐闋(七)の上に登つて、而して狂屈(九)を睹たり。知、之の言を以て狂屈に問ふ。狂屈(八)曰く、唉、予之を知れり、將に若に語らんとすと。中ごろ、言はんと欲して、其の言はんと欲する所を忘る。知問ふことを得ず。帝宮(一〇)に反り、黄帝に見えて問ふ。黄帝曰く、思ふことなく、慮ることなくして、始めて道を知り、處ることなく、服することなくして始めて道に安んじ、從ることなく、道ることなくして始めて道を得んと。知、黄帝に問うて曰く、我と若(一一)とは之を知り、彼と彼とは知らざるなり。其れ孰れか是なるやと。黄帝曰く、彼の無爲謂(一二)は眞に是なり、狂屈は之に似たり。我と汝とは終に近からざるなり。夫れ知るものは言はず、言ふものは知らず、故に聖人不言の教を行へり。

(一) 此の無爲謂の知を去り思慮を棄つればよく道の本體に融合すべき所以を說く　(一〇) 黄帝の居といふ、思惟の心あ

楚王與凡君坐。少焉楚王左右曰。凡亡者三。凡君曰凡之亡也。不足以喪吾存。夫凡之亡。不足以喪吾存。則楚之存。不足以存存。由是觀之則凡未始亡。而楚未始存也。

知北遊於玄水之上。登隱弅之丘。而適遭無爲謂焉。

楚王、凡君と與に座す。少くあつて楚王の左右曰く、(一)凡亡ぶるもの三つ。(二)凡君曰く、(三)凡の亡ぶるや以て吾が存を喪ふに足らず。夫れ(四)凡の亡ぶる、以て吾が存を喪ふに足らざるときは、則ち楚の存する以て存を存とするに足らず。是に由つて之を觀れば、則ち凡、(五)未だ始めより亡びずして、而して楚未だ始めより存せざるなり。

(一) 凡は國名 (二) 近侍の臣 (三) 凡國滅亡すとも吾が存在の意識を滅すべからず (四) 凡國の存亡は吾が存在の意識に關せざるものならば存亡俱に無にして楚國の存することも以て之を存とするに足らず (五) 存亡俱に無とすれば亡びたる凡國も以て亡べりとすべからず存せる楚國も存ぜりとするに足らず

知北遊(一)

(二)知、北のかた、(三)玄水の上に遊び、(四)隱弅の丘に登つて、而して適〻(五)無爲謂に遭ふ。知、無爲謂に謂つて曰く、予れ若に問ふことあらんと欲す。何を思ひ何を慮らば、則ち道を知らん、何くに處り、何を服とせば則ち道に安ぜん、何くに從り

不可止也。吾以爲得失之非我也。而無憂色而已矣。我何以過人哉。且不知其在彼乎。其在我乎。其在彼邪亡乎我。在我邪亡乎彼。方將躊躇。方將四顧。何暇至乎人貴人賤哉。仲尼聞之曰。古之眞人。知者不得説。美人不得濫。盜人不得劫。伏戲黄帝不得友。死生亦大矣。而無變乎己。況爵祿乎。若然者。其神經乎大山而無介。入乎淵泉而不濡。處卑細而不憊。充滿天地。既以與人。己愈有。

説くことを得ず、美人も濫ることを得ず、盜人も劫すことを得ず、伏戲黄帝も友とすることを得ず。死生亦大なり(二二)、而も己に變なし、況や爵祿をや。然るが若き者は(二三)、其の神大山を經とも介せらるゝなく、淵泉に入るとも濡れず、卑細に處るとも憊れず、天地に充滿す。(二四)既に以て人に與へて、己れ愈く有り。

(一二) 楚の莊王の相　(一三) 楚の相となる　(一四) 罰を蒙むるものとして憂ふ　(一五) 足下の眉目の間を見に喜びの色あり　(一六) 足下の工夫は如何　(一七) 軒冕爵祿の來るものは拒まず去るものは追はず　(一八) 窮通得失は命にして吾が關する所に非ずと思うて憂へず　(一九) 軒冕爵祿は彼に在るか、我にあるか若し彼に在らば彼の得にして我の失我に在らば我の得にして彼の失と見ゆかとを知らずして得失を支關す　(二〇) 逍遙自得して八方を高覽す　(二一) 人を以て貴しとし以て賤しとするを知る暇無し　(二二) 死生は人間の重大事なれども眞人の心を變ぜしめがたし　(二三) 是の如き人は其の精神大山を經過すとも妨げらるゝことなく淵の中に入るとも濡るゝことなく卑賤微細の地に居るとも病まずして天地に遍滿充塞す　(二四) 既に爵祿富貴を以て人に與ふれども己はいよいよ無形の寶を有し來る

分垂在レ外。揖二御寇一而進レ之。御寇伏レ地汗流至レ踵。伯昏無人曰。夫至人者上闚二青天一。下潜二黄泉一。揮二斥八極一。神氣不レ變。今女怵然有二恂目之志一。爾於レ中也殆矣夫。

向に却行し踵は三分の二だけ足より外にのぞく　(八)八方に放縱するも神氣變ぜず　(九)懼れて目眩まんとす　(一〇)汝の矢中ること難し

肩吾問二於孫叔敖一曰。子三爲二令尹一而不二榮華一。三去レ之而無二憂色一。吾始也疑レ子。今視二子之鼻間一栩栩然。子之用レ心獨奈何。孫叔敖曰。吾何以過レ人哉。吾以其來不レ可レ却也。其去

肩吾、(一)孫叔敖に問うて曰く、子三たび(二)令尹と爲つて、而して榮華とせず。三たび之を去れども憂色なし。吾れ始めや(三)子を疑へり。今、(四)子の鼻間を視るに栩栩然たり。(五)子の心を用ふること獨り奈何と。孫叔敖曰く、吾れ何を以て人に過ぎんや。吾れ以へらく、(六)其の來るや却くべからず、其の去るや止むべからずと。吾れ(七)得失の我に非ざるを以爲うて、而して憂色なきのみ。我れ何を以て人に過ぎんや。(八)且知らず、其の彼に在るか、其の我に在るか、其の彼に在らんか我に亡く、我に在らんか彼に亡きを。(九)方に將に躊躇し、方に將に四顧す。何ぞ人の貴しとし人の賤しとするに至るに暇あらんやと。仲尼之を聞いて曰く、古の(一〇)眞人は知者も

之也。而又何論刺焉、彼直以昏斷須一也。

列御寇爲伯昏無人射。引之盈貫、措杯水其肘上、發之。適矢復沓。方矢復寓。當是時、猶象人也。伯昏無人曰、是射之射。非不射之射也。嘗與汝登高山、履危石、臨百仞之淵、若能射乎。於是無人遂登高山、履危石、臨百仞之淵、背逡巡、足二

列御寇、伯昏無人の爲めに射る。之を引いて貫に盈つ。(一)杯水を其の肘上に措いて、之を發つ。適に矢はなつて復た沓なり、(二)方に矢はなつて復た寓す。(三)是の時に當つて、猶ほ象人のごときなり。(四)伯昏無人曰く、是れ射の射なり。(五)不射の射に非ざるなり。嘗に汝と與に高山に登り、(六)危石を履み、百仞の淵に臨まば、若能く射んかと。是に於て無人遂に高山に登り、危石を履み、百仞の淵に臨む。(七)背、逡巡し、足二分垂れて外に在り、御寇を揖して之を進ましむ。御寇、地に伏し、汗流れて踵に至る。伯昏無人曰く、夫れ至人なるものは、上、靑天を闚ひ、下、黃泉を潛り、(八)八極に揮斥して、神氣變ぜず。今、汝、(九)怵然として恂目の志あり、(一〇)爾の中たるに於けるや殆いかなと。

(一)弓を引いて一杯にひきしぼる　(二)前矢と後矢と重なり的に當る　(三)丁度矢を放つたかと思ふとまた次の矢を弦につがふ　(四)木偶の如く身動きをせず　(五)射の射にして無心の射に非ず　(六)無心のは心外境にあらねど射の射は心外境にあるを以て高山に登り危巖をふみ深さ百仞の淵に臨む時は能く射ることなし　(七)伯昏無人は背

而授二之政一。典法無レ更。偏令無レ出。三年。文王觀二於國一。則列士壞レ植散レ羣。長レ官者不レ成レ德。斔斛不三敢入二於四竟一。列士壞レ植散レ羣。則尙レ同也。長レ官者不レ成レ德。則同レ務也。斔斛不三敢入二於四竟一。則諸侯無二二心一也。文王於レ是焉以爲二大師一。北面而問曰。政可三以及二天下一乎。臧丈人昧然而不レ應。泛然而辭。朝令而夜遁。終身無レ聞。

顏淵問二於仲尼一曰。文王其猶未邪。又何以夢爲乎。仲尼曰。默。女無言。夫文王盡レ

蹄赤き馬に乘る (九) 汝の執る所の國政を臧の男に托せよ然らば人民疾苦より癒えん (一〇) 諸大夫驚きつゝしんで曰く其は文王の父君なり (一一) 其は先君の命なれば王に於ては唯命に從ふより外なし又卜定するの要なし (一二) 法度を改變せずして舊に從ひ一令をも出さず (一三) 國中の樣子を觀る (一四) 諸士列を破り群を散じて朋黨比周なさず (一五) 一官に長たるもの自ら德を成し功に居ることをなさず (一六) 六斗四升と一石即ち度量をいふ。四鄰の諸侯周の度量を信じて己れの度量を周の境内に入れず (一七) 和合協同を尙ぶ (一八) 衆と功を競はず務を同じくす (一九) 臣の座につきて問ふ (二〇) 斯の如きの政は之を天下に廣く及ぼすべきにや (二一) ぼんやりとして答へず飄然として辭す (二二) 文王朝その令を下し丈人その夜は遁れ去り一生涯杳として聞ゆることなし

顏淵仲尼に問うて曰く、文王は其れ猶ほ未だしか。又何ぞ夢を以てせんやと。(一) 仲尼曰く、默せよ、汝言ふこと無かれ。夫れ文王之を盡くせり、(二) 而るを又何ぞ論刺せん、彼直に以て斯須に循へる也と。(三)

(一) 夢を以て下を欺かんや (二) 文王は心を盡して致せしなり然るを又何ぞ非難すべき (三) 一時の臨機應變

之弗レ安也。欲ニ終而釋レ之。而不レ忍ニ百姓之無レ天也。於レ是旦而屬ニ之大夫一曰。昔者寡人夢見ニ良人黑色而頿。乘ニ駁馬而偏朱蹄一。號曰。寓ニ而政於臧丈人一。庶ニ幾乎民有レ瘳乎。諸大夫蹵然曰。先君王也。文王曰。然則卜レ之。諸大夫曰。先君之命。王其無レ它。又何卜焉。遂迎ニ臧丈人一

見る。號して曰く、而の政を臧の丈人に寓せよ、民瘳ゆることあるに庶幾からんと。諸大夫（一〇）蹵然として曰く、先君王なりと。文王曰く、然らば則ち之を卜せんと。諸大夫曰く、（一一）先君の命なり、王其れ它無からん、又何ぞ卜せんと。遂に臧の丈人を迎へて、之に政を授く。（一二）典法更むることなく、偏令出すこと無し。三年にして文王（一三）國に觀れば、則ち列士、（一四）植を壞り羣を散じ、（一五）官に長たるもの德を成さず。（一六）斔斛敢へて四竟に入らず。列士、植を壞り、羣を散ずるは則ち同を尚ぶなり。官に長たるもの德を成さざるは、則ち（一八）務を同じうするなり、（一七）斔斛敢へて四竟に入らざるは、則ち諸侯二心なきなり。文王是に於て以て大師と爲し、（一九）北面して問うて曰く、（二〇）政以て天下に及ぼすべきかと。臧の丈人（二一）昧然として應ぜず、泛然として辭す。（二二）朝に令して夜遁れ、終身聞ゆること無し。

（一）周の文王臧の地に遊ぶ　（二）釣道具を備へて釣るにあらねど常に釣れり　（三）其のまゝにして捨て置く　（四）人民の主とする所の人物無きに堪へず　（五）明朝大夫に告げていふ　（六）昨夜　（七）賢者　（八）鬚ありて頰毛の一

宋元君將畫圖。衆史皆至。受揖而立。舐筆和墨。在外者半。有一史後至者。儃儃然不趨。受揖不立。因之舍。公使人視之。則解衣槃礴。臝。君曰可矣。是眞畫者也。

文王觀於臧。見一丈夫釣。而其釣莫釣。非持其釣有釣者也。常釣也。文王欲擧而授之政。而恐大臣父兄

宋の元君、將に畫圖せんとす。衆史(一)皆至る。揖を受けて立ち、筆を舐り、墨を和す。外に在るもの半(二)。一史の後れて至るものあり(三)。儃儃然(四)として趨らず、揖を受けて立たず(五)。因つて舍に之く(六)。公、人をして之を視しむれば、則ち衣を解いて槃礴して臝す(七)。君曰く、可なり。是れ眞の畫者なりと。

(一) 多くの畫家皆至り　(二) 畫工堂に入る能はずして外に居るもの半數　(三) 一畫工後れて來るものあり　(四) 舒適自得の意、のろのろと歩みてはしらず　(五) 君命を受くるも拜揖して立たず　(六) 其の宿處に反る　(七) 衣服を脫し箕踞して裸體となる

(一)文王、臧に觀ぶ。一丈夫の釣するを見る、而して其の釣、釣ること莫し。其の釣(二)を持して釣ることあるものに非ず。常に釣れり。文王擧げて之に政を授けんと欲すれば、大臣父兄の安んぜざらんことを恐るゝなり。終(三)にして之を釋かんと欲すれば、百姓の天なき(四)に忍びざるなり。是に於て旦(五)にして之を大夫に屬して曰く、昔者(六)寡人夢に、良人(七)の黑色にして髯(八)あり、駁馬の而かも偏朱蹄なるに乘れるを

必爲二其服一也。爲二其服一者、未三必知二其道一也。公固以爲レ不レ然。何不下號二於國中一曰上無二此道一而爲二此服一者、其罪死。於レ是哀公號レ之五日。而魯國無二敢儒服者一。獨有二一丈夫儒服而立二乎公門一。公卽召而問以二國事一。千轉萬變而不レ窮。莊子曰、以二魯國一而儒者一人耳。可レ謂レ多乎。

莊子曰く、魯國を以てして儒者一人のみ、多しと謂ふべけんやと。

(一) 孔子の道を奉ずる士多くして莊子の道を奉ずるもの少し (二) 天に象どる圓形の冠を冠るものは天時を知るを表す (三) 方履なり。地に象どる四角の履をはくものは地形を知るを表す (四) 緩帶を飾る玉環を綴く貫けるものは事に遇へば決斷するを表す一說緩を綬字と讀むべしと云ふ (五) 君子其の道を備へ有するものは必ずしもおに據べたる如き儒服をきるもの必ずしも道を知らず (六) まことに儒者を疑うて然らずとするならば (七) 其の議論千變萬化して窮まることなし

百里奚爵祿不レ入二於心一。故飯レ牛而牛肥。使下秦穆公忘二其賤一與中之政上也。有虞氏死生不レ入二於心一。故足二以動一レ人。

百里奚、爵祿心に入らず。故に牛に飯して牛肥え、秦の穆公をして、其の賤を忘れて、之に政を與へしめたり。有虞氏死生心に入らず、故に以て人を動かすに足りき。

(一) 虞の賢人、もと虞の大夫、秦政に任じ五羖大夫と稱す (二) 爵位俸祿心に求めずして自適す (三) 百里奚牛を飼ひて牛肥えたるが故に秦の穆公其の身分賤なるを忘れて政を授く (四) 舜の父頑に母嚚に小子象を愛して舜を虐待せしかど死生を心にかけざるが故に人心を動かすことを得居る處邑を成し終に堯一禪を受く

厚、日月之自明。夫何修焉。孔子出。以告顔回曰。丘之於道也。其猶醯雞與。微夫子之發吾覆也。吾不知天地之大全也。

解は丁度醋甕の中の醋虫の如く狹少淺劣若し夫子が甕の蓋を開くことなかりしならば吾は天地の大全なることを知らざりしならん

莊子見魯哀公。哀公曰。魯多儒士。少爲先生方者。莊子曰。魯少儒。哀公曰。擧魯國而儒服。何謂少乎。莊子曰。周聞之。儒者冠圜冠者知天時。履句屨者知地形。緩佩玦者事至而斷。君子有其道者。未

莊子、魯の哀公に見ゆ。哀公曰く、魯には儒士多く、先生の方を爲すもの少しと。莊子曰く、魯には儒少しと。哀公曰く、魯國を擧げて儒服す。何ぞ少しと謂はんやと。(一)莊子曰く、周、之を聞く、儒者の圜冠を冠むるものは、(二)天の時を知り、(三)句屨を履むものは、地の形を知り、(四)佩玦を緩うするものは、事至つて斷ずと。(五)君子其の道あるものは、未だ必ずしも其の服を爲さざるなり。其の服を爲すものは、未だ必ずしも其の道を知らざるなり。公、(六)固に以て然らずとせば、何ぞ中國に號して曰はざる、此の道なくして此の服を爲すものは其の罪死せんと。是に於て、哀公之を號すること五日にして、魯國敢へて儒服するもの無し。獨り一丈夫あり、儒服して公門に立つ。公卽ち召して問ふに國事を以てす。(七)千轉萬變して窮まらず。

晝夜。而莫二之能一レ滑。而況得喪禍福之所レ介乎。棄レ隸者若レ棄二泥塗一。知二身貴一於隸一也。貴在二於我一而不レ失二於變一。且萬化而未二始有一レ極也。夫孰足二以患一レ心。已。爲レ道者解二乎此一。

下は萬物に依つて一に歸する所なれば其の一なる所の大常の道を得て之に同化する時は手足其他の身體は塵垢同樣 ● 四支百體や生の終始は胸中を亂すことなし ● 芥蔕、つまらぬもの ● 奴僕を退出する者 ● 且萬物は變化して窮まることなきものなれば其の化に從ひて物の初に遊べば足れり何ぞ心を煩へしむるに足らんや

孔子曰。夫子德配二天地一。而猶假二至言一以修レ心。古之君子。孰能脫焉。老聃曰。不レ然。夫水之於レ汋也。無爲而才自然矣。至人之於レ德也。不レ修而物不レ能レ離焉。若二天之自高。地之自

孔子曰く、(一)夫子、德天地に配す。而して猶は至言を假りて以て心を修む。(二)古の君子、孰か能く脫かんと。老聃曰く、然らず。夫れ、(三)水の汋に於けるや、爲す無くして、才自ら然るなり。(四)至人の德に於けるや、修めずして物離るゝこと能はず。天の自ら高く、地の自ら厚く、日月の自ら明なるが若し。夫れ何をか修めんと。孔子出づ。以て顏回に告げて曰く、(五)丘の道に於けるや、其れ猶ほ醯鷄のごときか。夫子の吾が覆を發く微つせば、吾は天地の大全を知らざりしならんと。

(一) 先生の德は天地の廣大に比すべきほどのものなるになほ至言を假りて心を修めらる (二) 古の君子何人かよく是の如く言說を免れん (三) 水の激して音を爲すは別に音を爲す心あるにあらで其の本質自然と然り。汋は水の激する聲 (四) 至人の德も自然に本づけば修爲を假らざるも外物之を離るゝことなし (五) 孔子自ら其道に於ける見

老聃曰。夫得レ是至美至樂也。得二至美一而游二乎至樂一。謂二之至人一。孔子曰。願聞二其方一。曰。草食之獸。不レ疾レ易レ藪。水生之蟲。不レ疾レ易レ水。行二小變一而不レ失二其大常一也。喜怒哀樂不レ入二於胸次一。夫天下也者萬物之所レ一也。得二其所レ一一而同レ焉。則四支百體。將レ爲二塵垢一。而死生終始。將レ爲二

老聃曰く、夫れ是を得れば至美至樂なり。至美を得て至樂に遊ぶ、之を至人と謂ふと。孔子曰く、願はくば其の（一）方を聞かむと。曰く、（二）草食の獸は藪を易ふることを疾まず、水生の蟲は水を易ふることを疾まず。小變を行へども其の大常を失はれざれば、喜怒哀樂胸次に入らず。夫れ（三）天下は萬物の一にする所なり。其の一なる所を得て焉に同じうすれば、則ち四支百體將に塵垢と爲らむとし、而して生死終始將に晝夜と爲らむとす。而して（四）之を能く滑すことなし。而るを況や得喪禍福の介（五）なる所をや。（六）隸を棄つる者の泥塗を棄つるが若きは、身隸より貴きことを知ればなり。貴きこと我に在りて變に失はず、（七）且萬化して未だ始より極まり有らざるなり。夫れ孰か以て心を患へしむるに足らんや。道を爲むるものは此を解せり。

（一）之に遊ぶ方法を承りたし　（二）藪かはり水かはりて舊と異る如きも之は僅の變化にして藪と水とに違ひなく大體の據りどころをまちがはざる故に敢へて厭はず喜怒哀樂の情胸中に生ぜざるなり「水」一に「淵」に作る　（三）天

物離レ人而立ニ於獨上也。老聃曰。吾游ニ於物之初一。孔子曰。何謂邪。曰。心困焉而不レ能レ知。口辟焉而不レ能レ言。嘗爲レ女議ニ乎其將一。至陰肅肅。至陽赫赫。肅肅出ニ乎天一。赫赫發ニ乎地一。兩者交通成レ和而物生レ焉。或爲ニ之紀一。而莫レ見ニ其形一。消息滿虛。一晦一明。日改月化。日有レ所レ爲。而莫レ見ニ其功一。生有レ所ニ乎萌一。死有レ所ニ乎歸一。始終相反乎無端一而莫レ知ニ乎其所一レ窮。非レ是也。且孰爲ニ之宗一。孔子曰。請問ニ游レ是。

(一〇)肅肅は天に出で、赫赫は地に發す。兩者交通して和を成して、物焉に生ず。或(一一)は之が紀を爲して其の形を見ることなし。(一二)消息、滿虛、(一三)一晦一明、日に改まり月に化し、(一四)日に爲す所有りて、其の功を見ることなし。生は萌す所有り、死は歸する所有り、始終無端に相反して、其の窮まる所を知ることなし。(一五)是に非ずんば且孰か之が宗と爲らむと。孔子曰く、是に遊ばむことを請ひ問ふと。

(一)老子、新に出づ　(二)不動の貌　(三)老子髮を洗うて乾かし居るを且て時を見合はせて待つ　(四)兀々然として獨立せる貌　(五)萬物未萌の太初に心を遊ばす　(六)心に色々考ふれども知ること能はず口を開けども言ふこと能はず　(七)物の初に遊ぶことは知ると得ず言ふことを得ざれば其の近きものを擧げ論ぜん　(八)嚴冷にして陰に屬す　(九)光明にして陽に屬す　(一〇)陰は天より出て陽は地より出て陰陽交通和して之に萬物を生ず　(一一)陰陽和合して物を生ずるものは之をして然らしむる法則あるが如くにして其の形迹を見ることなし　(一二)四季の變　日月の運行消長　(一三)晝夜の交錯　(一四)日に爲す所あれども其の功を見ること能はず　(一五)物の初卽ち道に非ずんばかゝる現象變化を司る宗主となるものなし

盡。效レ物而動。日夜無レ隙。而不レ知二其所一レ終。薰然其成レ形。知二命不一レ能レ規二乎其前一。丘以レ是日徂。吾終身與レ女交二一臂一而失レ之。可レ不レ哀與。女殆著三乎吾所二以著一也。彼已盡矣。而女求レ之以爲レ有。是求二馬於唐肆一也。吾服レ女也甚忘。女服レ吾也亦甚忘。雖レ然。女奚患焉。雖レ忘二乎故吾一。吾有二不レ忘者一存。

のみ外的の言動には眞性既に無きに汝之を求めて有りとなす　一四　市の終りて馬なき馬市にゆきて馬を求むる如し　一五　吾汝を思ふこと甚だ忘れて淡然たり故に汝の吾を思ふことも甚だ忘れて迹を執ることを離れよ　一六　凡て忘れよと云ふは心もとなきやうなれど汝何も苦にすることはなし、忘れよと云ふは舊の吾のことにして吾には忘るべからざる根本的のもの存在すれば患ふるに足らじ

孔子見二老聃一。老聃新沐。方將二被レ髮而乾一。慹然似レ非レ人。孔子便而待レ之。少焉見曰。丘也眩與。其信然與。向者先生形體。掘若二槁木一。似下遺レ

孔子老聃に見ゆ。(一)老聃新に沐す。方に將に髮を被りて乾かさんとす。慹然(二)として人に非ざるに似たり。孔子便(三)して之を待つ。少焉ありて見えて曰く、丘は眩するか。其れ信に然るか。向者に先生の形體は、掘(四)として槁木の如く、物を遺れ人を離れて獨に立てるに似たりと。老聃曰く、吾は物の(五)初に遊べりと。孔子曰く、何の謂ぞやと。曰く、心困焉(六)として知ること能はず、口辟焉として言ふこと能はず、嘗みに女の爲に其(七)の將を議せん。至陰は(八)肅肅たり、至陽は(九)赫赫たり

不比而周。無器而民蹈乎前。而不知所以然。而已矣。仲尼曰。惡可不察與。夫哀莫大於心死。而人死亦次之。日出東方。而入於西極。萬物莫不比方。有目有趾者。待是而後成功。是出則存。是入則亡。萬物亦然。有待也而死。有待也而生。吾一受其成形。而不化以待

を知る。丘是を以て日々に徂く（二〇）。吾れ終身（二一）汝と一臂を交へて之を失ふなり、哀しまざるべけんや。女殆ど（二二）吾が著るゝ所以に著るゝのみ、彼は已に盡きたり。而るを、女之を求めて以て有りと爲す。是れ馬を唐肆に求むるなり（二三）。吾の女を服するや甚だ忘る。女の（二四）吾を服するや亦甚だ忘れよ。然りと雖も（二五）、汝奚ぞ患へむ。故の吾を忘ると雖も、吾には忘れざる者有りて存せりと。

（一〇）回孔子の爲す所を學ばんとして及ばざるを歎ずるに譬へていふ（一一）馬が奔逸して空を飛ぶ如く孔子の道絶妙なるに至りては回は唯其後に瞠若として目を見はるのみ（一二）夫子は言はずして自然に眞實あり私黨せずして博く愛し官位無くして民自ら湊聚すれども然る理由を知らず（一三）世の中に最も哀れなるは生きながら心の死せるものにして形骸の死は其の次（一四）日は東方より出でゝ西の果に沒し東あれば西あり萬物相對的ならざることなし（一五）目あり足あるの生物は此の萬物相對の理によつて功を成す（一六）生物は日に待つ所あり日出づれば存在し日入れば死亡す（一七）生あるもののみならず萬物皆然るものにして死生皆其に待つ所ありて之を繼續せず（一八）吾一度人間たる成形を受けて生れ自然の化に隨はずして形の盡くるを待ち物に從うて動く時は日夜間隙なく其の終の如何になりゆくやはかられず（一九）自ら動く時は宴然として形をなし人間として生くるならば運命を豫め測ること能はず（二〇）孔子は聖の故に自然に從うて日々無窮の境にゆく（二一）日々無窮の境にゆくが故に一生顔回と臂を交へて倶に作りながら其心は去つて倶に化する能はず（二二）汝殆ど吾が言動の外部に著るゝものを見て之を學ぶ

顔淵問於仲尼曰。夫子步亦步。夫子趨亦趨。夫子馳亦馳、夫子奔逸絶塵。而回瞠若乎後矣。夫子曰。回何謂邪。曰。夫子步亦步也。夫子言亦言也。夫子趨亦趨也。夫子辯亦辯也。夫子馳亦馳也。夫子言道。回亦言道也。及奔逸絶塵。而回瞠若乎後者。夫子不言而信。

顔淵、仲尼に問うて曰く、夫子歩すれば亦歩し、夫子趨れば亦趨り、夫子馳すれば亦馳す。夫子(一)奔逸絶塵して、(二)回、後に瞠若たりと。夫子曰く、回何の謂ぞやと。曰く、夫子歩すれば亦歩すとは、夫子言へば亦言ふなり。夫子趨れば亦趨るとは、夫子辯ずれば亦辯ずるなり。夫子馳すれば亦馳すとは、夫子道を言へば回亦道を言ふなり。奔逸絶塵するに及んで、回、後に瞠若たりとは、(三)夫子は言はずして信に、(四)比せずして周に、器なくして民前に蹈んで、然る所以を知らざるのみと。仲尼曰く、悪、察せざるべけんや。夫れ(四)哀は心死より大なるはなく、而して人死亦之に次ぐ。(五)日、東方に出でて西極に入る。萬物、比方ならざることなし。(六)目あり趾あるもの、是を待つて、後、功を成す。(七)是れ出づれば則ち存し、是れ入れば則ち亡ぶ。(八)萬物も亦然り、待つあつて死し、待つあつて生ず。(九)吾れ一たび其の成形を受けて、化せずして以て盡くるを待ち、物に效うて動かば、日夜隙なうして其の終る所を知らざらん。(一〇)薫然として其れ形を成さば、命の其の前に規ること能はざる

又請レ見。溫伯雪子曰。往也蘄レ見レ我。今也又蘄レ見レ我。是必レ有ニ以振一レ我也。出而見レ客。入而歎。明日見レ客。又入而歎。其僕曰。每レ見ニ之客一也。必入而歎。何邪。曰。吾固告レ子矣。中國之民。明ニ乎禮義一。而陋ニ乎知一レ人心一。昔之見レ我者。進退一成レ規。一成レ矩。從容一若レ龍。一若レ虎。其諫レ我也似レ子。其道レ我也似レ父。是以歎也。仲尼見レ之而不レ言。子路曰。吾子欲レ見ニ溫伯雪子一久矣。見レ之而不レ言。何邪。仲尼曰。若ニ夫人一者。目擊而道存矣。亦不レ可ニ以容一レ聲矣。

昔の我を見る者、(五)進退、一は規を成し、一は矩を成す。從容たること(六)一は龍の若く、一は虎の若し。(七)其の我を諫むるや子に似、其の我を道くや父に似たり。是を以て歎ずるなりと。(八)仲尼之を見て言はず。子路曰く、吾子、溫伯雪子を見んと欲するや久し。之を見て言はざるは何ぞやと。仲尼曰く、(九)夫の人の若きものは、目擊して道、存せり、亦以て聲を容るべからずと。

(一) 溫は姓、伯は名、雪子は字、楚の道を懷ける人 (二) 楚は所謂荊蠻の地なるが故に楚人を中國の人と云ふ (三) 坐作進退の禮儀をばよく知れど人の心を知るに拙し故に面會するを欲せず (四) 齊に往くとき吾に面會せんことを求め今還るとき又面會せんことを求む是の如く必ず懇ければ我を啓發する所あるべし (五) 先日面會せし人は進退するに規矩法則に循りて亂れずと (六) 從容しておちつけると龍の如く虎の如く儼端 (七) 我を諫むるや懇々として子の父を諫むるが如く、我を導くや諄々として父の子を導くが如し (八) 孔子雪子を見て一言を發せず (九) 雪子の如きものは一目見る所に道の存するを知る故に言語を費すべきものに非ず

消。無擇何足以稱之。子方出。文侯儻然終日不言。召前立臣而語之曰。遠矣全德之君子。始吾以聖知之言。仁義之行爲至矣。吾聞子方之師。吾形解而不欲動。口鉗而不欲言。吾所學者眞土梗耳。夫魏眞爲我累耳。

し人の邪意を消散せしむ (八) 無擇の村人は愚にして順子の大なるを知らず故に之を稱讚する能はず (九) 志を失ふ貌 (一〇) 德の完全なる君子には吾遠く及ばず (一一) 子方のことを聞いてわが形體解散して動くことあたはざるが如く口閉ぢて言ふこと能はざるが如く茫然自失す (一二) 之まで學びし所のものは土偶の如く形ありて心なきものなり (一三) 魏國は眞に吾が眞性を累はすものなり

溫伯雪子適齊。舍於魯。魯人有請見之者。溫伯雪子曰。不可。吾聞中國之君子。明乎禮義。而陋於知人心。吾不欲見也。至於齊。反舍於魯。是人也

溫伯雪子、齊に適き、魯に舍る。魯人之を見んと請ふものあり。溫伯雪子曰く、不可なり。吾、聞く、中國の君子、禮義に明にして、人心を知るに陋しと。吾れ見るを欲せざるなりと。齊に至り、反りて魯に舍る。是の人又見んことを請ふ。溫伯雪子曰く、往くや我を見んことを蘄め、今や又我を見んことを蘄む。是れ必ず以て我を振くこと有らんと。出でて客を見、入つて歎ず。明日客を見、又入つて歎ず。其の僕曰く、之の客を見る每に、必ず入つて歎ずるは何ぞやと。曰く、吾れ固より子に告げたり、中國の民は、禮義に明にして、人心を知るに陋しと。

曰。谿工子之師邪。子方曰。非也。無擇之里人也。稱道數當。故無擇稱之。文侯曰。然則子無師邪。子方曰。有。曰。子之師誰邪。子方曰。東郭順子。文侯曰。然則夫子何故未嘗稱之。子方曰。其爲人也眞。人貌而天。虛緣而葆眞。淸而容物。物無道。正容以悟之。使人之意也

侯曰く、然らば則ち子には師無きやと。子方曰く、有りと。曰く、子の師は誰ぞやと。子方曰く、東郭順子なりと。文侯曰く、然らば則ち、夫子何の故に未だ嘗て之を稱せざると。子方曰く、其の人と爲りや眞、人貌にして天、虛緣にして眞を葆ち、淸にして物を容る。(九)物、道無ければ、容を正しうして以て之を悟し、人の意をして消せしむ。(八)無擇、何ぞ以て之を稱するに足らんと。子方出づ。文侯儻然として終日言はず。前に立てる臣を召して之に語つて曰く、(一〇)遠し、全德の君子。始め、吾れ聖知の言仁義の行を以て至れりと爲す。吾、(一一)子方の師を聞いて、吾が形解けて動くことを欲せず。口鉗みて言ふことを欲せず。(一二)吾が學ぶ所のものは、眞に土梗のみ、夫れ魏は眞に吾が累たるのみと。

(三) 彼の生死生物失態を超越し心を未生に遊ばして不死に達する所以を說き性命の由りて起る所を述ぶ (四) 田は姓、子方は字、名は無擇、魏の賢人 (五) 子方と同鄕の人 (六) 道を論じて屢々肯綮に當るが故に無擇の村人之を稱す (七) 其の居郭の東に在り故に之を氏とす (八) 東郭順子の人と爲りは純眞貌は人なれども心は天の如く虛無物に順ひて眞性を保ち淸白にてよく物を包容す (九) 人無道ならば儀容を正しくして無言のうちに之を善に變

其一人美。其一人惡。惡者貴。而美者賤。陽子問二其故一。逆旅小子對曰。其美者自美。吾不レ知二其美一也。其惡者自惡。吾不レ知二其惡一也。陽子曰。弟子記レ之。行賢而去二自賢之行一。安往而不レ愛哉。

て曰く、其の(三)美なるものは自ら美とす、吾れ其の美を知らざるなり。其の惡なるものは自ら惡とす、吾れ其の惡を知らざるなりと。陽子曰く、弟子之を記せよ。(四)行賢にして自ら賢とするの行を去らば、安くに往くとして愛せられざらんや。

(一)陽は姓、名は朱、字は子居、秦人なり　(二)容貌醜　(三)容色美しきものは自ら美として矜るが故に其の美なるを感ぜず醜なるものは恥ぢて謙遜するが故に反つて醜ならず　(四)其の行賢にして自ら己を賢とする自惚を去らば何處に往くも人に愛せらるべし

田子方（一）

田子方侍二坐於魏文侯一。數稱二谿工一。文侯

(二)田子方、魏の文侯に侍坐し、數〻(三)谿工を稱す。文侯曰く、谿工は子の師かと。子方曰く、非なり、無擇の里人なり。(四)道を稱へて數〻當る。故に無擇之を稱すと。文

而利之。見利而忘其眞。莊周怵然曰。噫物固相累。二類相召也。捐彈而反走。虞人逐而誶之。莊周反入三月不庭。藺且從而問之。夫子何爲頃間甚不庭乎。莊周曰。吾守形而忘身。觀於濁水而迷於淸淵。且吾聞諸夫子曰。入其俗從其俗。今吾游於彫陵而忘吾身。異鵲感吾顙。游於栗林而忘眞。栗林虞人。以吾爲戮。吾所以不庭也。

れ、栗林に游んで眞を忘る。栗林の虞人、(一九)吾を以て戮を爲せり。吾が庭せざる所以なりと。

(一) 異鵲の名、異は鵲 (二) 一羽の珍しきカササギ (三) 周圍一寸 (四) 翼大なれども栗林に集りて動かず目大なれども人の額に觸れて知らず (五) 足ばやに行く (六) 彈弓をもつてうちとめんとす (七) カマキリ虫が木蔭かげに身をかくして蟬を捕らんとし得んことに心を奪はれて其の身を忘る (八) 蟷螂を得んとする利のために目にて見覺にて飛ぶべき鳥の眞性を忘れ莊周が彈に之を頭上を知らず (九) 驚きおそるゝ貌 (一〇) 物は固より相累はすもの我儘を顧へば更に奪我を狙ふもののあり互に相招きて累ひをなす (一一) 園の番人は莊周を栗を盜むものと見て逐ひ罵る (一二) 蟬は蟷螂に蟷螂は異鵲に異鵲は周に周は虞人に狙はれ二類相招く (一三) 三ケ月庭先に出でず (一四) 周の弟子 (一五) 外形をまもりて反つて身を忘れ異鵲を狙ひて虞人に逐はる (一六) 利を見て心の眞を迷はし異鵲を罪せんとせり (一七) 老子 (一八) 其の土地に入れば其の土地の風俗に從ふべし是栗林の禁を破りたるをいふ (一九) 吾を罵り辱しむ

陽子之宋。宿於逆旅。逆旅人。有妾二人。

(二〇)陽子宋に之いて、逆旅に宿す。逆旅の人、妾二人あり。其の一人は美、其の一人は惡、惡なる者貴ばれて美なる者賤しまる。陽子其の故を問ふ。逆旅の小子對へ

人間一。社稷存焉爾。何謂レ無二始而非一レ卒、仲尼曰。化二其萬化一。而不レ知二其禪一レ之者一。焉知二其所一レ終。焉知二其所一レ始。正而待レ之而已耳。何謂二人與一レ天一邪。仲尼曰。有レ人天也。有レ天亦天也。人之不レ能レ有レ天性也。聖人晏然。體逝而終矣。

莊周游二乎雕陵之樊一。覩下一異鵲自二南方一來者上。翼廣七尺。目大運寸。感二周之顙一。而集二於栗林一。莊周曰。此何鳥哉。翼殷不レ逝。目大不レ覩。蹇レ裳躩步。執レ彈而留レ之。覩二一蟬方得二美蔭一。而忘二其身一。螳蜋執レ翳而搏レ之。見レ得而忘二其形一。異鵲從

莊周雕陵(一)の樊に遊ぶ。一異鵲(二)の南方より來るものを覩る。翼の廣さ七尺、目の大さ運寸(三)、周の顙に感れて、栗林に集まる。莊周曰く、此れ何の鳥ぞや。翼(四)殷なれども逝かず。目大なれども、覩ずと。裳を蹇げて(五)躩歩し、彈を執つて之を留めんとす。覩る、一蟬方に美蔭を得て、其の身を忘れ、螳蜋(六)翳(七)を執りて之を搏たんとし、得るを見て其の形を忘れ、異鵲從つて之を利し、利を見て其の眞を忘るゝを。莊周怵然(九)として曰く、噫(一〇)物固より相累はし、二類相召く(八)なりと。彈を捐てて反り走る。虞人(一一)逐ひて之を誶る。莊周反り入つて、三月(一二)庭せず。藺且(一三)從つて之を問ふ。夫子何爲れぞ、頃間甚だ庭せざるやと。莊周曰く、吾れ形を守つ(一四)て身を忘れ、濁水(一五)を觀て、清淵を迷はせり。且吾れ諸を夫子に聞く(一六)。曰く、其の俗(一七)に入れば其の俗に從ふと。今吾れ雕陵に遊んで吾が身を忘れ、異鵲吾が顙に感

之。執ニ臣之道一猶若レ是。而況乎所ニ以待一レ天乎。何謂ニ無レ受ニ人益一難。仲尼曰。始用四達。爵祿並至而不レ窮。物之所レ利。乃非レ己也。吾命有レ在レ外者也。君子不レ為レ盜。賢人不レ為レ竊。吾若取レ之何哉。故曰。鳥莫レ知ニ於鷾鴯一。目之所レ不レ宜レ處。不レ給レ視。雖レ落ニ其實一棄レ之而走。其畏レ人也。而襲ニ諸

（三三）聖人は晏然（あんぜん）として、體逝（たいせい）して終ると。

（一）時に猶ず（二）左の手には枯木によりかゝり右の手にて枯枝をうち猋然として神農氏の歌をうたふ（三）其の樂器たる枯枝はあれども節奏なく其の聲あれども宮商角徴羽の五音なし（四）木の音と歌聲とは人の心に感應す（五）心に感動する貌（六）拱手して形をたゞし顔回に見て之をうかゞふ（七）己を廣ぶことを過ぐれば大に至りすぎ己を愛することを切なれば反つて哀しむに至ることを恐る（八）貧と窮とは命にして天の損する所なり之に安んじ處りて性を毀ることなければ天損を受くることなきものにして行ふに易し（九）怜と譽とは人の益する所なり富貴にして怜譽からざるは甚難し（一〇）始と卒とは循環往來して端なし（一一）人と天とは一にして自然に基づけり今歌ふものは其れ誰ぞや是我に非ず（一二）四季寒暑の運行は閉塞する事ありともこれ天地造化の自然なり逃るべきに非ず（一三）人臣たるものは敢て君命に背かずして授けたる道を守ることを陳述す既に是の如し況や天命に待つものに於ては猶更之に從ふことを易し（一四）始め用ゐらるゝ時に四達して悖らず爵位俸祿並び得て限りなく外物より利せらるゝは外より來る利にして己の本來具有するものに非ずわが運命の外にあるもの（一五）君子賢人は命に非ざるものを盜竊せざるに吾從つて己の有に非ざる爵祿を取るは何故ぞ（一六）鷾は鳥より知恵あるはなく一目見て巣作るに都合あしきところはあまりに観ることを待たずして直ちに食物を落すとも顧みずして之を棄て去り巣を避く（一七）燕はかく人を畏るゝもなほ人間をはなる能はざるは人が社稷存するためにその土を去る能はざるが如きのみ（一八）天地の化は萬化して窮りなければども自らにして化するのみ始よりして化する所以のものを識り傳ふるにあらず故に無始無終にして循環窮りなし（一九）化は之を知ふべからず又強ひて期すべからざるが故に己を正にして化の自然に任せんのみ（二〇）天無くんば人無し人あるは天性の自然による又天となるも之を主宰するものなくんばあらず（二一）聖人は安らかに其の體自然の化に隨うて逝き變に任せ天と合一す

回端拱還目而窺レ之。仲尼恐三其廣レ己而造レ大也。愛レ己而造レ哀也。曰。回無レ受二天損一易。無レ受二人益一難。無二始而非一レ卒也。人與レ天一也。夫今之歌者其誰乎。回曰。敢問下無レ受二天損一易上。仲尼曰。饑渴寒暑。窮桎不レ行。天地之行也。運物之泄也。言二與レ之偕逝一之謂一也。爲二人臣一者。不二敢去一レ

窮桎して行はれざるは、天地の行なり、運物の泄なり。之と偕に逝くの謂を言ふなり。(一三)人臣たるものは、敢へて之を去らず、臣の道を執るも猶ほ是の若し、而るを況んや天に待つ所以をやと。何をか人の益を受くること無きは難しと謂ふと。仲尼曰く、(一四)始め用ひて四達し、爵祿並び至つて窮まらず。物の利する所は、乃ち己に非ざるなり。吾が命の外に在るものあるなり。(一五)君子盜を爲さず、賢人竊を爲さず、吾れ若うて之を取るは何ぞや。故に曰く、(一六)鳥は鷾鴯より知なるは莫し、目の宜しく處るべからざる所は、給視せず。其の實を落すと雖も、之を棄てて去る。(一七)其の人を畏るゝや、而かも諸を人の間に襲るは、社稷存すればなるのみと。何をか始めとして卒に非ざることなしと謂ふと。仲尼曰く、化は其れ(一八)萬化して、而して其の之を禪るものを知らず。焉んぞ其の終る所を知らん。焉んぞ其の始まる所を知らん。(一九)正にして之を待たんのみと。何をか人と天と一なりと謂ふやと。仲尼曰く、(二〇)人あるは天なり、天あるも亦天なり、人の天あること能はざるは性なり。

及其得柘棘枳枸之間也。危行側視、振動悼慄。此筋骨非有加急而不柔也。處勢不便、未足以逞其能也。今處昏上亂相之間、而欲無憊、奚可得邪。此比干之見剖心、徵也夫。

りつきて隨意にふるまふ　[illegible]古の射をよくする人逢蒙は其の弟子　[illegible]ねらふこと能はず　[illegible]刺ある樹　[illegible]恐る〳〵行きあたりを見まはす　[illegible]ふるへ懼る　[illegible]筋の此の如くなるは筋骨引きつりて硬直せしに非ず　[illegible]處る所の場合不便にして働きを十分にする能はざるが故なり　[illegible]主は上に昏く臣は下に亂る、際にありて憊れざらんと欲すとも得べからず　[illegible]殷の忠臣比干が紂王を諫めて心を剖かれし如きキザシあるものといふべし

孔子窮於陳蔡之間。七日不火食。左據槁木、右擊槁枝、而歌猋氏之風。有其具、而無其數。有其聲、而無宮角。木聲與人聲、犁然有當於人之心。顏

（一）孔子陳蔡の間に窮して、七日火食せず。（二）左、槁木に據り、右、槁枝を撃つて、猋氏の風を歌ふ。其の具（三）あつて、其の數なく、其の聲あつて、而して宮角なし。（四）木聲と人聲と、（五）犁然として人の心に當ることあり。顏回、（六）端拱還目して之を窺ふ。仲尼其の（七）己を廣くして大とするに造り、己を愛して哀に造らんことを恐る。曰く、回、（八）天の損を受くること無きは易く、（九）人の益を受くること無きは難し。（一〇）始として卒に非ざること無きなり。（一一）人と天と一なり。夫れ今の歌ふものは其れ誰ぞやと。回曰く、敢て天損を受くること無きの易きを問ふと、仲尼曰く、（一二）饑渇寒暑の

待レ形。不二求レ文以待一レ形。固不レ待レ物。

莊子衣二大布一而補レ之。正レ係レ履而過二魏王一。魏王曰。何先生之憊邪。莊子曰。貧也。非レ憊也。士有二道德一不レ能レ行憊也。衣弊履穿貧也。非レ憊也。此所レ謂非レ遭レ時也。王獨不レ見二夫騰猿一乎。其得二柟梓豫章一也。攬二蔓其枝一。而王二長其間一。雖二羿逢蒙一不レ能二眄睨一

莊子大布を衣て之を補ひ、絜を正し履を係けて、魏王に過ぎる。魏王曰く、何ぞ先生の憊れたるやと。莊子曰く、貧なり、憊れたるに非ざるなり。士の道德有つて行ふこと能はざるは憊れたるなり。衣弊れ、履穿ちたるは貧なり、憊れたるに非ざるなり。此れ所謂時に遭ふに非ざるものなり。王獨り夫の騰猿を見ずや。其の柟梓豫章を得るや、其の枝に攬蔓して、其の間に王長す、羿逢蒙と雖も、眄睨すること能はず。其の柘棘枳枸の間を得るに及んでや、危行側視、振動悼慄す。此れ筋骨急を加へて柔ならざることあるに非ざるなり。勢に處る便ならずして、未だ以て其の能を逞しくするに足らざればなり。今、昏上亂相の間に處りて、憊るゝ無からんことを欲すとも、奚ぞ得べけんや。此れ比干の心を剖かるゝ、徵あるかなと。

(一) 粗布を着て之を補綴し帶を正しく結び履を繩にて縛る　(二) 木登りする猿　(三) 皆大木あり　(四) 其の枝に取

而獨何也。林回曰、彼以利合。此以天屬也。夫以利合者。迫窮禍患害相棄也。以天屬者。迫窮禍患害相收。也。夫相收之與相棄亦遠矣。且君子之交淡若水。小人之交甘若醴。君子淡以親。小人甘以絕。彼無故以合者、則無故以離。孔子曰、敬聞命矣。徐行翔佯而歸。絕學捐書。弟子無挹於前。其愛益加進。異日桑雽又曰。舜之將死。冷禹曰。汝戒之哉。形莫若緣。情莫若率。緣則不離。率則不勞。不離不勞。則不求文以

たり。異日桑雽又曰く、舜の將に死せんとする、眞に禹に冷して曰く、汝之を戒しめよや、形は緣るに若くは莫く、情は率ふに若くは莫しと。緣れば則ち離れず、率へば則ち勞せず。離れず勞せざれば、則ち文を求めて以て形を待たず。文を求めて以て形を待たざれば、固より物を待たずと。

（一）林は姓名は回、假國者なり（二）假國難のために國を侵られ逃亡に瀕す（三）孔子甞に之かんとしては陳蔡の間に圍まる（四）國の君主の下也（五）假國の人（六）價のためとすれば赤子の價は璧より少く厄介のためとすれば璧を持するより赤子を負ふが厄介なり（七）璧は利によつて存するもの赤子は天命によつて授かりしもの（八）災難の場合にさしせまれば放りをさむ（九）取り收むると棄つるとは其間の情非常に差あり（一〇）甘酒（一一）君子は心情淡泊にしてよく親しめど小人は心濃厚にしてよく交を絕つ（一二）理由無くてて合へるものは理由無くして離るゝも。孔子の門弟子の合一ゐは假人の赤子に於ける如く天によらざるが故に故なくして離るゝなり（一三）靜かに行き逍遙して歸る 自得するあるが故に斯の如し（一四）弟子の孔子の前に拱手の禮を行ふことあらねど其の愛益々厚くなる（一五）形體は其の自然に從つて保つに如くはなく情は其の自然に率うて動くにしくはなし（一六）文飾を求め形を待つの要なし

孔子問二子桑雽一曰。吾再逐二於魯一。伐二樹於宋一。削二迹於衞一。窮二於商周一。圍二於陳蔡之間一。吾犯二此數患一。親交益疎。徒友益散。何與。子桑雽曰。子獨不レ聞二假人之亡一與。林回棄二千金之璧一。負二赤子一而趨。或曰。爲二其布一與。赤子之布寡矣。爲二其累一與。赤子之累多矣。棄二千金之璧一。負二赤子一

（一）孔子は子桑雽に問うて曰く、吾再び魯より逐はれ、樹を宋に伐られ、迹を衞に削られ、商周に窮し、（二）陳蔡の間に圍まる。吾此の數患（三）を犯して、親交益々疎く、徒友益々散ぜり、何ぞやと。子桑雽曰く、子獨り假人（四）の亡げしを聞かずや。（五）林回千金の璧を棄てて、赤子を負うて趨る。或人曰く、其の布（六）の爲めか、赤子の布寡し、其の累の爲めか、赤子の累多し、千金の璧を棄てて、赤子を負うて趨るは何ぞやと。林回曰く、（七）彼は利を以て合ひ、此は天を以て屬せるなり。夫れ利を以て合ふものは、（八）窮禍患害に迫つて相棄つるなり。天を以て屬するものは、窮禍患害に迫つて相收むるなり。夫れ（九）相收むるの相棄つると亦遠し。且つ君子の交りは淡くして水の若く、小人の交りは甘くして（一〇）醴の若し。（一一）君子は淡くして以て親しみ、小人は甘くして以て絕つ。彼の故（一二）なくして以て合ふものは、則ち故なくして以て離ると。孔子曰く、敬んで命を聞くと。（一三）徐行翔佯して歸り、學を絕ち書を捐て、（一四）弟子の前に揖すること無くして、其の愛益々進むことを加へ

免於患。直木先伐。甘井先竭。子其意者。飾知以驚愚。修身以明汙。昭昭乎如揭日月而行。故不免也。昔吾聞之大成之人曰。自伐者無功。功成者墮。名成者虧。孰能去功與名。而還與衆人。道流而不明居。得行而不名處。純純常常。乃比於狂。削迹捐勢。不為功名。是故無責於人。人亦無責焉。至人不聞。子何喜哉。孔子曰。善哉。辭其交游。去其弟子。逃於大澤。衣裘褐。食杼栗。入獸不亂羣。入鳥不亂行。鳥獸不惡。而況人乎。

ぞ烹ばんやと。孔子曰く、善い哉と。其の交遊を辭し、其の弟子を去り、大澤に逃れ、裘褐を衣（一七）、杼栗を食ふ。獸に入つて（一八）羣を亂らず、鳥に入つて行を亂らず。鳥獸も惡まず、而るを況んや人をや。

（一）二小國の名 （二）大公は老者の稱、任は名 （三）足下は死を厭はるゝか （四）翼々として重飛すること能はず無能の如し （五）互につれ立つて飛び翼を連ね一團となつて止まり進んで先頭とならず退いて後殿とならず （六）食ひ餘り （七）其の鳥群に排斥せられずして人に害せられず （八）直なる木は材と爲すべきが故に先づ伐られ甘き井は飲料と爲すべきが故に先づ水竭く （九）知を身に飾つて俗愚を驚かし身を修めて他のけがれを明かにし己を衒揚して恰も日月を揭げて行くが如く人の耳目を聳動す （一〇）其の德大成せる人 （一一）自ら其の功にほこるものは却つて功を失ひ功成るものは功破れ名成るものは名をかとす （一二）何人かよく功と名とを私せず之を衆人と共にするものぞ （一三）道は天下に流布すれども光を韜みて顯明に居らず德は世に行はるれども名聞の地に處らず （一四）純一正常にしてウツケモノに似たり （一五）迹を隱し權勢をすてゝ功名をあらはさず （一六）至人は聞達を求めず然るに足下名聞を喜ぶは何故ぞ （一七）皮衣と葛衣共に粗末の衣服 （一八）獸群に入りても獸驚かず其の群を亂し走らず

桑之間。七日不火食。大公任往弔之曰。子幾死乎。曰然。子惡死乎。曰然。任曰。予嘗言不死之道。東海有鳥焉。名曰意怠。其爲鳥也。翂翂翐翐而似無能。引援而飛。迫脅而棲。進不敢爲前。退不敢爲後。食不敢先嘗。必取其緖。是故其行列不斥。而外人卒不得害。是以

せんかと。曰く、然りと。子死を惡むかと。曰く然りと。任曰く、予嘗みに不死の道を言はん。東海に鳥あり、名づけて意怠と曰ふ。其の鳥たるや、(四)翂翂翐翐として能なきに似たり。(五)引援して飛び、迫脅して棲み、進んで敢へて前と爲らず、退いて敢へて後と爲らず。食敢へて先づ嘗めず、必ず其の(六)緖を取る。是の故に其の行列に斥けられずして、外人卒に害するを得ず。是を以て患を免かる。(七)直木は先づ伐られ、甘井は先づ竭く。子、其れ意ふに、(九)知を飾つて以て愚を驚(八)かし、身を修めて以て汙を明かにし、昭昭乎として日月を揭げて行くが如くなりしならん、故に免かれざるなり。昔は吾之を(一〇)大成の人に聞くに曰く、(一一)自ら伐るものは功なく、功の成るものは墮れ、名の成るものは虧くと。(一二)孰れか能く功と名とを去つて、衆人に還し與へんや。(一三)道流るれども明に居らず、得行はるれども名に處らず、(一四)純純常常として、乃ち狂に比す。(一五)迹を削り勢を捐てて、功名を爲さず。是の故に人に責むること無く、人亦責むることなし。(一六)至人は聞せず、子何

郭門之外。三月而成二上下之縣一。王子慶忌。見而問焉曰。子何術之設。奢曰。一之間無二敢設一也。奢聞之。既雕既琢。復二歸于朴一。侗乎其無レ識。儻乎其怠疑。萃乎芒乎。其送レ往而迎レ來。來者勿レ禁。往者勿レ止。從二其强梁一。隨二其曲傅一。因二其自窮一。故朝夕賦斂。而毫毛不レ挫。而況有二大塗一者乎。

奢曰く、一の間、(六)敢へて設くる無し。奢之を聞く、既に雕し既に琢し、(七)朴に復歸す。侗乎(八)として其れ識るなく、儻乎として其れ怠疑す、萃乎(九)芒乎(一〇)として、其れ往を送つて來を迎ふ。(一一)來るものは禁ずることなく、往くものは止むることなし。其の强梁(一二)に從ひ、其の曲傅に隨ひ、其の自窮に因る。故に朝夕(一三)賦斂すれども、毫毛挫かず。而るを況んや大塗(一四)あるものをやと。

(一) 奢は北宮、名は奢、衞の大夫　(二) 人民より賦金をとりあげて鐘を鑄造す　(三) 鐘を懸くる上下の架　(四) 周王の子、周の大夫　(五) 足下は何等の術を設けかく賦斂して鐘を作りしぞ　(六) 心專一なるのみにして敢へて術を設けず　(七) 彫琢して更に飾らず素朴にかへる　(八) 無知にして己の爲す所を知らず思慮無くして怠るが如く疑ふが如く態度ならず　(九) 物の聚まる貌　(一〇) 無心なる貌　(一一) 來るものは拒まずして受容し去るものは止めずして送る　(一二) 才强强にして我に背くものは背くにまかせ曲順にして我に附くものは附くにまかせ人民自ら其力を窮むるにまかせ敢へて強ひず　(一三) 朝夕賦斂すれど自然に因つて爲するが故に寸毫も民を害せず　(一四) 大道

孔子圍二於陳

孔子陳蔡の間に圍まれ、七日火食せず。大公任(一)往き之を弔して曰く、子殆ど死

君之累。除二君之憂一。而獨與レ道遊二於大莫之國一。方レ舟而濟二於河一。有二虛船一。來觸レ舟。雖レ有二惼心之人一不レ怒。有二一人在二其上一。則呼張二歙之一。一呼而不レ聞。再呼而不レ聞。於レ是三呼邪。則必以二惡聲一隨レ之。向也不レ怒。而今也怒。向也虛。而今也實。人能虛レ己以游レ世。其孰能害レ之。

あり、來つて舟に觸るれば、(三)惼心の人ありと雖も怒らず。一人其の上に在るあらば、則ち呼んで之を(四)張歙せしむ。一たび呼んで聞かず、再び呼んで聞かず、是に於て(五)三呼せんか、則ち(六)必ず惡聲を以て之に隨はん。向には怒らずして今は怒るものは、(七)向には虛にして今は實なればなり。人能く己を虛にして以て世に遊ばば、其れ孰れか能く之を害せん。

(一)人君となり人を有つものは有つて我が私を爲さんとするゆゑに累ひ人臣と爲りて人に有たるゝものは役せられて憂ふ (二)君の煩累を去り君の憂愁を除き道によつて大莫虛無の國に遊ばんと欲す (三)褊急の人 (四)外に開くか內に向はしむるかして舟を避けしむ (五)喚ばはること三度 (六)必ず罵詈するに至らん (七)前の場合には舟に人なく後の場合には舟に人あればなり

北宮奢。爲二衞靈公一賦斂以爲レ鐘。爲二壇乎

(一)北宮奢、衞の靈公の爲めに(二)賦斂して以て鐘を爲くる。壇を郭門の外に爲り、三月にして(三)上下の縣を成す。(四)王子慶忌、見て問うて曰く、(五)子何の術をか設けたると。

去國捐俗。與道相輔而行。君曰。彼其道遠而險。又有江山。我無舟車。奈何。市南子曰。君無形倨。無留居。以爲君車。君曰。彼其道幽遠而無人。吾誰與爲鄰。吾無糧。我無食。安得而至焉。市南子曰。少君之費。寡君之欲。雖無糧而乃足。君其涉於江而浮於海。望之而不見其崖。愈往而不知其所窮。送君者皆自崖而反。君自此遠矣。

君の費を少うし、君の欲を寡うせば、糧なしと雖も、而かも乃ち足らん。君其れ江を渉りて、海に浮ばば、之を望んで其の崖を見ず、(九)愈ゝ往いて其の窮まる所を知らざらん。(一〇)君を送るもの皆崖よりして反らば、君、此より遠ざからん。

(一) 私欲少くして雕琢作爲すれども私意することなく其の性至淳　(二) 如何にせば斯にかなふかを知らず卽ち是非の見なし　(三) 如何にして道を行ふべきかを知らずして自ら和す　(四) 約束なく縱まゝに行ひてそれが自然の道にかなふ　(五) 其生時は樂しむべく死すれば厚く之を葬り時に安んじ順に處る　(六) 道に由つて建德へ行かんことを欲む　(七) 形に倨り高ぶるといふことなく滯留することなくして之を車となして行け。皆寓言なり　(八) 吾誰と與に軒を並べて住まん　(九) だんだんに進みゆくに從ひて其の窮極する所を知らざる如くなるべし。自由の境地の無礙なるに譬ふ　(一〇) 崖より君を送つて來たりしもの崖より反り去らば君之より人と遠ざからん

故有人者累。見有於人者憂。故堯非有人。非見有於人也。吾願去

故に人を有つものは累ひ、人に有たるゝものは憂ふ。故に(一)堯は人を有つにあらず、人に有たるゝにも非ざるなり。吾れ願はくば(二)君の累を去り、君の憂を除き、而して獨り道と與に大莫の國に遊ばんことを。舟を方べて河を濟るに、虛船

疏於江湖之上一而求レ食焉。定也。然且不レ免二於罔羅機辟之患一。是何罪之有哉。其皮爲二之災一也。今魯國獨非二君之皮一邪。吾願。君刳レ形去レ皮。洒レ心去レ欲。而游二於無人之野一。

きが已に災するなり　(九)魯國あるがために災を受くるが故にかくいふ　(一〇)形を刳つて身に災する皮を除去し心を洗つて物欲を無くし而して人界を超越したる自然無爲の地に遊べ

南越有レ邑焉。名爲二建德之國一。其民愚而朴。少レ私而寡レ欲。知レ作而不レ知レ藏。與而不レ求二其報一。不レ知二義之所一レ適。不レ知二禮之所一レ將。猖狂妄行。乃蹈二乎大方一。其生可レ樂。其死可レ葬。吾願。君

南越に邑あり、名けて建德の國と爲す。其の民は愚にして朴。(一一)私少うして而して慾寡し、作すことを知つて而して藏することを知らず、與ふれども其の報を求めず、(一二)義の適ふ所を知らず、(一三)禮の將ふ所を知らず、(一四)猖狂妄行して、乃ち大方を蹈む、(一五)其の生樂しむべく、其の死葬るべし。吾れ願はくば、君が、國を去り俗を捐て、(一六)道と相輔けて行かんことをと。君曰く、彼は其の道遠くして險、又江山あり。我に舟車なし、奈何せんと。市南子曰く、君(一七)形倨なく、留居なくして、以て君が車と爲せと。君曰く、彼れ其の道幽遠にして人なし。(一八)吾れ誰と與にか鄰を爲さん。吾に糧なし、我に食なし、安んか得て至らんと。市南子曰く、

市南宜僚。見魯侯。魯侯有憂色。市南子曰。君有憂色。何也。魯侯曰。吾學先王之道。修先君之業。吾敬鬼尊賢。親而行之。無須臾離居。然不免於患。吾是以憂。市南子曰。君之除患之術淺矣。夫豐狐文豹。棲於山林。伏於巖穴。靜也。夜行晝居。戒也。雖飢渴隱約。猶且胥

市南の宜僚、魯侯に見ゆ。魯侯、憂色あり。市南子曰く、君の憂色あるは何ぞや(一)と。魯侯曰く、吾れ先王の道を學び、先君の業を修む。吾れ鬼を敬し賢を尊(二)び、親ら之を行ひて、須臾くも離れ居ること無し。然かも患を免れず。吾れ是を以て憂ふと。市南子曰く、君の(三)患を除くの術淺し。夫れ豐狐文豹(四)、山林に棲み、巖穴に伏するは、靜なり。夜行き晝居るは、戒(五)なり、飢渇(六)隱約すと雖も、猶ほ且江湖の上に胥疏かりて食を求むるは、定なり。然れども、且罔羅機辟の患を免れず。是れ何の罪か之れ有らんや。其の皮之が災(七)を爲せばなり。今、魯國(九)は獨り君の皮(八)に非ずや。吾れ願はくば(一〇)、君が形を刳りて皮を去り、心を洒ひて欲を去り、而して無人の野に遊ばんことをと。

(一) 姓は熊、名は宜僚、市南に隱居す (二) 鬼神を敬ひ賢人を尊び親ら道を行うて片時も道に離るゝことなし (三) 君が患を除く手術は淺薄なり (四) 大なる狐とアヤある豹が山林にすみ巖穴の間に隱るゝは其の行動靜かといふべし (五) 用心深し (六) 飢え渇き縮み困するもなほ世間に遠ざかりて食物を求むるは猶す所にキマリあり (七) かく注意周到なれど網にかゝり罠にかゝることあり (八) 狐豹の捕獲せらるゝは別に罪あるわけにあらで其の皮美し

則ち議せられ、爲すこと有れば則ち虧かれ、賢は則ち謀られ、不肖は則ち欺かる。胡ぞ得て必すべけんや。(一三)悲しい夫。弟子之を志るせ。(一四)其れ唯ゞ道德の鄉かと。(一五)

(一) 此の鴈已を虚しくして自ら賢とする心を去り無爲にして天に順ふ時はよく身を全うし患を免かるべき所以を說く　(二) 此の木は材として不良なる故に天壽を完うすることを得たり　(三) 今日宿の主人の有せる雁は材無きを以て殺さる　(四) 先生は材不材何れを善しとしたまふにや　(五) 材にも非ず不材にも非ざる所に處らん　(六) 然れども材不材の間は未だ自然の妙境に非ずして相對是非の境たるを免れず　(七) 已を道德の上に置きて世外に浮遊するものの如きは然らず　(八) 他人の褒譽もなく毀貶もなく或は龍或は蛇と變じて時とともに化して自ら主として爲さず可に適するのみ　(九) 一び上つて龍となり一たび下つて蛇となり大和の道 以て度量となす　(一〇) 萬物の根原たる無始の境に逍遥し物を物とし役して物のために已を役せられず　(一一) 萬物の實情人間社會の因襲の如きは是の如く自在ならず　(一二) 合ふかとおもへば離れ成るかとおもへば破られかどあるは挫かれ尊ければ非議せられ事を爲せば破壞せられ賢なれば謀略にかけられ愚なれば欺かる　(一三) 何ぞ必然とするを得んや。人事常に定まりなく興敗集散し互に相關ぐが故に之を必とすべからず　(一四) 記憶せよ　(一五) 遊ぶべきは自然無爲なる道德の鄉なり

之鴈。以不材死。先生將何處。莊子笑曰。周將處夫材與不材之間。材與不材之間。似之而非也。故未免乎累。若夫乘道德而浮游者則不然。無譽無訾。一龍一蛇。與時俱化。而無肯專爲。一上一下。以和爲量。浮游乎萬物之祖。物物而不物於物。則胡可得而累邪。此神農黃帝之法則也。若夫萬物之情。人倫之傳。則不然。合則離。成則毀。廉則挫。尊則議。有爲則虧。賢則謀。不肖則欺。胡可得而必乎哉。悲夫。弟子志之其唯道德之鄉乎。

者。止二其旁一而不レ取也。問二其故一曰。無レ所レ可レ用。莊子曰。此木以二不材一得レ終二其天年一。夫子出二於山一。舍二故人之家一。故人喜。命二豎子一。殺レ鴈而烹レ之。豎子請曰。其一能鳴。其一不レ能レ鳴。請奚殺。主人曰。殺二不レ能レ鳴者一。明日弟子問二於莊子一曰。昨日山中之木。以二不材一得レ終二其天年一。今主人

(二)此の木不材を以て其の天年を終ふるを得たりと。夫子山より出でて、故人の家に舍る。故人喜び、豎子に命じて、鴈を殺して之れを烹しむ。豎子請うて曰く、其の一は能く鳴き、其の一は鳴くこと能はず。請ふ奚れをか殺さんと。主人曰く、鳴くこと能はざるものを殺せと。明日弟子は莊子に問うて曰く、昨日山中の木は、不材を以て其の天年を終ふることを得。(三)今主人の鴈は、不材を以て死す。(四)先生將に何れに處らんとすると。莊子笑つて曰く、周は將に夫の(五)材と不材との間に處らんとす。(六)材と不材との間は、之に似て而して非なり。故に未だ累を免れず。若し夫れ(七)道德に乘じて浮游する者は則ち然らず。(八)譽もなく訾もなく、一龍一蛇、時と倶に化して、而して肯えて專ら爲すこと無し。(九)一上一下、和を以て量と爲す、(一〇)萬物の祖に浮游して、物を物として物に物とせられず。則ち胡ぞ得て累はすべけんや。此れ神農黄帝の法則なり。夫の(一一)萬物の情、人倫の傳は、則ち然らず、(一二)合へば則ち離れ、成れば則ち毀たれ、廉は則ち挫かれ、尊は

之以㆓至人之德㆒。吾恐㆔其驚而遂至㆓於惑㆒也。弟子曰。不㆑然。孫子之所㆑言是邪。先生之所㆑言非邪。非固不㆑能㆑惑㆑是。孫子所㆑言非邪。先生所㆑言是邪。彼固惑而來矣。又奚罪焉。扁子曰。不㆑然。昔者有㆑鳥。止㆓於魯郊㆒。魯君說㆑之。爲具㆓太牢㆒以饗㆑之。奏㆓九韶㆒以樂㆑之。鳥乃始憂悲眩視。不㆓敢飲食㆒。此之謂㆘以㆓己養㆒養㆗鳥也。若夫以㆓鳥養㆒養㆑鳥者。宜㆘棲㆓之深林㆒。浮㆓之江湖㆒。食㆑之以㆗委蛇㆖。則平陸而已矣。今休款啓寡聞之民也。吾告以㆓至人之德㆒。譬㆑之若㆘載㆑鼷以㆓車馬㆒。樂㆑鴳以㆗鐘鼓㆖也。彼又惡能無㆑驚乎哉。

に爲して恃む所ありて爲さず其德の長育するにまかせ自ら長ぜず　八　知を飾りて俗愚を驚かし身を修めて他人の汚をさらけ出す　九　己を衒耀して恰も日月を掲げ以て行く如く人の耳目を聳動す　一〇　汝の身體を滿足に保ち體中の九穴を具へて不具ならず中途に聾者盲者ビッコヰザリともならずして人間並の仲間に入るを得るは幸なり　一一　休吾が說の廣大なるに驚きて惑ふに至らんことをおそる　一二　先生の言非ならば休を惑はすことなし　一三　先生の言是ならば休固より惑へるによつて先生の說を聽きに來りしわけゆゑ先生に罪無し　一四　至樂篇に解出づ　一五　逍遙自適せしむ　一六　物その處を得てノンキなるべし　一七　款は穴啓は開く、見識の小なるなり　一八　ハツカネズミを載するに車馬の乘を以てし雀を樂しましむるに鐘鼓の音を以てする如く不相應

荘子行㆓於山中㆒。見㆓大木枝葉盛茂㆒。伐㆑木

山木

荘子山中に行き、大木の枝葉盛茂せるを見る。木を伐るもの、其の旁に止まるも、取らざるなり。其の故を問へば、曰く、用ふべき所なしと。荘子曰く、

爲而不恃、長而不宰。今汝飾知以驚愚、修身以明汙、昭昭乎若揭日月而行也。汝得全而形軀具而九竅、無中道夭於聾盲跛蹇而比於人數、亦幸矣。又何暇乎天之怨哉。子往矣。孫子出。扁子入坐。有閒仰天而歎。弟子問曰。先生何爲歎乎。扁子曰。向者休來。吾告

に至らんことを恐ると。弟子曰く、然らず。孫子の言ふ所是か、先生の言ふ所非か。非は固より是を惑はすこと能はず。(二二)孫子の言ふ所非か、先生の言ふ所是か。彼れ固より惑うて來れり。又奚ぞ罪あらんと。扁子曰く、然らず、昔は鳥あり、(二三)魯郊に止まる、魯君之を說び、爲めに太牢を具へて以て之を饗し、(二四)九韶を奏して以て之を樂しましむ。鳥乃ち始めて憂悲眩視して敢へて飲食せず。此をこれ己が養を以て鳥を養ふと謂ふなり。若し夫れ鳥の養を以て鳥を養ふものは、宜しく之を深林に棲ませ、之を江湖に浮べ、之に食はせて以て委蛇せしむべし、(二五)則ち(二六)平陸ならんのみ。今休は款啓寡聞の民なり。(二七)吾れ告ぐるに至人の德を以てす。之を譬へば、(二八)鼷を載するに車馬を以てし、鷃を樂しましむるに鐘鼓を以てするが若きなり。彼れ又惡んぞ能く驚くことなからんやと。

(一) 魯人　(二) [illegible]は[illegible]、[illegible]の賢人　(三) 私は鄉里に居るとき品行修まらずといふにもあらず　(四) 然るに原野に耕作すれば豐穰にあはず　(五) 天に對し何の罪あつて私は此の如き運命にあふにや　(六) 內には己の心地を忘れ耳目を遺れ芒然と無心になりて世俗の塵埃より外にさまよひ事を爲せども事なき業に逍遙自適す　(七) 性のまゝ

有ニ孫休者一。踵レ門而詫ニ子扁慶子一曰。休居レ鄕不レ見レ謂レ不レ修。臨レ難不レ見レ謂レ不レ勇。然而田レ原不レ遇レ歲。事レ君不レ遇レ世。賓ニ於鄕里一。逐ニ於州部一。則胡罪ニ乎天一哉。休惡遇ニ此命一也。扁子曰。子獨不レ聞ニ夫至人之自行一邪。忘ニ其肝膽一。遺ニ其耳目一。芒然彷ニ徨乎塵垢之外一。逍ニ遙乎無事之業一。是謂下

(一)孫休といふものあり。門に踵つて、(二)子扁慶子に詫げて曰く、(三)休鄕に居て修まらずと謂はれず、難に臨んで勇ならずと謂はれず。(四)然かも原に田つくれば歳に遇はず、君に事ふれば世に遇はず、鄕里に賓けられ、州部に逐はるゝは、則ち(五)胡ぞ天に罪ありてか、休は惡んぞ此の命に遇へると。扁子曰く、子獨り夫の至人の自ら行ふことを聞かずや。(六)其の肝膽を忘れ、其の耳目を遺れ、芒然として塵垢の外に彷徨し、無事の業に逍遙す。是を爲して恃まず、(七)長じて宰せずと謂ふ。今汝(八)知を飾つて以て愚を驚かし、身を修めて以て汙を明かにす、(九)昭昭乎として日月を揭げて行くが若きなり。(一〇)汝而の形軀を全うし、而の九竅を具へ、中道にして聾者跛蹇に夭せらるゝことなくして、人數に比するを得るは、亦幸なり。又何ぞ天を之れ怨むに暇あらんや。子往けと。孫子出づ。扁子入つて坐し、間く有つて天を仰いで歎ず。弟子問うて曰く、先生何爲れぞ歎ずるやと。扁子曰く、向きに休來る、吾れ之に告ぐるに至人の德を以てす。(一一)吾れ其の驚いて遂に惑ふ

馬將敗。公密而不應。少焉果敗而反。公曰。子何以知之。曰。其馬力竭矣。而猶求焉。故曰敗。

(一) 昔に東野稷、古の善く御する人 (二) 進退繩墨の如く直にして左右の旋轉ブンマハシに中てたる如く圓形 (三) 進退周旋の美麗なせる鍛錬のあやも之に及ばず (四) 馬を御の如く乗りまはすこと百度にしてかへらしむ (五) 東野稷今に斃むならん (六) 其の馬力竭きたるになほ驅することを求む

工倕旋而蓋規矩。指與物化。而不以心稽。故其靈臺一而不桎。忘足履之適也。忘要帶之適也。知忘是非。心之適也。不內變。不外從。事會之適也。始乎適。而未嘗不適者。忘適之適也。

工倕(一)旋して規矩を蓋ふ。(二)指物と化して、心を以て稽へず。故に其の(四)靈臺一にして桎せられず。(五)足を忘るゝは履の適なり、要を忘るるは帶の適なり、(六)知是非を忘るゝは心の適なり。(七)內變せず、外從はざるは、事會の適なり。(八)適に始まつて、未だ嘗て適せずんばあらざる者は、適を忘るゝの適なり。

(一) 堯の時の工人 (二) 手にて圓を叫くに繩墨を取捌するほど巧み (三) 指物と與に同化して自然に動き心にとせんかくせんと考へず (四) 故に其の心專一にして拘束せられず自由自在なり (五) 足あるを忘るは履の足にかなへるなり (六) 知に於て是非を忘るゝは心の適して自在なるなり (七) 心一にして變せず物に從はざるは境遇に適して安んずるなり (八) 適あることを知ればなほ適せざる所あれど適を忘れて自ら適するに至れば化の自然にかなひて適せざるなし

賞爵祿。齊五日。不敢懷非譽巧拙。齊七日。輙然忘吾有四枝形體也。當是時也。無公朝。其巧專而外骨消。然後入山林。觀天性形軀至矣。然後成見鐻。然後加手焉。不然則已。則以天合天。器之所以疑神者。其是與。

合す。器の神に疑はしき所以のものは、其れ是れか。(一四)

(一) 梓は官の工匠、慶は其の名 (二) 鐘鼓を懸くる架 (三) 元氣を消耗することなし (四) 名利盡く忘る (五) 名聞是非を忘る (六) 忽然として吾が四肢形體あるを忘る (七) 朝廷などいふ考へなし (八) 其の工夫に專心にして外物の心を亂るもの消失す (九) 山林に入りて材を探す (一〇) 樹の天性及び材形の優れたるを見て之をとり然る後實物通りの鐻の雛形を作る (一一) 製作に着手す (一二) 心にかなふ材なければ中止す (一三) 我の有する自然を以て天道に合致すしむ (一四) 製作品の鬼神の如く疑はしきは是がためか

東野稷。以御見莊公。進退中繩。左右旋中規。莊公以爲文弗過也。使之鉤百而反。顏闔過之。入見曰。稷之

(一)東野稷、御を以て莊公に見ゆ。(二)進退繩に中り、左右の旋は規に中る。莊公以爲へらく、(三)文も過ぎざるなりと。之をして鉤すること百にして反らしむ。(四)顏闔之に遇ふ。入つて見えて曰く、(五)稷の馬將に敗れんとすと。公密して應へず。少焉して果して敗れて反る。公曰く、子何を以てか之を知れると。曰く、其の馬力竭きたり、(六)而して猶ほ求む、故に曰く敗ると。

道。吾始二乎故一。長二乎性一。成二乎命一。與レ齊俱入。與レ汨偕出。從二水之道一。而不レ爲レ私焉。此吾所二以蹈一レ之也。孔子曰。何謂下始二乎故一。長二乎性一。成中乎命上。曰吾生二於陵一而安二於陵一。故也。長二於水一而安二於水一。性也。不レ知三吾所二以然一而然。命也。

るは是生まれながら本來具有する下地なり　性　陸に生まれたれど其の儘水に長じて水に安んじ居るは習性となれるなり　命　其のやうになる理由を知らずして無意識のうちに其のやうになるは自然の命なり

梓慶。削レ木爲レ鐻。鐻成。見者驚猶二鬼神一。魯侯見而問焉。曰。子何術以爲焉。對曰。臣工人。何術之有。雖レ然有レ一焉。臣將レ爲レ鐻。未三嘗敢以耗二氣也。必齊以靜レ心。齊三日。而不三敢懷二慶

(一)梓慶、木を削つて鐻を爲る。鐻成る。見るもの驚いて鬼神の猶しとす。魯侯見て問うて曰く、子何の術か以て爲れるやと。對へて曰く、臣は工人なり、何の術か之れ有らん。然りと雖も一あり。臣將に鐻を爲らんとすれば、未だ嘗て敢へて以て氣を耗せざるなり。必ず齊して以て心を靜にす。齊すること三日にして、敢へて慶賞爵祿を懷はず、齊すること五日、敢へて非譽巧拙を懷はず。齊すること七日、輒然として吾が四枝形體あるを忘るゝなり。是の時に當つてや、公朝なし。其の巧は專にして外骨消す。然る後山林に入り、天性形軀の至るを觀る。然る後見鐻を成す。然る後手を加ふ、然らずれば則ち已む、則ち天を以て天に

之似二木雞一矣。其德全矣。異雞無二敢應者一。反走矣。

孔子觀二於呂梁一。縣水三十仞。流沫四十里。黿鼉魚鼈之所レ不レ能レ游也。見二一丈夫游ビ之。以爲レ有レ苦而欲レ死也。使二弟子並レ流而拯ヒ之。數百步而出。被髮行歌。而游二於塘下一。孔子從而問焉曰。吾以レ子爲レ鬼。察レ子則人也。請問。蹈レ水有レ道乎。曰亡。吾無レ

孔子呂梁(一)に觀ぶ。縣水三十仞(二)、流沫四十里(三)、黿鼉魚鼈(四)の游ぐこと能はざる所なり。一丈夫の之を游ぐを見る。以爲へらく苦しきこと有つて死せんと欲するなりと。弟子をして流に竝んで之を拯はしむ。數百步にして出づ(五)。被髮行歌して、塘下に遊ぶ。孔子從つて問うて曰く、吾れ子を以て鬼と爲す、子を察れば則ち人なり。請ひ問ふ、水を蹈む道あるかと。曰く亡し。吾に道なし。吾れ故に始まり(六)性に長じ、命に成る。齊(七)と倶に入り、汩と偕に出で、水の道に從つて私を爲さず、此れ吾が之を蹈む所以なりと。孔子曰く、何をか故に始まり、性に長じ、命に成ると謂ふ。曰く、吾れ陵(八)に生れて陵に安んずるは故なり。水に長じて水に安ん(九)ずるは性なり。吾れ然る(一〇)所以を知らずして然るは、命なりと。

(一) 地名 (二) 瀑布三十仞、一仞は八尺 (三) 水激して泡立つこと四十里 (四) 大鼈と蜥蜴に似たる丈餘の爬虫及び魚やスッポン (五) 髮をふり亂し放歌行吟して堤下に遊ぶ (六) 本來具有する所に始まり習うて性となり自然に成る (七) 渦卷く水とともに入り湧上る水とともに出て水の道に從つて私意を挿まず (八) 陸に生れて陸に安じ處

丘有莘。山有夔。野有彷徨。澤有委蛇。公曰。請問。委蛇之狀何如。皇子曰。委蛇其大如轂。其長如轅。紫衣而朱冠。其爲物也。惡聞雷車之聲。則捧其首而立。見之者殆乎霸。桓公囅然而笑曰。此寡人之所見者也。於是正衣冠與之坐。不終日而不知病之去也。

狀鼓の如くにして一足にて行くといふ 〔一八〕 蛇の如くにして兩頭五彩あり 〔一九〕 澤神 〔二〇〕 車のコシキ 〔二一〕 委蛇は雷や車の音を嫌ふ 〔二二〕 委蛇の立つを見るものは霸者となるべし 〔二三〕 よろこび笑ふ貌

紀渻子。爲王養鬪雞。十日而問。雞已乎。曰。未也。方虛憍而恃氣。十日又問。曰未也。猶應嚮景。十日又問。曰。未也。猶疾視而盛氣。十日又問。曰。幾矣。雞雖有鳴者。已無變矣。望

紀渻子、王〔一〕の爲めに鬪鷄を養ふ。十日にして問〔二〕ふ、鷄已にするかと。曰く、未だしなり。方に虛憍〔三〕にして氣を恃むと。十日にして又問ふ。曰く、未だしなり。猶ほ嚮景〔四〕に應ずと。十日にして又問ふ。曰く、未だしなり。猶ほ疾視して氣を盛んにすと。十日にして又問ふ。曰く、幾し〔五〕、鷄鳴くものありと雖も、已に變ずることなし。之〔六〕を望むに木鷄に似たり。其の德〔七〕全し。異鷄敢へて應ずるもの無く、反つて走ると。

〔一〕 齊王 〔二〕 齊王問うて曰く、鷄已に用ふべきかと 〔三〕 頭を高く擧げて氣ひこむ 〔四〕 他鷄の聲や影を見れば鬪はんとす 〔五〕 もはや宜しかるらん 〔六〕 之を見るに恰も木製の鷄の如し 〔七〕 其の德完成したれば他鷄之に對抗するものなく戰はずして逃げはしる

傷。鬼惡能傷ㇾ公。夫忿滀之氣。散而不ㇾ反。則爲二不足一。上而不ㇾ下。則使二人善怒一。下而不ㇾ上。則使二人善忘一。不ㇾ上不ㇾ下。中ㇾ身當ㇾ心。則爲ㇾ病。桓公曰。然則有ㇾ鬼乎。曰有。沈有ㇾ履。竈有ㇾ髻。戸內之煩壤。雷霆處ㇾ之。東北方之下者。倍阿鮭蠪躍ㇾ之。西北方之下者。則泆陽處ㇾ之。水有二罔象一。

則ち鬼あるかと。曰く有り、沈(一〇)に履あり。竈(一一)に髻あり。戸内の煩壤(一二)に、雷霆之に處る。東北方の下には、陪阿鮭蠪(一三)之に躍る。西北方の下には、則ち泆陽(一四)之に處る。水に罔象(一五)あり。丘に峷(一六)あり。山に夔(一七)あり。野に彷徨(一八)あり。澤に委蛇(一九)あり。公曰く、請ひ問ふ、委蛇の狀何如と。皇子曰く、委蛇其の大さ轂(二〇)の如く、其の長さ轅の如し、紫衣にして朱冠、(二一)其の物たるや、雷車の聲を聞くを惡む。則ち其の首を捧げて立つ。(二二)之を見る者は霸たるに殆しと。桓公辴然(二三)として笑つて曰く、此れ寡人の見る所のものなりと。是に於て衣冠を正しうして之と坐す。日を終へずして病の去るを知らざるなり。

(一) 齊の桓公澤に獵す (二) 管仲馬車を御して魔物を見る (三) 桓公仲を尊んでいふ (四) 心疲れて病となり數日出御せず (五) 皇子は姓告敖は名 (六) 公の病は公自ら病めるにて鬼何ぞ公を害するを得ん (七) 鬱結せる氣發散して本に反らざれば精氣不足して衰弱す (八) 逆上して下らざれば癇癖をます (九) 沈下して上らざれば虛脫して記憶を亡ぼす (一〇) 泥水に履といふ鬼あり (一一) かまどには髻といふ鬼あり (一二) ゴミダメ (一三) 鬼の名。其の躍る狀小兒の如く黑衣赤幘劍を帶び戟を持つといふ (一四) 鬼の名。豹頭馬尾といふ (一五) 水神なり。小兒の如くにして黑色赤衣大耳長臂といふ (一六) 狗の如くにして角あり身に文彩ありといふ (一七) 其の大さ牛の如く其の

則女爲之乎。爲彘謀曰。不如食以糠糟。而錯之牢筴之中。自爲謀。則苟生有軒冕之尊。死得於腞楯之上。聚僂之中。則爲之。爲彘謀則去之。自爲謀則取之。所異彘者何也。

れば則ち之を去り、自ら爲めに謀れば則ち之を取る。彘に異なる所のものは何ぞやと。

（一）祭祀禮服を着用して豚小屋にゆく（二）汝何ぞ死を惡ふことあるべきや（三）白きチガヤを敷いて汝の肩や尻の肉を彫刻したる組の上に載せ以て汝を優待せんとす（四）豚の身のためを考へていへば米カス米ヌカの如き粗食して豚小屋の中に置かるゝ方が優遇して殺さるゝよりよし（五）自己の身のためを考へればどうかかうか生きてゐて高位尊爵になりさへすれば飾りたる葬車の上棺飾の中に死するも之をなす

桓公田於澤。管仲御。見鬼焉。公撫管仲之手曰。仲父何見。對曰。臣無所見。公反。誒詒爲病。數日不出。齊士有皇子告敖者曰。公則自

（一）桓公澤に田す、（二）管仲御す、鬼を見る。公管仲の手を撫でて曰く、（三）仲父何をか見ると。對へて曰く、臣見る所なしと。公反り、（四）誒詒して病を爲し、數日出でず。齊の士に（五）皇子告敖なるものあり。曰く、（六）公則ち自ら傷る、鬼惡んぞ能く公を傷らんや。（七）夫れ忿滀の氣散じて反らざれば、則ち不足を爲す。（八）上つて下らざれば、則ち人をして善く怒らしむ。（九）下つて上らざれば、則ち人をして善く忘れしむ。上らず下らず、身に中して心に當たれば、則ち病を爲すと。桓公曰く、然らば

年四十。而有二内熱之病一以死。豹養二其内一。而虎食二其外一。毅養二其外一。而病攻二其内一。此二子者。皆不レ鞭二其後一者也。仲尼曰。無二入而藏一。無二出而陽一。柴二立其中央一。三者若得。其名必極。夫畏塗者。十殺二一人一。則父子兄弟相戒也。必盛二卒徒一。而後敢出焉。不二亦知一乎。人之所レ取レ畏者。衽席之上。飲食之間。而不レ知二爲レ之戒一者過也。

な忘れたるが故に虎に其の體を食はれ顔は其の外部のみを養ひて病内部より起りて死す（一〇）一方に偏して足らざる所を補はず（一一）山林に入るとも有爲の心ありて晦ましかくるゝなかれ（一二）世に出づるとも有爲の心ありて世に顯れんと求むるなかれ（一三）藏は入るに過ぎ陽は出づるに過ぐるが故に顯晦の中央に枯木の如く立てよ（一四）入れどもかくれず出づれども顯れず中央に柴立することを得れば其の名必ず至極を證すべき人と名づけん（一五）虎狼劫盗などの出没する道（一六）飲食を十分にして後出づ（一七）人の畏れて戒しむべきものは閨房飲食の嗜欲

祝宗人。玄端以臨二牢筴一。説レ彘曰。女奚惡レ死。吾將下三月豢レ女。十日戒。三日齊。藉二白茅一。加中女肩尻乎彫俎之上上。

（一）祝宗人玄端して以て牢筴に臨み、彘に説いて曰く、（二）汝奚ぞ死を惡まん。吾れ將に三月汝を豢ひ、十日戒し、三日齊し、（三）白茅を藉いて、汝の肩尻を彫俎の上に加へんとす。則ち汝之を爲さんかと。（四）彘の爲めに謀るに曰く、食ふに糠糟を以てして、牢筴の中に錯かれんには如かずと。（五）自ら爲めに謀れば、則ち苟くも生きて軒冕の尊あり死して、腞楯の上、聚僂の中を得んに、則ち之を爲す。彘の爲めに謀

何聞二於夫子一。威公曰。田士無レ讓。寡人願聞レ之。開之曰。聞二之夫子一曰、善養レ生者。若レ牧レ羊然。視二其後者一而鞭レ之。威公曰。何謂也。田開之曰。魯有二單豹者一。岩居而水飲。不二與レ民共一レ利。行年七十。而猶有二嬰兒之色一。不幸遇二餓虎一。餓虎殺而食レ之。有二張毅者一。高門縣薄。無レ不レ走也。行

開之曰く、魯に單豹(五)といふものあり、岩居して水飲し、民と利を共にせず。(六)行年七十にして、猶ほ嬰兒の色あり。不幸にして餓虎に遇ふ。餓虎殺して之を食ふ。張毅といふものあり、(七)高門縣薄、走らざること無きなり。行年四十にして、(八)內熱の病あつて以て死す。(九)豹は其の內を養ひて、虎其の外を食ひ、毅は其の外を養ひて病其の內を攻む。此の二子の者は、皆其の後るゝを鞭たざるものなり。(一〇)仲尼曰く、(一一)入れども藏るゝこと無かれ、(一二)出づれども陽るゝこと無かれ、(一三)其の中央に柴立せよと。(一四)三者若し得れば、其の名必ず極まらん。夫れ畏塗なるもの、(一五)十に一人を殺せば、卽ち父子兄弟相戒むるなり。必ず卒徒を盛んにして、後敢へて出づ、(一六)亦知ならずや。(一七)人の畏を取る所のものは、衽席の上、飲食の間なり、而して之が爲めに戒むることを知らざるものは過なり。

(一)姓は田名は開之、道を學べる人　(二)人名、養生の法を學ぶ　(三)箒をもつて門庭の掃除をなす　(四)羊の群に後れたるものを打つて進ましむる如く足らざるを補うて養生の道を全くす　(五)人名　(六)年齡七十にして顏は赤坊の如く若々し　(七)高き門と簾を垂るゝ家にて權門をいふ　(八)內部に熱ある病　(九)豹は其の心を養ひて外

便操之也。彼視淵若陵。視舟之覆猶其車却也。覆却萬方陳乎前。而不得入其舍。惡往而不暇。以瓦注者巧。以鉤注者憚。以黄金注者殙。其巧一也。而有所矜。則重外也。凡外重者內拙。

と。

(一) 淵の名 (二) わたし守 (三) 水を潜るもの丶如きは未だ嘗て目に舟を見ることなきも直に之を操縱することを得 (四) 練習しばしばしてよく水を忘るゝに至るが故によく舟を動かし得 (五) 舟の顛覆するを見ること猶車が坂路より却くを見るが如く憂へず懼れず (六) 或は覆り或は却きさまざまの異變眼前に起れども其の心動かず (七) 是の如くば何れの場合と雖も綽々として餘裕あり (八) 瓦器の如き賤しきものを賭博のカケモノとすれば心之に牽かれざるが故に巧に中り帶留の金具を以てカケモノとすれば心之に牽かれて悸る故に中らぬことあり更に黄金を以てカケモノとする時は中てんとする念益強く動いて心に暇なくて心混亂する故に中らず (九) カケモノの如何にかかはらず其の技巧は同様なれども心に惜しむ所あれば外物を重んず

田開之見周威公。威公曰。吾聞祝腎學生。吾子與祝腎遊。亦何聞焉。田開之曰。開之操拔篲以侍門庭。亦

(一)田開之、周の威公に見ゆ。威公曰く、吾れ聞く(二)祝腎は生を學ぶと。吾子は祝腎と遊ぶ、亦何をか聞けると。田開之曰く、開之は(三)拔篲を操つて以て門庭に侍するのみ、亦何をか夫子に聞かんと。威公曰く、田子讓ること無かれ。寡人願はくば之を聞かんと。開之曰く、之を夫子に聞く、曰く、善く生を養ふものは、羊を牧ふが若く然り、(四)其の後るゝものを視て之を鞭つと。威公曰く、何の謂ぞやと。田

多。而唯蜩翼之知。吾不反不側。不以萬物易蜩之翼。何爲而不得。孔子顧謂弟子曰。用志不分。乃凝於神。其痀僂丈人之謂乎。

顏淵問仲尼曰。吾嘗濟乎觴深之淵。津人操舟若神。吾問焉曰。操舟可學邪。曰可。善游者數能。若乃夫沒人。則未嘗見舟。而便操之也。吾問焉而不吾告。敢問何謂也。仲尼曰。善游者數能。忘水也。若乃夫沒人之未嘗見舟。而

顏淵仲尼に問うて曰く、吾れ嘗て觴深の淵を濟る。津人舟を操ること神のごとし。吾れ問うて曰く、舟を操ること學ぶべきかと。曰く可。善く游ぐものは數〻すれば能くす、乃ち夫の沒人の若きは、則ち未だ嘗て舟を見ずして、便ち之れを操るなりと。吾れ問へども吾に告げず。敢へて問ふ何の謂ぞやと。仲尼曰く、善く游ぐ者の數〻して能くするは、水を忘るればなり。乃ち夫の沒人の未だ嘗て舟を見ずして、便ち之れを操るが若きや、彼れ淵を視ること陵の若く、舟の覆るを視ること、猶ほ其の車の却くがごときなり。覆却萬方前に陳なれども、而かも其の舍に入るを得ず、惡に往くとしてか暇あらざらん。瓦を以て注とすれば巧、鉤を以て注とすれば憚り、黃金を以て注とすれば殙し。其の巧は一なり。而して矜む所あれば、則ち外を重んず。凡そ外重きものは、內拙し

下平均。故無攻戰之亂。無殺戮之刑者。由此道也。不開人之天。而開天之天。開天者德生。開人者賊生。不厭其天。不忽於人。民幾乎以其眞。

仲尼適楚。出於林中。見痀僂者承蜩。猶掇之也。仲尼曰。子巧乎。有道邪。曰我有道也。五六月累丸二而不墜。則失者錙銖。累三而不墜。則失者十一。累五而不墜。猶掇之也。吾處身也。若厥株拘。吾執臂也。若槁木之枝。雖天地之大。萬物之

仲尼、楚に適き、林中より出でて、痀僂の者の蜩を承くる(一)、猶ほ之を掇るがごときを見る。仲尼曰く、子は巧なるか、道あるかと。曰く我に道あるなり。五六月(二)丸二つを累ねて墜ちざれば、則ち失ふもの錙銖。三つを累ねて墜ちざれば、則ち失ふもの十に一。五つを累ねて墜ちざれば、猶ほ之を掇るがごときなり。吾の(三)身を置くや、橛株の拘めるが若く、吾の臂を執るや、槁木の枝のごとし。天地の大、萬物の多と雖も、而かも唯蜩翼を之れ知る。吾反せず(四)、側せず、萬物を以て蜩の翼に易へず。何を爲すとしてか得ざらんやと。孔子顧みて弟子に謂つて曰く、(五)志を用ふること分れざれば、乃ち神に凝るとは、其れ痀僂丈人の謂かと。

(一) セムシのもの竿にて蟬を捕るに恰も手にて拾ひ取る如し (二) 蟬とりの練習に竿頭に二箇の丸を重ねて試み之が墜ちざるやうになれば蟬を失ふこと少歟 (三) 身體の構へは木の株の曲るが如く臂を堪へること枯木の枝の如く靜か (四) 身を轉ぜずそばたゝず凝然不動にして萬物多しと雖も心を注ぐは蟬翼のみ (五) 志を用ふること事一なれば其の神凝りて擾れず

性。養二其氣一。合二其德一。以通二乎物之所一レ造。夫若レ是者。其天守全。其神無レ郤。物奚自入焉。夫醉者之墜レ車。雖レ疾不レ死。骨節與レ人同。而犯害與レ人異。其神全也。乘亦不レ知也。墜亦不レ知也。死生驚懼。不レ入二乎其胸中一。是故遻レ物而不レ慴。彼得二全於酒一。而猶若レ是。而況得二全於天一乎。聖人藏二於天一。故莫二之能傷一也。復レ讎者不レ折二鏌干一。雖下有二忮心一者上。不レ怨二飄瓦一。是以天

は賊生ず。其の天を厭はず、人を忽せにせざれば、民其の眞を以ふるに幾し。

(一) 上の子は尊稱古は師を稱して子と云ふ (二) 姓は尹名は函谷關の令 (三) 至德の人は如何なる所を忍びゆくも妨げられず (四) 雲氣に乘じ日月を挾み虚を蹈み窮を過ぎても慄れず (五) 純清無雜の神氣を内に守るが故に外物之を犯すこと能はず故に慴れず (六) 知を以て工夫し勇を以て決行せし類に非ず (七) 凡そ其の形貌と色とあるものは皆物なり (八) 物我なりと雖も貌色あることは皆同じ (九) 何ぞ之を先とし推すに足らんや (一〇) 至人は物の形せざる最初の混沌まで溯り至り又物の變化することなき無爲窮極の境に止まる (一一) 是の道を得て之を窮めつくすものは物何ぞこゝを拘束し得んや (一二) 至人は常に自然の適度に安し居る (一三) 始なく終なく循環窮まりなき萬法變化の綱に身を置く (一四) 萬物の以て始まり以て終る混沌に逍遊し其の性を純一にし其の元氣を養ひ其の德を一に合せて物の成る至道の原自然の本に通ず (一五) 是の如きものは天道の自然を守ること全くして其の精神に間隙なければ物之に乘じ入ることを能はず (一六) 骨節關節他人と同じきに其傷人と異なるは醉者は無心にして其の精神全きが故なり (一七) 死と生と驚懼と醉者の胸中に無きが故に物に忤ふと雖もおそれず (一八) 聖人は自然無爲にして精神を天理に合するが故に物之を傷くること能はず (一九) 讐を復する者も仇敵のもてる干將莫邪の劍を惡みて折らず (二〇) 心偏狹なるものも軒より落ちたる瓦を怨みず (二一) 無情無心なれば天下は均しく平かなり (二二) 人の天即ち知を以て心を使はずして天の天たる性に率うて自然に因る (二三) 天を厭はずして常に自然の性を用ひ人を忽諸に附せずして知巧を慎まば民各々其の天眞を得るにちかし

至於此。關尹曰。是純氣之守也。非知巧果敢之列。居予語女。凡有貌象聲色者皆物也。物何以相遠。夫奚足以至乎先。是色而已。則物之造乎不形。而止乎無所化。夫得是而窮之者。物焉得而止焉。彼將處乎不淫之度。而藏乎無端之紀。游乎萬物之所終始。壹其

是れ色のみ。則ち物の形せざるに造りて、化する所なきに止まるあり。(一〇)夫れ是を得て、之を窮むるものは、物焉んぞ得て止めんや。(一一)彼將に不淫の度に處りて、(一二)無(一三)端の紀に藏れ、(一四)萬物の終始する所に遊び、其の性を壹にし、其の氣を養ひ、其の徳を合せて、以て物の造る所に通ぜんとす。夫れ是の若きものは、其の天守全く其の神郤なし、物奚よりか入らんや。(一五)夫れ醉者の車より墜つる。疾むと雖も死せず。(一六)骨節の人と同じうして、犯害の人と異なるは、其の神全ければなり。乘るも亦知らざるなり。墜つるも亦知らざるなり。(一七)死生驚懼、其の胸中に入らず。是の故に物に遻うて慴れず。彼れ全きを酒に得るも、而かも猶ほ是の如し。而るを況んや全きを天に得るをや。(一八)聖人天に藏る、故に之を能く傷くること莫きなり。(一九)讐を復する者も鏌干を折らず、(二〇)忮心あるものと雖も飄瓦を怨みず、(二一)是を以て天下均平なり。故に攻戰の亂なく、殺戮の刑なきものは、此の道に由ればなり。(二二)人の天を開かずして、天の天を開く。天を開くものは徳生じ、人を開くもの

則與彼更生。更生則幾矣。事奚足棄。而生奚足遺。棄事則形不勞。遺生則精不虧。夫形全精復。與天爲一。天地者萬物之父母也。合則成體。散則成始。形精不虧。是謂能移。精而又精。反以相天。

は無し（九）天真の實情に通達するものは知の以て奈何ともする無き所に心を勞さず（一〇）形體を養ふには必ず飲食衣服の如き物を先にすれど物十分にありながら養はざることあり即ち夭死是なり（一一）生あれば其の形體を養うて形體を離れざらんことを先にすれど形離れずして生きながらにして死せるが如きものなり（一二）生の來るや之を欲せずと雖も卻くることは能はず生の去るも亦之を引止むることは能はず（一三）物を以て形を養ふことは爲すに足らざれどありとて爲さざる可からざる所以は形のために累はさるゝことを免れぬため（一四）心正しく平かなれば彼造化と與に無限に生きかへる（一五）道に近し（一六）世事何が故に此棄すべきか生何が故に遺るべきか（一七）曰く世事を放棄すれば形勞せず生を遺るれば心勞へずして精が全し（一八）陰陽の氣合すれば形體を成し氣散ずれば形體亡びて未死の始にかへる（一九）性の自然に因れば渾融なし故によく物と與に移る（二〇）精の至極なれば我反つて天命の化育を助く

子列子。問關尹曰。至人潛行不窒。蹈火不熱。行乎萬物之上而不慄。請問何以

（一）子列子、（二）關尹に問うて曰く、（三）至人潛行するも窒がらず、火を蹈むも熱からず、（四）萬物の上に行いて慄れずと。請ひ問ふ、何を以て此に至れると。關尹曰く、是れ（五）純氣の守なり。（六）知巧果敢の列に非らず。居れ予女に語らん。（七）凡そ貌象聲色あるものは皆物なり。（八）物何ぞ以て相遠からん、夫れ（九）奚ぞ以て先に至るに足らん。

形不養者有之矣。有生必先無離形。形不離而生亡者有之矣。生之來不能卻。其去不能止。悲夫。世之人以爲。養形足以存生。而養形。果不足以存生。則世奚足爲哉。雖不足爲。而不可不爲者。其爲不免矣。夫欲免爲形者。莫如棄世。棄世則無累。無累則正平。正平

の去るや止むること能はず。悲しいかな。世の人以爲へらく、形を養へば以て生を存するに足れりと。而かも形を養ふも、果して以て生を存するに足らざれば、則ち世奚ぞ爲すに足らんや。(七)爲すに足らずと雖も、而かも爲さざるべからざるものは、其の免れざるが爲めなり。夫れ形の爲めにするを免れんと欲するものは、世を棄つるに如くは莫し。世を棄つれば則ち累なし、累なければ則ち正平、(八)正平なれば則ち彼と與に更生す、更生すれば則ち幾し。(九)事奚にか棄つるに足りて、生奚かに遺るゝに足る。(一〇)事を棄つれば則ち形勞せず、生を遺るれば則ち精虧けず。夫れ形全く精復すれば、天と一たり。天地は萬物の父母なり。(一一)合へば則ち體を成し、散ずれば則ち始めを成す。形精虧けず、是を能く移る(一三)と謂ふ。(一二)精にして又精、(一四)反つて以て天を相く。

(一) 此の篇性命の實情に達して生を養ふ所以を論じ神を藏し氣を守るの術を說く (二) 生の實情に通達するものは生の以て爲す無き所即ち生を益すことを務めず生は人の左右し得べからざる所なるに之を益さんとして心を勞する

胡蝶一。胡蝶胥也。化而爲レ蟲。生ニ於竈下一。其狀若レ脫。其名爲ニ鴝掇一。鴝掇千日爲レ鳥。其名爲ニ乾餘骨一。乾餘骨之沫爲ニ斯彌一。斯彌爲ニ食醯一。頤輅生ニ乎食醯一。黃軦生ニ乎九猷一。瞀芮生ニ乎腐蠸一。羊奚比ニ乎不箰久竹一生ニ青寧一。青寧生レ程。程生レ馬。馬生レ人。人又反入ニ於機一。萬物皆出ニ於機一。皆入ニ於機一。

(一) 以爲 (二) 百年を經たるされかうべ (三) よもぎ草を抜きて指さす (四) 予汝と與に知じなるが生死は要するに物化のみ故に汝も死するにあらず予も生まれず (五) 汝果して死を以て安養となすか予果して生を以て歡樂となすか (六) 萬物變化の種類は限りなくあり (七) 陰陽二氣の變用水を得れば水上に浮きたる微塵となる (八) 水陸のさかひ目にあれば蝦蟆の衣即ち苔靑となる (九) 丘に生ずればオホバコ草となる (一〇) 糞土を得れば烏足といふ草となる (一一) 虫の名 (一二) 肉死して解く (一三) 脫化せるが如し (一四)(一五)(一六)(一七)(一八)(一九)(二〇)(二一) 皆虫の名 (二二) [illegible] (二三) 蠹と云ふ (二四) 草の名 (二五) 久しく筍を生ぜざる枯竹と交りて青寧と云ふ虫を生ず (二六) 獸の名 (二七) 人又死して陰陽二氣の變用に入、生る死皆生物化機の動く所に外ならず

達ニ生之情一者。不レ務ニ生之所一レ無ニ以爲一。達命情一者。不レ務ニ知之所一レ無ニ奈何一。養レ形必先レ之物。物有レ餘而

達生(一)

(二)生の情に達するものは、生の以て爲す無き所を務めず。(三)命の情に達するものは、知の奈何ともする無き所を務めず、(四)形を養ふには必ず之を先んずるに物をす。物に餘りあつて形の養はざるもの之あり。(五)生あれば、必ず形を離るゝこと無きを先にす、形離れずして(六)生亡するもの之あり。生の來るや卻くること能はず、其

死。彼必相與異。其好惡故異也。故先聖不レ一ニ其能一。不レ同ニ其事一。名止ニ於實一。義設ニ於適一。是之謂ニ條達而福持一。

列子行食ニ於道從一。見ニ百歲髑髏一。攓レ蓬而指レ之曰。唯予與レ女知。而未ニ嘗死。未ニ嘗生一也。若果養乎。予果歡乎。種有レ幾。得レ水則爲レ㡭。得ニ本土之際一。則爲ニ鼃蠙之衣一。生ニ於陵屯一。則爲ニ陵舄一。陵舄得ニ鬱棲一。則爲ニ烏足一。烏足之根爲ニ蠐螬一。其葉爲ニ

列子行いて道從（一）に食す、百歲（二）の髑髏を見、蓬（三）を攓いて之を指して曰く、惟ゝ予（四）と女と與に知つて、未だ嘗て死せず。未だ嘗て生れざるなり。若（五）果して養ふか。予果して歡ぶか、種（六）幾ばくか有る。（七）水を得れば則ち㡭と爲り、水土（八）の際を得れば、則ち鼃蠙の衣と爲り、陵屯（九）に生ずれば則ち陵舄と爲り、陵舄鬱棲（一〇）を得れば則ち烏足と爲る。烏足の根は蠐螬（一一）と爲り、其の葉は胡蝶と爲る。胡蝶胥（一二）すれば、化して蟲と爲り、竈下に生ず。其の狀脫（一三）するが若し、其の名を鴝掇（一四）と爲す。鴝掇は千日にして鳥と爲る。其の名を乾餘骨と爲す。乾餘骨の沫（一五）は斯彌（一六）と爲り、斯彌は食醯（一七）と爲る。頤輅（一八）は食醯に生じ、黃軦（一九）は九猷（二〇）に生じ、瞀芮（二一）は腐蠸（二二）に生ず。羊奚不箰（二三）の久竹（二四）に比して青寧を生ず。青寧は程（二五）を生じ、程は馬を生じ、馬は人を生ず。人（二六）又反つて機に入る。萬物皆機より出でて、皆機に入ると。

聞邪。昔者海鳥止於魯郊。魯侯御而觴之于廟。奏九韶以爲樂。具太牢以爲膳。鳥乃眩視憂悲。不敢食一臠。不敢飮一杯。三日而死。此以己養養鳥也。非以鳥養養鳥也。夫以鳥養養鳥者。宜栖之深林。遊之壇陸。浮之江湖。食之鰌鰷。隨行列而止。委蛇而處。彼唯人言之惡聞。奚以夫譊譊爲乎。咸池九韶之樂。張之洞庭之野。鳥聞之而飛。獸聞之而走。魚聞之而下入。人卒聞之。相與還而觀之。魚處水而生。人處水而

水に處りて死す。彼れ必ず相與に異とせん。(二〇)其の好惡、故より異なればなり。故に先聖其の能を一にせず、(二一)其の事を同じうせず。名は實に止まり、(二二)義は適に設く。是を之れ條達して福持すと謂ふと。(二三)

(一)褚の字　(二)齊の桓公の相管仲　(三)袋の小なるものは大なるものを入るべからず　(四)釣瓶縄の短きものは深き水を汲むべからず　(五)大小長短自然の命運は定まれり小は小短は短各ゝ適する所ありて損益しがたし　(六)回は齊侯に黄帝堯舜をして治しきしむる道を說き併せて燧人氏神農氏の如き言を說きなば齊侯己に省み難ずれど了解せざらん　(七)齊侯甚はゞ回を罪に戮せられん　(八)海鳥飛つて魯の城外にとまる　(九)魯侯海鳥を瑞とし之を迎へ廟に宴す　(一〇)舜の樂　(一一)牛羊豚の肉を備ふる食膳　(一二)眼くらみ悲しみて一きれの肉を食はず　(一三)酒食は人間の食にして鳥の食に非ず　(一四)水邊の沙洲　(一五)鰌や白魚の子を食はせ鳥群と共にとまり優游自得して暮らしむべし　(一六)鳥はたゞ人の言語をきくだけのことさへ厭ふ　(一七)喧譁の喧々たる聲　(一八)咸池は黄帝の樂　(一九)鳥獸魚は解せざれど人衆樂をきけば相與に環觀す　(二〇)魚は相與に人の水に處れば死するを奇異とせん　(二一)古聖先王は能に應じて事に任じ一に拘することなし　(二二)名は實と相對し宜しきに叶つて設く　(二三)條理通達し福德を持すといふ、回の齊侯に說くや樂の鳥類に於けるが如く人の水に於けるが如く適合せず故に禍あらん

何邪。孔子曰。善哉女問。昔者管子有レ言。丘甚善レ之。曰。褚小者不レ可ニ以懷レ大。綆短者不レ可ニ以汲レ深。夫若レ是者。以爲。命有レ所レ成。而形有レ所レ適也。夫不レ可ニ損益。吾恐回。與ニ齊侯一言ニ堯舜黄帝之道一。而重以ニ燧人神農之言一。彼將下內求ニ於己一。而不上レ得。不レ得則惑。人惑則死。且女獨不レ

以爲へらく、命は成る所有つて、而して形は適する所あり、夫れ損益すべからずと。吾れ恐らくは回(五)、齊侯(六)と與に堯舜黄帝の道を言つて、重ぬるに燧人神農の言を以てせば、彼れ將に內己に求めて得ざらんとす、得ざれば則ち惑ふ。(七)人惑はば則ち死せんことを。且女獨り聞かずや。昔は海鳥(八)魯郊に止まる。魯侯御へて之を廟に觴す。九韶(一〇)を奏して以て樂を爲し、太牢(一一)を具へて以て膳と爲す。鳥乃ち眩視(一二)憂悲して、敢へて一臠を食はず、敢へて一杯を飲まず。三日にして死す。此れ(一三)己が養を以て鳥を養ふなり、鳥の養を以て鳥を養ふに非ざるなり。夫れ鳥の養を以て鳥を養ふものは、宜しく之を深林に棲ませ、之を壇陸(一四)に遊ばせ、之を江湖に浮べ、之に鰌鰷(一五)を食はせ、行列に隨つて止まり、委蛇して處らしむべし。彼は唯ゞ人言をだも聞くことを惡む、奚ぞ夫の譊譊(一七)を以てせんや。咸池(一八)九韶の樂、(二〇)之を洞庭の野に張れば、鳥之を聞けば飛び、獸之を聞けば走り、魚之を聞けば下り入る。人卒(一九)は之を聞けば、相與に還つて之を觀る。魚は水に處りて生き、人は

夢曰、子之談者似二辯士一。諸子所レ言、皆生人之累也。死則無二此一矣。子欲レ聞二死之說一乎。莊子曰然。髑髏曰。死無レ君於上一。無レ臣於下一。亦無二四時之事一。從然以二天地一爲二春秋一。雖二南面王樂一。不レ能レ過也。莊子不レ信曰。吾使下司命復二生子形一。爲二子骨肉肌膚一。反中子父母妻子。閭里知識上。子欲レ之乎。髑髏深矉蹙頞曰。吾安能棄二南面王樂一。而復爲二人間之勞一乎。

んやと。

(一) されかうべ (二) 兵刑に誅されて罪なき歟 (三) 斧鉞を以て打つ (四) 足下は生を貪りて嗜欲のために寿をちぢめてかく枯骨となれるか (五) 国を亡ぼし斧鉞を以て誅殺せられてかくなれるか (六) 天寿を以て死せるにや (七) 足下の曩に言ひし所の諸説は生時の累患にして死すれば大体してさる累患無し (八) 死すれば上に戴くべき君なく下に治むべき臣なく亦四時の循環もなし (九) 大なる説 (一〇) 天地を以て春秋となし其の寿窮まりなし (一一) 南面して天下に王たるものゝ楽と雖も之に過ぎず (一二) 人の寿を司る冥官をして再び足下の形を生じ骨肉肌膚を作り足下の父母妻子及び村里の知識にかへさしめん (一三) 深く眉をひそめ額に皺をよせて迷惑さうにす

顏淵東之レ齊。孔子有二憂色一。子貢下レ席而問曰。小子敢問。回東之レ齊。夫子有二憂色一

顔淵東齊に之く。孔子憂色あり。子貢席を下つて問うて曰く、小子敢へて問ふ、回東齊に之く、夫子憂色あるは何ぞやと。孔子曰く、善いかな女の問や。昔は(二)管子言ふあり、丘甚だ之を善しとす。曰く、(三)褚の小なるものは、以て大を懐くべからず。(四)綆の短きものは、以て深きを汲むべからずと。夫れ是の若きものは、

莊子之レ楚。見ニ空髑髏一。髐然有レ形。撽以ニ馬捶一。因而問レ之曰。夫子貪レ生失レ理。而爲レ此乎。將子有ニ亡國之事。斧鉞之誅一。而爲レ此乎。將子有ニ不善之行一。愧レ遺ニ父母妻子之醜一。而爲レ此乎。將子。有ニ凍餒之患一。而爲レ此乎。將子之春秋。故及レ此乎。於レ是語卒。援ニ髑髏一枕而臥。夜半髑髏。見レ

莊子楚に之く。空髑髏(一)を見る。髐然(二)として形あり。撽つ(三)に馬捶を以てし、因つて之に問うて曰く、夫子(四)生を貪り理を失うて、此と爲れるか、將た子、亡國(五)の事、斧鉞の誅あつて、此と爲れるか。將た子、不善の行あり、父母妻子の醜を遺さんことを愧ぢて、此と爲れるか。將た子、凍餒の患あつて、此と爲れるか。將た子の春秋(六)、故より此に及べるかと。是に於て語卒り、髑髏を援いて枕として臥す。夜半に髑髏、夢に見えて曰く、子の談ずるは辯者に似たり、諸〻(七)子の言ふ所は、皆生人の累なり、死すれば則ち此れ無し。子は死の說を聞かんと欲するかと。莊子曰く然りと。髑髏曰く、(八)死は上に君なく、下に臣なく、亦四時の事なし、(九)從然として天地(一〇)を以て春秋と爲す、南面王(一二)の樂みと雖も、過ぐる能はざるなりと。莊子信ぜずして曰く、吾れ司命(一一)をして、子が形を復生し、子の骨肉肌膚を爲り、子の父母妻子、閭里の知識に反さしめん、子之を欲するかと。髑髏、深矉(一三)蹙頞して曰く、吾れ安くんぞ能く南面王の樂みを棄てゝ、復た人間の勞を爲さ

形變而有ㇾ生。今又變而之ㇾ死。是相與爲二春秋冬夏四時行一也。人且偃然寢二於巨室一。而我嗷嗷然隨而哭ㇾ之。自以爲。不ㇾ通二乎命一。故止也。

支離叔。與二滑介叔一。觀二於冥伯之丘。崑崙之虚。黃帝之所ㇾ休。俄而柳生二其左肘一。其意蹶蹶然惡ㇾ之。支離叔曰。子惡ㇾ之乎。滑介叔曰。亡。予何惡。生者假借也。假ㇾ之而生。生者塵垢也。死生爲二晝夜一。且吾與ㇾ子觀ㇾ化。而化及ㇾ我。我又何惡焉。

支離叔(一)、滑介叔(二)と、冥伯の丘、崑崙の虚(三)、黃帝の休せし所(四)に觀ぶ。俄にして柳(五)其左肘に生ず。其の意、蹶蹶然(六)として之を惡む。支離叔曰く、子之を惡むか。滑介叔曰く、亡し(七)、予何ぞ惡まん。生なるものは假借なり、之を假りて生ず。生ずるものは塵垢なり(八)。死生は晝夜たり(九)。且我子と化を觀て、化我に及ぶ、我又何ぞ惡まん(一〇)。

(一) 不具者 (二) 滑稽人 (三) 死生兩つながら設せる境 (四) 黃帝死して休止せる墟址 (五) 吾道ずるを以て瘤の生じたるをいふ一說に柳は瘤瘍の義にして其の肘に生ずるは將に死なんとする徵なりと (六) 心動く貌 (七) 惡まず (八) 人生其のものが旣に假借なるに瘤は更にこれを假りて生ずるものなれば塵垢に同じ (九) 死生は晝夜の循行するが如く自然の命數 (一〇) 我と足下と共に物化の理を悟るに今化我が身の上に及ぶとも又何ぞ之を惡むの理あらんや

莊子妻死。惠子弔レ之。莊子則方箕踞。鼓レ盆而歌。惠子曰。與レ人居。長レ子老レ身。死不レ哭。亦足矣。又鼓レ盆而歌。不二亦甚一乎。莊子曰不レ然。是其始死也。我獨何能無二槩然一。察二其始一而本無レ生。非二徒無一レ生也。而本無レ形。非二徒無一レ形也。而本無レ氣。雜二乎芒芴之間一。變而有レ氣。氣變而有レ形。

莊子の妻死す、惠子之を弔ふ。莊子則ち方に(一)箕踞して、盆を鼓して歌ふ。惠子曰く、(二)人と與に居て、子を長じ身を老し、死して哭せず、亦足れり、又盆を鼓して歌ふは、亦甚しからずやと。莊子曰く、然らず。是れ其の始め死するや、我れ獨り何ぞ能く槩然たること無からんや。(三)其の始めを察するに、本生なし、徒に生なきのみに非ずして、本形なし。徒に形なきのみに非ずして、本氣なし。(四)芒芴の間に雜はり、變じて氣あり。氣變じて形あり、形變じて生あり、今又變じて死に之く。(五)是れ相與に春秋冬夏四時の行を爲せるなり。(六)人且偃然として巨室に寢ぬ、而して我噭噭然として、隨つて之を哭せば、自ら以爲ふに、命に通ぜずと。故に止むなりと。

(一) 兩脚を投げ出して坐し盆をたゝいて歌ひ哀悼の趣無し (二) 足下の妻足下と同棲して子を養育し身老いて死す死して哭せざるにて十分なるに盆を叩いて歌ふは極端ならずや (三) 未だ始より生れざる前を察するに本生命なく又形なく加之氣といふものもなし (四) 混沌恍惚の間に雜はり變じて氣を生じ氣變じて形を生じ形變じて生命あり又變じて死にゆく (五) 生まれてより死するまでの過程は四時の來り去る如き自然の運行をなせるのみ (六) 人且安らかに天地の巨室たる死に寢ぬ然るに我やかましく之を哭せんは天命を知らざるものなり

樂也。果有樂無有哉。吾以無爲誠樂矣。又俗之所大苦也。故曰。至樂無樂。至譽無譽。天下是非。果未可定也。雖然。無爲可以定是非。至樂活身。唯無爲幾存。請嘗試言之。天無爲。以之淸。地無爲。以之寧。故兩無爲相合。萬物皆化。芒乎芴乎。而無從出乎。芴乎芒乎。而無有象乎。萬物職職。皆從無爲殖。故曰。天地無爲也。而無不爲也。人也孰能得無爲哉。

活かすと。唯〻無爲なれば存するに幾し。請ふ嘗試みに之を言はん。天は無爲、(七)之を以て淸く、地は無爲、之を以て寧し。故に兩の無爲相合して、萬物皆化す。(八)芒乎芴乎として、從つて出ること無きか。芴乎芒乎として、象有ること無きか、萬物職職として、皆無爲より殖す。故に曰く、天地は無爲なり。而して爲さざること無しと。(九)人や孰れか能く無爲を得んや。

(一) 世俗の人の爲す所と其の樂しとする所と其の樂しとする所のものが果して樂しきか樂しからざるかを知らず (二) 世間的の快樂に向つて萬人趨らず趨き向ふは諤々然として勢止むことを得ざるが如くにして之を樂しといへど吾は未だ之を樂しとせず、諤々然は必ずせんとする貌 (三) 然れども快樂其のものに卽して考ふれば亦樂しとせざるにもあらず (四) 吾は樂不樂を超越したる無爲清靜を以て眞に樂しとすれど無爲は世俗の大に苦しむ所のもの (五) 是非は之に爭うて定むる所なけれど無爲を以てすれば是非を定むべし (六) 至樂と身を活かすと惟々無爲なれば之を存するに近し (七) 天は自然無爲なるが故に純清、地は無爲なるが故に安寧、故に天地の無爲合して萬物皆化育す (八) 恍惚として原由する所無きが如く形象有ること無きが如くなれど萬物職々として皆無爲より蕃殖す、職々は蕃殖する貌 (九) 世俗の人たれか此の無爲を得るものぞ

不足活身。以爲不善矣。足以活人。故曰。忠諫不聽。蹲循勿爭。故夫子胥爭之以殘其形。不爭名亦不成。誠有善無有哉。今俗之所爲。與其所樂。吾又未知。樂之果樂邪。果不樂邪。吾觀夫俗之所樂。擧羣趣者。誙誙然如將不得已。而皆曰樂者。吾未之樂也。亦未之不

れば名も亦成らず。誠に善ありや有ること無きや。

(一) 烈士は身を忘れて節に徇ひ名古今に傳はりて天下に善とせらるゝも誅殺身に至りて身を活かすに足らず (二) 烈士の善は誠に善なりや不善なりやを知らず (三) 若し之を善となさば身を活かすを得べき筈なるに烈士は多く身を殺す (四) 之を不善となさば忠烈人を濟ふに足るは之を如何に解釋すべき (五) 君を忠諫して聽かれざる時は退き去りて爭ふことなかれ (六) 伍子胥呉王扶差を諫めて越王句踐を赦すなからんことを諍ひしが後に屬鏤の劒を賜はりて死す (七) 身を完うするために爭諫せざれば名も亦全からず

今、俗(一)の爲す所と、其の樂しむ所と、吾れ又未だ知らず、樂しむの果して樂しきか、果して樂しからざるやを。吾れ夫の俗の樂しむ所を觀るに、(二)羣を擧げて趣くもの、誙誙然として將に已むことを得ざらんとするが如くにして、皆樂しと曰ふもの、吾れ未だ之を樂しとせざるなり。(三)亦之を樂しまずんばあらざるなり。果して樂みありや、有ること無きや。(四)吾れ無爲を以て誠に樂しとす、又俗の大に苦しむ所なり。故に曰く、至樂は樂みなく、至譽は譽れなしと。天下の是非、果して未だ定むべからざるなり。然りと雖も、(五)無爲以て是非を定むべし。(六)至樂と身を

夫富者、苦身疾作、多積財、而不得盡用。其爲形也亦外矣。夫貴者、夜以繼日、思慮善否。其爲形也亦疏矣。人之生也、與憂俱生。壽者惛惛、久憂不死、何之苦也。其爲形也亦遠矣。

夫れ富む者は、身を苦しめて疾作し、多く財を積んで、盡く用ふることを得ず。(一)其の形の爲にするや亦外なり。(二)夫れ貴き者は、夜以て日に繼ぎ、善否を思慮す。其の形の爲にするや亦疏なり、(三)人の生ゝるや、憂と倶に生る。(四)壽き者は惛惛たり。(五)久しく憂へて死せず、何ぞ之れ苦しきや。其の形の爲にするや、亦遠し。(六)

(一) 富めるものは身を苦しめて忙しく勤む (二) 形體のためにすと云ふも却つて形體を苦しむ是形を外にするものゝみ (三) 高貴のものは日夜善惡を思慮して安んずる時なければ形體のためにすと云ふも却つて是形體を粗略にするものゝみ (四) 人は生るゝと同時に憂苦を生ず (五) 長壽のものは老耄して心昏く久しく憂へて死せず (六) 是の如くば形體のためにすることも亦疎遠ならん

烈士爲天下見善矣、未足以活身。吾未知善之誠善邪、誠不善邪。若以爲善矣。

(一)烈士天下の爲に善とせらるゝも、未だ以て身を活かすに足らず。(二)吾れ未だ知らず、善の誠に善なるや、誠に不善なるやを。(三)若し以て善と爲さば、身を活かすに足らず。(四)以て不善と爲さば、以て人を活かすに足れり。故に曰く、(五)忠諫聽かれずんば、(六)蹲循して爭ふ勿れと。故に夫の子胥之を爭うて以て其の形を殘ふ。(七)爭はざ

天下有二至樂一。無レ有哉。有下可二以活一レ身者上。無レ有哉。今奚爲奚據。奚避。奚處。奚就。奚去。奚樂。奚惡。夫天下之所レ尊者。富貴壽善也。所レ樂者身安。厚味美服好色音聲也。所レ下者。貧賤夭惡也。所レ苦者。身不レ得二安逸一。口不レ得二厚味一。形不レ得二美服一。目不レ得二好色一。耳不レ得二音聲一。若不レ得者。則大憂以懼。其爲レ形也。亦愚哉。

天下に至樂有りや、有ること無きや。(二)以て身を活かすべきもの有りや、有ること無きや。(三)今奚をか爲し、奚にか據り、奚をか避け、奚にか處り、奚にか就き、奚をか去り、奚を樂しみ、奚をか惡まん。(四)夫れ天下の尊ぶ所は富貴壽善なり、樂しむ所のものは、身安く、(五)厚味美服好色音聲なり。(六)下とする所のものは、貧賤夭惡なり。苦しむ所のものは、身安逸を得ず、口厚味を得ず、形美服を得ず、目好色を得ず、耳音聲を得ざるなり。若し得ずんば、則ち大に憂へ以て懼る。(七)其形の爲めにするや、亦愚なるかな。

(一) 此の篇自然に順つて私意を交へず死生變化を超越し哀樂を絶したる所に至樂あるを論ず (二) 至樂の以てわが身を活かすべきものありや否や (三) 爲據避處就去樂惡するものは爲す有りて至樂に非ず (四) 天下に尊ぶ所のものは富貴長壽 (五) 滋味 (六) 鄙しむ所のものは貧賤夭死 (七) 形骸の外にのみ勞役して性を養はざるは愚なるかな

魚出遊從容。是魚樂也。惠子曰。子非魚。安知魚之樂。莊子曰。子非我。安知我不知魚之樂。惠子曰。我非子。固不知子矣。子固非魚也。子之不知魚之樂。全矣。莊子曰。請循其本。子曰。女安知魚樂云者。既已知吾知之。而問我。我知之濠上也。

子曰く、（三）子は我に非ず、安んぞ我が魚の樂しみを知らざるを知らんと。惠子曰く、我は子に非ず。固より子を知らず。（四）子は固より魚に非ざるなり。子の魚の樂しきを知らざるや、全し。莊子曰く、（五）請ふ其の本に循へ。（六）子曰つて、女安んぞ魚の樂しきを知らんと云へるは、既に已に吾が之を知れるを知つて、我に問へるなり。（七）我之を濠上に知れるなりと。

（一）流を絶つ石　（二）はやが水面に遊びて從容自在　（三）足下は我に非ざるに我が魚の樂しきことを知らずとは何を以て知らるべき　（四）足下固より魚に非ざれば足下が魚の樂しきを知らざるは確實　（五）枝葉を去つて根本に反れ　（六）足下予に向つて汝何ぞ魚の樂しきを知るべきと云へるは既に予が知れるを知つて我に問へるなり全然知らずと思ひなば問ふことなし　（七）我濠上に逍遙娛樂するが故に水に入つて魚たらずとも之に推して魚の樂しむを知るを得べし即ち人情物理自ら相推すべきを云ふ

至樂

惠子相梁。莊子往見之。或謂惠子曰。莊子來。欲代子。於是惠子恐。搜於國中。三日三夜。莊子往見之曰。南方有鳥。其名鵷鶵。子知之乎。夫鵷鶵發於南海。而飛於北海。非梧桐不止。非練實不食。非醴泉不飲。於是鴟得腐鼠。鵷鶵過之。仰而視之曰。嚇。今子欲以子之梁國。而嚇我邪。

惠子梁に相たり。莊子往いて之を見る。或る人惠子に謂つて曰く、莊子來り、子に代つて相たらんと欲すと。是に於て惠子恐れて、國中を捜すこと、三日三夜。莊子往いて之を見て曰く、南方に鳥有り、其名は鵷鶵(一)、子之を知るか。夫の鵷鶵、南海を發して、北海に飛ぶ。梧桐に非ざれば止まらず、練實(二)に非ざれば食はず、醴泉(三)に非ざれば飲まず。是に於て鴟は腐鼠を得、鵷鶵之を過ぐるや、仰いで之を視て曰く、嚇(四)と。今は子は子の梁國(五)を以て、我を嚇せんと欲するやと。

(一) 鳳凰の雛　(二) 竹の實　(三) 味甘き泉　(四) 腐鼠を奪はれんことを恐れ聲を怒らすなり　(五) 梁國は腐鼠のみ惠子は鴟なり惠子は梁の相位を奪はれんことを恐るゝが故に莊子を嚇さんとするにや

莊子。與惠子遊於豪梁之上。莊子曰。儵

莊子、惠子と與に豪梁(一)の上に遊ぶ。莊子曰く、儵魚(二)出で遊びて從容たり。是れ魚の樂しむなりと。惠子曰く、子は魚に非ず、安んぞ魚の樂しきを知らんと。莊

之以辯。是直用管闚天。用錐指地也。不亦小乎。子往矣。且子獨不聞夫壽陵餘子之學行
於邯鄲與。未得國能、又失其故行矣。直匍匐而歸耳。今子不去。將忘子之故。失子之業。公
孫龍口呿而不合。舌舉而不下。乃逸而走。

莊子釣於濮水。楚王使大夫二人往先焉曰。願以竟內累矣。莊子持竿不顧曰。吾聞。楚有神龜。死已三千歲矣。王巾笥而藏之廟堂之上。此龜者。寧其死爲留骨而貴乎。寧其生。而曳尾於塗中乎。二大夫曰。寧生而曳尾塗中。莊子曰往矣。吾將曳尾於塗中。

莊子濮水に釣す。楚王、(一)大夫二人をして往いて先んぜしめて曰く、願はくは(二)竟內を以て累はさん。莊子竿を持して顧みずして曰く、吾れ聞く、楚に神龜あり、死して已に三千歲。王は(三)巾笥して之を廟堂の上に藏むと。(四)此の龜は、寧ろ其れ死して骨を留むるを爲して貴からんか、寧ろ其れ生きて、尾を塗中に曳かんかと。二大夫曰く、寧ろ生きて尾を塗中に曳かんと。莊子曰く往け、(五)吾れ將に尾を塗中に曳かんとすと。

(一) 楚の威王大夫二人を遣して先づ往き之を待たしむ (二) 國政を委任いたしたし (三) 布に包み函に入れ宗廟に藏す (四) 此の龜は寧ろ死して骨を後世に留めて貴くなるを欲せんか寧ろ生きて尾を泥中に曳くを欲せんか (五) 貴顯にして勞せんより貧賤にして自適せん

益。湯之時八年七旱。而崖不二爲加一ㇾ損。夫不下以二頃久一推移上。不下以二多少一進退上者。此亦東海之大樂也。於ㇾ是埳井之鼃聞ㇾ之。適適然驚。規規然自失也。且夫知不ㇾ知二是非之竟一。而猶欲ㇾ觀二於莊子之言一。是猶ㇾ使二蚊負ㇾ山。商蚷馳一ㇾ河也。必不ㇾ勝ㇾ任矣。且夫知不ㇾ知ㇾ論二極妙之言一。而自二適一時之利一者。是非二埳井之鼃一與。且彼方跐二黃泉一而登二大皇一。無ㇾ南無ㇾ北。奭然四解。淪二於不測一。無ㇾ東無ㇾ西。始二於玄冥一。反二於大通一。子乃規規然。而求ㇾ之以ㇾ察。索ㇾ

諸氏百家の知を困學し衆人の辯説を窮め學ぶ（五）此の上なき達人（六）茫然として自失し之を奇異なりとなす（七）口を開いて合ふこと能はず（八）くづれ井戸の中の蛙（九）東海に棲める大鼈（一〇）上つて井桁の上に飛びまはり入れば井戸がはのくづれに休息す（一一）水に入れば水儘、腋の下につきて頤を水面に支ふ（一二）泥を蹴るときには泥中に足を没しクルブシを没す（一三）水中の赤き虫と小き蟹（一四）オタマジャクシ（一五）一谷の水即ち一井の水を獨占してくづれ井戸に踏跨がる樂は此上もなし（一六）鼈の左足未だ入りきらざるに右膝もはや支へて入れず（一七）海の廣大なるを告ぐ（一八）千里の遠きも海の大を譬ふるにたらず（一九）夏の禹王の時十年間に九度の洪水あり（二〇）海は大旱のために水減りしことなし（二一）時間の長短のために推移變化せず物量の多少を以て増減せず（二二）懼るゝ貌（二三）驚く貌（二四）其の未だ是非の境を窮め知らずして莊子の言を悟らんと欲するは猶蚊に山を負はせヤスデに河を馳せしむるが如く不可能のこと（二五）其の知至極精妙の言を論ずることを知らずして一時の利を向び自ら安ず（二六）莊子は至深至高にして下は九地の下なる黃泉を踏みて上は九天の上に上る（二七）南となく北となく釋然して四方に解け散りて測り知れざる瞑漠に歸す（二八）東もなく西もなく混沌冥涬の中より始まりて至理の大道に反り歸す（二九）種々に工夫して莊子の道を求むるに小知と辯説とを以てす（三〇）是正に管の穴より天をのぞき錐を以て地を突きさす知く小さき考なり（三一）燕の都壽陵の未丁年の若者が歩きぶりを趙の都邯鄲にならふ（三二）趙國の能を學び得ざるに其の故國の歩を忘れ兩つながら得る能はず（三三）口開きて合はず舌吊しあがりて下らず呆然自失す

則沒足滅跗。還虷蟹與科斗莫吾能若也。且夫擅一壑之水。而跨跱埳井之樂。此亦至矣。夫子奚不時來入觀乎。東海之鼈左足未入。而右膝已縶矣。於是逡巡而却。告之海曰。夫千里之遠。不足以擧其大。千仞之高。不足以極其深。禹之時十年九潦。而水弗爲加

是れ猶ほ蚊に山を負はせ、商蚷に河を馳せしむるがごときなり。必ず任に勝へず。且つ夫れ知は極妙(二五)の言を論ずることを知らずして、一時の利に自適するものは、是れ埳井の鼃に非ずや。(二六)且彼は方に黃泉を趾みて大皇に登る。(二七)南なく北なく、奭然四解して、不測に淪む。(二八)東なく西なく、玄冥に始まりて、大通に反る。子乃ち規規然(二九)として、之を求むるに察を以てし、之を索むるに辯を以てす。是れ直(三〇)に管を用ひて天を闚ひ、錐を用ひて地を指すなり。亦小ならずや。子往け、且子、獨り夫の壽陵(三一)の餘子の、行を邯鄲に學びしを聞かずや。未だ國能(三二)を得ず、又其の故行を失ひ、直に匍匐して歸るのみ。今子去らずんば、將に子の故を忘れ、子の業を失はんとすと。公孫龍、口呿いて(三三)合はず、舌擧つて下らず。乃ち逸して走る。

(一) 趙の辯士 (二) 魏の公子、道德を懷抱して風塵を厭ひし人 (三) 同と異とを合せ一にし堅と白とを分ちて二にし然らざるを然りとし可ならざるを可とし衆口を弄す、堅白を離つとは目の石を視るや其の白きを見て堅きを見ず手の石に觸るゝや其の堅きを知りて其の白きを知らず故に堅と白とは析して一にす可からずといふ說をさす (四)

衆口之辯。吾自以爲至達已。今吾聞莊子之言。汒焉異之。不知。論之不及與。知之弗若與。今吾無所開吾喙。敢問其方。公子牟。隱几大息。仰天而笑曰。子獨不聞夫埳井之鼃乎。謂東海之鼈曰。吾樂與。吾跳梁乎井幹之上。入休乎缺甃之崖。赴水則接腋持頤。蹶泥

大息し、天を仰いで笑つて曰く、子獨り夫の埳井の鼃を聞かざるか。東海の鼈に謂つて曰く、吾れ樂しいかな。吾れ井幹の上に跳梁し、入れば缺甃の崖に休ふ。水に赴けば則ち腋を接へ頤を持し、泥を蹶れば則ち足を沒し跗を滅す。虷蟹と科斗とを還りみるに、吾に能く若くこと無きなり。且夫れ一壑の水を擅にして、而して埳井に跨跱するの樂、此れ亦至れり。夫子奚ぞ時に來り入つて觀ざると。東海の鼈、左足未だ入らずして、右膝已に縶す。是に於て逡巡して却き、之に海を告げて曰く、夫れ千里の遠きも、以て其の大を擧ぐるに足らず。千仞の高きも、以て其の深を極むるに足らず。禹の時十年に九潦せしも、而かも水爲めに益すことを加へず。湯の時八年に七旱せしも、而かも崖爲めに損することを加へず。夫れ頃久の爲めに推移せず、多少を以て進退せざるものは、此れ亦東海の大樂なりと。是に於て埳井の鼃之を聞き、適適然として驚き、規規然として自失せり。且つ夫れ知は是非の竟を知らずして、猶ほ莊子の言を觀んと欲するは、

行不ㇾ避㆓蛟龍㆒者。漁父之勇也。陸行不ㇾ避㆓兕虎㆒者。獵夫之勇也。白刃交㆓於前㆒。視ㇾ死若ㇾ生者。烈士之勇也。知㆓窮之有ㇾ命。知㆓通之有ㇾ時。臨㆓大難㆒而不ㇾ懼者。聖人之勇也。由處矣。吾命有ㇾ所ㇾ制矣。無㆓幾何。將ㇾ甲者進辭曰。以㆓爲陽虎㆒也。故圍ㇾ之。今非也。請辭而退。

と。

(一) 衞國の邑 (二) 宋人孔子を包圍すること數匝なりしかど孔子絃歌を輟してやまず (三) 困窮を忌み厭ふこと久し然るに窮するを免れざるは天命なり (四) 榮達 (五) 是天下の民悉く知あるに非ず時勢の然らめしなり (六) 水行して蛟龍の如き猛虫に抗爭するは漁夫の勇氣 (七) 野牛や虎の如き猛獸 (八) 困窮するは天命により榮達するは時によるものなるを知り大難に遭遇してもおそれざるものは聖人の勇 (九) 子路の名 (一〇) 吾が天命は天の制する所人之を如何せんや (一一) いかほどもなくして甲兵を率ゐる將校來り謝して曰く陽虎と云ふ惡人と人違をせし故に孔子を圍みたるが今其のまちがひなるを知れり何とぞ辭して去らんと

公孫龍問㆓於魏牟㆒曰。龍少學㆓先王之道㆒。長而明㆓仁義之行㆒。合㆓同異㆒。離㆓堅白㆒。然㆓不然㆒。可㆓不可㆒。困㆓百家之知㆒。窮㆓

(一)公孫龍、(二)魏牟に問うて曰く、龍少うして先王の道を學び、長じて仁義の行を明かにし、(三)同異を合せ、堅白を離ち、不然を然とし、不可を可とす。(四)百家の知に困しみ、衆口の辯を窮む。吾れ自ら以爲へらく(五)至達のみと。今吾れ莊子の言を聞く、(六)汒焉として之を異しむ。知らず、論の及ばざるか。知の若かざるか、今吾れ吾(七)喙を開く所なし。敢へて其の方を問ふと。公子牟、机に隱つて

似無レ有何也。風曰然。予蓬蓬然起二於北海一。而入二於南海一也。然而指レ我則勝レ我。鰌レ我亦勝レ我。雖レ然。夫折二大木一蜚二大屋一者。唯我能也。故以二衆小不一レ勝。爲二大勝一也。爲二大勝一者。唯聖人能レ之。

孔子遊二於匡一。宋人圍レ之數匝。而弦歌不レ輟。子路入見曰。何夫子之娯也。孔子曰。來吾語レ女。我諱レ窮久矣。而不レ免命也。求レ通久矣。而不レ得。時也。當二堯舜一而天下無二窮人一。非二知得一也。當二桀紂一而天下無二通人一。非二知失一也。時勢適然。夫水

孔子匡(一)に遊ぶ。宋人(二)之を圍むこと數匝なれども、而かも弦歌して輟まず。子路入つて見えて曰く、何ぞ夫子の娯しむやと。孔子曰く、來れ吾れ女に語げん。我れ(三)窮を諱むや久し、而かも免れざるは命なり。(四)通を求むるや久し、而かも得ざるは時なり。堯舜に當つて、天下に窮人なし、(五)知の得たるに非ざるなり。桀紂に當つて、天下に通人なし、知の失に非ざるなり。時勢適に然りたればなり。夫れ(六)水行蛟龍を避けざるものは、漁父の勇なり。(七)陸行兕虎を避けざるものは、獵夫の勇なり。白刃前に交り、死を視ること生の若きものは、烈士の勇なり。(八)窮の命あるを知り、通の時あるを知り、大難に臨めども懼れざるものは、聖人の勇なり。(九)由處れ、(一〇)吾が命制する所ありと。(一一)幾何も無くして、甲を將る者進み辭して曰く、陽虎と以爲へり、故に之を圍めり。今非なり。請ふ辭して退かん

予噴則大者如珠。小者如霧。雜而下者不可勝數也。今予動吾天機而不知其所以然。蚿謂蛇曰。吾以衆足行而不及子之無足何也。蛇曰。夫天機之所動。何可易邪。吾安用足哉。蛇謂風曰。予動吾脊脅而行。則有似也。今子蓬蓬然起於北海。蓬蓬然入於南海。而

何ぞやと。蛇曰く、夫れ天機の動く所、何ぞ易ふべけんや。吾れ安んぞ足を用ひんやと。蛇は風に謂つて曰く、予吾が脊脅を動かして行くは、則ち似ることあるなり。今子蓬蓬然として北海に起り、蓬蓬然として南海に入りて、似ること有る無きは何ぞやと。風曰く然り、予蓬蓬然として北海に起つて、南海に入るなり。然り而して我を指せば則ち我に勝ち、我を鰌むも亦我に勝つ、然りと雖も、夫の大木を折り大屋を蜚ばすものは、惟我れ能くするなり。故に衆小に勝たざるを以て、大勝を爲すなり、大勝を爲すものは、惟ゝ聖人之を能くすと。

（一）東海沂蒙の山中に棲む一足獸は蚿の多足なるを羨む。蚿は百足虫（二）百足蟲は蛇の足無くして行くを羨む（三）蛇は風の形無くして行くを羨む（四）風は動いて行くに目は動かずして見るが故に羨む（五）目は形ありて知り心は形無くして知るが故に羨む（六）吾一足にて飛びつゝ行くに足下は百足を有すれども吾に及ばず（七）唾はくときは大小の唾珠の如く霧の如く霏々として地に降る是爲す所あつて然るにあらで自然の作用による（八）自然の機巧によつて足を動かせども如何にして動くかを知らず（九）自然の機巧が働くものにして之を變易すべからず（一〇）脊骨とあばらとを動かして行くは未だ形似によるを免かれず（一一）風の吹く貌（一二）風動くに形似なきは何故か（一三）指を以て風を指すも之に勝ち足を以て風を蹈むも之に勝つ是風は形似なきが故に是の如く弱て（一四）多くの小事には勝たねど大勝を得るとなり

謂レ人。北海若曰。牛馬四足。是謂レ天。落ニ馬首一。穿ニ牛鼻一。是謂レ人。故曰。無下以レ人滅上レ天。無下以レ故滅上レ命。無下以レ得殉上レ名。謹守而勿レ失。是謂レ反ニ其眞一。

夔憐レ蚿。蚿憐レ蛇。蛇憐レ風。風憐レ目。目憐レ心。夔謂レ蚿曰。吾以ニ一足一跉踔而行。予無レ如矣。今子之使ニ萬足一。獨奈何。蚿曰。不レ然。子不レ見ニ夫唾者一

天と謂ひ、(二)馬首を落ひ、牛鼻を穿つ、是れを人と謂ふ。故に曰く、(三)人を以て天を滅ぼすこと無かれ、(四)故を以て命を滅ぼすこと無かれ、(五)得を以て名に殉ふこと無かれ、(六)謹守して失ふこと勿れ、是れを其の眞に反ると謂ふと。

(一)牛馬に四足あるは自然の賦なれば之を天といふ　(二)馬首に絡をまとひ牛の鼻を穿つは人爲なれば之を人といふ　(三)人爲を以て天眞の自然を滅ぼすことなかれ　(四)有心故造を以て天命の無心自造を滅ぼすことなかれ　(五)名のために德を失ふことなかれ　(六)謹み守つて此の義を失ふことなかれ是を天眞の自然に反るといふ

(一)夔は蚿を憐み、(二)蚿は蛇を憐み、(三)蛇は風を憐み、(四)風は目を憐み、(五)目は心を憐む。夔は蚿に謂つて曰く、(六)吾れ一足を以て跉踔して行くも、予に如くこと無し。今子の萬足を使ふこと獨り奈何んと。蚿曰く、然らず。子は夫の唾はくものを見ざるか。噴けば則ち大なるもの珠の如く、小なるもの霧の如し。(七)雜つて下るもの勝げて數ふべからざるなり。(八)今予吾が天機を動かして、其の然る所以を知らずと。蚿は蛇に謂つて曰く、吾れ衆足を以て行けども、而かも子の足無きに及ばざるは

道者必達ニ於理一。達ニ於理一者必明ニ於權一。明ニ於權一者。不三以レ物害ニ己。至德者。火弗レ能レ熱。水弗レ能レ溺。寒暑弗レ能レ害。禽獸弗レ能レ賊。非レ謂ニ其薄一之也。言下察ニ乎安危一。寧ニ於禍福一。謹ニ於去就一。莫上レ之能害上也。故曰。天在レ內。人在レ外。德在ニ乎天一。知ニ天人之行一。本ニ乎天一。位ニ乎得一。蹢躅而屈伸。反レ要而語レ極。

己を害せず。至德のものは、火も熱すること能はず、水も溺らすこと能はず、寒暑害すること能はず、禽獸賊ふこと能はずとは、（三）其の之に薄まると謂ふには非ざるなり。（四）安危を察し、禍福に寧んじ、去就を謹しみ、之れを能く害すること莫きを言ふなり。故に曰く、（五）天は內に在り、人は外に在りと。（六）德、天に在れば、天人の行を知る。（七）天に本づき、德に位すれば、蹢躅として屈伸するも、要に反つて極を語ると。

（一）已に自然の化に任せば道を與びて之に順ふを要せず（二）應變無變の道に明（三）物に接近交渉するも害を受けずといふに非ず（四）安危の至らざる前に其の機を察し禍福に安じ處り去就の際を愼むが故に物之を害せず（五）天然無爲は內面的のもの人工の作爲は外面的のもの（六）其の無爲に合して天理にかなへば內外共に得て天人の行を知るを得（七）天理にもとづき德に住するときは或は進め或は退き或は屈み或は伸び物に應じて變ずるも常を失はずして道を守る

曰何謂天。何

曰く、何をか天と謂ひ、何をか人と謂ふと。北海若曰く、（一）牛馬四足、是れを

四方之無レ窮。其無レ所二畛域一。兼二懷萬物一。其孰承翼。是謂二無方一。萬物一齊。孰短孰長。道無二終始一。物有二死生一。不レ恃二其成一。一虛一滿。不レ位二乎其形一。年不レ可レ擧。時不レ可レ止。消息盈虛。終則有レ始。是所下以語二大義之方一。論中萬物之理上也。物之生也。若レ驟若レ馳。無二動而不レ變。無二時而不レ移。何爲乎。何不レ爲乎。夫固將二自化一。

と無し。何をか爲さんや、何をか爲さゞらんや、夫れ固より將に自ら化せんとすと。(一六)

(一) 辭退受納進趨退舍卽ち進退行藏 (二) 貴賤常なし故に之を反覆といふ (三) 汝の心志に拘執して虛無の大道に大にそむくことなかれ (四) 代る代る施して滯らざるをいふ (五) 汝の行を一に固執して自然を傷り爲に道に背馳することなかれ (六) おごそかにして國に君主のある如く德に偏私無し (七) ゆるやかにして祭に社神のある如く福を授くるに私無し (八) 廣く行きわたりて四方の遼遠窮まり無き如く境の隔つるものなし (九) 萬物を廣く納むれば何者をか特に承接扶翼せんや (一〇) 萬物は凡て一樣なれば何者を劣れりとし何者を優れりとなさん (一一) 死生常なくして恃みがたし (一二) 一度は缺け一度は滿ち常住の定形無し (一三) 年は追はんとするも去りて追ふべからず時は止めんとするも流れて窮まらず (一四) 盛衰消長して變化窮まらず終れば又始まる (一五) 大道の方を語り萬物の理を論ずるものなり (一六) 萬物は變じてきはまることなし此の大化の中にありて何をか爲し何をか爲さゞる爲すも爲さゞるも皆物自ら爲す所のもの故に固より其の自然の化に順ふまでなり

河伯曰。然則何貴二於道一邪。北海若曰。知レ

河伯曰く、然らば(一)則ち何ぞ道を貴ばんやと。北海若曰く、道を知るものは必ず理に達す、理に達するものは必ず權(二)に明かなり、權に明なるものは、物を以て

夫。當ニ其ノ時ニ順ニ其ノ俗ニ者。謂ニ之義之徒。默默乎河伯。女惡知ニ貴賤之門。小大之家一

河伯曰。然則我何爲乎。何不レ爲乎。吾辭受。趣舍。吾終奈何。北海若曰。以レ道觀レ之。何貴何賤。是謂ニ反衍一。無下拘ニ而志一。與レ道大蹇上。何少何多。是謂ニ謝施一。無レ一ニ而行一。與レ道參差。嚴乎若ニ國之有レ君。其無ニ私德一。繇繇乎若ニ祭之有レ社。其無ニ私福一。泛泛乎其若ニ

河伯曰く、然らば則ち我れ何をか爲さん、何をか爲さざらん。吾が辭受趣舍(一)、吾は終に奈何せんと。北海若曰く、道を以て之を觀れば、何をか貴び何をか賤しまん。是を反衍(二)と謂ふ。而の志に拘りて、道と大蹇(三)たる無かれ。何をか少とし何をか多とせん。是を謝施(四)と謂ふ。而の行を一にして、道と參差(五)する無かれ。嚴乎(六)として國に君あるが若く、其れ私德無し。繇繇乎(七)として祭の社あるが若く、其れ私福無し。泛泛乎(八)として其れ四方の窮り無きが若く、其れ畛域する所無し。萬物を兼ね懷く。其れ孰れをか承翼(九)せん。是を無方と謂ふ。(一〇)萬物一齊、孰れを短とし孰れを長とせん。道は終始無し。物は死生あり、(一一)其の成るを恃まず。一虛一滿(一二)して、其の形に位せず。年は擧ぐ(一三)べからず、時は止むべからず、消息盈虛(一四)して終れば則ち始有り。是れ大義(一五)の方を語り、萬物の理を論ずる所以なり。物の生や、驟するが若く馳するが若し。動くとして變ぜざること無く、時として移らざるこ

狌一。言レ殊レ技也。
鴟鵂夜撮レ蚤。
察二毫末一。晝出
瞋レ目而不レ見二
丘山一。言レ殊レ性
也。故曰。蓋師レ
是而無レ非。師レ
治而無レ亂乎。
是未レ明二天地
之理。萬物之
情一者也。是猶
師レ天而無レ地。
師レ陰而無レ陽。
其不レ可レ行明
矣。然且語而
不レ舍。非レ愚則
誣也。帝王殊レ
禪。三代殊レ繼。
差二其時一。逆二其
俗一者。謂二之簒

舍てざるは、愚に非ざれば則ち誣なり。（一〇）帝皇は禪を殊にし、三代（一一）繼を殊にす。（一二）其の時に差ひ、其の俗に逆ふもの、之を簒夫と謂ふ。其の時に當り、其の俗に順ふもの、之を義の徒と謂ふ。默默たれよや河伯、（一三）女惡んぞ貴賤の門、小大の家を知らんと。

（一）堯は位を舜に舜は位を禹に讓りて帝たれども燕王噲は位を其の相子之に讓りて國亂る（二）殷湯は夏を伐ち周武は殷を伐つて王たれども楚の白公勝は楚に反して殺さる（三）國を爭ひ國を讓るは禮に於て大に異なり且堯と夏桀は行に於て大に異なりと雖も時によりて或は貴或は賤以て一定すべきに非ず（四）城を衝き破る戰車を云ふよく城を破れども城の穴を塞ぐ能はざるは器殊にして用從つて殊なればなり（五）駿馬は一日に千里を馳するも鼠を捕ふること野猫に及ばざるは技能を殊にすればなり（六）梟は夜蚤をとりて毫末をも察する視力を有するに晝出づれば目を見はるも丘山の大を見る能はざるは其の性の殊なるによる（七）是を師として之にならへば非無く治を師として之にならへば亂無し。此の言是非治亂は相因るものなることを知らずして是と治とを尚ぶをいふ（八）是と治とを師とするは天と陰とを師とし地と陽とを忘れたるが如し（九）然るに尚是と治とを語つて止めざるは愚なり然らざればコジツクるなり（一〇）三皇五帝或は宗族相承け或は他姓に相讓る（一一）夏殷周三代或は世襲し或は簒奪す（一二）其の時代に反し其の時俗に逆ひたるものは之を簒奪の天といふ（一三）小大は主なく貴賤は門無し大も小たることあり賤も貴たることあり臧否時により顚倒して定まりなし汝何ぞ貴賤大小の分を知らん

莫不然。因其所非而非之。則萬物莫不非。知堯桀之自然而相非。則趣操覩矣。

堯と夏桀と自ら是として他を非とする理を知れば是非の據るところを見る、操は操りもつて據る意

昔者堯舜讓而帝。之噲讓而絕。湯武爭而王。白公爭而滅。由此觀之。爭讓之禮。堯桀之行。貴賤有時。未可以爲常也。梁麗可以衝城。而不可以窒穴。言殊器也。騏驥驊騮。一日而馳千里。捕鼠不如狸狌

昔者堯舜讓つて帝たり、之噲讓つて絕ゆ。(二)湯武爭うて王たり、白公爭うて滅ぶ。此に由つて之を觀れば、(三)爭讓の禮、堯桀の行、貴賤時あり、未だ以て常と爲すべからざるなり。(四)梁麗以て城を衝く可くして、以て穴を窒ぐべからずとは、器を殊にするを言ふなり。(五)騏驥驊騮、一日にして千里を馳するも、鼠を捕ふることは狸狌に如かずとは、技を殊にするを言ふなり。(六)鴟鵂は夜蚤を撮りて、毫末を察すれども、晝出づれば目を瞋らすも丘山を見ずとは、性を殊にするを言ふなり。故に曰く、(七)蓋し是を師とすれば非なく、治を師とすれば亂無からんかと。是れ未だ天地の理、萬物の情を明にせざる者なり。是れ(八)猶ほ天を師とすれば地なく、陰を師とすれば陽無きがごとし。其の行ふべからざるや明けし。(九)然れども且語つて

萬物莫レ不レ大。因二其所一レ小而小レ之。則萬物莫レ不レ小。知三天地之爲二稊米一也。知三毫末之爲二丘山一也。則差數覩矣。以レ功觀レ之。因二其所一レ有而有レ之。則萬物莫レ不レ有。因二其所一レ無而無レ之。則萬物莫レ不レ無。知二東西之相反。而不一レ可二以相無一。則功分定矣。以レ趣觀レ之。因二其所一レ然而然レ之。則萬物

ること莫し。（一二）東西の相反して、以て相無かるべからざるを知れば、則ち功の分定まる。（一三）趣を以て之を觀れば、其の然りとする所に因つて之を然りとすれば、則ち萬物然らざること莫く、其の非とする所に因つて之を非とすれば、則ち萬物非ならざること莫し。（一四）堯桀の自ら然りとして相非とするを知れば、則ち趣の操覩ゆ。

（一）貴賤の分大小の別は若しくは物性の外にありとせんか若しくは物性の外趣ありとせんか如何　（二）物に還つて之を見れば物各自ら貴しとして他を賤しむ　（三）世俗に還つて之を見れば貴賤は己にあらずして對者にあり即ち貴に對すれば己賤、賤に對すれば己貴たり　（四）差別觀に還つて見る　（五）自ら足れるを大とする見地を以て之を大とすれば萬物皆大にして稊米毫末も猶大とすべし　（六）餘り無きを以て之を小とすれば萬物小ならざるはなく天地丘山も亦小なり　（七）大となる所に因つて之を大とすれば天地も尙稊米に比すべく天地より大なるもの何ぞ無からん　（八）小とする所に因つて之を小とすれば毫末も尙丘山に比すべく毫末より小なるもの何ぞ無からん　（九）差別に於ける理法を見る　（一〇）有無は物の功なり功の上よりして見るに物有りとする肯定的の見地に立つて之を有とすれば萬物凡て有り　（一一）否定的に見れば萬物凡て無し　（一二）東と西とは意味を異にすれども東無くば西もなく西なくば東もなく相對立するものなることを知れば有無の分限定まるをおぼゆ　（一三）是非は物の趣なり是非の上よりして見るに是なりとする見地に立つて之を是なりとすれば萬物是ならざることなく之を非とする場合も亦然り

不ㇾ賤ニ貪汚ー。世之爵祿。不ㇾ足ニ以爲ㇾ勸。戮恥不ㇾ足ニ以爲ㇾ辱。知ニ是非之不ㇾ可ㇾ爲ㇾ分。細大之不ㇾ可ㇾ爲ㇾ倪。聞曰。道人不ㇾ聞。至德不ㇾ得。大人無ㇾ己。約ㇾ分之至也。

たる人は世に求めず德に富める人は己に足りて外に得ることなく大人は彼我を一にして己なし　（四）諸の差別を去るの意味

河伯曰。若物之外。若物之內。惡至而倪ニ貴賤ー。惡至而倪ニ小大ー。北海若曰。以ㇾ道觀ㇾ之。物無ニ貴賤ー。以ㇾ物觀ㇾ之。自貴而相賤。以ㇾ俗觀ㇾ之。貴賤不ㇾ在ㇾ己。以ㇾ差觀ㇾ之。因ニ其所ㇾ大而大ㇾ之。則

河伯曰く、（一）若しくは物の外、若しくは物の内、惡んか至つて貴賤を倪する、惡んか至つて小大を倪すると。北海若曰く、道を以て之を觀れば、物に貴賤なし。（二）物を以て之を觀れば、自ら貴として相賤しむ。（三）俗を以て之を觀れば、貴賤己れに在らず。（四）差を以て之を觀れば、（五）其の大とする所に因つて之を大とすれば、則ち萬物大ならざること莫く、（六）其の小とする所に因つて之を小とすれば、則ち萬物小ならざること莫し。（七）天地の稊米たるを知り、（八）毫末の丘山たるを知れば、則ち差の數（九）覩ゆ。（一〇）功を以て之を觀れば、其の有る所に因つて之を有りとすれば、則ち萬物有らざること莫く、（一一）其の無き所に因つて之を無しとすれば、則ち萬物無からざ

之所レ不レ能レ窮也。可二以レ言論一者。物之粗也。可二以レ意致一者。物之精也。言之所レ不レ能レ論。意之所レ不レ能二察致一者。不レ期二精粗一焉。是故大人之行。不レ出二乎害一レ人。不レ多二仁恩一。動不レ爲レ利。不レ賤二門隷一。貨財弗レ爭。不レ多二辭讓一。事焉不レ借レ人。不レ多レ食二乎力一。不レ賤二貪汙一。行殊二乎俗一。不レ多二辟異一。爲在レ從レ衆。

異を多とせず。(一六)爲すこと衆に從ふにありて、佞諂を賤しとせず。(一七)世の爵祿、以て勸むることを爲すに足らず。戮恥以て辱と爲すに足らず。(一八)是非の分を爲すべからず、細大の倪を爲すべからざるを知ればなり。(一九)聞くに曰く、道人は聞かず、至德は得ず、大人は己なしと。(二〇)分を約するの至りなりと。

(一) 此の上もなく純精なるものは形なく此上もなく大なるものは之を圍むを得ず形あれば已に精ならず圍むを得ば已に大ならず (二) 是信賞のことか (三) 細小なるものより廣大なるものを視れば視きはめがたきが故に圍むべからずと云ふ (四) 廣大なるものより細小なるものを視れば詳かならぬ所あるが故に形無しと云ふ (五) 精は細の又細なるもの垺は大の又遂に大なるもの、垺は廣大 (六) 大小の見る所カッテを異にし勢を同じくせざればなり (七) 精と云ひ粗と云ふは有形の上について云ふ (八) 數理 (九) 言語を以て論じ得べきものは粗なる有形物にして意を以て思量し得べきものは精なる無形物 (一〇) 精粗を超越す (一一) 大人の行は無心にして天行の運るが如く人を害することなくして恩を施せども恩を貴らず (一二) 私のために動かずして守門の僕隷を賤しまず (一三) 足るを知り分を守りて財貨を爭ふことあらねど敢へて辭讓するを高しとせずして得るに任ず (一四) 事あるに當り人の力を借ることあらば敢へて自らの力に食むことを高しとせず貪り汚るゝことを賤とせず (一五) 行は世俗と異なれども奇僻の行ひをなすことを高しとせず (一六) 事を爲すに異を立てず衆に從ひて迎合諂諛を賤とせず (一七) 世の官位俸祿は大人の心を動かし勸むるに足らず世の侮辱は大人にとつては以て恥辱とするに足らず (一八) 大人は是非は分つべきものに非ず細大は區別すべきものにあらざるを知れば凡て是の如し (一九) 嘗て聞ける所によれば道を得

其至大之域。是故迷亂而不能自得也。由此觀之、又何以知毫末之足以定至細之倪、又何以知天地之足以窮至大之域。

河伯曰、世之議者皆曰、至精無形、至大不可圍。是信情乎。北海若曰、夫自細視大者不盡、自大視細者不明。夫精小之微也、垺大之殷也。故異便。此勢之有也。夫精粗者、期於有形者也。無形者、數之所不能分也。不可圍者、數

河伯曰く、世の議するもの皆曰ふ。至精は形なく、至大は圍むべからずと。是れ信情か。北海若曰く、夫れ細より大を視るものは盡くさず、大より細を視るものは明ならず。夫れ精は小の微なり、垺は大の殷なり。故に便を異にす、此れ勢の有なり。夫れ精粗なるものは、形あるに期するものなり。形無きものは、數の分つこと能はざる所なり。圍むべからざるものは、數の窮むること能はざる所なり。言を以て論ずべきものは、物の粗なり、意を以て致すべきものは、物の精なり。言の論ずる能はざる所、意の察致する能はざる所のものは、精粗を期せず。是の故に大人の行、人を害するに出でずして、仁恩を多とせず。動いて利の爲にせずして、門隸を賤しとせず。貨財爭はざれども、辭讓を多とせず。事かりて人に借らざれども、力に食ふを多とせず、貪汙を賤しとせず。行は俗に殊なれども、辟

於遠近。故小而不寡。大而不多。知量無窮。證曏今故。故遙而不悶。掇而不跂。知時無止。察乎盈虛。故得而不喜。失而不憂。知分之無常也。明乎坦塗。故生而不說。死而不禍。知終始之不可故也。計人之所知。不若其所不知。其生之時。不若未生之時。以其至小。求窮

す。故に得れども喜ばず。失へども憂へざるは、分の常なきを知ればなり。坦塗（七）を明にす。故に生るれども説ばず、死すれども禍とせざるは、終始の故とすべからざるを知ればなり。（八）人の知る所を計るに、其の知らざる所に若かず。其の生の時は、未だ生ぜざるの時に若かず。（九）其の至小を以て其の至大の域を窮めんことを求む。（一〇）是の故に迷亂して自得すること能はざるなり。此に由つて之を觀れば、又何を以てか毫末（一一）の以て至細の倪を定むるに足ることを知らん、又何を以てか天地の以て至大（一二）の域を窮むるに足ることを知らん。

(一) 然らば天地の大を大とし毛筋の小を小とすればそれにてよろしからんか (二) 物の量は大小窮まりなく時は移つて止むことなく得失常なく終始は循環してはてなし (三) 小は小にして足り大は大にして足る故に小なれども寡しとせず大なれども多しとせず (四) 時の今古を證明して今は古より來り未來は今の追ふ所のものなるを知る (五) 時の必ず來るを知れば遠しと雖も悶えず近しと雖も足を爪立て、強ひてなさゞるは時の無限なるを知れる故なり (六) 大知は天道盈衰の理を知る (七) 大知は坦然平明の大道を明にする故に生れてもよろこばず死しても禍とせず (八) 人の知ることは有限にして知らざることは無限なり (九) 生時限りありて生ぜざる時には限り無し (一〇) 其の至小なる知る所と生の時とを以て至大なる知らざる所と生ぜざる時とを窮めんとす (一一) 毫末は至つて細小なる極點と定むるに足るかは不明 (一二) 天地も至つて大なる區域の極點とするに足るかは不明

舟車之所レ通。人處レ一焉。此其比萬物一也。不レ似豪末之在二於馬體一乎。五帝之所レ連。三王之所レ爭。仁人之所レ憂。任士之所レ勞。盡レ此矣。伯夷辭レ之以爲レ名。仲尼語レ之以爲レ博。此其自多也。不レ似二爾向之自多二於水一。

（一）四方の海に圍繞せられたる國土即ち世界が天地の間にあるさまを計り見るに蟻穴が大澤の中にあるに同じ（二）中國が世界の中にあるさまを計り見るに小米が大きなる米倉の中にあるに同じ（三）物の數を名づけて萬物と云ふ上が人は萬物中の一に居る（四）具貢九州穀食の生ずるところ舟車の通ずるところ人の在らざるは無ければ萬物に比すれば其の一に居るのみ（五）人を萬物に比すれば馬體の上の一本の毛の如し（六）五帝が禪讓相承け三王が討伐爭ひし仁人が憂ひ事に任ずるの士が勞する所のものは凡て此の小さなる人の上より出でず（七）伯夷は讓國たるを辭するを名譽と思ひ孔子が六經を講ずるを博學とおもへるは自ら大なりとして誇ること彼がさきに黃河の水を大なりとするに似たらずや

河伯曰。然則吾大二天地一而小二毫末一可乎。北海若曰。否。夫物量無レ窮。時無レ止。分無レ常。終始無レ故。是故大知觀二

河伯曰く、然らば則ち吾れ天地を大として、而して毫末を小とせば可ならんかと。（二）北海若曰く、否、夫れ物は量窮まりなく、時は止むこと無く、分は常なく、終始故なし。是故に大知は遠近を觀る。（三）故に小なれども寡しとせず、大なれども多しとせざるは、量の窮まりなきを知ればなり。今故を證嚮す、故に遙かなれども悶えず、掇けれども跂たざるは、時の止むことなきを知ればなり。盈虚に察

變。水旱不レ知。此其過二江河之流一。不レ可レ爲二量數一。而吾未二嘗以レ此自多一者。自以丁比二形於天地一。而受二氣於陰陽一。吾在二於天地之間一。猶丙小石小木之在乙天山甲也。方存二乎見レ少。又奚以自多。

尾閭の海水をもらすことは止む時なけれども海水盡くることはなし（七）春は雨少く秋は雨多けれども海水は増減することなく洪水にも旱魃にもかゝはることなし（八）吾が此を以て矜らざる所以のものは自ら形體を天地の間に伍し氣を陰陽より受けて生じ吾の天地の間に在ると猶小石小木が大山の上に在るが如く觀るにも足らぬものとおもふが故なり（九）正に己の小を見るに心を存するが故に何を以て自ら其の大に矜るを得ん

計三四海之在二天地之間一也。不レ似三礨空之在二大澤一乎。計三中國之在二海内一。不レ似三稊米之在二大倉一乎。號二物之數一謂二之萬一。人處レ一焉。人卒二九州穀食之所レ生。

（一）四海の天地の間にあるを計るに、礨空の大澤に在るに似ずや。（二）中國の海内にあるを計るに、稊米の大倉にあるに似ずや。（三）物の數を號けて之を萬と謂ふ。人一に處る。（四）人九州穀食の生ずる所、舟車の通ずる所を卒して、人一に處る。（五）此れ其の萬物に比するや、毫末の馬體にあるに似ずや。（六）五帝の連なる所、三王の爭ふ所、仁人の憂ふる所、任士の勞する所、此に盡く。（七）伯夷の之を辭するを名と以爲ひ仲尼の之を語るを博と以爲へる、此れ其の自ら多とするや、爾が向きに自ら水を多とせるに似ずやと。

北海若曰。井鼃不レ可三以語二於海一者。拘二於虚一也。夏蟲不レ可三以語二於氷一者。篤二於時一也。曲士不レ可三以語二於道一者。束二於教一也。今爾出二於崖涘一觀二於大海一。乃知二爾醜一。爾將レ可三與語二大理一矣。天下之水。莫レ大二於海一。萬川歸レ之。不レ知二何時止一。而不レ盈。尾閭泄レ之。不レ知二何時已一。而不レ虚。春秋不レ

北海若曰く、（一）井鼃以て海を語るべからざるものは、虚に拘ればなり。（二）夏蟲以て氷を語るべからざるものは、時に篤ければなり。（三）曲士以て道を語るべからざるものは、教に束ねらるればなり。今爾崖涘を出で、（四）大海を觀て、乃ち爾の醜を知る。爾將に與に大理を語るべからんとす。天下の水、海より大なるは莫し、萬川の之に歸する、何れの時か止まるを知らざれども、而かも盈たず。（五）尾閭の之を泄す。（六）何れの時已むかを知らざれども、而かも虚しからず。（七）春秋變ぜず、水旱知らず。此れ其の江河の流に過ぐること量數を爲すべからず。而も（八）吾未だ嘗て此を以て自ら多とせざるものは、自ら形を天地に比し、而して氣を陰陽に受けて吾の天地の間に在ること、猶は小石小木の大山にあるがごとしとするを以てなり。（九）方に少を見るに存す、又奚を以て自ら多とせん。

（一）井戸の中の鼃に對して海を語ること能はざる所以は其の居る處に拘るが故なり（二）夏の蟲類に對し嚴冬の氷を語ること能はざる所以は夏と云ふ時に執するが故なり（三）一方の事のみを信じる士（四）汝河岸の間より出でて大海を觀て汝自らの醜を知るが故に汝は與に至大の理を語るに足る（五）地盤くして海水をもらす處を云ふ（六）

崖之間。不ㇾ辯二牛馬一。於ㇾ是焉河伯欣然自喜。以二天下之美一爲二盡在一ㇾ己。順ㇾ流而東。行至二於北海一。東面而視。不ㇾ見二水端一。於ㇾ是焉河伯始旋二其面目一。望洋向ㇾ若而歎曰。野語有ㇾ之曰。聞ㇾ道百以爲ㇾ莫二己若一者一。我之謂也。且夫我嘗聞下少二仲尼之聞一。而輕二伯夷之義一者上。始吾弗ㇾ信。今我睹二子之難ㇾ窮也。吾非ㇾ至二於子之門一則殆矣。吾長見ㇾ笑二於大方之家一。

に順つて東し、行いて北海に至る。(五)東面して視るに、水の端を見ず。是に於てか河伯始めて其の面目を旋らし、(六)望洋として若に向つて歎じて曰く、(七)野語に之れあり曰く、(八)道を聞くこと百にして以て己に若くもの莫しと爲すと。我の謂なり。且夫れ我れ嘗て(九)仲尼の聞を少しとし、而して伯夷の義を輕しとするものを聞いて、始め吾信ぜざりき。(一〇)今にして我子の窮め難きを睹たり。吾子の門に至るに非ずんば則ち殆し。吾長く(一一)大方の家に笑はれんと。

(一) 此の篇知の知る所は窮りあつて恃むに足らざるを論じ大小是非死生禍福は拘はるべきに非ざる理を說けり (二) 秋になりて大水至り川々の水黃河に注ぎ入る (三) 濁流の大なること兩岸の水際にある牛馬をそれと見わくること能はぬほど (四) 水神欣喜して天下の美凡て己にありと思ふ (五) 水神北海の岸に立つて東に向つて海上を見渡すに茫洋として水のはてを見ず (六) 回顧して茫然自失し海神海若に向つて歎ず (七) 俚言 (八) 道を聞くこと百ばかりに過ぎざるに自分に及ぶものなしと思ふといふはわが事なり (九) 孔子の學識を少しとし伯夷の周の粟を食まざる義を輕しとす (一〇) 今に及んで我海洋の窮むること能はざるをさとる (一一) 大道の士に其の短見を笑はるべし

軒冕之謂也。非性命也。物之儻來寄也。寄之其來不可圉。其去不可止。故不爲軒冕肆志。不爲窮約趨俗。其樂彼與此同。故無憂而已矣。今寄去則不樂。由是觀之。雖樂未嘗不荒也。故曰喪己於物。失性於俗者。謂之倒置之民。

其の樂(七)、彼れと此れと同じ、故に憂ひ無きのみ。今、(八)寄去れば則ち樂しまず。是に由つて之を觀れば、樂しむと雖も未だ嘗て荒まずんばあらざるなり。故に曰く、(九)己を物に喪ひ、性を俗に失ふもの、之を倒置の民と謂ふと。

(一)官爵の類 (二)其の胸内に足り、外より益すことなきを樂といふのみ (三)身外の物にして性命の自然に非ず (四)軒冕の外物はわが心を樂ますに足らず偶々來るは一時の寄なり (五)寄は以て心を勞するに足らず故に樂むものは强ひず去るものは追はず (六)官爵の有無のために驕らず貧窮のために志を屈して俗流におもむかず (七)其の樂たるや軒冕窮約共に同じ (八)官爵去りて樂しまざるは去らざる時樂しむと雖も其の心荒めるなり (九)外物のために己を失ひ世俗のために眞性を失ふものは外を重んじて内を輕しむものにして内外を顛倒せる民といふ

秋水(一)

秋水時至。百川灌河。涇流之大。兩涘渚

(二)秋水時に至り、百川河に灌ぐ。(三)涇流の大、兩涘渚崖の間、牛馬を辯ぜず、是に於てか(四)河伯欣然として自ら喜び、天下の美を以て盡く己に在りと爲す。流

古之存レ身者。不二以レ辯飾一レ知。不三以レ知窮二天下一。不二以レ知窮一レ德。危然處二其所一。而反二其性一已。又何爲哉。道固不二小行一。德固不二小識一。小識傷レ德。小行傷レ道。故曰。正レ己而已矣。樂全之謂レ得レ志。

古の身を存するものは、辯を以て知を飾らず、知を以て天下を窮めず、(一)知を以て德を窮めず、(二)危然として其の所に處つて、其の性に反るのみ。又何をか爲さんや。(三)道は固より小行せず、德は固より小識せず、小識は德を傷り、小行は道を傷る。故に曰く、(四)己を正しうするのみ。樂全きをこれ志を得ると謂ふ。

(一) 德は自ら得るものなれば知を以て窮めず (二) 獨立して本分に處り其の眞性に反歸す (三) 有爲は道の小なるものなるが故に無爲の大道を行うて小行せず知は德の小なるものなるが故に無知の大德に處りて小識せず (四) 外を逐はずして己を正しうすべきのみ心自得して其の樂全きをば志を得たりといふ

古之所レ謂得レ志者。非二軒冕之謂一也。謂四其無三以益二其樂一而已矣。今之所レ謂得レ志者。

古の所謂志を得るものは、(一)軒冕の謂ひに非ざるなり。(二)其の以て其の樂を益すこと無きを謂ふのみ。今の所謂志を得るものは、軒冕の謂なり。軒冕身に在るは(三)性命に非ざるなり。(四)物の儻ま來るは寄なり。(五)寄の其の來るや圉ぐ可らず、其の去るや止むべがらず。故に(五)軒冕の爲に志を肆まにせず、窮約の爲めに俗に趨かず

交相喪也。道之人何由興乎世。世亦何由興乎道哉。道無以興乎世。世無以興乎道。雖聖人不在山林之中。其德隱矣。隱故不自隱。古之所謂隱士者。非伏其身而弗見也。非閉其言而不出也。非藏其知而不發也。時命大謬也。當時命而大行乎天下。則反一無迹。不當時命而大窮乎天下。則深根寧極而待。此存身之道也。

世を興すこと無く、世以て道を興すこと無し。聖人山林の中に在らずと雖も、其の德隱る、隱るゝは故自ら隱れず。古の所謂隱士なるものは、其の身を伏して見さざるに非ざるなり、其の言を閉ぢて出さざるに非ざるなり、其の知を藏して發せざるに非ざるなり。時命大に謬ればなり。時命に當つて大に天下に行へば、則ち一に反つて迹無し。時命に當らずして大に天下に窮すれば、則ち深根寧極して待つ。此れ身を存するの道なり。

(一) 世に道無く道亦世を離れ世と道と交々分離す (二) 聖人は敢て山林に隱れずして世にありと雖も世に道無きが故に其の德隱るゝことをなし隱して德の顯はるゝことなきは自ら隱れて用ひざるにあらで用ふるに所なきなり (三) 古に云ふ隱士といふものは其の身を山林に伏匿して世に現はさゞるに非ず其の口を默して言を出さゞるに非ず其の知を韜藏して發露せざるに非ず (四) 時大に非なるを見て是の如し (五) 時運に際會して大に天下に爲す所ある時は渾一無迹の至一に反歸して有爲の迹無し (六) 其の根本至極の眞性を深くし安じて時を待つ

而不ㇾ順。德又下衰。及ニ唐虞一。始爲ニ天下一。興ニ治化之流一。澆ㇾ淳散ㇾ朴。離ㇾ道以善。險ㇾ德以行。然後去ㇾ性而從ニ於心一。心與ㇾ心識。知而不ㇾ足ニ以定ニ天下一。然後附ㇾ之以ㇾ文。益ㇾ之以ㇾ博。文滅ㇾ質。博溺ㇾ心。然後民始惑亂。無下以反ニ其性情一。而復中其初上。由ㇾ是觀ㇾ之。世喪ㇾ道矣。道喪ㇾ世矣。世與ㇾ道

定むるに足らず。後る後之に附するに文を以てし、(一〇)之に益すに博を以てす。文は(一一)質を滅し、博は心を溺らす。然る後民(一二)始めて惑亂して、以て其の性情に反りて、其の初めに復ること無し。

(一) 年所を經るに及んで次第に德下り衰へ燧人氏伏羲氏の代に至りて無爲なること能はず始めて天下を治む卽ち燧人氏は生を變じて熟と爲し伏羲氏は牛を服し馬に乘り庖廚を立て八卦を畫し文字を制し知巧旣に用ひらる (二) 自然に順ふといへども意識的に順へるにて大古渾芒の時の如く至一に非ず (三) 至一に非ずと雖も尙は自然に順ふを得べし自然に順ふを得ざれば爲すことありて之に安じ居るを得べし故に神農黃帝の民は安ずるを得れども順なるを得ず (四) 唐堯虞舜 (五) 治政敎化の流弊を起し淳朴の風を薄くし散失す (六) 無爲の道を離れて差別的の善を爲す (七) 德を不自然にして作爲の行あり (八) 自然の性を去つて有爲の心に從ふ (九) 我有心を以て爲せば彼有心を以て之に應じ自他の心相疑ひて識察するは知の作用なれど知は以て天下を定むるに足らず (一〇) 知を用ひて足らざるが故に知を修飾するに文華と複雜とを以てす (一一) 文華は形式に流れて物の本質を滅ぼし複雜は煩縟にして心を亂す (一二) 民の心迷紛亂し其の天然の性情に反り自然の太初に立ちかへることなし

是に因つて之を觀れば、(一三)世は道を喪ひ、道は世を喪ひ、世と道と交も相喪ふなり。道の人何に因つてか世を興さん、世亦何に因つてか道を興さんや。道以て

古之人。在混芒之中。與一世而得澹漠焉。當是時也。陰陽和靜。鬼神不擾。四時得節。萬物不傷。羣生不夭。人雖有知。無所用之。此之謂至一。當是時也。莫之爲而常自然。

逮德下衰。及燧人伏戲。始爲天下。是故順而不一。德又下衰。及神農黄帝。始爲天下。是故安

古の人、混芒の中に在つて、一世と與にして澹漠を得。是の時に當つてや、(一)陰陽和靜に、鬼神擾れず、四時節を得、萬物傷れず、羣生夭せず。(二)人知有りと雖も之を用ふるに所なし。此を之れ至一と謂ふ。(三)是の時に當つてや、之を爲すこと莫くして、而して常に自ら然り。(四)

(一)古代の人は渾沌無知の中にあつて一世の人與に同じく恬淡寂寞即ち無爲の道を得たり　(二)陰陽の氣和ぎて靜かに鬼神靜肅して人に祟らず四時順當に萬物害はず衆生物夭死せず皆生々の化を遂げたり　(三)人知ありといへども其の知を利用すべき所もなし　(四)絶對一の境　(五)絶對一の自然に安じ居るは無爲にして然るにて爲すこともありて自然なるに歸す

(五)德の下衰するに逮び、燧人伏戲に及んで、始めて天下を爲む。是の故に(六)順なれども一ならず。德又下衰して、神農黄帝に及んで、始めて天下を爲む。是の故に(七)安なれども順ならず。德又下衰して、唐虞に及んで、始めて天下を爲む。治化の流を興し、淳を澆くし朴を散す。(八)道を離れて以て善なり、(九)德を險にして以て行ありあり。然る後性を去つて心に從ふ。(十)心と心と識る。知るも、而かも以て天下を

生而無以知爲也。謂之以知養恬。知與恬交相養。而和理出其性。夫德和也。道理也。德無不容仁也。道無不理義也。義明而物親。忠也。中純實而反乎情。樂也。信行容體。而順乎文。禮也。禮樂偏行。則天下亂矣。彼正而蒙己德。德則不冒。冒則物必失其性也。

り。德、(一〇)容れざること無きは仁なり。道理ならざること無きは義なり。(一一)義明かにして物親しむは、忠なり。(一二)中純實にして情に反るは、樂なり。(一三)行を信にし體を容りて、文に順ふは禮なり。(一四)禮樂偏行すれば、則ち天下亂る。彼れ(一五)正さんとして己が德を蒙にす。(一六)德は則ち冒さず、冒せば則ち物必らず其の性を失ふなり。

(一) 此の篇恬と知と交々相養ひつゝ清漠を得至一の境に至るべき所以を說き俗學俗思の爲すに足らざるを訓ふ (二) 俗學の修學を以て性を治め自然の本性に復歸せしめんとす (三) 俗思を以て利欲の念を亂しながらそれを以て知を明にせんとす (四) 本然の性を蔽はれて蒙き至愚の民 (五) 古の道を修むるものは無爲自然にして其の知を養ふ (六) 生れながらのまゝにして知巧を事とせず (七) 知を用ひざれば知ありと雖も其の恬を損ぜず故によく知を以て恬を養ふ (八) 知は恬を養ひ恬は知を養ふときには自然和と理とを生じ來る (九) 和は恬より出づ是德なり理は知より出づ是道なり (一〇) 德の包容せざるものなきは仁なり道の宜しきにかなはざるなきは義なり (一一) 義は物の理を直すが故に親しまざる所あり之をよく親しましむるものは忠厚の心なり (一二) 中心純清朴實にして性の實情に反り歸するものは樂なり (一三) 其の行を信實にし態度を正して節文に順ふは禮なり (一四) 禮と樂とは並び行はるべきもの之を偏して行ふときは天下亂る卽ち禮は理にして知、樂は和にして性、故に互に相俟つべきもの (一五) 人爲の禮樂を以て天下を正さんとして反つて己の德明かならず (一六) 德天下を蓋ふに足らざるに强ひて之を蓋ふ時は其の自然の性を失ふ

神是守。守而勿失、與神爲一。一之精通、合於天倫。野語有之。曰、衆人重利、廉士重名、賢士尚志、聖人貴精。故素也者、謂其無所與雜也。純也者、謂其不虧其神也。能體純素、謂之眞人。

ふ。

(一) 予は我、以上二句は古語を出だす即ち千古眞實の語是なり (二) 一物の雜すら雜亂することなき如し汲々精神を守る (三) 精神は四方一時に流動しゆきて行き屆かざる所なし (四) 上は高く天際に達し下は低く地中に蟠り萬物を化育し其の功用名狀すべからず (五) 之を名づけて天帝と同じきものといふ (六) 純粹素朴の道は精神を守るにあり神を守つて之を失ふことなくば神と一致す (七) 神と一となれば道と通ずる所ありて天理と合す (八) 俚言 (九) 純粹の素と云ふ言は生一本にして雜り氣のなきをいひ純とは其の固有の神を虧うて損せざるをいふ

(一)繕性

繕性於俗學。以求復其初。滑欲於俗思。以求致其明。謂之蔽蒙之民。古之治道者、以恬養知。

(二)性を俗學に繕めて、以て其の初めに復らんことを求め、(三)慾を俗思に滑りて、以て其の明を致さんことを求むる、之を(四)蔽蒙の民と謂ふ。(五)古の道を治むるものは、恬を以て知を養ふ。(六)生じて知を以て爲すこと無きなり。(七)之れを知を以て恬を養ふと謂ふ。(八)知と恬と交〻相養つて、和理其の性に出づ。夫れ(九)德は和なり、道は理な

鬱閉而不レ流。亦不レ能レ清。天德之象也。故曰。純粹而不レ雜。靜一而不レ變。淡而無爲。動而以天行。此養レ神之道也。

なり。

(一) 形を分外に勞して休まざるときは困弊し精神を用ひて止むことを知らざるときは勞れ損じ勞れ損ずる時は精神枯竭す (二) 塞がりて流れざるときは水清まず (三) 水は天然の德を備へたるもの (四) 純粹にして間雜なく靜一にして變易せず恬淡無爲物に感じて動くこと天の運行の如くするは精神を養ふの道

夫有二干越之劍一者。柙而藏レ之。不二敢用一也。寶之至也。精神四達。竝流無レ所レ不レ極。上際二於天一。下蟠二於地一。化二育萬物一。不レ可レ爲レ象。其名爲二同帝一。純素之道。唯

夫れ干越(一)の劍を有するものは、柙にして之を藏め、敢へて用ひざるなり。寶と(二)するの至なり。精神(三)は四達、竝に流れて極めざる所なし。上は天に際(四)り、下は地に蟠り、萬物を化育して、象を爲すべからず。其の名を同帝(五)と爲す。純素(六)の道は、唯〻神を是れ守る。守つて失ふことなければ、神と一たり。一(七)の精、通じて天倫に合ふ。野語に之れあり、曰く、衆人は利を重んじ、廉士は名を重んじ、賢士は志を尙び(八)、聖人は精を貴ぶと。故に素(九)とは、其の、與に雜る所無きを謂ふなり。純とは、其の神を虧がざるを謂ふなり。能く純素を體する、之を眞人と謂

憂。其神純粹。其魂不ㇾ罷。虛無恬惔。乃合二天德一。

故曰。悲樂者德之邪。喜怒者道之過。好惡者德之失。故心不二憂樂一。德之至也。一而不ㇾ變。靜之至也。無ㇾ所ㇾ於ㇾ忤。虛之至也。不二與ㇾ物交一。淡之至也。無ㇾ所ㇾ於ㇾ逆。粹之至也。

故に曰く、（一）悲樂は德の邪、喜怒は道の過、好惡は德の失と。故に心憂樂せざるは、（二）德の至りなり。一にして變ぜざるは、（三）靜の至りなり。忤ふに所無きは、虛の至りなり、物と（四）交らざるは、淡の至りなり、逆ふに所なきは、粹の至りなり。

（一）虛無恬淡は德に合ふ道にして悲樂喜怒好惡は德の邪過失　（二）心に憂ふる所も樂しむ所もなく自適して安ずるは德の極致　（三）無心にして變ぜざるは靜の極致、自然に因りて逆ふことなきは虛無の極致　（四）無慾にして物に交らざるは恬淡の極致、無爲にして物に逆ふことなきは純淸の極致

故曰。形勞而不ㇾ休則弊。精用而不ㇾ已則勞。勞則竭。水之性。不ㇾ雜則清。莫ㇾ動則平。

故に曰く、（一）形勞して休せざれば則ち弊え、精用ひて已まざれば則ち勞る。勞るれば則ち竭くと。水の性、雜らざれば則ち淸く、動くこと莫ければ則ち平。鬱閉して流れざれば、亦淸むこと能はず。（二）天德の象なり。故に曰く、（三）純粹にして雜らず、靜一にして變ぜず、淡にして無爲、動いて以て天行すと。此れ神を養ふの道

故曰。聖人之生也天行。其死也物化。靜而與レ陰同レ德。動而與レ陽同レ波。不レ爲二福先一。不レ爲二禍始一。感而後應。迫而後動。不レ得レ已而後起。去二知與レ故。循二天之理一。故無二天災一。無二物累一。無二人非一。無二鬼責一。其生若レ浮。其死若レ休。不二思慮一。不二豫謀一。光矣而不レ耀。信矣而不レ期。其寢不レ夢。其覺無レ

故に曰く、聖人の(一)生や天行、其の死や物化。(二)靜にして陰と德を同じうし、動いて陽と波を同じうす。(三)福の先たらず、禍の始たらず。(四)感じて後に應じ、迫つて後に動き、已むことを得ずして後に起つ。(五)知と故とを去りて、天の理に循ふと。故に(六)天災なく、物累なく、人非なく、鬼責なし。(七)其生は浮ぶが若く、其の死は休するが若し。(八)思慮せず、豫謀せず、(九)光あつて耀がさず、信あつて期せず。其の寢るや夢みず、其の覺むるや憂なし。(一〇)其の神純粹、其の魂罷れず、虛無恬惔にして乃ち天德に合す。

(一) 聖人の生けるや自然に任せて運動し其の死するや寂然として係累する所なし (二) 其の動靜は天地の陰陽二氣と調和す (三) 福を求むるは禍を得る所以福を受くる原因となるべきことをなさゞるは禍を得る原因となるべきことをなさゞるわけなり (四) 凡て己より爲すことありて行動せず物來りて感じたる後之に應じ事切迫して後に始めて動き止むを得ずして後に起つ (五) 知巧と人爲とを去つて天然の眞理に從ふ天の下せる災異にもあはず物の累ひもなく人の非難もなく鬼神の呵責もなし (七) 其の生は流のまにまに浮ぶが如く其の死は休息するが如く生死共に自然 (八) 色々思慮することをせず豫め工夫せず (九) 光あれども之に外に耀かさず信實あれども豫期することを爲さず (一〇) 其の精神純粹にして間雜せず其の精物に應じて疲るゝことなし

者之所好也。

若夫不刻意而高。無仁義而修。無功名而治。無江海而閒。不道引而壽。無不忘也。無不有也。澹然無極。而衆美從之。此天地之道。聖人之德也。故曰。夫恬惔寂漠。虛無無爲。此天地之平。而道德之質也。故曰。聖人休。休焉則平易矣。平易則恬惔矣。平易恬惔。則憂患不能入。邪氣不能襲。故其德全而神不虧。

若し夫れ刻意せずして而して高く、(一)仁義なくして修め、功名なくして治まり、江海なくして閒に、道引せずして壽ならば、(二)忘れざる無きなり、有らざる無きなり。(三)澹然として極無く、而して衆美之に從ふ。此れ天地の道、聖人の德なり。故に曰く、夫れ恬惔寂漠、虛無無爲は、此れ天地の平にして道德の質なりと。(四)故に曰く、(五)聖人は休すと。休すれば則ち平易、(六)平易なれば則ち恬惔、平易恬惔なれば、則ち憂患入ること能はず、邪氣襲ふこと能はず、(七)故に其の德全くして神虧けず。

(一) 心を殊更にかどだてずして自然に心高尚に尊々しく仁義だてせずして身修まる (二) 無心なるが故に凡て忘れ物に應ずるが故に常に有り (三) 恬淡虛靜にし極まり止む所なく萬善自ら備はる (四) 天地の平衡にして道德の本質 (五) 聖人は安息なり (六) 安らかにして動じ易し (七) 其の德完全にして神氣缺け損せず

語ニ仁義忠信恭儉推讓。爲ㇾ修而已矣。此平世之士。敎誨之人。遊居學者之所ㇾ好也。語ニ大功。立ニ大名。禮ニ君臣。正ニ上下。爲ㇾ治而已矣。此朝廷之士。尊ㇾ主彊ㇾ國之人。致ㇾ功幷兼者之所ㇾ好也。就ニ藪澤。處ニ閒曠。釣ニ魚閒處。無爲而已矣。此江海之士。避ㇾ世之人。閒暇者之所ㇾ好也。吹呴呼吸。吐ㇾ故納ㇾ新。熊經鳥申。爲ㇾ壽而已矣。此道引之士。養ㇾ形之人。彭祖壽考

廷の士、主を尊くし國を彊くするの人、功を致し幷兼するものの好む所なり。(一〇)(一一)藪澤に就き、閒曠に處り、魚を閒處に釣り、無爲なるのみ。此れ(一二)江海の士、世を避くるの人、閒暇なるものの好む所なり。(一三)吹呴呼吸、故を吐き、新を納れ、熊經鳥申、(一四)壽を爲すのみ。此れ道引の士、(一五)形を養ふの人、(一六)彭祖壽考なるものの好む所なり。(一七)

(一) 此の篇之等の偏士を擧げて之を斥け眞人は雕素樸を守るべきのみにして刻意仁義は未だ至らざるものなるを說く (二) 心をかど立て行を高尙にし世間を離れ人と違へる行ひをなす (三) 高尙なる論をなし世を怨み邪を惡み氣を負うて人とはりあふ (四) 世をのがれて山林に隱居する人 (五) 心を痛めて憔悴枯槁し淵に投じて身を潔くする人の好む所 (六) 恭敬儉約推讓辭讓して身を修む (七) 平和の世に住む人や師となりて人を敎ふる人 (八) 野に在りて閒遊家居して道を說く學者の好む所 (九) 朝廷に仕ふる士 (一〇) 功をたて敵國を併呑するものゝ好む所 (一一) 山林にゆき氣樂なる地位に居る (一二) 出てゝ仕へざる士 (一三) 氣息を吹きだし吸ひ入れて古き氣を吐き新しき氣を入る (一四) 熊の頭の屈して氣を閉ぢ鳥の氣を伸して頭を開く如く身體を調整して壽をのばす (一五) 氣を導き體を引く養生法を事とする人 (一六) 身體を養生する人 (一七) 彭祖の如き長壽なるもの、彭祖のこと逍遙遊に出づ

爲二雌雄一。故風化。性不レ可レ易。命不レ可レ變。時不レ可レ止。道不レ可レ壅。苟得二於道一。無二自而不一レ可。失レ焉者無二自而可一。孔子不レ出三月。復見曰。丘得レ之矣。烏鵲孺。魚傅沫。細要者化。有レ弟而兄啼。久矣夫。丘不下與レ化爲上レ人。不下與レ化爲上レ人。安能化レ人。老子曰。可。丘得レ之矣。

らず道は流動して塞ぐべからず（二二）苟も道を得たる以上は在る所として不可なることなく道を失ふときは在る所として不可なり（二三）孔子自らいふ今之を悟り得たり（二四）烏鵲は尾を交へて子を生じ（二五）魚は吐きたる泡を受けて孕む（二六）蜂は桑蟲を化して子と爲す（二七）弟を孕めば兄足らずして兄之を病む（二八）以上皆自然の化天性の本然にして仁義道德を以て律すべきに非ず孔子が自然の化に隨うて物に應ぜざりしこと久しかりしとなり（二九）自ら自然の化に隨つて物に應ずることを能はずんば人を化すること能はじ故に六經の義を治めて七十二君に說きしも用ゐられざりしなり（三〇）故に孔子今や之を悟ることを得たり

刻レ意尙レ行。離レ世異レ俗。高論怨誹。爲レ亢而已矣。此山谷之士。非世之人。枯槁赴レ淵者之所レ好也。

刻意（一）

意を刻し行を尙くし、世を離れ俗に異にし、（二）高論怨誹、亢を爲すのみ。此れ山谷の士、世を非るの人、（三）枯槁して淵に赴くものの好む所なり。（四）仁義忠信恭儉推讓を語りて、修を爲すのみ。此れ平世の士、敎誨の人、遊居する學者の好む所なり。大功を語り、大名を立て、君臣を禮し、上下を正し、治を爲すのみ。此れ朝、

明ニ周召之迹一。一君無レ所ニ鉤用一。甚矣夫人之難レ説也。道之難レ明邪。老子曰。幸矣。子之不レ遇ニ治世之君一也。夫六經先王之陳迹也。豈其所ニ以迹一哉。今子之所レ言。猶レ迹也。夫迹履之所レ出。而迹豈履哉。夫白鶂之相視。眸子不レ運而風化。蟲雄鳴ニ於上風一。雌應ニ於下風一而化。類自

猶ほ迹のごときなり。夫は迹は履の出す所、而も迹は豈に履ならんや。夫れ白鶂(七)の相視る、眸子運がずして風化し、蟲は雄(八)上風に鳴き、雌下風に應じて化し、類(九)は自ら雌雄を爲すが故に風化す。性(一〇)は易ふべがらず、命は變ずべがらず、時は止むべからず、道は壅ぐべからず。(一一)荀くも道を得れば、自りて不可なる無く、焉を失ふものは、自りて可なる無しと。孔子出でざること三月。復た見えて曰く、丘之を得たり。(一二)烏鵲(一三)は孺し、魚(一四)は沫を傳へ、細要(一五)のものは化し、弟(一六)有つて兄啼く。久しいかな、(一七)丘の、化と人たらざることや、化と人たらずんば、(一八)安んぞ能く人を化せん。老子曰く可たり、丘之を得たりと。(一九)

(一) 自ら思ふには六經を治むること多年なれば能く其の意義を熟知すと (二) 七十二の諸侯に仕へんことを求む (三) 周の成王を輔けて王道を天下に行ひし周公召公の行迹々明に解す (四) 採用 (五) 六經は先王が行爲せし古くさき迹かたにしてかゝる迹かたを殘せし先王の眞性其のものに非ず (六) 足下の言ふ所のものは猶人の足跡の如きものなり足跡は履より生ずるものにて履其のものに非ず (七) 鷺の一種互に視あふ時は瞳の動く暇もなく直に子を生む (八) 蟲類は雄が風上に鳴き雌が風下に應じ鳴きて子を生む (九) 山海經に曰く亶爰の山に獸あり狸の如し名を師類といふ云々自ら雌雄を爲して生々すと (一〇) 本然の眞性天與の運命は變易すべからず時は動きて止むべか

五月而能言。不至乎孩而始誰。則人始有夭矣。禹之治天下使民心變。人有心。而兵有順。殺盜非殺。人自爲種而天下耳。是以天下大駭。儒墨皆起。其作始有倫。而今乎婦女何言哉。余語女。三皇五帝之治天下。名曰治之。而亂莫甚焉。三皇之知。上悖日月之明。下睽山川之精。中墮四時之施。其知憯於蠆蠆之尾。鮮規之獸。莫得安其性命之情。而猶自以爲聖人。不可恥乎。其無恥也。子貢蹵蹵然立不安。

に至る 【[illegible]】 人自ら制度區別の區劃を立て、我甲・あにと天下に爭ひ 【[illegible]】 ここに於て天下の人大に驚き各己を善として言を爲し、儒墨及び諸子百家の學說起る 【[illegible]】 儒墨の學說は倫序ありて三十にして娶り二十にして嫁せしに今は十五歳以下の少女を婦とす 【[illegible]】 三皇の知たるや上においては日月の明を亂し下に於ては山川の精神に背き中においては四時寒暑の節をやぶる。天知蠆蠆の實毒を蔵るをいふ 【[illegible]】 其の知は蠆蠆の尾尻銳の蝨獸よりも毒あり 【[illegible]】 天下其の生性天命の實情を安じ得しむるもの一人もなし 【[illegible]】 蹵々として立つ

孔子謂老聃曰。丘治詩書禮樂易春秋六經。自以爲久矣。孰知其故矣。以奸者七十二君。論先王之道。而

孔子老聃に謂つて曰く、丘詩書禮樂易春秋の六經を治む。(一)自ら以爲らく久し、其の故を孰知すと。以て奸むるもの七十二君。(二)先王の道を論じて、周(三)召の迹を明にすれども、一君だも鉤用(四)する所無し。甚しいかな、人の說き難くして、道の明にし難きやと。老子曰く、幸なり、子の治世の君に遇はざるや。夫れ(五)六經は先王の陳迹なり、豈に其れ迹とする所以ならんや。今子(六)の言ふ所は、

文王順レ紂而
不二敢逆一。武王
逆レ紂而不二肯
順一。故曰レ不レ同。
老聃曰。小子
少進。余語二女
三王五帝之
治二天下一。黄帝
之治二天下一。使二
民心一一。民有二
其親死不一レ哭。
而民不レ非也。
堯之治二天下一。
使二民心親一。民
有下爲二其親一殺中
其殺上。而民不レ
非也。舜之治二
天下一。使二民心
競一。民孕婦十
月生レ子。子生

(二七)性命の情を安んずるを得るもの莫し、而かも猶は自ら以て聖人と爲す。恥づべからずや、其の恥無きことやと。子貢蹵蹵然(二八)として立つて安んぜず。

(一) たゞし戒む (二) 老子を龍にたとふ (三) 龍は氣合して體をなし散じてアヤをなし變化きはまらず雲に乘つて天地の至氣陰陽に養はる (四) 口開きて合はすこと合はずして呆然たり (五) 人死屍の如く不動にして龍の如く現る (六) 雷の如き聲を立てながら淵の如く深く默す (七) 子貢の字、老子を見ることを得べきかとなり (八) 孔子の紹介にて老子を見る (九) 老子其の堂上に坐せんとする時にてさも大儀さうに小さなる聲にて子貢の問ひに應ず (一〇) 年とりて老いぼれとなりたり (一一) 三王五帝(前に出づ)が天下を治むる形式に於ては各異なれども其の善く天下を治めたりといふ評判を得たることは同一 (一二) 以下堯舜禹湯文武の諸帝が天下を治むるに各異なれる所あるを說く (一三) 民の心を無爲自然のまゝに任せず爲すことありて統一す (一四) 民皆親を親とせず生死を別たず故に親死するも哭せず無爲に近しと雖も哭せざるは偏拘して爲すことあるに似たり (一五) 民心を互に親しますが故に親疎の別あり其の親のために降殺の喪服を作りて服す (一六) 民の心をして互に競爭せしむるが故に知を生ずること速か (一七) 古は孕むこと十四ケ月にして子を産み子生れて二歲にして言ふと傳ふるに舜の時に至りて十ケ月にして産み生れて五ケ月にして能く言ひ未だ孩笑する期にも達せざるうちに誰彼を見分くるほど早成 (一八) 競爭して知長ずるが故に隨つて心を勞することも多く壽命短し (一九) 民の心をして天眞本然のまゝならしめずして矯正變易せしむ (二〇) 人心其の淳朴を失ひて變詐知巧有り又兵は不順なるものなれど民の叛するものを討つに及びて之を順とするに至る (二一) 人を殺すは天理に逆ふものなれど盜生ずれば法を設けて之を殺し而して殺とせざる

者乎。鵲亦可ニ得而觀一乎。遂以ニ孔子聲一見ニ老聃一。老聃方將レ倨レ堂而應微曰。予年運而往矣。子將ニ何以戒一レ我乎。子貢曰。夫三王五帝之治ニ天下一。不レ同。其係ニ聲名一一也。而先生獨以爲レ非ニ聖人一。如何哉。老聃曰。小子少進。子何以謂レ不レ同。對曰。堯授レ舜。舜授レ禹。禹用レ力。而湯用レ兵。

うて背へて順はず。故に同じからずと曰ふ。老聃曰く、小子少しく進め、余女に三王五帝の天下を治むるを語らん。黃帝の天下を治むるや、(一三)民心をして一ならしむ。(一四)民其の親死して哭せざる有るも、民非らざるなり。堯の天下を治むるや、(一五)民心をして親しましむ、民其の親の爲めに其の殺を殺すること有るも、而も民非らざるなり。舜の天下を治むるや、(一六)民心をして競はしむ、民の孕婦十月にして子を生み、子生れて五月にして能く言ひ、孩に至らずして始めて(一七)誰す、則ち人始めて夭有り。禹の天下を治むるや、(一九)民心をして變ぜしむ。(二〇)人に心有つて、兵に(一八)順有り、(二一)盜を殺すは殺に非ず。(二二)人自ら種を爲して、而して天下のみ。(二三)是を以て天下大に駭き、儒墨皆起る。(二四)其の作すこと始めて倫有つて、今や女を婦とす、何をか言はんや。余女に語らん、三皇五帝の天下を治むる、名は之を治むと曰ふ、而かも亂、焉より甚しきは莫し。(二五)三皇の知、上は日月の明を悖り、下は山川の精に睽き、中は四時の施を墮る。(二六)其の知は蠣蠆の尾、鮮規の獸よりも憯にして、其の

名譽之觀。不レ足ニ以爲一レ廣。泉涸魚相與處ニ於陸一。相呴以レ濕。相濡以レ沫。不レ若三相ニ忘於江湖一。

孔子見ニ老聃一歸。三日不レ談。弟子問曰。夫子見ニ老聃一。亦將ニ何規一哉。孔子曰。吾乃今。於レ是乎見レ龍。龍合而成レ體。散而成レ章。乘ニ乎雲氣一。而養ニ乎陰陽一。予口張而不レ能レ嗋。予又何規ニ老聃一哉。子貢曰。然則人固有下尸居而龍見。雷聲而淵默。發動如ニ天地一

孔子老聃を見て歸り、三日談ぜず。弟子問うて曰く、夫子老聃を見る、亦た將に何をか規(一)さんとせしやと。孔子曰く、吾れ乃今、是に於てか(二)龍を見たり。(三)龍は合して體を成し、散じて章を成し、雲氣に乘じて陰陽に養はる。(四)予口張つて嗋ふこと能はず。予又何ぞ老聃を規さんやと。子貢曰く、然らば則ち人(五)固より尸居して龍見し、(六)雷聲して淵默し、發動天地の如き者あるか。(七)賜亦得て觀るべきかと。(八)遂に孔子の聲を以て老聃を見ゆ。(九)老聃方に將に堂に倨して應ずること微にして曰く、(一〇)予年運りて往けり、子將た何を以て我を戒めんとするかと。子貢曰く、夫れ(一一)三王五帝の天下を治むるは、同じからざれど、其の聲名を係くるは一なり。而るに先生獨り以て聖人に非ずと爲すは如何ぞやと。老聃曰く、小子少しく進め、子何を以て同じからずと謂ふと。對へて曰く、(一二)堯は舜に授け、舜は禹に授け、禹は力を用ひて、湯は兵を用ふ、文王は紂に順つて敢へて逆はず、武王は紂に逆

而語二仁義一。老聃曰。夫播レ糠眯レ目。則天地四方易レ位矣。蚊虻噆レ膚。則通昔不レ寐矣。夫仁義憯然乃憒二吾心一。亂莫レ大レ焉。吾子使二天下無一レ失二其朴一。吾子亦放レ風而動。總レ德而立矣。又奚傑然若下負二建鼓一而求中亡子上者邪。夫鵠不二日浴一而白。烏不二日黔一而黑。黑白之朴。不レ足二以爲一レ辯。

地四方位を易ふ。蚊虻膚を噆めば、則ち通昔寐られず。(三)夫れ仁義は憯然として乃ち吾が心に憒ふ。亂焉より大なるは莫し。(四)吾子天下をして其の朴を失ふこと無からしめよ、吾子亦た風に放りて動き、德を總べて立て。(五)又奚ぞ傑然として建鼓を負うて亡子を求むる者の若くならんや。(六)夫れ鵠は日々に浴せざれども白く、烏は日々に黔めざれども黑し。黑白の朴は、以て辯を爲すに足らず、(七)名譽の觀は、以て廣と爲すに足らず、(八)泉涸れて魚相與に陸に處る、相呴するに濕を以てし、相濡するに沫を以てするは、江湖に相忘れんには若かずと。

(一) 糠を播いて目をくらますときは天地四方何れが何れなりや方位わからず (二) 蚊々蛇が膚を刺すときは終夜ねむられず (三) 之と同様に仁義は毒を流して吾が心に亂す (四) 足下仁義を以て天下の民をして其の渾朴の質を失ふことなからしめよ足下自らも無心の風によつて動き德を總べ其の眞を守つて立てよ (五) 又何ぞ利口よりて大鼓を負うてたゝきながら逃子を求むる如く仁義に拘はるに及ばんや (六) 白鳥は毎日浴せざれど白く烏は毎日黑く塗らねど黑し故に黑白の質は天性にして是非の辯をなすべからず (七) 名譽の見は大となすに足らず。即ち鵠を黑くせんとし烏を白くせんとする如く仁義を以て本性を矯め以て名を求むる見解は狹しとの意 (八) 泉水涸れて多くの魚地上にあり互に濕氣を吐きかけ泡を以て濡しあふ如き區々の仁子々の義よりも廣々としたる江河湖海の上に見ず知らずにてゐるがよろし

眞之遊一。以レ富爲レ是者。不レ能讓レ祿。以レ顯爲レ是者。不レ能讓レ名。親レ權者。不レ能レ與二人柄一。操レ之則慄。舍レ之則悲。而一無レ所レ鑒。以闚二其所一レ不レ休者。是天之戮民也。怨恩取與。諫教生殺。八者正之器也。唯循二大變一無レ所レ湮者。爲二能用一レ之。故曰。正者正也。其心以爲レ不レ然者。天門弗レ開矣。

(六)怨恩取與、諫教生殺、八つのものは正すの器なり。(七)惟大變に循つて湮がる所無きものにして、能く之を用ふることを爲す。故に曰く、(八)正すものは正しきなりと。(九)其の心以て然らずと爲すものは、天門開けずと。

㊀ 古の至人は一寸道を仁に借り義に宿を借りて長く處らず寛縦自在の境に遊び簡素を以て心を養ひ眞を藏して人に貸さず。虚は墟にして大丘なり ㊁ 逍遥なれば無爲を得べく苟簡なれば足ることを知る故に心を養ひやすく不貸なれば已に藏して出だすことなし ㊂ 眞實の理をとるの遊といふ ㊃ 富貴を以て結構とおもふものは富貴に執するが故に人に祿利を讓ること能はず顯榮を以て結構と思ふものは顯榮に執するが故に人に名譽を讓ること能はず ㊄ 權勢權を有するときは之を失はんことを懼れ又之を失ふときは悲しみ痛みて少しも反省することなく迷ひてかへることを知らざるもの皆天に罪せられたる民なり ㊅ 己につらきを怨み德あるを恩とし義にかなへるを取り憐みて與へ上を諫め下を敎へ功あるを生かし罪あるを殺す此の八者は天下を正し治むる手段 ㊆ たゞ自然の變化に從うて拘泥せざるものゝみ此の八者を用ひ得 ㊇ 此の八者を用ひて天下を正すものは其の身正しきなり ㊈ 其の心に自然の變化に從うて拘泥せざることを否定するものは道に入ること能はず

孔子見二老聃一

孔子老聃に見えて仁義を語る。老聃曰く、夫れ(一)糠を播いて目を眯すれば、則ち天

而可三以告二人一、則人莫レ不レ告二其兄弟一。使三道而可二以與一レ人、則人莫レ不レ與二其子孫一。然而不可者無レ他也。中無レ主而不レ止。外無レ正而不レ行。由レ中出者。不レ受二於外一。聖人不レ出。由レ外入者。無二主於中一。聖人不レ隱。名公器也。不レ可二多取一。仁義先王之蘧廬也。止可三以一宿一而不レ可二久處一。覯而多責。

せざるものなからん　〇　道が獻上し得らるゝものならば其の親に獻上せざるものなからん。以下皆此に同じ　（一）　道を人に與へ得ざる理由は外にもあらず　（二）　中に道をきいて之を把持すべき主なき時は折角道をきくとも道止まらずして去る　（三）　外部の言の中に正道有らざる時は聖人道をきくと雖も行ひおなし　（四）　外に正あり中に主あり中外相應ずることなき時は聖人道を人に傳へず　（五）　道は公器にして天下と共にすべきものなれば多く己に取るべからず　（六）　仁義は先王の蘧廬なれば一宿するは可なれど久しく住むべくもあらず　（七）　長く仁義に居る時は衆人の誹謗を受け指摘せらるゝこと多し

古之至人。假二道於仁一。託二宿於義一。以遊二逍遙之虛一。食二於苟簡之田一。立二於不貸之圃一。逍遙無爲也。苟簡易レ養也。不貸無レ出也。古者謂二是采

古の至人（一）は、道を仁に假り、宿を義に託し、以て逍遙の虛（二）に遊び、苟簡の田に食ひ、不貸の圃に立つ。逍遙は無爲なり、苟簡は養ひ易きなり、不貸は出だすこと無きなり。古は是を采眞（三）の遊と謂ふ。富を以て是と爲すものは、祿を讓ること能はず。顯を以て是と爲すものは、名を讓ること能はず。權を親しむものは、人に柄を與ふること能はず。之を操れば則ち慄れ、之を舍つれば則ち悲しんで、一も鑒みる所なくして、以て其の休まざる所を闚ふものは、是れ天の戮民なり。

吾聞。子北方之賢者也。子亦得レ道乎。孔子曰。未レ得也。老子曰。子惡乎求レ之哉。曰。吾求二之於度數一。五年而未レ得也。老子曰。子又惡乎求レ之哉。曰。吾求二之於陰陽一。十有二年而未レ得。老子曰然。使二道而可レ獻。則人莫レ不レ獻二之於其君一。使二道而可レ進。則人莫レ不レ進二之於其親一。使三道

吾れ之を度數(四)に求む、五年にして未だ得ざるなりと。老子曰く、(五)子又惡んか之を求めたるやと。曰く、吾れ之を陰陽(六)に求む、十有二年にして未だ得ずと。老子曰く然り。(七)(八)道をして獻ずべからしめば、則ち人之を其の君に獻ぜざる莫からん、道をして進むべからしめば、則ち人之を其の親に進めざる莫からん。(九)道をして以て人に告ぐべからしめば、則ち人其の兄弟に告げざること莫からん。道をして以て人に與ふるべからしめば、則ち人其の子孫に與へざる莫からん。(一〇)然り而して不可なるものは他なし。(一一)中主なければ止まらず、(一二)外正なければ行はれず。(一三)中より出づるもの、外に受けざれば、聖人出ださず、外より入るもの、中に主なければ、聖人隱れず。名は公器(一四)なり、多く取るべからず、(一五)仁義は先王の蘧廬なり、止だ以て一宿すべくして、久しく處るべからず、(一六)覯て責多ければなり。

(一) 孔子は其の年齢五十一歳になりたれども未だ眞實の道を知らず (二)、沛の地にゆきて老子に見ゆ (三) 足下は道を何處に求められしや (四) 禮樂制度 (五) 其の次には何處に求められしや (六) 道を天地萬物の理に求む (七) 道を得ざるは其の筈のことなり (八) 若し道が物品の如く獻上し得らるゝものならば何よりも先づ其の主君に獻上

同一而矜二於治一。故譬三皇五帝之禮義法度。其猶二柤梨橘柚一邪。其味相反。而皆可二於口一。故禮義法度者。應レ時而變者也。今取二猨狙一而衣以二周公之服一。彼必齕齧挽裂。盡去而後慊。觀二古今之異一。猶三猨狙之異二乎周公一也。故西施病レ心而矉二其里一。其里之醜人見而美レ之。歸亦捧レ心而矉二其里一。其里之富人見レ之。堅閉レ門而不レ出。貧人見レ之。挈二妻子一而去レ之走。彼知レ美レ矉。而不レ知三矉之所二以美一。惜乎而夫子。其窮哉。

治を衿る點に於ては皆同一　(一二)　猨を繕へて周公の服を着する時は噛みきり引きさきて全部服を取り去つて快しとせん　(一三)　越國の美女西施は胸を患ひて眉をひそめながら其の里を行けば同村の醜女之を見て美とし亦胸を抱いて眉をひそめながら其の里を行く　(一四)　眉をひそむるは西施にして美なり然るに醜女之を傚へずして其の態にならふ故に其の醜を見るにたへずして富人は堅く門を閉ぢて出でず貧人は門を閉づることもかなひがたきにより妻子を携へて里を去る　(一五)　醜女は西施が顰するの美なるを知れども何故に顰することの美なるかを知らず、孔子が先王の治を美として其の何がために美なるかを知らず徒にとつて用ひむとするは此の醜女にならふもの　(一六)　道聖なから彼の師たる孔子は今に困窮するならん

孔子行年五十有一。而不レ聞レ道。乃南之レ沛。見二老聃一。老聃曰。子來乎。

(一)孔子行年五十有一にして、而して道を聞かず、乃ち南のかた沛(二)に之きて、老聃を見る。老聃曰く、子來れるか。吾れ聞く、子は北方の賢者なりと。子亦道を得たるかと。孔子曰く、未だ得ざるなりと。老子曰く、(三)子惡んか之を求めたるやと。曰く、

尋常。古今非二水陸一與。周魯非二舟車一與。今蘄レ行二周於魯一是猶レ推二舟於陸一也。勞而無レ功。身必有レ殃。彼未レ知二夫無方之傳。應レ物而不レ窮者一也。且子獨不レ見二夫桔槹者一乎。引レ之則俯。舍レ之則仰。彼人之所レ引。非レ引レ人也。故俯仰而不レ得二罪於人一。故夫三皇五帝之禮義法度。不レ矜二於

所以を知らず。惜いかな、而の夫子、其れ窮せんかなと。(二六)

（一）魯の大師 （二）孔子の衞にゆかるゝを如何におもふや （三）草を結んで狗を作り以て祭に用ひ終れば之を棄つ （四）芻狗を未だ祭祀に列らねざる前には篋に入れ緞錦を以て被ひ神主は齋戒沐浴して之を神に供ふ （五）已に祭祀につらねて事終るときは棄てられて行人其の上を踐み草刈ども之を取つてタキツケとして焚く （六）棄てられたる芻狗を再び拾ひて篋に入れ緞錦を以て被ひ其の下に遊居し寢臥するときは惡しき夢を見ずとも屢魘はるゝことあるべし （七）汝の師たる孔子は古先王の已に陳ねて神を祭りし芻狗を拾ひ來り弟子を集めて其の下に遊居寢臥す。是即ち孔子が堯舜禹湯文武周公の陳べし仁義を踏襲せしをさす （八）孔子宋に於て弟子と共に禮を大樹の下に習ひしに司馬桓魋其の樹を斬伐す （九）孔子衞に遊びたりしに衞人之を惡みて孔子の足跡を削り去る （一〇）孔子殷の故地と東周とに遊びて困しむ （一一）孔子楚に之かんとせしに陳蔡の太夫相謀りて孔子を包圍し爲めに七日熟食をとらず殆ど死に瀕す （一二）是れ孔子の魘はるゝものならずや （一三）水を行くべき舟をして陸に進ましめんとするならば一生涯押すも僅かの路程をも行くまじ （一四）古代を水に譬ふれば現代は陸文武周公の治めし周を舟に譬ふれば今の魯は車とも云ふべく萬般の事情凡て異なり （一五）孔子は常なくして轉ずる即ち臨機應變が物に應じ變化窮り無きことを知らずして周の教政を魯に強ひんとするもの （一六）ハネツルベ （一七）ハネツルベは引けばうつむき放てば仰ぐものなるが之はハネツルベが人を引くに非ずして人がハネツルベを引くものなるが故に俯仰するも人より罪せらるゝことなし （一八）伏犧神農黃帝と小昊顓頊商辛唐虞、史記にいふ所は之と少しく異なり （一九）三皇五帝の制せられ禮義法度は常に同じく一定するを尙ばずして應變して治を得ることを目的とす （二〇）柤は味甘くして梨に似たる果實 （二一）各味は異なれども口に可なる點とては一樣なる如く三皇五帝各形式は多少の異同あれども

得夢。必且數眯焉。今而夫子。亦取先王已陳芻狗。取弟子遊居寢臥其下。故伐樹於宋。削迹於衞。窮於商周。是非其夢邪。圍於陳蔡之間。七日不火食。死生相與鄰。是非其眯邪。夫水行莫如用舟。而陸行莫如用車。以舟之可行於水也。而求推之於陸。則沒世不行

今、周を魯に行はんことを蘄むるは、是れ猶ほ舟を陸に推すがごときなり。勞して功なく、身必ず殃有らん。彼は未だ夫の無方(一六)の傳ふる、物に應じて窮まらざるあるを知らざる者なり。且子獨り夫の桔槹(一七)なるものを見ざるか。之を引けば則ち俯し、之を舍けば則ち仰ぐ。彼は人の引く所、人を引くに非ざるなり。故に俯仰して罪を人に得ず。故に夫の三皇五帝(一八)の禮義法度(一九)、同を矜ばずして治を矜ぶ。故に譬へば三皇五帝の禮義法度は、其れ猶ほ柤梨橘柚(二〇)のごときか、其の味相反(二一)して、而して皆口に可なり。故に禮義法度は、時に應じて變ずるものなり。今猨狙(二二)を取つて、衣するに周公の服を以てせば、彼れ必ず齕齧挽裂して盡く去つて而る後に慊らん。古今の異を觀るに、猶ほ猨狙の周公に異なるがごときなり。故に西施(二三)、心を病んで、其の里に矉すれに、其の里の醜人見て之を美とし、歸つて亦心を捧けて其の里に矉す。其の里の富人(二四)之を見、堅く門を閉ぢて出でず、貧人之を見、妻子を挈へて之を去つて走る。彼(二五)は矉に美なるを知つて、矉の美なる

孔子西遊二於衞一。顏淵問二師金一曰。以二夫子之行一爲二奚如一。師金曰。惜乎而夫子。其窮哉。顏淵曰何也。師金曰。夫芻狗之未レ陳也。盛以二篋衍一巾以二文繡一。尸祝齊戒以將レ之。及二其已陳一也。行者踐二其首脊一。蘇者取而爨レ之而已。將復取而盛以二篋衍一巾以二文繡一。遊二居寢三臥其下一。彼不レ

孔子西のかた衞に遊ばんとす。顏淵、師金(一)に問うて曰く、夫子の行(二)を以て奚如んと爲すと。師金曰く、惜いかな而の夫子は、其れ窮せん哉と。顏淵曰く、何ぞやと。師金曰く、夫れ芻狗(三)の未だ陳ねざるや(四)、盛るに篋衍を以てし、巾ふに文繡を以てし、尸祝齊戒して以て之を將ふ。其の已に陳ぬるに及んでや(五)、行く者其の首脊を踐み、蘇者取つて之を爨ぐのみ。將に復た取つて盛るに篋衍を以てし、巾ふに文繡を以てせんに、其の下に遊居寢臥せば(六)、彼れ夢みるを得ずば、必ず且に數〻眯せんとす。今而(七)の夫子、亦先王の已に陳ねし芻狗を取り、弟子を取つて其の下に遊居寢臥す。故に樹を宋に伐られ(八)、迹を衞に削られ(九)、商周に窮す(一〇)、是れ其の夢むるに非ずや。陳蔡の間に圍まれて(一一)、七日火食せず、死と生と相與に鄰す、是れ其の眯するに非ずや(一二)。夫れ水行は舟を用ふるに如くは莫く、而して陸行は車を用ふるに如くは莫し。舟の水に行くべきを以てして(一三)、之を陸に推すを求めば、則ち世を沒ふるまで尋常をも行かじ。古今は水陸に非ずや(一四)、周魯は舟車に非ずや。

人。聖也者、達二於情一而遂二於命一也。天機不レ張而五官皆備。此之謂二天樂一。無レ言而心說。故有焱氏爲二之頌一曰、聽レ之不レ聞二其聲一。視レ之不レ見二其形一。充二滿天地一、苞二裹六極一。女欲レ聽レ之而無レ接焉。而故惑也。樂也者始二於懼一。懼故祟。吾又次レ之以レ怠。怠故遁。卒二之於惑一。惑故愚。愚故道。道可二載而與一レ之倶一也。

るが故に遁る。之を惑に卒ふ、惑なるが故に愚、愚なるが故に道。道をば載せて之と倶にすべきなりと。

● 委蛇として處るが故に無定の聲を發して引き立つ ● 無窮の聲は聲を貫けて盡す所なからんを恐れ之を調和するに自然の理を以てす ● 木の根々たるを遂ふ如く流動し草木叢生する如く競生す ● 衆聲相合することは叢の如くにして其の聲像定形なし ● 林の如く繁茂すれども其の跡をひかず ● 幽寂昏冥にして聲無く無方に動きて變化定まりなく不轉の異體をとどめに隔る ● 或は之を死といはゞ死といふべく生といはゞ生といふべし ● 衆の實なる實ともいふべく實の實なる衆とも云ふべし ● 流動轉移して一定の聲を主とせず ● 世人之を疑うて聖人に問ひはかる ● 聖とは物の實情を明かにして天命に從ふもの ● 形聲をなゝしかけを盈り繕まずして五官の司る所皆備具す ● 天機動かざるが故に言ふことなく天籟無聲にして自ら心愉悦す ● 炎帝神農氏をさすと云ふ ● 之を聽けども其の聲を聞かず之を視れども其の形を見ず。樂の精神を調達するが故に形聲を知ることなし ● 無聲無形にして天地四方を包羅す ● 之を聽かんと欲すれども既に形無く聲無きが故に之に接するに由なし ● 音樂と云ふものは始めてきくときは之を懼る、懼るゝが故に之を崇しとす ● 倦ましむるが故に崇敬を亡ぼして物外に遁る ● 遁ふとは知を忘るる故に愚、無知なるときは自然の道に歸す ● 道に入るときはわが馬車に同乘して倶に遊ぶべし。卽ち共に至樂を云ふべきなりとの意

也。儻然立於四虛之道。倚於槁梧而吟。目知窮乎所欲見。力屈乎所欲逐。吾既不及已矣。形充空虛。乃至委蛇。女委蛇。故怠。

吾又奏之。以無怠之聲。調之以自然之命。故若混逐叢生。林樂而無形。布揮而不曳。幽昏而無聲。動於無方。居於窈冥。或謂之死。或謂之生。或謂之實。或謂之榮。行流散徙。不主常聲。世疑之稽於聖

目知力等之を樂つる時は我無くして一身天地と大同して空に充ち委蛇として物のまゝに動く　(二二)　汝既に物のまゝに動き意の爲さんと欲する所無かりしが故に心放弛して倦みしなり

吾又之を奏するに、(一)無怠の聲を以てし、之を調ふるに(二)自然の命を以てす。故に(三)混逐叢生するが若く、(四)林樂して形無く、(五)布揮して而して曳かず。(六)幽昏にして聲無く、無方に動き、窈冥に居る。(七)或は之を死と謂ひ、(八)或は之を生と謂ひ、或は之を實と謂ひ、或は之を榮と謂ふ。(九)行流散徙して、常聲を主とせず。(一〇)世之を疑うて聖人に稽ふ。(一一)聖とは、情に達して命に遂ぐるなり。(一二)天機張らずして五官皆備る。此を之れ天樂と謂ふ。(一三)言ふなくして心說ぶ。故に(一四)有焱氏之が頌を爲して曰く、之を聽いて其の聲を聞かず、之を視て其の形を見ず、天地に充滿し、(一六)六極を(一五)苞裹すと。(一七)女之を聽かんと欲して接すること無し。而るが故に惑ふなり。(一八)樂とは懼に始まる、懼るゝが故に祟しとす、吾れ又之れに次ぐに怠を以てす、(一九)怠な

陰陽之和。燭之以日月之明。其聲能短能長。能柔能剛。變化齊一。不主故常。在谷滿谷。在阬滿阬。塗郤守神。以物爲量。其聲揮綽。其名高明。是故鬼神守其幽。日月星辰行其紀。吾止之於有窮。流之於無止。子欲慮之。而不能知也。望之而不能見也。逐之而不能及

能く短能く長、能く柔能く剛。變化齊一、故常を主とせず。谷に在れば谷に滿ち、阬に在れば阬に滿つ。郤を塗ぎて神を守り、物を以て量を爲す。其の聲揮綽、其の名高明。是の故に鬼神其の幽を守り、日月星辰其の紀を行る。吾之を有窮に止め、之を無止に流す。子、之を慮らんと欲して、知ること能はざるなり。之を望むも、見ること能はざるなり。之を逐うも、及ぶこと能はざるなり。(九)儻然として四虛の道に立ち、槁梧に倚つて吟ず。(一〇)目の知は見んと欲する所に窮まり、力は逐はんと欲する所に屈きて、吾れ既に及ばざるのみなる夫。(一一)形は空虛に充ち、乃ち委蛇に至る。(一二)汝委蛇たり、故に怠る。

(一) 陰陽の音律和合し聲調日月の明なる如く高明 (二) 變化と齊一と互に交迭して一定せず (三) 在る處に隨つて、變じ之に滿つ (四) 隙間に滿ち塞がりて物の精神を保護し物の大小に因りて其の應ずる量を異にす (五) 其の音聲宏暢條暢にして其の節奏高大光明 (六) 鬼神は其の處其の所を守りて幽界を侵さず日月星辰は其の紀道を循還して度を失はず。十二年を一紀と云ふ (七) 之を慮するに其の限りある所に止めることなき所に放ち止まるも動くも自然に任す (八) 之を追へども追及ぶこと能はず (九) 無心にして太虛の中に立ち几に凭りて吟歎し復た爲す所無し (一〇) 見んと欲すれども目知窮まり逐はんと欲すれども力盡きて最早既に及ばざるを知り止めてしまひたり (一一)

人事。順レ之以ニ天理。行レ之以ニ五德。應レ之以ニ自然。然後調ニ理四時。太ニ和萬物。四時迭起。萬物循生。一盛一衰。文武倫經。一淸一濁。陰陽調和。流ニ光其聲。蟄蟲始作。吾驚レ之以ニ雷霆。其卒無レ尾。其始無レ首。一死一生。一僨一起。所レ常無レ窮。而一不レ可レ待。女故懼也。

なくして、而して一は待つべからず。女故に懼るゝなり。(一八)

(一) 黃帝の臣 (二) 周禮に咸池を舞ひ以て地を祭るとあり、樂の名 (三) 湖南の地名 (四) 始めて樂を聽きし時は驚きおそれ、再び聽きし時には心倦怠し、終りに聽きし時は其の意を得ずして惑ふ (五) 心定まらず口もの言はずして自得せず (六) 汝多分然りしなるべし (七) 奏するには人を用ひ五音六律は天地の氣候と應ずるが故に驗を天にとつて之を正す (八) 樂の節を序づるには禮義を以て之を調ふ (九) 樂の淸濁高下は聲氣の正邪による故に聲氣の元たる太淸に基づきて樂を建つ (一〇) 至上の樂は人を以て之を奏し天地の氣候に基づく天理によつて之を順にし禮義の原たる五德を以て之を演奏し大淸の自然を以て之に應ず (一一) 是の如くにして始めて四季を調和し萬物をとゝのへ和ぐ (一二) 一音は高く一音は低くして物を長ずる春の氣たる文と、物を殺す秋の氣たる武と次序正しくとゝのふ (一三) 一音は淸み一音は濁りて節調同じからざる中に陰陽の律呂調和し其の聲よどみなく流動して光華あり (一四) 雷鳴つて蟄虫啓いて出づる如く應じて鳴り感じて動く (一五) 終なきが如く始めなきが如く循還して窮らず (一六) 或は死し或は生じ或は倒れ或は起る如く音の生起定まらず (一七) 常として定めある點は窮りなく變化して捉へがたく歸一の態を求むるも待ち望むべからず (一八) 此の如く茫漠として捉へがたかりし故始めて聽きし時汝恐れたるなり

吾又奏レ之。以ニ

吾又之を奏するに(一)陰陽の和を以てし、之を燭らすに日月の明を以てす。其の聲

其徳一者也。不足多也。故曰。至貴國爵幷焉。至富國財幷焉。至願名譽幷焉。是以道不渝。

は爵位を否定す　(一二)　眞の富に於ては財貨を否定し眞の顯榮に於ては世俗の名譽を否定す　(一三)　至仁は仁を越け至樂は樂を斥くるを以て道は千古依然として變易せず

北門成問於黄帝曰。帝張咸池之樂於洞庭之野。吾始聞之懼。復聞之怠。卒聞之而惑。蕩蕩默默。乃不自得。帝曰。女殆其然哉。吾奏之以人。徵之以天。行之以禮義。建之以太清。夫至樂者。先應之以

(一)北門成、黄帝に問うて曰く、帝咸池の樂を洞庭の野に張る。吾れ始めて之を聞いて懼れ、復た之を聞いて怠り、卒に之を聞いて惑ふ、蕩蕩默默として、乃ち自ら得ずと。帝曰く、(六)女殆んど其れ然らんかな、吾れ之を奏するに人を以てし、之を徵するに天を以てし、之を行るに禮義を以てし、之を建つるに太淸を以てす。夫れ至樂は、先づ之に應ずるに人事を以てし、之に順ふに天理を以てし、之を行るに五徳を以てし、之に應ずるに自然を以てす。然る後四時を調理し、萬物を太和す。四時迭ひに起り、萬物循つて生ず。一盛一衰、文武倫經し、一淸一濁、陰陽調和し、其の聲を流光にす。蟄蟲始めて作り、吾れ之を驚かすに雷霆を以てす。其の卒り尾なく、其の始め首なし、一死一生、一僨一起、常とする所は窮り

何也。則去レ之遠也。故曰。以レ敬孝易。以レ愛孝難。以レ愛孝易。而忘レ親難。忘レ親易。使二親忘一レ我難。使二親忘一レ我易。兼二忘天下一難。兼二忘天下一易。使三天下兼二忘我一難。夫德遺二堯舜一而不レ爲也。利澤施二於萬世一。天下莫レ知也。豈直太息而言二仁孝一乎哉。夫孝悌仁義。忠信貞廉。此皆自勉以役二

以て孝するは易くして、(四)親を忘るゝは難し。親を忘るゝは易く、(五)親をして我を忘れしむるは難し、親をして我を忘れしむるは易く、(六)天下を兼ね忘るゝは難し。天下を兼ね忘るゝは易く、(七)天下をして我を兼ね忘れしむるは難し。夫れ(八)德堯舜を遺れて爲さず、(九)利澤萬世に施して、天下知ること莫し、(一〇)豈に直に太息して仁孝を言はんや。夫れ(一一)孝悌仁義、忠信貞廉、此れ皆自ら勉めて以て其の德を役するものなり。多とするに足らざるなり。故に曰く、(一二)至貴は國爵を并け、(一三)至富は國財を并け、至顯は名譽を并くと。(一四)是を以て道は渝らずと。

(一) 楚の國都 (二) 北海の山の名 (三) 意あつて殊更に敬ふ孝は易けれど愛を以てする孝は難し (四) 親に孝することを忘れてする孝行は難し (五) 親をして我を忘れしめ親と子兩つながら無心にしてする孝は難し (六) 天下を治めて其の治むることを忘るゝは難し (七) 天下萬民をして我が化を被りながら其の化の由る所 知らしめざるは難し (八) 堯舜は未だ天下に兼ね忘らるゝ妙境に達せざるものなれば堯舜の行爲は之を棄てゝ學び爲さず (九) 利益恩澤萬世の後に施して天下其の恩惠を知らず (一〇) 何ぞ直に謂歎して仁と孝とを言はんや至仁に仁なく至孝に孝なく之を言ふは未だ至らず (一一) 親に孝に兄弟に悌に仁義を守り忠篤誠信貞潔清廉なる諸德は其の虚靜に安んずること能はず矯飾して其の本然の德性を不自然に使役するもの (一二) 爵位あれば之を貴となせど眞の貴に於て

商太宰蕩問ニ仁於莊子ニ。莊子曰。虎狼仁也。曰何謂也。莊子曰。父子相親。何爲不仁。曰請ニ問至仁ニ。莊子曰至仁無レ親。大宰曰。蕩聞レ之。無レ親則不レ愛。不レ愛則不レ孝。謂ニ至仁不孝ニ可乎。莊子曰。不レ然。夫至仁尙矣。孝固不レ足ニ以言ヒ之。此非ニ過レ孝之言一也。不レ及レ孝之言也。

商の太宰蕩、仁を莊子に問ふ。莊子曰く、虎狼は仁なり。曰く何の謂ぞやと。莊子曰く、父子相親しむ、何爲れぞ不仁ならんと。曰く、至仁を請ひ問ふと。莊子曰く、至仁は親しむこと無しと。太宰曰く、蕩之を聞く、親しむこと無ければ則ち愛せず、愛せざれば則ち孝ならずと。至仁を不孝と謂ふ、可ならんかと。莊子曰く、然らず。夫れ至仁は尙し。孝固より以て之を言ふに足らず。此れ孝に過ぐるの言に非ざるなり、孝に及ばざるの言なり。

(一) 商は宋國なり。太宰は官名、名は盈、蕩は其の字 (二) 虎狼の兇暴と雖も父子相親しむことあり (三) 至仁は仁の大なるもの、親しむとは偏愛す故に至仁は親しまず (四) 至仁は高尙至極の道德なれば孝の如き偏小德を以て至仁を論ずべからず (五) 孝以上の高言に非ずして孝以下の俗言なり

夫南行者至ニ於郢ニ。北面而不レ見ニ冥山ニ。是

夫れ南行するもの郢に至り、北面して冥山を見ず。是れ何ぞや。則ち去ることの遠ければなり。故に曰く、敬を以て孝するは易く、愛を以て孝するは難し。愛を

巳邪。意者其運轉而不レ能二自止一邪。雲者爲レ雨乎。雨者爲レ雲乎。孰隆二施是一。孰居二無事一。淫樂而勸レ是。風起二北方一。一西一東。有レ上彷徨。孰噓二吸是一。孰居二無事一而披二拂是一。敢問何故。

す、孰れか是を噓吸する、(一〇)孰れか無事に居て是を披拂する。(一一)敢へて問ふ何の故ぞ。

(一) 此の篇天地帝王の道は無爲を貴んで有爲を賤しみ、道德を重んじて仁義を輕んずべきを論ず (二) 天は運行し地は靜止し日月旋轉して各其の所を爭ふ、此の宇宙の活動は果して何物か之を先だちて行ふぞ (三) 共にツナなりシメククリする意 (四) 何者が無事靜寂の地位に居りて此の活動を推し行ふか (五) 機械をあやつる糸ありて動き出しては止むことを得ざるか (六) 雲が凝結して雨となるか、雨水が蒸發して雲となるか (七) 雲を興し雨を降す (八) 雲雨は陰陽和氣の應ずる所なるが故に淫樂といふ (九) 或は西に吹き或は東に吹き下より上に吹きのぼして吹きまはる (一〇) 息を吐くと吸ふ、風の動くをいふ (一一) 風を煽て動かす

巫咸祒曰。來。吾語レ女。天有二六極五常一。帝王順レ之則治。逆レ之則凶。九洛之事。治成德備。監二照下土一。天下戴レ之。此謂二上皇一。

(一)巫咸祒曰く、來れ、吾れ女に語らん。天に六(二)極五常有り。帝王之に順へば則ち治、之に逆へば則ち凶。(三)九洛を事とすれば、治成り德備はり、下土を監照し、天下之を戴く。此を上皇と謂ふと。

(一) 殷の神巫、祒は名 (二) 上下四方及び水火木金土の五行 (三) 洛書の九疇、天より地に賜ひし書といふ。此の書の述ぶる所に順はゞ治功成就し、道德完備し天下を統御し天下之を戴かん

也以臣之事一
觀之。斵輪徐
則甘而不固。
疾則苦而不入。不徐不疾。
得之於手。而
應於心。口不能言。有數存焉於其間。臣不能以喩臣之子。臣之子亦不能受之於臣。是以
行年七十。而老斵輪。古之人與。其不可傳也死矣。然則君之所讀者。古人之糟魄已夫。

り糟のみ (五)道理あらば無暇の罪を宥しつかはさんが、道理立たざる時は死罪に行はん (六)車大工自らの仕事よりして觀察す (七)車輪をけづるにゆるき時は甘くして堅固ならず (八)しまる時は苦澁にしてはまらず ゆるからずかたからざる加減は手に知りて心に應じ其呼吸を悟る (九)此の加減は口に言ふことあたはずして其處に自然の理法存す (一〇)以心傳心にして口說を以て授受すべからず (一一)書中の言說既に傳ふべからずとせば古人亦道を傳ふるに由なくして死せり

天其運乎。地
其處乎。日月
其爭於所乎。
孰主張是。孰
綱維是。孰居
無事推而行
是。意者其有
機緘而不得

（一）天運

（二）天其れ運るか、地其れ處るか、日月其れ所を爭ふか。孰れか是を主張する、孰れか是を（三）綱維する、（四）孰れか無事に居りて推して是を行れる、意ふに其れ機緘（五）有つて已むことを得ざるか、意ふに其れ運轉して自ら止まること能はざるか。（六）雲なるもの雨となるか、雨なるもの雲となるか、孰れか是を（七）降施する、孰れか無事に居て、（八）淫樂して是を勸むる。風北方に起り、（九）一西一東、上ること有つて彷徨

名聲。果不レ足㆓以得㆒彼之情㆒。則知者不レ言。言者不レ知。而世豈識レ之哉。

桓公讀㆓書於堂上㆒。輪扁斲㆓輪於堂下㆒。釋㆓椎鑿㆒而上。問㆓桓公㆒曰。敢問。公之所レ讀爲㆓何言㆒邪。公曰聖人之言也。曰聖人在乎。公曰已死矣。曰然則君之所レ讀者。古人之糟魄已夫。桓公曰。寡人讀レ書。輪人安得レ議乎。有レ說則可。無レ說則死。輪扁曰。臣

(一)桓公書を堂上に讀む、(二)輪扁輪を堂下に斲る。椎鑿を釋てて上り、桓公に問うて曰く、敢へて問ふ、公の讀む所は何の言と爲すかと。公曰く聖人の言なりと。曰く、聖人在りやと。公曰く、已に死せりと。曰く、然らば則ち君の(三)讀む所のものは、古人の糟魄のみなる夫。桓公曰く、寡人書を讀む。輪人安んぞ議するを得んや。(四)說有らば則ち可、說無くんば則ち死と。輪扁曰く、(五)臣や臣の事を以て之を觀る。(六)輪を斲ること徐なれば、則ち甘にして固からず。(七)疾なれば則ち苦にして入らず、(八)徐ならず疾ならず、之を手に得て、心に應ず。(九)口言ふこと能はず、數あつて其の間に存す。(一〇)臣以て臣の子に喩すこと能はず、臣の子も亦之を臣に受くること能はず。是を以て行年七十にして、老いて輪を斲る。(一一)古の人か、其れ傳ふべからずして死せり。然らば則ち君の讀む所のものは、古人の糟魄のみなる夫と。

(一)齊の桓公、春秋戰國時代五覇の一人 (二)車大工が車輪を堂下にけづる (三)主君の讀まるゝものは古人の殘

世之所貴道者書也。書不過語。語有貴也。語之所貴者意也。意有所隨。意之所隨者。不可以言傳也。而世因貴言傳書。世雖貴之哉。猶不足貴也。爲其貴非其貴也。故視而可見者。形與色也。聽而可聞者。名與聲也。悲夫。世人以形色名聲爲足以得彼之情。夫形色

(一)世の道に貴ぶ所の者は書なり、(二)書は語に過ぎず。語は貴ぶ有り、(三)語の貴ぶ所のものは意なり、(四)意は隨ふ所あり、意の隨ふ所のものは、言を以て傳ふべからざるなり。而して(五)世、言を貴ぶに因つて書を傳ふ。世や之を貴ぶと雖も、猶ほ貴ぶに足らざるなり、其の貴は其の貴きに非ざるが爲めなり。故に視て見るべきものは、(六)形と色となり、聽いて聞くべきものは、名と聲となり、悲しいかな、(七)世人形色名聲を以て、以て彼の情を得るに足ると爲すこと。夫れ形色名聲、果して以て彼の情を得るに足らざれば、則ち(八)知るものは言はず、(九)言ふものは知らず。(一〇)而るに世豈に之を識らんや。

(一) 世人は書を以て道を傳ふべしとなして之を貴ぶ　(二) 書は元來語を聚せたるものに過ぎず　(三) 語は自ら貴からずして別に其の貴ぶ所のものあり、卽ち語にて表す所の意義是なり　(四) 語の意義は隨ひ向ふ所のもの卽ち道あり　(五) 世人書を貴ぶと雖も其の貴ぶ所は貴ぶに足らざる書を貴ぶのみ　(六) 眼に由て見ゆるものは形と色となり耳に聽いて聞ゆるものは名と聲となり　(七) 形色名聲を以て道の眞情を得るに足るとするは悲しむべし　(八) 眞の道を知れるものは言の以て傳ふべからざるを知りて言はず　(九) 形色名聲の末を言ふものは眞の道を知らず　(一〇) 世人は區々の言を執つて道となす豈道を識るべけんや

夫子曰。夫道於レ大不レ終。於レ小不レ遺。故萬物備。廣廣乎其無レ不レ容也。淵乎其不レ可レ測也。形德仁義。神之末也。非二至人一。孰能定レ之。夫至人有レ世。不二亦大一乎。而不レ足三以爲二之累一。天下奮レ棅。而不二與レ之偕一。審二乎無假一。而不二與レ利遷一。極二物之眞一。能守二其本一。故外二天地一。遺二萬物一。而神未二嘗有レ所レ困也一。通二乎道一。合二乎德一。退二仁義一。賓二禮樂一。至人之心有レ所レ定矣。

夫子(一)曰く、夫れ道(二)は大に於て終らず、小に於て遺さず(三)、故に萬物備はる。廣廣乎として其れ容れざること無きなり、淵乎(四)として其れ測るべからざるなり。形德(五)仁義は、神の末なり、至人(六)に非ざれば、孰れか能く之を定めん。夫れ至人の世を有つは、亦大ならずや、而かも以て之が累とするに足らず。天下棅(八)を奮へども、而かも之と偕にせず。無假(九)を審(七)にして、利と遷らず、物の眞を極めて、能く其の本を守る。故に天地(一〇)を外にし、萬物を遺れて、神未だ嘗て困しむ所あらざるなり。道に通じ、德に合し、仁義を退け、禮樂を賓けて、至人の心定まる所ありと。

(一) 老子 (二) 道は廣大にして終極なし (三) 小なるものをも遺さず大小を兼ね存するが故に萬物具備す (四) 深遠にして測り知るべからず (五) 形と德と仁と義とは精神の輕き部分に屬するもの (六) 至德の人に非ずば形德仁義の末たることを定めがたし (七) 無爲玄默なるが故に世を保てども之が爲に累はされず (八) 天下に權柄をふるへどもそれに心をひかされずして己は靜に處る (九) 形あるものは皆假なり故に無假は眞に當る、即ち眞實をつまびらかに察するが故に利欲のために心をうつさず (一〇) 天地と萬物とを忘れはてゝ精神物に累はされず

神聖之人。吾自以爲脫焉。昔者子呼我牛也。而謂之牛。呼我馬也。而謂之馬。苟有其實。人與之名而弗受。再受其殃。吾服也恒服。吾非以服有服。士成綺鴈行避影。履行遂進。而問修身若何。老子曰。而容崖然。而目衝然。而顙頯然。而口闞然。而狀義然。似繫馬而止也。動而持。發也機。察而審。知巧而覩於泰。凡以爲不信。邊竟有人焉。其名爲竊。

凡て以て不信たり。邊竟に人あらば、其の名を竊と爲さんと。

(一) 姓は士字は成綺 (二) 百日舍り足の裏の胼皮を重ぬる如く勞して來る (三) 鼠穴に蔬菜の餘りあるに其の妹を棄て、養はざるは不仁 (四) 生のもの熟せるもの前に盡つるに斂積限なきは貪れり (五) 知らぬ顏して應ぜず (六) 今吾が心前來を悔いて離れるは何故ぞ (七) 吾は巧知神聖の人より脫却せるものなり (八) 足下我を牛と呼ばゞ牛、馬と呼ばゞ馬たるに甘んぜん故に聖人に非ずといはヾ、聖人に非ざるにても可 (九) かりにも其實ありながら人之に名を與へて受けざるときは、再び其の災殃を受けん。吾は聖知を脫却して聖人に非ずといふは實なり、故に足下が聖人に非ずと名づくるを甘じ受く (一〇) 吾が人言に服し從ふは有心故意に非ずして無心恒常なり、故に服するの心ありて服するにあらず自然に服するなり (一一) 肩を比べず一足退きて雁行し老子の影を踏むを避け之を履む (一二) 一歩一歩に愼んで進む (一三) 汝の容貌はきはだちて人に驕り (一四) 汝の目は突出し汝の額は廣く汝の口は大汝の狀貌は高くとまる (一五) 其の心は自ら持する所ありて止まれど心は彼方に奔馳す (一六) 動かんとして繫めたへ發するや的中を期して動く (一七) 是非を察し利害の取捨に審 (一八) 知識才能ありて驕泰の氣外に現る (一九) 不信實にして虛僞の行ひあり (二〇) 國境に此の如き人ありたらば境を踰り隙をうかがうて他國を侵し功となすに至る盜竊の類とよばれん

士成綺。見二老子一而問曰。吾聞夫子聖人也。吾固不レ辭二遠道一。而來願レ見。百舍重趼而不二敢息一。今吾觀レ子。非二聖人一也。鼠壤有二餘蔬一。而棄レ妹不仁也。生熟不レ盡二於前一。而積斂無レ崖。老子漠然不レ應。士成綺。明日復見曰。昔者吾。有レ刺二於子一。今吾心正郤矣。何故也。老子曰。夫巧知

(一)士成綺、老子を見て問うて曰く、吾れ聞く夫子は聖人なりと。吾れ固より遠道を辭せずして、來つて見んことを願ふ。(二)百舍重趼して敢へて息はず。今吾子を觀るに、聖人に非ざるなり、(三)鼠壤に餘蔬有りて、妹を棄つるは不仁なり、(四)生熟前に盡きずして、積斂崖なしと。老子(五)漠然として應ぜず。士成綺、明日復た見て曰く、昔者吾、子を刺ることあり、(六)今吾が心正に郤けり、何の故ぞやと。老子曰く、夫れ(七)巧知神聖の人、吾れ自ら以爲へらく脱焉たりと。(八)昔者子我を牛と呼ばば之を牛と謂はん、我を馬と呼ばば、之を馬と謂はん。(九)苟くも其の實あらんに、人之に名を與へて受けずんば、再び其の殃を受けん。吾が服するや恆に服せり、吾は服するを以て服することあるには非ずと。(一〇)士成綺(一一)雁行して影を避け、(一二)履行して遂に進んで、身を修むること若何と問ふ。老子曰く、(一三)而の容は崖然、(一四)而の目は衝然、而の顙は頯然、而の口は闞然、而の狀は義然。(一五)馬を繫いで止むるに似たり。(一六)動かんとして持、發するや機、(一七)察にして審、(一八)知巧にして泰かに觀る。

之性邪。孔子曰然。君子不仁則不成。不義則不生。仁義眞人之性也。又將奚爲矣。老聃曰。請問。何謂仁義。孔子曰。中心物愷。兼愛無私。此仁義之情也。老聃曰。意幾乎後言。夫兼愛不亦迂乎。無私焉乃私也。夫子若欲使天下無失其牧乎。則天地固有常矣。日月固有明矣。星辰固有列矣。禽獸固有羣矣。樹木固有立矣。夫子亦放德而行。循道而趨。已至矣。又何偈偈乎揭仁義。若擊鼓而求亡子焉。意夫子亂人之性也。

か、則ち天地固より常あり、日月固より明あり、星辰固より列あり、禽獸固より羣あり、樹木固より立つあり。夫子亦德に放つて行き、道に循つて趨かば、已に至らん。又何ぞ偈偈乎として仁義を揭ぐること、鼓を擊つて亡子を求むるが若くなる。意、夫子は人の性を亂るなりと。

● 著書を周の朝廷に納めんとす ● 子路の名 ● 周藏は周の書藏の名 ● 老子名は聃 ● 繙說して書に釋り說る ● 書を周むることを許さず ● 要約に冗長にして要領を得ざる故其の要領を求らん ● 仁義は人の本性に具はる徳か ● 仁は愛なり物の成る所以 ● 義は宜なり物のよりて生ずる所以 ● 仁義以外に又何をか爲すべきあらんや ● 心の奥底に物と共に樂しみ和ぎ、自他平等に愛して私心なきが仁義の實情なり ● 迂遠なる言に近し ● 兼愛するに意ありて愛すれば是既に私あるなり ● 人民 ● 以上皆其の自然に因るを說く ● 夫子亦自然の德に任せて自適し、道にしたがつて流通すればそれにて十分と申すもの、何ぞ仁義を以てする要あらんや ● カシ努して仁義を世に標榜することは大鼓を打つて迷兒を求むるが如く騷がしきは何故ぞ。

天德而出寧。日月照而四時行。若晝夜之有經。雲行而雨施矣。堯曰。然則膠膠擾擾乎。子天之合也。我人之合也。夫天地者。古之所大也。而黃帝堯舜之所共美也。故古之王天下者奚爲哉。天地而已矣。

孔子。西藏書於周室。子路謀曰。由聞。周之徵藏史有老聃者。免而歸居。夫子欲藏書。則試往因焉。孔子曰善。往見老聃。而老聃不許。於是繙十二經以說老聃。中其說曰。太謾。願聞其要。孔子曰。要在仁義。老聃曰。請問。仁義人

孔子、西のかた書を周室に藏めんとす。(一)子路謀つて曰く、(二)由聞く、周の徵藏史に(三)老聃なるものあり、免して(五)歸居すと。夫子書を藏めんと欲せば、則ち試みに往いて因れ(四)と。孔子曰く、善しと。往いて老聃を見る。而して老聃許さず。(六)是に於て十二經を繙きて、以て老聃に說く。其の說を中ばにして曰く、太だ謾なり、(七)願くは其の要を聞かんと。孔子曰く、要は仁義に在りと。老聃曰く、請ひ問ふ、仁(八)義は人の性かと。孔子曰く然り、君子仁(九)ならざれば則ち成らず、義(一〇)ならざれば則ち生ぜず。仁義は眞に人の性なり。(一一)又將た奚をか爲さんやと。老聃曰く、請ひ問ふ、何をか仁義と謂ふ。孔子曰く、中心(一二)物と愷んで、兼愛私無きは、此れ仁義の情なり。老聃曰く、意、後言(一三)に幾し。夫れ兼愛は亦迂ならずや、私(一四)無きは乃ち私なり。夫子若し天下をして其の牧(一五)を失ふ無からしめんを欲せん

用天下。此之謂辯士一曲之人也。禮法數度形名比詳。古人有之。此下之所以事上。非上之所以畜下也。昔者舜問於堯曰。天王之用心何如。堯曰。吾不敖無告。不廢窮民。苦死者。嘉孺子。而哀婦人。此吾所以用心已。舜曰美則美矣。而未大也。堯曰。然則何如。舜曰。

らざるなりと。堯曰く、然らば則ち如何んと。舜曰く、(一二)天德なれば出でて寧し。(一三)日月照して四時行はる。晝夜の經有り、雲行いて雨施すが若しと。堯曰く、(一四)然らば則ち膠膠擾擾たるか。(一五)子は天と合ふなり、我は人と合ふなりと。夫れ天地なるものは、古の大とする所にして、黃帝堯舜の共に美とする所なり。故に(一六)古の天下に王たるものは奚をか爲さんや。天地のみと。

(一) 天よりして道德道德よりして仁義仁義よりして分守分守よりして形名に五變す (二) 形名よりして因任因任よりして原省原省よりして是非是非よりして賞罰、天より凡て九變す (三) 其の順序を踏みず猝突に形名を語るは、其の本たる天を知らざるもの (四) 天を明かにするを言はずして形名賞罰をいひて、道を倒まにし道に迕うて說くものは人に治め役せらる (五) 形名賞罰は治の手段なることを知れども、治の道は天に因ることを知らず (六) 大用に適せずして一部に適せる人なり (七) 靜に出づ (八) 天下に王たるものゝ心の用ひかたは如何 (九) 鰥寡孤獨無告の民を侮らず困窮の民を棄てず (一〇) 幼者を愛し婦人をあはれむ (一一) 堯のいふ所美なるには相違なけれど未だ大ならず (一二) 天と德を合するときは俗に跡を離すとも靜かにして安すし (一三) 日月照らして春夏秋冬の四時行はれ晝夜のきまりあり、時に雲走りて雨降るが如く自然也 (一四) 然らば則ち我が爲す所は爲すに意ありて自然ならず作爲擾擾するものなりや (一五) 足下は其の德天と一致し我は漸く人と一致するのみ (一六) 古の天下に王たるものは他には何事もなさず爲す所は唯天地の自然によるのみ

其能。必由二其名一。以レ此事レ上。以レ此畜レ下。以レ此治レ物。以レ此修レ身。知謀不レ用。必歸二其天一。此之謂二太平一。治之至也。故書曰。有レ形有レ名。形名者古人有レ之。而非レ所二以先一也。

古之語二大道一者。五變而形名可レ擧。九變而賞罰可レ言也。驟而語二形名一。不レ知二其本一也。驟而語二賞罰一。不レ知二其始一也。倒レ道而言。迕レ道而說者。人之所レ治也。安能治レ人。驟而語二形名賞罰一。此有レ知二治之具一。非レ知二治之道一。可レ用二於天下一。不レ足三以

古の大道を語るものは、（一）五變して形名擧くべし、（二）九變して賞罰言ふ可きなり。（三）驟にして形名を語るは、其の本を知らざるなり。驟にして而して賞罰を語るは其の始を知らざるなり。（四）道を倒まにして言ひ、道に迕うて說くものは、人の治むる所なり、安んぞ能く人を治めん。驟にして形名賞罰を語るは、此れ（五）治の具を知ること有れども、治の道を知るに非ず、天下に用ひらるべくして、以て天下を用ふるに足らず。此を之れ辯士（六）一曲の人と謂ふなり。（七）禮法・數度・形名・比詳は、古人も之れ有り。此れ下の上に事ふる所以にして、上の下を畜ふ所以に非ざるなり。昔は舜は堯に問うて曰く、（八）天王の心を用ふること如何と。堯曰く、（九）吾れ無告に敖らず、窮民を廢てず、死者を苦しみ、（一〇）孺子を嘉し、而して婦人を哀れむ。此れ吾が心を用ふる所以のみと。舜曰く、（一一）美は則ち美なり、而かも未だ大な

是故古之明大道者。先明天。而道德次之。道德已明。而仁義次之。仁義已明。而分守次之。分守已明。而形名次之。形名已明。而因任次之。因任已明。而原省次之。原省已明。而是非次之。是非已明而賞罰次之。賞罰已明。而愚知處宜。貴賤履位。仁賢不肖襲情。必分

是の故に古の大道に明かなるもの（一）は、先づ天を明かにして、道德之に次ぐ。道德已に明かにして、仁義之に次ぐ。仁義已に明かにして、分守（二）之に次ぐ。分守已に明かにして、形名（三）之に次ぐ。形名已に明かにして、因任（四）之に次ぐ。因任已に明かにして、原省（五）之に次ぐ。原省已に明かにして、是非之に次ぐ。是非已に明かにして、賞罰之に次ぐ。賞罰已に明かにして、愚知宜しきに處り（六）、貴賤位を履み、仁賢不肖情に襲る（七）。必ず其の能を分ち、必ず其の名に因る（八）。此を以て上に事へ、此を以て下を畜ひ、此を以て物を治め、此を以て身を修む。知謀用ひず、必ず其の天に歸す（九）。此を之れ太平と謂ふ、治の至なり。故に書に曰く、形有り名有りと。形名は古人も之れ有り、而して先にする所以に非ざるなり（一〇）。

（一）古の大道を明かに知れるものは、先づ天理を明かにして道德を第二次とす（二）己が職分として守ること（三）物形あれば必ず名あり、天地萬物必ず形名によつてはたらきをなす（四）因によりて其の職に任ずること（五）其の意義をたづね其の事を審察すること（六）愚、知者其の適所に位置す（七）各自其の能とする所によつて其實情をつくす（八）必ず其の才能を分別して之に任じ、必ず其の名によつて實を責む（九）知謀を用ひずして必ず其の天理の自然に從ふ（一〇）形名は古人止りを得ずして用ひしもののゆゑ之を先にし尙びしものには非ず

也。哭泣衰經。隆殺之服。哀之末也。此五末者。須精神之運。心術之動。然後從之者也。末學者古人有之。而非所以先也。君先而臣從。父先而子從。兄先而弟從。長先而少從。男先而女從。夫先而婦從。夫尊卑先後。天地之行也。故聖人取象焉。天尊地卑。神明之位也。春夏先秋冬後。四時之序也。萬物化作。萌區有狀。盛衰之殺。變化之流也。夫天地至神。而有尊卑先後之序。而況人道乎。宗廟尚親。朝廷尚尊。鄉黨尚齒。行事尚賢。大道之序也。語道而非其序者。非其道也。語道而非其道者。安取道。

かず (三) 天は物を產むといふ情なけれど萬物自ら化生し、地は物を長ずる意なけれど萬物育成す (四) 萬物自ら產すれば神、萬物自ら長ずれば富み、天下自ら治まれば大 (五) 天地の德を用ひ萬物を役使し群臣を用ふる道 (六) 要を覽るは主の司る所事務の繁多を辨ずるは臣の司る所 (七) 三軍を動かし弓矛殳戈戟を執るは德の末 (八)、墨劓刖宮死の刑は教の末 (九) 權衡度量 (一〇) 法律 (一一) 比較詳審にして餘りに煩瑣なるは治政の末節 (一二) 鳥獸羽毛を以て衣冠を飾る (一三) 喪服 (一四) 喪服に斬縗齊縗大功小功緦麻の五等ありて念入と簡略とを具ふ (一五) 德教治樂衰に於ける五つの末節は精神の運旋し、心術の動搖するを要して後になすものにして、有爲不自然 (一六) 五末即ち人爲的文物制度の學習は古人も行ひしことなれど止むを得ずして爲せしにて、主要とせしわけに非ず (一七) 人倫に尊卑先後の區別あるは、天地運行の次序に象りて聖人の制せしなり (一八) 宇宙萬物の順序 (一九) 萬物化生して萌して伸ぶるものあり、屈して生ずるものあり、其狀同じからずして尊卑あり (二〇) 萬物互に盛衰相殺するは變化の流行にして自然の天理による (二一) 村里にては年長者を尚ぶ (二二) 道を語るも其次序を知らざるものは、之を眞の道といふべからず (二三) 道を語るも道の次序を知らずし、眞の道を失ふものは道を取り理を行ふことなし

功。故曰。莫神於天。莫富於地。莫大於帝王。故曰。帝王之德配天地。此乘天地。馳萬物。而用人羣之道也。本在於上。末在於下。要在於主。詳在於臣。三軍五兵之運。德之末也。賞罰利害五刑之辟。敎之末也。禮法度數形名比詳。治之末也。鐘鼓之音。羽旄之容。樂之末

なり。禮法度數刑名比詳は治の末なり。鐘鼓の音、羽旄の容は樂の末なり。哭泣、衰絰、隆殺の服は哀の末なり。此の五末なるものは、精神の運、心術の動を須ちて、然る後之に從ふものなり。末學なるものは古人にも之れあり、而れども先ずる所以に非ざるなり。君先だつて臣從ひ、父先だつて子從ひ、兄先だつて弟從ひ、長先だつて少從ひ、男先だつて女從ひ、夫先だつて婦從ふ。夫れ尊卑先後は天地の行なり、故に聖人象を取る。天尊く地卑しきは、神明の位なり、春夏先だち秋冬後るゝは、四時の序なり。萬物化作して、萌區、狀あり。盛衰の殺は、變化の流なり、夫れ天地は至神なり、而して尊卑先後の序あり、而るを況んや人道をや。宗廟に親を尙び、朝廷に尊を尙び、鄕黨に齒を尙び、行事に賢を尙ぶは、大道の序なり。道を語つて其の序に非ざるものは、其の道に非ざるなり。道を語つて其の道に非ざるものは、安んぞ道を取らん。

（一）其の知天地を籠絡すと雖も自ら工夫することなし　（二）其の辯說はよく萬物を彫刻するほどの力あれど自ら說

亦無爲也。是下與上同德。下與上同德。則不臣。下有爲也。上亦有爲也。是上與下同道。上與下同道。則不主。上必無爲而用天下。下必有爲爲天下用。此不易之道也。

（一）無爲なるが故に爲さゞる所なく天下を自在に運用して猶餘閑あり（二）有爲なるが故に力を勞し物の役となり反對に天下のために用ひられて汲々たり（三）無爲は上の德なれば下たるものは有爲なるべし然らずんば臣たる所以を失ふ

故古之王天下者。知雖落天地。不自慮也。辯雖彫萬物。不自說也。能雖窮海內。不自爲也。天不產而萬物化。地不長而萬物育。帝王無爲而天下

故に古の天下に王たるものは、（一）知天地を落ふと雖も、自ら慮らざるなり。（二）辯萬物を彫ると雖も、自ら說かざるなり。能、海內を窮むと雖も、自ら爲さざるなり。（三）天は產せずして萬物化し、地は長ぜずして萬物育ち、帝王は無爲にして天下功あり。故に曰く、（四）天より神なるは莫く、地より富めるは莫く、帝王より大なるは莫しと。故に曰く、帝王の德は天地に配すと。（五）此れ天地に乘じ、萬物を馳せて、人羣を用ふるの道なり。本は上に在り、末は下に在り、（六）要は主に在り、詳は臣に在り。（七）三軍五兵の運は、德の末なり。賞罰利害（八）五刑の辟は、敎の末

累一無二鬼責一。故曰。其動也天。其靜也地。一心定而王二天下一。其鬼不レ祟。其魂不レ疲。一心定而萬物服。言下以二虛靜一推二於天地一。通中於萬物上。此之謂二天樂一。天樂者。聖人之心。以畜二天下一也。

を同じうし、動くときは陽と波を同じくす（九）天と和す故に天の怨みなし（一〇）人と和す故に人の誹なし（一一）無爲なり故に物に祟られず（一二）陰陽と動靜を同じくするが故に、鬼神の責罰なし（一三）其の動靜は天地と一致す（一四）一心定まりて靜なれば天地と一體にして、天下よくこれに勝るものなし故に王たり（一五）鬼責なく物累なく、一心定まつて萬物從ふ（一六）虛靜靜寂の德を以て天地の廣きに推及し萬物の情に通達す

夫帝王之德。以二天地一爲レ宗。以二道德一爲レ主。以二無爲一爲レ常。無爲也。則用二天下一而有レ餘。有爲也。則爲二天下用一而不レ足。故古之人貴二夫無爲一也。上無爲也。下

夫れ帝王の德は、天地を以て宗と爲し、道德を以て主と爲し、無爲を以て常と爲す。（一）無爲なれば、則ち天下を用ひて餘りあり。（二）有爲なれば、則ち天下に用ひられて足らず。故に古の人は夫の無爲を貴ぶなり。上も無爲なり、下も亦無爲なれば、是れ下、上と德を同じうするなり。（三）下と上と德を同じうすれば、則ち臣たらず。下も有爲なり、上も亦有爲なれば、是れ上と下と道を同じうするなり。上と下と道を同じうすれば、則ち主たらず。上は必ず無爲にして天下を用ひ、下は必ず有爲にして天下の用と爲るは、此れ不易の道なり。

人和者。謂二之人樂一。與レ天和者。謂二之天樂一。

莊子曰。吾師乎。吾師乎。𩐈二萬物一而不レ爲レ戾。澤及二萬世一而不レ爲レ仁。長二於上古一而不レ爲レ壽。覆二載天地一。刻二雕衆形一。而不レ爲レ巧。此之謂二天樂一。故曰。知二天樂一者。其生也天行。其死也物化。靜而與レ陰同レ德。動而與レ陽同レ波。故知二天樂一者。無二天怨一。無二人非一。無二物

(一)莊子曰く、吾が師か、(二)吾が師か、(三)萬物を𩐈して戾と爲さず、(四)澤萬世に及んで仁と爲さず、(五)上古より長じて壽と爲さず、(六)天地を覆載し、衆形を刻雕して、巧と爲さずと。此を之れ天樂と謂ふ。(七)故に曰く、天樂を知るものは、其の生や天行、其の死や物化。(八)靜かなれば陰と德を同じくし、動けば陽と波を同じくすと。故に天樂を知るものは、(九)天怨なく、(一〇)人非なく、(一一)物累なく、(一二)鬼責なし。故に曰く、(一三)其の動くや天、其の靜かなるや地。(一四)一心定まつて、天下に王たり、(一五)其の鬼祟らず、其の魂疲れず、一心定まつて萬物服すと。(一六)虛靜を以て天地に推し、萬物に通ずるを言ふなり。此を之れ天樂と謂ふ。天樂なるものは、聖人の心、以て天下を畜ふなり。

(一)此の章數句大宗師篇に同じ、而して前には許由の言とし、此には莊子自言とす之を寓言として可なるべきか (二)天地の德は吾が師なるか (三)萬物を粉碎すれども暴戾となさず (四)恩澤を萬世に及ぼして仁となさず (五)太古より成長すれども長壽となさず (六)天地を覆ひ戴せ萬物の形を彫刻したればとて巧となさず (七)天樂を知るものは其の生存せる時は天理の自然を行ひ其の死するや萬物に從ひ死す (八)靜なる時は天地の氣たる陰氣と德

也。明レ此以北面。舜之爲レ臣也。以レ此處レ上。帝王天子之德也。以レ此處レ下。玄聖素王之道也。以レ此退居而閒遊。江海山林之士服。以レ此進爲而撫レ世。則功大名顯。而天下一也。

爲なり無爲なる時は　自らは爲さずして人其の事に任ず故に無爲は爲さゞる所なし　(七)　心通して樂しむ　(八)　虛靜恬淡寂寞無爲は萬物の本たることを明かに心得て唐虞天子の位に居りしは堯　(九)　玄德を有する聖人と聖人の德あつて其の位無きもの　(一〇)　此の理を心得て退居閒遊すれば、江海山林の隱士皆之に服從す　(一一)　此の理を心得て進んで世の中を治むる時は功業大に名譽世に顯れ天下一統す

靜而聖。動而王。無爲也而尊。樸素而天下莫三能與レ之爭二レ美。夫明二白於天地之德一者。此之謂二大本大宗一。與レ天和者也。所下以均二調天下一。與レ人和上者也。與レ

(一)靜かなれば聖たり、動けば王たり、無爲なれば尊く、樸素なれば天下能く之と美を爭ふ莫し。夫れ(三)天地の德に明白なるもの、此を之れ大本大宗と謂ふ、天と和するものなり。(四)天下を均調し、人と和する所以の者なり。人と和するもの之を人樂と謂ひ、(五)天と和するもの之を天樂と謂ふ。

(一)　止むべき時に止め、靜かなれば聖人となり、靜物に應じて動く時は王となる　(二)　自然に任せて爲すことなければ尊く樸素にして、文飾なければ天下能く之と美を競爭するものなし　(三)　天地間の大德即ち無爲を明白に覺るものを、大本大宗即ち大根本といふ天と和合して一體となるもの　(四)　既に天和を得れば天下を平順して人と和合す

夫虛靜恬淡。寂漠無爲者。天地之平。而道德之至。故帝王聖人休焉。休則虛。虛則實。實者倫矣。虛則靜。靜則動。動則得矣。靜則無爲。無爲也。則任事者責矣。無爲則俞俞。俞俞者憂患不能處。年壽長矣。夫虛靜恬淡。寂漠無爲者。萬物之本也。明此以南鄕。堯之爲君

夫れ虛靜恬淡(一)、寂漠無爲は、天地の平にして、而して道德の至なり、故に帝王聖(二)人は休す(三)。休すれば則ち虛(四)、虛なれば則ち實、實なるものは倫。虛(五)なれば、則ち靜、靜なれば則ち動、動なれば則ち得。(六)靜なれば則ち無爲、無爲なれば、則ち事に任ずる者責あり、無爲なれば則ち俞俞(七)、俞俞なるものは憂患處ること能はずして、年壽長し。夫れ虛靜恬淡、寂寞無爲は、萬物の本たり。(八)此を明かにして以て南鄕するは、堯の君たるなり。此を明かにして以て北面するは、舜の臣たるなり。此を以て上に處るは、帝王天子の德なり。此を以て下に處るは、玄聖素(九)王の道なり。此(一〇)を以て退居して閒遊すれば、江海山林の士服す。此(一一)を以て進爲して世を撫すれば、則ち功大に名顯れて、而して天下一なり。

(一) 虛靜恬淡寂寞無爲卽ち約言して靜は天地の平にして道德の極致 (二) 帝王聖人は無爲にして此の德に止まる (三) 休するときは不動靜止して名の名づくべきなく、形の與ふべきなく虛無なり (四) 虛無なる時は洞然として容れざることなし、故に無中有を生じて充實す實すれば既に條理ありて昭然 (五) 虛無なる時は固より寂靜不動なるが、靜はよく物に應ずるが故に動、其の動たるや作爲他動に非る故に動いて宜しきにかなふ (六) 寂靜なる時は無

所積。故萬物成。帝道運而無所積。故天下歸。聖道運而無所積。故海内服。明於天。通於聖。六通四辟於帝王之德者。其自爲也。昧然無不靜者矣。聖人之靜也。非曰靜也善。故靜也。萬物無足以鐃心者。故靜也。水靜則明燭鬚眉。平中準。大匠取法焉。水靜猶明。而況精神。聖人之心靜乎。天地之鑑也。萬物之鏡也。

す。(四)聖道運つて積む所なし、故に海内服す。(五)天に明かに、聖に通じ、帝王の德に六通四辟する者、其れ自ら爲すなり。(六)昧然として靜ならざる者なし。(七)聖人の靜や、靜と曰ふに非ざるなり、善なるが故に靜なり、萬物以て心を鐃すに足るもの無し。故に靜なり。(八)水靜なれば則ち明は鬚眉を燭し、平準に中れば、大匠法を取る。水靜なるも猶ほ明なり、而るを況んや精神をや。聖人の心靜ならんか、天地の鑑なり、萬物の鏡なり。

(一) 此の節帝王の道は天地を以て宗となし、道德を以て主となし、自然を以て用となすべきを論じ虚靜恬淡無爲を以て歸とすべきを說く (二) 日月星辰寒暑晦明の天道は運行して礙滞することなし (三) 帝王の道も亦運行して礙滞せざるが故に天下之に歸す (四) 聖人の道 (五) 天道明かに聖道に通じ帝王の德について、自在にひらき通ずるものは作爲にして爲すにあらで無爲にして爲す (六) 其の自ら爲すこと跡をくらまし光をつゝみ、昧然として暗く靜かならざることなし (七) 聖人の所謂靜は靜を目的の理想とするにあらで、靜即ち無爲たるが故に靜なるなり (八) 水平靜なるとゝは清明にして人の鬚眉をもありありと照し、又水の平かなることメヤスにかなふときは、匠人平準を定むるに水に法る

害也。而楊墨乃始離跂。自以爲レ得。非二吾所レ謂得一也。夫得者、困可二以爲一レ得乎。則鳩鴞之在二於籠一也。亦可二以爲レ得矣。且夫趣舍聲色。以柴二其内。皮弁鷸冠搢笏紳修。以約二其外一。内支二盈於柴柵一。外重二纆繳一。睆睆然在二纆繳之中一。而自以爲レ得。則是罪人交レ臂歷指。而虎豹在二於囊檻一。亦可二以爲レ得矣。

盛る祭器 (二) 祭器を作りし材木のキレハシ溝の中にあり (三) 祭器として好まるゝものと溝中の木片とを比較すれば美と醜との區別あれど其の木たるの本性を失へる點に於ては同一 (四) 盗跖と曾參と行義上には區別あり (五) あをくさき、ふすぶりくさき、にほひよき、なまぐさき、くさりくさき此の五臭が鼻をいぶし逆上して額を衝く (六) 病みたがひて味を辨ぜざらしむ (七) 是非の取捨心を亂し本性をして外馳せしむ (八) 楊朱は力を用ひて爲我を說き墨翟は兼愛を說き以て自ら得たりとなす (九) 是は吾が謂ふ所の得たるもの卽ち性を全うして自ら適したるものに非ず (一〇) 眞に得たるものは從容自適すべきに楊墨の如く困苦して以て得たりとなし得るならば鳩や鴞の如き鳥が籠中に在るも得たりとすべきなり (一一) 是非の取捨聲色等が其の性を擁塞し皮製の冠鷸の翠毛にて飾れる冠帶に插める笏帶の垂れを以て其の形を拘束す (一二) 内に於ては趣舍聲色の塞柵に妨害せられ外は衣冠束帶の束縛を重ぬ (一三) 睆々然と自得して束縛の中にありながら自ら得たりとする (一四) 罪人が後手に縛られ指をかゞめられ或は虎豹が生擒せられて檻中に在るをも之を指して得たりとなすべきなり

(一)天道

天道運而無レ

(一)天道運つて積む所なし。故に萬物成る。(二)帝道運つて積む所なし、故に天下歸

在溝中。比犧尊於溝中之斷、則美惡有間矣。其於失性一也。跖與曾史、行義有間矣。然其失性均也。且夫失性有五。一曰、五色亂目。使目不明。二曰、五聲亂耳。使耳不聰。三曰、五臭薰鼻。困惾中顙。四曰、五味濁口。使口厲爽。五曰、趣舍滑心。使性飛揚。此五者。皆生之

(二)跖と曾史と、義を行ふに間あり。然かも其の性を失ふは均し。且つ夫の性を失ふに五あり。一に曰く、五色目を亂り、目をして明ならざらしむ。二に曰く、五聲耳を亂り、耳をして聰ならざらしむ。三に曰く、(五)五臭鼻を薰し、困惾顙に中る。四に曰く、五味口を濁らし、口をして(六)厲爽ならしむ。五に曰く、(七)趣舍心を滑り性をして飛揚せしむ。此の五者は皆生の害なり。而るに(八)楊墨乃ち始めて離跂して、自ら以て得たりと爲す。(九)吾が所謂得たるに非ざるなり。(一〇)夫れ得たるもの、困して以て得たりと爲すべくんば、則ち鳩鴞の籠に在るも亦以て得たりと爲すべし。且つ夫れ(一一)趣舍聲色、以て其の內を柴し、皮弁鷸冠搢笏紳修、以て其の外を約す。(一二)內は柴柵に支盈せられ、外は纆繳を重ね、睆睆然として纆繳の中に在つて、自ら以て得たりと爲さば、則ち是れ(一四)罪人の臂を交へて(一三)歷指し、而して虎豹の囊檻に在るも、亦以て得たりと爲すべし。

(一) 百年の老木を切りきざみて犧樽を作り青黃の色を以て之を彩色す、犧は牛形を作りて酒器とせしもの樽は酒を

之心。至言不レ出。俗言勝也。以二二缶一鐘惑。而所レ適不レ得矣。而今也以。天下惑。予雖レ有二祈嚮一。其庸可レ得邪。知二其不一レ可レ得也。而強レ之。又一惑也。故莫レ若下釋レ之而不上レ推。不レ推誰其比レ憂

んや。(五)其の得べからざるを知つて、而して之を強ふる、又一惑なり。故に(六)之を釋てゝ推さざるに若くは莫し。推さずんば誰と其れ憂を比せんや、(七)

㊀ 大雅の聲音は餘り高尚なるが故に俗耳に入らず ㊁ 俗曲の名、俗曲を聞けば解し得て齊をそろへて笑ふ ㊂ 高尚の言は衆人の心に感ぜず ㊃ 二缶の瓦器の俗音を以て鐘の正音を亂さば到底音律にかなふことなし ㊄ 道に赴けざるを知りながら強ひて之を爲さんとするも一の惑 ㊅ 得べからざるものは之を放任して推し求めんとせざるにしくはなし ㊆ 求めずば自ら適す故に何の憂もなし

厲之人。夜半生二其子一。遽取レ火而視レ之。汲汲然唯恐二其似一レ己也。百年之木。破爲二犧樽一。青黄而文レ之。其斷

(一)厲の人、夜半に其の子を生む、遽かに火を取つて之を視る。(二)汲汲然として唯々其の己に似んことを恐るゝなり。

㊀ 癩病の人 ㊁ イソイソとして唯其の子が己に似て醜ならんことを心配す、子が親に似るは自然の理なれば其の然らざるを欲するは得べからざるを知つて強ふる者

(一)百年の木、破つて犧樽を爲り、青黄にして之を文る。(二)其の斷や溝中に在り。(三)犧樽を溝中の斷に比すれば、則ち美惡間あれども、其の性を失ふに於ては一なり。

也。合レ譬飾レ辭聚レ衆也。是終始本末不ニ相坐一。垂ニ衣裳一。設ニ采色一。動ニ容貌一。以媚ニ一世一。而不三自謂ニ道諛一。與ニ夫人一之爲レ徒。通ニ是非一。而不三自謂ニ衆人一。

(一)臣たり子たるもの、りつぱなる手柄　(二)此の説必ず理にかなふや否や知りがたし　(三)迎合諂諛の人と謂はずして反つて之を賞す　(四)君親に從ふを諛とし世俗に從ふを諛とせずは世俗なるものは君親よりも尊嚴なりや　(五)迎合諂諛の人といへば怫然として顏色を變ず　(六)譬喩を設け言葉を飾りて衆人に雷同す　(七)事の始終本末相離せず　(八)衣裳を長く垂れ美しき色を飾り容貌を動かして世俗に媚びながら自らは迎合諂諛といはず　(九)衆人と共に一つなかまとなりて同じく是とし同じく非としながら自ら衆人といはず　(一〇)其の愚なることを知れるものは愚を免れずと雖も大愚にあらず　(一一)大に惑へるものは一生涯惑のとけざるもの　(一二)大愚なるものは一生涯頑愚にして靈ならず　(一三)三人共に行くに其の中の一人迷にまよふも猶正路に至り得べし　(一四)求めて適に向はんとするも不可能

愚之至也。知ニ其愚一者。非ニ大愚一也。知ニ其惑一者。非ニ大惑一也。大惑者終身不レ解。大愚者終身不レ靈。三人行而一人惑。所レ適者猶可レ致也。惑者少也。二人惑則勞而不レ至。惑者勝也。而今也以ニ天下一惑。予雖レ有ニ祈嚮一。不レ可レ得也。不ニ亦悲一乎。

大聲不レ入ニ於里耳一。折楊皇荂。則嗑然而笑。是故高言不レ止ニ於衆人

大聲(一)は里耳に入らず、折楊皇荂(二)は則ち嗑然(三)として笑ふ。是の故に高言は衆人の心に止まらず、至言の出でざるは、俗言の勝てばなり。二缶(四)を以て鍾を惑はさば、適く所得ざらん。而るに今や天下を以て惑ふ、予祈嚮ありと雖も、其れ庶んぞ得べけ

而善。則世俗謂二之不肖子一。君之所レ言而然、所レ行而善。則世俗謂二之不肖臣一。而未レ知。此其必然邪。世俗之所レ謂然而然レ之。所レ謂善而善レ之。則不レ謂二之道諛之人一也。然則俗故厳二於親一。而尊二於君一邪。謂二己道人一。則勃然作レ色。謂二己諛人一。則怫然作レ色。而終身道人也。終身諛人

だ知らず、此の其の必ず然るやを。世俗の然りと謂ふ所を之を然りとし、善しと謂ふ所を之を善しとすれば、則ち之を道諛(一)の人と謂はざるなり。然らば則ち俗(四)は故より親より厳にして、君より尊きか。己を道人と謂へば、則ち勃然として色を作し、己を諛人と謂へば、則ち怫然として色を作すも、而かも終身道人なり、終人諛人なり。(五)譬(六)を合せ辭を飾りて衆を聚むるなり。是れ終始本末相坐せず。(七)衣裳(八)を垂れ、釆色を設け、容貌を動かし、以て一世に媚びて、自ら道諛と謂はず、夫の人(九)と與に徒と爲りて、是非を通じ、而して自ら衆人と謂はず。愚の至りなり。其の愚を知るものは、大愚に非ざるなり。其の惑を知るものは、大惑に非ざるなり。(一〇)大惑なるものは終身解けず、(一一)大愚なるものは終身靈ならず。(一二)三人行いて一人惑ふも、適く所のもの猶ほ致すべきなり。惑ふもの少なければなり。二人惑へば則ち勞して至らず。惑ふもの勝てばなり。而して今や天下を以て惑ふ。予、祈嚮(一四)するありと雖も、得べからざるなり、亦悲かしらずや。

何計以有虞氏爲。有虞氏之藥瘍也。禿而施髢。病而求醫。孝子操藥以修慈父。其色燋然。聖人羞之。至德之世。不尙賢。不使能。上如標枝。民如野鹿。端正而不知以爲義。相愛而不知以爲仁。實而不知以爲忠。當而不知以爲信。蠢動而相使。不以爲賜。是故行而無迹。事而無傳。

て賜と爲さず。(一六)是の故に行ひて迹無く、事として傳ふる無し。

(一)門は姓、無鬼は名　(二)赤張は姓、滿稽は名　(三)周の武王殷を伐つの軍を見物す　(四)武王は舜帝に遠かに劣れるが故にか、る戰伐の業ひにかゝれるならん　(五)天下均しく治まれるを舜帝が治めたるか天下亂れたるを治めたるか　(六)天下均しく治まることを願とするならば何ぞ舜帝の如く有虞の治を爲す必要あらんや　(七)頭瘍に藥を投じ禿髮にカツラを施し病んで醫を求むる如く亂れて後に治めしなり　(八)孝子藥をとつて父の病を療するに其の顏色憂ふるは始めより其の父に病無きに如かず　(九)至德の世には無爲の治を事とするが故に賢人を尙ばず能者を使はず　(十)上位に在るもの高き標枝の如く上にあれども自ら高しとせず民野鹿の如く遜がれずして自適す　(十一)行ふこと端正で直にして己は其の義にかなへることを知らず　(十二)互に愛しながら仁たることを知らず　(十三)皆實にして其の忠たることを知らず　(十四)たがはずして其の信たることを知らず　(十五)無知にして行動し互に使役しあひて恩となさず　(十六)行ひて人の目につく形迹もなく事として取りたてゝ傳ふるものなし

孝子不諛其親。忠臣不諂其君。臣子之盛也。親之所言而然。所行

孝子、其の親に諛はず、忠臣其の君に諂はざるは、臣子の盛なり。親の言ふ所を然りとし、行ふ所を善しとすれば、則ち世俗之を不肖の子と謂ふ。君の言ふ所を然りとし、行ふ所を善しとすれば、則ち世俗之を不肖の臣と謂ふ。而して未

利レ之之謂レ悅。共給レ之之爲レ安。怊乎若三嬰兒之失二其母一也。儻乎若三行而失二其道一也。財用有レ餘。而不レ知三其所二自來一。飮食取レ足。而不レ知二其所一レ從。此謂二德人之容一。願聞二神人一。曰。上神乘レ光。與レ形滅亡。此謂二照曠一。致レ命盡レ情。天地樂而萬事銷亡。萬物復レ情。此之謂二混冥一。

滋味を貪らざれば飮食腹に足れば可なるとして其の何れより來りしかを知らず　(一七)　至靈の精神光明を放つて形體と共に亡び心身兩つながら忘る　(一八)　明の極　(一九)　生命を忘れ心の實情を盡し天地と共に樂み萬事作爲の迹なく萬物自然の實情にかへり其の處を得　(二〇)　幽の極

門無鬼。與二赤張滿稽一。觀二於武王之師一。赤張滿稽曰。不レ及二有虞氏一乎。故離二此患一也。門無鬼曰。天下均治。而有虞氏治レ之邪。其亂而後治レ之與。赤張滿稽曰。天下均治之爲レ願。而

門無鬼(一)、赤張滿稽(二)と與に武王(三)の師を觀る。赤張滿稽曰く、有虞氏(四)に及ばざるか、故に此の患に離れりと。門無鬼曰く、(五)天下均しく治まれるを、有虞氏之を治めたるか。其れ亂れて後之を治めたるかと。赤張滿稽曰く、(六)天下均しく治まるを之れ願とせば、何を計つて有虞氏を以て爲さん。有虞氏は瘍(七)に藥するなり。秃にして髢を施し、病んで醫を求む。(八)孝子藥を操つて以て慈父を修む。其色憔然たるは、聖人之を羞づ。(九)至德の世は、賢を尙ばず、能を使はず、上(一〇)標枝の如く、民野鹿の如し。端正(一一)にして以て義たるを知らず、相愛(一二)して以て仁たるを知らず、實(一三)にして以て忠たるを知らず、當(一四)つて以て信たるを知らず。蠢動(一五)して相使つて、以

吾將レ遊レ焉。苑風曰。夫子無レ意二于橫目之民一乎。願聞二聖治一。諄芒曰。聖治乎。官施而不レ失二其宜一。拔擧而不レ失二其能一。畢見二其情事一。而行二其所一レ爲。行言自爲。而天下化。手撓顧指。四方之民莫レ不二俱至一。此之謂二聖治一。願聞二德人一。曰。德人居無レ思。行無レ慮。不レ藏二是非美惡一。四海之內。共

撓顧指して、四方の民俱に至らざること莫し。此を之れ聖治と謂ふ。願(一〇)はくは德人を聞かんと。曰く、德人なるものは居るに思(一一)なく、行くに慮なし。是非美惡を藏せず。四海の內、共に之を利するを悅(一二)と謂ひ、共に之を給するを安と爲す。怊(一三)乎として嬰兒の其の母を失ふが若く、儻(一四)乎として行くに其の道を失ふが若し。財(一五)用餘りあつて、其の自りて來る所を知らず。飲(一六)食足るを取て、其の從る所を知らず。此を德人の容と謂ふ。願はくは神人を聞かんと。曰く、上(一七)神光に乘じて、形と與に滅亡す。此を照曠(一八)と謂ふ。命(一九)を致し情を盡し、天地と樂しんで、而して萬事銷亡し、萬物情に復る。此れを之れ混冥(二〇)と謂ふ。

(一) 諄を聖人化していふ　(二) 大壑　(三) 小風を賢人化していふ　(四) 苑風は諄芒が大壑に遊ばんとする意を解せず　(五) 官を設け法を施して其の宜しきを失はず　(六) 人を拔擢擧用して其の才能を失はず　(七) 能く事の實情を悟りて其の爲すべきことを行ふ　(八) 言行自然のまゝに出して天下の民化す　(九) 手を擧げさしまねき頤を以て人を使ふのみにして四方の民皆來り歸す　(一〇) 苑風復た問ふ　(一一) 平居の日思ひわづらふことなく行くに謀め慮ることなく物に對し是非善惡の念を抱かず　(一二) 天下と共に利するを悅び天下と共に豐にして足るに安ず　(一三) 哀傷の貌　(一四) 自失の貌　(一五) 寡欲にして衆多の財寶の出所さへ知らず　(一六)

者形全。形全者神全。神全者聖人之道也。託レ生與レ民並行。而不レ知ニ其所一レ之。汒乎淳備哉。功利機巧。必亡ニ夫人之心一。若ニ夫人一者。非ニ其志一不レ之。非ニ其心一不レ爲。雖下以ニ天下一譽レ之。得中其所上レ謂。謷然不レ受。天下之非譽。無ニ益損一焉。是謂ニ全德之人一哉。我之謂ニ風波之民一。反ニ於魯一以告ニ孔子一。孔子曰。彼假ニ修渾沌氏之術一者也。識ニ其一一。不レ知ニ其二一。治ニ其內一。而不レ治ニ其外一。夫明白入レ素。無爲復レ朴。體レ性抱レ神。以遊ニ世俗之間一者。汝將ニ固驚一邪。且渾沌氏之術。予與レ汝何足ニ以識一レ之哉。

其の內心を治めて外物を逐はず（三九）心知明白にして質素無爲にして純朴の眞性にかへる（四〇）性を全くし神を保ちて世俗と交り和光同塵す（四一）渾沌氏の術は予と汝と共に之を識るの要なし

諄芒。將ニ東之ニ大壑一。適遇ニ苑風於東海之濱一。苑風曰。子將ニ奚之一。曰。將レ之ニ大壑一。曰。奚爲焉。曰。夫大壑之爲レ物也。注焉而不レ滿。酌焉而不レ竭。

（一）諄芒、將に東のかた（二）大壑に之かんとす。適〻（三）苑風に東海の濱に遇ふ。苑風曰く、子將に奚にか之かんとすると。曰く、將に大壑に之かんとすと。曰く、奚をか爲ると。曰く、夫れ大壑の物たるや、注げども滿たず、酌めども竭きず、吾れ將に焉に遊ばんとすと。苑風曰く、（四）夫子橫目の民に意なきか。願はくは聖治を聞かんと。諄芒曰く、聖治か、（五）官施して其の宜しきを失はず、（六）拔擧して其の能を失はず。（七）畢く其の情事を見て、其の爲す所を行ひ、（八）行言自爲して天下化し、（九）手

矣。無レ乏二吾事一。子貢卑陬失レ色。頊頊然不二自得一。行三十里而後愈。其弟子曰。向之人何爲者邪。夫子何故見レ之變レ容失レ色。終日不二自反一邪。曰。始吾以爲。天下一人耳。不レ知復有二夫人一。吾聞二之夫子一。事求レ可。功求レ成。用レ力少。見レ功多者。聖人之道。今徒不レ然。執レ道者德全。德全

て之が識るに足らんやと。

（一）滿水の溝　（二）一老人がはたけのあぜを作らんとしつゝあるを見て　（三）地道を掘りあげて井に入り甕にて水を汲み出でゝ灌ぐ　（四）力を勞する貌　（五）灌水の器械ありて一日に百畦に灌ぎ得　（六）木を鑿つて機械を作り後の方は重く前の方は輕くせば水を溢出すこと物を引出すごとく迅速なること沸湯の煮えあふるゝ如し　（七）ハネツルベ　（八）機械あれば必ず之に伴ひて其を運用する事務あり　（九）運用する事務あれば必ず知巧をめぐらす心の作用あり　（一〇）純正潔白の性備らず　（一一）全然動いて安定ならず　（一二）道に安じ居りがたし　（一三）心に愧ぢる貌　（一四）孔子の弟子　（一五）博く學びて聖人の眞似をなす　（一六）誇張の聲を大にして世人を籠絡す　（一七）獨り自ら高くして時世を哀しむ歌をうたひ評判を天下に賣る　（一八）汝の心を忘、汝の身體を棄て、其の謹心を除すを得ば可ならんか　（一九）わが仕事を缺かしむれ勿れ　（二〇）羞ぢて顏色をかふ　（二一）茫然自失して自ら安せず　（二二）去つて三十里行きて後始めて氣を復す　（二三）終日自失して常態に反らざるは如何　（二四）吾が師の孔子を以て天下一人とおもへり　（二五）事に於ては可なるを求めて之に從ひ功に於ては成就することを多きを求む　（二六）事に可、求むれば力を用ふること少く功は成を求むれば功を見ること多し　（二七）今彼の文人はたゞ然るのみにてやまず　（二八）生を世に託して民と共にすれども歸心なるが故に行くがまゝに任す　（二九）茫然として純一渾然　（三〇）功利の心と是非知巧とは彼の人には共に離し　（三一）外を運び物を喜ふことなく動くには必ず本性による　（三二）其の謂ふことと天下に行はるゝとも謷として顧ハ喜ばず　（三三）其の謂ふ所天下に行はれずとも冷然として顧着せず　（三四）世間の毀譽は自己を益し又は損せず　（三五）我が如きを風波の如く心定まらざる人間といふべし　（三六）渾沌氏のこと前に出づ。專知聰明を棄て是非を分たざる無心の道術　（三七）唯一絶對の道を離るも分れて二となりし相對　物　知らず　（三八）

之所レ不レ載也。吾非レ不レ知。羞而不レ爲也。子貢瞞然慙。俯而不レ對。有レ間。爲レ圃者曰。子奚爲者邪。曰孔丘之徒也。爲レ圃者曰。子非下夫博學以擬レ聖。於于以蓋レ衆。獨弦哀歌以賣二名聲於天下一者上乎。汝方將忘二汝神氣。墮二汝形骸一。而庶幾乎。而身之不レ能レ治。而何暇レ治二天下一乎。子往

は。吾れ之を夫子に聞く、事(二五)は可を求め、功は成を求む。力(二六)を用ふること少くして、功を見ること多きものは、聖人の道なりと。今徒に然らず、(二七)道を執るものは德全し、德全きものは形全し、形全きものは神全し、神全きものは聖人の道なり。生(二八)を託して民と並び行けども、其の之く所を知らず。汒乎(二九)として淳備なるかな。功利機巧(三〇)、必ず夫の人の心に亡し。夫の人の若きものは、其(三一)志に非ざれば之かず。其の心に非ざれば爲さず。天下を以て之を譽めて、其(三二)の謂ふ所を得と雖も、謷然として顧みず。天下を以て之を非り、其の謂ふ所を失ふ(三三)も、儻然として受けず。天下の非譽(三四)益損する無し。是を全德の人と謂はん哉、我れ(三五)を風波の民と謂はむと。魯に反つて以て孔子に告ぐ。孔子曰く、彼は渾沌氏(三六)の術を假修するものなり。其一(三七)を識つて、其の二を知らず、(三八)其の內を治めて、其の外を治めず。夫れ明白(三九)にして素に入り、無爲にして朴に復り、性(四〇)を體し神を抱いて、以て世俗の間に遊ぶもの、汝將に固より驚かんとするか。且(四一)渾沌氏の術は、予と汝と何ぞ以

力甚寡。而見功多。夫子不欲乎。爲圃者卬而視之曰。奈何。曰。鑿木爲機。後重前輕。挈水若抽。數如泆湯。其名爲槔。爲圃者忿然作色。而笑曰。吾聞之吾師。有機械者。必有機事。有機事者。必有機心。機心存於胸中。則純白不備。純白不備。則神生不定。神生不定者。道

を吾が師に聞けり。機械(八)有るものは、必らず機事(九)あり。機事あるものは、必ず機心あり。機心胸中に存すれば、則ち純白(一〇)備はらず。純白備はらざれば、則ち神(一一)生じて定まらず。神生じて定まらざるものは、道(一二)の載せざる所也と。吾れ知らざるに非ず。羞ぢて爲さざるなりと。子貢瞞然(一三)として慙ぢ、俯して對へず。間らく有つて、圃を爲るもの曰く、子は奚するものぞやと。曰く孔丘(一四)の徒なり。圃を爲るもの曰く、子は夫の博學(一五)以て聖に擬し、於于(一六)以て衆を蓋ひ、獨弦哀歌(一七)、以て名聲を天下に賣るものに非ざるか。汝方將に汝の神氣(一八)を忘れ、汝の形骸を墮てなば庶幾らんか。而身だも之れ治むる能はずして、何ぞ天下を治むるに暇あらんや。子往け、吾が事(一九)を乏しくすること無かれと。子貢卑陬(二〇)して色を失ひ、頊頊然(二一)として自得せず、行く(二二)こと三十里にして後愈ゆ。其の弟子曰く、向の人は何爲る者ぞ。夫子何の故に、之を見て容を變じ色を失ひ、終日(二三)自ら反らざるかと。曰く、始め吾れ以爲へらく、天下(二四)に一人のみと、知らず復た夫の人有らんと

願先生之言其風也。季徹曰。大聖之治天下也。搖蕩民心。使之成教易俗。擧滅其賊心。而皆進其獨志。若性之自爲。而民不知其所由然。若然者。豈兄堯舜之教民。溟涬然弟之哉。欲同乎德而心居矣。

を拔くも亦是の如し 一〇 蹴見る貌 一一 先生の言はるゝことは茫然として覺りがたし 一二 其の敎を垂れたまはんことを願ふ 一三 人民の心の動くに乘じて化を施し敢て之に逆はず 一四 盡く民の知巧の心を除去す 一五 他を竢たずして自ら足れりとする志 一六 上なる民を化すれども自然に從うて化するが故に民其の化せらるゝを知らず 一七 堯舜が民を敎ふるやりかたを優れたりとす 一八 無知頑愚にも甘んじて堯舜民を敎ふるに讓る所あらんや 一九 天下皆其の德を同じうして心敵へて外を遂はず之れに安ぜんとすればなり

子貢。南遊於楚。反於晉。過漢陰。見一丈人方將爲圃畦。鑿隧而入井。抱甕而出灌。搰搰然用力甚多。而見功寡。子貢曰。有械於此。一日浸百畦。用

子貢、南のかた、楚に遊びて、晉に反り、(一)漢陰を過ぎて、(二)一丈人の方に將に圃畦を爲らんとするを見る。(三)隧を鑿つて井に入り、甕を抱きて出で灌ぐ。(四)搰搰然として力を用ふること甚だ多くして、功を見ること寡し。子貢曰く、此に(五)械有り、一日に百畦を浸す。力を用ふること甚だ寡くして、功を見ること多し。夫子欲せざるかと。圃を爲るもの卬いで之を視て曰く、奈何んと。曰く、木を鑿つて機を爲る。後重く前輕し。水を挈ぐること抽くが若く、數なること(六)泆湯の如し。其の名を(七)槹と爲すと。圃を爲るもの忿然として色を作し、而して笑つて曰く、吾れ之

薦之。吾謂魯君曰、必服恭儉、拔出公忠之屬、而無阿私、民孰敢不輯。季徹局局然笑曰、若夫子之言、於帝王之德、猶螳蜋之怒臂以當車軼、則必不勝任矣。且若是則其自爲處危、其觀臺多物、將往投迹者衆。將閭葂覤覤然驚曰、葂也汒若於夫子之所言矣。雖然、

夫子の言の若きは、帝王の徳に於て、猶ほ螳蜋(七)の臂を怒らして以て車軼に當るがごとし、則ち必らず任に勝へざらん。且是の如きは、則ち(八)其れ自ら爲して危きに處るなり。其の(九)觀臺、物を多くすれば、將に往いて迹を投ずるもの衆からんとす。蔣閭葂(一〇)覤覤然として驚いて曰く、葂や、夫子の言ふ所に(一一)汒若たり。然りと雖も先生の其の風を言はんことを願ふと。季徹曰く、大聖の天下を治むるや、(一二)民心を搖蕩して、(一三)之をして教を成し俗を易へ、(一四)擧げて其の賊心を滅して、皆其の獨(一五)志を進め、性の自ら爲すに若ひ、(一六)民其の由つて然る所を知らざらしむ。然るが若きものは、(一七)豈に堯舜の民を教ふるを兄とし、(一八)溟涬然として之に弟たらんや、(一九)徳を同じうして心居らんと欲すればなり。

(一) 將閭は姓葂は名 (二) 辭退しても許されざるが故に止むなく既に教へ申したり (三) 先づ試みに之を先生に陳べ致さん (四) 恭敬儉素の行ひをつとめ公平忠誠の士を拔擢す (五) 依怙偏頗のことなくば民和ぎ治まらざることなし (六) クスクスと笑ふ (七) 丁度螳蜋が小さなる臂をふりあげて車轍にむかふごとく力能はざることなり (八) 自ら作爲して高き處に居る (九) 其物見臺に臨み見ゆる所の景觀を多くすれば人の之を悦んで往き至るもの多し公忠

聞。與二而所一レ不レ能レ言。凡有レ首有レ趾。無レ心無レ耳者衆。有形者、與二無形無狀一而皆存者盡無。其動止也。其死生也、其廢起也。此又非二其所一レ以也。有レ治在レ人。忘二乎物一。忘二乎天一。其名爲二忘己一。忘レ己之人。是之謂レ入二於天一。

(一)孔子 (二)此處に人あり其の人は道を治めて可と不可然りと然らずの是非の辯を放ち去りて之に拘らず (三)當時の辯者の言へる如く是非の見を離るゝこと恰も空間に懸在して依る所なきが如しといふやうなる有様ならば之を聖人と謂ふべきにや堅白のこと前に出づ、寓は字、惠子荊白論に、離るゝものは之に因るの語あり (四)胥人や技工の如く身體を勞し心を憂へしむるものにて聖人となしがたし (五)狸を捕ふる能ある狗は心を勞し敏捷なる猿は其の能のために人に捕へられて山林より來る (六)孔子を呼びかけていふ (七)汝が聞くこと能はず言ふこと能はざる無形無狀のものについて敎へん (八)首あり足ありながら心無く耳無きものは世に多し、心無く耳なきは外境を棄つるに似て作爲の臭あり (九)形體を有するもの無形無狀の玄道を體す而も首足心耳皆存して無爲なるものはなし (一〇)其の動作死生興廢等のことは天に在るを以て至人の關心すべきにあらず (一一)道を治むるといふも是人爲 (一二)物あるをも忘れ天あるをも忘るる之を名づけて己を忘るといふ (一三)渾然として自然と冥合す

蔣閭葂。見二季徹一曰。魯君謂二葂也曰。請受レ敎。辭不レ獲レ命。既已告矣。未レ知中否。請嘗

(一)蔣閭葂、季徹を見て曰く、魯君、葂に謂つて曰く、請ふ敎を受けんと。(二)辭すれども命を獲ず、既に已に告げたり、未だ知らず中るや否や、(三)請ふ嘗みに之を薦めん。吾魯君に謂つて曰く、必ず(四)恭儉を服し、公忠の屬を拔き出して、(五)阿私する無くんば、民孰れか敢へて輯からざらんやと。(六)季徹局局然として笑つて曰く、

其合緡緡。若愚若昏。是謂玄德。同乎大順。

夫子問於老聃曰。有人治道。若相放。可不可。然不然。辯者有言曰。離堅白。若縣寓。若是則可謂聖人乎。老聃曰。是胥易技係。勞形怵心者也。執狸之狗成思。猿狙之便。自山林來。丘。予告若。而所不能

泰初の渾然緡若に大同す　〔一〇〕 大同すれば渾然となりて一點の障なく、障なきが故に廣大にし、限られず　〔一一〕 鳥の鳴くや喙合ふが故に鳴くか將た鳴くが故に喙合ふか是無心にして然るものにて原因結果を以て說がたし　〔一二〕 天地と德を合するも之と同じく無心にして然るものにて其の合ふや緡々として愚なるが如く昏昧なるが如し　〔一三〕 根本自妙の德　〔一四〕 自然に順ひて私を挾まぬ妙境に大同す

夫子、老聃に問うて曰く、人あり道を治め、可不可、然不然を相放ちて、辯者言つて、堅白を離るゝ寓に懸くるが若しと曰ふこと有るが如くんば、是の若きは則ち聖人と謂ふべきかと。老聃曰く、是れ胥易技係、形を勞し心を怵へしむるものなり。執狸の狗は思を成し、猿狙の便なるは山林より來る。丘、予若に、而が聞くこと能はざる所と、而が言ふこと能はざる所とを告げん。凡そ首あり趾あつて、心無く耳無きものは衆し、有形の者、無形無狀と與にして、皆存するものは盡く無し。其の動止や、其の死生や、其の廢起や、此れ又其の以てする所に非ざるなり。治むることあるは人に在り。物を忘れ天を忘る、其の名を忘己と爲す、己れを忘るゝの人、是を之れ天に入ると謂ふと。

下。不賞而民勸。不罰而民畏。今子賞罰而民且不仁。德自此衰。刑自此立。後世之亂自此始矣。夫子闔行邪。無落吾事。俋俋乎耕而不顧。

泰初。有無無。有無名。一之所起。有一而未形。物得以生。謂之德。未形者有分。且然無間。謂之命。留動而生物。物成生理。謂之形。形體保神。各有儀則。謂之性。性修反德。德至同於初。同乃虛。虛乃大。合喙鳴。喙鳴合。與天地為合。

(一)泰初、(二)無無あり、(三)無名あり、(四)一の起る所。(五)一有つて未だ形せず、物以て生ずるを得、之を徳と謂ふ。(六)未だ形せざるものに分るゝこと有りて、且然かも間無し、之を命と謂ふ。(七)留動して物を生ず、(八)物成つて生理ある、之を形と謂ふ。(九)形體神を保ちて、各〻儀則ある、之を性と謂ふ。(一〇)性修つて徳に反り、徳の至初に同す。(一一)同は乃ち虛、虛は乃ち大なり。(一二)喙を合せて鳴き、喙鳴いて合ふ。(一三)天地と合を爲すは其の合ふや緡緡たり。愚の若く、昏の若し。是を(一四)玄徳と謂ふ。(一五)大順に同す。

(一) 天地未だ生ぜざる造化の元始わが心に於ては一念未だ萌さゞる時にあたる (二) 無は有を俟ちて存し相對なれど無無は有無を超越したる絶對の無なり (三) 形無ければ固より名なし (四) 有もなく無もなきが故に一なり (五) 一なれども名づくべき形なきものなるが萬物は此の一を得て生ず (六) 一徳は未だ形あらずと雖も分れて萬殊となる所以のもの存す然れども多即一にしてしかく間隙あるものならず之を天命といふ (七) 天命は或は靜止し或は流動して遂に萬物を化生す (八) 萬物育成して動植胎卵精粗大小の生理あるを形といふ (九) 形體よく其の精神を保ち守りて視聽言動各法則あるを性といふ (一〇) よく性を修めて無爲玄默なれば一徳に反り一徳をきはむるときは

與レ物皆昌。天下無レ道。則修レ德就レ閒。千歳厭レ世。去而上僊。乘二彼白雲一。至二于帝鄉一。三患莫レ至。身常無レ殃。則何辱之有。封人去レ之。堯隨レ之曰。請問。封人曰。退已。

堯治二天下一。伯成子高。立爲二諸侯一。堯授レ舜。舜授レ禹。伯成子高。辭爲二諸侯一而耕。禹往見レ之。則耕在レ野。禹趨就二下風一。立而問焉。曰昔堯治二天下一。吾子立爲二諸侯一。堯授レ舜。舜授レ予。而吾子辭爲二諸侯一而耕。敢問。其故何也。子高曰。昔堯治二天

堯、天下を治むるや、伯成子高、立つて諸侯と爲る。堯、舜に授け、舜、禹に授く(一)。伯成子高、諸侯たるを辭して耕す。禹往いて之を見れば、則ち耕して野に在り。禹趨つて下風に就き(二)、立つて問ふ。曰く、昔堯天下を治めしとき、吾子立つて諸侯たり。堯舜に授け、舜、予に授けて、吾子諸侯たるを辭して耕す。敢へて問ふ、其の故何ぞや。子高曰く、昔堯の天下を治むる、賞せずして民勸み、罰せずして民畏る(三)。今子賞罰して民且不仁なり。德此れより衰へ、刑此れより立ち(四)、後世の亂此れより始まらん。夫子闔ぞ行らざる。吾が事を落すこと無かれ(五)と。俋俋乎として耕して顧みず。

(一) 天下を授くるなり　(二) 禹尊者に對する如く小走りに行きて下座の方に就く　(三) 別に賞を與へて奬勵せざれど民善にすゝみ罰せざれど民罪を畏る　(四) 德これより衰へて民を安んずること能はざれば刑を設けて之を威さゞる能はず　(五) 吾が耕作のことを妨ぐるなかれ

也。女獨不レ欲何邪。堯曰。多ニ男子一則多レ懼。富則多レ事。壽則多レ辱。是三者。非レ所ニ以養一レ德也。故辭。封人曰。始也。我以レ女爲ニ聖人一邪。今然君子也。天生ニ萬民一必授ニ之職一。多ニ男子一而授ニ之職一。則何懼之有。富而使ニ人分一レ之。則何事之有。夫聖人鶉居而鷇食。鳥行而無レ彰。天下有レ道。則

り、今は然らば君子なり。天の萬民を生ずる、必ず之に職を授く。男子多くして之に職を授けば、則ち何の懼れか之れ有らん。富んで人をして之を分たしめば、則ち何の事か之れ有らん。夫れ聖人は(六)鶉居して鷇食し、鳥行して彰るゝ無し。天下道有れば、則ち(七)物と皆昌え、天下道無ければ、則ち(八)德を修め閒に就く。(九)千歳世を厭はば、去つて上僊し、彼の白雲に乘じて、帝鄕に至らん。(一〇)三患至るなく、身常に殃無くば、則ち何の辱か之れ有らんと。封人之を去る。堯之に隨ひて曰く、(一一)請ふ問はんと。封人曰く、退かんのみと。

(一) 華と云ふ地を巡見す (二) 國境を守る番人 (三) 聖人に壽あれと祝せる辭 (四) 男子多ければ心配多く富めば俗事累はしく長生すれば恥辱を殘すこと多し (五) 始めは帝を道を體する聖人かとおもひしが今は聖人より一段下りたる君子に過ぎず (六) 聖人は鶉の如く野處して居を擇ばず鶵鳥が母鳥の哺を仰ぎて足れりとする如くにして食を擇ばず鳥の空を飛ぶ如く無心に行動して其の迹なし (七) 萬物と共に其の平和を樂しんで繁昌す (八) 身の德を修め退いて閒居す (九) 千歳の壽を保ちて世の中に厭きたるときは此の世を去つて昇天し彼の白雲に乘じて天帝の居處に至るべし (一〇) 病老死の三患至ることなく己が身常に禍無し (一一) 何卒尙承りたきことあり

睽知而火馳。方且爲緒使。方且爲物絯。方且四顧而物應。方且應衆宜。方且與物化而未始有恒。夫何足以配天乎。雖然。有族有祖。可以爲衆父。而不可以爲衆父父。治亂之率也。北面之禍也。南面之賊也。

物形を異にして大同せざらん　(一〇) 知を嫉み之に役せられて奔競せん　(一一) 多端の事に役せられん　(一二) 物に拘束せられん　(一三) あたりを顧み心を勞して物の來るに應ぜん　(一四) 知を用ひて多くの事を宜しくせんとはかるならん　(一五) 物の變を逐うて其の心を役せん　(一六) 其知巧を勞して外物を逐ふが故に心常に物と共に變易して常恒の性なし　(一七) 家族あれば其の父祖あるものなれば齧缺の知をば一族の父たるには可なれども衆父の父たる天子と爲しがたし　(一八) 有爲を以て天下を治むるは天下を亂すのもと　(一九) 臣下たるものは禍を蒙り君主たるものは賊害せられん

堯。觀乎華。華封人曰。嘻。聖人。請祝聖人。使聖人壽。堯曰。辭。使聖人富。堯曰。辭。使聖人多男子。堯曰。辭。封人曰。壽富多男子。人之所欲

堯、華に觀ぶ。(一) 華の封人曰く、(二) 嘻、聖人なり。請ふ聖人を祝せん。(三) 聖人をして壽ならしめんと。堯曰く、辭す。聖人をして富ましめんと。堯曰く、辭すと。聖人をして男子多からしめんと。堯曰く、辭すと。封人曰く、壽富にして、男子多きは、人の欲する所なり、女獨り欲せざるは何ぞやと。堯曰く、(四) 男子多ければ則ち懼れ多し。富めば則ち事多し、壽なれば則ち辱多し。是の三つの者は德を養ふ所以に非ざるなり。故に辭すと。

封人曰く、(五) 始めや、我れ女を以て聖人と爲せ

之師曰二王倪一。王倪之師曰二被衣一。堯問二於許由一曰。齧缺可二以配一レ天乎。吾藉二王倪一以要レ之。許由曰。殆哉圾乎天下。齧缺之爲レ人也。聰明叡知。給數以敏。其性過レ人。而又乃以レ人受レ天。彼審二乎禁一レ過。而不レ知三過之所二由生一。與レ之配レ天乎。彼且乘レ人而無レ天。方且本レ身而異レ形。方且

つて以て之を要せん。許由曰く、殆い哉、圾乎たり(四)天下。齧缺の人と爲りや、聰明叡知、給數(五)にして以て敏、其性人に過ぐ。而して又乃ち(六)人を以て天を受けんとす。彼れ過(七)を禁ずるに審かにして、而して過の由て生ずる所を知らず。(八)之に與へて天に配せんか、彼れ且に人に乘じて天無からん。方に且に身を本(九)にして而して形を異にせん。方に且に知を尊んで火馳(一〇)せん。方に且に緒使(一一)たらん。方に且に物絯(一二)たらん。方に且に四顧(一三)して物應せん、方に且に衆宜(一四)に應ぜん、方に且に物と化(一五)せん。而して未(一六)だ始めより恒有らず。夫れ何ぞ以て天に配するに足らんや。然りと雖も、族(一七)有れば祖有り。以て衆父と爲すべくして、而して以て衆父の父と爲すべからず。治(一八)むるは亂るゝの率なり、北面(一九)の禍なり、南面の賊なり。

(一) 以下人名前に出づ　(二) 天子と爲すべきか　(三) 其の師たる王倪の力をかりて强ひて之を迎へん　(四) 危き貌　王倪を天子とすれば天下危しとなり　(五) 言行頻冗にして敏慧其の性人にすぐる　(六) 人爲の知巧を以て自然に對せんとす　(七) 知を以て過失を止むるとはよく心得居れども過失の生ずるは知よりするものなることを知らず　(八) 齧缺に天下を與へて天子となさば人爲の知巧に乘じて自然を失ふべし　(九) わが身を本にして彼我の差別を設け萬

而供其求。時騁而要其宿。大小長短修遠。

黃帝。遊乎赤水之北。登乎崑崙之丘。而南望還歸。遺其玄珠。使知索之而不得。使離朱索之而不得。使喫詬索之而不得也。乃使象罔。象罔得之。黃帝曰。異哉。象罔乃可以得之乎。

て測る可らざれど動かし得る條理有りて存す（四）道が萬物に接せる場合には絕對虛無の如くにして其中に物あり精ありて萬物の求めに應じて活動す（五）時に萬物に應じて種々の方面に發現するも要は萬物が至道に歸宿せんことを求む（六）萬物には大小長短の區別あるも至道に歸すれば即ち無限永遠なり

黃帝、赤水（一）の北に遊び、崑崙（二）の丘に登つて、南望して還歸し、其の玄珠（三）を遺せり。知（四）をして之を索めしむれども得ず、離朱（五）をして之を索めしむれども得ず、喫詬（六）をして之を索めしむれども得ざるなり。乃ち象罔（七）を使せしむ。象罔（八）之を得たり。黃帝曰く、異なる哉。象罔乃ち以て之を得べき乎と。

（一）赤は南方の色なれば南方にある假設の河といふ（二）西方の內崑崙最も高し（三）玄道を失ひしに譬へいふ（七）知明言
（四）心知を擬人化していふ（五）既に出づ此處にては明をいふ（六）既に出づ、此處にては言をいふ
を絕したる絕對無心の心境を擬人化していふ（八）玄道を得るには無象を以てせざるべからず

堯之師曰許由。許由之師曰齧缺。齧缺

堯の師を許由と曰ひ、許由の師を齧缺と曰ひ、齧缺の師を王倪と曰ひ、王倪の師を被衣と曰ふ。堯、許由に問うて曰く、齧缺以て天に配すべきか、吾れ王倪に藉

物採之。故形非道不生。生非德不明。存形窮生。立德明道。非王德者邪。蕩蕩乎。忽然出。勃然動。而萬物從之乎。此謂王德之人。

視乎冥冥。聽乎無聲。冥冥之中。獨見曉焉。無聲之中。獨聞和焉。故深之又深。而能物焉。神之又神。而能精焉。故其與萬物接也。至無

而して萬物之に從はんか、此を王德の人と謂ふ。

(一) 上に述べたる十德を有する人は自然に任せ從ひて彼の知によりて事に通ずるをはづ (二) 無知を立てゝ本體となすが故に其の知神明の如し (三) 其の心の出でゝ物に應ずるは求めて然るにあらず物有るときは採りて應ず (四) 道よく萬物を通生す故に形は道に非ずして生ずることなし (五) 人の生命は德に非るときは矇昧にして明かならず (六) 形を在るがまゝに存し天然の壽をつくし德を立て道を明かにす (七) 水の盛なる貌にて廣大なるをいふ (八) 忽然として其の出づることと無心物に應ずることと勃然として萬物之に從ひ歸す

冥冥に視、(一)無聲に聽く。(二)冥冥の中獨り曉を見、無聲の中獨り和を聞く、故に深(三)の又深にして、而して能く物あり。(四)神の又神にして、而して能く精あり。故に其の萬(五)物と接するや、至無にして而して其の求めに供し、(六)時に騁せて而して其の宿を要す。(七)大小長短も修遠なり。

(一) 道は虛無玄默なるが故に道を視るは冥々として暗きに視、道を聽くは聲無きに聽く (二) 冥々に視無聲に聽くとは何か冥々として視る可らざる中に曉光を望む如く無象中の象を視聲無き中に私聲を聽くをいふ蓋し聲大に和する時は耳之を得て聲となさず (三) 深遠なること限りなけれど道は頑空に非ずして物有りて存す (四) 神變微妙にし

不ㇾ榮ㇾ通。不ㇾ醜ㇾ窮。不下拘二一世之利一以爲中己私分上。不下以ㇾ王二天下一爲中己處上顯。顯則明。萬物一府。死生同狀。

夫子曰。夫道淵乎其居也。漻乎其淸也。金石不ㇾ得無二以鳴一。故金石有ㇾ聲。不ㇾ考不ㇾ鳴。萬物孰能定ㇾ之。

夫王德之人。素逝而恥ㇾ通二於事一。立二之本原一而知通二於神一。故其德廣。其心之出。有ㇾ

夫子曰く、夫れ道は淵乎として其れ居り、漻乎として其れ淸む。金石も得ざれば以て鳴ること無し。故に金石の聲あるも、考たざれば鳴らず、萬物孰れか能く之を定めん。

(一)老子　(二)道は淵乎として深く靜かに定まり居り漻乎として淸らかに澄む　(三)鐘鼓の樂器も其のまゝにて鳴らず必ず他に應じて鳴る　(四)金石も打たざれば鳴ることなきが如く道も亦之に等しく物至り感じて後に應ず其の感ずるや無方にして物に順ひ自ら主とせず故に萬物擬め道の象を定むることかたし

夫れ王德の人は素逝して、事に通ずるを恥ぢ、之が本原を立てて、知、神に通ず。故に其の德廣し。其の心の出づる、物有れば之を採る。故に形は道に非ざれば生ぜず、生は德に非ざれば明かならず。形を存し、生を窮め、德を立て道を明かにするは、王德の者に非ずや。蕩蕩乎たり。忽然として出で、勃然として動いて、

人利レ物之謂レ仁。不同同レ之之謂レ大。行不二崖異一之謂レ寛。有二萬不同一之謂レ富。故執レ德之謂レ紀。德成之謂レ立。循二於道一之謂レ備。不下以レ物挫上レ志之謂レ完。君子明二於此十者一。則韜乎其事レ心之大。沛乎其爲二萬物逝一也。若レ然者藏二金於山一。藏二珠於淵一。不レ利二貨財一。不レ近二貴富一。不レ樂レ壽。不レ哀レ夭。

完と謂ふ。君子此の十者に明かなれば、則ち韜乎(一二)として其れ心を事とするや大に、沛乎(一三)として其れ萬物の逝たり。然かるが若き者は、金を山に藏し(一四)、珠を淵に藏するなり。貨財を利とせず、貴富に近づかず、壽を樂しまず、夭を哀しまず、通(一五)を榮とせず、窮を醜とせず、一世(一六)の利に拘りて以て己が私の分と爲さず、天下に王たるを以て己れ顯(一七)に處ると爲さず、顯(一八)なれば則ち明。萬物は一府(一九)なり。死生は同狀なり。

(一) 老子 (二) 道は天地の如く萬物を上より覆ひ下より載す (三) 君子たるものは私心を除去せざるべからず (四) 自然のまゝに任せて私意を加へ爲さゞるを天といふ (五) 萬物不同なれど不同を不同とせざれば同となり一同にして異なし故に大 (六) 行爲の際だちて他と異る所なきを寛といふ (七) 取捨選擇せず萬物を包容するを富といふ (八) 德は物を統ぶるが故に紀といふ紀は綱なり (九) 德は人の確立するを得る所以 (一〇) 道にしたがへば衆善備はらざるなし故に備といふ (一一) 外物を以て志を挫折せざれば其の心完し (一二) 廣く萬物を包藏して心をはたらかすこと大 (一三) 德澤沛然として萬物の歸嚮する所となる (一四) 金銀珠玉を重んぜずして棄つるなり (一五) 榮達を光榮とせず困窮を恥辱とせず (一六) 世の中の利益にひかされて己が私の有となさず (一七) 顯榮の地位に居る (一八) 顯榮ならば處ること明にして韜晦自ら藏する所以にあらず (一九) 萬物不同は要するに一府にして彼我の區別なし何ぞ貨財富貴を己が私とせんや死生はもと同狀にして哀樂の理なし何ぞ窮通壽夭を以て心を動かさんや

者道也。上治レ人者事也。能有レ所レ藝者技也。技兼二於事一。事兼二於義一。義兼二於德一。德兼二於道一。道兼二於天一。故曰古之畜二天下一者。無欲而天下足。無爲而萬物化。淵靜而百姓定。記曰。通二於一一而萬事畢。無二心得一而鬼神服。

の名正し （八）道によつて上下の分別を觀るときは君主の位序正しくして其の義明かなり （九）道によりて官職材能を觀るときは大小職を異にして天の下治まる （一〇）萬物其の宜しきを得て應ずることを道に非ずといふことなし （一一）上位のもの下位の人を治むるは人事なり （一二）材能あるもの、多藝とする所以のものは技能なり （一三）技能は事に貢するものなるが故に兼ぬといふ （一四）事は義によりて行ふべきもの （一五）義は必ず德の施す所なり （一六）德の因つて成る所のものは道なり （一七）道は卽ち自然による自然は天なり （一八）無欲を以て天下に對するが故に天下の民亦足れりとす （一九）無爲にして萬物自ら化育し安靜にして人民安定す （二〇）記傳に曰く唯一の天道に通ずるときは萬事窮めつくさゞるなく心に欲することなくして鬼神も之に服す

夫子曰。夫道覆二載萬物一者也。洋洋乎大哉。君子不レ可二以不一レ刳レ心焉。無爲爲レ之之謂レ天。無爲言レ之之謂レ德。愛レ

（一）夫子曰く、夫れ道（二）は萬物を覆載するものなり。洋洋乎として大なる哉。君子（三）以て心を刳らざるべからず。無爲（四）にして之を爲すを天と謂ひ、無爲にして之を言ふを德と謂ひ、人を愛し物を利するを仁と謂ひ、不同（五）にして之を同じうするを大と謂ひ、（六）行の崖異ならざるを寬と謂ひ、（七）萬不同を有つを富と謂ふ。故に德を執るを（八）紀と謂ひ、（九）德成るを立と謂ひ、（一〇）道に循ふを備と謂ひ、（一一）物を以て志を挫かざるを

天地雖大。其化均也。萬物雖多。其治一也。人卒雖衆其主君也。君原於德。而成於天。故曰玄。古之君天下無爲也。天德而已矣。以道觀言。而天下之君正。以道觀分。而君臣之義明。以道觀能。而天下之官治。以道汎觀。而萬物之應備。故通於天地者德也。行於萬物

(一)天地大と雖も、其の化は均し。萬物多しと雖も、其の治は一なり。(三)人卒衆しと雖も、其の主は君なり。(四)君は德に原づいて天に成る、故に玄と曰ふ。古の天下に君たるは無爲なり、天德のみ。(五)道を以て言を觀れば、天下の君正しく、(六)道を以て分を觀れば、君臣の義明かに、(七)道を以て能を觀れば、天下の官治まり、道を以て汎く觀れば、(八)萬物の應備はる。故に天地に通ずるものは德なり、萬物に行はるゝものは道なり。(九)上の人を治むるものは事なり。(一〇)能の藝とする所ある者は技なり。(一一)技は事に兼ねられ、(一二)事は義に兼ねられ、(一三)義は德に兼ねられ、(一四)德は道に兼ねられ、(一五)道は天に兼ねらる。故に曰く、古の天下を畜ふものは、(一六)無欲にして天下足り、(一七)無爲にして萬物化し、淵靜にして百姓定まると。(一八)記に曰く、一に通じて萬物畢き、心に得ること無くして、鬼神服すと。

(一) 此の節無爲の天德を以て世を治め賢能有爲の士を使はざる時はよく至治に至るべき所以を說き人の性命の情を述ぶ (二) 天地は大なれども其の化育支配は一にしてかはることなし (三) 臣卒は多數なれども之を統一する主體は君首 (四) 君主は德を本として天理自然の道に達成す (五) 道によりて名號を觀察するときは天下の君たるや其

亂。恃於民而不輕。因於物而不去。物者莫足爲也。而不可不爲。不明於天者。不純於德。不通於道者。無自而可。不明於道者悲夫。何謂道。有天道。有人道。無爲而尊者天道也。有爲而累者人道也。主者天道也。臣者人道也。天道之與人道也相去遠矣。不可不察也。

道と謂ふ。天道有り、人道有り、無爲にして而して尊きものは天道なり。有爲にして而して累はしきものは人道なり。(一四) 主なるものは天道なり。臣なるものは人道なり。天道の人道に與けるや相去ること遠し、察せざるべからざるなり。

(一) 天は爲さゞる所なし、聖人之にならへども自然に任せて助長せず (二) 自然に德の成るに任せて自ら累ねて高くせず (三) 道には變化あれども自然と之に從ふのみにて故意に經營せず (四) 自然に仁にかなふのみにして之に恃み依らず (五) 止むを得ずして義に處り故意に義を積まず (六) 禮を要することあれば拘らずして之に應じ辭まず (七) 事に當れば之に接し必ずしも辭せず (八) 法にかなふ如くにして亂ひて亂れず (九) 民を恃み重んじて輕視せず (一〇) 物は賤しけれども之に因り任じて敢へて棄て去らず (一一) 物は名あり形ある差別的現象にして爲すに足るものにあらざれど強ひて爲さざるは自然に非ず故に爲さゞるべからず (一二) 次の玄理に明かならざるものは其の德純なる所ありて純ならず (一三) 道に通ぜざるものは凡て可とすべき所なし (一四) 無爲玄默にして尊きものは天道、有爲施治して累はしきものは人道

不レ居者義也。親而不レ可レ不レ廣者仁也。節而不レ可レ不レ積者禮也。中而不レ可レ不レ高者德也。一而不レ可レ不レ易者道也。神而不レ可レ不レ爲者天也。故聖人觀ニ於天一而不レ助。成ニ於德一而不レ累。出ニ於道一而不レ謀。會ニ於仁一而不レ恃。薄ニ於義一而不レ積。應ニ於禮一而不レ諱。接ニ於事一而不レ辭。齊ニ於法一而不レ

ざるものは道なり。(一〇)神なれども爲さざるべからざるものは天なり。

(一) 名あり形ある物は紛雜にして賤なれども之を棄てずして任ぜざるべからず (二) 民は無知にして卑しけれども之を輕んぜずして因らざるべからず (三) 事は昧き所なれども辭せずして爲さゞるべからず (四) 法は理の如く密ならねど陳ね施さゞるべからず (五) 義は分別にて關係上我に遠きものなれども之を守り處らざるべかず (六) 仁は親愛にて我に近きものなれども偏私せずして之を厲くせざるべからず (七) 禮は節度に中るものなれども之を積みて厚くせざるべからず (八) 德は中正なるものなれど之を高揚せざるべからず (九) 道は本來唯一無二のものなれど一に拘し、變通自在ならざれば道の眞性現しがたし故に易へざるべからず (一〇) 天は神變不思議なれども爲さゞれば其の神たるを現さゞるが故に爲さゞるべからず

故に聖人、(一)天に觀て而して助けず、(二)德に成つて而して累ねず、(三)道に出でて而して謀らず、(四)仁に會して而して恃まず、(五)義に薄りて而して積まず、(六)禮に應じて而して諱まず、(七)事に接して而して辭せず、(八)法に齊しくして而して亂れず、(九)民を恃んで而して輕んぜず、(一〇)物に因つて而して去らず。(一一)物なるものは爲すに足ること莫けれども、而かも爲さざるべからず。(一二)天に明ならざるものは、德に純ならず。(一三)道に通ぜざるものは、自りて可なる無し。道に明ならざるものは悲しいかな。何をか

行二乎無方一。挈レ汝適。復二之撓撓一。以遊二無端一。出入無レ旁。與レ日無レ始。頌二論形軀一。合二乎大同一。大同而無レ己。無レ己惡乎得レ有。有レ有。觀レ有者昔之君子。覩レ無者天地之友。

賤而不レ可レ不レ任者。物也。卑而不レ可レ不レ因者民也。匿而不レ可レ不レ爲者事也。麤而不レ可レ不レ陳者法也。遠而不レ可

ぞ有を有とすることを得ん。(一〇)有を觀るものは昔の君子、無を觀る者は天地の友たり。

(一)即ち卿有の人の天下を教ふるは影の形に伴ひ響の聲に應ずるが如く無心にして天下の感を受く　(二)自ら作爲せず唯問ふものある時はこれに應じ其の問判する所を殘らず發現す　(三)天下の問ひに應じて其の配となる　(四)自ら強ひて應せざること響應ずるが如し　(五)自ら強ひて行かざること方無きが如し　(六)全身を携へゆきて完然自在物に拘せざる地にかへし無限無端の絶對境に遊ぶ　(七)往來出入復而することなく日と同じく共に無始　(八)形骸體貌を譚說すれば萬物と一如区に一如されば我も無く己も無し　(九)無くんば有ならず又無ならず故に有を有としがたし　(一〇)有に着眼するものは差別の見を以て天下を治めんとする三王の徒無に着眼するものは無差別の見を以て無爲の教を守らんとする天地の友

(一)賤なれども任ぜざるべからざるものは物なり。(二)卑なれども因らざるべからざるものは民なり。(三)匿なれども爲さざるべからざる者は事なり。(四)麤なれども陳ねざるべからざるものは法なり。(五)遠なれども居らざるべからざるものは義なり。(六)親なれども廣めざるべからざるものは仁なり。(七)節なれども積まざるべからざるものは禮なり。(八)中なれども高くせざるべからざるものは德なり。(九)一なれども易へざるべから

夫有レ土者有二大物一也。有二大物一者。不レ可二以レ物物一。而不レ物故能物レ物。明二乎物レ物者之非一レ物也。豈獨治二天下百姓一而已哉。出二入六合一。遊二乎九州一。獨往獨來。是謂二獨有一。獨有之人。是之謂二至貴一。

大人之敎若二形之於レ影。聲之於一レ響。有レ問而應レ之。盡二其所一レ懷。爲二天下配一。處二乎無響一。

夫れ土(一)を有つ者は大物を有てるなり。大物を有つ者は、(二)物を以て物とすべからず。(三)而して物とせざるが故に能く物を物とす。(四)物を物とするものの物に非ざるを明かにせば、豈に獨り天下百姓を治むる而已ならんや。六合に出入し、九州に遊び、獨往獨來す、是を獨有(五)と謂ふ。獨有の人、是を之れ至貴と謂ふ。

㊀國土を有するものは人の有する所のもの、内にて大物を有すとすべし　㊁彼我の區別を立てゝ國家を物と觀一自我より離しみるべからず　㊂國家を物として自家に對するものとせず物我一如とするがゆゑに國家は無爲の中に治まる是眞に物を物とする本意　㊃物を物とせず即ち物我一如の見地より物を物とするは既に其の物たる意味を失うて玄同するが故に眞の物に非ずと云ふ理を明にするときは獨り天下を治め得るのみならず天地四方の六合に出入し禹貢九州に遊び獨歩獨行す　㊄對存せずして絕對的に有り

(一)大人の敎は、形の影に於ける、聲の響に於けるが若し。(二)問ふことを有つて之に應じ、其の懷く所を盡くして、(三)天下の配たり。(四)無響に處り、(五)無方に行く。(六)汝を挈げて適き、之を撓撓に復し、以て無端に遊ぶ。(七)出入、旁無く、日と與に始め無し。(八)形軀を頌論すれば、大同に合す。大同なれば己れ無し、(九)己れ無くんば惡ん

異二於己一也。同二於己一而欲レ之。異二於己一而不レ欲者。以レ出二乎衆一爲レ心也。夫以レ出二乎衆一爲レ心者。曷常出二乎衆一哉。因レ衆以寧。所レ聞不レ知二衆技衆一矣。而欲レ爲二人之國一者。此攬二乎三王之利一而不レ見二其患一者也。此以二人之國一僥倖也。幾何僥倖而不レ喪二人之國一乎。其存二人之國一也。無二萬分之一。而喪二人之國一也。一不レ成而萬喪餘。悲夫。有レ土者之不レ知也。

すなり。(二)夫れ衆に出づるを以て心と爲すものは、曷ぞ常て衆に出でんや。(四)衆に因れば以て寧し。(三)聞く所衆技の衆に如かずして、而して人の國を爲めんと欲するものは、此れ三王の利を攬て、其の患を見ざるものなり。此れ人の國を以て(五)僥倖するなり。幾何か僥倖して而して人の國を喪はざる。(六)其の人の國を存するや、萬分の一なくして、而して人の國を喪ふや、一も成らずして、萬に餘喪あり。悲しい夫、土を有つ者の知らざることや。

(一) 人己と同じきときは之を欲し人己と異なるときは之を欲せざる所以は他人以上にならんと欲するがため (二) 他人以上にならんとして常に他人を眼中に置くものは他人以上になりがたし (四) 衆中の心を絶ちて衆と一致すれば心安し (三) 我一人の聞く所は衆人の技能の多きに及ばざるに一人の身を以て人の國を治めんと欲するものは夏の禹王殷の湯王周の文王の利のみを見て其の弊害を見ざるもの (五) 國家を私してこぼれ幸ひを得んとするもの (六) 其の國家を保存するとは萬に一つも無く其の國家を亡すとに於ては唯の一つも成ることなくして亡すこと萬に過ぐ

乎歸矣。雲將曰。吾遇レ天難。願聞二一言一。鴻蒙曰。意心養。汝徒處二無爲一而物自化。墮二爾形體一。吐二爾聰明一。倫與レ物忘。大二同乎涬溟一。解レ心釋レ神。莫然無レ魂。萬物云云。各復二其根一。各復二其根一而不レ知。渾渾沌沌。終身不レ離。若彼知レ之。乃是離レ之。無レ問二其名一。無レ闚二其情一。物故自生。雲將曰。天降レ朕以レ德。示レ朕以レ默。躬身求レ之。乃今也得。再拜稽首起。辭而行。

本意なれども民に歸依せらる（八）天下の常道を亂し物の當に然るべき實情に反するときは自然の本性をやぶる（九）玄天成らざる弊は獸群解散し鳥夜半に鳴く如き不自然の現象を起す（一〇）意は噫。是無爲ならずして人を治むる過による（一一）汝の言の如きは聞くも汚らはし（一二）高く擧がる貌（一三）心を用ひざるが心を用ふる所以（一四）心を無爲に置かば治めずとも萬物自ら化を遂ぐべし（一五）汝の身體を忘れ汝の聰明を棄て彼と我との類と物とを忘る（一六）自然の氣なる太一に冥合す（一七）有爲の心と有知の神とを解放し寂然とし動念無し（一八）萬物衆多一に歸して其の根元にかへる（一九）無心なるが故に知らず（二〇）知らず覺えず無心にして終身其の根元を離れず然らずして其の根元にかへる〻ことに氣がつけば反つて復ることなくして離る（二一）若し彼と是との差別ある時は其の根を離る其の知ること彼にある時は離る〻もの是にあり（二二）既に知らざれば其の名も無かるべきなり然るに其の名を尋ぬるときは其の根を離る（二三）既に知らざれば其の情も無かるべきなりこれをうかがひ求むるときは其の根を離る（二四）問はず闚はずして萬物元より自然と生育するものなり（二五）吾自ら德と默とを求めて今之を得たり

世俗之人。皆寧三人之同二乎己一。而惡三人之

世俗の人、皆、人の己に同じきを喜んで、而して人の、己に異なるを惡(にく)めり。（一）己に同じければ之を欲し、己に異なれば欲せざるものは、衆(しう)に出づるを以て心と爲

往遊者鞅掌。以觀無妄。朕又何知。雲將曰。朕也自以爲猖狂。而民隨予所往。朕也不得已於民。今則民之放也。願聞一言。鴻蒙曰。亂天之經。逆物之情。玄天弗成。解獸之羣。而鳥皆夜鳴。災及草木。禍及昆蟲。意治人之過也。雲將曰。然則吾奈何。鴻蒙曰。意毒哉。僊僊

草木に及び、禍昆蟲に及ぶ。(一〇)意、人を治むるの過なりと。雲將曰く、然らば則ち吾奈何せんと。鴻蒙曰く、(一一)意、毒なるかな、(一二)僊僊乎として歸れと。雲將曰く、吾れ天に遇ふこと難し、願はくば一言を聞かん。鴻蒙曰く、(一三)意、心養せよ。汝徒ゝ(一四)無爲に處れば、物自ら化せん。(一五)爾の形體を墮て、爾の聰明を吐き、倫と物と忘るれば、(一六)涬溟に大同す。心を解き神を釋き、(一七)莫然として魂無し。(一八)萬物云云として、各ゝ其の根に復る。各ゝ其の根に復つて(一九)而して知らず。(二〇)渾渾沌沌、終身離れず。(二一)若し彼之を知らば、乃ち是之を離る。(二二)其の名を問ふこと無く、其の情を(二三)闚ふこと無かれ。(二四)物故より自ら生ずと。雲將曰く、天朕に降すに德を以てし、朕に示すに默を以てす。(二五)躬身ら之を求めて乃ち今や得たりと。再拜稽首して起ち、辭して行けり。

(一) 地名 (二) 天は鴻蒙を怪みていふ。朕は吾 (三) 逍遙浮遊して何の求めもなし (四) 放任にして我まかせに行く (五) 群をうつて遊ぶは形勢する如くなれども心は安逸にして一點の私なき天眞を觀得す (六) 吾も亦そこもとと同じく放任にしてゐるつもりなれども民予が往くさきざきに附ひ來りて求むる所あり (七) 吾は已むことを得ず不

蒙仰而視雲將曰。吁。雲將曰。天氣不和。地氣鬱結。六氣不調。四時不節。今我願合六氣之精以育羣生。爲之奈何。鴻蒙拊脾雀躍掉頭曰。吾弗知。吾弗知。雲將不得問。

化育の性命なれども有爲形象の迹なく唯々嶽々として天地間に磅礴するのみ故に是の如く無心 (五) 鴻蒙の體たらくを見て茫然自失して立止り嶷然として動かず (六) 長者の尊稱 (七) 己は遊んでゐるのぢや (八) 雲將は有爲の治を思ひ鴻蒙は無爲の遊をなす志向固より同じからず故に唯吁と嗟歎して是非をいはず (九) 天氣和合せず地氣凝結して散せず陰陽風雨晦明の六氣調和せず四季順を失ふ (一〇) 六氣の元精を和合せしめて諸の生物を育生せん願ひなるが如何にせばよろしからん。雲將有爲の形迹に拘して無爲玄默の妙を知らず

又三年。東遊過有宋之野。而適遭鴻蒙。雲將大喜。行趨而進曰。天忘朕邪。天忘朕邪。再拜稽首。願聞於鴻蒙。鴻蒙曰。浮遊不知所求。猖狂不知所

又三年、東遊して(一)有宋の野を過ぎて、適〻鴻蒙に遭ふ。雲將大に喜び、行き趨つて進んで曰く、(二)天、朕を忘れたりや。天、朕を忘れたりやと。再拜稽首して鴻蒙に聞かんことを願ふ。鴻蒙曰く、(三)浮遊して求むる所を知らず。(四)猖狂して往く所を知らず。遊ぶ者は鞅掌して以て無妄を觀る。朕又何をか知らん。雲將曰く、(六)朕也自ら以爲へらく(五)猖狂なりと。而して民予が往く所に隨ふ。(七)朕也民に已むことを得ずして、今や則ち民に放はる。願はくば一言を聞かんと。鴻蒙曰く、(八)天下の經を亂し、物の情に逆へば、玄天成らず。(九)獸の羣を解いて、鳥皆夜鳴き、災

土。今夫百昌皆生於土。而反於土。故余將去女。入無窮之門以遊無極之野。吾與日月參光。吾與天地爲常。當我緡乎。遠我昏乎。人其盡死。而我獨存乎。

世人は皆果ありとなす　㈣天と其の德を合するもの　㈤天下の歸往するもの　㈥生きて天の陽光を浴み死して土と成る　㈦凡百の生物は土に生じて土に死し反る　㈧前に出づ　㈨日月と其の光を同じくして無極なり　㈩天地と同じく恒常不易　(一一)物我に來るも無心なり去つて我に遠ざかるも無知なり　(一二)外物の來去は我の關する所に非ず故に其の寂然闇にして人盡く死するに我のみ獨り不死不滅なるかを疑ふ

雲將東遊、過扶搖之枝。而適遭鴻蒙。鴻蒙方將拊髀雀躍而遊。雲將見之。倘然止、贄然立。曰。叟何人邪。叟何爲此。鴻蒙拊髀雀躍不輟。對雲將曰。遊。雲將曰。朕願有問也。鴻

(一)雲將東遊して扶搖(二)の枝を過ぎて、適〻、鴻蒙(三)に遭ふ。鴻蒙方將に髀(四)を拊ち、雀躍して遊ばんとす。雲將之を見て、倘然(五)として止まり、贄然として立つ。曰く、叟(六)は何人ぞや。叟何ぞ此を爲すと。鴻蒙髀を拊ち雀躍して輟まず。雲將に對へて曰く、遊(七)ぶ。雲將曰く、朕願はくば問ふこと有らん。鴻蒙仰いで雲將を視て曰く、吁(八)。雲將曰く、天氣(九)和せず、地氣鬱結し、六氣調はず、四時節あらず。今、我六氣の精(一〇)を合して、以て羣生を育てんを願ふ、之を爲すこと奈何んと。鴻蒙髀を拊ち、雀躍して頭を掉つて曰く、吾れ知らず、吾れ知らずと。雲將問ふことを得ず。

(一)雲を擬人化していふ　(二)大木の名　(三)天地間の元氣　(四)股をうちこをどりして遊ぶ。天地の元氣は萬物

外。多知爲レ敗。我爲レ女遂ニ於大明之上一矣。至ニ彼至陽之原一也。爲レ女入ニ於窈冥之門一矣。至ニ彼至陰之原一也。天地有レ官。陰陽有レ藏。愼守ニ女身一。物將ニ自壯一。我守ニ其一一以處ニ其和一。故我修レ身千二百歳矣。吾形未ニ常衰一。

以て己を守れば能く天地陰陽の變理に一致し長壽を得んとなり (一六) 天は明に地はくらくして各司る所あり (一七) 陰中陽を藏し陽中陰を藏し二氣和して形體全し (一八) 物は形體をさす (一九) 唯一の至道を守つて德の和に安んじ居る

黃帝再拜稽首曰。廣成子之謂レ天矣。廣成子曰。來余語レ女。彼其物無窮。而人皆以爲レ終。彼其物無測。而人皆以爲レ極。得ニ吾道一者。上爲レ皇。而下爲レ王。失ニ吾道一者。上見レ光。而下爲レ

黃帝再拜稽首して曰く、廣成子を天(一)と謂はんと。廣成子曰く、來れ、余女に語げん。彼の其の物(二)は無窮にして、而して人皆以て終ると爲す。(三)彼の其の物は無測にして、而して人皆以て極まると爲す。吾が道を得る者は、上皇(四)と爲りて下王(五)と爲る。吾が道を失ふものは、上光(六)を見て、下土と爲る。今夫れ百昌(七)は、皆土に生じて土に反る。故に余將に女を去りて、(八)無窮の門に入りて、以て無極の野に遊ばしめんとす。吾、(九)日月と光を參へ、吾、(一〇)天地と常を爲す。(一一)我に當たるも緡乎たり、我に遠ざかるも昏乎(一二)たり、人其れ盡く死して而して我れ獨り存するか。

(一) 天と德を同じうする至人といはん (二) 道は無窮なるに世人は皆有限となす (三) 道は變滅せざるものなるに

敢問レ治レ身。奈何而可二以久長一。廣成子蹷然而起曰。善哉問乎。來吾語二女至道一。至道之精窈窈冥冥。至道之極昏昏默默。無レ視無レ聽。抱レ神以靜。形將二自正一。必靜必清。無レ勞二女形一。無レ搖二女精一。乃可二以長生一。目無レ所レ見。耳無レ所レ聞。心無レ所レ知。女神將レ守レ形。形乃長生。愼二女內一。閉二女

ず靜、必らず清、(八)女の形を勞することなく、女の精を搖かすこと無くば、乃ち以て長生なるべし。(九)目見る所無く、耳聞く所無く、心知る所無くば、女の神將に形を守らんとす。形乃ち長生す。(一〇)女の內を愼み、女の外を閉ぢよ。(一一)多知は敗を爲す。我れ女の爲めに(一二)大明の上に遂めて、(一三)彼の至陽の原に至らしめん。女の爲めに(一四)窈冥の門に入れて、(一五)彼の至陰の原に至らしめん。(一六)天地官有り、(一七)陰陽藏有り、愼んで女の身を守れ、(一八)物將に自ら壯ならんとす。我、(一九)其の一を守つて、以て其の和に處る。故に我、身を修むること千二百歲、吾が形未だ常て衰へずと。

(一)天子の位を退き蘭風の室を築き席に白きチガヤを敷きて潔淨にし三ケ月間閑居す　(二)下座の方より膝行して進み再拜稽首す　(三)如何にすれば壽を保ちて長久なるを得べきや　(四)蹶き起つ　(五)至道の精理は遠にしてかすか　(六)至道の極致は暗くして寂靜有爲無爲の境を超越せる絶對境にあり　(七)己の精神を抱き守りて靜かなれば身體も亦正しかるべし　(八)汝の身體を勞苦せず汝の精神を動搖することなくば乃ち長壽を得む　(九)耳目と心を外境と絶たば汝の精神汝の身體を守るべし　(一〇)汝の內面の性を守り外欲を遮げ　(一一)多知は禍となるものなれば思慮を亡ぼせ　(一二)大明は次の窈冥に對して云ひ天をさす　(一三)天の陽の至極、其の本原に至らしめんとなり　(一四)窈冥はくらき處にて地をさす　(一五)地は陰の至極、其の源泉に至らしめんとの意。要するに從來無爲

民人。吾又欲官陰陽以遂羣生。爲之奈何。廣成子曰。而所欲問者物之質也。而所欲官者物物之殘也。自而治天下。雲氣不待族而雨。草木不待黄而落。日月之光。益以荒矣。而佞人之心翦翦者。又奚足以語至道。

又奚ぞ以て至道を語るに足らんと。

㈠姓は廣、名は成子、古の道德者 ㈡物無くして大に通ずる虚無玄同の境地に安んじ居る ㈢至極の道に於ける精理を承りたし ㈣天地の精氣を取つて五穀の豐熟を助く ㈤陰陽萬物の生育を遂げしめんと欲す ㈥萬物の本質 ㈦帝の ㈧雲未だ集まるに及ばずして雨降り草木黄葉するに及ばずして落葉し日月の光輝益々くらくして萬物皆其の自然を失ふ ㈨汝は姦佞にして心の狹少淺劣なるものなれば至道を論ずる資格なし

黄帝退捐天下。築特室。席白茅。閒居三月。復往邀之。廣成子南首而臥。黄帝順下風膝行而進。再拜稽首而問曰。聞吾子達於至道。

黄帝退いて、㈠天下を捐て、特室を築き、白茅を席き、間居する三月、復往いて之を邀ふ。廣成子南首して臥す。黄帝下風に順ひ、㈡膝行して進み、再拜稽首して問うて曰く、聞く吾子至道に達すと。敢へて身を治むることを問ふ。㈢奈何して以て長久なる可きと。廣成子㈣蹷然として起つて曰く、善いかな問や、來れ、吾、女に至道を語げん。㈤至道の精は窈窈冥冥、㈥至道の極は昏昏默默。視ること無く、聽くこと無く、㈦神を抱いて以て靜かにせば、形將に自から正しからんとす。必ら

跂攘臂乎桎梏之間。意甚矣哉。其無愧而不知恥也甚矣。吾未知聖知之不爲桁楊椄槢也。仁義之不爲桎梏鑿枘也。焉知曾史之不爲桀跖嚆矢也。故曰。絶聖棄知。而天下大治。

枷をはめられたるもの、推しあふほど多数　(九)　かく世亂れたるに乘じて儒墨の徒始めて勢ひこんで手カセ足カセを受けたる人民の間に臂を張つて力みかへり仁義を說く　(一〇)　仁義起りしがために世亂れたるを思はず其の責任を忘れ反つて復た仁義を說いて民を桎梏の間に救はんとするは愧羞きこと甚し　(一一)　聖知反つて首枷足枷の楔となる　(一二)　仁義反つて桎梏の穴に嵌むる栓となる

黄帝立爲天子十九年。令行天下。聞廣成子在於空同之上。故往見之。曰。我聞吾子達於至道。敢問至道之精。吾欲取天地之精。以佐五穀。以養

黄帝立つて天子たること十九年、令天下に行はる。(一)廣成子、(二)空同の上に在りと聞き、故に往つて之を見て曰く、我聞く、吾子至道に達すと。敢へて(三)至道の精を問ふ。吾、(四)天地の精を取つて、以て五穀を佐け、以て民人を養はんと欲す。吾又(五)陰陽を官して、以て羣生を遂げしめんと欲す。之を爲すこと奈何。廣成子曰く、而の問はんと欲する所のものは、(六)物の質なり。而の官せんと欲する所は、物の殘なり。而の天下を治めてより、(八)雲氣族るを待たずして雨ふり、草木黄ばむを待たずして落ち、日月の光益々以て荒めり。(九)而は佞人の心の翦翦たる者、

畢起。於是乎喜怒相疑。愚知相欺。善否相非。誕信相譏。而天下衰矣。大德不同。而性命爛漫矣。天下好知。而百姓求竭矣。

求むるが故に欲求無限なれども求むる所の者は盡く

於是乎釿鋸制焉。繩墨殺焉。椎鑿決焉。天下脊脊大亂。罪在攖人心。故賢者伏處大山嵁巖之下。而萬乘之君憂慄乎廟堂之上。今世殊死者相枕也。桁楊者相推也。刑戮者相望也。而儒墨乃始離

是に於てか、(一)釿鋸制し、(二)繩墨殺し、(三)椎鑿決す。天下(四)脊脊として大に亂る。罪、人心を攖すに在り。故に(六)賢者、太山嵁巖の下に伏處して、而して萬乘の君、(五)廟堂の上に憂慄す。今の世、(七)殊死の者相枕し、(八)桁楊の者相推し、刑戮の者相望めり。(九)而して儒墨乃ち始めて離跂として臂を桎梏の間に攘ぐ。意甚しい哉、其の(一〇)愧づること無くして、而して恥を知らざることや、甚し。吾、未だ聖知の(一一)桁楊の椄槢たらざるや、(一二)仁義の桎梏の鑿枘たらざるやを知らず。焉ぞ曾史の桀跖の嚆矢たらざるを知らん。故に曰く、聖を絶ち知を棄てて、而して天下大に治まらんと。

(一)マサカリと鋸、刑具を以て禁制す (二)法令をもつて殺す (三)槌とノミ、刑具にて斬切す (四)相蹂躪する貌 (五)是の如きはもと仁義法令刑罰をもつて人心を亂せし罪に歸す (六)賢者は世を避けて太山の崖岩の下に隱れ住み萬乘の天子は政府の上にありて心配す (七)死罪の宣告を受けたる者互に重なりあふほど多數 (八)首枷足

昔者黄帝始以二仁義一攖二人之心一。堯舜於レ是乎股無レ胈。脛無レ毛。以養二天下之形一。愁二其五藏一以爲二仁義一。矜二其血氣一以規二法度一。然猶有レ不レ勝也。堯於レ是放二讙兜於崇山一。投二三苗於三峗一。流二共工於幽都一。此不レ勝二天下一也。夫施二及三王一。而天下大駭矣。下有二桀跖一。上有二曾史一。而儒墨

昔者黄帝、始めて仁義を以て人の心を攖す。堯舜是に於てか股に胈無く、脛に毛無く、以て天下の形を養ふ。(一)其の五藏を愁へしめて以て仁義を爲し、其の血氣に矜つて以て法度に規る。(二)然れども猶ほ勝へざることあるなり。(三)堯、是に於て驩兜を崇山に放ち、(四)三苗を三峗に投じ、(五)(六)共工を幽都に流す。(七)此れ、天下に勝へざるなり。(八)夫れ三王に施及して、而して天下大に駭く。(九)下に桀跖有り、上に曾史ありて、而して儒墨畢く起る。(一〇)是に於てか、喜怒相疑ひ、愚知相欺き、善否相非り、(一一)誕信相譏りて、而して天下衰ふ。(一二)大德、同ならずして而して性命爛漫す。(一三)天下知を好んで、而して百姓の求竭く。(一四)

(一) 奔命に疲れて股脛肉無く脛の毛摩り切る　(二) 徒に天下の外形を治む　(三) 是の如く努すれども仁義法度に足らざることあり　(四) 堯の時の悪人　(五) 種族の名、南に背く　(六) 地名　(七) 共工氏を幽都に流す　(八) 仁義法度足らずして刑罰を用ふ　(九) 夏の禹王殷の湯王周の武王に及んで天下大に亂る　(一〇) 下には不和不義を行ひたる夏桀盗跖あり上には仁義を行ひたる曾參史鰌ありて仁義の論其の説を聞き儒教墨教の道一時に起る　(一一) 一方に是として喜ぶ者あれば一方には亦之を非として怒るものあり互に疑ひあふ　(一二) いつはりとする者と眞實とする者と譏りあふ　(一三) 玄同の大德に一致せずして天眞の本性亂れくづる　(一四) 天下の人知を好み用ひて欲する所を

無爲。而萬物炊累焉。吾又何暇レ治二天下一哉。

崔瞿問二於老聃一曰。不レ治二天下一安臧二人心一。老聃曰。女愼無レ攖二人心一。人心排レ下而進レ上。上下囚殺。淖約柔二乎剛强一。廉劌彫琢。其熱焦火。其寒凝氷。其疾俛仰之間。而再撫二四海之外一。其居也淵而靜。其動也縣而天。僨驕而不レ可レ係者。其唯人心乎。

崔瞿、老聃に問うて曰く、天下を治めずんば安ぞ人心を臧くせんと。老聃曰く、汝(一)愼んで人心を攖すこと無かれ、(二)人心は下を排して上に進み、上下囚殺す。(三)淖約として剛强を柔かにし、(四)廉劌して彫琢す。(五)其の熱するや焦火、其の寒なるや(六)凝氷、(七)其の疾きこと俛仰の間にして再び四海の外を撫す。(八)其の居るや淵にして而して靜、(九)其の動くや縣りて而して天、(一〇)僨驕にして而して係ぐ可らざるものは其れ唯ゝ人心か。

(一) 天下を治むるは在宥にあるのみ言を愼んで人心を亂す勿れ (二) 人の心は相排擠し相競爭し下より上へ進み上下互に係縛し擯闘す (三) 處女の如くたをやかにして壯士の如き剛强なる心を柔かにす (四) かどばりたる心を削り磨ゐ變形す (五) 心の熱し來る如きは燃ゆる火の如し (六) 凝結せる氷 (七) 心の活動の敏速なること一俯仰の間に四海の外を馳せめぐる (八) 心の定居して動かざる時は深淵の如く靜 (九) 心の動く時は高く懸つて天に昇る如し (一〇) たけり狂うて束縛す可からず

惜之、甚矣天下之惑也、豈直過也而去之邪。乃齊戒以言之。跪坐以進之。鼓歌以儛之。吾若是何哉。

故君子不得已而臨莅天下。莫若無爲。無爲也。而後安其性命之情。故貴以身於爲天下。則可以託天下。愛以身於爲天下。則可以寄天下。故君子苟能無解其五藏、無擢其聰明、尸居而龍見、淵默而雷聲。神動而天隨。從容

故に(一)君子已むを得ずして、天下に臨莅せば、無爲に若くは莫し。無爲なり、而る後其の性命の情を安んず。故に貴ぶ(二)に身を以てすれば、天下を爲むるに於て、則ち以て天下を託すべし。愛するに身を以てすれば、天下を爲むるに於て、則ち以て天下を寄すべし。故に君子苟くも能く其の五藏(三)を解くこと無く、其の聰明(四)を擢くこと無ければ、尸居(五)して而して龍見し、(六)淵默して而して雷聲し、(七)神動して而して天隨し、(八)從容無爲にして而して萬物炊累す。吾、又何ぞ天下を治むるに暇あらんや。

(一) 止むを得ずは王者たらず若し止むを得ずして南面して天下に臨むときは無爲玄同の治をなすに如くことなし (二) 其の身を貴み愛するものは性命の情に安んずるものなるゆゑ我を貴て、物に殉せず故に天下を寄託すべし (三) 五臓は心の府たり之を解き分つ時は其の性命の情を失ふ (四) 其の聰明を外部に抽・表す (五) 尸の如く靜居して淵の如く沈默す (六) 默すること淵の如くにして其の聲雷の如く響く (七) 動きて逆なきこと神變自在して萬物自ら從り隨ふ (八) 從容無爲なれども萬物蔓延積累して自ら化す

於聲一也。說レ仁邪。是亂二于德一也。說レ義邪。是悖二於理一也。說レ禮邪。是相二於技一也。說レ樂邪。是相二於淫一也。說レ聖邪。是相二於藝一也。說レ知邪。是相二於疵一也。天下將レ安二其性命之情一。之八者。存可也。亡可也。天下將レ不レ安二其性命之情一。之八者。乃始臠卷傖囊而亂二天下一也。而天下乃始尊レ之

か、是れ技を相くるなり。(五)樂を說ぶか、是れ淫を相くるなり。(六)聖を說ぶか、是れ藝を相くるなり。(七)知を說ぶか、是れ疵を相くるなり。(八)天下將に其の性命の情に安んぜんとすれば、之の八つの者、存するも可なり、亡きも可なり。天下將に其の性命の情に安んぜざらんとすれば、之の八つの者、乃ち始めて(九)臠卷傖囊して、天下を亂つて、(一〇)而して天下乃ち始めて之を尊び之を惜む。甚だしいかな、天下の惑へることや。(一一)豈に直に過つて之を去らんや。(一二)乃ち齊戒して以て之を言ひ、跪坐して之を進め、鼓歌して以て之を儛はす。吾れ是(一三)の若きを何んせんや。

(一) 色に心を蕩かすもの　(二) 仁を好む時は是其の愛偏する所ありて其の德を亂す　(三) 義は物を裁する所以にして是非あり是天理に反戾す　(四) 禮は動作周旋の節に中るを云へば之を好む時は身體屈折の拔巧に馳せしむ　(五) 樂は聲律音調の以て人心を樂しましむる所以なれば之を好む時は人を淫蕩にみちびく　(六) 聖は多能通ぜざるなし之を好む時は藝能を尙ばしむ　(七) 知は詐に導く所以なれば之を好む時は人の疵惡を助く　(八) 天下の人其の天眞の本性に安んじ處らんとするならば聰明仁義禮樂聖知の八の如きは有るも可なきも可　(九) 人の心臠割して全からず卷束して舒びず傖槍して散ぜず囊結して解けず　(一〇) しかるに天下の人皆内を忘れて外を慕ひ彼の八者を尊み惜しむ　(一一) 此の八者に對し無關心の態度をとり雲烟過眼視せずして、尊惜甚だ勸む　(一二) 以下八者を尊惜する狀　(一三) 莊子此の此き世俗の迷ひを如何ともしがたしとなり

邪。毗於陽。大怒邪。毗於陰。陰陽並毗。四時不至。寒暑之和不成。其反傷人之形乎。使人喜怒失位。居處無常。思慮不自得。中道不成章。於是乎天下始喬詰卓鷙。而後有盜跖曾史之行。故舉天下以賞其善者不足。舉天下以罰其惡者不給。故天下之大不足以賞罰。自三代以下者。匈匈焉終以賞罰爲事。彼何暇安其性命之情哉。

而且說明邪。是淫於色也。說聰邪。是淫

(一) 此の篇天下有るがまゝにして強ひて治めず人々をして其の性命の情に安んぜしむべき所以を説く (二) 天下を自然のまゝにして亂さずといふことは聞き居れど天下を人爲の法制を以て治むといふことは聞き居らず (三) 本然の眞性を亂さんことを恐る (四) 素朴の德を換へて是非多方の德をなさんことを恐る (五) わざわざ王者を立てゝ民を治むる必要なし (六) 人民をして喜ばしげに其の本性を樂しましむと雖も在宥せざるが故に施すの迹ありて苦樂の情を動かさしむ是靜の道を缺く (七) 勞苦して其の本性を苦しましむるは恬和ならず (八) 桀と紂との治めし所以は何れも天眞の德に違ふ (九) 人大に喜ぶ時は陽氣過ぎ大に怒る時は陰氣過ぐ (一〇) 陰陽の二氣が共に適度ならざる時は四季生ぜず寒暑の和成らずして其の常を失ふ (一一) 喜怒其の次序を失ふ (一二) 安んずべき居處に安んぜず (一三) 思慮亂れて自得せず (一四) 中途に違うて則なる德を生ぜず (一五) 矯拂悖戻して邪路に陷る (一六) 盜跖の行は惡、曾參史鰌の行は善なれど其の性を離し德を違すに於ては一なり (一七) 是非善惡の紛紛々として群り生じ天下を以て善なるものを賞すれども足らず天下を以て惡なるものを罰すれども足らず (一八) 夏殷周以後は在宥にして天下を治めず騷がしく賞罰を以て天下を治めんとす (一九) 其の天性の實情を安んずること能はず

而して且明を説ぶか、是れ色に淫するなり。聰を説ぶか、是れ聲に淫するなり。(一)仁を説ぶか、是れ德に亂るゝなり。(二)義を説ぶか、是れ理に悖るなり。(三)禮を説ぶ

恐三天下之淫二其性一也、宥レ之也者。恐三天下之遷二其德一也。天下不レ淫二其性一。不レ遷二其德一。有下治二天下一者上哉。昔堯之治二天下一也。使三天下欣欣焉人樂二其性一。是不レ恬也。桀之治二天下一也。使三天下瘁瘁焉人苦二其性一。是不レ愉也。夫不レ恬不レ愉非レ德也。非レ德也而可二長久一者。天下無レ之。人大喜

を恐るゝなり。天下其の性を淫せず。其の德を遷さずんば、(五)天下を治むる者あらんや。昔、堯の天下を治むるや、天下をして(六)欣欣焉として、人ゝ其の性を樂しましむ。是れ恬ならざるなり。桀の天下を治むるや、天下をして(七)瘁瘁焉として、人ゝ其の性を苦しましむ。是れ愉ならざるなり。夫れ(八)恬ならず、愉ならざるは德に非ざるなり。德に非ずして、而して長久なるべきものは、天下に之れ無し。人、(九)大に喜ばんか。陽を毗け、大に怒らんか、陰を毗く。(一〇)陰陽並び毗くれば、四時至らず、寒暑の和、成らず。其れ反つて人の形を傷らんか。人をして(一一)喜怒位を失ひ、(一二)居處常無く、(一三)思慮自得せず。(一四)中道にして章を成さざらしむ。是に於てか、天下始めて(一五)喬詰卓鷙して而して後(一六)盗跖曾史の行あり。故に(一七)天下を擧げて以て其の善なるものを賞して足らず、天下を擧げて以て其の惡なるものを罰して給がず。故に天下の大も以て賞罰するに足らず。(一八)三代より以下は匈匈焉として終に賞罰を以て事と爲す、彼れ何ぞ其の(一九)性命の情を安んずるに暇あらんや。

所㆓已知㆒者、皆知㆑非㆓其所㆑不㆑善、而莫㆑知㆑非㆓其所㆓已善㆒者㆖。是以大亂。故上悖㆓日月之明㆒、下爍㆓山川之精㆒、中墮㆓四時之施㆒。惴耎之蟲、肖翹之物、莫㆑不㆑失㆓其性㆒。甚矣夫好㆑知之亂㆓天下㆒也。自㆓三代㆒以下者是已。舍㆓夫種種之民㆒、而悅㆓夫役役之佞㆒。釋㆓夫恬淡無爲㆒、而悅㆓夫啍啍之意㆒。啍啍已亂㆓天下㆒矣。

（五）網と魚梁　（六）網を張る杙　（七）網を打ちかけてとること　（八）兎を捕る網　（九）巧智を以て詐る　（一〇）漸々に人を害する言　（一一）捕へ所なき議論　（一二）牽强附會の言　（一三）偽りて理を非に曲ぐる言　（一四）同一物を異物とする議論　（一五）草の生茂る如く亂る　（一六）天下の民は己の知らざる知を求めんとはすれど既に其の身に知れる所のものを反省して過とすることを知らず　（一七）己の是認せざることを否定して是非をたつることはすれど反省して否定し是非を好しくすることを知らず　（一八）日蝕月蝕の天變　（一九）山崩れ川涸くる地異　（二〇）四季の氣候が狂ふ　（二一）ピクピクと蠕動する昆蟲　（二二）ヒラヒラと輕く飛ぶ虫　（二三）天變地異四時の不順によつて微細の昆蟲までも其の本性を失ふ　（二四）夏殷周以降は知を好むの結果其の本性を毀ることかくの如し　（二五）淳朴敦厚の民　（二六）こせつきたる佞人　（二七）無欲にして作爲せざる大道を捨つ　（二八）多言の説

在宥（一）

聞㆑在㆓宥天下㆒。不㆑聞㆑治㆓天下㆒也。在㆑之也者。

（二）天下を在宥するを聞く、天下を治むるを聞かざるなり。之を在するは、天下の、（三）其の性を淫せんことを恐るゝなり。之を宥するは、天下の、（四）其の德を遷さんこと

何以知二其然一邪。夫弓弩畢弋機變之知多。則鳥亂二於上一矣。鉤餌網罟罾笱之知多。則魚亂二於水一矣。削格羅落罝罘之知多。則獸亂二於澤一矣。知詐漸毒頡滑堅白解垢同異之變多。則俗惑二於辯一矣。故天下每每大亂。罪在二於好一レ知。故天下皆知レ求二其所一レ不レ知。而莫下知レ求二其

何を以てか其の然るを知るや。夫れ弓弩、畢弋(一)、機變(二)の知多ければ、則ち鳥上に亂る(三)。鉤餌(四)、網罟(五)、罾笱の知多ければ、則ち魚、水に亂る。削格(六)、羅落(七)、罝罘(八)の知多ければ、則ち獸、澤に亂る。知詐(九)、漸毒(一〇)、頡滑(一一)、堅白(一二)、解垢(一三)、同異(一四)の變多ければ、則ち俗、辯に惑ふ。故に天下每每(一五)として大に亂るゝは、罪、知を好むに在り。故に天下(一六)皆其の知らざる所を求むるを知つて、而して其の已に知る所を求むるを知るもの莫し。皆其の善しとせざる所を非とするを知つて、而して其の已に善とする所を非とするを知る者(一七)莫し。是を以て大に亂る。故に上、(一八)日月の明を悖り、下、(一九)山川の精を爍し、中、(二〇)四時の施を墮り、(二一)惴耎の蟲、(二二)肖翹の物、(二三)其の性を失はざる莫し。甚しいかな、知を好むの天下を亂ることや。(二四)三代より以下のものは是れのみ。夫の種種(二五)の民を舍てて、而して夫の役役(二六)の佞を悅び、夫の恬淡無爲(二七)を釋てて、而して夫の啍啍(二八)の意を悅ぶ。啍啍已に天下を亂る。

(一) 柄のある網と射グルミ (二) 鳥を捕る仕掛 (三) 空中の鳥其の生に安んずるを得ずして亂る (四) 釣針とエサ

徳之世一乎。昔者容成氏。大庭氏。伯皇氏。中央氏。栗陸氏。驪畜氏。軒轅氏。赫胥氏。尊盧氏。祝融氏。伏戲氏。神農氏。當二是時一也。民結繩而用レ之。甘二其食一美二其服一。樂二其俗一。安二其居一。鄰國相望。雞狗之音相聞。民至二老死一而不二相往來一。若二此之時一。則至治已。今遂至、使下民延レ頸擧レ踵。曰二某所有一賢者。贏レ糧而趣上レ之。則内棄二其親一而外去二其主之事一。足跡接二乎諸侯之境一。車軌結二乎千里之外一。則是上好レ知之過也。上誠好レ知而無レ道。則天下大亂矣。

畜氏、軒轅氏、赫胥氏、尊盧氏、祝融氏、伏戲氏、神農氏。是の時に當つてや、(二)民結繩して之を用ひ、其の食を甘しとし、其の服を美とし、(三)其の俗を樂しみ、其の居に安んず。(四)鄰國相望み、鶏狗の音相聞えて、民老死に至るまで相往來せず。此の時の若きは則ち至治のみ。今遂に民をして(五)頸を延べ踵を擧け、某の處に賢者有りと曰ひて、(六)糧を贏みて之に趣かしむるに至る。則ち内、其の親を棄てて、外其の主の事を去て、(七)足跡諸侯の境に接し、(八)車軌千里の外に結ぶ。則ち是れ上、知を好むの過なり。上誠に知を好みて而して道なければ、則ち天下大に亂る。

(一) 以下神農氏まで上古の帝王 (二) 書契無きが故に縄の結び目を以て代用し人民巧詐ならず (三) 其の風俗を善しとして樂しみ其の住居を適として安んじ處り恬淡寡慾 (四) 鄰國と境を接して鶏犬の聲聞えあふほどなりしも自得自適すれば互に往來せず (五) 自得せざるが故に期待する所あるなり (六) 食糧を包みもちて遠く賢者を訪ふ (七) 賢者を求めて他國に出て其の足跡諸侯の領國にまたがる (八) 車輪の跡千里の遠きにつゞく

其聰一矣。滅二文章一。散二五采一。膠二離朱之目一。而天下始人含二其明一矣。毀二絕鉤繩一。而棄二規矩一。攦二工倕之指一。而天下始人有二其巧一矣。故曰。大巧若レ拙。削二曾史之行一。鉗二楊墨之口一。攘二棄仁義一。而天下之德始玄同矣。彼人含二其明一。則天下不レ鑠矣。人含二其聰一。則天下不レ累矣。人含二其知一。則天下不レ惑矣。人含二其德一。則天下不レ僻矣。彼曾史楊墨師曠工倕離朱者。皆外立二其德一。而以爚二亂天下一者也。法之所レ無レ用也。

て天下を爚亂する者なり。法の用ふるなき所なり。（二〇）

㊀ 魚淵を去つて淺瀬に出づる時は必ず獲られ國の利器たる聖知は之を人に示す時は惡用せらる ㊁ 聖知を絕滅して素樸無爲の政を施しなば大盜起らざるべし ㊂ 民質朴にして矯飾せず ㊃ 漸く天下の聖法を殘ひ破りたる後民始めて共に道德を論ずべし ㊄ 六律をかき亂す。六律のこと前に出づ ㊅ 竽は笙に似たる樂器、瑟は大なる琴 ㊆ 燒棄つ ㊇ 師曠の耳を塞ぎて天下をして其の聰を蔽はざらしめば天下の人其の聰を内部に包藏して外部に示さゞるに至るべし ㊈ きらびやかなる色あや及び五色の色を散滅す 一〇 視ることの明なる離朱の目を膠づけして塞ぐ 一一 解前に出づ 一二 舜の時代の工人にして始めて規矩を作るといふ 一三 人爲の巧を絕滅しつくしたる後天下始めて眞實自然の巧あるべし 一四 鉤繩を以て曲直し規矩を以て方圓すべきものは巧に似て眞の巧に非ず大巧は自然に任ずるものなるが故に外見拙なるが如し 一五 曾參史鰌の仁義の行を除去り楊朱墨翟の自愛他愛を說く口を閉す 一六 彼我の差別なくして一に混同す 一七 人々各其の明を内部に包藏して外部に示さゞるときは天下の人外物のために眩惑せらるゝことなし 一八 人々各其の德を内部に含蓄包藏して表さゞる時は差別の見に陷りて僻み曲ることなし 一九 内部に含蓄せずして外部に德を立てゝ天下を惑亂するもの 二〇 其の法は多方有爲にして眞の德を修むる上に無用のものなり

子獨不レ知二至

子獨り至德の世を知らずや。昔は容成氏、大庭氏、伯皇氏、中央氏、栗陸氏、驪（一）

故曰、魚不可脫於淵、國之利器不可以示人。彼聖人者、天下之利器也、非所以明天下也。故絕聖棄知、大盜乃止。擿玉毀珠、小盜不起。焚符破璽、而民朴鄙。掊斗折衡、而民不爭。殫殘天下之聖法、而民始可與論議。擢亂六律、鑠絕竽瑟、塞瞽曠之耳、而天下始人含

故に曰く、魚は淵を脫すべからず、國の利器は以て人に示すべからずと。彼の聖人なるものは天下の利器なり。天下に明にする所以に非ざるなり。故に聖を絕ち知を棄てば、大盜乃ち止まん。玉を擿ち珠を毀たば、小盜起らじ。符を焚き璽を破りて民朴鄙ならん。斗を掊き衡を折りて民爭はず、殫く天下の聖法を殘うて民始めて與に論議すべし。六律を擢亂し、竽瑟を鑠絕し、瞽曠の耳を塞ぎて、天下始めて人其の聰を含まん。文章を滅し、五采を散じ、離朱の目に膠して、天下始めて人其の明を含まん。鉤繩を毀絕して、規矩を棄て、工倕の指を攦り、而して天下始めて人其の巧あらん。故に曰く、大巧は拙の若しと。曾史の行を削り、楊墨の口を鉗し、仁義を攘棄して、而して天下の德始めて玄同ならん。彼の人々、其の明を含まば、則ち天下鑠せられず。人々其の聰を含まば、則ち天下累せられず。人々其の知を含まば、則ち天下惑はず。人々其の德を含まば、則ち天下僻まず。彼の曾史、楊墨、師曠、工倕、離朱は、皆外、其の德を立て、以

聖人一而治中天下上。則是重利二盜跖一也。爲二之斗斛一。以量レ之。則幷二與斗斛一而竊レ之。爲二之權衡一以稱レ之。則幷二與權衡一而竊レ之。爲二之符璽一以信レ之。則幷二與符璽一而竊レ之。爲二之仁義一以矯レ之。則幷二與仁義一而竊レ之。何以知二其然一邪。彼竊レ鉤者誅。竊レ國者爲二諸侯一。諸侯之門而仁義存焉。則是非レ竊二仁義聖知一邪。故逐下於大盜揭二諸侯一。竊二仁義一。幷二斗斛權衡符璽之利一者上。雖レ有二軒冕之賞一弗レ能レ勸。斧鉞之威弗レ能レ禁。此重利二盜跖一。而使レ不レ可レ禁者。是乃聖人之過也。

の歴行はれず (八) 善人惡人共に聖人の道によるものとすれば天下を利するよりも害すること多し (九) 脣を失ふ時は自然齒寒とし (一〇) 楚の宣王諸侯を朝會せしに魯の酒濁り薄きを怒り魯を討つ。時に梁の惠王趙を討たんとして楚の之を救はんことを恐れしが此處に至り趙の邯鄲の都を圍む (一一) 脣の竭くるは齒を寒くするために非ず魯酒薄きは邯鄲を圍ましむるためならねど結果よりすれば方に然り故に聖人の生まるゝは大盜を起さんためならねど大盜は聖人の法に假りて起る (一二) 聖人をうち倒して仁義を斥け聖法を毀つて之に代ふるに素樸無欲を以てし盜賊を赦しはなつときは天下始めて治まらん (一三) 河水盡くる時は自然谷水も無くなり丘崩るゝ時は淵が埋るは自然の理 (一四) 故人の聖人共に出でゝ天下を治むるも其の結果は重ねて盜跖の腹を肥すに過ぎず (一五) 聖人民のために斛を作つて物の量をはかれば斛ぐるみに盜む (一六) ハカリを作つて重量をはかる (一七) 割符や印章を作りて約束を堅くせしむ (一八) 斗斛權衡仁義は民を正すべき具なれども既に之等の具あれば又之によりて奸を爲すものを增す (一九) 帶のカケガネに用ふる曲りたる玉 (二〇) 國を盜みし諸侯にして仁義を唱ふるは是聖人の仁義聖知を盜み取つて陽に標榜するもの (二一) 人皆國を盜むの大盜が諸侯たらんことを目的として仁義を利用し斗斛權衡符璽の利益をも幷せ得る者に倣ふ (二二) 高位貴爵ありと雖も善を勸說することと能はず (二三) 刑戮の威を以てするも惡を禁ずることと能はず

不レ行。天下之善人少。而不善人多。則聖人之利二天下一也少。而害二天下一也多。故曰。脣竭則齒寒。魯酒薄而邯鄲圍。聖人生而大盜起。掊二擊聖人一。縱二舍盜賊一。而天下始治矣。夫川竭而谷虛。丘夷而淵實。聖人已死。則大盜不レ起。天下平而無レ故矣。聖人不レ死。大盜不レ止。雖レ重二

下を治むと雖も、則ち是れ重ねて盜跖を利するなり。之が斗斛を爲りて以て之を量れば、則ち斗斛を幷與して之を竊み、之が權衡を爲りて以て之を稱れば、則ち權衡を幷與して之を竊み、之が符璽を爲りて以て之を信にすれば、則ち符璽を幷與して之を竊み、之が仁義を爲りて以て之を矯むれば、則ち仁義を幷與して之を竊む。何を以てか其の然るを知る。彼の鉤を竊むものは誅せられ、國を竊むものは諸侯と爲る。諸侯の門にして仁義存すれば、則ち是れ仁義聖知を竊むに非ずや。故に大盜の、諸侯を揭げて、仁義を竊み、斗斛權衡符璽の利を幷する者を逐はば軒冕の賞有りと雖も勸むること能はず、斧鉞の威も禁ずること能はざらん。此く重ねて盜跖を利して、而して禁ず可らざらしめたる者は、是れ乃ち聖人の過なり。

㊀ 巨盜の名　㊁ 盜むに當つて家中に藏むる財寶を想像するは聖といふべし　㊂ 盜み入るに當徒に先だつは勇
㊃ 盜りべき時の可否得失を知るは知　㊄ 贓品を分配するに公平なるは仁　㊅ 聖勇義知仁の道備具せずして大盜を成すものは天下になし　㊆ 善人も聖人の道を得ざるときは身を立つ所なく盜跖も聖人の道を得ざるときは其

世俗之所レ謂至知者。有ㇾ不下爲二大盜一積上者上乎。所レ謂至聖者。有ㇾ不下爲二大盜一守上者上乎。何以知二其然一邪。昔者龍逢斬。比干剖。萇弘胣。子胥靡。故四子之賢。而身不レ免二乎戮一。

故跖之徒問二於跖一曰。盜亦有レ道乎。跖曰。何適而無レ有レ道邪。夫妄二意室中之藏一聖也。入先勇也。出後義也。知二可否一知也。分均仁也。五者不レ備。而能成二大盜一者。天下未二之有一也。由レ是觀レ之。善人不レ得二聖人之道一不レ立。跖不レ得二聖人之道一

故に跖(一)の徒、跖に問うて曰く、盜も亦、道有るかと。跖曰く、何くに適くとして道有ること無からんや。夫れ室中(二)の藏を妄意するは聖なり、入る(三)に先だつは勇なり、出づるに後るゝは義なり。可否(四)を知るは知なり、分(五)つこと均しきは仁なり。五(六)つの者備らずして、能く大盜を成すものは、天下未だ之れあらざるなり。是に由つて之を觀れば、善人(七)も聖人の道を得ざれば立たず。跖も聖人の道を得ざれば行はれず。天下に善人少く、不善人多ければ、則(八)ち聖人の天下を利するや少くして、天下を害するや多し。故に曰く、脣(九)竭くれば則ち齒寒く、魯酒(一〇)薄くして邯鄲圍まれ、聖人(一一)生まれて大盜起ると。聖人(一二)を掊擊し、盜賊を縱舍して天下始めて治まらん。夫れ川(一三)竭きて谷虛しく、丘夷いで淵實つ、聖人已に死せば則ち大盜起らず、天下平にして故なからん。聖人死せずんば大盜止まず、聖人(一四)を重ねて天

布。耒耨之所刺。方二千餘里。闔四竟之內。所以立宗廟社稷。治邑屋州閭鄉曲者。曷嘗不法聖人哉。然而田成子一旦殺齊君。而盜其國。所盜者。豈獨其國邪。幷與其聖知之法而盜之。故田成子有乎盜賊之名。而身處堯舜之安。小國不敢非。大國不敢誅。十二世有齊國。則是不乃竊齊國。幷與其聖知之法。以守其盜賊之身乎。嘗試論之。

とを知る。昔者、龍逢は斬られ（一七）、比干は剖かれ（一八）、萇弘は胣られ（一九）、子胥は靡せらる（二〇）。故に四子の賢にして（二一）、而して身、戮を免れず。

（一）此の篇は、聖知の天下を治むる所以に非ざるを見し、聖知は盗を含んで表さざるべきを説す（二）箱を開き嚢の中を探り櫃をあばく（三）箱や嚢の封じ目を結び鍵を固くかける（四）大盗賊来る時は箱や嚢を開くことをなさず其のまゝ擔いで走り反つてシマリの固からんことを望む（五）鍵や紐を固くする知はわざわざ盗のために積み守るものと云ふべし（六）聖人の法を設くるは天下の民を治めんためなれども天下を奪ふものは聖人の立てし法を執つて天下に君み反つて之を濫用す（七）村里が連りあひ鶏犬の鳴聲互に聞ゆるほど國富み民多し（八）魚を網し犂鋤の耕す所二千餘里四方（九）四境内を一括す（一〇）祖宗の廟社と土地穀物の神を祀る社を立つ（一一）畝百を夫とし夫三を屋とし屋三を井とし井四を邑とす（一二）五家を比とし五比を閭とす、州は二千五百家郷は一萬二千五百家曲は郷曲（一三）齊の大夫陳恒、田成子私量を以て貸し公量を以て納め務めて小恵を民に施して國を奪ひ大欲を成す（一四）國を奪ひし盗賊ありながら己が身は堯舜の如き安泰の地位に在り（一五）是すなはち聖賢を冒瀆するとともに桓公以來齊國傳來の聖人の法をも併せ盗んで以て盗賊の身を守りたるなり（一六）世人のいふ至極の知といふものは盗賊のために積み守る同様のものなり（一七）夏桀を諫めて斬らる（一八）殷紂を諫めて胸を剖かる（一九）周の靈王の賢臣、周を出で、腸を割かれて死す（二〇）伍子胥は呉王夫差に死を賜はりて屍は江中に投ぜられて其の屍爛る（二一）四子は賢者にして禮法を守りたれど君臣の分あるがために暴君のために戮せらる

之所レ謂知也。然而巨盜至則負レ匱揭レ篋擔レ囊而趨。唯恐三緘縢扃鐍之不二固也一。然則鄕之所レ謂知者。不下乃爲二大盜一積者上也。故嘗試論レ之。世俗所レ謂知者。有乙不下爲二大盜一積上者甲乎。所レ謂聖者。有乙不下爲二大盜一守上者甲乎。何以知二其然一邪。昔者齊國鄰邑相望。雞狗之音相聞。罔罟之所レ

なり。然らば則ち鄕(五)の所謂知なるものは、乃ち大盜の爲めに積むものにあらずや。故に嘗試みに之を論ぜん。世俗の所謂知なるものは、大盜の爲めに積まざる者あるか。所謂聖(六)なるものは大盜の爲めに守らざるものあるか。何を以てか其の然るを知るや。昔は齊國(七)、鄰邑相望み、鷄狗の音相聞え、罔罟(八)の布く所、耒耨の刺す所方二千餘里、四竟(九)の内を闔はせ、宗廟社稷(一〇)を立て、邑屋(一一)、州閭(一二)、鄕曲を治むる所以のもの、曷ぞ嘗て聖人に法らざらんや。然り而して田成子(一三)一旦齊君を殺して其の國を盜む。盜む所のもの豈に獨り其の國のみならんや、其の聖知の法とを并せて之を盜めり。故に田成子、盜賊(一四)の名あつて、而して身堯舜の安きに處れり。小國敢て非らず、大國敢へて誅せず、十二世齊國を有つ。則ち是れ、乃ち齊(一五)國を竊み、其の聖知の法とを并せて、以て其の盜賊の身を守るにあらずや。嘗試みに之を論ぜん。(一六)世俗の所謂至知なる者は、大盜の爲めに積まざるものあるか、所謂至聖なるものは、大盜の爲めに守らざるものあるか。何を以てか其の然るこ

能至レ盗者。伯樂之罪也。夫赫胥氏之時。民居不レ知レ所レ爲。行不レ知レ所レ之。含哺而熙。鼓腹而遊。民能已レ此矣。及下至聖人屈二折禮樂一。以匡二天下之形一。縣二跂仁義一。以慰中天下之心上。而民乃始踶跂好レ知。爭歸二於利一。不レ可レ止也。此亦聖人之過也。

に歸して止む可らず。此れ亦聖人の過なり。

(一) 馬の知は喜べば相伴ひ怒れば蹴あふ如き單純なるものゝみ (二) 轅の端の横木とクビキ (三) 馬の額の上部にはむる月形の馬具 (四) 横目に睨む (五) 頸を曲げて軛をねぢる (六) 銜を突く (七) クツワを吐出す (八) タヅナを噛む (九) 單純なる馬の知を曲げて漸く人の目を盗む知をに至らしめしは伯樂の罪 (一〇) 太古の君長 (一一) 食物を口にふくみ食ひて樂しみ腹つゞみを打つて優遊自適す (一二) 民の知能は之位にて十分なり (一三) 然るに聖人禮樂に屈折せしめて天下萬民の形を正しくし仁義を足を爪立て求めしめて萬民の心を慰む (一四) 互に爭あひ競みあひて知を好む

(一)胠篋

將下爲二胠レ篋探レ囊發レ匱之盜一而爲中守備上。則必攝二緘縢一。固二扃鐍一。此世俗

將に篋を胠き、囊を探り、匱を發くの盜の爲めに守備を爲さんとすれば、則ち必ず(二)緘縢を攝び扃鐍を固くす。此れ世俗の所謂知なり。然れども(四)巨盜至れば、則ち匱を負ひ、篋を揭げ、囊を擔うて趨る、唯ゞ緘縢扃鐍の固からざらんを恐るゝ

下始分矣。故純樸不レ殘。孰爲二犧樽一。白玉不レ毀。孰爲二珪璋一。道德不レ廢。安取二仁義一。性情不レ離。安用二禮樂一。五色不レ亂。孰爲二文采一。五聲不レ亂。孰應二六律一。夫殘レ樸以爲レ器。工匠之罪也。毀二道德一以爲二仁義一。聖人之過也。

作れず白玉を刻み毀たずしては細工したる玉器は作れず　(一七)牛首の形に刻み宗廟を祭る酒器　(一八)上尖りて下方なる玉を圭といひ半ば圭形なるを璋といふ　(一九)無爲至正の道徳廢頽せずしては仁義を取り用ふる要もなし　(二〇)自然の性情心より離れずしては禮樂を用ふることもなし　(二一)青黄赤黒白　(二二)五色以外の間色を用ひたる色模様　(二三)宮商角徴羽　(二四)黄鐘　(二五)丸木を殘害して成器となすは工匠の罪

夫馬。陸居則食レ草飲レ水。喜則交レ頸相靡。怒則分レ背相踶。馬知已レ此矣。夫加レ之以二衡扼一。齊レ之以二月題一。而馬知介倪闉扼鷙曼詭銜竊轡。故馬之知而

夫れ馬は陸居ずれば、則ち草を食ひ、水を飲み、喜べば則ち頸を交へて相靡ひ、怒れば則ち背を分ちて相踶る。(一)馬の知は此に已むのみ。夫れ之に加ふるに衡扼(二)を以てし、之を齊ふるに月題(三)を以てして、馬の知、介(四)倪(五)闉扼(六)鷙曼し、詭(七)銜竊轡(八)す。故(九)に馬の知にして能く盗に至るものは、伯樂の罪なり。夫れ赫胥氏(一〇)の時、民居りて爲す所を知らず、行くに之く所を知らず。含哺(一一)して熙しみ、鼓腹して遊ぶ。民(一二)能く此に已む。聖人(一三)禮樂に屈折して以て天下の形を匡し、仁義に縣跂して以て天下の心を慰むるに至るに及んで、而して民始めて踶跂(一四)して知を好み、爭うて利

禽獸成レ羣。草木遂長。是故禽獸可二係羈一而遊。鳥鵲之巢。可二攀援而闚一。夫至德之世同與二禽獸一居。族與二萬物一並。惡乎知二君子小人一哉。同乎無知。其德不レ離。同乎無欲。是謂二素樸一。素樸而民性得矣。及レ至二聖人蹩躠爲レ仁。踶跂爲二義。而天下始疑矣。澶漫爲レ樂。摘僻爲レ禮。而天

して天下始めて疑ふ。澶漫(一五)して樂を爲し、摘僻して禮を爲して、天下始めて分る。故に純樸(一六)殘はずんば孰れか犧尊(一七)を爲らん。白玉毀たずんば孰れか珪璋(一八)を爲らん。道德(一九)廢れずんば安んぞ仁義を取らん。性情(二〇)離れずんば安んぞ禮樂を用ひん。五色(二一)亂れずんば孰れか文采(二二)を爲らん。五聲(二三)亂れずんば孰れか六律(二四)に應ぜん。夫れ(二五)樸を殘ひて以て器を爲すは、工匠の罪なり。道德を毀ちて以て仁義を爲すは、聖人の過なり。

(一) 仁義を以て拘束せずとも民は織りて衣を作り耕して食ふは自然の通有性、之を人皆同じうせる德といふ (二) 萬民一族なれど黨同比周せず (三) 之を名づけて天然に從つて自由にすといふ (四) 至德上にありて至德下に行はるゝ世には民の行ふこと滿足し物を視ること顚々にして正し (五) 小徑と切通し (六) 舟と橋 (七) 人の用を足すべき種々の動植群生して其の郷土に充滿す (八) 禽獸に慣れ之を繋いで遊ぶことを得、鳥鵲の巣も攀ぢ上つてのぞくことを得 (九) 至德行はるゝ世に於ては禽獸と群居して避けず (一〇) 人類生類と並び住む (一一) 何れか君子何れか小人たるを知らんや (一二) 一様に無知にして其の德心より離るゝことなし。知あれば心外に馳せて德之に離る (一三) 民各々其の性のありのまゝを得て天下自ら治る (一四) 聖人自然のまゝにせず努力して仁を爲し心を勞苦して義を爲すに至りて天下の民是非の見を懷き始めて疑ふ (一五) 心を強め放つて音樂を爲し形を折曲げて禮を爲してより天下の民始めて同德より分離して其の同乎たる眞性を失ふ (一六) 丸木を削り殘はずしては美しき酒樽は

治レ木。曲者中レ鉤。直者應レ繩。夫埴木之性。豈欲レ中二規矩鉤繩一哉。然且世世稱レ之曰。伯樂善治レ馬。而陶匠善治二埴木一。此亦治二天下一者之過也。

く曲がり眞直にする時は墨繩をうちし如く直し（七）陶土や木材の本性は自然を欲するが故に之を人爲によつて曲げられんことを欲せず（八）天下を治むる者は民の常性に從ひ無爲にして化すべきに仁義是非の見を持して作爲する時は伯樂及び陶者匠人の過と同じ過に陷れるもの

吾意善治二天下一者不レ然。彼民有二常性一。織而衣。耕而食。是謂二同德一。一而不レ黨。命曰二天放一。故至德之世。其行塡塡。其視顚顚。當二是時一也。山無二蹊隧一。澤無二舟梁一。萬物羣生。連二屬其鄕一。

吾れ意ふに、善く天下を治むるものは然らず、彼の民には常性あり、(一)織りて衣、耕して食ふ。是れ同德と謂ふ。(二)一にして而して黨せず、(三)命じて天放と曰ふ。故に(四)至德の世は、其の行ふや塡塡たり。其の視るや顚顚たり。是時に當りてや山に蹊(五)隧なく、澤に舟梁なし。(六)萬物羣生して、其の鄕に連屬す。禽獸は羣を成し、草木は遂長す。是故に禽獸は係羈して遊ぶべく、(七)烏鵲の巢は攀援して闚ふべし。(八)夫れ(九)至德の世は、國禽獸と居り、族、萬物と並ぶ。(一〇)惡んか君子と小人とを知らん(一一)や。同乎として無知、其の德離れず、同乎として無欲、是を素樸と謂ふ、素樸に(一二)して民の性、得たり(一三)聖人蹩躠して仁を爲し、踶跂して義を爲すに至るに及んで而

性也。雖レ有二義臺路寢一。無レ所レ用レ之。及レ至下伯樂曰二我善治一レ馬。燒レ之剔レ之。刻レ之雒レ之。連レ之以二羈馽一。編レ之以中皁棧上。馬之死者。十二三矣。饑レ之渴レ之。馳レ之驟レ之。整レ之齊レ之。前有二橛飾之患一。而後有二鞭筴之威一。而馬之死者。已過レ半。陶者曰。我善治レ埴。圓者中レ規。方者中レ矩。匠人曰。我善

り、之を連ぬるに羈馽を以てし、之を編むに皁棧を以てするに至るに及んで、馬の死するもの、十に二三あり。之を饑し、之を渇し、之を馳せ、之を驟せ、之を整へ、之を齊へ、前に橛飾の患ありて、而して後に鞭筴の威あり。而して馬の死するもの已に半に過ぐ。陶者の曰く、我は善く埴を治む。圓なるものは規に中り、方なるものは矩に中ると。匠人の曰く、我は善く木を治む。曲なるものは鉤に中り、直なるものは縄に應ずと。夫れ埴木の性は、豈に規矩鉤縄に中らんことを欲せんや。然かも且世世之を稱して曰く、伯樂は善く馬を治めて、而して陶匠善く埴木を治むと。是れ亦天下を治むるものの過なり。

● 此の四聖人が禮樂に心を盡し仁義に努めて物の眞なるものに違ひ反つて民をして知を好み利を爭ふに至らしむる所以を說く（一）晉王の高臺宮闕ありとも馬には用なく（二）古の臭ノ馬を相するもの（三）鐵金をあてゝ馬の毛を燒く（四）爪を切る（五）烙と同じ、オモヅラを著くるなり（六）タヅナにて首をつなぎハヅナにて前脚をしばる（七）マグサ桶と馬の床に敷く格子の類（八）轡の飾絲（九）（一〇）鞭策と同じ（一一）治むる所あれば埴の眞性を損りて埴土は死す（一二）陶器を作る工匠（一三）陶土（一四）陶土を捏ねて圓くすれば自然にブンマヘシに當てたる如く圓く四角にすればサシガネに當てたる如く四角になる（一五）木工（一六）木を曲ぐる時はマガリガネもて曲げし如

謂臧也。屬其性於五味、雖通如俞兒、非吾所謂臧也。屬其性乎五聲、雖通如師曠、非吾所謂聰也。屬其性乎五色、雖通如離朱、非吾所謂明也。吾所謂臧、非仁義之謂也。臧於其德而已矣。吾所謂臧者、非所謂仁義之謂也。任其性命之情而已矣。吾所謂聰者、非謂其聞彼也。自聞而已矣。吾所謂明者、非謂其見彼也。自見而已矣。夫不自見而見彼、不自得而得彼者、是得人之得、而不自得其得者也。適人之適、而不自適其適者也。夫適人之適、而不自適其適、雖盜跖與伯夷、是同爲淫僻也。余愧乎道德、是以上不敢爲仁義之操、而下不敢爲淫僻之行也。

公の時の樂師、音を知るものなり　(一七) 古の明目なるもの、孟子離婁上篇に離婁と云へるものと同人と云ふ　(一八) 天性の常德に善きをいふのみ　(一九) 天命の性に於ける實情のまゝに己を任すのみ　(二〇) 外に仁義を聞くにあらで内に天性に聞く　(二一) 外的に人の自得を己が自得として己自らの自得を自得とせざるものなり　(二二) 人の適として安んずる所のもの　(二三) 二人とも同じく至正よりはづれて偏頗に耽溺せるもの　(二四) 莊子自らは道德を反省して中心愧づる所なり　(二五) 仁義を固守せず

馬　蹄(一)

馬。蹄可以踐霜雪。毛可以禦風寒。齕草飲水。翹足而陸。此馬之眞

馬は、蹄以て霜雪を踐むべく、毛以て風寒を禦ぐべし。草を齕み、水を飲み、足を翹げて陸る。此れ馬の眞性なり。義臺路寢(二)有りと雖も、之を用ふる所なし。伯(三)樂の、吾れ善く馬を治むと曰ひて、之を(四)燒し、之を剔り、之を刻(五)り、之を雒(六)

傷レ性均也。奚必伯夷之是。而盜跖之非乎。天下盡殉也。彼其所レ殉仁義也。則俗謂二之君子一。其所レ殉貨財也。則俗謂二之小人一。其殉一也。則有二君子一焉。有二小人一焉。若二其殘レ生損レ性一。則盜跖亦伯夷已。又惡取二君子小人於其間一哉。且夫屬二其性乎仁義一者。雖二通如二曾史一。非二吾所レ

吾が所謂明なる者は其の彼を見るを謂ふに非ざるなり。自ら見るのみ。夫の自ら見ずして而して彼を見、自ら得ずして而して彼を得る者は、是れ人の得を得として(三一)而して自ら其の得を得とせざる者なり。(三二)人の適を適として而して自ら其の適を適とせざる者なり。夫の人の適を適として、而して自ら其の適を適とせざれば、盜跖と伯夷と雖も是れ同じく(三三)淫僻たるなり。(三四)余は道徳に愧づ。是を以て上、敢へて仁義の操を爲さず、(三五)而して下、敢へて淫僻の行を爲さざるなり。

(一) 小なる惑は方位を易ふる程度に止まれど大なる惑は天性を變ず (二) 舜帝に義を唱揚して天下の人性を擾め變ぜしより以來天下の人民仁義のために奔走駆馳せざるはなし (三) 外物を以て其の本性を變ぜざることなし (四) 小人は己が身を以て利欲に犠牲とす (五) 書を能くする人と少年 (六) 戚に羊を失ひし時如何にせしやと問へば竹簡を挾んで讀書せりと答ふ (七) 賭博して遊ぶ (八) 伯夷は名のために首陽山に餓死し盜跖は利欲のために盗みして東陵に死す (九) 名と欲と死する動機はちがへども生を殘害し本性を傷ふ點に於ては均し (一〇) 天下の事物悉く己を犠牲にするに外ならず (一一) 生を殘ひ本性を損する點に於ては伯夷も盜跖共に然るに一を君子とし一を小人とする道理なし (一二) 天然の本性を屈して仁義に從はしけるのは仁義に通達すること曾参史鰌の如くなりとも吾が所謂善に非ず (一三) 辛酸甘鹹苦 (一四) 古の善く味ひを通れる人 (一五) 宮商角徴羽の五聲 (一六) 字は子野、晉の平

殉二天下一。故此數子者。事業不レ同。名聲異レ號。其於二傷レ性以レ身爲レ殉一也。臧與穀二人相與牧レ羊。而俱亡二其羊一。問二臧奚事一。則挾レ筴讀レ書。問二穀奚事一。則博塞以遊。二人者。事業不レ同。其於レ亡レ羊均也。伯夷死二名於首陽之下一。盜跖死二利於東陵之上一。二人者所レ死不レ同。其於レ殘レ生

れども、其の生を殘ひ、性を傷るに於ては均しきなり。奚んぞ必ずしも伯夷の是にして、而して盜跖の非ならんや。(一〇)天下盡く殉なり。彼れ其の殉ずる所、仁義なれば、則ち俗に之を君子と謂ふ。其の殉ずる所、貨財なれば、則ち俗に之を小人と謂ふ。其の殉は一なり。則ち君子あり、小人あり、其の生を殘ひ、性を損するが若きは、則ち盜跖も亦伯夷のみ。(一一)又惡んぞ君子小人を其の間に取らんや。且夫れ其の性を(一二)仁義に屬する者は、通ずること曾史の如しと雖も、吾が所謂臧に非ざるなり。其の性を(一三)五味に屬すれば、通ずること(一四)俞兒の如しと雖も、吾が所謂臧に非ざるなり。其の性を(一五)五聲に屬すれば、通ずること(一六)師曠が如しと雖も、吾が所謂聰に非ざるなり。其の性を五色に屬すれば、通ずること(一七)離朱が如しと雖も、吾が所謂明に非ざるなり。吾が所謂臧とは、仁義の謂に非ざるなり。(一八)其の德に臧きのみ。吾が所謂臧なる者は所謂仁義の謂に非ざるなり。其の(一九)性命の情に任ずるのみ。吾が所謂聰なる者は、(二〇)其の彼を聞くを謂ふに非ざるなり、自ら聞くのみ。

古今不二。不可虧也。則仁義又奚連連如膠漆纆索而遊乎道德之間爲哉。使天下惑矣。

夫小惑易方。大惑易性。何以知其然邪。自虞氏招仁義以撓天下也。天下莫不奔命於仁義。是非以仁義易其性與。故嘗試論之。自三代以下者。天下莫不以物易其性矣。小人則以身殉利。士則以身殉名。大夫則以身殉家。聖人則以身

夫れ小惑は方を易へ、大惑は性を易ふ。何を以て其の然ることを知るや。虞氏、仁義を招げて以て天下を撓めしより、天下、仁義に奔命せざること莫し。是れ仁義を以て、其の性を易ふるに非ずや。故に嘗試みに之を論ぜん。三代より以下は天下物を以て其の性を易へざること莫し。小人は則ち身を以て利に殉じ、士は則ち身を以て名に殉じ、大夫は則ち身を以て家に殉じ、聖人は則ち身を以て天下に殉ず。故に此の數子の者は事業同じからず。名聲號を異にすれども、其の性を傷り、身を以て殉と爲すに於ては一なり。臧と穀と二人相與に羊を牧うて、而して倶に其の羊を亡ふ。臧に奚をか事とせしと問へば、則ち策を挾んで書を讀みしといふ。穀に奚をか事とせしと問へば、則ち博塞して以て遊べりといふ。二人の者の事業同じからざれども、其の羊を亡ふに於ては均しきなり。伯夷は名に首陽の下に死し、盜跖は利に東陵の上に死す。二人の者、死する所同じからざ

待㆓繩約膠漆㆒而固者。是侵㆓其德㆒也。屈㆓折禮樂㆒。呴㆓兪仁義㆒。以慰㆓天下之心㆒者。此失㆓其常然㆒也。天下有㆓常然㆒。常然者。曲者不㆑以㆑鉤。直者不㆑以㆑繩。圓者不㆑以㆑規。方者不㆑以㆑矩。附離不㆑以㆓膠漆㆒。約束不㆑以㆓纆索㆒。故天下誘然皆生。而不㆑知㆔其所㆓以生㆒。同焉皆得。而不㆑知㆔其所㆓以得㆒。故

下の心を慰むるは、此れ其の常然を失ふなり。天下に常然あり、常然とは曲る（四）者鉤を以てせず、直き者繩を以てせず、圓なる者規を以てせず、方なる者矩を以てせず、附離するに膠漆を以てせず、（五）約束するに纆索を以てせず。故に天下誘然（六）として皆生じて、而して其の生ずる所以を知らず。同焉として皆得て、而して其の得る所以を知らず。故に古今（七）二ならず、虧く可らざるなり。則ち仁義（八）又奚ぞ連連として膠漆纆索の如くにして、而して道德の間に遊ぶことを爲さんや。天下をして惑はしむ。

（一）曲り金、墨繩、ブンマハシ、サシガネを用ひて正しくするは物の本性を削り矯むるなり （二）繩、紐、膠、漆を用ひて堅くするは德の自然を侵し害ふもの （三）禮樂を以て身體を折りかゞめ仁義を以て慶め撫でゝ天下萬民の心を慰むるは其の自然を失へる矯飾のみ （四）曲るものも鉤を以て曲げたるにあらず曲るべき理ありて自然に曲るなり、以下同じ （五）しばりかけるに繩を以てせず （六）故に天下自然に皆生じて其の生ずる理由を知らず （七）古今に亙りて變ずることなく常然は缺くることなし （八）仁義又何ぞ不自然なること膠纆索の如く連々と長くつゞきて常然の道德の間に遊びて是非の見をなすことあらんや

所レ去レ憂也。意仁義其非二人情一乎。彼仁人何其多レ憂也。且夫駢二於拇一者。決レ之則泣。枝二於手一者。齕レ之則啼。二者或有レ餘二於數一。或不レ足二於數一。其於レ憂一也。今世之仁人。蒿目而憂二世之患一。不仁之人。決二性命之情一而饕二貴富一。故意仁義其非二人情一乎。自二三代一以下者。天下何其囂囂也。

の情を決して、而して貴富を饕る。故に意ふに仁義は其れ人の情に非ざるか。（八）三代より以下は天下何ぞ其れ囂囂たるや。

（一）正を正として之を守るものは天然の性命に從つて其の實を失はず（二）正を正とすれば假令其跂合するとも駢とせず六指あるものも跂とせず（三）鳧の脛は短きが天性なるゆゑ之を短しとしてツギタシをする時は却つて悲しまん鶴の脛長きも然り（四）天性長きは斷つべきに非ず天性短きは足すべきに非ずかゝる憂ひは殊更に去らずともよし（五）彼の鳧の脛を足し鶴の脛を斷たんとする如く憂ひ多きを見れば仁義は人の實情ならざるべきか（六）駢拇枝指は或は餘り或は足らず之を是非の上より見れば或はさきわけ或は嚙み切つて常人の通りせんと憂ひあるべき數は一なり、然れども是共に天性を害ふもの仁義を以て是非するも之に同じ（七）世間の仁者はクヨクヨ世の患を心配し不仁者は天命の性情をさき捨て、富貴を貪る、蒿目は半眼にして睫を見る貌（八）夏殷周三代以前は無爲にして天下化せしが其の以後に至つては仁義是非の說起りて世にやかまし

且夫待二鉤繩規矩一而正者。是削二其性一也。

且夫れ鉤繩規矩を待つて、正しくするは、是れ其の性を削るなり。（二）繩約膠漆を待つて固くするは、是れ其の德を侵すなり。（三）禮樂に屈折し仁義に呴兪して以て天

乎。而曾史是已。駢於辯者。纍瓦結繩、竄句遊心於堅白同異之間、而敝跬譽無用之言。非乎。而楊墨是已。故此皆多駢旁枝之道。非天下之至正也。

ゆ (一九) 瓦を堆積し繩を結びし如く無用の言を重ぬ (二〇) 古人の語句を改竄して己のものとす (二一) 解齊物篇に出づ詭辯を弄するをいふ (二二) 力を費し心を勞す。或は「跬譽（キヨ）無用の言に敝（ツカ）る」と訓ず、跬譽は近き譽 (二三) 楊朱墨翟、楊は爲我即ち自愛を主とし墨は兼愛を主とし何れも偏する以あり (二四) 役にも立たぬ餘計の道

彼正正者。不失其性命之情。故合者不爲駢。而枝者不爲跂。長者不爲有餘。短者不爲不足。是故鳧脛雖短。續之則憂。鶴脛雖長。斷之則悲。故性長非所斷。性短非所續。無

彼の正を正とする者は、其の性命の情を失はず。故に合(一)する者を駢と爲さず、而して(二)枝ある者を跂と爲さず、長き者を餘り有りと爲さず、短き者を足らずと爲さず。是の故に(三)鳧脛短しと雖も、之を續がば則ち憂ひなん。鶴脛長しと雖も、之を斷たば則ち悲しみなん。故に(四)性の長は斷つ所に非ず、性の短は續ぐ所に非ず。憂を去る所無きなり。意ふに(五)仁義は其れ人の情に非ざるか。彼の仁人は何ぞ其れ憂多きや。且つ夫れ拇に駢なる者、之を決かば則ち泣かん。手に枝ある者、之を齕まば則ち啼かん。(六)二つの者、或は數に餘りあり、或は數に足らず、其の憂に於けるは一なり。今、世の(七)仁人は蒿目にして而して世の患を憂へ、不仁の人は性命

枝於五藏之情者。淫僻於仁義之行。而多方於聰明之用也。是故駢於明者。亂五色。淫文章。青黃黼黻之煌煌。非乎。而離朱是已。多於聰者。亂五聲。淫六律。金石絲竹黃鐘大呂之聲。非乎。而師曠是已。枝於仁者。擢德塞性。以收名聲。使天下簧鼓。以奉不及之法。非

収め、天下をして簧鼓(一七)して以て不及の法を奉ぜしむる、非か。而して曾史(一八)是れのみ。辯に駢なる者は、纍瓦(一九)結縄竄句(二〇)心を堅白同異(二一)の間に遊ばして、而して敝跬(二二)して無用の言を譽むる、非か。而して楊墨(二三)是れのみ。故に此れ皆、多駢旁枝(二四)の道にして天下の至正に非ざるなり。

(一) 此の篇道徳を正とし仁義を無用の駢枝とし其の性命の情を傷ふものなるを説す (二) 足の拇指が第二指と附着せるもの (三) 手の六つ指 (四) 駢拇六指は共に天より受けたる性に出づと雖も五指あるが常形にして人の徳なるより見れば餘計のものといふべし (五) 體に附きたる瘤と吊り下れる疣、解大宗師に出づ (六) 贅疣は形の上に自ら生じたるものなれども生れながらにして有るものならず天性より見て餘計のもの (七) 有餘の道徳たる仁義を多端にして用ふるものは仁義もと人の五臓より出でたる情慮ではあれど紛々として道徳の正を得たるものと云ひがたし (八) 五臓の情慮に仁義あるは恰も身に駢枝あるが如し (九) 仁義の行に耽溺して聰明を濫用するに多端なり (一〇) 視覺の明餘計にして其の徳正しからざるものは青黄黒白赤の五色の正色を亂す (一一) 文彩のはなはだしき色や模樣のきらびやかなる色に心を奪はる (一二) 一名離婁、黄帝の時の人にして眼の明なること明かなり (一三) 聽覺の聰餘計にして其の徳正しからざるものは宮商角徴羽の五聲を亂す (一四) 黄鐘大呂姑洗蕤賓無射夾鐘の音律を淆する鐘磬琴瑟等の樂器 (一五) 字は子野晉の平公の樂師にして音律をよくす (一六) 仁餘計にして其の徳正しからざるものは徳を藏せずぬき出して世に衒ひ天賦の本性を閉塞して名聲を得んとす (一七) 笙の笛を吹くが如く聲を同じくして雷同し無用の法を信ぜしむ (一八) 曾參と史鰌、曾參は孔子の門人、史鰌は衞の靈公の臣共に仁義を以て聞

駢拇枝指。出乎性哉。而侈於德。附贅縣疣。出乎形哉。而侈於性。多方乎仁義而用之者。列於五藏哉。而非道德之正也。是故駢於足者。連無用之肉也。枝於手者。樹無用之指也。多方駢

外篇

駢拇(一)

駢拇(二)枝指(三)性に出でたるかな、而かも德に侈れり。(四)附贅縣疣、(五)形に出でたるかな、而かも性に侈れり。(六)仁義に多方にして而して之を用ふる者は、五藏に列なるかな、而かも道德の正に非ざるなり。(七)是の故に足に駢ある者は、無用の肉を連ぬるなり。手に枝ある者は無用の指を樹つるなり。(八)五藏の情に多方駢枝ある者は、(九)仁義の行に淫僻にして、而して聰明の用に多方たるなり。是の故に、(一〇)明に駢なる者は、五色を亂り、文章の靑黃黼黻の煌煌たるに淫する、(一一)非か。而して離朱是れのみ。(一二)聰に多なる者は五聲を亂り、(一三)六律の金石絲竹、黃鐘大呂の聲に淫する、(一四)非か。而して師曠是れのみ。(一五)仁に枝なる者は、(一六)德を擢き、性を塞ぎて、以て名聲を

食息。此獨無レ有。嘗試鑿レ之。日鑿二一竅一。七日而渾沌死。

人を有爲に導くときは道の本體も第一義的の意義を失うて亡ぶ

其所レ受二乎天一。而無レ見レ得。亦虛而已。至人之用レ心若レ鏡。不レ將不レ迎。應而不レ藏。故能勝レ物而不レ傷。

南海之帝爲レ儵。北海之帝爲レ忽。中央之帝爲二渾沌一。儵與レ忽時相與遇二於渾沌之地一。渾沌待レ之甚善。儵與レ忽謀レ報二渾沌之德一。曰。人皆有二七竅一。以視聽

將らず迎へず、應じて(八)而して藏めず、故に能く(九)物に勝へて而して傷はず。

(一) 尸は主、名の主となつて自ら勞することなく其の實あつて其の實を忘れよ (二) 思慮の府となることなく事を一手にひきうけて自ら主となることなく知の主となつて外物を逐ふことなかれ (三) 無窮の絶對處を極めつくす (四) 爲して迹無き自然境に遊ぶ (五) 天より受けたる固有の性を十分に發揮するも其は何處までも自然を尚び之を己に得たる差別の形迹を現すなかれ (六) 唯無爲になさんのみ (七) 物來りて映じ物去りて消ゆるに任せて送らず迎へず (八) 物來れば之に應じて其の影を映せども之を留めず (九) 萬物を容るゝに堪へて其の本體の明を傷くることなし

(一)南海の帝を儵(二)と爲し、北海(三)の帝を忽と爲し、中央の帝を渾沌(四)と爲す。儵と忽と、時に相與に渾沌の地に遇へり。渾沌之を待つこと甚だ善し(五)。儵と忽と渾沌の德に報いんことを謀る。曰く、人皆(六)七竅あり、以て視聽食息す、此れ(七)獨り有ること無し。嘗試みに之を鑿たんと。日に一竅を鑿つ。七日にして渾沌(八)死す。

(一) 南海陽明の帝 (二) 神速に取つて名となし有爲に譬ふ (三) 北海晦陰の帝 (四) 合和の象、無爲に譬ふ、以上皆寓言 (五) 手厚く款待す (六) 人には皆耳目鼻口の七穴ありて視聽食息の役をなす (七) 渾沌には此の七穴なければ試みに之を穿たん (八) 無爲自然なるが是道の本體なるに有爲の眼より見る時は反つて之を具らざるものとし

太冲莫勝。是殆見吾衡氣機也。鯢桓之審爲淵。止水之審爲淵。流水之審爲淵。淵有九名。此處三焉。嘗又與來。明日又與之見壺子。

〔三〇〕流水は止らず卽ち天壤にたとふ　〔三一〕鯢桓、止水、流水、濫水、沃水、氿水、雍水、汧水、肥水之を九淵と爲す、列子に出づ　〔三二〕此處は九淵の中僅に三を擧げたるのみにて未だ盡を盡さず　〔三三〕神巫茫然自失して逃去る　〔三四〕もはや逃げうせて見えず追ひつきがたし　〔三五〕宗は性初、未だ分れて陰陽と成らざる泰初の無なり　〔三六〕わ太虛にして自然の變化のまゝに動く　〔三七〕動くまゝに動きて不定なり　〔三八〕物に應じて動きつかまへ所なし　〔三九〕變のまゝに變じて正形なし　〔四〇〕列子之まで己が何等學び得し所なきを悟つて俛ぢかへる　〔四一〕三年家を出でずして修養す　〔四二〕人の貴にして物の賤しきを忘る　〔四三〕俗事は自ら之を理めず　〔四四〕外飾を去つて素朴に反る　〔四五〕無心にしてたゞ形體のみ立てるが如し　〔四六〕紛々多事の世上に立ちて自ら守りかくて一生涯を送りぬ

立未定。自失而走。壺子曰。追之。列子追之不及。反以報壺子曰。已滅矣。已失矣。吾弗及已。壺子曰。鄕吾示之以未始出吾宗。吾與之虛而委蛇。不知其誰何。因以爲弟靡。因以爲波流。故逃也。然後列子自以爲未始學而歸。三年不出。爲其妻爨。食豕如食人。於事無與親。雕琢復朴。塊然獨以其形立。紛而封哉。一以是終。

無爲名尸。無爲謀府。無爲事任。無爲知主。體盡無窮。而遊無朕。盡

(一)名の尸たること無く、謀の府たること無く、事の任たること無く、知の主たること無かれ。無窮を體盡して、而して無朕に遊び、其の天に受くる所を盡して、而して得るを見すこと無かれ。亦虛なるのみ。至人の心を用ふるは鏡の若し。

也有㆑瘳矣。全然有㆑生矣。吾見㆓其杜權㆒矣。列子入以告㆓壺子㆒。壺子曰。鄕吾示㆑之以㆑天壤㆒。名實不㆑入。而機發㆓於踵㆒。是殆見㆓吾善者機㆒也。嘗又與來。明日又與㆑之見㆓壺子㆒。出而謂㆓列子㆒曰。子之先生不㆑齊。吾無㆓得而相㆒焉。試齊。且復相㆑之。列子入以告㆓壺子㆒。壺子曰。吾鄕示㆑之以㆓

爨ぎ、(四三)豕を食ふこと人を食ふが如く、(四四)事に於て與り親らすること無し。(四五)雕琢を朴に復し、(四六)塊然として獨り其の形を以て立つ。(四七)紛として封り、一に是を以て終れり。

(一) 國の名 (二) 驗あること神の如き巫女 (三) 幸不幸長壽夭死 (四) 遠き歳月近き旬日のことを何月何日と期して豫言す (五) 恐怖を起し逃出す (六) 列子は神巫を見て深く迷ひこむ (七) 鄭の人名は林、列子の師 (八) 先生の道よりなほすぐれたるものあり (九) 吾は汝と道の外貌文飾について研究したれども道の根本眞實を研究せず (一〇) 多くの雌あるも雄なくば卵は生ぜざる如く道の文飾のみ知りて其の眞實を知らずば其の道を知ること能はじ (一一) 汝獨り高しとし道を以て世に對抗し必ず己を信ぜしめんとする故に神巫に相せられたるなり (一二) 神巫をして己を相せしめよ (一三) 十日ならずして死すべし (一四) 吾先生の人相に怪しき所あるを見たるが其は濕灰の燃えざるが如き必死の相なり (一五) さきには吾神巫に地文即ち至靜の象を示せり (一六) 動かんとして動かず正しからず (一七) 至德の生機を閉塞して發せざるところを見たるなり (一八) 足下の師が吾に遇はれしはしあはせのことなり (一九) 試みのため又神巫を伴ひ來れ (二〇) 病氣は癒ゆべくきつと生存すべし (二一) 閉せる生機の開き動かんとするを見たり (二二) 至靜にして名象の指すべきもの無きに生氣脚踵より發す (二三) 天は陽地は陰、地文の陰氣内に動きて陽發せんとするなり (二四) 生氣の甫めて動くもの (二五) 生機死機相半して吾相する能はず (二六) 試みに機の發現を一定に整へよ然らばも一度相すべし (二七) 大虛の無心なるが如く茫莫たるをいふ (二八) 衡は平、動靜二氣相平衡して交互するなり (二九) 大魚盤桓する旋渦即ち太沖莫勝 (三〇) 止水は流れず即ち地文にたとふ

之明日列子與之見壺子。出而謂列子曰。嘻。子之先生死矣。弗活矣。不以旬數矣。吾見怪焉。見濕灰焉。列子入泣涕沾襟。以告壺子。壺子曰。鄉吾示之以地文。萌乎不震不正。是殆見吾杜德機也。嘗又與來。明日又與之見壺子。出而謂列子曰。幸矣子之先生遇我

す。名實（二三）入らずして、而して機、踵に發す。是れ殆んど吾が善者機（二四）を見たる也。嘗みに又與に來れと。明日又之と與に壺子を見る。出でて列子に謂つて曰く、子の先生齊（二五）しからず。吾得て相すること無し。試みに齊（二六）しくせよ。且に復た之を相せんとすと。列子入つて以て壺子に告ぐ。壺子曰く、吾鄉に之に示すに太沖莫勝（二七）を以てす。是れ殆んど吾が衡氣機（二八）を見たるなり。鯢桓（二九）の審を淵と爲し、止水の審（三〇）を淵と爲し、流水（三一）の審を淵と爲す。淵に九名あり。（三二）此れ三に處れり（三三）。嘗みに又與に來れと。明日又之と與に壺子を見る。立つて未だ定らず。自失（三四）して走る。壺子曰く、之を追へと。列子之を追へども及ばず。反りて以て壺子に報じて曰く、已に滅せり（三五）已に失せり、吾及ばざる已と。壺子曰く、鄉に吾之に示すに未だ始めより吾が宗を出さざるを以てす（三六）。吾之と與に虛にして委蛇（三七）す。其の誰何（三八）たるを知らず。因つて以て弟靡（三九）たり、因つて以て波流（四〇）たり、故に逃れたるなりと。然る後列子（四一）自ら以て未だ始めより學ばずとなして、歸る。三年（四二）出でず。其の妻の爲めに

禍福壽夭。期以二歲月旬日一若レ神。鄭人見レ之皆棄而走。列子見レ之而心醉。歸以告二壺子一曰。始吾以二夫子之道一爲レ至矣。則又有二至レ焉者一矣。壺子曰。吾與レ汝既二其文一。未レ既二其實一。而固得レ道與。衆雌而無レ雄。而又奚卵焉。而以レ道與レ世亢必信夫。故使二人得而相一レ汝。嘗試與來。以レ予示レ

歸りて以て壺子（七）に告げて曰く、始め吾れ夫子の道を以て至れりと爲せり。則ち又焉（八）より至れる者ありと。壺子曰く、吾（九）は汝と其の文を既くして、未だ其の實を既くさず。而、固より道を得たりとするか。衆雌（一〇）あるも、而かも雄無くんば、又奚ぞ卵せん。而（一一）、道を以て世と亢して必ず信ぜられんとするかな。故に人をして得て汝を相せしむるなり。嘗試に與に來り、予を以て之（一二）に示せと。明日、列子之と與に壺子を見る。出でて、列子に謂つて曰く、噫、子の先生死なん、活きず、旬を以て數へじ、吾れ（一四）怪を見たり、濕灰を見たりと。列子入り、泣涕して襟を沾（一三）して以て壺子に告ぐ、壺子曰く、鄕（一五）に吾之に示すに地文を以てせり。萌乎（一六）として震かず正しからず、是れ殆ど吾が杜德機（一七）を見たるなり。嘗（一八）に、又與に來れと。明日又之と與に壺子を見る。出でて列子に謂つて曰く、幸なり、子（一九）の先生、我れに遇うて瘳（二〇）ゆること有り、全然として生有らん。吾れ其の杜權（二一）を見たりと。列子入つて以て壺子に告ぐ。壺子曰く、鄕に吾之に示すに天壤（二二）を以て

者可ㇾ比二明王一乎。老聃曰。是於二聖人一也。胥易技係。勞ㇾ形怵ㇾ心者也。且也虎豹之文來ㇾ田。猨狙之便。執ㇾ斄之狗來ㇾ藉。如ㇾ是者可ㇾ比二明王一乎。陽子居蹙然曰。敢問二明王之治一。老聃曰。明王之治。功蓋二天下一。而似ㇾ不ㇾ自ㇾ己。化貸二萬物一。而民弗ㇾ恃。有ㇾ莫ㇾ擧ㇾ名。使二物自喜一。立二乎不測一。而遊二於無有一者也。

の便と、斄を執ふるの狗とは藉を來す。(八)是の如き者は明王に比すべきかと。陽子居(九)蹙然として曰く、敢へて明王の治を問ふと。老聃曰く、明王の治は、功天下(一〇)を蓋へども己よりせざるに似たり。(一一)化萬物に貸せども民恃まず。(一二)有れども名を擧ぐる莫く、物をして自ら喜ばしむ。(一三)不測に立つて、而して無有に遊ぶ者なり。

(一)陽は姓、子居は字、名を朱といふ　(二)老子名は耼、楚に出づ　(三)敏捷剛健　(四)事に通じ理明か　(五)是の如き人物を聖人に比へすれば譬へば胥人や技工が形体を勞し精神を苦しむる如きものにて聖人に遠し　(六)虎や豹は美しき斑紋あるがため人に獵りこらる　(七)猿は輕巧なるが故に狗はよく狸を捕るが故に人に繫めらるゝ如くナマナカの小才あるがために有為の境涯を脫する能はず　(八)是の如き人物を古代の明王に比し得らるべきや以ての外なり　(九)顔色をあらため　(一〇)其の功天下を覆蓋すれども己は其の功に居らずして居らざる如し　(一一)化は萬物の上に施せども民其の化の及べるを忘れて恃みとせず　(一二)功化の偉大なるものあれどさて之を言葉に擧げていふことを能く萬物をして自ら喜ばしむるのみ　(一三)神明測る可からざるが如くにして無有自然境に遊ぶ

鄭有二神巫一曰二季咸一。知二人之死生存亡禍

鄭に神巫あり、(一)季咸と曰ふ。(二)人の死生存亡、禍福壽夭を知る。(三)期するに歲月旬日を以てすること神の若し。鄭人之を見て、皆棄てゝ走る。(四)列子之を見て心醉し、

無名人曰。去。汝鄙人也。何問之不レ豫也。予方將下與二造物者一爲上レ人。厭則又乘二夫莽眇之鳥一。以出二六極之外一。而遊二無何有之鄉一。以處二壙埌之野一。汝又何帠以レ治二天下一感二予之心一爲。又復問。無名人曰。汝遊二心於淡一。合二氣於漠一。順二物自然一而無レ容レ私焉。而天下治矣。

じて、以て六極の外に出でて、無何有の鄉に遊び、以て壙埌の野に處らんとす。(八)汝又何の帠ぞ、天下を治むるを以て予の心を感ぜしむることを爲すと。又復問ふ。無名人曰く、汝、(九)心を淡に遊ばし、氣を漠に合はせ、物の自然に順うて、而して私を容るゝこと無くんば、天下治まらんと。

(一)假設の人 (二)殷山の陽 (三)水の名 (四)去れ、天下を治むる法を問ふは鄙陋なり (五)無遠慮千萬にも問ひしものかな (六)無爲にして人を治めんとす (七)若し世を厭ひなば輕虛の氣に乘じて天地四方の外に出でゝ虛無の鄉に遊び曠蕩にして際涯なき野に處るべし、帠は譫囈 (八)汝又何の故に天下を治むることを以て予の心を動かすや (九)心を恬淡寡欲にし氣を虛靜にし物の自然のまゝに隨順して私意を挿むことなくば天下治まるべし

陽子居見二老聃一曰。有二人於此一。嚮疾彊梁。物徹疏明。學レ道不レ勸。如レ是

陽子居(一)、老聃(二)を見て曰く、此に人あり、嚮疾彊梁(三)にして物徹疏明(四)なり。道を學んで勸まず。是の如き者は明王に比すべきかと。老聃曰く、是の聖人(五)に於けるや、胥易技係の形を勞し心を怵へしむる者なり。且や虎豹(六)の文は田を來し、猨狙(七)

不ニ聽而化ヒ諸。狂接輿曰。是欺德也。其於レ治ニ天下一也。猶三涉レ海鑿レ河。而使ニ蚉負ヒ山也。夫聖人之治也治レ外乎。正而後行。確乎能ニ其事一者而已矣。且鳥高飛以避ニ矰弋之害一。鼷鼠深穴ニ乎神丘之下一。以避ニ熏鑿之患一。而曾二蟲之無レ知。

天根遊ニ於殷陽一。至ニ蓼水之上一。適遭ニ無名人一。而問焉曰。請ニ問爲ニ天下一。

治たる、外を治めんや。正して後行ふ、(八)確乎として其事を能くする者のみ。(九)且鳥は高飛して以て矰弋の害を避け、(一〇)鼷鼠は深く神丘の下に穴して、(一一)以て熏鑿の患を避く。而かも曾て二蟲より知無からんと。(一二)

(一) 共に人名、逍遙篇に出づ　(二) 虛僞の德　(三) 古の賢人　(四) 大河を鑿りうがつ　(五) 人君たるもの己が身にひきあて、儀式制度を出す時は何人と雖も之に從ひ化すべし　(六) 蚊に山を負はしむる如き不可能のこと　(七) 聖人の天下を治むるは儀式制度の如き方外の道を治めず　(八) 先づ己を正し無爲の道を治めて後之を天下に行ふ　(九) 己に得て後外へ行ひ確乎として正を行ふことを能くするのみ　(一〇) 鳥を捕ふる網といグルミ　(一一) ハツカネズミ　(一二) 社壇の下に深く穴を穿ちて煙にイブサれ鑿出さるゝ患を避く　(一三) 法制の僞德を以て天下を治むとも民能く此の二蟲の如く之を逃るゝの道を知る、民何ぞ二蟲より無知ならんや

天根、(一)殷の陽に遊びて蓼水の上に至る。(二)適〻無名人に遭うて問うて曰く、天下を爲むることを請ひ問ふと。無名人曰く、去れ、(三)女は鄙人なり。何ぞ問ふの豫はざる。(四)予は方に將に造物者と與に人を爲めんとす。(五)厭へば則ち又夫の莽眇の鳥に乘

有虞氏不レ及ニ泰氏一。有虞氏其猶藏レ仁以要レ人。亦得レ人矣。而未三始出二於非人一。泰氏其臥徐徐。其覺于于。一以レ已爲レ馬。一以レ已爲レ牛。其知情信。其德甚眞。而未三始入二於非人一。

肩吾見二狂接輿一。狂接輿曰。日中始何以語レ女。肩吾曰。告レ我君レ人者。以レ已出二經式義度一人孰敢

一は己を以て馬と爲し、一は己を以て牛と爲す。(一二)其の知情に信、(一三)其の德甚だ眞。而して未だ始めより非人より入らずと。(一四)

(一)此の篇天下を治むるに經樂刑政を設け紀綱法度を樹つるは眞に治むるの道に非ず化は萬物に施せど恃みとせず功は天下を蓋へども己に非ずとし無爲にして化する時は天下自然に治まる所以を說く (二)共に人名齊物論に出づ (三)王倪が知らずといひし眞意を悟り得たりと喜ぶ (四)堯の時の賢人王倪の師なり (五)足下は今になりて漸く悟られしにや (六)帝舜 (七)上古の帝王或はいふ大昊伏犧氏と (八)舜は躬に仁を體して人を懷け人亦之に歸せり (九)舜は未だ人爲に非ざる無爲の道に出でず (一〇)臥す時は徐々としてゆるやかに覺むる時は于于として自得す (一一)徐々として臥すは牛の如く于于として覺むるは馬の如く共に自然 (一二)其の知は眞實にして虛ならず (一三)其の德は飾る所なく僞なし (一四)未だ始より自然無爲の境を出でて有爲の地に入ることなし

肩吾、狂接輿を見る。狂接輿曰く、(一)日中始何を以て女に語れると。肩吾曰く、(二)我に告ぐ。人に君たる者、(三)己を以て經式義度を出さば、人孰か敢へて聽いて諸に化せざらんやと。狂接輿曰く、是れ欺德なり。(四)其の天下を治むるに於けるや、猶ほ海を渉り、(五)河を鑿ち、而して蚉に山を負はしむるがごときなり。(六)夫の聖人の(七)

聲一。而趨擧二其詩一焉。子輿入曰。子之歌レ詩。何故若レ是。曰吾思下夫使三我至二此極一者上而弗レ得也。父母豈欲二吾貧一哉。天無二私覆一。地無二私載一。天地豈私貧レ我哉。求二其爲レ之者一而不レ得也。然而至二此極一者命也夫。

我を貧しくせんや。其の之を爲す者を求むれども得ざるなり。然り而して（九）此の極に至る者は、命なるかなと。

（一）長雨降ること十日間　（二）子桑は貧なるゆゑ飢ゑて苦しむならん　（三）律呂の中に哀調あり　（四）かく貧乏なるは父母之を然らしめしか將た天か人か　（五）飢ゑて其の聲立たざる故に促しげに其の詩を唱ふ　（六）何故にかく窮むにや　（七）我を斯く貧乏ならしめし原因を思へども不明　（八）天地は偏頗に覆はず載せず　（九）此の窮境に立至らしめしものは天命ならん

（一）應帝王

齧缺問於王倪一。四問而四不レ知。齧缺因躍而大喜。行以告二蒲衣子一。蒲衣子曰。而乃今知レ之乎。

（二）齧缺、王倪に問ふ。四たび問うて四たび知らずといふ。齧缺因つて躍つて大に喜び、行いて以て（三）蒲衣子に告ぐ。蒲衣子曰く、（四）而、乃今之を知るか。（六）有虞氏の（七）泰氏に及ばざるを。（八）有虞氏は其れ猶ほ仁を藏して、以て人に要め、亦人を得たり。而れども未だ始めより（九）非人に出でず、（一〇）泰氏は其の臥するや徐徐、其の覺むるや于于。

復見曰。回益矣。曰何謂也。曰回坐忘矣。仲尼蹵然曰。何謂二坐忘一。顏回曰。墮二枝體一。黜二聰明一。離レ形去レ知。同二於大通一。此謂二坐忘一。仲尼曰。同則無レ好也。化則無レ常也。而果其賢乎。丘也請從二而後一也。

ち好すること無きなり。化すれば則ち常無きなり。(一一)而果して其れ賢れるか、丘や請ふ而が後に從はんと。

(一)仁義に拘束せられず之を超越せり (二)宜しけれども猶は不十分 (三)脚下に出づ (四)色を變ずる貌 (五)四肢五體の形を忘る (六)知を忘る (七)物我を一如にす (八)是非を齊しくす (九)大道に合致す (一〇)大道に合致するときは好惡を齊しくす (一一)化して形を離るゝときは常として拘はる所なし

子輿與二子桑一友。而霖雨十日。子輿曰。子桑殆病矣。裹レ飯而往食レ之。至二子桑之門一。則若レ歌若レ哭。鼓レ琴曰。父邪母邪。天乎人乎。有レ不レ任二其

子輿、子桑と友たり、而して霖雨十日。(一)子輿曰く、(二)子桑殆ど病みなんと。飯を裹んで、往いて之に食はしめんとす。子桑の門に至れば、則ち歌ふが若く、哭するが若し。琴を鼓して曰く、(三)父か母か、天か人かと。(四)其の聲に任へざる有りて、(五)而して趨かに其の詩を擧す。子輿入つて曰く、子の詩を歌ふ、(六)何の故にか是の若くなると。曰く、吾れ、(七)夫の我をして此の極に至らしむる者を思へども、得ざるなり。父母豈に吾が貧を欲せんや。(八)天に私覆無く、地に私載無し。天地豈に私に

黃帝之亡二其知一、皆在二鑪捶之間一耳。庸詎知夫造物者之不丁息二我黥一而補二我劓一使丙我乘レ成以隨乙先生一邪。許由曰。噫未レ可レ知也。我爲レ汝言二其大略一。吾師乎。吾師乎。䪠二萬物一而不レ爲レ義。澤及二萬世一而不レ爲レ仁。長二於上古一而不レ爲レ老。覆二載天地一。刻二彫衆形一而不レ爲レ巧。此所レ遊已。

槌斧の形なると兩己相背く如きをいふ　(一一) 古の美人　(一二) 古の勇者　(一三) 美人が美を失ひ勇者が力を失ひ知者が知を失へるは其造物者の火鑪中の陶鑄によつて然るのみ　(一四) 彼の造物者が陶鑄して吾が入墨を消し缺けたる鼻を足し完全に歸して先生に從ひ道を學ばしめざるかぎりもなし　(一五) それは貴惡の如くなるかも知れがたし　(一六) 大宗師は萬物を粉碎して之を整ふれども義となさず恩澤萬世に垂るれども仁となさず　(一七) 太古より生育すれども老いず　(一八) 天地を生成保持し萬物を色々の形狀に化成すれども自ら巧なりとなさず　(一九) 此の大宗師こそ從つて遊ぶべきもの

顏回曰。回益矣。仲尼曰。何謂也。曰回忘二仁義一矣。曰可矣。猶未也。它日復見曰。回益矣。曰何謂也。曰回忘二禮樂一矣。曰可矣。猶未也。它日

顏回曰く、回、益せりと。仲尼曰く、何の謂ぞやと。曰く回、仁義(一)を忘れたりと。曰く、(二)可なり、猶ほ未だしと。它日復た見えて曰く、回益せりと。曰く、何の謂ぞやと。曰く、回、禮樂を忘れたりと。曰く、可なり、猶ほ未だしと。它日復た見えて曰く、回、益せりと。曰く、何の謂ぞやと。曰く、回坐忘(三)せりと。仲尼(四)蹵然として曰く、何をか坐忘と謂ふと。顏回曰く、(五)枝體を墮て、(六)聰明を黜け、(七)形を離れ、(八)知を去つて、(九)大通に同じ。此を坐忘と謂ふと。仲尼曰く、(一〇)同なれば則

是非。許由曰。而奚來爲軹。夫堯既已黥汝以仁義。而劓汝以是非矣。汝將何以遊夫遙蕩恣睢轉徙之塗乎。意而子曰。雖然。吾願遊於其藩。許由曰。不然。夫盲者無以與乎眉目顏色之好。瞽者無以與乎青黃黼黻之觀。意而子曰。夫無莊之失其美。據梁之失其力。

かと。意而子曰く、然りと雖も、(七)吾願はくは其の藩に遊ばんと。許由曰く、(八)然らず。夫れ(九)盲者は以て眉目顏色の好きに與ることなく、瞽者は以て(一〇)青黃黼黻の觀に與ることなし。意而子曰く、夫れ(一一)無莊の其の美を失ひ、(一二)據梁の其の力を失ひ、黃帝の其の知を亡へる、(一三)皆鑪捶の間に在ればのみ。庸詎んぞ、(一四)夫の造物者の、我が黥を息し我が劓を補ひ、我をして成るに乘じて、以て先生に隨はしめざるを知らんやと。許由曰く、(一五)噫未だ知る可からざるなり。我れ汝の爲めに其の大略を言はん。(一六)吾が師や、吾が師や。萬物を𩐋すれども義と爲さず。澤、萬世に及べども仁と爲さず。(一七)上古より長ずれども老と爲さず。(一八)天地を覆載し、衆形を刻彫すれども巧も爲さず、(一九)此れ遊ぶ所のみと。

(一) 古の賢人、假設の人 (二) 前に出づ (三) 堯帝は何か足下を益することを言ひしか (四) 汝何故に吾がもとに來りしや (五) 仁義と是非と人の眞性を損傷すること黥と劓との形を損傷する如くなれば足下已に害せられたり (六) 廣遠放蕩變化の道卽ち仁義是非の拘束なき廣漠自在の境地をいふ (七) せめて藩籬内にても遊びたし (八) それも不可能 (九) 盲は瞳子なくして見えざるもの瞽者は瞳子あれども見えざるもの (一〇) 青黃は服色、黼黻は服の紋

宅而無情死。孟孫氏特覺。人哭亦哭。是自其所以乃。且也相與吾之耳矣。庸詎知吾所謂吾之乎。且汝夢爲鳥而厲乎天。夢爲魚而沒於淵。不識今之言者其覺者乎。其夢者乎。造適不及笑。獻笑不及排。安排而去化。乃入於寥天一。

み生を樂しむが絶對の道に非ずとならば死生に浮沈する吾は汝同樣萬物假現の夢より覺めざるものか 〔一三〕 孟孫氏は母の喪に遇ひて形の變化はあれど哀しまずして精神を損せず 〔一四〕 生を以て暫時の寓舍とすれば實の死といふべきものなし 〔一五〕 人哭すれば亦哭するは其の眞情より然るにて關にするを得ざるもの是自然に從ふなり 〔一六〕 孟孫氏のことを論ずるに汝と吾と與に判斷して斯く言へるのみにて實の所は吾は吾が主觀に囚はれて斷定するものなれば孟孫氏の心事迄は之より異なるべきものあるべきか 〔一七〕 譬へば汝夢に鳥となり又魚となりて天に翔り淵に潜ることを得 〔一八〕 今議論することは覺めて而して言へるのも將た夢に之を言へるものか 〔一九〕 適適のことに遭遇せば笑ふことを俟たずして胸自ら樂しく又笑ふべきことに出合ふときは其の笑ふべき道具立せずとも自ら笑ふ是天眞の自然 〔二〇〕 自然の道具立のまゝに安んじて人爲を加へず化と不化とを忘れ了る 〔二一〕 寥廓たる自然の道に入る

意而子見許由。許由曰。堯何以資汝。意而子曰。堯謂我。汝必躬服仁義而明言是非。

〔二二〕意而子、許由を見る。許由曰く、〔二三〕堯何を以て汝に資せると。意而子曰く、堯、我に謂ふ、汝必ず躬に仁義を服して、而して明かに是非を言へと。許由曰く、〔二四〕而、奚ぞ來ることをするや。夫の堯、既に已に汝を〔二五〕黥するに仁義を以てして、汝を劓るに是非を以てせり。汝將に何を以て夫の遙蕩恣睢轉徙の塗に遊ばんとする

尼曰。夫孟孫氏盡之矣。進於知矣。唯簡之而不得。夫已有所簡矣。孟孫氏不知所以生。不知所以死。不知就先。不知就後。若化爲物。以待其所不知之化已乎。且方將化。惡知不化哉。方將不化。惡知已化哉。吾特與汝其夢未始覺者邪。且彼有駭形。而無損心。有旦

所の化を待つのみか。且方に將て化するの、惡んぞ化せざるなるを知らんや。方に將て化せざるの、惡んぞ已に化せるなるを知らんや。(一一)吾れ特り汝と其の夢未だ始めより覺めざる者か。(一二)且彼は駭形有れども損心無く、(一三)旦宅有れども情死なし、(一四)孟孫氏は特り覺めたり。人哭すれば亦哭す。(一五)是れ其の乃る所以に自るなり。且や相與に之を吾とするのみ。(一六)庸詎ぞ吾が所謂之を吾とするなるものを知らん。且汝、夢に鳥と爲つて天に厲り、(一七)夢に魚と爲つて淵に沒る。識らず、今の言ふ者は其れ覺めたる者か、其れ夢むる者か。(一八)適に造れば笑ふに及ばず、(一九)笑を獻ずれば排するに及ばず。排に安んじて、(二〇)而して化を去れば、乃ち寥天一に入ると。(二一)

(一) 孔子の高弟、顏回に出づ (二) 魯の賢人 (三) 善く母の喪を守りし評判魯にゆきわたる (四) 彼の孟孫氏のやりかたは至極尤も (五) 喪禮の方式を知れるものより尚一段進めり (六) 世の喪禮は虛飾の點を簡にし省くことを得ざるものなり (七) 孟孫氏は已に喪禮を簡にするを得たり (八) 死生を超越して兩つながら之を忘る (九) 一に就を孰に作る生死の先後を知らずと也 (一〇) 造化が己を變化するまゝに任せて形を擇ばず以て己の知の及ばざる所の化を待ち生にあへば生に從ひ死にあへば死に從ふのみ (一一) 化して死することが即ち眞實の不死なるかも知りがたく又化せずして生存することが即ち眞實已に死せるものなるかも知りがたし (一二) 死生に拘して死を哀し

人相造乎道。相造乎水者。穿池而養給。相造乎道者。無事而生定。故曰。魚相忘乎江湖。人相忘乎道術。子貢曰。敢問畸人。曰畸人者畸於人。而侔於天。故曰。天之小人。人之君子。人之君子。天之小人也。

て天に侔し。故に曰く、天の小人は人の君子、人の君子は天の小人なりと。

(一) 夫子は方内方外何れに依らるゝか (二) 世累を脱すること能はず天の縲繫をかゝれる罪人 (三) 汝と共に方外に到るに努めん (四) 魚は水中に生育し人は道術の中に適帰す是其の本性 (五) 魚は池を穿つて水を得れば給養することを得 (六) 人は無事安靜なれば其の生安定す (七) 解脱に出づ (八) 畸は不偶の意にして變人をさす (九) 畸人は方外にのみ遊んで方内に遊ばざるものなれば俗人に對しては奇なれども天意と一致するもの

顏回問仲尼曰。孟孫才。其母死。哭泣無涕。中心不戚。居喪不哀。無是三者。以善處喪蓋魯國。固有無其實而得其名者乎。回一怪之。仲

(一)顏回仲尼に問うて曰く、(二)孟孫才は、其の母死して、哭泣するに涕無く、中心慼まず。喪に居て哀しまず。是の三者無くして、(三)善喪を以て魯國を蓋へり。固より、其の實無くして其の名を得る者有るか、回一に之を怪しむと。仲尼曰く、(四)夫の孟孫氏は之を盡くせり。(五)知よりも進めり。(六)唯ゞ之を簡にすること得ず。(七)夫れ已に簡にする所あり。(八)孟孫氏は生くる所以を知らず、死する所以を知らず、(九)先に就くことを知らず。後に就くことを知らず。(一〇)化に若うて物と爲し、以て其の知らざる

方之外者也。而丘遊方之内者也。外内不相及。而丘使女往弔之。丘則陋矣。彼方且與造物者爲人。而遊乎天地之一氣。彼以生爲附贅縣疣。以死爲決𤴯潰癰。夫若然者。又惡知死生先後之所在。假於異物。託於同體。忘其肝膽。遺其耳目。反覆終始。不知端倪。芒然彷徨乎塵垢之外。逍遙乎無爲之業。彼又惡能憒憒然爲世俗之禮。以觀衆人之耳目哉。

もの、孔子自らは世間の禮法内に游ぶもの 〔一五〕外と内とは懸けはなる 〔一六〕自分のやりかたは迂拙なり 〔一七〕造物者と友となり天地混茫の一氣の始たる不死不生の地に游ばんとす 〔一八〕生を以て瘤やイボの如く厄介視す 〔一九〕死を以てネブトの裂け膿のつぶれたるほどに思ひて惜しまず 〔二〇〕生が先にして死が後なるか死が先にして生が後なるかそんなことを度外視す 〔二一〕形體は幻妄虚假にして各異なり之を假りて生を營む 〔二二〕死は共通同一にして此處に生を託す 〔二三〕念慮を忘れ耳目の感覺を遺る 〔二四〕生と死と何れが終何れが始なるか之を反覆して際限を知らず 〔二五〕茫然無知の貌をして世俗の外に超越し、作爲することなき自然の行爲に自適す 〔二六〕憒亂する貌 〔二七〕世人の耳目に見せつける

子貢曰。然則夫子何方之依。曰。丘天之戮民也。雖然。吾與汝共之。子貢曰。敢問其方。孔子曰。魚相造乎水。

子貢曰く、然らば則ち(一)夫子は何の方にか依れると。曰く、丘は(二)天の戮民なり。然りと雖も吾(三)汝と之を共にせんと。子貢曰く、敢へて其の方を問ふと。孔子曰く、(四)魚は水に相造り、人は道に相造る。(五)水に相造る者は、池を穿てば養給ぐ。(六)道に相造る者は、事無ければ生定まる。故に曰く、(七)魚は江湖に相忘れ、人は道術に相忘ると。子貢曰く、敢へて(八)畸人を問ふと。曰く、畸人なる者は、(九)人に畸にし

曲。或鼓琴。相和而歌曰。嗟來桑戶乎嗟來桑戶乎。而已反其眞。而我猶爲人猗。子貢趨而進曰。敢問臨尸而歌。禮乎。二人相視而笑曰。是惡知禮意。子貢反以告孔子曰。彼何人者邪。修行無有而外其形骸。臨尸而歌。顏色不變。無以命之。彼何人者邪。孔子曰。彼遊

やと。孔子曰く、彼は方の外に遊ぶ者なり、而して丘は方の內に遊ぶ者なり。外內相及ばず、而るに丘女をして往いて之を弔せしむ。丘は則ち陋なり。彼れ方に且に造物者と人たり、而して天地の一氣に遊ばんとす。彼は生を以て附贅縣疣と爲し、死を以て決𤴯潰癰と爲す。夫れ然るが若くば、又惡んぞ死生先後の在る所を知らんや。異物に假り、同體に託し、其の肝膽を忘れ、其の耳目を遺れ、終始を反覆して、端倪を知らず。芒然として塵垢の外に彷徨し、無爲の業に逍遙す。彼れ又惡んぞ能く憒憒然として世俗の禮を爲し、以て衆人の耳目に觀さんや。

(七) 子反、琴張は□□に見ゆれど□□□□の言なり (八) 誰かよく無心にして相與にし無心にして相爲すものぞ (九) 天に登るは高遠なるをいひ、霧に遊ぶは玄虛なるをいひ、能く塵埒界を超越して其の轉逆を神仙にするをさす (一〇) 形は法なり。人爲の拘法に超越して絕對の境に逍遙冥合するをいふ (一一) 生を忘るゝ故に生は盡くることなく無限 (一二) 編曲に同じ (一三) 葬事を助けしむ (一四) 歌詞を作る (一五) 汝は一旦は本眞に反れども我は猶人にして假現の世にあり (一六) 死骸の前にて放歌するは禮にかなへりや (一七) 足下の如きもの何ぞ禮の本意を知らんや (一八) 善行もなくして其の形骸を無視す (一九) 之を何と言ふべきものか沙汰の限りなり (二〇) 彼は世間の繩法外に遊ぶ

曰二人耳人耳一。夫造化者必以爲二不祥之人一。今一以二天地一爲二大鑪一。以二造化一爲二大冶一。惡乎往而不可哉。成然寐。蘧然覺。

子桑戶。孟子反。子琴張三人相與友。曰孰能相三與於無二相與一。相三爲於無二相爲一。孰能登レ天遊レ霧。撓二挑無極一。相忘以レ生。無レ所二終窮一。三人相視而笑。莫レ逆二於心一。遂相與友莫然。有レ間而子桑戶死。未レ葬。孔子聞レ之。使二子貢往待ニ事焉。或編レ

(一)子桑戶、孟子反、子琴張三人、相與に友たり。曰く、(二)孰か能く相與にすること無きに相與にし、相爲すこと無きに相爲さん。孰か能く(三)天に登り、霧に遊び、(四)無極に撓挑して、(五)相忘るゝに生を以てし、終窮する所無からんと。三人相視て笑ふ、(六)心に逆ふこと莫し、遂に相與に友として莫然たり。間く有りて子桑戶死す。未だ葬らず。孔子之を聞き、子貢をして往いて(七)事を待たしむ。或ものは(八)曲を編し或ものは琴を鼓し、相和して歌つて曰く、嗟來、桑戶や、嗟來桑戶や。(九)而已に其の眞に反りて、我れ猶人たり猗と。子貢趨つて進んで曰く、敢へて問ふ、(一〇)尸に臨んで歌ふは禮かと。二人相視て笑つて曰く、(一一)是れ惡んぞ禮の意を知らんと。子貢反つて以て孔子に告げて曰く、彼は何人ぞや、(一二)修行有ること無くして、其の形骸を外にす。尸に臨んで歌ひ、顏色變ぜず。以て(一三)之に命ずる無し、彼れ何人ぞ

曰、父母於子、東西南北。唯命之從。陰陽於人、不翅於父。彼近吾死。而我不聽。我則悍矣。彼何罪焉。夫大塊載我以形。勞我以生。佚我以老。息我以死。故善吾生者、乃所以善吾死也。今大冶鑄金。金踊躍曰、我且必爲鏌鋣。大冶必以爲不祥之金。今一犯人之形。而

するは、乃ち吾が死を善しとする所以なり。今大冶(九)、金を鑄んに、金踊躍して、我れ且に必ず鏌鋣たらんとすと曰はば、大冶必ず以て不祥の金と爲さん。(一〇)今一たび、人の形を犯して、而して人のみ人のみと曰はば、夫の造化者、必ず以て不祥の人と爲さん。今一たび(一一)天地を以て大鑪と爲し、造化を以て大冶と爲さば、惡にか往いて可ならざらんや。(一二)成然として寐ね、蘧然として覺めんのみと。

(一) 氣息急にして將に死せんとす (二) 子來の妻子の泣くを叱り止む (三) 死は化なり。濫りに泣きて死に臨める人を驚かすこと勿れ (四) 偉大なるかな造化の力、足下を何物になさんとするにや又足下を化して何處にゆかしめんとするにや (五) 鼠に肝なく蟲に臂なし。卽ち化して無物となるか往きて處なきかといふ意なりといふ (六) 陰陽二氣の人に於ける關係は人の父母に背く能はざる程度のものならず、是非とも陰陽に從はざる可らず (七) 造物者は吾を死に近づけ、我死せざらんとせば我之に逆ふにて彼に罪無く我に罪あり (八) 鏌鋣前に出づ (九) 大なる鍛冶工が金を鑄んとするに鑪中の金が躍りだして我はぜひとも莫邪の名劍になりたしといはゞ、鍛工必ず之を不吉の金となさん (一〇) 今一度人の形を享け得て生れて死することを厭ひ、長く人に生きんことを希はゞ彼の造物者は必ず之を不吉の人となさん (一一) 天地を大鑪とし造化を鍛工とし我を鑪中の金と見なし、造化我を鼠肝蟲臂となすも、其の爲す所に任せば何處に往くとして可ならざることとなし (一二) 安らかに寐ね無心にして覺め生死窮達の如く自適するをいふ

假。而化予之尻以爲輪。以神爲馬。予因而乘之。豈更駕哉。且夫得者時也。失者順也。安時而處順。哀樂不能入也。此古之所謂縣解也。而不能自解者。物有結之。且夫物不勝天久矣。吾又何惡焉。

自ら之を解くこと能はざるものは生を悅び死を惡む私心が結ばるゝ故なり。「而」の上一本「惡」の字あり　(二四) 萬物は凡て天の命ずる所なれば天命を如何ともしがたし唯之に順ふべく惡むべきに非ず

俄而子來有病。喘喘然將死。其妻子環而泣之。子犁往問之曰。叱避。無怛化。倚其戶與之語曰。偉哉造化。又將奚以汝爲。將奚以汝適。以汝爲鼠肝乎。以汝爲蟲臂乎。子來

俄かにして子來、病有り、喘喘然(一)として將に死せんとす。其の妻子環りて之を泣く、子犁往きて之を問うて曰く、叱(二)、避けよ、化(三)を怛かすこと無れと。其の戶に倚り之と語つて曰く、偉(四)なるかな造化、又將に奚んぞ汝を以て爲さんとする、將に奚にか汝を以て適かしめんとする。(五)汝を以て鼠肝と爲すか、汝を以て蟲臂と爲すかと。子來曰く、父母の子に於ける、東西南北唯命に之れ從ふ。(六)陰陽の人に於ける、翅に父母に於けるのみならず。(七)彼れ吾を死に近くして、我れ聽かずんば、我れ則ち悍なり。彼れ何の罪ぞ。夫れ大塊(八)、我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を佚するに老を以てし、我を息はするに死を以てす。故に吾が生を善しと

僂發レ背。上有二五管一頤隱二於齊一。肩高二於頂一。句贅指レ天。陰陽之氣有レ沴。其心閒レ而無事。跰𨇤而鑑二于井一曰、嗟乎。夫造物者。又將三以レ予爲二此拘拘一也。子祀曰、女惡レ之乎。曰亡。予何惡。浸假。而化二予之左臂一以爲レ雞。予因以求二時夜一。浸假而化二予之右臂一以爲レ彈。予因以求二鴞炙一。浸

めん。浸假して、而して予の尻を化して以て輪と爲し、(一七)神を以て馬と爲さば、予は因つて之に乘らん、豈に更に駕せんや。(一八)且夫れ得るは時なり、(一九)失ふは順なり。(二〇)(二一)時に安んじて順に處れば、哀樂入ること能はざるなり。此れ古の所謂縣解なり。(二二)(二三)而して自ら解くこと能はざる者は、物之を結ぶこと有ればなり。且夫れ物天に勝たざること久し、(二四)吾れ又何ぞ惡まんやと。

(一) 假設の人物　(二) 無より有を生じ有より死を生ずる理を知るものありや　(三) 吾其の理を知れるものと友とならん　(四) 各の心融合して友となる。莫逆の友といふは之より出づ　(五) 身體屈曲して伸びざらしめんとす　(六) セムシ　(七) 脊骨曲して五臟頭上に位置す　(八) 項部の椎骨は天をさす　(九) 上下の位置顛倒して身體の陰陽の調和亂る　(一〇) 斯の如けれど子輿の心閑寂にして事とせず　(一一) ヨロヨロとして井水に吾が影をうつす　(一二) 顯出　(一三) 足下は形體を忘るゝこと能はずして其の疾病を厭はるゝか　(一四) 厭ふことなし　(一五) 造物者若し漸々と變化せしめて已の左臂を雞となさば、因つて之に夜中に時を告ぐることを求め其の命に安んじて適とせん　(一六) ハジキダマとなさば因つて以て小鳩の炙肉を求めん　(一七) わが尻を化して車輪となしわが精神を化して馬となさば、已は因つて之に乘らん　(一八) 別に車に駕するまでもなくて樂なり　(一九) 形體は之を求むれども得べからず得るは時の自然なり　(二〇) 形體を失うて死し造物に復歸するは物の順理　(二一) 得るに安んじて失ふに順ひ處る時は哀樂の情此の心を動かすことを得ず　(二二) 懸隔なくして自由なるをいふ養生主に出づ　(二三) 懸繫せられて

迎也。無レ不レ毀也。無レ不レ成也。其名爲二攖寧一。攖寧也者。攖而後成者也。南伯子葵曰。子獨惡乎聞レ之。曰。聞二諸副墨之子一。副墨之子。聞二諸洛誦之孫一。洛誦之孫。聞二之瞻明一。瞻明聞二之聶許一。聶許聞二之需役一。需役聞二之於謳一。於謳聞二之玄冥一。玄冥聞二之參寥一。參寥聞二之疑始一。

子祀子輿子犂子來四人相與語曰。孰能以レ無爲レ首。以レ生爲レ脊。以レ死爲レ尻。孰知二死生存亡之一體一者。吾與レ之友矣。四人相視而笑。莫レ逆二於心一。遂相與爲レ友。俄而子輿有レ病。子祀往問レ之。曰偉哉。夫造物者。將三以レ予爲二此拘拘一也。曲

子祀、子輿、子犂、子來、四人相與に語つて曰く、孰か能く無(一)を以て首と爲し、生(二)を以て脊と爲し、死を以て尻と爲さん。孰か死生存亡の一體たるを知る者ぞ、吾(三)れ之と友たらんと。四人相視て笑ふ、心(四)に逆ふこと莫し。遂に相與に友たり。俄にして子輿病あり、子祀往いて之を問ふ、曰く、偉なるかな、夫の造物者、將(五)に予を以て此の拘拘たらしめんとす。曲(六)僂背に發す、と。上(七)に五管有り、頤齊を隱し、肩頂より高く、句(八)贅天を指す。陰陽(九)の氣沴るゝこと有り。其の心(一〇)間にして無事、跰𨇤(一一)として井に鑑みて曰く、嗟乎、夫の造物なる者、又(一二)將に予を以て此の拘拘たらしめんとするやと。子祀曰く、女(一三)之を惡むかと。曰く、亡(一四)し。予何ぞ惡まん。浸假して、予の左臂を化して以て鷄(一五)と爲さば、予は因つて以て時夜を求めん。浸假して予の右臂を化して以て彈(一六)と爲さば、予は因つて以て鴞炙を求

吾猶守而告レ之。參日而後能外二天下一。已外二天下一矣。吾又守レ之。七日而後能外レ物。已外レ物矣。吾又守レ之。九日而後能外レ生。已外レ生矣。而後能朝徹。朝徹而後能見レ獨。見レ獨而後能無二古今一。無二古今一而後能入二於不死不生一。殺レ生者不死。生レ生者不生。其爲レ物無レ不レ將也。無レ不レ

は、攖れて而る後成る者なりと。南伯子葵曰く、子獨り惡にか之を聞けると。曰く、諸を副墨の子に聞けり。(一六)副墨の子は諸を洛誦の孫に聞き、(一七)洛誦の孫は之を瞻明に聞き、(一八)瞻明は之を聶許に聞き、(一九)聶許は之を需役に聞き、(二〇)需役は之を於謳に聞き、(二一)於謳は之を玄冥に聞き、(二二)玄冥は之を參寥に聞き、(二三)參寥は之を疑始に聞けりと。(二四)

(一) 南郭子綦と同じ　(二) 顔色少年の如く艶々しきは何故ぞ　(三) あゝ如何にして學び得らるべけんや足下は教ふるに適當せる人物ならず　(四) 卜梁倚を教へんとおもへども、果して彼が聖人たり得べきか心もとなし　(五) 聖人の道を教ふること可能なりとせば、聖人の道を以て聖人の才を有するものに告ぐるは容易なり　(六) 猶我の守するを候ひ得らて告ぐ　(七) 教ふること三日にして後、天下を忘るゝことを得　(八) 萬物あることを忘る　(九) 教ふること九日にして自己の生を忘る　(一〇) 胸中澄徹して朝陽の清明なる如し　(一一) 天地萬物と自己と一致し、差別の見を離れて唯一無二の形を現じ來る　(一二) わが生を殺す本體は不死なる道、又生を生ずるものも不生の道。かくて道は不死不生なり　(一三) 道に萬物を送つて將へざることなく迎へて始めざることなし　(一四) 分つて散多となし合せて全一と成す　(一五) 物に觸れて擾亂する者　(一六) 書は文字、文字は言の謂なるを以ていふ。之より以下人の替名に擬して說く凡て寓言と知るべし　(一七) 講論によつて之を知る　(一八) 目にて視る　(一九) 耳に囁きてさとる　(二〇) 體得するなり　(二一) 歌誦歌詠するなり　(二二) 深遠寂寥の心境　(二三) 道の本原空無なるをいふ　(二四) 其の始を疑へども未だ始めより始あらざる第一義諦

南伯子葵問ニ乎女偊一曰。子之年長矣。而色若ニ孺子一何也。曰吾聞レ道矣。南伯子葵曰。道可得ニ學邪。曰惡。惡可。子非ニ其人一也。夫。卜梁倚。有ニ聖人之才一。而無ニ聖人之道一。我有ニ聖人之道一而無ニ聖人之才一。吾欲ニ以敎一レ之。庶ニ幾其果爲ニ聖人一乎。不レ然以ニ聖人之道一。告ニ聖人之才一。亦易矣。

(一)南伯子葵、女偊に問うて曰く、子の年長ぜり、而して(二)色孺子の若きは何ぞやと。曰く、吾道を聞けばなりと。南伯子葵曰く、道は學ぶことを得べきかと。曰く、(三)惡んぞ可ならん、子は其の人に非ざるなり。夫の卜梁倚は、聖人の才有れども聖人の道無く、我は聖人の道有れども聖人の才無し。(四)吾以て之を敎へんと欲するに、其の果して聖人たるを庶幾せんや。(五)然らずんば聖人の道を以て、聖人の才に告ぐるは亦易し。(六)吾猶ほ守つて之に告ぐ、(七)參日にして而る後に、能く天下を外にす。已に天下を外にす、吾又之を守る。七日にして、而る後に能く(八)物を外にす。已に物を外にす。吾又之を守る。(九)九日にして、而る後に能く生を外にす。已に生を外にす、而る後に能く(一〇)朝徹す。朝徹して而る後に能く(一一)獨を見る。獨を見て而る後に能く古今無し。古今無くして、而る後に能く不死不生に入る。(一二)生を殺す者は不死、生を生ずる者は不生、(一三)其の物たるや、將らざること無く、迎へざること無し、(一四)毀らざること無く、成らざること無し。其の名を(一五)攖寧と爲す。攖寧なるもの

得レ之以挈二天地一。伏戲得レ之以襲二氣母一。維斗得レ之終古不レ忒。日月得レ之終古不レ息。堪坏得レ之以襲二崑崙一。馮夷得レ之以遊二大川一。肩吾得レ之以處二大山一。黄帝得レ之以登二雲天一。顓頊得之以處二玄宮一。禺強得レ之立二乎北極一。西王母得之坐二乎少廣一。莫レ知二其始一。莫レ知二其終一。彭祖得レ之上及二有虞一。下及二五伯一。傅說得レ之以相二武丁一。奄二有天下一。乘二東維一騎二箕尾一而比二於列星一。

て、上有虞(かみいうぐ)に及び(二二)、下五伯(は)に及ぶ。傅說(ふえつ)(二三)之を得て以て武丁(ぶてい)に相(しやう)として天下を奄(えん)有(いう)し、東維(とうゐ)(二四)に乘(の)り、箕尾(きび)(二五)に騎して、而して列星(れつせい)に比せり。

(一) 道は實理ありて形なく徵證ありて跡なし (二) 淡然として作爲するところなく形なし (三) 心を以て心に傳へ得れども手に受くべからず (四) 心に自得することを得れども眼に見るべからず (五) 道其のものが自ら本となり根となり天地あらざる太古より存す (六) 鬼は造物の跡、止を以ていひ帝は民物の生、明を以ていふ。幽冥界の鬼神も現實界の帝王も此の道を得て後神靈となる (七) 大極は五氣、五氣とは五方の氣にして先とは上なり (八) 天地四方を六極といふ (九) 天地の生成以前に生じたれども久しとなさず、上古より長存すれども老いたりとなさず、永久不老なり (一〇) 太古の帝王 (一一) 太昊伏羲氏、聖人間世に出づ (一二) 陰陽を生ずる元氣を襲取して之を有す (一三) 北斗星は此の道を得て萬古に違ふことなく、北極に在りて衆星の拱ふ所となる (一四) 崑崙山の神 (一五) 河の神 (一六) 太山の神 (一七) 黄帝軒轅氏雲に乘つて上天に登りしことと見ゆ (一八) 顓頊高陽氏北方の帝となり玄宮に處る (一九) 北海の神 (二〇) 太陰の精といふ、舜の時に使を遣して玉環を獻じ漢の武帝の時に青桃を獻ず、顏容十六七にして甚だ端正、常に西方小廣山に坐して不老不死と傳ふ (二一) 顓頊の玄孫、能く性を養ひて道を得。解道馮遊に出ぢ (二二) 上は舜の時代より下は周の五覇時代まで生存す (二三) 殷の武丁卽ち高宗夢に傅說を得て天下に冠め相となす、死して列星となると傳ふ (二四) 箕斗の間にある星の名 (二五) 星の名、二十八宿の一

人猶效レ之。又況萬物之所レ係。而一化之所レ待乎。夫道有レ情有レ信。無レ爲無レ形。可レ傳而不レ可レ受。可レ得而不レ可レ見。自本自根。未レ有二天地一。自古以固存。神レ鬼神レ帝。生レ天生レ地。在二大極之先一而不レ爲レ高。在二六極之下一而不レ爲レ深。先二天地一生而不レ爲レ久。長二於上古一而不レ爲レ老。豨韋氏

定し、是等が命に歸するものなることを知るものあれば、人猶之に効うて師とす（四）況して萬物之に聯繫し一化之を待つて生成する道といふものを知るものに於てはいふまでもなし

夫れ道（一）は情有り、信有り。（二）爲す無く、形無し、（三）傳ふべくして、受く可らず。（四）得べくして見る可らず。（五）自ら本づき、自ら根ざし、未だ天地あらざるの古よりして以て固より存す。（六）鬼を神にし、帝を神にし、天を生じ、地を生ず。（七）大極の先に在つて、而して高しと爲さず、（八）六極の下に在つて、而して深しと爲さず。（九）天地に先だちて生じて久しと爲さず、上古より長じて而して老いたりと爲さず。（一〇）豨韋氏之を得て以て天地を挈げ、（一一）伏戲之を得て以て氣母を襲どり、（一二）維斗之を得て終古忒はず、（一三）日月之を得て終古息まず。（一四）堪坏之を得て以て崑崙を襲どり、（一五）馮夷之を得て以て大川に遊び、（一六）肩吾之を得て以て大山に處り、（一七）黃帝之を得て以て雲天に登り、（一八）顓頊之を得て以て玄宮に處り、（一九）禺強之を得て北極に立ち、（二〇）西王母之を得て少廣に坐す。其の始めを知ること莫く、其の終りを知ること莫し。（二一）彭祖之を得

之固矣。然而夜半有力者負之而走。昧者不知也。藏小大有宜。猶有所遯。若夫藏天下於天下而不得所遯。是恒物之大情也。特犯人之形而猶喜之。若人之形者。萬化而未始有極也。其爲樂可勝計邪。故聖人將遊於物之所不得遯而皆存。善夭善老。善始善終。

を負うて走るも、昧者は知らざるなり。小を大に藏すれば、宜しきあるも、猶ほ遯るゝ所あり。(三)若し夫れ、天下を天下に藏すれば、(四)遯るゝ所を得ず、是れ恒物の(五)大情なり。特に人の形を犯して猶ほ之を喜ぶ、(六)人の形の若き者は萬化して未だ始めより極まり有らざるなり、其の樂みたる計るに勝ふ可けんや。(七)故に聖人將に(八)物の遯るゝを得ざる所に遊びて、而して皆存せんとす。天を善しとし、老を善しとし、(九)始を善しとし、終を善しとするも、人猶ほ之に效ふ。又況んや萬物の係る所にして、而して一化の待つ所をや。(一〇)

(一) 舟を叡壑の中に藏し山を澤中に隠して大丈夫にかくしおほせたりと思ふ (二) 夜中頃大力を有するもの來りて舟や山を負うて走るも、眠れるものは之を覺らざる如く、死生は命にあることを知らずして、生に執し之を頼みとするものは運命の偉力に生を奪はるゝことを知らず (三) 舟や山の如き小物を谷や澤の如き大物中に隠すときは、大丈夫なる如きも猶ほ之を失ふことあり (四) 天下を天下に隠すときは遁して隠さず從つて之を失ふことなし (五) 恒常の大實理 (六) 世人は顔色形態皮膚爪髪等は日に月に變化して極まりなきものなることを覺えず、養生の術を設けて長壽を求め其の自然の形を損す (七) 萬物變化して極まりなきところに窮に計るべからざる樂あり (八) 聖人は天下を天下に藏し隠して之を失はざる所に優游し、生死何れをも存せんとす (九) 形の夭を始終を善しとして皆

況其眞乎。

泉涸。魚相與處於陸。相呴以濕。相濡以沫。不如相忘於江湖。與其譽堯而非桀也。不如兩忘而化其道。夫大塊載我以形。勞我以生。佚我以老。息我以死。故善吾生者。乃所以善吾死也。

夫藏舟於壑。藏山於澤。謂之

として、わが身をすらその爲に拵つる程なれば、まして其の眞實の道に於ては尙更之がために盡す所あるべきなり

(一)泉涸れて、魚相與に陸に處り、相呴するに濕を以てし、相濡する沫を以てするは、江湖に相忘るゝに如かず、(二)其の堯を譽めて桀を非らんよりは、兩ながら忘れて、其の道に化するに如かず。(三)夫れ大塊我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を佚するに老を以てし、我を息はするに死を以てす、故に(四)吾が生を善しとするは、乃ち吾が死を善しとする所以なり。

(一) 泉の水涸れて多くの魚、陸上に橫たはり、口より水氣を吹きて濕しあひ水沫を吐きて濕しあふ如く、狹苦しき差別界にありていらざる仁義立てせんより、廣き江湖の水中に游泳して互に知らぬかほをなす如く、各個に特立自適する方がよろし (二) 聖人の典型たる堯帝を譽めて、暴君の典型たる夏の桀王を非難するよりも、好惡兩つながら忘れて一に歸し道に同化し自然に歸するがよろし (三) 天地は我を生じ之に形を與へて、生活に勞苦せしめ老年にして安逸せしめ死して長く休息せしむ (四) 我が形生老死皆天地の方寸より出で來り、生死畢竟一に歸すべきものゆゑ吾が生を善しとして之を肯定するは卽ち吾死を善しとして肯定する道理なり

(一)夫れ舟を壑に藏し、山を澤に藏して之を固しと謂ふ、然かも(二)夜半、力有る者、之

一。其弗レ好之也一。其一也一。其不レ一也一。其一與レ天爲レ徒。其不レ一與レ人爲レ徒。天與レ人不ニ相勝一也。是之謂ニ眞人一。

死生命也。其有ニ夜旦之常一天也。人之有レ所レ不レ得レ與。皆物之情也。彼特以レ天爲レ父。而身猶愛レ之。而況其卓乎。人特以レ有レ君爲レ愈ニ乎己一。而身猶死レ之。而

ならざるも也一。(三)其の一なるは天と徒たり。其の一ならざるは人と徒たり。(四)天と人と相勝たざるなり、是れを之れ眞人と謂ふ。

㊀眞人は好惡を一にし之を好むも好まざるも一の無心に歸し差別の見を絶す ㊁無差別界の一は固より一、有差別界の不一も亦眞人にとりては一に外ならず ㊂其の無差別界に立つものは天と一體、其の有差別界に立つものは人と一體となる ㊃かく云へば天と人と區別ある如くなれど、天と人とは相剋するものにあらずして天道人道一に歸するが眞人の道

(一)死生は命なり、其の夜旦の常あるは天なり、人の與ることを得ざる所有るは、皆物の情なり。(二)彼れ特に天を以て父と爲して、而して身猶ほ之を愛す、而るを況んや其の卓れたる者をや。(三)人特に君あるを以て、己れに愈れりと爲して、身猶ほ之に死す、而るを況んや其の眞なるものをや。

㊀人間の死生は天命に屬し晝夜の交代して變せざるは、天の數にして斯く人の與り知ることを得ざるものあるが萬物の上に存する實情なり ㊁人はたゞ天を以て我が出生の本源即ち父と爲すものなるが、人倫の父すら之を愛するほどなれば父よりも尤は卓越せる天をば尊ぶべき道理なり ㊂人はたゞ己の事ふる主君をば己に優れるもの

乎其未可制也。連乎其似好閉也。悗乎忘其言也。以刑爲體。以禮爲翼。以知爲時。以德爲循。以刑爲體者。綽乎其殺也。以禮爲翼者。所以行於世也。以知爲時者。不得已於事也。以德爲循者。言其與有足者至於丘也。而人眞以爲勤行者也。故其好之也

得ざるなり。(二〇)德を以て循と爲す者は、其の足ある者と丘に至るを言ふなり。而して人は(二一)眞に以て勤め行く者と爲すなり。

(一) 其の行狀義にかなふのみにして中立して偏私せず (二) 謙遜卑下して已に足らざるが如くなれども、自ら足るを以て他より承けず (三) 從容として、廉角あれども固陋ならず (四) 廣大にして宏大無邊なれど浮華ならず (五) イソイソとして喜びあるが如し (六) 自ら首唱せず押しせまつて已むを得ず之に應ず (七) 喜色充滿して我が美を色に表す (八) 容與自得して德を心に止め蓄へて外に馳せず (九) 眞人もと嚴厲の氣なけれど、其の然る如きは世上の凡俗に似たる所あり (一〇) 高大にして之を抑制すべからず (一一) ムッツリとして緘默を好むに似 (一二) 首をうな垂れて其の言を忘る (一三) 刑法を以て體とし自ら守る (一四) 禮を以て翼として已をたすけ世と和す (一五) 刑法を以て體とし自ら守るものは私怨なきが故に其の殺すこと寛大なり (一六) 德を以て已に循へ我より之を作らず (一七) 知を以て時に任せ已より主唱せず (一八) 禮を以て翼として世に和するが故に世に行はる (一九) 知を以て時と爲すものは已むを得ずして事に應ずるものなり (二〇) 德を已に循ふるものは、足あるものは皆小山に登り得る如く共に道に登り得 (二一) 眞人の刑體知德一として精到ならざるなきを見て、勤苦して後之を行ふものと思ひ其の自然にして爲す所以を知らず

故に(二二)其の之を好むも也一、其の之を好まざるも也一なり。(二三)其の一も也一、其の一

齊。箕子。胥餘。紀他。申徒狄。是役二人之役一。適二人之適一。而不三自適二其適一者也。

古之眞人。其狀義而不朋。若不足而不承。與乎其觚而不堅也。張乎其虛而不華也。邴邴乎其似喜乎。崔乎其不得已乎。滀乎進二我色一也。與乎止二我德一也。厲乎其似世乎。警

(二一) 帝堯之に天下を讓りしに受けずして河に投じて死す (二二) 殷湯の讓りを受けず自ら石を負ひ盧水に投ず (二三) 孤竹君の二子、周の武王が殷紂を討つに慊らず首陽山に隱れ終に餓死す (二四) 殷の紂王の臣、諫めて聽かれずして佯狂す (二五) 箕子の名或は云ふ比干と (二六) 殷湯天下を務光に讓らんとするや己に及ばんことを怖れて水に投ず (二七) 紀他にならひて水に投じて死す (二八) 以上の數子は人の役に役せられ人の適として樂しむ所を適とし、自ら適として樂しむ所を適とせず、凡て人に隨ひて已を棄てたるもの

古の眞人は、其の狀、義にして而して朋せず。足らざるが若くにして、而して承けず。與乎として其れ觚なれども堅からざるなり。張乎として其れ虛なれども華ならざるなり。邴邴乎たり、其れ喜ぶに似たるか、崔乎たり其れ已むを得ざるか、滀乎として我が色を進め、與乎として我が德を止む。厲乎として其れ世に似たるか、警乎として其れ未だ制すべからず。連乎として其れ閉を好むに似、悗乎として其の言を忘る。刑を以て體と爲し、禮を以て翼と爲し、知を以て時と爲し、德を以て循と爲す。刑を以て體と爲す者は、綽乎として其れ殺す。禮を以て翼と爲す者は、世に行はるゝ所以なり。知を以て時と爲す者は、事に已むを

寂リ其顙頯。凄然似秋。煖然似春。喜怒通四時。與物有宜。而莫知其極。故聖人之用兵也。亡國而不失人心。利澤施乎萬世。不爲愛人。故樂通物。非聖人也。有親。非仁也。天時。非賢也。利害不通。非君子也。行名失己。非士也。亡身不眞。非役人也。若狐不偕。務光。伯夷。叔

君子に非ざるなり。(一九)名を行うし、己を失ふは士に非ざるなり。(二〇)身を亡ぼして眞ならざるは、人を役するに非ざるなり。(二一)狐不偕、(二二)務光、(二三)伯夷、叔齊、(二四)箕子、(二五)胥餘、(二六)紀他、(二七)申徒狄の若きは、(二八)是れ人の役に役し、人の適に適して、而して自ら其の適を適とせざる者なり。

(一) 無心にして死し無心にして生れ來るのみ (二) 人生の始まる所の生を忘れずして生あるもの、必ず死あることを観じ死に安んず (三) 生は求めずして來りしものなれば、死も亦之を求むることなくして自然に來るを待つ (四) 生を此の世に受けて喜び、又生を忘れて之を天に返して死す (五) 人爲の心を以て天爲の常道を棄てず (六) 人爲を以て天理を助長せず只自然に隨ふ (七) 其の心は外物の紛々を忘れて平 (八) 其の容貌は寂靜 (九) 其の額は寛くして平 (一〇) 凄然として秋氣の如し (一一) 又暖かにして春の和氣に似たり (一二) 其の喜怒は隨時の春生秋殺あると一致し、萬物と融合すれども浩々として其の際限を知らず (一三) 聖人は戰ふことありて國を亡すも固より私欲に出でざるものゆゑ、其の國の民心を失ふことなし。これ肅殺の中に一味の溫を含む也 (一四) 恩澤萬世に垂れ施すも殊に人を愛せんとしてわざと爲せしにあらずして自然の理に由る。之煖然たる溫氣の中に尚嚴冷の氣存するなり (一五) 聖人は物の自然に融通自由なるを愛するが、故に人爲を以て通ぜしめんとせず (一六) 人によりて親疎に區別を設くるは仁者の所爲に非ず (一七) 殊更に天時に合はせんとする者は未だ時を忘れて自然に合ふの賢に若かず (一八) 利を好み害を惡むは衆人の心、君子は利害通じて一たり (一九) 世上の名聲を求めて己の眞性を失ふは士に非ず (二〇) 好惡に支配せられ身を亡ぼして眞性を失ふは、人を使役するものならで反つて人に使役せらるゝもの

不甘。其息深深。眞人之息以踵。衆人之息以喉。屈服者其嗌言若哇。其耆欲深者。其天機淺。

れしやすし　(二三)外物に使はれ氣の屈服して伸びざるものは言語喉につまりて咽ぶ如し　(二四)嗜好欲望深きものは凡て天授の妙用淺くして深からず

古之眞人。不知說生。不知惡死。其出不訢。其入不距。翛然而往翛然而來而已矣。不忘其所始。不求其所終。受而喜之。忘而復之。是之謂不以心捐道。不以人助天。是之謂眞人。若然者其心忘。其容

古の眞人は生を說ぶことを知らず、死を惡むことを知らず。其の出も訢ばず、其の入も距まず。(一)翛然として往き翛然として來るのみ。(二)其の始まる所を忘れず、(三)其の終る所を求めず。(四)受けて而して之を喜び、忘れて而して之を復す。是を之れ(五)心を以て道を捐てず、(六)人を以て天を助けずと謂ふ、是を之れ眞人と謂ふ。然るが若き者は、(七)其の心は忘、(八)其の容は寂、(九)其の顙は頯。(一〇)淒然として秋に似たり、(一一)煖然として春に似たり、(一二)喜怒四時に通じ、物と宜しき有つて、而して其の極を知ること莫し。故に(一三)聖人の兵を用ふるや、國を亡ぼすも人心を失はず。(一四)利澤、萬世に施すも、人を愛すると爲さず。(一五)故に物を通ずるを樂しむは聖人に非ざるなり、(一六)親有るは仁に非ざるなり、(一七)天を時とするは賢に非ざるなり。(一八)利害通ぜざるは、

未定也。庸詎知吾所謂天之非人乎。所謂人之非天乎。且有眞人而後有眞知。何謂眞人。古之眞人。不逆寡。不雄成。不謨士。若然者。過而弗悔。當而不自得也。若然者登高不慄。入水不濡。入火不熱。是知之能登假於道也。若此。古之眞人。其寢不夢。其覺無憂。其食

眞人は、(一八)其の寢るや夢みず其の覺るや憂無し、(一九)其の食ふや甘しとせず、(二〇)其の息や深深。(二一)眞人の息は踵を以てし、(二二)衆人の息は喉を以てす。(二三)屈服する者は其の嗌言哇ぶが若し、(二四)其の耆欲深き者は其の天機淺し。

(一) 大宗師とは大中至正の師範の意にして、即ち道を謂ひ、此の篇道の本源を推究し貧富死生を超越して命に安んずべきを說く (二) 天の爲す所のもの即ち天理の本然を知り、人の爲す所のもの即ち人爲の必然を知るものは天理人爲を兼ね覺るものにして中分なし (三) 天の爲す所を知るといふは天理自然のまゝに隨順して生くること (四) 人の爲す所を知るといふは、人知の知り得る所のものは自然に從ひ人知の知り得ざる所のものは知らずとして天命に委す (五) 天壽を全うして中途に夭折せざるは知の最も極致とする所 (六) 知は盛といへども亦患ひとすべき困難あり (七) 知は待つ所の事實があつて後に天壽とか夭折とか斷定がつくもの (八) 然るに知の待つ所の事實は特に一定せずして逆覩しがたし (九) 故に天理とおもひしも人爲にして人爲と思ひしも天爲なるかもはかられず (一〇) 且之等の知は相對的の知にして眞知にあらず眞人に至つて始めて眞知を有す (一一) 古代の眞人は物の不十分なるものに對して嫌惡せず (一二) 成功を自慢せず (一三) 士は事、事は自然のまゝにして人爲の小細工をせず (一四) かくの如き眞人は過つことあるも妄に悔いず (一五) 成功するも自ら得意にならず (一六) かくの如きものは心内に充つる故に外物のために累はされず (一七) 眞知が道に向上進歩するありさまこの通り (一八) 物に累はされざる故に寢ねて夢みず覺めて憂ふることなし (一九) 眞人は嗜欲に累はれざる故に食事をうましと思はず (二〇) 神定まる故に其の呼吸深し (二一) 眞人の呼吸は足の踵にてなすほど深し (二二) 普通人は喉にて呼吸するゆゑに息切

子之神ヽ勞ニ乎子之精ヽ倚ㇾ樹而吟。據ニ槁梧ー而瞑。天選ニ子之形ー。子以ニ堅白ー鳴。

(一)大宗師

知ニ天之所ㇾ爲。知ニ人之所ㇾ爲者至矣。知ニ天之所ㇾ爲者。天而生也。知ニ人之所ㇾ爲者。以ニ其知之所ㇾ知。以養ニ其知之所ㇾ不ㇾ知。終ニ其天年ー而不ニ中道夭ー者。是知之盛也。雖ㇾ然有ㇾ患。夫知有ㇾ所ㇾ待而後當。其所ㇾ待者特

(二)天の爲す所を知り、人の爲す所を知る者は至れり。(三)天の爲す所を知る者は、天にして生くるなり。(四)人の爲す所を知る者は、其の知の知る所を以て、以て其の知の知らざる所を養ふ。(五)其天年を終へて、而して中道にして夭せざる者は、是れ知の盛なるなり。(六)然りと雖も患あり。(七)夫れ知は待つ所ありて後當る。(八)其の待つ所の者は特に未だ定まらざるなり。(九)庸詎ぞ吾が所謂天の人に非ざるか、所謂人の天に非ざるかを知らんや。(一〇)且つ眞人有つて後眞知有り。何をか眞人と謂ふ。(一一)古の眞人は寡に逆らはず、(一二)成を雄らず、(一三)士を謨らず。然るが若き者は、(一四)過てども悔いず、當れども自ら得たりとせざるなり。(一六)然るが若き者は高きに登つて慄れず、水に入つて濡はず、火に入つて熱せず。(一七)是れ知の能く道に登假するや、此の如し。古の

之人。莊子曰。道與之貌。天與之形。惡得不謂之人。惠子曰。既謂之人。惡得無情。莊子曰。是非吾所謂情也。吾所謂無情者、言人之不以好惡內傷其身。常因自然而不益生也。惠子曰不益生。何以有其身。莊子曰。道與之貌。天與之形。無以好惡內傷其身。今子外乎

之を人と謂ふ、惡んぞ情無きことを得んやと。莊子曰く、是れ吾が所謂情に非ざるなり(四)。吾が所謂情無き者は、人の好惡を以て(五)內、其の身を傷らず、常に自然に因つて、生を益さざるを言ふなりと。惠子曰く、生を益さずんば(六)、何を以て其の身あらんやと。莊子曰く、道之に貌を與へ(七)、天之に形を與ふ、好惡を以て、內其の身を傷ること無からんのみ。今、子は、子の神を外にし(八)、子の精を勞し(九)、樹に倚つて吟じ(一〇)、槁梧に據つて瞑す、天、子の形を選べるに(一一)子は堅白を以て鳴ると。

(一) 貴殿は聖人情無しといはるゝが人は本來情なきものにや (二) 情なければ木石と等し何ぞ之を人といふを得む (三) 人の動作周旋の貌は道之を人に與へ五官百骸の形は天が與へたるもの言動こゝに生じ四肢五體こゝに在り、之を人と謂はざるを得ず (四) それは吾がいふ所の情とは違ふ (五) 外物に對する好惡の情によりて其の身を傷害せず、常に自然に順つて人爲を以て生を助長せざるを情無しといふ (六) 人の身體あるは生を助長しゆくが故なれば生を益すことなくば其の身も無し (七) 前出 (八) 足下の精神をして外物を追はしむ (九) 利害に精根を疲らす (一〇) 樹にもたれて口吟し机によつて瞑想し常に神氣を浪費す (一一) 天は足下の形を選びてせつかく立派なる形貌を授けたるに足下は堅白異同の辯を以て心を勞し世に誇燿す

喪惡用ㇾ德。不ㇾ貨惡用ㇾ商。四者天鬻也。天鬻也者天食也。既受二食於天一。又惡用ㇾ人。有二人之形一。無二人之情一。有二人之形一。故羣二於人一。無二人之情一。故是非不ㇾ得二於身一。眇乎小哉。所三以屬二於人一也。謷乎大哉。獨成二其天一。惠子謂二莊子一曰。人故無ㇾ情乎。莊子曰然。惠子曰。人而無ㇾ情。何以謂二

不具を兼ぬるをもて之を綽名とす (二) 滿足の普通人を見れば反つて其の頸痩せて小さく見えて不具者の如し (三) 頸下に瘤ありて太き瓶の如しといふ意。癭は瘤、これも不具者の名 (四) 德の秀づる所ある時は其の形の不具を忘れて意とせず (五) 世人其忘れて可なる外形を忘れず其の忘る可からざる德を忘る (六) 誠忘といふべきもの (七) 聖人は形以外に神遊して拘らず (八) 知巧をば不靜の孽となす (九) 世上の約束にて無理強ひに人を附着せしむるを膠となす (一〇) 世上の德惠にて人の心を結合するをツギアハセとす (一一) 技藝をば需要に應ずる商賈となす (一二) 聖人は謀みはかることなきゆゑに知巧の要なし (一三) 斷絕することなきゆゑに強ひて約束を以て膠着する要なし (一四) 元より全くして喪ふ所なきゆゑに德惠の要なし (一五) 技藝を賣ることなきゆゑに商賈に從事する要なし (一六) 知約德工天の養ふ所のもの、即ち人の自然に體得すべきもの (一七) 天の與へたる食 (一八) 人爲によらず (一九) 聖人は人並の形はあれども人並の情を備へず (二〇) 是非善惡を超絕して身を累さず (二一) 小なる貌 (二二) 形の小なるは形に於ては人に屬するがゆゑ也 (二三) 大なる貌 (二四) 心の大なるは人並を離れて獨り天道の大を心に成就せり

惠子、莊子に謂つて曰く、(一)人故より情無きかと。莊子曰く、然りと。惠子曰く、(二)人にして情無ければ、何を以てか之を人と謂はんやと。莊子曰く、(三)道之に貌を與へ、天之に形を與ふ、惡んぞ之を人と謂はざることを得んやと。惠子曰く、既に

闉跂支離無脤說衞靈公。靈公說之。而視全人。其脰肩肩。甕㼜大癭說齊桓公。桓公說之。而視全人其脰肩肩。故德有所長。而形有所忘。人不忘其所忘。而忘其所不忘。此謂誠忘。故聖人有所遊。而知爲孼。約爲膠。德爲接。工爲商。聖人不謀惡用知。不斲惡用膠。無

闉跂支離無脤、衞の靈公に說く。靈公之を說ぶ。而して全人を視れば其の脰肩肩たり。甕㼜大癭、齊の桓公に說く。桓公之を說ぶ。而して全人を視れば其の脰肩肩たり。故に德長ずる所有れば、形忘るゝ所有り。人其の忘るべき所を忘れずして、而して其の忘れざるべき所を忘る、此れ誠忘と謂ふ。故に聖人は遊ぶ所有り、而して知を孼と爲し、約を膠と爲し、德を接と爲し、工を商と爲す。聖人は、謀らず、惡んぞ知を用ひん、斲らず、惡んぞ膠を用ひん。喪ふ無し、惡んぞ德を用ひん。貨らず、惡んぞ商を用ひん。四つの者は天鬻なり、天鬻なる者は天食なり。既に食を天に受く、又惡んぞ人を用ひん。人の形有つて、人の情無し。人の形有り、故に人に羣す。人の情無し、故に是非、身に得ず。眇乎として小なる哉、人に屬する所以なり。謷乎として大なる哉、獨り其の天を成せり。

(一) 闉曲りて趾を以て行き踵地につかざるもの。支離は其の身曲僂なるもの、無脤はミツクチ。一人にして以上の

接而生時於心者。是之謂才全。何謂德不形。曰平者水停之盛也。其可以爲法也。內保之而外不蕩也。德者成和之修也。德不形者。物不能離也。哀公異日以告閔子曰。始也吾以南面而君天下。執民之紀。而憂其死。吾自以爲至通矣。今吾聞至人之言。恐吾無其實。輕用吾身。而亡吾國。吾與孔丘。非君臣也。德友而已矣。

を聞いて、（二二）吾が其の實無く、輕ゝしく吾が身を用ひて、而して吾國を亡さんことを恐る吾と。孔丘とは君臣に非ざるなり、（二三）德友のみと。

（一）生存と死亡　（二）困窮と榮達　（三）非謗と賞讃、ひもじきとかわき、寒さと暑さ　（四）世上に於る事物の變化　（五）天命の運行　（六）此の相對現象が日夜眼前に消長交代して止まざれど、固より命の自然なるが故に其の由來する所を計ること能はず　（七）事の變命の行は以てわが德の和を亂すに足らざるもの、又わが靈府たる內部の心に侵入して心の動搖を來すことを得ざるものなり　（八）死生窮達をわが德の和を以て喜び和らげて、活路を與へ心常に悅びを失はず　（九）日夜間なく樂しみ萬物と和ぎて春の如き和氣あり　（一〇）萬物と接觸交涉して萬物に役せられず、駘蕩たる春和の時を心中に生ずるもの　（一一）德が面に現れずとは如何なることにや。哀公の言なり　（一二）孔子曰ふなり　（一三）水平といふは水の停まり溜まる極致をいふ　（一四）物の平直なる標準となし得るは內に充實して外に流動せざるがため　（一五）德とは和を完全に修めて成就するもの　（一六）德の外部に現れざるは物と心と截然と二元に相別れずして、物心は是一如なるが故に物は德と離るゝこと能はず亦德の德として現れざるなり　（一七）名は損、字は子騫、孔子の門人　（一八）天子は北より南に向つて坐す　（一九）綱紀を手に執る、即ち國政を專らにして民の死を憂へあはれむ　（二〇）至德の善事　（二一）孔子をさす　（二二）吾が君主たる實なく、輕ゝしくふるまひて吾が國を亡さんことを恐る　（二三）道德上の友人

葬也。不以翣資。刖者之屨。無爲愛之。皆無其本矣。爲天子之諸御。不爪翦。不穿耳。取妻者止於外。不得復使。形全猶足以爲爾。而況全德之人乎。今哀駘它未言而信。無功而親。使人授己國。唯恐其不受也。是必才全而德不形者也。

哀公曰。何謂才全。仲尼曰。死生存亡。窮達貧富。賢與不肖。毀譽饑渴寒暑。是事之變。命之行也。日夜相代乎前。而知不能規乎其始者也。故不足以滑和。不可入於靈府。使之和豫通而不失於兌。使日夜無郤。而與物爲春。是

哀公曰く、何をか才全しと謂ふやと。仲尼曰く、(一)死生存亡と窮達貧富と、賢と不肖と、(二)毀譽饑渴寒暑とは、(四)是れ事の變にして、(五)命の行はり。(六)日夜前に相代はれども、而かも知も其の始を規ること能はざる者なり。故に以て(七)和を滑るに足らず、靈府に入る可からず。(八)之を和豫して通ぜしめて、而して兌を失はず。(九)日夜郤無からしめて、而して物と春を爲す、是れ(一〇)接りて而して時を心に生ずる者なり。是れ之を才全しと謂ふと。(一一)何をか德、形れずと謂ふやと。(一二)曰く、(一三)平なる者は水停の盛なるなり、其の以て(一四)法と爲すべきは、内之を保ちて而して外蕩せざればなり。(一五)德は成和の修なり、(一六)德の形れざるは、物離るゝこと能はざればなりと。哀公異日以て(一七)閔子に告げて曰く、始めや吾れ(一八)南面して而して天下に君たり、(一九)民の紀を執りて、而して其の死を憂ふるを以て、吾れ自ら以て(二〇)至通と爲せり。今、吾れ(二一)至人の言

辭。寡人醜乎。卒授之國。無幾何也。去寡人而行。寡人卹焉。若有亡也。若無與樂是國也。是何人者也。仲尼曰。丘也嘗使於楚矣。適見㹠子食於其死母者。少焉眴若皆棄之而走。不見己焉爾。不得類焉爾。所愛其母者。非愛其形也。愛使其形者也。戰而死者。其人之

なりと。

(一) 孔子の字 (二) 面貌醜惡の人 (三) 男子此の人と同居するものは (四) 其の醜を忘れ思慕して去る能はず (五) 哀駘它をさす (六) 人に先立つて主張することなく人の言に賛成するのみ (七) 人君たる位置にゐて人の死を救ふ權なし (八) 祿山なる貨財ありて人を食に飽かしむる富もなし (九) 知慧は國の四境以外に聞えず (一〇) かくてもなほ男女が哀氏の側に集るといふは必ず凡人と異なる所なるべし (一一) 諸侯の自稱 (一二) 果して醜貌を以て天下に鳴りひゞけるはどのもの (一三) 私は哀氏の性質を愛するやうになれり (一四) 滿一ケ年 (一五) わが國に執政缺かりし故哀氏に國政を任せんとす (一六) 意に介せざるが如くにして辭退するに似たり (一七) 氣にとめぬ貌 (一八) 自ら醜として愧づ。哀公なほ物欲に囚はるゝ所ある故に哀氏にしかざるを恥づ (一九) 氣がふさいで掌中のものをとられたる如し (二〇) ともに此の國を治むることを樂しむもの無きが如し (二一) 豚の兒が死んでゐる母豚の乳を飲む (二二) 目をしばたゝき驚きて母を棄てゝ去る (二三) 豚の兒が其の死母を棄てしは母が生前の如く、己を見ず又邵かに顧つて己の如く動かざりしが故 (二四) 豚の兒が母を愛するは其の形を愛するにあらで其の形を使ふ精神を愛す (二五) 戰死者の葬式には飾れる翣扇を用ゐることなし (二六) 足斬られし者のクツは足なきものゝクツの如く之を愛すること無し (二七) 以上の二例皆其の本體なきゆゑタヾの飾は役に立たざればなり (二八) 妃嬪 (二九) 耳環をはめず形を傷けんことを怖るゝなり (三〇) 新妻を娶るものは暫く外に止め置きて家事にこきつかはず其の形を全うす (三一) 形體の全きことすら暫く天子の寵幸を得新婚の歡をつくすに足る (三二) しかるに況して徳の全き人に於ては哀駘它の如く人をして思慕せしむ (三三) 人をして己に國政を授けしめたゞ其の辭せざるを懼れしむるほど人望を得 (三四) 天賦の才完全具足し徳内に生じ外にあらはれず

人之死。無三聚祿以望二人之腹一。又以レ惡駭二天下一。和而不レ唱。知不レ出二乎四域一。且而雌雄合二乎前一。是必有下異二乎人一者上也。寡人召而觀レ之。果以レ惡駭二天下一。與二寡人一處。不レ至二以レ月數一。而寡人有レ意二乎其爲一レ人也。不レ至二乎期年一。而寡人信レ之。國無レ宰。而寡人傳レ國焉。悶然而後應。氾而若レ

す。悶然(一六)として而して後に應じ、氾(一七)として而して辭するが若し。寡人醜乎(一八)たり、卒に之に國を授く。幾何も無くして寡人を去つて而して行く。寡人卹焉(一九)として亡ふこと有るが若く、與(二〇)に是の國を樂しむもの無きが若し、是れ何なる人なるぞやと。仲尼曰く、丘や嘗て楚に使す。適〻㹠子(二一)の其の死母に食む者を見る。少焉して眴若(二二)として皆之を棄てて走る。己(二三)を見ざれば爾り、類するを得ざれば爾り。(二四)其の母を愛する所の者は、其の形を愛するに非ざるなり、其の形を使ふ者を愛するなり。(二五)戰つて而して死する者は、其の人の葬や翣を以て資らず。刖者(二六)の屨は之を愛することを爲すこと無し。(二七)皆其の本無ければなり。天子の諸御(二八)と爲れば、爪翦(二九)らず耳を穿たず、(三〇)妻を取る者は外に止めて、復た使ふことを得ず。(三一)形の全きも猶ほ以て爾りと爲すに足れり、(三二)而るを況んや全德の人をや。今、哀駘它未だ言はずして而して信ぜられ、功なくして而して親しまる、(三三)人をして己に國を授けて、唯其の受けざらんことを恐れしむ。是れ必ず才全(三四)うして德形れざる者

彼且レ蘄下以二諔詭幻怪之名一聞上。不レ知三至人之以レ是爲二己桎梏一邪。老聃曰。胡不下直使中彼以二死生一爲二一條一。以二可不可一爲二一貫一者。解中其桎梏上。其可乎。無趾曰。天刑レ之。安可レ解。

が力もて解くことかなはず

魯哀公問二於仲尼一曰。衞有二惡人一焉。曰二哀駘它一。丈夫與レ之處者。思而不レ能レ去也。婦人見レ之。請二於父母一曰。與二人爲一レ妻。寧爲二夫子妾一者。數十而未レ止也。未二嘗有一レ聞二其唱一者也。常和而已矣。無二君レ人之位一以濟二乎

魯の哀公、(一)仲尼に問うて曰く、衞に惡人あり、哀駘它と曰ふ、(二)丈夫の之と處る者、(三)思うて去ること能はざるなり。婦人之を見れば、父母に請うて人に妻たらんよりは、寧ろ(四)夫子の妾たらんと曰ふもの、十數にして未だ止まらざるなり。未だ嘗て其の(五)唱ふるを聞くこと有らず、常に和するのみ。(六)人に君たるの位の、以て人の死を濟ふ無く、(七)聚祿の以て人の腹に望しむる無く、又惡を以て天下を駭かし、和して唱へず、(八)知は四域を出でずして、(九)且つ而かも雌雄前に合ふは、是れ必ず人に異なる者有らんと。(一〇)寡人召して之を觀れば、(一一)果して惡を以て天下を駭かす。寡人と處ること月を以て數ふるに至らずして、而して(一二)寡人其の人と爲りに意有り(一三)期年に至らずして而して寡人之を信ぜり。(一四)國に宰なくして、寡人國を傳へんと

也。夫天無レ不レ覆。地無レ不レ載。吾以二夫子一爲二天地一。安知二夫子之猶若レ是也。孔子曰。丘則陋矣。夫子胡不レ入乎。請講以レ所レ聞。無趾出。孔子曰。弟子勉レ之。夫無趾兀者也。猶務レ學以復二補前行之惡一。而況全德之人乎。無趾語二老聃一曰。孔丘之於至人一。其未邪。彼何賓賓以二學子一爲。

とす。而るを況んや全德(一一)の人をやと。無趾(一二)、老聃(一三)に語つて曰く、孔丘(一四)の至人に於ける其れ未たしか、彼れ何ぞ賓賓(一五)として學子を以てする。彼れ且に諔詭幻怪(一六)の名を以て聞えんことを蘄めんとす。至人(一七)是れを以て己が桎梏と爲すを知らざるかと。老聃曰く、胡ぞ直に(一八)彼の死生を以て一條と爲し、可不可を以て一貫と爲す者をして、其の桎梏を解かしめずして其れ可ならんやと。無趾曰く、天之を刑す(一九)、安んぞ解く可けん。

(一) 叔山は字、足趾無き故に無趾といふ (二) 趾無き故にカヽトにて歩み孔子に目通りす (三) 足趾を斷たるゝの患にかゝる (四) 今吾がもとに來るとも既に遲し (五) 吾たゞわが本分を知らずして輕擧に行動しそのため足を失へり (六) 今吾が夫子を訪ないしは猶は足よりも尊き德と云ふものあれば、之を全うせんと欲すればなり (七) 先生を以て天他の如く頼みとす (八) 先生より是の如く不具者たる故に疎外せらるゝとは意外なり (九) いや自分がわるかつたどうか之へ參られよ (一〇) どうか自分が之まで聞きたることをお話し申さん (一一) 不具者なれど學問して以前の惡しき行ひを補はんとす (一二) 不具ならざる人 (一三) 老子名は聃 (一四) 孔子は道の極致に達したる至人とするにはよほど遠し (一五) 盛に子弟に學を敎ふるは如何なる心ぞ (一六) 怪異非常の名を世に沽らんことを求む (一七) 至人は求名を以て自分を束縛する足枷手枷と見なせるを知らざるにや (一八) 足下は何ぞ直に死生を同一視し是非を混同するを以て孔子の束縛を解かざりしや (一九) 孔子學を攻め名を求む、是天が刑せるものなれば吾

人以其全足。笑吾不全足者衆矣。我弗然而怒。而適先生之所。則廢然而反。不知先生之洗我以善邪。吾與夫子遊十九年矣。而未嘗知吾兀者也。今子與我遊於形骸之內。而子索我於形骸之外。不亦過乎。子產蹵然改容更貌曰。子無乃稱。

外形の上より是非す　(一七)不安の貌　(一八)もはや此の上申されな

魯有兀者叔山無趾。踵見仲尼。仲尼曰。子不謹。前既犯患若是矣。雖今來何及矣。無趾曰。吾唯不知務而輕用吾身。吾是以亡足。今吾來也。猶有尊足者存。吾是以務全之

魯に兀者、(一)叔山無趾あり、(二)踵して仲尼に見ゆ。仲尼曰く、子謹まず、前に既に(三)患を犯すこと是の若し。今來ると雖も、(四)何ぞ及ばんと。無趾曰く、吾れ唯(五)務を知らずして、而して輕しく吾が身を用ひ、吾れ是を以て足を亡へり。(六)今吾が來るは、猶ほ足より尊き者有りて存ずればなり、吾れ是を以て之を全うするを務めんとす。夫れ天は覆はざるなく、地は載せざるなし。吾れ(七)夫子を以て天地と爲す。(八)安んぞ夫子の猶ほ是の若くなるを知らんやと。孔子曰く、(九)丘は則ち陋し、夫子胡ぞ入らざるや、(一〇)請ふ、講ずるに聞く所を以てせんと。無趾出づ。孔子曰く弟子之を勉めよ、夫の無趾は兀者なり、(一一)猶ほ學を務めて以て前行の惡を復補せん

之所取大者先生也。而猶出言若是。不亦過乎。子産曰。子既若是矣。猶與堯爭善。計子之德。不足以自反邪。申徒嘉曰。自狀其過。以不當亡者衆。不狀其過。以不當存者寡。知不可奈何。而安之若命。唯有德者能之。遊於羿之彀中。中央者中地也。然而不中者命也。

形骸(けいがい)の内に遊ぶ、而して子(し)我を形骸(けいがい)の外に索(もと)む。亦過(あやま)たずやと。子産(しさん)(二七)蹵然(しゆくぜん)として容を改め貌(ばう)を更(か)へて曰く、(二八)子(し)乃ち稱(しよう)すること無かれと。

(一) 申徒は姓、嘉は名、鄭の賢人 (二) 罪によりて刖られたるもの (三) 名は僑、鄭の賢大夫 (四) 郭註に曰く、師たるもの丶嘉號なり、伯は長なり、昏は闇なり、德物の長に居て、光をつゝみて晦きがごとく、洞らかに物我を忘る、故に伯昏無人といふと。要するに假想の人物ならむ (五) 子產刑人と同伴せんことを嫌ひてかくいふ (六) 一室に同席す (七) 前日の約を反覆していふ (八) 且そこもとは鄭の執政たる自分と道へども避け讓らざるは執政と同格なりと思はるゝか (九) 伯昏無人の門下に此の如く執政などいふワケヘダテあらんや (一〇) そこもとは執政の官をたのみとして人を侮るもの (一一) 鏡面明かなれば塵埃つかず (一二) 今そこもとの師として學ぶ所のものは先生にして、かゝる賢者と共に處ることとなる故過失なかるべしとおもひしに、猶此の此き言を發せらるゝはまちがひならずや (一三) 既に是の如く不具なるに猶古聖帝堯と善を競はんとす (一四) そこもとの德を考ふるに自ら反省することと能はざるか (一五) 自ら過失を辯解して足を失はざらんとするするものは世に多し (一六) 過失を辯解せずして足を失ふは致方なしとおもふ者は少し (一七) 事の勢如何ともなし難きことを知り安心して運命に從ふことは有德者にのみできること (一八) 古の射をよくせし人 (一九) 弓を張つて射る時矢の前端の當る處 (二〇) 彀中の中央に矢ある時は必ず中る (二一) 足を全うするも全うせざるも天命なるに自分の足の滿足なるを以て吾が足の不具なるを笑ふもの多し (二二) むつとして怒る (二三) 伯昏無人の所にゆけば怒も消えうせ氣ぬけしてかへり來る (二四) 是は先生が善道を以てわが怒りを洗ひ去りしためか (二五) 吾先生の門に遊ぶこと十九年なれども之まで自分の不具者たることを氣にとめられず (二六) そこもとゝ自分と形骸の內なる德に遊ぶにも拘らずそこもとは吾を

席而坐。子產謂二申徒嘉一曰。我先出。則子止。子先出。則我止。今我將レ出。子可二以止一乎。其未邪。且子見二執政一而不レ違。子齊二執政一乎。申徒嘉曰。先生之門。固有二執政一焉如レ此哉。子而說二子之執政一。而後レ人者也。聞レ之曰。鑑明則塵垢不レ止。止則不レ明也。久與二賢人一處。則無レ過。今子

政を說びて、而して人を後にする者なり。之を聞く、曰く、鑑(一一)明かなれば則ち塵垢止まらず、止まれば則ち明らかならざるなり。久しく賢人と處れば、則ち過無しと。(一二)今子の取つて大とする所の者は先生なり、而も猶ほ言を出すこと是の若し、亦過たずやと。子產曰く、(一三)子既に是の若し、猶ほ堯と善を爭はんとす。子の德(一四)を計るに、以て自ら反るに足らざるかと。申徒嘉曰く、(一五)自ら其の過を狀して、亡ふ當からずと以へる者は衆し、其の過(一六)を狀せずして、存す當からずと以へる者は寡し。(一七)奈何ともすべからざるを知つて、而して之に安んじて命に若ふは、唯有德者のみ之を能くす。羿の彀中(一八)(一九)に遊ぶ、(二〇)中央は中るの地なり、然り而して中らざる者は命なり。人(二一)其の足を全うするを以て、吾が足を全うせざるを笑ふ者衆し。我れ怫然(二二)として而して怒る、而かも先生(二三)の所に適けば、則ち廢然として而して返る。知らず、(二四)先生の我を洗ふに善を以てすればか。吾れ(二五)夫子と遊ぶこと十九年にして、而して未だ嘗て吾が兀者なるを知らざるなり。今、(二六)子と我と

要者。而猶若レ是。而況官二天地一府二萬物一直寓二六骸一象二耳目一一二知之所一レ知。而心未二嘗死一者乎。彼且二擇レ日而登一レ假。人則從レ是也。彼且何肯以レ物爲レ事乎。申徒嘉兀者也。而與二鄭子產一同二師於伯昏無人一。子產謂二申徒嘉一曰。我先出。則子止。子先出。則我止。其明日又與合堂同

申徒嘉(一)は兀者(二)なり。而して鄭(三)の子産と同じく伯昏無人(四)を師とす。子産、申徒嘉に謂ひて曰く、我れ先づ出づれば則ち子止まれ、子先づ出づれば則ち我れ止まらんと。其の明日又(五)與に合堂(六)同席して坐す。子産、申徒嘉に謂ひて曰く、(七)我れ先づ出づれば則ち子止まれ、子先づ出づれば則ち我れ止まらんと。今、我れ將に出でんとす、子以て止まる可きか、其れ未だしか。且子(八)、執政を見て違らず、子は執政に齊しきかと。申徒嘉曰く、先生(九)の門固より執政有る焉んぞ此の如からんや(一〇)、子は、子の執

にては松柏のみ獨り正しく冬も夏も變ることなく靑々たり、是草木に於ける常心を得たるもの (五) 命を天より命けたる人間の中にては帝堯帝舜が獨り正しく萬物の主位に立つ、是人間に是ける常心を得たるもの。張君房校本「受二命于天一唯堯舜獨也正在二萬物之首一」に作るに從つて訓ず (六) 自己の生を正して衆人の生を正さんことを希望す (七) 太初の眞性を保有する徵證は外部の事實としては物に懼れざるやうになる (八) 其の勇能く大軍に突入す (九) 名を求めんとして自ら爲す所あるものすら是の是く懼れず (一〇) 天地を奉仕すべき官とす (一一) 萬物を藏庫と見る (一二) 身首四肢の六體を假寓として形體のために勞せず (一三) 耳目の形あるのみにて耳目に心をひかれず (一四) 知の知る所を一に歸して心未だ嘗て死生のために死せざるものに於ては猶更のこと懼れず (一五) 王駘は日ならずして羽化登仙せんとする故に何も敎ふることをなされど人是に從學す (一六) 彼れまた何ぞ物のために沒頭せんや

常季曰。彼爲己。以其知得其心。以其心得其常心。物何爲最之哉。仲尼曰。人莫鑑於流水。而鑑於止水。唯止能止衆止。受命於地。唯松柏獨正。在冬夏青青。受命於天。唯舜獨也正。幸能正生。以正衆生。夫保始之徵。不懼之實。勇士一人。雄入於九軍。將求名而能自

常季曰く、彼れの己(一)を爲むる、其の知を以て其の心を得、其の心を以て其の常心を得、物何爲れぞ之を最とするやと。仲尼曰く、人、流水に鑑みるなくして、(二)而して止水に鑑む。唯止のみ(三)能く衆止を止むればなり。命を地に受くるは、(四)唯松柏獨り正し。冬夏に在りて青青たり。命を天に受くるは、(五)唯堯舜獨り正し。萬物の首に在り。能く生を正して以て(六)衆生を正さんことを幸ふ。夫れ始を保つ(七)の徵は、懼れざるの實なり。勇士一人、雄(八)九軍に入る。將(九)に名を求めんとして、能く自ら要する者すら、猶ほ是の如し。而るを況んや天地を官とし、萬物を府と(一一)し、直ちに六骸(一二)を寓とし、耳目を象(一三)とし、知の知る所(一〇)を一にして、而して心未だ嘗て死せざる者をや。彼れ且に日を擇んで登假(一四)せんとし、人則ち是に從ふなり。(一五)彼れ且た何ぞ肯へて物を以て事とせんやと。(一六)

(一)王駘の己を修むる方法は其の知を以て究めて心の眞相を悟り得、又其の心を以て物と與に遷らざる恆常の心を悟り得たるものなるが、如何にして之を優れたりとするにや　(二)流水の面に水鏡せずして止まれる水面に水鏡す　(三)流水は喧動遷せる心止れば寂然不動の常心、唯常心のみ衆人の常心を得しむ　(四)命を地より受けたる樹木中

然者其用レ心。獨若二之何一。仲尼曰。死生亦大矣。而不レ得二與レ之變一。雖二天地覆墜一。亦將不二與レ之遺一。審乎無レ假。而不二與レ物遷一。命二物之化一而守二其宗一也。常季曰。何謂也。仲尼曰。自二其異者一視レ之。肝膽楚越也。自二其同者一視レ之。萬物皆一也。夫若レ然者。且不レ知二耳目之所レ宜。而遊二心乎德之和一。物視二其所レ一。而不レ見二其所レ喪。視レ喪二其足一。猶レ遺レ土也。

是非のために神を外にし精を勞する時は德全からずして形亦適ならざる所以を覺す (二) 罪を以て趾を切られたるもの (三) 王駘に從遊するもの孔子の弟子と其數同じ (四) 魯の賢人 (五) 先生と魯を二分す (六) 漫然と立つてゐるだけにて弟子を教へず坐してゐるだけにて議論もせざれど、從つて遊ぶものは始め往く時腹中更に無一物なれど歸り來る時には得る所あり (七) これは無言口舌に上らざる教を施せしものなんか彼は形は不具なれど心德は完全なるものか (八) 王駘を斥す (九) 丘は孔子の字自分も從遊したき念願なれど後れて未だ往かず (一〇) 何ぞ只魯國の衆のみ弟子となるのみならんや (一一) 彼は刑餘の足無し男なるに人尊みて王先生と貴す (一二) 常人と異なること遠し (一三) 彼の如きものは平素心を用ふること如何にせしものにや (一四) 死生は人生の一大事なれど王氏の德は之を超越し居るを以て死生とともに變ぜず (一五) 其の德萬物を超越し居るを以て天地覆りおつと雖も之と與に落つることなし (一六) 物に假ることなきもの、即ち眞の道を明に體現して物と與に變遷せず (一七) 物の變化を天命として自然に依存し道の大本を守る (一八) 魯の賢人 (一九) 相對差別の見地より見る時は腹中に坐位する肝と膽とも楚と越との如く相隔絶す (二〇) 絶對無差別の見地より見れば萬物は皆渾然として一に歸す (二一) 王駘の克く斯の如くなるは耳に聲を聞きても心之を接せず目に色を見ても心之に接せず (二二) 心を德の至美至樂なる境に優游せしむ (二三) 萬物凡て同一なる所に目をつけて差別的得喪に目をつけず (二四) 足を失ふを視ること土を棄つるが如く見て意に介せず

者也從之遊者。與夫子中分魯。立不教。坐不議。虛而往。實而歸。固有不言之教。無形而心成者邪。是何人也。仲尼曰。夫子聖人也。丘也。直後而未往耳。丘將以爲師。而況不若丘者乎。奚假魯國。丘將引天下而與從之。常季曰。彼兀者也。而王先生。其與庸亦遠矣。若

成れる者か。是れ何人ぞやと。仲尼曰く、(八)夫子は聖人なり。(九)丘や直に後れて未だ往かざるのみ。丘將に以て師とせんとす。而るを況んや丘に若かざる者をや。(一〇)奚ぞ假魯國のみならん。丘將に天下を引いて、與に之に從はんとすと。常季の曰く、彼は(一一)兀者なり。而るに王先生たり。其れ(一二)庸と亦遠し。(一三)然るが若き者は、其の心を用ふるや、獨り之を若何んと。仲尼曰く、(一四)死生も亦大なり。而して之と變ずるを得ず。(一五)天地覆墜すと雖も、亦將に之と遺ちざらんとす。(一六)無假を審にして、物と遷らず。(一七)物の化を命として、其の宗を守るものなり。(一八)常季曰く、何の謂ぞや。仲尼曰く、(一九)其の異なる者よりして之を視れば、肝膽も楚越なり。(二〇)其の同じきものよりして之を視れば、萬物皆一なり。(二一)夫の然るが若き者は、且た耳目の宜き所を知らずして、而して心を德の和に遊ばしむ。(二二)物其の一とする所を視て、而して其の喪ふ所を見ず。(二三)其の足を喪ふを視ること、猶ほ土を遺すが如しと。

(一) 此の篇本然の德を喪はずして自己方寸の間に完全具足するときは形の具はらざるは嫌むに足らざるを說き好個

畫レ地而趨。迷陽迷陽無レ傷二吾行一。吾行卻曲。無レ傷二吾足一。山木自寇也。膏火自煎也。桂可レ食故伐之。漆可レ用故割之。人皆知二有用之用一。而莫レ知二無用之用一也。

道行はるゝば聖人世に立ちて功を成す （五） 道行はれざらば聖人隱れて生を完うす （六） 現代に於ては僅に刑せらるゝことなきを幸とすべきのみ （七） 生を完うし刑を免るゝ至福は羽毛の如く輕くして之を受くるに造作なけれど今人は福を受くることを知らず （八） 刑罰にふるゝ禍難は大地より重くして恐るべきものなるに今人は之を避くることを知らず （九） 人に對するに賢德を以てし聖人ぶることは止めたがよろし （一〇） 地を區ぎりして趨る如く禮法に拘束せらるゝは危し （一一） 草の名、困學紀聞に曰く胡明仲曰く、荊楚に草あり叢生して條ながし野人呼びて迷陽とす其の膚に刺多しと （一二） 刺ある迷陽も吾が行くを傷くることなし （一三） 吾が行くは直行せずして曲折してゆくを以てわが足を傷くることなし （一四） 山の樹木が能あるために斫伐せらるゝは自分で自分を害ふといふもの （一五） 油火が能あるために燈火とせらるゝは自分で自分を燒くといふもの （一六） 肉桂は辛味あり食用となる故に伐られ漆はツヤありて用をなすゆゑに幹を割きて傷くるなり （一七） 人皆有用の相對用のみを知りて無用の絕對用を知らず

魯有二兀者王駘一。從レ之遊者。與二仲尼一相若。常季問二於仲尼一曰。王駘兀

德充符（一）

魯に兀者（二）王駘あり、（三）之に從うて遊ぶ者、仲尼と相若く。（四）常季、仲尼に問うて曰く、王駘は兀者なり。之に從ひて遊ぶ者、（五）夫子と魯を中分す。（六）立ちて教へず、坐して議せず。虛にして往き、實にして歸る。（七）固より不言の教あり、形なくして心

其身一終其天年一又況支離其德一者乎。

孔子適楚。楚狂接輿遊其門一曰。鳳兮鳳兮。何如德之衰也。來世不可待。往世不可追也。天下有道。聖人成焉。天下無道。聖人生焉。方今之時僅免刑焉。福輕乎羽一莫之知載。禍重乎地一莫之知避。已乎已乎。臨人以德。殆乎殆乎

む時には三鍾十九斛二斗の米と十束の薪とを受く　(一一)形體上の不具者も其身を養ひ、天壽を完うするぐらゐなれば況して其の德を不具にして無用にするときは自然の生を完うすることいふまでもなし

孔子楚に適く。楚の狂接輿、(一)其の門に遊ぶ。曰く、(二)鳳や鳳や、何如ぞ德の衰へたるや。(三)來世は待つ可らず、往世は追ふ可らざるなり。(四)天下道あれば、聖人成す。(五)天下道なければ聖人生く。(六)今の時に方りては、僅に刑を免れんのみ。(七)福は羽よりも輕し、之を載ぐるを知る莫し。(八)禍は地よりも重し。之を避くるを知る莫し。(九)已なんか、已みなんか、人に臨むに德を以てす。(一〇)殆いかな、殆いかな。地を畫して而して趨る。(一一)迷陽、迷陽。(一二)吾が行くを傷ふ無し。(一三)吾が行くは卻曲す、吾が足を傷ふ無し。(一四)山木は自ら寇するなり。(一五)膏火は自ら煎るなり。(一六)桂は食ふ可し、故に伐らる。漆は用ふべし、故に割かる。(一七)人皆有用の用を知りて、無用の用を知る莫きなり。

(一)門下に徘遊す　(二)鳳は聖人なれば世に道ある時に出づべきに今道なき時に出づれば德衰へたりといふ、孔子に譬へいふ　(三)未來を期待せんとするも得べからず過去を追慕するも既に逝ければ追ふ可からず　(四)天下に

者。不レ可ニ以 適レ河。此皆巫祝以知レ之矣。所以爲ニ不祥一也。此乃神人之所三以爲ニ大祥一也。

支離疏者。頤隱ニ於齊一。肩高ニ於頂一。會撮指レ天。五管在レ上。兩髀爲レ脇。挫鍼治繲。足ニ以餬レ口。鼓レ筴播レ精。足三以食ニ十人一。上徴ニ武士一。則支離攘ニ臂於其間一。上有ニ大役一。則支離以レ有ニ常疾一不レ受レ功。上與ニ病者粟一。則受ニ三鍾與ニ十束薪一。夫支ニ離其形一者。猶足下以養ニ

(一)支離疏なる者、(二)頤、齊を隱し、肩は頂より高く、(三)會撮は天を指す。(四)五管は上に在り。(五)兩髀脇と爲る。(六)挫鍼と治繲と、以て口を餬するに足る。(七)筴を鼓し精を播する。以て十人を食ふに足る。(八)上、武士を徴すれば、則ち支離、臂を其の間に攘ぐ。(九)上、大役あれば、則ち支離は常疾あるを以て、功を受けず。(一〇)上、病者に粟を與ふれば、則ち三鍾と十束の薪とを受く。(一一)夫れ其の形に支離なる者、猶ほ以て其の身を養うて其の天年を終ふるに足る。又況んや其の德を支離にする者をや。

(一) セムシの人の名は疏といふもの (二) オトガヒ垂れて臍をかくす (三) 頭後のモトドリは垂直に立つ (四) 頭が胸腔より低き故に五臓は反つて頭より上にあり (五) 兩方の足の股が肋骨部となるほど頭部と足部と接觸す (六) 裁縫と洗濯とを以て口スギとすることを得 (七) 箕をふるひて米と糠とをふるひ分くることを業とする時は一家十人を扶養することを得 (八) 政府に於て募兵する時は支離は不具たる故徴募せらるゝ患もなく腕をまくりて大勢の中に威張る (九) 政府に大工事ある時は支離は持病ある故に課役を受けず (一〇) 然れど政府より病者に粟米を惠

狂醒三日而不已。子綦曰。此果不材之木也。以至於此其大也。嗟乎神人以此不材。

宋有荊氏者。宜楸柏桑。其拱把而上者。求狙猴之杙者斬之。三圍四圍。求高名之麗者斬之。七圍八圍。貴人富商之家。求樿旁者斬之。故未終其天年。而中道之夭於斧斤。此才之患也。故解之以牛之白顙者。與豚之亢鼻者。與人有痔病

(一)宋に荊氏といふ者あり、(二)楸、柏、桑に宜し。(三)其の拱把より上なる者は、狙猴の杙を求むる者之を斬る。(四)三圍四圍は高名の麗を求むる者之を斬る。(五)七圍八圍は貴人富商の家の樿旁を求むる者之を斬る。(六)故に未だ其の天年を終へずして、中道にして斧斤に夭せらるゝは、此れ才の患なり。(七)故に之を解するに牛の白顙の者と、豚の亢鼻の者と、人の痔病ある者とを以ては、以て河に適く可らず。(八)此れ皆巫祝以て之を知る。所以に不祥と爲すなり。(九)此れ乃ち神人の大祥となす所以なり。

(一)戰國時代の國名　(二)荊氏の地にはカシハ、クハ等がよく生育す　(三)其の木の兩手にて一二ギリになる以上のものは猿の止まり木を求むるものが斬り取る、拱は一カカヘなれど此處は上の如く解すべし　(四)三カカヘ四カカヘあるものは富家の梁棟を求むるものが斬取る　(五)七カカヘ八カカヘある木は貴人富商の棺のへりの一枚板を求むる者が斬取る　(六)天壽を完うせずして半途に斧に斬らるゝは其の材が用をなすため　(七)河神を祓ひ祭るに牛の額白きもの豚の鼻の上向きたるもの人の痔疾を病むものは河神の犧牲となしがたし　(八)ミコ、カンナギは此のことを知れば此等の三者を不祥とす　(九)巫祝は不祥となせど無用を以て生を完うするを以て大なる吉事となす

其相物也。而幾死之散人。又惡知二散木一。匠石覺而診二其夢一。弟子曰。趣レ取レ無レ用。則爲レ社何邪。曰密。若無レ言。彼亦直寄焉。以下爲二不レ知レ己者一詬厲上也。不レ爲レ社者。且幾有レ翦乎。且也彼其所レ保與レ衆異。而以レ義譽レ之。不二亦遠一乎。

南伯子綦游二乎商之丘一。見二大木一焉。有レ異。結駟千乘。隱將レ芘二其所一レ藾。子綦曰。此何木也哉。此必有二異材一夫。仰而視二其細枝一。則拳曲而不レ可三以爲二棟梁一。俯而視二其大根一。則軸解而不レ可三以爲二棺槨一。咶二其葉一則口爛而爲レ傷。嗅レ之則使二人

南伯子綦(一)、商(二)の丘に遊びて、大木を見る。異なる有り。結駟(三)千乘、隱れて其の藾する所に芘はれんとす。子綦曰く、此れ何の木なりや。此は必ず異材ならん(四)と。仰いで而して其の細枝を視れば、則ち拳曲にして、以て棟梁と爲す可からず。俯して而して其の大根を視れば、則ち軸解(五)にして、以て棺槨と爲す可から(六)ず。其の葉を咶めば、則ち口爛れて傷を爲す。之を嗅げば、則ち人をして狂酲(七)三日にして已まざらしむ。子綦曰く、此れ果して不材の木なり(八)。以て此の其の大なるに至れるなり。嗟乎神人は此の不材を以てすと(九)。

(一) 伯は長の意にして物に長たるに足る意、卽ち南郭子綦なりといふ (二) 地名 (三) 四馬を乘とす、卽ち四千の馬を連結するなり (四) 普通ならざる材なるべし (五) 拳を曲げたる如く屈曲して家屋の棟や梁の材とすべからず (六) 大なる根本の方を見れば車輻の間隙の如く樞心空虛 (七) 其の葉を嗅げば酒に宿醉せし如くフラフラすること三日になるも治せず (八) 役に立たぬ材木なるが故にかく巨大になれるなり (九) さてもさても達人は此の不材の術を用ふるものなり、樹、不材ならば伐られず、人、下材ならば生を全うす

木邪。夫柤梨橘柚果蓏之屬。實熟則剝。剝則辱。大枝折。小枝泄。此以其能苦其生者也。故不終其天年而中道夭。自掊擊於世俗者也。物莫不若是。且予求無所可用久矣。幾死乃今得之。爲予大用。使予也而有用。且得有此大也邪。且也若與予也皆物也。奈何哉

を譽めば亦遠からずやと。

（一）人名、大工の棟梁　（二）地名　（三）クヌギを以て土神をまつれるもの　（四）其の枝の大さ牛が幹の後にかくれて見えざるほど　（五）一抱へを圍といふ　（六）其の高さは山の上に挺立すること十仞に及んで始めて枝あり、仞は八尺　（七）丸木舟を造るべきほどの大枝が周圍に十數本も出づ　（八）樹を見物するもの市の如く群る　（九）匠石は此の大樹を顧みすしてズンズン行く　（一〇）弟子だちは十分に樹を見物して後走りて匠石に追ひつく　（一一）斧斤は共にオノ、即ち大工の道具をとつて先生にしたがつてより以來かくの如くりつぱなる材木を見ず　（一二）無用の木　（一三）棺は内にして槨は外、屍を斂むるコシ　（一四）扉とすれば樹脂流れ出づ　（一五）無用の惡木なるが故に斧斤を見れ漸く長壽を保ち能ふ　（一六）櫟社の大樹匠石の夢中に現る　（一七）匠石汝は予を如何なる木に比較せんとするや　（一八）美しき木　（一九）果樹の名　（二〇）瓜の類　（二一）大枝は折り取られ小枝は折られて生氣を泄らさる　（二二）これは有用の能あるを以て自分の生を苦しむるものなり　（二三）天壽を全うせずして半途に夭死するは自ら招きて世俗に打たるゝが故　（二四）無用の材たらんことを望むこと久し　（二五）殆ど伐採されんとする危機に瀕することありしも今自分の望み通りになりて無用にして生を全うす即ち是大用たり　（二六）予若し有用の材なりしならば斯の如く大なること能はざらん　（二七）汝と予とは樹木と人間とに別るれど要するに何れも物たるにすぎざれば何ぞ互に對者を物として則ち見るを得んや　（二八）予より之を觀れば汝に是殆ど死に近き無用の人なり然るに如何ぞ無用の木の知て大用たる所以を知らんや　（二九）占上　（三〇）世に用無きを求むるに急にてありながら、櫟樹が社神となれるは何の心ぞ　（三一）櫟は唯社に寄托するまでにて此は己を知らざるものゝために無用の大木たるを罵辱せらるゝを以てしかせるまでなり　（三二）設し櫟樹は社神とならずとも豈斫伐せらるゝことあらんや　（三三）櫟樹の抱守する所の操守衆俗と異なる所あれば汝社を以て之を譽むるはいよ〳〵大木の意に違し

斤以隨夫子。未嘗見材如此其美也。先生不肯視。行不輟何邪。曰已矣。勿言之矣。散木也。以爲舟則沈。以爲棺槨則速腐。以爲器則速毀。以爲門戶則液樠。以爲柱則蠹。是不材木也。無所可用。故能若是之壽。匠石歸。櫟社見夢曰。女將惡乎比予哉。若將比予於文

なり。用ふべき所なし。故に能く是の若きの壽ありと。匠石歸る。櫟社夢に見えて曰く、女、將に惡んか予を比せんとするや。若將に予を文木に比するや。夫れ柤、梨、橘、柚、果蓏の屬、實熟すれば則ち剝がれ、剝がるれば則ち辱しめらる。大枝は折られ、小枝は泄らさる。此れ其の能を以て、其の生を苦しむものなり。故に其の天年を終へずして中道に夭するは、自ら世俗に掊擊せらるゝものなり。物として是の如くならざる莫し。且予用ふべき所なきを求むる久し。死に幾くして、乃ち今之を得て、予が大用を爲せり。予をして用あらしめば、且此の大あるを得んや。且也若と予と皆物なり。奈何ぞ、其れ相物とせんや。而、死に幾きの散人又惡んぞ散木を知らんと。匠石覺めて其の夢を診す。弟子曰く、用なきを取るに趣げるに、則ち社たるは何ぞやと。曰く、密にせよ。若は言ふ無れ。彼亦直ゝ焉に寄す。己を知らざる者の爲に詬厲せらるゝを以てなり。社と爲らざる者も、且幾んど剪らるゝ有らんや。且や彼れ其の保つ所衆と異なり、而して義を以て之

夫愛レ馬者。以レ筐盛レ矢。以レ蜃盛レ溺。適有ニ蚊虻僕緣一。而拊レ之不レ時。缺レ銜毀レ首碎レ胸。意有レ所レ至。而愛有レ所レ亡。可レ不レ愼邪。

馴び従ふは自然であり怒りて飼養主を殺すは不自然なり（九）筐の中に馬糞を入れ大蛤の殼にて作れる便器に溺水を入るゝほど馬を愛す（一〇）たまたま蚊や虻が馬に群りつきたるとき時を見はからず不意に拊つ時は馬驚きてクツワを損じ首を傷け胸を折きて蚊虻の害す以上の大損害を生ず（一一）愛するの意は行届かざるにあらざれど手段を誤れるが故に愛の實を亡失することあり

匠石之レ齊。至ニ乎曲轅一。見ニ櫟社樹一。其大蔽レ牛。絜レ之百圍。其高臨レ山十仞。而後有レ枝。其可ニ以爲一レ舟者旁十數。觀者如レ市。匠石不レ顧。遂行不レ輟。弟子厭觀レ之。走及ニ匠石一曰。自ニ吾執ニ斧

（一）匠石齊に之き、（二）曲轅に至りて、（三）櫟社の樹を見る、（四）其の大さ牛を蔽ふ。之を絜るに（五）百圍あり。（六）其の高さ山に臨むこと十仞にして而して後枝あり、（七）其の以て舟と爲すべきもの旁に十數。（八）觀る者市の如し。（九）匠石顧みず、遂に行きて輟まず。（一〇）弟子厭くまで之を觀て、走りて匠石に及ぶ。曰く、（一一）吾、斧斤を執りて、以て夫子に隨ひてより、未だ嘗て材の此の如く其れ美なるを見ざるなり。先生肯て視ず、行きて輟まざるは何ぞやと。曰く、已めよ、之れを言ふ勿れ、（一二）散木なり。以て舟と爲せば則ち沈み、以て（一三）棺槨と爲せば則ち速に腐れ、以て器と爲せば、則ち速に毀れ、以て（一四）門戸と爲せど則ち液樠す。以て柱とすれば、則ち蠹む。（一五）是れ不材の木

蜋一乎。怒二其臂一以當二車轍一。不レ知二其不一レ勝レ任也。是二其才之美一者也。戒レ之愼レ之。積二伐而美者一以犯レ之。幾矣。女不レ知二夫養レ虎者一乎。不下敢以二生物一與上レ之。爲二其殺レ之之怒一也。不下敢以二全物一與上レ之。爲二其決レ之之怒一也。時二其饑飽一。達二其怒心一。虎之與レ人異レ類。而媚二養レ己者一順也。故其殺者逆也。

へざるを知らざるなり。其の才の美を是とする者なり。(三)之を戒め之を愼めよ。而が美なる者を積伐して、以て之を犯せば、幾し。(四)女は夫の虎を養ふものを知らざるか。敢へて生物を以て之に與へざるは、其の之を殺すに怒るが爲なり。(五)敢へて全物を以て之に與へざるは、其の之を決くに怒るが爲なり。(六)其の饑飽を時にし(七)其の怒心を達す。虎の人と類を異にするも、己を養ふ者に媚ぶるは順なり。故に其の殺すものは逆なり。(八)夫の馬を愛する者、筐を以て矢を盛り、(九)蜃を以て溺を盛る。適ま蚊虻の僕緣するありて、之を拊つに時ならざれば、則ち銜を缺き、首を毀ち、胸を碎く。(一〇)意、至る所ありて、而して愛、亡ふ所あり、愼まざる可んや(一一)と。

(一) カマキリ蟲 (二) カマキリ蟲が其の腕をふりあげて旋り來る車輪に立ち向ふは自己の分を知らざるもの (三) 其の身の才能の美をほこる者なり (四) 汝の才能の美にほこりて太子の威を犯して直諫せば身殆し (五) 生物を虎に與へざる理由は虎が其の生物を殺すために怒るをおそるゝ故なり (六) マルのものを與へざるは虎が之を割き食ふために怒るをおそるゝ故なり (七) 虎の空腹と滿腹とをうまく調節して怒心を殺ぐ (八) 自分を飼養するものに

愼之。正女身哉。形莫若就。心莫若和。雖然。之二者有患。就不欲入。和不欲出。形就而入。且爲顚爲滅爲崩爲蹶。心和而出。且爲聲爲名爲妖爲孽。彼且爲嬰兒。亦與之爲嬰兒。彼且爲無町畦。亦與之爲無町畦。彼且爲無崖。亦與之爲無崖。達之入於無疵。

亦之と無町畦たれ。(一九)彼、且に無崖たらんとせば、亦之と無崖たれ。(二〇)之を達して、無疵に入れよ。

(一) 姓は顔、名は闔、魯の賢人なり (二) 名は蒯聵 (三) 太子の傅育官 (四) 名は瑗、伯玉は其の字、衛の賢大夫 (五) 天賦の徳性うすし、太子を指す (六) 正しき規矩無く、放縦のまゝにせば吾國を危くす (七) 規諫して方正にならんとせば吾身に禍を受く (八) 太子の知は人の過失を知るに十分なれども己れの過失ある點を知らず (九) 斯の如き人物は如何せばよからん (一〇) 足下の身を戒め慎み先づ自分の身を正しくして隙を見せず彼をして犯すこと能はざらしめよ (一一) 外部の形に於ては太子の意のまゝに従ふ如くふるまふがよろしく内部の心中に於ては和を守つて太子を美に導くがよろし (一二) 就くも和するも共に弊害あり (一三) 外形に於て太子に従ふも之に牽かされて惡道に入るは好ましからず (一四) 心中和を守るも之を外面に暴露するはよからず (一五) 我自身も顛覆し、滅亡し、崩壊し、破滅するならん (一六) 外聞の評判名譽となり、従つて物のアヤカシを生じ禍を生ぜん (一七) 太子若し頑白小僧の如きしわざをなす時は自分も共に頑白小僧となれ (一八) 太子若し放埒な所業をなさんとせば自分も共に放埒となれ (一九) 太子若し検束なくダラシナキことをなさんとせば自分もダラシナクふるまへ (二〇) 極端まで到達して後過失なき方に引入れよ

女不知夫螳蜋

女は夫の螳蜋を知らざるか。(二一)其の臂を怒らして、(二二)以て車轍に當る、其の任に勝

久。惡成不ㇾ及ㇾ改。可ㇾ不ㇾ愼與。且夫乘ㇾ物以遊ㇾ心。託ㇾ不ㇾ得ㇾ已。以養ㇾ中至矣。何作爲報也。莫ㇾ若ㇾ爲ㇾ致ㇾ命。此其難者。

及なき中道を守る　（一九）何事も人爲的に作りまうけて君父に報ずることをなさんや　（二〇）私心作爲することなく自然の命ずるまゝに行ふが一ばんよろし

顏闔將ㇾ傅ニ衞靈公太子一。而問ニ於蘧伯玉一。曰。有ㇾ人ニ於此一。其德天殺。與ㇾ之爲ニ無方一。則危ニ吾國一。與ㇾ之爲ニ有方一。則危ニ吾身一。其知適足ニ以知ニ人之過一。而不ㇾ知ニ其所ニ以過一。若ㇾ然者吾奈ㇾ之何。蘧伯玉曰。善哉問乎。戒之

顏闔（一）、將に衞の靈公の太子（二）に傅たらんとして（三）、蘧伯玉（四）に問うて曰く、此に人あり。其の德天殺（五）なり。之と無方（六）をなせば、則ち吾が國を危くし、之と有方（七）をなせば、則ち吾が身を危くす。其の知適に以て人の過を知るに足れども、而かも其の過つ所以を知らず。然る若き者（八）は、吾れ之を奈何せんと。蘧伯玉曰く、善い哉問や（一〇）。戒め、愼み、女（九）の身を正せよや。形（一一）は就くに若くは莫く、心は和するに若くは莫し。然りと雖も之の二つ（一二）の者も患あり（一三）。就くも入るを欲せず、和（一四）するも出づるを欲せず。形就いて而して入らば且に顚たり（一五）、滅たり、崩たり、蹶たらんとす。心和して而して出づれば、且に聲たり（一六）、名たり、妖たり、孽たらんとす。彼（一七）、且に嬰兒たらんとせば亦之と嬰兒たれ。彼、且に無町畦（一八）たらんとせば、

巨。言者風波也、行者實喪也。夫風波易以動、實喪易以危。故忿設無由、巧言偏辭。獸死不擇音。氣息茀然。於是並生心厲。剋核太至、則必有不肖之心應之。而不知其然也。苟為不知其然也、孰知其所終。故法言曰、無遷令、無勸成。過度益也。遷令勸成殆事。美成在

に若くは莫し。此れ其の難き者なり。

（一）自分の承り居ることをお話し申さう（二）親しみ近きものは信實を以て相從うて疑はず（三）親しみ遠けれは言を加へて信實を表明す（四）言は互の心に疏通するものにあらで之を相傳ふるものあることを要す（五）當方と先方と共に喜ぶ言と共に怒る言とを傳ふるは最も難し、卽ち一方喜べば一方怒り一方怒れば一方喜ぶ（六）双方共に喜ぶ言にははめ過ぎる言多く双方共に怒る言には惡しく言ひ過ぎの言多し（七）過大の言は虛妄なり（八）信ずるもの難きときは言を傳ふる使者は禍にかゝる（九）古書の名（一〇）ありのまゝの實を傳へて過大の言をなさゞるときは禍無し（一一）手練の巧妙を以て互に角觝するものは始めのほどは陽氣なる快樂氣分なれど終りは常に陰氣になる（一二）興甚だ深くなれば多くの度に過ぎたる祕術をつくし却つて快樂たるの興味を失ふが故なり（一三）禮儀を正して飮宴するものは始めは整然として居れど終りは亂雜となる（一四）樂しみ度に過ぐるゆゑなり（一五）始めは信實をつくせども常に終りは疎遠薄情となるもの（一六）最初の注意が疎略ならば其の終結となると必ず大事となる（一七）言は波に風の加はれるが如く動きやすきもの、行爲は內心の信實を失ひ易し（一八）人の憤るは他に理由なし信實ならざる巧みな言と正しからざる一邊の言による（一九）獸の死せんとするときは好音を擇び鳴くひまなくして息づかひ亂りがはし（二〇）前の如き言を耳にするときは双方に忿怒の念を生ず（二一）人を責むることと過酷なるときは對手は惡心、怒して之に報じ怒りうらむ（二二）對手が惡心を起せるに氣がつかず（二三）對手の惡心一度起るときは其の果がわからざるべし（二四）君の命令を傳ふるに其を改め傳ふるは言の過ぐるなり（二五）自然と成るを待たで成ることを勸むるは行の過ぐるなり（二六）能緣のこと（二七）美の成立は久しき時間を要し惡の成立せるものは改め難し（二八）物のなりゆきに隨ひて心を逍遙自適の境に遊ばし止むを得ざる自然に任せて適不

兩怒必多溢惡之言。凡溢之類妄。妄則其　之也莫。莫則傳言者殃。故法言曰。傳其常情。無傳其溢言。則幾乎全。且以巧鬪力者。始乎陽。常卒乎陰。太至多奇巧。以禮飮酒者。始乎治。常卒乎亂。太至則多奇樂。凡事亦然。始乎諒。常卒乎鄙。其作始也簡。其將畢也必

陽に始まり、常に陰に卒る。(一二)太だ至れば則ち奇巧多ければなり。(一三)禮を以て酒を飮む者は、治に始まり、常に亂に卒る。太だ至れば則ち(一四)奇樂多ければなり。凡そ事も亦然り。(一五)諒に始まりて常に鄙に卒る。(一六)其の始めを作すや簡なれば、其の將に畢らんとするや必ず巨なり。(一七)言は風波なり、行は實喪なり。夫れ風波は以て動き易く、實喪は以て危かり易し。故に(一八)忿の設るは由なし。巧言偏辭なり。(一九)獸、死せんとするとき音を擇ばず。氣息茀然たり。(二〇)是に於て並に心厲を生ず。(二一)剋核太だ至れば、則ち必ず不肖の心ありて之に應じて、而して其の然るを知らざるなり。(二二)苟くも其の然るを知らずと爲さば、(二三)孰れか其の終る所を知らん。故に法言に曰く、(二四)令を遷す無れ。(二五)成るを勸むる無れと。度を過ぐるは益なり。令を遷し、成るを勸むるは(二六)殆事なり。(二七)美の成るは久しきに在り、惡の成れるは改むるに及ばず。愼まざる可けんや。且夫れ(二八)物に乘じて以て心を遊ばしめ、已むを得ざるに託して、以て中を養はば至れり。(二九)何をか作爲して報ぜんや。(三〇)命を致すを爲す

之事レ君義也。無二適而非一レ君也。無レ所レ逃二於天地之間一。是之謂二大戒一。是以夫事二其親一者。不レ擇レ地而安レ之。孝之至也。夫事二其君一者。不レ擇レ事而安レ之。忠之盛也。自事二其心一者。哀樂不レ易二施乎前一。知二其不レ可二奈何一。而安レ之若レ命。德之至也。爲二人臣子一者。固有レ所レ不レ得レ已。行二事之情一。而忘二其身一。何暇レ至二於悅レ生而惡レ死。夫子其行可矣。

るゝところなし　(一九)　親に仕ふるものは順逆の境遇を擇ばずして安んじ處る　(二〇)　事の難易を擇ばずして之を安んじ爲す　(二一)　自ら自己の心を主とし之に事ふるものは順逆難易によりて哀樂を加へず　(二二)　奈何ともすべからざる天命を知りて之に安んじ處り天命にしたがふは德の極致　(二三)　人の臣たり子たるものは愛を心に解かず義を逃れずして已むを得ざる所あり　(二四)　事の實を行うて其の身の如何を顧みず　(二五)　先生も齊國にゆかるゝがよろしからん

丘請復以レ所レ聞。凡交近則必相靡以レ信。遠則必忠レ之以レ言。言必或レ傳レ之。夫傳二兩喜兩怒之言一。天下之難者也。夫兩喜必多二溢美之言一。

丘請ふ、復(一)た聞く所を以てせん。凡そ交り近ければ則ち必ず相靡ふに信を以てし、遠(二)ければ則ち必ず之を忠にするに言(三)を以てす。(四)言は必ず之を傳ふるあり。夫れ兩喜兩怒(五)の言を傳ふるは、天下の難き者なり。夫れ兩喜(六)は必ず溢美の言多く、兩怒は必ず溢惡の言多し。凡そ溢(七)の類は妄なり。妄なれば則ち其の之を信ずるや莫し。莫(八)ければ則ち言を傳ふる者殃あり。故に法言(九)に曰く、其の常情(一〇)を傳へて、其の溢言を傳ふる無ければ、則ち全きに幾しと。且つ巧(一一)を以て力を鬭はす者は、

食也執粗而不臧。爨無欲清之人。今吾朝受命。而夕飲氷。我其內熱與。吾未至乎事之情。而既有陰陽之患矣。事若不成。必有人道之患。是兩也。爲人臣者。不足以任之。子其有以語我來。仲尼曰。天下有大戒二。其一命也。其一義也。子之愛親命也。不可解於心。臣

れ大戒と謂ふ。是を以て夫の其の親に(一九)事ふる者は、地を擇ばずして之に安んず、孝の至りなり。夫の其の君に事ふる者は、(二〇)事を擇ばずして之に安んず、忠の盛なるなり。(二一)自ら其の心に事ふる者は、哀樂前に易はり施さず。其の奈何ともすべ(二二)からざるを知りて、而して之に安んじて命に若ふは、德の至りなり。(二三)人の臣子たる者固より已むを得ざる所あり。事の情を行うて而して其の身を忘る。何ぞ生を悅びて、而して死を惡むに至るに暇(二四)あらん。夫子其れ行いて可なり。(二五)

(一) 楚の莊王の玄孫尹蔵の子、名は諸梁、字は子高、葉を領し僭して公と稱す (二) 楚王が拙者を使者とするは甚だ重大の事件なり (三) 齊國が使者を待遇するには非常に鄭重にして急に當方の要求に應ぜざらん (四) 凡そ事は小となく大となく道によらずして成就することなし (五) 人爲の刑罰を被る (六) 事成らば刑罰を免るゝかはり心痛の結果陰陽の氣を傷ひて病氣となる (七) 事成るも事成らざるも後の患無きものは虛明を得たる有德者のみ能くす (八) 吾が食物は粗末不美なるをとる (九) 庖廚儉薄なるが故に炊爨に清凉の飲食を欲する人なし (一〇) 吾未だ使に出づる事實に至らざるに既に心痛の結果氣血を被る心配あり (一一) 此の度の使事不成功ならば刑罰に附せられん (一二) 人道陰陽二つの患具備す (一三) 人臣たるもの斯る大任に任ふることかたし (一四) 夫子此の點について吾に示敎する所あれ (一五) 天下に二つの法あり (一六) 其の一つは天命の自然たる命と他の一つは理の宜しくなすべき義なり (一七) 常に心に在るものゆゑ放遺しがたし (一八) 何處にゆくも王土に非るものなく天地間に義を逃

使㆓於齊㆒。問㆓於仲尼㆒曰。王使㆓諸梁㆒也甚重。齊之待㆓使者㆒。蓋將㆓甚敬而不㆑急。匹夫猶未㆑可㆑動也。而況諸侯乎。吾甚慄㆑之。子嘗語㆓諸梁㆒也曰。凡事若小若大。寡㆓不㆑道以懽成㆒。事若㆑不成。則必有㆓人道之患㆒。事若成。則必有㆓陰陽之患㆒。若成若不㆑成。而後無㆑患者。唯有德者能㆑之。吾

重し。(三)齊の使者を待つ、蓋し將に甚だ敬して而して急ならざらんとす。匹夫猶は未だ動かす可らず。而るを況んや諸侯をや。吾は甚だ之を慄る。子嘗て諸梁に語れるあり、曰く、(四)凡そ事若しくは小、若しくは大、道あらずして以て懽成すること寡し。事若し成らずんば、則ち必ず(五)人道の患あり、事若し成らば、則ち必ず(六)陰陽の患あり。(七)若しくは成り若しくは成らずして、而る後、患なき者、唯有德者のみ之を能くすと。(八)吾が食や、粗にして臧からざるを執り、爨に凊を欲するの人無し。今、吾、朝に命を受けて夕に冰を飲む。我れ其れ內、(九)熱せるか。(一〇)吾れ未だ事の情に至らずして、而して旣に陰陽の患あり。(一一)事若し成らずんば必ず人道の患あらん、是れ兩つなり。(一二)人の臣たるもの以て之に任ふるに足らず。(一三)子其れ以て我に語る有れやと。仲尼曰く、(一四)天下に大戒二つ有り。(一五)其の一は命なり、其の一は義なり。子の親を愛するは命なり、心に解く可らず。(一六)臣の君に事ふるは義なり、(一七)適くとして君に非ざるは無く、天地の間に逃るゝ所なし。是を之

飛者一矣。未レ聞ニ以レ無レ翼飛者一也。聞ニ以レ有レ知知者一矣。未レ聞ニ以レ無レ知知者一也。瞻ニ彼闋者一。虛室生レ白。吉祥止レ止。夫且不レ止。是之謂ニ坐馳一。夫狗ニ耳目內通一。而外ニ於心知一。鬼神將ニ來舍一。而況人乎。是萬物之化也。禹舜之所レ紐也。伏羲几蘧之所ニ行終一。而況散焉者乎。

葉公子高將レ

所、而るを況(二二)んや散たる者をやと。

(一) 未だ始め心齋せざりし時は我身ありて自他の見を免るゝ能はざりき (二) 心齋をなし得るに至りては我身なく自他の見を免れたるが之を虛心と云ふべきものか (三) 十分なり (四) 鳥籠の如き狹くるしき場處に入るも其の鳥籠といふ名目に拘はれずして優游の餘地を存す (五) 其の境地に入れば言ふべきことを言ひ、入らざるときは言はず (六) 門關を設けて人を拒むことなく藥をもつて他の疾病を癒すが如く他を敎化せんと求めず、毒は藥なり (七) 唯一の道に處りて已むを得ずして爲す自然にとゞまる時は道に近し (八) 世上に迹を絕ちて韜晦するは易けれど世に在りて事をなしながら其の爲したる跡をあらはさゞるは難し (九) 人爲に行動するものは本心を僞り飾りやすし (一〇) 天然の自然に行動するものは本心を僞ることかたし (一一) 翼あるものは翼に由る所ありて飛ぶを得 (一二) 知あるものは知に由る所ありて知るを得 (一三) 知無くしてよく知るものあるを聞かず (一四) 暗室中に一孔を見るに、空室には白光を生ず、心虛しければ亦此の如く虛明なり (一五) 妙境は其の止るべき虛明に止りて外に馳せず (一六) 止るべき處に止らずして心外に馳するを坐ながらに馳すといふ (一七) 耳目の感官が中樞部に刺戟を內通するに任せて心知を外物と斥けて虛明に住するときは鬼神も來り止らんとす (一八) 鬼神すら然り況や人間を化し得ざることあらんや (一九) 萬物同化の理法 (二〇) 舜帝禹王の身のシメくゝりとする所 (二一) 共に支那古代の聖王 (二二) まして尋常人たるものは於てに此の化に依るべきことと云ふまでもなし

(一)葉公子高、將に齊に使せんとす。仲尼に問うて曰く、(二)王の諸梁を使ふや甚だ

待ㇾ物者也。唯道集ㇾ虛。虛者心齋也。

顏回曰。回之未ㇾ始得ㇾ使。實自回也。得ㇾ使ㇾ之也。未ㇾ始ㇾ有ㇾ回也。可ㇾ謂ㇾ虛乎。夫子曰。盡矣。吾語ㇾ若。若能入ㇾ遊其樊。而無ㇾ感ㇾ其名。入則鳴。不ㇾ入則止。無ㇾ門無ㇾ毒。一宅而寓ㇾ於ㇾ不ㇾ得ㇾ已。則幾矣。絕ㇾ迹易。無ㇾ行ㇾ地難。爲ㇾ人使。易ㇾ以僞。爲ㇾ天使。難ㇾ以僞。聞ㇾ以ㇾ有ㇾ翼

顏回曰く、回の(一)未だ始め使しむるを得ざるや、實に自ら回なり。(二)之を使しむるを得るや、未だ始めより回あらざるなり。虛と謂ふ可きかと。夫子曰く、(三)盡くせり。吾れ若に語らん。若、(四)能く其の樊に入り遊びて、其の名に感ずること無く、(五)入れば則ち鳴き、入らざれば則ち止む。(六)門なく、毒なく、(七)一宅して、已むを得ざるに寓すれば、則ち幾し。(八)迹を絕つは易く、地を行く無きは難し。(九)人に使めらるゝは以て僞り易く、(一〇)天に使めらるゝは以て僞り難し。(一一)翼あるを以て飛ぶ者を聞く、未だ翼なきを以て飛ぶ者を聞かざるなり。(一二)知あるを以て知る者を聞く、(一三)未だ知無きを以て知る者を聞かざるなり。(一四)彼の闋しき者を瞻るに、虛室は白を生ず。(一五)吉祥は止まるに止まる。夫れ(一六)且くも止まらざる、是を之れ坐馳と謂ふ。夫れ(一七)耳目の內通するに狥ひて心知を外にすれば、鬼神も將に來り舍らんとす、而るを況ん(一八)や人をや。是れ(一九)萬物の化なり。(二〇)禹舜の紐する所なり。(二一)伏羲、几蘧の行うて終はる

齋。吾將レ語レ若。有而爲レ之。其易邪。易レ之者。皞天不レ宜。顏回曰。回之家貧。唯不レ飮レ酒。不レ茹レ葷者。數月矣。若レ此則可三以爲二齋乎。曰是祭祀之齋。非二心齋一也。回曰。敢問二心齋一。仲尼曰。若一レ志。無三聽レ之以二耳一。而聽レ之以レ心。無三聽レ之以二心一。而聽レ之以レ氣。聽止二於耳一。心止二於符一。氣也者虛而

とする者は、皞天と宜しからずと。顏回曰く、回の家は貧し、唯酒を飮まず、(六)葷を茹はざる者數月なり。此の若きは則ち以て齋と爲す可きかと。曰く、是れ(七)祭祀の齋にてて、心齋にあらざるなり。回曰く、敢へて心齋を問ふと。仲尼曰く、(八)若志を一にせよ。(九)之を聽くに、耳を以てする無くして、之を聽くに心を以てし、(一〇)之を聽くに心を以てする無くして、之を聽くに氣を以てす。(一一)聽くは耳に止まり、(一二)心は符に止まる。(一三)氣なるものは、虛にして物を待つ者なり。(一四)唯道は虛に集まる、(一五)虛は心齋なり。

(一) 自分にては此の上の思案なし (二) 何卒其の方法を承りたし (三) 心を清淨にして虛心になれ (四) 有心にして爲すことは太だ困難なり (五) 爲すことを易しとなすは自然の理にかなはず、皞は皓、アキラカなり (六) 腥き食物を食はざること數ケ月 (七) 鬼神を祭るモノイミにして心の上のモノイミならず (八) 心を專念一意にせよ (九) 物を聽くに耳を以てきかずして凡て形骸を忘れて心にて直接にきけ (一〇) 物を聽くに心を以てきくときは意猶は動くことあれど、氣を以てきくときは氣は無心にして虛しきがゆゑに動く所なし (一一) 聲は耳に住し感官を忘るゝこと難し (一二) 心は外貌の符たる形體に住し形骸を忘るゝこと難し (一三) 氣は住するところなく虛にして物の來るを待つもの (一四) 始めなく終りなく至理は虛なるところに集まる (一五) 故に心を虛にすることを心齋といふ

之爲徒也。擎跽曲拳。人臣之禮也。人皆爲之。吾敢不爲邪。爲人之所爲者。人亦無疵焉。是之謂與人爲徒。成而上比者。與古爲徒。其言雖教。讁之實也。古之有也。非吾有也。若然者雖直不爲病。是之謂與古爲徒。若是則可乎。仲尼曰。惡。惡可。太多政法而不諜。雖固亦無罪。雖然。止是耳矣。夫胡可以及化。猶師心者也。

惡んぞ可ならん。（一三）太だ政法多くして諜からず。（一四）固しと雖も亦罪なし。然りと雖も（一五）是に止まるのみ。夫れ胡ぞ以て（一六）化を及ぼすべき、（一七）猶ほ心を師とする者なり。

（一）心に天眞を守りて質直にし外面を曲げて世俗に合す（二）衞君を教化することを成しとげて上、古の忠臣にならはん（三）心の質直無雜のものは天と同化して之がナカマとなる（四）天子人君も顔回自らも天の子にして其の間些の區別無し（五）然るに唯自己の言を衞君が採用するとせざるとを衞方より要求はせず（六）其の心純眞質直なる故童子といふ（七）外面を曲げて俗に合するものは世人のナカマとなるなり（八）手をさゝげ、足を跪き、躬をかゞめ首を俯す（九）教化を成しとげて上、古人にならふものは古人とナカマになるもの（一〇）其の言は教化のためなりとはいへ實は其の過失を改めしむるなり（一一）古よりあることにて吾始めてなすことに非ず（一二）以上の如くならば質直なりと雖も咎無し（一三）非常に方法手段多くして穩當ならず（一四）然れども其の方法卑しけれど別に罪はなし（一五）罪無しといふだけのもの（一六）人に教化を及ぼすことは思ひもよらず（一七）術策を施さむとするにて心にすがる所あり

顔回曰。吾無以進矣。敢問其方。仲尼曰

顔回曰く、（一）吾れ以て進むなし、（二）敢へて其の方を問ふと。仲尼曰く、（三）齋せよ。吾れ將に若に語げんとす。（四）有して而して之を爲すは、其れ易からんや。（五）之を易し

せんことを求む (七)彼を導いて次第に德に進ましむることも成就せざるほどゆゑ大德はなほさらのこと (八)若し衞君が己の我見を固執して變化せざるならば表面は一致するも内部ははかりがたし

成。而況大德乎。將執而不レ化。外合而內不レ訾。其庸詎可乎。

曰。然則我內直而外曲。成而上比。內直者與レ天爲レ徒。與レ天爲レ徒者。知下天子之與レ己皆天之所上レ子。而獨以二己言一蘄二乎而人善一レ之。蘄二乎而人不一レ善之邪。若レ然者人謂二之童子一。是之謂二與レ天爲一レ徒。外曲者。與レ人

曰く、然らば則ち、(一)我れ內直くして外曲り、(二)成して上比せん。(三)內直き者は天と徒たり。天と徒たるものは、(四)天子の己れと皆天の子とする所なるを知る。(五)而るに獨り己が言を以て、而人の之を善くするを蘄め、而人の之を善くせざるを蘄めんや。然るが若きもの、人之を童子と謂ふ。(六)是れを之れ天と徒たりと謂ふ。(七)外曲る者は人と徒たるなり。(八)擎跽曲拳は人臣の禮なり。人皆之を爲す、吾敢へて爲さざらんや。人の爲す所を爲す者は、人も亦疵る無し。是れを之れ人と徒たりと謂ふ。(九)成して上比する者は、古と徒たり。其の(一〇)言は教ふと雖も、讁の實なり。(一一)古の有なり、吾が有に非ざるなり。然るが如き者は、(一二)直しと雖も病たらず。是れを之れ古と徒たりと謂ふ。是の如くば則ち可ならんかと。仲尼の曰く、惡、

刑戮。其用兵不止。而求實無已。是皆求名實者也。而獨不聞之乎。名實者。聖人之所不能勝也。而況若乎。

有扈民の治むる國を攻む（九）空虛斷滅即ち亡滅（一〇）三國が兵を構へて攻戰すること止まざりしは國土を貪り取らんとする貪利の念止まざりしため（一一）關龍逢比干は名を求め三國は實を求めしもの（一二）名實は強烈なる人間の欲望にして聖人すら德を以て之を化すること能はず

雖然。若必有以也。嘗以語我來。顏回曰。端而虛。勉而一。則可乎。曰惡。惡可。夫以陽爲充孔揚。采色不定。常人之所不違。因案人之所感。以求容與其心。名之曰日漸之德不

然りと雖も若は必ず以てせんとするあらん（一）。嘗みに以て我に語げよや。顏回曰く、端にして虛、勉にして一ならば（二）、則ち可ならんかと。曰く惡、惡んぞ可ならん。夫れ陽を以て充を爲し（三）、孔いに揚り（四）、采色定まらざるは（五）、常人の違はざる所。因りて人の感ずる所を案じ、以て其の心を容與せんことを求む。之を名づけて日漸の德も成らずと曰ふ（六）。而るを況んや大德をや。將し執りて化せざれば（七）、外合うて內は訾られず、其れ庸詎ぞ可ならんやと（八）。

（一）汝は必ず他人を化するに其の術ありとするならん（二）端正にして虛心、勉めて心を純一にす（三）表面を飾りて己の德內に先つる態度をとる（四）いたく心驕る（五）衞君は顏色時に定まらず喜怒常なきゆゑ普通人は之に逆うて說く能はず（六）そこで之に說かんとするものは對手の感動するやうなことを工夫しそれにて心をくつろが

是以レ火救レ火。以レ水救レ水。名レ之曰二益多一。順始無レ窮。若殆以レ不レ信厚言。必死二於暴人之前一矣。

を以て衞君を救はんとするは恰も火を以て火を救ひ水を以て水を救ふ如く反つて其氣勢を強くす (四〇) 過失を救はんとして反つて人君の過失を大にす (四一) 最初己を屈して人君の意に從ふ時は主客の狀勢已に成りて無限に屈服せらるべし (四二) 殆ど信ぜられざる狀態に於て強ひて言ふ時は必ず暴君のために殺さるべし

且昔者桀殺二關龍逢一。紂殺二王子比干一。是皆修二其身一。以下傴二拊人之民一。以レ下拂二其上一者也。故其君因二其修一以擠レ之。是好レ名者也。昔者堯攻二叢枝胥敖一。禹攻二有扈一。國爲二虚厲一。身爲二

且昔者桀は關龍逢を殺し、(一) 紂は王子比干を殺す。(二) 是れ皆其の身を修め、(三) 下を以て人の民を傴拊し、下を以て其の上に拂れる者なり。(四) 故に其の君其の修に因りて以て之を擠る。(五) 是れ名を好む者なり。昔者、堯は叢枝、(六) 胥敖を攻め、(七) 禹は有扈を攻む。(八) 國は虚厲と爲り、(九) 身は刑戮せらる。(一〇) 其の兵を用ふること止まらざりしは、而も實を求めて已むこと無ければなり。是れ皆名實を求むる者なり。(一一) 而獨り之を聞かざるか。名實は聖人すら勝つ能はざる所なり。(一二) 而るを況んや若をや。

(一) 夏の桀王は忠臣關龍逢の己を諫めしを怒り之を殺す (二) 殷の紂王は其の諸父比干を殺戮す (三) 其の身の德を修養し身人君の位に居らず下位にありながら他人の有せる民を愛撫す (四) 夏桀殷紂は關龍逢比干の身に修むる所のものに藉口して之を罪に陷る (五) 右の關比の二者は名を好むものなり (六) 二國の名 (七) 夏の禹王 (八)

不爭。未達人心。而彊以仁義繩墨之言。術暴人之前者。是以人惡有其美也。命之曰菑人。菑人者。人必反菑之。若殆爲人菑夫。且苟爲悅賢而惡不肖。惡用而求有以異。若唯無詔王公。必將乘人而鬭其捷。而目將熒之。而色將平之。口將營之。容將形之。心且成之。

も草あくたの荒蕪地の如く人民途方にくる　〔九〕先生より承る　〔一〇〕よく治まれる國は救ふ必要なきゆゑ之を去り、亂れたる國は救ふ必要あるゆゑ之に赴く　〔一一〕良き醫師の門には病人多く集る如く亂國は君子の赴き救ふを待つこと切なるものあり　〔一二〕平生夫子より承りし所を基礎として治國の方法を案せば或は衞國の亂を救ふべきか　〔一三〕汝は往きて十中八九刑戮せらるゝにまちがひなし　〔一四〕道は純一至正にして雜駁なるを厭ふ　〔一五〕道雜駁なるときは多岐多端となる　〔一六〕多端なる時は其の道統一力を失ひて紛糾棼亂す　〔一七〕道紛亂して統一を失ふ時は心志を勞すること多くして憂ふ　〔一八〕已に憂ふる時は之を己に反し救ふこと能はず　〔一九〕先づ己が身に道が備はりたる後に其の道を他人に傳へ存す　〔二〇〕己が身に備はる所の道未だアヤフヤなるに何ぞ衞君の如き暴人の爲り行ふところに行く暇あるべき　〔二一〕人の德がとろけ亡ぶるは名聞を求むる故也　〔二二〕知の出づるは相爭ひて互ひに勝たんとする所よりす　〔二三〕名聞を求むるは競爭者に打克たんと相軋轢する也　〔二四〕知は競爭の手段道具　〔二五〕名と知とは不吉なる道具　〔二六〕名と知とは思ふ存分にふるまふものならず　〔二七〕德を積むこと厚く信ずると堅固なるもまだ人間の氣質の如何なるものかがのみこめず　〔二八〕名聞を爭ひ求めざるもまだ人間の心の如何なるものかがわからず　〔二九〕わざとらしく仁とか義とか融通の利かぬ四角ばつた言を以てヤクザモノに說くものに於ては徒に其の心に逆ふのみにて却つて身を危うす　〔三〇〕暴人却つて其の善人ぶりを憎みて災難にかゝる人といふ名をつくべし　〔三一〕其の言に從はざるのみならず反對に危害を加ふ　〔三二〕衞國若し賢人を好み愚人を惡むの心あらば、他にも賢人多きことなるに何ぞ汝を用ひて人目をひく如き手數をなさん　〔三三〕汝王公に召出されしわけてもなきに數へ往くなれば、自己を用ひしむる必要上人のすきまに乘じてやりこめ以て勝利を得んとするなるべし　〔三四〕汝の目はくらまんとする如し　〔三五〕汝の顏色は色を和げて平靜にせんとす　〔三六〕口は辯に多く辯ぜんとす　〔三七〕人主の意を迎ふる態度に表れんとす　〔三八〕心に人主を說破せんとする成心を生ぜんとす　〔三九〕以上の態

則多。多則擾。擾則憂。憂而不救。古之至人。先存二諸己一。而後存二諸人一。所レ存二於己一者未レ定。何暇レ至二於暴人之所一レ行。且若亦知二夫德之所一レ蕩。而知之所レ爲レ出乎哉。德蕩二乎名一。知出二乎爭一。名也者相札也。知也者爭之器也。二者凶器。非レ所二以盡一レ行也。且德厚信矼。未レ達二人氣一。名聞

せずして、而して彊(二九)ひて仁義繩墨の言を以て暴人の前に術ぶる者をや。是を以て人其の美あるを惡み、之を命じて菑人と曰はん。菑人は人必ず反りて之に菑す。若(三〇)は殆ど人の爲に菑せられんか。且(三一)苟くも賢を悅び、不肖を惡むとせば惡んぞ而を用ひて以て異にする者有るを求めん。(三二)若(三三)唯王公に詔ること無し、必ず將に人に乘じて、其の捷を鬭はさんとす。而(三四)の目は將に之に熒はんとし、而(三五)の色は將に之を平かにせんとし、口(三六)は將に之を營まんとし、容(三七)は將に之を形さんとし、心(三八)は且に之を成さんとす。是(三九)れ火を以て火を救ひ、水を以て水を救ふなり。之を名けて益多(四〇)と曰ふ。始めに順へば(四一)窮りなし。若(四二)殆ど信ぜられざるを以て厚く言はば、必ず暴人の前に死せん。

㊀ 此の篇說く所は世に住むの法にして己の知の鋭きを挫き世の亂れたるを解き光を和げ塵に同じうして人と爭はず心を虛にし名を杜ぎ譽を却け世に用ひられざるときは患を免れ生を全うする所以を述ぶ　㊁ 名は淵・孔子の高弟、亞聖とよばる　㊂ 孔子の字　㊃ 春秋十二列國の一、今の河南省の城下に當る小國　㊄ 我意をふるまふ　㊅ 輕卒に國の政治を取りて己の過失を知らず　㊆ 輕卒に人民を使役して死尸國に滿つほど　㊇ 水利よき田地

請行。曰、奚之。曰、將之衛。曰、奚爲焉。曰、回聞衛君其年壯、其行獨。輕用其國、而不見其過。輕用民死。死者以國量。乎澤若蕉。民其無如矣。回嘗聞之夫子曰。治國去之。亂國就之。醫門多疾。願以所聞思其則、庶幾其國有瘳乎。仲尼曰、譆、若殆往而刑耳。夫道不欲雜。雜

之かんとす。曰く、奚をか爲さんとすと。曰く、回聞く、衛の君は其の年壯にして、其の行獨なり。(五)輕〻しく(六)其の國を用ひて、其の過を見ず、(七)輕〻しく其の民を死に用ひて、死者國を以て量る。(八)澤に乎ける蕉の若く、民其れ如んともするなしと。回嘗て之を(九)夫子に聞けり、曰く、治國(一〇)は之を去り、亂國は之に就く。(一一)醫の門には疾多しと。願はくば、聞く所を以て其の則を思はば、庶幾くは其の國瘳ゆるあらんかと。仲尼曰く、譆、(一二)若(一三)は殆ど往きて刑せられんのみ。夫れ道(一四)は雜はるを欲せず、雜は(一五)れば則ち多し。(一六)多ければ則ち擾る。(一七)擾るれば則ち憂ふ。(一八)憂へて救はれず。古の至人は、(一九)先づ諸を己に存して、而る後に諸を人に存す。己に存する所の者、(二〇)未だ定らず、何ぞ暴人の行ふ所に至るに暇あらん。且若亦夫の德の蕩する所と、(二一)知の出づるを爲す所とを知れりや。德は名に蕩し、(二二)知は爭に出づ。(二三)名なる者は相軋るなり。(二四)知なる者は爭の器なり。(二五)二つの者は凶器なり。(二六)盡くし行ふ所以に非ざるなり。且(二七)德厚く信矼きも、未だ人氣に達せず。(二八)名聞爭はざるも未だ人心に達

以命レ之。必有下不レ蘄レ言而言。不レ蘄レ哭而哭者上。是遁レ天倍レ情。忘二其所一レ受。古者謂二之遁天之刑一。適來夫子時也。適去夫子順也。安レ時而處レ順。哀樂不レ能レ入也。古者謂二是帝之縣解一。指窮二於爲一レ薪。火傳也。不レ知二其盡一也。

顔回見二仲尼一

を窮むれども、火の傳はるや其の盡くるを知らざるなりと。

(一) 老子、姓は李氏、名は耳、字は伯陽、聃は其の號、周の楚の苦縣の人、道德經五千餘言を著す、其の說清淨自然を尚びて人の施爲を斥け無爲默化を以て道の極致となす、其の學老莊と幷稱し孔孟の儒學派と對立して一の學派をなす (二) 三度哭泣せしのみにて立出て禮を盡くさず (三) 喪失を敬稱していふ (四) かく粗略にてもよろしきや (五) 始めは吾老子を以て至人となせしが今は然らざるを覺れり (六) 老人は老子を哭すること吾子の死せしを哭するが如し (七) 老子が人の心を結びつけしことは、言へといはねど自然亡師を慕ふの意を言ひ、又哭せんことを求めざれど自然哭するやうにしむけたるものあるならん (八) 天理に背き人情に反し人の死生は天より受けしものなれば死を哭するの理無きことを忘れしなり (九) 天理に背く罪 (一〇) 偶然此の世に生れ來りしは老子の生れ來るべき時節なりしなり (一一) 偶然此の世を去りしは老子の去るべき順序なり (一二) 生れ來るべき時節に安んじ生れ死すべき順序に甘んじ隨ふときは生れたりとて樂しむに足らず、死したりとて哀むに足らず (一三) 人間の死は卽ち天が宙宇に懸れる吾人の繫縛を解きたるものといふ (一四) 火の燃ゆるに當り薪の實體を指し見るときは窮盡することあれど火其のものは傳はりゆきて盡くることなし、人の死するや其の形骸を以てすれば盡くることあれど、其の精神を以てすれば無限にして盡くることなし

人間世

(一)顔回(がんくわい)、(二)仲尼(ちうぢ)に見えて行かんことを請ふ。曰く、奚(いづく)にか之(ゆ)くと。曰く、將に(四)衞に

澤雉十步一啄。百步一飮。不レ蘄レ畜二乎樊中一。神雖レ王不レ善也。

老聃死、秦失弔レ之。三號而出。弟子曰。非二夫子之友一邪。曰然。然則弔焉若レ此可乎。曰然。始也吾以爲二其人一也。而今非也。向吾入而弔焉。有下老者哭レ之。如レ哭二其子一。少者哭レ之。如レ哭二其母一。彼其所二

（一）澤雉は十步に一啄し、百步に一飮するも、（二）樊中に畜はるゝを蘄めず。（三）神は王すと雖も善しからざればなり。

（一）澤中の雉は十步行きて一度食を得之を啄み、百步行きて一度水を飮み勞苦甚し　（二）籠の中に飼養せらるゝことを欲せず　（三）精神は暢び暢びとして安樂なるが如しと雖も窮屈せらるゝは心に樂しからず

（一）老聃死す、秦失之を弔す。（二）三號して出づ。弟子曰く、（三）夫子の友に非ずやと。曰く、然りと。然らば則ち弔する、（四）此の若くにして可なるかと。曰く、然り。（五）始めや、吾以て其の人と爲す。而して今は非なり。向に吾入りて弔するや、（六）老者は之を哭すること、其の子を哭するが如く、少者は之を哭すること、其の母を哭するが如き有り。彼れ其の之を會する所以は、必ず言を蘄めずして言ひ、哭を蘄めずして哭する者有らん。（七）是れ天を遁れ、（八）情に倍き、其の受くる所を忘れしなり。古は之を（九）遁天の刑と謂ふ。（一〇）適ゝ來るは夫子の時なり。（一一）適ゝ去るは夫子の順なり。（一二）時に安んじて順に處れば、哀樂入る能はず。古は是を帝の縣解と謂ふ。（一三）指は薪たる

恢恢乎其於レ遊レ刃一必有二餘地一矣。是以十九年。而刀刃若三新發二於硎一。雖レ然。毎レ至二於族一。吾見二其難一レ爲。怵然爲レ戒。視爲止。行爲遲。動レ刀甚微。謋然已解。如二土委一レ地。提レ刀而立。爲レ之四顧。爲レ之躊躇。滿志。善レ刀而藏レ之。文惠君曰。善哉。吾聞二庖丁之言一。得レ養レ生焉。

なる骨節に打ちあてゝ刀を折るゆゑなり （二九）刀の刃は新に砥石にて磨きたてたる如し （三〇）骨節には間隙ありて刀の刃は薄く厚みなし （三一）ひろびろとして刀刃を動かすに必ず十分の餘地あり （三二）剖き難きを見てハットし心をひきしむ （三三）眼一點を凝視す （三四）手の動くことおそく刀を動かすこと非常に緩し （三五）物のたち割られたる音 （三六）土の地に崩れ落ちたる如く完全に剖き終る （三七）剖くことを終つて滿足の感にたへずあたりを顧み低佪す （三八）得意になりて刀を拭うてしまふ （三九）庖丁の言を聞きて生を養ふには自然に從ふを司とすることを學び得たり

公文軒見二右師一而驚曰。是何人也。惡乎介也。天與。其人與。曰天也。非レ人也。天之生是使レ獨也。人之貌有レ與也。以レ是知二其天也。非レ人也。

（一）公文軒（こうぶんけん）、（二）右師（うし）を見て驚いて曰く、是れ何人ぞや。（三）惡（いづくん）ぞ介（かい）なる。天なるか、其れ人なるか。曰く、（四）天なり、人に非ざるなり。（五）天の生、是れ獨（どく）ならしめしなり。（六）人の貌（かたち）は與（くみ）するあるなり。（七）是を以て其の天にして、人に非ざるを知ると。

（一）公文は姓、軒は名、宋の人 （二）官名、罪ありて隻脚を斷たる （三）いかにして片足を切られたるにや （四）生れつきなるか將た人のために切られたるか （五）天が其の生れし時より獨脚ならしめたり （六）人の容貌は各人相似たるところあるもの （七）人の容貌は互に似たるものなるに獨り隻脚なるは是天の然らしむるなり

方今之時、臣以神遇。而不以目視。官知止而神欲行。依乎天理。批大郤。導大窾。因其固然。技經肯綮之未嘗。而況大軱乎。良庖歲更刀。割也。族庖月更刀。折也。今臣之刀十九年矣。所解數千牛矣。而刀若新發於硎。彼節者有間。而刀刃者無厚。以無厚入有間。恢

刀刃は新に硎を發したるが若きなり。然りといへども族に至る每に、吾其の爲し難きを見て、怵然（三二）として戒を爲し、視ること爲めに止まり、（三三）行くこと爲めに遲く、（三四）刀を動かすこと甚だ微なり。謋然（三五）として已に解く。土の地に委する如し。（三六）刀を提げて立ち、（三七）之が爲めに四顧し、之が爲に躊躇す。滿志（三八）刀を善うて、之を藏す。文惠君曰く、善い哉、吾、庖丁（三九）の言を聞きて生を養ふことを得たりと。

（一）料理人、名は丁　（二）梁の惠王のために牛を料理す　（三）庖丁の手が牛に觸れる　（四）手に力を入れて肩をそばだつ　（五）ウンと足を踏みこたへる　（六）膝を曲げる　（七）骨と肉と離れる音　（八）刀を動かす　（九）刀を使ふ音　（一〇）音樂の節奏と一致す　（一一）殷の湯王の作りたる樂の名　（一二）堯の作りたる樂章　（一三）うまいものだ、　（一四）技術も是ほどまで神妙に達するものか　（一五）私の好む所のものは道であつて技術よりもなほ神妙なり　（一六）全々牛の上に在れば眼にふるゝ所牛に非ざるなし　（一七）マルの牛と見えずして既に解きたる肉と見ゆ　（一八）現今にて精神を以て牛に對し目にて觀ず　（一九）手足耳目の官能は割き難きの所に遇へば止まらんとすれども精神はなほ活動して牛を割かんと欲す　（二〇）牛體の自然の組織に從ふ　（二一）骨と肉との間の大なる隙間を切りひらく　（二二）骨節の間の大なる隙間を解き開く　（二三）牛體の自然に順ふ　（二四）自分の技術は骨と肉の結ばれたるところに刀を觸るゝことだに未だなしゝことなし　（二五）まして大なる骨節にはなほさら刀を觸れしめず　（二六）良い料理人も每年刀を新調す　（二七）骨肉の結集せるところを斬りさけばなり　（二八）普通の料理人は每月刀を新調するといふのは入

庖丁爲二文惠君一解レ牛。手之所レ觸肩之所レ倚。足之所レ履。膝之所レ踦。砉然嚮然。奏レ刀騞然。莫レ不レ中レ音。合二於桑林之舞一。乃中二經首之會一。文惠君曰。譆善哉。技蓋至レ此乎。庖丁釋レ刀對曰。臣之所レ好者道也。進二乎技一矣。始臣之解レ牛之時。所レ見無レ非レ牛者一。三年之後。未三嘗見二全牛一也。

庖丁の、文惠君の爲に牛を解くや、手の觸るゝ所、肩の倚る所、足の履む所、膝の踦る所、砉然たり、嚮然たり。刀を奏する騞然として、音に中らざること莫し。桑林の舞に合し、乃ち經首の會に中る。文惠君の曰く、譆、善い哉。技も蓋し此に至るかと。庖丁、刀を釋て對へて曰く、臣の好む所の者は道なり。技よりも進めり。始め臣の牛を解く時、見る所、牛に非ざる者無し。三年の後未だ嘗て全牛を見ざるなり。今の時に當りては、臣は神を以て遇うて目を以て視ず。官止まるを知つて、而して神は行かんと欲す。天理に依りて、大郤を批き、大窾を導く。其の固然に因る。技は肯綮を經るだも未だ嘗てせず。而るを況んや大軱をや。良庖も歳ごとに刀を更ふ。割けばなり。族庖は月に刀を更ふ。折るればなり。今臣の刀は十九年。解く所數千牛。而して刀刃は新に硎より發せるが若し。彼の節なる者は間ありて、而して刀刃には厚みなし。厚み無きを以て間あるに入る。恢恢乎として其の刃を遊ばすに於て、必ず餘地あり。是を以て十九年にして

周也。不ㇾ知周之夢爲二胡蝶一與。胡蝶之夢爲ㇾ周與。周與二胡蝶一則必有ㇾ分矣。此之謂二物化一。

㈠ 以前莊周自ら胡蝶となりしを夢む ㈡ 樂しげに飛ぶ ㈢ 心中愉快にして我意にかなひ、自ら莊周たることを忘れたり ㈣ にはかに夢さむ ㈤ 驚き目ざむる貌 ㈥ 莊周が夢の中に胡蝶となりしか又胡蝶が夢の中に莊周となりしか ㈦ 莊周と胡蝶とには必ず區分あり ㈧ 斯く萬物皆自然の造化中にあり

吾生也有ㇾ涯。而知也無ㇾ涯。以ㇾ有ㇾ涯隨ㇾ無ㇾ涯。殆已。已而爲ㇾ知者殆而已矣。爲ㇾ善無ㇾ近ㇾ名。爲ㇾ惡無ㇾ近ㇾ刑。緣ㇾ督以爲ㇾ經。可二以保ㇾ身。可二以全ㇾ生。可二以養ㇾ親。可二以盡ㇾ年。

㈠養生主

㈡吾が生や涯あり、而して㈢知や涯無し。㈣涯あるを以て、涯なきに隨ふ、殆き已。㈤已にして知をなす者は殆きのみ。㈥善を爲すも名に近づくこと無く、㈦惡を爲すも刑に近づくこと無く、㈧督に緣りて以て經と爲さば、以て身を保つべく、以て生を全くすべく、以て親を養ふべく、㈨以て年を盡すべし。

㈠ 此の篇死生に於て心を動かすことなく身を保ち年を全くする所以を論じ生を養ふ道を說く ㈡ 吾人の生命には限りあり ㈢ 人間の理知作用は無限多端なり ㈣ 有限の生を以て無限の知の赴く所に隨ふは危險なり ㈤ 危險なるにもかゝはらず知を事とするものは危險なり ㈥ 善行を修するも名聞を求むる如きことをなさず ㈦ 惡行を修するも刑罰にふるゝ如きことをなさず ㈧ 中道に依據して之を常となす ㈨ 天壽を全うすべし

於無竟一。故寓二諸無竟一。

罔兩問レ景曰。曩子行。今子止。曩子坐。今子起。何其無二特操一與。景曰。吾有レ待而然者邪。吾所レ待。又有レ待而然者邪。吾待蛇蚹蜩翼邪。悪識レ所二以然一。悪識レ所二以不一レ然。

罔兩(一)、景(二)に問うて曰く、曩に子行き、今は子止まる。(三)曩に子坐し今は子起つ。何ぞ其れ特操(四)なきやと。景曰く、(五)吾は待つありて而して然る者か、(六)吾が待つ所も又待つ有りて然る者か。吾が待つは(七)蛇の蚹、蜩の翼か。(八)悪んぞ然る所以を識らん。悪んぞ然らざる所以を識らん。

(一)物の陰影の外圍の薄き影 (二)影 (三)此のまヘソナタは動きたるに今は靜止す (四)行止座起つねに定まりなくして操守無し (五)吾は形に待つ所あつて行止坐起するものか (六)吾が待つ所の形其のものも他に待つものありて行止坐起するものか (七)蛇の肋骨の鱗と蜩の翼、蛇と蜩とは之によつて行くを得れど蚹と翼とは自ら行く能はず (八)行止坐起する所以と然せざる所以とを知るべき

昔者莊周夢爲二胡蝶一。栩栩然胡蝶也。自喩適レ志與。不レ知レ周也。俄然覺。則蘧蘧然

(一)昔は莊周夢に胡蝶と爲る。(二)栩栩然として胡蝶なり。(三)自ら喩んで志に適するかな、周たるを知らざるなり。(四)俄然として覺むれば則ち(五)蘧蘧然として周なり。知らず、(六)周の夢に胡蝶と爲るか、胡蝶の夢に周と爲るか。(七)周と胡蝶とは、則ち必ず分あり。(八)此れを之れ物化と謂ふ。

與若同矣。惡能正之。使同乎我者正之。既同乎我矣。惡能正之。使異乎我與若者正之。既異乎我與若矣。惡能正之。使同乎我與若者正之。既同乎我與若矣。惡能正之。然則我與若與人。俱不能相知也。而待彼也邪。何謂和之以天倪。曰。是不是然不然。是若果是也。則是之異乎不是也。亦無辯。然若果然也。則然之異乎不然也。亦無辯。化聲之相待。若其不相待。和之以天倪。因之以曼衍。所以窮年也。忘年忘義。振

や。何をか之を和するに、天倪を以てすと謂ふ。曰く、是と不是と、然と不然と、是若し果して是ならば、則ち是の不是に異なるや、亦辯なし。(九)然若し果して然ならば、則ち然の不然に異なるや亦辯なし。(一〇)化聲の相待つは、其の相待たざるが若し。(一一)之を和するに天倪を以てし、(一二)之に因るに曼衍を以てするは、(一三)年を窮むる所以なり。(一四)年を忘れ、(一五)義を忘れて、(一六)無竟に振ふ。故に諸を無竟に寓す。(一七)

(一)若し我と汝と是非の辯論をなさんに　(二)どちらかの一方が是にして他の一方が非になるか　(三)どちらも是にして同時にどちらも非なるか　(四)第三者の人　(五)明かならざる說　(六)汝と同意見のものをして正さしめば　(七)其の說我と汝とに異なるものをして之を正さしめなば其の人は我と汝とより立脚を異にするものなれば正すこと能はじ　(八)然るに何ぞ他を待ちて正す要あらむ、自然の理に任すよりはかなし　(九)是若し果して眞に是ならば不是と異なる所あるべきは固より辯論する要なし　(一〇)是非の辯は相待つて立つものにて是といへば是、非といへば是なるが故に是非を正しがたし、是始めより相待つて立たざると同じ　(一一)之を和合齊一するに天地自然の分を以てす　(一二)之に因るに即ち束縛されざる自由の態度を以てす　(一三)自然の生をきはめつくす方法　(一四)死生を忘る　(一五)是非を忘る　(一六)無窮の境即ち絶對境に動く　(一七)我身を絶對境に寄寓せしむ

丘也與女皆夢也。予謂女夢。亦夢也。是其言也。其名爲弔詭。萬世之後而。一遇大聖知其解者。是旦暮遇之也。

既使我與若辯矣。若勝我。我不若勝。若果是也。我果非也邪。我勝若。若不吾勝。我果是也。而果非也邪。其或是也。其或非也邪。其俱是也。其俱非也邪。我與若不能相知也。則人固受其黮闇。吾誰使正之。使同乎若者正之。既

(一)既に我と若とをして辯ぜしめんに、若、我に勝ちて、我、若に勝たざれば、(二)若果して是にして、我は果して非なりや。我、若に勝ちて、若、吾に勝たざれば、我果して是にして、而果して非なりや。其れ或は是にして、其れ或は非なりや。其れ(三)俱に是にして、其れ俱に非なりや。我と若と相知ること能はざれば、則ち(四)人固より其の(五)黮闇を受けん。吾れ誰にか之を正さしめむ。(六)若に同じき者をして之を正さしめば、既に若と同じ、惡んぞ能く之を正さん。我に同じき者をして之を正さしめば、既に我に同じ、惡んぞ能く之を正さん。(七)我と若とに異なる者をして之を正さしめば、既に我と若とに異なり、惡んぞ能く之を正さん。我と若とに同じき者をして之を正さしめば、既に我と若とに同じ、惡んぞ能く之を正さん。然らば則ち我と若と人と、俱に相知ること能はずして、(八)而して彼を待たん

所。與王同筐牀。食芻豢而後悔其泣也。予惡乎知夫死者不悔其始之蘄生乎。夢飲酒者。旦而哭泣。夢哭泣者。旦而田獵。方其夢也。不知其夢也。夢之中又占其夢焉。覺而後知其夢也。且有大覺而後知此其大夢也。而愚者自以爲覺。竊竊然知之。君乎牧乎。固哉。

んや。(六)夢に酒を飲む者、旦にして哭泣し、夢に哭泣する者旦にして田獵するあり。其の夢みるに方りてや、(七)其の夢なるを知らざるなり。夢の中に又其の夢を占ひ、覺めて而る後に其の夢なりしを知るなり。且(八)大覺ありて而る後に此れ其の大夢なるを知るなり。而るに愚者は自ら以て覺めたりと爲し、(九)竊竊然として之を君(一〇)とし牧とするを知る。(一一)固なる哉。丘や女と皆夢みるなり。(一二)予の女を夢みると謂ふも亦た夢なり。是れ(一三)其の言や其の名を弔詭と爲す。萬世の後にして一たび(一四)大聖の其解を知るものに遇はば、是れ旦暮に之に遇ふなり。

(一)艾といふ土地の境を守る番人　(二)見出されて晉公の寵姫となる　(三)寢牀　(四)牛羊犬豚の肉　(五)始めに生に執着せしを後悔せずとも限らず　(六)酒を飲むと宴遊するは歡樂にして哭泣するは悲哀なるが、歡樂と悲哀何れを眞とすべきぞ　(七)夢みてゐる時は其の夢なるを知らず、夢の中に其の夢の吉凶を占ひ、夢さめて後其の夢なりしを知る　(八)大なる覺悟を經て後人生畢竟一の大なる夢なることを知る　(九)小知の貌、こせこせとして　(一〇)己の是とする所を君主とし仕へ、其非とする所を牧人として使役す　(一一)頑迷なるかな　(一二)人生畢竟一の夢なるが故に丘も汝も、皆此の夢を見居るものなり　(一三)弔詭不可思議の言なり　(一四)萬世の後に大聖人出でて此の言の意味を知るものに遇ふ時は現在それに遇ふが如し

之。且女亦太早計。見卵而求時夜。見彈而求鴞炙。予嘗爲女妄言之。女以妄聽之。奚旁日月。挾宇宙。爲其脗合。置其滑涽以隸相尊。衆人役役。聖人愚芚。參萬歲而一成純。萬物盡然。而以是相蘊。予惡乎知說生之非惑邪。予惡乎知惡死之非弱喪而不知歸者邪。

知らんや。

(一) 長梧の門人といふ、固より假設人物として可なり (二) 孔子 (三) 事をなすに心を煩さず (四) 利害を同一視して去らず (五) 人が予に求むるも喜ばず (六) 一定の法則によつて行はず (七) 大辯は言はず、言はざる中に言ふ所あり (八) 俗世のけがれの外に遊ぶ (九) みだりなる言 (一〇) 玄妙なる行動 (一一) 長梧 (一二) 古代の聖王たる黄帝も之を聽きて其の是非に迷ふ (一三) 孔子名は丘といふ (一四) お前も甚だ輕卒なり (一五) 鷄の卵を見て之に時を告げんことを求む (一六) 鳥を擊つハジキダマを見小鳩の炙肉を求む (一七) デタラメに言つて見よう (一八) 宜いかげんに聽いて居れ (一九) 日月の側に立つて世界を抱き之を一つに合致さす、明德日月に並び道古今を貫きて造化と合するが如きをさす (二〇) 俗世の務の亂雜にして次第無きをいふ (二一) 己を高しとし人を見下し輕しめて自ら尊しとする如き俗見を棄つるもの世にありや、是至つて稀なることなり (二二) 衆人は境を逐ひ物に累はされて勞苦す (二三) 無知の貌 (二四) 萬年無限にわたり心を一にまとめて純粹 (二五) 若き時故郷を失踪して本據たる土地に歸ることを知らず

麗之姬艾封人之子也。晉國之始得之也。涕泣沾襟。及其至於王

麗の姬は艾(一)の封人の子なり。晉國の始めて之を得るや、涕泣して襟を沾せり。其の王の所に至り、王と筐牀(二)を同じくし、芻豢(四)を食ふに及んで、而る後其の泣きしを悔いたり。予惡にか、夫の死者も其始めの生を蘄めしを悔いざるを知ら

騎日月。而游乎四海之外。死生無變於己。而況利害之端乎。

瞿鵲子問乎長梧子曰。吾聞諸夫子。聖人不從事於務。不就利。不違害。不喜求。不緣道。無謂有謂。有謂無謂。而游乎塵垢之外。夫子以爲孟浪之言。而我以爲妙道之行也。吾子以爲奚若。長梧子曰。是黃帝之所聽熒也。而丘也何足以知

瞿鵲子、長梧子に問うて曰く、吾れ諸を夫子に聞く、聖人は務に從事せず、利に就かず、害を違らず、求むるを喜ばず、道に緣らず、謂ふこと無きも謂ふ有り、謂ふこと有るも謂ふ無くして、而して塵垢の外に游ぶと。夫子は以て孟浪の言と爲し、而して我は以て妙道の行と爲すなり。吾子は以て奚若と爲すと。長梧子曰く、是れ黃帝も聽きて熒ふ所なり。而るを丘や何ぞ以て之を知るに足らん。且女も亦太だ早計なり。卵を見て而して時夜を求め、彈を見て而して鴞炙を求む。予嘗みに女が爲に之を妄言せん。女以て之を妄聽せよ。奚か日月に旁うて、宇宙を挾み、其の脗合を爲し、其の滑涽にして隸を以て相尊ぶことを置くものぞ。衆人は役役たり。聖人は愚芚なり、萬歲に參し、一にして純を成す。萬物を盡く然りとして、而して是を以て相蘊む。予惡んぞ、生を說ぶの、惑に非ざるを知らんや。予惡ぞ死を惡むの弱喪にして歸るを知らざる者に非ざらを

帶。鴟鴉耆レ鼠。四者孰知二正味一。猨猵狙以爲レ雌。麋與レ鹿交。鰌與レ魚游。毛嬙麗姫人之所レ美也。魚見レ之深入。鳥見レ之高飛。麋鹿見レ之決驟。四者孰知二天下之正色一哉。自レ我觀レ之。仁義之端。是非之塗。樊然殽亂。吾惡能知二其辯一。

れど偏化せず (一〇) ぴくぴくと怖ぢおそる (一一) 猿は樹上に居りて平氣 (一二) 民と猨猴と鰌との處るところ、差別の見を離れて之を見れば何れが眞實の棲處なるかわからず (一三) 牛羊犬豚 (一四) 鹿の類は小草を食ふ (一五) 虫の名 (一六) 小蛇 (一七) 鳶 (一八) 此の四者に於て何れが正しき食なるかわからず (一九) 大猿 (二〇) 交尾す (二一) 越王の愛姫と晉の獻公の驪姫、共に美人 (二二) 美人に慕ひ寄らず深く水中に潛り入る (二三) 疾走す (二四) 天下に於ける眞實の美色 (二五) 仁義の端緒や是非善惡の區別はメチャメチャに亂る (二六) 區別がわからず

齧缺曰。子不レ知二利害一。則至人固不レ知二利害一乎。王倪曰。至人神矣。大澤焚而不レ能レ熱。河漢冱而不レ能レ寒。疾雷破レ山。風振レ海。而不レ能レ驚。若レ然者乘二雲氣一。

齧缺曰く、子は利害を知らず、(一) 則ち至人は固より利害を知らざるかと。(二) 王倪曰く、至人は神なり。(三) 大澤焚くれども熱する能はず。(四) 河漢沍れども寒する能はず。(五) 疾雷山を破り、(六) 風、海を振はすれども驚かす能はず。然るが若きものは、(七) 雲氣に乗り、日月に騎りて、而して四海の外に遊ぶ。死生も己を變ずるなし。(八) 而るを況んや利害の端をやと。

(一) 利害損得を知らず (二) 至極の達人 (三) 神變不思議なり (四) 大なる林野を燒く火も燒く能はず (五) 河水氷結すれども凍えさせがたし (六) 大風起りて海波立つ (七) 體用內外具足する如き人は雲に乗り日月に乗りて世界の外に心遊す (八) 己の心を動かさず

所不知邪。曰吾惡乎知之。然則物無知邪。曰吾惡乎知之。雖然嘗試言之。庸詎知吾所謂知之非不知邪。庸詎知吾所謂不知之非知邪。且吾嘗試問乎女。民溼寢則腰疾偏死。鰌然乎哉。木處則惴慄恂懼。猨猴然乎哉。三者孰知正處。民食芻豢。麋鹿食薦。蝍且甘

言はん。庸詎んぞ、吾が所謂知るの知らざるに非ざるを知らんや。庸詎んぞ吾が所謂知らざるの、知るに非ざるを知らんや。且吾れ嘗試みに女に問はん。民溼に寢ぬれば則ち腰疾し偏死す。鰌は然らんや。木に處れば則ち惴慄恂懼す、猨猴は然らんや。三者孰れか正處を知らん。民は芻豢を食ひ麋鹿は薦を食ひ、蝍且は帶を甘しとし、鴟鴉は鼠を耆む。四者孰れか正味を知らん。猨は猵狙を以て雌と爲し、麋は鹿と交り、鰌は魚と游ぶ。毛嬙麗姫は人の美とする所なれども、魚は之を見て深く入り、鳥は之を見て高く飛び、麋鹿は之を見て、決驟す、四者孰れか天下の正色を知らんや。我よりして之を觀れば、仁義の端、是非の塗は、樊然として殽亂す。吾れ惡んぞ能く其の辯を知らんと。

(一) 許由の師王倪の弟子 (二) 堯の時の賢人 (三) 物の齊しく是とする所の萬物に一貫せる原理 (四) 萬物一貫の原理を知らずといふことを知るか (五) 萬物は絶對に知り得ざるものか (六) 知るといふも實際は知らぬのかも測りがたし、絶對に以て知り得べからざる形而上物を知りたりといふも確かならず (七) 知らずといふが實際確實なる知識かも測りがたし (八) 濕氣の多い處に寢ると中風を病みて半身不隨になって死す (九) 鰌 いつも水中に居

不竭。而不知其所由來。此之謂葆光。故昔者堯問於舜曰。我欲伐宗膾胥敖。南面而不釋然。其故何也。舜曰。夫三子者。猶存乎蓬艾之間。若不釋然何哉。昔者十日並出。萬物皆照。而況德之進乎日者乎。

齧缺問乎王倪曰。子知物之所同是乎。曰吾惡乎知之。子知子之

猶と同じ、其の光を包藏して外部に露さざるなり

故に昔は堯、舜に問うて、曰く、我れ宗、膾、胥敖(一)を伐たんと欲す。南面して(二)釋然たらざるは、其故何ぞやと。舜の曰く、夫の三子は猶ほ蓬艾(三)の間に存するがごときに、若し釋然たらざるは何ぞや。(四)昔者十日並に出で萬物皆照らさる。而るを況んや德の日より進めるものをやと。(五)

(一)堯の時の三諸侯 (二)天子の位に在りて心中悦ばしからず (三)雜草の間に有る如き取るに足らぬもの (四)淮南子に見ゆ、十の太陽一度に出て萬物皆照らさる (五)まして其の德日より進める堯帝にして彼の三子を光被し得ざる道理なし、故昔者堯以下の一章を錯簡とする說あり

齧缺王倪(一)に問うて曰く、子は(二)物の同じく是とする所を知るかと。曰く、吾惡んぞ之を知らん。子は子の(三)知らざる所を知れりやと。曰く、吾惡んぞ之を知らん。然らば則ち物(四)知るべき無きやと。曰く、吾惡んぞ之を知らん。然りと雖も嘗試に之を

也者有レ不レ辯也。曰何也。聖人懷レ之。衆人辯レ之。以相示也。故曰。辯也者有レ不レ見也。

夫大道不レ稱。大辯不レ言。大仁不レ仁。大廉不レ嗛。大勇不レ忮。道昭而不レ道。言辯而不レ及。仁常而不レ成。廉清而不レ信。勇忮而不レ成。五者园而幾レ向レ方矣。故知止ニ其所レ不レ知一至矣。孰知ニ不言之辯。不道之道一。若有ニ能知一。此之謂ニ天府一。注焉而不レ滿。酌焉而

夫れ大道（一）は稱あらず、大辯（二）は言はず、大仁（三）は仁ならず、大廉（四）は嗛ならず、大勇（五）は忮はず、道は昭（六）かなれば道ならず。言は辯ずれば（七）及ばず。仁は常なれば（八）成らず。廉（九）は清ければ信ならず。勇は忮へば（一〇）成らず。五つの者は园なれども方に向ふに幾し（一一）、故に知は其の知らざる所に止まるは（一二）、至れり。孰れか不言の辯、不道の道を知らん。若し能く知る有らば、此れを之れ天府（一三）と謂ふ。注げども滿たず。酌めども竭きず。而して其の由つて來る所を知らず（一四）。此れを之れ葆光（一五）と謂ふ。

（一）眞に偉大なる道は名づくべき名なし（二）大なる言は無言なり。妄に辯ずれば言の威力損す（三）大なる仁は愛無偏頗の小節に拘らざれば仁ならざる如し（四）大なる廉潔は圭角なし（五）大なる勇氣は血氣に任せて人を害はず（六）道の明瞭なるは道ならず（七）辯ずるときは言たる價値なし（八）一定偏私の傾向あるときは大成せず（九）廉潔は淸きに拘する時は眞實ならず（一〇）人を害へば勇成立せず（一一）道辯仁廉勇の五者　元來の本質は圓滿無礙なるものなれども明瞭辯淸忮の方向を取るときは圭角多礙に墮し第二義に墮つ（一二）知は現象世界に於ける相對知に止まらずして絶對不可知の境に止まるときは申分なし（一三）若し不言の辯不道の道を知るならば、之を天理卽ち宇宙原理の集合點といふ（一四）其の知無限量にして而も其の然る所以を知らず（一五）前に出でたる滑疑の

三。而況自ㇾ有適ㇾ有乎。無ㇾ適焉。因ㇾ是已。夫道未二始有一ㇾ封。言未二始有一ㇾ常。爲ㇾ是而有ㇾ畛也。請言二其畛一。有ㇾ左有ㇾ右。有ㇾ倫有ㇾ義。有ㇾ分有ㇾ辯。有ㇾ競有ㇾ爭。此之謂二八德一。六合之外。聖人存而不ㇾ論。六合之内。聖人論而不ㇾ議。春秋經ㇾ世。先王之志。聖人議而不ㇾ辯。故分也者有ㇾ不ㇾ分也。辯

生じて窮極無し（一三）齊物の地に住して分化せざらんとせば此處に頼りて動かざるのみ

夫れ道は未だ始めより封(一)あらず。言は未だ始めより常(二)あらず。是となせば畛あり(三)、請ふ其の畛を言はん。(四)左あり右あり、倫あり義あり、分あり辯あり、競あり爭あり。此を之れ八德(五)と謂ふ。六合の外は聖人存じて論せず。(六)六合の內は聖人論じて(七)議せず。春秋(八)の世を經する(九)は先王の志なり、聖人議して辯ぜず。(一〇)故に分つ者は分たざる有り、辯ずる者は辯ぜざる有り。(一一)曰く、何ぞや。聖人は之を懷く。(一二)衆人は之を辯じて以て相示すなり。故に曰く、辯ずる者は見ざる有り。(一三)

（一）限界（二）言には一定せる意義なし（三）斷定を下せば疆界を生じ相對となる（四）左右の區別あり、同類あり、區分あり、辯別あり、競あり爭あり、一說に、有倫有義を有論有議とするものあり（五）八の功用（六）天地四方の外は卒遠にして實際の功用に遠きが故人之を措きて論せず（八）三代史籍の名、一般には孔子が魯の史記によつて作れる史書を斥す（九）世をはかりをさむ（一〇）史書の上にては是非の見を立つるのみにて其の理由を辯ぜず（一一）區分すべきものにても區分せず、理由を辯明すべきものにても辯明せず（一二）內にして外に見さず（一三）辯明を試むるものは　を見ざることあり

吾所レ謂之其果有レ謂乎。其果無レ謂乎。

天下莫レ大二於秋毫之末一。而太山爲レ小。莫レ壽二乎殤子一。而彭祖爲レ夭。天地與レ我並生。而萬物與レ我爲レ一。既已爲レ一矣。且得レ有レ言乎。既已謂二之一一矣。且得レ無レ言乎。一與レ言爲レ二。二與レ一爲レ三。自レ此以往巧曆不レ能レ得。而況其凡乎。故自レ無適レ有。以至二於

天下は秋毫(一)の末より大なるは莫くして、而して太山(二)を小と爲す。殤子(三)より壽なるは莫くして、而して彭祖(四)を夭と爲す。天地(五)我と並び生じて、萬物我と一たり。既に已に一たり、且言有りとするを得るか(六)、既に已に之を一と謂ふ。且言無しとするを得るか(七)。一と言と二と爲る(八)。二と一と三と爲る(九)。此より以往は巧歷も得る能はず(一〇)。而るを況んや其の凡をや。故に無よりして有に適くも、以て三に至る(一一)。而るを況んや有より有に適くをや(一二)。適くこと無からんとせば、是に因るのみ(一三)。

(一) 秋に脫けかはれる兎の毛にして至微なるもの (二) 泰山、山東の高山なり。大といひ小といふも相對的の觀念なるを以て、小なるものを以てすれば兎毛も以て大なりとすべく、大なるものを以てすれば泰山も以て小なりとすべし (三) 幼稚にして死する嬰兒 (四) 前に出づ、古代の長壽者、殤子を標準として彭祖も短命とする理前と同じ (五) 天地は我と與に存し萬物も我と相對し (六) 既に萬物と我と一たらば是非の論を挿み得るか (七) 既に一といふ以上は絕對に非ずして一ならざる物と對するが故に是非の論辯ありとするを得るか (八) 萬物と我と一なる上に又此論の言を以て一といへば二となる (九) 其の二と元の本體なる一を加へれば三となる (一〇) 是より以上は數學の名人も計算し得ず (一一) 相對的の有無と元の無と合せて三 (一二) 現實に卽して有より有に適く時は萬殊の差別を

是不類乎。類與不類相與爲類。則與彼無以異矣。雖然。請嘗言之。有始也者。有未始有始也者。有未始有夫未始有始也者。有有也者。有無也者。有未始有無也者。有未始有夫未始有無也者。俄而有無矣。而未知有無之果孰有孰無也。今我則已有謂矣。而未知

を言はん。(五)始といふものあり。(六)未だ始めより始めあらずといふ者あり、(七)未だ始めより夫の未だ始めより、始めあらざることあらずといふものあり。有といふものあり、無といふものあり、(八)未だ始めより無あらずといふものあり、(九)未だ始めより夫の未だ始めより無有らざること有らずといふ者あり。(一〇)俄にして有無あり。而して未だ知らず、(一一)有無の果して孰か有にして、孰か無なるか。(一二)今我は則ち已に謂ふ有り、而して未だ知らず、吾が謂ふ所の其れ果して謂有るか、其れ果して謂無きかを。

(一) 今先づ此に一の立論ありとせんに (二) 自己の意見が其の立論と一致するかせざるか (三) 一致すると一致せざるとに係らず、與に一致さすれば彼の立論と自己の意見と異なる所なし (四) 彼と我と異なる所無きゆゑ、言はずとも可なれど試みに一言すべし (五) 萬物には始めあり (六) 始めより溯れば無始がある (七) 無始より溯れば有始無始を超越したる無始がある (八) 無々といふものあり (九) 無々々といふものあり (一〇) 無々々の眞境より忽然として有無を生ず (一一) 有無とはいへど有無は素相對觀念なれば實際どちらを有としどちらを無とせん (一二) 今我は前の如く謂ふ所ありしが、吾が謂ふ所果して是にして謂れありや無しや知らず

枝策也。惠子之據梧也。三子之知幾乎。皆其盛者也。故載之末年。唯其好之也。以異於彼。其好之也。欲以明之彼。非所明而明之。故以堅白昧終。而其子又以文之綸終。終身無成。若是而可謂成乎。雖我亦成也。若是而不可謂成乎。物與我無成也。是故滑疑之耀。聖人之所圖也。爲是不用而寓諸庸。此之謂以明。

べき點なし (四) 物有れども境界區別なし (五) 境界區別はあれども是非善惡の見なし (六) 平等の價値なかるべき萬物に是非の値踏が施さるゝが是れ道の損する理由 (七) 愛憎好惡の私愛の生ずる所以 (八) 斯くの如く道の成ると虧くるとが有りとするも無しとするも差別の見に住するにて、齊物の見よりすれば成虧以上に超越す (九) 成虧を有りとするは例へば昭氏が琴を彈ずる如し (一〇) 名は文、鄭の人、善く琴を鼓す。琴を鼓すれば既に聲ありて成虧の相對的意義を生ず (一一) 鼓せざれば既に聲無く而して亦成用なし (一二) 字は子野、晉の平公の樂師 (一三) 杖を以て節を撃つ (一四) 前に出づ。梧は几なり (一五) 三人の知は其の極盛まで盡くすに近し (一六) 晩年に至るまで從事して止めず (一七) 三人の藝能を好むや他と異にす (一八) 自己の藝能を明にして他人にも承認せしめんとす (一九) 自得に甘んじて敢へて他に表明すべきものにあらざるに之を他に表明す (二〇) 當時の辯士の堅白同異の說 (二一) 昭文の子又父の緒業を以て世を終へ一生成ることなし (二二) 自ら是とするものは皆成るといふべし (二三) 物と我と其の是を異にせるものは成ること無し (二四) 不明の明は聖人の事とする所なり (二五) 聖人は己の是とする所を用ひずして是非兩ながら世人の用ふる所に寄り從ふ

今且有言於此。不知其與是類乎。其與

今且此に言あり、知らず、是れと類するか、其れ是れと類せざるか、類すると類せざると、相與に類を爲せば、則ち彼と以て異なるなし。然りと雖も請ふ嘗みに之

可以加矣。其次以爲有物矣。而未始有封也。其次以爲有封焉。而未始有是非也。是非之彰也。道之所以虧也。道之所以虧。愛之所以成。果且有成與虧乎哉。果且無成與虧乎哉。有成與虧。故昭氏之鼓琴也。無成與虧。故昭氏之不鼓琴也。昭文之鼓琴也。師曠之

是非あらざるなり。(六)是非の彰るゝや、道の虧くる所以なり。道の虧くる所以は(七)愛の成る所以なり。(八)果して且成ると虧くるとありや、果して且成ると虧くると無きや。(九)成ると虧くると有るの故は、(一〇)昭氏の琴を鼓するなり。(一一)成ると虧くるとなきの故は、昭氏の琴を鼓せざるなり。昭文の琴を鼓するや、(一二)師曠の(一三)策を枝つや、(一四)惠子の梧に據るや、(一五)三子の知は其の盛なるを皆すに幾き者なり、故に之を(一六)末年に載とす。唯(一七)其の之を好むや、以て彼に異にす。其の之を好むや、以て之を(一八)彼に明にせんと欲す。(一九)明にする所に非ずして、而して之を明にす、故に(二〇)堅白の昧を以て終る。而して(二一)其の子又文の綸を以て終り、終身成ること無し。是の若くして成ると謂ふ可きか、(二二)我と雖も亦成るなり。是の若くして成ると謂ふ可からざるか、(二三)物と我と成ること無きなり。是故に(二四)滑疑の耀は聖人の圖る所なり。是が爲めに用ひず(二五)して諸を庸に寓す、此を之れ明を以てすと謂ふ。

(一) 其の知慧極度まで到達す　(二) 天地萬物を遺れ我を忘れ、曠然として累ひなしとする者　(三) 極度なれば加ふ

通也者得也。適得而幾矣。因レ是已。已而不レ知二其然一。謂二之道一。勞二神明一爲レ一。而不レ知二其同一也。謂二之朝三一。何謂二朝三一。曰狙公賦レ芧。曰朝三而莫四。衆狙皆怒。曰然則朝四而莫三。衆狙皆悅。名實未レ虧。而喜怒爲レ用。亦因レ是也。是以聖人和レ之以二是非一。而休二乎天鈞一。是之謂二兩行一。

(一) 可なるものをば之を不可し、、不可なるものをば之を不可として我見を立てず (二) 行ふべき道あれば之を成し、謂ふべきことあれば之を然りとして自然に從ふ (三) 如何なるをか然りとし如何なるをか然らずとする、然るを然りとし然らざるを然らずとす (四) 萬物は本來然りとすべき所及び可なる所あり (五) 梁にして橫 (六) 柱にして縱 (七) 癩病にして醜なるもの (八) 越王句踐が呉王夫差に獻ぜし美人 (九) 怪しく正しからぬもの (一〇) 物は別れて萬殊なるも、道は通じて一なり (一一) 物の分解滅盡するは即ち生ずるなり (一二) 物の生ずるは滅ぶなり (一三) 生成と毀壞と共に一に歸す (一四) 道に通達したる人 (一五) 相對の見を用ひずして庸といふ見地より見る (一六) 理に通ずるといふこと (一七) 道に近し (一八) 是によるのみにして其の然る所以を知らず (一九) 精神を勞して一元說を立てながら、實は萬物の同じきを知らざるものを朝三といふ (二〇) 猿の飼養者 (二一) 橡の實を猿に分ち與ふ (二二) 朝は三個與へ暮は四個與ふ (二三) 名實未だ損することなく合計は七個なるに或は喜び或は怒る (二四) 是非の見に囚はるればなり (二五) 是非を混合して自然の平等に歸せしむ (二六) 是非偏倚なき行

古之人其知有レ所レ至矣。惡乎至。有下以爲二未レ始有一レ物者上。至矣盡矣。不レ

古の人、其の知至る所あり、惡にか至る。以て未だ始めより物あらずと爲すもの有り。至れり、盡せり、以て加ふ可らず。其の次は以て物ありと爲して、而して未だ始めより封有らざるなり。其の次は以て封ありと爲して、而して未だ始めより

之而然。惡乎然。然二於然一。惡乎不レ然。不レ然二於不一レ然。物固有レ所レ然。物固有レ所レ可。無二物不一レ然。無二物不一レ可。故爲レ是擧下莛與レ楹、厲與二西施一。恢恑憰怪上道通爲レ一。其分也成也。其成也毀也。凡物無二成與一レ毀。復通爲レ一。唯達者知二通爲一レ一。爲レ是不レ用。而寓二諸庸一。庸也者用也。用也者通也。

物固より然りとする所あり、物固より可とする所あり、物として然らざる無く、物として可ならざる無し。故に是が爲に莛と楹と、厲と西施と、恢恑憰怪なるを擧げて、道は通じて一たり。其の分るゝは成るなり、其の成るは毀つなり、凡そ物は成ると毀つとなく復た通じて一たり。唯達者のみ通じて一たるを知る。是が爲めに、用ひずして而して諸を庸に寓す。庸なる者は用なり、用なる者は通なり、通なる者は得なり、適〻得て而して幾し。是に因るのみ。已にして其の然るを知らず、之を道と謂ふ。神明を勞して一を爲して、而して其の同じきを知らざるなり、之を朝三と謂ふ。何をか朝三と謂ふ、曰く、狙公の芧を賦するに、曰く、朝は三にして暮は四と。衆狙皆怒る。曰く、然らば則ち朝は四にして莫は三と。衆狙皆悅ぶ。名實未だ虧けずして、而して喜怒用を爲す。亦是に因ればなり。是を以て聖人之を和するに是非を以てして、天鈞に休す。是を之れ兩行と謂ふ。

是一乎哉。果且無二彼是一乎哉。彼是莫レ得二其偶一。謂二之道樞一。樞始得二其環中一。以應二無窮一。是亦一無窮。非亦一無窮也。故曰。莫レ若レ以レ明。以レ指喩二指之非一レ指。不レ若三以レ非レ指喩二指之非一レ指也。以レ馬喩二馬之非一レ馬。不レ若三以レ非レ馬喩二馬之非一レ馬也。天地一指也。萬物一馬也。可二乎可一。不二可乎不可一。道行レ之而成。物謂レ

(一)可を可とし、不可を不可とす。(二)道之を行へば成し、物之を謂へば然りとす。(三)惡(いづく)にか然りとする、然るを然りとす。惡(いづく)にか然らずとする、然らざるを然らずとす。

(一) 世上の事物は彼に非るものなく亦是に非るものもなし、皆立脚地によつて異るのみ (二) 非我に立脚地を置くときは自我はわからぬ (三) 自我の立脚からすれば自我の眞相分明、自知則知之は自是則知之ならんかといふ說あり (四) 古語に曰く、非我は自我から發生せしもの、自我は亦非我によつて存するもの (五) 彼と是との二元を立つるは方生の說なり。方生は相對の意 (六) 方生相對の說によるとなると生と死、死と生、可と不可、不可と可、是と非、非と是相對立して絕對根本の解法つきがたし (七) 聖人は方生の說によらずして天理に照し見る (八) 聖人の說は方生の說より進歩すれども因は是に因據するものにて是非の境に超越せず (九) 是と彼、彼と是同じく一元に歸す (一〇) 彼と是との間に是と非と相分れず彼に是非あり是に是非あり (一一) 彼と是との名目を立つることが既に非にして、果して彼是たるものありや無しや (一二) 彼と是とは離會致合して相對偶せず (一三) 樞はクルル、扉を開閉する要樞、道樞は根本眞理ともいふべきか (一四) 樞を承くるヒヂツボ (一五) 樞がヒヂツボに嵌りて無限の働きをなす如く無窮の妙用に應ず (一六) 是なるものも無窮の眞理を有し、非なるものも無窮の眞理を有す (一七) 指の本體は我が有する肉體的の指に非ずして外に在ることを指を以て說明す (一八) 肉體的の指が指の本體其のものに非ざることを指に非るものを以て說明す (一九) 名目を以て物の本體を說明し能はずして本體外のものに直接すべきをいふこと指の例と同じ (二〇) 天地萬物凡て此の指と馬との如く、名目に拘泥しては眞相を得べからず

物無非彼。物無非是。自彼則不見。自知則知之。故曰。彼出於是。是亦因彼。彼是方生之說也。雖然。方生方死。方死方生。方可方不可。方不可方可。因是因非。因非因是。是以聖人不由。而照之于天。亦因是也。是亦彼也。彼亦是也。彼亦一是非。此亦一是非。果且有彼

物(一)、彼に非ざるは無く、物、是に非ざるは無し。(二)彼よりすれば則ち見えず。(三)自ら知れば則ち之を知る。(四)故に曰く、彼は是に出づ、是は亦た彼に因ると。(五)彼是は方生の說なり。然りと雖も(六)方に生ずれば方に死し、方に死すれば方に生ず。方に可なれば方に不可に、方に不可なれば方に可なり。是に因れば非に因り、非に因れば是に因る。是を以て(七)聖人は由らずして之を天に照す。(八)亦是に因るなり。(九)是れ亦彼なり、彼亦是れなり、(一〇)彼亦一是非なり、此亦一是非なり。(一一)果して且彼是ありや。果して且彼是なきや。(一二)彼是其の偶を得る莫し、(一三)之を道樞と謂ふ。樞始めて其の環(一四)中を得て、以て無窮に應ず。(一五)是も亦一無窮なり、非も亦一無窮なり、故に曰く、明を以てするに若くは莫しと。(一六)指を以て、(一七)指の指に非ざるを喩さんより、(一八)指に非ざるを以て、指の指に非ざるを喩さんには若かざるなり。(一九)馬を以て馬の馬に非ざるを喩さんより、馬に非ざるを以て馬の馬に非ざるを喩さんには若かざるなり。(二〇)天地は一指なり、萬物は一馬なり。

吾獨且奈何哉。夫言非レ吹也。言者有レ言。其所レ言者。特未レ定也。果有レ言邪。其未ニ嘗有一レ言邪。其以爲レ異ニ於鷇音一。亦有レ辯乎。其無レ辯乎。道惡乎隱而有ニ眞僞一。言惡乎隱而有ニ是非一。道惡乎往而不レ存。言惡乎存而不レ可。道隱ニ於小成一。言隱ニ於榮華一。故有ニ儒墨之是非一。以是ニ其所レ非。而非ニ其所レ是。欲下是ニ其所レ非。而非中其所上レ是。則莫レ若レ以レ明。

非ある。道は（一五）惡にか往いて存せざる、言は惡にか存して可ならざる。道は小成（一六）に隱れ、言は榮華（一七）に隱る。故に儒墨（一八）の是非あり、以て其の非とする所を是として、而して其の是とする所を非とす。其の非とする所を是として、而して其の是とする所を非とせんと欲せば、明（一九）を以てするに若くは莫し。

（一）實在の精神は隨うて之を規範とす　（二）世事變易して止まざる理を知りて心に自得するもの〻み成心あるに非ず　（三）心に具足完成する所なくして是非の見あり　（四）今日越に往きながら前日に至りしことありといふ如く虚妄なり　（五）無きものを有りとする　（六）夏の禹王と雖も知ること能はず、禹王は天下を跋渉して九州を定むるの功あり　（七）人の言ふは風の吹くと同じからず　（八）人が言ふは言ふべき理ありてなり　（九）言ふべき理ありて言ふなれど言ふ所の是非定まる所なきのみ　（一〇）果して言ふべき理あるにや將た言ふべき理なきにや　（一一）孵化したばかりの雛の鳴聲、無心に發せし聲なり　（一二）區別ありや區別なきや　（一三）眞正なる道は何處に隱れて元來純眞唯一なるべき道に眞僞の二相を生ぜしや　（一四）眞正なる言は何處に隱れて是非の二相を生ぜしや　（一五）道は何處にも存在し言は何處に在るも可なるべきはず　（一六）私意に隱る、故に眞僞を生ず　（一七）詩術自負に隱る〻故に是非生ず　（一八）孔子の教を奉ずる派と墨子の教を奉ずる派との間に是非批難の聲あり　（一九）非とする所を是とし是とする所を非とするが如くなし根本的に判斷するには明を以てするが第一

而不レ知二其所一レ歸。可レ不レ哀邪。人謂二之不死一奚益。其形化。其心與レ之然。可レ不レ謂二大哀一乎。人之生也。固若レ是芒乎。其我獨芒。而人亦有二不レ芒者一乎。

困苦の貌 二八 落ちつく所なし 二九 人之を未だ死なずといふも死と同然 三〇 形體化すれば心も亦化す 三一 闇昧にしてとりとめなし

夫隨二其成心一而師レ之。誰獨且無レ師乎。奚必知レ代。而心自取者有レ之。愚者與有焉。未レ成二乎心一。而有二是非一。是今日適レ越。而昔至也。是以レ無レ有爲レ有。無レ有爲レ有。雖レ有二神禹一。且不レ能レ知。

夫れ其の成心に隨うて之を師とせば、誰か獨り且た師なからんや。(一)奚ぞ必ずしも(二)代るを知りて、而して心に自ら取る者、之れあるのみならむ。愚者も與に有り。(三)未だ心に成らずして、而して是非あるは、(四)是れ今日越に適きて而して昔至れるなり。(五)是れ有る無きを以て有るとなすなり。有る無きを有りと爲さば、(六)神禹ありと雖も、且つ知ること能はじ。吾れ獨り且た奈何せんや。(七)夫れ言は吹に非ざるなり、(八)言ふは言ふこと有り、(九)其の言ふ所の者特り未だ定らざるのみ。(一〇)果して言ふこと有りや、其れ未だ嘗て言ふこと有らざるや、其れ以て(一一)鷇の音に異なりとせんに、亦た(一二)辯ありや、其れ辯無きや。(一三)道は惡くにか隱れて眞僞ある、(一四)言は惡にか隱れて是

與レ爲レ親。汝皆說レ之乎。其有レ私焉。如レ是皆有レ爲二臣妾一乎。其臣妾不レ足二以相治一乎。其遞相二爲君臣一乎。其有二眞君一存焉。如求。得二其情一與不レ得。無二益損一乎其眞一。一受二其成形一。不レ亡以待レ盡。與レ物相刃相靡。其行盡如レ馳。而莫二之能止一。不二亦悲一乎。終身役役。而不レ見二其成功一。苶然疲役。

る可んや。人之を(二九)不死と謂ふも奚ぞ益あらん。(三〇)其の形、化すれば其心も之と然り、大哀と謂はざる可けんや。人の生や、固より是の如く芒たりや、(三一)其れ我獨り芒にして、而して人亦芒ならざる者ありや。

(一) 未來を心配するを慮といひ過去を悔むを歎といふ　(二) 心の變じ易きと執著して動かざると　(三) 煩勞と安逸　(四) 中情を發露すると態度を作つて表面を飾ると　(五) 音樂の音が竹管の空虛より出づる如く、蒸暖・濕氣によつて菌の生ずる如く、人心の喜怒其の他の情は起り亡ぶること定めなし　(六) 喜怒等十二の情は晝夜眼前に交代去來してやまざれど其のきざすもとを知らず　(七) 其の捉ふべき所なきを歎息するなり　(八) 日常旦暮朝夕に此の情を經驗し得　(九) 何か由來する根本ありてそれより發生顯現するか　(一〇) 彼れ造化のしわざに非ざれば我是の如くなる能はじ　(一一) 我身無きときは造化の妙用在りとも認むることなし　(一二) 精神の主宰者ある如くなれども特に其の非を見るを得ず　(一三) 眞宰の發動して人間の行動となることは確實なれども、眞宰其のもの、形は見えず　(一四) 實あれども形は無し　(一五) 百の骨節、眼耳鼻口前陰後陰の九穴、肝心脾肺腎の五臟等をいふ、又六藏と六腑と同じといふ　(一六) 人體に俱備す　(一七) 身體の何れの部に親しきや　(一八) 全部一樣に好むか　(一九) 私して特に一箇所を好むか　(二〇) 諸部凡て臣妾僕婢の如き賤役にして互に統治すること能はざるか　(二一) 諸部交る〳〵互に君臣の關係に立ちて統一するものとせらるゝものとありや　(二二) 眞宰の實を知り得ると得ざるとにかゝはらず眞宰其のものに損益なし　(二三) 眞宰が形體を受けて之に宿る時は形體を亡ぼさずして死滅を待つ　(二四) 人間は外物に背き傷け又相愛著す　(二五) 形體を減耗すること馳せゆく如く速か　(二六) 一生勞苦すれども成功せず　(二七) 疲憊

喜怒哀樂慮
嘆變執姚佚
啓態。樂出レ虛。
蒸成レ菌。日夜
相ニ代乎前一。而
莫レ知ニ其所一レ萌。
已乎已乎。旦
暮得レ此。其所レ
由以生乎。非レ
彼無レ我。非レ我
無レ所レ取。是亦
近矣。而不レ知ニ
其所一レ爲レ使。若レ
有ニ眞宰一。而特
不レ得ニ其朕一。可レ
行已信。而不レ
見ニ其形一。有レ情
而無レ形。百骸
九竅六藏。賅
而存焉。吾誰

喜怒あり、哀樂あり、(一)慮歎あり、(二)變執あり、(三)姚佚あり、(四)啓態あり、(五)樂は虛に出で、蒸は菌を成す。(六)日夜前に相代りて、(七)其の萌す所を知る莫し。已みなんか已みなんか、(八)旦暮此を得、(九)其の由る所、以て生ずるか。(一〇)彼に非ざれば我無し、(一一)我に非ざれば取る所無し。是れ亦近し、而して其の使しめらるゝ所を知らず。(一二)眞宰あるが若くして、特に其の朕を得ず。(一三)行ふべきは已に信にして、其の形を見ず、(一四)情あれども形なし。(一五)百骸九竅六藏賅ねて(一六)存す。吾、(一七)誰と與にか親たらむ。(一八)汝皆之を說ぶか、其れ私(一九)する有りや。是の如きは皆臣妾(二〇)たることありや、其の臣妾は以て相治むるに足らざるか。其れ遞(二一)に君臣と相爲るか、其れ眞君ありて存せりや。如し其の情(二二)を求め得ると、得ざると、其の眞に益損なし。一たび(二三)其の成形を受くれば、亡さずして以て盡くるを待つ。(二四)物と相刃ひ相靡き、其の行き盡すこと馳する(二五)が如くにして、之を能く止むること莫し、亦悲しからずや。(二六)終身役役として、而して其の成功を見ず、(二七)茶然として疲役して、(二八)其の歸する所を知らず、哀しまざ

日以㆑心鬪。縵者窖者密者。小恐惴惴。大恐縵縵。其發若㆓機栝㆒。其司㆓是非㆒之謂也。其留如㆓詛盟㆒。其守㆑勝之謂也。其殺如㆓秋冬㆒。以言㆓其日消㆒也。其溺之所㆑爲㆑之。不㆑可㆑使㆑復㆑之也。其厭也如㆑緘。以言㆓其老洫㆒也。近㆑死之心。莫㆑使㆑復㆑陽也。

り。其の發(一四)する機栝の若しとは、其の是非(一五)を司るの謂なり。其の留(一六)まる詛盟の如しとは、其の勝(一七)を守るの謂なり。其の殺(一八)すると秋冬の如しとは、以て其の日に消して(一九)、其の溺るゝの之くを爲す所(二〇)、之を復らしむ可らざるを言ふなり。其の厭(二一)さるゝや緘るが如しとは、以て其の老洫(二二)にして、死に近きの心、復陽(二三)せしむる莫きを言ふなり。

(一) 大なる知慧は從容とおちつく (二) コセコセと分け隔てをなす (三) 大なる議論は美しく盛んなり (四) あとさきを顧みる (五) 夜眠れば魂外境に交つて夢を見る (六) 晝間眼覺むれば身體が外境に向つて開き、與に外物に接觸して交渉をなす (七) 毎日心の上に外物と相鬪ふ (八) グズグズして決斷なきもの (九) 陰險なるもの (一〇) 算勘のこまかなるもの (一一) 小事に恐るゝもの (一二) ビクビクと小心 (一三) 思ひ長し (一四) 心の發動することと弩の機、弓の筈を發する如く必ず目ざす所に當てんと欲す (一五) 是非を自分のおもふまゝに支配し是を執り非を斥く (一六) 一つの事に留り守りて動かざること誓約の如くす (一七) 優勝の地位を固守す (一八) 憔悴することと秋冬の氣の肅殺なる如し (一九) 日々に身神消耗して人欲に溺れ行くことをなす (二〇) 元通り恢復しがたし (二一) 心性の壓迫せらるゝこと物に封ぜられたる如し (二二) 老衰して死を待つのみの心 (二三) 陽氣にかへる、よみがへる

唱レ喁。冷風則小和。飄風則大和。厲風濟。則衆竅爲レ虛。而獨不レ見二之調調之刁刁一乎。

して吹く音恰も人の掛聲の如く呼應して響くをいふ　(一九) 清冷輕細なる小風は小さく調子を立つ　(二〇) 疾風　(二一) 激風止めば凡ての穴聲を收む　(二二) 調々刁々は風既に吹き止みて樹葉動搖せるにいふ

子游曰。地籟則衆竅是已。人籟則比竹是已。敢問二天籟一。子綦曰。夫吹二萬不一レ同。而使二其自一レ己也。咸其自取。怒者其誰邪。

子游曰く、地籟は則ち衆竅是れのみ。人籟は則ち比竹(一)是れのみ。敢へて天籟を問ふと。子綦曰く、夫れ萬の同じからざるを吹いて、而して其をして己よりせしむ。(二)咸く其れ自ら取る。(三)怒る者は其れ誰ぞや。(四)

(一) 竹管を編んで吹く、簫笙の類　(二) 風は萬竅の同じからざるを吹いて而して萬竅自ら其の音を發するが如くせしむ　(三) 萬竅凡て皆自ら音を發し得たりとなす　(四) 是非得失互に爭ひて萬竅怒號して聲氣の不平なるが如くなるは何者か我に然せしむるぞ、是天のせしむる所

大知閑閑。小知間間。大言炎炎。小言詹詹。其寐也魂交。其覺也形開。與接爲レ構。

大知は閑閑たり、(一)小知は間間たり。(二)大言は炎炎たり、(三)小言は詹詹たり。(四)其の寐ぬるや魂交はり、(五)其の覺むるや形開き、(六)與に接して構を爲し、(七)日に心を以て鬪ふ。(八)縵なる者あり、(九)窖なる者あり、(一〇)密なる者あり、(一一)小恐は惴惴たり、(一二)大恐は縵縵た(一三)

聞二地籟一。女聞二地籟一而未レ聞二天籟一夫。

子游曰。敢問二其方一。子綦曰。夫大塊噫氣。其名爲レ風。是唯無レ作。作則萬竅怒呺。而獨不レ聞二之翏翏一乎。山林之畏佳大木。百圍之竅穴。似レ鼻似レ口似レ耳似レ枅似レ圈似レ臼似レ洼者。似レ汙者。激者。謞者。叱者。吸者。叫者。譹者。宎者。咬者。前者唱レ于。而隨者

子游曰く、敢へて(一)其の方を問ふと。子綦曰く、夫れ(二)大塊の噫氣其の名を風と爲す。(三)是れ唯作ることなし。作れば則ち(四)萬竅怒呺す。而、獨り之の(五)翏翏を聞かざるか。(六)山林の畏佳たる大木、(七)百圍の竅穴の、鼻に似、口に似、耳に似、(八)枅に似、(九)圈に似、臼に似、(一〇)洼に似る者、(一一)汙に似る者、激する者、(一二)謞する者、(一三)叱する者、(一四)吸ふ者、叫ぶ者、(一五)譹する者、(一六)宎する者、(一七)咬する者、前なる者は(一八)于と唱へて、隨ふ者は喁と唱ふ。(一九)冷風なれば則ち小和し、(二〇)飄風なれば則ち大和す。厲風濟めば、則ち(二一)衆竅虛と爲る。而、獨り之の(二二)調調たると、之の刁刁たるとを見ざるか。

(一) 地籟天籟の說を求らん (二) 大塊のオクビを名づけて風といふ (三) 風はたゞにては起らず起る時は萬竅怒號す (四) あらゆる穴が盛に叫ぶ (五) 長風の聲 (六) 山林の動搖せる大木 (七) 臼か、へこみある大木の穴 (八) マスガタ、柱上の方木 (九) マゲモノ、曲物 (一〇) 小さき溜水のクボミ、水、牛跡に聚まるを洼といふと (一一) 溜水のクボミ、洼より大なり (一二) 鳴矢の飛ぶ音の如きもの (一三) 叱咤の聲の如きもの (一四) 氣を吸ふ如き音を立つるもの (一五) 泣きさけぶ如きもの (一六) 深く幽かなるもの (一七) 哀切なるもの (一八) 于喁は掛聲、風の前後

南郭子綦隱レ几而坐。仰レ天而噓。嗒焉似レ喪二其耦一。顏成子游立侍二乎前一曰。何居乎。形固可レ使レ如二槁木一。而心固可レ使レ如二死灰一乎。今之隱レ几者。非二昔之隱レ几者一也。子綦曰。偃不二亦善一乎。而問レ之也。今者吾喪レ我。汝知レ之乎。女聞二人籟一。而未レ

齊物論(一)

(二)南郭子綦几に隱りて坐し、(三)天を仰いで噓す、(四)嗒焉として其の耦を喪ふに似たり。(五)顏成子游、立つて前に侍す。曰く、(六)何居や、(七)形は固より槁木の如くならしむべく、而して(八)心は固より死灰の如くならしむべきか。(九)今の几に隱る者は、昔の几に隱る者に非ざるなりと。子綦曰く、(一〇)偃、亦善からずや、而の之を問ふことや。今は吾、(一一)我を喪ふ。汝之を知るか。女は(一二)人籟を聞きて、未だ地籟を聞かず、女は地籟を聞きて、未だ天籟を聞かざるかなと。

(一) 此の篇世の學問其の嚮ふ所を異にし己を立てゝ相共非するは、是非兩ながら忘れて之を自然に歸するに如かずとして紛々多岐の物論を一に合する所以を説く (二) 楚の昭王の庶弟、莊王の司馬 (三)・天を仰いで緩かに息を吐く (四) 我を忘れて物我の相對を失へるが如し (五) 姓は顏、名は偃諡は成、字は子游、子綦の弟子 (六) 如何なされしや (七) 形體を枯木の如くにす (八) 心を火氣なき灰の如くす (九) 先生現在几によらるゝ有樣は以前に几によられし時の有樣と異なり (一〇) 子游の名、汝の問ひも尤もなり (一一) 自我を忘れて物と差別なし (一二) 人間の作爲による音響、即ち簫管の如き音樂

顧。今子之言。大而無ㇾ用。衆所二同去一也。莊子曰。子獨不ㇾ見二狸狌一乎。卑ㇾ身而伏。以候二敖者一。東西跳梁。不ㇾ避二高下一。中二於機辟一。死二於罔罟一。今夫斄牛。其大若二垂天之雲一。此能爲ㇾ大矣。而不ㇾ能ㇾ執ㇾ鼠。今子有二大樹一。患二其無一ㇾ用。何不ㇾ樹二之於無何有之鄕一。廣莫之野一。彷徨乎無二爲其側一。逍遙乎寢二臥其下一。不ㇾ夭二斤斧一。物無ㇾ害者。無ㇾ所ㇾ可ㇾ用。安所二困苦一哉。

此れ能く大たり。(一三)而るに鼠を執ふること能はず。今、子大樹ありて、其の用なきを患へば、(一四)何ぞ之を無何有の鄕、廣莫の野に樹ゑて、(一五)彷徨乎として其の側に無爲に、(一六)逍遙乎として其の下に寢臥せざるや。(一七)斤斧に夭せられず、(一八)物の害するなき者は、(一九)用ふべき所なきも、安ぞ困苦する所あらんやと。(二〇)

(一)アフチの樹　(二)樹幹　(三)擁腫して繩墨が打てず　(四)曲りくねつてモノサシにあはず　(五)路の傍に捨て置くも匠工も顧みず　(六)足下の言大げさにして役に立たず　(七)衆人の共に去つて相手にせざる所　(八)狸の屬　(九)遊んでゐる鼠などを覗ふ　(一〇)走り跳つて地の高低を擇まず　(一一)ワナにかゝりアミに入つて死す　(一二)大野牛　(一三)大なることは十分大なり　(一四)役に立たぬを苦にする　(一五)何も無き郷里、果てなく廣き野、共に假設の名、寂絶無爲の地に譬ふ　(一六)ブラブラとして其の樹の側に無爲閑寂を樂しむ　(一七)ノツソリとして其の樹の下に寢る。用不用を超越して無爲を事とするをいふ　(一八)大なるを斧といひ小なるを斤といふ　(一九)樹齡若くして斫られず　(二〇)世上の用向には立ちがたきも困苦する所なし。莊子の言說大に過ぎて迂なるが如きも亦大用あるを以て思ふべしとなす

朝而鬻ニ技百金ー。請與レ之。客得レ之。以說ニ吳王ー。越有レ難。吳王使ニ之將ー。冬與ニ越人ー水戰。大敗ニ越人ー。裂レ地而封レ之。能不龜手一也。或以封。或不レ免ニ於洴ニ澼絖ー。則所レ用之異也。今子有ニ五石之瓠ー。何不レ慮下以爲ニ大樽ー而浮ニ乎江湖上。而憂ニ其瓠落無ト所レ容。則夫子猶有ニ蓬之心ー也夫。

（六）重くして擧げがたし　（七）剖きて飲器となす　（八）平たく淺し　（九）盛大ならぬにあらねど役にたゝぬゆゑ碎きすてたり　（一〇）ヒヾのきれぬ藥　（一一）代々眞綿を晒すを職業とす　（一二）其の藥法を百金に買はんと申込む　（一三）一族を集めて相談す　（一四）一ケ年の收利僅金のみ、金の重さ一斤を一金とす　（一五）秘法を百金に賣る　（一六）兵端をひらく　（一七）冬越人と船戰し不龜手の藥を用ひて、水師の動作敏活なれば大に之を敗る　（一八）土地を割きて侯に封ず　（一九）ヒヾの藥たるに於ては同一なれども一は封侯となり、一は絖を晒す職人たるを免れざるは之を用ふる所の異なればなり　（二〇）大きな酒樽を作る　（二一）海河に泛べて遊びまはることに氣がつかず　（二二）貴殿はまだ蓬が生えて道が塞がりし如く心壅蔽する所あり

惠子謂ニ莊子ー曰。吾有ニ大樹ー。人謂ニ之樗ー。其大本擁腫而不レ中ニ繩墨ー。其小枝卷曲。而不レ中ニ規矩ー。立ニ之塗ー。匠者不レ

惠子、莊子に謂つて曰く、吾に大樹あり。人之を樗（一）と謂ふ。其の大本（二）は擁腫（三）にして繩墨に中らず、其の小枝は卷曲（四）にして規矩に中らず。之を塗（五）に立つるに匠者も顧みず。今、子（六）の言大にして用なし。（七）衆の同じく去る所なり。莊子曰く、子獨り狸狌（八）を見ずや。身を卑うして伏し、（九）以て敖ぶものを候ふ。東西に跳梁（一〇）して高下を避けず、（一一）機辟に中り、罔罟に死す。今夫れ斄牛（一二）は其の大さ垂天の雲の若し、

樹之成。而實五石。以盛水漿、其堅不能自擧也。剖之以爲瓢。則瓠落無所容。非不呺然大也。吾爲其無用而掊之。莊子曰。夫子固拙於用大矣。宋人有善爲不龜手之藥者。世世以洴澼絖爲事。客聞之。請買其方百金。聚族而謀曰。我世世爲洴澼絖。不過數金。今一

て以て瓢と爲せば、則ち瓠落(七)にして容るゝ所なし。(八)呺然として大ならざるに非ざれども、吾は其の用なきが爲に之を掊けりと。莊子曰く、夫子は固より大を用ふるに拙なり。宋人に善く不龜手(九)の藥を爲るもの有り。(一〇)世世絖を洴澼するを以て事と爲す。客之を聞きて、其の方を百金に買はんと請ふ。(一一)族を聚めて謀りて曰く、我世世絖を洴澼するを爲すも、(一二)數金に過ぎず。(一三)今や一朝にして、技を百金に鬻ぐ。請ふ之を與へんと。客之を得て、以て吳王に說く。越と難あり、(一四)吳王之をして將たらしむ。(一五)冬越人と水戰し、(一六)大に越人を敗れり。地を裂きて之を封ず。(一八)能く不龜手なるは一なり。或は以て封ぜられ、或は絖を洴澼するを免れず。(一七)則ち用ふる所の異なればなり。今、子、五石の瓠あり。何ぞ以て大樽を爲りて、(一九)而して江湖に浮ぶことを慮らずして、(二〇)而して其の瓠落にして容るゝ所なきを憂ふるや。則ち夫子は猶ほ蓬の心あるかなと。(二一)

(一)石は也、魏の州　(二)魏の惠王　(三)大なる瓢箪の種を贈る　(四)實の大さ五石を容る　(五)飲料を入るれば

物莫之傷。大浸稽天不溺。大旱金石流。土山焦而不熱。是其塵垢粃糠。將猶陶鑄堯舜者也。孰肯以物爲事。

(八) アタセタする (九) 天下の事に心を勞せず (一〇) 此の神人をば何物も傷害することなし (一一) 大洪水が天に屆くほど出ても溺れず (一二) 大旱にて金石も融けて流る (一三) 野や山が焦げて草木枯るゝも熱を感ぜず (一四) 塵垢やシヒナとモミガラ (一五) 神人の爪の垢を以ても堯舜を作ることができる。陶は土器鑄は金器を造るなり (一六) 是の如きの人何ぞ外物にかゝづらはんや

宋人資章甫而適諸越。越人斷髮文身。無所用之。堯治天下之民。平海內之政。往見四子藐姑射之山。汾水之陽。窅然喪其天下焉。

(一)宋人、(二)章甫を(三)資として、越に適く。越人は(四)斷髮文身(五)之を用ふるに所なし。堯天下の民を治め、海內の政を平にす。往きて(六)四子を(七)藐姑射の山、(八)汾水の陽に見れば、(九)窅然として(一〇)其天下を喪へり。

(一) 宋人は愚直なりと見え、多くかゝる例に引く (二) 殷の禮冠 (三) 貨として賣らんために越にゆく (四) 髮を結ばずして體に入墨す、野蠻の俗なり (五) 禮冠を用ふる所なし (六) 許由、齧缺、王倪、被衣の四隱士 (七) 前出 (八) 汾水の北岸、堯此處に都すといふ (九) 茫然自失す (一〇) 天下を忘れて無己無功無名の境に到達したり。此の章前と接續せず、或は錯簡ならんといふ

惠子謂莊子曰。魏王貽我大瓠之種。我

(一)惠子、莊子に謂つて曰く、(二)魏王、我に(三)大瓠の種を貽れり。我、之を樹ゑて成る。而して(四)實五石。以て(五)水漿を盛れば、其れ堅くして自ら擧ぐること能はず。之を(六)剖い

雪。淖約若二處一子。不レ食二五穀一。吸レ風飲レ露。乘二雲氣一。御二飛龍一而遊二乎四海之外一。其神凝。使三物不二疵癘一。而年穀熟。吾以レ是狂而不レ信也。

乘り雲に乘る　(一二)天下の外に遊ぶ　(一三)其の神人の精神凝りて動かず　(一四)其のあたりの百物が傷を病むことなし　(一五)年々の五穀も豐熟す　(一六)常識に外れてゐて事實とは思はれず

連叔曰。然。瞽者無三以與二乎文章之觀一。聾者無三以與二乎鍾鼓之聲一。豈唯形骸有二聾盲一哉。夫知亦有レ之。是其言也。猶二時女一也。之人也。之德也。將下旁二礴萬物一以爲上レ一。世蘄二乎亂一。孰弊弊焉以二天下一爲レ事。之人也。

連叔曰く、然り。(一)瞽者は以て文章の觀に與ることなく、(二)聾者は以て鍾鼓の聲に與ることなしと。豈に唯(三)形骸に聾と盲と有るのみならんや、夫の知にも亦之れ有り。是れ其の(四)言や猶ほ時れ女がごときなり。(五)之の人や之の德や、將に(六)萬物を旁礴して以て一と爲さんとす。(七)世に亂を蘄めらるゝも、孰か(八)弊弊焉として、(九)天下を以て事とせんや。(一〇)之の人や物之を傷ること莫し、(一一)大浸天に稽れども溺れず、(一二)大旱に金石流れ、(一三)土山焦ぐれども熱せず。是れ其の(一四)塵垢・粃糠も(一五)將に猶ほ堯舜を陶鑄せんとする者なり。(一六)孰れか肯へて物を以て事とせんやと。

(一)盲人は色彩を見ること能はず、青赤之を文といひ赤白之を章といふ　(二)ツンボは鐘鼓の音をきくこと能はず　(三)身體の上にツンボとメクラがあるのみならず、知識の上にも不具者あり　(四)知識の上の聾盲といふは汝の如き人物をいふ　(五)神人の人格や德　(六)萬物を混同して一體となさんとす　(七)世に其を治めんことを要求せら

深林、不レ過二一枝一。偃鼠飲レ河、不レ過二滿腹一。歸休乎君。予無レ所レ用二天下一爲。庖人雖レ不レ治レ庖、尸祝不下越二樽俎一而代上レ之矣。

(一三)モグラモチ河の水を飲むも腹一ばい以上を要せず (一四)天子の美名を君のものとせん (一五)自分は天下を貴ふも不用なり (一六)料理人が料理を等閑にす (一七)カタシロとハフリ、共に司祭の人 (一八)酒を入るゝ器と肉を盛る器、祭器なり、之を打捨てゝ料理人と交代せず、吾が本分とし樂しむ所を捨てゝ他に奔らざるをいふ

肩吾問二於連叔一曰、吾聞二言於接輿一、大而無レ當、往而不レ反。吾驚二怖其言一、猶二河漢一而無レ極也。大有二逕庭一、不レ近二人情一焉。連叔曰、其言謂レ何哉。曰、藐姑射之山、有二神人居一焉。肌膚若二冰

(一)肩吾、連叔に問うて曰く、吾、言を(二)接輿に聞く、(三)大にして當なく、(四)往いて反らず。吾、其の言に驚き怖る。猶ほ(五)河漢の極なきが如し。(六)大に逕庭ありて、人情に近からずと。連叔曰く、其の言何をか謂ふと。曰く、(七)藐姑射の山に(八)神人の居るあり。(九)肌膚は冰雪の若く、(一〇)淖約として處子の若し。五穀を食はず、風を吸ひ、露を飲む。(一一)雲氣に乘り、飛龍に御して、(一二)四海の外に遊ぶ。其の神凝り、(一三)物をして(一四)疵癘せざらしめて、(一五)年穀熟すと。吾、是を以て(一六)狂として信ぜざるなり。

(一)何れも假設の人 (二)論語微子篇にある楚の狂接輿、姓は陸名は通といふ (三)言論廣大にして到りきはまる所なし (四)茫莫として歸著點なし (五)恰も銀河の茫莫として際涯なき如し (六)普通の說とは間隔ありて人の常情に近からず (七)想像上の山 (八)仙人 (九)肌理は雪の如く白し (一〇)美麗にして處女の如し (一一)雲に

堯讓二天下於許由一曰。日月出矣。而爝火不レ息。其於レ光也。不二亦難一乎。時雨降矣。而猶浸灌。其於レ澤也。不二亦勞一乎。夫子立而天下治。而我猶尸レ之。吾自視缺然。請致二天下一。許由曰。子治二天下一。天下既已治也。而我猶代レ子。吾將爲レ名乎。名者實之賓也。吾將爲レ賓乎。鷦鷯巢二於

堯(一)、天下を許由(二)に讓りて曰く、日月(三)出づるに爝火息まざれば、其の光に於ける、亦た難からずや。時雨(四)降りて而して猶ほ浸灌せば、其の澤に於ける、亦た勞せずや。夫子(五)立たば天下治まらん。而るに我猶ほ之に尸(六)たるは、我れ(七)自ら視て缺然たり。請ふ(八)天下を致さんと。許由の曰く、子、天下を治めて、天下既に已に治まれり。而るに我猶ほ子に代らば、吾、將た名の爲(九)にせんか、名は實の賓(一〇)なり。吾、將た賓の爲(一一)にせんか、鷦鷯(一二)深林に巢ふも、一枝に過ぎず、偃鼠(一三)河に飲むも滿腹に過ぎず。休(一四)を君に歸せん、予(一五)は天下を用つて爲す所無し。庖人(一六)庖を治めずと雖も、尸(一七)祝(一八)、樽俎を越えて之に代ることをせずと。

(一)帝堯なり、支那太古の聖王　(二)堯の時の隱者、箕山にかくる　(三)日月已に出でたるに炬火なほ照らすことを止めざるときは、其の光物を照すに於ける困難　(四)時を得たる時雨降れるに猶は水を引きて田にそゝぐときは潤ひに於て無用の勞、許由已に在るに堯天下を有つの不可をいふ　(五)許由をさす　(六)カタシロ、祭祀の時に神位に立つ人、其の實なくして其の位に居るをいふ　(七)我自ら我身を省みて足らず　(八)どうか天下を讓らん　(九)名を得んがために天子とならむ　(一〇)名は實の賓客、實とは其の身に屬する天地の正にして主なり名は客なり　(一一)實の賓たるもののためにに天子となり實を害することをなさじ　(一二)ミソサザイ深林に巣を作るも一本の枝を要す

竟。斯已矣。彼其於世。未數數然也。雖然猶有未樹也。夫列子御風而行。冷然善也。旬有五日而後反。彼於致福者。未數數然也。此雖免乎行。猶有所待者也。若夫乘天地之正而御六氣之辯。以遊無窮者。彼且惡乎待哉。故曰。至人無己。神人無功。聖人無名。

を累はさず (一一) 毀譽褒貶の境界を知る、即ち榮辱は己に存して他に在らざる故に己を守りて他を顧みず (一二) これ以上に出でず (一三) 世俗のことにコセコセとせず (一四) 物の外に超越せざる所あり

夫の列子(一)は風に御して行く。(二)冷然として善し。(三)旬有五日にして後に反る。(四)彼は福を致す者に於て、未だ數數然たらざるなり。(五)此れ行くを免ると雖も、猶ほ待つ所の者あり。(六)若し夫れ、天地の正に乘じ(七)六氣の辯を御して、(八)以て無窮に遊ぶものは、(九)彼れ且つ惡にか待たんや。(一〇)故に曰く、至人は己無く、(一一)神人は功無く、(一二)聖人は名無しと。(一三)

(一) 名は禦寇、鄭の人穆公と時を同じうす (二) 風に乘つて飛ぶ (三) 飄逸にして自在 (四) 十五日間にして復地上に反り來る (五) 人界の福祿を致すことにコセコセせず (六) 地上を行歩せずしてよけれど猶は風を待つ所あり (七) 天地の正しき道に乘ず (八) 陰、陽、風、雨、晦、明の變化に乘ぶ (九) 無限の絕對境に遊ぶ、即ち宇宙の本體に合一す (一〇) 何物をも待つことなし (一一) 至極の達人には物我の念なし (一二) 人間以上の人には世間的の功業なし、自然と一致して行動すれば其の功顯れず (一三) 聖人には世間的の名譽無し、絕對の境地に在れば相對的の名無きなり

雲氣。負二青天一。然後圖レ南。且レ適二南冥一也。斥鴳笑レ之曰。彼且二奚適一也。我騰躍而上。不レ過二數仞一而下。翶二翔蓬蒿之間一。此亦飛之至也。而彼且二奚適一也。此小大之辯也。

山東の高山　(五)前出　(六)旋風に羽ばたきし曲折して高く舞ひ上る　(七)雲の外に出づ　(八)前出　(九)斥は小澤、鴳は小鳥　(一〇)飛上る　(一一)八尺を仞といふ　(一二)ヨモギと野人參、雜草なり　(一三)飛びまはる　(一四)飛ぶことの極點にして是以上飛べず　(一五)然るに彼大鵬は何處に飛びゆかんとするにや　(一六)これ小知と大知、小年と大年との區別のみ

故夫知效二一官一。行比二一郷一。德合二一君一。而徵二一國一者。其自視也。亦若レ此矣。而宋榮子猶然笑レ之。且擧レ世而譽レ之。而不レ加レ勸。擧レ世而非レ之。而不レ加レ沮。定二乎內外之分一。辯二乎榮辱之

故に夫の知、(一)一官に效し、行、(二)一鄕に比し、(三)德一君に合うて(四)一國に徵あるもの、(五)其の自ら視るや、亦此の若し。而して(六)宋榮子、(七)猶然として之を笑ふ。且つ(八)世を擧げて之を譽むるも、勸むることを加へず。(九)世を擧げて之を非るも、沮むことを加へず。(一〇)內外の分を定め、(一一)榮辱の竟を辯ず、(一二)斯れのみ。(一三)彼れ其の世に於ける未だ數數然たらざるなり。然りと雖も、(一四)猶ほ未だ樹たざるあり。

(一)其の人の知識一の官職の事務を處辨するに足る　(二)其の行ひ一鄕の人心を比合して己に歸嚮せしむ　(三)其の德一人の主君に知られて一國に著名となる　(四)一國に合して民に信ぜらる　(五)かゝる小器の人が自己を觀察せることと斥鴳の自ら得すると同樣　(六)名は鈃、宋の賢人　(七)笑ふかたち、器の小なるを哂ふなり　(八)世間一般に譽めそやすも乘氣にならず　(九)世間一般に非難するも氣落ちせず　(一〇)內外の區別を定めて外物を以て內心

爲レ秋。上古有二大椿者一。以二八千歳一爲レ春八千歳爲レ秋。而彭祖乃今以レ久特聞。衆人匹レ之。不二亦悲一乎。

以て計るが故に名とす (四) ミソカとツイタチを知らず、即ち一ケ月だけの長さも知らず (五) ヒグラシ蟬は一年の長さを知らず (六) 今の湖南湖北の地 (七) 大木の名、又靈龜の名 (八) 太古に大椿といふ樹あり (九) 名は鏗、堯の臣、年七百歳、楚辭王註に見ゆ (一〇) 長壽を以て獨り世に聞ゆ (一一) 僅か七百歳の彭祖を長壽の極限の如く思へるは二蟲が鵬の心事を知らざると同じにて悲しむべし

湯之問レ棘也是已。窮髮之北。有二冥海者一。天池也。有レ魚焉。其廣數千里。未レ有下知二其修一者上。其名爲レ鯤。有レ鳥焉。其名爲レ鵬。背若二泰山一。翼若二垂天之雲一。摶二扶搖一羊角而上者九萬里。絶二

湯(一)の棘に問ふも也是のみ。窮髮(二)の北、冥海といふもの有り、天池(三)なり。魚あり、其の廣さ數千里、未だ其修さを知るものあらず。其の名を鯤と爲す。鳥あり、其の名を鵬と爲す。背は泰山(四)の如く、翼(五)は垂天の雲の若し。扶搖(六)に摶つて羊角して上る者九萬里、雲氣(七)を絶ち青天を負うて、然る後に南を圖り(八)、且に南冥に適かんとす。斥鴳(九)之を笑うて曰く、彼は且に奚に適かんとするや、我れ騰躍(一〇)して上るも、數(一一)仞に過ぎずして下り、蓬蒿(一二)の間に翱翔(一三)す、此れ亦飛の至り(一四)なり。而るに彼れ(一五)且に奚に適かんとするやと。此れ小大(一六)の辯なり。

(一) 殷の湯王が棘といへる賢人に問ふ、列子湯問に見ゆ (二) 不毛の極地、髮は草なり (三) 前出 (四) 五岳の一、

矣。奚以之九萬里而南爲。適莽蒼者。三飡而反。腹猶果然。適百里者。宿舂糧。適千里者。三月聚糧。之二蟲又何知。小知不及大知。小年不及大年。奚以知其然也。朝菌不知晦朔。蟪蛄不知春秋。此小年也。楚之南有冥靈者。以五百歲爲春。五百歲

(五) 目ざす樹まで行かずして地に落ちてしまふ (六) 何ぞわざわざ九萬里も飛上つて置いて南に往くことを要せんや、淺見の人局量狹少にして世界の大なるを知らざるにたとふ

(一)莽蒼に適くものは、(二)三飡にして反る、(三)腹猶ほ果然たり。(四)百里に適くものは(五)宿に糧を舂く。千里に適くものは三月糧を聚む。之の二蟲は又何をか知らん。(六)

(一) 近郊に出かける (二) 三食してかへる (三) 腹なほ十分にして飢ゑず (四) 百里の遠方にゆく (五) 前夜より食糧を舂きて用意す、遠く行くものは其の準備も亦大仕掛なるべし、鵬の九萬里も高く上るは此の理によるのみ (六) 此の蜩と小鳩とは大鵬の志を知らんや。即ち小人には大人の志は解らずと也

(一)小知は大知に及ばず、(二)小年は大年に及ばず。奚を以て其の然るを知るや。(三)朝菌は(四)晦朔を知らず、(五)蟪蛄は春秋を知らず。此れ小年なり。(六)楚の南に(七)冥靈といふ者あり。五百歲を以て春となし、五百歲を秋と爲す。(八)上古に大椿といふ者あり、八千歲を以て春とし、八千歲を秋と爲す。而るに(九)彭祖は乃ち今久しきを以て特り聞え、(一〇)衆人之に匹はんとす、亦悲しからずや。(一一)

(一) 小さなる知識は大なる知識に及ばず (二) 年齢短きものは年齢長きものに及ばず (三) 菌の一種、其の生期を

也不レ厚。則負二大舟一也無レ力。覆二杯水於坳堂之上一。則芥爲二之舟一。置レ杯焉則膠。水淺而舟大也。風之積也不レ厚。則其負二大翼一也無レ力。故九萬里。則風斯在レ下矣。而後乃今培レ風。背負二青天一而莫二之夭閼一者。而後。乃今將レ圖レ南。

覆へせば、則ち芥（三）之が舟と爲り、杯を置くも則ち膠す。水淺くして舟大なればなり。（四）風の積むや厚からざれば、則ち其の大翼を負ふに力なし。故に九萬里（五）にして則ち風斯に下に在り。而る後乃ち今（六）風に培はれ、（七）背に青天を負うて之を夭閼する者なし。而る後乃ち今（八）將に南を圖らんとす。

（一）水深く積もらざれば大舟を泛ぶる力なし　（二）マゲモノの水を床の凹みに覆す　（三）小さき塵芥は舟の如く浮べど杯を置くも膠着して動かず　（四）それと同じく大氣の積もること、厚からざるときは鵬の大翼を保つ力なし　（五）上空に飛上ること九萬里なるときは、鵬を支ふるに足るだけの厚き大氣が下に在り　（六）それだけの厚き大氣に翼力を養はる　（七）背に青天を負うて大鵬の飛ぶを妨止するものなし　（八）これだけの準備整うて後南冥を目ざして飛ばんとす

蜩與二鷽鳩一笑レ之曰。我決起而飛搶二楡枋一。時則不レ至而控二於地一而已

（一）蜩と鷽鳩と之を笑うて曰く、我れ決起（二）して飛んで楡枋（三）を搶く（四）。時には則ち至らず（五）して地に控ちて已む。（六）奚ぞこの九萬里にして南するを以てせんと。

（一）蜩と小鳩、世俗の小人に譬ふ　（二）勢を奮つて飛ぶ　（三）ニレとハゼ、ともに灌木　（四）突きあたりてとまる

天池也。

齊諧者志怪者也。諧之言曰。鵬之徙於南冥也。水擊三千里。摶扶搖而上者九萬里。去以六月息者也。野馬也。塵埃也。生物之以息相吹也。天之蒼蒼其正色邪。其遠而無所至極邪。其視下也亦若是則已矣。且夫水之積

雲の如し　(七)　運するは動く意、海動くときは必ず大風あり、鵬之に乘じて遠く南冥に飛ばんとす　(八)　南方の大海　(九)　自然に成れる池

(一)齊諧は怪(二)を志せるものなり。諧の言に曰く、鵬の南冥に從るや、(三)水に擊つこと三千里、(四)扶搖に摶(五)つて、上るもの九萬里。(六)去つて六月を以て息ふものなりと。(七)野馬や塵埃や、生物の息を以て相吹くなり。(八)天の蒼蒼たるは其れ正色か、其れ遠くして至極する所なければか、(九)其の下を視るや、亦是の若くならんのみ。

(一)　古書の名、之も莊子の假設か　(二)　神怪不思議のことを記す　(三)　翼を以て水面を擊つこと三千里の廣きに及ぶ　(四)　下より上に吹き上ぐる旋風　(五)　羽ばたきして高く飛上ること九萬里　(六)　飛去つて六ケ月目に翼を收めて休息す。或は曰く周の六月は夏正の四月にして海運して風起る時、息は風、卽ち六月大風の起るをまちて飛ぶ意なりと　(七)　陽炎や塵埃は地上に棲息する生物の呼吸によつて生ずるもの　(八)　空の色の蒼々たるは空に特有の色か或は亦遠くして際涯なきゆゑに蒼く見ゆるか、恐くは遠くて際涯なきためならん　(九)　大鵬が空より下を視るも下界は野馬塵埃に蔽はれて、かくの如く蒼々と見ゆるなるべし。是皆鵬の高く飛ぶを形容す

(一)且夫れ水の積むや厚からざれば、則ち大舟を負ふに力なし。(二)杯水を坳堂の上に

北冥有レ魚。其名爲レ鯤。鯤之大。不レ知二其幾千里一也。化而爲レ鳥。其名爲レ鵬。鵬之背。不レ知二其幾千里一也。怒而飛其翼若二垂天之雲一。是鳥也。海運則將レ徙二於南冥一。南冥者

荘子

内篇

（一）逍遙遊

（二）北冥に魚あり、其の名を鯤と爲す。（三）鯤の大さ、其の幾千里なるを知らざるなり。化して鳥と爲る、其名を鵬と爲す。（四）鵬の背其の幾千里なるを知らざるなり。怒り（五）て飛べば、其の翼（六）垂天の雲の若し。是の鳥や、（七）海運すれば、則ち將に南冥に徙ら（八）んとす。南冥は天池なり。（九）

（一）此篇物外に寛縦自適して心を遊ばす意を説き大知小知を辨じ、外に待つ所あるは應用無礙なること能はざるが故に、心を物外に放つて無己無功無名の域に逍遙すべきを論ず　（二）北方の大海、冥は溟と同じ　（三）魚の卵、微小のものを藉り來つて大魚の名とす　（四）古文の鳳の字、巨大なる神鳥の名、是皆荘子の寓言的假設の名稱にして超俗の至人に譬へしもの、荘子自らを暗示せるが如し　（五）勢を奮つて飛ぶ　（六）其の翼の大なること天を蔽へる

善。知者不博。博者不知。聖人不積。既以爲人。己愈有。既以與人。己愈多。天之道。利而不害。聖人之道。爲而不爭。

れ愈ゝ有り。既に以て人に與へて、己れ愈ゝ多し。(六)天の道は利して害せず、聖人の道は爲して爭はず。

(一) 誠實なる言は美ならず、言を飾りて美なる者は信あらず (二) 善行あるものは辯を好まず、巧辯の者は行善ならず (三) 眞に知る者は博きに誇らず、博く識る者は眞に道を知る者にあらず (四) 聖人は己に私して積む事なく既に以て人に與ふ。二つの既の字盡の義としコトゴトクと訓ずる說あり、亦通ず (五) 人の爲めにし人に與へて己に積む事なき故他と爭ふ事なく失ふ事もなし、卽ち己愈々有し己愈々多き譯也 (六) 呂註に「凡ソ物利スル所有レバ利セザル所有リ、利セザル所アレバ害セザル能ハズ、唯天ノ道利スル所無シ、則チ利セザル所無シ、利セザル所無ケレバ利シテ害セズ、凡ソ物ノ爲スアル者我有ラザルナシ、我有ラザルナケレバ我有ルガ故ニ爭フ有リ、聖人ノ道、爲ス無シ、爲スト雖モ爲ス爲ス無シ、爲ス無キガ故ニ我無シ、我無キガ故ニ爭ハズ、是レ天ノ道ノミ」と。やゝ煩に渉るの嫌あれど、蓋し老子の意斯くの如くならんか

老子 終

輿。無レ所レ乘レ之。雖レ有二甲兵一。無レ所レ陳レ之。使三民復結レ繩而用二之。甘二其食一。美二其服一。安二其居一。樂二其俗一。隣國相望。雞狗之聲相聞。民至二老死一不二相往來一。

美しとし、其居に安んじ、其俗を樂しむ。(七)隣國相望み、雞狗の聲相聞ゆれども、民老死に至るまで相往來せず。

(一) 有道の人之を始めんには小國少數の民を得るも、よく組合を立て、器材ある人物も用ふるなし、所謂爲すなくして自然に化するをいふ。眞注本には「小國寡民、什伯の器ありて而も用ひざらしむ」に作る、從ふべきが如し。其文意につきても諸說あれど、思ふに、治を爲すの理想は小國寡民にあり、小國寡民なれば上と下と自ら相忘れて相爲すなく、人に十倍し百倍する才器のものあるも用ふる所なしと解するを可とすべし (二) 其生を樂み其居に安ずるの謂也 (三) 遠きに徙らざるが故に舟輿の用なし (四) 死を重んじて鬪はざるが故に刀刃の用なし (五) 太古文字なく繩を結びて契となしたる時代即ち太古醇樸の狀態に復して之を用ひしむ (六) 簡素の生活狀態を喜ぶをいふ (七) 四國相接して雞狗の聲も相聞ゆる程なれど、民は皆己が簡素の生活を樂んで外を慕ひ相往來することなし。「雞狗」一本「雞犬」に作る。此章は老子の理想とする太古醇樸の風を最もよくあらはしたるもの、蓋し當時戰國紛爭亂れて止む所を知らず、老子深く太古の無爲純樸を慕へる也

信言不美章第八十一

信言不レ美。美言不レ信。善者不レ辯。辯者不レ

信言は美ならず、美言は信ならず。善なる者は辯ぜず、辯ずる者は善ならず。(一)知る者は博からず、博き者は知らず、(二)聖人は積まず、既に以て(三)人の爲めにして、己

人執左契而不責於人。有德司契。無德司徹。天道無親。常與善人。

小國寡民。使有什伯之器而不用。使民重死而不遠徙。雖有舟

親なし、常に善人に與す。(五)

(一) 怨み大なれば之と和するも尚ほ怨の殘るあり、怨ありて和せんよりは始めより怨なからしむるに如かず (二) 契は手形也、賣買貸借の時二分して左右に各一つを持つ、左券を持つ人は之を證として右券を持つ人を責めはたる也、但古來の用例を見るに、之に反して右券を權利者とし左券を債務者としたるも見え必ずしも一定ならざるが如し (三) 左契を執れども以て人に求むる事なし、寛大にして怨を結ぶ事なきをいふ也 (四) 有德者は聖人左契を取りて而も責めざるの心を心とし、無德者は明白を重んじ事々一々明白に割きを附けんとす。徹は一說に徹法の義とす、卽ち古の助法、周に助を改めて徹法とす、八家の私田も亦力を通じて合作し、其收入を平均ならしめんとの法也。との說によれば、左契は財物を有する者の執る所、右契を有する者其財物を責めて取りに來れば只其契の合ふがまゝに物を渡すのみにて其人を計較する心なし、無心にして物を待つ也、八家收入の平均を欲する者は計較に心ありて有心にして物を待つ也、といふが如き意に解すべからんか (五) 私の親しみ

小國寡民章第八十

(一)小國寡民も什伯あらしめ、人の器あるも用ひず。民をして(二)死を重んじて、而して遠く徙らざらしむ。(三)舟輿ありと雖も之に乘る所無く、(四)甲兵ありと雖も之を陳ぬる所なし。民をして(五)結繩に復して而して之を用ひしむ。(六)其食を甘しとし、其服を

天下柔弱。莫過於水。而攻堅强者。莫之能勝。其無以易之。弱之勝强。柔之勝剛。天下莫不知。莫能行。故聖人云。受國之垢。是謂社稷主。受國之不祥。是謂天下王。正言若反。

和大怨。必有餘怨。安可以爲善。是以聖

天下の柔弱なるは、水に過ぐる莫し。而して堅强なる者を攻むるに、(一)之に能く勝つ莫し。(二)其れ以て之に易ふるなからん。弱の强に勝ち、柔の剛に勝つ。天下知らざる莫きも、能く行ふ莫し。故に聖人云ふ、(三)國の垢を受くる、是を社稷の主と謂ひ、國の不祥を受くる、是を天下の王と謂ふと。(四)正言は反するが若し。

(一) 水の弱に勝つものなし (二) 水の柔弱なるを用ふる、物の以て之に易ふべきなからん。實註には「以其無以易之也」に作る、「其以て之に易ふるなきを以(モチ)ふれば也」と訓む、斯く水が堅强なる者を攻めて必ず之に勝つは、其如何なる者も以て之に易ふべきなき程の柔弱を用ふるを以て也と解すべし (三) 垢ははぢ也、けがれ也、不祥は不善也、社稷は國家也、垢と不祥とを受くるは柔弱なり、柔弱にして始めてよく主たり王たるべしと也 (四) 正言は道に合して俗に反す、卽ち一見逆しまなる如く見ゆるもの也、世間普通には垢を受くるを辱とし、不祥を受くるを殃と爲すが故に、特に斯くいひて、眞成聖人の言の正言なる所以を明かにするなり

和大怨章第七十九

大怨を和して、必ず餘怨あらば、安んぞ以て善となすべけん。是を以て聖人は(一)左契を執りて、(二)而も人を責めず。(三)有德は契を司り、無德は徹を司る。天道は

天之道其猶張弓乎。高者抑之。下者舉之。有餘者損之。不足者補之。天之道。損有餘而補不足。人之道則不然。損不足。以奉有餘。孰能有餘以奉天下。唯有道者。是以聖人爲而不恃。功成而不處。其不欲見賢。

天之道章第七十七

（一）天の道は其れ猶ほ弓を張るがごときか。（二）高き者は之を抑へ、下き者は之を舉げ、餘りある者は之を損し、足らざる者は之を補ふ。天の道は、餘り有るを損して足らざるを補ふ。（三）人の道は則ち然らず、足らざるを損して以て餘りあるに奉ず。（四）孰れか能く餘りありて以て天下に奉ぜん、唯だ有道の者のみ。是を以て聖人（五）は爲して而して恃まず、功成りて而して處らず、其れ賢を見すことを欲せず。

（一）賈註に「凡ソ弓ヲ張ベテ其體ヲ俯スレバ弭（ユヅカ）上ニ在リ、弰（ユズエ）下ニ向フ、之ヲ張リテ其ノ體ヲ仰ムクレバ弭ハ下ニ向ヒ、弰ハ上ニ在リ、是レ弭ノ高キ者ヲ抑ヘテ之ヲシテ下ニ向ハシメ、弰ノ下キ者ヲ與ゲテ之ヲシテ上ニ在ラシム」云々と。この比喩の意蓋し斯くの如きか　（二）天道公平無私、高下を齊しくし、餘不足を均一ならしむるをいふ　（三）人の道は天道に反し、富める者は益々富み貧しき者は愈々貧しきが如き事となる　（四）よく餘り有るを以て天下に奉ずる者は孰れぞ、只有道者よく之を爲すのみ　（五）天下に爲す所ありてもそれを自ら恃みて慢ずる心なく、功を仕遂げて誇るもの顔はせず、己の賢をあらはししめすを欲せず

天下柔弱章第七十八

難レ治。民之輕レ死。以三其求レ生之厚一。是以輕レ死。夫唯無三以レ生爲一者。是賢二於貴一レ生。

人之生也柔弱。其死也堅強。萬物草木之生也柔脆。其死也枯槁。故堅強者死之徒。柔弱者生之徒。是以兵強則不レ勝。木強則共。強大處レ下。柔弱處レ上。

なき者は、是れ生を貴ぶより賢れり。

(一) 民の飢うるは收斂の結果也 (二) 民の治め難きは上たるもの智術を用ひ法を密にするの結果也 (三) 輕々しく其身を以て自ら死を取るをいふ (四) 賈註には「生生の厚き」に作る、厚く生活せん事を以て自愛自養に過ぎ奢侈に流るゝをいふ (五) 身を忘れて自然に任せ殊更に生の爲めに爲す無き者は生生の厚きを求め人爲を以て之を貴ぶに勝れり、即ち人爲的に生を爲すなく自然に任せて無爲なるが眞に生を貴ぶ所以也との義

人之生章第七十六

(一)人の生るゝや柔弱、其死するや堅強なり。萬物草木の生ずるや柔脆、其死するや枯槁す。故に堅強は死の徒なり、(二)柔弱は生の徒なり。是を以て、(三)兵強ければ則ち勝たず、木強ければ則ち(四)共す。(五)強大は下に處り、柔弱は上に處る。

(一) 生るゝ時には其體柔弱にて死すれば硬直す (二) 類、仲間 (三) 兵の強を恃む者は勝たず、これ上來しばしば言ふ所也 (四) 一本「折る」とあるに從ふべし。林註には共を拱と解し「拱把ニ至ルトキハ則チ斬ニ枯レントス」といへり (五) 吳註に「人ノ德行凡ソ堅強ナル者ハ己ヲ矜リ人ヲ凌ギ必ズ其貴高ニ歷ブヤ反ツテ人ノ下ニ處ル柔弱ナル者ハ衆ノ歸スル所ニシテ一ヲ得テ人ノ上ニ處ル」

何以ㇾ死懼ㇾ之。若使三民常畏二ㇾ死。而爲ㇾ奇者。吾得二執而殺一ㇾ之。孰敢。常有二司殺者一殺。夫代二司殺者一殺。是謂下代二大匠一斲上。夫代二大匠一斲者。希ㇾ有ㇾ不ㇾ傷ㇾ手矣。

民之飢。以二其上食ㇾ税之多一。是以飢。民之難ㇾ治。以二其上之有一ㇾ爲。是以

れしめて、而して奇を爲す者、吾れ執へて之を殺すを得るも、孰れか敢てせん。（三）常に司殺の者ありて殺せばなり。夫れ司殺の者に代りて殺すは、（四）是を大匠に代つて斲るといふ。夫れ大匠に代りて斲る者は、手を傷らざるあること希なり。

（一）刑を用ふる精神は死を以て人を懼れしむるに過ぎず、然るに道德頽廢して民利を爭うて死を畏れざるに至つては死刑も何の效なき譯也　（二）若し又人民常に畏れつゝもなは邪を爲す者あらば、吾執へて之を殺し以て民を戒むるを得るも、又何ぞ敢てこれを爲すの要あらん、別に常に殺を司る者あり之を殺すにあらずや。以上刑を弄び殺を喜びたる當時の世態を慨して深く之を戒しめし言ならんか　（三）天也、天は不仁者を惡みて遂に死に至らしむ、所謂天網恢々疎にして失はざるの意也　（四）未熟なる者が大匠に代りて木を斲りたらんには概ね誤つて手を傷けん、天の殺すは猶大匠の木を斲るが如し人之に代りて妄に殺さば却て自ら禍を受けん

民之飢章第七十五

（一）民の飢うるは、其上の税を食むこと多きを以て、是を以て飢うるなり。（二）民の治め難きは、其上の爲すあるを以て、是を以て治め難きなり。（三）民の死を輕んずるは、（四）其生を求むるの厚きを以て、是を以て死を輕んずるなり。夫れ（五）唯だ生を以て爲す

勇二於敢一則殺。勇二於不レ敢則活。此兩者。或利或害。天之所レ惡。孰知二其故一。是以聖人猶難レ之。天之道。不レ爭而善勝。不レ言而善應。不レ召而自來。坦然而善謀。天網恢恢。疏而不レ失。

勇於敢章第七十三

(一)敢に勇なれば則ち殺され、敢せざるに勇なれば則ち活く。(二)此兩者は或は利或は害、(三)天の惡む所、孰れか其故を知らん。是を以て聖人猶ほ之を難しとす。天の道は爭はずして而も善く勝ち、(四)言はずして而も善く應じ、召かずして而も自ら來り、(五)坦然として而も善く謀る。(六)天網恢恢、疏にして而も失はず。

(一) 無理に押しきつて事を爲すに勇なる者は其身を殺すに至り、謹にして敢て事をなさざるに勇なる者は身を保つ (二) 共に勇なれど一は利也一は害也 (三) 天道幽遠、其惡む所聖人すらなほ窺ひ難しとなす。呂註に「敢ニ勇ナル者人以テ利ト爲シテ害或ハ其中ニアリ、敢セザル者、人以テ害トナシテ、利或ハ其中ニアリ、則チ天ノ惡ム所殆ド知以テ論ルベキニアラズ」 (四) 言はざれども物よく感應す、所謂天何ヲカ謂ハンヤ四時行ハレ百物生ルの意也 (五) 事とする所なく無爲坦々として而も其の計畫備也。「坦然」實註には「繟然」に作り、舒緩也と註せり (六) 天道の網はおほまかにて其目あらきが如くなれども、善惡の報漏れ失ふ事なし。「失はず」一本「漏さず」に作るといふ

民不レ畏レ死。奈

死不畏死章第七十四

(一)民、死を畏れずんば、奈何ぞ死を以て之を懼れしめん。(二)若し民をして常に死を畏

知知病。夫唯病レ病。是以不レ病。聖人不レ病。以二其病一レ病。是以不レ病。

民不レ畏レ威。大威至矣。無レ狹二其所一レ居。無レ厭二其所一レ生。夫惟不レ厭。是以不レ厭。是以聖人自知不二自見一。自愛不二自貴一。故去レ彼取レ此。

ず。(三)聖人病まず、其病を病むを以て、是を以て病まず。

(一)道を知りて人知を恃まざるは上、人知を恃みて道を知らざるは病とも解すべく、又單に渾圓として其知をあらはさざるは上、僞に知らざるにをは知れりとしてはこり示さんとするは病と見るも可ならん (二)知らずして知るの病たるを知りて之を憂ふるが故に此病に陷らず (三)聖人にかゝる病なきは其病を病として憂ふるが故也

民不畏威章第七十二

(一)民、威を畏れざれば、大威至る。其(二)居る所を狹しとすることなく、其生くる所を厭ふことなかれ。夫れ惟だ(三)厭はず、是を以て厭はれず。是を以て聖人は自ら知りて(四)、自ら見さず。(五)自ら愛して、自ら貴しとせず。故に(六)彼を去りて此を取る。

(一)人天威を畏れずして驕傲なれば天罰に遭ふべし (二)分に安んじて己の居る所の地を狹しとすることなく、其生を保つ所以を厭ふなかれ。「狹しとする」一本「狎る、」に作る、狎れ輕んずる意也 (三)自ら厭はざるが故に天よりも厭はれず (四)自らよく道を知れども而も之をあらはし示して誇張することなし (五)自ら身を愛すれども貴しとしてはこれ尊大なし (六)彼は威を畏れずして狹しとし又厭ふの心也、此は道に安じて自ら見さず自ら貴しとせざるをいふ

吾言甚易知。甚易行。天下莫能知。莫能行。言有宗。事有君。夫惟無知。是以不我知。知我者希。則我貴矣。是以聖人被褐懐玉。

知不知上。不

㊂ 互に兵を擧げて相加ふる時、已むを得ざるに出て悲然として人を殺傷するを痛む者は必ず勝つ

吾言甚易知章第七十

吾が言甚だ知り易く、甚だ行ひ易きも、天下能く知る莫く、能く行ふ莫し。言に(一)宗あり事に君あり。夫れ惟だ知るなし、是を以て我れを知らず。(二)我れを知る者希なれば、則ち我れ貴し。(三)是を以て聖人は褐を被て玉を懐く。(四)

㊀ 宗は族の總也以て道の萬事萬物を總ぶるに喩ふ、言も事も皆道にもとづくをいふ ㊁ 道は言の宗、事の君たるを知らず故に我(老子の自謂)を知らず ㊂ 能く我を知る者の稀なるは即ち我が貴き所以也。四十一章に「笑はざれば以て道と爲すに足らず」と同意、世人吾が知り易き言を知らず、行ひ易き事を行はざるは傚はしき事なれど、これ皆道の根源より出て來る言なれば、賢ろ人の我を知らざることそ我眞に道をなされる所以、即ち我貴き所以との意 ㊃ 表に褐を着て内に玉をいだく、内に道を抱けども之を韜晦して人に示すとなく、外面人と同じうして中獨り異なるをいふ也

知不知章第七十一

知りて知らざるは上、(一)知らずして知るは病。夫れ唯だ病を病とす。(二)是を以て病ま

謂用人之力。是謂配天。古之極。

用兵有言。吾不敢爲主而爲客。不敢進寸而退尺。是謂行無行。攘無臂。仍無敵。執無兵。禍莫大於輕敵。輕敵幾喪吾寶。故抗兵相加。哀者勝矣。

敵を相手にせずと也。寶注本は此一句「善く敵に勝つ者は爭はず」に作る、意味は同一に解す可し ㈢ 身を卑うして却って人にへりくだる ㈣ 自然の德と相竝ぶ ㈤ 古道の極致也

用兵有言章第六十九

(一)兵を用ふるに言あり。(二)吾れ敢て主とならずして、而して客となり、(三)敢て寸を進めずして、而して尺を退くと。(四)是を行くに(五)行なく、攘ぐるに臂なく、仍くに敵なく、執るに兵なしと謂ふ。禍は敵を輕んずるより大なるは莫し。敵を輕んずれば、幾んど吾が(六)寶を喪ふ。(七)故に兵を抗げて相加ふる、哀む者は勝つ。

㈠ 兵家の言として相傳ふる語あり ㈡ 主は事を仕掛ける者にして客は敵に應ずる者也、卽ち我より進んで戰はず、已むを得ずして敵に應ずる也 ㈢ 進む事は難んじ退く事は易しとす、進み戰はずしてなるべく敵を避くるの意 ㈣ 以下老子が此古言を說明する也 ㈤ 吳註に「進ミ戰フ者ハ其行陣ヲ整ヘテ行キ臂ヲ攘ゲテ以テ兵(武器)ヲ執リ前進シテ以テ敵ヲ仍(ツ)ク行カザレバ(行)陣有リト雖モ行ナキガ如ク、攘ハザレバ臂アリト雖モ臂ナキガ如ク、執ラザレバ兵(武器)アリト雖モ兵無キガ如ク、之ヲ仍(ツ)カザレバ敵ノ前ニ在ル有リト雖モ敵無キガ如シ」と、此一節の解として蓋し最も要を得たるものか。つまりよく〳〵已むを得ずして後始めて動かすの形容ならん ㈥ 前章に所謂三寶也、敵を輕んずるは强うして殺人を喜び、進んで取る譯ゆゑ、慈・儉・讓下の三寶を失ふ譯也

能廣。不三敢爲二天下先一。故能成二器長一。今捨レ慈且勇。捨レ儉且廣。捨レ後且先死矣。夫慈。以戰則勝。以守則固。天將レ救レ之。以レ慈衞レ之。

善爲レ士者不レ武。善戰者不レ怒。善勝者不レ與。善用レ人者爲二之下一。是謂二不レ爭之德一。是

て之を衞ればなり。

(一) 天下の人皆我(老子の自稱)を稱して大人物なれど不肖たるに似たりといふ。不肖は尋常の物に似ざるの義とな す說もあれど、思ふに今日の所謂不肖なるべく、而して其言葉の内容には世の賢人智者に似ずして無能也との意を 含有せるなるべし。賈註本は「我が道大にして不肖に似たりと謂ふ」に作り、老子の道に對する世人の言となす (二) 世の所謂賢人智者才人に似たらば既に小なる也其大なるは似ざるが爲めのみ (三) 慈は柔弱の意儉は寡慾にして驕 らざる意 (四) 謙下して爭はず (五) 柔なるが故に挫けずして能く勇也 (六) 足る事を知りて驕らざるが故に窮ま らずして廣し (七) 人に先んぜず謙下するが故に人に推されて官の長となる (八) 今柔弱、寡欲、謙下を捨てゝ先 以て勇廣先を圖らばこれ死亡を招くの道たるや必せり (九) 天すら將に我を救はんとす、我柔弱を以て自らまもれ ば也。この文は慈を以て之を衞る者は天も將に之を救はんとすと解して可なるべし

善爲士章第六十八

善く士たる者は武ならず、善く戰ふ者は怒らず、善く勝つ者は與にせず、善く人を用ふる者は之が下と爲る。是を爭はざるの德と謂ひ、是を人の力を用ふと謂ひ、是を天に配すと謂ふ。古の極なり。

(一) 強毅にして武勇を以て人に先んぜんとする事なし (二) 勝つは他とともに爭ふ結果なるが、眞によく勝つ者は

民。必以レ身後レ之。是以聖人處レ上而民不レ重、處レ前而民不レ害。是以天下樂レ推而不レ厭。以二其不一レ爭。故天下莫二能與レ之爭一。

して厭はず。(五)其爭はざるを以て、故に天下能く之れと爭ふ莫し。

(一)百川の四海に注ぐは其位置ひくければ也　(二)自ら孤寡不穀といふ如きこの例也、要するに聖人自ら謙退すれば之を尊びて上とすと也　(三)聖人は謙なるが故に上にありても民之をおもしと感ずる事なく、譲るが故に前に居りても妨害になるものとは思はず　(四)樂しんで之を推擧して厭ふ事なし　(五)聖人は他と爭ふ事なし常に自ら謙譲するが故に天下何物も能く之と爭ふ事なし

天下皆謂章第六十七

天下皆謂三我大似二不肖一。夫惟大。故似二不肖一。若肖。久矣其細。我有二三寶一。寶而持レ之。一曰慈。二曰儉。三曰不三敢爲二天下先一。慈故能勇。儉故

(一)天下皆我を大にして不肖に似たりと謂ふ。夫れ惟だ大なり、故に不肖に似たり。若し(二)肖たらば、久しいかな、其細なるや。我に三寶あり、寶として之を持す。一に曰く(三)慈、二に曰く儉、三に曰く(四)敢て天下の先たらず。(五)慈なり、故に能く勇。(六)儉なり、故に能く廣し。(七)敢て天下の先たらず、故に能く器の長と成る。(八)今慈を捨てて且勇に、儉を捨てて且つ廣く、後を捨てて且つ先んぜば、死なんかな。夫れ慈なり、以て戰へば則ち勝ち、以て守れば則ち固し。(九)天將に之を救はんとす、慈を以

之難レ治。以二其智多一。以レ智治レ國。國之賊。不下以レ智治上レ國。國之福。知二此兩者一。亦楷式。能知二楷式一。是謂二玄德一。玄德深矣遠矣。與レ物反矣。乃至二於大順一。

江海所三以能爲二百谷王一者。以二其善下一レ之。故能爲二百谷王一。是以聖人欲レ上レ民。必以レ言下レ之。欲レ先レ

の賊なり、智を以て國を治めざるは國の福なり。(四)此兩者を知れば亦楷式たり。能く楷式を知る、是を玄德と謂ふ。(五)玄德は深し、遠し、物と反せり。(六)乃ち大順に至る。

(一)明は多智巧詐をいひ、愚は無知無欲自然にして素樸なるをいふ　(二)多智なれば奸詐多し治め難き所以也　(三)智巧を以て民に臨めば民亦奸詐を以てし、國益々亂れそこなふ　(四)智を以てするは國をそこなふもの、智を以てせざるは國を福するものといふ、この二つの事を知れば、以て國を治むるの楷式(のり、法式)たるべし　(五)微妙深遠にして智巧を貴ぶ世の紛々たる物情とは相反す　(六)斯く物と反して其本源に復歸するが故に自然に隨ひ之と冥合一致するに至る

江海爲百谷王章第六十六

(一)江海の能く百谷の王たる所以は、其善く之れに下るを以て、故に能く百谷の王たり。是を以て聖人、民に上たらんと欲すれば、(二)必ず言を以て之に下り、民に先んぜんと欲すれば、必ず身を以て之に後る。是を以て(三)聖人は上に處りて而して民重しとせず。前に處りて、而して民害とせず。是を以て天下(四)推すことを樂んで、而

下。爲者敗之。執者失之。是以聖人無爲。故無敗。無執。故無失。民之從事。常於幾成而敗之。愼終如始。則無敗事。是以聖人欲不欲。不貴難得之貨。學不學。復衆人之所過。以輔萬物之自然。而不敢爲。

古之善爲道者。非以明民。將以愚之。民

得難きの貨を貴ばず、(九)不學を學とし、(一〇)衆人の過ぐる所に復る。以て萬物の自然を輔けて、(一一)而して敢て爲さず。

(一) 諸事安泰なる時に之を支持するは易く、亡亂の如きも其未だ萌さぬ前なれば防止の途も謀り易し (二) 事の起らぬ前になし、亂れぬ前に治める、前章に所謂大を其細に爲すの意也 (三) 一かゝへもある大木は毛のさきほどの萌芽より生ず (四) 非常に高き臺も一簣の土をつみ重ねたるより起る (五) 遠き旅路も一歩の發足より始まる (六) 殊更に意識して爲す者は却て其事を敗り、殊更に之を執る者は失ふ、無爲自然なる者には失敗なし (七) 一般常人の (八) 欲念を起す事なきを以て欲とし、常人の貴しとする貨財を以て貴きものと思はず (九) 世俗に所謂學問をなさぬ事を以て學問とする、第四十八章に所謂「道を爲して日に損する」の謂也 (一〇) 衆人のうか〳〵と通り過ぎて目も止めぬ所即ち自然の道にかへる (一一) 韓非子「恃」に作る實には必らず之に從ふべしと謂へり、要するに自然の道に從ひ私意を以て作爲する事なきをいふなるべし

古之善爲道章第六十五

古への善く道を爲むる者は、以て民を明かにするに非ず、(一)將に以て之を愚にせんとするなり。民の治め難きは、(二)其智多きを以てなり。(三)智を以て國を治むるは、國

大。夫輕諾必寡ㇾ信。多ㇾ易必多ㇾ難。是以聖人猶難ㇾ之。故終無ㇾ難。

ならん。「小大多少」を連續し事の大小多少を問はず皆之を一視すと解く說もあり。「怨に報ゆるに德を以てす」は論語憲問篇に之を難ず、孔子の說は相對差別の見に立脚し、老子の說は絕對無差別に立言す、議論の根柢全く相異なる也 ㊁ 事の易き內に難き事を思ひ、細にありて大を思ふ ㊂ 難事も其はじめは易く、大事も其始めは細也 ㊃ 大を其細に爲して大を其大に爲さず、換言すれば大なるに到りて大を圖る事を爲さず、其細にありて大を思ふをいふ ㊄ やすうけあひをする者は其依頼を果す事少なし ㊅ 易しとして輕んずれば成らず、卽ち易しとする事多ければ多き程却りて難き事の多くなる謂也 ㊆ 如何なる易事にても之を難しとして忽がせにせず、故に難事はなし

其安易持章第六十四

其安易ㇾ持。其未ㇾ兆易ㇾ謀。其脆易ㇾ破。其微易ㇾ散。爲二之於未一ㇾ有。治二之於未一ㇾ亂。合抱之木。生二於毫末一。九層之臺。起二於累土一。千里之行。始二於足

其安きは持し易く、其未だ兆さざるは謀り易く、(二)其脆きは破れ易く、其微なるは散じ易し。(一)之を未だ有らざるに爲し、之を未だ亂れざるに治む。(三)合抱の木は毫末より生じ、(四)九層の臺は累土より起り、(五)千里の行は足下に始まる。(六)爲す者は之を敗り、執る者は之を失ふ。是を以て聖人は爲すなし、故に敗るゝことなし。執るなし、故に失ふことなし。(七)民の事に從ふや、常に幾ど成るに於て而して之を敗る。終を愼むこと始の如ければ、則ち敗るゝ事なし。是を以て聖人は不欲を欲とし(八)

也。不レ曰ニ求以得。有レ罪以免一邪。故爲ニ天下貴一。

ず、蘇註に曰く「天子ヲ立テ三公ヲ置ク、將ニ道ヲ以テ人ヲ救ハントスルノミ、拱璧ノ貴駟馬ノ良アリテ之ヲ進ムト雖モ此道ヲ進ムルノ多ナルニ如カザル也」と、亦通ず。拱璧は一かゝへの珠、駟馬は四頭立の馬にて卽ち馬車一乘也。拱璧をさゝげものとし車を以て迎ふ、蓋し賢者を聘するの禮をいふなるべし。一說には三公道を行くの威容とし、又一說には拱璧を先にして駟馬を君に奉るの意とす　(五) 道は求むれば必ず得、罪あるも道を得れば卽ち其罪を免かる

爲無爲章第六十三

爲ニ無爲一。事ニ無事一。味ニ無味一。大レ小多レ少。報レ怨以レ德。圖ニ難於其易一。爲ニ大於其細一。天下難事。必作ニ於易一。天下大事。必作ニ於細一。是以聖人終不レ爲レ大。故能成ニ其大一。

(一)無爲を爲し、無事を事とし、無味を味ひ、小を大とし、少きを多しとし、怨に報ゆるに德を以てす。(二)難きを其易きに圖り、大を其細に爲す。(三)天下の難事は必ず易きに作り、天下の大事は必ず細に作る。是を以て聖人は終に(四)大を爲さず、故に能く其大を成す。(五)夫れ輕諾は必ず信寡し。(六)易きこと多ければ必ず難きこと多し。是を以て聖人(七)猶ほ之を難んず、故に終に難きことなし。

(一) 爲す事無きを爲すとも、事無きを事とし味無きを味とし、小を大とし、少なきを多しとし、怨をも怨とせず德を以て之に報ゆ、畢竟の意味は、無爲恬淡、彼我相對の境地を離れて絕對自然の境地にあり、一視無差別なるの意

欲レ入二事人一。夫兩者各得二其所一レ欲。故大者宜レ爲レ下。

道者萬物之奥。善人之寶。不善人之所レ保。美言可二以市一。尊行可二以加一レ人。人之不善。何棄之有。故立二天子一置二三公一。雖レ有三拱璧以先二駟馬一。不レ如三坐進二此道一。古之所三以貴二此道一者何

國下るも已を全うするのみ大國下る時は天下之に歸往する也、大局より見て大國の下る方最要也故に特に大國につきていふにや。林註には凡てこれ比喩の言にして、道を知るの大なる者は必ず謙下を以て宜しと爲す、此句一章の結語也と力説せり

道者萬物之奥章第六十二

(一)道は萬物の奥にして、善人の寶、(二)不善人の保つ所なり。(三)美言は以て市るべく、尊行は以て人に加ふべし。人の不善なる、何の棄つることか之あらん。故に(四)天子を立て、三公を置く。拱璧の以て駟馬に先だつ有りと雖も、坐して此道に進むに如かず。古の此道を貴ぶ所以の者は何ぞや、求むれば以て得、罪あるも(五)以て免ると曰はずや。故に天下の貴たり。

(一) 奥は室の奥にて貴人の居る所、故に道は萬物の奥といふ (二) 不善人も之によりて身を保つべし (三) 言の美なるは人に說き與ふべく、行の尊きは以て人を服すべし、されば不善人も道より出でたる美言は必ず之を求め、尊行は必ず之に服す、道より見れば不善人なりとも棄つる事はなき也 (四) 天子を立て三公を置く、其天子三公たるもの即ち璧へて以て他の勢者を招來せんよりは、ゐながら此道に進むが可也。一說には、天子を立て三公を置く、身其尊位に處り高貴を擁けるものよりもゐながら此道に進むが方まされり。又一說には「此道を進むるに若かず」と讀

傷人。聖人亦不傷。夫兩不相傷。故德交歸焉。

大國者下流。天下之交。天下之牝。牝常以靜勝牡。以靜爲下。故大國以下小國。則取小國。小國以下大國。則取大國。故或下以取。或下而取。大國不過欲兼畜人。小國不過

らざるべからず　(三)　聖人が也　(三)　鬼も神力なし、否鬼に神力なきにあらず、其神力人に祟を爲す事なき也　(四)　神も神を也　賈註には「之を傷はず」に作る、從ふべし。一本「人を傷はず」「民を傷はず」に作るは從ふべからず　(五)　神も人を傷はず、聖人も神も傷はず、お互に相傷ふ事なし　(六)　聖人は聖人、神は神と其德交々歸して各々其處を得と也

大國者下流章第六十一

大國は下流なり(一)、天下の交なり(二)。天下の牝なり(三)。牝は常に靜を以て牡に勝ち(四)、靜を以て下るを爲す。故に大國以て小國に下れば、則ち小國を取り(五)、小國以て大國に下れば、則ち大國に取らる(六)。故に或は下つて以て取り(七)、或は下つて而して取らる(八)。大國は人を兼ね畜はんと欲するに過ぎず、小國は入りて人に事へんと欲するに過ぎず。夫れ兩者各〻其欲する所を得(九)。故に大なる者は宜しく下るを爲すべし(一〇)。

(一)　小國の來り服すること水の下流に注ぐが如し　(二)　大國は天下の會集する所也　(三)　大國は柔にして而も天下みな歸服す　(四)　牝の性は靜にして、よく柔服し而も柔よく剛を制して以て牡に勝つ　(五)　小國自ら歸服するに至る　(六)　よく大國に納れらる　(七)　大國は　(八)　小國は　(九)　下りさへすれば大國も小國も各其欲する所を得　(一〇)　小

克。則莫ㇾ知二其極一。莫ㇾ知二其極一。可三以有二國一。有二國之母一。可二以長久一。是謂二深ㇾ根固ㇾ柢。長生久視之道一。

久視の道なり。

(一) 吝嗇の嗇にてをしむの義也、從つて費す所を抑損して過度ならず、畢竟寡慾の義となる (二) 過ぎざるが故に、過ぎに至らずして早く本然に復る。一本「是を早復と謂ふ」とし、又「是を早服と謂ふ」に作る、早服は早く道に附くの義也 (三) 德を積むこと重厚也の意 (四) 德を積むこと重厚なれば自ら餘りありて如何なる事にても能くせずといふことなし (五) 窮まることなく、其窮極を窺ひ知るべからず (六) 斯く論じ來れば嗇は國を有つの母といふべし人君この母を得て以て長久なるべし (七) 嗇を以てよく長久なるをば、是を根柢(共に木ノ根)を深く且つ固くすといふ。柢の字一に蔕(音テイ)に作る、ヘタ也 (八) 斯く嗇によりて根を深くし柢を固くするは國家長久の道なるのみならず之を身にすれば長生の道たる也、久視また長生と同義にして天年を保つの謂なるべし。林註には久視ハ神全ウシテ以テ久シク視ヲ瞬キセザル可キ也といへり

治大國章六十

治二大國一若ㇾ烹二小鮮一。以ㇾ道蒞二天下一。其鬼不ㇾ神。非二其鬼不一ㇾ神。其神不ㇾ傷ㇾ人。非二其神不一ㇾ傷ㇾ人。

大國を治むるは小鮮を烹るが若し。(一)道を以て天下に蒞めば、其鬼、神ならず。(二)其鬼、神ならざるにあらず、其神、人を傷はざるなり。(三)其神のみ人を傷はざるに非ず、聖人亦傷はず。(四)夫れ兩つながら相傷はず、(五)故に德交〻歸す。(六)

(一) 小鮮は小魚、小魚を烹るに擾亂すれば破る、大國を治むるも有爲に煩すれば却て亂る、淸靜無爲所謂悶々た

伏。孰知二其極一。其無レ正邪。正復爲レ奇。善復爲レ妖。民之迷。其日固已久矣。是以聖人方而不レ割。廉而不レ劌。直而不レ肆。光而不レ耀。

割かず、(八)廉なれども劌らず、(九)直なれども肆びず、(一〇)光れども耀かず。

(一) 察々の反對也、昏き也、忌諱多からず、法令章かならざるをいふ (二) 純樸也 (三) 明察也、苛察也 (四) 不足也、民怨志を抱きて足らざる所あるが如し (五) 禍轉じて福となり、福轉じて禍となり、禍福相倚り相伏して止まる所なし (六) 正すぐれば奇に復し、善過ぐるれば妖に復る (七) 方正なれども刃物にて切り割きたる如く角立たず。劌の字一說には劌と共に角立ちて他の者を傷くるの義とす (八) 廉隅(カド)あれども切り斷ちたる如く尖らず (九) 直なれども伸び過ぎず (一〇) 光あれども其光を包みてきら／＼と人目につくが如き事あらず

治レ人事レ天。莫レ如レ嗇。夫惟嗇。是以早復。早復謂二之重積德一。重積德則無レ不レ克。無レ不レ

治人事天章第五十九

人を治め、天に事ふるは、(一)嗇に如くは莫し。夫れ惟だ嗇なり、(二)是を以て早く復る。早く復る之を(三)重積德と謂ふ。(四)重積德なれば、則ち克くせざるなし。克くせざるなければ、則ち(五)其極を知るなし。其極を知るなければ、以て國を有つべし。(六)國を有つの母は、以て長久なるべし。(七)是を根を深くし、柢を固くすと謂ふ。(八)長生

下多ニ忌諱一而民彌貧。人多ニ利器一國家滋昏。民多ニ技巧一奇物滋起。法令滋彰。盜賊多有。故聖人云。我無爲而民自化。我好レ靜而民自正。我無レ事而民自富。我無欲而民自樸。

して盜賊多くあり。故に聖人云ふ、我れ無爲にして民自ら化し、我れ靜を好んで民自ら正しく、我れ事無くして民自ら富み、我れ無欲にして民自ら樸なり(七)と。

(一) 國を治むるは法度の正を以てし、兵を用ふるには詭譎の奇を以てす、而もこれ皆事を爲すもの、爲す事なくして天下始めて服す (二) 下の細かき仔細あるを以て也 (三) 法制禁令の義 (四) 便利の器多く出づるに從ひて人々小智に馳せて國家ますます昏し (五) 奇異無用の物 (六) 法令詳密を極むる程却て益々盜賊多くなる (七) 虚僞奸詐なくして質樸也

其政悶悶。其民醇醇。其政察察。其民缺缺。禍兮福所レ倚。福兮禍所レ

其政悶悶章第五十八

其政悶悶(一)たれば、其民醇醇(二)たり。其政察察(三)たれば、其民缺缺(四)たり。禍(五)は福の倚る所、福は禍の伏する所、孰れか其極を知らん。其れ正なきか、正復た奇(六)となり、善復た妖となる。民の迷へる、其日固に已に久し。是を以て聖人方(七)なれども

者不レ知。塞二其兌一閉二其門一。挫二其鋭一解二其紛一。和二其光一同二其塵一。是謂二玄同一。不レ可二得而親一。不レ可二得而疎一。不レ可二得而利一。不レ可二得而害一。不レ可二得而貴一。不レ可二得而賤一。故爲二天下貴一。

紛を解き、其光を和して、其塵に同じくす。是を玄同と謂ふ。(四)得て親しむべからず、得て疎んずべからず、得て利すべからず、得て害すべからず、得て貴ぶべからず、得て賤しうすべからず、故に天下の貴たり。(五)

(一) 道は絶對にして言議を容れず、知るべくして之を言ふべからざる也　(二) 五十二章に出づ　(三) 第四章に出づ　(四) 至玄至妙にして物我を同じうし敢て異を立てざる意　(五) 道を體する者は親疎利害貴賤を超絶す、故に眞に天下の貴たる也

以レ正治レ國。以レ奇用レ兵。以レ無レ事取二天下一。吾何以知二其然一哉。以レ此。夫天

以正治國章第五十七

(一)正を以て國を治め、奇を以て兵を用ひ、事無きを以て天下を取る。吾れ何を以て其然るを知るや、(二)此を以てなり。夫れ天下(三)忌諱多くして、而して民彌〻貧しく、人(四)利器多くして、國家滋〻昏く、民技巧多くして(五)奇物滋〻起り、(六)法令滋〻彰に

攫。攫鳥不搏。骨弱筋柔而握固。未知牝牡之合而朘作。精之至也。終日號而嗌不嗄。和之至也。知和曰常。知常曰明。益生曰祥。心使氣曰强。物壯則老。是謂不道。不道早已。

知者不言。言

は精の至なり。終日號びて而して嗌(八)嗄れざるは、和の至なり。和を知るを常と曰ひ、常を知るを明と曰ふ。(九)生を益すを祥と曰ひ、(一〇)心、氣を使ふを强と曰ふ。(一一)物壯んなれば則ち老ゆ。是を不道と謂ふ。不道は早く已む。

(一) 德を外にあらはさずして内に含み修する事の厚き者 (二) 赤子無心にして物を害せず、故に物亦我を害する事なし、含德厚きもの亦然りと也 (三) 爪牙を以て我を害するが如き事なし (四) 鷙鳥の如く、羽やけづめてうつ鳥をいふ (五) 赤子は筋骨柔弱なれども固く五指を握る、含德厚き者柔弱にして而もよく道を守るに比すべし (六) 男女交合の道 (七) 一音スヰ、赤子の陰部をいふ、赤子は男女交合の道を知らざるに而も其陰物の勃起するは欲の致す所にあらずして精氣の自然に厚き故也 (八) 咽喉也。但古人の說によれば古本には此字なし、莊子の文より後人の增入せるものといふ、赤子は終日泣きさけべども聲かれず、和氣の至り也 (九) 人爲を以て生を增益せんとするを祥といふ、祥は妖の義也 (一〇) 心が意識的に氣を使ふを强といふ (一一) 强なれば則ち壯、壯なれば則ち老ゆ これ道にあらずして長久なるべからざるをいふ也、此句第三十章にも出でたり

知者不言章第五十六

(一)知る者は言はず、言ふ者は知らず。(二)其兌を塞ぎ、其門を閉ぢ、(三)其銳を挫きて、其

之家。其德乃餘。修二之鄉一。其德乃長。修二之國一。其德乃豐。修二之天下一。其德乃普。故以レ身觀レ身。以レ家觀レ家。以レ鄉觀レ鄉。以レ國觀レ國。以二天下一觀二天下一。吾何以知二天下之然一哉。以レ此。

其德乃ち普し。故に(三)身を以て身を觀、家を以て家を觀、鄉を以て鄉を觀、國を以て國を觀、天下を以て天下を觀る。吾(四)何を以て天下の然るを知るや、(五)此を以てなり。

(一) 建てたる者は拔け抱ける者はおつ、只德を建つる者は拔けず、一を抱く者は失ふ事なし、其德以て子孫に及び、家榮えて祭祀絶ゆる事なからん (二) 德を修するの本眞は我身にあり、故 之を身に修むれば卽ち眞といふ、身の德眞にして後之を推して家に及ぼし、鄉に及ぼし、國に及ぼし、天下に及ぼす、其範圍は大小同じからざれども德は常に足りて全體に及ばずといふ事なし (三) 德を身に修する所以は敢て外物に俟つにあらず身を以て身を觀るにあり、之を推して考ふれば、德を家に修むる所以は家を以て家を觀るにあり、鄉國天下亦之に異なるなし (四) 何を以て天下に德を修する所以は天下を以て天下を觀るにあるを知るかといふに、前述の如く、身を修する所以は身を以て身を觀るにあるを知り、之を推して考ふる也 (五) 上に述ぶる所を指す、卽ち身を以て之を知ると也、道を指し德を指すとなす說あれど取らず

含德之厚章第五十五

含德之厚。比二於赤子一。毒蟲不レ螫。猛獸不レ

(一)含德の厚きは、赤子に比す。(二)毒蟲も螫さず、猛獸も(三)據らず、(四)攫鳥も搏たず。(五)骨弱く、筋柔かにして、而も握ること固し。(六)未だ牝牡の合を知らずして而して(七)峻作つ

知。行二於大道一。唯施是畏。大道甚夷而民好レ徑。朝甚除。田甚蕪。倉甚虛。服二文采一。帶二利劍一。厭二飲食一。資財有レ餘。是謂二盜誇一。非レ道哉。

(三)大道は甚だ夷かにして、而も民は徑を好む。(四)朝甚だ除すれば、田甚だ蕪れ、倉甚だ虛し。(五)文采を服し、利劍を帶び、飲食に厭き、(六)資財餘りある、是を盜誇と謂ふ。道に非ざる哉。

(一)小さい分別のあるをいふ　(二)私意を以て作爲する所あらんを畏る　(三)大道は坦々として行き易きに、人は之を行かずして小路を好み、之を近道として行き易しと爲す　(四)朝廷美しく手入れの屆き立派になりすぎる時、民の田はあれ、倉庫はからとなる　(五)斯く下民より誅求して民をして貧しからしめ、而して上たるもの美服を着利劍を帶び、飲食に厭き、財貨餘りあり、是は盜賊といふべし　(六)一本「財貨」に作る　(七)林註には盜賊の其能に誇るが如しとの意といふ。但、此字もと竽に作り、買註は韓非の說によりて竽字の誤となす、竽は五聲の長なり、即ち大盜唱へて小盜和すの義といふ

善建者不レ拔。善抱者不レ脫。子孫以祭祀不レ輟。修二之身一。其德乃眞。修二

善建不拔章第五十四

(一)善く建つる者は拔けず、善く抱く者は脫せず。子孫以て祭祀して輟まず。(二)之を身に修むれば、其德乃ち眞。之を家に修むれば、其德乃ち餘りあり。之を鄉に修むれば、其德乃ち長し。之を國に修むれば、其德乃ち豐なり。之を天下に修むれば

爲二天下母一。既得二其母一。以知二其子一。既知二其子一。復守二其母一。沒レ身不レ殆。塞二其兌一。閉二其門一。終レ身不レ勤。開二其兌一。濟二其事一。終レ身不レ救。見レ小曰レ明。守レ柔曰レ强。用二其光一。復二歸其明一。無レ遺二身殃一。是謂二襲常一。

使三我介然有レ

知りて、復た其母を守れば、身を沒ふるまで殆ふからず。(四)其兌を塞ぎ其門を閉づれば、身を終ふるまで勤めず。(五)其兌を開き、其事を濟せば、身を終ふるまで救はれず。(六)小を見るを明と曰ひ、柔を守るを强と曰ふ。(七)其光を用ひて其明に復歸せば、身の殃を遺すことなし。是を(八)襲常と謂ふ。

(一) 始は天下萬物の始め也、既に始めあれば即ち萬物生ず、即ち萬物の母といふべし (二) 母たる道を得て子たる萬物を知り (三) 子たる萬物を知りて復た母たる道に歸り、之を守りて外物に役せられずば (四) 兌は口也、門は人の出づる所也、口を閉ぢて言はず、門を閉ぢて爲さず、心を外物に役するなくしてよく内に守る所あれば、終身優游して勤勞する事なし (五) 之に反して、口を開き事を爲して徒に心外物を逐ふ時は、終身勞苦してまた救ふべからず。「濟す」一說にマスと訓じ知欲を益すの義とす (六) 大を見るは明ならず小を見るもの眞の明、强を守るは强ならず、柔を守るこれ眞の强也 (七) 光の本體を明といふ、即ち明は母にして光は子也、即ち心の光を用ひて事物を照し、更に其光を收めて本體たる明、小を見るのに明に復歸すれば、身災害に遇ふ事なし (八) 襲は藏也、常は不易也、其用を藏して窮まらざる義也

使我介然章第五十三

我をして(一)介然として知る有りて、大道を行はしめば、唯だ(二)施すを是れ畏れん。

道生レ之。徳畜レ之。物形レ之。勢成レ之。是以萬物莫レ不三尊レ道而貴二徳。道之尊。徳之貴。夫莫二之命一而常自然。故道生レ之畜レ之。長レ之育レ之。成レ之熟レ之。養レ之覆レ之。生而不レ有。爲而不レ恃。長而不レ宰。是謂二玄徳一。

道之を生じ、徳之を畜ひ、物之を形し、勢之を成す。(一)是を以て萬物道を尊びて、而して徳を貴ばざるは莫し。道の尊きと、徳の貴きとは、夫れ之を命ずる(二)なくして、而して常に自ら然り。故に道之を生じ、(三)之を畜ひ、之を長じ、之を育し、(四)之を成し、之を熟し、之を養ひ、之を覆ふ。(五)生じて有せず、(六)爲して恃まず、長じて宰せず。是を玄徳と謂ふ。(七)

(一) 萬物は皆道より生じ、徳の化育せられ、物となりて形をあらはし、自然の勢によりて成る　(二) 一本「爵するに」作る、林註は之を非とすれども、命も亦爵の義ならんか、道と徳との尊貴は誰よりも之を命ずるにあらずして自ら尊貴也との意なるべし　(三) 一本此上に「徳」の字あり、但、徳も亦道より出づるを以て、概言すればこれ皆道の用也　(四) 此二句一本には「之を亭し、之を毒す」に作る、希賢註に「其成ヲ權(ハカ)ル之ヲ亭ト謂ヒ、其用ヲ量ル之ヲ毒ト謂フ」とあり。一説には形に因て品を分ち質に因て之を成すの義とせり　(五) 庇護する意　(六) 道徳よく萬物を生長養育庇護して、而も我有とせず、我之を主宰する事なし　(七) 玄妙の徳

天下有始章第五十二

天下有レ始。以

天下始有り、以て天下の母たり。(一)既に其母を得て、以て其子を知り、既に其子を(二)

出生入死。生之徒十有レ三。死之徒十有レ三。民之生、動之二死地一亦十有レ三。夫何故。以二其生レ生之厚一。蓋聞善攝レ生者、陸行不レ遇二兕虎一。入レ軍不レ被二甲兵一。兕無レ所レ投二其角一。虎無レ所レ措二其爪一。兵無レ所レ容二其刃一。夫何故。以三其無二死地一焉。

(一)出づれば生、入れば死。(二)生の徒十に三有り、(三)死の徒十に三有り。(四)民の生くべくして、動もすれば死地に之くもの、亦十に三有り。夫れ何の故ぞ、(五)其生を生とするの厚きを以てなり。蓋し聞く、(六)善く生を攝する者は、(七)陸行して兕虎に遇はず、軍に入りて甲兵を被らず。(八)兕も其角を投ずるに所なく、虎も其爪を措くに所なく、兵も其刃を容るゝに所なしと。夫れ何の故ぞ、其死地なきを以てなり。

(一) 生は死の徒死は生の始、生死は出入を相爲すのみ (二) 生のなかま即ち生くべくして生くるもの十中に三 (三) 死のなかま即ち死すべくして死する者十中に三 (四) 生を得べき筈なるものやゝもすれば死地にゆくもの亦十中に三 (五) 生を得んとの念欲厚くあまり身を愛し過ぎて却つて生くべくして死する也 (六) 眞によく生を持ちて大切に之を守る者、其意蓋し生の徒にもあらず、死の徒にもあらず、生死の境を超越し、内に身あるを見ず、外に物あるを見ざる底の者をいふならん (七) 陸を行きて兕(野牛の類)や虎に遇はず、戰場に入りても甲兵を被りて傷をうくるが如き事なし。甲兵をも身に被らずと解する說もあれど、前句下句と相應じて甲兵の害を被らずと解すべからん、甲(ヨロヒ)は兵に添へていへる迄と見るべし (八) 我身を有とせず、生死の境を超越したる者には何者も害を加ふる能はざる也

道生之章第五十一

聖人無常心。以百姓心爲心。善者吾亦善之。不善者。吾亦善之。得善矣。信者吾信之。不信者。吾亦信之。得信矣。聖人之在天下。慄慄爲天下渾心。百姓注其耳目。聖人皆孩之。

聖人無常心章第四十九

聖人は常の心なし、(一)百姓の心を以て心となす。(二)善なる者は吾れ亦之を善とす、不善なる者は吾れ亦之を善とす。(三)善を得たればなり。信なる者は吾れ之を信とす。不信なる者は吾れ亦之を信とす。信を得たればなり。聖人の天下に在るや、(四)慄慄として天下の爲めに心を渾ず。(五)(六)百姓皆其耳目を注ぐも、聖人皆之を孩にす。(七)

(一) 聖人は心に主として自ら執する所なきをいふ (二) 善不善信不信といふ如き差別の念なく、等しく之を善とし信として了ふ。實註に「亦」の字なし、從ふべからん (三) これ其心に眞の善を得るを以て也。この句實註本によれば次の「信を得たればなり」と共に「德善なり」「德信なり」と訓ずべく、聖人の德は善なり信なりとも解し、又民の德は斯くて善たり信たるに至るとも解す (四) 危ぶみ懼れて安んぜざる貌、天下の人民の是非利害に汲々たるを憂ふる也 (五) 渾然として善不善信不信共に同樣に取扱ふ (六) 人民皆聖人に耳目を注ぎて其是非予奪する所を見る (七) 一樣に之を嬰兒として遇す、民の是非善惡によりて區別する事なく、只渾噩として無爲にして化するを謂ふ也

出生入死章第五十

下。不レ窺レ牖見ニ天道一。其出彌遠。其知彌少。是以聖人不レ行而知。不レ見而名。不レ爲而成。

ければ、其知ること彌〻少なし。(三)是を以て聖人は行かずして而して知り、見ずして而して名づけ、爲さずして而して成る。

(一)天下の人情物理と天道の幽遠なると、其根柢は道のみ、心道と冥合せば居ながらにして天下を知り天道を見ん　(二)出でて求めんとすれば、足迹の及ぶ所目力の達する所因より幾ばくもなく、心徒に個々枝葉の事に馳せて其知る事少なからん　(三)聖人道に因り、努せずして成し無爲にして化するをいふ

爲學日益章第四十八

爲レ學日益。爲レ道日損。損レ之又損。以至ニ於無爲一。無爲而無レ不レ爲矣。故取ニ天下一者。常以レ無レ事。及ニ其有一レ事。不レ足ニ以取ニ天下一。

(一)學を爲せば日に益し、道を爲せば日に損す。(二)之を損して又損し、以て(三)無爲に至る。無爲にして、而して爲さずといふことなし。(四)故に天下を取る者は、常に事なきを以てす。其事あるに及んでは、以て天下を取るに足らず。

(一)學問をすれば知慾日に增して道を爲せば知慾日に損す　(二)道を爲して抑損し抑損し以て無爲の境地に至る　(三)無爲にして始めて如何なる事をも爲すべし、有意にして事を爲す者未だ眞に事を爲すに足らず　(四)爲す事なく自然のまゝにして化するが故に天下來服する也、人爲を以て有意に事を爲すに及びては天下を取る能はず

靜爲二天下正一。

天下有レ道。却二走馬一以糞。天下無レ道。戎馬生二於郊一。罪莫レ大二於可レ欲。禍莫レ大二於不レ知レ足。咎莫レ大二於欲レ得。故知レ足之足常足。

不レ出レ戸知二天

求めざる故、却て屈せるが如く見ゆ (四) 大巧は巧まざるを以て拙きが如く見ゆ (五) 大辯は徒に辯を弄せざるを以て訥辯の如く見ゆ。辯の字一に辨に作る、蓋し通用也 (六) さわがしきは寒に堪へ、靜かなるは熱に堪ふ (七) 躁すれば其正を失ふ、靜にしてよく其熱に勝つべし、故に清靜は天下の正にして有道の士の居る所也

天下有道章第四十六

天下道あれば、(一)走馬を却けて以て糞ふ。天下道なければ、(二)戎馬郊に生ず。罪は(三)欲すべきより大なるは莫く、禍は足るを知らざるより大なるは莫く、咎は得るを欲するより大なるは莫し。故に(四)足ることを知りて之れ足れば常に足る。

(一) 天下治平にして戰なき故、走馬を退けて田につちかふの用に供す (二) 兵亂治まらず、軍馬戰地に生まるゝに至る (三) 「欲すべしとなすより」の義に解すべし、心に欲し羨ましと思ふ念を萌すをいふ (四) 足る事を知れば不足の者をも足ると爲す、卽ち足る事を知りて心に足りてゐれば常住に不足といふ事なし

不出戸章第四十七

(一)戸を出でずして天下を知り、(二)牖を窺はずして天道を見る。(三)其出づること彌〻遠

名與身孰親。身與貨孰多。得與亡孰病。是故甚愛必大費。多藏必厚亡。知足不辱。知止不殆。可以長久。

大成若缺。其用不敝。大盈若沖。其用不窮。大直若屈。大巧若拙。大辯若訥。躁勝寒。靜勝熱。淸

(一)名と身と孰れか親しき。身と貨と(二)孰れか多き。(三)得ると亡ふと孰れか病しき。是故に(四)甚だ愛すれば必ず大に費え、多く藏すれば必ず厚く亡ふ。(五)足るを知れば辱しめられず、止まるを知れば殆からず、以て長久なるべし。

(一)世人やゝもすれば身を危ふくして名を求む、而も名聞と身とを比するにいづれか我に親しきぞ、名は身の己に切なるに及ばざらん　(二)財寶　(三)物を得んとて心を勞すると亡ひて憂ふると孰れか苦しき　(四)甚しく名を愛し、多く貨を藏すれば必ず心を費す所多く、損亡する所厚からん　(五)名利共に足るを知り止る事を知れば、辱めを受くる事もなく危殆に陷る事もなく、身長久なるべし

大成若缺章第四十五

(一)大成は缺くるが若くにして、其用敝れず。(二)大盈は沖しきが如くにして、其用窮まらず、(三)大直は屈するが若く、(四)大巧は拙きが若く、(五)大辯は訥なるが若し。(六)躁は寒に勝ち、靜は熱に勝つ。(七)淸靜は天下の正たり。

(一)大成してゐるものは巧を弄してなき故、一局部より見れば缺けたる如きも、全體としては完全なる故、久しく用を爲してやぶるゝ事なし　(二)物の大盈せるは却つて沖虛なるが如くにして其用きはまらず　(三)大直は直きを

其死。吾將以爲敎父。

天下之至柔。馳騁天下之至堅。無有入無間。是以知無爲之有益。不言之敎。無爲之益。天下希及之矣。

言すれば冲也といふに外ならざるが如し ㊃ 萬物皆陰陽を具ふ、而して陰を背に負ひ、陽を前に抱く、而して之を和するに虚冲卽ち盈ち溢れざるの氣を以てす ㊄ 第三十八章に出づ ㊅ 損して益する事あり、益して損する事あり、謙遜して却て人に敬はれ自ら誇りて却て人に惡まるゝが如き是也 ㊆ 古人の敎訓、強梁云々の□を指す 眞註には「義として」の語なし ㊇ 剛強にして制し難き者は碌な死に方はせず。この句卽ち古人の言か、金人銘に「強梁者不得其死、好勝者必遇其敵」とありといふ ㊈ 我此言を尊んで敎の父となさん、敎の父とは萬物の母といふ類にて其根本の義、生ずる義には母といひ、敎には父といふ、蓋し文の綾也

天下之至柔章第四十三

天下の至柔は天下の至堅に馳騁し、(一)無有は無間に入る。(二)是を以て無爲の益あることを知る。(三)不言の敎、無爲の益、天下之に及ぶもの希なり。

㊀ 至柔なる者よく至堅なるものの間を行くべし、堅は剛強といふに同じ、後の無間と韻を叶へて至堅といふ也。馳騁一說に使役と解す ㊁ 無形なれば間隙の無き所にも入る、無間は間隙の入るべきなきをいふ ㊂ 上來屢々見えたる思想にして、これ實に道の妙用也、天下之に及ぶもの殆んどなしと也

名與身章第四十四

道生一。一生二。二生三。三生萬物。萬物負陰而抱陽。沖氣以爲和。人之所惡。唯孤寡不穀。而王公以爲稱。故物或損之而益。益之而損。人之所教。亦我義教之。强梁者。不得

(一六) 非常に大なる象は目よく其形を見るべからず　(一七) 上述の語例の如く、道は隱れて形の見るべきなく、名の名づくべきなし、夫れ道は名なく形なきが故に、萬物を成して成すの跡なく、又成して其功に居らずよく貸し與へて以て萬物を成す、即ち萬物皆道を借りて成る也

道生一章第四十二

(一)道一を生じ、(二)一二を生じ、(三)二三を生じ、三萬物を生ず。(四)萬物は陰を負うて陽を抱き、沖氣以て和を爲す。人の惡む所は唯だ(五)孤寡不穀なり。而も王公以て稱となす。故に物或は之を(六)損して而も益し、或は之を益して而も損す。(七)人の教ふる所、我れ亦義として之を教ふ。(八)强梁なる者は其死を得ずと。吾れ將に(九)以て教の父と爲さんとす

(一) 道は無也、無より一を生ず、無極よりして太極を生ずるの謂也、蓋し一は道の用と見るも可、即ち道の作用にして尙絕對也、萬物の根源也、第一章に所謂常の名也　(二) 既に一あれば相對の二を生ず、陰陽といふが如し即ち是也　(三) 既に二あれば三を生ず、陰と陽と相和して天地人三才を生ずといふが如き是也、老子の言ふ所は蓋し萬有生成の過程を示すものにて、無より一を生じ、一より二、二より三、三より萬物を生ず、萬物の根源は一也、更に切

上士聞レ道。勤而行レ之。中士聞レ道。若レ存若レ亡。下士聞レ道。大笑レ之。不レ笑不レ足三以爲二道。故建言有レ之。明道若レ昧。夷道若レ纇。進道若レ退。上德若レ谷。大白若レ辱。廣德若レ不レ足。建德若レ偸。質眞若レ渝。大方無レ隅。大器晩成。大音希聲。大象無形。道隱無レ名。夫惟道善貸且成。

上士は道を聞きて、勤めて而して之を行ひ、(一)中士は道を聞きて、存するが若く、亡するが若く、(二)下士は道を聞きて大に之を笑ふ。(三)笑はざれば以て道と爲すに足らず。(四)故に(五)建言に之あり、(六)明道は昧きが若く、(七)夷道は纇なるが若く、進道は退くが若く、(八)上德は谷の若く、(九)大白は辱れたるが若く、(一〇)廣德は足らざるが若く、(一一)建德は偸なるが若く、(一二)質眞は渝るが若し。(一三)大方は隅なく、(一四)大器は晩成す。(一五)大音は希聲、(一六)大象は無形なりと。(一七)道は隱れて名なし、夫れ惟だ道は善く貸して且つ成す。

(一) 上根の士は道を信じて勤行す (二) 小智の士は有りとも思ひ有らずとも思ひ、半信半疑也 (三) 下愚の士は一笑に附して全く信ぜず (四) 下愚の人の笑はざる如きものは眞の道と爲すに足らず (五) 古言、古人の立言 (六) 以下凡て反言法也、明あれども其光をつゝむが故に昧きが如く、進めども其もとに復るを以て退くが如し、凡てをの眞なるものは外見却て反對に見ゆる也 (七) 平らかなる道は平かならざるが如し、纇は類也不レ平をいふ (八) 上德は德を德とせずして其虚しきこと谷の如し (九) 大いに潔白なるは其白きをあらはさずして却て汚れたる如し (一〇) 德廣き者は謙遜して足らざるが如し (一一) 固く建てたる德は却てかりそめなるが如し。一說には「偸」をヌスメルと訓じ、こそ／＼と人目を忍びて敢て事を爲し得ぬ義とし、又「ナラブ」と訓じ、德は獨立なれども固執せずして物とならぶが如しと解す (一二) 物の眞の色は却つてさめて變色せる如く見ゆ (一三) 大きな四角はかどの無きに同じ、其隅が人の目に見えざる也 (一四) 大いなる器は晩成する事遅し (一五) 非常に大なる音聲は無聲に同じ

以下爲基。是以侯王自稱孤寡不穀。此其以賤爲本邪非乎。故致數車無車。不欲琭琭如玉。落落如石。

反者道之動。弱者道之用。天下之物。生於有。有生於無。

保正する義。一說には相也、中心の義とす (五) 天若し道を得ざれば淸からず、淸からざれば裂けんの恐ありと也以下皆この意に解すべし (六) 働きて地氣の發泄するあらん (七) 神たる働きの止むに至らん (八) 枯竭せん (九) 常に生々するなくんば (一〇) 貞正の德を以て萬物を保正する事なくして只位のみ高貴ならば顚仆する事あらん (一一) 侯王自稱して孤といひ、寡人といひ、不穀といふ、皆謙して賤稱を用ふるものにて、卽ち賤を以て本となすには非ずや。孤は特立無德の義、寡は寡德之人の義、不穀は不善の義 (一二) 車には輪あり、轂あり、輻あり、衡あり、軾あり、之を一つ〳〵分解してどこ迄も數へて行つて見れば結局車といふものは無き事となる、卽ち車は全きものを一つと見て始めて其用あり、車は衆有を合したる一の虛名にして以て道に喩ふべし (一三) 琭々又碌々に作る、落々と共に離れ〳〵にごろ〳〵してゐる貌、一を得ずして、玉は玉として、石は石として、離れ〳〵にごろ〳〵してゐるが如きは有道の君子の欲せざる所也

反者道之動章第四十

(一)反は道の動にして、(二)弱は道の用なり。(三)天下の物は有に生じ、有は無に生ず。

(一) 本に歸復するものこれ道の動き也、道働きて物を生じ、物生じて又其本に歸るをいふ (二) 弱にして强に勝つものこれ道の働き也 (三) 第一章に所謂無名は天地の始、有名は萬物の母の義也

上士聞道章第四十一

昔之得ㇾ一者。天得ㇾ一以清。地得ㇾ一以寧。神得ㇾ一以靈。谷得ㇾ一以盈。萬物得ㇾ一以生。王侯得ㇾ一以爲二天下貞一。其致ㇾ之一也。天無二以清一將二恐裂一。地無二以寧一將二恐發一。神無二以靈一將二恐歇一。谷無ㇾ以盈將二恐竭一。萬物無二以生一將二恐滅一。侯王無二以爲ㇾ貞而貴高。將ㇾ恐ㇾ蹶。故貴以ㇾ賤爲ㇾ本。高

昔の（一）一を得る者は、天は（三）一を得て以て淸く、地は一を得て以て寧く、神は一を得て以て（二）靈に、谷は一を得て以て盈ち、萬物は一を得て以て生じ、侯王は一を得て以て天下の（四）貞たり。其之を致すは一なり。（五）天以て淸きことなくんば、將に恐らくは裂けんとす。地以て寧きことなくんば、將に恐らくは（六）發せんとす。神以て靈なるなくんば、將に恐らくは（七）歇まんとす。谷以て盈つるなくんば、將に恐らくは（八）竭きんとす。萬物以て生ずるなくんば、將に恐らくは滅びんとす。侯王以て（一〇）貞なるなくして、而して（九）貴高ならば、將に恐らくは蹶らんとす。故に貴は賤を以て本と爲し、高は下を以て基と爲す。是を以て侯王自ら（一二）孤寡不穀と謂ふ。此れ其賤を以て本とするか、非ずか。故に（一一）車を數ふるを致せば車なし。（一三）琭琭として玉の如く落落として石の如くなるを欲せず。

（一）往古、太古の義。一説には始也と解し、ハジメノと訓ず（二）道也、道の用也、蓋し第四十二章に所謂一にして、數の始め、萬物の眞の根源をいふ也（三）天の淸明なる、地の安靜にしてゆるぎなき、神の靈なる、谷の虛にして而も盈つる、萬物の生々する、王侯の天下の貞たる、皆道を得るを以て也（四）正也、又貞止の德を以て萬邦を

道而後徳。失レ徳而後仁。失レ仁而後義。失レ義而後禮。夫禮者。忠信之薄而亂之首也。前識者。道之華而愚之始也。是以大丈夫處二其厚一。不レ取二其薄一。居二其實一不レ居二其華一。故去レ彼取レ此。

此を取る。

(一) 徳ありて自ら其徳を知らず徳自らにして行はる (二) 徳を失はじと自ら意識して固執するをいふ (三) 無爲也萬物の自然に任せて我より作爲すること無し (四) 以ては有心の義也、徳を以て目的として人爲的に爲すをいふ、故に「以て爲すなし」とは換言すれば心無くして之を爲すと也 (五) 徳を目的として意識的に人爲的になす也 (六) 上仁は博愛無私なれば我より爲す事ではあるが、而も其目的の爲めにわざと勉め行ふごときにはあらず (七) 義は上下親疎の別を立つる所以にて、どこ迄も人爲的也意識的也自然にあらず (八) 應じなければ強ひてもさせる、不自然の甚しき也、臂を云々はうでまくりをして引張る、即ち他に之を強ふる形容也 (九) 人爲の不自然を排して自然の大道に復歸せしめんとする者これ老子の主張也、故に老子の見地よりすれば、太古醇樸の世には只自然の大道のみ、道働いて名あり即ち徳となる、それより世降り人智出づるに及んで、遂に仁あり義あり禮あるに至るといふ也、蓋し繁文縟禮人徒らに形式の末に馳せたる當時の時世を概していふもの、全編概ね皆然り (一〇) 禮は中心の信よりも外面の形式に重きを置く、故に忠信の心薄きに至りて禮制せらる、禮の制せらるゝは實に世の亂るゝ始め也 (一一) 人に先だつて多智を衒ふは、道の實にあらずして華也、眞智の見地よりすれば多く識るは愚の始め也 (一二) 厚は忠信、薄は禮、實は道、華は識也 (一三) 彼は禮、此は道

昔之得一章第三十九

上徳不レ徳。是以有レ徳。下徳不レ失レ徳。是以無レ徳。上徳無レ爲而無二以爲一。下徳爲レ之而有二以爲一。上仁爲レ之而無二以爲一。上義爲レ之而有二以爲一。上禮爲レ之而莫二之應一則攘レ臂而仍レ之。故失レ

下篇

上徳不徳章第三十八

上徳は徳とせず、是を以て徳あり。下徳は徳を失はず、是を以て徳なし。上徳は爲すなくして、而して以て爲すなく、下徳は之を爲して、而して以て爲すあり。上仁は之を爲して、而して以て爲すなく、上義は之を爲して、而して以て爲すあり。上禮は之を爲して、而して之に應ずる莫ければ、則ち臂を攘げて之を仍く。故に道を失うて而して後に徳あり、徳を失うて而して後に仁あり、仁を失うて而して後に義あり。義を失うて而して後に禮あり。夫れ禮は忠信の薄きにして而して亂の首なり。前識は道の華にして、而して愚の始なり。是を以て大丈夫は其厚きに處りて其薄きを取らず、其實に處りて其華に居らず 故に彼を去つて

道常無爲。而無不爲。侯王若能守。萬物將自化。化而欲作。吾將鎭以無名樸。無名之樸。亦將不欲。不欲以靜。天下將自正。

心を制し情を奪ふの道を示すものとなすあり、而も此章の如きが韓非の所論の源泉となりたるは爭ふべからず ㊁ 「しばらく」と訓する人もあり、其原因として先づと解すべからん ㊂ 明を包みてあらはさざる義なるべし ㊃ 柔弱を守るは老子の主義也、剛强を以て剛强と爭はず、剛强の自然に衰ふるを待つ、是れ柔弱を以て剛强に勝つの謂也 ㊄ 下の句を起す爲めの喩、魚淵に藏るれば自然にして危殆なし、國の利器も亦藏して人に示すべからず、輕々しく用ふべからざる也 ㊅ 人君の威柄と解し、又兵力の義と解す

道常無爲章第三十七

（一）道の常なるは、爲すこと無くして、而も爲さざることなし。（二）侯王若し能く守らば、萬物將に自ら化せんとす。化して而して作さんと欲するあらば、吾れ將に鎭むるに無名の樸を以てせんとす。無名の樸も（三）亦將に欲せざらんとす。欲せずして以て（四）靜かなれば、天下將に自ら正しからんとす。

㊀ 常の道は無爲にして而も萬物を生成す。希聲註に道の常たる所以の者は、其體は名無きを以ての故に爲す無く用は名あり、故に爲さざるなしと ㊁ 王侯常の道を守らば無爲にして天下萬物自ら其德に化す ㊂ 作は生也、要也、生生化化して窮り無ければ愈々道を失ふに至る、故に人君は無名の樸即ち自然の眞を以て之を鎭めて妄作妄動せざらしむる也 ㊃ 而して更に無名の樸をも思欲する事なく、不欲にして靜かなれば天下は自ら正しからん。蘇註に、聖人中に樸を抱くの念無く、外に樸を抱くの迹なし、故に樸全うして用大なり、苟も樸を欲する心尙は胸中に存せば、則ち之を失ふ遠しと

不足見。聽之不足聞。用之不可既。

將欲噏之。必固張之。將欲弱之。必固強之。將欲廢之。必固興之。將欲奪之。必固與之。是謂微明。柔之勝剛。弱之勝強。魚不可脫於淵。國之利器。不可以示人。

天下往く、往いて害せず、安平泰也」と訓じ、道を執つて天下を治むれば天下之に歸往す、聖人民を視る事子の如く無爲にして化してまた之を害するなし、故に天下自ら泰平也と解す ㊁ 三字共に同義 ㊂ 音樂と滋味とには旅客悦びて止まる、而も止まるは一時的の事也 ㊃ 道は之を言葉にいひあらはすを音樂滋味の類と異なり、淡泊無味也。賈註「道の口より出づる」に作る ㊄ 音樂美味の耳口を喜ばしむるに異なり、道は無象無聲、見るに足るものなく、聞くに足るものなけれども、之を用ふるに盡くる事なし

將欲噏之章第三十六

(一)將に之を噏めんと欲せば、必ず固(二)之を張る。將に之を弱めんと欲せば、必ず固之を強くす。將に之を廢せんと欲せば必ず固之を興す。將に之を奪はんと欲せば、必ず固之を與ふ。是を(三)微明と謂ふ。(四)柔は剛に勝ち、弱は強に勝つ。(五)魚は淵を脫すべからず、(六)國の利器は以て人に示すべからず。

㊀ 噏は斂也翕也、縮め合はせるをいふ、先づ張れば其反動として縮む、故に縮めんと欲するならばまづ之を張る也、以下の比喩皆之れに準じて知るべし、つまり張りたる者、強き者、興りたる者、得たるに者に對しては強ひて之と爭はずして張るまゝに張らしめ、強きがまゝに強からしめ、興るがまゝに興らしめ、得るがまゝに與へ置きてその反動として自然に縮み、弱り、廢れ、失ふを待つべしとなさん、古來之を權謀の言を爲すあり、或は之を聖人

而不レ為レ主。故常無欲。可レ名二於小一矣。萬物歸レ焉而不レ知レ主。可レ名二於大一矣。是以聖人能成二其大一也。以三其不二自大一。故能成二其大一。

執二大象一天下往。往而不レ害。安平泰。樂與レ餌過客止。道之出レ言。淡乎其無レ味。視レ之

す也。其自ら大なりとせざるを以て、故に能く其大を成す。

㈠ 中流の船の如く何れにも係着する所なき意。一説に水の如く氾濫して適かざる所なき意 ㈡ 萬物は道をたよりて生ずるも、道は其生ずるまゝにして避けず ㈢ 萬物生成の功ありてもそれを我功とせず。覆註には「功成れども名とし有せず」に作る ㈣ 萬物にそのおかげを蒙らすれども道は其主宰となる心なし。覆註には「萬物を愛養して」云々に作る ㈤ 道の辭せず居らず主たらざる常無欲の方面より見れば小とも名づくべし ㈥ 萬物の歸往する所、而も道が之を統ぶるの形なき所よりいへば、亦大とも名つくべし、小ともいふべく大ともいふべく、左せしむべく右せしむべく、一曲一部に偏在せざる所、これ卽ち道の道たる所以也 ㈦ 聖人は道を體する者。聖人亦自ら其大を爲すに心なく、大を大となさざるが故によく其大を爲す也。大を成すとは天下萬物之に歸往するを謂ふ。覆註には「能く……以て」の間を「終に大を爲さず」に作る

執大象章第三十五

大象(一)を執りて天下に往く。往いて而して害せず、安平泰(二)なり。樂(三)と餌とは過客止まる。道の(四)言に出づる、淡乎として其れ味なし。之を視れども(五)見るに足らず、之を聽けども、聞くに足らざれど、之を用ひて既すべからず。

㈠ 道の無象の象なるをいふ、大道に由りて行ふ時は天下得て之を害するなく身安泰也。一説には「大象を執れば

知レ人者智。自知者明。勝レ人者有レ力。自勝者强。知レ足者富。强行者有レ志。不レ失二其所一者久。死而不レ亡者壽。

(一)人を知る者は智なり、自ら知る者は明なり。人に勝つ者は力有り、(二)自ら勝つ者は強なり。(三)足ることを知る者は富み、(四)強行する者は志あり。(五)其所を失はざる者は久しく、(六)死して亡びざる者は壽し。

(一) 人を知るの智は外に向つて働く心の力なり迷ふ事あり、自ら自己の分を知る明は内にある者にして迷ふ事なし、よく自ら知りてこそ始めてよく人をも知り得べきなれ、要するに自知自勝して始めてよく道に達すべしと也 (二) 人に勝つは腕力のみ、自ら己に克つが眞の強き也 (三) 足る事を知らねばいくら富みても貪りて止まず、貧しきと異なるなく、足る事は知れば貧賤も富貴と異ならず (四) 力行と同意、勤めて自ら行ふ者は必ず其志を得 (五) 自己の居るべき所に居りて、以て其所に安んずる者は長久也 (六) 身は死するも其神天下に在りて亡びざる者は眞の長壽と稱すべし

大道汎兮章第三十四

大道汎兮。其可二左右一。萬物恃レ之以生而不レ辭。功成不レ居。衣二被萬物一

大道は汎として、(一)其れ左右すべし。(二)萬物之を恃みて以て生すれども而も辭せず、(三)功成れども居らず、(四)萬物に衣被して而も主たらず。故に常(五)無欲、小と名く可し。(六)萬物焉に歸して而して主を知らず、大と名くべし。是を以て(七)聖人は能く其大を成

道常無レ名。樸雖レ小。天下不二敢臣一。侯王若能守。萬物將二自賓一。天地相合。以降二甘露一。人莫二之令一。而自均。始制有レ名。名亦既有。夫亦將レ知レ止。知レ止所二以不一レ殆。譬道之在二天下一。由三川谷之於二江海一也。

道常無名章第三十二

道(一)の常なるは名無し。(二)樸は小なりと雖も、天下敢て臣とせず。(三)侯王若し能く守らば、(四)萬物將に自ら賓せんとす。(五)天地相合うて以て甘露を降し、(六)人之を令むること莫くして、自ら均しからん。(七)始めて制して名あり。(八)名亦既に有れば、(九)夫れ亦將に止まることを知らんとす。止まるを知るは殆からざる所以なり。(一〇)譬へば道の天下にあるは、(一一)由ほ川谷の江海に於けるがごとし。(一二)

(一)第一章に所謂常の道に同じ (二)第二十八章に「樸に復歸す」の樸と同じ、自然也、道の至致也 (三)卑しとせず。臣の字は後の賓、均と韻を叶へたる也 (四)樸を (五)來り服せん (六)天地和して甘露が降る (七)人民は上之を令する事なくして無爲にして化して自ら均平の治を見ん (八)第二十八章の「樸散じて器となる」の意、樸をきりわりて茲に始めて萬事萬物の名を生ず (九)既に名を生ずれば萬事萬物紛々として窮まる所なからん、故に其止まる所を知るを要す (一〇)止まるを知れば外物を追ひて外に馳する事なし、これ危殆なき所以也 (一一)道は萬物の歸往して止まる所、恰も川谷の水の江海に歸往して之に止まるが如し (一二)猶に同じ、一本「猶」に作る

知人者智章第三十三

左。用レ兵則貴レ右。兵者不祥之器。非二君子之器一。不レ得レ已而用レ之。恬淡爲レ上。故不レ美也。若美必樂レ之。樂レ之者是樂レ殺レ人也。夫樂レ殺レ人者。不レ可レ得二志於天下一矣。故吉事尙レ左。凶事尙レ右。是以偏將軍處レ左。上將軍處レ右。言下居上勢則以二喪禮一處上レ之。殺レ人衆多以二悲哀一泣レ之。戰勝以二喪禮一處レ之。

す。故に美とせざる也。若し美とせば必ず之を樂まん。之を樂む者は、是れ人を殺すを樂む也。(七)夫れ人を殺すを樂む者は、志を天下に得べからず。故に吉事は左を尙び、凶事は右を尙ぶ。是を以て(八)偏將軍は左に居り、(九)上將軍は右に處る。(一〇)喪禮を以て之に處るを言ふなり。人を殺すこと衆多なれば、悲哀を以て之に泣き、戰勝てば喪禮を以て之に處る。

(一) 兵を用ふる事の精巧なる者は其佳なれば佳なる程愈々多く人を殺す譯ゆゑ不吉の人物也 (二) 他のにくしみを受くる事あり (三) 兵を善く用ふるを爲さず (四) 平居には左を貴び兵を用ひる時には右を貴ぶ (五) よく兵を用ふるは不祥の事を行ふ事ゆゑ、兵は不祥にして君子の器にあらざるをいふ也。純甫の言に、此句以下古の義疏の經に混入せるものならんといふ、亦一見解と爲すべし (六) 無味淡々强ひて勝たんとするが如き欲念なきを上とす、故に勝ちても喜ぶべしとはせぬ也、良の無味なるは美として喜ぶことなきが如し。「故に……樂む也」の間、賈註には「勝てども美とせず、而るに之を美とする者は是れ人を殺すを樂むなり」に作る (七) 美とすれば樂む、用兵を樂むは殺人を樂む也 (八) 一方の大將 (九) 全軍の將 (一〇) 普通の禮にては上位の人左に居り下位の人右に居る當なるに、兵事には偏將左に居り上將右に居る、これ兵は凶事喪禮を以て居ると也「居上勢則」は王弼本に從って削る

還。師之所處、荊棘生焉。大軍之後。必有凶年。故善者果而已矣。不敢以取強焉。果而勿矜。果而勿伐。果而勿驕。果而不得已。果而勿強。物壯則老。是謂非道。非道早已。

夫佳兵者。不祥之器。物或惡之。故有道者不處。是以君子居則貴

以て(五)強を取らず。(六)果して矜ること勿れ、果して伐ること勿れ、果して驕ること勿れ、果して已むことを得ざれ、果して強たること勿れ。(七)物壯んなれば、則ち老ゆ、是を非道と謂ふ。非道は(八)早く已む。

(一)兵力を以て天下に強國たるを爲さず　(二)兵の事はめぐりかへるを好む、我兵を以て人を害すれば我亦めぐり〳〵て其害を蒙るに至る　(三)軍隊の陣したる地は荒蕪なる　(四)事を成し遂げて已む　(五)それ以上に求め爲して強たらんとはせず　(六)事を成し遂げてはこりおごる事なく、已むを得ずして爲し、決して成し遂げたる結果として強たる勿れ　(七)物壯なれば老ゆ、壯は人爲人力を用ひて強く盛なるの謂也、故に非道(一本不道)といふ　(八)非道は早く衰へて久しきこと能はず。林註には既に其道に非ざるを知らば早く已めて爲す勿れと解せり。二つの「非道」雙註には共に「不道」に作る

夫佳兵章第三十一

夫れ兵を佳くする者は不祥の器なり、(一)物或は之を惡む。(二)故に有道の者は處らず。(三)是を以て君子居るときは則ち左を貴び、(四)兵を用ふるときは則ち右を貴ぶ。(五)兵は不祥の器にして君子の器に非ず。已むを得ずして之を用ふれば、恬淡を上と爲

將三欲取二天下一而爲レ之者。吾見二其不一レ得已。天下神器。不レ可レ爲也。爲者敗レ之。執者失レ之。凡物。或行或隨。或噓或吹。或强或羸。或載或隳。是以聖人。去レ甚去レ奢去レ泰。

(一)天下を取らんと將欲して之を爲す者は、吾其得ざるを見るのみ。天下は神器(二)なり。(三)爲す可からざる也。爲す者は之を敗り、執る者は之を失ふ。凡そ物、(四)或は行き或は隨ひ、或は噓(五)し或は吹し、或は强く或は羸く、或は載せ(六)或は隳る。是を以て聖人は、(七)甚を去り、奢を去り、泰を去る。

(一) 天下の歸するは自然を體し人爲を去るにあり、天下の民心を我に歸せしめんと欲して人爲を以て其事に從ふは決して天下を得る所以にあらず (二) 形而上を道といひ形而下を器といふ、天下は器の神なる者也、人爲にて得べきにあらず (三) 爲せば敗れ執れば失ふ、爲さず執らざれば敗るゝこともなく失ふこともなし、人爲强行の不可をいふ也 (四) 以下相對の必ず相伴ふものを擧げて以て爲せば必ず敗るゝ事を明かにす (五) 噓(一に呴に作る)は息をかけて物を煖む、吹は息を吹いて物を冷やす (六) 載せて全うするあれば物として隳るとあり (七) 甚奢泰共に同義にて度に過ぎたるをいふ、物に自然あり强ひて爲すべからず、事に適當あり過すべからずといふが老子の意也

以レ道佐二人主一者。不三以レ兵强二天下一。其事好レ

以道佐人主章第三十

道を以て人主を佐くる者は、(一)兵を以て天下に强たらず。(二)其事たる還るを好む。(三)師の處る所、荊棘生じ、大軍の後、必ず凶年あり。故に善なる者は(四)果のみ、敢て

雌一。爲二天下谿一。爲二天下谿一。常德不レ離。復二歸於嬰兒一。知二其白一守二其黑一。爲二天下式一。爲二天下式一。常德不レ忒。復二於無極一。知二其榮一守二其辱一。爲二天下谷一。爲二天下谷一。常德乃足。復二歸於樸一。樸散則爲レ器。聖人用レ之則爲二官長一。故大制不レ割。

嬰兒に復歸す。其白（四）を知りて、其黑を守れば、天下の式（五）となる。天下の式となれば、常德忒（六）はず、無極（七）に復る。其榮（八）を知りて、其辱を守れば、天下の谷となる。天下（九）の谷となれば、常德乃ち足り、樸（一〇）に復歸す。樸（一一）散ずれば則ち器となる。聖人（一二）之を用ひて則ち官長と爲す。故に大制（一三）は割かず。

（一）雄は剛也、陽也、强也。雌は靜也、柔也、弱也。よく動靜剛柔を兼ね知りて而も柔弱淸靜を守る（二）天下の自ら歸すること、谿の低きにありて水を求むるにあらずして水自ら之に歸するが如きをいふ（三）恒常の德全くして嬰兒の如き無知柔弱の狀態に歸る、嬰兒の無知柔弱は老子の理想也、第二十章にも見ゆ（四）白は明也、智也。黑は暗也、愚也（五）模範（六）常住にしてたがひ失ふことなく（七）無物也、無智無欲の極也（八）貴をさけて賤に居る（九）前出天下の谿と同義（一〇）あらき也、自然の狀態をいふ（一一）木の樸（アラキ）をきりこまざけば器となる如く、人の素樸散じて知欲生じ一かどの才器となる、器となればそれ〴〵特有の用あり（一二）王者は其器を用ひてそれ〴〵の官に長たらしめ以て百官の制を立つ。一說には「聖人之ヲ用フレバ則チ官長タリ」と訓じ、聖人に用ひられて百官の長となると解す（一三）聖人天下の全體を制するに當りては、只一つの樸卽ち道の全體を身に體し、天下の心をして自ら一に歸せしむ、故に之を割きて器と爲すことなし

將欲取天下章第二十九

策。善閉無關楗。而不可開。善結無繩約。而不可解。是以聖人常善救人。故無棄人。常善救物。故無棄物。是謂襲明。故善人不善人之師。不善人善人之資。不貴其師。不愛其資。雖知大迷。是謂要妙。

知其雄守其

くして、而も解くべからず。是を以て聖人常に善く人を救ふ、(七)故に人を棄つること無し。常に善く物を救ふ、(八)故に物を棄つること無し。是を襲明と謂ふ。(九)故に善人は不善人の師にして、(一〇)不善人は善人の資なり。(一一)其師を貴ばず、其資を愛せずば、知と雖も大に迷ふ。是を要妙と謂ふ。(一二)

(一)以下の五條は譬喩にて、其意蓋し自然に順ひ強ひて爲さざる有は痕迹をあらはす事なくして自ら其宜しきを得るをいふ　(二)車の輪のあと　(三)きずと責むべきもの。一説に讁は璚に作るべく、赤玉のきずをいふと　(四)計數の術、かずとり　(五)善く戸を閉ざすものは關(クワンヌキ)や楗(ヂヤウマヘ)を用ひざるも人之を開くを得ず　(六)なはてしばる。一説に約も亦なは也　(七)物の自然に因りて之を用ふ　(八)一視同仁にて如何なる人にても棄つることなし　(九)明を包んで内に藏するをいふ、所謂察々ならざる也　(一〇)善人不善人互に用ありて決して一方に偏すべからざるをいふ　(一一)師ありて貴ばず、資ありて愛せずんば、たとへ知ありて自ら智者となすとも實は大に迷へる也　(一二)此理を知るを要妙と爲す、要妙は道の肝要の妙竅の義ならん

知其雄章第二十八

其雄(一)を知りて、其雌を守れば、天下の谿(二)となる。天下の谿となれば、常德(三)離れず

重爲二輕根一。靜爲二躁君一。是以君子終日行不レ離二輜重一。雖レ有二榮觀一。燕處超然。如何萬乘之主。而以レ身輕二天下一。輕則失レ臣。躁則失レ君。

善行無二轍迹一。善言無二瑕讁一。善計不レ用二籌

重爲輕根章第二十六

(一)重は輕の根たり、(二)靜は躁の君たり、是を以て(三)君子は終日行けども輜重を離れず、(四)榮觀ありと雖も燕處超然たり。如何ぞ(五)萬乘の主にして、(六)身を以て天下よりも輕しとせん。(七)輕ければ則ち根を失ひ、躁なれば則ち君を失ふ。

(一) 凡て重きは輕きの根本也輕きは重きに制せらる (二) 人君靜坐してよく諸臣を奔走せしむるが如く、靜はよく躁(サワガシ)を鎭め之を制す (三) 王者は終日行くとも、衣食器具を載せたる車を離れて迄身輕にては行かず (四) 盛な觀物ありても心之に奪はれず、常に靜かに安からに居りて物外に超然たり (五) 大國の君主 (六) 身を天下より重んじて始めて國治まり身安からん、身を輕んじて天下を重んずるは本末輕重を失ふもの也。第十三章末尾を參照せば猶更に明かならん (七) 安ければ根卽ち重を失ひ、躁がしきは君卽ち靜を失ふ。「根」の字賀註による

善行無轍迹章第二十七

(一)善く行くものは(二)轍迹なく、善く言ふものは(三)瑕讁なく、善く計るものは(四)籌策を用ひず、(五)善く閉すものは關楗なくして、而も開くべからず。善く結ぶものは(六)繩約な

有物混成。先天地生。寂兮寥兮。獨立而不改。周行而不殆。可以爲天下母。吾不知其名。字之曰道。強爲之名曰大。大曰逝。逝曰遠。遠曰反。故道大。天大。地大。王亦大。域中有四大。而王處一焉。人法地。地法天。天法道。道法自然。

物(一)あり混成(二)し、天地に先つて生ず。寂(三)たり寥たり、獨立(四)して改めず、周行(五)して殆ふからず、以て天下(六)の母たるべし。吾れ(七)其名を知らず、之を字(八)して道といふ。強(九)ひて之が名を爲して大といふ。大(一〇)を逝と曰ひ、逝を遠と曰ひ、遠を反と曰ふ。故に道大なり、天大なり、地大なり、王(一一)も亦大なり、域中(一二)に四大あり、而して王一に居る。人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道(一三)は自然に法る。

(一)道を物といふは、敢て道を物となすにはあらず、假に指示していふ爲めの辭也　(二)渾然として成り形體に分別すべきなきをいふ　(三)無形無聲也　(四)絶對にして永久不變　(五)遍く六合にゆき渉りて窮まり盡する事なし　(六)天下萬物皆道より生ずれば也　(七)道固より無名也　(八)假に字名を附けて道といふ　(九)強ひて名づくれば大とすべきか　(一〇)大といふ語の思想は六合に渉り千古に通ずる也、そのどこ迄も往きひろがる思想よりいへば逝也、其往く事無限に遠き思想よりいへば遠也、而も其歸りて又もとに歸る思想よりいへば反也、要するに道は絶對無限無窮の循環なる義をあらはす　(一一)人の中にて特に衆人の崇仰するもの　(一二)天地間　(一三)法は則、義、之を其極致とすと解かば意義自ら明かならんか、地は人より大、故に人は地を則として法る、天は地より大、故に地は天に法る、道は天より大、故に天は道に法る、溯源し來りて道の四大中の最大なる所以を示せるならん、而して道は無窮無極の自然を以て其極致とすと也

道一者。道亦樂レ得レ之。同二於德一者。德亦樂レ得レ之。同二於失一者。失亦樂レ得レ之。信不レ足。有レ不レ信。

跂者不レ立。跨者不レ行。自見者不レ明。自是者不レ彰。自伐者無レ功。自矜者不レ長。其在レ道也。曰二餘食贅行一。物或惡レ之。故有道者不レ處也。

して自然なる也　（二）勢はげしき風雨は長き時間は續かず、風雨の自然にあらざれば也　（三）飄風驟雨を爲すは天地なり、天地すら自然ならざるは久しき能はず、況や人にして自然に反して强ひて爲すものいかで久しきを得ん　（四）道を事とする者、道を學び之を行ふ者　（五）有道の人には其道に同じうし、有德の人には其德に同じうし、道と德とを失へる人に對しても、その失へるがまゝに同じうして敢て違を立てず　（六）かくすれば有道の人も有德の人も道と德とを失へる人も皆樂しみ、我强ひて言はずして人自ら信ず　（七）我信足らざれば人之を信ぜず、即ち强ひて言を以て語らず、所謂希言自然にして始めて我信足り人以て信ずべし

跂者不立章第二十四

（一）跂者は立たず、跨者は行かず、（二）自ら見す者は明かならず、自ら是とする者は彰はれず、（三）自ら伐る者は功なく、自ら矜る者は長からず。（四）其道にあるや、（五）餘食贅行と曰ふ。（六）物或は之れを惡む。故に有道の者は處らず。（七）

（一）つまだつ者は久しく立ち得ず　（二）兩足をふんばりて大股にあるく者は長く行き得ず、跂も跨も共に不自然なれば也　（三）第二十二章の文を參照せば其意明かならん　（四）道に在りては。道の上より見れば　（五）無用の長物　（六）他のにくみを受くる事あり　（七）自見・自是・自伐・自矜等の故意不自然の行を爲さず

有物混成章第二十五

爭一。古之所レ謂曲則全者。豈虛言哉。誠全而歸レ之。

希言自然。故飄風不レ終レ朝。驟雨不レ終レ日。孰爲レ此者。天地。天地尚不レ能レ久。而況於レ人乎。故從二事於道一者、道者同二於道一。德者同二於德一。失者同二於失一。同二於

てよく直く、よく窪みて始めてよく盈つべく、能く古くして始めてよく新に、能く少なくして始めてよく多かるべしとの意 (三) 少則多といふを韵を叶へるために二句としたる也、但、二句を對するものと解くも亦意明かならん 少の極也、虛也、無也。直ちに道と解し德と解するも可ならんか (四) 則るべき軌範 (五) 其有を有として衒ふ事なく、自負する事なく、誇ることなく、驕る事なき故、能く明かに彰れ功ありて長久也 (六) 誠に天賦自然の生命を全うして之を天に歸す所以也

希言自然章第二十三

(一)希言は自然なり、故に(二)飄風は朝を終へず、驟雨は日を終へず。(三)孰れか此れを爲す者ぞ、天地なり。天地すら尙ほ久しき能はず、而るを況んや人に於てをや。故に(四)事に道に從ふ者は、道は道に同じうし、(五)德には德に同じうし、失には失に同じうす。(六)道に同じうする者は、道も亦之を得るを樂しむ。德に同じうする者は、德も亦之を得るを樂しむ。失に同じうする者は、失も亦之を得るを樂しむ。(七)信足らざれば信ぜざることあり。

(一) 聽けども聞えざるを希言といふ、無言の言也、強ひて言ふにあらず、強ひて默するにもあらず、道のまゝに

中有信。自古及今。其名不去。以閲衆甫。吾何以知衆甫之然哉。以此。

曲則全。枉則直。窪則盈。弊則新。少則得。多則惑。是以聖人抱一爲天下式。不自見。故明。不自是。故彰。不自伐。故有功。不自矜。故長。夫唯不爭。故天下莫能與之

實有の義と解すべし。呂註には道の一を得て雜らざる者也といへり　(六) 不變不易萬物の生々化々期して待つべし　(七) 道は永久にかはることなし　(八) 萬物と解し、萬善と解し、又萬物のはじめと解す、要するに萬有悉く道より出づるをいふ　(九) 我何を以て萬物の道より出づるかを知るやといふに、上に述ぶるごとく道の無中自ら象あり物あり精あるを知ればなり

曲則全章第二十二

(一)曲なれば則ち全し、枉なれば則ち直し、窪なれば則ち盈つ。弊るれば則ち新なり、(二)少なれば則ち得、多ければ則ち惑ふ。是を以て聖人は(三)一を抱きて、天下の(四)式となる。(五)自ら見さざるが故に明かに、自ら是とせざるが故に彰る。自ら伐らざるが故に功あり。自ら矜らざるが故に長し。夫れ唯だ争はず、故に天下能く之れと争ふ莫し。古の所謂曲なれば則ち全き者、豈虚言ならんや。(六)誠に全うして之れを歸す。

(一) 曲は自然にまがるをいひ、枉は殊更にまげるをいふ、一説に曲は部分々々の義とし、全は全體の義とす。柳の枝に曲折なしといふ類にて、全きを以て全きを求めては得べからず、よく曲にして始めてよく全く、よく枉げて始め

悶。澹兮其若ㇾ海。飂兮似ㇾ無ㇾ所ㇾ止。衆人皆有ㇾ以。我獨頑且鄙。我獨異二於人一。而貴ㇾ求二食於母一。

孔德之容。唯道是從。道之爲ㇾ物。唯恍唯惚。惚兮恍兮。其中有ㇾ象。恍兮惚兮。其中有ㇾ物。窈兮冥兮。其中有ㇾ精。其精甚眞。其

人は智餘りあり、我はぼんやりとして遺忘する所あるが如し 〔一三〕 無知にしてくらき貌 〔一四〕 昭々・察々は共に智用かにして明察する貌、昏々と悶々とは共に智のくらきをいふ 〔一五〕 心淡々として海の如く、さつと吹き行く風の宿止する所なきが如し、執着なく物に滞ることなきをいふ、飂は風の吹く形容。賀註には「忽として晦きが若く、寂として止まる所無きに似たり」に作る、それによれば、此一句は、恍惚として分明ならず、寂にしてきはまる所なしと解すべきか 〔一六〕 自ら斯くなさんと取り守りて行爲する所あり 〔一七〕 固陋頑愚にして事宜に適せざるがごとし 〔一八〕 賀註には「母に食はるゝを貴ぶ」に作る。乳兒の母に養はるゝ如く德に養はれて道と冥合せん事を貴ぶと也。林註には、母を道とし、道を味はん事を求むと解せり、亦通ず

孔德之容章第二十一

(一)孔德の容は、唯だ道に是れ從ふ。道の物たる、(二)唯だ恍、唯だ惚。惚たり恍たり、(三)其中に象あり、恍たり惚たり、其中に物あり、(四)窈たり冥たり、其中に(五)精あり、其精甚だ(六)眞にして、其中に信あり。古より今に及ぶまで、(七)其名去らず、以て(八)衆甫を閲ぶ。(九)吾れ何を以て衆甫の然るを知るや、此を以てなり。

〔一〕 大德也、道は形無く德は形あり、即ち容といふ 〔二〕 只ぼつとして見るべきの形無し 〔三〕 天地萬物は道より出で、即ち恍惚にして形なき道の中に象あり物あり 〔四〕 道は奧深く暗くして見るべからず 〔五〕 精は象と同じく

絶レ學無レ憂。唯之與レ阿。相去幾何。善之與レ惡。相去何若。人之所レ畏不レ可レ不レ畏。荒兮其未レ央哉。衆人熙熙。如レ享二大牢一。如三春登二臺一。我獨泊兮其未レ兆。若二嬰兒之未一レ孩。乘乘兮若レ無レ所レ歸。衆人皆有レ餘。我獨若レ遺。我愚人之心也哉。沌沌兮。俗人昭昭。我獨若レ昏。俗人察察。我獨悶

學(一)を絶てば憂なし。唯(二)と阿と相去る幾何ぞ、善(三)と惡と相去る何若ん。人(四)の畏る所は畏れざるべからず。荒(五)として其れ未だ央まらざる哉。衆人は熙熙(六)として、大牢(七)を享くるが如く、春臺(八)に登れるが如し。我獨り泊(九)として其れ未だ兆さざること、嬰兒の未だ孩せざる(一〇)が若く、乘乘(一一)として歸する所無きが若し。衆人(一二)は皆餘りあり、而して我獨り遺れたるが若し。我は愚人の心なる哉、沌沌(一三)たり。俗人は昭昭(一四)として、我獨り昏きが若し。俗人は察察として、我獨り悶悶たり。澹(一五)として其れ海の若く、飂として止まる所なきに似たり。衆人は皆以てする有り(一六)、我獨り頑(一七)にして且つ鄙し。我獨り人に異にして、母(一八)に食はれんことを求むるを貴ぶ。

(一) 學を爲して知見を廣めんとすれば却て道に遠ざかる、學を絶ちて眞の無に歸すれば憂なし　(二) 共に應答の聲にて、唯は丁寧、阿は横柄也　(三) 善惡の別もこれを絶對の見地より見れば畢竟唯と阿との差のみ　(四) されど强ひて世に逆ふにも及ばず、人の不可として畏るゝ所は我も亦畏る　(五) 只世に居り世に逆はざれども心を道に遊ばしむるを以て恍惚として際き窮るなし　(六) 歡樂する貌　(七) 牛羊豕三種の饗、非常な御馳走　(八) 春の日高き臺に登りて春光を樂む如し　(九) 靜かにして未だあらはれ動かず　(一〇) 孩は智恵づき笑ふをいふ　(一一) 行き疲れたる貌、道にさまよひて歸する所無きが如し、外物に執着せず、我を立てずして只自然のまゝなるをいふ　(一二) 衆

家昏亂有ニ忠臣一。

絶レ聖棄レ智。民利百倍。絶レ仁棄レ義。民復ニ孝慈一。絶レ巧棄レ利。盗賊無レ有。此三者。以爲文不レ足。故令ニ有レ所レ屬。見レ素抱レ樸。少レ私寡レ欲。

の大道の行はれざる結果のみ ㊂ 自然の大道を離れ、人知を以て事を學聖するに及んで僞を生ず ㊃ 父子兄弟夫婦、一家和すれば孝慈の名なく、一國治まれば忠臣の名は無き筈也、孝忠の名あるは畢竟國亂れ家和せざるによりて起りたる也

絶聖棄智章第十九

(一)聖を絶ち智を棄つれば、民の利百倍す。(二)仁を絶ち義を棄つれば、民孝慈に復る。(三)巧を絶ち利を棄つれば、盗賊有ること無し。(四)此三者は、以爲ふに文にして足らず。故に(五)屬する所有りて、(六)素を見し樸を抱き、私を少うし欲を寡うせしむ。

㊀ 所謂聖智の名出づるに及んで天下の詐作す、之を絶ちて絶對自然の大道にかへり無爲の治を爲せば民利自然に興らん ㊁ 仁義の名出でて孝不孝慈不慈の分別起る、之を絶ちて道と相忘るゝ時、民眞の孝慈の誠に復る ㊂ 技巧利益を貴へば民利に走りて遂に盗を爲す、之を絶たば盗賊なからん ㊃ 聖智・仁義・巧利の三者は文飾にして思ふに眞によく民を治むるに足らざるもの也 ㊄ 屬は附着の義、民をして道に附着し、表には素を見はし内には樸を抱き、内外表裏一致して文飾を避けて素樸を守り、少私寡欲ならしめて、民始めて自然に治らん

絶學無憂章第二十

太上下知レ有レ之。其次親レ之譽レ之。其次畏レ之。其次侮レ之。故信不レ足焉。有レ不レ信。猶兮其貴レ言。功成事遂。百姓皆曰二我自然一。

太上(一)は下之れ有るを知る。其次(二)は之を親み之を譽む。其次(三)は之を畏る。其次(四)は之を侮る。故に信足らざれば(五)信ぜざるあり。猶(六)として其れ言を貴ぶ。功成り事遂げて、百姓(七)皆我が自然といふ。

㊀太古至德の世（一說には最上の德を有する大人）は人君無爲の治を爲し、下民は只上に君有るを知るのみ、其事功を見る事なし ㊁德やゝ下れば仁義を以て治を爲し民に恩を施す、故に民之に親しみ之を譽む ㊂更に下れば政刑を以て政を爲す、故に下之を畏る ㊃いよ〳〵下れば權謀詐術を以て天下を制せんとし下之を侮るに至る ㊄信は自然の誠也、上たる者信足らざれば、民上を信せず ㊅太上の治者をいふ、ためらひて輕々しく言を出さず。林註には、民旣に信せざるに治を爲す者猶安全として言理を以て貴しとなす、故に號令勅詔の事あり、豈悠々民の疑を遁ねずやと解したれどいかゞ ㊆功成り事遂げ、民皆其生に安ずるも而も其上の力たるを知らず、皆自己の自然と思ふ、これ即ち太上の治也

大道發章第十八

大道廢有二仁義一。智慧出有二大僞一。六親不レ和有二孝慈一。國

大道(一)廢れて仁義あり、智慧(二)出でて大僞あり、六親(三)和せずして孝慈あり、國家昏亂して忠臣あり。

㊀大道の行はるゝ時代には人情道の內にあり、道自然に行はる、仁義の如き人爲的道德の出て來たるは絕對自然

致レ虚極。守レ靜篤。萬物並作。吾以觀二其復一。夫物芸芸。各歸二其根一。歸レ根曰レ靜。靜曰レ復レ命。復レ命曰レ常。知レ常曰レ明。不レ知レ常。妄作凶。知レ常容。容乃公。公乃王。王乃天。天乃道。道乃久。沒レ身不レ殆。

致虚極章第十六

虚を致すこと極り、(一)靜を守ること篤くば、萬物並び作るも、(二)吾れ以て其復を觀ん。夫れ物の芸芸たる、(三)各々其根に歸る。根に歸るを靜といひ、靜を命に復るといひ、(四)命に復るを常といひ、(五)常を知るを明といふ。常を知らざれば妄りに作して凶なり。(六)常を知れば容る。(七)容るれば乃ち公なり。(八)公なれば乃ち王なり、(九)王なれば乃ち天なり、(一〇)天なれば乃ち道なり、(一一)道なれば乃ち久し、(一二)身を歿ふるまで殆ふからず。

(一)虚は無心靜は無爲　(二)人よく無心無爲ならば萬物紛々として起るも爲めに心を擾す事なくして、よく其復歸する所の本體の無を觀るべし　(三)茂りて多き貌　(四)天命の本自然　(五)平常不易　(六)妄に動作して災禍を受く　(七)廣く物を包容す　(八)公平無私　(九)天下に王たるは即ち此公道也、故に公なれば乃ち王たるべし　(一〇)公道を以て王たるはこれ天たる也　(一一)天たるはこれ絶對の大道たる也　(一二)道は常久也、人能く此常道を得れば即ち終身安らかにして道に叶ひ又危殆あるなし

太上章第十七

者。微妙玄通。深不可識。夫惟不可識。故強爲之容。豫兮若冬涉川。猶兮若畏四隣。儼若客。渙若冰將釋。敦兮其若樸。曠兮其若谷。渾兮其若濁。孰能濁以靜之徐清。孰能安以久之徐生。保此道者。不欲盈。夫惟不盈。是以能敝不新成。

に(三)強ひて之れが容を爲す、(四)豫たり、冬、川を渉るが若く、(五)猶たり、四鄰を畏るゝが若く、(六)儼として客の若く、(七)渙として冰の將に釋けんとするが若く、(八)敦として其れ樸の若く、(九)曠として其れ谷の若く、(一〇)渾として其れ濁るが若し。(一一)孰れか能く濁つて以て之れを靜かにして徐ろに清からん。(一二)孰れか能く安にして以て之を久しうして徐ろに生ぜん。此道を保つ者は盈つるを欲せず。夫れ惟盈たず、是を以て(一三)能く敝うして新たに成さず。

(一) 道を體得したる者 (二) かすかにして奥深し (三) 強ひて之を形容するに即ち次の如し (四) 事を爲すにためらふ事恰も冬日川を渉るごとし (五) ためらひ大事を取る事人の四鄰を憚るが如し (六) 儼然として妄動妄言せぬ事客の如し (七) 渙は舒散也、氷の將に釋けんとして未だ釋けざる如く、打ちくつろぎながら又中に守る所ある也 (八) 敦厚にして飾なきことあらきの如し (九) 胸中虚にしてひろき事谷の如し (一〇) 渾然として光をつゝみ自ら潔白を見はさざる事濁水の如し (一一) 濁水は靜かにして置けば自ら澄む、何人かよく渾濁に居て靜にゆつくりと其澄むを待つ者ぞ (一二) 何人かよく安んじ動かざる之を久しうして徐ろに其生動するを待つ者ぞ (一三) 內虚にして盈たず、故にいくら古くなりても壞れる事なき故新に成す必要なく永久に古き道そのまゝなる也。一說「能」を敝とし「ヤブレニタフ」と訓じ、いつ迄もやぶれずと解す、亦通ず

之不レ得。名曰レ微。此三者。不レ可二致詰一。故混而爲レ一。其上不レ皦。其下不レ昧。繩繩兮不レ可レ名。復二歸於無物一。是謂二無狀之狀。無象之象一。是謂二恍惚一。迎レ之不レ見二其首一。隨レ之不レ見二其後一。執二古之道一。以御二今之有一。能知二古始一。是謂二道紀一。

古之善爲レ士

一となる。其上(七)にして皦なるにあらず、其下にして昧きにあらず。(八)繩繩として名くべからず。無物に復歸す。是れを無狀の狀、(九)無象の象といふ。是れを(一〇)恍惚といふ。(一一)之れを迎へて、其首を見ず、之れに隨ひて其後を見ず。(一二)古の道を執りて、以て今の有を御すれば、能く古始を知る。是れを道紀(一三)といふ。

(一)以下凡て道の形迹無きをいふ也　(二)色の見るべきなきをいふ　(三)聲の聞くべきなきをいふ　(四)執也、舊註には搏に作り、搏圓となす　(五)形の執るべきなきをいふ　(六)夷希微の三者は皆道の見るべからず、聞くべからず、執るべからざるを形容するものにて、窮め詰りて分別し得べきにあらず、故に混じて一となる也　(七)皦は明、道は高きにありて明なるにもあらず、低きにありて暗きにもあらず、無が絶對にして高下明暗を超越せり　(八)連つて絶えずかぎりなき貌　(九)其狀其象は無にもあらず有にもあらざるをいふ　(一〇)微妙不測あるが如く又無きが如き意　(一一)道は無始無終、前より見るも首なく後より見るもしりなし　(一二)古の道即ち其初めの無を以て今の有を治むれば古始の道なる者を知るべし　(一三)道の綱紀、道をすべくゝる大づな

古之善爲士章第十五

古の善く士たる者は、(一)微妙玄通深くして識るべからず。(二)夫れ惟識る可からず、故

謂下貴二大患一若上身。吾所三以有二大患一者。爲二吾有一身。及二吾無一身。吾有二何患一。故貴三以レ身爲二天下一。則可レ寄二天下一。愛三以レ身爲二天下一。乃可三以託二於天下一。

れ身を無みするに及ばば、吾れ何の患かあらん。故に身を(七)以て天下を爲むるよりも貴ぶものは、則ち天下を寄すべし。身を以て天下を爲むるよりも愛するものは、乃ち以て天下を託すべし。

(一) 寵辱は榮辱に同じ、榮辱は外にあるものゆゑ吾が心を勞すべきにあらざるに、世人は其得失去來によりて驚くがごとく深く之を念とする (二) 同樣に大患を畏れ惮るゝ身を重んじ貴ぶ如くす (三) 賓註には「何をか寵辱驚くが若しと謂ふ、寵は下なり」に作る (四) 寵は辱のもと、寵辱もと二にして一なるに、世人は寵を上とし辱を下として、寵を得ては喜びて驚き之を失ひては怨みて驚く。賓註の文によれば、寵は下なり況や辱をやと解すべきが如し (五) 賓註此下に「是謂二寵辱若一レ驚」の六字あり (六) 我に大患あるは我に吾を我として身を有する心あれば也、吾我を有となさず凡て自然に歸して一點の我執なきに及ばゞ亦何の患あるべき (七) 眞によく身を愛し身を貴ぶこと天下を治むる以上なる者にして始めて天下を依託するに足るべし

視レ之不レ見。名曰レ夷。聽レ之不レ聞。名曰レ希。搏

視之不見章第十四

(一)之れを視れども見えず、名けて夷(二)と曰ふ。之れを聽けども聞えず、名けて希(三)と曰ふ。之れを搏(四)れども得ず、名けて微(五)と曰ふ。(六)此三者は致詰す可らず。故に混じて

五色令二人目盲一。五音令二人耳聾一。五味令二人口爽一。馳騁田獵。令二人心發一レ狂。難レ得之貨。令二人行妨一。是以聖人爲レ腹不レ爲レ目。故去レ彼取レ此。

寵辱若レ驚。貴二大患一若レ身。何謂二寵辱一。辱爲レ下。得レ之若レ驚。失レ之若レ驚。何

五色章第十二

五色は人の目を盲せしめ、(一)五音は人の耳を聾せしめ、(二)五味は人の口を爽はしめ、(三)馳騁田獵は人の心に狂を發せしめ、(四)得難きの貨は人の行ひを妨げしむ。(五)是を以て聖人は腹を爲して(六)目を爲さず、(七)故に彼を去りて此を取る。(八)

(一)以下凡て外物に囚はるれば内心の守を失ふをいふ。五色は青黄赤白黒、五色の美なるは人の目を惑はして視る事の正を失はしむ　(二)宮商角徴羽の妙音は聴く事の正を失はしむ　(三)鹹酸甘苦辛の美味は人の味覺の正を失はしむ　(四)馬を馳せ獸を獵する樂　(五)行ひの正しきを失はしむ　(六)腹即ち内をみたし己を養ひ氣を守りて散ぜざらしむ　(七)外物を逐ひて之に心をうつし奪はれず　(八)彼は五色五音等の外物をいひ此は内に守る所の道を謂ふ

寵辱章第十三

寵辱驚くが若く、(一)大患を貴ぶこと身の若くす。(二)何をか寵辱と謂ふ。(三)辱を下と爲し、(四)之を得ても驚くが若く、之れを失ひても驚くが若し。何をか大患を貴ぶこと身の若しといふ。(五)吾れ大患ある所以の者は、吾れ身を有するが爲めなり。吾

達。能無知乎。生レ之畜レ之。生而不レ有。爲而不レ恃。長而不レ宰。是謂二玄德一。

相抱一して離れずといふ說あり。外には魄を載せ內には一即ち道の本體を抱き二者合して離れずと解するが可ならんか　(三) 氣を純にし志を柔和にして赤子の如くす、これ修養の極致也　(四) 私欲を洗ひ除きて萬物自然の玄理を覺る　(五) 心の疵、人爲の私心　(六) 天門は心、開闔は動靜、心は運動變化して止まざるも、而も心が物を迎ふるにあらず、物至つて動き、動いてまた靜なるこれ雌の德也、つまり心活動するも而も退いて守るの雌德を失はぬ也　(七) 宇宙萬物の理を明かに知りて而も其知あらはれず所謂大知無知なる如くす　(八) 萬物を成育長養するも、私有せず、我功として恃まず、又已れ之が主宰とならず　(九) 德あるも其主を知らず、天地の自然に順ふ、幽冥の大德の義

三十輻共二一轂一。當二其無一有二車之用一。埏レ埴以爲レ器。當二其無一有二器之用一。鑿二戶牖一以爲レ室。當二其無一有二室之用一。故有之以爲レ利。無之以爲レ用。

三十輻章第十一

(一)三十輻一轂を共にす、(二)其の無に當りて車の用あり。(三)埴を埏つて以て器を爲る、(四)其の無に當りて器の用あり。戶牖を鑿ちて以て室を作る、(五)其の無に當りて室の用あり。故に有の以て利たるは、(六)無の以て用をなせばなり。

(一) 三十の車輪のやが一つのこしきに集まる　(二) 車の能く行くはこしきの中央の空虛なる所に心棒を入れて以て輪を轉ずるによる　(三) 粘土をこねうちて　(四) 器の空虛なる所以てよく物を盛るべし　(五) 戶や窓の空虛なる所より人は出入し光線も入りて以て室の用を爲すべし　(六) 車器室の如き實有なるものが人の利便となるは虛にして無なる所が其用を爲すによる也

如二其已一。揣而鋭レ之。不レ可二長保一。金玉滿レ堂。莫二之能守一。富貴而驕。自遺二其咎一。功成名遂身退。天之

ず。金玉堂に滿つれば、之を能く守る莫し。富貴にして驕れば、自ら其咎を遺す、(三)功成り名遂げて身退くは天の道なり。(四)

(一) 器に水を盈してもつ 盈さぬ樣に持つてゐるは心勞甚し、始めより一杯にせぬがよし (二) 刃物を鋭くして置いて折れぬ樣に治めるのに永持ちせず。揣は治也、折れぬ樣に節に用心する也、前の句と共に「之を盈して持す」「之を鋭くして揣す」の倒句法也。一說には揣音ダ、きたえるの義とす (三) 自ら禍災に遇ふ (四) 春去り夏來り、秋去り冬來る、功を成して退くは天の道、人も亦盈滿の名に居るべからず

載二營魄一抱レ一。能無レ離乎。專レ氣致レ柔。能如二嬰兒一乎。滌除玄覽。能無レ疵乎。愛レ民治レ國。能無レ爲乎。天門開闔。能爲レ雌乎。明白四

載營魄章第十

營魄を載せて(一)一を抱き、(二)能く離るゝなからん乎。(三)氣を專にし、柔を致し、能く嬰兒の如くならん乎。(四)滌除玄覽して能く疵なからん乎。民を愛し國を治めて能く無爲ならん乎。(五)天門開闔して能く雌たらん乎。(六)明白四達して能く無知ならん乎。(七)之を生じ、之を畜ひ、(八)生じて有せず、爲して恃まず、長じて宰せず、是を玄德と謂ふ。(九)

(一) 數說あり、或は魂魄卽ち精神とし、或は肉體とし、或は知覺感覺の作用卽ち營々として物を追ひて定まらざる然の義とす (二) 一を道として、肉體を鎭じ道を抱き二者相離れざらしむといふ說あり、又精神を形體に載せ形神

上善若レ水。水善利ニ萬物一而不レ爭。處ニ衆人之所レ惡。故幾ニ於道一矣。居善地。心善淵。與善仁。言善信。政善治。事善能。動善時。夫惟不レ爭、故無レ尤矣。

(一)上善は水の若し。水は善く萬物を利して而も爭はず(二)、衆人(三)の惡む所に處る。故(四)に道に幾し。(五)居は善く地、(六)心は善く淵、(七)與は善く仁、(八)言は善く信、(九)政は善く治、(一〇)事は善く能、(一一)動は善く時、夫れ惟爭はず、故に尤なし。

(一) 前に所謂天下皆善の善たるを知るものとは異なり、道の所謂善なるもの、絶對の善也 (二) 其性順にして我意なく只自然の運行のまゝにす (三) 低きは人の惡む所、而して水は常に低きに居る (四) 水と道とは相似て近きもの也。上善も亦既に上善といふ名のある以上道そのものにはあらざれども、而も相對の善にあらずして道に近きものたる也 (五) 以下みな聖人の爲す所を以て水の狀に喩ふ、居るや高きを避けて下に趨り安らかにして爭はず (六) 心は虚にして深く妄に動くことなし (七) 人に與へて仁あるも而も仁愛の意なく報を求めず。一説「與」をクミスルモノと訓じ、上善の人は天下の仁と與(トモ)にして親疎なしと解す (八) 言ふべくして自然に言ふ故に自ら信(マコト)也 (九) 水の穢を洗ひ高下に平準する如く、自然のまゝに政を爲す故自らよく治まる (一〇) 物の來るに應じて自然に能くするは、恰も水の方圓の器に從つてそれぞれ形を爲す如し (一一) 水の冬氷りて春解くる如く、動くこと自然にして能く時に合す

持而盈之章第九

持而盈レ之不レ

(一)持して之を盈たすは、其已むに如かず。(二)揣して之を鋭くするは、長く保つ可から

べからず。蔣君采の說に、玄牝の牝は讀んで七の如く以て上句の韻に叶へ、又玄牝之門といひて下句と韻を叶ふる也と、この說によればゲンヒと讀むべし （四）天地の始まる所の根本 （五）微にして絕えず、旣に絕えざれば卽ち存亡の境地を超越するもの、存するも而も其存を見るべからず、故に存するが如くといふ （六）道の物を生ずるを謂つて「之を用ふ」といふ、道萬物を生ずるも而も之を用ひて勤むることなく只自然にして成る也

天長地久章第七

天長地久。天地所ニ以能長且久一者。以三其不ニ自生一。故能長生。是以聖人後ニ其身一而身先。外ニ其身一而身存。非レ以ニ其無レ私耶。故能成ニ其私一。

天は長く地は久し。天地の能く長く且久しき所以の者は、其の（一）自ら生ぜざるを以ての故に能く長生す。是を以て（二）聖人は其身を後にして身先じ、（三）其身を外にして身存す、其（四）私無きを以てに非ずや、故に能く其私を成す。

（一）自然に生育し、意を生成に用ひず （二）聖人は天地の道德を體して天地と同じく無私無欲也、其身を後にして人と爭はず、故に人亦我と爭はずして天下の民物自ら歸往し、以て身自ら安んずる事となる （三）己の知欲にて外物を追ひ求むる事なし、故に物亦我を害する事なくして身安らかに存す （四）身を後にし身を外にするは卽ち私無き也、身先んじ身存するに私也、無私なるが故によく其私成ると也

上善若水章第八

天地不ㇾ仁。以二萬物一爲二芻狗一。聖人不ㇾ仁。以二百姓一爲二芻狗一。天地之間。其猶二橐籥一乎。虛而不ㇾ屈。動而愈出。多言數窮。不ㇾ如ㇾ守ㇾ中。

谷神不ㇾ死。是謂二玄牝一。玄牝之門。是謂二天地根一。綿綿若ㇾ存。用ㇾ之不ㇾ勤。

(一)天地は仁せず、萬物を以て芻狗(二)と爲す。(三)聖人は仁せず、百姓を以て芻狗と爲す。天地の間は其れ猶ほ橐籥(四)のごとき乎。(五)虛にして屈きず、動いて愈〻出づ。(六)多く言へば數〻窮まる、(七)中を守らんに如かず。

㈠天地は仁を仁とせず、仁を施して仁を忘るゝの義、又仁を人爲言議の愛と解するも可ならん ㈡祭祀用の草人形、祭終れば用なくして之を忘る、天地の萬物を生々化育するも只其自然に任せて之と相忘るゝこと芻狗の如しと也 ㈢聖人は天地の大道を體得するもの故、民と相忘れて所謂仁愛に超絶すと也 ㈣ふいご ㈤內空虛にして而も能く風を生じて盡き窮まることなし、動けば動く程風を生ず、天地の間に道あり恰もこれに類すと也 ㈥人知を以て事理を辨ぜんとすれば、言へば言ふ程益〻窮す ㈦不言無爲、只虛を守るが可也

谷神不死章第六

谷神(一)死せず、是を玄牝(二)と謂ふ。(三)玄牝の門、是を天地の根(四)と謂ふ。(五)綿綿として存するが若く、(六)之を用ひて勤めず。

㈠虛にして靈なる者、道を譬へたる語、不死は道の無始無終なるをいふ ㈡幽玄靈妙にして萬物を生むの母の義 ㈢玄牝は萬物の母即ち萬物の由つて出づる所、故に門といふ、玄牝中の門といふが如く其一部分の個所と解す

治。

道沖而用レ之。或不レ盈。淵乎似二萬物之宗一。挫二其銳一解二其紛一和二其光一同二其塵一。湛兮似レ若レ存。吾不レ知二誰之子一。象二帝之先一。

民をして自己の力によりて衣食足らしむるをいふ ㊄ 不レ尚・不レ見・不レ貴、これ即ち無爲也、この無爲の政を爲して天下治まらざることなし

道沖章第四

道は沖(一)にして、之を用ふるに或は盈たず、(二)淵乎として(三)萬物の宗(四)に似たり。(五)其銳を挫きて、其紛を解き、(六)其光を和して、其塵に同ず。(七)湛として存する若くなるに似たり。吾、(八)誰の子なるを知らず。(九)帝の先に象たり。

㊀ 盅也、道の無形無象にして包容せざるなきを謂ふ ㊁ 盈たざるに似たりといふと同意、滿盈するものは溢る、道は盅にして其用窮らず、即ち盈たざるものあるが如き也 ㊂ 深遠なる形容 ㊃ 本根、源 ㊄ 道自ら銳を挫きて鈍くし、而もよく物の紛雜を解きて事理整然たらしむ ㊅ 道は内に光あれども包みてあらはさず、物の塵に同じくして敢て獨り自ら潔よくせず。其銳其光の其は道自らを指し、其紛其塵の其は萬物を指す ㊆ 水の深くたゝへたる形容。原文の兮は音ケイ、音調を強める爲めの助辭、訓讀には讀まざるを常とす ㊇ 道は無始無終にして形象なし、即ち其因つて出づる所の本を知るべからず ㊈ 帝は天帝、象は似の義、天地開闢の以前より存する者の如し

天下不仁章第五

不レ辭。生而不レ有。爲而不レ恃。功成而不レ居。夫惟不レ居。是以不レ去。

無爲の意を明かに爲す也との說も見ゆ　(六)我ものとせず　(七)大成したる功をたのみほこらず　(八)己が功なりとせず　(九)其功が去らず、即ち其功を失はずの意、其功に居れば其功の去るべき事もあれど、既に其功に居らざれば固より其功の去るべき理なき也

不尙賢章第三

不レ尙レ賢。使二民不一レ爭。不レ貴二難レ得之貨一。使二民不一レ爲レ盜。不レ見レ可レ欲。使二心不一レ亂。是以聖人之治。虛二其心一。實二其腹一。弱二其志一。强二其骨一。常使二民無知無欲一。使三夫知者不二敢爲一也。爲二無爲一則無レ不レ

(一)賢を尙ばざれば、民をして爭はざらしむ。(二)得難きの貨を貴ばざれば、民をして盜を爲さゞらしむ。(三)欲すべきを見しめざれば、心をして亂れざらしむ。是を以て聖人の治は、(四)其心を虛しくして其腹を實し、其志を弱くして其骨を强くす。常に民をして無知無欲ならしめ、夫の知者をして敢て爲さゞらしむ。(五)無爲を爲せば則ち治らざることなし。

(一)賢を尙べば民は己の若かざるを恥ぢ、己亦貴ばれん事を欲して相爭ふに至る　(二)金銀寶玉も之を賤視して土塊の如くすれば之を盜む者はあらじ　(三)ほしいと思ふべき物を目につかせざれば民心亂るゝ事なし、人の心の亂るゝは欲する所あるによる也、見の字、尙貴の二字に對すれば殊更に目につく樣に見せびらかすといふが如き意に解すべきが如し　(四)心を虛しくするは無知、志を弱くするは無欲、腹を實し骨を强くするは、素樸にして眞を守り、

要するに萬事萬物の歸結の義ならん (九) 常無欲と常有欲、卽ち道の體と用との謂なるべし (一〇) 其本一にして其名異なるのみ、卽ち楯の兩面といふが如く、一體にして兩面の義と解すべからん (一一) 深遠幽玄の義、道の極至をいふ (一二) 玄といへば既に道の極至なれど、なほ無名・有名・常無欲・常有欲といふが如く二者相對也、更に之を究むれば、道は眞の絕對也、有も無く又無も無し、之を玄之又玄といふ也 (一三) 萬理萬物の妙體の出で來る門

天下皆知美之爲美。斯惡已。皆知善之爲善。斯不善已。故有無相生。難易相成。長短相形。高下相傾。音聲相和。前後相隨。是以聖人處無爲之事。行不言之敎。萬物作焉而

天下皆知章第二

天下皆美(一)の美たるを知るは、斯れ惡のみ。皆善の善たるを知るは、斯れ不善のみ。故に有無(二)相生じ、難易相成し、長短相形れ、高下相傾き、音聲相和し、前後相隨ふ。是を以て(三)聖人は無爲(四)の事に處り、不言の敎を行ふ。萬物作りて辭せず(五)、生じて(六)有せず、爲して恃まず(七)、功成りて居らず(八)。夫れ惟居らず、是を以て去らず(九)。

(一) 美の美たるを知るは所謂相對の美にして眞の美にあらず、既に相對にして眞美にあらざれば、これを醜ともいふべし (二) 有無・難易・長短・高下・音聲・前後は何れも相對の關係をあらはす語、凡そ世の事理は悉く相對也、この相對の見に執して居ては眞の大道は見るべからずとの意を含めて解すべし (三) 老子の所謂絕對自然の大道に通達したる人 (四) 無爲不言は卽ち絕對也、善も惡もなく、只其自然のまゝの境地に居り、人をして自然のまゝの性を遂げしむ (五) 作るがまゝにまかす、一說には其勞を辭せずと解す、又萬物以下は自然の無心を說きて以て聖人

道可ㇾ道非二常道一。名可ㇾ名非二常名一。無名天地之始。有名萬物之母。故常無欲以觀二其妙一。常有欲以觀二其徼一。此兩者。同出而異名。同謂二之玄一。玄之又玄。衆妙之門。

老子 上篇

道可道章第一

道(一)の道とすべきは常の道に非ず、名(二)の名とすべきは常の名に非ず、無名(三)は天地の始にして、有名(四)は萬物の母なり。故に常無欲(五)以て其妙(六)を觀、常有欲(七)以て其徼(八)を觀る。此兩者(九)は同出(一〇)にして異名なり、同じく之を玄(一一)と謂ふ。玄(一二)の又玄衆妙(一三)の門。

(一) 仁義禮といふが如く所謂道と指示していふべき道は、恒久不變絕對自然の大道に非ず (二) 親に對する孝、君に對する忠といふが如き德目より事々物々の名稱に至るまで、凡て或事物の名としていふべき名は、眞の大道の作用として宇宙萬物形成の根本となるべき恒久不變の名に非ず (三) 名の命すべき無きもの、即ち絕對自然の大道 (四) 大道の作用して萬物形成し玆に名を生ずるもの (五) 一說「常無以て其妙を觀んと欲し、常有以て其徼を觀んと欲す」と訓ずるも、欲は意也、情也と解するを可とせん、常無欲とは恒久に情意なき義にて大道の本體の狀をいふ (六) 微妙、道の極致の妙體 (七) 道の本體作用して萬物を生々發育せしめんとの恒久の意欲を有するもの、即ち有名の狀態也 (八) 物の出づる所の孔也とし、又邊際也、歸也、盡也と解し、物の盡くる所といひ、德の歸する所といふ、

を要するに列子は戰國時代の末に莊子其の他の書を本として何人かが編纂したものと思ふ。編纂物である以上、列子の學說などを論ずる資料としては深い注意を以て取扱はねばならぬ。

本書は唐にて玄宗が老子等の書を皆某眞經と稱した時に沖虛眞經と稱せられ、後宋の景德年中更に至德の二字を加へて至德沖虛眞經といはれた。注釋は古來多くない、今傳はるもので古いものは東晉の張湛の注、唐?の殷敬順の釋文で、其の他は林希逸の口義等である、邦人のものでは諸葛晃の列子考を擧ぐべきか。

文學博士　服部宇之吉

身を取扱ふの自由を有せずといふのが、所謂爲我主義の根據である。而して楊朱篇を見ると此の主義は一轉して享樂主義而かも瞬間を享樂するといふ極端なものになつて居る。此の極端な享樂主義は列子の主義であつたとは思はれない。且本書の中には明に之と相反する思想も見える。以上は思想の矛盾の一例であるが、其の外夢占の事が有るかと思へば、周末戰國時代有名なる思想家の好んで口にせる題目が有り、同時代の人の口にせる古代史に關する異說が有り、又戰國時代に於ける海外の知識を錄せりと見るべきものが有る等、隨分雜駁であつて、何となく編纂物たるの感有らしめる。第二本書は莊子と文字相似たるもの甚だ多く、二書共に獨立の著作とは見難からしめる。今の莊子は漢初存せるものの一部分のみである、若し漢初の莊子今に存せば列子との近似は更に多きを加へるであらう。そこで莊列の間に剽竊の問題が起るのであるが、莊子が列子を取つたとは誰にも考へられない、問題は言ふまでもなく列子が莊子を取つたといふことになる。之

く相同じ。若し乾鑿度が漢初に出來たものであつて、列子の書が乾鑿度を取つたと斷定すべき理由有らば、今の列子の書は漢初には存し得ざることとなるも、乾鑿度の成立は戰國時代に在りとすれば、列子がそれを取つたとしたところで、今の列子を漢初のものにあらずとは言ひ難い譯である。

本書を漢初に存せるものと同じとすることは直に列子自身の著作とすることではない。本書に就いては色色の疑問が有る。第一は思想に統一がないことである、本書に楊朱篇といふ一篇が有る、何故に有るのか、楊朱の主義が列子と一致するると見ない以上、其の存在を說明することが出來ぬ。楊朱は名高い利己主義者で、後年孟子に痛く攻擊された人である。孟子の書では楊朱の根據は分らぬが、本書に據れば二つの立脚點が知られる。其の一つは老子に本づいたもので、列子の思想とも一致するものである、卽ち吾人の一身は吾人の自由意志の生じたものでなくて、天地二氣の調和保合の結果に出たものである、隨つて吾人は自己の勝手に一

つて居る、故に此の結論には大なる疑ひが有る。且西方の聖者といふ者は周公とも老子とも解する人が有つて、佛陀とより外に解釋の出來ぬものでない以上、前記の結論は益、疑はしくなる。天瑞篇の中に輪廻說の如き思想が有るので、それを材料として列子に佛敎思想の存することを證せんとする人も有るが、右輪廻說に似た思想は禮記月令（呂氏春秋に取りしもの）にも有り、又古代支那思想が所謂ユニヴァーサル、アニミズム(Univresal arimism)たる以上、凡ての物が互に相轉化し得ることを認めるのは當然の事であり、本書に見えて居るのはその程度の轉生(transmutation 又は metempsychosis) の思想に過ぎない、佛敎の輪廻說と直に日を同じくして談るべきものではない。故に予は佛敎思想云云を以て本書の年代を斷ずる說には左袒せぬ。

本書の思想内容に統一はないが漢以後のものと斷定せねばならぬ點は發見されぬ。天瑞篇に太易、太始、太初及び太素を解說し宇宙開闢を說くの一段は老子の道、一、二及び三を說明せるものと見るべく、而して其の文今傳ふる易緯乾鑿度と全

列子といふ人物が假設的ならば、其の書は勿論贋鼎であるが、今列子といふ人物は實在であるとなれば、其の書の眞贋が始めて問題になる。列子八篇は前漢の時に有つたもので、現に漢書藝文志に錄されて居る。但此處に一の問題となることは漢志の列子と今存する列子と同一なりや否である。二者同一なりとしても、列子自身の著作なりや否の問題は猶ほ殘るが、若し二者同一ならずとせば、問題は更に複雜になつて、漢志に錄された列子は何時亡びたか、今の列子は何時頃に世に出たか又誰が僞作したか等の問題が加はるのである。漢代の列子と今の列子との異同は何に據つて判斷するか、前者の存在せぬ今日にては專ら後者の思想內容より判斷する外に方法がない。卽ち本書仲尼篇に西方之人有聖者焉云云といへるを或は是れ佛陀をいふなりと固執し、佛教の支那に入りしは後漢の明帝の時に在り、本書蓋し魏晉の際に僞造さると斷定するが如きがそれである。佛教を支那政府が公然迎へたのは後漢の明帝の時であるが、佛教の思想は其の前より支那に入

邊に在りしことと思ふ。

列子の事蹟は前記天瑞、說符等の篇に見ゆる外何も分らぬ。蓋し獨善主義の修道家であるを以て、之を慕つて敎を受けに行く人人との間に若干の交涉有りし外に世間とは交涉無く、時の王公貴人などから厚禮を以て聘せらるゝ樣な五月蠅い事も無かつたと見える。前に列子の態度を浮世離れがして居ると云つたが、老子の主義は本と山林獨棲ではない、和光同塵で如何に汚れたる浮世にも住んで行く、但其の汚れには染みないが、去りとて獨り淸く白く見えない樣にする、何でも己れ一人だけ際立て見えるのは取らない。故に老子は妻を娶り家を成し子孫も有つた。列子も浮世離れがして居るとは云へ、全く俗人と異なるに至つては是れ道を修むること未だ達せざるものである、一方から見ると浮世離れがして居つても、他方から見れば俗と異ならぬところが有つた、卽ち矢張妻を有し家を成した人であることは本書に記さるゝ通りであらう。

たるや、莊子から評すると、浮世を離れんとして浮世離れのしたもので、莊子自身の如く浮世を其の儘に理想の鄕と觀ずる者から見れば未だ到らざるものである。故に莊子は世間の小知に比ずれば比較にならぬほど高い、又宋榮子の無抵抗主義よりも一段高いことは許したが、未だ眞に大道に到れるものとは認めなかつた。宋榮子の系統は不明であるが其の學說主義に於て老子に本づくものあることは認められる、但其の無抵抗主義が遂に平和主義となり、而して平和主義實現の爲め天下を周游歷說せるに至つては老子の主義に一致せざるものがある。列子は全然獨善主義を取つた人であつたと見える。莊子も議論は兎に角、實行に於ては獨善主義ではあるが、絕對と相對、理想と實際等の關係に就いて一種の哲學を有し、又死生を一にするの悟りの境に入つて居つた。然るに列子には莊子の如き哲學は無かつた樣である、又未だ死生を一にするの悟りの境には十分に入らずして、寧ろ多く生に重きを置いた樣である、莊子屢〻之を稱して而して滿足せざる所以略〻此の

賑恤せしむ、子陽乃ち列子に粟を贈りしに、列子は子陽が將に失敗せんとするを知り其の私惠を受くるを欲せず、之を謝絶せり、後果して鄭の民亂を作して子陽を殺せりと有る。 史記に據れば鄭繻公二十五年に鄭其の相駟子陽を殺した。 孔子の卒後八十二年に當る年で、又孟子が梁惠王を見た年よりは六十二年前に當る。 莊子と孟子とは、不思議に一度も面會しては居らぬが同時の人である、然れば此の年數で見ると列子が莊子よりも先輩であることは明であつて、莊子の屢〻之を稱する所以も自ら知られる。

列子は年代から言つて老子に師事し得ない譯であるが、莊子の書に據るに列子の師は壺丘子林といふ人である。 但其の修めたところの道は果して何であつたか、莊子には列子風を御して行くと有つて、修道の結果空中を飛行でもした樣に聞える、蓋し物外に逍遙すとか塵外に飄然たりとかいふほどの意味に見るべきもので、列子が如何にも浮世離れをして居る態度を評した語と思ふ。 而して其の態度

ず、内篇逍遙遊篇に人に小知と大知との別有ることを論じ遂に大道を體得せる至人に說き到るの階段として宋榮子と列子とを擧げたるを見るに、宋榮子は荀子・韓非子等にも屢、見ゆる戰國時代有名の平和運動者である以上、假設的人物たる列子を之に比較するといふことは有り得べからず、故に自分は莊子を以て莊子を證據立てて列子を實在の人と信ずるのである。

列子を實在の人物としたが、其の傳記等は一向徵すべきものがない。莊子に色色の話が出て居れども、有道の士として相當崇拜者が有つたこと位の外は判らぬ。今の列子の書には傳記に屬する一二の事項が有る、書物の眞贋の判定が付かぬ中に直に取つて材料にすることは如何といふ疑も起るが、後に否定さるべき理由生ずれば否定を認めることとして、今暫く之を採り用ゐんに、列子天瑞篇に列子鄭圃に居ること四十年云云の文が有る、文勢より見るに鄭の圃田の人なることを知るべし。又同說符篇に列子鄭に在りて飢色有り、或る人之を鄭の相駟子陽に言ひて

列子解題

列子八篇は列禦寇（禦或は圄に作る）の撰と稱するが、此れには種種の疑問が有る、(一)は列禦寇が實在の人物なりや否の疑問、(二)は列禦寇は實在の人物なりとしたところで、今の列子といふ書が果して其の著作であるか如何かの疑問である。(二)は他の語で言へば今の列子は古の列子卽ち漢初に在りしところの列子なるか、その眞贋如何の問題である。卽ち問題は列子其の人と書とに關するものである。

列子の事は始めて莊子に見え、それより後世の稱するところとなつた。然るに莊子の書には寓言少からず、其の稱するところを以て必ずしも實在の人とは爲し難いといふ理由より、列子を直に假設の人物と斷定する學者が有る。成る程莊子の書には假設の人物も少くなく、又擬人的人物も有るが、列子の事は莊子內、外、雜各篇に涉りて屡〻見えて居り、假設的人物としては現はれ方が餘り多過ぎるのみなら

である。

文學博士　服部宇之吉

べきものは猶ほ外にも有るが、今暫く之を略す。

漢初の天子及び大臣多く黄老の術を好んだ。此れは身を修むるに簡易質素を以てし、國政も成るべく簡捷にやるといふことであつて惡い事ではなかつた。殊に戰國時代より秦の後を承けた當時に在つては、民と共に休息するの法としても善かつたことと思ふ。然るに晉の世に行はれたところの清談は老莊を宗としたもので、甚だしきものは名敎を無視し、然らざるも國家などいふ念は頭の片隅に押込めて置いて、唯自己の氣分を樂むといふ風で、晉の滅亡の一因を爲して居る。黄老と老莊とは相距ること遠い。蓋し莊子自身の說に存する萌芽は門人等に據つて發達されて隨分危險な說を成して居る、莊子は國家も政府も權威も認めるけれども、處世法としては成るべくそれ等に觸れぬやうにすることを說いて居る。而して門流或は國家をも權威をも否認する說を立てて居る。莊子の流から清談の如きものが出ても決して不自然ではない。それだけ一知半解の莊子學者は危險

子の所謂道である。此く老子は決して無政府主義者ではない。莊子は內篇七篇の最後に應帝王の一篇を置いたのは、聖人道を體して無欲無爲、人物の自ら化するに任せば、功は天下を蓋ひ化は萬民に福し、其の應は帝王たりといふことにて、一應無政府主義に似て居るとも見えるが、應帝王といふ名義既に無政府主義にあらざるを示すといふべし。而して人間世篇に君臣父子の義を人が此の世に於て免るべからざるものとして、只管其の義を全くすべきを說けるは決して無政府主義ではない。外雜諸篇に到ると無政府主義的口氣も見えるが、前にもいへる如く此等は直に莊子の思想とは云ひ難く、莊子の流を汲んで稍〻極端に走せた者の議論であらう。莊子には所謂內聖外王の思想が有つて、老子と同じ樣に天下が一の聖人に歸往することをいふ、此れ其の所謂無政府主義と異なる所以である。

外篇繕性篇に復初といふ思想が現はれて居るが、唐の李翺の復性說を經て宋儒盛んに復初を說くのは明に莊子の影響である。宋學に於ける老莊の影響の見る

主義が色色の形に現はれ、その中には吐故納新、熊經鳥伸などいふ方法にて一種の運動により體中の氣の代謝を良くし以て長生の目的を達せんとする者も有つた。莊子は此くの如きは肉體の壽命を延ばすより外に效がないとて排斥して居る、以て莊子の法は自ら目的も方法も違ふことが知られる。列子も靜座法を行つたと見える、多分莊子のもそれと方法も目的も同じであらうと思ふ。今の道士は莊子が排斥した方法をも依然として行つて居る。

世人往往老莊の思想を無政府主義なりとするが、それは明白に誤解である。老子の自然主義よりすれば人類相互の扶助などは不必要で、人各〻孤立獨行すれば足る筈である、然るに老子は社會的生活を必然の事と說いて居る。但老子の所謂社會は小國寡民たるのみ。兎に角老子は人類は初めより國家生活を爲すものと信じて疑はぬのみならず、老子の所謂道は天下の統一を理想としたもので、即ち最初の多數の小國寡民は道を體する一人の王に歸往し天下が一に歸すといふのが老

に至つては文章の爲めに莊子を學んだ人も隨分少くない。

韓退之云ふ、子夏の後に田子方有り、子方の學流れて莊周となると、何に本づきて云へるものか知らぬが、莊子は確に儒教に就いて中中深い知識を持つて居つた。故に内篇人間世篇に君臣父子を論ずるが如きは堂堂たる儒者の言である。外雜諸篇に至ると時に孔子を嘲り仁義を非るが、よくよく讀むと、盜跖の口を藉りて孔子を嘲るが如きは、盜跖其の人が莊子の理想にあらざる以上、其の口を藉りて孔子を嘲つてもそれは畢竟一種の滑稽のみ。仁義を非るは其の意は仁義の末に拘泥する者を非るに在り、故に常に曾史の行を非る、未だ嘗つて仁義其の物を非とせず。

内篇齊物論に南郭子綦の事を形容して形は槁木の如く心は死灰の如し云云とあるので、人或は莊子は印度瑜伽論師の法を學んで一種の靜座法を行へるならんといふ。瑜伽論師の事は想像に過ぎぬが、老子の派に一種の靜座法にて無念無想の境に入る修行が有つたことは信ぜらる。當時は昔より有りし身又は生を貴ぶ

莊子の思想とは認め難い、現に內篇の思想と明に矛盾するものがあることを知らねばならぬ。

莊子の書古來注釋多いが、今存するものでは郭象の注最も古い、僧玄英の疏が有る。解し易いものでは林希逸の口義が有り、之に陸方壺、李衷一二人の注を加へて三注大全と稱するものが有る、明の焦竑の莊子翼亦諸家の說を兼ね擧ぐ、但弱侯自身の意見を以て取舍せるを惜む。又專ら文章の上より見たものには林西仲の莊子因が有る、其の他は今一一擧げない。

莊子の書唐に在つて南華眞經と稱せられた。但其の經に列した例は隋末唐初の人である陸德明の經典釋文に老莊二子の書を收めてあるのにある。南北朝の際南朝の學者皆老莊を治め玄談を爲した、隋唐は北から起つて天下を統一したが、經學に於ては南朝の大勢に支配された。此かる關係より得たる莊子の勢力は唐が老子の子孫といふ理由で老子を尊ぶに至つて一層加はつた譯である。又後世

象の舍てたものの幾分かを存して居ると信ずべき理由がある。外雜二篇は注釋家勝手に取舍したといふことに據つて、內篇七篇とは價値の異なるものであることが知られる。孟子の書今存するものは七篇（各〻上下に分けて十四篇ともいふ）であるが、其の外に外書四篇有る、今有るものが昔からのものかどうかすら疑問であるが、兎に角外書といふものは價値の少いものである。此樣な譯で一部の書を內外及び雜と分ける場合に、外と雜とは內よりも價値少きものたることが知られる。莊子の內篇七篇は各篇の名義に各〻特別の意味が有るのみならず、七篇の次第は必然の順序が有る。然るに外雜諸篇は皆篇首の文字を取りて篇の名と爲すに止まり、篇と篇との順序も何等必然的なるものがない。此樣な關係から見ると內篇は確に莊子の筆に成つたものであるが、外雜諸篇は或は莊子の談論を錄し、或は莊子の緖餘に出でしものも有らうが、多くは門人等の筆に出たものと思ふ。隨つて莊子の思想として正當に認むべきものは內篇に見ゆるものであつて、外雜篇に至つては一概に

と思つて聘したのかも知れぬ。今當時の事情はよくは知り難いが、色色の方面から察するに莊周は實際的には獨善家で有つたと思ふ、經綸家では勿論無く又經綸家らしい點も見出されぬ、矢張り名の爲めに聘せられたのであらう。莊周の時代は恰も孟子と同じであるに拘はらず、孟子未だ嘗て莊子に言及せず、莊子亦孟子の事を言はぬ、蓋し二子未だ嘗て相見なかつたのである。此の事は疑問とすれば疑問となるも、何事もなしとすれば何事もなし、予は何事もなしと爲す方である。

莊子の書今傳ふるものは前記の如く三十三篇であるが、漢書藝文志には五十二篇とある。蓋し內篇七篇は動かざるも、外雜二篇の數が今本と異なつて居つたのである。經典釋文に據れば莊子を注釋せる諸家、內篇以外は各、其の意を以て取舍せる故、篇數區區であつた。郭象三十三篇(內篇とも)を取りて之が注を爲り、其の注獨り後に行はるゝに至りて異本皆亡びて仕舞ふた、要するに三十三篇は郭象の取りしものにして、郭象の舍てたるもの蓋し十九篇有るのである。今本列子の中に郭

莊子解題

莊子の書、今存するものは内篇七篇、外篇十五篇、雜篇十一篇、合せて三十三篇で、莊周の著と稱せらる。極めて簡單なるものである、蓋し傳ふべき事蹟が少いからである。莊周の事は史記に傳有れども、生れは蒙の人、蒙は今の河南省商邱縣の地である。即ち老、列二子と同じく今の河南省の人である。蒙に大きい漆園が有つたと見え、其の役人となつた事があるといふが、詳かな事は判らぬ。後年楚の威王が人を以て招いで宰相にしようとしたが謝絶した事が史記に見える。當時の諸侯は名を以て人を用ゐる傾向が有つて、世に名高い人だと其の人の實力などを調べずに聘したので、虚名が相當役に立つた事も有る、莊周も其の例であつたか。或は莊子の書で見ると、高遠なる哲理も説くが、又仁義や刑政の議論もする、強ち空論のみを説いて居る學者でもない樣であるから、實際的經論の方面にも手腕有るべし

も有り、決して嚴然たる體系を成せるものにあらず、唯是れ尨然又雜然たるもののみ。後世の儒者は專ら現在に於ける道德政治敎育等の問題に就きて論ずるのみにて、靈界の問題に至りては、宋儒すら天理說を提げて鬼神の存在をも否定せるほどにて、何等の答をも措かず。後世に於ける支那の佛敎は專ら三世因果等を說き死者の葬祭に從ひ又靈界の問題を取扱ふも、支那國民は儒佛二敎が說かざる方面に於て生活上必要を感ずること甚だ切なるもの有り、卽ち廣義を以て言ふところの自然に關する知識是れなり。而して此の知識は道敎の徒其の求むるところに隨つて之を與へんとす、此れ道敎の支那に生命有る所以にして、又以て後世所謂道敎が老子以外に取るところ多きを想ふに足らん。其の詳かなることは別に之を論ずべければ、今之を略す。

文學博士　服部宇之吉

に孔子が言偃(子游)に語げたりと爲さるゝ大同小康の說の如きは其の尤なるものなり。一言にして蔽へば禮記中にて老子敎の影響と認むべきものは退化思想なり。一度禮記に入り又他の方面より支那民族の腦裡にも入りしより、退化說は多く儒者の思想を支配し、遂には儒敎本來の思想なるかの觀を呈せり。世人往〻孔子を目して保守復古主義者と爲すは此の關係に出づるなり。

西漢の初め黃老の道多く上流の間に尊尙され、魏晉の際淸談盛んに士大夫の間に行はれ、南北朝の間南人好みて老莊玄虛の理を言ひ、宋儒起りて理氣性命の學を唱へ孔孟を崇敬し異端を排斥せりと雖も、久しく佛敎と接近して人心に浸染せる老莊の思想は自ら其の腦裡に若干の影響を與へたり。老子の思想は禪學に近き點有り、宋儒の思想に隱然影響せるところの小ならざるを見る。

道敎は老莊の思想に本づくと雖も、宗敎としての道敎は、其の他種々の思想信仰習慣等を取り入れたるが、其の取れるものゝ中には明に老莊の主義に反するもの

るものなり。此くて老子は明に復古を理想と爲せり。此の點に於て亦孔子の進步を理想と爲せるに反せり。

老子專ら虛無自然を說くといへば、世間の實生活と甚だ徑庭有る說を爲すが如きも、其の實老子は人情世態に通じたる人にして、一面には權略主義とも功利主義とも名づくべき思想を吐露し、仁義をすら斥けたるに拘はらず、其の書中には屢〻兵刑の事を說けり。此等亦其の自然主義と密接に相關するものなり。紙數限りあるを以て其の說明は之を省略す。

老子教の後世に及ぼせる影響

孔老二子道相同じからざる以上、老子の教が儒教に及ぼす影響の如きは縱ひ之有りとするも、多くの年歲を經たる後の事なるべしと想はるゝに、意外にも西漢の初めに編纂されたる禮記中には老子教の影響と見るべきもの少からず。禮運篇

退化人類墮落の思想となり、此に老子に特有なる復古主義となれり。而して此の主義は前項に說明せる老子の理想とよく一致するものたるを見る。人類の墮落社會の退化とは何ぞ。老子以爲らく、人類の初めて此の世界に生れしや、君主有りと雖も、人類は自然の情態に在りて生存したるを以て人人各〻自ら己れの力に衣食して他人に依ること殆ど希なり、是を以て民は君主有るを知るのみにて君民殆ど沒交涉なりき。漸く時を經るに隨ひ人の知欲漸く進み來り、人と人との間の交涉漸く多きを加へ、隨つて君主は民の爲めに其の生命財產を保護する等の勞を執ることとなり、民は此に至りて始めて君主の恩德を感じて君を愛するに至る。此れより以往世は漸く開け君民の交涉は愈〻多く同時に君民各〻其の利を思ふを以て、民は君を畏るゝこととなり、遂には君を侮るに至る。此れ明に墮落又退化なり。墮落の極又當初の自然の情態に反へるは蓋し運命の當然なるべし。老子の唱ふる大道は即ち墮落せる人類、退化せる社會を救濟して原始的情態に反へらしめんとす

に進み行くものなりや否と問へば、老子は否と答へ、凡そ萬物は皆其の根に復歸すべきものなりと云ふ。萬物其の根に復歸すとは、個體を構成せる天地二氣の保合破れて二氣各〻其の本に復へり、個體としての存在は滅するを言ふこと勿論なるが、老子の意味を推せばヘラクライトスの說の如く宇宙が最初の渾沌的、實在の情態に復へり、やがて又再び新しき宇宙成ると言ふことに歸すべく思はるゝも、老子自身はそれまでは說かざりき。兎に角個體は皆其の根に復歸すとは老子の反復說明せるところにして、道の反とは即ち是れなり。此の思想は蓋し萬物の生成の過程を考ふるに、渾沌たる實在としての道が日に益〻其の渾沌の情態を離れて具體有限の世界に進むこととなれば、今日の語に於て進化と稱するものは、老子の道より言へば道を離れ道に遠ざかることとなる。離れ遠ざかるものはその儘益〻離れ遠ざかるべき運命と爲せば則ち已む、老子は離れ遠ざかるが故に本根に復へるべき運命有りと爲せり。此の思想は老子が之を人類社會に適用するに至りて、明に社會

るに、老子は常に嬰兒を理想とせるの一事なりとす。蓋し嬰兒は身體極めて柔弱なると同時に、知識意志未だ發達せず、精神も亦柔弱なり。此れ即ち生の理想なり。草木も初生の時は枝葉皆柔弱、漸く年を經て幹枝堅强となれば終に枯槁す。人も亦筋骨堅强精神剛强となりて終に死す。凡そ堅强は自然より與へられたる生命の原動力たる氣を人が己が任意に消耗するの結果として生ずるものなり。氣を消耗すること少ければ常に柔弱の情態を保ち得べし。自然より與へられたる生命を保ちて又自然に返へさんとするより、老子は嬰兒を理想と爲せり。氣を消耗すること少しといふも不老不死を希ふにはあらず、不老不死は老子の認めざりしところなり、後世の道家が仙術を説くは本と老子に出でざるなり。

老子の所謂道が儒教の道と異なるところの他の點は、老子は道に反をいふにあり。反とは返へるといふことにて、前に言へるが如く一氣は渾沌的實在より出で、一氣より天地陰陽二氣分化し、遂に萬物生ずるが、此の作用は言はば無限に直線的

の免れざる自然的運命なる以上、運命の儘に生くべきのみ。生を喜び死を惡むは人の常情なれども、老子は生死共に自然の運命と爲すを以て亦自然に順ふのみ。生を厭ひて早く世を去らんことを欲し、或は不老不死ならんことを欲するが如きは、均しく是れ惑ひなり、我れは唯自然の我れに與へたるものを大切に保ちて自然の取り返へさんとする時には其の取り返へすに任かすといふが老子の本旨なり。故に厭生にもあらず、亦樂天にもあらず、唯自然に順ふのみ。此の主義より立言せる處世法としては、俗世に處して俗人の間に一種の異彩を發し世人の注目を惹くが如きは老子の最も忌むところなり、和光同塵の教此に於てか生ず。又老子は德有る者を形容するに常に容貌愚の如くなるを言ひ、擧措逡巡常に決斷に乏しきが如くなるを言ふ、此れ老子の理想とせる人格が、儒教にて聖人君子と稱する者の聰明睿智にして果斷、知と勇とを兼ね具ふるとは大に異なることを示すものにして、此の相異を最も明にするに足るものは、儒教の理想とする聖人君子は是れ成人な

人の知覺經驗によりて事物に就きて判斷を下だすことを否定するにあり、意の否定とは我れ欲す故に善なり若くは美なりといふが如き主意的態度を否定するにあり、要するに事物の自然を觀じ、其の自然に順ひて處理することにして、自我の否定は自然との一致融合の裡に大に自己を肯定することとなるなり。此の見地より老子は一切の價値判斷を相對的のものと爲し、此れに卽して立てられし一切の議論を排斥せり。其の仁義禮及び前識を排斥せるも、亦此等は人爲に渉り有爲に屬し、大道の如く自然無爲にあらざるを以てなり。故に老子の敎は虛靜無爲を主張するも、其の所謂無爲は一切の活動を否定し只管寂寞ならんことを旨とするものにあらず、如何ほど活動するも、活動が凡て自然に出づる時は其の儘に無爲なりと爲すなり。此れ無爲而無不爲といふ所以なり。隨つて人世を厭ひ山林に隱れんとするが如きは、老子の與みせざるところなり。老子固より此の世界を欣求すべき樂土とは見ざれども、亦厭離すべき穢土とも思はず。此の世に生れ來れるは人

形質二者は一氣の調和作用により保合して萬物を生ず。凡そ此等の過程は皆是れ自然又必然にして、其の間何等の計畫若くは意志を容れず。此の自然の過程をも道といふ。此の意味に於ては道は自然理法なり。

道に此く萬物の物質的原因たる方面と自然理法たる方面と有り、何れの方面より見るも造物者の創造作用といふが如き思想を容るゝ餘地無く、宇宙は只是れ必然の支配のみ、故に老子は專ら道の虛無を說く。虛無は分けて看る時は知の否定と意の否定となるべく、合せて看れば自我の否定となるべし。老子は天地萬物を總べて道と稱し、汎神教的見解をも有すれども、決して道を人格的實在と看たること無く、徹頭徹尾非人格的のものと看たり。老子は自然に優る力の有り得ることを認めず、必然は最大の權威なりと爲せるが爲めに、人の道を說くにも亦自然に順ひ必然に安んずることを以て理想と爲せり、此れ其の虛無の教有る所以なり。

人の道としての虛無は知と意との否定即ち自我の否定なるも、知の否定とは個

地をも氣と謂ふ、氣とは蓋し微妙なる物質にして、無限の生命を有するものなり、天地を同じく氣と謂ふと雖も、二者の間に自ら區別有り、天を形、地を質と謂ふ。形とは見るべくして執るべからざるもの、質とは見るべく又執るべきものなり。而して天地は本と渾沌たる一氣より分化せるものと爲す、此の場合の氣は天地を氣と謂ふ場合と異なりて、聞くべくして見るべからざるものなり。儒敎は本と宇宙開闢の初めは唯渾沌たる一氣有りしのみ、已にして一氣より天地分化し、天地の氣交感保合して萬物生成すと爲す。然るに老子は儒敎の所謂一氣を以て第二次的のものと爲し、氣より前に渾沌的實在有り、此の渾沌的實在は後來最先に氣を生じ、次に形を生じ、終りに質を生ずるも、當初は氣形質三者渾沌として並びに其の中に存すと爲し、其の存在情態を夷、希、微の三語を以て言ひ表はせるなり。此くの如き渾沌的實在は卽ち道なり。是れ宇宙萬物の物質的原因としての道なり。

渾沌的實在たる道は自然の過程に從ひて氣を生じ、氣又自然に形と質とを生じ、

察するに及びては、老子を外國人と爲す者と否との別有り。老子の思想中何れの點が外國思想なりやと問へば、彼等は第十四章（八十一章に分くるものに就きて言ふ）に

視之不見、名曰夷、聽之不聞、名曰希、搏之不得、名曰微。

といへる夷希微の三字を、或は印度或は希伯來の言語に聯絡せしむるに過ぎず、吾人より之を見れば其の根據甚だ薄弱なり。此の三字は老子の所謂道の一面を形容する語にして、而かも其の方面は論者が聯絡せしめんと欲する希伯來等の思想とは相去ること遠きものなり。

前記三句は何を意味するかと云へば、第二十五章に

有物混成、先天地生。

といへる其の所謂物の説明に外ならず。天地に先だちて生じ而かも混然として成れる物とは何ぞ。既に之を物と謂ふ、固より無即ち非實在と爲すべからず、亦之を混成と謂ひ天地に先だつと謂ふ以上、具體的の實在たるを得ず。支那にては天

篇の中にて上篇は道を言ひ、下篇は德を言ふと爲す者有れども、其は大なる誤解なり。老子の言上下二篇に分け、上篇の第一章は道可道、非常道といふ句を以て起り、下篇の第一章即ち本書第三十八章は上德不德、是以有德といふ句を以て起る、故に先秦の古書の篇目が概ね篇首の文字を取りて名づけらるゝの例に倣ひ、上篇を道、下篇を德と稱し、合せて道德と稱するに過ぎず。上篇は道を言ひ、下篇は德を論ずると爲すが如きは各篇の內容にも一致せざる謬說のみ。此の書久しく道德經の名を以て知らる、然れども之を儒家の經書の如き地位に置き、國家の建設せる學校の教科に列し科擧にも課せんとせるは唐代に試みられしのみ、其の他には例無し。唐は姓李の故を以て老子を尊び之を皇帝に封じたる等崇敬甚だ至れり。

老子の學說

西洋の學者或は老子の根本思想は外國思想なりと爲す。而して詳に其の說を

老子が其の書を關尹の請ひによりて作り之に授けたりといふことも疑ふべし。老子の書は始め口授によりて傳へられしものなるべく、之を竹帛に垂れしは後人の業なるべし。

注釋其の他著書に關する事實

老子の學說は戰國時代に各方面に影響を及ぼし、儒敎の經書の注釋すら竹帛に垂れられしもの未だ多からざる戰國の末に於て、早く已に韓非は其の著書中に喩老、解老二篇を作りて老子の書の一部分の解釋を爲し、漢以來老子に注せる者甚だ多く、近代に至りては歐米人の飜譯亦十數種を算す。老子の注釋書中最も有名なるものは魏の王弼の注と爲す。王弼は一書を上下二篇八十一章に分けたり、此れ最も普通なる分章法なるが、或は七十二章と爲し、或は六十三章と爲すあり。

史記に道德の意五千餘言云云と云へるにより、或は本書を道德經と稱し、上下二

著書の動機

史記に據れば、老子世の亂を避け關を出でて西遊せんとし關に至りし時、關令尹喜之に請ひて書を著はさしむ、乃ち道德の意五千餘言を著して之に與ふとあり、此れ即ち今の老子なり。關令尹喜四字の讀法に就いては、關の令姓は尹名は喜にして、關の令とは關守りなりと解するあり、或は關の令尹名は喜と讀むあり、令尹とは楚の官名にして執政なり、關守りを關の令尹といふは疑ふべし、且莊子等に關尹といふ名稱有り、關の令姓は尹名は喜と見るを當れりと爲さん。尹喜の何人なるかに就きては史記の言ふところも明瞭ならず、莊子等によれば其の思想老子に似たる點有るも、老子とは別に一派を爲せる人の如し、後世の道家に關尹を祖述せるものと老子を祖述せるものと有りしが如きも、亦此の關係を證するに足らん。道家或は關尹は老子に隨ひて成都(今の四川省の首府)に至るなど說けども信じ難し、

と老子の著者とは自ら別人なりと爲すあり。禮記の記述疑ふべしと爲す說最も妥帖なるを覺ゆ。史記又老子が周の衰ふるを見、官を棄て關を出でて西に遊ばんとしたることを記したれど、其の關を出でしや否を明言せず、又其の終るところを知るなしと記せるを以て、老子の最後は雲を捉ふるの感有り。然るに史記は明に老子の子孫を叙して、漢景帝の時に官に在りし人に及べり、知るべし、終はるところを知るなしといへるは單に老子の死せし處不明なりといふ意味にして、復た他の意有るにあらざるを。道家好みて仙を言ふも、莊子には老聃死せし時、秦佚之を弔せしことを記せり、戰國時代には老子の徒と雖も老子を仙逝せりなど言はざりしを見るべし。莊子には又老聃官を退きて沛に居りしこと見ゆ、然れば關を出でて西遊せる事實有りと爲すも、久しからずして復た還り來りしこと疑ふべからず。老子の後半生は之を前半生に比すれば反つて明瞭なりとす。

と雖も、癩の義にはあらず。

老子の年代に關しても異説多し。道家荒誕の説は暫く措き、其の他に就きて見るに、或は戰國時代の末に出づと爲す者あり、或は孔子に比すれば前一輩にして孔子の時に及べりと爲す者あり、其の他猶ほ異説有り。今一々之を論ずるの煩を避けて予の所見を言へば、予は孔子の前一輩にして孔子の時に及べりと爲す説に從ふものなり。

老子の履歷は史記・莊子等に周室に仕へて古書舊志を取扱ふ官たりしこと見ゆるのみ。劉向等は此れによりて老子の學説の由來を斷定せり。禮記檀弓篇には孔子が禮に關して之を老聃に聞けりといへるもの二三有り。老子周に事へて古書舊志を掌りしを以て、古禮に就きては職務上知悉せるところ有りしならんとて此の記述を信ずる者有り、或は今の老子の書は口を極めて禮を譏る、孔子豈に之に禮を問ふべけんや、禮記の記載は事實にあらずと爲し、或は孔子が禮を問へる老聃

論法にして正しからんには、孔子が生れたる魯國曲阜縣闕里の如き亦問題と爲すの價値あるべし、何となれば魯は魯愚などいふ時の魯にして、闕と相對して才智の短なるを示し、曲阜亦美名にあらざればなり。然れども何人も此の名によりて孔子を疑ふ者なく、亦孔子を支那人にあらずと爲す者なし、獨り老子に至りて之を疑ふは、畢竟老子の思想に支那思想に出でざるもの有りと爲すを以てなり。思想に關しては後に之を論ずべし、今は史記に見ゆる鄕貫の信ずべきものなることを言ふに止めん。但楚苦縣に就きては說有り、或は楚は今の湖南省荆州府を中心と爲せる周代の楚國なりと爲し、或は然らずと爲す、漢書地理志等によりて案ずるに、楚苦縣といへる苦は春秋時代までは陳國に屬し、春秋の末、陳が楚に滅ぼされし以來楚に屬したるものにて、史記は春秋以後の所屬を以て楚苦縣といへるのみ。苦縣は今の河南省に在り、卽ち老子は支那中腹の產にして、一派の學者が言ふが如き南方の人にあらず。苦は音コにしてクにあらず。厲は漢代には賴の字に改めたり

一年、生れながらにして白髪なりきなど說く者有れども、其は傅會の說にして信ずるに足らず。　蓋し李耳が世に出で人に知られしは其の後半生に在り、其の前半生の事を知れる者殆ど無く、世人は其の老いたるの故を以て呼びて老聃といひ、後遂に老子といふに至れるならん。　前半生の事は嘗に時人之を知る者無かりしのみならず、後人亦之を知らず、史記本傳にも後半生の事を記せるのみ。　西洋人或は前半生の事の明ならざるを以て老子が支那人にあらざるの一證に具へんとする者有れども、前半生の明ならざる者豈に獨り老子のみならんや、未だ以て其の人の生處を斷ずるの資と爲すべからざるなり。

老子の鄕貫は史記に楚苦縣厲鄕曲仁里とあり。　西洋の學者或は楚は苦楚とも熟して用ひられ苦と意義相似たり、厲は癘卽ち癩と通じ、曲仁亦美名にあらず、此く醜惡なる名の重なるは偶然にあらず、故意に出づべしとて、此の鄕貫は後人の作り出せるものにして、老子は實は由來不明なる外國人なりと爲す者有り。　若し此の

老子解題

著者の鄕貫年代等

老子とは老先生といふに同じ、一種の敬稱のみ。然るに此れを以て或る一人の學者の稱と爲し、又其の著書の名と爲すに至れるは、猶ほ聖人といふ名が後世には孔子を意味するに至れるが若し。老子と稱せらるゝ學者は、姓は李、名は耳、字は伯陽、或は曰く諡して聃といふと。蓋し耳を名とせるは耳に特徵有りしに因るべし。左傳等によるに、春秋時代には身體の特徵に取りて名字を附したる中、耳の特徵に取りしもの亦往々之れ有り。聃は字書に耳無郭又は耳漫而無輪などとあり、西人或は耳朶の下垂して甚だ長きなりと爲せども、其は誤解にして、聃とは耳の輪郭無きなり。既に耳の特徵に取る以上、聃は諡にあらずして、字なるべし。

何故に李耳を老子と稱せるかに就きては、後人或は其の母胎に在りしこと八十

雜篇

庚桑楚……四三九
徐無鬼……四六〇
則陽……四八八
外物……五一〇
寓言……五二三
讓王……五三〇
盜跖……五五〇
說劍……五七二
漁父……五七九
列禦寇……五八九
天下……六〇三

列子

天瑞第一……六二五
黃帝第二……六四八
周穆王第三……六八八
仲尼第四……七〇九
湯問第五……七三六
力命第六……七七一
楊朱第七……七九四
說符第八……八二五

—（目次終）—

勇於敢章第七十三……六六
民不畏死章第七十四……六六
民之飢章第七十五……六七
人之生章第七十六……六八
天之道章第七十七……六九
天下柔弱章第七十八……六九
和大怨章第七十九……七〇
小國寡民章第八十……七一
信言不美章第八十一……七二

莊子

內篇

逍遙遊……七五
齊物論……八九
養生主……一一六
人間世……一二一
德充符……一四七
大宗師……一六四
應帝王……一九〇

外篇

駢拇……二〇一
馬蹄……二〇九
胠篋……二一四
在宥……二二四
天地……二四四
天道……二七一
天運……二九〇
刻意……三一二
繕性……三一八
秋水……三二四
至樂……三四八
達生……三六〇
山木……三七九
田子方……三九七
知北遊……四一五

執大象章第三十五……三一
將欲歙之章第三十六……三一
道常無爲章第三十七……三三

下篇

上德不德章第三十八……三四
昔之得一章第三十九……三五
反者道之動章第四十……四七
上士聞道章第四十一……三七
道生一章第四十二……三九
天下之至柔章第四十三……四〇
名與身章第四十四……四〇
大成若缺章第四十五……四一
天下有道章第四十六……四二
不出戶章第四十七……四二
爲學日益章第四十八……四三
聖人無常心章第四十九……四四
出生入死章第五十……四四
道生之章第五十一……四五
天下有始章第五十二……四六
使我介然章第五十三……四七
善建不拔章第五十四……四八
含德之厚章第五十五……四九
知者不言章第五十六……五〇
以正治國章第五十七……五一
其政悶悶章第五十八……五二
治人事天章第五十九……五三
治大國章第六十……五四
大國者下流章第六十一……五五
道者萬物之奧章第六十二……五六
爲無爲章第六十三……五七
其安易持章第六十四……五八
古之善爲道章第六十五……五九
江海爲百谷王章第六十六……六〇
天下皆謂章第六十七……六一
善爲士章第六十八……六二
用兵有言章第六十九……六三
吾言甚易知章第七十……六四
知不知章第七十一……六四
民不畏威章第七十二……六五

老子目次

上篇

道可道章第一……一
天下皆知章第二……二
不尙賢章第三……三
道沖章第四……四
天下不仁章第五……四
谷神不死章第六……五
天長地久章第七……六
上善若水章第八……六
持而盈之章第九……七
載營魄章第十……八
三十輻章第十一……九
五色章第十二……一〇
寵辱章第十三……一〇
視之不見章第十四……一一
古之善爲士章第十五……一三
致虛極章第十六……一四
太上章第十七……一四
大道廢章第十八……一五
絕聖棄智章第十九……一六
絕學無憂章第二十……一六
孔德之容章第二十一……一八
曲則全章第二十二……一九
希言自然章第二十三……二〇
跂者不立章第二十四……二一
有物混成章第二十五……二一
重爲輕根章第二十六……二二
善行無轍迹章第二十七……二三
知其雄章第二十八……二四
將欲取天下章第二十九……二五
以道佐人主章第三十……二六
夫佳兵章第三十一……二七
道常無名章第三十二……二九
知人者智章第三十三……二九
大道汎兮章第三十四……三〇

例言

一　老子・莊子・列子の三書全部を收めて本書一卷と爲す。

二　老子は林注本、莊子は郭注本、列子は張注本の流布版本を以て底本とせり。

三　三書共に前記底本の外、世間通行の數書を參考として、訓讀注解共に其の宜しきに從はん事を期し、且つ原文中文字の同異の甚しきものはなるべく之を注記する事とせり。

BL
1900
L25T8

LIBRARY
AUG 5 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

老子全

莊子全

列子全

BL
1900
L25T8

Lao-tzu
Roshi Soshi Resshi

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY